

ようこそ人間讃歌の楽園へ

gigantus

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「静かに暮らしたい。ただ甘い蜜だけを啜りたい。誰かの一番になりたい。大いに結構じゃないか。人間というのはどこまでも利己的で、どこまでも醜く、どこまでも愚かしく、どこまでも愚直な存在だが、だからこそこの上なく美しいんだ」

これは人間讃歌を謳う男が征く、実力至上主義の物語。

目次

| | |
|-----------------|-----|
| 彼は強か少女と出会う。 | 1 |
| 彼は学校について思考する。 | 16 |
| 彼は同窓の徒を分析する。 | 29 |
| 彼は仮説を検証する。 | 39 |
| 彼は魔性教師に尋ねる。 | 50 |
| 彼は孤独少女と友達になる。 | 61 |
| 彼は俺様御曹司に呼ばれる。 | 72 |
| 彼は強か少女の頼みを断る。 | 88 |
| 彼らは希望へ向けて結託する。 | 95 |
| 彼は孤独少女に協力する。 | 112 |
| 彼はAクラスの女王と出会う。 | 130 |
| 彼は強か少女を従える。 | 142 |
| 彼は孤独少女の兄と出会う。 | 155 |
| 彼らは今一度説得を試みる。 | 166 |
| 彼は学徒の王と契約する。 | 179 |
| 彼は今後の仕込みに奔走する。 | 187 |
| 彼は不良少年を手懐ける。 | 200 |
| 彼らは予想外の事実を知る。 | 213 |
| 彼は快活少女に打ち明ける。 | 227 |
| 彼らは最初の関門を突破する。 | 242 |
| 彼と強か少女の休日。 | 254 |
| 彼はCクラスの王と出会う。 | 266 |
| 彼らは不良少年を信じる。 | 277 |
| 彼らは証拠集めの算段を立てる。 | 288 |

彼らは寡黙少女に声をかける。

彼と強か少女は駒を進める。

彼は快活少女の頼みを引き受ける。

彼は寡黙少女を狙う男へ囁く。

彼と不良教師は事を企てる。

彼らは審判の刻へ向けて準備を進める。

孤独少女たちは審議に臨み、彼はそれを眺む。

無機質少年は寡黙少女を救い、彼は当て馬へと祈りを捧げる。

403

夏休みへ向けて、彼は奔走する。

彼と孤独少女の休日。

彼らは孤島に降り立つ。

彼らは島にて試験を課せられる。

彼らは今後の方針を決める。

彼らは拠点を探し始める。

彼らは拠点を決め、設備を整える。

王は宴へと繰り出し、彼らは格闘少女を拾う。

格闘少女は彼と出会い、俺様御曹司は島を去る。

王は策を巡らせ、無機質少年は彼と協力する。

王は宴に招待し、彼は地中を掘り起こす。

三者三様、少年少女は奮闘する。

試験は折り返しを迎え、彼は奇策に打って出る。

彼は罪を被り、孤独少女は鍍金の女王へ事実を突きつける。

彼と無機質少年は策を講ずる。

三者三様、少年少女は最後の夜を過ごす。

301

313

322

333

345

362

379

417

436

452

465

478

491

503

517

532

549

566

578

597

617

633

650

島での生活は終わりを告げ、彼は啜う。

幕間：彼は羽化した。

彼らは第二の試験を課せられる。

彼らは協力することを強いらられる。

彼らは1回目の会合に向く。

彼らは試験の仕組みを考察する。

彼は火種を見つける。

彼は歪な恋模様を知る。

思惑が交錯する中、試験は動き出す。

水面下で思惑は広がる。

王は動き出し、彼は心を弱らせる。

鍍金の女王は崩れ、火種は落とされた。

鍍金の女王の真実と王の懺悔。

鍍金の女王は最後の希望に縋る。

王妃の毒林檎と虚像の王子

無機質少年は鍍金の女王に糸を垂らす。

辰の契約は結ばれた。

快活少女は悔れない。

彼と無機質少年は相對する。

狂王と女王は思考する。

快活少女の決断と彼の昼食。

格闘少女は休暇を楽しむ

格闘少女と無機質少年の奇妙な一日

幕間：箱庭の外で

彼は鍍金の女王に手を伸ばす。

彼は狼少年に道を示す。

幕間：その日、彼の者は先生と出会った。

幕間：かの者は一滴を投じること成功した。

夏は終わり、秋が始まる。

彼は強か少女と出会う。

人間は愚かしい。

ある者は私欲のために他者を足蹴にし、他者の不幸に悦を感じる。ある者は他者を傷つけることに悦を感じ、理由無く人を傷つける。ある者は資質が備わっていないながらそれを腐らせ、他人の脚を引くことに精を出す。

差別、貧困、理由無く虐げられる弱者。

ふと周りを見回してみるだけでも、世の中には理不尽と呼べる不幸に溢れている。

無意味に迫害され、無意味に殺される人間。

そして、それを何の罪の意識も抱かずにやってのけるのもまた人間だ。

ああ、諸皆総じて愚かしい。

だがこうも思う。

それこそが人間本来の姿なのだろう、と。

善と悪、至極単純な二元論で語るならば、人は容易く悪へと流れる。なぜならば、そのほうが生きることが簡単であり、そして快樂を得やすいからだ。

欲に溺れ、己のためだけに生きることがどれほど容易いか。

そして、個々の欲が一つのコミュニティを覆い尽くせばどれほどの混沌が訪れるのか。

それは歴史が指し示す通りだ。

嘗て眠れる獅子と呼ばれていた大国は、別国より齎された禁忌の果実によって無残に墮落させられた。

ただ手を伸ばせば簡単に手に入る快樂に、人は心底溺れやすい。

そしてその欲は加速し、伝播し、ついには国一つを崩壊させるに至った。

人の欲とはそういうものだ。

だからこそ、世界は禁忌の果実を嚴重に管理し、ある国では禁じる方向へと進んだ。

つまり果実を喰らうことは悪だと定めたのだ。

そうしなければ人は容易く果実に溺れると分かっていたからだ。

果実だけでなく、世の中には社会や法で悪だと定められたものは数知れず存在する。

なぜならば、そうしなければ人は簡単に目先の蜜へと手を染めるからだ。

手の届く範囲に蜜があれば、人はその味を覚え、そしてさらなる蜜を求めてやまない。

悪だと定められた概念は総じて、定めなければ社会というコミュニティが崩壊する可能性を孕んでいる。

だが逆説的に言えば、そうしなければ人は善の道を歩こうとは思わない生物だということでもある。

悪を悪であると、手を染めてはならぬことだと誰しもが口を揃えて言うだろう。

しかし何故それが悪であるかを語ることの出来る者はそう多くない。

社会が、法がそれを許さないからだ。というのは実に陳腐な理由だ。

果実を喰らえば肉体に影響を及ぼし、生活を営むのが困難になる。他者を傷つけければ法で裁かれる。

だがそれがどうした？

赤の他人が悪に手を染めたところで、所詮は他人事だ。

己の生活が脅かされなければ、人は他者に対して無関心でいられるはずだ。

己がただ欲望を満たすことが出来るのならば、人は他者に対して気を配ることはないはずだ。

では何故人は悪と呼ばれる行為を憎み、忌避するのか

それは、己の生活が脅かされることを恐怖しているからだ。

加えて言うならば、己が善行に甘んじている最中に他者が悪へと傾

くことが許せないからだ。

つまりは恐怖、そして不平等という感情だ。

しかしこれはなんら可笑しいことではない。

何故なら人間は、実のところ許されるならば悪へと染まりたい生き物なのだから。

無論、生まれながらにして善であり、悪の誘惑になど屈しないという人間もいるだろうが……

ともかく、人間は突き詰めていけば利己的であり、そして傲慢な生き物だ。

醜いだろう。愚かしいだろう。

だがそれこそ本来の姿なのだ。

今更このようなことを議論するなど茶番と言わざるをえない。

人間は所詮こうだ。と定義して悦に浸り、世界の真理を知った気になつて高みから見下ろすなど実に詰まらない生き方だ。

だから僕は違う生き方を探した。

人間が醜く、愚かしいということは分かった。

では、その定義は果たして全人類にそのまま当てはまるのだろうか。

先に挙げた例外のように、決して悪へと傾かない人間がいるように、世に蔓延る理不尽に立ち向かう人間もいるのではないだろうか。

友のため、家族のため、身を捨ててでも悪に立ち向かう心。

恐怖に屈さず立つ信念。

勇気、覚悟、そういったものを抱いて生きている人間もいるのではないだろうか。

嗚呼、それはなんと強く美しいのだろうか。

石くれの中にも宝石は眠っている。
そう考えれば、人間はとても素晴らしい生き物ではないか。
生まれながらにして光り輝く宝石もあるうが、例えば石くれであったとしても磨き上げれば太陽のぶとき輝を放つ宝石となる原石もあるだろう。

探してみよう。

求めてみよう。

光り輝く宝石を、可能性を秘めた原石を。

嗚呼、素晴らしきかな人類よ。

僕は、まゆずみゆづや 黛柚椰は人間を愛している。

4月。黛柚椰はバスに揺られていた。

窓から見えるのは満開に咲いた桜並木。

この地域の桜は今日が満開の日らしい。

新たな門出の日である今日に丁度満開の桜を見るとは中々どうして縁起が良いと彼は風情を楽しんでいた。

バスの中は混雑しており、吊革に掴まっているサラリーマンやOLがバスの揺れに少し足元をふらつかせている。

座席は当然全て埋まっており、さらには吊革も全て使われている状態だ。

吊革にすら掴まれない乗客も当然いるわけで、特に彼の視線の先にいた老婆は今にも転んでしまいそうなほどに足元が覚束ない。

「(朝のこの時間帯なら混んでも仕方ないな……)」

老婆に対して若干同情するも、時間帯を踏まえれば今の状況も仕方のないことだと彼は割り切っていた。

席に座っている他の乗客も、老婆の存在に気づいてはいるものの束の間の安息を手放したくはないのか席を譲る気配は無かった。

しかしそんな静寂はすぐに破られることになる。

「席を譲ってあげようって思わないの？」

そう声を発したのはスーツに身を包んだOL。

老婆の横に立っているその女性に声をかけられたのは優先席に座っている一人の若者だった。

ドツカリと腰を下ろしている体格の良い金髪の男。

優先席、体格がいい、若者。

その要素は標的になるのも止む無しだろう。

「(若いから、体格がいいから席を譲れ。どうせ立っていても平気だろう、ということだろうか)」

柚椰は冷静に状況を分析していた。

恐らくだが女性はこう思ったのだろう。

「若いんだから立っているべきだ」

「年寄りには席を譲るべきだ」

「体格がいいんだからバスに揺られても平気だ」と。

「(実に傲慢。年配者がいたから声をかけるに至っただけで内心はずっと思っていたのだろう。それこそ席に座っている学生全てに)」

柚椰は冷めた目で事の成り行きを見守っていた。

「その君、お婆さんが困っているのが見えないの？」

女性の声はよく通り、乗客たちの視線が一斉に集まっていた。

「実にクレイジーな質問だね、レディー」

少年は無視、あるいは女性の言うことに素直に従うかと思われた

が、実際はそのどちらでもなくニヤリと笑いながら足を組みなおした。

「何故この私が、老婆に席を譲らなければならぬんだい？ どこにも理由は無いが」

「君が座ってる席は優先席よ。お年寄りに席を譲るのは当然でしょう？」

「理解できないね。優先席はあくまで優先席であって法的な義務はどこにも存在しない。この席を譲るか否か。それは今現在この席を有している私が判断することなのだよ。若者だから席を譲る？ 実にナンセンスな考え方だ」

「確かに。年寄りだから譲るべきだというのは一見正しいようでいて、実際は破綻した理論だ」

確かに若者と年寄りは世間一般的な認識で言えば、体力のある者と体力の無い者だ。

であるが故に、若者が年寄りに席を譲るとするのは正しい理論に聞こえる。

しかし、それはあくまでセオリー、よくある場合に限った話だ。

例えば、あの金髪の少年は確かに体格が良いが、それはあくまで生まれつきのもので、もしかしたら重度の疾患を患っているという可能性もある。

あるいは今彼は貧血で座らざるを得ない状況にあるかもしれない。そういった可能性は今この時点では僅かながら存在するのだ。

少年の堂々とした口ぶりはあくまで強がりであり、本当は身体の苦痛に今尚苦しんでいるかもしれない。

そういった可能性に頭を巡らせるだけの知性が女性にはないように見受けられる。

「(尤も、視る限りアレはそういうタイプではないようだが……)」

しかし、今の可能性はあの少年には当てはまることはない。柚椰は確信していた。

「私は健全な若者だ。確かに立つことに何の不自由も感じない。しかし、座っているときよりも体力を消耗することは明らかだ。意味も無く無益なことをするつもりにはなれないねえ。それとも、チップを恵んでくれるとでも言うのかな?」

「そ、それが目上の人に対する態度!」

「目上? 君や老婆が私よりも長い人生を送っていることは一目瞭然だ。そこに疑問を挟む余地も無い。だが、目上とは立場が上の人間を指して用いる言葉だ。それに君にも問題がある。歳の差があるとしても生意気極まりない実にくてぶてしい態度ではないかな?」

「なっ……! あなたは高校生でしょう! 大人の言うことを素直に聞きなさい!」

「も、もういいですから……」

OLはムキになっていたが、老婆はこれ以上騒ぎを大きくしたくないように、手振りでもOLを宥めていたが、当の彼女は怒り心頭といった様子で落ち着くことはない。

「(社会的義憤から個人的な怒りへと変わった。この時点で女性の行為は全てがエゴ。善意の皮を被ったただの押し付けに成り下がった)」

OLの態度、声のボリューム、息の荒さ。

それらを見た柚椰は、既にこれは彼女の行為が善行ではなくなっていると判断した。

尚一層冷たい眼差しを、彼女を取り巻く周囲から彼女一人へと絞つた。

「どうやら君よりも老婆の方が物分りがいいようだ。いやはや、まだまだ日本社会も捨てたものではないな。老婆よ、残りの余生を存分に謳歌するといい」

少年はそう締めくくるとイヤホンを耳に入れ、爆音で音楽を聴き始めた。

その光景にOLは悔しそうに歯を噛み締める。

年下に言いくるめられた上、偉そうな態度は心底癢に障るだろう。

それでも言い返さなかったのは、少年の言い分に納得せざるを得なかったからだ。

少年の弁に対抗することはできなかった。

「すみません……」

女性は必死に涙をこらえ、老婆に対して小さく謝罪していた。

強引に話は終息したものの、バスの車内の空気は最悪と言っている。

立っている乗客は皆視線を他所へとそらし、席に座っている乗客も巻き込まれたくないといった様子で皆俯くか窓の外を見ていた。

「あの、私もお姉さんの言うとおりでと思うな」

そんな空気の中、また一人、先の少年に声をかける者がいた。

先ほどのOLとは違い、今度は少女、そして見る限り学生。

柚椰と少年と同じ高校の生徒だ。

「今度はプリティーガールか。どうやら今日の私は思いの外女性運があるらしい」

「お婆さん、さつきからずっと辛そうにしているみたいなの。席を譲ってあげてもらえないかな？ その、余計なお世話かもしれないけど、社会貢献にもなると思うの」

「社会貢献、か。中々面白い意見だ。確かにお年寄りに席を譲ることは、社会貢献の一環かもしれない。しかし残念だが私は社会貢献に全く興味が無い。私はただ私が満足であるならばそれでいい。それともう一つ。このように混雑した車内で優先席に座っている私を槍玉に挙げておいていいの？ 他にも我関せずと座り込み沈黙を貫いている者は放っておいていいの？ お年寄りを慮る心があるのなら、そこには優先席か否かは瑣末な問題でしかないと思うのだがね」

少年の言葉はどこまでも傲慢で、けれどどこまでも正しかった。

少女の優しい語りかけにも耳を貸すことは無い。

横で聞いていたOLも老婆も言いかえす言葉は無いようだった。

「皆さん、少しだけ私の話を聞いてください。どなたかこのお婆さんに席を譲っていただけませんか？ 誰でもいいんです、お願いします」

しかし、少年に立ち向かった少女はまだ挫けてなどいかなかった。この一言を搾り出すのに、いったいどれほどの勇気と覚悟が必要だったのだろうか。

この発言で、少女は周囲の顰蹙を買い、鬱陶しいと思われることも止む無しだっただろう。

けれど少女は一切躊躇うことなく言っただけだ。

「嗚呼、美しい……」

先ほどからずっと見守っていた柚椰は少女の言葉に、その姿に心を打たれた。

周囲の悪意を買うことを恐れず、ただ目の前の弱者のために手を差し伸べんとする姿。

己に向けられる悪評よりも、ただ目の前のか弱き老人のために奮闘するその姿。

それは柚椰が求めて止まない人間の美しさそのものだった。

「(良い。何はともあれ気に入った)」

柚椰に最早迷う余地など無かった。

「うん、いいよ。お婆さん、どうぞ座ってください」

柚椰はスツと立ち上がり、通路に立った。

幸い彼が座っていたのは件の問答が行われていた優先席から程近く、さらに通路側の座席であったため、席を譲るにはなんの障害もなかった。

かけられた言葉と、席を空けた柚椰の姿を目にすると少女の表情はみるみる内に喜色へ染まった。

「あ、ありがとうございますっ！」

少女は満面の笑みで頭を下げると、空けられた座席に老婆を誘導した。

そして二人が柚椰の前までやってくると、彼はニコリと笑った。

「いいよ。寧ろすぐに譲れなくて悪かったね。中々声かけるタイミン
グが掴めなくて。いらぬ手間をかせかせてしまった」

「う、ううん！ 私全然！」

少女はまさか謝られるとは思っていなかったのかびつくりと言った顔で顔の前で手をブンブンと振っていた。

そんな少女を横目に、柚椰は今度は少し腰を屈めると老婆と目をしっかりと合わせた。

「お婆さんもずつと立たせてしまつてすみません。俺はもうすぐ降りるので、ゆつくり座つていてください」

「ありがとうねえ……兄ちゃんほんとにありがとうねえ」

優しい言葉をかけられた老婆は少し涙声で何度も何度も感謝の言葉を述べていた。

老婆からの感謝の言葉を聞くと、柚椰はカラツとした笑顔で頷いた。

「どういたしまして。それと——」

柚椰は少女と共に老婆を席に誘導し終わると、先ほど二人がいた優先席のほうへ歩いていった。

彼の向かう先にいたのは、先ほど少年と言いつ争っていたOLだった。

「お姉さんも、すぐ名乗り出なくてすみません。嫌な役回りをさせて申し訳ありませんでした」

「え、いや、別に……そんな謝られることでも」

いきなり謝られたことに女性は戸惑っていた。

まさか自分にも謝罪の言葉を述べに来るとは思わなかったのだらう。

先ほどの少年に言い負かされたからか、未だその瞳にはうつすらと涙が残っていた。

女性の涙を見ると、柚椰は上着のポケットからある物を取り出した。

「お姉さんが本来流す必要の無かった涙を流させたのは俺の所為です。これ良かったら使ってください。ちゃんと下ろしたてなので大丈夫ですよ？」

彼が取り出したのは紺色のハンカチだった。

下ろしたてというのは本当のようで、未だ梱包時の型が付いたまま

のようだ。

女性は差し出されたハンカチに最初は遠慮していたが、柚椰は半ば強引に彼女の手に握らせた。

「あ、ありがとう」

「ええ、お姉さんもお仕事頑張ってください」

おずおずと礼を述べた女性に、柚椰はそう言っただけで再びニコリと笑った。

車内のいざござから数分後、バスはあるバス停に停車した。

ここが柚椰の、いやバスにいる自分と同じ制服を身に纏った者たちの目的地。

そこは今日から柚椰が通うことになる高校の前だ。

制服を着た学生が一人、また一人と降りていく。

柚椰も例に漏れず、バスを降りると窮屈だったと言わんばかりに大きく伸びをした。

「んっ、ああ……満員電車ならぬ満員バスというのも疲れるものだ」

社会人や、世の学生が毎朝経験している苦境に柚椰は同情していた。

尤も、今日から三年間は先の苦境とは無縁の生活を送ることになるのだが。

「さて、じゃあ行こうか」

「あ、ねえ君！」

学校へ向かう道を歩き出そうとしたそのとき、誰かが柚椰に声をかけた。

振り向くとそこにいたのは、先ほど老婆に席を譲ってくれないかと乗客に呼びかけていた少女だった。

少女は柚椰が気づいたのを見ると嬉しそうに笑い、トテトテと歩み

寄ってきた。

「ん？ ああ、さっきの」

「うん、さっきは本当にありがとう！ お婆さんも喜んでたと思う！」
「気にしないで。さっきも言ったけど、すぐに名乗り出なくてごめんね」

「ううん、気にしないで！ えつと……」

少女はそこで言葉を切ると、柚椰を頭からつま先まで見下ろした。その服装から、目の前の男が自分と同じ学校の生徒だと分かっているのだろう。

その上でどう呼ぶべきか考えているのだろうと柚椰はあたりをつけた。

「ああ、同じバスに乗ってたつてことは同じ一年生だね？ 俺は黛柚椰、よろしくね」

「私は榊田桔梗、よろしくね黛君っ！」

名前を聞くと、少女はこれまた嬉しそうに笑顔を浮かべて自身の名を名乗った。

「せっかくだし学校まで一緒にいこっ！」

「うん、これも何かの縁だ」

榊田の誘いに応じたことで、二人は学校へ向かって再び歩き出した。

歩き始めると、榊田は再び先のバスでの一幕について話を戻した。

「さっきの話に戻るけどさ、黛君お婆さんだけじゃなくてOLのお姉さんにも謝ってたでしょ？」

「ああ、まあね」

「それにお姉さんを気遣ってハンカチ渡してたし、黛君って優しいんだね！ 紳士でかつこよかったよ！」

榊田は興奮気味に先の車内での柚椰の行動について語っていた。

それほど柚椰の行動は彼女にとって好印象だったのだろう。

「男のハンカチで申し訳なかったけどね」

「ううん、そんなことないよ。お婆さんが座れたのも黛君のおかげ。寧ろさっきのは私のほうこそ、余計なことしちゃってたかなって……」

余計なお節介だったかなって実はちよつと不安だったんだ……」

そう語る櫛田の表情は眉が少し下がり、シユンとしていた。

彼女の行動は決して責められるような行為ではないが、それでも出すぎた真似だったのではないかと少し不安に思っているのだろう。

そう感じ取った柚椰は首を横に振って彼女の言葉を否定した。

「あの場で一番お婆さんに寄り添っていたのは間違いなく君だと思うよ？ あの金髪が折れないと分かったら、最終的に他の乗客にも呼びかけていたわけだからね。諦めずにどうかしようとしてた君は俺よりも立派だったと思う」

「そ、そうかな……えへへ」

柚椰からの褒め言葉に櫛田はうつすら頬を赤らめて照れていた。

「そうそう、君が一番だよ。一番かつこよかったのも、一番優しかったのも、一番役に立ったのもね」

「ま、黛君ったら、褒めすぎだよお……」

柚椰から放たれる惜しみない賛辞の嵐に、櫛田は両頬に手を当てて真っ赤になっていた。

いつそ湯気でも出ているのではないかと思わせるほどに赤くなつて照れている櫛田を柚椰は黙って見つめていた。

「(感情を揺さぶった単語は『一番』。ああ、承認欲求か)」

柚椰は自分が口にした言葉に櫛田がどのように反応したかを見ていたのだ。

彼が褒め言葉を並べれば、櫛田に徐々に喜びの感情が芽生え出した。

そして一際大きく喜んだのが『一番』という単語だということに気づいた。

以上のことから柚椰は櫛田の人間性を分析した。

「(彼女は承認欲求が強い。社会的ステータスに固執するタイプか)」
恐らく櫛田は他人からの評価を気にする性格だ。

それもプラスの、自分を好意的に見てくれる評価を望んでいる。他人に認められたい、感謝されたい、好きになつてもらいたい。

とどのつまり承認欲求。自分が必要とされたいという願望だ。

「(彼女は善行を積むことによって得られる周囲の羨望や尊敬の念を望む。先的一幕は感謝されたい、いい人間に見られたいという願望からか)」

櫛田を分析した柚椰は先のバスでの出来事を振り返っていた。

恐らくだが、彼女は心からの善意で立ち上がったのではない。

老婆に感謝されたい、周りからいい人間に見られたいという思いからの行動だったのだろう。

加えて車内には同じ制服を着た学生が数多く見受けられた。

そしてそれは櫛田も気づいていたはずだ。

つまり先の彼女の行動はあの車内だけの出来事で終わる話ではなく、彼女のこれからの学園生活においてもプラスに作用することは間違いない。

『あの子はお年寄りのために勇敢に立ち上がった』。

その評価はすぐには効果が現れなくとも、櫛田がいずれあの車内にいた生徒と再会したときに作用するかもしれない。

とにかくマイナスになることは限りなく低いのだ。

まさに勝ちの決まった勝負。

打算によって成された行為に他ならない。

「(弱者を傷つけることなく、利用することで己の利とする強かさ。それもまた美しい)」

結果として完全なる善意ではなかったものの、櫛田の行為とその思想を柚椰は大層気に入った。

彼女の在り様もまた、柚椰にとっては美しい人間として映ったからだ。

「? どうしたの黛君」

柚椰がこちらをじっと見つめていたためか、先ほどまで照れていた櫛田はいつの間にか元通りになっていた。

彼女は柚椰が自分を見つめていることに首をかしげた。

「いや、櫛田は可愛いなと思ってね」

「にやつ!？」

さらつと放たれた爆弾に櫛田は思わず変な声を上げて飛び上がった。

先ほどとはまた違うベクトルの褒め言葉に櫛田は再び赤くなった。

しかし、今度のそれは先とはまた違った熱だった。

照れるというよりは純粋に恥ずかしいといった感情だ。

「い、いきなりそんなこと言われても……恥ずかしいよ……」

「そうかい？ 別におかしなこと言ったつもりはないけど。可愛くてかつこよくて優しいなんて櫛田はもう非の打ち所がないね。中学ではさぞモテモテだったんじゃないかな？」

「も、もう……！ 黛君ったら！ そんなことないってば！」

もうこれ以上褒めないでくれと言わんばかりに櫛田は身体の前に両手を突き出していた。

「まさか入学初日から君のような子と知り合えるなんて俺は運がいいね。社会貢献もたまにはしてみるものだ」

「うううもしかして黛君、私のことからかかってるでしょ？」

柚椰からの止まない褒め殺しに櫛田は頬を膨らませて恨めしそうにつぶやいた。

彼女もいい加減目の前の男が意図的に自分を褒め続けていることに気が付いたようだ。

「ふふっ、ごめん。反応が可愛くてついね」

「っ……！ 黛君の意地悪！ もう知らないっ！」

あつけらかなと言つてのける柚椰の態度に拗ねてしまったのか、櫛田はそう言つて早歩きでスタスタと歩き出してしまった。

そんな彼女の反応をいじらしく思いながら、柚椰もまた小走り以後を追った。

「待つてよ、櫛田？ 一番可愛い櫛田さん？」

「褒めながら追いかけてこないでよ黛君のバカ！」

後ろから追ってくる男からの追加攻撃に更なる追い討ちをかけられながら、櫛田は学校への道を走っていた。

彼は学校について思考する。

「はあ……」

学校に到着し、校門をくぐったところで櫛田は深々とため息をついていた。

ため息の原因はただ一つ、つい先ほどの出来事である。

「どうしたんだい櫛田？ そんなため息なんてついて」

そして元凶であるはずの男はあっけらかんとした態度で尋ねてきた。

白々しい男の質問に櫛田はジトーツとした目を向けた。

「誰の所為だと思ってるのかな？ 全く、まさか褒められてこんなに疲れるとは思わなかったよ……」

「まあまあ、いい運動になったと前向きに考えるといいよ」

「女の子のこと弄ぶ黛君なんて嫌い……」

柚椰の言い様に櫛田は思わず恨み言を漏らした。

もちろん本気で嫌いだなどは思っていないが、少しくらい困らせてやろうという意地もあつたのだ。

「それは困るね。君とはこれからも仲良くやっていきたいんだ。ここには他に知り合いなんていないから、この縁は切りたくないな」

ニンマリと笑いながら話す柚椰に櫛田はさらにどつと疲れた気持ちになった。

「私だって知り合いいないから黛君とは友達でいたいけど……黛君意地悪だし」

「別に思ってもないことを言ったわけではないよ？ 本当に君の事は可愛いと思ってるさ」

「そっちのほうが余計悪いよっ！」

またしても可愛いと言われたことで櫛田は再び顔が熱くなってしまった。

朝の褒め殺しがお世辞ではなく本心であるなら余計に性質が悪い。

いくら本心だからと言ってこうもポイポイと褒められていたら心臓に良くないのだ。

「とりあえずクラス表が出てみたいだから見に行こうか。ああ、もしクラス分かれてしまっても遊びに行くからね」

「それって私と遊ぶんだよね？ 私で遊ぶつもりじゃないよね？」

「当たり前だろう？ 女の子で遊ぶなんて酷いじゃないか」

「どの口が言ってるのかなほんとに……」

全く自覚が無い柚椰にもう何も言うまいと櫛田は諦めたようだ。

ガツクリとうな垂れている櫛田に柚椰はカラカラと笑っている。

なにはともあれ、二人はクラス表が張り出されている掲示板の前まで向かった。

「あ、私Dクラスだ」

先に櫛田が自分の名前をDクラスの欄で発見したようだ。

「俺もDだね」

そして柚椰もまたDクラスの欄に自分の名前を見つけたらしい。

お互い共にDクラスだと分かったことで柚椰はニツコリと櫛田に笑いかけた。

「やったね櫛田、俺たち同じクラスみたいだ」

「なんでだろう、あんまり嬉しくない……」

嬉しそうに笑う柚椰に対して、櫛田はやや複雑そうだ。

本当に嬉しくないのかと聞かれれば嘘になるが、先的一幕が思いの外尾を引いているらしい。

「そう言わないでほしいな。知り合いが同じクラスの方がお互い何かと安心だろう？」

「まあそりゃそうかもだけど……」

柚椰の言っていることも理解できるのか、櫛田は先ほどよりはマシな表情になった。

「大丈夫だよ、君の友達作りには俺も協力するから」

「協力って？」

満面の笑みで語る柚椰に櫛田は果てしなく嫌な予感がしていた。

そしてその予感はずぐさま的中することとなる。

「勿論、さっきの櫛田武勇伝を俺が語り部として披露するに決まってるだろう?」

「絶ッ対ダメだからねっ!」

とんでもないことを言つてのけた柚榔に櫛田は全力でツツコミを入れた。

「え、ダメなのかい?」

「ダメに決まってるでしょそんなの! 恥ずかしいから! 大体櫛田武勇伝の語り部ってなにさ! ヤンキーの喧嘩エピソードじゃないんだよ!」

「琵琶は弾けないから琵琶法師にはなれないけどギターなら出来るよ? さしずめギター法師だ」

「ギター法師にもならなくていいから! ありがたい教えでもなんでもないよ!」

「俺は皆に君がいかに素晴らしい人かってことを知ってほしいんだけど」

「その気持ちは嬉しいけどやり方考えて! とにかく絶ッ対やらないでね!」

怒涛のツツコミラッシュに疲れたのか、櫛田はそこでドツと深いため息をついた。

そして自分は、もしかしたらとんでもなく疲れる人と知り合いになつてしまったのではないかと若干後悔していた。

「さて、くだらない冗談はさておいていい加減教室に行こうか。いつまでもここにいたら周りの迷惑になつてしまうからね」

「だから誰の所為だと思つてるのかな!」

これから先の学園生活に一抹の不安が過ぎる櫛田であつた。

「1—D、1—D……つと、ここだね」

「はあ……もう疲れた……疲れたよお……」

教室のドアの上にかけているプレートから、二人は無事に自分たちの教室を探し当てた。

櫛田は柚椰の2、3歩後ろをトボトボとついて歩いていた。

その姿はまさに疲労困憊といった様子。

朝っぱらから美少女がうな垂れているのは嫌でも周りからの視線を集めていた。

「なああの子可愛くね?」

「だな。胸デケー」

「一緒にいる男誰だよ……まさか彼氏!?!」

「ねえ、あの男子超かっこよくない!?!」

「でも女の子というよ? 彼女かなあ?」

廊下にいた生徒たちは柚椰と櫛田を遠目から見てヒソヒソと話をしていた。

入学初日から男女と一緒に歩いてきたのだ。

しかもお互い美男美女ときた。

思春期の少年少女にとってこれほど話のネタにこまるものはない。

既に二人の関係を探ろうとする者までいる始末だった。

「えっと、俺の席は、つと……」

柚椰は先に教室に入ると中をぐるりと見回し、自分の名前が書かれたプレートが置かれている席を探していた。

既に教室には席の半数ほどが埋まっており、探すのはさほど難しくはなさそうだった。

「ん?」

ふと柚椰は何かの視線を感じたのか教室内をもう一度見回した。

「(見られている……いや、これは視られているか?)」

視線の種類が人間が人を見るそれとは異なることを感じ取り、今度は壁や天井、窓ガラスなどを観察した。

そして見つけた。

「(監視カメラ、教室を隅々まで見られるように四隅に一つずつ。他にもあるだろうな)」

視線の正体は教室に設置されていた監視カメラだった。

学び舎の、それも教室内に何故そんなものがあるのかという疑問はあつたが、ひとまずそこで思考を切ると、彼は自分の席に腰掛けた。

鞆を机の上に乗せたとき、ふと隣がどんな生徒なのか気になったのか柚椰は隣の席に目を移した。

「あ……」

丁度同じタイミングで隣の席に座っていた生徒もこちらを見ようとしていたのか、両者の視線がぶつかった。

思わず声が漏れたのは仕方がないだろう。

何故なら隣にいたのは……

「柚椰がお隣さんなんだ。よろしくね」

「まさかまさかのだよ……」

知り合いが隣の席だったことに柚椰は喜んでいたが、対照的に柚椰はガクリとうな垂れた。

今日知り合った人と同じクラスの上に隣の席。

普通ならば喜ぶべきことなのだろうが、既に柚椰は柚椰がどういった人間なのか重々承知しているため、この現実には肩を落としていた。

「柚椰の『く』と黛の『ま』じゃ隣になるなんてないと思っていたんだけどね。これはまたラッキーだったよ」

「私、席が五十音順じゃないことを恨む日が来るなんて思ってたなかったよ……」

「俺は嬉しいよ？ クラスのマドンナ筆頭候補の隣なんてね。この席に座る権利をその辺の男子に売ればそれなりの値がつきそうだね」

「そんなオークションやらなくていいから！」

「至って健全な男子高校生らしい取引じゃないか。可愛い女子の隣なんて大抵の男は泣いて喜ぶものだよ？」

「え、じゃあ黛君も？」

柚椰は意外そうな顔で思わず尋ねた。

「それは俺だつて男の子だからね。可愛い子の隣は嬉しいに決まつているさ。櫛田は女神か何かなんじゃないかと思ひ始めているよ。ねえ、ちよつと手を合わせて拜んでもいいかい?」

「恥ずかしいからそんなことで拜まないで!」

冗談なのか本気なのか分からない発言に櫛田は右往左往していた。

そんなやりとりを周りにいたクラスメイト、特に男子は恨めしそうに見ていた。

「何だアイツ! あんな可愛い子と親しげに話しやがつて!」

「初日にして早くもカップル誕生か!」

「いや、多分同中とかじゃね?」

「にしては仲良すぎだろ!」

「あ、櫛田、あそこを見てみなよ」

「え?」

柚椰が指で示した方へ櫛田が目を向けた。

そこには先ほどバスでひと悶着あつた金髪の少年が腰掛けていた。

少年は両足を机の上に乗せ、鼻歌を歌いながら爪を研いでいる。

「彼も同じクラスみたいだね」

「だね、仲良くなれるかなあ」

「彼もさっきのことは大して覚えていないんじゃないかな? バスでの振る舞いを思い出してみるといい。傲岸不遜というか、唯我独尊とつか。とにかく過去のことネチネチ引っ張り出してくるような人間ではないと思うよ」

「あはは、確かにね……」

ストレートな物言いに櫛田は苦笑いを浮かべた。

「ただ、あれは仲良くというガラじゃないだろうね。自分が認めた人間しか眼中に無いタイプだ。御眼鏡に適わなければ名前すらマトモに呼ばない人種と見る」

「え、黛君つてそういうの分かっちゃうの?」

柚椰があまりにも詳細に分析するため、櫛田は驚いていた。

直接話したわけでもない相手を、ただ見ただけでどのような人間か分析する。

第一印象で性格を決め付けるといふのは褒められた行為ではない。しかし柚椰のそれはただ決め付けているのではなく、本当に人の中身を見ているのではないかと思わせるような説得力を帯びていたのだ。

「目がいいとはよく言われるね。人の癖や仕草とか、あとは目つきとか。そんなのが昔からよく目につく性質だね」

「そうなんだ〜じゃあ私は？ 私はどういうタイプかな？」

柚田はそう言うと、ズイツと柚椰に近づくと見つけた。

そして彼女は上目遣いで柚椰をじつと見つめた。

誰が見ても美少女である柚田がいきなりそのような大胆な行動をすれば、必然的に野次馬の視線は釘付けになる。

「(承認欲求の塊、強^{した}かで二面性のある女。とは流石に言えないな)」

いくらなんでも流石にそれを口にするほど柚椰はデリカシーのない男ではなかった。

「ふむ、天真爛漫な女神で一番可愛い俺の心のオアシス、かな？」

「ふえっ!？」

「な!! あの野郎口説きやがった!」

「歯の浮くようなセリフ言いやがって!」

「クソウ! 顔が良い奴は何言ってもかっこいいってか!」

「いいなく私もイケメンにあんなこと言われた〜い」

「やっぱり二人は付き合ってるのかな〜?」

柚椰が一切の躊躇い無く投下した爆弾は、柚田はおろか周囲で聞き耳を立てていた野次馬まで巻き込んだ。

男子たちは嫉妬や殺意を瞳に滲ませ、女子は柚田に対して羨望の眼差しを向けていた。

周囲の関心が柚椰と柚田に向いている最中、始業を告げるチャイムが鳴った。

「ああ、チャイムが鳴ったね。先生が来るから静かにしないといけない」

「え、あ、うん、そうだね……（なんでそんなにサラツとしてるの!?）」
先ほどの発言をまるで無かったかのように振舞う柚椰の態度に戸惑いながらも櫛田は返事をした。

しかし内心は、こちらをドキドキさせながらも冷静な彼の態度に複雑な感情を抱いていた。

全員が席に着いたと同時にスーツを着た一人の女性が教室へと入ってきた。

長い髪をポニーテールで纏め、キリツとした目つきは彼女がすっかりした教師であるという印象を抱かせている。

「新入生諸君、私がDクラス担任の茶柱佐枝だ。担当教科は日本史。初めに言っておくが、この学校には学年ごとのクラス替えは存在しない。卒業までの三年間、私が担任としてお前たち全員と学ぶことになると思う。今から一時間後に入学式があるがその前に、この学校に設けられている特殊ルールについて書かれた資料を配る。尤も、以前入学案内と合わせて配布してあるがな」

そう言って配られた資料が前の席から順に後ろに回されていく。

二列目、三列目と徐々に後ろに回っていき、そして全員へと行き渡った。

この学校には、他の高校に無いルールがいくつかある。

一つ目は生活体系、この学校の生徒は敷地内にある寮での生活を義務付けられており、特殊な例を除いて外部との接触を禁止されている。

それは例え親しい関係、家族であってもだ。
当然敷地から出ることも禁じられている。

しかしその分、敷地内に生徒の欲求を満たす施設は完備されている。

娯楽から飲食店、洋服や生活家電に至るまで、外で買えるものは全て敷地内で揃うようにできている。

二つ目は――

「今から配る学生証カード、それを使えば敷地内の全ての施設を利用することが出来る。勿論、売店などで商品を購入することも可能だ。端的に言えばクレジットカード、電子マネーのようなものだ。ただし消費されるのは現金ではなく、この学校内でのみ流通しているポイントだ。この学校においてポイントで買えないものはない。学校の敷地内にあるものなら何でも購入可能だ」

そう、これが二つ目の特徴であるSシステムだ。

学生証に内蔵されているこの機能は、この学校では金を意味する。現物を持たせないことで金銭トラブルを防ぎ、且つ生徒の消費状況を把握することが可能だ。

そしてこのポイントは学校側から無償で提供される。

「施設では機械に学生証を通すか、あるいは提示することで使用できる。それからポイントは毎月一日に生徒全員に自動的に振り込まれることになっている。お前たちには既に一人十万ポイントが支給されているはずだ。尚、このポイントは一ポイントあたり一円の価値がある。分かりやすいな?」

先生の言葉に教室の中がざわついた。

入学した生徒、つまりここにいる生徒全員は学校から十万円のお小遣いを支給されたということなのだから。

うら若き少女少女たちにとってそれは大金であるということは言うまでもない。

「支給額に驚いたか? この学校は実力で生徒を測る。入学を果たした時点で、お前たちにはそれだけの価値と可能性がある。それはお前たちに対する評価の表れだ。遠慮なく使え。ただし、ポイントは卒業後には全て学校側が回収する。現金化などは不可能だから貯め込んでいても得にはならんぞ。ポイントはどのように使おうがお前たちの自由だ。仮に必要ないと言うのであれば誰かに譲渡することも問

題は無い。だがカツアゲのような真似はするなよ？ 学校はその手の問題には厳粛に対処する」

戸惑いが広がる中、茶柱先生は肅々と説明を終えた。

「質問は無いようだな。では、よい学生ライフを送ってくれたまえ」
そう締めくくると彼女はスタスタと教室を出て行った。

「(さて、では少し考えるところ)」

先生が出て行くのを見届けると、柚椰は暫し思案し始めた。

「(先生が僅かながら含みを持たせた単語はいくつかある)」

一つ目は『学年ごと』のクラス替えは存在しない』。

普通に考えればこの学校のクラスは三年間同じで、

二年次三年次も誰かと離れることや別クラスから誰かが来ることはないということだろう。

しかしその言葉を発したとき、彼女の声色は少し変わり、瞳孔に揺らぎが視えた。

つまり何かの意味があるということだ。

そう思った柚椰は試しに先のセリフをいくつか分割してみた。

学年ごとの、クラス替えは、存在しない。

こうして分けてみると意味が変わる可能性のある単語は最初の部分。

『学年ごと』という部分だ。

つまり年度ごとにクラスが変わることはないが、学校が設ける何かしらの要素によってクラスが変動することはあるということだ。

それがDクラスの面々がバラバラになって新しいクラスへと変えられるのか。

或いはDクラスがCクラスに、あるいはBクラスになるといふことなのかは不明だが。

とにかくクラスが変わる可能性はあるということだけ今は念頭にに入れておこうと柚椰は結論付けた。

二つ目は『この学校においてポイントで買えないものはない』。これは敷地内の施設をポイントがあれば好きなだけ利用することが出来るということを意味するだろう。

だが、引つかかるのは『この学校において』という部分。

ポイントがあれば敷地内の施設を利用することが出来るとは言わず、この学校においてと言い、さらに買えないものはないと言った。つまりそれは物を買ったり食べたりすること以外にも使えるということにはならないだろうか。

例えば、誰か気に食わない奴を退学にする権利を学校から買うなどということも出来るのではないだろうか。

或いは定期テストの答えを、いや点数そのものを買うことも出来るのではないだろうか。

とにかく、常識では買えないものもこの学校のルール上、買うことが出来るかもしれないということだと柚椰は気づいた。

三つ目は『この学校は生徒を実力で測る』。

四つ目は『それはお前たちに対する評価の表れだ』。

これはこの学校が生徒を測る指針と、現時点での自分たちへの評価についてだ。

現時点での実力、それは入学試験のことで間違いはない。

試験を突破し入学したというレベルで与えられるのが今端末にある十万ポイントであるということだ。

つまりここはスタート地点。

そして実力で測るということは当然ながら個々の、いやクラスの力によって判断されるということだ。

測ると言われて真っ先に考えうる要素は定期テストだろうか。

テストの点数が悪ければ、赤点であるならば、期待外れだったと学校側は判断するだろう。

では普段の生活態度並びに授業態度、小テスト、学校行事などにも目を向けてみよう。

個々の実力を測るということならば当然勉学以外にも評価される要素は存在する。

生活態度に関して言えば寝坊や喧嘩、授業態度なら内職や居眠りや私語、学校行事なら体育祭などが挙げられる。

生活態度が悪ければ教員からの印象は悪くなり、高い評価はつけづらくなる。

授業態度が悪ければ通知表に悪い評価がつけられる。

学校行事に関しては悪く書かれることはないにしても内申点などの評価は良くなるだろう。

しかしそれはあくまで外の、普通の学校での話だ。

これら全てが生徒たちの実力であり、全てが評価に左右される要素であるとするならば自ずと答えは導き出せる。

現時点で自分たち新入生は学校側に十万を与える価値のある人間であると認識されている。

しかしこの先、もし不出来であると、この学校に相応しくない生徒であると判断された場合、それはポイントにそのまま反映されるのではないだろうか。

「なるほど、確かに先生は毎月十万振り込まれるとは一言も言っていない」

担任の発言を今一度振り返ったことで、柚椰はこの予想が当たっていると確信した。

「(ここから先は徹頭徹尾、僕たちの一挙手一投足がそのままポイントに影響するということか)」

結論を出した柚椰は笑みを浮かべた。

この学校は、とどのつまり完全な実力社会。力がそのまま金となり、生活に影響する。

目先の欲に目が眩んでポイントを使い果たし無一文となる人間もいるだろう。

あるいはもつとポイントをと求めて強引な手段を使ってくる人間

もいるだろう。

あるいは、何かを成すためにポイントを使うものもいるだろう。

それは十人十色の間模様。

この学校は絵の具箱のようなものだ。

「(いいね……実際に心が躍る)」

これから出会うであろう数多の人間に柚椰は心躍らせていた。

彼は同窓の徒を分析する。

「皆、少し聞いて貰ってもいいかな？」

そう声を上げたのは好青年という言葉がそっくり当てはまりそうな男子生徒だ。

いかにも優等生といった雰囲気でクラスの中心にいそうな男子。

「僕らは今日から同じクラスで過ごす仲間だ。今から自発的に自己紹介でもして一日でも早く皆が仲良く出来ればと思うんだ。入学式までまだ時間もあるし、どうかな？」

「さんせー！ 私たち、まだ皆の名前全然わかんないし」

一人が提案したことで、それまで迷っていた生徒たちが次々に賛同した。

「じゃあ言い出した僕から。僕は平田洋介。趣味はスポーツ全般だけど、特にサッカーが好きかな。気軽に洋介って呼んでほしい。よろしく」

言いだしっぺの男子、平田はスラスラと、つつがなく自己紹介をやつてのけた。

彼の後に続く形で一人、また一人と自己紹介をした。

途中口下手な、というより人の前で話すことが苦手なタイプの女子もいたが、周りの生徒のアシストもあってなんとかこなしていた。

「俺は山内春樹。小学では卓球で全国に、中学では野球でインターハイまでいったけど、怪我で今はリハビリ中だ。よろしく」

冗談を交えて自己紹介を行ったこの男子は、所謂お調子者といったところだろうか。

「じゃあ次は私だねっ」

事の成り行きを見ていた柚椰の隣から元気のいい声が聞こえた。

朝から既に何度も聞いた聞き覚えのある声。

「私は櫛田桔梗と言います。中学からの友達はこの学校にはいないので一人ぼっちです。あ、でも今日朝に一人、友達が出来たかな。早く

顔と名前を覚えて、みんなとも友達になりたいって思ってます」

大抵の生徒が一言、二言で終わる自己紹介で櫛田は尚も語った。

「私の最初の目標は、ここにいる全員と仲良くなることです。皆の自己紹介が終わったら、ぜひ私と連絡先を交換してください」

物腰柔らかかという言葉が相応しい櫛田の自己紹介は男女問わず多くのクラスメイトの心を掴んだ。

「それから放課後や休日は色んな人とたくさん遊んで、たくさん思い出を作りたいので、どんどん誘ってください。ちよつと長くなりませんが、以上で自己紹介を終わりますっ」

最後に、自分の親しみやすさをアピールして彼女の自己紹介は締めくくられた。

多くの男子生徒はその可憐さに心奪われたのか、彼女に大きな拍手を送っている。

女子生徒もまた、親しみやすそうだと彼女に好印象を抱いているようだ。

「(彼女の口ぶりから察するに、交友関係は他クラスにも及びそうだな……)」

既に櫛田の性格を把握していた柚椰は彼女の長所がそこであるということに気づいた。

彼女はクラスという枠組みで友達の線引きはしないだろう。楽しい学校生活を送りたいという思いは嘘ではないだろう。

しかしそれ以上に、彼女は自分の価値を高めることに暇がない。幅広い交友関係を築いているというのはそれだけで一種のステータスになりうるのだ。

「(もし先に立てた仮説が正しいのなら、彼女の人脉は大きな武器になる……)」

柚椰は改めて櫛田の価値を高く買った。

「じゃあ次——」

促すように次の生徒に視線を送った平田だが、視線を向けられた生

徒は平田を睨みつけていた。

髪を真つ赤に染めた、いかにも不良のような男だ。

「俺らはガキかよ。自己紹介なんて必要ねえ、やりたい奴だけやってろ」

赤髪の男は喧嘩腰で平田に食って掛かった。

「僕に強制する権利はない。でもクラスで仲良くしようとすることは決して悪いことじゃないと思うよ。もし不愉快な思いをさせたのなら謝るよ」

相手をまつすぐ見つめて頭を下げる平田の姿を見て、一部の女子は赤髪の男を睨みつけた。

「自己紹介くらいいいじゃない」

「そうよそうよ」

「(同調圧力。とりわけ女性は時に個よりも輪を重視する傾向がある)」

平田が既に女子生徒に好意的に見られていることもあつてか、大半の女子生徒は彼に味方したようだ。

そしてこれこそが同調圧力。

『平田がそう言っているのだからお前もやるべきだ』という考えが教室内に蔓延している。

一人がそれを表に出したことで一人、また一人とそれに同意するかのように、皆揃って赤髪の男を敵のように見る。

赤髪の言うように、やりたい奴だけやればいいという考え。

それは男女問わず一部の生徒は持っているだろう。

しかし、残念ながらそれはこの状況においてはマイノリティだ。

わざわざここで赤髪に味方するような行動を取るメリットはない。

長いものには巻かれるとはよく言ったもので、多数派に流されていれば波風立たずにすむからだ。

世界からいじめがなくならない理由も実のところこれに起因する。

声の大きな者、集団の中心に位置する者がいじめを肯定する姿勢をとった場合、多くの者はそれに流されることがままある。

なぜならば、反対すれば自身がそのターゲットになる危険性を秘めているからだ。

中心人物が『アイツが嫌いだ』と言えば、『自分も嫌いだ』『自分も実は前から嫌いだった』とそれに追従するような行動をとる。

たとえばその中心人物が気に食わない奴だったとしても、集団の輪を崩さないために友好的な姿勢をとる。

個よりも輪、少数派の考えよりも多数派の考えへと人は同意しやすい。

「うっせえ、こっちは別に仲良しごっこしに来たんじゃねえんだよ」

赤髪の男はそう吐き捨てて席を立った。

同時に言葉を発さないうちにも数人の生徒が続くように席を立ち、教室を出て行った。

ほとんどが男子だが中には女子もいた。

「(協調性がない。というよりこれは同調圧力への嫌悪、か)」

席を立った生徒一人一人を柚椰は視ていた。

そして如何なる理由で席を立ったのかを分析していた。

「悪いのは彼らじゃない。勝手にこの場を設けた僕が悪いんだ」

「そんな、平田君は何も悪くないよ。あんな人たちが放っておいて続けよう?」

謝罪する平田をフォローするように女子がそんなことを言った。

その光景を、というよりは平田を柚椰はじつと見つめていた。

「(協調性の重視、というよりこれは……恐れ、かな?)」

平田の在り方は、優しさというよりは歪んだ何かであると柚椰は見抜いた。

クラスを纏めるといふよりは、崩壊することを是が非でも防ごうとする。

団結を望むのではなく、軋轢を恐れる。

だからこそ平田は先の場面で頭を下げることを躊躇わなかったのだ。

柚椰は平田の分析をひとまず打ち切り、次の生徒に視線を移した。

「俺は池寛治。好きなものは女の子で、嫌いなものはイケメンだ。彼女は随時募集中なんでよろしく！ もちろん可愛い子か美人希望！」
冗談なのか、或いは本音なのかはさておくとして、池と名乗る男子の自己紹介は少なからず女子から軽蔑の視線を貰った。

「スゴイ、イケクンカツコイー」

「マジマジ？ 俺も自分で悪くねえかなって思ってるけどさ、へへへ」
女子が言った心にもないことを池は真に受けているようだ。

「どうやらお世辞だということに全く気づいていないらしい。」

「(池、彼は乗せやすそうだな……煽てれば木に登るタイプか)」

「あの、自己紹介をお願いできるかな？」

平田が次に指名したのは今朝方バスにいた金髪の男。

彼のような男がまだ教室に残っていたのは意外だ。

彼は短く微笑むと机の上に両足を乗せ、その体勢のまま自己紹介を始めた。

「私の名前は高円寺六助。高円寺コンツェルンの一人息子にして、いずれはこの日本社会を背負う男だ。以後お見知りおきを、小さなレディーたち」

彼はこの場にいる女子生徒のみに向けて自らの身分を明かした。

しかし女生徒たちは彼に目を輝かせることはなく、寧ろ変人を見るような目を向けていた。

「それから言っておこう。私が不愉快と感じる行為を行った者は、容赦なく制裁を加えることになるだろう。嫌ならば十分配慮したまえ」
「えーっと、高円寺君。不愉快と感じる行為っていうのはどんなことかな？」

物騒な言葉を聞いたためか、平田はそう尋ねた。

「言葉通りの意味だよ。強いてあげるとするならば……私は醜いもの

が嫌いだ。そのようなものを目にしたら……果たしてどうなってしまうやら」

「あ、ありがとう。気をつけるようにするよ」

高円寺の傲慢たる発言に苦笑いしながらも平田はそう返した。

「己が優れているという確固たる自信。そこには一切の揺らぎがない」

柚椰は高円寺の人となりは今一度詳しく分析していた。

高円寺六助という人間は、とどのつまり優秀なのだろう。

それは客観的事実ではなく、主観的事実に基づいている。

しかし自惚れているのではなく、そうであると当たり前のように認識している。

恐らくだが、彼はこれまで試練という試練にぶつかったことがない。

或いはぶつかったとしても容易に突破してきたのだろう。

だからこそ自分が優秀であると誰よりも理解しているタイプだ。

「文武両道、百戦錬磨、それが当たり前だと思っている人種か……」

加えて彼が言った『醜いものが嫌い』という言葉。

それは恐らく容姿のことではなく、内面を指す。

御曹司という立ち位置であることを踏まえれば簡単に察しがつく。

彼には、彼の家にはこれまで多くの人間が群がってきただろう。

そしてそれらは全て、彼の親が経営している企業か或いは彼らの財産が目当てだった。

己の存在に対する評価ではなく、背後にあるものへ媚びへつらってくる人間。

嗚呼、それは確かに醜いだろう。

もし先の彼の自己紹介で彼に媚を売ってくる者がいたとすれば、彼は忠告することなく制裁を加えていただろう。

「彼と交渉する場合、下手な建前や小細工は悪手だろうね……」

今後、彼と取引する際は全て本音で語らざるを得ないだろうと柚椰は思った。

「じゃあ次は君、お願いできるかな？ 他の皆も君が気になつてるみたいだから」

平田が指名したのは柚椰だった。

先ほどからクラスメイトの、とりわけ男子からの『お前は何処のどいつだ』といった視線が向けられていることは柚椰も理解していた。

柚椰は平田の指名に頷くと、静かに椅子から立った。

「じゃあ期待に応えて。俺は黛柚椰。趣味は将棋、囲碁、チェス。特技はこれと言えないものはないけど、スポーツは大体出来るかな。平田がさつきサッカーが好きと言っていたから今度サッカーでもやろうかと、まあこんな感じかな。なにか質問があれば聞いてくれて構わないよ」

クラスメイトがまだ聞きたいことがあるような目をしていたのを察したからか、彼は教室を見渡しながらそう言った。

するとクラスメイトが次々に我も我もと手を挙げ始めた。

「じゃあ質問質問！ 櫛田ちゃんとはどういう関係だ!？」

「さては恋人じゃねえだろうな!?! だとしたら許さねえぞ!」

「黛君、連絡先教えて!」

「あ、抜け駆けズルイわよ! 私も私も!」

「み、皆落ち着いて……」

クラスメイトの熱量に平田は面食らっていた。

一方そんな彼らの熱を一気に向けられているはずの柚椰は涼しそくに微笑んでいた。

「ふふつ、櫛田とは今日ここに来る途中で縁があつて知り合つたんだ。第一村人ならぬ第一お友達というやつだね。彼女も俺が第一お友達みたいだったから、お互いラッキーだったよ。ああ、連絡先なら全然交換するから構わないよ。俺も友達は多く作りたいからね」

クラスメイトから聞かれたことを柚椰はつらつらと答えていた。

小さな冗談も挟みつつ返ってきた答えにクラスメイトたちは皆笑っていた。

「なあーんだ、ただの友達か」

「つーか第一お友達ってなんだよ」

男子たちは安心する者や柚椰の小ボケに笑っていた。

女子もまた、イケメンの連絡先を手に入れられるという事実にはテンションが上がっているようだ。

「あ、でもその前に榎田と連絡先を交換しないとね」

「え、私?」

いきなり話を振られた榎田はキョトンとした顔で首をかしげた。

そんな彼女に柚椰はニコツと笑った。

「うん、第一お友達だから一番最初に登録するなら俺は君がいいな」

そう言うとは彼はポケットから取り出した学生証端末を榎田に差し出した。

端末ごと渡された榎田は、その行動に面食らっていた。

「ええっ!? 端末ごと渡しちゃうの!」

「今日貰ったばかりの物だから、別に見られても困るものじゃないだろう?」

「そ、それはそうだけど……」

「じゃあ、早速交換しようか」

柚椰に促され、榎田は自分の端末と柚椰の端末を操作してお互いの連絡先を登録した。

あまりに自然と行われたやりとりにクラスメイトは一瞬ポカんとしていた。

しかし徐々に状況を理解したのかざわつき始める。

「あの野郎……やっぱ油断ならねえ!」

「あっさり榎田ちゃんと連絡先交換しやがって……!」

「端末ごと渡すなんて、榎田さん信頼されてるね」

「ね、なんか羨ましい」

「皆、まだ自己紹介する人が残ってるから一旦落ち着いて」

ざわついているクラスメイトを平田は宥め、自己紹介を再開しようとした。

そして彼が指名した次の生徒――

「えー……えっと、綾小路清隆です。得意なことは特にありませんが、皆と仲良くなれるよう頑張りますので。えー、よろしく願いします」

取りとめもなく、というよりは特になにも目立つことは言わず、その男子生徒は自己紹介を締めた。

クラスメイトも何とリアクションをとっていいものかと困惑しながらも拍手を送っていた。

「よろしくね綾小路君、仲良くなりたいのは僕も同じだ。一緒に頑張ろう」

男子生徒をフォローするように平田がそう言って笑顔を振り撒いた。

「……」

クラスメイトたちが拍手を送る中、柚椰は先の男子生徒を見つめていた。

これまでの生徒同様、どのような人間かを分析するためだ。

しかし――

「(口下手、内気、ではないな。アレはなんだ?)」

綾小路と名乗る男子生徒の分析はこれまでの生徒たちより遥かに複雑だった。

「(孤立したいわけではない、だが目立ちたくもない。そういう奴は何処にでもいるが……)」

柚椰が視るに、綾小路のソレはごくありふれたものではないということとは理解できた。

友達は欲しい、けれどグループの中心などにはなりたくない。

そういった人間はどこにでもいる。

長いものに巻かれる人種などはまさにそれだろう。

しかし、綾小路清隆は違う。

「(浮世離れ……いや、非人間的という表現が正しいか)」
変わり者というカテゴリーには属さない。

そもそも綾小路清隆という人間は一般的に分析される性格には当てはまらない。

達観しているというよりは冷めている。

見下しているのではなく無関心。

大人ぶっているのではなく、恐らく本当に精神が歳相応のそれではない。

「(取捨選択に迷わない。利のないものはなんであれ切り捨てる機械的思考、か)」

柚椰が分析した結果、綾小路清隆という人間は以下の特徴を有していると考えた。

メリット、デメリットの判断が正確且つ冷静。

感情を排除した機械的思考の下、利益不利益によって人間関係を構築するタイプ。

クラスメイトを、ひいては全校生徒全職員を敵か否かで判断する。

そして恐らく敵と判断した場合――

「(容赦なく潰すだろうな……あの手の人種に誰かと肩を並べるという思考はない)」

綾小路清隆は導火線のない爆弾。

いつ爆発するか分からない不発弾のようなものだ。

人畜無害そうな雰囲気を纏っているが、実際はどこまでも物騒で冷酷だ。

支配欲にまみれた小物より尚性質が悪い。

「(もし彼が件の人物であるなら出し抜くのは容易ではなさそうだね……やるとするなら念入りに、だ)」

それは黛柚椰の中で、綾小路清隆という男がしかと刻まれた瞬間だった。

彼は仮説を検証する。

自己紹介的一幕から数時間が経過した。

入学式は滞りなく行われ、生徒は再び教室で軽くホームルームをした後に解散となった。

するとゾロゾロとクラスメイトたちが身支度を整えて教室を出て行き始めた。

7割近くの生徒は学生寮へ帰るようで、残る3割はいくつかのグループに分かれて早くも遊びに繰り出すつもりのようなのだ。

「あ、ねえねえ黛君っ」

鞆を肩に掛け、教室を出ようとした柚椰に櫛田が声をかけてきた。

「今からみんなと軽くお茶しにいくんだけど、一緒に行かない？」

「どうやら用件は遊びのお誘いだったようだ。」

入学初日にして、早くもクラスの中心的立ち位置を獲得した櫛田からの直々のお誘い。

彼女に直接誘われたという羨ましさに、同行する予定だった男子たちは柚椰を睨んでいた。

そんな男子たちの視線が痛いからか、柚椰は苦笑いしながら頭を掻いた。

「えっと、俺もみんなとお茶したいのは山々なんだけど……少し先に行きたいところがあるんだ。だからごめんね」

「行きたいとこって？」

「寮生活だし日用品を買いにね。新年度だから混むだろうから、早めに買って揃えておこうかと思ってね」

「なるほどく黛君頭良いね！」

「生活力があるのは櫛田的にポイント高いかな？」

「うんうん、高い高い！」

誘いを断つたにも関わらず櫛田から好感を得たことに、見ていた男子たちは一層嫉妬の籠った視線を柚椰にぶつけた。

そんなことに気づいているのかいないのか、尚も柚椰は櫛田と会話を続けた。

「なんだったら櫛田の分も買っておこうか？ テイツシユやタオルとか、消耗品なら男女関係なく使うだろう？」

「なっ!?!」

「あんにやろー!?!」

「こうもさり気なく紳士ぶりをアピールしやがるとは!」

柚椰がした提案を耳に入れた男子たちは皆戦慄していた。

自然に女子に優しくし、自らの存在をアピールする手腕。

既に男子たちの中で、黛柚椰は抜け目のない奴だという認識で固まった。

尤も、当の本人である柚椰はそんなことは一切考えていないのだが。

「ええっ!?! そ、そんなの悪いよ〜! 黛君に余計な荷物増やしちゃうし」

「気にしなくていいよ。男手なんて使えるときに使っておくものさ。代わりに立て替えておくくらい構わないよ」

「うーん、じゃあお願いしちやおっかな?」

櫛田は柚椰の厚意に素直に甘えることにしたようだ。

「いいよ、任せて。ああ、部屋番号を教えてくださいれば後で部屋まで届けるけど、どうするっ?」

「と、届けてくれるの!?!」

まさかそこまでやってくれるとは思っていなかったのか櫛田は驚いていた。

聞いていた男子たちも驚いている、というよりキレている。

男子たちからすれば柚椰は入学初日、今日知り合った仲にも関わらずグイグイ攻めているように見えるからだ。

「手を出すなら終いまで、というのが俺のポリシーだからね。俺の部屋に取りに来させたら結局君に持たせることになるだろう? 荷物

になる物もあるし、最後までやらせてほしい。あ、でも流石に男に部屋番号を教えるのは女性的に不味いかな?」

「う、ううん！ 黛君のことは信用してるから平気だよっ！ ……意地悪だけど」

「聞こえてるよ」
「てへっ」

櫛田は自分で頭をコツンと突いて照れ笑いを浮かべた。

あざといと言われても仕方のない行為だが櫛田がやると何故か自然に感じられる。

現に男子たちはハートを射抜かれている様だ。

「まあいいや、じゃあ帰ってきたら連絡して。持っていくから」

「分かった！ じゃあお願いしますっ」

「はい、お願いされます」

最後に軽く言葉を交わし、二人は会話をそこで終えた。

あまりに自然な二人のやりとりは、本当に今日知り合ったばかりなのかと疑いたくなるほどだった。

「（これから先は、僕の仮説を立証するために必要な調査だ）」

敷地内に設けられているコンビニに入店すると、柚椰は店内を注意深く観察し始めた。

店員や利用している生徒、そして陳列されている商品一つ一つを彼は見ていく。

「（生徒の収入源であるポイントが流動的であるならば、大なり小なり貧富の差が生まれるはずだ）」

生徒の実力がそのままポイントに反映され、それが生徒の月収入となるというのなら、

月に10万貰える生徒もいれば、月に5万、いや3万という生徒もいる可能性がある。

当然使える額が減れば買えるものの範囲も狭くなる。

先月まで買えていたものが今月は買えないということもありえな

い話ではない。

浪費癖がついている生徒の場合、ポイントが減るといふ現象は最悪だろう。

「節約を心がけると言っても限度がある。であれば当然何処かにあるはずだ」

柚椰は店内を物色しながらも、自分の必要な物と、先ほど櫛田に頼まれた物を一通りカゴに入れていった。

ティッシュやタオル、トイレットペーパー、台所洗剤や石鹸などの消耗品を取り敢えずカゴにぶち込む。

「生きていく上で……いや生徒として相応しい身嗜みを整えるというのは学校も望んでいるはず」

彼は思案しながら店内を歩いていた。

そしてカップ麺のコーナーを通りかかると――

「おや？ 綾小路じゃないか」

「え」

「あら、良かったじゃない綾小路君。貴方の存在を認知してくれている人がいて」

カップ麺を手を取っている綾小路と、一人の女子生徒を発見した。

「俺の名前、覚えているのか……？」

綾小路はどこか感動した様な顔で柚椰に尋ねた。

まさかそんなことを尋ねられると思っていなかった柚椰はキョトンとした。

「さつき自己紹介していただろう？ 勿論覚えてるよ。綾小路清隆、得意なものはないけど皆と仲良くできるように頑張りますって」

「ふっ、なんの捻りも面白味もない、実に貴方らしい自己紹介ね綾小路君」

「放っておいてくれ……自己紹介って結構緊張するんだぞ」

柚椰によって明かされた綾小路の自己紹介の内容を聞いて、女子生徒は小馬鹿にするように笑った。

対する綾小路は先の自己紹介の時の記憶が蘇ったのかどこか項垂

れている。

「確かに特技とか趣味とかで面白い自己紹介をするのは難しいからね。あれはあれで無難で良かったと思うよ?」

「そう言ってもらえると幾分楽になる……そういうお前は黛、だよな?」

「ああ、黛柚椰だ。苗字でも名前でも適当に呼んでくれて構わない。それで君は——」

「……」

柚椰がそれとなく隣にいる女子生徒に名前を尋ねたが、当の女子生徒は沈黙を貫いていた。

「おい堀北、聞かれてるぞ」

「言つたでしよう? 私は友人を作るつもりはないの」

綾小路が名前を名乗るように促したが、堀北と呼ばれた生徒はバツサリと切り捨てた。

取りつく島もない態度に普通ならそこで気まずさが生まれるはずだ。

しかし——

「堀北って名前なんだね。下の名前は?」

綾小路が苗字を口にしたのを柚椰は逃さなかった。

そして改めて今度は下の名前を聞こうと尋ねた。

「貴方のせいで苗字が知られたじゃないの」

「たかが苗字だろうが……ってというか、ここまできたらもう諦めて名乗れよ」

女子生徒は余計なことをしてくれただと言わんばかりに綾小路を睨んだ。

しかし綾小路も面倒臭いのか、いい加減諦めろと再度彼女に促した。

するとようやく折れたのか、女子生徒は心底鬱陶しそうに——

「堀北鈴音よ……別に覚えなくていいわ」

あまりにも愛想なく名前を名乗った。

「うん、よろしくね。それにしても、鈴音っていい名前だね」

「いらぬお世辞をどうもありがとう。別によろしくするつもりはな
いけれど」

笑顔で語りかけてくる柚椰を堀北はこれまたバツサリと切り捨て
た。

誰にでもこの態度なのかと綾小路は改めて彼女の社交性の壊滅さ
に呆れていた。

「ところで二人は何を買いに来たんだい？ やっぱり消耗品かな？」

「ああ、まあ、そんなところだ」

「別に何だつていいでしょう」

柚椰の質問にあまりにも対照的に回答する綾小路と堀北であった。

ふとそこで綾小路は柚椰が押しているカートに視線を落とした。

「黛は……随分と大きな買い物だな」

「今日から寮生活だから日用品を揃えておかないと思つてね。まし
て今日は入学初日だから、売り切れたりしないように早めに買いにき
たんだ」

「でも一人分にしては多くないか？」

「ああ、俺の分だけじゃないよ。櫛田の分もさ」

「櫛田のも？ なぜ」

綾小路の疑問は尤もだった。

「まあ成り行きで？」

「ふつ、入学初日から女子のパシリなんて随分と腰が低いのね貴方」

柚椰の返答に堀北は嘲笑した。

「おい、堀北」

「あはは、別に奢りというわけじゃないさ。ただ立て替えておくだけ
だよ」

堀北の失礼極まりない発言に苦言を呈そうとした綾小路だったが、
柚椰は怒ることなく寧ろ笑顔で応対していた。

その対応に、柚椰の懐の広さに綾小路は少し感心した。

「お、綾小路、堀北。これを見てみなよ」

「どうした？」

「何なのよ……」

柚椰は何かを発見したのか二人を呼びつけた。
面倒臭そうにしながらも柚椰の指す方を見る辺り、堀北も根は素直
なのかもしれない。

「(そら、やはりあつたぞ救済措置が)」

柚椰が見つけたのはワゴンに雑に置かれていた商品の数々。

それは歯ブラシや絆創膏や髭剃り、箱が凹んだ弁当や崩れたサンド
イッチなどバラバラだ。

中にはシャンプーやボディーソープなどもある。

恐らく見切れ品かワケあり商品などだろう。

しかし驚くべきはワゴンに書かれたある文字だ。

「無料……？」

思わず堀北がそう呟いたのも無理はない。

ワゴンに書かれていたのは無料という文字、そして1ヶ月に3個ま
でという文字だ。

「すごいね、ワケあり品と言ってもまさかタダなんて」

「ああ、どういうことなんだろうな」

「ポイントを使い過ぎた人への救済措置かしら？ 随分と生徒に甘い
のね」

興奮する柚椰と真意を計りかねている綾小路、そしてある予測を立
てた堀北と反応は三者三様だった。

「じゃあ、お言葉に甘えて三点まで頂きます」

柚椰はそう言うのと歯ブラシと髭剃り、そしてシャンプーを手につ
てカゴへと入れた。

「卑しいのね。ポイントがあるのだから別に必要ないでしょうに」

あつさり¹と無料と言う言葉に釣られた柚椰に堀北は呆れていた。

しかしそんな彼女の辛辣な言葉に対しても柚椰はカラカラと笑っ
ていた。

「別に何でもかんでもありがたいがたがって貰っているわけではないよ？」

1ヶ月に3個までなら、まずすぐ無くなるものは論外。選ぶならよく使うもので且つ月に一回程度変えるような消耗品がベスト。だから歯ブラシ・髭剃り・シャンプーにしたんだ」

「結構考えてるんだな」

「生活力はあるのね、意外だわ」

柚椰のこの説明に綾小路はふむふむと納得していた。

そしてこれには流石の堀北も多少なりとも感心していた。

「どうせなら3点全て櫛田さんの消耗品にして、無料であることを黙ってポイントを請求すればいいのに」

「堀北……」

堀北のあまりに酷い発想に綾小路は若干引いていた。

「ふふつ、確かにそれなら余分にポイントが貰えるね。でも流石にそれはしないよ。頼まれている以上、櫛田の分はちゃんと買い物をするつもりさ。あ、そうだ堀北、女性用のシャンプーやボディーソープってどれがいいか教えてくれないかな？」

「嫌よ。貴方の頼みを聞く義理がないもの」

柚椰の頼みを堀北は躊躇う事なく拒否した。

「全部とりあえず一番安いもので揃える、というのも失礼だろう？女性の好みは同じ女性である堀北に聞いたほうがいいと思ってるね」

「なんで私が貴方のお遣いを手伝わなければならぬのかしら？ 大体、そんなものは本人に連絡して聞けばいいじゃない」

「そうか、その手があったか。ありがとう堀北」

まさに天啓といったような顔で礼を述べると、柚椰は端末を取り出して櫛田へメールを送った。

「この程度のこと礼を言われる覚えはないのだけれど」

頭が良いのか悪いのか分からない柚椰に堀北は呆れたようにそう呟くと、スタスタとレジの方へ歩いて行ってしまった。

「おい堀北……じゃあな黛、俺ももう行くぞ」

「ああ、明日からよろしく」

綾小路は柚椰に一言かけると、堀北を追いかけないようにレジへと向かっていった。

その後、綾小路と堀北はレジで店員と揉めている赤髪の男に出会うのだが、それはまた別の話。

「(仮説は補強された……ポイントは減少する。それも下手をすれば何も買えないほどにまで)」

コンビニでの買い物を終えた柚椰は、一旦荷物を置きにいくために寮への道を歩いていった。

道中彼は先ほどコンビニで見つけたワゴンについて考えていた。

無料のワゴンを見つけたことで、彼の仮説が肉付けされた。

生活必需品の無料配布。

それはつまり、タダでくれてやるからその程度の身嗜みはしろということだろう。

学校のこの措置によって最低ランクの生活は保障される。

「(日用品がこれなら、恐らく衣と食にも何かしらの措置が取られているだろう)」

生活を営む上で必要な衣・食・住という三つの要素。

住は学生寮とこのワゴンで手に入る。

残る二つも最低限の何かが保障されているであろうことは想像に難くないと柚椰は踏んだ。

恐らく男女共に制服の下に着るであろう肌着や下着類は洋服店に行けば無料のものがあるであろう。

肌着類がないというのは衛生上学校側も無視はできないはずなのだから。

そして最後、食に関しては――

「(学食、あるいはスーパ―などに無料のメニューや食料が存在していると考えるのが妥当か)」

宛てがわれた部屋に荷物を置き、柚椰は再び外へと繰り出した。

次に向かうのはつい数時間前まで居たはずの学校。

目的は当然、自分の仮説をさらに補強するための調査だ。

「(ポイントは減少する。では、逆に増やすことは可能なのか。それも自発的な手段で)」

学校によつてポイントが減らされるということは分かった。

では、ポイントを増やすことは出来るのだろうか。

普通に考えればポイントが増えるということは自分の実力を学校側が高く評価するということだ。

それは定期テストや学校行事での成果、部活動での成果が挙げられるだろう。

しかしそれはあくまでセオリー通りの手段だ。

「(生徒間でのポイントの譲渡は可能。ならば必ず存在するはずだ、生徒間での賭け事が)」

賭け事、とどのつまり博打。

それは古来からある娯楽の一種であり、人間が生み出したスリルのある遊びだ。

生徒間でポイントの譲渡が出来るというのは担任の発言で分かっている。

しかし強引な手段での取引は不可能。

仮に、学校側から貰えるポイントが少なく日常生活を送るのが困難な者が居た場合。

その生徒は必ず思うはずなのだ。

『手っ取り早くポイントを増やしたい』と。

それと対照的に、潤沢なポイントを有してはいるものの、もっとポイントが欲しいと考える者もいるはずだ。

となれば当然発生するのだ。

何かしらの手段を用いて行われるポイントを賭けたギャンブルが。流石に敷地内に競馬場やカジノなどはない。

だとすれば存在しているのはあくまで学校内で、そしてあくまで表向きは賭博ではないとしているもの。

「(テストの点数での賭け、スポーツの賭け試合、ボードゲーム、カー

ドゲーム、可能性はいくつかある)」

いくつか挙げた候補の中で、特に可能性の高いものに絞って考える。

部活動の一環として行われているという前提で考えるとすれば、それは文化部の可能性が高い。

もちろん運動部でも賭け試合というものが行われている可能性もある。

しかし、それ以上に文化部には賭けに繋がりそうな部活の候補がいくつかあることを既に柚椰は知っていた。

そして幸運なことに、彼の得意とする将棋も囲碁もチェスもこの学校には部活として存在している。

あとはポーカーでもあれば良いと笑みを浮かべた。

「ひとまず今日のところは、ポイントを増やす手段があるかどうかの調査だな」

「柚椰の検証はまだ続くようだ。」

彼は魔性教師に尋ねる。

学校に到着した柚椰はまず初めにある場所へと向かった。

事前の推測を確かめるために食堂に行くというのも選択肢としてはアリだった。

しかし彼は不要だと思っていた。

もう既に先の推測はほぼ確実に当たっていると確信していたからだ。

一つ確信を得たことで、彼の興味は次の項目へと移った。

今彼が最優先で調査したいと考えていることはポイントの増やし方についてだ。

であるならば、目指す場所はただひとつ――

「失礼します、1—Dの黛です」

訪れたのは職員室だった。

情報を集めるならば、まず初めに教員から当たるつもりらしい。

1年生が、それも入学初日から職員室に訪れたのは珍しいのか、室内で作業をしていた教員数名は入り口に立っている柚椰に視線を移した。

しかしそれもあくまで一瞬、直ぐに各々の作業を再開した。

流星は一流高校の教員といったところだろうか。

「黛か、どうした？　まさか初日から何か問題を起こしたわけではなかろうな？」

柚椰の担任である茶柱先生が、どこか楽しそうにそう尋ねてくる。

彼女はホームルームのときと違い、多少なりとも柔らかい雰囲気を感じて纏っていた。

オンオフのしつかりした人なのか、案外こつちが素なのかもしれないと柚椰は思った。

「あー、いえ、実は茶柱先生ではなくて、星之宮先生に少し用が
「え、私？」

星之宮先生は傍で聞き耳を立てていたのか、いきなり話を振られた
ことにキョトンとしていた。

彼女は星之宮知恵、1—Bの担任である。

「Dクラスの黛君が私に用だなんてどうしたの？ あ、まさか先生に
惚れちゃったかな？ でも私は先生だからダメよく？」

「いえ、そうではなく、少し質問したいことがあります」

星之宮先生はまつたりとした喋り方で柚椰をからかった。

しかしそんな冗談を柚椰はサラリと流しながら用件を告げる。

「なんだ黛、私では不満か？」

まさか担任である自分ではなく、違う教員に質問しにくると思わ
なかつたようで、茶柱先生はそう尋ねた。

言葉だけ聞けば不満そうな感じを受けるが、実際は不満というより
は面白いものを見るかのようにニヤリと笑っている。

「まさか、茶柱先生に不満なんてありませんよ。ただ、今回の内容はフ
レンドリーそうな星之宮先生の方が聞きやすいと思ったので」

「なるほどね、佐枝ちゃんお堅いからね」

「余計なお世話だ」

星之宮先生の言葉を茶柱先生は一蹴した。

「じゃあ黛君、お話聞かせて？ ちょうど生活指導室開いてるから行
こ」

星之宮先生はそう言うとニコニコしながら職員室を出て行った。

「はい。茶柱先生、失礼します」

柚椰も茶柱先生に一礼すると、先に出て行った星之宮先生を追うべ
く職員室を後にした。

「それで？ 聞きたいことってなくに？」

星之宮先生は生活指導室として設けられている部屋に柚椰を通した。

そして彼が席に座るや否や、早速話の内容について尋ねた。

彼女に促されたことで、柚椰は一切の前置きなく本題へ入った。

「聞きたいことは主に2つです。学校が設ける試験以外でポイントを稼ぐ方法について。そして、学校のシステムそのものを買う場合のポイント相場についてです」

「——っ!？」

柚椰が聞いてきた内容に星之宮先生は目を見開いていた。

それは驚きと動揺が入り混じった表情。

彼女の表情から、聞きたいことの前者については存在するということ、そして後者についても可能であるということを知った。

「どうしてそんなことを聞くのかな？ ポイントなら毎月10万も貰えるんだよ？ それに学校のシステムを買うなんて普通出来ると思う？」

驚きから一転、星之宮先生は努めて冷静に、そして教師らしい返答をした。

しかしそれが真実ではないということを知った柚椰は既にお見通しだ。

「茶柱先生は毎月10万振り込まれるとは一言も口にしていませんでした。そしてそれは星之宮先生と同じはず。加えて茶柱先生は10万ポイントは入学を果たした今の俺たちへの評価だと言っていました。筆記試験と面接で判断された結果が10万という数字だとするならば……それはしっかりと勉強し、且つ面接で行儀良く振舞っている姿を見た上での判断です。そんなものはここから先、学校生活が始まれば否が応でもボロが出る。生徒の実力がそのままポイントに結びつくであろうことを考えれば、態度の悪い不良品にはポイントの減少などの措置が取られることは想像に難くありません」

「——っ! (この子、今日だけでそこまで気づいたの!?)」

柚椰の語る内容に星之宮先生は黙ってはいるものの、内心は驚愕していた。

「ポイントが減るといふことは、それだけ生徒の生活にも影響が出るということですよ。この学校においてポイントとはつまり金。金に困っている人間が、もっと金をと欲する人間が何をするか。生徒間でポイントの譲渡は規則に抵触しない。強引な手段ではなく、双方同意の下で行われるポイントのやり取り。それは――」

「賭け事、つてことね?」

「はい、恐らくですがあるのではないですか? 生徒同士による賭けが行われている部活動が」

「……」

柚椰の問いに星之宮先生は沈黙を貫いていた。

しかしやがて誤魔化せないということに察したのか、深々とため息をついた。

「はあー……参りましたくそうだよ、この学校には生徒たちがポイントを賭けて遊んでる部活もある」

「どの部ですか?」

「基本的にどこの部でも内容は違えどあるかな。運動部なら誰が一番多く点を取るかで賭けるとか。文化部ならチェスとかのボードゲーム系、あと遊戯部でもやってたかな?」

「なるほど、道場破りを考えると文化系に行ったほうがやりやすそうですね」

「おススメはしないけどね。賭けに慣れてるつてことは皆それなりに強いってことでもあるし」

「問題ありませんよ、ボードゲームとかは好きなので」

「頑張つてねくれぐれもポイント全部スらないようにね」

賭け事に意欲的な柚椰に星之宮先生はメールを送った。

「それで、学校のシステムそのものを買うつてどういうこと?」

多少和やかな雰囲気にはなったものの、直ぐに再び真剣な空気になり、星之宮先生はそう尋ねた。

そしてそれは彼女が最も驚いた質問なのだ。

柚椰がその質問をしてきたとき、まさか僅か半日にしてその可能性

に行き着いたのかと彼女は戦慄した。

根拠のない質問であるならばいくらでも誤魔化しが利く。

しかし、そんな考えと同時に柚椰は確信を持って聞いてきているということも薄々察していた。

正確には先ほどの柚椰の弁を聞いた結果、察せざるを得なかったのだ。

「茶柱先生はポイントで敷地内にあるものなら何でも買えると言っていました。ここにはコンビニやスーパー、飲食店や家電量販店まで揃っています。普通ならポイントがあればどの店でも買える物が出ると考えます。しかし茶柱先生はこうも言っていたんです。『この学校においてポイントで買えないものはない』と」

「――！」

「わざわざそんな言い回しをしたのには理由があるはずだと考えたんです。『この学校において』という言葉、それは施設だけでなく学校そのものも対象になる。そしてその学校においても買えないものはないと言外に言っているのではないかと。例えば、定期テストの問題を事前に購入する。或いはテストの点数そのものを購入することも可能なのではないかとね。もしくは上級生から過去問を買うなんてこともルール上出来るはずだと俺は考えています」

「……確かに佐枝ちゃんの言う通りなら問題ないね〜でも黛君が聞きたいのはそこじゃないってことだよな？」

「ええ、あくまでこれは作戦として使われる方法です。俺が思いつくのですから、他の1年生にも同じ考えに行き着いている人がいるかもしれない。或いは上級生が既に同じ方法を使っていることもありえる話です。なので僕が貴女に聞きたいことは――」

柚椰はそこで言葉を切ると、目を閉じて少し息を吸った。

そして再び目を開き、言葉を紡いだ。

「生徒を強制的に退学させる権利をかう上で必要なポイントがいくらなのか。そして生徒の退学を取り消す権利をかう上で必要なポイントがいくらなのか。対象が自分のクラスの場合と他クラス、他学年の

場合と両方教えてください」

「なっ……!?!」

柚椰が口にした内容に星之宮先生は今日一番の驚きを覚えた。

予想の斜め上どころか完全に意識外の内容だったからだ。

同時に恐怖した。

一体それを聞いて何をするつもりなのかと。

「そ、そんな非常識なもの買えるわけが……」

「買えますよ。この学校においては、ね?」

何とか誤魔化そうとするが、柚椰はそれを許さない。

彼はじつと、まっすぐに、けれど突き刺すように星之宮先生を視た。

「——っ!?! (なに……? なんなの、この子の目は……!?!)」

柚椰の目は職員室で見たときのような柔らかい目でも、先ほどまでの真剣な目でもない。

氷のような、いいやそれ以上に冷たい目。

こちらの全てを見抜いているかのような絶対零度の目。

ずっと目を合わせていれば、全てを晒してしまうような気にさせる目。

今すぐにも目を逸らしたい。

しかし——

「どうしました? 顔色が悪いように見受けられますが」

「っ……!?! あっ……!?!」

目を逸らせない。逸らすことを許されない。

声が出ない。息が苦しい。

先生と生徒でありながら、既に星之宮知恵は黛柚椰に服従してもいいという気にさえなっていた。

それほどまでに柚椰の眼光は鋭く、そして恐ろしかった。

支配者を前にした平民は、かつてこのような気持ちだったのかもしれないと彼女は思った。

しかしいくら相手の目が怖いとはいえ、彼女にも教師としての誇りがあつた。

教師として、生徒に屈することなどあつてなるものかと抗つた。沈黙を貫き、気丈に柚椰の瞳を見つめ返すことで抵抗した。

しかし――

「……退学者の救済には2000万プライベートポイント。それと合わせてクラスポイントが300必要だわ。自クラスでそれなら他クラスの場合は……直接の救済なら少なく見積もっても3000万、クラスポイントは400つてところかしらね」

星之宮知恵は抗えなかつた。

抵抗はした。最大限、全霊を以つて。

けれど不可能だつた。

教師である以前に一人の人間として、黛柚椰という存在に屈してしまつたのだ。

望んだ回答を得た柚椰は暫し考え込んだ。

「僕たちが既に得ている10万はプライベートポイント……クラスポイントとはクラス単位で加減されるポイントのことですね。では、そのポイントをプライベートポイントで買うとすればいくらになりますか？」

柚椰は先ほどと同じ目で再び星之宮先生を見た。

「――っ！……クラスポイントはクラスの評価によつてつけられるポイントだから。それを増やすことはクラスメイト全員分の評価を底上げすることと同義よ。だから300ポイント丸々買うとすれば……300万はかかるわ」

見つめられたことにビクツと震えながら、星之宮先生は素直に答えた。

「では全てをプライベートポイントで賄うとすれば……自クラスなら2300万、他クラスなら3400万といったところか。なるほど、やはり捨て札の回収は高くなりますね。では、生徒を強制的に退学さ

せる権利を買う場合はいくらになりますか？」

「そ、それは……」

流石にそれだけはと星之宮先生は抵抗した。

もし仮に自分が教えたとしたら、目の前の生徒がそれを実行に移すかもしれない。

そうなった場合、標的にするのは自分のクラスの生徒かもしれない。

これを教えるのはあまりに危険なのだ。

「心配ありませんよ、先生。僕は誰彼構わず嫌いだから、目障りだから退学させようなどということは全く考えていませんから。これはあくまで例え話です。今ここで答えたとしても、あくまで貴女は僕の例え話に乗っただけに過ぎません。生徒と先生のスキンシップの一環ですよ。だから気にする必要はありません。さあ、教えてください？」

彼女の警戒を察してか、柚椰は柔らかく微笑みながらそう尋ねた。

先ほどまでの冷たい目はそのままに、口元だけの柔らかい笑み。

この状況でそれはまさに飴と鞭。

落としてから上げるといふ緩急。

人の心をよく視ている柚椰だからこそその手段だ。

そして彼に尋ねられた星之宮先生は――

「……退学させるのは退学者を救済するのとはわけが違うわ。救済措置じゃない、完全な独裁の権利よ。当然そんなもの、学校側は可能な限り認めたくはない。でももし、ポイントによつて強引に可能とするなら……自クラスなら6000万、他クラスなら8000万つてところでしょうね」

自分の今までの教員生活の経験に基づき、暫定的な数字を提示した。

それはあまりに高額だが不可能と言うわけではないという事実。

前例のない仮定を算出するのは精神も心も疲弊させる。

現に星之宮先生は冷や汗をかいていた。

「なるほど……理解しました」

柚椰は短くそう言うと、再び瞳を閉じた。

そして1秒足らずでもう一度瞼を開けた。

「ありがたいございます星之宮先生。色々と勉強になりました」

そう言つて笑う姿に、先ほどの冷たさは微塵も残っていないかった。

あまりに素早い切り替えに星之宮先生はついていけなかった。

「どうやら怖がらせてしまったみたいですね。すみません、昔からどうしても気になることがあると、つい強引に聞いてしまう癖があつて」

「え、あ、ううん！ いいのいいの。先生なんだから、生徒の相談には乗つてあげないとね」

あつけらかんとした柚椰の態度に緊張が解れたのか、星之宮先生はそう言つて微笑んだ。

といつても即興の作り笑いでかなり引き攣っているのだが。

「やっぱり星之宮先生に相談して正解でした。先生のクラスの生徒が羨ましいです。俺もBクラスだったらよかったのに」

「もく、そんなこと言っちゃダメよ。佐枝ちゃん意外と傷つきやすんだから」

先の空気を打ち消すように、二人は冗談を交えた会話を繰り広げていた。

尤も、先生の方に関しては無理矢理にでも明るい雰囲気を作っているのだが。

「ではそろそろ俺は行きますね。お時間を取らせてすみませんでした」

柚椰はそう言うのと席を立ち、生活指導室を出て行くこととした。

しかし星之宮先生はどうしても聞かなければならないことがあるのか、彼を呼び止めた。

「ね、ねえ黛君、最後に一つだけ、私からもいいかな？」

「なんですか？」

先生に呼び止められたため柚椰は出ていこうとする足を止めた。

止まった彼の背に向けて、星之宮先生は尋ねた。

「さっきのことを聞いて、黛君は一体何をするつもりなの……？」

「何を、ですか。そうですね……」

星之宮知恵の問いに、黛柚椰は暫し間を空けるとこう答えた。

「社会貢献、ですよ」

「はあ……」

生活指導室で一人、星之宮知恵は大きく息を吐き出していた。

尋常ではないほどの疲労と倦怠感に包まれながら、彼女が思い返すのは唯一つ。

先ほどのこの部屋を出て行った男子生徒のことだ。

「黛柚椰君、か……」

初めてだった。

生徒でありながらあそこまでの威圧感と底の知れなさ。

優秀な生徒はこの学校にも数多く在籍している。

中には天才とも呼べる生徒もいる。

しかし彼はそういった類の人間ではない。

完全なる異質。

天才というよりは怪物に近い何か。

たった一回の話、それもあくまで概要程度にしかなされなかった話から、一気にこの学校の仕組みまで辿り着いた洞察力。

答えづらい、答えてはならない問いに対しても有無を言わせない威圧感。

そして何より恐ろしいのがあの目だ。

見つめられたら最後、こちらの心も何もかもを丸裸にされるようなあの目。

こちらの考えも、人となりも、ともすれば未来でさえ見られているような気にさせられた目。

あの目から放たれるプレッシャーは凄まじかった。

教師でありながら、思わず彼に忠誠を誓いそうになったほどだ。

彼の真の武器は恐らくあの目であると星之宮知恵は確信していた。

黛柚椰はあの目を以ってして、先の結論に辿り着いたのだろう。

「佐枝ちゃんにはとても飼い慣らせないかもね……柚椰君は」
脳裏に浮かぶ同期の女性に、彼女は同情の念を送っていた。

彼は孤独少女と友達になる。

学校二日目、さつそく今日から授業が行われた。

初回授業ということもあって、ほとんどの授業はガイダンスのみだった。

教師陣は明るくフレンドリーだったため、生徒たちは皆直ぐに緊張が解れていた。

中には初回早々居眠りや私語をしている者までいた。

しかしそんな生徒たちは教師に注意されることはなかった。

教師が気づいていなかったわけではない。

気づいた上で一切注意しなかったのだ。

しかし、決して無視をしていたわけではない。

それは教師たちを視れば柚椰には簡単に分かった。

「(全ての教師に共通していた感情。それは軽蔑と嘲り……確定だな)」

教師たち一人一人を視た柚椰は彼らの秘めていた感情を読み取っていた。

授業妨害とも取れる態度を取っている生徒への、ともすればクラス全体への軽蔑。

そしてこの行為によって後に何かがあると分かっているが故の嘲りの感情だった。

一般的な学校で考えれば、後の科目別成績評価に響くと考えるのがベターだ。

しかしこの学校においては違う。

授業態度の悪さはそのまま生徒自身の評価へと直結する。

そして評価に直結するということは、ポイントに影響を及ぼすということに他ならない。

「(昨日聞いたクラスポイントという単語から察するに、ペナルティはクラス単位で執行される)」

昨日星之宮先生との会話で出てきた単語から、柚椰は今後起こりうる現象について大凡の予想を立てていた。

そして、それを踏まえた上で今後どう立ち回るか対策を練っている。

「(まだ二日目、今はこの事よりも学校全体について知るべきだ)」

柚椰は一旦そこで思考を打ち切ると席を立った。

時刻はお昼時。つまり今は昼休みだ。

であれば当然行くところは決まっていた。

「いただきます」

数十分後、校内の食堂で手を合わせている柚椰の姿があった。

購買でパンなどを買って教室で食べるという選択肢もあったが彼は学食を選択した。

理由は単純。昨日の考察通りなら学食にあるであろう無料のメニューを一度試してみたいと思ったからだ。

案の定学食の券売機には無料と書かれているメニューが存在した。名前は山菜定食。その名の通り山菜をふんだんに使用した定食だ。手を合わせた柚椰は早速箸で山菜をひとつまみすると口へと運んだ。

「あー……んっ……うん、普通だね」

味は可もなく不可もなく。

山菜らしい独特の苦味が口に広がる。

味付けはしっかりとされておりからか不快感はないようだ。

一緒についてきた白米と味噌汁は有料のメニューと変わらないためか普通に美味しい。

総合的に考えると、決して不味いということはない。

柚椰は山菜を食べてご飯を一口、合間に味噌汁を挟むという極めてスタンダードに食べ進めていく。

しかし一年生が、それも入学二日目です。無料メニューを食べているというのは物珍しいのか、食堂にいた他の生徒の視線を嫌でも集める。そしてそれは当然、同じクラスの生徒からの視線もだ。

「なんだよ黛、お前なんでそんなもん食ってんだよ」
「んっ？」

声をかけられたことで柚椰は一旦箸を止めた。

そして顔を上げるとそこには同じクラスである池がいた。

彼の側には山内、そして女子生徒が数人いた。

どうやら彼らは柚椰のすぐ近くに座って昼食を摂っていたようだ。

先の池同様、同伴していた女子たちも柚椰が食べているものが珍しいのか、彼の手元に視線を落としていた。

「それ山菜定食だよね？ 無料の」

「なんでそれにしたの？ ポイントいっぱいあるのに」

女子たちはポイントがあるであろうにも関わらずわざわざ無料の定食を頼んだ柚椰が不思議なようだ。

「おいおい黛、まさかもう金欠かあ？」

「いくら毎月10万ももらえるからってはやぎすぎだろ」

池と山内は柚椰が散財の限りを尽くしたと思っっているのか、その金遣いの荒さを茶化していた。

「いや、確かに昨日は日用品を揃えるために5000くらい使ったけどそれだけだよ。これは単純に興味さ。無料のメニューがどんなものか試したくてね。それに山菜は身体にいいんだよ？ 無料で健康になれるなんて良いこと尽くめだ」

そう言っただけで笑うと柚椰は食事を再開した。

パクパクと食べ進めるその姿を見て、クラスメイトたちはポカンとしていた。

「なんか黛君って……」

「結構家庭的なんだね」

「ん、そうかい？」

女子たちは昨日の櫛田と似たようなことを言った。

「でもよくポイント残ってんならわざわざタダ飯食わなくてもよくな

？」

「だな、どうせなら高え飯食ったほうが得だろうよ」

池と山内はポイントに困っていないにも関わらず無料のものを選ぶことが理解できないのか、変なものを見るかのような目でそう言った。

「何にしても安くても良いものは知っていて損はないだろう？ 調子に乗って物を買すぎたら、池と山内も食べてみるといい。これはこれでアリだと思うよ……ごちそうさまでした」

定食を全て食べ終えた柚椰はそう言っただけで席を立った。

そして返却口にトレーを置くとそのまま学食を後にした。

「黛って変わってるな」

「だな」

柚椰の後ろ姿を眺めながら池と山内はそう呟いた。

食堂を後にした柚椰は校内をぶらりと歩き回っていた。

その間、彼が考えていたのは食堂を出て行く時に丁度流れた校内放送についてだ。

「(先の校内放送を聞く限り、放課後に部活の説明があるらしい)」

放送の内容は今日の夕方、新入生に向けた部活動の説明会が開かれるというもの。

運動部文化部に関わらず、何か部活に入ろうと考えている1年生にとっては部活の雰囲気を知るのに良い機会だ。

「(部活に入る気は無いが、行って損はなさそうだ)」

残りの昼休み全てを校内の散策にあてた柚椰は午後の授業に遅れないように急いで教室へ戻った。

「お、綾小路と堀北じゃないか」

「ん、黛か」

「黛君、私たちがセットのように呼ばれるのは甚だ遺憾なのだけれど？」

放課後、さっそく体育館に顔を出した柚椰と一緒にいる綾小路と堀北を見つけた。

尤も、堀北に関しては一緒にいるというつもりはないようだが。

「コンビニの時といい今回といい、二人は仲が良いのかい？」

「勘違いしないで頂戴。嫌な偶然が重なっているだけよ。それに今回に関しては友達のいない綾小路君に仕方なく付き添ってあげているだけ」

「そりやどうも……」

堀北からの言葉のナイフに抉られたのか綾小路は苦々しく言葉を返した。

「堀北は優しいんだね」

「そうね、哀れな男に付き合っただけの慈悲はあるわ」

「お前、俺以外にロクに話せる奴がいなただけだろ」

息を吐くように罵倒する堀北と低いテンションながらもツツコミを入れる綾小路。

二人の相性は存外悪くないのかもしれない。

「そういえば、綾小路とはまだ連絡先を交換していなかったね。いい機会だから交換しようか」

「い、いいのか……!？」

柚椰の申し出に綾小路は目を輝かせていた。

昨日のコンビニでも似たようなことがあったことから、柚椰は綾小路が友達というものを作ることには慣れであると気づいた。

「クラスメイトなんだから当然だろう？ はい」

「感謝する……!!」

そう言っただけ綾小路は急いで上着のポケットから端末を取り出すと慣れない手つきで端末を操作して連絡先を交換する。

二分とわからず無事に交換を済ませると、彼は感慨深そうにアドレ
ス欄を眺めていた。

「堀北も、どうかな?」

「どうして私と黛君が連絡先を交換しなければならないのかしら?
交換する必要性を感じないのだけけれど」

柚椰は傍にいた堀北にも声をかけたが彼女は間髪容れずに断った。
しかしあっさり断られても尚、柚椰はカラカラと笑っていた。

「まあまあ、そう言わないで。綾小路とも交換しているんだろう?」

「していないわ。するわけがないじゃない」

「え、そうなのかい? てつきり昨日のうちに済ませていると思って
たんだけど」

「さつきも言ったでしょう。私たちは別に友達でもなんでもないの」

「じゃあ俺と第一お友達になろうか」

「話の脈絡が無さ過ぎて理解できないのだけれど。一体どうしてそう
なったのかしら?」

柚椰の自由なトークに頭が痛いというように堀北は頭を抱えた。

しかし柚椰の勢いは止まらない。

「難しく考えなくていいんだよ。友達というのは大抵は流れでなるも
のなんだ。なんでもないことで会話をして、たまに一緒に勉強をした
りして、暇があつたら遊ぶ。それが友達だ」

「必要性が皆無ね。そんなことをする相手なんて私は欲していないも
の」

「なんだつたら俺が勉強を教えてあげてもいいよ? 案外君より出来
るかもしれない」

「――! へえ……随分大きく出たわね」

取り付く島も無かった堀北が、柚椰のその発言にこれまでとは違
うリアクションを取った。

挑発されたと感じたのか、彼女は柚椰を射殺するような目つきで睨
んでいる。

「食いついたね。まだテストはないからなんとも言えないけど、結果
次第ではそうなるかもしれないという話さ」

「面白いじゃない。いいわ、乗ってあげる」

堀北はそう言うのと端末を取り出した。

それが了承の意だと受け取った柚椰はニコリと笑うと端末を操作した。

綾小路とは違い、堀北はやり方自体は知っていたからか交換は直ぐに終わった。

「じゃあ堀北の第一お友達は俺ということだ」

「勘違いしないで。貴方の発言が出任せでないか確かめるための一時的な措置よ。もしテストで私のほうが上だったら、そのときは泣いて教えを乞わせるまでよ」

「ふふっ、ならしつかりと勉強しておかないとね。君の授業は厳しそうだ」

好戦的な発言をする堀北に柚椰はそう言って笑った。

「一年生の皆さんお待ちせしました。これより部活代表による入部説明会を始めます。司会を務めさせて頂きます、生徒会書記の橘です。よろしく願います」

柚椰と堀北のやり取りが丁度終わったとき、橘と名乗る女性の先輩のアナウンスの下、体育館の舞台上に部の代表である先輩たちが並んだ。

その出で立ちには各々スポーツのユニフォームを着ていたり和服を着ていたりと様々だった。

先輩が一人、また一人と各々の部活について紹介していく。

「堀北、どうしたんだ？」

ふと横で見えていた綾小路が突然そのようなことを言った。

それを聞いた柚椰は堀北へと視線を移した。

「……」

堀北は顔を青ざめさせ、舞台上を凝視していた。

その只ならぬ様子に思わず柚椰も声をかけた。

「堀北、大丈夫かい？」

「……」

しかし返事が返ってくることは無い。

堀北の精神状態が気になった柚椰は今一度彼女を視た。

「(主な感情は尊敬と……そしてこれは畏怖か？ 彼女は何かに怯えているのか)」

彼女が一体誰にそのような感情を抱いているのか柚椰は興味を持った。

そしてその答えはすぐに分かることとなる。

先輩たちによる説明は残すところ男の先輩一人となった。

最後ということもあつて体育館にいる者全員の視線が集中する。

背丈はそれほど高くなく、身体は細身で髪は黒。

シャープな眼鏡をかけ、知的な印象を抱かせている。

マイクの前に立ったその先輩は無言で一年生たちを見下ろしている。

その沈黙は5秒、10秒と続き、ともすれば30秒近く経過しているような気さえさせた。

「がんばってください〜い」

「カンペ、持っていないんすかあ〜？」

「あははははー！」

壇上の先輩に対して一年生たちは野次を飛ばした。

しかしそれでも尚、件の先輩は微動だにせず立ち尽くしていた。

一言も言葉を発さないその姿に一年生たちは段々と呆れ始めた。

沈黙を貫く先輩と、呆れかえる一年生。

しかし柚椰はこの光景に、この沈黙に覚えがあつた。

「(緊張しているのではない。これは沈黙という話術だ)」

嘗て世界を二度目の戦火の渦へと巻き込んだかの有名な第三帝国。

その第三帝国総統に君臨していた男が用いていた話術の一種だ。

彼もまた、観衆が進んで自分の話しを聞くようになるまで意図的に沈黙を貫いた。

沈黙によつて齎される効果。

それは己の第一声を、聞き手の脳内に強く印象付けるといふものだ。

今この状況において、この沈黙による効果は絶大と言えるだろう。

既に数多くの部活動が紹介を行っていた。

しかもその内容はどこも似たり寄ったりといったところで一年生たちは食傷気味であっただろう。

故にこの先輩の沈黙は否が応でも強烈なイメージを植え付ける。

「私は、生徒会会長を務めている、堀北学と言います」

1分以上沈黙が続き、ついにその先輩が口を開いた。

「生徒会もまた、上級生の卒業に伴い、1年生から立候補者を募ることとなっております。立候補するために必要な資格などはありませんが、もし生徒会の立候補を考えている者がいるのなら、部活への所属は避けて頂くようお願いします。生徒会と部活の掛け持ちは原則として受け付けていません」

堀北学と名乗ったその男の口調は柔らかかったが、だからといって緩いわけではない。

彼から放たれる肌を突き刺すような緊張と空気は体育館にいる一年生たちに有無を言わせなかった。

「それから、私たち生徒会は、甘い考えによる立候補を望まない。そのような人間は当選することはおろか、本校に汚点を残すことになるだろう。我が生徒会には、規律を変えるだけの権利と使命が学校側に認められ、期待されている。そのことを理解できる者のみ歓迎しよう」
そう締めくくると、彼は真っ直ぐ舞台を降り体育館を出て行った。
「皆さまお疲れ様でした、以上で説明会は終了です。これより入部の受付を開始させていただきます。また、受付は4月いっぱいまで行っていますので、まだ検討中の生徒は後日申込用紙を部まで直接持参してください」

司会の生徒のおかげか、先ほどまで張り詰めていた空気は消え、再び生徒たちの喧騒が戻ってきた。

そして既に入部する部活を決めていた生徒はぞろぞろと申し込みの受付へと向かっていった。

「……」

一年生たちに喧騒が戻っても尚、堀北は立ち尽くしたまま動く気配

が無かった。

放っておけばいつまでもそんな状態だろうと思った柚椰は――

「どうっ」

「あうっ！……あ、あら？　ここは何処かしら？」

堀北の脳天に軽くチョップをおみまいした。

頭に衝撃が走って正気に戻ったのか、彼女は目を白黒させて周りをキョロキョロと見回していた。

「おかえり堀北、やっと正気に戻ったね」

「ここは何処の次は私は誰とか言い出すかと思ったぞ」

カラカラと笑う柚椰と冗談を言う綾小路。

二人の言葉で徐々に状況を理解したのか、堀北は柚椰を睨んだ。

「女性に手を上げるなんて乱暴なのね」

「放っておいたら夜まであんな調子だろうと思ったからね。あのまま突っ立っていたら周りに迷惑になるだろうし。それに、ちゃんと手加減したから痛くはないだろう？」

「……そうね、衝撃こそあれど痛みはないわ。それに、確かに黛君の言う通りね。」

呆けていたのは私の責任だったわ。ごめんなさいね」

「(あの堀北が謝った……だと……!?)」

呆然としていた自覚はあったのか、堀北は素直に非を認めて謝罪した。

彼女が人に対して謝るといのが意外だったのか綾小路は少し驚いていた。

謝罪された当の柚椰は全く気にしていないのかニコリと笑った。

「構わないよ、友達なんだから気にしないで」

「さつきも言ったけど、あくまで一時的に交友を持ってもいいと言っているだけで友達になったつもりはないわよ」

「そういい残すと堀北はスタスタと人ごみに紛れるように体育館から出て行ってしまった。」

「おや、怒らせてしまったかな？」

「気にしなくていいと思うぞ。にしても、堀北を謝らせるとは凄いな」
「そうかな？ 堀北も意地っ張りなだけで根は優しい子なんだと思うよ」

「……ポジティブなんだな、黛は」

堀北の容赦のない罵倒をいい方に捉えられる柚椰に綾小路は感心しているようだ。

「じゃあ、俺もそろそろ帰るよ」

「部活は入らないのか？」

「ひとまずは保留かな。4月中は受け付けてるみたいだし、焦って決めるものでもないだろう？」

「それもそうか」

「そういうことで、また明日ね」

「ああ」

綾小路に別れを告げ、柚椰は足早に体育館を後にした。

彼は俺様御曹司に呼ばれる。

「おはよう山内！」

「おはよう池！」

入学から一週間が経過したある朝、池と山内はお互い元気に挨拶を交わしていた。

いつもは始業ギリギリに登校してくる二人なのだが、今日は何故か早かった。

「いやあー、授業が楽しみ過ぎて目が冴えちやつてさー！」

「この学校は最高だよな、まさかこの時期から水泳があるなんてさ！」

水泳と言えば女の子！ 女の子と言えばスク水だよな！」

どうやら二人が興奮しているのは今日から水泳の授業が始まるかららしい。

テンションを抑えきれない二人は朝早くから熱く語り合っている。

しかしその所為か、二人は周りが全く見えていなかった。

その証拠に教室であるにも関わらず、大っぴらに声のボリュームも考えずトークを繰り広げている。

であれば、当然その会話は教室にいる他の生徒にも聞こえている。

一部の女子は早くも二人にドン引きしていた。

しかしそんな女子からの視線に、悲しいかな池と山内は全く気づいていない。

「おーい博士く、ちよつと来てくれよ！」

「ふふっ、呼んだ？」

太目の生徒が、あだ名なのか『博士』と呼ばれて池に近づいていった。

「博士、女子の水着ちゃんと記録してくれよ？」

「任せてください。体調不良で授業を見学する予定ンゴ」

「記録？ なんだよそれ」

いつのまにか登校してきていたのか、須藤もその輪に加わってい

た。

「博士にクラスの女子のおっぱい大きい子ランキングを作ってもらんだよ！ あわよくば携帯で画像撮影とかもなっ！」

「……おいおい、マジか」

いくら連む仲とはいえ、流石に須藤も引いているようだ。

周りで聞いていた女子たちも彼らに対し、まるで汚物を見るかのような目線を向けている。

「おい綾小路」

突如、池が席に座っていた綾小路に声をかけた。

池はものすごく気持ちの悪い笑顔で手招きしている。

「な、なんだよ」

戸惑いながらも、綾小路は呼ばれるがまま彼らのところまで近づいていった。

「実は今俺たち、女子の胸の大きさを賭けようってことになってんだけどさ」

「オッズ表もあるやで」

そう言う博士は得意げにタブレットを操作し、あるファイルをタップした。

画面に映し出されたのはクラスの女子全員の名前が書かれている表。

表には各女子一人一人にオッズが書かれている。

「えーっと……じゃあ、参加しようかな」

「お！ やろうぜやろうぜ！」

少し考えて、綾小路は参加を表明した。

また一人仲間が増えたことに池はテンションがさらに上がっている。

彼らの賑わいに惹かれるように、他の男子たちも一人、また一人と群がり始めた。

「おはよう」

そしてまた一人、男子が登校してきた。

挨拶をしながら教室に入ってきたのは柚椰だった。

「黛！ お前もちよつとこつちこいよこつち！」

また一人仲間を見つけたとでも言うように、池はさっそく柚椰を呼んだ。

「ああ、だけどその前に席に荷物だけ置かせてほしいな」

柚椰はそう言うと一旦自分の席に向かった。

彼は机の上に鞆を置くと、ぐるりと教室を見回した。

そして教室の中で男子と女子のテンションがはつきり別れていることを察した。

「堀北、これはどういう状況なんだい？」

理由を知りたくなつた柚椰はとりあえずどちらの派閥にも属していない堀北に事情を聞いた。

いつの間にか柚椰のすぐ近くにいた堀北は掻い摘んで事情の説明をした。

「どうやら男子は私たち女子の胸の大きさを賭け事してるみたいよ」

「それはまたなんとも……」

女子が男子たちを嫌悪するように見ているのはその所為かと柚椰は納得した。

「教室で堂々とやることではないね……あそこの女子たちなんてゴミを見るような目で見ているし」

「コソコソやられるのもそれはそれで不快だけれど。こうも隠そうともせず堂々としている辺り品性下劣としか言い様がないわね」

堀北も男子たちには嫌気がさしているのか、その罵倒はかなり辛辣だ。

「まあ女子からしたら良い気はしないよね」

「まさかとは思うけれど、黛君も参加するの？」

堀北はどこか試すような目で尋ねた。

周りで見ていた他の女子たちも柚椰の参加の有無が気になるのか彼に目線を送っている。

彼女たちの目は『お前もあいつ等と同じなのか』、と言外に言ってい

るようだ。

「俺？ んー、普通に考えてノーだね。流石にあれは堀北にも、他の女子の皆にも失礼だろう？ ノリか常識かの選択において、時と場合と内容はちやんと考えないといけない」

「……そう、黛君はマトモで少し安心したわ」

ひとまず柚椰は常識を弁えていると分かったからか堀北はそう言っただけ息を吐いた。

「堀北的に今のはポイント高いかな？」

「そうね、多少なりとも評価は上がったわ」

堀北のその言葉に、周りで聞いていた女子たちは無言で頷いた。彼女たちの中で、柚椰の評価が上がったのは確からしい。

「おーい黛、早く来いって！」

柚椰と堀北のやりとりが聞こえていなかったのか、池は尚も柚椰を呼んだ。

どうやら他の男子たちも賭け事に夢中で聞いていなかったようだ。

「すまない、ちよつとトイレに行きたいんだ。じゃあね堀北」

柚椰は最後に堀北にそういう残すと教室を出て行った。

「なんだよ黛、早く帰ってこないと締め切っちゃうぞく！」

暗に断られたことに気づかないのか、教室を出て行く柚椰の後姿に池はそう呼びかけた。

「やっぱこの学校すげえな！ 街のプールよか凄いいんじゃね!?!」

競泳パンツを穿いた池が学校のプールを見るなり驚嘆の声を上げた。た。

他の男子たちも声には出さないまでも皆驚いている。

学校のプールは屋内プールであり、しかも温水であるため環境は最高だった。

「確かに、とても学校の設備とは思えないな」

柚椰もまた、プールの淵から水面を覗き込みながら感動していた。

「女子は!? 女子はまだなのかつ!?」

鼻息を荒くしながら、池はキョロキョロと周りを見回す。

煩惱極振りのその姿はいつそ清清しい。

「着替えに時間かかるからまだだろ」

池の必死な姿に綾小路は苦笑いを浮かべながらそう言った。

「なあ、もし俺が血迷って女子更衣室に突撃したらどうなるかな!?」

「もれなく袋叩きにされた上に退学。そのあと書類送検のフルコースだろうな」

「怖えからリアルなツツコミやめろよ!?」

綾小路の返しに池は震えた。

「テンションが高いのは仕方ないにしても、もう少し落ち着いたほうがいいかもしれないね」

「そうだな、変に意識していると女子に嫌われるぞ?」

柚椰の言葉に追従するように綾小路は池を嗜めた。

「意識しない男が居るかよ! ……俺勃ったらどうしよう」

「多分その瞬間、卒業まで女子の嫌われ者コースだろうね」

「ああ、彼女を作る計画も暗礁に乗り上げることになる」

池の最低な発言に柚椰と綾小路は少し引いている。

「うわー、凄いい広い! 中学のプールと全然違う」

男子グループから遅れること数分、ついに女子の声が聞こえた。

「き、来たぞツ!?!」

池は血走った眼で身構える。

意識するなど注意したにも関わらずこの様である。

ところが彼のテンションと興奮は即座に裏切られることになった。

「長谷部がない! ど、どういふことだ博士ツ!?!」

授業を見学する博士が慌てて見学用の建物の二階から全貌を見渡している。

高台からならば、池が見逃した件の獲物を見つけ出すはずだ。

しかし、その姿はどこにも見当たらない。

信じられないと言う様に博士は首を左右に振った。
だが彼らの疑問は直ぐ傍で解決することになる。

「う、後ろだ博士ー！」

「——っ!? ンゴゴゴ!?!」

池が自身の後ろを指差したことで何かを察し、博士は急いで振り返った。

そう、彼らが探していた長谷部は博士と同じ見学組だったのだ。
彼女だけではない、他にも女子たちが次々見学席に姿を現した。

「な、なんでだよ……どういことだよおー！」

「巨乳が、巨乳が見られると思っただのにつ、思っただのにい!!」

池と山内の慟哭がプールサイド全土に響き渡る。

そんな大声で叫んでいれば、当然それは見学席にも聞こえる。

件の女生徒、長谷部は虫をみるような目で——

「キモッ」

躊躇うことなく本音をぶちまけていた。

同じく見学している女子たちも似たようなことをつぶやいている。

「恐ろしい勢いで嫌われていくな、あの二人は」
「完全に身体しか見ていないからね。流石に俺もフォローは無理かな」

崩れ落ちている池と山内、そして二人を嫌悪している女子たち。

その光景に綾小路と柚椰は乾いた笑いを漏らしていた。

「二人とも、何やってるの? 楽しそうだねっ」

「く、くく、櫛田ちゃんっ!?!」

池と山内、二人の間に割って入るように櫛田が顔を覗かせた。

スクール水着を着た櫛田は、妖艶な身体のラインが浮き彫りになっている。
豊満な胸と程よく肉のついた太ももと尻。

出るところは出て、引つ込むところは引つ込んでいる。

その抜群のスタイルに男子のほとんどの視線が一瞬釘付けになった。

「なんかこう……すごいな、色々」と

「確かに彼女はスタイルがいいからね」

綾小路は櫛田のスタイルの良さに言葉を濁し、柚椰は素直に褒めていた。

「馬鹿騒ぎもいい加減にしてほしいものね」

いつの間にか二人の隣にいた堀北がそんなことを言った。

「いつの間に来たんだ？」

「今さっきよ。それにしても……」

綾小路の問いに堀北は短く答えると、無言で彼の身体を頭からつま先まで見下ろした。

「綾小路君、何か運動してた？」

一通り身体を見終えた堀北は、ふとそんなことを尋ねた。

「え、いや別に。自慢じゃないが中学は帰宅部だったぞ」

「それにしても前腕の発達とか、背中の筋肉とか、普通じゃないけれど」

「生まれつきじゃないか？」

「……まあいいわ、それと黛君は……」

堀北は綾小路への興味が失せたのかそこで会話を打ち切ると、今度は柚椰の身体を見た。

「黛君も何かやってたのかしら？」

「小学のときはサッカーやバスケットをね。中学は運動部にあったスポーツは一通りやったかな？　といっても部員ではなく助っ人でやっていただけだけどね」

「助っ人？」

「うん、人数が足りないから試合に出てほしいと頼まれることが多いからね。それで時々選手として出ていたんだ。1日目はバスケット、2日目はサッカー、3日目はバレーって時もあったかな」

「い、忙しいわね……」

柚椰が過去経験したハードな予定を聞いた堀北の顔は若干引き攣っていた。

「体力持つのか？」

綾小路も驚いているのかそんなことを尋ねた。

「案外なんとかなるものだよ？ 気合と根性で」

「極めて非論理的ね」

柚椰の返答に堀北は冷静にそう言った。

しかしいつもの彼女とは違い、どこか微笑ましく笑っているようにも見える。

「よし、お前ら集合しろ」

いかにも体育会系といった体付きの男性教師が全員に集合をかけた。

「見学者は……16人か。随分多いが、まあいいだろう」

サボリであることは明白であったはずだが、男性教師は咎めることはない。

「早速だが、準備体操を終えたら全員泳いでもらうぞ」

「あの先生、俺あんまり泳げないんですけど……」

一人の男子がそう申し出た。

「俺が担当するからには、必ず夏までに泳げるようにしてやるから大丈夫だ」

「別に無理して泳げるようにならなくてもいいですよ。海なんていかないし」

「そうはいかん。泳げるようになれば、いずれ必ず役に立つぞ？ 必ずな」

男性教師はそう締めくくると、早速準備体操に入るよう全員へ促した。

準備体操を終えた後は、とりあえず50メートルほど流して泳いだ。

「とりあえず殆どの者が泳げるようだな。では早速だがこれから競争をする。男女別50メートル自由形だ」

男性教師のその言葉に一同はざわつき始めた。

「1位になった生徒には、俺から特別に5000ポイント支給しよう。ただし、一番遅かった生徒は補習だから覚悟しろよ」

その言葉に、泳ぎに自信がある生徒からは歓声が、苦手な生徒からは悲鳴が上がる。

「女子は二組に分かれて、一番タイムの早かった者が優勝。男子はタイムの早かった上位5人で決勝をやる」

男子教師がそう言い、まず初めに女子たちの競争が始まった。

「櫛田ちゃん櫛田ちゃん櫛田ちゃん櫛田ちゃん」

池は櫛田のことで頭がいつぱいのようだ。

柚椰はカラカラと笑うと彼の背中をポンと叩いた。

「まあまあ、落ち着きなよ池。目が狂気染みているよ」

「だ、だって櫛田ちゃんクソ可愛いだろがっ！ 胸もデカイしきー！」

池は落ち着くということを知らないようだ。

横で聞いていた綾小路も死んだ様な目で池を見ている。

男子たちを横目に、女子たちは一斉にプールへと飛び込み、泳ぎ始めた。

リードしたのは堀北だった。

彼女は序盤から大きく差を広げ、そのまま距離を維持し続けてゴールした。

「おおー やるな堀北ー！」

ストップウォッチを片手に、男性教師は興奮気味にそう言った。

タイムは28秒とかなり早く、非常に優秀だった。

続いて第二レース、こちらには池のお目当てである櫛田がいた。

彼女は笑顔で男子たちに手を振っていた。

その可憐な姿に男子たちは皆悶えている。

そしてスタートした第2レースだったが、試合展開は一方的だった。

というのも、水泳部の女子が大差をつけて1人勝ちしたのだ。

タイムも26秒とダントツの1位だった。

女子のレースが終わり、続いて男子のレースへと移った。まず第1レースに綾小路、須藤、柚椰などが参加した。全員一斉にスタートし、皆各々得意な泳法で進んでいく。そして1番にゴールしたのは須藤だった。

「やるじゃないか須藤。25秒切ってるぞー！」

男性教師は一層興奮し、須藤を褒め称えていた。

一方綾小路は36秒で10位、柚椰は26秒で2位だった。

「須藤、水泳部に入らないか？ これなら練習次第でいけるぞー」

「俺バスケ一筋なんで。水泳なんて眼中にないっす」

須藤はそう言うと、余裕そうにプールから上がった。

続いて第2レース。

スタート台に男子が一斉に並んだが、その瞬間女子たちから歓声が上がった。

「キヤー！ 平田くーん、頑張つてー！」

そう、何を隠そう第2レースに参加する男子の中には平田がいるのである。

彼の体は華奢ではあるがしっかりとしており、女性受けしそうな体付きだった。

「ケッー！」

女子の歓声を一気に受けている平田の姿に池が唾を吐く仕草をみせる。

須藤も気に入らないのか平田を睨んでいた。

「勝ち上がってきたらぶっ潰してやる。この俺の全力でな」

闘争心に火がついたのか、須藤はそう言つて不敵に笑った。

男性教師の笛の合図で、男子たちは一斉にプールへと飛び込んだ。

平田が泳ぐ姿に女子たちは一層興奮していた。

期待を裏切らずに平田は1位でゴール。

タイムも26秒13と好タイムだった。

「よし、いけるぜ須藤、そして黛！ お前らがアイツに鉄槌を下すんだ

！」

「任せとけ。徹底的にぶっ潰して、平田の人気を地に落としてやる」

「え、俺もやるのかい？」

池の発破に須藤は本気のトーンで答えた。

一方柚椰はいつの間にか巻き込まれていたことに思わず聞き返した。

「お前も平田より早かったんだから当たり前だろ！ ぶち抜いてやれ！」

拒否権は認めないと言わんばかりに池はそう言った。

だが第3レースにて、その企みを崩さんとするダークホースが現れた。

「見ていたまえ、真の実力者が泳げばどうなるのかを」

レース開始前にそう宣言したのは高円寺だった。

彼は自信たっぷりにはクラスメイトに、主に女子たちにそう告げるとスタートと同時に真の姿を見せた。

無駄の無いフォームでまるで飛魚のように泳いでいく様は、見る者を唖然とさせた。

平田でさえ驚きのあまり目を見開いていたほどだ。

見ているだけで、須藤よりも早いと分かるその速度で高円寺は瞬く間にゴールした。

ゴールと同時にストップウォッチを切った男性教師が思わずタイムを二度見していた。

「23秒22……だど!？」

「フツ、いつも通り私の腹筋、背筋、大腰筋は好調のようだ」

驚愕している男性教師を尻目に、高円寺は優雅に髪をかき上げてプールから上がった。

その表情は余裕そうであり、まだ余力を残していると分かるほどだ。

「燃えてきたぜ……!!」

ノーマークだった強敵の存在に、須藤はメラメラと闘志を燃やして我先にとスタート位置へ歩いていった。

「ははっ、凄いね高円寺は」

柚椰は素直に感心しているのか高円寺を褒めていた。

そして彼もまたスツと立ち上がると首を軽く回して身体を解し始めた。

「ねえねえ黛くんっ」

「ん？ ああ櫛田、おつかれ様」

決勝前のストレッチをしていた柚椰に櫛田が声をかけてきた。

「黛君も決勝に参加するんだよね？ 頑張ってねっ」

「ああ、やるだけやってみるよ」

柚椰はそう言うのとスタート位置へ移動するために歩き出した。

しかしふと何か思いついたのか、彼は足を止めた。

「そうだ、櫛田」

「なに？」

「俺がもし1位を取ったら、明日の昼食を奢ってあげよう」

「ええっ!?! 黛君、勝つつもりなの!?!」

いきなりの提案に櫛田は驚いていた。

それもそのはず、先のレースで柚椰のタイムと高円寺のタイムは3秒近く差があった。

競技において3秒というのはとても大きな差だ。

それを櫛田も分かっているからか、柚椰の提案は予想だにしないものだったのだ。

「んー、きつっきので身体も慣れてきただろうからね。ちよつと頑張ってみるとするよ」

「慣れてきたって……」

困惑する櫛田を放置して柚椰はスタスタと歩いて行ってしまった。

「よお平田ア……今日がお前の命日だ……」

「え、須藤君？ 急に物騒なこと言っただうしたんだい？」

スタート台に既に並んでいる須藤は、同じく待機している平田に対してよく分からない宣言をしていた。

理由を知らない平田は須藤がいきなりそんなことを言ってきたことに困惑している。

「そして高円寺イ、余裕こいてられんのも今のうちだ。俺がその鼻へし折ってやらあ！」

「おやおや、随分と威勢のいいボーイがいたものだ」

須藤は今度は高円寺に対して宣戦布告をした。

しかし高円寺は全く意に介していない。

須藤の独り相撲状態である。

そんな彼を見かねてか柚椰が声をかけた。

「まあまあ、そんなピリピリしないで気楽にやろうよ」

「テメエもだ黛イ！ 池に言われただろうが、平田をぶつ潰せつてよお！」

声をかけられたことで須藤は今度は柚椰へ矛先を向けた。

横で聞いていた平田は、まさかそんな指示があったとは知らず驚いている。

「それは君だけでやれるだろう？ 俺は俺なりにやるだけさ」

須藤の怒号とも取れる声に柚椰はそう言ってカラカラと笑う。

各々の思想が交差する中、いよいよその決戦の火蓋が切られた。

「え……!？」

「うそ……」

「マジかよ……」

数分後、プールサイドは驚愕に包まれていた。

各レースの上位が集まっていることもあり、決勝は見ごたえのある

ものであった。

須藤は先ほどよりギアを上げ、さらに早い速度で泳いでいた。平田もまた、スポーツマンとしてのプライドから本気で泳いでいた。

そして高円寺。

彼もまた、先ほど同様綺麗なフォームでスピードを上げていた。

しかし彼は先ほどとは違い、本気で泳いだ。

本気を出すことに一切躊躇いが無かった。

先のタイムを考えれば、彼は別段本気にならずとも一位を取ることが容易かったはずだ。

にも関わらず彼は本気を出した。

一体何故か？

それは、そうしなければ勝てないと踏んだからだ。

「22秒68……!?!」

男性教師が1位の生徒のタイムを呟いた。

声は震えており、今日一番驚いていると誰もが分かるほどだ。

そのタイムを叩き出した生徒は――

「ふう……やっぱり久しぶりだと結構キツイものがあるね」

黛柚椰だった。

「うおおおお!!」

「キヤー!!」

我に返った男子たちが興奮のあまり大きな歓声を上げた。

女子たちもまた、予想外の男子が1位を取ったことに興奮していた。

「スゲエ！ 黛の奴、平田どころか高円寺までぶち抜きやがった！」

「つーか最後の高円寺との一騎打ちヤバすぎだろ！」

池と山内はレース終盤の様子を思い出して大騒ぎしている。

他の男子たちも柚椰の大健闘に同じく驚いていた。

「凄い……黛君、ほんとに勝っちゃった……」

「えっ、櫛田さんそれどういうこと!?!」

「黛君、勝利宣言して有言実行したってこと!?! 何それかつこよすぎ
るよー!」

思わずポソリと呟いた櫛田の発言を聞いた女子たちは一斉に彼女
に群がる。

そして事情を聞いた女子たちは、皆柚椰に対して熱い視線を送って
いた。

彼らの興奮を他所に、レースに参加していた生徒が全員プールから
上がってきた。

「クソッ! 黛テメエ、さつきは手抜いてたつてのよ……!?!」

須藤はプールから上がるといの一番に柚椰に詰め寄った。

自分より遅かったはずの柚椰が今回1位を取ったことから、先の
レースで手加減をしたのではないかと憤っているのだ。

「違うよ。さつきも勿論ちゃんとやっていたさ。ただ水泳は最近ご無
沙汰だったからね。ちよつと鈍っていた分、遅くなっていたんだろ
う」

柚椰は恐ろしい形相で迫る須藤に怯むことなくそう言った。

「凄いな黛君、スポーツ全般出来るって言ってたけどこれほどとは
……」

「身体を動かすのは好きだからね。色々と手を出してるだけだよ。そ
れに、流石にサッカーじゃ平田に敵わないだろう」

平田は素直に柚椰を褒めていた。

そして最後、一騎打ちで争った相手である高円寺が柚椰の前に立つ
た。

「フッフ、まさかこの私が本気を出しても尚一步及ばない相手がいる
とは驚いた。久しぶりに心躍る勝負だったよ。だが、次は必ず私が勝
つから覚悟しておきたまえ」

そう言つて高円寺は柚椰に右手を差し出した。

柚椰はニコリと笑うと、自分も右手を出して彼の手を握った。

「ああ、そのときはあつさり負けないように俺も頑張るよ」

返しがお気に召したのか、高円寺は優雅に髪をかき上げ微笑んだ。

「フツ、随分とクールじゃないか。ますます気に入ったよ、柚椰ボーイ」

「柚椰ボーイ？ なんだいそれは」

あまりに変な呼び方に柚椰は思わず尋ねた。

「この私が好敵手と認めたのだ。親しみを込めてそう呼ばせてもらふよ」

「まあ、変わったあだ名だけど、別に嫌ではないから好きに呼んでもらうて構わないよ」

高円寺が気に入っているのなら別段訂正させる必要はないと思つたのか、柚椰はすんなりその呼び方を了承した。

こうしてDクラスの初めての水泳の授業は幕を閉じた。

彼は強か少女の頼みを断る。

「いただきますっ」

「はい召し上がれ。といっても俺が作ったわけではないけど」

水泳の初回授業の翌日、昼休みの食堂で櫛田と柚椰は昼食を摂っていた。

授業での約束通り、このランチは全て柚椰の奢りである。

しかもご丁寧に食後にはデザートまで付いている。

至れり尽くせりとはこのことだ。

二人は談笑しながら食事を進め、櫛田は柚椰が奢ってくれたデザートに手をつけた。

「ん〜、おいしっ」

デザートのパニライイスに櫛田はご満悦のようだ。

「そんなに美味しそうにしてもらえると奢り甲斐もあるよ」

「えへへ〜でもまさか本当に1位獲るなんて思わなかったよ。黛君って他にどんなスポーツやってたの?」

「ふふっ、昨日堀北にも同じようなことを聞かれたよ。部活であるよ
うなスポーツは一通りやったかな」

柚椰は水泳の授業で堀北に似たような質問をされたことを思い出して笑うと、堀北のときと同じような返答をした。

しかし櫛田は柚椰から堀北の名前を聞くとどこか暗い表情になった。

「櫛田?」

「黛君ってさ、最近堀北さんと仲良いよね……」

「友達だからね。まあ、彼女は否定しているけど」

「でも堀北さんって黛君と綾小路君としか喋ってるどころ見たことないよ?」

「堀北は基本的に一人で居るのが好きみたいだからね。そういえば君も彼女のことを何回か遊びに誘っていたよね?」

「うん、毎回バツサリ断られちゃうんだけどね……あはは」

そう言つて櫛田は力なく笑つた。

彼女が堀北を放課後の遊びに誘う場面は柚椰も何回か見ていた。しかしその度に堀北は彼女を冷たく突き放した。

クラスの人気者である櫛田に対してそんな態度を取れば、クラスメイトが堀北に対して良い印象を持たないのは必然だっただろう。

現に堀北は女子たちからは煙たがられており、男子たちからも近寄るべからずといったイメージを持たれている。

「彼女は少し言葉がキツイところがあるからね。あれで誤解されてしまっているところもあるかな」

柚椰にとつては大したことではないが、他のクラスメイトにとつて堀北の言葉は堪えるだろうということは彼も分かっていた。

しかし堀北の口の悪さは昔からのことであるということにも柚椰は察しがついていた。

ずっとそうしてきた以上、ただ直せと言つたくらいで直るものではない。

寧ろ直せというのはかえつて堀北には逆効果であると柚椰は思っていた。

「でも、それでも私は堀北さんと友達になりたいんだ」

櫛田は柚椰の目をまっすぐ見つめてそう言つた。

その目は力強く、決意と覚悟に塗れている。

しかしそれだけではないことを柚椰は見抜いていた。

「(そうまでして彼女に拘るのには何か理由があるのだろうか……)」

櫛田と初めて出会ったときから柚椰は彼女の本質を既に知っていた。

彼女の性格を踏まえると、彼女がただ堀北と友達になりたいと思つているとは考えられない。

何か裏があると柚椰は確信している。

「でね、朝に綾小路君にも相談したんだけど、黛君にも協力して欲しいの」

「協力？」

「うん。綾小路君がね、放課後堀北さんを誘ってカフェに行くの。そこに偶然ってことで私が行くことになってるんだけど……」

「俺にも来て欲しいってことかい？」

「うん、私が一人でカフェに行くよりも黛君と一緒に来たってことにした方がバレないかなって」

「なるほどね……」

榊田と綾小路が立てた作戦を聞いた柚椰は暫し考え込んだ。

榊田がカフェに一人で来て、たまたまそこで綾小路と堀北に出くわすというシチュエーション。

それは確かに普通の女子がやるならばいい作戦だろう。

しかし、榊田は良くも悪くも交友関係が広い女子だ。

そんな彼女が放課後に、それも一人でカフェに来て、偶然二人に出くわすというのは少々作戦としては粗いだろう。

堀北ほど聡明な人間なら、すぐにわざとらしさに気づくはずだ。

こつそり根回しされ、無理矢理そのような状況を作られたと知れば、彼女はと思うだろうか。

まず間違いなく怒って出て行ってしまおうだろう。

そもそも堀北の性格上、榊田とは絶望的なまでに馬が合わないということは柚椰も察していた。

一人を好む堀北に対して、榊田はそれでもと距離を詰めようとする。

友達を必要としない堀北と、クラスメイト全員と友達になろうとする榊田。

(彼女からすれば榊田の目標自体気に食わなくて仕方がないはずだ)

クラスメイトだから仲良くしようというのは堀北にとって嫌で嫌で仕方ないだろう。

例えば自分がこの作戦に加わったとしても、堀北が首を縦に振ることはないだろうということも柚椰は既に分かっていた。

「(それに、どう転んでも間違いなく彼女との仲は拗れるだろうね)」

自分が同行しようがしまいが、この作戦は間違いなく失敗に終わ

る。

さらに必ず櫛田と綾小路の二人と堀北との仲は拗れる。

同行すればそこに自分も加わる可能性もあるだろうと柚椰は結論付けた。

結果彼は――

「んー、君からのお願いを無碍にするのは心苦しいけど、俺は協力できないかな」

櫛田の頼みを断ることに決めた。

「っ！ そっか……」

協力を断られたことで櫛田は残念そうにつぶやく。

「なんかごめんね！ 変なこと頼んじゃって」

「気にしなくていいよ、協力は出来ないけど応援はしてるからさ」

「うん、ありがとっ！」

柚椰からのエールに櫛田は天真爛漫な笑顔でそう言った。

「ちよつと静かにしろー。今日はちよつとだけ真面目に授業を受けて貰うぞ」

櫛田との一幕から数日経ったある日の3時限目。

日本史担当である茶柱先生が教室に入ってくるなりそう言った。

「月末だから今日は小テストを行う。前から順に回してくれ」

そう言うとき彼女は最前列の生徒にプリントの束を配っていく。

やがて全員に行き渡ると生徒はそのプリントに目を落とす。

日本史の時間に配られたにも関わらず、内容は主要5教科の問題が纏めて載っているテストだった。

「ええ〜聞いてないよ〜ズル〜イ」

「だな」

「予告なしでテストとかアリですか〜？」

事前告知なしでいきなり小テストとあって、生徒たちからはズルいと不満が出ている。

「今回のテストはあくまで今後の参考用だ。成績表には反映されることはない。ノーリスクだから安心して取り組み。ただしカンニングは厳禁だぞ」

茶柱先生のその言葉に生徒たちは安心したのか、開始の合図と同時に各々のペースで問題を解き始めた。

テストの内容は1教科4問の全20問で1問辺り5点の配当だった。

生徒たちは皆つらつらと問題を解き進めていく。

すっかり取り組む者もいれば、適当なところで切り上げて机に突っ伏している者もいる。

そうして授業終了のチャイムがなるまで、生徒たちは小テストに取り組んだ。

「今日の小テストは随分と手が込んでいたな」

放課後、柚椰は校内を歩きながら今日やった小テストについて考えていた。

問題は基本的に中学レベルの問題がほとんどであり、高校生ならば解くのにそう苦労しないものばかりだった。

しかし、それは20問ある内の17問目までだった。

18問目から問題の難易度が桁違いに上がったのだ。残りの3問は高校1年生ではおおよそ解けるはずも無い難問が並んでいた。

「(問題に波がありすぎる。あれなら大多数が17問正解、85点だろう)」

中学で勉強をしっかりとし、高校受験に真面目に取り組んだ生徒ならば、ほぼ確実といっていいほどその点数になる。

つまり点数の差がつかないのだ。

あくまで小テストだと言われればそれまでだが、ただの小テストであるはずがないというのは既に柚椰も確信していた。

「生徒が簡単な問題ですら解けない、或いは解こうとしないと思っ
ているのか……」

現に小テスト中もペン回しに興じていたり、ぼうつと外を見ていたり、居眠りをしている生徒がいた。

不真面目な生徒がいることを把握し、その上であの問題を出す意
図。

それは一つだろう。

「今回の小テストは間違いなくポイントに反映されるな」

テスト開始前、茶柱先生は成績表には反映されないと言っていた。

しかしポイントには反映されないと一言も言っていない。

そもそも、ポイントに対して先生は入学初日から今日まで一切触れ
ていないのだ。

生徒の現在の状態を把握する参考として今回の小テストが用いら
れたならば、それは生徒の現在の實力を決めることと同義だ。

「ペナルティがクラス単位と考えると……来月頭に確実にクラスは
荒れるだろう」

普段の授業態度、そして今回の小テスト。

お世辞にもDクラスは良い状態とは言えない。

今月のペナルティが来月頭に執行されるとするならば、ほぼ間違い
なくDクラスは大きくポイントを失うことになる。

そうなればどうなるか。

今、Dクラスの生徒はその殆どがポイントの流動性に気づいていな
い。

故にポイントを湯水のように消費しているはずだ。

来月振り込まれると思いいんている10万ポイントは、既に大きく
減らされていることに気づかない。

「いや、最悪の場合0もありえるな。授業態度があまりに悪過ぎる」
柚椰は授業が始まってから今日までのクラスメイトたちの授業態

度を振り返った。

把握しているだけでも遅刻欠席はほぼ毎日。

授業中に私語や携帯を触るのはほぼ毎回。

しかし柚椰は決して全員に注意を促すことはしなかった。

やる気の無い人間に、不真面目な人間に真面目にやれと注意したとして、聞き入れないどころか時として逆効果となることを知っているからだ。

ちなみに堀北と綾小路は真面目に授業を受けておりそもそも注意する必要がなく、櫛田にはあとで何かしつぺ返しがあるかもしれないということは伝えてあった。

「尤も、一度痛い目を見たほうが学ぶこともあるだろう」

柚椰は別にクラスメイトを見捨てているから放置したのではないかった。

むしろ柚椰は彼らに期待すらしていた。

今は不真面目だとしても、一度危機に瀕すれば改めるはずだ。

一度地の底まで落ちれば足掻こうとするだろうと信じていた。

「とりあえず、今は今後に備えて蓄えておくべきか」

柚椰は目的の部屋の前まで来ると足を止め、扉をノックした。

部屋の中から入室を促す声が聞こえると、彼はニツコリと笑みを浮かべながら扉を開け放った。

「すみません。チェス部の先輩方、俺と勝負してくれませんか？」

彼はポイントを稼ぐために今日も部活破りに精を出していた。

彼らは希望へ向けて結託する。

5月1日、今日も学校開始を告げる始業のチャイムが鳴った。それから程なくして担任である茶柱先生がポスターの筒を手に持って教室に入って来る。

先生の顔はいつになく険しい。

「せんせーどうしたんすかあ？ ひよつとして生理でも止まりましたあ？」

池が先生の様子を見て心底デリカシーの無い発言をかました。その発言から、女子たちは汚物を見るような目で池を睨んだ。

「これよりホームルームを始める。が、その前に何か質問はあるか？ 気になることがあるのなら今のうちに聞いておくといい」

池のセクハラ発言を一切無視して先生はそんなことを言った。

その口ぶりは、生徒から質問があることを確信しているかのようだ。

実際その通り、数人の生徒がすぐさま手を上げた。

「あの、今朝確認したらポイントが振り込まれてないんですけど。毎月1日に支給されるんじゃないんですか？ おかげで今朝ジューズ買えなくて焦りましたよ」

本堂という生徒が今朝の出来事からそんな質問をした。

彼の言う通り今日は5月の月初め、ポイントが支給される日なのだ。

にも関わらず、彼が今朝端末を確認したところポイントが振り込まれていなかったようだ。

「本堂、前に説明した通りだ。ポイントは毎月1日に振り込まれる。今月も問題なく振り込まれたことを学校側は確認している」

「えっ……でも、振り込まれてなかった、よな？」

本堂は周りに居るクラスメイトに同意を求めた。

彼の問いかけに山内や他の男子や女子も頷いている。

ポイントは振り込まれていない。

にも関わらず先生は振り込まれたと言っている。

一体どういうことだと生徒たちは困惑した。

「……お前らは本当に愚かな生徒たちだな」

恐ろしく冷たい声で茶柱先生はそう言った。

「愚か、つすか……?」

何を言われたのか分かっていないのか本堂は思わず聞き返す。

「座れ本堂、二度は言わんぞ」

「さ、佐枝ちゃん先生?」

茶柱先生の底冷えするような声にようやく何かがおかしいと気づいたのか、本堂はどもりながらも席に着いた。

「ポイントは振り込まれた。これは間違いない。このクラスだけ忘れられた、などという可能性も無い。わかったか?」

「い、いや、分かったかって言われても、なあ? 実際振り込まれてないわけだし……」

それでも納得がいかないと本堂は不満気な様子だ。

他の生徒たちも本堂と同じ気持ちなのか、皆不満そうな表情を見せている。

「ははは、なるほど、そういうことだねティーチャー? 理解できたよ、この謎解きがね」

高円寺は何か気づいたのかそう言って笑った。

そして机に足を乗せ、偉そうな態度で本堂を指差した。

「簡単なことさ、私たちDクラスには1ポイントたりとも支給されなかった。つまりはそういうことだよ」

「はあ? なんでだよ。毎月10万ポイント振り込まれるって……」

「私はそう聞いた覚えはないがね。そうだろう?」

高円寺はニヤニヤと笑いながら茶柱先生にも指先を向けた。

「態度には問題ありだが、高円寺の言う通りだ。全く……これだけヒントをやって自分で気づいたのが数人とは嘆かわしいな。その上、この中で早いうちから気づいていたのは黛ただ一人だったぞ」

「は……？」

「え……？」

「黛、君……？」

茶柱先生の発言で、クラス中の視線が柚椰一人に向けられた。

その視線に折れたのか、柚椰は深くため息をつく。と茶柱先生に尋ねた。

「星之宮先生に聞いたんですか？」

「聞かずとも分かる。入学初日の、それも午後に入つてすぐに職員室にきた1年はお前だけだった。加えて担任である私ではなくBクラス担任の星之宮をわざわざ指名した。その時点で確信したよ。こいつはこの学校のシステムに気づいた、とな」

茶柱先生はニヤリと笑った。

「はあ……そうですね。確かに俺は初日の説明で、先生が毎月支払われるポイントが10万固定だとは一言も言っていないことに気づきました。そして生徒を實力で測るといふ発言から、その實力に応じてポイントが変化するのではないかと考えた。生徒ないしはクラスの實力、それはテストの成績や授業態度で判断される」

降参と言わんばかりに柚椰は自分が入学初日に立てた仮説を淡々と話していく。

周りで聞いていた生徒は言葉を失っているようで誰も言葉を発さない。

「黛の言う通りだ。このクラスは随分とやってくれたよ。遅刻欠席、合わせて98回。授業中に私語や携帯を触った回数391回。この学校ではクラス全体の成績がポイントに反映される。結果、お前たちは振り込まれるはずだった10万ポイントを全て吐き出した。つまりお前たちは今回ポイントを与える価値無し、0という評価を受けただけのことだ」

茶柱先生は呆れながら、機械的に状況を説明した。

「茶柱先生、僕はそんな話、説明を受けた覚えはありません……」

流石に理不尽だと思つたのか平田がそんなことを言った。

彼に同調するように他の生徒も頷く。

「なんだ、お前らは説明されなければ理解できないのか」

「当たり前です。振り込まれるポイントが減るなんて聞かされてませんでした。説明さえしてもらえれば、皆遅刻や私語なんてしなかつたはずですよ」

「それは不思議な話だな平田。遅刻や授業中に私語をしないことは当たり前のことだ。先生の話はちゃんと聞きましょうと小学校、中学校で教わらなかつたのかね？」

「それは……」

「身に覚えがあるだろう。そう、お前たちは嫌というほど聞かされてきたはずだ。そのお前らが、言うに事欠いて説明されなかつたから納得できない？ 通らんよ、そんな理屈は。当たり前のことを当たり前になさしていれば、少なくともこの結果にはならなかつた。全てお前たちの撒いた種、自己責任だよ」

ぐうの音も出ない正論に平田を含め生徒たちは黙るしかなかった。「高校に上がったばかりのお前らが、何の制約も無く毎月10万も貰えると本気で思っていたのか？ 日本政府が作った優秀な人材教育を目的とするこの学校で？ ありえないだろう、常識的に考えれば分かるはずだ。なぜ疑問を疑問のまま放置しておくのか理解に苦しむよ」

「ではせめて、せめてポイント増減の詳細を教えてください……」

正論の嵐の中、平田はせめてもの疑問に答えてもらうべく尋ねた。

「それは出来ない相談だ。査定内容は学校の決まりで教えられないことになっている。だが、私も鬼ではない。一つ良いことを教えてやろう」

そう言うとき茶柱先生はクラスを見渡した。

「遅刻や私語を改め、仮に今月マイナスを0に抑えたとしてもポイントは減らないが増えることはない。先も言ったが、そんなことはやって当たり前のことだからだ。つまり、来月もお前たちに振り込まれるポイントは0だ。だが裏を返せば、失うものがないということだ。これからはいくらでも遅刻や私語はし放題だ。良かったな」

良いことと言う名の最大限の皮肉に生徒たちは暗くなった。

これから態度を改めようとしていた生徒もいただろうが、その気も霧消した。

要はこれから真面目になったとしてもポイントが増えることはないのだから。

そうしているうちにチャイムが鳴り、ホームルームの時間が終わりを告げた。

「無駄話が過ぎたな。いい加減本題に移ろう」

茶柱先生は先ほど持つてきていたポスターの筒を開き、黒板に貼付けた。

生徒たちは呆然としながら貼られたその紙に視線を向ける。

「これは……各クラスの成績、ということ？」

張られている内容から堀北はそう解釈したようだ。

紙にはAクラスからDクラスの名前とその横に最大4桁の数字が表示されていた。

この数字こそがクラスポイント。

支給されるポイントに関係するものであることは想像に難くない。恐らくこのポイントに100を掛けた数が支給されるのだろう。

しかし、驚くべきは各クラスのポイント総数の順位だ。

Aクラスが940、Bクラスが650、Cクラスが490、そしてDクラスが0だ。

そう、AからDと綺麗に並んでいる。

「ねえ、おかしいと思わない？」

「ああ……ちよつと綺麗過ぎるな」

表の違和感に気づいたのか堀北と綾小路は小声でやりとりをする。「お前たちはこの1カ月好き勝手に生活してきた。学校側はそれを否定するつもりはない。遅刻も私語も、全て最後は自分たちにツケが回ってくるだけのことだ。ポイントの使用に関してもそうだ。どう使おうがお前たちの自由。現にその点に関して制限は何も設けていなかったらどう？」

「いやいや、こんなにあんまりですよ！ どうやって生活しろっとうんですか！」

ポイントが一切支給されないという現実には耐えかねてか池がそう叫んだ。

山内もこれからの生活に絶望しかないので阿鼻叫喚といった様子だ。

「見て分かる通り、他の全クラスはポイントを振り込まれている。それも1カ月生活するには十分すぎるほどのポイントがな。言っておくが不正は一切ないぞ。全てのクラスが同じルールの下で審査されている。にも関わらず、ポイントでここまでの差がついた。それが現実だ」

「何故……こんなにもクラス間で差があるんですか？」

平田も表の違和感に気づいたのかそんなことを言った。

「段々理解してきたか？ お前たちが何故Dクラスに選ばれたのか」

「え、そんなの適当じゃないんすか？」

「普通クラス分けてそんなもんだよね？」

各々生徒たちは仲間内で顔を見合わせてやいのやいの言っている。

しかし明確な答えは出そうも無い。

そんな彼らを見て、茶柱先生はため息をついた。

「だからお前たちは愚かだと言ったんだ……高円寺と黛、気づいたことがあれば言ってみろ」

「フツ、私は既に気づいたよ。だが、ここは柚椰ボーイに譲るとしよう」

話を振られた高円寺は偉そうな態度で柚椰にそのまま話を振った。

「え、気づいたなら自分で言ったほうがいいよ」

「先の発言を聞いて分析はキミの仕事だと思ひ振ったまでさ。さあ、気づいたことを言ってみたまえ」

傲岸不遜といった態度を崩さず、高円寺は改めて柚椰に促した。

語るのが柚椰だけと言う事でクラスメイトたちの視線が彼に集まる。

「そうですね……ポイントの減少具合で各クラスの状態が大体把握できます。Aクラスは60、Bクラスは350、Cクラスが510、そして俺たちが1000。目を惹くとすればAクラス、減少量が圧倒的に少ない。考えられる可能性は二つ。一つは不真面目な生徒は一部に取組んだ。そしてもう一つは、早々にポイントの仕組みに気づいた生徒がクラスをほぼ完全に支配したか」

「二——っ!?!」

支配という物騒な単語に生徒たちは驚愕した。

「ただ注意しただけでここまで極端な数字になるとは思えない。恐らく俺が立てた仮説と同じようなことをリークさせたと考えられます。でも、あくまで仮説は仮説でしかない。実際に検証するために不真面目な生徒にだけは教えなかった。結果、このようにポイントは減った。これによって仮説は立証され、仕組みに気づいた生徒はクラスで影響力を持つ。言ってしまうえば、Aクラスはその生徒によって掌握されたということが分かる」

目に見える情報を頼りに、柚椰は淡々と各クラスの状態を分析する。

「Bクラスに関しては先の可能性の前者のほうだと考えられる。仕組みに気づきはしないまでも、授業はちゃんと受けるべきだと考えた生徒が殆どだったはずだ。恐らくそう促した生徒に多くの生徒が同調した結果だろうね。つまりBクラスは結束が固く、チームワークに長けている。そしてCクラス。減少量が半分以上ということから、恐らく4月の半ばまでこのクラスと同じような状態だった。だが途中から誰かが仕組みに気づき、強引にクラスを纏め上げた。跳っ返りは当然居ただろうが、実力行使に出たんだろう。大幅且つ急速な軌道修正を行なったことから、CクラスはAクラスとは違い、完全な独裁体制だろうと分かる。以上のことから各クラス的环境、生徒のスペックを考えれば、クラスのAからDは生徒の優劣をも示している」

「フツ、そこまで詳細に分析するとは。流石は私が認めた男だ」

柚椰の解説に何故か高円寺が得意気に鼻を鳴らした。

「確かに、期待以上の回答だ黛」

高円寺に同調するように、茶柱先生もそう言って不敵に笑った。

「黛の分析の通り、この学校では優秀な生徒の順にクラス分けがされるようになっていく。最も優秀な生徒はAクラスへ、ダメな生徒はDクラスへ、と。つまりここDクラスは落ちこぼれが集まる最後の砦ということだ。敢えて言わせてもらうが、要はお前たちは最悪の不良品だということだ」

その発言に堀北の顔が強張った。

不良品という言葉が余程ショックなのだろう。

「しかし1ヶ月で全てのポイントを吐き出したのは過去のDクラスでもお前たちが初めてだ。よくもここまで盛大にやったものだと感心しているよ、立派立派」

拍手と共に、茶柱先生はDクラスの面々に賛辞を送る。

しかしそれが最大限の皮肉であることは言うまでもない。

皆が現実には打ちひしがれている中、平田が再度質問した。

「このポイントが0である限り、僕たちはずっと0のままということですか……?」

「そうだ。このポイントは卒業まで継続する。だが安心しろ、寮の部屋はタダで使用できるし、食事にも無料のものがあるから死にはしない」

先生の言いたいことはつまり必要最低限の生活は保障されるということだが、そんなものは何の慰めにもならない。

Dクラスの面々は、その殆どがこの1ヶ月贅沢三昧の日々を過ごしていた。

それがいきなり無一文という地の底まで落とされたのだ。

すぐに適応しろというのも無理な話だ。

「じゃあこれから俺たちはずっと他のクラスから馬鹿にされるってことかよ！」

苛立った須藤が机の脚を蹴り飛ばした。

クラス分けの仕組みが明らかになった以上、これから先Dクラスは否が応でも他クラスから見下される。

ポイントが0というのも馬鹿にされるネタとしてはうってつけだろう。

「なんだ須藤、お前にも体裁なんてものがまだあったんだな。そう思うのなら頑張つて上のクラスに上がれるようにするんだな」

「あ？」

「クラスのポイントは金と連動しているだけではない。このポイントはクラスのランクにも反映されるということだ」

茶柱先生の言う通りなら、もし仮にポイントが半分でも残っていれば、このクラスはCクラスへとあがっていたということだ。

尤も、今となつては大きな差が生まれてしまっているわけだが。

「さて、もう一つお前たちには残念なお知らせがある」

そう言つて新たに黒板に張り出された一枚の紙。

そこにはクラスメイト全員の名前がずらりと並び、その横にはまたしても数字が記載されていた。

「この数字が何を表しているか、バカが多いこのクラスの生徒でも理解できるだろう」

茶柱先生はそう言つて生徒たちを一瞥する。

「先日やった小テストの結果だ。揃いも揃つて粒ぞろい。私は嬉しいぞ。お前らは中学で一体何を勉強してきたんだ？」

表に記載されている点数はその殆どが60点前後。高得点を取っているのはごく僅かの限られた生徒だけだった。

最低点は須藤の14点、次点が池の24点だ。

このクラスの平均点は恐らく60点前半だろう。

「良かったな、これが本番であれば少なくとも7人は退学になつていただろう」

「た、退学？ どういうことですか!？」

「なんだ、説明していなかったか？ この学校では中間、期末のテストで1教科でも赤点を取れば退学だ。今回のテストで言えば、32点未満の7人が対象だ。本当に愚かとしか言い様がないよ」

その発言に真つ先に驚愕の声をあげたのは該当する7人の生徒たち。

張り出された紙には赤点のボーダーラインであろう線が引かれており、それより下の生徒は赤点であることを示していた。

「ふっぎけんなよ佐枝ちゃん先生！ 退学とか冗談じゃねえよ！」

「私に言われても困る。これは学校のルールだ。諦めろ」

「ティーチャーの言うように、このクラスには愚か者が多いようだねえ」

茶柱先生につっかかる生徒たちを眺めながら高円寺が偉そうに微笑む。

いつのまにか取り出したヤスリで彼は優雅に爪を研いでいた。

勿論机に足は乗せたままである。

「なんだと高円寺！ お前だっけどうせ赤点だろー！」

「フツ、一体どこに目をつけているのかねボーイ。よく見たまえよ」

高円寺は突っかかってきた池に今一度表をよく見ろと指で差した。

その態度に苛立ちながらも、池は言われた通りに表を下から上まで舐め回すように凝視した。

すると、高円寺の名前は勿論だが乗っていた。

しかしそれは表のかなり上の方、つまり上位の層に。

得点は90点と誰が見ても高得点の数値だった。

同率で並んでいるのは堀北、そして幸村という男子だ。

「絶対須藤と同じ馬鹿キャラだと思ってたのに」

「フツ、私をそこに居る愚か者と同類だと思っていたなど心外だな。

それにしても……まさか君が1位とは私も驚いたよ、柚椰ボーイ」

「はあ？」

高円寺の発言を聞き、池は再度表を見た。

すると表の1番上、つまり今回最も高い点数をとったという証明の位置に黛柚椰の名前が載っていた。

得点はなんと100点。全問正解ということだ。

「ま、マジかよ……」

池はおよそ自分では取ったことのない数字に面食らっているようだ。

他の生徒たちも満点という成績に驚いているのか柚椰をポカンと

した顔で見ている。

「まさか最後の3問を全て正解しているとはね。90点の私が2位である以上、君が単独トップということになる。健闘を讃えさせてもらうよ」

高円寺は難問であった最後の3問をクリアした柚椰に対して最大限の賛辞を送った。

「時間ギリギリまで粘って解いていたからね。良い方に転んで良かったよ」

自分を褒めてくる高円寺に対して柚椰はそう答えた。

「それからもう一つ付け加えておく。国の管轄下にあるこの学校は高い進学率と就職率を誇っている。恐らくお前たちも目標とする進学先や就職先を持っていることだろう」

この学校が高い進学率と就職率で有名であることは広く知れ渡っている。

難関大学や一流企業にもすんなり入れるともっぱらの噂だった。

当然この学校を受験する生徒は、その殆どがそれを目当てに来ている。

「だが世の中そんな上手い話はない。お前らのような低レベルな人間がどこにでも就職できるなんてあるはずないだろう」

「……つまり希望する進路を叶える恩恵を受けるためにはCクラス以上上がる必要がある。そういうことですか？」

「それは違うな平田。この学校に望みを叶えて貰いたければ、Aクラスに上がるしかない。それ以外の生徒には学校側は何一つ進路について保障することはない」

「そ、そんな……聞いてないですよそんな話！ 滅茶苦茶だ！」

そう言って立ち上がったのは、先の小テストの成績で高円寺や堀北と同じ2位を取った幸村だ。

小テストの成績を考えても学力に秀でていることは間違いないだろう。

恐らく彼も、望む進路を叶えるためにこの学校に入学し、真面目に勉強に取り組んだのだろう。

にも関わらずこの仕打ちは彼にとって耐え難いものだったのだ。「みつともないねえ、男が慌てふためく姿ほど見ていて惨めなものはない」

幸村の文句を耳障りとしても言いたげに高円寺はそう言っただけ息をついた。

その言葉が癩に触ったのか、幸村は今度は高円寺に突っかかる。

「じゃあお前はDクラスであることに不満はないのかよ……」

「不満？ 何故不満を感じなければならぬのだね？」

「レベルの低い落ちこぼれだと認定されて、その上進路の保障もないって言われたんだぞ！ 不満がない方がどうかしてるじゃないか！」

「実にナンセンス。愚の骨頂とはこのことだね」

高円寺は爪を研ぎながら幸村を相手にしていた。

その態度は、まるで眼中にないとも言いたげだ。

「学校側は私のポテンシャルを計りきれなかったというだけのことだ。私は誰よりも自分のことを評価し、尊敬し、尊重し、偉大なる人間だと自負している。学校側がDクラスだと認定しようが、私にとっては意味のないことだよ。仮に私を退学にするというのなら好きにするといい。最後に泣きついてくるのは100%学校側なのだからね」

まさに唯我独尊、傲岸不遜といった態度で高円寺は高らかに語った。

自分に確固たる自信があるからこそその発言だ。

「それに私は学校に進学先を斡旋してもらおう必要などない。高円寺コンツェルンの後を継ぐことは決定事項なのだから、DだのAだのほどうでもいいのだよ」

御曹司である高円寺がいずれ親の会社を継ぐということはおかしなことではない。

彼は既に将来を約束されているのだ。

故に学校側に何かしてもらおう必要など皆無だろう。

幸村は反論する言葉を失い、力なく椅子に腰を下ろした。

「浮かれていた気分は払拭されたようだな。お前らの置かれた状況がいかにも過酷か理解できたか？ であればこの長つたらしいホームルームにも意味はあったと言える。中間テストまで後3週間。じっくりと熟考し、退学を回避してくれ。お前らが赤点を取らずに乗り切れる方法はあると確信している。実力者に相応しい振る舞いをもって挑んでくれ」

そう締めくくると、茶柱先生は教室を出ていった。

生徒の残る教室はまるで御通夜のような空気だ。

赤点を取った生徒たちはがっくりとうなだれている。

あの須藤でさえ舌打ちをして俯いていた。

「どういうことなんだよ黛！」

茶柱先生がいなくなつてからの休み時間、池がズカズカと柚椰の席に向かうと開口一番そう言った。

「どうしたんだい池、そんなカツカして」

「しらばっくれんな！ お前、ポイントが減るつてずっと前から知つてたんだろ!? なんで教えてくれなかったんだよ!!」

池の発言に、周りで見えていたクラスメイトたちも言葉を発さないまでも同調していた。

何故ポイントの仕組みに気づいていながら、それを誰にも教えなかったのか理解できなかつたのだ。

「さつき言っただろう？ 仮説はあくまで仮説だ。実際に立証できなければただの妄想でしかない」

「それでもポイントが減るかもしれないって言うくらいは出来ただろ!?」

その言葉にクラスメイトたちも頷いていた。

特に赤点組は今にも飛びかからん勢いで柚椰を睨みつけていた。

しかしそんな視線を向けられても尚、柚椰は飄々としていた。

「ふむ……でも、仮にそれを言ったところで君たちは聞き入れたかい？ 毎月10万振り込まれると信じて疑わなかった君たちが」

「そ、それは……」

柚椰の返しに池は言葉に詰まった。

「け、けどよ、黙ってることもなかったじゃねえか！ 友達だろ俺ら！」

池が黙り込んでいると今度は山内がそんなことを言った。

「そうだよ……言ってくれば私たちだって携帯弄るのやめたかもしれないのに」

「うん、自分だけ気づいてて黙ってるなんて酷いよ……」

山内に追従するように女子たちからも不満の声があがった。

「そうは言っても、君たちは今まで誰にも注意をされなかったのかい？ 先生に怒られはしないまでも、後で何があるか分からないから気をつけたほうがいいと」

「そんなこと言われてねえよ！」

「そうだぜー！」

池と山内の返答に女子たちも無言で頷いた。

「本当に？ 今まで、ただの一度も、誰からも、授業態度について何か言われたことはないのかな？」

柚椰は今一度彼らに念を押すように尋ねる。

「だから！ そんなの誰にも言われて……」

「あつ……」

池と山内は何か気づいたのかそこで黙った。

女子たちも心当たりがあったのか目を見開いていた。

「そ、そういう前に一回だけ、言われた……」

彼らを代表して池が声を震わせながら答えた。

「榎田に言われたらどう？」

「——っ!？」

凶星と言わんばかりに池は飛び上がった。

「他の皆も、授業態度が悪かった人は全員一回は彼女に言われたはずだよ。『あとで何かペナルティがあるかもしれないから、ちゃんと授業を受けたほうがいい』とね」

「心当たりのある生徒は皆一様に驚愕していた。」

同時に柚椰から櫛田へと視線を移した。

「そう、俺は彼女にだけは教えたんだ。毎回怒られはしないが、あとで何か手痛いしっぺ返しがあるかもしれないから気をつけるようにと。そして同じことを授業態度の悪い人に彼女の口から一度忠告しておいてほしいとね」

「うん、黛君にそう言われたから私、水泳の初回授業の日に一回だけ皆に注意したよね」

櫛田は柚椰の言葉に頷き、確かに一度だけ注意したと言った。

「な、なんで櫛田ちゃんにだけ……」

「俺が言うより彼女が言ったほうがすんなり聞き入れると思ったからさ。彼女は男子女子問わず交友関係が広い。それに物腰も柔らかいから角が立たないと踏んだ。男子に関しては素直に言うことを聞くと思っただし、女子も彼女の言うことなら信用すると思っただ。ちゃんと俺は君たちに情報をリークしようとしていたんだ。でも結局、君たちは考えすぎだとも思っただのかマトモに取り合わなかった。大方、男子は女子の水着のことで一日中浮かれていたんだろう」

「ぐっ……」

「凶星なのか池が言葉に詰まっている。」

それは山内も同じなのか、彼もまた黙り込んでいた。

「それに、俺が直接教えなくてもヒントはそこら中に転がっていただろう？ スーパーの無料食品コーナーや学食の山菜定食、コンビニの無料ワゴンに無料のミネラルウォーター。湯水のようにポイントを使ってた君たちでさえ手をつけなかったものが、何故この学校にあるのか。それはポイントがない生徒への救済措置だと考えれば分かるだろう。尤も、ポイントが0になった以上、これからその恩恵にどっぷり浸かることになるのは俺たちだ」

それに、と柚椰はさらに付け加える。

「今回のことで、ポイントが減少するということは全クラスの全生徒が知るようになった。先んじて対策をしていたAクラスは勿論、BクラスやCクラスもポイントを死守するために躍起になるだろう。上のクラスの人間が各々固まってポイントを減らさない方向で動く以上、落ちてくることはまず無いと思っただけいい。つまり、俺たちは彼らが立ってるスタートラインにすら立てず、大きく出遅れたということだね」

最早柚椰に文句を言う生徒は一人もいなかった。皆が皆分かっているのだ。

今のこの状況は自分が招いた結果なのだ。

「けど、同時にこれはチャンスでもあると俺は思うよ？」

その言葉に俯いていた生徒たちが顔を上げた。

「ど、どういうことだよ黛」

「0ということは失うものが何もないということでもあるんだ。ならば後は這い上がるだけだろう？」

「這い上がるって言ったって……」

「授業態度を改めたってポイントは増えないんだろ？」

「そうだよ、一体どうやってポイントを増やせばいいの……？」

「私これからずっとポイント0なんて嫌だよ……」

柚椰の言葉がただの慰めでしかないと思っただけのか池たちは途方に暮れていた。

「何か策があるのかい？」

クラスを代表して平田がそう尋ねた。

「この学校は実力で生徒を計る。生徒の実力はクラスの実力でもありポイントに反映される」

「それは分かるけど、実力を計る機会が小テストや今回の審査だろうか？ 他に計るものって言ったって何が……!？」

平田は何かに気づいたのか目を見開いた。

その様子に柚椰はニヤリと笑みを浮かべた。

「目下にあるだろう。学校で生徒のことを計る一つの試練が」

「そうか、中間テスト……！ 定期テストは僕たちの実力を計るのに

うってつけだ！」

「正解。わざわざ茶柱先生が最後に中間テストについて触れていたのが証拠だよ。俺たち一人一人が赤点を取らないことは勿論、好成绩を収めればそれはクラスの実力があるということの証明だ。流石に一気に元通りとはならないだろうけど、状況が好転することは間違いない」

「そうだね、黛君の言う通りだ！ 皆、少しでもポイントを回復させるために中間テストに向けて頑張ろう！」

平田はそう言ってクラスの面々に呼びかけた。

「で、でもよ、俺ら小テストでさえ赤点だったんだぜ……？」

「だよな、今から勉強して点取れって言ったってよおー」

赤点組だった池と山内は今ひとつモチベーションが上がらないようだ。

「僕が教えるから大丈夫だよ！ 他の皆も、少しでも点数が高い人は僕に協力してほしい！」

「私も参加するよ！ 皆で一緒に勉強しよう！」

平田の呼びかけに真っ先に答えたのは櫛田だった。

影響力のある彼女が参加を表明したことで、これまで項垂れていた生徒たちが一人、また一人と目に光を宿し始める。

「池君と山内君も、一緒に頑張ろ？」

「く、櫛田ちゃんが一緒に勉強するなら、俺もやろうかなあ……」

「だな、ちよつと本気出してやってもいいか」

クラスのアイドルである櫛田に誘われたことで池と山内はあっさり参加の旨を表明した。

こうしてDクラスは来たる中間テストに向けて結束を強め始めた。

彼は孤独少女に協力する。

「黛君、一緒にお昼を食べましょう」

衝撃のホームルームから授業を挟み、昼休みになると堀北が柚椰のところనికిてそう言った。

彼女の発言にクラスの空気が固まる。

今まで女子が誘おうが素気無く断ってきたはずの堀北が自分から、それも男子を誘うという光景。

それは衝撃以外の何物でもなかったのだ。

「ま、まままマジかよ!?!」

「堀北が誰かを昼飯に誘うなんて!?!」

「もしかして綾小路君じゃなくて黛君狙いなもの!?!」

「まさかの三角関係!?!」

男子も女子も今目の前で起こっていることを処理できていないのか混乱している。

「うん、いいよ。どうせなら綾小路も誘うかい?」

「彼は他の男子たちと食べるでしょう。それに……今日は貴方と二人きりがいいのだけれど」

「はあああああ!?!」

「黛の野郎、榎田ちゃんと仲良いだけでなく堀北にまで手出してんのか!」

「堀北さん積極的〜!」

「まさか榎田さんも入れた四角関係ってこと!?!」

堀北の爆弾発言にこれまで以上にぎわつく野次馬たち。

男子は柚椰が榎田だけでなく、堀北にも手を出していると思ひ込んでいる。

女子に至ってはドラマの観過ぎと言わざるを得ない妄想を爆発させている。

「んー、そうか。じゃあ行こうか。……聞きたいことがあるんだろう？」

「……ええ」

囁かれた最後の言葉に堀北は一瞬驚いたが、直ぐにいつも通りの涼しい表情で応じた。

彼女は柚椰の三步後ろを歩く形で食堂へ向かう。

二人は足早に食券を買い、料理を受け取ると空いている席へと座る。

「それで、何が聞きたいのかな？」

堀北は真剣な顔で柚椰を見た。

「朝、貴方はクラスポイントの内訳からクラス分けの仕組みについて分析してたわよね？ そのことについて詳しく話を聞きたいと思っていたの」

「なるほどね。その顔を見る限り、君は納得がいかないんだろう？ 成績が良いにも関わらずDクラスに配属されたのは一体どうして、と」

「その通りよ。あの変人はともかくとして、高得点を取った私が何故Dなのか。貴方だって……満点、だったみたいだし」

堀北は心底悔しそうに柚椰を睨んだ。

「そういえば俺のほうが成績上だったわけだけど、友達お試し期間は どうする？ 俺としては堀北とは今まで通り友達でいたいと思っているんだけど」

「そんなことは今どうでもいいでしょう。私が聞きたいのは――」

「友達なら何でも答えるんだけどな。残念だな」

堀北を遮るように、柚椰はわざとらしくそう言って笑った。

その小憎たらしい態度と笑顔により一層悔しさが募る堀北。

「くっ……！ どうしても私を友人にしたいのね」

「どうする？ 堀北が嫌で嫌で仕方ないというなら俺も無理強いはしないけど」

「別に嫌ではないわ……黛君のことは……少なくとも他の人よりは良く思っているわよ」

目を逸らしながら堀北はポソリとつぶやいた。

彼女はそのままたちラチラと袖椰を見ていたが、やがて大きく咳払いをするときリリとした表情を作った。

「いいわ。黛君、貴方を私の初めての友人にしてあげる」

言葉は上からだったが、それは照れ隠しであると袖椰は察した。

だからこそ、彼女の了承の旨に笑顔を以って応えた。

「うん、じゃあこれからもよろしく」

「それで、先の話に戻ってもいいかしら？」

堀北はさつきと本題に戻りたいようだ。

「ああ、テストの出来がいい。つまり学力優秀なのに何故Dなのかという話だね。簡単な話だよ。学校が計っている実力は、勉強の良し悪しだけではないということさ」

「どうということかしら？ 学校というのは勉強するところでしょう。なら普通に考えて、勉強の出来る人間が即ち優秀であるはずよ」

堀北は一般常識と照らし合わせて反論する。

「ここは国が運営している学校だよ？ そして優秀な学生を育成して輩出すると豪語している。世間で言う優秀な人間というのはどんな奴だろう？ 勉強は出来るが他人とロクに付き合うことも出来ない世間知らずかな？」

「もしかして、今私は喧嘩を売られているのかしら？」

暗に自分のことを言われたと思ったのか、堀北は怖い顔で袖椰を睨みつけた。

「別に君のことを言っているわけじゃないよ。現に俺とは友達だろう？」

「……そうね、成り行きだけだね」

悪意が無いと分かったからか、堀北は一旦矛を収めた。

「話を戻すが、優秀な人間とはどういう人間か。勉強はロクに出来ないくせに政界や大企業の大物と親交がある奴か。スポーツに秀でてはいても勉強はからっきしの奴か。逆に勉強は出来ても運動はからっきしの奴か。良い大学を出しても論理的な思考も出来ず、ただ感情論を並べ立てる奴が優秀か。品行方正、文武両道ではあるが、他

人を虐めることに悦を感じる奴が優秀か。総じて何かプラスはあってもそれと同等のマイナスもある。恐らくこの学校が言う優秀な人間というのはマイナスが少ないか、あるいは無い。勉強も運動も、ちゃんと考える頭も、そして協調性もある人間。言ってしまうと、この学校は欠点の無い人間を作ろうとしているんだろう」

「そんなこと……」

「ない、と言い切れるかい？ 中学レベルの問題すら赤を取る奴が高校に、それも国が運営するここに入れると思うかい？ 何か別の評価基準があると考えるのがベターだろう」

二人の脳裏に浮かぶのは今朝発表された小テストで赤点を取った生徒たち。

どの生徒にも共通して言えるのは、高校受験を突破した人間とは思えないほどの馬鹿だということだ。

「……それでも私は納得できないわ」

堀北はそれでも今の現状を受け入れることは出来ないようだ。

彼女は自分が優秀であることに自負があるのだろう。

（優秀であること、Aクラスであることに固執する何かがあるのだろう）

堀北の表情から柚椰は彼女が何かに拘っていることを見抜いた。

恐らく彼女は自分が不出来であると認定されることを極端に恐れている。

誰だつて自分が出来損ないだと言われれば嫌な思いをするだろう。

しかし彼女の場合はそれが特に顕著だ。

不快を通り越して怯えや恐怖といった感情にまで及んでいる。

そうなるまでには何かがあったはずだと柚椰は睨んでいた。

「放課後にも茶柱先生の所に抗議に行ってくるわ」

「そうか、まあ納得するしないは君の気持ちの問題だからね。別に止めはしないよ」

「そう……」

短くそう返した堀北だったが、その表情はどこか穏やかだった。

「さて、いい加減食べようか。ご飯が冷めてしまう」

「そうね、いただきますよう」

二人は揃って手を合わせると、いそいそと箸を進め始めた。

料理をちよūdō食べ終えた頃に再び堀北が話しかけた。

「話は変わるけれど黛君、ポイントは何れくらい残ってる？」

「ああ、今月収入ゼロだからね。堀北はどんな感じだい？」

「食事は自炊を心がけているし、無駄遣いはしないようにしているわ。

だから先月のポイントも半分以上は残ってる。それで、黛君は？」

「ああ、はい」

堀北に尋ねられた柚椰はポケットから取り出した端末を彼女に差し出した。

彼女が画面を覗き込むと、そこには学生証として柚椰の顔と名前、所属クラス。

そして現在のプライベートポイントが表示されていた。

その数値を見た堀北は思わず固まった。

口をポカンと開け静止する姿は、普段の彼女とのギャップが酷いことになってる。

「な、にこれ……？」

「だから俺の今のプライベートポイント」

「じゃなくて！ この額はなんなのって聞いているのよ！」

驚きのあまり思わず大声を出す堀北。

食堂でそんな声を出せば嫌でも人目を惹く。

周囲からの視線に我に返ったのか、堀北はコホンと二つ咳をした。

そして周囲を気にしながら今度は小声で再度尋ねた。

「なんでこんなにポイントが多いのよ!? 一体なにをしたの!？」

「賭け試合をやっている部活に毎週道場破りしていったらそうなったんだ」

「道場破りって貴方……」

奇想天外な方法に堀北は頭を抱えた。

「チェス部で55万、囲碁部で60万、将棋部で80万。遊戯部でのポーカーで200万、ダーツ部で120万。結果、締めて515万ポ

イントってことさ」

カラカラと笑いながら、柚椰は現在ののポイントの内訳を教えた。

1年生の、それもまだ1カ月しか経っていない中で柚椰のポイント額は異常と言っているだろうか。

「そ、そんなに稼げるものなの……？」

常識外れの数字のオンパレードに堀北は少し引いていた。

「最初は5万とかで始めていたんだけどね。4月の最終週頃は所有額の半分や全額を賭けていたからこうなったのさ」

「全額って……」

勝負に負ければプライベートポイントはもれなく0。

今で言うDクラスの状態になるわけだ。

そんな危ない賭けをしてきたと平気で語る柚椰が堀北には理解できなかった。

「ポイントが入る者にとってはボロ負けではあっても無一文になるわけじゃないからね。仮に負けたくしても、次の月で負けを取り返せばいいという思考があつたんだろう。驚くほど簡単に乗ってきてくれたよ。まあ、俺は今月貰えるポイントが0だから負けたら完全にアウトだったけどね」

「笑い事じゃないわよ……」

他人の事ながら冷や汗をかく堀北。

やはり彼女も根は優しいのだろう。

「まあまあ、勝ったんだから結果オーライじゃないか。なにかあつたときのためにポイントは蓄えておいて損は無い」

「蓄えると言っても限度があるでしょうに……そんなに稼いでどうするのよ」

「堀北とのデート費用とかかな？」

「デートはお断りするけれど、奢らせるのは悪くないわね……そこまです稼いでいるなら心は痛まないし」

「君のそういう遠慮ないところ、俺は結構好きだよ？」

「褒め言葉として受け取っておくわ」

その後も二人は軽口を楽しみながら昼休みを過乗って来てくれた

「しかし、先生の呼び出してなんだろうね？」

「さあ、俺はなんとも。これといって身に覚えはないが」

放課後、柚椰と綾小路は職員室へ行くために廊下を歩いていた。

先ほど校内放送で二人が名指しで呼び出されたためだ。

二人とも、呼び出されるようなことはこれといって心当たりがない。

しかし先生の呼び出しとあれば行かないわけにはいかず、こうして向かっているのだ。

「成績優秀者の黛ならともかく、俺が呼び出されるとは思わなかったんだが」

「流石に小テストが良かったくらいで呼び出しはしないだろう」

職員室に到着した二人は扉を開け、呼び出した張本人を探した。

しかし室内に件の人物はいない。

柚椰はとりあえず他に唯一関わりのある先生に声をかけた。

「星之宮先生、茶柱先生はいますか？」

「え、あつ、ゆ、黛君。今日はどうしたの？」

声をかけられた星之宮先生は少しもりながらも用件を尋ねた。

「俺たち二人、茶柱先生に呼ばれたんですけど」

柚椰がそう言うと、星之宮先生はキョロキョロと職員室を見回した。

「あれー？ さっきまでいたんだけどなー。多分すぐ戻ってくると思うし中で待ってたらどう？」

「だって。どうする綾小路？」

先生からの提案を受け、柚椰は隣にいる綾小路に話を振った。

「いや、俺は廊下で待ってます」

どうやら綾小路は職員室という空間が苦手なのか、ここで待つとい

うごことにあまりいい顔をしていない。

「じゃあ俺もそうするか。先生、俺たち廊下にいるので」

「そう言い残し、二人は職員室を出て廊下に待機した。」

「あーん待ってよく、せつかくなんだからお話しましょうよ」

二人が廊下にいると、何故か星之宮先生まで廊下に出てきた。

「この前、黛君とは真面目な話しかしてなかったし。それに……」

星之宮先生は綾小路を頭からつま先までじっくり見た。

「先生、キミともお話してみたいな。名前は？」

「綾小路、ですけど」

視線から逃れるように綾小路は顔を逸らしながらそう答えた。

その反応がお気に召したのか星之宮先生はニンマリと笑う。

「綾小路君かあ、黛君もだけど二人して格好いいわね、モテるでしょ？」

「いや、別に俺モテないっすから」

「俺も友達が多いけど彼女はいませんね」

綾小路と柚椰各々反応を示す。

「意外だなく私が生徒だったら二人とも放っておかないのに」

「私の生徒に何をしているんだお前は」

いつの間にか戻ってきていた茶柱先生が手に持ったクリップボードで星之宮先生の頭を叩いた。

結構な力で叩いたのか、かなりいい音が廊下に響く。

「いったくい！ 何するの！」

「お前が二人で遊んでいるからだ」

「佐枝ちゃんがどっか行っちゃうから私が相手してあげてただけなのに」

「わざわざお前まで廊下に出ることはないだろうが。二人とも待たせたま、とりあえず生活指導室まで来てくれ」

手短にそう伝えると茶柱先生はスタスタと歩き始めた。

それを追うように二人もまた歩き始める。

しかし二人のさらに後ろから、星之宮先生がニコニコしながらついてきた。

「お前はついてくるな」

「なんで〜？ 別に減るもんじゃないしいいじゃない。それ・に、二人が一体どんな用件で呼び出されたのか気になるなあ〜」

笑顔を崩さずに星之宮先生はそう言った。

茶柱先生はそんな彼女を射殺すように睨みつけている。

「もしかして、佐枝ちゃん下克上とか狙っちゃってる？」

「バカを言え。そんなこと無理に決まっているだろ」

「だよね〜佐枝ちゃんには出来っこないよね〜」

張り詰めた空気が二人の間に広がっている。

二人が暫し無言で見合っていると、一人の女子生徒がトコトコをこちらに歩いてきた。

「星之宮先生、少しお時間よろしいでしょうか？ 生徒会の件でお話があります」

女生徒は一瞬、綾小路と柚椰を見遣ったがすぐに視線を逸らした。

「ほら、呼ばれているぞ。さっさと行け」

これ幸いと茶柱先生はクリップボードで星之宮先生の今度は尻を引つ叩いた。

「も〜佐枝ちゃんのいけず〜。またね二人とも。じゃあ一之瀬さん、職員室で話聞いわ」

素直に諦めて星之宮先生は一之瀬と呼ばれた女生徒を連れて職員室に戻っていった。

それを見送った後、茶柱先生は再び歩き出した。

程なくして指導室の前まで来ると、彼女はサツサと中へと入っていった。

「で、何なんですか、俺たちを呼んだ理由って」

部屋に入ると早速綾小路が本題に入るよう促した。

「それについてだが……二人ともこっちに来てくれないか？」

茶柱先生は指導室の中にあるドアを開いてそこへと促した。

そこは給湯室になっっているようでコンロやヤカンなどが置かれて

いた。

「茶でも沸かせばいいんですかね？　ほうじ茶でいいですか？」

「綾小路、俺はコーヒーがいいな」

「余計なこととはしなくていい。それと黛は寛ごうとするな」

気を利かせようとする綾小路と、自由過ぎる柚椰に茶柱先生はツツコミをいれる。

「お前たちに許されているのは、私が出て来て良いというまでこの部屋で物音一つ立てず静かにしていることだ。勝手に出たり、この部屋で騒ごうものなら問答無用で退学だ。いいな？」

茶柱先生は早口でそう言い終わると給湯室を出てドアを閉めてしまった。

何がなんだか分からないまま、二人は言われた通りに静かにしていた。

しばらくすると指導室のドアが開く音が二人の耳に入ってきた。

「まあ入ってくれ。それで、私に話とは何だ？　堀北」

「堀北？」

「（ああ、昼に言っていたやつか）」

扉を通して聞こえてきた名前に綾小路は眉をひそめる。

既に心当たりがあった柚椰は黙って会話に耳を傾け始めた。

「率直にお聞きします。何故私がDクラスに配属されたのでしょうか」

「本当に率直だな」

「先生は今朝、優秀な人間から順にAクラスに選ばれたと仰いました。そしてDクラスは落ちこぼれが集まる最後の砦だと」

「事実だ。どうやらお前は自分が優秀な人間だと思っているようだな」

「入学試験は殆ど解けたと自負しています。面接でも、大きなミスを犯した記憶はありません。少なくとも、Dクラスになる理由が私には分かりません」

堀北は入学試験で確かな結果を残したという自負があるのだろう。それは驕りではなく、確かな自信として。

「そうか、ならちようどこにその入試問題の結果があるから見てみよう」

「用意周到ですね……まるでこうなると分かっていたようです」

「教師として、生徒の性格はある程度理解しているつもりなのでな。堀北鈴音。お前の見立て通り今年の1年の中でその結果は3位だ。実に優秀、十分過ぎる結果だ。面接でも問題点はこれといって見つかっていない寧ろ高評価だ」

「ありがとうございます。では何故ですか？」

「お前はDクラスであることが不満か？」

質問を質問で返されたことに堀北は顔を顰める。

「正當に評価されない状況を喜ぶ人間はいません。ましてこの学校ではクラスによって将来が大きく左右されるのですから当然です」

「お前は随分と自己評価が高いんだな」

茶柱先生は失笑した。

「お前の学力が秀でていることは認めよう。だけどな、学力に優れた者が優秀なクラスに入れると誰が決めた？ 学校はそんなことは一度も言っていない」

「(やつぱり黛君の言う通り、何か別の基準があるの?)」

堀北の脳裏には、昼に柚椰が言っていた内容が浮かんでいた。

「確かに勉強が出来ることは一つのステータスだ。だがそれだけで上のクラスに配属されると思ったら大間違いだ。それに正當に評価されない状況を喜ぶ者はいないと決め付けるのは早計だな。Aクラスというのは学校からのプレッシャーが強い。そして下のクラスからの妬みもな。日々重いプレッシャーの中で生活するというのは存外大変なものだ。それに、中には正當に評価されないことを良しとする者さえいる」

「まさか、そんな人間がいるなんて理解できません」

「そうか？ 我がDクラスにもいると思うがね。低いレベルのクラスに割り当てられて喜んでいる変わり者がな」

心当たりがあるのか茶柱先生は含みのあることを言う。

「説明になっていません。私がDクラスに配属されたのが事実かどうか

か。採点基準が間違っていないかどうか再度確認をお願いします」

「残念だがお前がDクラスであることは揺るがざる事実だ。お前はDクラスになるべくしてなった。それだけだ」

「……」

「悲観せずともAクラスに上がる可能性はゼロではないぞ」

「未熟な者が集まるDクラスが、どうやってAクラスになれるというのですか?」

「無謀だが不可能ではない道のりを選ぶかどうかはお前たちの自由だ。しかし、お前は何故Aクラスに上がることにそこまで拘る?」

「それは……」

言いたくない事柄なのか、堀北は言葉に詰まった。

「言いたくなければそれでいい。話は終わりか?」

「今日のところは失礼します。ですが、まだ納得していないことは覚えておいてください」

そう言っつて椅子から立ち上がると、堀北は部屋を出て行こうとした。

「ああ、少し待て。そういえば指導室にまだもう二人呼んでいたんだ。お前にも関係のある人物だぞ」

茶柱先生のその言葉に、堀北は誰か特定の人物が見当たったのを目を見開いた。

「! まさか……兄さ——」

「出て来い綾小路、黛」

「ねえ、綾小路。俺たち凄いい呼びじゃない感じがしないか?」

「奇遇だな黛、俺も同じことを思っていた」

二人はそんなことを言いながら給湯室から出てきた。

予想外の人物の登場に堀北は戸惑っている。

「……二人とも聞いてたの?」

「聞こえてきた、が正解だけだな」

「茶柱先生が黙って待機してろとだけ言っつて出て行ってしまっつてね。」

許してほしいな」

堀北の問いに綾小路と柚椰はそう答えた。

「先生、何故このようなことを？」

この状況が予定調和と理解できたのか、堀北は大層ご立腹といった様子だ。

彼女からの恨みがましい視線に対して茶柱先生は至って涼しげだった。

「必要なことだと判断したまでだ。さて、いい加減お前たち二人を呼び出した訳を話そうか」

「私はこれで失礼します」

最早自分が居る意味はないと判断した堀北が部屋を出ようとする。

「まあ待て堀北。聞いておいた方がお前のためにもなる。Aクラスに上がるためのヒントになるかもしれんぞ？」

「手短にお願ひします」

あっさり釣られた堀北に茶柱先生はニヤリと笑った。

先生は堀北が椅子に座りなおしたのを確認すると、さっそく本題に入った。

「さて、まずは綾小路からだ。随分と面白い奴だよお前は」

「先生の苗字に比べれば面白くもなんともないですよ俺は」

「全国の茶柱さんに謝れ、馬鹿者が」

呆れたように茶柱先生はそう言うと、クリップボードから外した紙を一枚一枚机に並べた。

それらはここに居る一年生には酷く見覚えのあるもの。

この学校の入試問題だ。

「入試問題の結果は5教科全て50点。加えて今回の小テストでも同じく50点。これは一体何を意味するかわかるか？」

堀北は驚いた様子でテスト用紙と綾小路を交互に見ていた。

しかし当の綾小路はなんてことはないと言いたげに肩をすくめた。

「偶然って怖いっスね」

「ほう？ あくまでも偶然全ての結果が50点になったと？ 意図的

だろうに」

「偶然ですよ。証拠は無いでしょう。そもそも、点数を操作して何の得があるんですか？」

はぐらかすような態度を取る綾小路に茶柱先生は深くため息をつく。

「憎たらしい生徒だなお前は……黛、お前はと思う？」

茶柱先生は別の切り口から攻めようと思ったのか、今度は柚椰に話を振った。

尋ねられた柚椰は机に置かれている綾小路の答案をズラツと見た。

「ふむ、正答率の低い問題を軒並みクリアして、比較的簡単な問題を間違っている。特に数学に関して終盤の難問が出来てるのに序盤のが出来ていない。積み重ねの科目である数学でこれは少し違和感がありますね」

数学の答案を指して、柚椰は正直な見解を述べた。

茶柱先生も同じことを言おうとしたのか、どうだ？　と言いたげに綾小路を見る。

「たまたまですよ。別に実は天才だったとか、俺にそんな設定はないです」

「どうだかな。私に言わせれば、お前は望んでDクラスに配属された稀な生徒。優秀であることを周りに悟らせたくないかのように見える」

その口ぶりは、まるでそうであると確信しているかのようだ。

「買いかぶりですよ。俺はDになるべくしてなった。それでいいじゃないですか」

「ふん、今はそういうことにおこう。では、次はお前だ黛」

このまま追求しても意味が無いと判断したのか、茶柱先生は今度は柚椰について話題を移した。

再びクリップボードから紙を複数枚取り出し、机の上に並べられていく。

「お前の場合は綾小路とは真逆。5教科全て100点。そして小テストでも100点。結果、文句なしの入学首席。ここまで来るといつそ

清清しいな」

「嘘……」

答案一枚一枚を見て堀北は呆然としていた。どの答案も全ての解答欄に丸が付けられている。

それは結果が満点であることの証明だ。

「たまたまですよ……って俺も言ったほうがいいですか？」

「その場合、私より先に堀北がお前に飛びかかるかもしれないぞ」

「あ、それは嫌ですね、堀北とは友達なので。頑張って勉強しました。そして無事に満点取れました。以上です」

茶柱先生の忠告を受け、柚椰はあっさり折れた。

「フツ、その言い訳はそれはそれで堀北の響きを買うぞ？ 見てみる」
言われた通りに柚椰が堀北のほうを見ると、そこには悔しそうに、恨めしそうに睨む彼女の姿があった。

「もしかして怒っているのかな？」

「怒ってないわ。ええ、別に。黛君が私より遙かに上だったからといって、だからどうということはないわよ」

「女が怒ってないって言ってるときは怒ってるサインらしいぞ黛」

「綾小路君は黙っていてくれないかしら？ うっかり刺してしまいそうだよ」

「一体何で刺すんだよ……」

茶々を入れてきた綾小路に八つ当たりとも言える暴言が浴びせかけられる。

物騒な発言に綾小路は思わずつつこんだ。

「黛に関しては特に言うことはない。引き続き頑張れ。さて、私はもう行く。お前たちもさっさと出る」

そう言うと、茶柱先生は3人を廊下につまみ出した。

「……じゃあ、帰るか」

もうここに居る意味は無いと綾小路はそそくさと帰ろうとした。

「だね、堀北も帰ろう」

「二人とも待って」

堀北が帰ろうとする二人を呼び止めた。

柚椰は言われた通り立ち止まったが、綾小路は歩く脚を止めない。しかし諦めず堀北は早歩きで綾小路を追いかけた。それを追う様に柚椰もまた二人を追いかける。

「さっきの点数、本当に偶然なの？」

堀北が聞きたいのは綾小路の入試成績のことのようなのだ。

「当事者がそう言ってるだろ。それとも、何か証拠でもあるのか？」

「根拠はないけれど、それでも違和感があることに変わりはないわ。それに、貴方はAクラスにも興味がなさそうだし」

「それは黛だつてそうだろ」

「俺？ んー、俺は上げられるならそれもアリかな」

話を振られた柚椰はカラカラと笑いながらそう答えた。

望む返答を得られなかったからか綾小路はため息をつく。

「堀北こそ、Aクラスに随分と拘るんだな」

「いけないかしら？ 進路を有利にするために頑張ることが」

「別に、自然なことだろ」

「私はこの学校に入学して、ただ卒業すればゴールだと思っていたわ。でも実際はまだスタートラインにすら立てていなかった」

そう語る堀北は屈辱と言わんばかりに顔を歪めていた。

「堀北、君はAクラスに上がりたいかい？」

彼女にそう尋ねたのは柚椰だった。

「当然じゃない。必ず上がってみせるわ」

「言うまでもないけど、クラスの大半はその志はおろか学生生活すらロクに出来なかった奴だよ？ たった1カ月でクラスポイント全部ドブに捨てるような者ばかりだ」

「結構辛辣だなお前……」

柚椰の歯に衣着せない物言いに綾小路は乾いた笑いを漏らす。

「分かってるわ。それでもやるしかないじゃない」

「それが例え茨の道でも、かい？」

「ええ」

堀北の躊躇いのない返答。

そして彼女の力強い眼差しを柚椰は視た。

彼女の瞳に宿るのは強い覚悟。

例え過酷な道でありであろうと、己が本願のために踏破しようとする
勇気だった。

「(まだ蕾だが、いずれ大輪の花を咲かせるかもしれない……美しい
な)」

堀北鈴音という人間の示した勇気と覚悟。

それは酷く未熟であるが、同時にとても美しい。

少なくともこのとき、柚椰は彼女に感じ入っていた。

故に彼女へかける言葉は一つだった。

「分かった。俺も協力するよ」

「——！・ 本当？」

柚椰の言葉に堀北は目を輝かせた。

「うん、どうやら本気みたいだからね。協力は惜しまないよ」

「ありがとう……貴方が協力してくれるなら心強いわ」

堀北も柚椰が有能であることは今日一日で十分理解しているのか、
協力を得られたことに喜んでいる。

「それで？ 綾小路はどうするんだい？」

「黛がいるなら俺は必要ないだろ」

「そんなことはないわ。戦う上で歩兵は必要なもの」

「俺は歩兵かよ……」

堀北からの扱いに綾小路は思わずつつこんだ。

「じゃあ綾小路も協力してくれるってことで」

「そうね、綾小路君ならそう言ってくれると信じてたわ」

「一言も言ってねえよ!?!」

決定事項と言わんばかりに事を進める二人。

最早拒否権などないようなものである。

「じゃあ、なにか考えが纏まったら連絡して」

「ごねる綾小路を他所に、柚椰はそう言って帰ろうとする。

「……ねえ、黛君」

しかし、再び堀北が彼を呼び止めた。

「ん、どうしたんだい？」

脚を止め、振り返りながら柚椰は聞き返した。

「昼に言ってたわよね？ この学校の優秀の定義について。勉強だけじゃAクラスにはなれない。勉強も運動も、考える頭も、協調性も必要だって」

「ああ、言ったね」

「……じゃあ貴方はどうなの？ 勉強に関しては悔しいけど私より優れてる。運動だって優れていることは水泳の授業のときに分かった。分析する力もあるし、協調性だって十分あると私は思ってる。なのに、どうして貴方はDクラスにいるの？」

堀北の疑問は尤もだった。

先の分析の結果に鑑みると、柚椰は全てのステータスにおいて高水準だ。

特別何かが欠けているとは彼女には考えられなかった。

にも関わらず、黛柚椰はDクラスとして、不良品として扱われている。

その矛盾に疑問を抱かずにはいられなかったのだ。

「んー、そうだね……」

柚椰はそこで一旦黙ると、堀北へ近づいていった。

「それは、君がもう少し俺と仲良くなったら教えるよ」

そう言って柚椰は右手の人差し指で堀北の左頬をツンとつついた。

彼はAクラスの女王と出会う。

「隣、よろしいでしょうか？」
「ん？」

5月初日から1週間経ったある日の昼休み。

食堂で昼食を摂っていた柚椰はふと声をかけられた。

顔を上げると、そこには片手に杖を持ち、もう片方の手でトレーを持っている銀髪の女子がいた。

「ああ、いいよ。どうぞ」

隣の席は空いており、別段断る理由もなかったため柚椰は快諾した。

両手が塞がっているその女子に配慮して彼女が座れるように椅子を引いた。

「ありがとうございます」

柚椰の紳士な行いに気を良くしたのか、少女は微笑んで礼を述べた。

「いつも昼食はここで召し上がっているのですか？」

「基本的にね。ここは学校の学食とは思えないほどレベルが高いからね」

「確かにそうですね。とても一学校の食堂とは思えません」

少女はそう言うと、自身が頼んだ料理に手をつけ始めた。

「制服の綺麗さから察するに、同じ1年生かな？」

「はい。私、Aクラス所属の坂柳有栖と申します。以後お見知りおきを」

少女は一旦箸を置くと、しっかりと柚椰の目を見て自己紹介をした。

彼女に習い、柚椰も箸を置いてしっかりと目を合わせた。

「Dクラスの黛柚椰だ。どうぞ末永くよろしく」

「はい、よろしくおねがいします。黛君」

互いに名前を名乗り終え、二人は再び食事を再開する。

「黛君はDクラスだったんですね」

「ああ、たった1カ月で1000ポイント吐き出したイカれたクラスの所属だよ」

そう言つて柚椰は自虐するように笑つた。

彼の自虐に坂柳も可笑しそうに笑う。

「そのわりには随分と余裕そうだと見えますね。貴方は今、この食堂のメニューでも高い部類のスペシャル定食を食べている。よろしければ参考までに現在のプライベートポイントを教えていただけますか?」

「いいよ、はい」

あつさり快諾した柚椰は、以前堀北にしたのと同じように端末を差し出した。

躊躇い無く承諾されたことに少し驚きながらも坂柳は端末の画面を覗き込んだ。

そこに表示されている柚椰のプライベートポイントの額に彼女は目を見開いた。

「驚きましたね……まさかこれほど多いとは思いませんでした。どのように増やしたのか教えていただいても?」

「賭け勝負をやっている部活を手当たり次第に荒らしていっただけさ」

「黛君は賭けにお強いんですね。それにしても……4月の段階でポイントを増やすなんて、まるでこれから減ることを知っていたようですね」

坂柳はそう言つて微笑んだ。

その笑みは、暗に柚椰がそうであると確信しているぞと言っているようだ。

そして柚椰もまた、彼女のその笑みを見てあることを確信した。

「なるほど……坂柳、君がAクラスの支配者ということか」

「――！ 驚きましたね、まさかそこまで見抜いてしまうとは」

「ポイントの減少具合で各クラスの体系は導き出せるだろう？ Aクラスはあまりにも消費量が少なかった。早々にシステムに気づいた人間が情報を武器に統率していると考えるのが妥当だ」

淡々と説明をする柚柳は一層楽しそうに笑みを深める。

「その口ぶりから察するに、黛君も早い段階から気づいていたということですか。けれど、残念ながら私はAクラスの完全な支配者ではありませんよ。Aクラスは少々込み入った事情がありまして」

「……派閥争いかな？」

「ええ、その通り。Aクラスには私を筆頭とする派閥のほかにも一つ、葛城という男子が持つ勢力が存在します。現在Aクラスは坂柳派と葛城派の勢力で二分されているというわけです」

「でも、ポイントの仕組みに気づいたのは君だけだったんだらう？ 間抜けなボスを担ぎ上げている勢力なんて、潰そうと思えば潰せるはずだけ」

オブラートに包まない柚柳の発言に坂柳は笑う。

「ふつつ、齒に衣着せぬ物言いは好きですよ。確かに仰る通り、葛城派を潰すことは容易です。きつかけさえあれば、いつでも彼を引き摺り下ろすことは可能です。ですが残念ながら今のところ、そのきつかけが存在しないことも事実。だからこそ今は静観するときと判断しています」

「なるほど……君、結構攻撃的な性格なのかな？」

「おや、分かりますか？」

「要は好機さえあればいつでも首を刎ねるつもりだということじゃないか。君が武闘派ということ、葛城は穏健派といったところか」

「本当に黛君は優秀ですね……もし貴方がAクラスだったら是非右腕として腕を振るっていただきたいかった」

坂柳は冗談めかしてそう言ったが、その目は至って本気だった。

もし仮に同じクラスであったなら、迷うことなく柚柳を引き入れていた。

この短い会話の中だけでも、彼が強力な武器になりうるということは十分理解したからだ。

「Dクラスの俺としては、Aクラスに坂柳みたいな生徒がいることが心底恐ろしいね」

「どうしてですか?」

「君は学力は勿論、洞察力、そして周囲を支配するカリスマも備えている。杖を突いていることから察するに、君は激しい運動が出来ないにも関わらずAクラスにいるということは、他のステータスが恐ろしく高いということだ。遠くない内に、必ず君はAクラスを束ねる女王になる。そうなった場合、どのクラスよりも強いクラスになることは疑いようも無い。君が束ねたAクラスを蹴落とすことは一筋縄じゃいかなそうだ」

「ふふっ、不可能とは言わないのですね」

「生憎、こちらにはどうしてもAクラスに上がりたいといって聞かないお姫様がいるからね」

「では、黛君はその人に付くと?」

「今のところは、ね」

二人は互いに笑みを浮かべて見合う。

相手の腹を探り合っているのだろうか。

或いは互いに認め合っているのだろうか。

「では、私はそろそろ失礼します。よければ連絡先を交換していただ

くしても?」

「こゝろ」

無事に連絡先を交換し終わると、坂柳は食堂を後にした。

柚椰もまた、さっさと片づけを済ませると自分の教室へと戻っていった。

放課後、皆が帰ろうとしていると平田が教卓の前に立った。

「皆、中間テストまで残り2週間を切った。そこで今日から放課後は参加者を募って勉強会を開こうと思うんだ」

この一週間でクラスの意識は変わり、授業態度は大幅改善された。

しかしテストに向けた勉強に関しては未だ踏ん切りがつかない生徒も中にはいた。

「もし勉強を疎かにして赤点を取れば退学。それはどうしても避けない。前に黛君が言ったように、テストの成績はクラスポイントにも良い影響を齎すはずだ。この前の小テストで点数が良かった人数で対策を用意してみたんだ。不安がある人は参加して欲しい。今日の5時からこの教室で、テストまでの間は毎日2時間程度やるつもりだ。途中抜けても構わないよ。僕からは以上だ」

平田が話し終わると、数人の赤点組がすぐに彼の元に向かった。

他にもテストに不安を感じている生徒がゾロゾロと、とりわけ女子が多く参加の旨を表明した。

しかし目下の不安要素である須藤、池、山内の三人は机から動こうとしない。

池と山内に関しては迷っているようだが、須藤に関しては是が非でも行かないと言わんばかりにふんぞり返っている。

勉強が嫌なのか、或いは単純に平田が気に食わないのか。

とにかく3人は平田の勉強会に参加しようとはしない。

柚椰はその様子にため息をつく、スツと立ち上がり平田の元へ行った。

「ねえ平田」

「なんだい？ 黛君」

「気づいてるだろう？ あの3人、君の勉強会に参加する気ゼロだよ」

「そうだね……目下の不安要素である彼らには参加してほしいんだけど」

柚椰の言うことは平田も分かっているのか眉を下げている。

「平田君も黛君もいいよ、あんな人たちが放っておこうよー」

「そうだよ、あいつら退学してもいいってことでしょ？」

「むしろ退学してもらったほうが清々するっていうか」

既に参加を表明している女子たちからは須藤ら3人を見捨てる意見が出ている。

しかし、彼女たちがそう言っても平田は諦めたくないのか、須藤たちをチラチラと伺っている。

「少し、提案がある」

「なにか良い案があるのかい？」

「堀北、綾小路、そして俺で別に勉強会を用意する。彼らはそちらに参加させるとするのはどうだろう？」

「堀北さんと綾小路君が？ それに黛君もかい？」

「ああ、あと榎田も入れたい。彼女が誘えば3人も動く可能性はある」
「確かに可能性はあるね。けど大丈夫かな……？」

須藤たちを見ながら平田は不安そうにつぶやく。

「君の方に参加する女子は須藤たちと一緒に居たくなさそうだからね。下手に参加させたら須藤たちは勿論、女子たちからも不満が出そうだ」

榎田は平田の耳元でそう囁いた。

「…… そうだね、じゃあ任せるよ」

「ああ、任せてほしい」

平田から了承をもち取ると榎田は踵を返して席に戻っていった。

そして隣の席に座っている榎田に今しがた平田と話し合った内容を伝えた。

「というわけだから君から誘ってみてくれないかな？ 女子に誘われれば嫌な気はしらないと思うんだ」

「うんっ！ 任せて！ じゃあ誘ってくるねっ」

榎田は二つ返事で了承すると、さっそく須藤たちに声をかけに行つた。

次に榎田は堀北と綾小路のところに行き、同じようなことを伝えた。

「随分と勝手に話を進めてくれたわね……」

堀北は心底不機嫌そうだ。

勝手に自分が勉強会を開くことになっていることにもそうだが、それ以上に櫛田が参加することに納得がいつていないようだ。

「苦肉の策だから許してほしいな。彼らを説得する上で櫛田は最適解だ。堀北が誘って彼らが首を縦に振るとい確証があるなら止めるけど?」

「……」

痛いところを突かれたのか堀北は黙り込んだ。

「綾小路も、よく話してる池たちがこちらに来るなら平田のほうより参加しやすいだろう?」

「確かにそうだな。感謝する」

綾小路は柚椰の提案に好意的のようだ。

「分かったわ、認めましょう。ただし、今度からは私にも相談すること。いいわね?」

「ああ、じゃあ俺たちは先に図書室行っていようか」

堀北からも何とか了承を得たことで、3人は図書室へと移動した。

図書室でしばらく待っていると櫛田が3人と、沖谷という男子を連れてやってきた。

「黛君、連れてきたよ〜!」

「良くやってくれたね。お手柄だ櫛田隊員」

「ありがとうございます黛隊長!」

柚椰のボケに櫛田は乗ってくれたようだ。

その仲の良いやり取りに池と山内は齒軋りしている。堀北に関しては呆れているのか白い目を向けていた。

「そういや、沖谷も連れてきたんだな」

柚椰は当初誘う予定の無かったはずの沖谷がここにいることに触れた。

「小テスト赤点ギリギリだったから心配で……平田君のグループはちよつと入りにくくて……」

沖谷はおどおどしながらここに来た経緯を説明した。

「分かるツ！ 分かるぞ沖谷い〜」

「いけ好かねえ平田の勉強会になんて参加したくねえよな〜」

池と山内は何を勘違いしているのか沖谷に仲間意識を感じているようだ。

「まあ一緒にやるのは全然構わないぜ。堀北もいいよな？」

「そうね、ただしやるからには真面目にやってもらおうよ」

「う、うんっ」

堀北に若干ビクビクしながらも沖谷は空いている席に座った。

彼が座った席の隣に櫛田が座り、他の3人は別の席に座った。

「32点未満は赤つつつたよな。ってことは32点じゃアウトだっつてことか？」

「未満だったらセーフだっつて。大丈夫かよ須藤」

池でさえ須藤の学力が心配になったようだ。

「私が教える以上、ここに居る皆には最低50点は取ってもらおうわ」

「げえ、それってその分大変ってことだよな？」

「赤点さえ回避すればいいと考えて挑むのは危険よ。デッドラインを楽に越えることを目指してやらなければ困るのは貴方たちなのだから」

赤点組の弱気な態度に対して堀北はそう戒めた。

「今度のテストで出る範囲はこちらでまとめてあるわ。残り2週間、徹底して取り組んでもらう。分からないことがあったら聞いてちょうだい」

「おい、最初の問題から分からねえんだが……」

須藤が堀北を睨みつけながらそう言った。

彼が見ている問題を一同は覗き込んだ。

そこには連立方程式の問題が載っており、所謂中学レベルの問題だった。

「少しは頭を使って考えてみる。最初から諦めてたら前に進めない

ぞ」

呆れながら綾小路がそう嗜めた。

「つていつてもよ、俺は勉強はからつきしなんだ」

「うげ、俺も分かんね……」

「右に同じく」

「あはは……皆よく受かったよね」

須藤たち3人のあまりに悲惨な現状に櫛田が苦笑いを浮かべている。

沖谷に関しては遅いながらも無事に解いていた。

「つーか連立方程式ってなんだよ……」

「須藤、それは哲学的だね」

須藤のボヤキに柚椰がカラカラと笑った。

「ダメだ、やめる。こんなことやっつてられつか」

始めてまだ10分も経っていない中、須藤たちがリタイアを表明した。

あまりに情けない姿に堀北の顔がみるみる厳しい顔になる。

空気が悪くなったことを感じ取った櫛田がなんとかフォローすべく、須藤たちに噛み砕いて説明をした。

しかし彼女の解説も、3人はまるで理解できないと言わんばかりに首を傾げていた。

そしてその醜態について堀北が限界を向かえた。

「貴方たちを否定するつもりはないけれど、あまりに無知、無能すぎるわ。こんな問題も解けなくて将来どうしていくのか、想像するだけでゾツとするわね」

「つせえな、お前には関係ねえだろ」

堀北の言い方が癩に障ったのか、須藤が机を叩いた。

「確かに私には関係ないことよ。貴方たちがどれだけ苦しもうと影響は無いから。ただ憐れんでいるだけ。今までずっとつらいことから逃げてきたんでしょね」

「言いたいこと言いやがって。勉強なんざ将来何の役にも立たねえんだよ」

「それは興味深い話だわ。根拠を知りたいわね」

「こんな問題解けなくても、俺は苦労したことなんざねえ。教科書に噛り付いてるくらいならバスケットでプロ目指したほうがよっぽど役に立つ」

「それは違うわね。こういった問題を解けることが生活にも変化を及ぼす。勉強していればもっと苦労しなかった可能性がある。バスケットにしても同じ道理ね。貴方は自分の都合の良いルールでバスケットに取り組んできたんじゃないかしら。本当に苦しい部分には勉強同様背を向けて逃げてきたんじゃない？ 練習にも真摯に取り組んでいるようには思えない。何より、周囲の和を乱すような性格の貴方を私ならレギュラーにはしないわ」

「——っ！」

我慢ならなかったのか須藤は堀北に詰め寄り胸倉を掴んだ。

「須藤君っ！」

必死な声を上げ、櫛田が須藤の腕を掴んだ。

堀北は須藤に対して眉一つ動かさず、冷たい目を向けていた。

「バスケットでプロを目指す？ そんな幼稚な夢が簡単に叶うとでも思ってるのかしら。貴方のようにすぐ投げ出す人間は、絶対にプロになんてなれない。尤も、仮にプロになれたとしても納得のいく年収がもらえるとは思えない。そんな現実味の無い職業を志す時点で、貴方は愚か者よ」

「ダメエ……っ！」

「今すぐ学校を辞めてもらえないかしら？ そしてバスケットのプロなんてくだらない夢は捨てて、バイトでもしながら惨めに暮らすことね」

「ハッ……上等だよ。やめてやるこんなもん。わざわざ部活を休んで来てやったのに、完全に時間の無駄だったぜ」

須藤は堀北から手を離すと、さっさと鞆に教科書を詰め始めた。

「止めないのか？」

「ああ、あれはもうダメだろう。完全に火が点いてしまった」

綾小路が隣ですっと黙っている柚椰に尋ねたが、彼は須藤の顔から

最早説得は無理だと判断したようだ。

そして須藤に次いで、池や山内もやる気をなくしたのか勉強道具を片付けて出て行こうとした。

「み、皆、本当にいいの……？」

「行こうぜ沖谷」

迷っていた沖谷もまた、池につられて出て行った。

図書室に残っているのは堀北、綾小路、柚椰、そして櫛田だけだった。

その櫛田ももう限界のようだった。

「堀北さん、こんなんじや誰も一緒に勉強なんてしてくれないよ……」

「私が間違ってたわ。もし今回上手くいったとしても、あの人たちはすぐに同じような窮地に追い込まれる。そうならばこれの繰り返しよ。実に不毛で余計なことだと痛感したわ」

「どういうこと……？」

「足手まといは今のうちに切り捨てるべき、ということよ」

堀北はもう須藤たちを救おうとは思っていないようだ。

「そんなのって……ねえ、黛君も何か言ってるよ」

「そうだね……でもこればかりは須藤たちの気持ちの問題だからね。彼らが本気でこの学校で生き抜いていくと決めない限りは打つ手なしだ」

「そんな……」

櫛田は表情に影を落とし、鞆を持って立ち上がった。

「私はなんとかしてみる。こんなに早くお別れなんて嫌だよ」

「櫛田さん、本気でそう思っているの？」

そう尋ねたのは堀北だった。

「いけないかな？ 友達を見捨てたくないって思っちゃ」

「本心からそう言っているのなら構わないわ。でも、私には貴女が本気で彼らを救いたいと思っっているようには見えない」

「何それ。意味分かんないよ……どうして堀北さんはそんなこと平気で言えちゃうの？」

櫛田は悲しげに顔を伏せたが、すぐに顔を上げた。

「じゃあね、また明日」

短く言葉を残し、櫛田も図書室を出て行った。

「二人ともご苦労だったわね。勉強会はこれで終了よ」

「そうみたいだな」

「あつという間だったね。まあ、実際にそうなんだけど」

堀北からの言葉に綾小路と柚椰は答える。

「先に俺は帰るね」

柚椰は腰を上げると、勉強道具を鞆に仕舞った。

「帰るの？」

「ちよつと今回の功労者を労いにね。巻き込んでしまったのは俺だから」

柚椰は暗に櫛田のところに行くと言っているようだ。

「そう……好きにしたらいいわ」

堀北は柚椰が櫛田のところに行くのが気に食わないのか若干不満気だ。

「じゃあ二人とも、また明日」

片づけを済ませ、鞆を持つと柚椰は二人に別れを告げた。

しかしドアの前で彼は一旦立ち止まった。

「ああ、それと堀北」

「何かしら？」

「人の夢に貴賤はないよ。Aクラスになるという君の夢だって、須藤たちにとつては不可能な夢でしかない。人の夢を啜う権利は誰にもないんだ。それだけは覚えておくといい」

そういい残して柚椰は図書室を出て行った。

彼は強か少女を従える。

「ん、出ないか……」

図書室を出た柚椰はすぐさま櫛田に連絡を取ろうとした。

しかし2、3回かけても一向に繋がらない。

電源を切っているのか、あるいは着信に気づいていないのか。

居所が分からない以上、彼女を探しに行くしかなかった。

(彼女の性格上居るとすれば人の居ない、誰にも見られていないところ、か)

居場所には大体の見当をつけた柚椰はひとまず一番可能性の高い場所へと向かう。

するとすぐに道中で櫛田と思われる後姿を発見した。

彼女は校舎の中へと入っていき、上の階へと続く階段を上っていった。

(やはり屋上か。あそこには学校が仕掛けたカメラはない)

この学校には夥しい数の監視カメラが仕掛けられている。

しかし、一部の部屋や場所には仕掛けられていない。

その内の一つが屋上だ。

柚椰の予想通り、櫛田はどんどん階段を上っていき、ついに屋上の扉の前で立ち止まる。

彼女の後姿を視てこれから何かが起こると察知した柚椰は、咄嗟に左手首に付けていた腕時計を触った。

「あー……ウザい」

櫛田が発した声は、彼女のものとは思えないほど低かった。

「マジでウザい、ムカつく。死ねばいいのに……」

まるで呪詛を唱えるかのように、彼女はぶつぶつと暴言を呟く。

「自分が可愛いと思ってお高く止まりやがって。お前みたいな性格の女が勉強教えられるわけないっつーの!」

櫛田の罵声の矛先は、言わずもがな堀北だった。

「あー最悪。ほんつと、最悪最悪最悪。堀北ウザい堀北ウザい、ほんつとウザいっ！」

(この光景を池に見せたら卒倒するだろうな……)

暴言を撒き散らす櫛田の姿を見ながら柚椰はぼんやりとそんなことを考えていた。

クラスのアイドルであり、誰にでも優しい少女の裏の顔。

彼女が絶対に誰にも見せたくないであろう顔。

櫛田は堀北を心底嫌っているのだろう。

堀北が櫛田を嫌っているように、いやそれ以上に櫛田は堀北を憎悪している。

では、何故櫛田は嫌いであるはずの堀北がいる勉強会に参加したのだろうか。

提案したのは柚椰であるが、断ることも当然出来たはずだ。

にも関わらず彼女は二つ返事で了承した。

疑問は今日の勉強会のことだけではない。

そもそも櫛田は、何故嫌いであるはずの堀北に近づいたのか。

幾度となく遊びに誘い、友達になってほしいと声をかけた理由は何だ。

(嫌いであるはずの人間に近づく理由……監視か?)

柚椰がある一つの可能性に気づいたとき、櫛田が屋上の扉を思いっきり蹴り開けた。

誰もいない学校に、その音は大きく響き渡る。

予想外に大きな音がしたためか、彼女は一瞬身を固くして息を殺した。

そして誰にも見られていないか確かめるために彼女は後ろを確認したが――

「やあ、思っていたより元気そうだなによりだったよ」

そこには手を上げてニッコリと笑顔を浮かべている柚椰が居た。

まさか柚椰が居るとは思わなかったのか、櫛田は目を見開いた。

「ま、黛君、なんで……？」

疑問を口にした櫛田の声は少し震えていた。

「今回頑張ってくれた君を労うのと、あと心配だったからね。堀北に酷いことを言われていたから、もしかしたら傷ついているかと思ったんだ」

「そうなんだ……」

つかつかと櫛田が階段を下りていき、柚椰の前まで来た。

「今の、もしかして聞いてた……？」

彼女が尋ねているのは、間違いなく先ほど彼女が吐いた暴言のことだ。

「まあね」

「そっか……」

柚椰があっさり肯定したことで櫛田は俯いた。

「黛君にだけは聞かれなくなかったなあ……」

そう呟く櫛田の声は少し涙ぐんでいた。

彼女は本当に柚椰にだけは自分の本性を知られなくなかったのだろう。

「別にいいんじゃないかな？ 誰彼構わずに良い顔をしていればストレスも溜まるだろう。たまたまストレスを発散しているところを俺が聞いたただけだ。それに、君に裏の顔があるということはどうに知っていたよ」

「え……？」

一瞬何を言われたのか分からなかったのか櫛田は固まった。

そしておずおずと、怯えながら柚椰に尋ねる。

「い、いつから……？」

「バス停で会ったときからだよ。君が底抜けの善人ではなく、社会的ステータスに拘る人間だということは気づいていた。本性は承認欲求の塊で、利己的な人間だということもね。前に目がいいと言っただろう？ 高円寺を分析したのと同じように、君に関してもとうに本性は見抜いていたんだ」

「うそ……」

自身の本性が目の前の方の男に筒抜けだったという事実には打ちひしがれていた。

しかしすぐに我に返ると柚椰を恐ろしい形相で睨みつけた。

「このこと、誰かに話したら許さないから」

「話すと言ったら？」

詰め寄られていながらも柚椰は至って冷静に返した。

「今ここで、黛君にレイプされそうになったって言いふらす」

「でもそれは冤罪になるんじゃないかな？」

「大丈夫、冤罪じゃないから」

そう言うと榎田は柚椰の手を掴み、自身の胸元へと当てた。

要は柚椰に自分の胸を揉ませたのだ。

「おや」

「これで指紋、べったりついたから。証拠はある。私は本気よ、分かった？」

自分を使うことで、榎田は柚椰の弱みを作ったのだ。

万が一柚椰が秘密をバラしたなら、制服の指紋を証拠に警察へ突き出すということだろう。

完全に柚椰の生命線を握ったと確信したのか榎田は強気に脅しをかける。

「確かにこれを証拠として出せば、俺は完全に犯罪者だ……でも——」

刹那、柚椰は恐ろしいほど強い力で榎田の手を振り払うと、そのまま彼女の首を掴んだ。

そしてその勢いのまま、階段の壁へと彼女を押し付ける。

「——この程度で俺を嵌めようだなんて、随分と思いがつたね。桔梗」

「あつ……！……！……！？」

まさか首を絞められるとは思わず、榎田は柚椰の手から逃れようと必死にもがく。

しかし、彼女がいくら力を振り絞っても柚椰の手はビクともしない。

「上着の左右のカフスボタン。ネクタイピン。胸ポケットに挿してあるボールペン。これが何を意味しているか分かるかい？」

「あつが……?」

「俺が今、現在進行形で回している盗聴器と隠しカメラだよ」

「——っ!？」

柚椰にそう言われるや否や、櫛田は彼がポケットに挿しているボールペンを取ろうとした。

しかし柚椰は櫛田の首から手を離すと、彼女が伸ばした腕を素早く掴み、そのままもう片方の手と合わせて再び壁へと押し当てた。

頭の上で両腕を拘束されたことで、櫛田は完全に自由を失っている。

「言っただろう? 本性に気づいていた、と。君が罵詈雑言を並べ立てる前に俺はこれらを起動していた。だから君の本性も、今君が仕掛けたトラップも、しっかりと記録されている。脅迫をするならその場凌ぎの浅知恵ではなく、念入りに下準備をしてやるべきだ」

「くっ……!」

「君のことは良い友達だと思っていたけど、こちらに牙を?くのならば方がない。本来であれば歓迎するところだが今は時期が悪い。生憎と、こんな素晴らしい箱庭から早々に退場するわけにはいかないんだ。今の映像を学校にもクラスにも……いや、ネットを介して全生徒にばら撒いてあげよう。二重人格の、虚言癖の、薄汚い尻軽女として余生を楽しむといい」

柚椰の目は本気だった。

どこまでも冷徹で、どこまでも容赦が無い。

櫛田はその目を見て黛柚椰の本性を垣間見た。

自分なんかとは比べ物にならないくらいの恐ろしさを、底深い闇を目の前の男は秘めていると。

「お願い、消して……なんでもするから……」

完全に打つ手が無くなったのか、櫛田は力無くそう懇願した。

しかし彼女の懇願にも柚椰は心を揺らさない。

「君が何かメリットを齎してくれるとしても言うのかい？ 広い交友関係以外に自慢できることなどない君が」

「なんだってするから！ 身体だって好きにしてい！ 黛君の言うことならなんでも聞くから！」

「手となり足となつて動くど？」

「動くから！」

「……いいだろう」

柚椰はひとまず矛を収めたのか櫛田の拘束を解いた。

身体が自由が利くようになる、櫛田は力が抜けたのかその場へたり込んだ。

「おーい、大丈夫かい？」

「よくそんな何事も無かったかのように見えるよね！」

先ほどの雰囲気は何処へやら、柚椰はいつも通りのテンションに戻っていた。

あまりの切り替えの早さに流石の櫛田もついていけない。

「ふふっ、怖がらせて悪かったね」

「まさか黛君にまで裏の顔があるなんて思わなかったよ……」

カラカラと笑う柚椰に櫛田はもう言い返す気力も無い。

「じゃあ、これからよろしく頼むよ」

「ちよつと待つてよ！」

あつさり帰ろうとする柚椰を櫛田は大声で呼び止める。

「具体的に私は何をすればいいの……？」

「ふむ、ひとまず今のところは何も無いよ。いつも通り過ごしてくれて構わない」

「えっ!? じゃ、じゃあ動画と録音データは……？」

「ああ、部屋のパソコンとポケットの端末にバックアップで入っているよ。心配しなくてもブラフではないから安心するとい」

「そんな……じゃあどうすれば消してくれるのさー」

先ほどの脅しが嘘ではないと知って櫛田は絶望した。

そしてどうすればデータを消してくれるのかを尋ねた。

「方法は2つ考えている。1つは君が俺の仕事をこなしてくれる度に動画か音声のどちらかを一つ消す。もう1つは、データ全てを君が買い取る。いずれにしても今君が着ている制服は洗濯するか破棄してもらうけどね」

「買い取るって……一体いくらなら売ってくれるの？」

「1つあたり50万。元データが各デバイス4つで、バックアップがそれぞれ2つずつ。締めて600万だね」

「600万って……そんなの払えるわけじゃないじゃん！」

「だったら借金だね。俺の仕事をこなして返済してもらおうしかない。ああ、ちゃんと契約書は書いてもらおうよ」

「どう転んでも黛君の言うこと聞くしかないってことなんだね……」

逃げ場が無いと分かり、櫛田は今度こそ逆らう気が無くなったようだ。

「どちらがいい？好きなほうを選んでいいよ」

「……じゃあ最初のほうで。借金は気持ち的にもなんか嫌」

「ああ分かった」

櫛田は柚椰との契約を受け入れた。

彼女が同意したと分かるや否や、柚椰は踵を返した。

「じゃあ俺はこれから夕食を食べに行くけど君はどうする？」

「一緒に行くっ！」

不機嫌さを隠そうともせず、櫛田はそう言っただけで柚椰の後ろをついて行った。

学校を出た柚椰と櫛田はその足で施設内に設けられているファミレスに入った。

店内は空いており、二人は待たされることなくテーブル席に通された。

「何が食べたい？　好きなものを頼んでいいよ」

「えっ、奢ってくれるの？」

「せっかくだからね。気にしないで好きなものを食べるといい」

「やったっ！」

店の中だからか櫛田はいつも通りのようだ。

周りから見れば、二人は仲睦まじいカップルか何かに映るだろう。

もしDクラスの誰かに見られたら、明日の話題は確定してしまう。

櫛田はニコニコしながらメニューを捲り、注文する料理を決めていく。

「じゃあ……エビとホタテのクリームパスタとプリンアラモード。あとドリンクバーも」

「俺は……ハンバーグとライスでいいか」

注文を決め終わると、柚椰はテーブルのボタンを押して店員を呼ぶ。

そして店員に注文を伝え、十分ほどで料理が運ばれてきた。

二人は手を合わせ、各々料理を食べ始める。

「それで、改めて聞くけど黛君は私に何をさせたいの？」

料理の美味しさに頬を綻ばせながらも、櫛田は改めて柚椰にそう尋ねた。

柚椰は切り分けたハンバーグを口に運んでゆっくりと咀嚼する。

「そうだね……とりあえず俺が君に求めているものは情報かな。君の人脈を駆使して得た情報を俺に流してもらおう」

「情報を？　でも黛君なら自分の力で集められるんじゃないの？」

「学校のシステムに関しては一通り調べはついた。君に本格的に動いてもらおうとすれば、それはこれから先に来るであろう試験のときだ」「試験？　それって定期テストのこと？」

「いや、定期テスト以外にもクラスポイントに影響を与えるイベントがある。これはほぼ間違いないと言っている」

「それはどうして?」

「学力の良し悪しだけでクラスが決まるわけじゃない。それは君の大嫌いな堀北がDに居ることでもいい加減気づいているだろう?」

「それはそうだね……っていうか外でそのこと言わないでくれない?」

人目を気にしてか、櫛田は軽率な発言をする柚椰を睨んだ。

彼女に睨まれて柚椰はカラカラと笑った。

「これは失礼。話を戻すけど、定期テストで計れるのは学力だけだ。なら、他のスペックはどうやって計るといふんだい? バカだが運動は出来る須藤を学校はどう計る?」

「なるほどね……体育祭とか身体を使う試験ってことか」

「そういうことだね。要は普通では考えられないような試験も存在するということだ。恐らく生徒個人だけではなく、クラス全体の評価を決める試験もね。そうなった場合、他クラスにまで広がる君の交友関係は間違いなく役に立つ」

「私にスパイになれってこと……?」

「それもそうだが、同じDクラス内にも網を張っておいたほうがいい。今現在Dクラスはお世辞にも統率が取れているとは言えない。試験を円滑に進めるための緩衝材、これは今日やってもらったようなことだね。そしてクラス間で流れる情報の把握。櫛田桔梗という人間の価値を使ったクラスメイトの懐柔。やってもらうことは山積みだね」

「人遣い荒いなあもう……でも、私に拒否権はないもんね」
柚椰の要求の多さに苦笑いしながらも、櫛田は了承する他無かった。

「君の価値を俺は凄く高く買っているんだよ? 少なくとも君は、堀北や他の者よりよほど有能だ」

「……そ、そうかな? 私、堀北さんより使える?」

櫛田は意外そうに、けれど嬉しそうにそう聞き返した。

彼女は誰かに褒められるということに心底弱いのだ。

「ああ、誰彼構わず喧嘩売るようなことを言う堀北とは違つて協調性もある。チームプレイで事に向かう上で、一番有能なのは君のような人間だよ。俺に言わせれば、堀北より君がDにいることの方が意外だね」

「えへへ……なんか照れちゃうな」

櫛田は照れくさそうに、恥ずかしそうに笑う。

結果的に従属する立場にあるものの、柚椰から褒められるのは悪い気はしないようだ。

「でも、それを言うなら黛君もじゃない？ 友達も多いし、頭もいいし運動も出来る。なんでDクラスなのかな？」

櫛田は以前堀北がしたのと同じような疑問を投げかけた。

彼女もまた、柚椰が何故Dクラスにいるのか不思議でならないらしい。

「……まあ、君になら構わないか。俺の言うことを聞いてくれるわけだからね」

「ほんとっ!? 聞かせて聞かせて!」

まさか素直に教えてくれるとは思わなかったのか、櫛田は上機嫌で柚椰に尋ねた。

ニコニコしながら聞いてくる彼女に柚椰はそつと耳元に口を寄せた。

「過去に色々とおつてね。それが学校側にバレてしまった。以上」

「なにそれー!? 凄いザツクリじゃん! ズルいよもつと詳しく教えてよー!」

あまりにいい加減な回答に櫛田は口を尖らせて不満を口にする。

もつと凄いものを期待していたからか、肩透かしもいいところだったらしい。

「詳しく知りたいならここでは無理だね。君の裏の顔と同じだ」

「裏の顔あるのは黛君もじゃんか!」

自分の本性と一緒になされたからか櫛田はプンスカと怒り始める。

「分かった分かった、今度教えてあげよう」

「今度っていつ?」

はぐらかそうとする親に聞く子供のようには間髪入れずに聞き返した。

「作戦を本格的に動かすときにだ。俺の部屋なら誰にも聞かれないだろう」

「！ まさか部屋に連れ込んで私に何かするつもり……!?!」

「自分で胸を揉ませた人間の台詞ではないね」

「それはもう忘れてよ！ あ、あのときは焦ってたっというか……!」
まさか先の出来事を掘り返されるとは思わず、櫛田は真っ赤になつて慌てていた。

大胆な行動に打って出たものの、彼女はその手のことにあまり耐性がないらしい。

「とにかくちゃんと教えてあげるから、今は諦めてほしい」

「ふう〜」

ここで聞き出すことは出来ない知り、櫛田はふうたれている。
可愛くない女子がやれば悲惨な光景だが、彼女がやると様になっている。

柚椰は櫛田が美少女であると改めて理解した。

「つていうか黛君、さつき学校に居たとき私のこと名前で呼んだよね？」

「あれ、そうだったかな？」

「桔梗って呼んでたよ？」

「ああ、つい癖だね。真剣だったからか無意識に言っていたかもしれない」

「ふーん、そっかー。黛君は無意識に女の子のこと名前で呼んじゃう人なんだー」

そう言いながら櫛田はプイツと顔を逸らした。

表情と声色から判断するに、彼女は何か不満そうである。

「桔梗、君は可愛いね」

「ひゃっ!?!」

名前呼びと可愛いと言われたことの相乗効果からか櫛田の顔が一気に赤くなつた。

「い、いいいきなり何さ!？」

「なんだ、故意に呼ばれたいんじゃないのか」

「そういうことじゃないよ！ 全く、黛君はもうちよつと女心つてものを——」

「俺のことは名前で呼ばないのかい?」

「はいっ!？」

今度は頓珍漢なことを言われ、変な声を出す櫛田。

「な、なんで私が黛君を名前呼びしなきゃいけないのさ!？」

「俺が呼んだんだから今度は君の番だよ。ほら、呼んでみて」

「うう……ゆ、柚椰君?」

櫛田はおずおずと、上目遣いで恥ずかしそうに名前を呼んだ。

彼女のその仕草は、恐らく他の男子ならば一瞬で恋に落ちるのである。

「うん、なんだい?」

「うー、冷静なのがなんかムカつくなあ……」

一切表情を変えない柚椰のリアクションに櫛田はどこか釈然としないようだ。

そんな彼女の不満そうな顔を見て柚椰は笑った。

「とりあえず、今俺が君に求めるものは一つ。Dクラスの中で確かな地位を築いてもらうことだ」

「すごい何事も無かったかのように戻ったね……」

櫛田は照れないどころか何事もないように話を戻す柚椰に苦笑いした。

「今現在Dクラスの女子で台頭してるのは君と軽井沢の二人だ」

「あー、あのウザいバカギャルでしょ。自分が女王様みたいにふんぞり返りやがってマジムカつくわ。しかも私にポイントまで集りにきやがって……」

軽井沢という名前を聞いて櫛田は顔を顰めて毒を吐く。

「本性出てるよ」

「はっ!?! ……て、てへっ」

我に返ったのか既に本性がバレているにも関わらず櫛田は取り

繕った。

そんな彼女を他所に、柚椰は本題に戻った。

「話を戻すよ。櫛田、早めに軽井沢を蹴落としてトップに立ってもらいたい。上に立つ資質は君のほうがあるはずだ。それは君自身も分かっているだろう?」

「そりゃね、あんなのより私のほうが可愛いし性格もいいし」

櫛田は自信たっぷり自分の良さをアピールする。

「前者は同意するけど、後者は少し口を挟みたくなるね」

「普段の姿はってことだよ。本当の私は黛君しか知らないし」

「そうだね。そして本当の俺も、今のところ知っている生徒は君だけだ」

「――! ……ってことは私たちは同じ秘密を共有する仲ってことかな?」

櫛田は自分と柚椰の関係性に名前をつけた。

そしてそれは柚椰にとってもしっくりくるものだった。

「そうなるね。持ちつ持たれつというところかな」

「えへへ、じゃあ似たもの同士協力しないとね」

「櫛田が望む働きをしてくれれば、データの消去は勿論、出来る限りのことはするよ。今食べている夕食のようにな」

「へえー、じゃあデートとかもしてくれるんだ?」

櫛田は面白そうに、けれど若干の期待を含ませて尋ねた。

「櫛田が望むならね。噂されてもいいなら構わないよ」

「そっか、じゃあ考えとくねっ!」

そう言つて櫛田は満面の笑みを浮かべた。

こうして二人の奇妙な協力関係が結ばれた。

彼は孤独少女の兄と出会う。

夕食を終え、櫛田を部屋へと送り届けた柚椰は夜風に当たりながら敷地内を散策していた。

そしてそろそろ自室に戻ろうとしていた矢先、寮の近くで物陰に隠れている綾小路を見つけた。

「綾小路、何をしているんだい？ そんな所で」

「黛か……あれをみてみる」

「ん？ なんだ、堀北か。一緒にいるのは……生徒会長か？」

綾小路の指差す方へ視線を移すと、そこには堀北と、以前演説をしていた生徒会長が何やら話をしているのが見えた。

しかし、ただ話をしていると言うには少々雰囲気殺伐としている。

「Dクラスになったと聞いたが、3年前と何も変わらないな。ただ俺の背中を見ているだけで、お前は自分の欠点に気づいていない。この学校を選んだのは失敗だったな」

「そんなことは……！ 私はAクラスに上がってみせます。そしたら——」

「無理だな。お前はAクラスには辿り着けない。それどころかクラスも崩壊するだろう。この学校はお前が考えているほど甘いところではない」

「絶対に、絶対に辿り着いてみせます……」

「無理だと言っただろう。本当に、聞き分けのない妹だ」

生徒会長の言葉から、彼と堀北は兄妹であることは察せられた。

彼の表情には一切の感情が宿っておらず、実の妹であるはずの堀北をまるで何の興味もないように見ている。

刹那、彼は無抵抗な妹の手首を掴み、強い力で壁に押し付けた。

柚椰はこの後何かが起こると考えて素早く腕時計を触り、同時に端末のカメラも起動した。

「どんなにお前を避けたところで、俺の妹であることに変わりはない。お前のことが周囲に知られれば、恥をかくのはこの俺だ。今すぐこの学校を去れ」

「で、出来ません……っ。私は、絶対にAクラスに上がってみせます……！」

「愚かだな、本当に。昔のように痛い目を見ておくか？」

「兄さん、私は——」

「お前には上を目指す力も資格もない。それを知れ」

刹那、堀北の身体が引かれ宙へと浮いた。

突然のことで堀北は全く受け身が取れていない。

このままだと彼女はコンクリートの地面に叩きつけられるだろう。

危険を察知した綾小路が物陰から飛び出していく。

そして気配を悟られる前に、彼は堀北の手首を掴む生徒会長の腕を掴み取り行動を制御させた。

「……何だ？ お前は」

生徒会長は自分の腕を掴んでいる綾小路へ鋭い眼光を向ける。

堀北はいきなり出てきた綾小路を見て目を白黒させていた。

「あ、綾小路君!?!」

「あんだ、今堀北を投げ飛ばそうとしただろ。ここはコンクリだつて分かってんのか。兄妹だからってやって良いことと悪いことがある」

「盗み聞きとは感心しないな」

「いいからその手を離せ」

「それはこちらのセリフだ」

二人は睨み合い、暫しの沈黙が広がる。

「やめて、綾小路君……」

絞り出すように、堀北の弱々しい声が響く。

綾小路は彼女の要求を呑み、渋々腕を離す。

その瞬間、生徒会長の恐ろしい速度の裏拳が綾小路の顔面目掛けて飛んできた。

彼は身体を反らすことで攻撃を回避する。

しかしそんな彼を追撃するように急所を狙った鋭い蹴りが振られる。

「つぶねー！」

綾小路は飛んできた蹴りを間一髪で避けるが、続けざまに彼に向けて生徒会長の右手が伸ばされる。

掴まれば先の堀北のように地面に叩きつけられるであろうことは簡単に予想出来る。

そのため綾小路は左手の裏でその手を叩くことで受け流した。

「ほう、いい動きだな。立っ続けに避けられるとは思わなかった。

それに、俺が何をしようとしていたのかもよく理解している。何か習っていたか？」

「ピアノと書道なら。小学生の時、全国音楽コンクールで優勝したこともあるぞ」

生徒会長の問いかけに綾小路はズレた答えを返す。

「ふふっ、綾小路がピアノを弾くとは、これは面白いことを聞いた」

綾小路の返答が面白かったのか柚椰は笑いながら物陰から出てきた。

またしても乱入者が現れたことで生徒会長の眼光が柚椰に向けられる。

「お前は……黛柚椰か」

「これは生徒会長、知っていたただけのように嬉しそうですよ」

柚椰はヘラヘラと笑いながら近づいていく。

「ふん、生徒会長として新入生の情報は把握している。全教科満点の入学首席でありながらDクラスに配属された異端児ならば尚更な」

生徒会長は淡々と柚椰の名を知っている理由について語った。

「おや、もしかして生徒会長の中で俺は結構な問題児という位置づけですか？ それはさておき、生徒会長は堀北のお兄さんだったんですね」

「遺憾ながら」

「っ！」

生徒会長の冷たい発言に堀北がビクツと身体を震わせる。

そんな彼女を横目で見ながら、柚椰は生徒会長と向き合った。

「随分と過激なことを平気でするんですね。堀北の家はそういう躰の仕方が当たり前なのですか？」

「赤の他人には関係のないことだ」

「流石に友達がコンクリに叩きつけられそうになっていたところを見て知らぬ顔は出来ませんよ。そもそも、いくら夜とはいえ学校の敷地内で生徒会長があんなことをして平気なのですか？」

「ここに監視カメラはない。知らなければいいだけの話だ」「なるほど……」

柚椰はそこで言葉を切ると胸ポケットから取り出した端末をちらつかせた。

「じゃあ、今撮った動画ネットに流しても大丈夫だということですね？」

次の瞬間、生徒会長の拳が柚椰の顔面目掛けて放たれた。

「おっとー」

顔へ飛んできた拳を柚椰はあっさり回避する。

しかし綾小路のときと同様、続けざまに今度は膝蹴りが柚椰の腹へと繰り出される。

その膝蹴りを、柚椰は身体ごと横にスライドさせることで避ける。すると今度は膝蹴りを放ったのとは反対の方の足を使った後ろ回し蹴りが顎目掛けて放たれる。

それを柚椰は綾小路に倣って身体を反らすことで対応した。

「怖い怖い、的確に急所ばかり狙うとは容赦がないですね」

「ふん、危なげなく避けておいてよく言ったものだ。そこにいるソイツもそうだが、お前も何か心得があるのか？」

「学校の部活であるような武道は一通り？」

「ほう？　面白い男だなお前は。鈴音、お前に二人のような友達が居たとはな。驚いた」

「黛君はともかく、綾小路君は友達なんかじゃありません。ただのクラスメイトです」

「綾小路、君振られてしまったよ？」

「いや、堀北に友達認定されているお前の方がレアなんだからな？」

生徒会長と堀北とのやりとりを他所に、柚椰と綾小路はそんな会話を繰り返している。

「ところで生徒会長、この動画はどうしますか？」

柚椰は再び端末をちらつかせた。

「幾ら要求するつもりだ？」

「これで撮った動画なら、貴方が消せと言うのなら消しますよ？　どうやら貴方は自分の不祥事よりも、堀北が自分の妹だとバレることが避けたいようですから」

その言葉に堀北が悲しそうに俯く。

「消していいですよ、どうぞ」

柚椰は生徒会長に端末を投げてよこした。

それを危なげなく受け取ると、生徒会長は素早く端末を操作すると件の動画データを消去した。

「ふん、どうやらお前は甘い男のようだな」

「貴方の妹さんが大事にしたくはなさそうだったので。友達のお願いは断れませんよ」

「……まあいい。鈴音、相変わらずお前は孤高と孤独を履き違えているようだな。それからお前たち。綾小路と黛、お前らがいれば少しは面白くなるかも知れないな」

そう言い残し、生徒会長はその場から去ろうとした。

しかしその背に向かって柚椰が言葉を投げた。

「生徒会長、俺も貴方に一つ言っておきたいんですが」

「……なんだ」

「貴方は先ほど、堀北には上を目指す力も資格もないと言ったがそれは違う。何かを目指す。夢を描き、それを求めることは生きとし生け

るもの全てが持つ平等な権利だ。例え兄である貴方であろうと、堀北の親であろうと、彼女の夢を否定する権利は誰にもない。少なくとも俺は、彼女の夢を追う姿に敬意を抱いたからこそ、彼女に協力すると決めたんですから」

「……面白い」

生徒会長はそう言って微笑むと、今度こそその場を後にした。

「じゃあ、帰ろうか」

柚椰はカラカラと笑い、綾小路と堀北に向き直った。

「二人とも、最初から聞いていたの……?」

「半分偶然だ。ジュース買ってたら外に行くお前を見かけてな。ただ立ち入るつもりはなかった。それは本当だ」

「俺は散歩の帰りにコソコソしている綾小路を見かけたからね」

堀北の問いに綾小路と柚椰は各々答えた。

「貴方たちには変なところを見られてしまったわね」

「気にするな」

「右に同じく」

「戻りましょう。夜も遅いわ」

堀北がそう促したことで、一同は寮へ戻るべく歩き出した。

「そういうえば堀北、もう勉強会はいいの?」

寮へ帰る道中、綾小路がそう言って口火を切った。

今日の勉強会は大失敗に終わった。

須藤たちの学力の低さもそうだが、堀北が彼らの神経を逆撫でしたことが直接的な原因だ。

「図書室でも言ったけど、私は赤点保持者に時間を割くだけ無駄だと判断した。卒業まで同じようにテストは繰り返し返される。その度に赤点を取らないようにカバーするなんて愚の骨頂よ」

「須藤たちは平田から距離を置いてるぞ。勉強会に参加するとは思えない」

「黛君も言っていたでしょう？ それは彼らの気持ちの問題よ。彼らが本気で退学を回避したいと考えない限り、例え私が教えたところでどうこうなるとは思えないわ。寧ろ早いうちから彼らを切り捨ててしまえば必然的にマシな生徒だけになるでしょう。そうなれば上のクラスを指摘することも容易くなる。願ったり叶ったりよ」

「まあ、枯れそうな枝を間引くことも時には大事だろうね」

柚椰は堀北の主張を援護するようなことを言った。

まさか柚椰がそんなことを言うとは思わなかったのか綾小路はジト目で彼を見ている。

「言っておくが、退学者が出ようがクラスには大して影響はないと思うよっ。」

「……どうしてそう言い切れるんだ？」

柚椰の考察に綾小路は理由を尋ねた。

恐らく綾小路は退学者が出ることによって生じるデメリットの可能性を提唱して堀北を説得しようとしていたのだろう。

にも関わらず、先んじてその可能性を否定されたのだ。心なしか彼の表情は不満そうだ。

「実力主義というものは、言い換えれば不良品にはとことん冷たいということだよ。ドロップアウトした残骸が優良個体の足を引っ張ることを認めるなんてこの学校はしないはずさ」

「……まだ確証はないだろう。それに、クラスポイントには0より下があるかもしれない」

「0って結果が、遅刻も私語もし放題の今の現状だよ？ このまま墮落し続けていったところでポイントは動かない。ならば、それは彼らがこのままフェードアウトしたところで同じだと思っただけだね？」

「例えそうだとしても、結論を出すのは早いと俺は思う。それに、須藤

たちだつてクラスに何かメリットを齎すかもしれない」

「へえ、面白いじゃない。そのメリットは何？ 言ってみなさい」

反論を続ける綾小路にそう尋ねたのは堀北だった。

「テストの点数だけでクラスの、生徒の優劣は決まらないってことはもう分かったはずだ。入学試験の点数は、恐らく須藤も池も山内もドングリの背比べだろう。でもアイツらはこの学校に入学できた。それは他の何かに秀でているってことじゃないのか？」

「……」

綾小路の問いかけに堀北は沈黙を以って答えた。

彼女が思い出しているのは水泳の授業で活躍していた須藤の姿。

彼が運動能力に秀でていることは言うまでもない。

「池だつてコミュニケーションには長けてる。要は単純な学力では計れない能力を備えてるってことだろ。もし仮に今後学力以外を計る試験があつたなら……それはアイツらが活躍し、クラスにメリットを齎すときってことだ」

「希望的観測ね。仮にそうだったとしても、彼らが満足のいく結果を出せる保証はないでしょう」

「でもだからといって今切り捨てるのはアイツらという武器をみすみす捨てるのと同義だ。今は後悔しなかつたとしても、いずれ後悔するときにきつとある」

綾小路と堀北。二人はお互いの主張をぶつけ合い、そして曲げない。

綾小路は須藤たちに可能性があると信じている。

反対に堀北は須藤たちに何の期待もしていない。

両者の考えはとことん平行線だ。

ならば、この場にいるもう一人はどうだろうか。

「まあ、保険はかけておいて損はないんじゃないかな？ バカと鋏は使い用と言うからね」

柚榔はそう言つて二人の間に割つて入った。

思わぬ援護射撃に綾小路は意外そうな顔で柚椰を見た。

対する堀北は裏切られたと思ったのか、話が違うとでも言いたげに柚椰を睨んだ。

「黛君、貴方さつき彼らのことは切り捨てるべきだつて——」

「俺は間引くこともときには必要、退学者が出てもポイントには影響ないだろうと言っただけだよ？ 須藤たちを切り捨てるべきだとは一言も言っていないさ。それに綾小路の言う通り、学力以外のスペックを計る試験があるということは俺も思っていたからね」

「！……やっぱり黛も気づいてたのか」

「勿論。学力以外で合格したのに、学校のカリキュラムでは学力しか計らないというのもおかしい話だろう？ 案外、夏休み辺りに無人島に放り出されて自力で帰ってこい、なんて試験もあるかもしれない」
「そんな無茶苦茶な試験、あるわけないでしょう……」

突拍子も無い発想に堀北は頭を抱える。

「君の兄さんが言っていただろう？ 『この学校は甘いところではない』と。ただ学力テストだけの学校であるならそんなことを言うかな？ もしそうだったとしたら、いくらでも抜け道があるだろう。個では踏破できない何かがあると、常識では考えられない何かがあると考えるのが自然だ」

兄の発言を持ち出されたことで堀北は今度こそ反論する材料を失ったのか黙り込む。

恐らく彼女の頭の中では先ほどの兄との出来事がリフレインしているのだろう。

彼女のその沈黙を、綾小路と柚椰は見守っている。

「……分かったわ。ひとまず彼らを切り捨てるのは保留にする。今後役に立つことを見越した上での救済措置として、今回だけ彼らの面倒を見ましよう。ただし、当然二人にも協力してもらおうからね。私だけに3人を押し付けるのは止めてちょうだい」

「俺に出来ることなら」

堀北がひとまず折れてくれたことに綾小路は胸を撫で下ろしながらそう答える。

「うん、俺も可能な限りやってみるよ」

柚椰もまた二つ返事で了承した。

こうして彼らは再び、須藤たちに勉強を教えるという方針で団結した。

「でも、問題はアイツらだよな」

綾小路は脳裏に須藤たち3人を思い浮かべる。

今日の出来事で、彼らが勉強に対して、堀北に対して悪い印象を持ったことは確かだった。

そんな彼らを今一度説得し、勉強会へ連れ出すことは出来るのだろうか。

「黛、もう一回榊田に頼むってことは出来ないか？」

「そうだね……榊田は了承してくれるかもしれないから問題ないとして、池と山内に関しては折れてくれると思うけど須藤がね……流石に堀北がいることを知れば、いくら榊田でも説得するのは難しいんじゃないかな？」

綾小路は柚椰に今一度榊田を使って須藤たちを誘い出すことは可能か聞いたが、どうやら難しいようだ。

「そもそも私は榊田さんが勉強会に参加すること自体遺憾なのだけだ」

堀北に関してはそもそも榊田が参加することが嫌なようだ。

「多少強引な手でもいいなら俺が須藤を連れてくるけど、どうする？」

二人が頭を悩ませていると、柚椰がふとそんな提案をした。

「出来るのか？ 須藤は他人の言うことを素直に聞くタイプじゃないだろ」

「そうね、あの単細胞な男がすんなり聞き分けるとは思えないわ」

綾小路と堀北は須藤の性格上、素直についてくるとは思えないようだ。

しかしそんな彼らに対し、柚椰はニコリと笑みを浮かべた。

「言葉で不可能なら彼の得意分野で語り合うしかないだろう？」

彼らは今一度説得を試みる。

大失敗に終わった勉強会の翌日、朝のホームルームが始まる前に柚椰は櫛田を呼び出した。

そして昨日堀北と綾小路との話し合いで決まった事柄について伝えた。

改めて勉強会を開くこと。そして昨日と同じように3人に声をかけてほしいということ話を話した。

「というわけで、もう一回お願い出来ないかな？」

「それは別にいいけど、須藤くんは簡単にはいかないと思うよ？ 堀北さんに教わるっただけで怒っっちゃうかも……」

「まあそれはね。昨日の今日でホイホイ釣られるほどバカではないだろう」

「……ほんつと、あの女心底ウザいわ。面倒かけさせやがって」

「本性出てる」

「はっ……!?! も、もうく堀北さんにも困っちゃうよねっ」

柚椰に言われて我に返ったのか、櫛田は辺りを警戒しながら猫を被った。

昨日までの大女優ぶりは何処へやら、あまりにお粗末な猫被りに柚椰は苦笑いした。

「なんというか、俺にバレてから仮面が緩くなっているんじゃないかな？」

「黛君の所為だよっ！」

「なぜ？」

「だ、だって、黛君にも裏があるって分かったら、つい演じるの忘れちゃうっていうか……ただでさえ黛君と一緒にいるの楽しいし、気兼ねしないし、仕方ないじゃん」

恥ずかしそうにボソボソと櫛田は恨み節を口にした。

彼女にとつて柚椰は最早友達以上に気を許せる相手なのだろう。

自分の本性を知っていても変わらさず接してくれる。
それだけでなく柚椰もまた、自分と同じように裏の顔がある。
櫛田にとつて、柚椰はやつと出会えた同類であり仲間なのだ。
つい本性を出して会話をしてしまうのも仕方ない。

「一緒にいて楽しいと思つてもらえるのは嬉しいけど、それで周りにバレたら本末転倒だよ?」

「だからバレないように黛君がちゃんと守つてよねっ」

「それは櫛田次第だね。君が俺に従ってくれる限り、俺も君を裏切らないし手放さない」

「――・じゃあ、私がちゃんとと言うこと聞いてれば、黛君は私の味方になつてくれるの?」

「勿論。昨日言つただろう? 俺は君のことを一番有能だと思つている。優秀な君を手放すわけがないじゃないか」

「じゃ、じゃあ、もし私と堀北さんが対立したら? それでも私の味方になつてくれる……?」

上目遣いで櫛田がそう尋ねた。

彼女は、柚椰が肯定してくれることを期待しているような、どうか肯定してくれと懇願しているような目をしている。

そんな彼女に対して、柚椰が返す言葉はただ一つ。

「ああ、もしそうなつたとしても、俺は櫛田の味方だよ」

「つ……!・ そっか、えへへ」

もし仮に櫛田と堀北が対立するような状況になつたとしたら、柚椰は櫛田に付く。

これは彼が彼女を従えたときから決めていたことだつた。

櫛田桔梗という人間は他人から求められることを何より悦として
いる。

それと同時に、彼女は誰かの一番になることを求めている。

誰かに大切にされることを心から願っている。

柚椰はそれを理解しているが故に、彼女の望む答えを投げたのだ。

(それに堀北が今の夢を目指すなら、櫛田程度は踏破してもらわないと困るからね)

Aクラスに上がるという堀北の夢。

それを実現するならば、クラス全体の力も勿論だがそれ以上に彼女自身が強くならなければいけない。

坂柳有栖という怪物がAクラスにいる以上、今のままでは間違いなく堀北は折れる。

柚椰は堀北に期待しているからこそ、櫛田の味方であることを望んだ。

「とりあえず、昼休みにでも誘ってみてほしい。綾小路と堀北も連れてね」

「綾小路君はいいにしても、なんで堀北さんまで？」

そう尋ねる櫛田の表情は、暗に堀北と一緒に行動することが嫌と言っているように見える。

「中心になって行動してるのが俺とその二人だからね。俺の代わりに一緒に行動してほしい」

「え、黛君は行かないの？」

「昼休みはちよつと行きたいところがあるからね。とにかく、嫌で嫌で仕方ないかもだろうが我慢してほしい」

「……今度買い物付き合つて。それで手を打つ」

櫛田はそう言つてそっぽを向いた。

恐らくそれが彼女なりの落とし所なのだろう。

可愛らしい要求に柚椰は笑みを浮かべて応じる。

「ああ、成功にしても失敗にしても、結果は連絡してほしい」
「分かった」

その言葉を最後に、二人は会話を切り上げて教室へ戻った。

昼休み、櫛田は言われた通り綾小路と堀北を伴って須藤たち3人を呼び出した。

すると程なくして有頂天気分の池と山内が須藤を連れてやってきた。

櫛田からの呼び出しということで浮かれていた彼らだったが、同席している堀北を視界に入れた途端に表情が強張る。

「呼び出してごめんね、ちよつと堀北さんから話があるって」

「な、なにかな？ 俺たち、なんかしたかな!？」

堀北からの話と聞いて池が身構える。

「3人とも、平田君の勉強会に参加する気はないの？」

「え？ 勉強会？ いや、だって勉強とかダルいし、平田はムカつくし、テスト前日に詰め込んだらなんとかなるかなって。中学の時もそれで乗り切ってきたし」

池の言葉に山内と須藤は頷く。

彼らは目下に迫る中間テストは一夜漬けで乗り切るつもりらしい。

「貴方達らしい考え方ね。けれど、このままじゃ退学になる可能性は高いわ」

「……相変わらず何様なんだよ、お前は」

堀北の言葉に須藤が噛み付く。

昨日の遺恨はしっかりと残っているようだ。

「一番心配なのは貴方よ須藤君。退学に対する危機感がなさすぎる」

「テメエには関係ねえだろ。いい加減ぶつ飛ばすぞ。俺は今バスケットで忙しいんだよ。勉強なんてテスト前にやりや十分だつつの」

「お、落ち着けて須藤」

沸々と怒りを露わにする須藤に思わず池が宥めに入る。

須藤の怒りに危機感を持ったのは櫛田もだった。

「ねえ須藤君、もう一回一緒に勉強しないかな？ 一夜漬けでも乗り切ることが出来るかもしれない。けど、ダメだったら大好きなバスケットも出来なくなっちゃうよ?」

「それは、そうだけど……俺はこの女の施しを受ける気はねえんだよ。昨日俺に吐き捨てた言葉は忘れちゃいない。まずは謝罪が先だろうが」

須藤は堀北に対して敵意以外の感情を持っていなかった。

彼自身、今のままではテストを乗り切ることが危ういということは理解できているのだろう。

しかしそれ以上に、須藤は堀北が自分に吐いた暴言が許せないのだ。

自分が入れ込んでいるものを、自分が目指している夢を嘲笑うようなことを言った堀北が。

そんな須藤に対し、堀北は勿論簡単に謝罪の言葉を口にはしない。

何故なら彼女は自分の言ったことは間違っていないと自負しているからだ。

「私は貴方が嫌いよ須藤君」

「なっ!？」

この期に及んで謝罪どころか火に油を注ぐようなことを堀北は言う。

「けれど今は、お互いに嫌い合っている場合ではないわ。私は私のために勉強を教える。貴方は自分のために勉強をすればいい。違うかしら?」

「そんなにAクラスに行きたいのかよ。嫌いな俺を誘ってまで」

「そうよ。そうでなければ、誰が好き好んで貴方達に関わると思っているの?」

一切取り繕わない堀北の一言一言に須藤はさらに苛立ちを募らせていく。

「俺はバスケットに忙しいんだよ。テスト期間でも、他の連中は練習を休む気配はねえ。面白くもねえ勉強してる間に、遅れを取るわけにはいかねえんだよ」

須藤がそう言うと、堀北は鞆から一冊のノートを取り出して机に広げた。

そこにはテスト当日までのスケジュールが事細かに記載されていた。

た。

「今から二週間、貴方達はまず平日の授業を死ぬ気で勉強しなさい」
「はあ？」

堀北の言葉に須藤は眉を顰めた。

池と山内も何を言っているのか分からずキョトンとしている。

「普段、貴方達は真面目に授業を受けていないわよね？」

「決めつけないでもらいたいね」

心外だとしても言いたげに池が口を挟む。

すると堀北は須藤から池へ視線を移した。

「じゃあ、真面目に取り組んでいるの？ 本当に？」

「スイマセン取り組んでないです。授業とか超退屈でボーツとしてます」

「池、お前折れるの早すぎだろ!？」

堀北の追求にあっさり降伏する池に山内がつっこんだ。

池の言葉を聞き、堀北はそれ見たことかと言わんばかりにため息をつく。

「要は貴方達は1日に、6時間以上もの時間を無駄に消費しているのよ。だったら放課後の1、2時間を拘束するよりもそっちを真面目にやったほうが有効よ」

「確かに理論的には正しいかもだけど……それは無茶じゃないかな？」

櫛田は堀北の方針に不安を感じていた。

それもそのはず。昨日だけでも須藤達の学力の底は知れた。

お世辞にも授業についていけるほどの学力があるとは言えないのだ。

そんな彼らに授業を真面目にやれと言ったところで無茶が過ぎるというのが櫛田の意見だ。

「授業の内容なんて俺ついていけねえよ」

「俺も」

「寧ろそっちの方がストレス溜まりそうだ」

池と山内、そして須藤もあまり気が進まないようだ。

「それだけじゃないわ。授業で分からなかったことは次の休み時間の間に復習してもらおう。私が貴方達3人に合わせた解答をまとめておくから。それを綾小路君と櫛田さんと私、あと今ここにはいないけど黛君を入れた4人で教えるの」

つまり休み時間は、堀北が用意した解答を基に復習を行うということだ。

確かにこの作戦ならば、休み時間を無駄無く活用して勉強することが出来る。

「でもよお、やっぱ間に合うとは思えねえよ。高校の勉強難しいしさ」

「そうそう、訳分かんねえつてのが正直な感想だわ」

池の弱音に山内が同調する。

「1時間の授業で学ぶことは案外少ないものよ。ノートにして1、2ページほど。そこから重要性の高いものだけに絞れば半ページの知識を詰め込むだけで済む。どうしても時間が不足する場合に限って、昼休みを利用するつもりよ。私は別に問題を理解しろとは言わないわ。頭にそのまま叩き込んで欲しいだけ。大切なのは授業の時は先生の声、黒板に書き出される文字だけに集中すること。ノートを取ることは一旦忘れてくれて構わないわ」

「は？ ノート取らなくていいのかよ？」

板書を写すという作業をしなくていいと言われ、須藤は不可解そうな顔をした。

「書きながら問題をやって答えを覚えるということとは意外に難しいものよ？ ノートだけ取って理解した気になって貰っても困るもの。物は試し。否定する前に実践してちょうだい」

「……やる気になんねえな。時間かけてやったところでそんな簡単に勉強ができるとは思えねえ」

「勉強に裏技なんてないわ。それは貴方の好きなバスケットだってそうでしょう？」

「……確かにそうだ、な」

どうやら須藤は僅かながらも堀北の言葉に耳を傾けるようになって

ているようだ。

「貴方のバスケットへの熱意を少しだけでも勉強の方にも向けてくれれば今はいいわ。これから先も学校でバスケットをやっていたいのなら、今貴方がすべきことは動き出すことよ」

それは須藤へ送る堀北なりのエールだった。

言葉こそ可愛げがないが、彼女はそれでも歩み寄っている方だということは明らかだった。

しかし、未だ須藤は堀北に従うのが癪なのか、中々首を縦に振らない。

その状況を見兼ねてか、綾小路がここで一石を投じた。

「なあ榎田、お前彼氏は出来たか？」

「え、ええっ!? い、いきなりなに?」

まさかいきなりそんなことを聞かれるとは思っていなかったのか榎田は大層慌てた。

心なしか頬も少し赤くなっている。

「どうなんだ?」

「い、今はいない、けど?」

綾小路の追求に戸惑いながらも榎田は素直に答えた。

「なら、俺が次のテストで50点取ったら、デートしてくれ」

「ええっ!?」

いきなりデートの約束を申し込まれるという状況に榎田は混乱している。

しかしそんな状況に黙っていられない男たちが今この場にいた。

「何言ってるんだよ綾小路! 榎田ちゃん、俺は51点取るから! 俺とデートしてくれ!」

「お前こそ何言ってるんだ! 榎田ちゃん、俺52点取るからデートしてくれ!」

割って入ってきたのは池と山内。

彼らもまた、テストの点数を材料に榎田にデートを申し込んだ。

俺も俺もと群がる男子2人を見て、榎田はようやく綾小路の発言の真意に気づいた。

「えーっと、困ったなあ……私、テストの点数で人を判断しないよ?」
「でも、勉強頑張るならやっぱご褒美欲しいし。見ての通り池と山内は乗り気だぞ? 何かご褒美があればやる気も出ると思う」

真意に気づいた櫛田は綾小路とそんなやりとりを交わす。

その最中も池と山内は櫛田に対して熱い視線を送っていた。

「ご褒美を下さいと言わんばかりに2人の目は輝いている。」

「じゃ、じゃあこうしない? テストで1番点数の良かった男の子と、その、デートするって……私、嫌いなことでも頑張って努力出来る人は好きだなっ」

天使のような笑顔で、櫛田は彼らにご褒美を与える旨を伝えた。

「うおおおおお! やる! やるやる! やります!」

「絶対高得点取ってやるから見ててくれよな櫛田ちゃん!」

池と山内は興奮のあまり叫び散らしている。

しかし、最後の一人、須藤に関しては――

「付き合ってらんねえ。俺もう行くわ」

須藤はそう言う足早にその場を去ろうとした。

まさか帰ろうとするとは思わなかったのか池が慌てて呼び止める

「なんだよ須藤! お前だって櫛田ちゃんとデートしてえだろ?」

素直になろうぜ!」

「は? 俺は別に……っつーかデートする時間があるなら俺はバスケットやってた方がいいわ」

どうやら須藤はクラスのアイドルとのデート権よりもバスケットの方がいいらしい。

根っからのバスケット少年ということなのだろうか。

彼はそう言い残すと、本当に帰って行ってしまった。

「なんだ須藤の奴、ツンデレか?」

「野郎のツンデレとか誰得だよ」

池と山内は須藤のノリの悪さに若干不満そうだ。

「やっぱり須藤君は中々納得してくれないね……」

「だ、大丈夫だつて櫛田ちゃん！ 後でもう一回説得してみるから！」
「アイツだつて本当はデートしたいはずだし、俺らに任せてくれ！」

悲しそうにする櫛田に池と山内は慌ててフォローする。

説得は任せろと言ひ残して、二人もまたその場を後にした。

「というか櫛田、お前つて結構酷いな」

去つて行く二人を見送りながら、ふと綾小路がそう呟いた。

「どうして？」

「テストで1番点数の良かった男子とデートする。これつて要は黛の一人勝ちだろ。アイツが半端な点数取るとは思えないし、アイツが1番じゃないとなると次点の高円寺とデートすることになる。お前は約束を守ろうとするかもしれないが、高円寺がデートを望むかは正直微妙だ。どう転んでも池と山内はご褒美を貰えない。鼻先に人參つけられて走らされてる馬みたいなものだろ」

「てへっ、バレちゃった」

目論見を看破された櫛田は悪びれるそぶりもなく頭をコツンと叩いた。

「何にせよ、3人のうち2人は懐柔出来たわけだし僥倖ね。櫛田さん、礼を言わせてもらうわ。ありがとう」

結果的に須藤こそ説得できなかったものの、池と山内は勉強に対してやる気になった。

その結果を加味してか、堀北は素直に礼を述べた。

まさか彼女が素直に感謝の言葉を口にするとは思わなかったのか、礼を言われた櫛田も横で見っていた綾小路も驚いている。

「い、いいよいよ！ 私なんかで役に立てたなら嬉しいし。それに、黛君にもお願いされちゃったからさ」

「そうか、そういうえば櫛田は黛に頼まれて今日来てくれたんだつたな。俺からも感謝する」

堀北に次いで綾小路もまた、櫛田に対して感謝の言葉を口にした。

「あ、そうだ。黛君に連絡しなきゃ」

櫛田はそう言うのとポケットから端末を取り出した。

彼女の言葉に堀北は首を傾げる。

「連絡？」

「うん、成功しても失敗しても、終わったらとりあえず連絡してほしいって」

「そう……やっぱり須藤君が折れないことは織り込み済みだったってことね」

「でも本当にどうしよう……須藤君がやる気になってくれる方法があればいいんだけど」

柚椰へのメールを打ちながら、櫛田は須藤の懐柔案を模索している。

しかし不安そうな彼女とは打って変わって堀北と綾小路は冷静だった。

「それに関しては黛君を信頼しましょう。そうよね綾小路君？」

「ああ、どうにかして連れてくる方法はあるってことは昨日言ったからな」

「え、そうなの？」

初耳だと言わんばかりに櫛田はキョトンとしている。

「明日の朝まで待ってみましょう。須藤君が参加すると決まったら本格的に始めるわ」

「ああ、分かった」

「う、うん！」

堀北の提案に、二人は首を縦に振った。

「では生徒会長、俺はこれで失礼します」

同時刻、柚椰はそう言っただけで生徒会室を出て行くつもりでいた。

昼休みに彼が行きたいと行っていた場所。

それはこの学校の生徒会室だったのだ。

目的はただ一つ、生徒会長である堀北学に会うためだ。

「黛、俺と契約した以上、約束は守ってもらうぞ」

去ろうとする柚椰の背に、生徒会長は言葉を投げる。

顔を突き合わせてはいないまでも、彼は鋭い眼光で柚椰を睨んでいた。

「分かっているとは思いますが、俺がお前に与えた情報はトップシークレットだ。無闇矢鱈に公開することは勿論、俺が情報の出所であることも伏せてもらう」

「分かっていますよ。心優しい先輩に教えてもらった、ということにします。今後とも、お互い持ちつ持たれつの良い関係でいきましょう」

「それと……俺がお前に命じたこと、ゆめ努力されるな」

そう言うのと生徒会長は一層鋭い目つきで柚椰を見据えた。

彼が柚椰に命じたことはそれほどまでに重要なことなのだから。

その声色と背中に突き刺さるプレッシャーに柚椰はカラカラと笑った。

「ええ、勿論忘れていませんよ。約束は守ります。貴方に言われた通り、一之瀬さんと妹さんは副会長の手から必ず守りますよ」

では、
と言いき残して柚椰は生徒会室を出て行った。

彼は学徒の王と契約する。

「こんにちは生徒会長、昨日ぶりですね」

綾小路と堀北と櫛田が須藤たち3人を説得している頃。

生徒会室を訪れた柚椰は開口一番そう言った。

室内には彼の言う通り、生徒会長である堀北学が一人で事務作業をしていた。

堀北会長は昼休みの来客、それも相手が昨日出会った柚椰ということもあり作業を中断して彼と目を合わせた。

「黛か、何の用だ？ 生徒会への立候補、ということでもないんだろう？」

「話が早くて助かります。昨日の夜に貴方が起こした暴行未遂についてなんですけど、実は一つ言い忘れていたことがありますね。まずはこれを見ていただければと」

柚椰はそう言って端末を操作してとあるデータを再生した。

それは昨日の夜、寮の近くで会長が堀北をコンクリートに叩き付けようとしたときの映像だった。

それだけではなく、会長が綾小路を執拗に攻撃している場面、そして柚椰に殴りかかって来た場面が映し出されていた。

「……」

会長は黙って動画を見ている。しかしその表情は普段とは異なり、驚いているようにも見える。

「実は端末のカメラ以外でも動画を撮っていたことをすっかり忘れていました。動画以外にも、貴方が妹さんに吐いた暴言とも取れる音声も録音してあったんです」

「……何が目的だ？」

白々しくヘラヘラと笑う柚椰を会長は射殺さんばかりに睨みつけた。

柚椰が昨日すんなりと動画を消させたのはブラフであり、本命はこ

のデータを使つてこちらを強請る魂胆だったと気づいたのだ。

「ポイントか？ それとも、お前を生徒会に入れるよう斡旋しろとも言うつもりか？」

「いえいえ、流石に俺も貴方の弱みに付け込んで金を巻き上げるようなことはしませんよ。ただ、どうしてもデータを闇に葬りたいと仰るのなら、一つお願いがありました」

「言ってみろ」

会長が促したことで、柚椰はニヤリと笑みを浮かべた。

「この学校の全生徒の入学以前の経歴や入学後の情報が載っているデータを頂きたいんですよ」

「……ふざけているのか？」

要求を聞いた会長はこれまで以上に鋭い眼光で柚椰を睨んだ。

同時に彼から吹き出すのは殺意にも似た敵意。

当然だ。柚椰が要求しているのは要は生徒たちのプライバシーの塊。

それは学校側と、生徒会長である彼しか知らない、知ってはいけないものなのだ。

無闇に口外することは勿論、情報を渡すなど到底許される行為ではない。

その非常識にもほどがある要求を呑むわけにはいかないのだ。

しかし彼の殺気を受けて尚、柚椰は笑みを絶やささない。

「おや、では言い方を変えましょうか——」

「——妹さんを危険な目に遭わせたくなければ、俺に情報をください」

「っ！……それはどういう意味だ？」

会長が一瞬息を呑んだのを見て柚椰はこれまた可笑しそうに笑っ

た。

「おや、動揺しましたね。やはりいくら冷たく接しているとはいえ、妹さんは大事ということですか」

「御託はいい。どういう意味かと聞いている」

柚椰の茶々を切り捨てるように会長は続きを促す。

「昨日の一件ですよ。俺も最初はてっきり貴方は自分の名誉が汚れるから堀北と兄妹という事実を隠そうとしたのかと思っていました。けれど、それにしても彼女にアドバイスとも取れる言葉を残している。彼女がAクラスに上がりたいという夢を否定しながらも俺と綾小路を頼れと暗に忠言していた。ならば何故貴方は自分と兄妹であることを隠そうとしたのか。結論を言えば、デメリットが生じるのは貴方ではなく堀北の方だ。貴方は自分と彼女が兄妹だと知られることで、彼女に何らかの危険が生じることを恐れたのではないですか？」

「ふん、くだらん妄想だ。何故俺が不肖な妹を気になさなければならぬのだ」

「分かっているはずですよ。貴方は自分のことを狙っている、自分を疎ましく思っている人間に心当たりがあるのではないですか？ 一般生徒からの支持は厚く、教師からの人望もある貴方を蹴落としたいと考えている人間。考えられるとすればそれは——同じ生徒会の人間、ですよね？」

「……」

その追求に会長は無言を貫く。

「沈黙は肯定ですよ。大方察するに、それは次期会長のポストに就くであろう人間。現生徒会副会長の南雲雅、ですか？」

「……昨日お前を面白い男と言ったが訂正しよう。お前は食えん奴だ」

会長は暗に肯定の意を示した。

そして背もたれにゆっくりと寄りかかると、大きく息を吐き出した。

「お前の言う通り、俺を蹴落とさんとしている人間は副会長の南雲だ。俺とアイツは根本的に思想が異なるからな。このままアイツが生徒会長に就任すれば、間違いなくこの学校の秩序は乱れる。俺や歴代の生徒会長が築き上げてきたものを、アイツは跡形もなく壊すだろうということとは俺も感じていた」

「貴方がそれほどまでに危険視するということは、件の副会長は革命でも起こすつもりですか？」

「アイツが掲げているのは究極の実力主義。これまで以上にこの学校を弱肉強食に変えるつもりなのだろう。強者は勿論アイツ自身。弱者は皆アイツに淘汰され、搾取され、全てを失うだろう」

「随分と物騒ですね。よくそんな問題児が副会長にまでなれたものだ」

「実力主義のこの学校において、アイツの品格などさして問題ではない。現にアイツは優秀であり、その行動には確たる自信を持っている。だが、俺に言わせればアイツのその絶対的な自信こそが危険なのだ。たとえ悪逆非道な暴君だと言われようと、アイツはそれを絶対的な正義であると疑わない。俺は、いくら生徒会長とはいえ独裁政権のようなことをしようとするアイツを見過ごすことはできないのだ」

「その彼が、貴方の兄妹である堀北を自陣に引き入れるかもしれない。それを危惧しているということですね？」

「鈴音がそう簡単に誰かに従うような人間でないことは俺が一番よく分かっている。だがそんなアイツだからこそ、南雲との相性は最悪なのだ。南雲は自分が気に入った人間ならば、どんな手を使ってでも手に入れる。たとえばそれが非道なことであろうと、彼はそれを正義だと自負しているのだからな」

「引退した貴方は生徒会長としての権限を失い、ただの一般生徒に戻る。あとは自分の息のかかった人間を使って貴方を囲い込み、身柄を拘束する。貴方に憧れている堀北は、貴方の身に危険が迫っていると脅されれば屈さずにはいられない。結果、彼女は南雲に従わざるを得ないということですか。随分と強引だ」

「俺のことなど捨て置けと言つても鈴音は聞かないだろう。南雲は何

人もの女生徒と関係を持っているが、その全てを私物と呼称している。いくら不出来な妹でも、家族が私物として扱われることは我慢ならん」

「いいお兄さんじゃないですか。といつても、彼女自身は貴方のことを尊敬している反面恐れてもいるみたいですが」

「ほげげ。生まれつきこうなのだ。今更歩み寄ることなど性に合わん」

会長はそう言つてそつぽを向くが、その眼差しはこれまでとは全く違う優しい目をしていた。

彼は本心では妹を大切に思っているのだろう。

だがそれを素直に表に出すことができないが故に冷たく当たる。

不器用と言う他無いが、それは紛れもなく兄妹愛のそれだった。

「とにかく、貴方は南雲の勢力をこれ以上大きくさせたくない。加えて、彼が会長に就任した際に暴拳に出ないよう今のうちに力を削いでおきたいということですね？」

「その通りだ。既に生徒会に立候補してきた1年もいたが、南雲の手にかかる恐れのある者は既に落とした」

「Bクラスの一之瀬さん、ですか」

柚椰が口にした名前を聞くと、会長は僅かに口角を上げた。

「聡いな。南雲は美しい女とあればすぐに声をかけてくることは予想できていた。俺の代で生徒会に入ったとあれば、彼女に声をかけてくることは間違いない」

「貴方の物を奪うということにも快感を覚えるから、ですね？」

「俺と反目している以上、彼女を奪うことは俺への見せしめにもなるからな。勿論、俺は自分についてきてくれてくれる者たちを所有物と思つたことは一度もない。だが南雲はそうは思わないだろう。大方、他人の女を寝取る間男のような気分にもなるはずだ」

南雲に対する辛辣な発言に柚椰は声を出して笑った。

「ははっ、いくら危険視しているとはいえ、副会長にそこまで言うとは貴方も本気ですね」

「これ以上、アイツを付け上がらせるわけにはいかんのでな。だが俺が一之瀬を落とすとしても、既に彼女が生徒会に立候補したという情報は出回っている。結果として、いずれ南雲に声をかけられることは明白だ」

「では貴方が目下危惧しているのは妹さんのことだけでなく一之瀬さんのことも、ということですか」

「肉親であろうとなかろうと、この学校に入学してきた以上俺にとっては大切な生徒だ。易々と毒牙にかかることを看過できるわけないだろう」

「理想の上司ですね貴方は。支持率の高さも納得だ」

「世辞はいい。それで、これを聞いてお前はと言うのだ？」

そう言つて会長は柚椰をまっすぐ見つめた。

その目は敵意の目ではなく、柚椰がどう行動するかを問うような、何かを期待しているような目だった。

柚椰はそれを理解したからこそ、今までのヘラヘラとした態度から一転して真面目な顔つきになった。

「今の話を聞けば、流石に俺もデータの形に情報を寄越せとは言いませんよ。条件を一つ加えましょう。情報を頂ければ、貴方のそのお願いを聞くことを約束します」

「ほう？」

「南雲の戦力を削ぐこと、そして貴方の妹さんと一之瀬さんが彼の手にかかることを阻止する。情報を頂いた対価として、俺はこれらの依頼を達成するよう動きまます」

「出来るというのか？ お前に」

会長の声色は柚椰のことを否定するような冷たいものではなく、本当に可能なかと試すようなものだった。

その問いかけに対して、柚椰は不敵に笑った。

「そこは信頼していただく他無いですね。入学してまだ間もない1年生の俺にそんな大それたことが出来るのかどうか。全ては貴方が俺をどれだけ高く買っただけにかかっています。ですが、協力を惜しまないことは約束しますよ。俺としても、貴方が会長である今

の方が居心地が良いことは確かなので」

「……いいだろう。その契約に応じる」

暫し思案した後、会長は柚椰との契約に応じた。

その言葉に、言質を取ったと言わんばかりに柚椰は笑みを深める。

「では交渉成立ということだ」

柚椰はそう言うのと端末に入っていた昨日の映像のデータを全て消去した。

そして会長に端末を渡してデータが残っていないことを確認させる。

その際に、会長は柚椰の持つプライベートポイントを見たが、さして驚いてはいなかった。

「生徒の情報に関しては、後で端末に送って頂ければと。連絡先を交換して頂いてもよろしいですか？」

「ああ、構わん」

二人は連絡先を交換し、いつでもコンタクトが取れるようにした。

「頂いた情報は勿論基本的に公開はしませんし、貴方から頂いたということも伏せさせていただきます。ただ、場合によっては貴方の名前を使うかもしれないということだけ留意して頂ければ」

「一之瀬の説得のときにか？」

会長がその発想に至ったことに柚椰は楽しそうに笑みを浮かべた。

「流石、貴方も十二分に聡いですよ。俺が貴方に依頼され、貴方から情報を受け取ったという前提は彼女を説得する上で必須ですから。彼女は貴方に憧れて生徒会に立候補したんでしようし、貴方が身を案じているということを告げれば納得してくれるでしょう」

「随分と人の感情を熟知しているようだな。副会長がお前のような人間だったなら俺も安心だったと今になって思う」

先んじて作戦を立てる柚椰に会長は感心していた。

そして、次期会長が柚椰のような人間であつたならどれだけ安心できたかという意味のない仮定に頭を巡らせる。

会長の言葉がむず痒いのか、柚椰は困ったように笑った。

「ご冗談を。俺みたいなのは精々裏で動く程度がちょうど良い。表

立って人の上にいるべきなのは、貴方のような人だ。貴方とは今後とも、良い関係を築いていきたいですね」

「奇遇だな、俺もだ。お前のような人材とは今後も有益な関係を望む」

二人は笑みを浮かべながら互いを褒め称えている。

お互いに相手を高く買っているが故に、今後も自分の利益になるような関係を望んでいた。

「近いうちに一之瀬さんに接触します。彼女が良い方へ転んでくれた場合は連絡しますので」

「ああ、頼む」

「では、この学校の未来のために、お互い尽力しましょう」

「ふん、言われるまでもないがな」

こうして二人は互いに利用し合う関係になった。

彼は今後の仕込みに奔走する。

放課後、Dクラスの面々は各々行動を開始した。

大多数の人間は中間テストに向けた勉強会に参加するために平田の元へ集まってく。

そして彼らの輪に入ろうとしなかった池と山内、そして沖谷は綾小路と堀北のところへ行った。

しかしごく僅か、そのどちらの輪にも入り込むことを躊躇うあまり勉強会に参加しない者もいた。

彼らは独学でなんとか乗り切ろうとしているのだろう。

テストの不安よりも、大勢の人間の中に溶け込むことの方が彼らにとってはストレスを感じるのだ。

結果、彼らは足早に教室を出ていった。

その光景を、綾小路たちは遠目から見ていた。

「やっぱり漏れる奴らはいるか……」

「うん、そうだね……出来ればあの子達も一緒に勉強できればいいんだけど」

綾小路がボソツとつぶやいたのを櫛田が拾った。

「いいっていいって！ どうせ自分の力でなんとかするだろ？」

「だな、それよか俺らは堀北ちゃんや櫛田ちゃんに教わってガシガシ勉強して良い点取ろうぜ！」

池と山内は昼休みに櫛田から提示されたご褒美で完全にやる気になっっているようだ。

結果、昨日とは別人のように勉強に対して意欲を示している。

「俺も教えるんだが……」

ナチュラルに省かれていることに綾小路がツツコミを入れる。

「大丈夫だ綾小路、俺は君の味方だよ」

柚椰がニコニコしながらフォローした。

「ところで池君、山内君、結局須藤君は説得できたのかしら？」

「あー、それね……」

「見ての通りだよ」

堀北に問われた2人は疲れたような顔で一点を指差した。

そこにはいそいそとカバンに荷物を詰めて教室を出て行く須藤の姿があつた。

「ご覧の通り、説得は無理だったって訳」

「自分にはバスケがあるから勉強なんていい、ってさ。バスケバカって言うよりは意地張ってるだけだなありゃ」

「で、でも須藤君だって赤点取ったらバスケツトどころじゃないって分かってるはずだよ？　なのはどうして……？」

「榎田ちゃん、俺らは榎田ちゃんのご褒美が欲しくて勉強する気にならないよ。俺らは榎田ちゃんのご褒美が欲しくて勉強する気にならないよ。俺らは榎田ちゃんのご褒美が欲しくて勉強する気にならないよ」

「ああ。アイツ、マジでバスケでプロになろうとしてるからな。バスケ部の奴らに置いてかれるかもっていう焦りもあるだろうし、勿論勉強への不安もある。多分今アイツは、自分でもどうすりゃいいか分かってねえんだと思う」

榎田が漏らした疑問の声に池と山内は各々持論を述べた。

それは彼らが須藤の友達だからこそその発言だった。

同じ赤点組同士通じ合うものがあるのだろう。

「放課後勉強しなくてもいいって言われても……？」

「男の意地なんだろうな〜いや、熱いね〜」

「つーか、マジであのガタイでツンデレとか誰得だったの」

しようがない奴だと言いたげに2人は笑った。

2人にとって須藤は大切な仲間なのだろう。

しかし状況は決して楽観視できるものではない。

「だが、このまま手を拱いていると本当に須藤はボーダーを割ることになるぞ」

「そうね……黛君、例の作戦はいつ決行するのかしら？」

「そうだね、彼の部活終わりにでもやるとしよう」

堀北に聞かれた榎田はカラカラと笑いながら答えた。

そのやりとりに池と山内は首を傾げる。

「作戦？」

「なんだ、黛はなんか考えてんのか？」

「私も聞きたいなっ」

櫛田もまた、未だ聞かされていない柚椰の作戦とやらの興味津々と
いった様子だ。

「部活終わりに話し合いに行つてくるだけだよ。まあ、難航したら強
硬手段に出るけど、つと——じゃあ俺はちよつと行くところがあるか
ら」

柚椰はそう言うのと鞆を肩に掛けて椅子から立ち上がった。

「えっ、行つちやうの？」

まさか出て行くとは思わなかったのか櫛田はキョトンとしている。

「勉強会は須藤が参加すると決まつてからだからね、そうだろう堀北
？」

堀北はその問いに頷く。

「そうね、先に始めてしまうことも勿論出来るわ。けれど、本格的にや
るからにはやっぱり足並みを揃えて事に向かったほうがいいわ」

「堀北から足並みを揃えるなんて言葉が出るとは……」

「綾小路君、余計な茶々入れはしないでくれないかしら？ 今のは言
葉の綾よ」

「まあそういうわけだから、池たちも今日は自由に過ごしていて構わ
ないよ。遊びに行つてもいいし、3人に初歩的なことだったら教わつ
て勉強しておくのもアリだよ？」

柚椰にそう言われた池と山内は目を輝かせて櫛田に群がった。

「マジで？ じゃあじゃあ、早速櫛田ちゃん教えて！」

「だな。先に知識蓄えて、後で来やがった須藤の奴をビビらせてやろ
うぜー！」

どうやら2人は完全にスイッチが入っているようだ。

遊びに行つてもいいと言われているにも関わらず、迷うことなく勉
強を選択した。

「ご褒美云々もそうだが、彼らは須藤がいずれこちらに加わると信じ

ているのだろう。

だからこそ、彼が参加したときに少しでも驚かせてやろうと考えているのだ。

2人に詰め寄られて櫛田はオロオロしている。

その光景を綾小路たちは傍観していた。

「櫛田効果は絶大だったな」

「それもそうだけど、1番は2人が須藤を信じているからだろうね」

「友情ってことかしら？ ……私には分かりかねるわね」

「そうかな？ 堀北なら分かると思うけど。勿論、綾小路も」

柚椰にそう問われた2人は首を傾げた。

「だって二人とも、俺が須藤を連れてくると信じてくれているだろう？」

「――！ そうね、確かに」

「ああ、お前ならなんとかなるって俺も信じてる」

2人は微笑みながら同意した。

そして柚椰もまた、彼らの信頼に応えるように笑顔を浮かべる。

「ありがとう、じゃあ後は任せるよ」

「何処へ行くのかしら？」

「ふふっ、ちよつと今後のための下準備、かな？」

堀北の問いにはぐらかすように答えながら柚椰は教室を出ていった。

その後ろ姿を見送りながら堀北と綾小路は先の柚椰の発言を振り返った。

「下準備ってどういうことかしらね？」

「普通に考えれば、テストに向けて何か仕込もうとしてるってことだろう。あるいは、Aクラスに上がるために何か情報を集めてるのか。どっちかだな」

「つくづく侮れないわね黛君は。同じクラスで良かったわ」

「同感だな。上のクラスに居たら厄介な敵になってたかもな」

2人は柚椰の有能さに感心する反面、彼が敵に回らなかったことに胸を撫で下ろした。

教室を出た柚椰は悠々と廊下を歩いていった。

彼が向かう先は、これからのための仕込みを行う上で必要な相手が居る場所。

(情報は得た。あとは目ぼしい生徒に当たってみるだけだ)

生徒会長から全生徒の情報は午後の授業の休み時間に端末に送られてきていた。

柚椰はそれに目を通し、声をかける生徒を既に選出していたのだ。

これから会うのはまず1人目、1番交渉の成功率が高い相手だ。件の生徒が居たのは図書室だった。

彼はテーブルの一角に腰掛け、机に教科書とノートを広げている。誰がどう見ても勉強中といった様子だ。

「2—D、後藤先輩ですよね？」

「は？ ……誰だお前」

柚椰に声をかけられたその男子生徒は鬱陶しげに顔を上げて応対した。

勉強に集中していた所為か、その声色は少し不機嫌だった。

「初めまして、1—Dの黛です。隣いいですか？」

「好きにしろよ。つつーかお前、あの噂のDクラスなんだな」

先輩から了承を得ると、柚椰は隣の席に腰掛けた。

柚椰がDクラスと名乗ったことで、先輩は少し柔らかい声になった。

学年は違えど、同じDクラスという事に仲間意識を感じたのだらう。

加えて、先輩が口にした噂という単語。

それは柚椰のクラスがクラスポイントを0にしたという噂のことを指している。

ては最悪です。遅刻も私語もし放題。授業中に携帯を弄るのなんて日常茶飯事ですよ」

これも嘘だ。

今現在、Dクラスは皆行動を改め、真面目に学校生活を送っている。しかし、敢えて状況を悪く伝えることで相手の同情を買うという作戦だ。

「酷いなそれは……少し同情する」

結果、案の定先輩は柚椰に対して同情するような目を向けている。

その表情を見て、柚椰は釣れたと確信した故に交渉に入った。

「そこで、同じ志を持って勉強に取り組んでいる先輩を見込んでお願いがあるんです」

「なんだ？ 言ってみろ」

「1年生のときに受けたテストの過去問を譲ってはくれませんか？」

そう言うとき先輩は少し考え込んだ。

しかし嫌な顔はしていないため柚椰はさらにごり押す。

「勿論タダでは言いません。それ相応のポイントはお支払いしますよ。先輩も、馬鹿な奴らの所為でポイントにお困りでしょう？」

「ううむ……確かにそうだな」

柚椰の誘惑に先輩は大きく揺れた。

確かに柚椰の言う通り、彼はポイントには困っている。

いくら自分が頑張ったところで、周りの人間によってDクラスのクラスポイントは減らされていた。

支給されるポイントが少ないと、当然やれることにも制限がかけられる。

束の間の息抜きである娯楽でさえポイントの所為で満足に出来ないのだ。

「……いくらなら払える？」

「小テスト、そして定期テスト5教科合わせて8万でどうですか？」

「そ、そんなに貰っていいの？」

予想外の額に先輩は大層驚いていた。

1万や2万であれば断っていた。

4万や5万であれば即決していた。

しかし柚椰はそれよりも遙か上の額を提示してきたのだ。

ここまでの好条件とあれば飛びつかない手はない。

がしかし、本当に貰っても良いのかという躊躇いもあった。

「勿論、後藤先輩だからこそですよ。学生としてあるべき姿で勉強に打ち込む先輩を俺は尊敬しています。だからこそ、この額はその敬意の形と思って頂ければ」

「うむ、そうか……よし、俺も君のような後輩は好きだ。契約するよ」

柚椰の言葉に気を良くしたのか、先輩は満足気に頷いて承諾した。

「ありがとうございます。では、番号と連絡先を教えてくださいませんか？」

「ああ、勿論だ」

先輩は意気揚々と端末を取り出すと、柚椰に番号を教えた。

それを見て、早速柚椰は先輩に8万ポイントを支払った。

「過去問は今日の夜にでも送ってください」

「分かった。君もテスト頑張れよ」

先輩は完全に柚椰を一後輩として可愛がることを決めたようだ。

その信頼に柚椰は笑顔を浮かべる。

「ええ、それともう一つ、先輩に良い話があるんですが」

「なんだ？俺に出来ることならなんでも言ってくれ」

先を促す先輩に柚椰は続きを語った。

「もしこれから先、学校内で何か問題が起こった場面に遭遇したとき、動画を撮っていてほしいんです」

「動画を？ どうしてそんなことを」

「誰かが喧嘩をしているとか、誰かが悪いことをしているとか、なんでもいいんですよ。男子が女子を部屋に連れ込んでいたとか、逆も然りです。そういった場面に遭遇したときに撮った動画を、後日俺に送ってください。内容に応じてポイントをお支払いします。目下欲しいのは……副会長さんの動画、ですかね？」

「……な、南雲のだと……!?!」

柚椰が口にした副会長という言葉に先輩は慄いた。

南雲という名に相当怯えているのは明白だ。

その表情はやりたくないという感情が前面に出ていた。

「別に副会長に逆らえと言っているわけではありませんよ。あくまで先輩は偶然その場に遭遇して、偶然動画を撮ってしまった。そしてそれをたまたま仲の良い後輩である俺に送ってくれた、というだけです。勿論、先輩から貰ったということは絶対に秘匿にします。貴方が彼にマークされることはありませんから安心してください」

「……ほ、本当に俺からの情報だつてことは伏せてくれるんだな？」
「勿論です。副会長さんの情報は貴重ですからね。一般生徒の情報よりも高いポイントをお支払いします。一般生徒の動画なら2万、副会長さんの動画なら最低6万はお支払いします」

「ろ、6万ポイント……」

提示された額に先輩はゴクリと唾を飲んだ。

危険な橋を渡るとはいえ、その額はあまりに魅力的だった。

そして柚椰は秘密を守ると約束してくれた。

ならば、その提案に乗ってもいいのではないだろうかと先輩は思った。

柚椰は先輩がやる気になってくれたと確信したのか席を立った。

「では、乗り気になって頂けたようなので俺はこれで失礼します」

「お、おう、動画がもし撮れたら送る。そのときはポイントを頼むぞ」

「ええ勿論。先輩とは今後とも良い取引をしていきたいので」

先輩に笑顔でそう言い残し、柚椰は図書室を出ていった。

「3—D、諏訪原先輩ですよね？」

「……なに？　なんか用？」

図書室を出た柚椰が次に向かったのは敷地内のとあるカフェ。目的は店内の一角でケーキと紅茶を楽しんでいた女生徒だった。ティータイムに水を差されたことで、先ほどの先輩同様不満そうに應對していた。

「実は、先輩を見込んでお願いがあるんですが」「いきなり何？　っていうか君誰」

藪から棒に何だとも言いたげに先輩は素っ気ない。しかし柚椰は朗らかな笑みを絶やさなかった。

「1-Dの黛柚椰っていいいます。よろしくおねがいます」

「ん、それで？　その黛君は一体何を頼みに来た訳？」

「単刀直入に言うと、1年生のときに受けたテストの過去問を譲って頂きたいんです。勿論、相応のポイントはお支払いしますよ」

「ふーん」

紅茶を啜りながら、先輩は柚椰の話聞いた。

そしてティーカップを置くと、つまらなそうにそっぽを向いた。

「会ったばかりの君にそんなこと頼まれてOKするのもね、別に私、ポイントに困ってる訳じゃないし」

先輩のその発言に柚椰は声を出して笑った。

「はははっ、それは無いでしょう」

「……何？　何が言いたいのか」

「先輩、散財癖が酷くてクラスメイトはおろか部活の後輩たちにまで借金してますよね？」

「——っ！　ど、どうしてそれを……」

凶星だったのか先輩は冷や汗を浮かべている。

「返す当てもなく、友達だから、先輩だからって理由で踏み倒してますよね。貴女にポイントを貸した生徒から聞きましたよ？　随分と強引に巻き上げられた、って」

「くっ……！」

柚椰はまたしても嘘を挟んだ。

彼女にポイントを貸した生徒から聞いたという嘘。

それは彼女を動揺させ、判断を鈍らせる。

「先輩も自分の立場が危うくなってるんじゃないですか？ 借金抱えて返すつもりもない人間が、周りからどういう目で見られるかは想像に難くない」

「……」

柚椰の言葉に心当たりがあるのか先輩は無言で俯く。

恐らく既に彼女は周りから白い目で見られ始めているのだろう。

しかし、それを打開する策が彼女にはない。

ポイントを返す当てがないため彼女は借金を帳消しに出来ない。

優雅にティータイムを楽しんでいたのは、つまるところ強がりだったのだろう。

弱る先輩に、柚椰はニヤリと笑みを浮かべた。

「でも、俺はそんな先輩だからこそ、この交渉を持ちかけたんですよ」「どういうこと？」

「おや、気づきませんか？ この取引において先輩にデメリットは何一つないんですよ？ 貴女はテストの過去問をただ俺に送るだけ。別に何かを失うことはない。しかし、俺はその対価としてポイントを貴女に支払う。つまり、貴女は使うこともない過去の遺物を差し出すだけでポイントが手に入るわけですよ」

「た、確かに」

先輩は柚椰の言葉に納得しているのか徐々に顔を綻ばせた。

その表情から柚椰は彼女が取引に乗ってくると確信した。

「お支払いするポイントは小テスト、そして定期テスト5教科合わせて8万です」

「そ、そんなに……？ で、でも払えるんでしょうね?! 貴方あのDクラスでしょ?」

「どうやら先輩の耳にも今年のDクラスは最悪だということは伝わっているらしい。」

クラスポイントが0になり、ポイントが支給されていないはずのクラスに所属している柚椰。

そんな彼が本当にそんな額のポイントを支払えるのか先輩は疑っているのだ。

しかし先輩に尋ねられても尚、柚椰は自信満々な笑みを以って答える。

「ご心配なく。それなりに蓄えはありますから。もし信用できなければ、過去問を受け取る前に半額の4万だけでも先にお支払いしますよ？」

「……そこまで言うなら、どうやら本当みたいね」

先輩は柚椰の表情から、彼の言うことが嘘偽りではないと信じたらしい。

「いいわ、その取引乗ってあげる」

「ありがとうございます。では番号と連絡先を頂いてもよろしいですか？」

「はいはい」

先輩はテーブルに備え付けられている紙ナプキンを手に取ると、そこに番号と連絡先をボールペンで書き込んだ。

柚椰はそれを受け取ると、端末に彼女の連絡先を登録して彼女へ8万ポイントを支払った。

「え、先に払ってくれるの?」

先輩は自分の端末にポイントが支払われたことを確認すると、その支払われた額に驚いていた。

「交渉に乗ってくださいだった優しい先輩への細やかな対価ですよ。過去問は今日の夜にでも送ってください」

「あ、ありがとうございます……」

にこやかな笑顔でそんなことを言う柚椰に先輩は毒気を抜かれたのかしおらしい態度をとっていた。

彼女もまた、柚椰のことを信用したようだ。

「では、更にポイントを稼ぐ良い話を。これは諏訪原先輩にだけですよ?」

「わ、私にだけ……」

その甘美な響きに先輩はゴクリと唾を飲んだ。

間違いなく彼女がその取引に応じると確信している柚椰はニヤリ

と笑った。

「ええ、方法は至って簡単です。――」

彼は図書室で出会った先輩に話したのと同じ内容を、目の前の先輩に語り聞かせた。

今後、校内でのアクシデントに遭遇した場合に動画を撮ってほしいということ。

そしてその動画を送ってほしいということ。

動画の対価としてポイントを支払うということを伝えた。

目下欲している動画は生徒会副会長の動画であることも……

「ふ、副会長の動画って……」

目の前の先輩もまた、副会長の名を聞いて怯えていた。

どうやら南雲雅という名は上級生の間でさえ恐れられているようだ。

「先輩からの情報であることは勿論伏せさせて頂きます。決して先輩にはデメリットがないことはお約束しますよ?」

「ほ、ほんとに……?」

「ええ、副会長のものなら動画1つで最低でも6万ポイント。悪い話ではないでしょう?」

「そうね……分かったわ」

「では、よろしくお願いしますよ」

了承の意をもぎ取ったことに満足すると、柚椰は席を立ち、カフェを後にした。

その後も部活動終了時刻になるまで、柚椰は敷地内にいる先輩に次々と声をかけて回った。

しかし先の2人とは異なり、今度は動画の件のみを交渉するために

……

彼は不良少年を手懐ける。

時刻は午後7時。既に陽は沈み、辺りは暗くなっていた。

既に殆どの生徒たちは寮へ帰宅しており、校内に残っているのは部活に所属している生徒のみだ。

一通り用事を済ませた柚椰は目的の人物に出会うために体育館へと足を踏み入れた。

体育館の中に入ると、目当ての生徒はすぐに見つかった。

「ふっー」

既に部活は終了しており、部員も帰宅しつつある中、その生徒は体育館に残っていた。

彼は熱心にバスケットボールを突き、汗を流している。

素早いドリブルでゴールまで向かうと、彼はその体躯を駆使して大きく飛び上がり、ボールをリングへ叩き込んだ。

その一連の動作は鮮やかと言う他なく、彼のバスケットセンスが確かなものであることが伺えるものだった。

「やあ、居残り練習とは精が出るね、須藤」

「ああ？ ……って、なんだ黛か」

いきなり声をかけられたことに驚き半分怒り半分と言った様子で須藤は声のする方へガンを飛ばした。

しかし相手が柚椰だと分かると直ぐにその怒りを鎮めた。

「何の用だよ？ 言っとくが、俺は勉強会なんざ参加しねえぞ」

須藤は柚椰が勉強会に誘いに来たと思ったのか、再びボールを突き始めた。

その態度に柚椰は可笑しそうに笑みを浮かべる。

「昨日堀北にボロクソに言われてムカついたかな？」

「当たり前だろ。自分の夢を愚かだなんだと言われてヘラヘラしてられる方がどうかしてるぜ。っつーか、マジであの女ムカつくぜ……！」

人のこと好き放題馬鹿にしやがってよ」

須藤は昨日の一幕を思い出したのか怒りを沸沸と滾らせ始めた。

彼はまだ堀北のことを許していないのだ。

そんな状態で、勉強を教わるというのは彼のプライドが許さないのだろう。

「人間は自分の理解できないことには大概無神経なことを言うものだ。彼女にとって、プロバスケット選手になるという夢は理解できないものだったということだろう」

「俺はあの女のそういう所がムカつくんだよ。周りは皆自分より劣つてると思つて見下してやがる。っていうか、俺に言わせればAクラスに上がるつーアイツの夢の方がどうかしてると思うがな」

「とても非現実的だ。そんな夢を掲げて馬鹿なんじゃないか、と思つているのかい？」

「ああ、どう考えても無理だろそんな夢。皆で力を合わせてAクラスに上がりましようだあ？ ハッ！ 馬鹿馬鹿しい。そんなこと夢見てるアイツは俺より愚か者で、ただの浮かれ女だよ」

この場に本人が居ないのを良いことに、須藤は好き勝手に暴言を吐き連ねる。

その姿に柚椰は一層可笑しそうに笑った。

「はははっ、随分とボロクソに言うね。でもそれは堀北も同じさ。今の君と同じようなことを、彼女は君に対して思っている。互いに相手の夢が理解できない。無理だと思つているからこそ相手を愚かだと思ふんだ」

「ああ？」

言っていることが理解できないのか須藤は鬱陶しげに柚椰を睨んだ。

「君が本気でプロのバスケット選手になろうとしているのと同じだ。彼女も本気でAクラスに上がろうとしている。夢を本気で追ふことの過酷さと辛さ、同時に生まれる楽しさは君が一番良く分かっているだろう？ だからこそ他人に夢を馬鹿にされるのは腹が立つし、半端な気持ちで夢を語る奴のことが許せない。違つかい？」

「だったら何だよ。俺に堀北を許せとでも言うつもりか？」

「いいや、部外者の俺がそんなこと言うのは筋違いだ。これはあくまで君と彼女の問題だよ。火種を生んだのが彼女である以上、彼女が先に謝るのが道理だ」

「分かっているじゃねえか。黛は話の分かる奴で助かる」

柚椰の言葉に気を良くしたのか須藤は上機嫌でボールを突く。

しかし、このまま柚椰が話を終えるはずがなかった。

「でも、一つ聞かせてほしいことがあるんだ」

「あん？　なんだよ」

「——今の君は本気でバスケットをやっているのかい？」

「……あ、あ？」

柚椰の言葉に一気に沸点を突破したのか、須藤がこれまでとは異なる怒気を飛ばした。

それほどまでに、今の柚椰の発言は彼の癪に障ったのだろう。

しかしその怒気を受けても尚、柚椰は煽ることを止めない。

「おや、何かおかしなことを言ったかな？　俺には今の君が本気でプロになるためにバスケットをやっているようには見えなかったというだけなんだが」

「知ったような口聞いてんじゃねえよ。テメエに何が分かったよ……！」

「だって今の君は、全然楽しそうに見えないからさ」

「ハア？」

理解できないとでも言いたげに須藤は眉を吊り上げる。

「何言ってるんだ黛、俺は今日だってこうやって——」

「余計なことを考えたくなくてバスケットに打ち込んでいるだけだろう？」

バスケット部の皆に置いて行かれたくなくて、でもテストは赤点を取るかもしれない。何をやって良いか分からなくて、結局自分の自慢であ

るバスケに逃げているだけだ」

「……」

「勿論、俺はプロバスケ選手になろうという君の夢を否定するつもりはないよ。けれどこの学校に入った以上、夢を実現させるにはどうしても勉強は付き纏う。今までバスケだけをやってきた君にとつて、今の現状は凄くストレスを感じるということも理解しているつもりだ。だからこそ、君が今何をすべきか、何を目先に考えれば良いのか俺が示してあげようと思ってね」

「同じ年の癖に年長者ぶるんじゃないやねえよ！」

そう言うのと須藤はボールを思いつきり床に叩きつけた。

「分かってんだよ俺だって！ 勉強しないとヤベエってことくらい！ けど、それでも！ 俺に勉強なんざ出来るわけねえだろうが！ 今までバスケしかやってこなかったんだぞ……？ テスト勉強なんざいつも一夜漬けでギリギリ赤点回避してきたんだ！ けど高校の勉強はそんな甘くないってことくらい俺だって分かってる！ 1教科でも赤点取ったら退学なんて聞いてねえよ！ 俺はバスケでプロになるための通り道としてこの学校を選んだんだ！ なのに！ この学校に入ったらバスケだけじゃやってけねえなんて……俺にはバスケしかねえんだ！ 今までマジで本気でバスケに打ち込んできたんだ！ こんなところで夢が絶たれるなんて嫌だ！ けど、だからって今から勉強してどうにかなるわけ……」

それは慟哭にも似た須藤の本心。

彼は本当はどうに分かっていたのだ。

このままでは本当に赤点を取って退学になるかもしれないということに。

けれど、今まで勉強などロクにしてこなかったからこそ、勉強というものに躊躇いを感じている。

頑張っても駄目なのではないか。

今から勉強しても間に合わないのではないか。

そういった不安から彼はその一歩を踏み出せないでいる。

結果、今尚バスケに縋っているのだ。

「必ず赤点を回避する方法がある、としてもかい？」

「は？」

「先に君にだけ教えるけど、俺には定期テストで必ず赤点を回避出来る秘策がある。それを使えば君は赤点を回避することは勿論、60点……いや、80点は取れる」

「ハッ、そんなハツタリ信じろとでも？」

口から出任せだとも言いたげに須藤は鼻で笑った。

しかし柚椰は尚も強い語気で言い続ける。

「もう一度言う。俺の言う通りにすれば、君は赤点を取って退学になることはない。これからもバスケットをやっていたいのなら、黙って俺についてくるんだ」

「そう言われて、はい分かりました……なんて言うわけねえだろ！」

反骨心が剥き出しになったような形相で、須藤は柚椰に詰め寄った。

「テメエの言うことが嘘だろうとなかろうと、俺はテメエの命令を聞く気はこれっぽっちもねえ。どうしても言うこと聞かせたいってんなら、力づくでやってみろよ！」

「ほう、力づくなら良いんだね？」

須藤から言質を取った柚椰は、先ほど須藤が投げ捨てたボールを拾い上げる。

「なら、君のお得意のバスケットでやってあげよう。1on1。5本先取。俺が勝てば、今後俺の言うことには全て従ってもらうよ。もし君が勝てば、そうだな……金輪際、君には口を出さない。勿論、堀北や綾小路にも徹底させることを約束する」

「ナメてんのか……？ この俺にバスケットで挑むだあ？ 調子乗ってんじゃねえぞ！」

自分に有利な条件で勝負を挑んできた柚椰に須藤は完全にキレている。

今まで努力してきた分野で戦うというのは勿論悪くない。

しかし、柚椰の態度が問題だったのだ。

条件は柚椰にとって不利であるはずなのに、彼は普通に勝つ気でいるように見えたからだ。

「君にとってこれ以上ないほどに有利な条件だろう。それとも……勝つ自信がないから怒っているのかな？」

須藤をやる気にさせるために、柚椰はさらに火に油を注ぐ。

結果、須藤は目を血走らせて犬歯を剥き出しにした。

「あ、あ!? 上等だ、やってやるよ! 言っとくが、怪我しても文句言らんじやねえぞ!」

こうして柚椰と須藤、2人の勝負が幕を開けた。

「ふっー!」

柚椰が放ったボールがリングに綺麗に入った。

これで得点は4対0。つまり柚椰が勝負に王手をかけた。

「ぐっ……!」

須藤はその光景に歯を食い縛る。

彼は決して、みすみす得点を許したわけではなかった。

当然全力で、柚椰の攻撃を止める気で立ち向かったはずなのだ。

しかし、ドリブルをする柚椰に相対する度に、彼は床に尻餅をつかせられた。

そう、一度や二度ではない。

柚椰が攻撃する度に、毎回必ず引き起こされたのだ。

その現象を彼はよく知っている。

研究をするためにプロのバスケット選手の試合を観ていたときに見たことがあった。

現象の名は『アングルブレイク』。

相手が重心を移動させた瞬間に切り返すことで、相手のバランスを崩させ転ばせる技術だ。

努力に努力を重ねた一部のプレイヤーだけが会得できる高等技術。

それを今、目の前の相手は駆使している。

その事実には須藤は戦慄していた。

「(どうなってるんだよ?! なんでコイツがこんな技を? バスケ部じゃなかったはずだろうが!)」

「さあ、次は君の攻撃だよ」

座り込んで呆然としている須藤に、柚椰は拾い上げたボールを差し出した。

「——っ! ナメんなアツ!!」

須藤は勢いよく立ち上がり、柚椰からボールをもぎ取るとすぐさま攻撃に転じた。

圧倒的不利な点差であるが、須藤は決して諦めていない。

その大柄な体格を使い、膠着状態に持ち込めば勝機はある。

一般的に見れば高身長である柚椰だが、それでも須藤よりは小柄だ。

力押しで突き進み、空中戦に持ち込めばリングにボールを押し込むことは可能だと踏んでいたのだ。

「おらアアツ!!」

右手にボールを持ち、須藤は大きく跳び上がった。

飛んでしまえば、柚椰の身長ではブロックすることは不可能だと確信していた。

しかし——

「だろーうな、と思っていたよ」

「なっ?」

須藤は、右手に持っていたはずのボールがいつの間にか無くなっていくことに気づいた。

いや、無くなつたのではない。正確には須藤はボールを持って跳んですらいなかった。

彼は跳ぶ直前にボールを弾かれていたのだ。

この現象もこの勝負の最中に何度もあったことだ。

柚椰を抜こうとしたときも、距離を取ってアウトサイドからのシュートに切り替えようとしたときも。

動き出そうとした瞬間に、ボールが手から弾かれていった。

読まれているとしか思えないその現象に、須藤は為す術などなかった。

「別に俺は未来が視えるとか、そんな常識外れなことをしているわけじゃないよ?」

「じゃあ、一体なんで……なんで俺の動きが分かるんだよ!? 実際にかけてみりゃ分かる。テメエのそれはただ速いんじゃないか、完全に俺の先の動きが見えてるとしか思えねえ!」

キャンキャンと犬のように喚き散らす須藤を尻目に、柚椰は先ほど弾いたボールを拾い上げる。

そしてゆつくりとボールを突きながら、須藤の疑問に答えた。

「単に目がいいだけだよ。人間の目の動きや体の動き、仕草や癖。それらを視て相手が今何を考えてるか、何をするつもりか予測しているだけさ。そして須藤、君は特に読みやすかった、というだけのことだよ」

「あ、あ!? テメエ俺のことバカだつて言いてえのか!」

「実際バカだろう? 14点」

「あ、テメエ! 俺を点数で呼ぶんじゃないか!」

苗字で呼ばないことに須藤は怒った。

しかし柚椰はカラカラと笑うと、そのままスリーポイントラインまでドリブルで一気に前進した。

「まあとにかく——」

柚椰は跳び上がると、そのままボールを放った。

いきなり攻撃を始めたことで須藤は完全に意表を突かれていた。

ボールは綺麗に放物線を描き、そのままリングに触れることなく入り、ネットを通過した。

その鮮やかなシュートに須藤は見入って言葉を発することが出来

なかった。

「これで5本目。俺の勝ちだ」

ニツコリと笑顔を浮かべながら柚椰は自分の勝ちを告げた。

「いただきます……んっ」

「……」

「うん、美味しい。どうしたんだい？ 須藤も食べなよ」

「……」

そう促すが、須藤は微動だにせずに柚椰を見つめている。

2人の前にはハンバーグステーキとライスが2つ置かれていた。

しかし須藤は料理に一切手をつけない。

その態度から何を勘違いしたのか柚椰はニツコリと笑った。

「ああ、心配しなくてもここは俺の奢りだ。遠慮せず好きなだけ食べるといい」

「ボコボコにされた相手に奢られてるってどういう状況なんだよ!!」

このままでは埒が明かないと判断した須藤はテーブルをバンツ！と叩いて怒鳴った。

そう、あの後2人は学校を出て、その足で夕飯を食べるためにファミレスに入った。

といっても、柚椰が須藤の手を掴んで強引に連れ込んだのだが。

テーブル席に通されると柚椰はさっさと注文を済ませ、あれよあれよという間に料理が運ばれてきて今に至る。

なにがなんだか分からない、というより完全に置いてけぼりを食

らっていた須藤にも限界が来たのだ。

「マジでなんなんだよ黛、つつーかお前だってポイント苦しいはずだろうが」

「え、別に苦しくはないよ?」

「は? いやだって、今月ポイント0だっただろ?」

「少しばかり色々やって増やしたんだよ。ほら」

柚椰は端末を操作して現在のプライベートポイントを表示させると、それを須藤に見せた。

その数値を見た須藤は目を剥いてひっくり返りそうになるほど驚いた。

「はああああつ!? ちょっつ、おまつ、桁がおかしくねえかコレ!? 俺の知ってるマックスのポイントより0が1個多いんだが!? つつーか頭の数字もおかしいだろ! なんだよ4つて!」

「まあそういうわけでご飯を食べる分のポイントには困っていない。だから奢るくらいはどうってことないってわけさ」

あつけらかんと言い放つ柚椰に須藤は疲れたように背もたれに寄り掛かった。

「はあー……なんか只者じゃねえとは薄々思ってたが、マジでお前何者なんだよ」

「ふむ、用心深い小心者、かな?」

「俺に喧嘩売ってきた時点で小心者とは言わねえよ!」

柚椰のズレた発言に須藤は全力で物申した。

「さっきの勝負は俺が勝ったわけだから、約束通りこれからはちゃんとして俺に従ってもらうよ」

「チツ……わあつたよ、真剣勝負で決まったことを守らねえほど俺はクズじゃねえ。ちゃんと勉強するよ。あの女に頭下げろって言うなら嫌で嫌で仕方ねえがやってやる」

「さっきも言っただろう? それに関しては俺が口を出すことじゃない。胸倉を掴んだ君も勿論悪いけど、この件で一番悪かったのは堀北だ。彼女が謝らない限り、君は謝らなくていい」

柚椰がそう言うのと、須藤は意外そうな顔になった。

「なんだよ、そこはちゃんと分かってくれるのか」

「俺は君を奴隷のように使う気はないからね。君の気持ちはある程度汲むさ」

「へえへえ、そりやありがたいですよ」

須藤は言葉こそ投げやりだが、その表情は柚椰への感謝の気持ちが見てとれた。

ひとまず須藤がこちらを僅かながら信頼してくれていると感じた柚椰は早速今後の予定を話した。

「これからの動きを伝えておくよ」

「おう」

「まず勉強会だけど、基本は今日堀北が言った通りに進める。授業をメインにして休み時間にその復習。だけど、須藤の教師役には俺が就く」

「黛が？」

「ああ、堀北に教わるのは君も嫌だろうからね。櫛田は池と山内が取り合いになるだろうし、そのあぶれた方に堀北が就く。そして沖谷には綾小路が就く予定だ」

「へえー」

「そして須藤、現状君を制御できるのは俺だけだ。君は俺に従うと約束した以上、俺が教えれば素直に勉強してくれると信じている」

「まあ、な……少なくとも他の奴らよりかは黛の方が良い」

「そして勉強会でベースを作ったら、君たちにはあることをやってもらう」

「あること？」

首を傾げる須藤を他所に、柚椰は再び端末を操作してあるものを表示させると、端末を自分と須藤が顔を突き合わせているテーブルに置いた。

「これがさつき俺が言った、定期テストの必勝法だよ」

「ん？ って、おい！ これって……!?!」

端末を覗き込んだ須藤は、それが何なのか理解したのか目を見開いた。

「そう、過去問だ。今日2年生から買い取った」

柚椰が見せたのは、数時間前に2年の先輩から買い取ったテストの過去問。

あの後先輩は急いで寮に戻り、過去問のデータを端末に入れて送ってきたのだ。

夜ならいつでもいいとは言っても、柚椰のためにすぐさま行動に移してくれた。

先輩が柚椰を信頼している証拠である。

「俺たちが先月末に受けた小テストの過去問も合わせて貰ってある。照合した結果、全ての問題が一致してる。要はテストの問題は毎年同じものだということだ」

「ってことはよ、これを覚えてテストを受ければ……」

「ああ、必ず赤点は回避できるし、なんなら勉強が苦手な君でも成績上位に食い込むことが出来る」

「マジかよ！　こんなんあったら楽勝じゃねえか！　なあ、早く俺にも送ってくれよ」

早く早くと餌を強請る飼犬のように須藤は急かした。

しかしその要求に柚椰は首を横に振る。

「さっき言っただろう？　これをやるのはベースを作った後でだ。早いうちから甘い蜜を覚えたらロクなことにならない」

「なんだよー、別にいいだろ？」

「いや駄目だ。クラスにもテストの3日前か4日前に公開するつもりだ。最初から過去問があると知れば、誰も彼もが4月の状態に逆戻りする可能性があるからね。全員同じように勉強をさせる。勿論君だって例外じゃない」

「で、でもよ、ベースを作るたって具体的にどれくらいかかるんだ？」

「それは君のやる気次第だね。当然俺も君に分かるように教えるつもりだけど、結局は君が自分の知識として身につけられるかどうかだ。君が一生懸命やってくれば、俺もそれ相応の対応をする。今日のコレみたいにご飯もご馳走してあげるし、夜に勉強をしたいと言うなら

付き合っただけよ」

「お、俺なんかそこまでしてくれんのか……？」

「ああ、須藤のために俺はとことんやってやる。だから君も頑張っただけに食いついてきなよ」

「黛……」

柚椰の言葉に感動したのか須藤は少し目が潤んでいた。

今まで人にここまで優しくされたことなどなかったのだろう。

元々乱暴な性格だった所為か、教師も親も腫れ物に触るような態度で接してきた。

クラスメイトからは怖がられ、そして嫌悪されてきた。

そんな人生だった須藤にとって、柚椰という存在は自分に尽くしてくれる初めての人だったのだ。

ここまでしてくれる相手に、一体自分は何をしてやれるだろうか。

それはまだ分からないが、今はただ彼の言う通りに頑張ってみよう。

そう須藤は結論づけた。

「俺、やるよ。マジで勉強と向き合ってみる。それでテストでも良い結果出してやる。だからよ、黛も俺にとことん付き合ってくれ！」

「勿論、頑張ろうね須藤」

「おう！」

そう元気よく返事をする、須藤は笑顔でハンバーグにかぶり付いた。

彼の笑顔は、今までで一番の良い笑顔だった。

彼らは予想外の事実を知る。

「おはよう黛！」

朝のホームルーム前、須藤がにこやかな笑顔で教室に入ってきた。そして登校するや否や真つ先に柚椰の所に行き、先の挨拶をかました。

須藤のその爽やかな朝の挨拶に教室の空気が凍った。

理由は二つある。

一つは現在時刻。

今の時刻は午前7時50分。

いつも遅刻か、或いは始業ギリギリに教室に駆け込んでくることが日常茶飯事だった須藤にとって今の時間はあまりに早かった。

余裕を持って登校してくる須藤の姿は、それだけで周りを驚愕させるのに十分だったのだ。

そして二つ目の理由、それは笑顔だ。

いつも眉間に皺を寄せ、話しかけようものなら誰彼構わず睨みつけていた須藤。

唯一マトモに会話が出来るのは池と山内くらいのものであった。

その2人に対してでさえ、須藤は笑顔を見せたことなどない。

つまりクラスの誰一人として見たことのない満面の笑みで挨拶をする須藤の姿。

それは彼が早く登校してきたということ以上にクラスメイトを咄然とさせた。

決して彼の笑顔が素敵だったとか、見惚れていたとかそんなことは一切ない。

単純に気味が悪い、気持ち悪いといった感情からの戸惑いが酷いことになっているのだ。

しかし彼に挨拶をされた本人である柚椰はニコリと笑っていた。

「やあ、おはよう。君がこんなに早く来るのは初めてじゃないかな？」

「つたりめーよ！ 今日から本気で勉強すんだからな。気合い十分だぜ！」

須藤のその言葉に周りで聞いていたクラスメイトは騒然とした。彼から勉強という単語が出てくることが信じられないとでも言いだけに皆一様にポカンとしている。

「やる気があるのは感心だね。とりあえず昨日言ったように、授業は寝ないでちゃんと受けるんだよ？」

「分かってるって、寝そうになったら腕でも抓ってどうにかするからよ！」

「よし、なら午前中の授業ちゃんと受けて、復習もしっかり出来たら昼は好きなものを食べていいよ」

「マジで？ つしゃ！ 俺、牛丼大盛りだからな！ お代わりもさせろ！」

「はいはい、昨日とは正反対なくらい遠慮がないね。いいよ」

「へへっ、約束だからな！」

須藤は柚椰から言質を取ると、上機嫌で自分の席へ戻っていった。それと入れ替わるように、今度は池と山内が柚椰の所に駆け込んでくる。

「お、おおおおい黛！ なんだよ今の!？」

「なんだ須藤のあの笑顔は!? 気持ち悪いっつーか、とにかく不気味なんだが!？」

「俺も気になるな。黛、一体何をしたんだ？」

「私も気になるわね」

「私も私もっ！」

いつの間にか傍にいた綾小路も、須藤の別人とも言える変化について聞きたいようだ。

堀北も同じ気持ちなのか、彼女もまたいつの間にか近くまで来ていた。

そして柚椰の隣の席でずっと事の成り行きを見ていた櫛田も、須藤の変化が気になって仕方ないらしい。

取り囲まれて詰め寄られながらも柚椰はカラカラと笑う。

「別に大したことはしていないよ。勉強をするならそれ以外は面倒を見てやると言っただけさ」

「それって、さつき須藤君が言ってた牛井大盛りってやつ？」

「櫛田は先の会話を思い出した。」

「ああ、運動部で体格も良い彼は食べる量も多いだろうと思ってね。食費を賄ってやるだけでも本人からすればありがたいがたかつたんだろう」「マジかよ、そんな単純なことだったのかよ……」

「つつーか飯で釣られるって、俺たちの説得とは一体……」

あまりにあつさりとした内容に池と山内は項垂れていた。

昨日自分たちがした説得とは一体なんだったのだろうか。

そして食事というあまりに簡単な理由で懐柔された須藤を見て2人は呆れていた。

「なんというか、あまりに単純すぎて私にも思いつかなかつたわ……」「同じく。というか、まさか飯で懐柔できるとは思わないだろ」

堀北と綾小路も、その発想は無かつたと言わんばかりに苦笑いを浮かべていた。

「あはは……で、でも、これでやつと皆揃つたよねっ」

「ああ、ここからテスト当日まで、全員で頑張っていこうか」

「柚椰のその言葉に一同は頷いた。」

かくして、ようやく彼らは中間テストへ向けて本格的に勉強会を開始した。

勉強会が始動してから早一週間が経過した。

堀北の考えた勉強プランは須藤たちにはマッチしたらしく、彼らは少しずつ、着実に知識をつけていった。

既に彼らは中学レベルの問題ならば、難なく解ける程度には成長していた。

現在、彼らは昼休みの時間を図書室での勉強会に当てていた。

全員机にノートと教科書を広げ、各々目の前の問題に意識を集中させている。

「授業受けて思ったんだけどさ、地理って結構簡単だよな」

「化学も思ってたほど難しくない」

今やっている問題を見ながら、池と山内がそんなことを言った。

「どっちも基本的に暗記問題が多いからかな？ 英語や数学は基礎が

出来てないと解けない問題が多いし」

「油断は禁物よ。特に地理は時事問題が出ることも十分考えられるわ」

「ジジイ問題？」

「時事問題。最近起きた政治や経済における事象のこと。要は教科書に載っている問題だけが出題されるとは限らないということよ」

「げえ、そんなの反則だろ。テスト範囲の意味ねえじゃん！」

「それも含めて勉強よ」

「前言撤回。俺地理嫌いになりそう……」

堀北が齎した情報を聞いた池は一気に地理に対して苦い顔を始めた。

「まあ、今はそれは置いておいて、目の前の問題を解くことに集中したほうがいいんじゃないか？」

「じゃあ私から皆に問題ね。帰納法を考えたのは誰でしょうか？」

池のモチベーションを保つために綾小路がサラリとフォローをした。

それに乗つかれるように櫛田が全員に問題を出した。

池たちは櫛田の問題を考えているのか皆一様に首を捻った。

「えーつと……さつき授業で習ったやつだよな？」

池がシャーペンを回しながら思考する。

「ああアレだ。アレ。なんかスゲエ腹の減る名前だった気がすんだけど」

「フラン……フランシスコなんちゃらだった気がする……」

「いや、ザビエルみたいな名前だった気がするぜ」

3人は臆げながらも覚えているみたいだが、明確な答えは出てこな

い。

「あ、フランシス・ベーコン。じゃね？」

池がようやく思い出したのか、導き出した答えを櫛田に言った。

「正解っ！」

「うっし！ これで満点確定だな！」

「いや、全然だろ……」

楽観的すぎる池の発言に綾小路がつっこんだ。

「まあでも全員土台は出来ているから、このまま気を抜かずにいけばなんとかなると思うよ」

柚椰は池たちの現状を踏まえ、堀北の計画が順調に進んでいると判断したようだ。

「そうだね、皆！ くれぐれも体調だけは崩さないようにしてね。勉強する時間も減っちゃおう」

「大丈夫でしょう、この3人なら」

櫛田の心配を堀北は必要ないと思っっているようだ。

その発言に池は有頂天になった。

「流石堀北ちゃん！ 俺たちのこと信用してくれてる感じ!？」

「そうね、風邪をひかないであろうことは信じてるわ」

暗にバカは風邪ひかないと言っっているようなものだが、当の本人たちは気づいていないようだ。

「おい、ちよつとは静かにしろよ。ギャーギャー煩えな」

思いの外声が大きかったのか、隣で勉強していた生徒の1人が文句を言ってきた。

「お？ ああ悪い悪い、ちよつと煩かったよな。問題が解けて嬉しくてなく帰納法を考えたのはフランシス・ベーコンなんだぜ？ 覚えておいて損はないからな」

注意されていても池はヘラヘラと笑いながらそう言った。

しかしその発言に何か引っかけたのか、文句を言ってきた生徒の片眉が上がった。

「あ？ お前ら、ひよつとしてDクラスの生徒か？」

そう言うと、彼と一緒に勉強していたであろう仲間たちが一斉に顔

を上げた。

皆一様に池を始めとするDクラスの面々をジロジロと見ている。そんな目で見られれば良い気がするわけもなく、須藤は不機嫌そうに口調を強張らせた。

「んだよ、俺らがDクラスだから何だつてんだよ。なんか文句あんのか？」

「いや別に？ 文句はねえよ。俺はCクラスの山脇だ。よろしくな」
ニヤニヤとしながら、山脇は須藤たちを見回した。

「ただなんつーか、この学校が実力でクラス分けしてくれて良かったなってよ。お前らみたいな底辺と一緒に勉強させられたらたまねーからなあ」

「なんだとー！」

真っ先に怒りを露わにしたのは言わずもがな須藤だった。

しかし須藤に怒鳴られても尚、山脇はヘラヘラとした態度を崩さない。

「本当のことを言っただけで怒んなよ。もし校内で暴力行為なんて起こしたら、どれだけポイントに響くか。おっと、お前らはなくすポイントもないんだっけか！ じゃあ退学になるかもなあ？」

「上等だ、かかって来いよ！」

須藤は完全に火が点いているのか、大声を張り上げて立ち上がる。図書室でそんなことをすれば、当然周りからの注目を集めてしまう。

このまま取っ組み合いにでもなれば、教師の耳に入ることは明白だ。

「須藤、声が大きいよ」

「っ！ 黛……でもよー！」

柚椰に窘められて一瞬黙ろうとした須藤だが、馬鹿にされたことがよっぽど頭にきているのか中々矛を収めない。

当然柚椰も須藤の気持ちは理解していたが、尚も強い口調で戒めた。

「場所を弁えたほうがいい。いいから大人しく座るんだ」

「……わあつたよ」

柚椰との約束を思い出したのか、須藤は渋々席に座り直した。

その素直な態度が可笑しかったのか、山脇は一層馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「なんだよ、一丁前なのは威勢だけで命令されりや素直に言うこと聞くのか。馬鹿は馬鹿らしく、何も考えずに殴りかかってくりやいいのによ」

「デメエ……！」

山脇の挑発に須藤は再び立ち上がろうとしたが、柚椰の言うことを聞くという約束を律儀に守っているのか我慢している。

「彼の言う通りよ。ここで騒ぎを起こせばどうなるか分からない。最悪の場合退学だってありえることだと思っただ方がいいわ。抑えなさい」

「堀北……」

柚椰に次いで堀北もまた、須藤の怒りを抑えようと諫めた。

しかし、堀北がこのまま引き下がるわけもなかった。

「それから……私たちのことを悪く言うのは構わないけれど、貴方もCクラスでしょう？ 正直、自慢できるようなクラスではないと思うのだけれど」

「CからAクラスなんて誤差みたいなもんだ。お前らDクラスは別次元だけだな」

「随分と不便な物差しを使っているのね。私から見れば、Aクラス以外は団子状態よ」

堀北のその言葉に、今までヘラヘラしていた山脇の表情が変わった。

「1ポイントも持っていない不良品の分際で、生意気言うじゃねえか。顔が可愛いからって何でも許されると思うなよ？」

「脈絡も無い話をありがとう。私は今まで自分の容姿を気に掛けたこととはなかったけれど、貴方に褒められたことで不愉快に感じたわ」「っ！」

その挑発に山脇が机を叩き、立ち上がる。

しかし同席しているCクラスの生徒が慌てて彼の袖を掴み抑えた。
「お、おい、よせつて。俺たちから仕掛けたなんて広まったらやばいぞ」

山脇はその制止の声に冷静になると、再びニヤニヤした笑みを浮かべる。

「今度のテスト、赤点を取れば退学だってことは知ってるだろ？ お前から何人退学者が出るか楽しみだぜ」

「残念だけど、Dクラスからは退学者は出ないわ。それに、私たちの心配をする前に自分たちのクラスを心配したらどうかしら。驕っていると足を掬われるわよ」

堀北の発言を聞いたCクラスの面々は皆一様にゲラゲラと笑い出した。

「くくつ、おいおい何の冗談だそりゃ」

「俺たちは赤点を取らないために勉強してるんじゃないやねえ。より良い点数取るために勉強してんだ。お前らと一緒にすんな。大体お前らフランチス・ベーコンだとか言つて喜んでるが正気か？ テスト範囲外のところを勉強して何になんだ？」

「え？」

Cクラスの生徒の言葉が聞き捨てならなかったのか、堀北が思わず声を出す。

「もしかしてテスト範囲もロクに分かってないのか？ これだから不良品はよお」

「テメエ、大人しくしてりやいい気になりやがって！」

我慢の限界を迎えたのか、須藤は再び立ち上がって山脇に詰め寄ると胸倉を掴み上げた。

「お、おいおい、暴力振るう気か？ マイナス食らうぞ？ いいのか？」

「こちとら、元から減るポイントなんざねえんだよ！」

須藤が腕を引く、既に彼は殴り飛ばす動作に入っている。

制止の声がかげられるより前に、須藤の拳が山脇の顔面に突き刺さ

る――

「落ち着けと言っただらう？」

「うおっ!？」

——より先に柚椰が須藤の脚を払った。

バランスを崩された須藤は山脇から手を離し、床に尻餅をついた。いきなりそんなことをした柚椰に周りはポカンとしている。

須藤もまた、一瞬何が起きたのか分かっていなかったが、原因が柚椰であると分かった途端立ち上がった。

「何すんだよ黛!」

「大人しくしていると言っただのに結局殴る直前まで行くとはね。君は言われたことを3歩歩くと忘れるのかい？ その頭は飾りか14点」

「お、おう、悪い。……って! だから点数で呼ぶんじゃねえ!」

柚椰から怒られたことで一瞬しおらしくなった須藤だが、以前と同じように点数で呼ばれたことに憤慨した。

しかし、柚椰は須藤をまっすぐ見つめて真摯に言葉を紡ぐ。

「いいから黙って堪えるんだ。君は変わろうとしたんだらう？ こんなところで俺をがっかりさせないでほしいな」

「黛……」

命令ではなく、そうであってくれと頼むような柚椰の声色に須藤は今度こそ冷静さを取り戻した。

しかし須藤が冷静になれば、当然それまでやりあっていた相手は凶に乗る。

「へっ、結局殴れねえヘタレかよ。しかも、自分より小さい奴に言いくるめられるとか無様だな」

山脇は須藤が殴ってこないと分かるや否や再度挑発した。

しかし、その挑発に乗ったのは須藤ではなかった。

「羨のなっていない猿は黙っているんだ」

そう言っただけ山脇を見据えたのは先ほど須藤を抑えた柚椰だった。

まさか彼が乗ってくるとは思わなかったのか山脇は一瞬虚を衝かれたが、みるみる内に怒りを露わにした。

「ああ？ テメエ、不良品の分際で何調子こいてんだあ？」

「騾のなつてない猿は黙れと言ったんだよ。君たち揃いも揃って、好き放題騒いでさぞ気持ちがいいだろうね。それに、数も数えられない馬鹿を人間と呼ぶのは人間に対して失礼だろう？」

「はあ？ なに訳の分かんねえこと言ってるんだよ！」

「君はさつき、CからAクラスなんて誤差だと言ったけど、CクラスとAクラスの間は何ポイント差があると思ってるんだい？ Aクラスが940、そして君たちCクラスは490。差にして450だ。対して、俺たちDクラスと君たちCクラスとの差は490。君たちがAクラスに対して誤差だと言うのなら……俺たちは君たちCクラスと誤差ということになるんだが？」

「——っ！」

柚椰に言われて気づいたのか、山脇はばつが悪そうな顔で目を逸らした。

そして柚椰は尚も畳み掛ける。

「たった40の差で別次元だと堂々と主張するというのならそれもそれでいいと流したけど、どうやら案の定、何も考えずに口にしていたらしいね。数も数えられない、客観的にものを考えることの出来ない猿が、人間相手に随分と調子のいいことを言ったものだ」

「テメエ……い！」

「俺たちDクラスが不良品の集まりなら君たちCクラスは何だい？」

猿の惑星かな？ 君たちを束ねるボス猿は随分と楽そうで羨ましいよ」

「ああ!? テメエ今、龍園さんを馬鹿にしたか！」

完全に火がついたのか、今度は山脇が柚椰の胸倉を掴んだ。

すかさず須藤が割って入ろうとするが、柚椰はそれを制止する。

柚椰は血走る目で睨みつけてくる山脇を冷たく見下ろした。

「へえ、君たちのボスは龍園というのか。覚えておくよ。ボス猿じゃないとすれば、そうだな……猿の飼育員と記憶しておくよ」

「テメエエエエ!!」

我慢ならなかったのか山脇が拳を振りかぶった。

流石に不味いと思ったのかCクラスの生徒も止めようと声をかけるが山脇には聞こえていない。

このままでは柚椰は殴られる。

誰もが思ったそのとき、1人の女子生徒が割って入ってきた。

「はい、ストップストップ!」

女生徒は山脇の腕を取り、柚椰が殴られることを防いでいた。

「い、一之瀬……」

山脇は女生徒とは知り合いなのか、名前を呼んで狼狽える。

「これ以上ここで騒ぐなら、学校に報告しなきゃいけないけどそれでもないの?」

「わ、悪い、そんなつもりはないんだよ。ちよつとふざけてただけで、ハハッ」

冷や汗を流しながらなんとか笑みを作る山脇。

いつのまにか拳は引つ込められ、柚椰からも手を離していた。

「や、山脇、もう行こうぜ」

「だ、だな。これ以上こんなところにいたら馬鹿が感染っちまう」

仲間に促されたことで山脇はさっさと勉強道具を片付けると、仲間と一緒に図書室を出て行ってしまった。

「君も、ちよつと挑発しすぎだよ? やりすぎはダメっ」

一之瀬は柚椰にも苦言を呈した。

先に挑発してきたのがCクラスの方とはいえ、少々言葉が過ぎると感じたようだ。

「そうだね、ちよつと熱くなりすぎたかな。迷惑をかけたね」

柚椰は素直に非を認めると、一之瀬に対して謝罪した。

「うん! 素直に謝れて偉い偉い!」

謝罪を受け取った一之瀬は笑顔で頷いた。

まるで子どもをあやすような言い回しだが、恐らく他意はないのだろう。

「迷惑かけてごめんね帆波ちゃん」

「ううん、気にしないで」

櫛田が一同を代表して改めて一之瀬に対して謝罪した。

当の一之瀬もさして気にしていないのか、その謝罪を受け取った。

櫛田が彼女を名前で呼んだことから、2人が親しい仲であることが伺える。

「知り合いかい?」

気になった柚椰が櫛田にそう尋ねた。

その問いに櫛田はニツコリとしながら頷く。

「うん、Bクラスの一之瀬帆波ちゃん」

「よろしくねっ」

櫛田に紹介され、一之瀬は柚椰にそう言って笑顔を向けた。

「黛柚椰だ。よろしく」

「うん、よろしくね黛君っ!」

柚椰が名乗ると一之瀬は満足そうに頷いた。

人当たりの良いその物腰から、クラスでも彼女が人気であることが容易に察せられた。

「ところで一之瀬、1つ聞いてもいいかい?」

「なにかな?」

「中間テストの範囲、改めて教えてくれないかな?」

柚椰がそう言うと、櫛田を始めとするDクラスの面々は先のCクラスの人々が言っていたことを思い出した。

「そ、そうだよ! さつきアイツらテスト範囲が違うって……」

「まさか……テスト範囲が変わったとでもいうの?」

堀北はある可能性に行き着いたらしい。

それはテスト範囲の変更。

一般的な学校でもままあることだが、ことこの学校においてそれは重大な問題だ。

なにせ退学がかかっているテストなのだから、その情報だけは決して聞き逃してはならない。

しかし、堀北は記憶を遡っても担任である茶柱先生からテスト範囲

の変更などという事柄は伝えられていないということに気づいた。
つまり伝達ミス。

Dクラスにはその情報が出回っていないという事実を指し示していた。

「う、うん、確かにちよつと前にテスト範囲は変わったよ？　うちのクラスでも星之宮先生がホームルームの時に言ってたし」

「なっ……!?!」

「マジで……!?!」

「うそ……だろ……」

一之瀬が肯定したことで、池と山内と須藤は愕然としていた。
驚いているのは彼らだけではない。

堀北や綾小路、櫛田もまた目を見開いていた。

しかし柚椰は図書室の時計を見てあることを考えて全員に伝えた。

「昼休みが終わるまでまだ時間がある。全員今すぐ職員室に行くよ」

「！　そうね、どういふことなのか茶柱先生に聞きに行かなければならないわ」

「佐枝ちゃんせんせーのミスだったとかだったらマジで笑えねえよ！」

「だな」

堀北の発言に池と山内が同調する。

「つつーか、マジでDクラスにだけ知らされてなかったとしたら……」

「うん、あまりにも酷いよ……」

須藤が口にした仮定と同じことを櫛田も思っていたのか、その表情は悲しげだ。

各々が不満を口にする中、無言を貫いている綾小路に柚椰は話を振った。

「綾小路、君はどう思う？」

「学校側がDクラスにだけ情報を伝えなかったか、あるいは先生が意図的に情報を止めていたか。可能性としては後者だと俺は思う。どちらにしても、その真意を聞きに行かないとだけだな」

「だね。とりあえず急ぐべきだ」

彼らは急いで荷物を纏めて図書室を出ると、職員室へ向かって駆け出した。

彼は快活少女に打ち明ける。

図書室を出て職員室に駆け込んだDクラスの面々は、担任である茶柱先生に事情を問い詰めた。

一同を代表して堀北がテスト範囲が変更されたか否かについて尋ねると、先生はあっさりとしてそれを認めた。

しかも、伝え忘れていたと事も無げに言い放ったのだ。

当然そんな説明で納得できるはずもなく、池や山内は不満を口にしていった。

須藤もまた、言葉に出さないまでも不機嫌さを前面に押し出していた。

しかし堀北は、これ以上不満を口にしても状況が変わることはない判断したのかすぐに頭を切り替えていた。

彼女は踵を返し、職員室を出る。

それに倣うように、須藤たちも渋々だがその後が続いて職員室を出た。

「櫛田さん、少しお願いがあるのだけれど」

廊下に出ると、すぐさま堀北は櫛田にあることを頼もうとした。

「なにかなの？」

「新しいテスト範囲のことを、Dクラスの皆に知らせて欲しいの」

そう言うと、堀北は先ほど先生から受け取ったテスト範囲の書かれたメモを手渡した。

「それはいいけど、私でいいの？」

「この中で貴女が1番の適任者であることは、議論するまでもないこと。テスト範囲を勘違いしたままテスト本番を迎えるわけにはいかないわ」

「うん、分かった。私が責任を持って平田君たちに伝えておくね」

「私は明日以降に備えて、新しいテスト範囲からさらに絞込みをするわ」

堀北は努めて平静を装っていたが、その表情からは僅かに焦りが滲み出ていた。

必死に勉強した部分は無駄になり振り出しに戻された。時間も一週間しか残されていない。

何より心配なのは池や山内、須藤のモチベーションだ。

「堀北。俺、明日から1週間部活休むから」

須藤がいきなりそんなことを言った。

「え？」

「形振り構ってる時間はねえ。ここまできたらバスケットに当てる時間も全部くれてやる」

「本当に構わないの？」

「男に二言はねえ」

堀北の忠告を受けて尚、須藤の覚悟は揺らがない。

「しゃーない、俺もやるぜ」

「だな、ここで引き下がるのはカッコ悪すぎるしな」

須藤が覚悟を見せたことで池と山内にも火が点いたらしい。

彼らがやる気になっていると、柚椰が須藤に声をかけた。

「須藤、ベースはもうすぐ完成する。心配することはないよ」

「えっ……それって……!?!」

須藤は柚椰の言っていることが理解できたのか目を見開いた。

2人の会話を聞いている者たちは何のことを言っているのかわからず首を傾げている。

「ああ、だから安心して明日からも勉強すればいい。池、山内にしても心配ない。堀北が新しく組んだメニューをやるんだ。ベースが完成すれば必ず結果は出る」

「黛……そうだよな！俺らには堀北ちゃんがいる！」

「頼んだぜ堀北ちゃん、俺らも必死でやるからさ！」

柚椰の言葉を好意的に解釈したのか、池と山内も表情に希望が宿っていた。

「君たちは先に教室に戻っていていいよ。堀北、綾小路、櫛田は少し話したいことがあるから残ってほしい」

「え、ええ、分かったわ」

「分かった」

「う、うん」

3人は柚椰の言う通り、その場に残ることを承諾した。

柚椰に言われ、池たちは先に教室へ戻っていった。

「それで？ 話というのは何かしら」

堀北が口火を切った。

「この顔ぶれってことは池たちに課す勉強メニューについてか？」

「それに、さっきの黛君の言葉、必ず結果は出るって……」

櫛田は先ほど柚椰が言った言葉が気にかかっているらしい。

「今まで黙っていてすまないが、ひとまずこれを見てほしい」

柚椰は端末からあるデータを開き、3人に見せた。

それが何であるか、すぐに気づいたのは堀北だった。

「これってまさか……!?!」

「そう、中間テストの過去問。1週間ほど前に手に入れておいた」

「た、確かにこれを使うのはテスト勉強には効果的だね……」

櫛田は過去問を使った勉強はテスト対策に効果的だと思ったらしい。

しかし、柚椰が伝えたいのはそれだけではない。

「それだけじゃない。この中間テストだけど、毎年全く同じものが出題されているんだ」

「ええっ!?!」

「確証はあるのか？」

綾小路の疑問は尤もだった。

普通であれば定期テストの問題というのはその年その年で僅かながら変わるものだ。

その年度に教科を担当する先生の癖や授業の進行度によってどう

しても左右されるのがテスト範囲であり、テスト問題なのだから。

「検証のために先月末にやった小テストを含めて2年生、3年生のそれぞれから譲ってもらったんだ。照らし合わせた結果、面白いくらいに全問一致。ごく丁寧に問題文まで一緒だった」

柚椰がそう言ったことで、綾小路はある可能性に行き着いた。

「……ということは、テスト範囲の変更というのは」

「嘘だろうね。元々テスト範囲は固定だった。生徒たちがどう動くかを見極めるためにわざと変更なんて言葉を使ったんだろう」

そこまで言われたことで、堀北もまた今回の事態の真相に気づいた。

「じゃあ、茶柱先生が伝え忘れていたというのも」

「Dクラスの、というよりは俺たちの動きを見るためだろうね。現にあの人、自分のミスだと認めておきながら何も悪びれず、むしろ俺たちを試すような目を向けていたよ」

「そういえばさつき、一瞬だが黛を見ていたな……」

綾小路は職員室で茶柱先生が柚椰に一瞬だが変な目線を送っていたことに気づいていた。

それが何であるかまでは分からなかったものの、不可解であることには気づいていたようだ。

「恐らく俺が過去問を先んじて集めていたことをどこかで聞いていたんだろうね。あの人、俺と一緒に職員室に来たのを見て一瞬笑ったよ。『なんでお前まで一緒になって驚いてるんだ?』とでも言わんばかりに」

「黛はどうして今まで黙ってたんだ?」

「そ、そうだよ! こんな裏技があるなら早く教えてもいいじゃん!」

綾小路と櫛田は、こんな秘策があることをどうして黙っていたのかと柚椰に尋ねた。

しかし堀北は少し思案する様子を見せると、柚椰を真っ直ぐ見つめた。

「いえ、そうしなかったのにはちゃんと理由があるわ。そうよね?」

「勿論。実は須藤を懐柔するとき、俺は過去問の存在を教えていた。

案の定、須藤はくれと言ってきたけど俺は拒否した」

「早いうちからこんな裏技があることを知れば、彼が勉強することを止めてしまうから？」

「そう、須藤たちだけじゃない。クラスの皆も同じだ。これが必勝法だと知れば、過去問を丸暗記するだけでいいと投げやりになることも考えられたからね。あくまでこれは、全員がテストを受けるに十分な力をつけた上で公開するべきものだ」と判断した」

「さつき黛が須藤に言っていたベースって言葉がそれか」

綾小路は先ほど須藤に言っていた柚椰の言葉を思い出した。

「有効なカードというのは単体でも勿論強いが、使う側がポンコツだったらいつまでもそれに頼ることになってしまうからね。Aクラスに上がることが目的なら、クラス全体のスペックを底上げすることは避けて通れない工程だ」

「確かに、楽な道を覚えてしまったらそこで成長は止まるからな。黛の考えは尤もだな」

「私が新しく組んだメニューを課して、彼らが力を付けた段階で過去問を使って駄目押し。要はそういう作戦ってことね？」

「そういうことだね。そしてクラス全体への公開の方法だが、これは櫛田にやってもらいたいんだ」

「え、私？」

まさか自分にそんな役割を当てられるとは思わなかったのか櫛田はキョトンとしている。

「テスト範囲が変わったことを知り、それを知らせた君はクラスのためになにか打開策はないか模索した。そして過去問を使うことを思いつき、先輩に交渉してなんとか過去問を入手した。手に入れた過去問はなんと毎年同じ問題らしい、これは必勝法だ。というのが筋書きだね」

「……なんか私、黛君に女優か何かだと思われてる？」

何から何まで決められた筋書きに櫛田は苦笑いしている。

あまりに白々しい予定調和に流石に同意しかねるようだ。

「でも君がそうすることが最適だと思うんだ。綾小路と堀北もそう思

うだろう?」

「確かに。クラスのアイドルである櫛田が頑張ったという体にしたほうが皆の結束も深まるな」

「そうね。この中で一番クラスの人と最も自然に接することが出来るのは櫛田さんね」

「2人までそんなこと言って……もうっ」

綾小路と堀北にも煽てられたことで、櫛田は逃げ道を無くした。

しかし2人からの言葉には悪い気はしていないらしい。

堀北からの言葉だというのに、櫛田は嬉しそうに頬を綻ばせている。

「分かった。じゃあ、私が過去問を配る役をやるよ」

「ありがとう、全体に公開するタイミングはテスト前日か2日前くらいが望ましい」

当初の予定では3日前を目処に考えていたが、柚椰はそれでも十分だと判断したらしい。

「そっか、あまり早く渡すのも良くないもんね」

櫛田は納得したのか、うんうんと頷いている。

「にしても黛、過去問を使う方法は一体何時思いついたんだ?」

「そうね、参考までに聞かせてもらいたいわ」

「今月頭のホームルームで、赤点を取らずに乗り切れる方法があると確信していると先生が言った時にだね。テストを乗り切る方法はいくつか浮かんだんだが、可能性が高いのは過去問を使った勉強だと踏んだ。問題が全く同じだったことは予想外だったけどね」

「だが、結果として先生が言ってくれたことの意味がそれだってことが分かったな。お手柄だと思う」

綾小路は素直に感心しているのか柚椰を褒めた。

しかし堀北は何かを考え込んでいる。

「けど、もしかしてこれって他のクラスもやってくるんじゃないかしら?」

堀北の疑問。

それはこの必勝法を思いついているのが自分たちだけではないの

ではないかというもの。

他のクラス、特にAクラスは同じことを考えているのではないだろうか。

「ああ、やってくるだろうね。特にAクラスは」

「——っ！ やっぱりそうよね」

「勿論正攻法でテストに臨むクラスはいるはずだよ。特に基礎スペックが高く、クラスの結束が固いであろうBクラスとかはね」

「帆波ちゃんのクラス？」

榎田は友達である一之瀬が所属しているクラスを挙げられたことに反応した。

「うん、彼女がBクラスのリーダーだろう？ 一目で分かった。彼女みたいなタイプは自然とクラスを中心に居て、自然と人を惹きつける。男女問わず慕われて、気がつけばクラスのリーダーになっているタイプだ」

「……今日初めて会ったはずなのに随分と好印象なのね」

「ふーん、黛君って帆波ちゃんみたいなのが好きなんだ……」

榎田が語った一之瀬の分析を聞いて、堀北と榎田は何故か不機嫌そうにむくれた。

「いや、むしろ俺は危機感すら感じてるよ？ 一之瀬みたいな人間は甘く見ていると痛い目を見る。Aクラスばかり意識して、Bクラスを通過点だと思ってたら必ず足を掬われるだろう。今は彼女たちとは友好的関係を築くのが得策だ。間違っても敵対しようなんて考えない方がいい」

「その口ぶりだと、黛はAクラスのリーダーにも心当たりがあるのか？」

「ああ、前に食堂で会ったからね」

綾小路からの問いかけに榎田はあつさりと頷いた。

それに真っ先に食いついたのは言わずもがな堀北だった。

「誰？ Aクラスを纏めてるのは誰なの？」

「まあまあ落ち着きなよ。そうだね、Aクラスのリーダーだが……正直に言って底が見えない」

「黛でもか？」

「綾小路は俺を買い被りすぎだよ。俺がやれるのは精々頭を捻って先んじて仕込みを打つ程度だ。だがAクラスのリーダーは、基本的な知力が高いことは勿論だが、クラス全員を掌握できるほどのカリスマがある。それは前に俺がホームルームで言っただろう？ クラスポイントの減少を60に抑えたという点だけでもその強さは分かるはずだ」

「間違いなく強敵ということね……」

「ああ、向こうが完全にAクラスを支配したとき、間違いなく大きな壁として立ちはだかる。そうなれば、突き崩すことは容易じゃない。こちらでもクラス全員で事に当たらないと勝負にすらならないだろうね」

「面白いじゃない。受けて立つわ」

堀北は闘争心を刺激されたのか、好戦的な笑みを浮かべていた。

しかし綾小路は冷静に状況を見ていた。

「とりあえず、今はAクラスのことよりも自分たちのことだな」

「そうだね。中間テストでクラス間の差を大きく詰めることは無理だろう。でもクラスポイントを上げることは出来るし、それをすることはクラスの士気を高める上では必須だ。先の敵を見据えるよりも、今は自軍を纏めて強くする段階だよ」

その言葉に一同は皆頷いた。

「さて、泣いても笑っても残り1週間。頑張っていこうか」

「ええ、私も今日中にはメニニューを作るわ」

「俺も、出来ることはやるつもりだ」

「私も私も！ 皆のために頑張るよっ」

皆が皆、決意を新たに中間テストに向けて歩き出した。

「あ、櫛田、もう一個お願いがあるんだけどいいかい？」

「なにかかな？」

首を傾げる櫛田に柚椰はニッコリと笑った。

「一之瀬の連絡先、教えてくれないかな？」

「むう……」

柚椰のお願いを聞いた櫛田は風船のように頬を膨らませていた。

「むっ……」

傍で聞いていた堀北もまた、僅かながらむくれていた。

放課後、敷地内のあるカフェで柚椰は珈琲を飲んでいた。

テーブル席で寛いでいる彼は、ある人物が来るのを待っていた。

「ごめんね、待たせちゃったかな？」

そう言っただけで来たのは今日柚椰と初めて会った一之瀬だった。

榎田から連絡先を受け取った柚椰は彼女に放課後2人で会ってほしいとメールを送っていたのだ。

「いや、そんなに待ってないよ。いきなり呼び出してすまない」

「ううん、大丈夫！ でも、桔梗ちゃんから連絡先渡してもいいか聞かれたから何かと思ってたけど、まさかいきなり2人で話したいなんてメール来たからびっくりしちゃった」

「初めて話したその日に呼び出されて、よく了承してくれたね。改めてありがとう」

「桔梗ちゃんの友達なら悪い人じゃないと思ったからね。図書室のときはちよつと怖かったけど……」

一之瀬は昼休みの時に図書室で起きた一幕について思い出していた。

「あの時はCクラスの連中に言いたい放題言われて少し熱くなっていたからね」

「あはは……確かにあの人も言い過ぎだったよね」

「俺は自分のことはどうこう言われようと構わないけど、榎田たちまで馬鹿にされたことが頭にきたんだ」

「桔梗ちゃんたちが？」

「須藤たちは確かに現時点では成績不振だけど、テストに向けて真剣に勉強と向き合っている。そして櫛田や堀北、綾小路も彼らのために自分の時間を費やして勉強を教えている。俺は努力している皆を不良品と馬鹿にしたCクラスの連中が許せなかった」

柚椰は真摯に、そして一之瀬の心に響くように言葉を紡いだ。

「そうなんだ……黛君って優しいんだね!」

一之瀬は柚椰のことを良い人だと思ったようで、笑顔で彼のことを褒めた。

その言葉がむず痒いというように柚椰は頭を掻いた。

「でも、いくらなんでも言い過ぎたと反省しているよ」

「反省してるだけでも偉いよ。ちゃんと自分のことを見れるってことなんだから」

「ありがとう。そう言われると少し気が楽になる」

「いいのいいの! それで、私と話したいことって結局何なの?」

一之瀬は柚椰からの礼の言葉を受け取ると、今回の本題について触れる。

彼女が触れたことで、柚椰もまた本題に入ろうとした。

「そのことなんだが……君が生徒会に立候補したというのは本当かい?」

「え、うん、そうだよ。もしかして情報もう出回ってる?」

「一部ではね。一之瀬みたいな女子だと余計に噂が出回りやすいんだろうね」

「私みたいなの?」

「うん、可愛い女子の動きというのは否が応でも大衆の関心を惹くから」

「にやつ!」

柚椰の言葉に一之瀬は変な声を出した。

「か、可愛いって、いきなりそんなこと言われると照れちゃうな」

「いやいや、君は可愛いと思うよ。クラスでも人気者なんじゃないかな?」

「そ、そんなことないよ〜!」

一之瀬は真っ赤になって手をブンブンと振りながら柚椰の言葉を否定する。

その表情は恥ずかしいやら嬉しいやらといったところだろうか。

「本当、私なんて全然！……それに、生徒会だって結局会長さんに断られちゃってさ」

そう語る一之瀬はショボンとしながらも、完全に意気消沈といった感じではなかった。

「ふむ、けどその目を見る限り、諦めてはいなさそうだね」

「うん、チャンスがあつたらまた立候補するつもりだよ」

「そうか……」

一之瀬のその発言を聞いた柚椰は、以前会長と交わした契約を思い返す。

そして会長から課せられた課題を実行に移すことを決めた。

「もし今後、一之瀬がもう一回立候補するとすれば、それは堀北会長が引退した後。代が変わって新体制になったときと判断していいのかな？」

「そうだね。その時が1番狙い時かなって」

「そうか、このまま行けば次の会長に就任するのは現副会長の南雲雅だね。一之瀬は彼のことはどの程度知っているのかな？」

「え、うーん……実はほとんど知らないんだよね。副会長さんってことだから多分会長さんを尊敬してる良い先輩なんじゃないかな？」

一之瀬が副会長についてほとんど知らないという事実を聞き出した柚椰は好機とばかりに内心笑みを浮かべる。

「良い先輩か……実はそうでもないらしいんだ」

柚椰は深刻そうな顔を作り、彼女の関心を向けさせる。

「えっ、どういうことかな？」

「まずはこれを見てくれないかな」

そう言っって柚椰が鞆から取り出したのは一つの資料。

以前生徒会長から受け取ったデータを元に作成した南雲雅にまつわる調査資料だった。

そこには彼がこれまで起こしてきた事件や問題行動、彼の性格や交友関係まで細かく記されていた。

一之瀬は言われるがままに資料に目を走らせていくが、やがてその表情は驚愕へと変わった。

「これって……!?!」

「南雲副会長はお世辞にも良い生徒とは言えない。むしろ堀北会長とは真逆の人間だ。品行方正な会長とは違い、南雲副会長は問題行動とも言える事柄が多い。書いてある通り、2年生の何人かは彼の手によつて退学させられている。学校側はそれも彼の實力だと判断して処分などは下していないが、彼が危険な生徒であることは疑いようもない」

「そんな……」

「そして副会長だが、なんでもかなりの女好きらしい。資料にも載っている通り、彼が自室に女生徒を連れ込んでるところが度々目撃されている。写真を見れば分かると思うけど、同意の上で為されている行為には見えないんだ」

柚椰が指で差したのは、南雲副会長が女生徒を寮の自室へ連れ込んでいる写真だ。

それは偶然その場に居合わせた先輩が、たまたま持っていたカメラで撮影したものだ。

先輩はその写真をすぐさま柚椰に送り、情報を提供したのだ。

「しかもこの副会長、関係を持った女生徒を私物と呼んでいるらしい。これは資料にもある通り、彼と同じ2年生の先輩からの証言だ。勿論これは彼のことを嫌っている先輩の嘘という線も考えられる。だが、それにしても同じ証言があまりに多いんだ」

柚椰は次々に該当箇所を指で差すことで資料に信憑性を持たせた。物的証拠や証言の数々は否が応にでも真実であることを印象付けさせる。

「南雲副会長が会長に就任すれば、これまでより一層派手に暴れる可能性が高い。生徒会入りを希望している君も、彼の標的になるかもしれない」

「で、でも、なんで黛君はこのことを私に……？」

「南雲副会長が危ない人間だと一番よく知っているのは誰だと思う？」

柚椰のその問いに、一之瀬はある人物が思い当たった。

「——っ！ まさか」

「そう、堀北会長だ。会長は別に君が生徒会に相応しくないと判断したから落としたんじゃない。自分が引退した後、会長に就任した南雲に君が狙われることを防ぐために落としたんだ」

「まさか……でも、会長さんがどうして……」

信じられないとでも言いたげに一之瀬の瞳は揺れていた。

しかし、確たる証拠が目の前にある以上、それを嘘と否定することは出来ない。

一之瀬の表情から、彼女が今揺れ動いていることを確信した柚椰はさらに駄目押す。

「堀北会長は言っていたよ。この学校に入ってきた以上は知らぬ生徒であれ、俺にとつて守るべき生徒だ、とね。その生徒が危険な目に遭うことを見過ごすことは出来ない、と。けれど、一之瀬が立候補したという情報が出回った以上、遅かれ早かれ副会長に目をつけられることにも気づいていた。だから俺に依頼してきたんだ。君を副会長の手から守ってほしいとね」

「会長さんが黛君に……？」

「ああ、俺一人で短期間にこれだけの情報を集めることは不可能だよ。この資料は堀北会長が俺にくれた情報を元に作ったんだ。全ては君を守るために」

「私のために……でも、なんで黛君はそのお願いを聞いてくれたの？ 別にそのときは私と友達だったわけじゃないのに」

一之瀬の疑問は尤もだった。

柚椰はそのとき友達でもなく、顔見知りというわけでもない。

ましてや直接話したことなどなかったはずの相手。

にも関わらず、一体何故彼はその依頼を引き受けたのか。

「堀北会長の想いに共感したからとか、副会長への個人的な怒りも

あつたけど……1番は一之瀬だったから、かな」

「私だったから……？」

「前に一回職員室の前で会っただろう？ そのとき星之宮先生が名前を呼んでいたから一之瀬の顔と名前は知っていた。堀北会長が君の名前を出したとき、すぐに俺はあのとき会った女子だと気づいた。顔も知らない何処かの誰かじゃなくて、一之瀬という女子を知っていたから俺は躊躇いなく了承したんだ」

「たったそれだけの理由で……？　だ、だってどんな人かも分からないじゃない」

「これでも人を見る目には自信があるからね。一目見たときから君が悪い人間ではないということには分かっていたよ。そして今日実際に話してみても、あのとき了承したのは間違いじゃなかったと確信した。だから今、ここでその話をしようと思つたんだ」

「そっか……やっぱり黛君は優しいね」

そう言つて一之瀬は笑顔を浮かべた。

彼女は完全に柚椰を信用したようだ。

「それともう一つ、一之瀬には渡したい物があるんだ」

柚椰は再び鞆から一つの紙束を取り出すと、それを一之瀬へと手渡した。

「これは……？」

「中間テストの過去問だ。どうやら毎年出る問題は同じらしいよ？」

「ええっ!？」

一之瀬はいきなりそんな物を渡してきたことに驚いている。

「2年生と3年生からそれぞれ貰つて照らし合わせたから本当だよ。間違いなくテストの必勝法だね」

「な、なんでこんな凄いものを？　Dクラスだけで独り占めしたっていいのに……」

「俺のことを信じてくれたお礼だよ。使う使わないは君に任せる。そもそもこれは俺が独断で手に入れたものだから君に渡したって何の問題もないからね」

「ふふっ、黛君って面白いね」

柚椰の振る舞いが面白かったのか、一之瀬は可笑しそうに笑った。

「ありがとう、じゃあ遠慮なく貰っちゃうね！」

「ああ、有効に使ってね」

「でも、私だけ色々して貰っちゃってごめんね」

「気にしなくていいよ」

「ううん、気にするよ。過去問もそうだけど、私のために色々頑張ってくれたんだもん。今度何かお礼させてねっ！」

「じゃあ今度機会があれば頼むね」

「うんっ！」

柚椰から了承をもぎ取ると、一之瀬は満面の笑みで頷いた。

彼らは最初の関門を突破する。

中間テスト前日、事前の打ち合わせ通り櫛田はクラス全員に過去問を配った。

男子たちは櫛田を救いの女神のように崇めており、特に池と山内に関しては感動のあまり叫んでいた。

女子もまた彼女の大手柄に惜しみない賛辞を贈っていた。

須藤だけはどうしても櫛田が配っているのか不思議そうな顔をしていたが、柚椰が黙っているとジェスチャーを送ると素直に頷いていた。

こうしてDクラスは、過去問という強力な武器を手に中間テストに臨むこととなったのであった。

その日の夜、柚椰は須藤の部屋に押し掛け、テスト勉強の最終確認をしていた。

過去問を一通り須藤に解かせ、それを採点する事で仕上がり具合を把握するというものだ。

今採点しているのは最後の教科である英語。須藤が最も不得意だった科目だ。

「よし、英語は63点。これで5教科全部一通りクリアだね」

「よっしゃあつー！」

採点の結果は上々と言っているものだった。

勉強開始前は中学英語すら壊滅的だった状態だった須藤。

それが僅か2週間ですいに6割取れるまでになったのだから上出来だろう。

柚椰は須藤の書いた答案を一枚一枚捲りながら振り返った。

「国語が76点、数学が68点、社会が79点、理科が67点。そして英語が63点。2週間でここまで伸ばしたのは君の努力の結果だ。良くやったね」

「へへっ、俺だつて本気でやりやこんなもんよ！」

柚椰に褒められて須藤はいつになく上機嫌だった。

「だけど、どれもこれも微妙なミスが目立つのは確かだね。国語と社会に関しては漢字間違いが多いし、数学に関しては勿体ない計算ミスがある。理科は公式を微妙に間違えて覚えてるし、英語はスペルミスがある。まあこれは知識量の問題だから流石に2週間じゃ限度があるか。数学の計算ミスは明日気をつけたほうがいい。小さいミスが積み重なれば点数は伸びないよ？」

「うっ！ そ、それは、まあ……気をつけるけどよ」

急成長したとはいえ流石に褒めつぱなしとはいかず、柚椰は目についた点を1つ1つ指摘した。

その苦言に上げて落とされたと言わんばかりに須藤は項垂れる。

「まあ、そこだけ気をつけていけば心配ないだろうね。明日はいつも通り、リラックスして臨めばいいよ。間違つても寝坊はしないようにね？」

「分かつてるつて、こんだけ頑張つて当日寝坊でテストすつぽかすとか笑えねえからな」

須藤も言われたことは百も承知のようだ。

「じゃあ、俺はそろそろお暇するよ」

「おう、じゃあな！」

いそいそと荷物を纏めて柚椰は須藤の部屋を後にした。

「欠席者は無し。ちゃんと全員揃っているみたいだな」

ついに迎えた中間テスト当日。茶柱先生が不敵な笑みを浮かべながら教室へやって来た。

「お前ら落ちこぼれにとって、最初の関門がやって来たわけだが、何か質問は？」

「僕たちはこの数週間、真剣に勉強に取り組んできました。このクラ

スで赤点を取る生徒は居ないと思います」

「ほう？ 随分な自信だな平田」

平田の言葉に同調するように、他の生徒たちも自信に満ち溢れた表情をしている。

そんな彼らを見て茶柱先生は愉快そうに口角を上げると、取り出したプリントの束を配り始めた。

最初の科目は社会。知識量が物を言う科目だ。

「もし、今回の中間テストと7月に実施される期末テスト。この2つで誰一人赤点を取らなかつたら、お前ら全員夏休みにバカンスに連れて行ってやる」

「バカンス、ですか？」

「そうだ、そうだなあ……青い海に囲まれた島で夢のような生活を送らせてやろう」

茶柱先生のその言葉に生徒たちは、というより男子たちから一気に何かが吹き出した。

夏、青い海、島、バカンス。それらの単語から男子たちはすぐにある結論を導き出したのだ。

彼らが期待しているもの。それはただ一つ。

女子の水着姿に他ならない。

「な、なんだこの妙なプレッシャーは……」

男子から発せられる気迫に流石の茶柱先生も圧されているのか一歩退いた。

「おい野郎共！ 気合入れろやアツ!!」

「うおおおおおおおっ!!」

変なスイッチが入ったのか、池の口調がおかしい。

しかしおかしなのは他の男子たちも同じであり、彼の煽りに呼応するように咆哮した。

そんなテンションの男子たちを女子は白い目で見ている。

恐らく男子たちが興奮している理由に気づいたのだろう。

「池たち完全に目が血走っているね」

「あはは……」

男子たちの様子を傍観していた柚椰は隣にいる櫛田に話を振る。櫛田はどう反応して良いものかと苦笑いを浮かべていた。

やがて全員にプリントが行き渡り、喧騒は収まり静寂へと変わった。

そして先生の合図と共に、皆は一斉に問題へ取り掛かった。

テスト問題は予想通り過去問と同じものだった。

これならば丸暗記していれば、満点を取ることもさえない。いや、不可能ではない。

生徒たちも昨日過去問を解いていたからか焦ることはなく、スラスラとペンを走らせていった。

2時間目、3時間目と国語と理科のテストも終わっていった。

そして4時間目、科目は数学。

問題は小テストのときのものより遥かにレベルが高いものがズラリとならんでいる。

しかし、これも過去問と相違ない内容だった。

須藤たちは、どうしても理解できないものは潔く諦め、出来る問題を確実に解くことでテストを進めていった。

そして迎えた休み時間。

堀北の勉強会に参加していたメンバーは皆揃って彼女の周りに集まっていた。

「楽勝楽勝！　このまま行けば余裕だな！」

「だな、俺120点くらい取っちゃうかも」

池と山内は手応えを感じているのか余裕そうに笑顔を浮かべていた。

しかし油断しているわけではなく、彼らは最後の教科である英語の過去問を手に持っていた。

「須藤、次で最後だ。君の1番苦手な英語だけど、いけそうかい？」

「ああ、お前と一緒に過去問もやったしな。気合いは十分だ」
「ふふっ、そうか」

柚椰は今回最後のテスト教科である英語が最も苦手な須藤に声をかけた。

しかし、須藤はさして不安そうにはしていない。

昨晩に過去問をしっかりと解いたからか、その表情には自信さえ滲み出していた。

2人の会話から、彼らが昨日の夜一緒に勉強していたことは明らかだった。

「なんだよ黛、お前昨日須藤と一緒に過去問やってたのかよ」

「ああ、須藤の仕上がり具合を確認するためにね」

「別に一緒にやらなくても、過去問暗記するだけなら1人でやってもよかつたんじゃないの?」

「苦手な教科の総濼いは意外と疲れるものだよ? 問題を解いている間に眠くなって気がつけば朝だった、なんてことにならないように一応ね」

「あははっ! 確かに須藤ならありえそうだな〜!」
「だなく〜!」

柚椰の言葉がツボに嵌ったのか池と山内はゲラゲラと笑った。

彼らの大笑いにカチンときたのか須藤が憤慨する。

「おいお前らバカみてえに笑ってんじゃないやねえ! それと黛! 俺は寝落ちなんて間抜けなことしねえよ!」

「そうかい? 現に昨日英語の過去問を解かせたとき、ウトウトしていた気がするんだけど」

「し、して……なくも、ねえけどもよ……」

身に覚えがあるためか、須藤の覇気は一瞬にして霧消した。

「やっぱりしてたんじゃないやねえか〜!」

「黛先生がいてくれてよかつたな須藤〜!」

「う、うるせえ! その英語でテメェらより点数取ってやるから見てろや!」

須藤のその言葉に、池と山内の目がキラリと光った。

「お、言ったな？　じゃあ勝負すつか！」

「1番点数が低かった奴が、勝った2人の言うこと1つ聞くつてのはどうだ？」

「上等だ！」

3人は次の英語のテストの点数で勝負をするつもりらしい。

ルールを設定した彼らは、急いで席に戻ると過去問と睨めっこを始めた。

勝手に盛り上がる3人を、堀北を始めとする先生チームは傍観していた。

「勝手に盛り上がってるわね……」

「でも、勉強で勝負つてのは健全でいいんじゃないか？」

「そうだね、3人ともなんか良い雰囲気だしねっ！」

「彼らのアレは良い変化だと思うよ？　少なくとも、今までとは別人だね」

堀北たちは呆れながらも、須藤たちの変化を良いことだと受け取っていた。

そうこうしているうちに休み時間は終わりを告げ、英語のテストが開始された。

これまでの教科同様、テスト問題と過去問との間に違いはない。

皆落ち着いて問題と向き合い、ペンを走らせていった。

こうして全てのテストが恙無く進められ、無事に中間テストが終わりを迎えた。

「かんぱーい！」

池が缶ジュースを片手に叫んだ。

中間テストは終わり、結果も発表されてから一夜明けたその日の夜。

元赤点組の3人は一堂に結集していた。

勉強から解放された喜びと、退学者が出なかったことに堀北を除き笑顔に溢れていた。

友達と苦勞を分かち合い、共に試練を乗り越える。

これこそ青臭い青春の1ページとでもいうのかもしれないと綾小路は感じ入っていた。

しかし彼はある一点が不満なのか、少し困ったような顔をしていた。

「祝勝会を開くのは構わないんだが……なんで俺の部屋なんだ？」

そう、祝勝会をやっているのは綾小路の部屋なのだ。

どういうわけか皆が揃いも揃って彼の部屋に押しかけ、あれよあれよと言う間にこの状態になっていた。

「だって俺の部屋汚えし。山内と須藤も同じ理由。女の子の部屋ってわけにもいかないだろ？ いや、もちろん俺としては櫛田ちゃんの部屋とか大歓迎だけど」

「じゃあ黛の部屋でもいいだろう」

綾小路は池の話に出てこなかった柚椰を挙げた。

「その黛に聞いたら、綾小路の部屋が良いんじゃないかってさ」

「黛……」

自分を売った柚椰へ綾小路は恨めしそうな視線を送った。

柚椰は須藤たちと談笑していたが、綾小路からの視線に気づくと笑顔で手を振った。

「どうしたの綾小路？ 君も楽しみなよ」

「池に俺を売っておいて、よくもまあそんなに寛いでいられるな」

「それに関しては謝るよ。それにしても、この部屋は随分スッキリしてるね」

柚椰は部屋を見回すとそんなことを言った。

同じことを思っていたのか池も話に加わる

「だよなだよな！ この部屋マジで何もねえし、ゲームとか買わねえの？」

「必要に迫られれば買うかもしれないが……今はいらないな」

「櫛田ちゃんは どう思う？ この部屋殺風景じゃねえ？」

池は櫛田に話を振った。

「え、うーん、私は良いと思うよ？ 簡素だけど清潔感があるし」

「だってよ。良かったな櫛田ちゃんに褒めてもらえて。ハハハ」

私怨に満ち満ちた池が乾いた笑いを漏らしながら綾小路を小突く。

「というか、私は黛君のお部屋の方が興味あるな」

櫛田は柚椰を流し目で見ながらそんなことを言った。

彼女がそう言うと、池は今度は柚椰へと矛先を変えたのか彼へ恨みの視線をぶつけ始める。

「俺の？ ー、俺の部屋も大したもののは置いてないね。流石にこの部屋ほど何も無いわけじゃないけど。ゴチャゴチャ散らかってるというわけでもないし、大して面白くもないかな」

「へえ、そうなんだ」

柚椰の可もなく不可もなくといった返答に対しても櫛田は笑顔だった。

その笑顔はいつも男子たちに向けているものよりも、少し毛色の違うもののような気がした。

「にしても、無事に全員テスト乗り越えられて良かったよな！」

櫛田と柚椰の空間を振り払うように池が話題を変えた。

池の言う通り、彼と彼を始めとする元赤点組は大健闘した。

結果は以下の通りである。

須藤は国語78点、数学68点、社会80点、理科67点、英語70点。

池が国語80点、数学70点、社会72点、理科60点、英語68点。

山内が国語76点、数学72点、社会70点、理科62点、英語67点。

英語のテストの前に取り決めた勝負は山内が負けた。

しかし、どれもこれも小テストのときでは考えられないほどの高得点だったのだ。

「そうだな。赤点どころか全員50点以上取ったわけだし、大成功と言ってもいいんじゃないか？」

「うんうん！ 皆頑張ったよねっ」

綾小路の言葉に同調するように櫛田は笑顔で頷いた。

「櫛田ちゃんと堀北ちゃんのおかげだよな！」

「だな、ほんと助かったぜ」

池と山内は女子2人へ感謝の言葉を贈った。

櫛田は謙遜する様子で2人の言葉を受け取っていた。

もう1人である堀北はその輪に加わらず、1人俯いて静かに小説を読んでいた。

が、葉を挟んで本を閉じると、彼女は1つ深呼吸をして顔を上げた。

「須藤君」

堀北が声をかけたのは須藤だった。

「なんだよ？」

これまで一切話に加わらずに本を読んでいた堀北にいきなり話しかけられて須藤は少し驚いている。

「以前貴方に言ったことについてだけど」

「え、あ、ああ……うん、あれか」

堀北が言っているのは、最初の勉強会の際に須藤に吐いた暴言のことだろう。

それを思い出したのか、須藤は少し苦い顔をした。

しかし、以前のように怒り狂っているというわけではなかった。

寧ろ本人も今の今まで忘れていたのか、怒りというよりは困惑の方が強いようだ。

「あの時、私は貴方の夢が幼稚で、それを目指す貴方を愚かだと言ったわ。でも、貴方は本当に真剣に夢を追いかけているのよね」

「ああ、俺は絶対にバスケのプロになる。それは誰に言われても曲げるつもりはねえ」

須藤は堀北をまっすぐに見つめ、真剣に自分の覚悟を伝えた。

「私には自分には理解できないからといって、結果的に貴方の夢を否定したわ。そしてそれを追いかける貴方のことも。後になって思い返

して痛感したわ。幼稚だったのは私の方だった。自分に理解できないからってそれが愚かなことだと見下していた。分野は違えど、真剣になって何かを目指すことを馬鹿にする権利は誰にもない」

堀北は以前図書室で柚椰に言われたことをその日の夜、部屋に戻って考えていた。

そして、Aクラスに上がろうとしている自分と、プロのバスケット選手になろうとしている須藤との間に優劣などないと気づいたのだ。

再び開かれた勉強会でも、須藤は途中で投げ出さず最後まで勉強と向き合っていた。

その真剣な姿に、堀北は須藤の認識を改めた。

だからこそ自分の言動を悔い改め、今こうして須藤と向き合っている。

「あのときはごめんなさいね。貴方なら、きつと夢を叶えられると思うわ」

そう言っただけだが微笑んだ。

「お、おう……サンキュ。お、俺も胸倉掴んで悪かった……」

堀北からの素直な謝罪に戸惑いながらも、須藤もまた彼女にしたことを謝った。

「おいおいおい！　なんか良い雰囲気じゃーん！」

「だな！　まさか2人が素直に謝るなんてな〜！」

池と山内が我慢できなかったのか2人に大して茶々を入れ始めた。

「バツ！　違えよ！　堀北が謝ったら俺も謝るって決めてただけだ！」

「そうね、須藤君と良い雰囲気になんてなるわけがないわ。勘違いしないでちょうだい」

「おまつ、素直になったと思ったらもう毒舌かよ！」

「ごめんなさい、生憎と生まれつきこうなの」

「ぐうぬ……一瞬でも良い奴だと思っただけ俺が馬鹿だった……！」

「あら、私は良い人よ？　少なくとも赤点候補だった貴方たちの面倒を見たのだから」

「俺が世話になったのは主に黛だわ！　お前よりか黛の方がよっぽど

良い奴だつての！」

「まさか貴方、今回の件で黛君と仲良くなったなんて考えているのかしら？　だとしたら勘違いも甚だしいわね。私は彼の友人だけれど、貴方はその枠にすら入っていないわ」

「お前が決めてんじやねえよ！　俺にとつちや黛はもうダチ通り越して恩人だつての！」

「私にとって彼は初めての友人。つまりは親友よ。貴方のそれとは比べものにならないわ」

「お前にとつてつてただけだろうが！　大体、黛の最初のダチは櫛田でお前は精々3番目かそれ以下のくせに！」

「順番なんて瑣末なことよ。肝心なのはお互いの仲が深いか浅いかなのだから。私と彼は同じ志を持った仲よ。最早友達の枠すら超えているわ」

「訳の分からねえこと言つてんじやねえ！　前からちよつと思つてたが、お前実は結構なバカだろ！」

「バカとは心外ね。14点君の分際でいい気にならないで！」

「だ・か・ら、俺を点数で呼ぶんじやねえ！」

須藤と堀北は今度は勉強会についてやいのやいの言い争いを始めた。

その光景が面白いのか池と山内はゲラゲラと笑っている。

「ねえねえ、須藤君と堀北さん、今度は黛君のことで言い争つてるよ？」

「元々あの2人は水と油なんだろ。たまたま今回だけお互い歩み寄りただけで」

櫛田と綾小路は2人のやりとりを疲れた表情で眺めている。

2人の話題の中心である柚榔はカラカラと笑いながらお茶を飲んでいて。

「でも喧嘩するほど仲が良いとも言うんじやないかな？」

「……前にも言ったが、お前つて結構ポジティブだよな」

「でも良いんじゃない？　喧嘩っていうよりは、じゃれ合いみたいでなんか楽しそう！」

3人は須藤と堀北のやりとりを微笑ましく見守っていた。
こうしてDクラス最初の関門である中間テストは完全に幕を閉じたのだった。

彼と強か少女の休日。

中間テストから早1ヶ月が経過した。

6月も終わりに差し掛かり、もうすぐ夏になろうとしていた。

無事に中間テストを乗り越えたといっても、うかうかしているとすぐに期末テストがやってくる。

そのため、この1ヶ月間に決して中弛みしないようにと一同気を引き締めて授業に臨んだ。

問題児だった須藤たち3人も中間テストで勉強の楽しさを少しでも感じることが出来たからか遅刻もせず、居眠りもしなかった。

そんな日々を送り、今日は6月最後の日曜日。

シヨツピングモールのベンチには、端末を弄って時間を潰している柚椰の姿があった。

休日ということもあり館内は生徒たちで溢れており、各々自由気ままにシヨツピングを楽しんでいる。

柚椰が今日ここに居るのには理由がある。

それは、この1ヶ月先延ばしにしていたある約束のためだ。

「おはよっー」

満面の笑みを浮かべながら榎田がトコトコとやってきた。

彼女こそ柚椰が待っていた相手である。

中間テスト前に彼女と交わした、買い物に付き合うという約束。

お互い中々予定が合わなかったからか、今日の今日まで流れていた約束だ。

「やあ、おはよう」

やって来た榎田に柚椰はにこやかに笑って応える。

「ごめんね、待った？」

「いいや？ 来たばかりだよ」

「ふふっ、そっか」

柚椰の返答が嬉しいのか、柚田はふにやつとした笑みを浮かべる。休日に出会ったから、彼女の服装は当然ながら私服だ。

自分の魅力が分かっているようなそのコーディネートは彼女をより一層引き立てていた。

現に目の前を通りすぎる生徒たちは柚田の私服姿に目を奪われている。

彼女連れの男ですら柚田に見惚れているらしく、横にいる彼女に抓られていた。

「私服、可愛いね。似合ってる」

「えっ!? そ、そうかな……?」

柚田は髪を弄りながら上目遣いでそう尋ねた。

男心を掴んで離さないその仕草に周りで見ている男たちは皆悶絶している。

「ああ、柚田らしくて可愛いと思うよ」

「えへへ、ありがとう!」

柚椰の言葉に柚田は嬉しそうに、少し恥ずかしそうに笑った。

花が咲いたようなその笑顔は彼女の可憐さを最大限に主張させている。

「それで、今日は何か買うのかい?」

「うーん、これって決めてるものはないけど……今日は黛君と一緒に色々見て歩きたいなっ」

「勿論。今日は付き合うという約束だからね。どこでもついて行くよ」

「じゃあ行くっ!」

ひとまずモール内を散策することに決めた2人は、当てもなく歩き始めた。

「そういうえば、2人で休日を通すのは初めてだね」

モール内を歩きながら、ふと柚椰がそんなことを尋ねた。

すると柚田はプクツと頬を膨らませながらジト目で柚椰を睨む。

「誰かさんが中々時間作ってくれなかったもんね」

「すまないね、色々と忙しかったんだ」

「むう……」

まるで仕事に追われている夫のような言い訳に櫛田は一層むくれた。
た。

「櫛田も友達との付き合いとかがあるだろう？ 休日が埋まっていたのはお互い様だ」

「それはそうだけど……」

柚椰の言う通り、予定が埋まっていたのは櫛田も同じだった。

交友関係の広い彼女は、当然ながら遊びに誘われることも多い。

それは女子からだけでなく男子からもだ。

友達というものを大切に行っている櫛田が、その誘いを無下にすることはない。

結果、この1ヶ月のほぼ毎週末の予定が埋められていたのだ。

「でも、男の子と2人きりで過ごすのは黛君が初めてだよ……？」

櫛田はおずおずと柚椰を見上げた。

その顔は少し恥ずかしそうだが、彼女の目はすこぶる真面目だった。

柚椰はその表情から少し意外そうに微笑んだ。

「意外だね。池や山内に誘われなかったのかい？ てつきり何回かあるものと思ってたけど」

その言葉に櫛田は首を横に振った。

「ううん。確かに誘われたけど、いつも他の女の子とか男の子も誘って一緒に行こうって」

「上手く躲してきたということか。賢いね」

「つつーか、アイツら目つきがキモいんだっつ。下心見え見えでマジウザいし」

苦虫を噛み潰したような顔で、櫛田は池と山内への暴言を吐く。

「本性出てる」

「てへっ」

柚椰に注意され、櫛田はチロつと舌を出して戯けた。

全く悪びれない態度に柚椰は頭を抱えた。

「それだけ回避し続けてきた櫛田と、今俺が2人きりで遊んでいるわけか。彼らに見つかったら吊るし上げられるね、これは」

「私のことずつと放つたらかしくしてた黛君が悪いんだもん。見つかったも助けてあげないもんねっ」

櫛田は柚椰を困らせるチャンスと言わんばかりにニヤツと笑った。吊し上げられる原因とも言える彼女に弁護しないと云われた柚椰は頭を搔く。

「じゃあ……実は付き合っています、とでも言えばいいのかな？」

「ふえっ!？」

予想外の返答に櫛田は変な声を出す。

「っ、付き合ってるって、私と黛君が……?」

「ああ、既に付き合っているということにすれば彼らも諦めるだろう?」

「そ、それはそうかもだけど……あう……」

真っ赤になって俯く櫛田にさっきまでの威勢は見る影もなかった。頭の中で柚椰とのあれこれを妄想しているのかその顔からは湯気すら出そうな勢いだ。

そんな彼女の様子に柚椰は仕返しと言わんばかりにニヤツと笑う。

「冗談だよ。そんなことを言ったらもれなく男子たちから公開処刑されてしまう。俺もまだ長生きしていたいからね」

「——っ! 黛君の意地悪っ!」

擲揄われたと理解したのか、櫛田は眉を吊り上げて怒り出した。

そして肩を揺らしてズンズンと先へ先へと歩き出してしまった。

「櫛田? 俺は行き先を知らないんだが、どこに行くんだい?」

櫛田のリアクションから、流石にやりすぎたと思ったのか柚椰が小走りですぐ後を追いかける。

「ふんっ! じゃあ頑張っつについて来ればいいじゃん! 絶対待ってあげないんだから!」

心のこもっていない謝罪に櫛田が揺れるわけもなく、彼女は一切歩を緩めることはなかった。

「椰揄ったのは謝るよ。機嫌を直してほしいな」

「別に……もう怒ってないもん」

先的一幕以降、2人はモール内を追いかけっこをしながら歩き回っていた。

しかし、早歩きで進んでいた櫛田が先にバテたため、結局柚椰に追いつかれていた。

現在、2人は一旦休憩するためにモール内のカフェで一息ついている。

注文したコーヒーが来るまでの間、柚椰は改めて櫛田に謝罪した。櫛田は怒っていないと言いつつも、まだ若干頬が膨らんでいる。

やがてテーブルにコーヒーが運ばれると、櫛田はクルクルとスプーンでコーヒーをかき回し始めた。

「全く、なんで黛君は私にばかり意地悪するのかな……」

「ふむ、1番気兼ねしない相手だからかな？」

「にしてもだよっ！ 初めて会ったときだって、私のこと……」

「可愛いと言ったのは嫌だったかい？」

「嫌じゃないけどさあ……黛君は言い過ぎなんだもん」

「コーヒーを弄りながら櫛田は唇を尖らせた。

「そうかな？ 可愛いなんて君は言われ慣れていると思ったんだが」

「黛君は別だもん……なんかお世辞じゃないっていうか、本心で言ってる気がするから」

「まあ実際に本心だからね」

「っ！ だからそういうところが意地悪なんだよ……」

「プイツとそっぽを向きながら櫛田が恨めしそうにつぶやいた。

「まあまあ。君が可愛いのは事実なのだから、この際置いておこう」

「自分で言っておいてサラツと流さないでくれないかな？ どうせ帆波ちゃんとかにも同じこと言ってるんでしょ」

そっぽを向いたまま、目だけを柚椰に向けて櫛田はそう言った。「どうしてそこで一之瀬が出てくるんだい？」

「初めて会った日に連絡先教えてって私に言ってきたし。なんか、帆波ちゃんのこと高く評価してるみたいだし」

「ああ、あれか」

櫛田が言っているのは、中間テスト前にあった出来事のことだ。

一之瀬と初めて会ったその日に、櫛田は柚椰から連絡先を教えるほしいと頼まれた。

その前の会話で柚椰が一之瀬のことを高く買っていることに少しムツとしていた矢先のことだった。

別段何か言うつもりもないが、なんとなく櫛田は面白くなかったのだ。

「前にも言っただろう？ 一之瀬は甘く見ていい相手ではない。いずれ踏破する壁だとしても、今は友好的な関係を築いておくべきだ」と「それはそうだけど……」

「一之瀬一人の力も勿論強力だが、彼女の真の強さは周りを上手く動かせるという点にある。Bクラスは彼女が主軸であり、同時に彼女の存在こそがアキレス腱だ。彼女とどう関係を築くかでBクラス攻略の難易度は大きく変わる」

「じゃあ、黛君が帆波ちゃんに近づいたのは、Dクラスを勝たせるためってこと？」

櫛田がそう尋ねると、柚椰はコーヒーを飲んで少し黙った。

「表向きの理由はそうだね。俺は堀北の目標に協力するわけだから、先んじて攻略ルートを選んでると思ってくれて構わない」

「ふーん、堀北さんのためなんだ……」

柚椰から堀北の名前を聞いたことで、櫛田は尚一層不機嫌そうだ。「表向きは、と言っただろう？」

「……じゃあ、裏の理由はなんなのさ」

不機嫌さを隠そうともせず、櫛田は半ば投げやりに尋ねた。

その問いに、柚椰は真剣な顔つきになって答える。

「一之瀬を俺の手札に加えたかったんだ。彼女はBクラスだが、上手く引き込めれば非常に優秀なカードになる。性格上スパイにするのは無理だろうが、彼女に協力を仰ぐことは出来る」

「帆波ちゃんを？」

「彼女が動けばBクラスも動く。現状最も協力を求めやすいのがBクラスだ。核である彼女が協力する姿勢をとれば、自ずとBクラスは協力的になる」

淡々と解説する柚椰に櫛田は啞然としていた。

そして、以前彼に自分が服従すると決定付けられたときと同じような寒気を感じた。

彼は自分と同じように、一之瀬のことも利用しようとしているのだ。

「私と同じように、帆波ちゃんのこと情報源として利用するってこと？」

「いいや、情報に関しては君を信じているからそれで十分だよ。一之瀬はあくまでBクラスを動かしたいときに切れるカードということさ。普段は仲の良い友人関係でいようと思う」

「そっか、私で十分、か……」

櫛田は柚椰が自分のことを信じてると言ったことで少しはにかなだ。

単純かもしれないが、柚椰に頼りにされているというのはやはり嬉しいのだ。

先ほどまでのモヤモヤはいつの間にかどこかへ消えていた。

「そうだ、この際だから君に一つやってほしいことがあるんだ」

「なにかな？」

「ちよつと待ってくれ」

柚椰はそう言うのと端末をササッと弄る。

数秒後、櫛田の端末が通知音を発した。

「確認してほしい」

「う、うん」

櫛田は言われた通り、端末を開いた。

通知の正体はプライベートポイントが変動したことを知らせるものだった。

しかし、ポイントが減ったのではない。

寧ろその逆、櫛田のプライベートポイントが一気に増えていたのだ。

元々7万弱あったポイントが37万ポイントになっていた。

つまり今、プライベートポイントが30万増えたのだ。

「な、何これ……!?!」

櫛田はいきなりポイントの桁が一個増えたことに驚きを隠せなかった。

そして思わず端末と櫛田を交互に二度見していた。

「振り込んだのは30万ポイント。今回やってほしいのは、ちよつとしたお遣いかな?」

「お遣いって……30万で黛君は何を買うつもりなのさ」

「ああ、買うのは俺ではなく櫛田、君だよ」

「へ?」

「詳しく話すでしょうか。とりあえずコーヒーでも飲むといい」

櫛田に促され、櫛田は自分が頼んだコーヒーを一口飲む。

同じように櫛田もコーヒーを飲んでいた。

「まずこのお遣いで結果的に得をするのは俺ではなく君だ。そして、そのポイントで買うのは物ではなく……人だ」

「どういうこと?」

言っている意味が分からないと櫛田は首を傾げる。

「君にはさっさとDクラスの女子の頂点に立ってほしいというのは前に言ったね?」

「う、うん」

「そして、現状有力候補なのが君と軽井沢の2人。これは大丈夫かな?」

「うん」

「タイプの違う2人は、当然交友関係の築き方も違う。君は持ち前の

明るさと物腰の柔らかさで相手の懐に入って関係を持つ。反対に軽井沢は己のネームバリューやクラスでの立ち位置によって関係を構築する」

「確かに、私と軽井沢さんはタイプが違うってことは分かるけど。それがどうしたの?」

「彼女が君と対等な立ち位置を形成しているのは何故だと思う? 頭の良さも、人当たりの良さも、勿論見た目でも君の方が上なのにも関わらずだ」

柚椰に問われた櫛田は、暫し思案するそぶりを見せると、やがて一つの答えを出した。

「クラスのリーダーである平田君の彼女だから?」

「正解。平田は品行方正、スポーツ万能、成績優秀。誰彼構わず噛み付いていた頃の須藤に対しても嫌な顔一つせず接するほどの聖人だ。そんな彼はさしずめDクラスの王、キングだ。そして彼の恋人という立ち位置を獲得している軽井沢はさしずめ女王、クイーン。彼女と反目することは、結果として王である平田とも敵対する可能性を秘めている。平田は自分を王だとは思っていないだろうが、周りはそうは思わない。特に目立ちたくない女子たちにとって、平田や軽井沢に目をつけられるというのはこの上なく恐ろしいことだ。軽井沢はそれを理解しているんだよ。クイーンである自分に逆らえるはずもない。逆らえばクラス全体を敵に回すかもしれない。自分の肩書きが武器になることを確信した上で彼女は今の地位を築いているんだ」

「……本ツ当、ムカつく。要は平田君に寄生してるだけの害虫じゃん」
櫛田は軽井沢への嫌悪を隠そうともしないで顔を顰めた。

「だが、当然そんな支配は脆く崩れやすい。恐怖によって支配されている者は、何か要因があれば、些細なきっかけを与えてやれば簡単に支配者を裏切るんだ」

「裏切る、って?」

「5月頭のホームルームでクラスポイントが0になったとき、軽井沢は何をしたかな?」

「……クラスの女子たちからポイントを借りて回ってた」

「そう。二大巨頭の片割れである君にも彼女は声をかけた。君は表向きには、頼まれたら断らない優しいアイドルなわけだからね。だが彼女がメインで標的にしていたのは、女子カーストの中でも下位に属している生徒たちだ。気が小さく、クラスの中に溶け込むことが得意じゃない女子たち。クイーンである彼女がポイントを貸せと言えば、断ることなんて出来はしない。そうして見事、彼女はポイントを集め今尚学生生活を謳歌している」

「改めて聞くと本当腹立つわ……」

「さて、ここで問題だ。傍若無人なクラスの女王にポイントを巻き上げられ、惨めな思いをしていながらそれを表に出せない女子生徒たち。果たして彼女たちは心から望んで軽井沢の勢力に加わると思っかい？」

突然始まったクイズに戸惑いながらも、榎田は再び考える。

しかし、この問題に答えを出すにはそう時間はかからなかった。

「……加わらないと思う。だって、いつまたポイントを強請られるか分からないもん」

「正解。彼女たちは今でも怯えているだろう。軽井沢にポイントを集められることに、彼女の颯爽を買うことに。さて、もう一つ問題だ。クイーンの圧政に怯えていると、そこにクラスのアイドルがやってきた。そして彼女は『クイーンに取られたポイントを代わりに返すよ』と言った……さて、彼女たちは何を思うかな？」

「——っ!？」

榎田はようやくそこで榎田の真意に気づいた。

彼が自分にやってほしいと言っていること。

自分がこれからやるべきことに……

彼女の表情から榎田は自分の意図が伝わったと確信し、笑みを浮かべた。

「正解。彼女たちは深く感謝するはずだ。そしてこう思う。『乱暴な軽井沢さんとは違って、榎田さんは私たちのことを考えてくれるん

だ』『軽井沢さんなんかより榎田さんの方がずっと優しくて良い人だ』『この人についていきたい』『この人の友達になりたい』『榎田さんに付けば、もう怯えなくていいんだ』とね。そして気がつけば、そこには平民の支持を得た新たな女王が誕生している」

榎田は柚椰の言葉に聞き入っていた。

そして想像した。

自分を支持し、自分のことを輝いた目で見てくる者たち。

支持を失い、蹴落とされ、惨めに這いつくばっている軽井沢の姿。

それはなんと素晴らしい光景だろうか。

承認欲求の塊である彼女にとって、それはあまりに甘美な夢だった。

「素敵……」

思わずそう呟いた彼女の表情は、ゾツとするほど冷たく、そして美しかった。

榎田が完全にやる気になったことで柚椰もまたニヤリと笑う。

「軽井沢にポイントを巻き上げられたクラスの女子の顔と名前は把握しているかい？」

「うん、全員覚えてる」

「軽井沢は君には少ない額で譲歩したが、件の女子たちからはもっと多く巻き上げているはずだ。5000か、あるいは8000あたりだろう。だから、1人あたり15000ポイント配ってほしい」

「いい、15000!? で、でもそんなに配ってたら私がどうやってポイントを稼いだか疑われちゃうんじゃない?」

榎田の不安は尤もだった。

Dクラス全体がポイント不足である現状において、そんなに多くのポイントを保有していれば嫌でも的になる。

甘い話には裏があるというのはよくある話だ。

榎田にポイントを盾に、何かされるのではと不安になる可能性もあるのだ。

「いいや、大丈夫だ。もし聞かれたらこう答えればいい。『これは他のクラスの友達から借りて集めた。目の前で困ってる人を助けられないことに比べたら借金くらいどうってことないよ』とね。泣ける美談じゃないか。冴えない自分のためにクラスのアイドルが自分の身を削ってくれたなんてね。別にこの通りに言えとは言わない。でも、必ず結果的に自分のプラスになるようなことを言って誤魔化すんだ。余ったポイントは君の小遣いにして構わないよ」

事も無げに言い放つ柚榔に櫛田は微笑んだ。

「黛君って、やっぱり本性は凄く怖いね……でもそういうところ、私凄く好きかも」

そう言って笑う櫛田の顔は、表の顔とは正反対なまでに邪悪で、そして妖艶だった。

彼はCクラスの王と出会う。

7月。それは学生にとって、1学期最後の月。
今日はその月の初め、7月1日だ。

朝の教室はいつにも増して賑やかというか騒々しい。

何故なら今日は、学校からポイントが支給される日なのだから。
振り込まれるポイントの額は、クラスポイントの値に100を掛けた値と決められている。

つまりクラスポイントの値が高ければ高いほど、貰えるポイントは増えるのだ。

Dクラスは5月頭に、そのクラスポイントを0にしてしまった。
そのため、今日の今日までDクラスの面々は支給額0の日々を過ごしていた。

しかし今日、いや今月こそポイントが支給されるはずだと彼らは確信していた。

理由は言わずもがな、中間テストでの大健闘だ。

皆が皆好成绩を収めた件のテストは、間違いなくクラスの評価を上げたはずなのだから。

しかし、朝端末を確認した彼らはある違和感に気づいた。

そう、ポイントが全く変化していなかったのだ。

「おはよう諸君。今日はいつにも増して落ち着かない様子だな」

ホームルームの開始を告げるチャイムの音と共に、茶柱先生が教室へ入ってきた。

「佐枝ちゃん先生！ 俺たち今月もポイント0だったんですか!? 朝チェックしたら1円も振り込まれてなかったんだけど!」

池の言葉で合点がいったのか、茶柱先生は腕を組んで嘆息する。

「なるほど、それで落ち着かなかったわけか」

「俺たちこの1ヶ月、死ぬほど頑張りましたよ。中間テストだって乗

り切ったし……なのに0のままなんてあんまりじゃないですかね！
遅刻や欠席、私語だって俺ら全くしてなかったはずだし！」

「そう結論を急ぐな。説明してやるから、ひとまず話を聞け」

ヒートアップする池を宥めると、茶柱先生は教室を見回した。

「確かにお前たちは今までとは見違えるほど頑張った。それは私も認めていいる。お前たちが実感を持っていいるように、学校側も当然それを理解していいる」

先生の言葉を生徒たちは黙って聞いていた。

「ではまず、今月のポイントを発表する」

先生はそう言うのと、手にした紙を黒板に広げた。

紙には今月のクラスポイントが各クラス毎に記載されている。

ほぼ全てのクラスが先月の値にプラス100近く加算されていた。

Aクラスはなんと1090ポイントと、入学時の値を上回っている。

「……やっぱりどのクラスもポイントは増えたわね」

張り出された結果を見て、堀北は1人つぶやいた。

彼女は中間テスト前に柚椰としたやり取りを思い返していた。

彼が用意していた中間テストの必勝法。

全く同じ問題が出るという事実を知り、過去問を用いることでテストの点数を上げるという策。

確かに必勝法だったが、同じことを他のクラスもやってくるかもしれないということも事前に分かっていた。

堀北も、柚椰も、そして綾小路と櫛田も。

今回指導役に当たっていた4人は全員その可能性を理解していた。

そして案の定、結果がその事実が的中したことを指し示している。

クラス間の差は今回のテストでは縮まることはなかった。

今回発表されたDクラスのクラスポイントは190ポイント。

そう、確かに増えていた。

0だった値はこの期間で3桁にまでなったのだ。

「え？ なに、190って……俺たちプラスになったってことかよ！」
ポイントが増えたという事実を知り、池が飛び上がって喜んだ。

周りの生徒たちも飛び上がりはしないまでも、皆喜びの表情を浮かべていた。

「やったね、黛君っ！」

「うん、全員の努力の結果だね」

櫛田と柚椰はこの結果を出した喜びを分かち合っていた。

「喜びのはまだ早いぞお前たち。他クラスの連中はお前たちと同等以上のポイントを増やしているだろ。今回は中間テストを乗り切った1年へのご褒美として各クラスに最低100ポイント支給されることになっている」

「でもでも、それでも1ヶ月ちよいでこれって俺ら結構頑張ったってことでしょ佐枝ちゃん先生！」

池は先生が言った前提を踏まえても、この成長度合いは凄いことだろうと主張した。

先生もそれは理解しているのか、呆れたようにため息をつきつつも、その表情は心なしか柔らかかった。

「まあそうだな。ご褒美の100ポイントを差し引いても、お前たちが今回90ポイントを稼いだことは事実だ。5月の時のお前らでは考えられないほどの成果だということは認めよう」

その言葉にクラス中が一層喜びに包まれた。

5月頭のホームルームであまりに冷たい言葉を浴びせかけてきた茶柱先生が、今回自分たちのことを僅かながらに褒めたのだ。

定期テストで結果を出すということが、クラスポイントに良い影響を与えるということが証明された。

その事実だけでも、この1ヶ月の努力は無駄ではなかったことが実感できたのだから。

「黛君の言ってた通りだったね。定期テストで良い成績を出せば報われるって」

「ね！ 頑張って勉強して良かったかも！」

「ホントホント！ 黛君、ありがとね！」

平田の言葉に乗っかるように女子たちも皆ポイントが増えたことによる喜びと、柚椰への感謝を表している。

しかし柚椰は彼らの言葉に首を横に振った。

「いや、この結果は全員で勝ち取ったものだよ。誰か1人でもやる気にならなかつたらこうはならなかつた。褒めるなら全員、頑張った自分自身のことを褒めてあげるんだ」

柚椰が言ったことは事実だった。

もし、誰か1人でも諦めていたら、テストなど無理だと匙を投げていたら。

テストで結果を出すことはおろか、他の生徒が稼いだ分のプラスを打ち消してしまうことだつて考えられた。

しかし、今回Dクラスは皆が一丸となつてテストに臨んだ。

その事実こそ讃えられるべきことだと柚椰は指摘した。

柚椰の言葉を謙遜と受け取つたのか、先ほど柚椰を褒めていた女子たちは彼にうっとりとした視線を送り始めていた。

「あれ？でもさ、クラスポイント増えてんのになんで1ポイントも振り込まれてないわけ？」

浮かれ気分から一転、池は至極当然の疑問に原点回帰した。

その言葉に皆我に返つて茶柱先生を見る。

クラスポイントは190。つまり今月支給されるポイントは19000ポイントのはずだ。

にも関わらず、ポイントは全く振り込まれていない。

一体どうしてなのだろうか、という疑問が彼らに渦巻いている。

しかしその疑問に先生はすぐに答えを出した。

「今回、少しトラブルがあつてな……1年生のポイント支給が遅れている。お前たちには悪いが少し待っていてくれ」

「えーマジっすかあ？学校側のトラブルなんだからなんか詫びポイントとかないんすか？」

ソーシャルゲームの詫び石のようなものを池は求めた。

池と同じような不満は他の生徒たちも持っていた。

20000近くポイントが支給されるはずだったのだから、その不満はある種当然と言えるだろう。

「そう責めてくれるな。私にはどうすることも出来ん。トラブルが解

消次第ポイントは支給されるはずだから我慢してくれ。尤も、ポイントが残ってれば、だがな」

茶柱先生は最後に意味深な言葉を残してホームルームを締めくくった。

ホームルームが終わるや否や、柚椰の端末が通知を発した。「ん？」

端末を取り出し、確認するとそれはメールだった。

三年生のとある男子生徒からのメールだ。

『黛、数日前に特別棟で男子生徒が喧嘩してる動画が撮れたから送る。制服からして1年生だと思う』

その文面と共に送られてきたのは1つの動画ファイル。

一般生徒のトラブルの動画の提供料は1本20000ポイントだ。

柚椰はメールを確認し終えると、すぐに送り主である男子生徒の番号を入力した。

そして20000ポイントを入金し終わると、先のメールの返事を打った。

『情報提供ありがとうございます。先程ポイントを入金させていただきました。今後とも、いい取引を期待しています』

「やあ、久しぶりだね坂柳」

「ええ、お久しぶりですね黛君」

昼休み、食堂には柚椰と坂柳の姿があった。

別に2人は一緒に昼食を食べようと約束していたわけではない。

柚椰が食堂に来た時には既に、坂柳はテーブルに座り、優雅に紅茶を飲んでいた。

4人掛けのテーブルを1人で使っていたため、柚椰は彼女の向かいの席に座っただけなのだ。

「1人で昼食かい？ 意外だね」

「いいえ、普段はクラスの方と一緒にですが、今日は特別です。……予感がしたのですよ。今日このお昼休みの時間に貴方がやってくるだろう、と」

坂柳はフツと微笑んだ。

ティーカップを片手に微笑むその姿は、一つの絵画のような美しさがあつた。

「さしずめ中間テストの結果について、かな？」

「いえいえ、貴方がいればDクラスは中間テストなどどうにでもなるということは読めていました。しかし……問題児だった生徒を中位以上の成績を取らせるまでに持っていたことは流石ですね」

「Aクラスの女王様に褒められるとは光栄だね」

「ふふつ、相変わらずドライですね。中間テストでは過去問を用意したのですか？」

「ああ、駄目押しのカードとしてね。その口ぶりだと君もやったようだね」

「ええ、使えるものは使っておくに越したことはありませんので」

「君も相変わらず頭が切れるね。流石だ」

「お互い様、でしょう？」

2人は互いに笑みを浮かべながら、互いのことを褒め合う。

建前抜きで、相手が自分にとって認めるに足る強敵だと理解しているが故に。

「そういえば、最近ポイントはどうですか？」

坂柳は柚椰のプライベートポイント事情が気になるのか、そんな質問をした。

「ああ、6月中に前にやったのと同じようなやり方で稼がせてもらったよ。1ヶ月空ければ相手もポイントが貯まるだろうからね。いつまでも通用する手ではないだろうけど、稼げるうちに稼いでおくに越したことはない」

「なるほど、では以前見せていただいた額よりもさらに増えていると
考えてよろしいのですね？」

「まあね。でも稼いだ分、一気に使うことも多いよ」

「ほう、それは如何様な？」

「それは秘密だ。君も知っているだろう？ ポイントがあれば出来る
ことは増える」

柚椰は敢えて言葉を濁したが、坂柳は暗に柚椰が言っていることに
気づいていた。

その証拠に、彼女は感慨深そうに紅茶を一口飲んだ。

「やはり貴方は面白いですね……Dクラスにはつくづく面白い方がい
らっしゃるようで」

「君がそう評価する相手は……綾小路清隆、かな？」

柚椰がそう尋ねると、坂柳は僅かに瞳孔が開いた。

僅かであるため分かりにくいだが、彼女が驚いていることは確かだ。

「まさかそこまで見抜いているとは……どうしてそう思ったのか聞か
せていただいても？」

「ウチの担任が俺と彼を指してお姫様に言ったんだよ。Aクラスに上
がるためのヒントになるはずだ、とね」

「なるほど……」

「わざわざそう言った件の人間がテスト平均50点。難問クリアして
おきながら中学レベルの問題を間違える。彼は間違っても凡人なん
かじゃない。あれは紛れもない異常者だ」

「ふふつ、クラスメイトに対して酷い言い様ですね」

「能ある鷹はなんとやらと言うが、彼は完全に壊れている。凡人に憧
れる天才などというものは創作物の中にはありふれているが、彼は少
し違う。俺が思うに……綾小路清隆は人間に憧れる無機物、と
いったところだね」

初めて視たときから、柚椰は綾小路が普通の人間ではないことに気
づいていた。

普通に話している分には、ただの人間とそう変わらない。

しかし、綾小路という人間はあまりに人間臭くない。

人特有の揺らぎがあまりにも感じられないのだ。

「無機物、ですか……薫君は面白いことを言いますね」

柚椰の分析が愉快だったのか、坂柳はニコリと笑った。

「確かに、私が興味を示している対象は綾小路君ですよ。彼のことは以前から知っていましたので」

「ほう、不思議な縁もあつたものだね」

「詳しく話すことは出来ませんが、私は彼の秘密を知っています。一つ言えることがあるとすれば……私にとって、彼は貴方と同様評価するに値する人、ということですよ」

「なるほどね。まあ、いいよ。今のところ彼をどうこうする気はないからね」

柚椰はそれ以上は深く触れないことにしたようだ。

坂柳が仄めかしていることは、恐らく綾小路にとって爆弾になりうるもの。

それを握ることは、転じて彼を掌握することでもあるが、同時に敵対するリスクも含まれている。

今現在、柚椰に綾小路と敵対するメリットはないのだ。

だからこそ、今はそれ以上聞くつもりはなかった。

「おうおう、今日は珍しく男と2人で逢引か？　坂柳」

2人が話していると、1人の男子生徒がゆっくりと彼らのところへ歩いてきた。

背丈はわりと高く、やや癖のある黒髪ロングヘアの男子。

目つきは鋭く、餓えた獣のような獰猛さを孕んでいた。

男からの問いかけに嘆息しながら坂柳はティーカップを置いた。

「そんな貴方も、今日はお連れの方がいらつしやらないのですね。龍園君？」

坂柳はその男子生徒の名前を呼んだ。

龍園という単語から、柚椰はすぐさま彼が何者であるかを察した。

以前図書室でCクラスの生徒たちといざこざがあつたときに1人の生徒が口にしていた名前だ。

つまり、目の前の男はCクラスを束ねているリーダーであるとして理解する。

「食堂に来てみれば、テメエが男と2人で見えるのが見えたからな。他の奴らはどっか別のところで適当に食ってると追い出したまでだ」

「相変わらず乱暴ですね。クラスメイトに対して随分な仕打ちじゃないですか」

「はっ！ テメエには言われたかねえな」

坂柳の指摘を龍園は鼻で笑った。

すると彼は、今度は坂柳と一緒にいる柚椰に目を移した。

「それで、テメエはどこのだいつだ？」

「Dクラスの黛だよ。よろしくね龍園君」

ギロリと睨むように見られていながらも、柚椰はカラカラと笑いながら自己紹介をした。

ふてぶてしい態度と映ったのか龍園は不機嫌そうに舌打ちした。

「んだよ、雑魚クラスの奴か……にしても、坂柳が雑魚とつるんでるなんてどういう風の吹き回しだ？」

「黛君は雑魚ではありませんよ。私は彼のことを高く買っています。もしAクラスであったなら、どんな手を使ってでも手に入りたいほどに」

「ほう？」

坂柳の言葉に引かかったのか、龍園は再び柚椰をジロジロと見始めた。

「ツラは良い。身体つきも悪くねえ。だが、坂柳が評価してるってことは……お前、知能犯か？」

「おや、まさかの犯罪者呼ばわりかい。言っておくと俺に前科はないよ？」

「ふん、肝も据わつてるとききたか……面白え」

柚椰の返しがお気に召したのか、龍園は彼の隣にドツカリと腰を下ろした。

「改めて名乗るぜ。俺は龍園翔。Cクラスの王だ」

顎を上げ、柚椰を見下ろすように龍園は名乗った。

「王、ね……独裁者の間違いじゃないかい？」

「ハハハ！ 独裁者ときたか。こりや傑作だ！」

龍園は心底可笑しいとばかりにゲラゲラと笑う。

「だが、言い得て妙だな。力で振じ伏せたことは確かだぜ？」

「君のところの奴隷さんが中間テスト前に俺たちDクラスに喧嘩を売ってきたことは知っているかい？」

「あん？ なんだそりゃ」

寝耳に水だったのか、龍園は片眉を上げた。

「静かにするべき図書室で、俺たちDクラスを不良品だなんだと笑いながら馬鹿にしてきたんだ。まあ流石にこちらも馬鹿にされることは仕方ないと割り切ってはいたけどね。主に馬鹿にしてきたのは山脇という生徒なんだが、ご存知かな？」

柚椰はかなり脚色して龍園に事情を伝えた。

実際初めに騒いでいたのは柚椰たちの方なのだが、それを割愛してあたかも山脇がいきなり馬鹿騒ぎをしてきたように伝えた。

龍園が事情を知らないと分かるや否や、躊躇なく相手方に非があるような言い回しをする辺り、柚椰の狡猾さが伺える。

「ああ、あの馬鹿か。ちよつとボコボコにしてやったらすぐに従順になった奴だぜ？ そりや悪かったな。いくら雑魚に雑魚と言っただけとはいえ、TPOを弁えねえのはあの馬鹿の落ち度だ。お前が望むなら、後で俺が制裁しておくが？」

「どうやら龍園は乱暴ではあるが、人並みの常識は弁えているらしい。」

「いや、構わないよ。君が主導でやらせたわけではないんだ。こちらももうそのことは水に流しているんだ。ここはお互い様ということにしよう」

「――！ ククツ、なるほどな。どうやら俺は一本取られたみてえだ」
龍園は柚椰の狙いに気づいたのかククツと笑った。

「俺が暴力だけしか能がねえただの乱暴者かどうか、今の問答で確かめたんדרろ？」

「ふふつ、正解。君が山脇の行動を肯定し、それがどうしたと突き返す

ようだったなら、君は所詮ただの不良でしかない。でも君はDクラスが雑魚だということは認めながらも、彼の行動には非があることを理解していた。それは龍園翔という王が、冷静に物事を判断できる独裁者だという証拠だ。頭の切れる独裁者というのは厄介だね」

「そういうお前も、随分と頭が回るじゃねえか。まさかDクラスにお前みたいなのがいるとはな……面白くなりそうだ」

カラカラと笑う柚椰と、ギラギラとした目で笑う龍園。

双方共に違いの認識を改めた。

相手は決して、甘く見ていい相手ではないと理解したのだ。

「お分かりいただけましたか？ 彼の優秀さが」

「ああ、所詮雑魚の集まりだと思ってたが訂正する。コイツがいる以上、Dクラスも潰すべき相手だ」

坂柳の言葉を肯定した龍園は、最後にチラリと柚椰を見ると席を立った。

「俺はもう行くぜ。じゃあな坂柳」

「ええ。では、またいずれ」

「そして黛、お前のことは今日でしつかりと覚えさせ？」

「カツアゲとかはやめてほしいな。あと出来れば闇討ちもね」

「ハッ、言ってる馬鹿が」

坂柳と柚椰、それぞれに言葉を残し、龍園は食堂を出ていった。

「坂柳、紅茶が冷めているよ」

「……龍園君に今度会ったときに請求します」

残されたテーブルで、2人がそんなやりとりをしていたことを龍園は知ることはない。

彼らは不良少年を信じる。

翌朝、ホームルームの席で茶柱先生から新たな火種が投下された。いつもは最小限の言葉だけで教室を出ていくはずの彼女から伝えられたのは耳の痛い連絡事項だった。

「今日はお前たちに報告がある。先日学校でちよつとしたトラブルが起きた。そこに座ってる須藤とCクラスの生徒との間での騒動。端的に言えば喧嘩だな」

先生のその言葉に、教室中がざわざわと騒がしくなる。

須藤とCクラスが揉めたこと、責任の度合いによつては須藤の停学。

そしてクラスポイントの削減が行われること。

淡々と、粛々と先生は状況を説明した。

話す内容は決してどちらか一方に肩入れするようなことはなく、あくまで学校側としての中立的な説明だった。

「その……結論が出ていないのはどうしてなんですか？」

平田から至極当然の質問が飛んだ。

暴力沙汰であり、状況も、当事者も分かっているのに処分が未だ下されていないことは不可解と言う他ない。

「訴えはCクラスからだ。どうやら一方的に殴られたらしい。ところが真相を確認したところ、須藤はそれを事実ではないと否定した。彼が言うには、先に仕掛けたのは自分ではなくCクラスの生徒たちの方だ。彼らに呼び出され、喧嘩を売られ、殴りかかってきたというのが須藤の主張だ」

「ああ、俺はアイツらに呼び出されて、暴言を吐かれた。そして拳句の果てに殴りかかってきたから反撃したただけだ。俺から仕掛けたなんてのはアイツらの嘘だ」

「だが証拠がない。違うか？」

「……」

先生からの指摘に須藤は黙る他なかった。

「今のところ真実は分からない。だから結論が保留になっている。どちらが悪かったのかでその処遇も大きく変わるからな。目撃者でも居れば話は早いのだがな……この中に須藤たちの喧嘩を目撃した者がいれば拳手をしてくれ」

先生はそう問いかけるが、手を上げる生徒は1人もいない。

「残念だが、このクラスには目撃者はいないようだな」

「くっ……！」

目撃者ゼロという現状を突きつけられ、須藤は歯噛みした。

「学校側も目撃者を探すために各クラスの担任の先生が詳細を話しているはずだ」

それは学校側としては当然の措置だった。

早急に処分を決定しなければならぬ以上、全学年の全クラスに詳細が通達されるだろう。

「とにかく話は以上だ。目撃者の有無や証拠の有無。それらを含め、最終的な判断は来週の火曜日には下されるだろう。それではホームルームを終了する」

話は終わりだと言わんばかりに、茶柱先生はスタスタと教室を出て行ってしまった。

先生が出て行くと、教室は再びざわつき始めた。

皆が皆、須藤に対して不満ありありと行った視線を向けている。

当の本人である須藤は冤罪とはいえクラスに迷惑をかけている現状に歯を食いしばって俯いていた。

ボソボソと小声で須藤への陰口が吐かれ始めたそのとき、1人の男子生徒が須藤のところに向かっていった。

中間テスト以降、須藤の面倒を見ていた柚椰である。

「ま、黛……」

近づいてきた柚椰に気づいた須藤が弱々しく顔を上げた。

対する柚椰は何の笑顔も浮かべず、座っている須藤をただ見下ろしている。

柚椰の雰囲気がいつもと違うと分かり、須藤は一層縮こまる。

「悪い……前に暴力沙汰はやめろって言われたのに結局やっちゃまった」

「……」

しおらしく謝る須藤に柚椰は何の言葉も返さない。

彼の目は冷たく、普段の彼からは想像も出来ないほどに怖い。

柚椰から向けられるその目に、須藤は背筋が冷たくなるのを感じた。

「健、廊下に出るんだ」

柚椰の口から発せられたその言葉は、あまりに低く、そして冷たいものだった。

その声に、須藤は一層ビクリと怯えた。

周りで見ていた生徒たちも、いつもと違う柚椰の態度に黙り込んでいる。

「ま、黛?」

「同じことを二度も言わせないでくれ。廊下に出るんだ」

戸惑う須藤に、柚椰は再度命令を下す。

顎で教室の外を指し、これ以上言わせるなとばかりに睨んだ。

須藤は素直にコクリと頷くと、椅子から立ち上がった。

そして2人は静かに歩き出すと教室を出ていった。

「な、なんか黛の奴、いつもと雰囲気違くない?」

急に静かになった教室に、池の戸惑いの声が響いた。

「だな。いつもはヘラヘラしてるっていうか、笑ってることが多いのに」

「だよな。それに今、須藤のこと名前で呼んでたよな……?」

池と山内の会話に、生徒たちもざわざわとし始める。

皆が皆、柚椰の変化に戸惑っていた。

「さっきの黛君、なんか凄く怖かった……」

「うん、いつもは優しい感じなのにね……」

女子たちも普段の優しい柚椰のイメージとかけ離れたさっきの姿

に怯えている。

しかし1人だけ、この教室の中で唯一柚椰の豹変ぶりを知ってる者がいる。

「黛君が人のことをいきなり名前で呼ぶときって実は決まってるんだ」

そうつぶいたのは櫛田だった。

彼女のそのつぶやきを聞いたことで、皆の視線が彼女に集中する。

「櫛田ちゃん知ってるの？」

一同を代表して池がそう尋ねる。

「うん、前に一回見たことがあって……」

櫛田はその一回の対象は自分であったことは伏せて伝えた。

皆が話の続きが気になると、彼女は詳しく話し始めた。

「黛君が急に名前で呼ぶときは、本気で怒ってるときだよ。多分、黛君は今回の事件を起こした須藤君に対して怒ってるんだと思う」

その説明に、生徒たちは合点がいった。

この1ヶ月、須藤が真面目になったのは柚椰の存在が大きかった。

須藤は彼の言うことは素直に聞いていた。

柚椰も、そんな須藤のことを気にかけていた。

そんな矢先に須藤が暴力沙汰を起こしたのだ。

柚椰が怒るのも無理はないと皆は思ったのだ。

「まさか今度は2人が殴り合いの喧嘩とかしないよな……？」

「流石にそれは……ないとは言えねえな」

池と山内のつぶやきが静かな教室に響いた。

教室を出た柚椰と須藤は階段の踊り場まで来ていた。

1時間目まであまり時間はない。

そのためさっさと事を済ませなければならぬ。

「事情を全部説明するんだ。嘘偽りなく全て」

「……分かったよ」

柚椰の命令に少し嫌がるそぶりを見せた須藤だが、やがてポツポツと事情を説明し始めた。

「呼び出したのは同じバスケット部の小宮と近藤だった。原因は多分俺が今度の大会でレギュラーになるかもって話が持ち上がったからだと思う。1年でレギュラー候補に選ばれたのは俺だけだったし、アイツらとは部活中にも何度か言い争ったりしてたからな。だから俺が選ばれたことへのやつかみかなかだと思っただ」

「そうと分かっついていてどうして出向いたんだい？ 無視すれば良かったはずだろう」

「ここで無視しても絶対また部活中に色々言われると思っただからな。いい加減終わらせたいと思っただよ。それで特別棟に行ったらアイツら2人以外にも石崎っつー奴がいてな。石崎は2人のダチらしくて、ついてきたらしいんだ」

「用心棒代わり、ということか」

「多分な。それで小宮と近藤は俺に『Dクラスのお前がレギュラーなんて気に食わない』、『痛い目見たくないやバスケ部をやめろ』って言ってきたんだよ」

「それで頭に来て殴った、と?」

柚椰がそう尋ねると須藤は首を横に振った。

「俺は殴る気なんてさらさら無かった。普通に断って帰ろうとしたんだよ。でも俺が挑発に乗らないと分かったらアイツら……」

「どうした?」

急に黙った須藤に柚椰が続きを促す。

すると須藤は言いにくそうに、言いたくなさそうに口を開いた。

「俺が挑発に乗らないと分かったら、今度はクラスのお前の悪口を言い始めたんだよ。『お前が尻尾振ってる糞は所詮口だけの腰抜け野郎だ』って。多分、テスト前に揉めたCクラスの奴らが自分を強く見せるために嘘をばら撒いたんだ。それだけじゃねえ。堀北のことも『不良品のくせに口ばっか達者な落ちこぼれだ』。挙句『お前みたいなク

ズに優しくする奴らもどうせ皆クズなんだろ』ってよ……最後は、違
うってんならかかってこいって言いながら殴りかかられた。それで
ブチ切れて……」

「殴ったのか」

須藤はコクリと頷いた。

「俺のことだけならまだ我慢できた。お前に釘も刺されてたしな。で
も、俺を助けてくれたお前と堀北を……ダチのことまで馬鹿にされた
のが許せなかった。そんで気づいたらボコボコにしてた」

つまり須藤を怒らせた直接的な原因は、彼の仲間への暴言だったと
いうことだ。

須藤は決して自分勝手な理由で人を殴ったのではなかったのだ。

Cクラスの生徒たちは、須藤にバスケット部を辞めさせるために脅迫し
失敗した。

しかし、彼に暴力を振るわせるために彼の仲間のことでも中傷した。

結果、須藤は怒り、暴力を振るった。

そして後日、Cクラスの生徒たちは須藤に襲われ殴られたと嘘をつ
いて学校に訴えた。

これが事の一部始終らしい。

「殴ったことは認める。でも俺は自分から喧嘩ふっかけたりはして
ねえ！ 信じてくれ！」

須藤は柚椰に必死になって懇願した。

どうか信じてほしい。味方でいてほしいと願った。

他の人はまだいい、ただ柚椰にだけは信じてほしいと須藤は思っ
ていた。

「ああ、信じているよ」

須藤の訴えに、柚椰は微笑みを以って応えた。

「君がそう言うのなら俺はそれを信じる」

「で、でもお前キレてたんじゃ……」

先ほど教室から自分を連れ出したときの態度から、須藤は柚椰がキ
レていると思っていたようだ。

「そのまま教室に居たら、君に対して誰かが直接なにか言ってくることは読めていたからね。だからそうなる前に強引に連れ出しただけだよ」

「な、なんだよ……キレてたんじゃねえのかよ……」

緊張が解れたのか須藤は一気に疲れたように項垂れた。

「ひとまず今後の対応について考えるところでしょう。教室に戻るよ」

「クラスの奴らにも説明すんのか？」

「それが得策だろうね。少なくとも君がただ殴ったという認識のまま協力を仰ぐよりは遥かに事が進みやすい」

「そりやそうだけだよ……なんか小っ恥ずかしいっつーか」

須藤は喧嘩の原因を知られるのが恥ずかしいようだ。

自分のことでキレて殴ったならまだいいものの、仲間のためにキレたというのは少し言いづらいらしい。

「寧ろ良い機会だと俺は思うけどね。入学当初のイメージを払拭しておくのは君にとってプラスになるはずだ。君が仲間想いの奴だと知れば、必然的に君の評価は上がる。それは転じてクラスの結束を高めることにも繋がる。良いことづくめだ」

「……分かったよ。ちゃんと説明すりゃいいんだろ」

「ああ、俺も一緒に居てあげるからそうした方がいい」

2人は話を終え、1時間目に間に合わせるために教室へ向かった。

「それと、1つ君に約束しておくよ」

教室に向かっている途中、歩きながら柚椰が須藤に話しかけた。

「約束？」

「ああ。この事件の終息が学校側の独自の判断ではなく、双方の主張を吟味するための審議が行われると仮定する。もし、Cクラス側が今の主張を崩さず、あくまで『須藤が自分たちを呼び出し、一方的に殴りかかってきた』と証言した場合――」

そこで言葉を区切ると、柚椰は須藤を真っ直ぐ見つめた。

身長差的に見上げる形となっているが、柚椰は強い眼差しで宣言した。

「必ず君を勝たせてあげよう。君には何の処分も下させない。完全な勝利を手に入れる。だから安心してついてきていいよ」

その言葉に、須藤は目を見開いた。

「必ず勝たせるって……目撃者もまだ見つかつてねえんだぞ?」

「心配なくていいよ。目撃者は必ず見つけ出す。それに、俺は君が潔白だと証明するために事を起こすんじゃない。相手が嘘をついていることを証明するために動くんだ」

「どういうことだよ?」

「君が潔白だと証明することは、はっきり言って不可能だ。相手に怪我をさせている以上、この点においてお咎めなしとはならない」

「おい、さつきお前無罪にするって言ったじゃねえか!」

「よく考えてみなよ。君は相手を殴った。それは事実だろう? でも、こと審議の場において、問題はどちらが嘘をついているかなんだ」
「嘘をついてるか……?」

「相手は君に全て原因があり、自分たちは何もしていないというスタンスを取っている。それが嘘だと証明された場合、学校側はCクラスに対してどう思うかな?」

「そりやお前、嘘ついて訴えたんだから良く思うわけが……!?!」

須藤はそこで何かに気づいたのか口をポカンと開けた。

「気づいたかい? 審議において嘘の証言、偽証というのは最も重い罪だ。それまでの前提が全部嘘になり、その審議自体の意味を失うことになるからね。たとえそこで焦って主張を変えたとしても、審議する側はまた嘘なのではないかと疑う。つまり、今のまま審議が始まり、そこで相手の偽証が証明できれば、その時点で相手の負けは確定する」

「そういうことか……! でも、嘘を証明するってどうやるんだよ?」
「大丈夫だよ。自分のクラスメイトを、そして俺を信じてついてくればいい」

柚椰のその言葉に、須藤は黙って頷いた。

彼はDクラスを、柚椰を信じることに決めたのだ。

「というわけだ。須藤は自分から喧嘩を仕掛けたわけではないと言っている」

教室に戻り、1時間目が終わった休み時間。

柚椰は須藤を連れて、皆の前で事件の詳細について説明した。

最初は須藤の説明に半信半疑だったクラスメイトも、間に柚椰を介したことで僅かながら信用しているようだ。

「彼はあくまで俺たちの、Dクラスのことを悪く言われて頭に来た。そして向こうが先に殴りかかってきたから殴り返した。以上が事の詳細だよ」

「黛はそれを信じるのかよ?」

一同を代表して池がそう尋ねる。

周りの生徒も柚椰の返答を待っているのか、彼に視線を向けていた。

「ああ、信じる。皆も最近の彼が真面目だということは分かっているはずだ。もう彼は自分勝手な理由で人を殴るような人間ではないと俺は信じている」

「私も須藤君を信じるよっ!」

柚椰に追従するように、櫛田も須藤を信じると言った。

「確かに、前の須藤君は乱暴だったかもしれない。でも、今は遅刻もしないし授業中居眠りもしてない。中間テストだって頑張ってたんだもん。その頑張りを自分で無駄にするようなこと、須藤君はしないと
思う」

「僕も、須藤君を信じるよ」

次に声をあげたのは平田だった。

「須藤君は同じクラスの仲間なんだ。だから、精一杯協力するのが友達だと思う」

「だよー。ほんとに無実なんだとしたら可哀想じゃん」

平田に続くのは彼の彼女である軽井沢だった。

クラスのキングとクイーンが協力する姿勢を取った。

そしてクラスのアイドルである櫛田もまた、須藤を信じると言った。

その効果は絶大だったのか、クラスの雰囲気は須藤を信じるといった方向へ固まり始めた。

「私、友達に目撃した人がいないか聞いてみるね」

「僕も、サッカー部の皆に当たってみるよ」

「あたしもー」

櫛田と平田、軽井沢の3人は目撃者を探す算段を立て始める。

その光景を眺めながら、柚椰は須藤に話しかけた。

「どうだい？ 真面目にやっていてよかっただろう？」

「おう……中学のときじゃ考えられねえ」

「真面目になれば、こうして君にとってプラスになって返ってくるんだよ」

「……マジでありがとな、黛」

「礼なら皆に言いなよ。協力してくれる皆にね」

柚椰に促され、須藤はクラスメイトたちを見回した。

「お前ら、ほんとにありがとなー！」

須藤がそう言うときクラスは一瞬沈黙した後、一気にざわついた。

「何だ須藤、気持ち悪いなく！」

「っーか礼言うのは早えーよ須藤！ まだ目撃者見つかってねえんだからー！」

池と山内は素直な須藤に対して茶々を入れ始めた。

他の生徒たちも同感なのか、皆可笑しそうにクスクスと笑っている。

「うっせー、協力してくれることに礼言ったんだよ……」

池たちに言われたことは尤もだと思ったのか、須藤は頭を掻きながらぼやいた。

しかし、その表情は今までの彼とは見違えるほどに柔らかく、朗らかなものだった。

彼らは証拠集めの算段を立てる。

昼休み。柚椰を始めとするいつものグループは食堂に集まっていた。

メンバーは柚椰、堀北、綾小路、櫛田。

そしてお馴染み池と山内と須藤の3人を入れた計7人だ。

綾小路は参加したくなさそうにしていたが、櫛田に誘われなし崩し的に同行する形となっていた。

「一難去ってまた一難、ね……頭が痛くなるわ」

堀北は頭を抱え深々とため息をついた。

「うぐ……面目ねえ」

耳が痛い話であるため、須藤もいつものキレがない。

普段であればここで堀北と軽口の応酬が始まるのだが、今回は事情が事情のため須藤はかなり小さくなっている。

「で、でもさ！ 須藤君は私たちのために怒ってくれたんだからさ、ねっ？」

シユンとしている須藤に櫛田がすかさずフォローを入れる。

「そうだね。なんでも俺や堀北を馬鹿にされて怒ったらしいよ？ 泣ける話じゃないか。そうは思わないかい？」

「別に赤の他人にどうこう言われようと私は気にも留めないわ。勝手に義憤に駆られて拳句の果てに手を出すなんて、本末転倒もいいところじゃない」

「うぐっ……」

柚椰も櫛田に乗っかる形で堀北を諭そうとしたが、彼女はそれをバツサリと一刀両断。

彼女の言葉の矢が再び須藤に突き刺さった。

「ただまあ、単に貴方が自分勝手な理由で人を殴ったのではないということは信じてあげるわ」

「堀北……！ お前……」

須藤はキラキラした目で堀北を見た。

「最近の貴方の行いを考慮した上での判断よ。別に貴方とは友達でもなんでもないのでから勘違いしないで」

「お前は二言目には毒吐かないと死んじまう病気が何かか!？」

間髪を容れずに毒を吐く堀北に須藤は堪らずつつこんだ。

「でもさ、前の堀北ちゃんなら須藤のことなんて信じる信じない以前に見捨ててたんじゃね？」

「だよな。ちよつと前だったらこうして一緒に食堂にいることすらありえなかつたし」

池と山内は堀北が多少なりとも須藤のことを評価していると指摘した。

2人のフォローに綾小路が便乗する。

「そうだな。前の堀北なら『須藤君の弁護なんてする気は無いわ。愚か者はさっさと退学してほしいわね』とか言ってただろ」

「……綾小路君、ひよつとしてそれは私の真似かしら？ 非常に不快なのだけれど」

綾小路の全く似ていない、というより似せる気のないモノマネに堀北がギロリと眼光を鋭くする。

「ぷっ！ くくくっ……！ 綾小路、お前それっ……！」

「全っ然似てねえ！ 言ってる言葉はそれっぽいけどマジで似てねえ……！」

池と山内は綾小路のモノマネがツボに入ったのか腹を抱えて悶絶している。

その様子に堀北の目つきが一層鋭くなる。

「綾小路君、貴方の不愉快なモノマネがこの2人はお気に召したみたいよ。よかつたわね」

「顔と言動が一致してないぞ」

睨みつけながら言ってくる堀北に綾小路は苦笑いした。

「まあまあ、綾小路君のモノマネは一旦置いておいて、今後のこと考えようよ！」

榎田がそう促したことで、彼らは本題に戻る。

「つーか、須藤のこと信じるってことで固まったわけだけど、実際どうすつかだよな」

「だな。クラスに目撃者がいないわけだし、どっかから連れてくるしかないんだろうが……」

「手当たり次第探すにしても、そう簡単には行かないだろうな」

池と山内は頭を捻りながら対策を考え始めた。

綾小路は冷静に今の状況を分析している。

「Cクラス側が今回の事件を須藤君の蛮行だと訴えている以上、覆すのは容易ではないわ。現に手を出してしまったわけだし、逆に須藤君は怪我一つしていない。状況は最悪ね」

「こんなことなら一発ぐらい殴られときゃよかつたぜ……」

堀北も状況が芳しくないことは理解しているのか苦い顔をしている。

そんな彼女の発言に須藤がらしくないことを言った。

「ねえ、黛君はどう思う？」

櫛田がそう尋ねたことで、全員の視線が柚椰に集中する。

「事情を聞いた時に既に須藤には言ったことだけど、今回の事件で彼が暴力を振るったことを覆すことは、はっきり言って不可能だ」

「そんなんっ!？」

「おい黛! なにももう諦めてんだよ!」

「そうだぜ! 須藤のこと信じるって最初に言ったのお前じゃねえか!」

柚椰の言葉に櫛田は悲しそうな顔をし、池と山内は柚椰に対して文句をぶつける。

綾小路と堀北は黙って話を聞いていた。

既に話を聞いていた須藤は残念そうにしながらも同じように大人しく話を聞いている。

「最後まで聞くんだった。今回俺たちがやるべきことは須藤が暴力を振るっていないことの証明じゃない。現に手を出してしまったことは彼も認めていることである以上、これは事実であり真実だからね。では現時点で真実とされていない……いや、まだ明かされていない事実

とは何か。それを証明することこそが、この問題の解決策だよ」
「なるほど、偽証の証明ってことね？」

柚椰の言葉に合点がいったのか、堀北が納得したような顔で尋ねる。

堀北の発言で櫛田も気づいたのか驚いた表情をしている。

池と山内は聞き慣れない単語に首を傾げていた。

「その通り。相手の主張が嘘であると証明できれば、今回の事件は終息する。何故なら、事件が明るみになった発端である訴えこそが嘘になるわけだからね」

「だが、その点で勝ちを拾うのも容易じゃない」

綾小路が冷静に返してきた。

「そう。もしこの点で須藤の無罪を勝ち取る場合、大きく分けて2つの要素が不可欠だ。1つは言わずもがな相手の主張が嘘であると証明できる証拠の確保。これは目撃者の証言や、現場の映像、音声などがあればクリアできる。そして2つ目は――」

「Cクラスが今の訴えを変えないこと、かしら？」

その先を読んで堀北がそう尋ねる。

すると柚椰は満足げに頷いた。

「正解。Cクラスの訴えは『須藤が自分たちを呼び出し、一方的に殴ってきた』というもの。つまり呼び出したのも、喧嘩を仕掛けたのも須藤の方だというのが相手の主張なんだ」

「原因と経緯。その全てが須藤君にあると言っている今の証言が変わらないままなら相手の偽証が成立する」

「そういうことだ」

柚椰と堀北のやりとりで状況を理解した面々は再び難しい顔になった。

「難しいことはよく分かんねえけどさ、要は相手が嘘ついてるって証明するってことだろ？」

「うん、しかも相手がその嘘をつき続けることが条件だもんね……」

「どっちにしても簡単なことじゃねえよな」

池と山内、そして櫛田はどうしていいものかと唸っている。

「そもそも目撃者なんて都合よく現れるものでもないからな」
「そうね。証言が難しいのなら、あとは物的証拠が必要になるけれど……」

綾小路と堀北も頭を捻って考えているが、状況が困難であることは事実として受け止めざるを得ないらしい。

「須藤、喧嘩した特別棟に監視カメラはないのか？」

「んなもん、いちいち確認してねえよ……」

綾小路が須藤に監視カメラの有無について尋ねるが、どうやらそんな確認などしていかないようだ。

皆が皆、暗礁に乗り上げたとき、柚椰が須藤に話しかけた。

「須藤、君の今後の動きについて指示をするけど構わないかい？」

「なんだよ？」

「ひとまず君は事件の証拠集めには不参加だ。当事者が奔走して良いことはない」

柚椰がそう言うと、須藤は困ったように頭を掻く。

「まあ、確かにそうだけどよ。でも任せつきりっつーのもなんか申し訳ねえっていうか」

「今はクラスメイトを信じるべきだ。君は証拠が揃うまで、停学になるかならないかの瀬戸際でオロオロする演技でもしておくといい」

「それに何の意味があるんだよ？」

「Cクラス側はそれを期待しているんだよ。君がヤケになって暴れるか、オロオロしながらクラスメイトに助けを求める姿を見たがっているんだ」

「なんだよそれ……！」

あまりに性格の悪いCクラスの奴らに須藤は怒りを露わにする。

「いや、案外それは効果的かもしれないぞ」

柚椰を援護したのは綾小路だった。

「須藤が動揺しているという事実は、相手にとって勝ちを確信させる要素になる。Cクラスに嘘をつき続けてもらう以上、それはプラスに働くはずだ」

「そうは言うけどよ……俺別に演技経験とかねえし」

綾小路の言葉に納得はしていても、須藤は今ひとつ気が乗らないらしい。

そんな中、柚椰が再び口を開いた。

「もう一つ、これは須藤だけではなくクラス全員に言っておきたいことだが――」

「――今回の事件、俺は表立って証拠集めには一切関与しないつもりだ」

「はあっ!?!」

真つ先に声をあげたのは池だった。

「ちよっ、どういうことだよ篤!?!」

「こんだけ喋っというて関与しないって、そりやねえだろ!」

先ほど同様、池と山内は抗議の声をあげた。

「これに関しては私も2人に同意よ。どういいうつもりなのかしら?」

「な、何か理由があるんだよね……?」

堀北も柚椰の発言が不可解なのか眉を顰めている。

籾田も意味が分からないのか困惑していた。

「理由の説明はしてくれらるんだよな?」

「今回の件がCクラス側の仕組んだことなら、それはクラス主導で行われた可能性が高い。であれば当然、Cクラスのリーダーが首謀者だろう」

綾小路に尋ねられたことで、柚椰は掻い摘んで事情を説明した。

「Cクラスのリーダー? もしかして知り合いなのかしら?」

「ああ、昨日ここで会ったんだ。ご丁寧に名前を覚えておくとまで言われたね」

「つまり目をつけられてるってことね……なるほど、理解したわ」

堀北は柚椰が言いたいことが分かったのか嘆息する。

しかし周りは置いてけぼりだったため、すかさず声を上げる。

「な、なあ堀北ちゃん？ 何がなるほどなんだよ？」

「2人だけで分かっただけで俺たちにも教えてくれよ」

「要は、黛君はCクラスのリーダーに警戒されている相手ってことよ。恐らく、昨日の段階で気づいたんでしよう。黛君が一筋縄じゃいかないう相手だっただけに」

「なっ……!?!」

「マジかよ……」

堀北の説明に池と山内は目を見開いていた。

「確かに、黛君がこの中で1番頭が良いのは事実だもんね……」

「黛が証拠集めに参加していると知れば、Cクラスのリーダーは予定を変更する可能性がある」

櫛田と綾小路も柚椰が置かれている状況を理解したようだ。

「綾小路君の言う通りよ。偽証の証明が成される可能性がある」と知れば、訴えの内容を変えてくると思うわ。須藤君の過剰防衛の線で再び訴えを起こされたら、その時点でこちらの負け。チエツクメイトよ」

「マジかよ……1番の戦力が……」

堀北の説明に池は絶望したような声を出した。

他の面々も、声に出さないまでも柚椰の戦線離脱を憂いていた。

「おうおう、停学になるかもしれないねえってのに仲良く昼飯ですか。いいご身分だねえ」

不愉快な笑い声を出しながら、1人の男子生徒が同伴者を連れて柚椰たちのところにやってきた。

先日図書室で揉めた山脇を始めとするCクラスの生徒たちだ。

「デメエら……!」

やってきたのが彼らと分かるや否や、須藤は嫌悪感を剥き出しにして睨んだ。

「おー怖っ、お前みたいなのはさっさと退学になっちまえばいいのにな」

「だなー、停学なんて甘っちょろかったかもな」

「なんてったって、上のクラスの人間に手出したんだからよ」

須藤を挑発するためか、山脇たちCクラスの面々は半笑いでそんな

ことを言い出した。

彼らの態度に須藤の怒りのボルテージはどんどん上がっていく。

そんな須藤を見かねてか、柚椰はテーブルの下で端末を操作し、彼にメールを送った。

「テメエら調子乗ってんじゃねえぞ！ テメエらが黛の嘘をクラスでばら撒いたんだろ！ ——って、ああ？」

怒鳴りつけてる途中に端末が通知を発したことで須藤は勢いが失速した。

ポケットから端末を取り出し、何の通知か確認する。

表示されたメールの文面を見た須藤は、一瞬だけ柚椰を見た。

柚椰は自分を見てきた須藤に無言でアイコンタクトを送る。

すると須藤も意図が伝わったのか、周りに気づかれない程度に小さく頷いた。

2人のアイコンタクトに気づかない山脇たちは、先ほどの須藤の発言を鼻で笑い始めた。

「なに訳のわからねえこと言ってるんだ？ 俺たちが嘘をばら撒いたんだあ？」

「テメエら、中間テスト前に黛の挑発に乗って手出そうとした挙句、Bクラスの女に止められて尻尾巻いて逃げたじゃねえか！ 小宮と近藤の野郎が関わりのねえはずの黛の名前を出した時点で分かってんだよ！ テメエらは尻尾巻いて帰ったのが悔しくて、黛がビビって逃げたことにしたんだろ！」

「なんのことだか知らねえな〜？ なあお前ら？」

「だな、その野郎が腰抜けだつてのは事実だろ？」

「ンだとコラー！」

柚椰本人は何も言わないが、何故か須藤がどんどんヒートアップしている。

それが愉快なのか山脇はゲラゲラと笑うと、今度は柚椰に話を振った。

「で、当の本人の黛くんはこの忠犬が今回起こした事件についてどう思ってるのか聞きたいねえ？」

山脇が話しかけてきたことで、柚椰は内心笑みを浮かべた。

これが作戦を発動させる絶好の好機とばかりに……

「そうだね、正直失望しているよ。あれだけ釘を刺しておいたにも関わらず、結局人を殴って問題を起こしたんだからね」

辛辣に語る柚椰が意外だったのか、山脇は少し驚いていた。

「へえ、じゃあこのクズが停学になりそうっていう今の状況はどう思ってたんだよ？」

「別にどうも思わないさ。せっかく目をかけてやったのにこの有様だ。俺の期待を、信頼を裏切った彼にかけてやる温情なんてものは、もう微塵もない」

「そんなっ……！ 黛……」

柚椰の言葉に須藤は捨てられた子犬のような目になる。

「落ちこぼれの君をせっかく救ってやったのに、その恩を仇で返したんだから当然だろう。良いことをすれば自分に返ってくると思っただけをかけたが、君には当てはまらなかったようだ。正直心底がつかりしているよ。君は結局何も変わっていないかったんだからね」

「そんなこと言わないでくれ！ 俺、本当に反省してるから！ だから助けてくれよ！」

縋るように懇願する須藤を柚椰は冷たく見下ろす。

「今現在、彼らの挑発に乗りつつある時点で説得力がないんだよ。君の弁護をするのは時間と労力の無駄でしかない。俺は君のことを見限ったんだ。君が停学になろうが退学になろうが俺の知ったことじゃない」

「もうこんなことしねえから！ だから今回だけ頼むって！」

「二度も言わせるな。俺の決定は揺るがない。いい加減君の馬鹿さ加減にも嫌気が差してきたんだ。もう君はDクラスには必要ない」

柚椰の言葉に、須藤は絶望したように項垂れた。

2人のやりとりに櫛田たちは何も言うことはない。

誰一人として、須藤のために協力してやってほしいと柚椰に言うことはない。

その様子に山脇たちは満足げに笑った。

「ハハハッ！ ご主人様に見捨てられちまったみたいだな須藤く？」
「まあ自業自得だけどな」

「クズは所詮どう転んでもクズ。それを学べただけでもよかったじゃねえか。なあ黛クン？」

「そうだな。いい勉強になったよ。クズを助けることなんて所詮無駄でしかないと気づかされた」

Cクラスの生徒に話しかけられ、柚椰は冷たくそう言い放った。

「じゃあ俺らはそろそろ行くか」

「だな、ご主人様に見捨てられた犬が停学になるのを楽しみにしてるぜ」

「精々無駄に足掻けよ不良品共」

言いたいことを言って満足したのか、山脇たちはその場を去っていった。

「ふふっ、どうやら上手くいったみたいだね」

「ハハハッ！ あのバカ共、完全に信じてやがった！」

山脇たちがいなくなると、柚椰と須藤は可笑しそうに笑った。

「え、なにになに!? どういうこと!?」

池は状況が飲み込めないのか混乱している。

それはどうやら山内も同じようだ。

「あはは……黛君と須藤君は一芝居打ったんだよ」

先的一幕の真意を理解していた櫛田が二人に説明する。

「え、芝居!? 演技ってこと!?!」

「うん、さっき黛君は表立って証拠集めには関わらないって言ってたでしょ?」

「うんうん」

「Cクラスの人が来たときに、須藤君と黛君が普通に仲良くお話ししてたかどうか思う?」

櫛田が尋ねたことで、池と山内は合点がいったようだ。

「——！　そっか、黛が須藤のために動くんじゃないかって思う」

「そっ！　だから山脇君たちの前では、黛君は須藤君を見捨てたように見せないといけなかったんだよ」

「そうだったのかあ〜」

「いや、二人の演技ヤバかったぜ。マジだと思っただし」

演技が迫真すぎたため、池と山内は完全に信じ切っていたようだ。

「ともかく、これでCクラスには黛君が須藤君を見捨てたという情報が出回るわね」

「にしても、演技出来ないと言ってたわりには結構様になってたぞ須藤」

綾小路は先の須藤の演技の上手さに感心していた。

「山脇たちと言いつ合つてるときに黛からメール来たんだよ。『これからお前に酷いことを言うから傷ついた演技をしろ』って」

「さつき端末弄ってたのはそれか！」

池は先ほど須藤が端末を確認していたのを思い出した。

「これで仕込みは1つ完了した。あとは証拠を集めるだけだね」

「問題はその証拠集めなのだけだね」

「私、先輩とかにも当たってみるよ！」

「櫛田ちゃんがそうするなら、俺らはどうすつかなく」

「他クラスに協力を求めるのもアリなんじゃないか？」

綾小路がそんな提案をした。

「AクラスとかBクラスについてことか？」

「この中に、AクラスやBクラスの生徒と関わりのある人はいるかしら〜」

堀北が尋ねるが、手をあげたのは櫛田と柚椰の2人だけ。

他は皆そっぽを向いていた。

「可能性があるとすればBクラスだね」

「帆波ちゃんのクラス？」

「ああ、一之瀬にちよつとメールしてみよう」

「……随分と仲良くなつてるのね」

サラッとメールをすつと言う柚椰を堀北はジト目で見ていた。

「まあ、櫛田に連絡先を教えてもらってから、たまにメールはしているよ」

「ふーん……」

「女か!? まさか彼女じゃねえだろうな!」

帆波という名前から女子であると嗅ぎつけた池が詰め寄ってきた。

「彼女じゃないよ。お友達だ」

「本当だな!? 抜け駆けは許さねえぞ!」

「そんなにがつつくとモテないよ?」

「うるせえ! 持つ者には俺や山内のパッションは分からねえんだよ!」

「いや、俺もモテているわけじゃないだろう」

池の熱量に柚椰は辟易しているようだ。

「黛君」

「なんだい?」

堀北は少し考え込むようなそぶりを見せると、顔を上げて柚椰を見つめた。

「お友達の一之瀬さんとはメールをするのに、どうして私にはメールをしないのかしら?」

「え?」

「貴方の理論なら、私も貴方とメールのやりとりをする条件は満たしているはずなのだけれど。にも関わらず、これまで貴方が私に送ってきたメールはテスト前の勉強会の連絡事項しかないわ。私と一之瀬さんの間になんの差があるのか、参考までに聞かせてもらいたいわね。別に私は黛君とメールをしたいというわけではないけれど、友達との間に優劣をつけるのはいけないと思うの」

早口で捲し立てるように堀北はつらつらと持論を語った。

一見すると何を言ってるか分からないが、彼女の為人を知ってる人間からすれば理解できた。

「君は、ひよつとして寂しがっているのかな?」

柚椰がそう尋ねると、堀北は赤くなつて固まった。

「っ! な、なにを言ってるのかしら? 私が寂しいなどと思うわけ

がないじゃない。私が言いたいののは、どうして私よりも後から出て来た一之瀬さんとはメールをしているのかと言っているだけよ。貴方が私を無理矢理友達にしたのだから、その私をおざなりにするのは如何なものかと言っているの」

「分かった分かった。じゃあ今度からは堀北にもメールするから。それで許してほしい」

ツンツンしてる堀北が何をしてほしいか理解しているからか、柚椰はそう言って手を合わせた。

「別にメールしろと言っているわけではないのだけど。まあ、せつかく送ったメールを無視するのもよくないでしょうし、返信はしてあげるわ」

堀北はそっぽを向きながらそう言った。

言葉こそ素直ではないが、彼女の表情は柚椰の言葉で少し和らいでいたのは確かだった。

彼らは寡黙少女に声をかける。

調査開始から数日経過した夜、一同は進捗を報告すべく集まった。場所は以前中間テストの祝勝会を開いた綾小路の部屋である。

当たり前のように溜まり場として利用されている現状に、綾小路はもう諦めたように何も言わない。

「で、なんか進展はあったのか？」

調査に参加することが出来ない須藤はこういう場でしか進捗状況を聞けないため、一同に状況を聞いた。

「全くない。目撃者は1人も出てこねえよ」

「つーか、本当に目撃者なんているんだろっな？」

池と山内は全く進展のない現状に疲れ始めていた。

学校からの通達に加え、自発的に聞き込みを行なっても尚、目撃者はおろかその情報さえ手に入る気配がないのだから。

「須藤く、マジで誰かに見られたとか気づかなかったのか？」

「人の気配みたいなのは感じたが、それも本当かどうかは正直分からねえよ」

須藤も誰かに見られた気がするだけで、それが本当かどうかは判断つかないらしい。

その言葉に一同の間に一層重い空気が立ち込める。

「帆波ちゃんに頼んでBクラスの人にも聞いてもらったけど、こっちも収穫はなかったよ」

「そうか……そうになると、方向性を変えるべきだね」

柚椰の発言に櫛田が頷く。

「実は私も同じことと思ってたんだ。例えば、目撃者を目撃した人を探すとか」

「事件当日、特別棟に入っていく人間を見た人間を探す、ということかい？」

「うん、どうかな？」

櫛田の案は悪くないものだった。

特別棟という場所は、普段から生徒の出入りが多くない。

しかし、その入り口は人目につく場所にある。

つまり事件があった時間帯に特別棟に入って行った人間を見たという証言が出れば、目撃者に辿り着けるということだ。

「来週の火曜がデッドラインである以上、あまり時間はない。その線で動くしかないな」

綾小路は現状を考えて櫛田の案に賛成した。

明日は木曜日。

来週の火曜日に学校側が処分を決定すると言っている以上、それまでになんとしても証拠を揃えなければならぬ。

土日になれば学校はないため、情報を聞いて回ることも容易ではなくなる。

皆が難しい顔をしていると、玄関のチャイムが鳴った。

証拠集めに参加しており、今この場にいないのは1人だけだ。

部屋の主人である綾小路がドアを開けると、案の定訪ねてきたのは堀北だった。

「遅くなったわ。それで、何か進展はあったのかしら？」

遅れて来た堀北は、皆から進捗状況を一通り聞いた。

そして櫛田が提案した次の作戦を聞くと、彼女は硬い表情で考え込んでいた。

「プランとしては悪くないわ。無作為に動き続けるよりは考えを変えて動くのもアリね」

堀北は櫛田の作戦には概ね肯定的のようだ。

残り日数が少ない中、決してベストな選択とは言えないが、ベターであることは確かだった。

「ところで堀北、お前は何か収穫があったのか？」

綾小路はまだ堀北が報告を行っていないことから、何か情報を得たのではないかと当たりをつけていた。

「そうね、せっかく案を出してくれた櫛田さんには悪いけれど、目撃者の見当はついたわ。須藤君の事件を目撃した人物は確かに存在して

いた。それもかなり身近に、ね」

堀北が持つてきた情報は、想像よりも遥かに大きなものだった。存在するのかわからず定かではなかった目撃者を既に見つけたというのだから大手柄だ。

「マジかよ堀北ちゃん！」

「目撃者の見当がついたって……それ本当か？」

池と須藤は喜び半分驚き半分といったリアクションだった。

他の面々も、信じられないといったようすで驚きを隠せていない。

「今回の事件、その目撃者の正体は……佐倉さんよ」

堀北の口から思いがけない人物の名前が飛び出した。

「佐倉さんって、同じクラスの……？」

山内と須藤は顔を見合わせていた。

堀北が口にした名前に聞き覚えがないのか、誰だそいつはと言わんばかりの様子だ。

「どうしてそう言い切れるんだ？」

「以前教室で目撃者の話をしたとき、彼女は一瞬だけ目を伏せたのよ。多くの生徒が榎田さんや平田君、軽井沢さんを見ていた中、たった1人だけ。自分に関係のないことなら、そんなリアクションはしないはずよ」

堀北は調査開始初日の教室での一幕から、既に絞り込みを行っていたのだ。

「つまり、佐倉が目撃者の可能性が高いつてことか」

「いいえ、佐倉さんが目撃者で間違いないわ。さつき直接確認してきたもの。」

認めはしなかったけれど、反応からして彼女で間違いないでしょうね」

「どうやら堀北は堀北なりに独自で動いていたらしい。」

「なんだかんだ言っつて、堀北ちゃんも須藤のために頑張ってたつてことかー！」

「堀北……」

大きな進展を齎した堀北に須藤は感動しているようだ。

普段口喧嘩ばかりしている2人だが、その間には確かな友情があったのだと感激しているらしい。

「何度も言うようだけど、私は貴方の友達ではないわよ須藤君」

「お前は黛以外は断固として友達と認めねえ呪いでもあんのか!？」

未だ友達とは認めない鉄壁の堀北に須藤がつっこんだ。

「つていうか、こんな頑固な堀北ちゃんに友達認定されてる黛ってマジで何なの!？」 黛、お前堀北ちゃんに何したんだよ?」

「別に何もしていないよ? 最初は断固拒否されてしまったから、ひとまずお試し期間ということとで始めたんだ。それで5月頭くらいになつて認めてあげるわ、と言ってくれたから正式に友達になつた感じだね」

「Oh! 全く理解不能! 間の過程が全カットすぎて分からんちん!」

柚椰の説明がぎっくりしすぎているためか池のリアクションがおかしなことになっている。

しかし結局のところ、どうして堀北が柚椰にだけ心を許しているのかについて明確な答えはないのだ。

なし崩し的に友達となつた2人だが、堀北が本当に嫌ならばどうに拒絶していたはずなのだ。

柚椰が人の懐に入り込むのが上手いからか、堀北にとって彼がメリットを齎す存在だからか。

答えは周りにも、堀北本人にも実のところ分からない。

「黛君のことはもういいでしょう。今は佐倉さんの話じゃなかったかしら?」

これ以上根掘り葉掘り聞かれないのか、堀北は強引に軌道修正を行った。

彼女の言うことも尤もだったからか、皆は本題へ戻った。

「目撃者が見つかったのは嬉しいけどよ、佐倉って誰だ? お前ら知ってるか?」

顔と名前が一致しないのか、須藤は佐倉がどういう生徒か分からないようだ。

見かねた柚椰がヒントを出した。

「須藤の右斜め前。眼鏡をかけたおさげの女の子だよ」

「あん？ あー、そんな奴居たような居ないような……」

柚椰のヒントを聞いても尚、須藤はいまいちピンと来ていない。

すると今度は池がヒントを出してきた。

「じゃあアレだよ。クラスで一番胸の大きい子って言えば分かるか？

やたら胸の大きい子いるじゃん」

「あー、居たなそういえば」

あんまりなヒントだったが結果として須藤は思い当たったようだ。

しかし、そんな特徴の出し方をすれば、池がどういう目で見られるかはお察しの通りである。

「ダメだよ池君、そんな風に覚えたら。可哀想だよ」

「不潔ね」

ご覧の通り、この場にいる女性陣である櫛田と堀北からは大ブーイングである。

「や、やや、違うんだって櫛田ちゃん。堀北ちゃんもドン引かないで!?

これはアレだよ。決して疚しい気持ちで言ったんじゃないよ。ほら、背の高い男子と違ってざっくりイメージで覚えたりするじゃんよ？ 同じように身体的特徴を的確に捉えただけでさー。あ、綾小路なら分かってくれるだろ!？」

「いや、流石に今のヒントは俺も無いと思うぞ。俺が女子なら間違いないく2人と同じ反応をすると思う」

池は綾小路に助けを求めるが、その手は振り払われた。

「じゃ、じゃあ黛！ お前なら分かってくれるよな!？」

「……まあ、池だからね。仕方ないんじゃないかな。うん」

柚椰は視線を逸らしながらそう言ったが、それはフォローではなく死体蹴りである。

これによって男子からの援護は望めないということが決定づけられた。

「クソうー！ 違うんだ、違うんだよお！ あんな地味な子、全然好きじゃないし！ 勘違いしないでくれえ！」

最早女子たちの信頼は地に落ちたという現実には打ちひしがれ、池は泣き崩れた。

「最低な池君はひとまず置いておいて、佐倉さんの話に戻りましょうか」

「容赦ない死体蹴りだな堀北」

堀北の手加減なしの罵倒に綾小路は苦笑いしている。

「後は佐倉さんがどこまで知ってるかだよ。その辺はどうかな？」

「それは本人に確かめるしかないわね」

「今から佐倉の部屋行けばいいんじゃない？ 時間もないしさ」

山内がそう提案した。

無難な案に見えるが、いきなり訪ねても相手がいい顔をしないのは明白だろう。

「じゃあ、私ちよつと連絡してみるね」

櫛田はクラス全員の連絡先を知っている。当然佐倉も例外ではなかった。

20秒ほど端末を耳に当てる櫛田だったが、首を振りながら操作を終えた。

「ダメ。出なかった。後でまたかけてみるけど正直微妙かな」

「微妙って？」

「連絡先は教えてもらえたんだけど、よく知らない私に連絡されても迷惑に感じるかなって。実際何度か話しかけてるけど相手にされないみたいだから」

つまり櫛田がコンタクトを試みても、相手がそれを拒否する可能性があるということだ。

「初期の堀北ちゃんみたいな感じってこと？」

「その認識は甚だ遺憾なのだけれど」

堀北が無遠慮な発言をかます池を睨む。

「佐倉さんは人見知りとか、そんな感じだと思っな。私の見たところ」
「そうだね……正直に言って、目撃者の候補には1番上がってほしくなかったタイプかな」

柚椰は腕を組みながらそう言った。

彼のその発言に綾小路が尋ねた。

「どういうことだ？」

「彼女のようなタイプは目立つことをとにかく嫌うんだ。何よりも目に触れないことを最優先事項として生きている。綾小路の上位互換みたいな感じだね」

「……俺、黛からは佐倉みたいに見られてるのか？」

柚椰にそんな風に思われていたとは知らず、綾小路は少し傷ついていた。

「堀北みたいに興味がないことにはとことんドライというタイプじゃないんだ。そして事件を目撃しておきながら、関係ない振りを平然とできるほど冷たい人間でもない。むしろ無視し続けることに罪悪感を覚えるくらいには心の優しい人間だ。でもそれ以上に、誰かと関わることを必死で避けることを選ぶ。罪悪感や後ろめたさに苛まれることよりもね。彼女のようなタイプを懐柔することは、正直容易ではないよ」

「黛君にそこまで言わせることは確かに一筋縄じゃいかなそうね」

綾小路同様名前を出されているにも関わらず、堀北はあまり気にしていないようだ。

むしろ自分のことを理解してくれていると思っているからか、心なしか誇らしげな雰囲気すらある。

「なんか面倒くせえなー。ほんと、宝の持ち腐れだよな。これが」

山内はそう言いながら胸元に両手を持っていつて、わさつと動作を見せる。

「そうそう。乳だけはスゲエデカいんだよ。あれで可愛けりやなく！」

先のことを全く反省していないのか、再び池がデリカシーのない発言をかます。

そして案の定、櫛田は苦笑い、堀北はゴミを見るような目で見ていた。

「いや、佐倉は可愛いと思うよ？ 顔を伏せていることがほとんどだ

から気づかないと思うけど、実際かなり顔は整っている」

柚椰がシレッとそんなことを言ったからか、池と山内がすぐさま食いついた。

「マジで!? っていうか顔しっかり見たのかよ黛!」

「どんな顔だった!? 美少女か!」

「君たち2人は、いちいち圧が凄いんだよ圧が」

必死な形相で詰め寄ってくる2人に柚椰は引いていた。

「あはは……黛君は観察は得意だからね」

柚椰は乾いた笑いを漏らしていたが、その表情は少し不機嫌そう
だ。

柚椰が佐倉の容姿を褒めたのが気に食わなかったのだろうか。

「むう……」

堀北も口には出さないものの、どこか不満気だ。

親友である自分の容姿は褒めたことすらないのに赤の他人は褒めるとはどういう見なのだろうか、とでも言いたげだ。

「とにかく、明日まずは私1人で聞いてみるね。大勢で話しかけても警戒すると思うし」

「それがいいだろうな」

そこで話し合いは終了し、報告会はお開きとなった。

翌日の放課後、柚田はホームルームが終わると同時に席を立った。

そして静かに帰る準備をしている佐倉の元へ。

柚田にしては珍しく緊張気味な様子だった。

池や山内、そして須藤も話は気になっているからか、遠目から様子を伺っている。

「佐倉さんっ」

「……な、なに……？」

眼鏡をかけた猫背の少女は気怠そうに顔を上げた。

声をかけられるとは思っていなかったからか、どこか慌てている。

「ちよつと佐倉さんに聞きたいことがあるんだけどいいかな？ 須藤

君の件で——」

「ご、ごめんなさい、私……この後予定あるから……」

明らかにバツの悪そうな顔をして佐倉は視線を逸らした。

誰かと話すのが得意じゃない。あるいは好きじゃないといった空気がありありと出ている。

「そんな時間取らせないよ？ 大切な事だから話をさせて欲しいの。

須藤君が事件に巻き込まれた時、もしかしたら佐倉さん近くにいたん

じゃないかって」

「し、知らないです、堀北さんにも言われたけど、私全然知らなくて……」

おどおどとしながらも、きっぱりと否定する佐倉。

櫛田も嫌がる素振りを見せる佐倉に対し、強引に話を聞く真似はしたくないのだろう。

少し戸惑うような、困ったような顔を作るがすぐに笑顔に戻す。

それでもここであっさり引き下がるわけにはいかないのだろう。

彼女が須藤の処遇を大きく左右する存在かもしれないのだから。

「もう……いいですか、帰っても……」

そう言う佐倉は明らかに挙動がおかしかった。

単に人との会話が不得意というだけではなく、何かを隠しているように見える。

彼女は利き手を隠しながら、櫛田と視線を合わせようとしめない。

人と目を合わせるのが苦手な場合でも、ある程度相手と目を合わせようとするものだが、佐倉は櫛田の方に顔を向けようとしめない。

異性相手ならまだしも同性、それも形式上でも連絡先を交換している相手である櫛田に対してその態度は不自然という他なかった。

「今から少し時間取れないかな？」

「ど、どうしてですか？ 私、何も知らないのに……」

櫛田はなんとか佐倉に食い下がるが状況は好転するどころか悪化している。

不自然な会話のやり取りが長引けば長引くほど、必然的に周囲の注目を集めてしまう。

ただでさえ人見知りである佐倉にとってこの状況はますます心を閉ざしてしまうことは明白だった。

「私、人付き合いが苦手なので……ごめんなさい」

案の定、佐倉は櫛田を全く寄せ付けようとしなない。

人との距離を詰めるのが上手いはずの櫛田が悪戦苦闘している。

「厳しいわね。彼女が説得に失敗するようだと」

2人のやり取りを傍観していた堀北が綾小路にそう言った。

彼女の言う通り、このクラスにおいて櫛田以上に佐倉と会話ができる人物はいない。

櫛田は人付き合いが苦手な人間とも、自然と話せてしまうような空間を作り上げる。

しかし、佐倉はどうしてもその空間に入ろうとしない。

むしろ彼女の今の態度は櫛田から逃げようとしているとさえ思えた。

それを裏付けるように、彼女は最初に口にした『予定があるから』という言葉をもう使っていない。

本当に予定があるのであれば、それを繰り返すはずなのだ。

櫛田から距離を取るように、佐倉は荷物を纏めて立ち上がった。

「さ、さよなら」

話を切り上げられないと判断したのか、彼女は逃げる選択をしたようだ。

机に置いてあった彼女の私物と思われるデジカメを握りしめて佐倉は歩き出す。

その時、同じく教室を出ようとしていたであろう柚椰とぶつかったしまった。

「あっ！」

「おっと」

佐倉の手から零れ落ちたデジカメラが床に叩きつけられて高い音を出す。

同じように柚椰もまた、肩にかけていた鞆の中身を豪快にぶち撒けてしまった。

「ご、ごめんなさいっ！」

自分のデジカメラもそうだが、ぶつかった相手が荷物をぶちまけたことに驚いて佐倉は柚椰に慌てて謝罪する。

オロオロしながら頭を下げる佐倉に柚椰はカラカラと笑った。

「いいよいいよ、気にしないで。それより怪我はなかったかい？」

「う、うん……平気、です……」

話したことのない柚椰に対してオドオドしながら佐倉は返事をした。

「これは、だいぶ豪快に散らかしてしまったね」

柚椰は全く気にしていないといった様子でそそくさと床に広がっている自分の私物を拾って鞆に戻していく。

ノートや教科書、筆記用具などといった勉強道具を次々拾っていき、最後にデジカメラを手に取った。

「つと……これは」

「わ、私のですっ！」

柚椰がデジカメラを手にしたので慌てて佐倉が自分の物だと申し出た。

「そうか、はい」

「あ、ありがとうございます……」

佐倉はデジカメラを受け取ると、急いで動作確認を始めた。

落としたショックでもしかしたら壊れてしまったかもと不安になっっていたようだ。

しかし電源ボタンを押すと、すぐにカメラは起動した。

「よ、良かった……壊れてなかった……」

佐倉はデジカメラが起動したことでほっと胸を撫で下ろしていた。

「ご、ごめんね佐倉さん、私が急に話しかけたから……」

「いや、櫛田は悪くないよ。周りを見ていなかった俺が悪かった」

「2人は悪くない、です……私の不注意ですから……さよなら」

2人にそう言い残して、佐倉は足早に教室を出て行ってしまった。結局説得に失敗してしまったためか、櫛田は悔しそうに見送っていた。

「どうやら説得は失敗のようだね」

「うん……」

柚椰の言葉に櫛田は力無く頷いた。

「まあ、日を改めてまた声をかけてみるしかないかな」

そう呟くと、柚椰は上着のポケットに手を入れた。

そこには、先ほど佐倉が落としたものと全く同じデジカメが入っていた。

彼と強か少女は駒を進める。

「な、何これ……」

寮へと帰宅した佐倉愛里はパソコンを見て呆然としていた。

デジカメに入っているSDカードを読み込み、中の写真を確認しようとしたとき、彼女は事態に気づいた。

SDカードの中には確かに写真が入っていた。

校舎から見える夕焼けの写真、中庭の樹木から差し込む木漏れ日の写真。

他にも美しい風景の写真が並んでいたが、どれ一つとして見覚えが、撮った覚えがない。

極め付けはとある1枚の写真だ。

寮の一室でDクラスの生徒たちが楽しそうにジュースやお菓子をつまんでいる写真。

こんな場面に自分はいたことなどないし、ましてや写真に写っている人たちと関わりなどないはずなのだ。

佐倉はこの写真を見て、このデジカメが自分のものではないことに気づいた。

「ま、まさか……!?!」

彼女は今日、自分が寮に帰ろうとした際に起こったアクシデントを思い出した。

櫛田の追求から逃げようとした際に、彼女はある男子生徒にぶつかってしまった。

そのとき自分はデジカメを落とし、相手はカバンの中身を床にぶち撒けていた。

考えられる可能性は一つだ。

そのときに、彼のデジカメと自分のデジカメが入れ替わってしまったのだ。

「ど、どうしよう……!?!」

事態に気づいた佐倉は大いに慌てた。

自分が今こうしてSDカードの中身を確認している以上、相手も同じことをしているかもしれない。

もしそうならば、相手は自分の秘密を、絶対に知られてはならない秘密を知ってしまったかもしれない。

頭の中で最悪の可能性が湧き上がり、脳を一色に埋め尽くす。

その日、彼女は不安と恐怖から一睡もできなかった。

「いらつしやい、入って」

「お、お邪魔します……」

同時刻、柚椰は自分の部屋に櫛田を招いていた。

おっかなびつくりといった様子で櫛田はおずおずと部屋に入る。

「黛君のお部屋来るの初めてだから緊張するなあ」

中に案内された櫛田は、柚椰の部屋を見回した。

以前祝勝会の時に言っていたように、柚椰の部屋は綾小路の部屋とそう違いはなかった。

強いて挙げるとすれば、デスクの上にドンと鎮座しているモニターくらいだろうか。

今日日学生が寮に置くのは殆どがノートパソコンである中、どうやら柚椰はデスクトップ派らしい。

「お茶でも淹れるよ。コーヒーと紅茶どちらがいいかな？」

「えっ、あ、うん、じゃあ、紅茶がいいな」

「分かった。適当に座っていいよ」

柚椰がキッチンに向かうのを見送り、櫛田はとりあえずローテーブルの近くに置かれた座布団に腰を下ろした。

座れる場所は他にもあるが、デスクの前は論外としてベッドに腰掛けるのもなんとなく憚られたのだ。

「学生寮ならこんなものだろうとは思っていたけど、やっぱりもう少

し広い方がいいよね」

「そ、そう？ 1人部屋なら十分じゃないかな」

「部屋に人を呼ぶと少し手狭に感じるよ。現に祝勝会の時は結構窮屈だったからね」

「あはは、それはそうだね」

「広い部屋をポイントで買えないものかな。茶柱先生に聞いてみるか」

コンロでお湯を沸かしながら柚椰は待っている櫛田とそんなやりとりをしていた。

会話中も、櫛田はキョロキョロと部屋の中を見ていた。

これといって目を惹くものは無く、至って普通の学生の部屋といった感じだ。

机の横には教科書やファイルが並んでいる棚が置かれており、それほど珍しくもない。

数分後、2人分のティーカップを持って柚椰が戻ってきた。

「はい紅茶。砂糖とミルクは？」

「あ、うん、欲しいかな」

「分かった」

櫛田がそう言うと、柚椰はローテーブルにカップを置いて再びキッチンに戻り、砂糖とミルクを持ってきた。

それを彼女に手渡すと、柚椰はデスクの前の椅子に腰掛けた。

「それで、いきなりどうしたの？ 今から部屋に来いなんて」

紅茶を一口飲み、櫛田は早速本題に入ろうとした。

「ああ、今日佐倉に話しかけて失敗しただろう？ その話だよ」

「うーん、やっぱり中々心開いてくれないよね……」

櫛田は今日の放課後の一幕を振り返って苦笑いした。

取りつく島もないといった佐倉の態度に櫛田も苦戦していた。

結局逃げられてしまい、説得は失敗。

目を改めて声をかけてみようということでも落ち着いたが、正直望みは薄かった。

「そのことだけど、正直言ってもう佐倉の証言はあまり必要なくなっ

た」

「ええっ!？」

柚椰がいきなりそんなことを言ったからか、櫛田は大層驚いた。

「ど、どういうこと!？」

「正確には佐倉が持っていた証拠は既に手に入れたからお役御免ということだよ」

「手に入れたって、どうやって……」

「これだ」

柚椰はデスクの上に置いてあったデジカメを手にとって櫛田に見せた。

櫛田は一瞬何を言っているか分からないといった表情をしていたが、やがて意味を理解したのか目を見開いた。

「もしかして佐倉さんのデジカメ……!?!? な、なんで」

「彼女が逃げようとしたとき、俺とぶつかっただろう? そのときに俺は鞆の中身を床にぶちまけた」

「うん」

「そのときに佐倉の持っていたコレと、俺が予め用意してたデジカメをすり替えたんだ」

「すり替えたって……で、でも佐倉さんの持つてるものと同じものをどうやって用意したの?」

「彼女が教室で度々デジカメを弄っていたのを見ていたからね。簡単に同じものを手に入れることが出来たよ」

「佐倉さんを観察してたのはそのため?」

「正解。彼女の情報は既にあつたからね」

そう言うと柚椰はパソコンを操作し始めた。

「佐倉愛里。性格は極めて内向的。趣味は写真撮影。彼女の性格上、説得して証言台に立たせることが出来る可能性は限りなく低いと考えた。そして彼女の趣味から、今回の事件の証拠を持っているとすればそれは写真だと当たりをつけた。だから全く同じデジカメを用意して、彼女のものとするり替えることを思いついた」

「じゃ、じゃあ須藤君の事件の写真も」

「ああ、今このパソコンに入っている。彼女と風景の写真の中に写っていたよ。須藤とCクラスの生徒たちとの喧嘩の様子がね」

柚椰はパソコンのモニターに写真を表示させると、モニターごと動かして櫛田にそれを見せた。

画面に映された写真には確かに須藤たちの姿が写っている。

「で、でも、まだ審議の日まで時間はあるんだよ？　こんな強引な手で写真を集めなくなつて佐倉さんを説得すれば——」

「彼女が所属しているクラスはどこかな？」

「え、そりゃあDクラスだけど……!?!」

どうやら櫛田は柚椰の質問の意図が分かったようだ。

「そう。暴行事件の被疑者として扱われてる人間と同じクラスの人間が証言台に立つ。それだけで証言の信憑性を失う要因になるんだ。加えて彼女は人前に立つことが苦手な人間だ。俺たちが彼女を脅して嘘の証言をさせていると相手方に指摘される可能性もある」

「そんなつ、だって、佐倉さんは本当に事件を見てたんだよ？　写真だってあるし！」

「今は木曜日の夜。現時点で説得が出来ていないんだ。明日か来週頭か、なんとか説得したとしても審議の日直前だ。どうして早く名乗り出なかったのか、なんて指摘が当然くるだろう」

柚椰の淡々とした解説に櫛田は言葉を返すことができない。

「彼女という証人が使えないとなると、あとはこの物的証拠しか効力を持たない。それも彼女が審議の場で提出するよりは、情報提供で得たという形にしたほうが効果はある。佐倉本人を引っ張り出すより遥かに効果的なんだ」

「そんな……」

「だが、彼女もカメラが入れ替わったことにはすぐに気づくはずだ。恐らくもう気づいているかもしれないね」

手の中でデジカメを弄びながら柚椰は佐倉の様子を推測していた。

「明日にでもうっかり間違えたということにして返すつもりだよ。用意していたカメラには事前に撮影していたデータが入ったSDカードを挿しておいたから、この言い訳が疑われることはまずない。勿

論、彼女のSDカードの中身を見たことは伏せる。そうしたほうがプラスに働くからね」

「どういうこと?」

「SDカードの中には事件の写真以外にも色々な写真が入っていたんだ。彼女が人には絶対に知られたくない秘密を内包している写真がね」

櫛田はそこで柚椰の本当の狙いに気づいた。

「見ていないと言われていても、本当かどうかは分からない。不安を抱えた人間ほど、転がしやすいものはないよ?」

ニヤリと笑う柚椰に、櫛田はゾツとした。

今まで何度か柚椰の恐ろしさは肌で感じてきたが、何度経験してもたまらない。

背筋が凍るような冷たさ、底の見えない闇の深さ。

櫛田は柚椰には一生敵わないと理解しているが故に、彼の裏の顔に心底傾倒している。

「本当、私じゃどう足掻いても黛君を出し抜くなんてこと出来ないね……」

「出し抜くつもりだったのかい?」

「ううん、全然。確かに最初は脅されて出来た関係だけどき、今の私は黛君に何がなんでもついていくって決めてるから。そうしたほうが私にとっても良い方に転ぶだろうし、なにより黛君の役に立てるでしょ?」

もう櫛田は自分の弱みだの、利害関係だのは考えていなかった。

ただ柚椰の役に立ちたい。

彼の手となり、足となることが結果的に自分にとっての幸せに繋がるのだと理解した。

たとえ柚椰にとつて自分がただの駒であつたとしても構わない。

最後に彼と同じ側で笑っていらればそれでいいのだ。

「佐倉さんも引き入れるつもりなの?」

「いや、今回の事件に関して言えば彼女は既に用済みだよ。勿論、証言台に立つというのなら止めないけどね。でもカードは既に手に入れ

ている以上、今の彼女がどう行動しても状況が好転することはないんだ。俺が彼女に期待するとすれば、それはこの先にある。彼女がこのままただの下位カーストに収まるならそれもよし。……誰かに拾われるのであれば、それもまたよしだ」

「拾われるって誰に？」

「さあ、それは分からない。でも、俺は彼女がこのまま搾取される豚で終わると思っていないよ。もしかしたら大きく化けるかもしれないし、そうならないかもしれない。良い方に転ぶかそうでないかは彼女次第だ」

「冷たいんだね……」

「そういえば、例の件は順調かな？」

柚椰はもう佐倉について話すことはないと言わんばかりに話題を変えた。

柚田はすぐに以前柚椰に言われた件についてだと気づく。

「うん、順調だよ。1日2人、昼休みと放課後に1人ずつ声かけてポイントも渡した。あとは佐倉さん含めて数人だけかな」

「そうか、感触としてはどうだった？」

そう尋ねられると、柚田は愉快そうに笑みを浮かべた。

「皆口を揃えてありがとうありがとうって感謝してたよ。本当、馬ツ鹿みたいだね。黛君の思惑通り、皆私に付いたみたい」

「計画通り、だね」

「うんっ！」

柚田は満面の笑みで頷いた。

表情と声こそいつもの彼女だが、その言葉は彼女の本心からのものだった。

柚田は自身が理想とする世界に着々と近づいていることを実感し、幸福に満ち満ちていた。

「平民は落とした。あとは御付きの人間たちだ」

「佐藤さんや松下さん、篠原さんのこと？」

柚田は柚椰が軽井沢と普段つるんでいる生徒のことを暗に指して

いると気づいたようだ。

彼女の問いに柚椰は頷く。

「彼女たちも軽井沢にポイントを貸した人間だ。君同様、貸した額は少ないだろうが、借金を未だ返済していないことは明白だ」

「まあそりゃね、クラスにポイントが振り込まれてないわけだしね」

「平民は恐れから軽井沢に文句を言うことができないわけだが、それは彼女たちも同じことだ。クイーンの怒りを買えば、王国から追放され一気に平民に落とされるかもしれないからね。だから3人も決して軽井沢にポイントを返せとは言っていないはずだ」

「でも、3人は軽井沢さんの友達だよ？ 案外気にしてないかも」

柚田がそう言うのと、柚椰はニヤリと笑った。

「まさか。近しいからこそ不満というのは水面下で蓄積しているものだよ。言いたいと言えないという不満か、或いは本人も気づいていないが実は溜まっていた不満か。いずれにしても、それはこちらが突けば簡単に吹き出す。平民同様、懐柔するのは容易だ」

「そっか、それもそうだね……」

思い当たるところがあるのか、柚田は少し含みを持たせた反応を示した。

「だが、同性である君が行くことはリスクもある。二大巨頭の片割れである君が付き人に接触すれば、軽井沢の耳に入る可能性があるからね。だから、3人の懐柔には俺が動こうと思う」

「黛君が？」

「軽井沢がポイントを借りて返していないことを、君から聞いたということにして3人に接触する。クラスのために、貸し借りの問題を放っておくことは出来なかったとしても言っておけばどうにでもなるだろう。クイーンを蹴落とす以上、彼女たちを懐柔することは避けて通れないプロセスだ。彼女たちに関しては1人につき20000ポイント渡すことにするつもりだよ」

「気に入らないけど仕方なく一緒にいる人に貸したポイントが200000になって返ってくる。そんな美味しい話なら、軽井沢さんに告げ口することはなさそうだね」

「ああ。彼女たちは間違いなく軽井沢から俺と君に鞍替えする。公言はしないまでも内心では完全に軽井沢を見限るだろうね」

「でも結局、アイツには彼氏の平田君がいるよ？ 付き合ってる彼女が女子たちから煙たがられたら流石に動くんじゃないかな？」

「いいや、それは無いと言っていいよ」

柚椰は平田が軽井沢のために動くことはないと言断した。

「どうして？」

「あの2人は単なる恋人関係じゃない。所詮、鍍金の女王と鍼力の王でしかないということだよ。彼も彼女も、人を束ね統率する役割を与えるにはあまりに脆い。俺のような小心者に付け入る隙を見せている時点で不合格だ。あの2人は所詮、その程度の器でしかないんだ」

櫛田は柚椰が自分のことを小心者と言ったことにはつつこみたかった。

しかし彼が言った『2人が単なる恋人関係ではない』という言葉への疑問。

そして2人が脆い王であると言った言葉には納得しているからか、それ以上口を挟むことはなかった。

彼は快活少女の頼みを引き受ける。

「やつほ、黛君。おはよう」

朝、寮のエントランスで一之瀬は柚椰を見つけると、ニコニコしながら話しかけた。

柚椰も彼女を視界に入るとニコツと笑って挨拶を返す。

「おはよう。随分早起きなんだね」

「うん、ちよつと管理人さんと話したいことがあったから」

「へえ、それは何を？」

「うちのクラスから何人か、寮に対する要望みたいなのがあつてね。それを纏めた意見を管理人さんに伝えてたところなの。水回りとか、騒音とか」

「なるほどね。それにしても、わざわざ代表して動くなんて真面目だね」

生徒各々で対応すべき事柄を代表して行う一之瀬。

こういうところが彼女の人気の秘密なのかもしれないと柚椰は感心していた。

「おはよう一之瀬委員長」

ちょうどエレベーターから降りてきた2人の女生徒に声をかけられ、一之瀬はそれに応えた。

女生徒が口にした単語に引つかかったのか柚椰は一之瀬に尋ねる。

「委員長？ 一之瀬はなにか委員会に入っていたのかい？」

「ううん、学級委員だよ。といっても、うちのクラスが勝手にやってるだけなんだけどね」

「なるほど。委員長以外にも役職を決めているのかな？」

「一応副委員長とか書記とかも決めてるよ。予め決めておけば学校行事のときとかにスムーズに動けるでしょ？」

「どうやらBクラスは本当に一之瀬を主導として纏まっているらしい。」

「Bクラスは統率が取れていそうでいいね。羨ましいよ」

「別に變に意識したりはしてないよ？ みんなで楽しくやってるだけだし。どうしてもトラブルは少なからずあるからね、苦勞することもあるよ」

「そういうものかい？」

「そうだよ。それに、Dクラスだって最近の良い感じじゃない？ 今回の事件だって、皆協力して証拠集めしてるんでしょ？」

「まあね。俺は表立って参加できていないんだけど」

柚椰の言葉に一之瀬は渋い顔になった。

「昨日堀北さんに会った時に聞いたよ。Cクラスのリーダー、龍園君に目を付けられてるんだよね？ だから今回、黛君は須藤君を見捨てたように見せてるって」

「どうやら一之瀬は昨日の段階で堀北と会ったのか、柚椰の事情を知っているようだ。」

「知っているなら話は早いね。堀北の言った通り、俺は今回殆ど動いていないんだ。裏で情報こそ集めているけど、人目につくところで聞き込みはしていないよ。だから君たちBクラスにも協力を頼んだんだ」

「黛君には大きな恩があるからね。喜んで協力するよっ！」

「そういうえば、結局生徒会の件はどうしたんだい？」

「うん、黛君と会長さんからあんな話聞かされちゃったらね……残念だけど立候補は止めようかなって」

「そうか」

一之瀬は生徒会入りを止めるつもりらしい。

次期会長が自分を狙っているかもしれないという情報を聞かされて、それでも立候補するほど命知らずではないのだ。

「おはよう一之瀬！」

「おはようございます一之瀬さん！」

柚椰と一之瀬が学校に向かって歩いてみると、道中で次々生徒たちが声をかけてくる。

その殆どが女子であり、皆一之瀬に挨拶をしてみた。

それは一之瀬帆波という生徒が、女子からの人望も厚いということの証明だった。

「人気者だね」

「そんなことないよ。他の子より目立っただけじゃないかな?」

「ただ目立つただけではこんなに人に慕われたりはしないよ。君の人徳が為せることじゃないかな?」

「そうかな?でも、そうだと嬉しいなっ」

柚椰の言葉に悪い気はしないのか、一之瀬は嬉しそうに笑った。

「あ、そうだ。黛君は夏休みのこと聞いた?」

「ああ、バカンスがどうこうという話かな?」

「うん、それ。黛君はどう思ってる?」

一之瀬は何か疑っているのか、柚椰の見解を聞きたいらしい。

「きな臭いというのが正直なところだね。この学校が生徒にただのバカンスを提供するとは思えない。夏休み返上で何か仕掛けてくる可能性は十分にあるだろうね」

「やっぱりそう思う? 私もそこがターニングポイントだと思うんだよね」

「一之瀬もか」

一之瀬はコクンと頷いた。

「中間テストや期末テストよりも影響力のある課題ってやつかな。上のクラスとの差ってテストじゃ全然埋まらなかったでしょ? だから大きく差を詰められるようなイベントがあるかもって」

「俺も概ね同じ見解だね。各クラスの間で最低100以上差がある以上、ドカンとポイントを稼ぐチャンスがあるだろう。うちもいい加減Cクラスとの差を詰めないかどうかにもならない」

「あはは……私に出来ることならなんでも言ってる?」

柚椰への恩義からか、一之瀬は健気にそんなことを言った。

「でも、もし本当にバカンスだったらそれはそれで楽しそうだよ」

「そうだね。その時はその時で楽しむとしようか」

「うんうん! あ、よかったらBクラスとDクラスで一緒に遊ぼうよ!」

「クラスの皆に聞いてみないと分からないけど、それも楽しそうだしそんなやりとりを交わしながら歩いていると、ふと何かを思い出したように一之瀬が立ち止まった。

彼女に倣うように柚椰も足を止める。

「どうしたんだい?」

「えっと、あのさ……参考までに聞いてみたいことがあるんだけど、いいかな?」

「いいよ。なんだい、改まって」

真剣な眼差しで尋ねてくる一之瀬に柚椰は首を傾げた。

「女の子に告白されたことある……?」

「え、まあ、無くはないけど、それがなにか関係が?」

「ううん、ごめん、何でもないの」

何でもないとは言っていない、彼女の表情はそうとは言っていない。

「告白でもされたのかい?」

「え? あ、うん、そんな感じかな」

どうやら一之瀬は誰かに告白されたようだ。

人気者の彼女であれば、ありえない話ではない。

「あのさ、良かったら今日の放課後時間貰えないかな? 告白のことでちょっと問題を抱えててさ……忙しいかもしれないけど」

「いや、構わないよ。さっきも言ったけど俺は表立って動いていないからね」

「ありがとう。じゃあ放課後、玄関で待ってるね」

「分かった」

そこで会話を終え、2人は別れて各々教室へ向かった。

「あ、あの……黛、くん……ちよつといいかな?」

柚椰が教室に到着し、席に着くや否や佐倉が彼の元にやってきた。今までクラスメイトとロクに会話すらしてこなかった佐倉が人に話しかける。

その光景はあまりに珍しいため、クラス中の視線を集めた。

周りからの視線に敏感なのか、佐倉はビクビクしている。

「ああ、佐倉か。いいよ。俺もちよつと用があつたんだ。廊下でいいかい？」

「う、うん……」

柚椰は佐倉を連れて教室を出た。

「用件はこれだろうか？」

廊下に出た柚椰は佐倉にデジカメを差し出した。

柚椰の要件が自分と同じであると理解した佐倉は急いで自分もデジカメを取り出した。

「寮に帰って鞆から出したらびっくりしたよ。俺のじゃなかったからね。多分昨日ぶつかったときに間違えてしまったんだろう」

「う、ううん、私が自分のつて言った所為だから……」

柚椰と佐倉は手に持ったデジカメを相手に渡し、相手から同じデジカメを受け取った。

「ま、黛君はどうして自分のじゃないって気づいたの……？」

暗にSDカードの中身を見たのかと佐倉は尋ねた。

しかし柚椰はニコツと笑うと首を横に振った。

「いや、まず外見で俺ではないことは分かったよ。俺面倒臭がつて液晶に保護フィルムなんて貼っていなかったんだ。なのに昨日部屋に戻って見てみたらフィルムが貼ってあったから、おかしいとすぐに気づいた」

「そ、そうなんだ……」

柚椰が中身を見ていないと知り、佐倉は胸を撫で下していた。

彼女は柚椰の言葉を信じたようだ。

ただ見ていないと言われただけなら彼女は安心しきれなかっただろう。

しかし、柚椰が佐倉のデジカメと自分のデジカメの外見の違いをす

ぐに挙げたことで信憑性が出たのだ。

「保護フィルムを貼るなんて佐倉は几帳面だね。そのデジカメ、大切にしているんだろう?」

「うん、大事な物……」

佐倉はデジカメを両手でギュツと抱えてつぶやいた。

それほどまでに彼女にとって、カメラは大切なのだろう。

彼女のその反応に、柚椰は少し困ったように頭を掻いた。

「えっと、大切な物が聞いておいてこんなことを言うのは本当に申し訳ないんだけど……それ、壊れているみたいなんだ」

「え……」

柚椰の言葉に佐倉はポカンとしていたが、慌ててデジカメの電源を押しした。

しかしカメラの電源は点かない。

何度も電源ボタンを押しても点かず、バッテリーを入れ直してみたが、それでも点かない。

完全に故障しているようだ。

原因は恐らく、昨日の落下のショックだろう。

「ど、どうしよう……!?!」

「ごめんね? 間違えた上に壊れてしまうなんて。もしどうにもならなそうなら弁償するから」

絶望したような顔で俯く佐倉に柚椰は困ったようにそう言った。

しかし佐倉は柚椰の申し出に首を横に振った。

「ううん、元はと言えばぶつかって私が悪いから……気を遣わせてごめん、なさい」

「いや、俺にも責任はあるよ。修理に出す時は言ってくれないかな?

修理費がかかるようなら半分出させてもらうよ。せめてそれくらいはやらせてほしい」

「うん、ありがとう……」

柚椰の善意を素直に受け取ったのか、佐倉はコクリと頷いた。

時間は流れ、放課後。

朝に約束したため、柚椰は玄関で一之瀬を待っていた。

5分ほど待っていると、一之瀬が柚椰に気づいたのか手を振りながらやってくる。

「黛君、お待たせ！ ごめん、待った？」

「いや、そんなに。精々2，3分くらいだよ」

柚椰は本来の待ち時間より少なく見積もった時間を告げた。

「それで、俺は何をすればいいのかな？」

「すぐに終わらせるつもりだから。ちよつとついてきて」

一之瀬は柚椰を伴って、学校の裏側へ向かった。

行き着いた先は体育館裏。

場所、時間帯、全てにおいてあることをするのに絶好のシチュエーションだ。

「さてと……」

呼吸を整え、一之瀬はくるりと柚椰に向き直った。

「私ね、今からここで告白されるみたいなの」

「へえ」

一之瀬は手紙を取り出して柚椰に見せた。

ハートの可愛いシールの貼られたいかにもラブレターと言わんばかりのものだ。

中を見て欲しいと促され、柚椰は中身を拝見する。

便箋や書かれている字体から相手は女子であることは明白。

内容は、一之瀬のことが入学当初から気になっていた。

最近恋愛感情を抱き始めたということが書かれていた。

結びには金曜夕方4時に体育館裏で会いたいと書かれ締めくくられていた。

指定された時間まであと10分といったところだろうか。

「これを受けて、俺はどうすればいいのかな？」

「私、恋愛には疎くって……どう接したら相手を傷つけずに済むのか。仲の良い友達でいられるのか分からないから……助けてほしいなっ
て」

「わざわざ俺に頼むということは相手は……」

「うん、Bクラスの子なんだよね……」

柚椰の予想通り、一之瀬に告白しようとしている相手は彼女と同じクラスの女子だった。

「今日のごとは出来る限り秘密にしたいの。そうじゃないとこれから先、気まづくなりそうだし。黛君なら約束守ってくれるでしょ？」

「まあ、そりゃあ一之瀬の頼みなら聞くけど……でも君なら告白なんてされ慣れていると思っただけだね」

「えっ!? や、全然！ そんなことないって。告白なんてされたことないもん！ だからもう、ほんとどうして、って感じでさ……」

そう言われ、柚椰は改めて一之瀬を頭からつま先まで見下ろした。

いきなり無言で見られていることに一之瀬は恥ずかしそうにモジモジとしている。

一通り観察し終わると、柚椰はふむ、と呟いた後に見解を述べた。

「単純に可愛いからじゃないかな？ それに優しいところもある。うん、一之瀬なら惚れられても仕方ないと思うよ」

「っつ！ もう、揶揄わないでよ〜！」

一之瀬は真っ赤になって両手をブンブンと振っていた。

「ところで、告白を断るための助けとは具体的に何を？」

「その……彼氏のフリ、してくれないかなって」

おずおずと、恥ずかしそうに一之瀬はポソリとつぶやいた。

なまじ美少女であるためか、その仕草は可愛いと言う他ない。

「色々調べたら、付き合ってる人がいるのが一番相手を傷つけないで済むって……」

「相手も君に恋人がいるかどうかなんて事前にリサーチしているんじゃないかな？ まさか相手も略奪愛を考えてはいないだろう」

「うっ、それは……」

「それに、相手を傷つけない気持ちは分かるけど、嘘がバレればど

の道相手を傷つけることになるよ?」

「すぐに別れたことにするとか。黛君にフラれたってことにしてもいいよ?」

「そんなことを言ったら、俺はこれから来る相手に夜道で刺されるだろうね……」

「ええっ!? さ、刺されちゃうの!」

柚椰から飛び出した物騒な発言に一之瀬は驚いていた。

その場面を想像したのか、彼女は心なしか目に涙を溜めているように見える。

「愛に生きる人間はときとして恐ろしいんだ……と、おや?」

「? どうしたの黛君——あっ!」

柚椰が途中で黙ったことを不審に思った一之瀬は彼が見ている方へ振り返った。

一之瀬の視界に入ってきたのは1人の女生徒。

その相手に一之瀬はぎこちなく手を挙げた。

どうやら告白相手が来たらしい。

相手はボーイッシュな顔立ちの女子だった。

女子が女子に告白するというのは昨今珍しくはないが、未だ新鮮な光景であることは確かだ。

「あの一之瀬さん……その人は?」

現れた女子は一之瀬の横に居る見知らぬ男子生徒に警戒感を示している。

「彼はDクラスの黛君。ごめんね千尋ちゃん、知らない人連れてきちゃって」

「……もしかして、一之瀬さんの彼氏……とかですか?」

「あ……えっと……」

「一之瀬とは仲良しのお友達だよ」

言葉に詰まる一之瀬に割って入る形で柚椰はそう言った。

予定と違う発言に一之瀬は虚を衝かれてキョトンとしている。

千尋と呼ばれた女子は割って入ってきた柚椰を睨みつけた。

「……そのお友達の黛さんがどうしてここにいるんですか?」

「一之瀬に呼ばれてね。ちよつとたわいもない世間話をしてただけだよ」

「じゃあ、さつきとどこか行ってもらえませんか。私これから一之瀬さんに大切な話があるんです」

「へえ、告白でもするのかい？」

「——ッ！ 貴方に関係ないでしょう」

敵意剥き出しで睨む女子に柚椰はカラカラと笑った。

「ふふつ、まあそれはそうだね。俺には関係ない。誰が誰を好きになるうとも、同性愛であるという社会的マイノリティに対して愛を以つて立ち向かおうともね。君が一之瀬のことを本気で好きになって、同じ女性であるということすら踏み越えて、勇気を出してこの日この場所に呼び出し、これから本気の告白をしようとしていることなんて、俺には全く関係のないことだよ」

「——！」

柚椰の言葉に一之瀬はハツとした。

彼の言葉を聞き、一之瀬は改めて自分に告白しようとしている相手を見た。

そして覚悟を決めたのか、コクリと頷く。

「ありがとう、黛君」

「ん、構わないよ。じゃあ健闘を祈ってるよ、千尋ちゃん」

柚椰は最後に告白相手にそう言い残し、その場を離れた。

柚椰は体育館裏から少し離れた並木道で立ち止まると、近くのベンチに腰を下ろした。

5分ほどそうしていると、彼の横をさつきの女子が小走りで駆け抜けていく。

少女の目には薄っすらと涙が浮かんでいたことに柚椰は気づいた。

「結局どこまでいっても、恋愛は片方が想うだけではどうにもならないものだよ」

柚椰は去っていく少女の背中を見送りながら、そんなことをつぶやいた。

少女が去っていった数分後、一之瀬がトボトボと戻ってきた。

「やあ、おつかれさま」

「あ……」

声をかけられ、一之瀬は柚椰の存在に気づいたようだ。

彼女は少し気まずそうに俯いたが、すぐに顔を上げる。

「私、逃げてたんだね。千尋ちゃんの気持ちを受け止めようともしないで、傷つけないことばかり考えてた。黛君に言われてハツとしたよ。千尋ちゃんのこと考えてるようで、本当はなにも考えてなかった」

恋愛って難しいね、と呟き一之瀬は柚椰の横に座った。

「明日からはいつも通りにするからって言ってたけど……元通りやっていけるかな」

「すぐには難しいだろうね。そう簡単に切り替えられたら苦労はないよ」

「そうだよね……ごめんね、変なことにつき合わせちゃって」

「構わないよ。君には世話になっているからね」

「それを言ったら、私だって黛君にはいっぱいお世話になってるよ。むしろ今回でまた1つ増えちゃった」

そう言って困ったように一之瀬は笑う。

彼女はグツと大きく伸びをすると、ピョンとベンチから立ち上がった。

「黛君も、なにかあったら私に言ってね？ 私、なんでも協力しちゃうからっ！」

「ああ、そのときはよろしく頼むよ」

「えへへ、じゃあ帰ろー！」

2人は朝のときと同様、並んで寮への道を歩いていった。

彼は寡黙少女を狙う男へ囁く。

日曜日、ショッピングモールに綾小路と櫛田の姿があった。

2人が今日ここにいるのには理由がある。

1つは佐倉がデジカメを修理に出すというのでその付き添い。

もう1つは言わずもがな、事件の証言をしてもらうための説得である。

後者に関しては柚椰が既に証拠を手に入れているため必要ないかのように思われた。

しかし昨晚、櫛田が柚椰に今日の予定について話した際に、彼は予想に反した返答をした。

『明日佐倉のカメラの修理に付き合うなら、引き続いて説得をしてほしい』

『え、説得を続けるの？ どうして？』

『データを見ていないことにしている以上、いきなり手を引くのは不自然だからね。あくまで証拠のために粘り強く説得しているように演出したほうがいい』

『そっか、それもそうだね。じゃあ綾小路君でも連れて行くよ』

『ああ、よろしく頼むよ』

そして柚椰への報告を終えた後、櫛田は綾小路に連絡し今日の予定をセッティングしたのだった。

2人は合流すると、佐倉との待ち合わせ場所へ向かった。

ものの数分で佐倉は見つかった。

帽子を深く被り、マスクをしているが、よく見れば佐倉だということに分かる。

彼女はモール内にある広場に備え付けられているベンチの1つに座っていた。

しかし彼女の横、つまり一緒のベンチにはもう1人座っていたのだ。

「やあ2人とも、おはよう」

佐倉の横に座っていた奴はにこやかな笑顔で綾小路と櫛田に手を振る。

そう、黛柚椰その人である。

「あれ、黛も来てたのか」

綾小路はてつきり3人だけだと思っていたのか少し驚いている。

「ちよ、ちよちよちよつと待ってくれないかな!? 黛君、一旦こつち来て!」

柚椰がここにいるということに櫛田は大層慌てており、彼の腕を掴むとその場を離れた。

綾小路と佐倉を2人きりで置き去りにしてしまっているのだが、今の彼女はそれどころではなかった。

「なんでここにいるの!? っていうか、なんで佐倉さんと一緒に待ってたの!」

物陰に柚椰を押し込むと、櫛田は凄い勢いで彼に詰め寄る。

「昨日デジカメを返したときに連絡先を交換してね。もし修理に出すときは連絡してほしいと言ったんだ。そうしたら昨日君とやり取りの後に連絡がきてね。俺も少し用があつたから一緒に行くと言つてついてきたんだ」

「だったらその後でもいいから連絡してよ!」

「ふふつ、ちよつと2人を驚かしてやろうと思つてね」

「もう……」

あつげらかんと笑う柚椰に櫛田はもう文句を言う気が失せたのか項垂れた。

「ほら、いつまでも2人を残しておくわけにもいかないし戻ろうか」

「うん」

2人はそこで会話を打ち切り、綾小路と佐倉のところへ戻った。

改めて合流した4人は、その足で早速家電量販店へ向かった。学校と連携しているため、モール内には全国的にも有名な量販店が多数設けられている。

利用するのが学生だけということもあり、店自体の敷地面積は決して広くはない。

しかし、日常で必要なものや学生が利用する可能性のあるものは十分取り扱っている。

「えっと、確か修理の受付は向こうのカウンターでやってたよね」

櫛田は何度か来たことがあるのか、思い出しながら店内の奥へと向かう。

その少し後ろを佐倉と綾小路と柚椰がついていく。

「すぐ直るかな……」

「本当にすまないね」

不安げな様子で、佐倉はデジカメを握りしめる。

その様子に居た堪れなくなったのか柚椰が困ったように頭を掻いた。

「う、ううん、違うの！　そういうつもりで言ったんじゃない……」

柚椰が謝ったことに佐倉は慌てて弁解をした。

2人の雰囲気を見かねてか綾小路が話題を変える。

「よっぽど好きなんだな、カメラ」

「え、う、うん。……変、かな？」

「いや全然。むしろいい趣味じゃないか？　なあ？　黛」

「そうだね。写真を撮るのは中々に面白いものだと思うよ」

柚椰のその言葉に綾小路はあることを思い出した。

「そういえば黛も佐倉と同じデジカメ使ってたんだよね」

「ああ。だから間違えてしまったんだけどね」

「何はともあれ、早く直るといいな」

「うんっ」

綾小路の励ましに佐倉は少し微笑みながら頷いた。

「あったよ、修理受け付けてくれるところ！」

店内は商品が多いため視界が悪くなっているが、どうやら店の1番奥に受付場所があったらしい。

場所がわかったことで一同は早速そこへ向かう。

「あ……」

受付場所に向かう途中で佐倉の足が止まった。

その横顔は、何か嫌なものを見つけたような嫌悪感が浮き上がっている。

しかし、彼女の視線の先には特に変なものは見当たらない。

「どうしたの？ 佐倉さん」

いきなり立ち止まった佐倉を変に思ったのか、櫛田が声をかける。

「あ、えっと……その……」

佐倉は何か言いたげな様子だったが、結局首を左右に振って深呼吸をする。

「何でもないから……」

そう言っただけで懸命に笑顔を浮かべ、彼女は受付場所へ向かった。

明らかに何かありそうな様子に残された3人は顔を見合わせた、本人が何でもないと言うならと後を追う。

佐倉の代わりに店員に話しかけ、デジカメの修理を依頼する櫛田。

その間手持ち無沙汰な男子2人は、辺りに陳列されている電化製品を眺めていた。

（佐倉の感情は嫌悪・恐怖。対象は恐らく……店員か）

櫛田は商品を見ながら、先ほどの佐倉の表情から感情を読み取っていた。

感情の種類と、その矛先。

佐倉が一度立ち止まったのは、修理受付の担当を視界に入れたから。

彼女が嫌悪の表情を浮かべていたのは、恐らく過去にその店員に何かをされたからだ当たりをつけた。

商品を見つつ、櫛田は櫛田が話している店員の様子を観察した。

店員はやけにテンションが高く、半ば捲し立てる勢いで櫛田に積極的に話しかけている。

聞こえてくる情報から、どうやら櫛田をデートに誘っているらしい。

シアタールームで上映されている女性アイドルのコンサートを見に行こう。

どうやら店員はアイドルオタクのようで、幅広いトークで櫛田にアプローチをかけていた。

櫛田は嫌がるそぶりを見せないことから、相手は好感触を感じているのだろう。

しかし――

(完全に引いているな……心の中で思いきり罵倒していそうだ)

櫛田は櫛田の本性を知っているため、彼女が今何を思っているかは手に取るように分かっている。

櫛田が笑顔を浮かべていても、内心では店員のことをゴミを見るような目で見ていることも熟知していた。

櫛田の心配を他所に、店員は気持ちが高ぶっているのかやり取りが一向に進まない。

このままでは流石にまずいと感じたのか、櫛田は佐倉にデジカメを出すよう促した。

店員は佐倉からデジカメを受け取ると、さっさと状態を確認した。曰く、どうやら落ちた衝撃でパーツの一部が壊れてしまったため電源が入らない。

幸いこのデジカメは佐倉が入学してから買ったものであり、保証書も保管されていたため、保証期間内で無償修理が受けられるとのことだ。

「どうやら弁償する必要はないみたいだな。よかったな黛」

櫛田と同じように会話を聞いていたのか、綾小路はそんなことを言う。

「保証書をちゃんと残していた佐倉に感謝しないといけないね」

綾小路の言葉に櫛田はカラカラと笑った。

彼らを他所に、修理の受付は順調に進められていく。

あとは必要事項を記入して終わり。

のはずだったのだが、佐倉の手が用紙を前にして止まった。

「佐倉さん？」

不思議に思った櫛田が、佐倉に声をかける。

しかし、佐倉は黙ったままペンを片手に固まっていた。

さつきまで櫛田との会話に夢中になっていた店員がじつと佐倉を見つめる。

佐倉も櫛田も用紙の方に視線を向けていて気が付いていない。

(店員に個人情報教えたくない。とかか……)

柚椰は店員の目つきと佐倉の様子から状況を把握した。

彼の横で事の成り行きを見ていた綾小路も店員の様子に不信感を感じているのか眉を顰めている。

「ちよつと失礼します」

「えっ？」

綾小路が動き出そうとした矢先、一足早く柚椰が佐倉の横に立った。

そして柚椰は佐倉からペンを受け取ると、彼女の代わりにさらさらと用紙にペンを走らせた。

「修理が終わったら俺に連絡してください。よろしくお願いしますね」

「ちよ、ちよつと君？ このカメラの所有者は彼女だよね？ それはちよつと……」

いきなり割って入ってきた男にムツとしながら店員はごねた。

「このカメラを壊したのは俺ですし、責任の一端くらいは背負うのが道理ですから。保証は受けられると先ほど伺いましたし、そもそも購入者と所有者が違っても問題はないはずですよ」

柚椰は淡々と説明を続けながら、名前や寮の部屋番号まで全て埋めてしまった。

「それとも、貴方が彼女の個人情報をもどうしても知りたくて知りたくて仕方ないと仰るのなら……その理由をお聞かせ願えますか？」

ニヤリと笑みを浮かべながら柚椰は店員にそう言った。

その発言に櫛田と佐倉は怯えたような顔で店員を見る。

「そ、そんなわけがないだろう！ 分かった、分かりました。大丈夫です」

女性2人からの視線が堪えたのか、店員は半ば声を荒らげながら了承の意を示した。

了承をもち取ったことで、受付は無事に終わり、用紙と共にデジカメが預けられた。

一安心とばかりに胸を撫で下ろした佐倉だったが、修理に2週間ほどかかるという聞いて、再び落胆して肩を落としていた。

「凄い店員さんだったね……凄い勢いで捲し立てられたから焦っちゃった」

受付場所から離れるや否や、櫛田が苦笑いをしながらそう言った。

「……ちよつと、気持ち悪いよね……」

「き、気持ち悪くはないけど。もしかして知ってたの？ あの店員さんのこと」

櫛田の問いに佐倉はコクリと頷いた。

そこから彼女はポツリポツリと事情を説明した。

「どうやらカメラを買いに来た際に対応したのがあの店員らしい。」

その時から店員はあのような感じで積極的に佐倉に話しかけていたようで、結果佐倉はあの店員が苦手になったようだ。

「綾小路君と黛君はどう思う、かな……？」

佐倉は男子2人の意見を求めた。

「確かに少し不気味ではあったな。黛が行かなかつたら俺が同じことをしてた」

「同じく。店員が客に対して接する距離感ではないねアレは」

綾小路も袖椰と同じことを思っていたらしく、解決方法も同じものを思いついていたらしい。

「カメラを買った時以外にも、この店に来る度に声をかけられて……だから1人で来るのが怖くて……」

「なるほど、だから俺が行くと言ったときにすぐ了承してくれたんだね」

柚椰は佐倉がすんなりと同行を許したことに合点がいったようだ。友達でもない、しかも異性である自分がついて行くとさえ人見知りの佐倉は断るだろうと柚椰は思っていた。

しかし予想に反して、佐倉はあっさりと了承した。

そのことに少し違和感を感じていたが、その答えが分かり納得したらしい。

「確かに、そういう事情なら俺か黛が代筆したほうが得策だな」

「まあ、責任の一端を負う上でこれくらいはやるさ」

「あ、ありがとう……黛君。綾小路君も、凄く助かった……」

佐倉は代筆を買って出てくれた柚椰と、一緒について来てくれた綾小路に礼を言った。

「気にしないでいいよ。住所くらい減るものじゃない。修理の連絡が来たら君に連絡するから」

「俺は何もしていないぞ？ 実際に動いたのは黛だ」

「先に動いたかどうかの違いしかないだろう？ 俺がやらなければ君がやっていたんだからさ」

「私にとっては、2人ともありがたかった……だから2人にありがとう、だよ？」

おずおずと再び礼を述べる佐倉。

その様子に綾小路は謙遜をやめ、素直に礼を受け取ることにした。

「それに、今日は櫛田さんも一緒だったから、話しかけられずに済んだよ。ありがとう」

佐倉は店員に対応してくれた櫛田にも礼を言った。

「全然、こんなことでよければいつでも言っただけ！ それにしても佐倉さん、カメラ好きなんだね」

「うん、小さいころはそうでもなかったんだけど。中学生になる前くらいかな、お父さんに買ってもらってからどんどん好きになっちゃって。でも、撮るのが好きだけでカメラのことは全然詳しくないんだけど」

「詳しいのと好きなのは別だよ。何かに夢中になれるのって素敵だよ」

「佐倉は風景写真がメインなんだっけ？　人は撮らないのか？」
「ふえっ!？」

綾小路からの質問に佐倉は仰天して後ずさる。

わたわたと慌てるその様は、明らかに挙動不審だ。

質問自体は至って普通の、特に変でもないものだったはずだ。

しかし、佐倉は口をパクパクさせ、体を硬直させている。

「ひ、秘密……」

どうやら佐倉は答えたくはないらしい。

その返答に綾小路は若干傷ついていた。

「あ、あのね、その、恥ずかしいから……」

頬を赤らめ、俯きながら佐倉は言う。

これ以上深く聞くことは良くないと踏んだ綾小路は話題を変えた。

「そうだ、ついでで悪いんだけどさ、ちよつと店内を見ていてもいいか？」

「何か欲しい物でもあるの？」

「いや、どんな物が置いてあるか気になってな。3人は適当にブラブラしてくれてもいいし」

「あ、俺は少し1人で見たいものがあるから一旦離れるね」

どうやら柚椰は個人的に見たいものがあるのか、1人で行きたいと申し出た。

「じゃあ、私たちは綾小路君についていこつか？」

「う、うん。付き合ってもらったし、時間もあるから」

女子2人は綾小路についていくことにしたようだ。

「じゃあ、店の外で落ち合おうか」

「ああ、分かった」

「オツケー！」

「うん……」

柚椰は3人に言い残してスタスタと店の奥へと消えた。

柚椰が向かったのは、先ほど用を済ませたはずの修理受付だった。そこには先ほど柚椰たちに対応した店員がまだ居た。

「やあ、店員さん。さっきぶりですね」

「っ！ 君は……」

店員は柚椰を視界に入れた途端、苦虫を噛み潰したように顔を顰めた。

佐倉と櫛田がいないからか、嫌悪感を剥き出しにしている。

「何の用ですか？ 修理は受け付けましたし、もう用は済んでいるでしょう」

およそ店員としてはあまりに愛想がない対応だが無理もない。

柚椰はそんな対応にもカラカラと笑みを絶やさない。

「いえ、店員さんとちょっと個人的にお話がしたくてですね？ 随分な女好きとお見受けしたので」

「……お客様には関係のないことです」

「明るくて可愛くて巨乳の女性とあれば、デートに誘いたくもなりますよね？ まあ、アイドルのコンサートに誘うのはちよつとどうかと思います」

「っ！ 君には関係ないと言って——」

「でも貴方の本命は佐倉愛里、でしょう？」

「——っ!？」

柚椰のその言葉に店員は息を呑んだ。

どうしてそれと言わんばかりに目を見開く店員に柚椰はニヤリと笑う。

「分かりますよ。大人しそうで詰め寄れば嫌とは言えなさそうですからね。おまけにスタイルも抜群ときた。獲物にするならうつつで

すよね」

「ち、違う！俺はそんなつもりであの子に近づいたわけじゃ……」
「おや、となると何か別の理由があるようですね。今の彼女の為人が判断材料じゃないとすると……彼女の本当の姿を知ってるから、とかですか？」

「なっ——!?!」

店員は今日一番の驚きを見せた。

ビンゴと言わんばかりに柚椰はさらに畳み掛ける。

「彼女の本当の顔は俺も知っていますよ。その上で普通のクラスメイトとして彼女に接しています。お分かりの通り、彼女は自分を偽って学校生活を送っています。本当は世の男子の憧れでありながら、クラスノ端にいる地味な生徒としてね」

「ど、どうしてそんな……」

店員は佐倉がどうしてそんなことをしているか理解できないと言いたげだった。

彼女の本当の姿を知っているから、彼女の魅力を知っているから。彼女がそれを隠しているということがどうしても理解できなかった。

「彼女は自分を色眼鏡で見てくる男子が嫌だったんでしよう。恐らく元々内気な性格で、カメラの前でだけ伸び伸びとしていられる。そんなところでしようか。いや、実に不憫ですね。もっと彼女には自分を曝け出してほしいものです」

「……彼女はどうしてそんなに自分を隠そうとするんだ？」

「男性経験がないからじゃないですか？内気な上に、異性との接し方も分からないのでしよう。いじらしくて可愛らしいじゃないですか」

柚椰は話は終わりだとも言うように、そこで会話を打ち切り踵を返した。

「ああ、彼女に恋人でも出来たらきつと自由になれるだろうに。何処かにいないものだろうか。彼女のことを本気で愛しているような、そんな素晴らしい人間は」

最後に店員をチラリと見て、柚椰はその場を後にした。

「……」

柚椰が言い残した言葉を聞き、店員が何を思ったのかは本人しか知る由もなかった。

彼と不良教師は事を企てる。

休日明けの月曜日、審議の日まで残り1日となった。

堀北が佐倉という目撃者を見つけ、櫛田や平田、軽井沢といったクラスの中心人物たちの行動でクラス全体が纏まりつつあった。

しかし、未だ決定打に欠けることは明白で、須藤を確実に無罪にすることは難しかった。

当初の作戦通り、相手の偽証を証明するという方向で進んでいるものの、可能性は五分五分といったところだ。

「今日も暑いな……」

登校すべく、寮のロビーから出た綾小路は全身を包み込むような熱風に顔を顰めた。

時期は7月。もうすぐ夏本番ということで気温も日を追うごとにどんどん上がっている。

じんわりと汗が浮き出るような暑さがこれからさらに激しくなることに綾小路はうんざりしていた。

学校に辿り着き、靴を履き替えて校舎の中を歩き始めたとき、彼はある変化に気がついた。

下駄箱から少し先にある階段の踊り場に設けられている掲示版。

そこに、須藤とCクラスに関する情報を持つ生徒を募集する張り紙が貼ってあったのだ。

「これは……」

「おはよー綾小路君っ」

張り紙を眺めている綾小路に、今登校してきたのであろう一之瀬が声をかけた。

振り返って彼女を見た綾小路は、先ほどまで見ていた張り紙と彼女が繋がった。

「もしかして一之瀬か？ この張り紙」

そう尋ねられると、一之瀬はキョトンとした顔で首を傾げた。

彼女は例に倣って先ほどまで綾小路が見ていた張り紙を見た。

「へえ。なるほどなるほど。こういう手もアリだねえ」

「え、一之瀬じゃなかったのか」

「ううん、私じゃないよ。これは多分……あ、いたいた！ 神崎くん！」

一之瀬は手を挙げ、ある男子生徒を呼び止めた。

彼女に気づいた男子生徒は、静かな足取りで近づいてくる。

「この張り紙、神崎君だよね？」

一之瀬は張り紙を指で差して尋ねた。

「ああ。金曜日のうち用に用意して貼っておいた。それがどうかしたか？」

「ううん、彼が誰がやったのか知りたがってたから。あ、紹介するね。Bクラスの神崎君。こっちはDクラスの綾小路君だよ」

「神崎だ、よろしく」

神崎という生徒は物腰は固めだが真面目そうな印象を与える男だった。

高身長、スラリとした体型。

平田や黛とは違ったタイプで人気が出そうだな、と綾小路は思った。

「どう神崎君。有力な情報はあつた？」

「残念ながら使い物になりそうな情報は無かった」

「そっかあ……じゃあこっちも例の掲示板見てみるね」

「掲示板？ 他の場所にも張り紙がしてあるのか？」

その問いに一之瀬は薄く笑い、違うよと否定した。

彼女は端末の画面を綾小路に見せた。

「学校のホームページって見たことある？ そこに生徒が自由に使える掲示板があるんだよ。だからそこでこの前から情報提供を呼びかけてみるんだ。学校での暴力事件について目撃者がいれば話を聞かせて貰いたいってね。ただ……」

「そっちも今の所当たりはない、と」

「そうなんだよね……」

綾小路が覗き込んだ画面には確かに目撃者を募る書き込みがあり、閲覧者数まで見られるようになっていた。

その数は未だ数十人のようだが、直接聞いて回るよりは遥かに効率的といえる。

有力な情報をくれた人や目撃者には報酬としてポイントを支払う用意があると書かれてあった。

「あ、ポイントのことは気にしないでね。私たちが勝手にやってることだからさ。それに、今の手応えだとちよつと望み薄だし……あ」

話の途中に一之瀬が何かに気づいた。

「どうした？」

「新しい書き込みだよ。少し情報があるって」

暫くメールを読んでいた一之瀬だったが、読み終えたのか少し笑みをこぼした。

「こんな感じなんだけど」

一之瀬が2人に端末の画面を見せた。

そこにはとある生徒からの匿名の情報が記載されていた。

ハンドルネームは麻ま友ゆ子こ。

内容は今回の事件に関わっているCクラス側の生徒に関するものだ。

「例のCクラスの1人、石崎は中学時代相当な不良だったの。暴力沙汰が絶えず、地元では名の通った荒くれ者。関わらないが吉だよ☆」
か……」

画面に表示された文面を綾小路が読み上げる。

「多分同郷の子からのリークかな？」

「興味深いな」

同じく、近くで文面を読んでいた神崎がそう呟く。

その呟きに綾小路も頷いていた。

須藤にやられたと訴えているCクラスの生徒3人は、皆ごく普通の生徒だという先入観があった。

しかし、その内の1人が喧嘩慣れしているというのなら話は別だ。残りの2人に関しても須藤と同じバスケット部に所属しているという

ことから身体つきはしっかりしているはずだ。

その3人が須藤相手に一発も殴れずに返り討ちにあつた。

明らかに不自然であることは言うまでもない。

「神崎君はこれを見てどう思う?」

「……もしかすると、須藤にやられたのはわざとかもしれないな。3人が、というよりはCクラスが、須藤を罠に嵌めるために動いたと考えればしっくりくる」

「うん、やっぱりそうだよな。さすが神崎君! あとはこの情報の裏付けがしっかり取れば、須藤君の無罪に一步繋がるかもね。でもまだ弱い、かな?」

「そうだな。上手く心証を操作できたとしても半々が良いところだろう。どうしても一方的に殴つたと言う事実が重く圧しかかってくる」

一之瀬と神崎は極力責任の比重を和らげようと考えているようだ。

「Dクラスの見撃者の意見を合わせれば6:4、あるいは7:3まで持っていけるかもしれない。そつちの方はどうなんだ? 確実な目撃者だったか?」

「正直まだなんとも言えないな……」

綾小路は佐倉の名前を伏せて、未だ交渉中だと答えた。

昨日の出来事を経て、佐倉はこちらを信用してくれたのか、証言をすると申し出てくれた。

しかし当日どうなるかはまだ不確定だったため、そう答える他なかったのだ。

「そつか……何か事情があるのかな?」

佐倉の問題はデリケートなため、綾小路は明言を避けた。

「流石に別の目撃者の報告はないね。出てくれば面白いと思つたけどやっぱり厳しいかなあ。もう時間はないけど、ネットや張り紙から情報が来るのを待つしかないね」

「いいのか? そこまでして貰つて。Cクラスの連中に目をつけられることになるぞ?」

「へーきへーき。元々私たちはCとA、その両方から狙われることになるんだし。それに……黛君にお願いされちゃつたからね」

一之瀬がそう言うのと、隣で聞いていた神崎が頭を抱えた。

「すまない綾小路。事件の捜査に協力すると言いついてから一之瀬はずっとこうなんだ。元々少し前から口を開けば黛君、黛君といった具合でな——」

「わーわーわー!! にや、にやにを言ってるのかな神崎君は!」
「んぐっ!」

神崎の口を一之瀬が大慌てで遮る。

彼女は顔を真っ赤にして必死な形相で神崎の口を両手で塞いだ。

「むぐぐ!」

「もー! 神崎君たら! 私がそんなに黛君のこと言ってるなんてそんなわけないじゃない! 綾小路君も勘違いしないでね!? そ、そういうのじゃないから! 全然違うから!」

「分かったから神崎を放してやれ。そろそろ窒息しそうだぞ」

綾小路が神崎を指差したことで、ようやく一之瀬は神崎がぐったりしていることに気づいた。

「あつ!? ぐ、ごめんね神崎君!」

「ふはあーっ! ……こ、殺す気か!」

「ご、ごめんってば〜!」

ようやく解放され、思いつき酸素を吸った神崎は恨めしそうに一之瀬を睨んだ。

一之瀬もこれに関しては自分が悪いと自覚しているためオロオロしながら謝っている。

なんとか息を整えた神崎は大きく咳払いをして、一之瀬を当初の話題に戻そうとした。

その意図が伝わったのか、一之瀬は頭を切り替えて話に戻る。

「と、とりあえず、情報くれた子にはポイントを振り込んであげないかね。あ、でも匿名の相手にどうやって渡せばいいんだろう?」

「良かったら教えようか?」

首を傾げている一之瀬に綾小路が助け舟を出す。

「綾小路君分かるの?」

「いろいろ弄ってたら覚えた。相手のメールアドレスは分かるか?」

「フリーのだけど分かるよ」

一之瀬は綾小路に端末を見せた。

それを覗き込みながら綾小路は具体的なやり方を説明する。

「まずポイントの送金画面を開いてくれ。左上に自分のIDが出てるはずだ」

「えーっと」

一之瀬はスムーズに手を動かして画面をタップする。

数秒とかわからず、目的のポイントページが端末に表示された。

そして画面の左上に番号が表示されているのを確認する。

「あったあった。これだね。それで、この後はどうすればいいの？」

「そのID番号から一時的なトークンキーが発行できるんだよ。それを相手に伝えれば入金のリクエストが来るはずだ」

「そうなんだくありがと！」

「どういたしまして」

「じゃあ行こうか、せっかくだし3人で行こっ！」

一之瀬は綾小路と神崎を伴って、教室へ向かった。

「おはよー綾小路君！」

「お、おう。おはよう」

教室に入る綾小路を榎田が笑顔で出迎えた。

その眩しいまでの笑顔に綾小路は仰け反っている。

「おはよう」

綾小路に少し遅れる形で、今度は柚椰が教室に入ってきた。

彼はその足で綾小路たちのところまでやってくる。

「綾小路、榎田、おはよう」

「おう、おはよう」

「おはよう黛君っ」

「堀北もおはよう」

柚椰は席に座って本を読んでいる堀北にも挨拶をした。

綾小路と櫛田には挨拶をしなかった彼女だが、柚椰がそう言う本を閉じて顔を上げた。

「ええ、おはよう黛君」

黛には挨拶するんだな、と綾小路は内心思った。

「昨日は楽しかったよねっ」

櫛田は昨日のことについて男子2人に話題を振った。

「まあな。初めて休日に出かけたし、いい思い出になった」

「中々に寂しい発言だね、それは」

綾小路の発言に柚椰は苦笑いした。

「2人とも、また今度一緒に遊ぼうね!」

天真爛漫な笑顔でそう言い残して櫛田は女子グループの方へ向かっていった。

「黛君」

櫛田がいなくなるや否や、堀北が柚椰に話しかけた。

「ん、なにかな?」

「……休日は櫛田さんと一緒だったの?」

「あと佐倉と綾小路だね。4人で遊んでいたんだ。そうだろう?」

「俺は佐倉の件で協力してほしいって頼まれて仕方なくな」

柚椰に振られた綾小路は事の経緯を堀北に説明した。

「そう……」

一通り事情を理解した堀北は暫し考え込むそぶりを見せると、ジトツとした目で柚椰を見た。

「黛君、貴方はどうしてそこに参加していたのかしら? 表向きには証拠集めに関わらないということなのだから佐倉さんや櫛田さんと一緒にいる必要はなかったと思うのだけど」

「んー、少し用があったからね。あと佐倉のデジカメが壊れたのは俺にも責任があったから」

「つまり責任があれば黛君はどこにでも行くと、そういう解釈でいいのかしら?」

「まあ、そうだね。ケースバイケースだけど」

「そう、なら友人としての責任を取って私とも出かけるべきじゃないかしら？ 私が把握している限りでは休日には友人から遊びに誘われたことは一度もないのだけど。以前私をデートに誘うような事を言っておきながらただの一度もよ。別に私は休日に友人と出かけたとか遊びたいとか思っているわけではないけれど、佐倉さんとも遊んでいる以上、友人である私が誘われられないというのは不公平だと思うの」

早口で捲し立てる堀北の姿に、傍観していた綾小路は既視感を感じていた。

以前メール云々で彼女が柚椰にごねたときと似ていたのだ。

というか、以前須藤に友達に先も後もないと言っていただろう、とつつこみたかったが彼は我慢した。

「え、誘ってよかったのかい？ てつきり君は一人で過ごすのが好きなんだと思っていたんだけど」

「そうね。それはその通りだわ。けど、友人からのお誘いなら話は別よ。友人である貴方からのお誘いを無下にするほど私は薄情ではないわ。それに、重ねて言うけれど、私はあくまで公正を期すために言っているだけよ。堀田さんと私との間に優劣なんて設けてはいけないわ。だって私も友人の友人なのだから」

どうやら堀北は堀田に対して並々ならぬ対抗心があるらしい。

「じゃあ今度一緒にどこかに出かけようか。今回のお詫びに奢るからさ」

「そう……ならいいわ。別に今回のことを怒っているわけではないけれど、せっかくの善意を無駄にするのも良くないでしょうし、その厚意に甘えてご馳走になることにするわ」

柚椰が了承したことで、堀北はひとまず機嫌が直ったようで、再び本を開いて読み始めた。

彼女が再び本の世界に入ってしまったのを見て、綾小路は柚椰と小声で話し始めた。

「堀北があんなにムキになるのは意外だったな」

「自分だけ誘われなくて寂しかったんじゃないかな？」

「どつちかというと黛に誘われなかったってことが大きいと思うぞ」
「なんにしても、友達だと思ってくれているのはありがたいね」
一般的な友達としての詰め寄り方じゃなかったと思うぞ、と綾小路は言おうとしたが、藪蛇になりそうだったため口を噤んだ。

ホームルームを終えた茶柱先生を昨日一緒に遊んだ4人が呼び止める。

教室の中だと目立つため、佐倉への配慮だ。

前列に櫛田と堀北と柚椰。

後列に綾小路と佐倉が待機する。

一同を代表して櫛田が先生に事の説明をする。

「目撃者？ 須藤の事件のか」

「はい。実は佐倉さんが事件の一部始終を見ていたんです」

櫛田が後ろで静かに待機していた佐倉を呼び寄せる。

彼女は少し緊張した面持ちで前に出た。

「櫛田の話によれば、須藤たちの喧嘩を見ていたそうだが」

「……はい。見ました」

先生に凝視されて居心地が悪そうにしながら、佐倉はボソリと答える。

それから彼女はゆっくりと、言葉に詰まりそうになりながらも自分が見た事実を語った。

先生は佐倉の話の最後まで一言も口を挟まずに聞いていた。

「お前の話は分かった。が、それを素直に聞き入れるわけにはいかないな」

目撃者の発見に、Dクラスの担任である茶柱先生なら喜ぶと思っていたのだろう。

期待を裏切られた櫛田が、慌てて理由を尋ねる。

「ど、どういうことですか？ 先生」

「佐倉、どうして今になって証言した。私がホームルームで報告した際には名乗り出なかったな。欠席していたわけでもなかっただろう」

「それは……その……私は誰かと話すのが、得意じゃないので……」
「得意じゃないのに今になって証言するのも変じゃないか？」

当然の追求を茶柱先生は行う。

先生その言葉を聞いた櫛田はハツとした。

以前柚椰の部屋に呼ばれた際に、彼から言われたことと全く同じだったからだ。

彼の予想通り、すんなりと佐倉の証言を有用な証拠として採用されるわけがなかったのだ。

「えつと……クラスの、が、困ってるから……私が証言する事で、助かるなら……そう思ったから……」

蛇に睨まれた蛙のように、佐倉は小さく縮こまり背中を丸めてしまふ。

担任である茶柱先生は佐倉の為人を把握しているはずだ。

こうして真実を話しているだけでも、大きな成長だと感じているだろう。

「なるほど。お前なりに勇気を出してのことだった、ということだな？」

「は、はい」

「そうか。お前が目撃者だと言うのなら、私は当然の義務としてそれを学校側に伝える用意がある。だがその話を素直に聞き入れ、須藤が無罪になることはないだろう」

「ど、どういうことですか？」

「本当に佐倉は目撃者なのか？ ということだ。Dクラスがマイナス評価を受けるのを恐れて、捏ち上げた嘘なんじゃないかと私は思っている」

「茶柱先生、そんな言い方は酷いと思います！」

あんまりな言い様に櫛田が声を荒らげた。

「酷い？ 本当に事件を目撃しているなら初日に申し出るべきだ。期限ギリギリになって名乗り出られても怪しむのが当然だろう。それと同じクラスからの目撃者とくれば尚更な。疑うなという方に無理がある。そうは思わないか？ 都合よく同じクラスの生徒が人気のない校舎にいて偶然一部始終を目撃した。出来過ぎだろう」

茶柱先生の言い分は尤もだった。

佐倉が事件を目撃していたという事実はあまりに出来過ぎている。疑われたとしても仕方ないのだ。

相手方に見れば、内輪の作り話だと思うのが当然だ。

公正なジャッジを行えば、目撃証言として弱くなるのはやむなしだろう。

「しかし目撃者は目撃者だ。嘘だと決め付けるわけにもいかない。ひとまず受理しておくことにしよう。それから、場合によっては審議当日、佐倉には話し合いに出席してもらおうことになるだろう。人と関わるのが苦手なお前に、それが出来るのか？」

試すような発言で佐倉を揺さぶる茶柱先生。

案の定佐倉は、当日のことを想像してか顔が青ざめている。

「それが嫌なら辞退するのも手だ。その際には審議に参加する須藤に伝えておけ」

「大丈夫？ 佐倉さん」

「う、うん……」

気遣う櫛田に一応返事を返す佐倉だったが、自信はなさそうだ。

人前で証言することに加え、当日は須藤と二人きりで審議に参加。彼女にそれを強いるのは酷としか言い用がない。

「私たちが参加しても構いませんか、先生」

やはり名乗りを上げたのは櫛田だった。佐倉を援護するためだろう。

「須藤本人の承諾があれば許可しよう。だが何人もというわけにはいかない。相手方が当事者3名である以上、最大で2名まで同席することを許可する。よく考えておけ」

話は終わりだ、とでも言うように先生は全員を教室へ戻るように促

した。

職員室を後にした一同は教室に戻り、堀北に事情を説明した。

「当然と言えば当然の結果ね」

「ごめんなさい……私がおっと早く名乗り出てたら……」

「過ぎたことを悔いても仕方ないわ。確かに早ければもう少し違った結末があったかもしれない。けれど、目撃した人物がDクラスだった以上、さしたる違いはなかったわ」

それは堀北なりのフオローなのだろう。

誰もが納得する目撃者や証拠が出てこない限り、須藤を無罪にするのは無理だった。

「それから櫛田さん、当日は私に任せてもらえないかしら。貴女が佐倉さんの支えになることは十分理解しているけれど、討論となれば話は別よ」

「それは……うん、そうだね。私じゃ、その部分は力になれないと思う」

「佐倉さんも、それで構わないかしら？」

「わ、分かった」

全然良くはないといった感じだったが、背に腹は代えられないということで了承する他なかった。

「そういえば、先生は最大2人って言ってたよ？ あと1人誰か参加させたほうがいいんじゃないかな？」

櫛田は茶柱先生の言葉を思い出して、そう言った。

堀北もその事は考えていたのか暫し思索するそぶりを見せた。

「あと1人……そういえば、貴方たちは4人で出て行ったわよね？」

1人居ない気がするのだけど」

「え？」

櫛田は今顔を突き合わせている人間を一通り見回した。
教室に残っていた堀北を入れてここには4人しかいない。
つまり1人居ないのだ。

「黛がないいな」

該当する人物、つまりここに居ない人間を綾小路が言い当てた。

「あれっ!? 黛君は!？」

「それで、お前は一体何の用だ? 黛」

櫛田たちが教室に戻った頃、職員室の前で茶柱先生と柚椰は顔を突き合わせていた。

帰るように促したにも関わらずその場に留まった柚椰に別件があるのだろうと察した先生は職員室に戻らず、彼に要件を尋ねた。

「明日は審議の日ですね。Cクラス側の訴えは変わりませんか?」

柚椰のその問いに茶柱先生は腕を組み、壁に寄りかかって嘆息する。

「相変わらずだ。相手方は須藤が全ての元凶だと一貫して主張している。佐倉を目撃者として引っ張ってきたことは褒めてやるが、それだけでは弱いぞ。彼女の証言だけで須藤を無罪にするのは不可能だ」

「いえ、俺は今回の事件で須藤の無罪を主張するわけではありませんよ」

「なに?」

茶柱先生は不審そうに眉を顰めた。

「俺が、というより俺たちが目指しているのは、Cクラス側の主張と証言の偽証を証明することです」

「なるほどな……その点で勝ちを拾うつもりだったのか」

柚椰の言葉に納得したように茶柱先生は息を吐いた。

「だが、どちらにしても佐倉だけでは偽証の証明など出来んよ。お前

が審議に参加すると言うのなら、わずかに可能性はあるかもしれんがな」

「いえ、俺は審議の場に参加する気はありませんよ。参加するのは堀北と……恐らく綾小路辺りがやるでしょう」

「綾小路が？ アイツはこの手のことに参加するとは思えんが」

「そこは適当に理由をつければどうにでもなります。俺が出ないとなると、堀北は彼を指名するはずですから」

「ふっ、随分と堀北のことを熟知しているじゃないか」

「付き合いも長いですから」

二人は堀北のことを脳裏に浮かべながら微笑み合った。

「では、審議に参加しないでどうやって勝ちを挽ぎ取るつもりだ？

何か考えがあるんだろう？」

「先生は話が早くて助かります」

茶柱先生が話に乗りに気になったことで、柚椰は本題に入る。

「現状有力な証拠はありません。こちら側にも相手側にも、そして学校側にも、ね？」

「どういう意味だ？」

「学校側は、というより今回審議に参加する茶柱先生とCクラスの担任の先生。そして最終決定を下すであろう生徒会側も事件について詳しくは知らないはず。違いますか？」

「ほう、生徒会が判決を下すことを知っていたのか」

「まさか。初歩的な推理ですよ。生徒間のいざこざで学校側が出張るのなら、当事者同士や先生だけではどうしても偏った判決が下される可能性はある。ならば公正を期すためには第三者、つまりどちらにも属さない上に一定の権限がある人間が出てくることは明白です。結果、該当するのは生徒会だけでしょう。恐らく堀北会長が当日の裁判長役ですね？」

「……やはりお前は食えん奴だ」

言葉こそ投げやりだが、先生は柚椰の推理に素直に感心しているようだ。

「それで、それを受けてお前はどう行動するつもりだ？」

「当日行動するのは俺ではありませんよ。動くのは茶柱先生、貴女です」

「なに？」

わけが分からなくても言いたげに茶柱先生は片眉を上げた。

「私に須藤の弁護をしろう？ 確かに私はお前たちの担任だが、立場上は学校側だ。堂々と肩入れするような行為が許されるわけがないだろう」

「先生にしてもらうことは至って簡単なことですよ。審議の場でCクラスの偽証が証明されるような証拠が出た場合、それを相手側に飲ませる。その上で相手がもし訴えの内容を変えようとするならば、一から提訴することを求める。もし相手がそれでも提訴すると言うのなら、その前にこちら側の訴えの審議に持ち込むぞと言っていただければ」

「こちら側の訴え、だと？」

「訴えを起こす際に何か必要なものはありますか？」

「ああ。必要書類に訴える相手とその内容、被疑者と被害者の明記。そしてもしも第三者が提訴するのならその人間の名前を記入して担任か生徒会に提出すれば完了だ」

「ならば茶柱先生、その用紙をいただけませんか？ 訴える相手は今回の事件に関わったCクラスの生徒3名。被害者は須藤健。第三者の欄には俺が名前を書きます」

「ふむ、訴えを起こすのは個人の自由だが、何を訴えると？」

「そうですね……内容は須藤への暴行の教唆、Dクラスの生徒への名誉毀損、といったところですか」

柚椰はニヤツと笑いながら、訴えの内容を語った。

それを聞いた茶柱先生はようやく彼の作戦に気づいたのか同じくニヤリと笑う。

「面白い。相手が一から提訴するというのなら、先にお前の訴えを提出する。用紙を用意するのに時間が必要な以上、必ずこちらが先手を取れるということか」

「その通りです。そしてこの訴えが通り、新たに審議が開かれた場合、

必ずこちらが勝ちますよ」

「ほう、なぜそう言い切れる？」

「先に言った先生にやっていただきたいことの1つ目ですよ。審議の場で偽証が証明されるような証拠が出る……要はそれは相手の偽証だけでなく、後出しでこちら側が訴えた内容を立証する確たる証拠になるんですよ。須藤はCクラス側の策略で殴るように仕向けられたことの、ね……」

「クククッ、今まで何年もDクラスを受け持ってきたが、お前みたいな生徒は初めてだよ」

茶柱先生は心底愉快そうに笑った。

彼女の教員人生の中で、柚椰という生徒は飛び抜けて異質だったのだ。

柚椰が自分のクラスの所属になったことに、彼女はある種運命的なものを感じた。

「もうお分かりの通り、俺はこの審議をひっくり返す証拠を既に持っています。佐倉の証言は相手方を油断させるために用意したブラフですよ。俺は明日の審議の日に証拠を提出します」

「ほう、だがDクラスからの情報提供では信憑性に欠けるぞ？」

既にその点はクリアしているであろうということは察しながらも、茶柱先生は試すような問いを投げる。

「これが実は俺が見たわけではないんですよ。一般生徒から、たまたま須藤たちの喧嘩の様子を見たという情報を仕入れただけです。あとはこれをDクラスからの証拠提出ではなく、学校側が独自に情報収集を行った過程で入手した、ということにするだけです」

「……なるほどな、いい抜け道を見つけたな黛」

「今回の審議に参加する堀北会長とは個人的に繋がりがありませんからね。これから話をつけにくくつもりですよ。生徒会側も事件の詳細な情報は欲しいでしょうから。しかも、1—Dの黛柚椰からの情報ではなく、一般生徒からの情報を黛柚椰が代表して提出するんです。それは学校側が生徒を通じて得た有益な情報に他なりません。紛れもない有力な物的証拠として間違いなく受理されますよ」

柚榔から一通り話を聞いた茶柱先生は大きく息を吐き出した。

そして誰にも見せたことのないような優しい笑みで柚榔に笑いかけた。

「お前は悪い生徒だな篤。だが、お前のような生徒は嫌いではないぞ」「ありがとうございます。俺も、茶柱先生みたいなノリの良い人は大好きですよ」

こうして水面下で、担任と一生徒の悪巧みが始まった。

彼らは審判の刻へ向けて準備を進める。

昼休み、教室では明日に迫った審議についての作戦会議が開かれていた。

堀北と綾小路の席を中心に須藤、池、山内の3人と櫛田と柚椰が集まるといった状態だ。

「明日、勝てるかな私たち……」

「ここまできたらもう後には引けねえだろ。なあ?」

櫛田と須藤は同時に堀北に意見を求める。

答えるのが面倒なのか、堀北は無言でパンを口に運んだ。

「おい堀北、どうなんだよ実際」

空気を読めない須藤が、堀北の顔を覗き込む。

「汚い顔を近づけないでくれないかしら須藤君」

「き、汚くねえよ……」

あまりに鋭利な言葉のナイフに須藤は思いつきり傷ついたのか、動揺する。

「現状勝つ確率は五分五分よ。対抗する証拠は集まってきたけど、それでも必ず勝てるかと言えば正直厳しい状況ね」

「真実を知る目撃者、敵の過去の素行の悪さ。それだけで十分じゃねえのか?」

須藤はあまり状況を悪く考えていないのか楽観的だ。

「審議の場に黛君が参加出来ないと言っている以上、私と綾小路君が参加することになる。正直綾小路君じゃ不安が残るけれど、相手方の主張を変えさせないという作戦でいく以上、黛君が出てくるという情報を相手に与えるわけにはいかないわ」

「不安ならやつぱり俺は参加しないほうがいいんじゃないか?」

「あら、貴方に拒否権なんてあるわけがないじゃない。消去法で貴方以外に適任がないのだから参加する以外に選択肢はないわ」

「さいですか……」

「頼んだよ綾小路。俺の分まで頑張って堀北をアシストしてくれ」
「他人事だな黛……」

一人蚊帳の外だからかヘラヘラと笑っている柚椰に綾小路は恨めしそうな視線を送る。

「そういえば、黛君は裏で情報を集めていたわけだけど、収穫はあったのかしら?」

「確かに、まだ黛から報告は一つもなかったな。どうなんだ?」

堀北と綾小路は柚椰に収穫はあったのか尋ねた。

須藤と櫛田もそこは気になっていたのか柚椰の返答を待った。

「ああ、収穫はあったよ。さつき茶柱先生に言ってきたところさ」

「そう、私たちには教えてくれないのかしら?」

「そうだぜ! 俺の停学がかかってんだから教えてくれよ」

未だ詳しくは話そうとしない柚椰に堀北と須藤は不満そうだ。

そんな2人からの不満の声に柚椰はニコリと笑った。

「安心していいよ。俺が持ってきた情報は間違いなく有力な証拠になる。明日、審議が始まればその時点で相手の投了だ。この勝負は必ず勝てる」

「……そう、黛君がそう言うのなら信じましょう」

「だな、信じてるぜ」

2人は柚椰の自信満々な発言を信用して、それ以上深く聞くことはしなかった。

綾小路と櫛田も同じく、柚椰のことを信じることにしたようだ。

「あ、おいちよ、まだ読んでる途中なんだから返せよ!」

「いいじゃねーかよ。俺だって金半分出したんだからさ。後で渡すつて」

池と山内は漫画の週刊誌を取り合っていた。

先ほどから静かだったのは漫画を読んでいたかららしい。

ポイントが無い無いと言う割には、毎週雑誌を買う金を捻出している辺りやりくりが上手いのかも知れない。

「あれ……?」

2人の雑誌の取り合いを見ていた櫛田が、何かに気づいたのか考え

込む素振りを見せた。

「もしかして……」

「どうした？」

考え込んでいる櫛田に綾小路が声をかける。

「あ、ううん。なんでも無い。ちよつと引つかかっただけだから」

そう言いつつも、櫛田は端末を取り出して何やら調べ物を始めた。

放課後、柚椰は1人校内を歩いていた。

目的は、明日の審議への仕込みを行うためだ。

これから会う相手には事前連絡はしてある。

あとは直接会って交渉するだけだった。

「どうも会長、お久しぶりです」

「ああ。直接会うのは久しぶりだな」

生徒会室に入ると、柚椰は部屋の主である堀北会長に挨拶をする。

堀北会長も柚椰に対して一定の信頼があるからか、他の生徒に対するそれより幾分か対応がフランクだ。

「明日はお前のクラスの生徒の起こした事件に対する審議の日だな。お前が俺を訪ねてきたのはそのことだろう？」

「流石ですね。話が早くて助かります」

これから会いに行くとしたか連絡していないにも関わらず、既に用件に当たりをつけている堀北会長に柚椰はニコリと笑う。

「Dクラスは一丸となって事件の証拠集めに奔走していると聞いたぞ。どうやらクラスの結束は着々と深まっているようだな」

「事件の当事者である須藤が中間テストを経て真面目になったことが功を奏しました。おかげさまで貴方の妹さんも捜査には協力的です

よ」

「鈴音がか？ それは……意外だな」

柚椰の言葉を聞いた堀北会長は意外そうな、けれど少し嬉しそうに若干頬を緩ませる。

「彼女も少しずつではあります。人と関わり始めています。俺のことも友達として認めてくれますから」

「ふん、 黛と関わることで鈴音が少しでも孤独と孤高の意味の違いを理解し始めたのなら言うことはない。俺が言っても意固地になるだけだったからな。その点に関しては感謝している」

「いえいえ、 会長には俺もお世話になっていきますから。それ相応の結果は出させてもらいますよ。一之瀬さんも既に生徒会入りを諦めています。南雲副会長の情報を教えたら首を縦に振ってくれました」

「そうか。ならば、俺がお前に情報を与えたことにも意味が生まれたということだな」

「今後も彼の戦力を削ぐことはさせていただきます。妹さんに関しても、会長の後を追って生徒会に入る以外で、何か別の目標を作らせることが出来ればと考えてますよ」

「なにからなにまで理解しているということか。つくづくお前は侮れないな」

「憧れは憧れのままであるからこそ美しいんです。憧れになろうとしたら、それはアイデンティティを失うことになる。貴方の姿を追い続けても、妹さんが辿り着くのは所詮貴方の劣化コピーだ。恐らく貴方はそれに気づいていたからこそ、彼女に冷たく当たっているのでしょうか？」

「ふっ……以前から感じていたが、どうやらお前は人の気持ちを汲み取ることに長けているらしい」

柚椰が自分の考えを既に理解してくれているということに堀北会長は柔らかい表情を浮かべていた。

「それで話を戻すが、事件の審議についてお前は俺に何用でここに来たんだ？」

「明日の審議ですが、生徒会が裁判官として参加すると俺は踏んでい

ます。当たっていますか？」

堀北会長は驚いたような、けれど柚椰の洞察力を踏まえればまあ気づくだろうな、といった顔をした。

「その通りだ。今回のような場合、最終決定は我々生徒会に委ねられている」

「やはりそうでしたか。会長は事件の詳細についてどの程度ご存知ですか？」

柚椰がそう尋ねると、堀北会長は腕を組んで背もたれに寄りかかった。

「双方の言い分を聞いているのみだな。事件現場の特別棟の階段付近には監視カメラはない。映像があれば、この程度の事件は審議するまでもなく処分が下されるのだが……。今回は場所が悪かったな。学校側も確実な情報というのが手に入っていない」

「だから明日の審議の場で双方から証拠が上がってくるのを待ち、それを加味して判決を下すと？」

「そうなるな。だが、どちらが仕掛けたにせよ、場所を考えると作為的なものを感じるというのが俺の個人的な見解だ」

「おや、貴方も今回の事件に意図的なものを感じているのですか？」

「暴力事件を起こすような生徒はこれまでもいたが、どいつもこいつも野蛮な生徒だった。場所を選ばず、直情的且つ突発的に暴力を振るったケースばかりだったからな。今回のようなケースは前例がない。だからこそ単純な事件構造ではないと推測したまでだ」

「やはり頭がキレますね。仰る通り、今回の事件は仕組まれたものです。それもCクラスのリーダーが指示した狡猾な作戦ですね」

「ほう、なぜそう言い切れる？ お前のことだ。単なる擁護ではないんだらう？」

「勿論。俺は既に真実を握っています。Cクラスが訴えた内容と証言、その全てをひっくり返す確たる証拠を、ね」

柚椰がそう言うと、堀北会長の目が鋭くなった。

「面白い。須藤の無罪ではなく、相手の偽証を証明する作戦ということか。では、その証拠を持って審議に臨むといい。有力な証拠である

と判断すればこちらもそれを材料とし、Cクラスの訴えを棄却する」
「いえ、明日の審議に俺は参加しません」

「なに？ どういうことだ」

茶柱先生の時と同じような反応を堀北会長も示した。

「審議に参加するのは当事者である須藤、そして妹さんと綾小路の計3名。加えて証人としてDクラスの女生徒が1名です」

「証人がいたのか。だが、同じクラスの人間では信憑性は薄い」

「ええ、それは理解しています。審議に参加する人間の情報は明日にでも相手方に伝わるでしょう。俺が参加しない理由は1つ。相手に訴えの内容を変えさせないためです」

「なるほどな。お前が出てくると分かれば、相手が須藤の過剰防衛の線で攻めてくると読んだわけか」

「流石ですね。相手の出方も既に予想しているとは」

「ふん、仕組んだのがCクラスであるならば、どうにかして須藤を停学に、あるいはDクラスに何かしらのペナルティを課そうとすることは予想できる。恐らくお前はCクラスのリーダーに警戒されているのだろう？ お前ほど頭の回転が早い人間が目をつけられないはずはない」

「高く買っていただけるのは光栄ですが、俺は大した人間ではありませんよ」

「大した人間じゃない相手に、俺は取引を持ちかけたりはしない」

柚柳の謙遜を堀北会長は鼻で笑った。

「証人として召喚する女生徒も、相手方を油断させるためのブラフです。同じクラスからの証人なんてもの、相手も脅威には感じないはずですからね。どうして早く名乗り出なかった、脅されているんじゃないか、なんて言うってくるであろうことは読めています」

「だろうな。では、お前は審議に参加せずにどうやって状況を好転させるというんだ？」

「こちら側が動くのは担任である茶柱先生です。といっても須藤の弁護ではなく、あくまで相手側への追求に徹してもらいますが」

「ふむ、相手に偽証を認めさせるために、か？」

「ええ。偽証が証明された場合に、相手にそれを認めさせる。その上で、相手が訴えの内容を変えてくるならば、一から提訴し直すように求める。そしてそれでも相手が提訴するというのなら、こちら側が訴えた内容の審議に持ち込むといった流れです」

そこまで聞くと、堀北会長は柚椰の狙いに気づいたのかクツクツと笑い始めた。

「クククツ、なるほどな。読めたぞ。お前の作戦がな」

「おや、理解していただけましたか？」

「ああ。恐らくお前は明日の審議の直前に相手側を訴える書類を担当に握らせるのだろうか？ その上で、審議の場でお前が持っている証拠を突きつける。相手は訴えの取り下げか、さらなる提訴を選択させられる。前者を選べば審議の意味がなくなり須藤は無罪。後者を選べば審議になり、お前たちDクラスが勝つ。今のまま審議が開かれた段階で相手の敗北が確定する。というのがシナリオだな？」

「大正解。満点回答ですね。会長と話すのは楽しいですよ」

「世辞はいい。して、その証拠の提出はどうするつもりだ？ 鈴音か綾小路にでも伝えておくのか？」

「いえ、Dクラス側からの証拠提出なんて相手からしたら認めたくなくて仕方ないでしょう。どうにかして言いがかりをつけてごねるはずです。そこで俺は確実な方法を取ります。今日貴方に会いに来たのはそのためですよ」

柚椰はそこで言葉を一旦切ると、堀北会長をまっすぐ見つめた。

「俺はDクラスとして証拠を提出するものではありません。一般生徒として学校側に、生徒会長である貴方に事件の詳細な情報を提供するんです」

「――！・　ほう、なるほど。そういう作戦か」

「事件を目撃したのは俺のクラスの生徒以外にもいたのですよ。それはDクラスではなくCクラスでもない、全くの第三者です。俺はその人から得た情報を、審議を行う生徒会へ情報提供として差し上げるだけですよ。裁判官である貴方が事件の詳細を知らない以上、生徒からの情報は必要なはずですから」

「Dクラスのお前からの証拠提出ではなく、我々生徒会が情報収集を行なった過程で一般生徒から情報を得たということにするわけか。あくまでお前は一般生徒からの情報を代理で提出したに過ぎない。相手側も我々が集めた情報とあれば言いがかりをつけることは出来ないだろう。それをすれば、心証が悪くなると理解しているからな」
「その通りです。これにてチェックメイト。俺たちDクラスの勝利です」

完璧な柚椰の作戦に堀北会長は感心していた。

相手の逃げ道を徹底的に封じ、確実に勝ちへの道筋を作り上げる。

一種の詰め将棋のような思考に堀北会長は改めて柚椰を高く評価した。

「お前の考えは分かった。それで、その証拠というのは？」

「それは明日、審議の途中に出したいのですよ。勝ちを疑わないCクラスの滑稽な様を貴方にもご覧になっていただきたいので。なので会長——」

「——審議中、端末の電源を切らないでいて欲しいのですが」

その日の夜、綾小路の部屋に須藤を除くメンバーが集まっていた。普段は馴れ合いを好まない堀北もしっかりと参加している。

「何か進展があったの？ 櫛田ちゃん」

「そうね、話してもらえないかしら？」

話があるから綾小路君の部屋に集まるとメールが来たときは何事かと思っただわ」

池と堀北は、この集まりを設けた櫛田に本題を尋ねる。

「進展も進展、凄いことに気づいちやった。綾小路君、パソコン借りていいかな？」

その申し出に綾小路が頷くと、櫛田はパソコンを起動してインターネットへと接続する。

「じゃーん！ 皆さん、これをご覧下さいーい！」

櫛田がアクセスしたのは誰かのブログのようだった。

個人制作というよりは業者が手掛けたような本格的なサイトだ。

「あれ？ この写真って、雫じゃん」

サイトを見た池がそう呟く。

「雫？」

「グラビアアイドルだよ。ちよつと前まで少年誌にも出てたことあるんだぜ！」

知らないといったリアクションをする綾小路に興奮気味に説明する池。

ブログには個人でアップしたと思われる画像がいくつか載っている。

グラビアアイドルというだけあって、容姿もプロポーションも文句のつけようがない。

「この子に見覚えないかな？」

「見覚えも何も、雫でしょ？」

櫛田の問いに池は首を傾げる。

「よく見て」

櫛田はアイドル雫の画像をアップで表示する。

池はその画像をまじまじと見た後……

「可愛い〜！」

「じゃなくって！ ……これ、佐倉さんじゃない？」

「はい？ 櫛田ちゃん、誰が誰だつて？」

「同じクラスの佐倉さん」

「……いやいやいや！ 佐倉つて、ありえないっしょ」

なんの冗談だと池は笑い飛ばす。

一方、横にいた山内は段々と表情が硬くなっていく。

「なあ池……俺、冷静に見てみると、その、ちよつと佐倉っぽい気がするなつて」

「いやいや、だつてメガネかけてないぜ？ 髪型だつて違うし」

「その覚え方は単細胞すぎるだろ……」

あまりに雑な覚え方をしている池に綾小路がつっこんだ。

しかし池はまだ納得していないのか、綾小路と画面を交互に見ている。

「あの佐倉が、雫……うっそだあ！ ちよつと雰囲気は似てるけど、別人だつて。だつて雫つてめっちゃ明るい感じるぜ？ なあ綾小路」

池は綾小路に話を振る。

アップされた写真はどれも可愛く撮れており、自撮りに慣れている様子が窺える。

「佐倉からメガネを取つて、髪型をこれにすれば確かに当てはまると思うぞ？」

「そうかあ〜？」

「ねえ、黛君はどう思うかな？」

男子2人のやりとりを他所に、櫛田は柚椰の見解を求めた。

柚椰は自分で持つてきていた缶コーヒ―を片手に本を読んでいたが、櫛田に尋ねられたことで顔を上げた。

「ん？ ああ、それか。うん、佐倉の正体は雫だよ？ 間違いない」

「ええっ!?! 黛君知つてたの!?!」

櫛田が大声で驚いたことで池と山内、綾小路や堀北も一斉に柚椰を見た。

「マジかよ黛！ お前本当に雫が佐倉だつてのか!?!」

「つっつか知つてたのかよ!?!」

池と山内は仰天と言わんばかりにひっくり返っていた。

「ブログの写真だけでも裏付ける証拠はあるよ。そうだろう綾小路？」

「ああ。ここを見てみる」

柚椰に話を振られた綾小路は一つ頷くと、ブログにアップされている一枚の写真を指で差した。

「僅かにだが、寮の部屋の扉が写ってる」

「あつ！ 確かに、この寮と同じだね！」

つまりこの写真は、高確率で寮の部屋にて撮影された一枚であるということだ。

「じゃあやっぱり佐倉は雫なんだ……まだ全然ピンとこないけど」

「よく気づいたな榎田」

「池君たちが週刊誌読んでの見て思い出したんだよね。なんか佐倉さんってどこかで見たことあるなって前から思ってたから」

「俺らのクラスにグラドルがいたなんて！ 興奮してきたな！」

「だな！」

興奮を抑えきれない池と山内はスーパーハイテンションになっている。

全部聞いている榎田はアハハと乾いた笑いを漏らしているが、内心はドン引きしていることを柚椰は知っている。

「でも確か雫って、人気が出始めた後に急に姿消しちゃったんだよね」
アイドルとして活動する一方、学校では目立たない物静かな生徒。

コインの表裏のようにまるで違う生活を生み出した理由は何なのだろう。

「ところで黛はいつ佐倉がアイドルだって気づいたんだ？」

綾小路が当然の疑問を柚椰に投げかける。

「佐倉を観察していた過程だね。たまたまネットを漁っていたらこのブログに行き着いて、目元に既視感があったんだ」

「なるほどな、お前の観察眼ならそういう気づき方もあるか」

柚椰の説明に綾小路は納得したように頷いた。

「黛君は佐倉さんのこともよく見てるのね」

「ん？ 俺は大体全員のことを見ているよ。勿論、君のことも」
「っ！ そう……ならあまり私を放ったらかしにしておくのはどうかと思うけれど」

柚椰の言葉に一瞬言葉に詰まった堀北は、そっぽを向きながらそんなことを言った。

「でも不思議だよな。なんでアイドルなのにあんな地味にしてんだろ」

池がそんなことをつぶやいた。

華のアイドルであるはずの佐倉が、どうして学校ではああも地味な生徒として過ごしているのだろう。

雫というグラドルを知っている彼らしい当然の疑問だった。

「なにか理由があるんだろう。だから俺は知った上で普通に接していたわけだからね」

「そうだよ、隠してるってことは知られたくないってことだろうし……私たちがじゃ分からない特別な理由があるのかも」

「アイドルという色眼鏡で見られたくない。とかかもな」

「それか、本来の佐倉は学校での姿の方なのかもしれない」

綾小路が少し考える素振りを見せながら、そう進言した。

「そっか、それもあるかもね……頑張って明るいアイドルを演じてたのかも」

「だとしたら、俺たちがいきなり接し方を変えるのは佐倉にとっても良くないかもしれないな」

「そうだね……だから池君山内君！ アイドルだー！ って言って佐倉さんに向かっていっちゃダメだよっ！」

「わ、分かってるよ櫛田ちゃん！ 流石に俺もそんなミーハーなことしねえって」

「お、おう」

櫛田に念を押されたことで、池と山内は先ほどのハイテンションを改めた。

その後、たわいもない雑談をした後、集会はお開きとなった。

皆が帰った後、綾小路はパソコンの前に座り、先ほどまで見ていた
雫のブログを改めて見た。

過去の更新まで遡ってみると、どうやら2年ほど前からブログはス
タートしているらしい。

それは佐倉がグラドルとして活動を始めたタイミングだ。

これからの思いと抱負が語られている。

「なんというか……普通だな」

この時点では、特段注目すべきポイントがあるようには見えない。
それから1年間、ほぼ365日ブログは更新され続け、その日あつ
た出来事や思いを綴っている。

ファンからのコメントにも全て対応するという徹底ぶりだ。

しかし、流石にこの学校に入学してからはコメントに返答をしてい
ない。

外部との連絡を取ってはいけないという学校のルールは厳守して
いるようだ。

あまり表舞台に立っていないとはいえないとはいえ、佐倉の人気は綾小路が思っ
ているよりずっと高かった。

「ツイッターのフォロワー数は……5000、か。結構多いな」

佐倉のツイッターも見てみたが、多くのファンがリプライを送って
いる。

復活を望む声や、テレビに出る予定はないのかといったいかにも
ファンらしい文面が並んでいる。

そんな中、綾小路はある書き込みに目を留めた。

時期は今からおよそ3ヶ月前の更新に対するコメントだ。

『運命って言葉を信じる？ 僕は信じるよ。これからはずっと一緒だ
ね』

これだけならファンの行き過ぎた妄想だ。別段気にかける必要はない。

しかしそれ以降、同じようなコメントは毎日書き込まれており、日々エスカレートしていった。

『いつも君を近くに感じるよ』

『今日是一段と可愛かったね』

『目が合ったことに気づいた？ 僕は気づいたよ』

「なんだこれ……気持ち悪いな……」

同性の自分がそう思うのだから、佐倉本人は相当な恐怖を感じるだろうと綾小路は思った。

コメント主は、まるで雫の近くにいるとでも言いたげな書き込みばかりだ。

この閉鎖された学校の中で、佐倉と触れ合うことのできる人間は限られている。

生徒、教師、あるいは学校に出入りしている業者関係の人間。

必然的に連想されるのは、日曜に会った家電量販店の男だった。

「まさか……」

綾小路はすぐさま日曜日の更新のコメント欄を開いた。

そして嫌な予感的中し、彼は固唾を呑むこととなる。

『ほら、やっぱり神様はいたよ』

その文面で綾小路は1つの推測を立てた。

このコメントを打っているのは家電量販店の店員であり、佐倉がデジカメを買いに行った日に相手は雫の正体が佐倉だと気づいた。

この気持ち悪いコメントが目立つようになった時期とも一致する。そしてこの日、佐倉は壊れたデジカメの修理のために再び店を訪れた。

店員は運命を感じたはずだ。勝手極まりないがそう推測できる。

そして店員は佐倉の個人情報を知りたいがために、書類を書かせていたのだろう。

「結果として黛に邪魔されたわけだが……」

綾小路はまだ件の店員が書き込んだコメントがあるかどうか探し

出した。

すると予想通り、彼が書いたと思われるコメントが出てくる。

『無視するなんて酷いじゃないか。それとも気が付かなかったのかな？』

『今何してるの？ 会いたいよ会いたいよ会いたいよ』

次々と危ないコメントが出てくる。これを見ている佐倉は恐怖でしかないはずだ。

「ん？」

ふと綾小路は、件の店員が書いたコメント以外にあるコメントに目を留めた。

それはその店員のコメントに対するファンからの返信のようなものだった。

『お前ずっとコメ欄荒らしてるけどマジなんなわけ？ キモいんだけど』

『つーか目が合ったとかwww妄想痛いわーwww』

『ネットスト乙。雫が訴えたらお前オワリだからwww』

『神様なんていねーよバーカ！ 雫がお前みたいなキモいの気にかけてるわけないじゃん』

それは相手を煽るような、神経を逆撫でするようなものばかりだ。

それら全ては同じ人間からのようで、店員のコメントに対して連投するように打たれている。

「まずいな……相手は佐倉のすぐ近くにいるというのに……」

相手がただの妄想を書き込んでいると思いついて好き勝手やってるそのコメント主に綾小路は舌打ちした。

ストーカーに対してこの対応はあまりに悪手だ。

一歩間違えば店員がとち狂って佐倉を襲いかねない。

その危険を綾小路は理解していたが、現状打てる手は殆ど存在しない。

今日明日でストーカー問題を解決できる策などないのだ。

綾小路には佐倉からのSOSを待つ以外に取れる手段はなかった。

「胸を打つ喜劇には綿密な脚本が必要だ」

同時刻、自室に戻った柚椰はパソコンの前に座り、綾小路と同じく雫のブログを見ていた。

綾小路同様、ストーリーカーの書き込みを柚椰は笑みを浮かべながら見ている。

そして何を思ったのか、最新の更新の記事に書き込まれているストーリーカーのコメントに返信を書いた。

「道化は決して白馬の王子にはなり得ない。姫君を脅かす悪漢が関の山だろう……」

そう、ストーリーカーのコメントに煽るような文面を送っていたのはこの男である。

日曜日の更新のコメントから、柚椰はずっとストーリーカーのコメントに対して似たような文面を送りつけていた。

学校の規則で、外部との連絡は固く禁じられている。

しかし、柚椰はストーリーカーがこの敷地内の家電量販店の店員であると知っている。

だからこそ堂々と彼を煽るような文面を送りつけているのだ。「さて、そろそろ動く頃合いか」

椅子の背もたれに身体を預け、柚椰はカラカラと笑いながら天井を見上げた。

何故ストーリーカーを焚きつけるような書き込みを彼は行ったのか。それは彼本人しか知る由もない。

「どうする佐倉愛里。早く騎士に助けを求めなければ、待っているのは絶望だよ」

柚椰は心底楽しそうに、これから狙われるであろう少女にメールを送った。

「感・情・に・盲・目・な・人・間・ほ・ど・恐・ろ・し・い・も・の・は・な・い・の・だ・か・ら・ね」

孤独少女たちは審議に臨み、彼はそれを眺む。

審議の日当日。

放課後を告げるチャイムが鳴るのと同時に、綾小路と堀北が席を立った。

「心の準備はいい？ 須藤君」

「ああ……勿論。さっさとケリをつけようぜ」

精神統一していたのか、目を閉じ腕を組んでジツとしていた須藤が目をゆっくり開く。

「須藤君、分かっているとは思うけれど、審議の間では大人しくしているのよ」

「ああ、分かっている」

「相手が嘘を並べ立てていても、それに声を荒らげて反論することは愚行よ。いいわね？」

「ああ」

「それと、審議の間では礼儀正しくしていること。間違っても机に肘をついたり、先生にタメ口をきくなんてことはご法度よ」

「分かっているっての！ お前は俺のお袋か！」

念を押し続ける堀北にいい加減鬱陶しいのか須藤がつっこむ。

「貴方のような手のかかる息子を持つなんて真っ平御免だわ」

そんな須藤のツッコミを何を馬鹿なことをと堀北は切り捨てる。

「どうやら二人とも、いつも通りの言葉の応酬を繰り返すだけの余裕はあるらしい。」

「頑張ってる堀北さん、須藤君！」

櫛田からのエールに堀北はスルー、須藤はガッツポーズを以って応えた。

「大丈夫か佐倉」

綾小路は椅子に座ったまま固まっている佐倉に声をかけた。

すると彼女は微かに唇を震わせながら席を立った。

「うん……大丈夫。ありがとう……」

どうやら綾小路の想定していた以上に、佐倉の緊張度合いが高い。まだ審議が始まっていないのにこの精神状態では、まともに話すことすら出来ないかもしれない。

「さくら」

「うひゃあっ!？」

いきなり背後から肩を掴まれたことで佐倉はびっくりして飛び上がった。

彼女の両肩を掴んだのは柚椰だった。

「緊張してるかい?」

「ま、黛君……うん、やっぱりまだちよつと怖い、かな……」

「そう、まあ仕方ないよ。自分が事件の目撃者として証言台に立つなんてのは誰でも緊張するものさ」

佐倉の緊張を柚椰は理解しているよ、と優しく微笑む。

「君は自分が見たものを正直に話せばいい。ただ素直に、ありのままを語ればいいんだ。それで万が一状況が好転しなかったとしても、それは君の責任じゃない。君のやるべきことは、ただあの日起きた出来事を話すだけだ。後のことは堀北と綾小路がやってくれるさ。そうだろう?」

「ええ。佐倉さん、証言さえしてもらえば、あとはこちらの仕事よ。貴女は別段責任を感じる必要はないの」

「そうだな。俺も出来る限りのことはする。だから心配するな」

柚椰に振られた二人は各々自分なりの言葉で佐倉を気遣った。

その言葉に安心できたのか、佐倉はコクンと頷いた。

「さて、そろそろ行かないといけない。じゃあ佐倉、堂々と胸を張って行っておいで」

話は終わりだ、と言うように柚椰は佐倉の背中をトンと押した。

柚椰からのエールに佐倉は再び頷くと、先に歩き出した堀北たちの後を小走りで追った。

時刻は3時50分。話し合いは4時から行われる。

4人で職員室まで移動すると、ちょうど廊下に出ようとしていたのか、茶柱先生と鉢合わせになった。

「来たか。では、向かうとしよう」

「職員室でやるわけじゃないんですね」

「勿論だ。この学校には特殊なルールが複雑に存在する。今回のようなケースでは問題のあったクラスの担任と、その当事者が各々主張を交わし、そして最終的に生徒会の判決で決着がつけられる」

生徒会、という単語を聞いた瞬間堀北の足が止まった。

茶柱先生は少しだけ振り返り、鋭い瞳で堀北の顔を覗き込む。

「やめておくなら今のうちだぞ、堀北」

須藤は事情が分からず頭に疑問符を浮かべていた。

「……行きます。大丈夫です」

明らかに強がりであると分かる返答だったが、先生を含め誰も何も言わなかった。

職員室のある1階フロアから階段を3つ上がった4階に、その部屋はあった。

部屋の入り口には『生徒会室』と書かれたネームプレートが刺さっている。

茶柱先生は扉をノックした後、その中へと足を踏み入れた。後に続くように堀北たちも中へ入る。

生徒会室には長机が置かれており、ぐるりと長方形を作っていた。Cクラスの生徒3人は既に着席しており、その横にはメガネをかけた30代後半と見られる男性教師も同席していた。

「遅くなりました」

「まだ予定時刻前ですよ。お気になさらず」

「お前たち、面識は？」

茶柱先生は堀北たちに尋ねるが、全員目の前の先生と面識はない。

「Cクラスの担任、坂上先生だ。それから——」

先生は部屋の奥に座る、一人の男子生徒に視線を移す。

「彼がこの学校の生徒会長だ」

堀北会長は妹に目を向けることもなく、机に置いた書類に目を通している。

しばらくの間、堀北は兄に視線を送っていたが、相手にされてないと認識すると目を伏せてCクラスの生徒たちの前に腰を下ろした。

「ではこれより、先日起こった暴力事件について、生徒会及び事件の関係者。担任の先生を交え審議を執り行いたいと思います。進行は、生徒会書記、橘が務めます」

ショートカットの女性、橘書記が、そう言い軽く会釈した。

彼女は事件の概要を双方に分かりやすく説明していく。

概要といっても、Cクラス側とDクラス側の主張を加味したざっくりとしたものだったが。

「——以上のことを踏まえ、原告であるCクラスの訴えが真実であるかを見極めさせていただきます」

説明を終えると、橘書記は一度前置きをした後、Dクラスの面々へ視線を向ける。

「小宮君たちバスケット部2名は、須藤君に呼び出され特別棟へ行つた。そこで一方的に喧嘩を吹っかけられ殴られたと主張しています。須藤君、それは本当ですか？」

「いいえ、違います。それは真つ赤な嘘。でつち上げです」

事前の忠告をちゃんと覚えているからか、須藤はタメ口をきくこともなく努めて冷静に反論した。

「では須藤君にお聞きします。真実を教えてくださいますか？」

「俺はあの日、部活の練習を終えた後に小宮と近藤に特別棟に呼び出されました。呼び出される理由に心当たりはあったので、俺は渋々その呼び出しに応じたんです」

「心当たり、というのは具体的に言えますか？」

橘書記の問いに須藤はコクリと頷く。

「俺は事件の日の少し前に、バスケット部の顧問の先生から、夏の大会でレギュラーに迎え入れるかもしれないと言われたんです。小宮と近藤は以前、部活中に言い争いをしてた相手なので、呼び出しはその事に対するやつかみか何かだと思いました。勿論無視することも出来ませんでした。だけど、また部活中に争いになるよりはさっさと清算したいと思ったので応じました」

須藤の丁寧な話ぶりに綾小路も、あの堀北でさえ目を丸くしていた。

真面目になったとは感じていたがここまで丸くなるものかと感心しているようだ。

「それは嘘です。僕たちが須藤君に呼び出されて特別棟に行つたんです」

須藤の冷静な語り口に焦つたのか、小宮が口を挟んだ。

「小宮君、今は須藤君への質問をしている最中です。口を挟まないでください」

「っ！……すいません」

しかし橘書記は堀北会長同様厳格な人間なのか、質疑の邪魔を許さない。

彼女が強い口調で戒めると、小宮は渋々黙り込んだ。

「では、続いて呼び出された後のことについて話していただけますか？」

「はい。特別棟に行くと、そこには呼び出した張本人の小宮と近藤だけじゃなく、そこにいる石崎も何故かその場にいました。俺はそのとき、この場で殴り合いでもさせるつもりなのかと感じました」

「それは何故ですか？」

「呼び出した二人が、わざわざガタイのいい石崎を連れてやってくるなんてどう考えてもおかしいからです。不審に思っていたら、小宮と近藤は俺に『痛い目を見たくなかったらバスケット部を辞めろ』と脅してきました」

「違います。僕たちはそんなことを言っていないです」

小宮の次は近藤が話に割って入ってきた。

「近藤君、先の小宮君にも言いましたが、まだ質疑の途中です。お静かに」

「くっ……！」

またしても横槍を入れてきたことに橘書記は再び毅然とした態度でそれを切り捨てた。

「では、須藤君は二人からの言葉に怒りを覚え、彼らに暴力を振るったということですか？」

須藤はその問いに首を左右に振った。

「いいえ。俺は少し前からあまり軽率な行動はしないようにと、あるクラスメイトに釘を刺されていました。俺はそのことを肝に銘じていたので、二人からの要求を突っぱねて帰ろうとしたんです」

「なるほど。では、何故自制していたにも関わらず暴力を振るうに至ったのですか？」

「二人は俺が脅しに屈しないと分かると、俺のダチを……俺を救ってくれた恩人たちの悪口を言い始めたんです。俺に勉強を教えてください、俺を助けてくれた仲間のことを二人は『クズ』、『腰抜け』、『落ちこぼれ』と罵倒してきましたんです」

「違っ——」

「小宮君、今度勝手に話し始めると、退廷させますよ」

「——っ！」

須藤の主張に口を挟もうとする小宮だったが橘書記の忠告に黙らざるをえない。

「散々罵倒した後、『お前みたいなクズに優しくする奴らもどうせ皆クズなんだろ』『違うってんならかかってこい』と言って殴りかかってきました。殴りかかられたことと、恩人を好き勝手に馬鹿にされたことに頭にきた俺は、3人を相手に殴り合いをしました」

「それが須藤君が主張する事の顛末、ということですね？」

「はい」

一通り事件当時の流れを説明し終わると、須藤は大きく息を吐き出して席に座った。

「どうやら原告側と被告側で主張は真つ向から食い違っているようです。しかし、共通することもありました。では続いて小宮君、近藤君へそれぞれ質問を行います」

須藤の主張を聞き終えた後、今度はCクラス側への質疑に入った。

「小宮君。貴方と近藤君は以前から須藤君とは揉め事があつたと主張していますね。その揉め事について具体的に答えてください」

「揉め事というか、須藤君がいつも僕たちに絡んでくるんです」

「絡むとは？」

「彼は僕らよりもバスケットが上手いので、その自慢をしてくるんです。僕らも負けないように練習していますが、それを馬鹿にされるのは気持ちの悪いものじゃなかったので、そういう意味では度々ぶつかっていました」

「なるほど。近藤君、小宮君の発言に間違いはないですか？」

「はい。俺も小宮も、須藤君に馬鹿にされていました」

二人の話は作り話なのか、須藤は眉間に皺を寄せ始めた。

しかし声を荒らげて反論することはしない。

それは悪手だと先ほどの自分の質疑応答の際に理解したからだ。

「両方の言い分が食い違っている以上、今ある証拠で判断していかざるを得ませんね」

「僕たちは須藤君に滅茶苦茶に殴られました。一方的にです」

Cクラス側は自分たちが負った怪我を判断材料に持っていくつもりのようなのだ。

「おい堀北」

ジツと俯き、黙り込んでいる堀北に綾小路は声をかける。

しかし彼女は地蔵のように全く動かない。

というより心ここに在らずといった状態だ。

「Dクラス側からの新たな証言がなければ、このまま進行しますがよろしいですか？」

生徒会も、先生も、このまま有益な証拠が出なかった場合、今あるもので裁きを下さるだろう。

状況は須藤にとって圧倒的に不利だった。

いくら彼本人が冷静に状況を説明したとしても、それを裏付ける証拠がないのだから。

「おい、堀北」

綾小路はなんとか堀北を現実には引き戻そうと声をかける。

しかし彼女は兄を前にして完全に縮こまってしまっている。

「どちらが呼び出したにせよ、どんな意図があったにせよ、今ここにあるものが証拠だ。現状、須藤の主張を裏付ける証拠はない。加えてCクラスの生徒は皆怪我をしている。これでは、須藤が一方的に相手を殴ったという主張を認めざるを得ないな」

「ぐっ……！」

生徒会長の冷たい発言に思わず食ってかかりそうになる須藤。

しかしそれでは逆効果だと理解しているが故に何も言えない。

だがこのままでは本当にCクラスの訴えが認められてしまう。

背に腹は代えられないと判断し、綾小路は強硬手段に打って出た。

「ひゃっ!？」

いきなりの衝撃に堀北は可愛らしい声を上げる。

綾小路がやったことは簡単だ。

彼女の脇腹を思いつきり擦ったのだ。

さっさと堀北を復活させるべく、綾小路は彼女の脇腹を擦り続ける。

「ちよ、な、や、やめっ!？」

呆氣にとられている先生たちを横目に、綾小路は堀北を擦る。

もう十分だと思うタイミングで、綾小路は手を離れた。

堀北は半泣きになりながらも、強烈に彼を睨み見上げる。

手段は強引だったが、結果として堀北は復活した。

「お前が戦わなきゃこのまま敗北だ」

「っ……」

やっと事態を飲み込めたのか、堀北は一度Cクラス、教師、そして兄を見る。

そして今、自分たちが置かれた絶体絶命のピンチを認識する。

「……失礼しました。私から、質問させていただいてもよろしいです

か?」

「構いませんか? 会長」

「許可する。次からはもつと早く答えるように」

堀北はゆつくりと椅子を引き、立ち上がる。

「先ほど、貴方たちは須藤君に呼び出され特別棟に行ったと言いました。須藤君は一体誰を、どのような理由で呼び出したのですか?」

今更なにを、と小宮たちは顔を見合わせる。

「答えてください」

堀北は追撃するように一言付け足した。橘書記もそれを認める。

「俺と近藤を呼び出した理由は知りません。ただ、部活が終わって着替えてる最中に、今から顔を貸せて言われて……俺たちが気に入らないとか、そんな理由じゃないでしょうか。それがなんだって言うんですか」

「では、どうして特別棟には石崎君も居たのでしょうか? 彼はバスケット部員ではありませんし無関係のはず。現場にいたのは大変不自然に思えますが?」

「それは……用心のためですよ。須藤君が暴力的なのは知ってましたから」

「なるほど。つまり須藤君に暴力を振るわれるかもしれない、そう感じていたと?」

「そうです」

まるでその質問をされることを想定しているかのようには、小宮はスムーズに答えた。

「小宮君の主張は分かりました。それで中学時代、暴力沙汰が絶えなかった石崎君を用心棒代わりに連れて行ったということですね。地元では名の通った荒くれ者であり、周辺学校の生徒からも恐れられていた彼を」

堀北のその発言に小宮をはじめとするCクラスの生徒たちは目を見開いた。

特に張本人である石崎は大変動揺しているようだ。

その反応に堀北は目ざとく気づく。

「石崎君の経歴については一般生徒からの情報提供です。恐らく同郷の生徒がいたのでしょう。ですがどうやら本当のようですね。これが全くの嘘ならば石崎君が動揺するはずがありませんから」

「ち、違う！ 俺はそんなことしてねえよ！」

「石崎君、静粛に。まだ質問の途中です」

動揺を言い当てられたことに石崎は狼狽えたが、すかさず橘書記が黙らせる。

堀北の語り口と攻め方を見ていた綾小路は、なんだか黛に似てきたな、と感じていた。

「小宮君、貴方は石崎君が荒事に強いと知った上で連れて行った。違いますか？」

「い、いいえ、あくまで自分の身を守るためですよ。それに、石崎君が喧嘩が強いことで有名なんて知りませんでした。ただ、頼りになる友達なので連れて行っただけです」

堀北もまた、頭の中でイメージトレーニングを行っていたのか冷静に話を聞く。

そしてすぐさま次の一手を打つ。

「小宮君が石崎君のことを知らないのは分かりました。しかし、彼の経歴を踏まえると、小宮君と近藤君と同じようにそこまで一方的に殴られたことが理解できませんね。人から恐れられるというのは、単に喧嘩っ早いからという理由ではないでしょう。怖がられ、恐れられ、忌避されるのは喧嘩が強いから。これまで喧嘩で勝ち続けてきたからではありませんか？ そんな石崎君が須藤君に一方的に殴られ、そこまでの怪我を負うのでしょうか？」

「それは……僕たちに喧嘩の意思がなかったからですよ」

「三対一でも？ 囲んで殴ればいくら相手が須藤君でも、貴方たちは好きに殴れたはずです。明らかに有利な状況で、以前から争っていた相手を、それでも殴らなかつたのですか？」

「そ、そうです」

「石崎君もそれは変わりませんか？」

「お、おう」

石崎は堀北から目を逸らしながらも答える。

「以上でDクラスの主張は終わりか？」

黙って聞いていた堀北会長がそう尋ねる。

「須藤君が相手を殴り傷つけたことは事実です。しかし、先に喧嘩を仕掛けてきたのはCクラスです。その証拠に、一部始終を目撃した生徒もいます」

「では、Dクラスから報告のあった目撃者を入室させてください」

橘書記が促したことで、佐倉が生徒会室に入ってきた。

不安げな、どこか落ち着かない様子の彼女は足元を見ている。

「1―D、佐倉愛里さんです」

「目撃者がいるというので何事かと思いましたが、Dクラスの生徒ですか」

Cクラス担任の坂上先生はメガネを拭きながら失笑した。

「何か問題でもおありですか、坂上先生」

「いえいえ、どうぞ進めてください」

茶柱先生と坂上先生の視線が一度交錯する。

「では証言をお願いしてもよろしいですか。佐倉さん」

「は、はい……あの、私は……」

言葉が止まる。

そして、静寂の時間が流れた。

沈黙が続けば続くほど、佐倉はどんどん下を向き、顔を青ざめさせていく。

「佐倉さん……」

堀北もたまらず声をかけるが、さつきまでの彼女同様声は届かない。

「どうやら、彼女は目撃者ではなかったようですね。これ以上は時間の無駄です」

「そう結論を急ぐことはないでしょう、坂上先生」

「急ぎたくもありませんよ。こんな無駄なことで、私の生徒は苦しんでいます。彼らはクラスのムードメーカーで、多くの仲間たちに心配をかけていることを気にしています。バスケットにも彼らはひた向き

に取り組んでいる。そんな彼らの貴重な時間を奪っているのですから。担任として、それを見過ごすわけにはいきません」

「ふむ、確かに坂上先生の言うことも一理ありますね。だが、佐倉は私の受け持つ生徒だ。貴方が生徒を慮るように、私も彼女を慮る道理がある。私は彼女が口を開くまで待つことを求めますよ」

茶柱先生が味方をするような言葉を口にしたことに綾小路と堀北は目を丸くした。

今まで突き放すような、どこか冷たい言い回しばかりをしていた彼女がここにきて初めて自分たちの味方になったのだから。

その時だった。予期せぬ声が生徒会室に大きく響き渡った。

「私は確かに見ましたっ!!」

それが佐倉の声だと周りが認識するのに、数秒は要した。

それだけ意外な、振り切ったポリウムだった。

「最初にCクラスの生徒が須藤君に殴りかかったんです。間違いありません！」

佐倉は必死に、そして真摯に証言をした。

彼女の勇気と決意の表れであるその堂々たる姿に綾小路は心の中で拍手を送る。

しかし、そんな彼女の勇気も、この場においてはあまり意味をなさない。

「すまないが、私から発言させて貰ってもよろしいかな？」

手を挙げたのは坂上先生だった。

「本来、極力教師は口を挟むべきではないと理解しているが、この状況はあまりに生徒が不憫だ。生徒会長、構わないかな？」

「許可します」

堀北会長から許可を得ると、坂上先生は佐倉へ視線を向ける。

「佐倉君と言ったね。私は君を疑っているわけではないが、それでも1つ聞かせてほしい。君は目撃者として名乗りを上げたのが随分遅かったようだね。それはどうしてかな？ 本当に見たのなら、もっと早く名乗り出るべきだった。違うかね？」

茶柱先生と同じく、坂上先生もその点において追求してきた。

「それは……巻き込まれたくなかったからです……」

「どうして巻き込まれたくないと？」

「私は、人と話すのが得意じゃないので……」

「なるほどよく分かりました。ではもう一つ。人と話すのが得意ではない貴方が、週が明けた途端目撃者として名乗り出たのは不自然じゃないですか？ 私には、Dクラスが口裏を合わせて貴女に嘘の証言をさせているようにしか見えない」

Cクラスの生徒たちは、その言葉に合わせて、僕たちもそう思いますがと答えた。

「そんな……私はただ、本当のことを……」

「私には君が自信を持って証言しているようには見えないのだよ。それは本当に嘘をついているから、その罪悪感に苛まれているからじゃないかな？」

「ち、違います！」

坂上先生からの追求を佐倉は首をブンブンと振って否定する。

「私は君を責めているわけではないよ。恐らくクラスのため、須藤君を救うため、嘘をつくことを強いられたのではないかな？ 今正直に告白すれば君が罰せられることはないだろう」

容赦ない心理攻撃に、さすがに見かねた堀北が手を挙げる。

「それは違います。佐倉さんは確かに対話が得意ではありません。しかし、本当に事件を目撃したからこそこの場に立っているんです。もし嘘の証言をさせるならば、彼女以外にも適任がいたとは思いませんか？」

「思いませんね。Dクラスにも優秀な生徒はいる。堀北さん、貴女のようなね。しかし、あえて佐倉さんのような生徒を立たせることで信憑性を持たせたかったのではないですか？」

やはりDクラスの目撃者というのは有効打にならない。

どれだけ真実を語ろうと、庇っている、嘘をついているといくらでも理由がつけられるのだ。

坂上先生は勝ちを確信しているからか、不敵に微笑んで腰を下ろさうとした。

「証拠ならあります！」

佐倉は机に手のひらを叩きつけた。

そこには数枚の長方形の紙のようなものが置かれていた。

「それは……」

言葉以外のものが出てきたことで、坂上先生の表情が固まる。

「私が、あの日あの場所にいた証拠です！」

橘書記は佐倉に断りを入れてから、机に置かれた紙に手を伸ばした。

「これは……会長」

どうやら紙の正体は写真らしく、彼女はそれを堀北会長に提出する。

写真に目を通すと、堀北会長は机の上にならべ、全員が見えるようにした。

その写真に写っていたのは、佐倉とは似ても似つかない愛くるしい表情を浮かべている彼女。

アイドルの雫だった。

「私はあの日、自分を撮るために人のいない場所を探しました。その時に撮った証拠として日付も入っています」

日付は先々週の金曜日の夕方。

事件が起きた時間と一致する。

綾小路と堀北も、佐倉が持っていた本物の証拠に息を呑んだ。

今まで被害者を装っていたＣクラスの３人にも動揺が走る。

「これは何で撮影したものかな？」

「デジタルカメラですけど……」

その返答を聞くと、坂上先生は鼻で笑った。

「確かデジカメは日付の変更が容易にできたはずだ。パソコン上で日付だけ変えて印刷すれば当時の時間帯に合わせることは可能だ。証拠としては不十分です」

「しかし坂上先生、これは違うと思いませんか？」

堀北会長は下に重なっていたもう一枚の写真をスライドさせる。

「これは……!?!」

そこには喧嘩の状況をはっきりと写し出されていた。

事件現場で、須藤が石崎を殴った直後と思われる写真だ。

「なるほど。どうやら貴女が現場にいたというのは本当のようだ。ですが、この写真ではどちらが喧嘩を仕掛けたかは分かりません。貴女が最初から一部始終を見ていた確証にもなりえませんか」

写真は喧嘩が終わったタイミングのものだ。

確かにこれでは決定的な証拠とは呼べない。

「どうでしょう茶柱先生、ここは落としどころを模索しませんか」

坂上先生は茶柱先生に話を振った。

「落としどころ、ですか」

「今回私は、須藤君が嘘をついて証言したと確信しています」
「っ！」

その発言に食ってかかろうとした須藤だが、彼は必死に堪えた。

「このままでは話し合いは平行線。私たちは訴えの内容を変えませんが、そちらさんも目撃者と口裏を合わせ諦めない。つまり、相手が嘘をついていると応酬して止まない。提出された証拠も決定的なものとは言いがたい。そこで落としどころです。私はCクラスの生徒にも僅かながら責任はあると思います。3人いたことや、一人は喧嘩慣れしている過去を持つているそうなので、それは問題でしょう。そこで須藤君に2週間の停学、Cクラスの生徒たちに1週間の停学。それでいかがでしょうか？ 罰の重さの違いは、相手を傷つけたかどうか、その違いです」

堀北会長は黙ってその話を聞いていた。

坂上先生の話の噛み砕くと、Cクラスが半分譲歩すると認めたことでもあった。

本来は1ヶ月以上の停学となっていたものが2週間となればかなりの譲歩だ。

「ふむ……確かに当初の処分を考えれば大分こちらの罰は軽い。提案としてはこれ以上ないくらいの好条件ですね」

「そうですね」

「ですが——」

茶柱先生は鋭い目つきで坂上先生を射抜いた。

「こちら側は一切譲歩する気はありませんよ。教え子たちが戦うというのなら、私は担任として、それを最後まで見届ける義務がある。レフェリーの真似事などは生徒会の仕事だ。我々担任がやることではない。我々がやることは、彼らを徹底的に争わせ、白黒をつけさせてやることだけです。勝負を降りるならどうぞ勝手にやって下さい。訴えを取り下げるのなら止めはしません。しかしまだ、そちら側がこちらに非があると僅かでもお思いになっているというのなら、譲歩などという生温いことをせず、初志貫徹。徹頭徹尾。自分たちが何の非もない被害者であることを貫いていただきたい」

「——っ！ では、Dクラスはこの交渉を飲まないと、そういうことですね？」

茶柱先生の強気な発言に坂上先生は顔を顰めた。

その表情は理解できない、とても言いたげな様子だ。

敗北の色が濃い現状で、まだ強気でいられる彼女の態度が分からないのだ。

ちようどその時だった。生徒会室に電子音が鳴り響いたのは。

「むっ？ すまない、俺だ」

鳴ったのはどうやら堀北会長の端末だった。

厳格な性格である彼が審議の場で電源を切り忘れたことに橘書記は驚いていた。

「ふむ……なるほど」

端末を確認した堀北会長は通知された内容に目を通していった。

堂々と端末を弄る彼に、橘書記が尋ねる。

「会長、どうなされたんですか？」

「いや、俺も今回の審議にあたって、生徒から情報提供を求めていたのだ。我々生徒会も、事件の概要は双方の言い分を聞いていたのみだっ

たからな。より詳しく状況を知るために、目撃者を募っていたというわけだ」

「いつの間に……それでは、今の着信はその情報提供ですか？」

その問いに、堀北会長はニヤリと笑い頷いた。

「ああ。どうやら佐倉以外にも事件の目撃者がいたらしい。それも、彼女のように事件のワンシーンではなく一部始終を、な」

「なっ——!?!」

堀北会長のその発言に、橘書記を始め生徒会室内全員が息を呑んだ。

特にCクラスの生徒3人は驚愕のあまり固まっている。

「っ、馬鹿なことを。今更目撃者など出てくるわけがありませんよ。どうせそれも、Dクラスの誰かがやったでっち上げでしょう」

「ほう、では坂上先生、いやこの場にいる全員に見ていただきましょうか。どうやらこれは写真ではなく、動画のようですよ」

堀北会長はメールに添付されていた動画ファイルをタップすると、端末を机の上に置いた。

全員がその端末を覗き込んだ途端、動画が再生される。

『話は終わりか？　なら俺は行くぜ。テメエらの脅しなんざ怖くもねえからな』

『おい待てよ須藤。テメエ、クズのくせに調子乗ってんじゃねえぞ！』

『そうだそうだ。テメエが尻尾振ってる黛って奴、口先だけの腰抜けらしいじゃねえか』

『あ、それ俺も聞いたぜ。なんか山脇に喧嘩売って尻尾巻いて逃げたってよ』

『うわ、ダッセー！　クズのお守りしてる奴もクズだったってか！』

『なんでも聞いた話じゃ、黛以外にも喧嘩売ってきた奴がいたらしいぜ？　確か名前は……堀北だっけか？』

『あー知ってる知ってる！　そいつも口だけは一丁前の落ちこぼれだって話だぜ？』

『所詮Dクラスだもんな。クズに優しくする奴なんてクズしかいねえわな!』

『……おい、テメエら。今、黛と堀北のことなんつった……?』

『ああ? クズのテメエを困ってるクズだって言っただよ!』

『違うってんなら、かかってこいよこのクズがア!』

『……上等だゴラアアツ!!!』

動画には、須藤たちが喧嘩を始めるまでのやりとり、そして須藤が3人を殴りつけてその場から去るまでの一部始終が全て収められていた。

再生が終わり、生徒会室は静寂に包まれる。

その沈黙を破ったのは堀北会長だった。

「ふむ、どうやら動画を見る限り、須藤の主張と一致するな」

「そのようですね。この動画に全てが収められている以上、揺るがぬ証拠ということになります」

生徒会二人がどんどん話を進めていく中、坂上先生が待ったをかける。

「ま、待ちなさい! こ、こんなものいくらでも捏造できる! Dクラスが生徒が作った偽の映像でしょう!」

「いいえ、情報提供者は三年生の一般生徒です。どうやらたまたま特別棟にいたみたいですね。佐倉と同じく、校内を散歩でもしていたのでしょうか」

「さ、三年だと……!? だ、だが、そうだとしても何故今になって情報提供が来たんだ! こんなものがあるのなら、もっと早くに提出すればよかったはずだ!」

「その点についてもメールに書いてありますね。『今年、自分は受験を控えています。もし自分が名乗り出ること審議の場に召喚されることを考えると、受験勉強の時間を取られるのが嫌でした。しかし、生徒会が情報提供を呼びかけていると聞き、学校への情報提供であれば召喚されることはない判断しました』とのことです」

堀北会長は坂上先生の逃げ道を徹底的に封じていく。

どう理由を後付けしたところで、この動画は間違いなく物的証拠に他ならない。

つまり事件の真実はこの動画の中に収められているのだ。

「し、しかし、この動画が本物だとしても、私の生徒たちが一方的に殴られたことには変わりない！ 結果として三対一だが、これは須藤君の過剰防衛と言えるのではないですかな!?!」

坂上先生がその言葉を口にした瞬間、茶柱先生はニヤリと笑った。事前に柚椰と打ち合わせした作戦を発動する好機が、今やってきたのだから。

「なるほど。ということとは、坂上先生並びにCクラスの生徒もこの証拠を採用するわけですね。ならばここまで一貫してなされた主張と証言は全て嘘でしたと認めて下さい。その上で須藤の過剰防衛を証明する証拠を揃え、一から提訴し直していただきたい!」

「——っ!?!」

茶柱先生の容赦ない追求に坂上先生は言葉を失った。

Cクラスの生徒たちも一転して絶体絶命に追い込まれたことに動揺している。

しかし茶柱先生はそこで追撃の手を緩めることはない。

さらなる一手はすでに打たれているのだから。

「もし、そちら側が須藤の過剰防衛の線でそれでも争うというのなら止めません。しかしその前に、我々Dクラスがそちらを訴え、新たな審議に持ち込みます」

「Dクラスが訴えるだと……!?!」

茶柱先生は愉快そうに、懐から折りたたまれた一枚の紙を取り出した。

彼女はそれを広げると、全員に見えるように机の上に広げる。

「実は今日の放課後、審議が始まるほんの少し前にDクラスの生徒から訴えを起こす書類を受け取っていたんですよ。訴える相手は今回の事件に関わったCクラスの生徒、小宮、近藤、石崎の3名。被害者

は須藤健。訴えの発起人は黛柚椰。内容は被害者に対する暴行教唆並びにDクラスの生徒に対する名誉毀損。となつています」

「なっ——!?!」

坂上先生は茶柱先生が持っていた思わぬ隠し手に完全に虚を衝かれていた。

訴えを再び起こすには、新たに書類を作成し提出しなければならぬ。い。

しかし相手方は既に書類を完成させ、担任はそれを受け取っている。

後はそれを学校側として受理すれば訴えは通り、審議が開かれる。

つまり今から再び訴えの内容を変えて提訴し直したとしても、必ず後手に回ることになるのだ。

加えて訴えた内容も内容だった。

Dクラスが新たに訴えるとしている内容は、既に先の動画で証明されている。

つまり審議が開かれても、この動画を証拠に必ずDクラスが勝つようになっているのだ。

どう転んでもこちらの勝ち筋はなく、完全な詰み。

「まさか、貴女はこれを予期して交渉を突っぱねたのですか……!?!」
「いえいえ、あくまで私は教え子たちの勝利を信じていただけです。この書類は、もしものときのためにとっておいただけですよ。まさか本当に使うことになるとは思いませんでした」

白々しく言う茶柱先生に坂上先生は歯噛みする。

「どうなさいますか? 訴えを取り下げ、今回の件を水に流すというのなら、我々もこの書類は提出いたしません。しかし、あくまでも決着を望むのでしたら、まず今回の審議でそちら側の偽証が証明される。その上で我々がCクラスを訴え、罰則を求めます」

「ぐう……」

最早Cクラスに選択肢は無かった。

勝負を降りるか、明確な敗北を決定づけられるかの違いでしかない。

「坂上先生、ご判断を」

最終判断を下す役割である堀北会長が、Cクラスの決断を求めた。小宮を始めとするCクラスの生徒たちも、もう打つ手はないと諦めていた。

この審議の結末は決まったのだから……

「我々Cクラスは……訴えを、取り下げます……」

坂上先生からその言葉を聞いた堀北会長は、ひとつ頷くと判決を言い渡した。

「原告が訴えを取り下げたため、今回の審議はこれで終了とする。今回の暴力事件の顛末は既に明らかだが、双方共にこれ以上相手への処罰を求めることはないと判断した。よって、今回の件で双方に処分が下ることはない。以上だ」

審議が終わり、生徒会室から全員が退出した。

坂上先生を始めとするCクラスの面々は、悔しそうに齒噛みしてその場を去っていった。

残っているのは生徒会の二人と、Dクラスのメンバーだ。

「会長、それにしても一体いつの間に情報提供なんて呼びかけてらしたんですか？」

「ああ、少し前にな。しかし、今回は情報を持っている生徒に恵まれたな。あのままでは、遅かれ早かれDクラスの敗北は濃厚だった」

「フツ、まさか。我々は必ず勝つと確信していたよ。生徒会長」

不敵に笑う茶柱先生に、堀北会長もまた笑った。

「今回はお互いに、アイツに上手く扱われたということですね」
「そのようだな。だが、結果としてこちらとしても大白星だよ」

「良い生徒に恵まれましたね、茶柱先生」

「ああ、全くだ」

堀北会長はそう言い残すと、書記の桶を伴ってその場を後にした。

「茶柱先生、アイツとは誰のことですか？」

兄がいなくなったことで、堀北が気になっていたことを質問した。

「そうか。お前たちは聞かされていなかったんだったな」

「なにをですか？」

「なに、単純なことだ。考えてもみろ？ 審議の場で、徹底抗戦の構えを取った矢先に生徒会長の端末が鳴る。しかも届いたのは事件の決定的証拠を収めた動画のファイル。それを確認してCクラスが動揺し、須藤の過剰防衛へと訴えを変える。すかさずそこで、Dクラスが新たに訴える内容を記載した書類を突きつける。それら全てが本当にたまたまだと思うか？」

そこまで言われて、ようやく堀北は何かに気づいた。

同じく話を聞いていた綾小路も、今回の審議を裏で操っていた存在を確認した。

「——っ!? まさか……」

「おっと、これ以上は蛇足だな。ではお前たち、用が済んだらさっさと帰れ」

茶柱先生は上着の袖のカフスボタンを一個外すと、それを投げてキャッチしながらその場を後にした。

残されたのは堀北、綾小路、須藤と佐倉の4人だった。

「綾小路君、まさか今回の審議……」

堀北と同じ結論に至っている綾小路は頷く。

「ああ、恐らく全部黛が裏で仕組んでたんだらうな」

「ええっ!?!」

「マジかよ!?!」

佐倉と須藤はあまりに予想外な事実^に仰天^{して}いた。

「茶柱先生が用意していた書類を作ったのも、先生に当日の流れを指示したのも黛君ね。そして恐らく……」

「ああ、生徒会長の端末にメールで動画を送ったのも黛だろうな。恐らくどこかで審議の様子を聞いてたんだろう。でなきやあんな都合のいいタイミングでメールは来ない」

「で、でも一体どうやって……?」

「どのようにして柚椰が審議の様子を聞いていたのか佐倉は分からなかった。

「考えられるとすれば、さつき茶柱先生が投げて遊んでいたあのカフスポタンかしら?」

「恐らくあれは盗聴器か何かか。事前に先生に持たせてたんだろうな」

「それで審議の様子を聞いてたってことかよ……」

須藤は改めて柚椰の有能さに戦慄^{して}いた。

「最高のタイミングで確実に相手の息の根を止める一手を打つ。いいえ、それだけではないわね。着実に勝ちへの道筋を彼は念入りに準備していたのよ」

「昨日黛が言ってた投了^{つて}のはこういうことだったってことか」

「ほ、本当に凄い人だね……黛君^{つて}……」

「だろ!? 黛はスゲエんだぜ!」

佐倉の褒め言葉に何故か須藤がドヤ顔で胸を張る。

その態度にカチンときたのか、堀北が食^{つて}かかった。

「何故貴方が威張^るのかしら須藤君? そもそも貴方が問題を起こさなければ私たちが動くこともなかったのよ。それを理解しているのかしら?」

「わ、分かつてるよ! それは本当申し訳ねえと思^{つて}る^{つて}」

「本当に反省しているのかしら。黛君の手を煩^わせるなんて、飼^い犬としての自覚がないんじゃない?」

「俺は犬じゃねえ! 失礼な^{こと}言うな!」

「いいえ、貴方は犬よ。それもポメラニアンかなにかかしら」

「小型犬じゃねえか！」

「14点の貴方なんてポメラニアンで十分よ！」

「ああ!? 堀北テメエ! ポメラニアン馬鹿にすんじゃねえぞ!」

「もうポメラニアンになつてゐるぞ……」

14点と呼ばれることよりポメラニアンを馬鹿にされて怒る須藤に綾小路は呆れていた。

二人のやりとりを初めて見る佐倉は二人の口喧嘩に驚いてオロオロしている。

「ふ、二人とも……喧嘩しないで……」

「あー、佐倉。別に気にしなくていいぞ。いつものことだし、これは単なるじゃれあいだから」

「え、そうなの……?」

「ああ。その証拠に、二人とも本気で怒ってるわけじゃないだろ?」

綾小路が二人を指差したことで、佐倉は改めて須藤と堀北の様子を見た。

二人は口喧嘩こそしているが、その様子はどこか穏やかで、それが日常的一幕であると分かる。

それを見て安心したのか、佐倉はほっと胸を撫で下ろした。

「そっか……でも、なんかいいね……あんな風に言い合える関係って」

「アイツらは言い合いすぎだけだな」

「ふふっ、そうかもね」

佐倉がおかしそうに小さく、しかし確かに声を出して笑った。

「あ、あのね、綾小路君……私……」

「ん? どうした」

綾小路は自分の袖をチョンと摘む佐倉に聞き返した。

しかし、彼女は少し考え込むような素振りを見せると、首を横に振った。

「ううん、なんでもない……」

佐倉のその言葉に、綾小路はそれ以上聞き返すことはなかった。

無機質少年は寡黙少女を救い、彼は当て馬へと祈りを捧げる。

審議から一夜明け、いつもの日常が戻って来たかに見えた。

しかし、教室に入った瞬間、綾小路は変化に気づいた。

普段はギリギリに登校してくるはずの佐倉が既に席についていたのだ。

いつもと変わらないように見える彼女だが、気持ち背筋を伸ばしているようにも感じられた。

変化とは言えないほどの微妙な違い。

勘違いだと言われれば、そうかもと答えてしまうほどの、風が吹けば飛ぶほどの差。

彼が席に着こうと佐倉の席の前を通り過ぎようかというタイミングで、佐倉が顔を上げ彼の存在に気づいた。

「えっと……おはよう。綾小路君」

「お、おはよう」

初めて佐倉から挨拶をされたことで、綾小路は言葉に詰まりながらも挨拶を返した。

「どう思う？・彼女」

綾小路が席に座ると、隣の堀北がそう尋ねてきた。

暗に佐倉の変化について言っているのだと理解した彼は己の見解を述べる。

「何か心境の変化があったんだろ。昨日の審議で自信がついたとか」

「どうかしらね。人がそう簡単に変わるとは思えないわ。厳しいことを言うようだけど、私には彼女が無理をしているようにしか見えな
い」

感動的な想像は、現実的な一言で打ち破られる。

佐倉愛里という少女は、昨日と今日とでそう差はない。

しかし、全く同じという訳ではない。

彼女なりに何か、変化をもたらそうと思つての行動だと綾小路は理解できた。

「身の丈に合っていないことをすれば、思わぬ方へ転びかねないわ」

「お前が言うのと説得力があるな」

「どういう意味かしら？」

ニツコリと笑いながら、堀北は尋ねる。

その笑みに悪寒を感じた綾小路は、それ以上何か言うことはなかった。

その後、ホームルームで審議の結果が茶柱先生から通達された。

事実上、Dクラスの完全勝利という結果にクラス中が沸き立った。

支給が止められていたポイントは明日にでも振り込まれるのとこのとだ。

その事実には、クラスのテンションはさらに高くなる。

綾小路と堀北、須藤と佐倉は審議の全てを操っていた黛について、皆に言うことはなかった。

別段言いふらすことでもなく、本人もそれを望んでいる訳ではないだろうと判断したのだ。

午前の授業。昼休み。午後の授業とつつながなく進み、放課後。

綾小路は敷地内を駆け抜けていた。

彼は端末を起動すると、連絡先リストの中から佐倉の名前を選択し、彼女の現在地を表示させる。

胸騒ぎがあった。

それも嫌な、陰湿な、どこかこびりつくような陰気な予感。

考え過ぎかもしれない。だが、勘違いでもないかもしれない。

以前佐倉のブログを見た際に感じた彼女に迫る危険。

そして今日、朝の教室で感じた彼女の些細な変化。

極め付けは終業後、教室で彼女と別れた時に、彼女が言った言葉だった。

『綾小路君も、堀北さんも、黛君も……皆凄いやね……私も、変わらな
きや』

それは彼女の勇気と決意だとその時は思った。

ああ。頑張れよ、とだけ言って彼女と別れた。

しかし、彼女の変化とその言葉。

そして、彼女に迫る危険を全て材料として考察した瞬間、怖気が走った。

佐倉愛里という少女の辿り着いた結論。

それは恐らく……

「ストーカーと直接話をつけに行つたのか……!」

それはあまりに軽率な行為だ。

相手は男性で、しかも常識が通じるような相手じゃない。

既にストーカーは凶行に走るだけの要素を揃えているのだ。

つまりいつ爆発してもおかしくない。

佐倉はたった一人でその爆弾を解体しに行つたのだ。

「勇気と無謀は違うぞ……!」

端末の位置情報が示す場所へ、綾小路は急いで向かった。

同時刻、家電量販店にて。

『ああ、店長さん。僕、このお店でカメラの修理を依頼した者なんですけど』

『ええそうです。実は彼女の代理で。彼女、連絡先を書くのが怖いって言って、代わりに僕が』

『どうも彼女、この店のとある店員さんに随分としつこく絡まれたらしくてですね』

『えーっと、そう、この人です。なんでもこの人にデートに誘われた

り、部屋番号を聞こうとしてきたり、店員としてはありえない対応をされたと言つてましてね』

『いえいえ、店長さんが謝ることではないですよ。でも、僕も彼女の恋人として、その店員さんが何者なのか調べる必要があると思ひまして。ちよつと彼の身辺を探つてみたんですよ。したらびつくり。彼、どうやら僕の彼女のストーカーだったみたいなんです』

『おや、驚いてますね。勿論証拠もありますよ。彼女の端末の通話履歴に、彼の番号はしつかりと残っていますし、その時の会話も録音しています。加えて、実は僕の彼女はネットでアイドル活動のようなものをしてましてね。その彼女のブログに気持ちの悪いコメントを書いている人間が最近出てきたんですよ。时期的にも、彼女がここでカメラを買つた時期と一致するんですよ』

『あ、お気づきになりました？ そうです。この店員さんですよ。僕はこの後、彼を警察に通報しようかと考えてるんです。ですがその前に一度、彼と個人的にお話をしたいなと思ひまして。彼は今日出勤日ですか？』

『あれ、出勤日なのにまだ出勤してこない？ ひよつとしてバックレですかね？ いけませんねそれは。では、彼の緊急連絡先にでもかけてみてはいかがですか？』

『え、待合室で待たせてくれるんですか？ ありがとうございます。いやー親切な店長さんでよかった！ ここはいいお店ですね。でも、今度からはちゃんと採用する人は選ばないとダメですよ？』

端末の位置情報が示したのは、家電量販店の搬入口がある場所だった。

彼は乱れた呼吸を整えるように、その場所へと息を殺しながら目的地へと近く。

そして物陰から現場を覗き込むと、そこには男と対峙している佐倉の姿が見えた。

「もう、私に連絡してくるのはやめてください……!」

「どうしてそんなこと言うんだい？　僕は君のことが本当に大切なんだ……雑誌で君を初めて見た時から好きだった。ここで再会した時は運命だと感じたよ。好きなんだ……君を想う気持ちは止められない!」

「やめて……やめてください!」

佐倉は叫ぶと、鞆から何かの束を取り出す。

それは手紙。数十……いや、百に届きそうなほど夥しい数の手紙。そのどれもが、目の前の男が出したものののだろう。

「どうして私の部屋知ってるんですか!　どうしてこんなもの、送ってくるんですか!」

「決まってるじゃないか。僕たちは心で繋がってるからなんだよ」

佐倉と男との間に、もはや言葉は通じない。

それほどまでに男の精神は狂っていると綾小路は思った。

「もうやめてください……迷惑なんですっ!」

佐倉は男からの一方的な狂った愛情を拒絶するように、手紙の束を地面へ叩きつけた。

その瞬間、男の表情がそれまでニヤニヤしていたものから、一転して無表情へと変わった。

「どうして……どうしてこんなことするんだよ……!　君を想って書いたのに!」

「こ、来ないで……!」

男は距離を詰め、今にも襲い掛かりそうな勢いで歩き出す。

そして佐倉の腕を掴むと倉庫のシャッターに叩きつけるように押し付けた。

「今から僕の本当の愛を教えてあげるよ……そうすれば君も、わかってくれる」

「いや、離してください!」

「僕は君を本気で愛してるんだ。君を世界で一番愛しているのは僕だ

け。そう、僕だけなんだよお！」

限界だった。

それ以上は佐倉の身が危ない。

そう判断してから行動するまで、そのデイスレイは恐らく綾小路がこの学校に来てから最速だった。

端末のカメラを起動し、現場を撮影する。

そのシャッター音が聞こえたのか、男の動きが止まった。

好機とばかりに綾小路は物陰から姿を現した。

「現場は抑えたぞ。気持ち悪いストーカーさん」

「あ、綾小路君……？」

「な、なんだお前、僕と彼女の邪魔をするな！」

綾小路を視界に入れ、正反対の反応を示す佐倉とストーカー。

彼らに近づきながら、綾小路は再びシャッターを切る。

「敷地内で店員が生徒へ乱暴を働く決定的瞬間。揺るがぬ証拠だな」

その言葉にストーカーは、ようやくと今自分が何をされているのか理解したのか、慌てて佐倉から手を離れた。

「ち、違う！　これは——」

「違わないだろ。っと、なんだこの手紙。これ全部お前が書いたのか？　うわ……本当に気持ち悪いな」

汚物を摘むかのように、綾小路は落ちた手紙の角を摘み上げると男の前でヒラヒラと揺らした。

「違うんだ。ただ僕は……そ、そう！　この子がデジカメの使い方を教えて欲しいっていうから、個別に教えてたっていうか。それだけ！

それだけなんだよ」

「そうなのか？　佐倉」

「え……」

綾小路に尋ねられた佐倉は、彼とストーカーとを交互に見た。

ストーカーはどうか嘘をついてくれと懇願するような目を彼女に向けていたが、今更それは凶々しいとしか言えない。

佐倉はもう逃げないと決意したのか、大きく息を吸うと、綾小路に言った。

「ち、違うよ綾小路君……この人は、私のストーカーですっ！」

「——雫ウウウウウウウツ!!!」

佐倉に裏切られたとあまりに身勝手な怒りからか、

ストーカーは彼女の正体であるグラビアアイドルの名を叫びながら彼女へ再び襲いかかろうとした。

しかし彼が佐倉に襲いかかることは許されない。

なぜなら今この場には、佐倉が待ち焦がれていた騎士がいるのだから。

本当はずっと助けを求めたかった。しかし結局助けてと言えなかった。

彼女が救ってほしいと思っていた王子様がいるのだから。

「そこまでだ」

綾小路はストーカーと佐倉との間に割って入ると、近づいてくるストーカーの首を掴み、放り投げるように壁へと叩きつけた。

背中から壁へ叩きつけられたことで肺から一気に空気が抜けたのか、ストーカーは息苦しそうにその場に蹲る。

その惨めな姿を冷たく見下ろすと、綾小路はストーカーの頭を掴んで顔を上げさせる。

「お前が佐倉を襲おうとした現場は抑えた。写真もある。俺がこのまま警察に突き出せばお前は終わりだ」

初めて聞く綾小路の地を這うような冷たく低い声に、佐倉はビクリと震えた。

その声向けられている張本人であるストーカーはもつと怯えているのか、ガタガタと震えだした。

綾小路はなぜ自分がこうも怒り狂っているのか分からなかった。

しかし、今はただ、目の前の男がこれ以上佐倉の視界に入ることが許せなかった。

「アイドルは応援する存在のはずだ。付き合おうとか、ましてや手出そうとした時点でお前はただの犯罪者。愛してるだの好きだの気持ちの悪いことをベラベラと喋っていたみたいだが、俺に言わせればお前は気持ちの悪いただのストーカーなんだよ」

「ひっ!？」

「次、佐倉の目の前に現れてみる。その時は……俺はアンタを殺すぞ」
そう告げる綾小路の眼光は、その言葉が本気であると示していた。
彼の言葉に完全に吞まれたのか、ストーカーは脱兎のごとく逃げ出した。

「ご、ごめんなさい! もう二度としません! だから助けてくれええええ!!」

店員は店に戻らず、そのままどこか別の場所へ逃げていった。

恐怖の元凶が去ったことで佐倉は気が抜けたのか、腰を抜かし地面に座り込みそうになった。

それに気づいた綾小路は慌てて腕を掴んで身体を支える。

「よく頑張ったな、佐倉」

色々と言いたいこともあったが、ひとまず綾小路は佐倉を労った。
彼女が彼女なりに、覚悟を決めて一步を踏み出したことは確かなのだ。

今はその気持ちを汲んでやるのが大切だと判断した。

「どうしてここに……?」

「お前と連絡先を交換しておいてよかったよ」

そう言っただけで端末を取り出し、佐倉の位置情報が分かる画面を表示して見せた。

事情を理解した佐倉は、ようやくと解放されたという安心からか、ポロポロと涙を零す。

「私、全然ダメだった……結局、一人じゃ何もできなかった」

「そんなことはないぞ。佐倉は頑張った。俺はそう思う」

泣き出す佐倉の頭を優しく撫でながら、綾小路は彼女の勇気を称えた。

それから数分ほど、佐倉は彼の前で思いつき泣きじやくった。

「綾小路君……」

「なんだ?」

「さつき、あの男の人に言っただこと……」

佐倉は先ほどストーカーが彼女の芸名を口にしたこと。

そして綾小路がストーカーに言ったことについて触れた。

恐らくそれで、綾小路も佐倉が違う顔を持っていることに気づいていたと思っただろう。

「ああ、俺は知ってた。佐倉がアイドルだったってこと」

「い、いつから……？」

「少し前から。他にもクラスには何人か気づいてる奴がいる」

綾小路は正直に話すことにした。

遅かれ早かれバレることならば、素直に白状した方がいいと判断したためである。

「もしかしたら、それで良かったかも……偽り続けるって大変だから」
今回の件で、佐倉が仮面を外すきっかけになればいいと綾小路はなんとなく思った。

「綾小路君は……私のこと、変な目で見ないんだね……」

「変な目？」

「……ううん、なんでもない」

佐倉のそれは昨日の審議の終わりの時と同じような返答だった。

しかしその表情は、憑き物が落ちたように晴れやかな、ちよつと嬉しそうに微笑んでいた。

「はあっ……！ はあっ……！ はあっ……！ はあっ……！」

学校の敷地内を、男は全速力で逃げ回っている。

彼は先ほど綾小路に脅されて尻尾を巻いて逃げたストーカーだ。

男の脳内にある思考はただ一つ。

少しでも遠くへ、あの男から遠くへ逃げたい。

しかし一体どこへ逃げればいいのか。

この敷地内から勝手に外へ出ることはできない。

従業員である自分も、敷地内の寮に住むことを義務付けられている

のだから。

どうすれば、と思い悩んでいると、彼の携帯が大きく鳴った。

その音にビクリとしながらも、恐る恐る携帯をタップして耳へ当てた。

「も、もしもし……」

『やあ、店員さん。お久しぶり』

その声には聞き覚えがある。

愛する人が店にやってきたとき、彼女に書類を書かせようとしたときに割って入ってきたあの男だ。

声の主を理解した瞬間、男は携帯を強く握りしめた。

『あ、もしかして驚いてますか？ 実はお店の名簿で店員さんの番号をゲットしたのでかけてみたんですよ。最近調子はどうですか？

俺は最近すこぶる元気で——』

『どういうことだ！ 話が違うじゃないか！』

『はい？ ちょっとちよつと店員さん、一体何の話ですか？』

「惚けるな！ お前は言ったじゃないか！ あの子を本気で愛している男が現れれば、あの子は自由になれるって！ だから僕は彼女に愛を伝えたのに！ 彼女に会いに行ったのに！」

『あ……その話か。僕は最初から嘘など言っていない。何故なら、彼女は貴方をはつきりと拒絶しただろう？』

「は……？」

それまでとは打って変わって冷たくなった声色と喋り方に男は足を止めた。

ちよつと歩行者信号が赤だったため、横断歩道の前で男は静止している。

前を見ると、そこには自分と同じように端末を耳に当てている男がいた。

それは、今まさに自分が通話をしている相手。

自分を唆した悪魔が立っていた。

『そうだな。ではそろそろ答え合わせをしようか』

「答え合わせ……？」

『まず初めに、僕は彼女のことを調べていた過程で、彼女にストーカーがいることを突き止めた。そして彼女のデジカメの状態を確認し、それが入学後に買ったものと判明した。次にカメラの購入時期と、ブログでストーカーが活動を始めた時期を照らし合わせて、ストーカーの正体が家電量販店の店員かなにかであると推測した。あの日、僕が彼女のデジカメの修理に付き合った理由。それは君に会うためだ』

「な、んだと……？」

『僕も彼女のこととはどうにかしてあげようと思っていたんだ。周囲に溶け込めるように、穏やかに過ごせるようになってほしいとね。故に彼女が変わる何か劇的なきっかけがあればと考えた。そこで思いついたのが、彼女に恋をさせることだ』

「恋……」

『実にテンプレートなものだが、恋で人が変わるといえるのはよくある話だ。だが、ただでさえ人と関わらない彼女がそう簡単に男に心を許すはずがない。彼女を本気で愛し、彼女もまた相手を本気で愛する。そういった形が理想だったが、現段階では不可能だと判断した』

信号が赤から青へと変わる。

しかし両者はその場を動かない。

片方の男は話の先を聞くために、もう片方の男はその男に語り聞かせるために。

『そこで考えたのは、あえて彼女に危険が及ぶ状況を作り、そこを誰かに助けさせるといふものだ。所謂白馬の王子や正義の騎士というものさ。実に素敵な物語だと思わないか？』

「まさか……！」

『気づいたかい？ その通りだ。僕は君に彼女を襲わせて、そこを誰かに助けさせようと考えたんだ。言ってしまうえば君は姫君を狙う悪の盗賊か、或いはただの道化としての役割を全うしたに過ぎない』

「ほ、僕を利用したというのか……!？」

『ブログで君の書き込みに煽るようなコメントを打ったのも僕だよ。』

そうすればストーカー心理を刺激できると考えたんだ。その想定通り、君は奮い立ち、自分が本当に佐倉愛里の運命の相手だと誤認した。その結果、君は佐倉愛里と接触し、襲いかかった。ここに至るまでの展開は全て、初めから最後まで僕の計画通りだ。君の見事な当て馬ぶりを脚本家として褒め讃えさせてもらおうよ』

「くっ……」

最初から掌の上で踊らされていたという事実にも男は齒噛みする。対照的に悪魔はカラカラとおかしそうに笑った。

信号が青から赤へと変わる。

『当て馬が用意できれば、あとは王子を用意してくればいいだけだ。だがそれは決して適当な人選であってはならない。彼女が一定の信頼を置いている相手でなければ、その意味を成さないからだ。考えた結果、選択肢は僕か綾小路の二択に絞られた。僕が役を買って出てよかったが、今回は綾小路にやってもらったことにした。彼も佐倉愛理のことを気にかけているようだったからね。彼が助けた方が今後のためにも、良い方へ転ぶと判断した』

「僕の愛を、彼女への愛をなんだと思ってるんだお前は!!」

男は我慢ならなかったのか、電話越しに目の前の悪魔へ吠える。

その叫びに、悪魔は堪えきれなかったのか声をあげて笑った。

『ふっふっ、君の愛か。そんなものを彼女は一切、微塵も欲してなどいなかっただろう。彼女が君を拒絶したときの顔を、声を、今一度よく思い出してみるといい。彼女が君に抱いている感情はただ一つ。嫌悪だよ。ああ、折角だ。一つ覚えておくといい——』

『——君が彼女に抱いた感情の名は執着だ。それは愛から最も遠い感情だよ』

「あゝ あああああああああつ!!!!」

その言葉に激昂し、男は悪魔の元へ一直線に駆け出した。距離にして僅か数メートル、襲いかかるのに数秒とかならない。

しかし、男の身体は、横から突っ込んで来たトラックによって跳ね飛ばされた。

「え……う」

男は何が起こったのか理解できないまま、トラックに轢かれ、無残にも下敷きとなった。

信号無視して横断歩道を渡ったが故の事故だった。

トラックの速度、男の轢かれ具合から、安否を確認するまでもなく即死だろう。

男は悪魔に近づくことすらできないまま、その生涯を終えることとなったのだ。

「16時54分。今週も時間ぴったりだ」

腕時計で時間を確認すると、柚椰はニコリと笑い、踵を返した。

毎週水曜日のこの時間。

モールのとある店へ商品を運ぶ業者のトラックがこの交差点を通ることを彼は知っていた。

知っていたが故に、彼はそのトラックを男の処分用の道具として利用したのだ。

背後から運転手の悲鳴にも似た大声が聞こえてくる。

人を轢いたという現実には運転手をパニックに陥れているだろう。

しかし、既に柚椰は興味が失せたのか、後ろを振り返ることはない。

「道化から恋の仲人への昇格おめでとう。次は運命の人に君自身が愛されることを祈っているよ」

トラックの下で肉片となっているであろう男へ向けて、彼は小さな祈りを捧げた。

夏休みへ向けて、彼は奔走する。

暴力事件から数日経ったある日の放課後。

柚椰は櫛田を介してある生徒たちをカフェに呼び出した。

それは以前、櫛田とともに企てた計画における重要なファクター。

クイーンを蹴落とすために必要な通過点だ。

「黛くーん！ 連れて来たよーっ」

カフェに入って来た櫛田は店内の一角に座っている柚椰を見つけると嬉しそうに手を振った。

彼女の横には目的の女生徒たち三人も同伴している。

「ありがとう櫛田。そしてこんにちは、佐藤、篠原、松下。まあ座って」

「二し、失礼しまーす」

柚椰に促され、呼び出された三人はおずおずと柚椰の向かいに腰掛ける。

そして櫛田は柚椰の隣に座った。

全員が座ると、三人を代表して松下が柚椰に話しかけた。

「それで、どうしたの？ 櫛田さんを挟んでわざわざ呼び出すなんて。

私、黛君と連絡先交換してたよね？ 他の二人も」

彼女の言葉に佐藤と篠原もうんうん、と頷く。

「いや、俺も出来るなら三人に直接連絡を取ってこの場を設けたいと思っていたんだ。でも事情が事情だから、櫛田を外して集まるのもどうかと思ってる」

「事情って？」

「櫛田、話していいかい？」

「うん、今日はそのために集まってもらったんだもん」

柚椰と櫛田は何やら深刻そうな、真面目そうな雰囲気話している。

その様子に三人も何を話すのだと気を引き締め始めた。

「須藤の暴力事件が無事に解決して、この前晴れてDクラスにポイン

トが振り込まれただろうか？」

「うん、久しぶりのポイントだつて皆大はしやぎだったよね」

「あたしも嬉しかったなく2万は大きいよやっぱ」

「中間テストの頑張りも無駄にならなかつたし、審議に勝つてよかったねって話してたよね」

柚椰の問いに、佐藤たち三人は各々その時のことを振り返つていた。

三人は皆一様に喜びを露わにしている。

「そう、うちのクラスにとつては入学以来のポイント支給だった。皆の懐が少しでも潤つたわけだけど、あれから何か変化はあつたかな？」

「変化つて、なに？」

「別に何も、ねえ？」

「うんうん、特に何も無いよ？」

「そうか、変化はないか……ポイントが増えたりはしなかつたかい？」

「ポイントが増える？」

「そんなことなかつたよ？ そうだよね？」

「うん、至つて普通。ポイントが入つたつていつでも相変わらず節約生活かな」

三人の返答を聞いた柚椰は思い悩むように嘆息した。

何が何だか分からない3人は頭に疑問符を浮かべている。

「実は、前から俺は櫛田からある話を聞いていたんだ。Dクラスの女子たちが、ある生徒へポイントを貸しているという話をね」

「えっ」

「あっ！」

「そういえば……」

三人はそこでようやく柚椰が言いたいことに気づいたようだ。

「君たち三人、もといDクラスの女子は軽井沢にポイントを集られたんだろう？ 確か、ポイントが0になった5月頭に」

「う、うん。確かにそうだけど」

「軽井沢さんが2000ポイントでいいから貸してつて」

「すぐ返すからってことで私も貸した」

「榎田も軽井沢にポイントを貸したらしくてね。すぐに俺に相談してくれたんだ」

榎田がそう言うと、三人の視線が榎田に集中した。

「お金の貸し借りってさ、やっぱりちゃんと約束事を決めないとトラブルになると思うんだ。中学の時に、友達が同じようなことでトラブルになったこともあったから。だから、黛君に何かいいアイデアがないか聞いてみたんだ」

榎田は目を伏せ、深刻そうにつぶやく。

クラスを想う健気な少女と言わんばかりの迫真の演技だ。

案の定、三人は信じたのか、榎田を気遣う素振りを見せ始める。

「そんな、言ってくれたら私たちも協力したのに」

「そうだよ、榎田さんが一人で悩むことじゃないよ」

「うんうん」

「話を聞いた俺は、ひとまず様子を見るように榎田にアドバイスした。ポイントが振り込まれない5月、6月は軽井沢も返済のしようがないだろう？ だからポイントが振り込まれたときに、彼女が返すかどうか待ってから動いた方がいいってね」

「あつ、だからさつき変化はないかって聞いたの？」

先ほどの榎田の質問の意図がわかったのか、松下がそう尋ねる。

「そうだよ。ポイントが振り込まれれば、彼女にも返済の目処は立つ。彼女がポイントを借りた相手に返済して回るのなら、それで話は終わるんだ。別に今更どうこう言うつもりもなかったんだ。けれど」

「軽井沢さんは一向に返す気配がない」

松下の発言に佐藤は俯き、篠原は苦い顔をした。

「いくらクラスの中心人物とはいえ、借りたものを返さないでいたらどうなるかは明白だ。今でこそ不満が爆発してはいないけど、いずれ大きなトラブルを招きかねない。榎田と相談した結果、俺は行動を起こすことにしたんだ」

そう言うと、榎田は端末を取り出した。

「君たちに一人当たり20000ポイントあげるよ。返済義務なしで

ね」

「「ええっ!?!」」

柚椰の提案に三人は大層驚いた。

それも当然。いきなり2万もの大金をポンと渡すと言うのだから。返済義務なし。それはつまりあげるといふことだ。

そんな提案をされて驚かないわけがない。

「ど、どうして黛君が?」

「そうだよ、軽井沢さんの借金とは関係ないじゃん!」

「黛君が自腹を切るなんてそんなことしなくていいよ!」

当然ながら三人は遠慮した。

それ以外に困惑と疑問も入り混じっている。

柚椰は三人のその感情を汲み取った上で、彼女達を懐柔するために次なる手を打つ。

「俺も櫛田と同じだよ。クラスに余計なトラブルを招きたくないんだ。君たちと軽井沢の間に火種があるのなら、俺はそれを摘み取りたい。その為ならポイントくらい惜しまないよ」

微笑みながら柚椰は優しく語り聞かせる。

自分のクラスの立ち位置、そして相手の心理を理解している彼だけの手法だ。

人は言葉によつて心を動かされる。

しかし、単に聞こえのいい言葉だけを並べても心は動かない。人はそこまで馬鹿ではない。

偽り臭さが僅かでも感じられてしまえば、一気に信用性を失うのだ。

それを理解しているが故に、黛柚椰は芯まで自分を偽ることを可能としている。

胡散臭さなど微塵も感じさせない、紛れもない本心あるように語り聞かせることができる。

「黛君……」

「そんなにクラスのために……」

「でも、黛君だってポイントには苦しいでしょう? そんなことしな

くたつて……」

「俺も別口で地道に稼いでいたからね。多少懐に余裕はあるから心配いらぬよ。さあ、ポイントを振り込むから番号を教えてほしい」

柚椰が促すと、三人はおそろのおそろの端末を取り出して番号を表示させた。

それを見て、柚椰は一人一人番号を打ち込み、彼女達たちに宣言通り一人につき2万ポイントを振り込んだ。

「全員ちゃんと振り込まれたかな？」

「う、うん」

「確かに20000ポイント増えてる」

「でもどうやって黛君はポイントを増やしたの？」

至極当然の疑問を松下が投げる。

「使わなくなった要らないものを売ったり、ちよつとした勝負に勝ったり、かな」

「ふーん、そっか」

詳しく話すつもりがないと分かったのか、松下はそれ以上聞くことはしなかった。

「さて、じゃあ俺はそろそろ行くよ。ここの支払いはしておくから、あとは男子禁制で女子会を楽しんでね」

用が済んだため、柚椰はさっさと席を立つと、レジで全員分の支払いを済ませてカフェから出て行ってしまった。

残されたのは櫛田を含めた女子四人。

「なんか、黛君って不思議な人だよな」

「うん、優しいっていかお人好し？」

「ねえ櫛田さん、本当に彼氏とかじゃないの？」

「あ、それ私も気になってた！」

「相談しにくいことでも相談できる相手ってことでしょ？　どうなの？　どうなの？」

柚椰がいなくなったことで、三人の関心は彼と櫛田の関係へと向いた。

「え、ええっ!?!　ち、違うよ、黛君とはそういう関係じゃなくて……」

「えっ、彼氏とかじゃないの？ 意外〜」

「ねっ、てつきりもうとつくに付き合ってるのかと」

「じゃあ私が立候補してもいい感じ？」

ニンマリと笑いながら松下が手を挙げた。

「う、ううー……好きにすればいいじゃん……」

松下の立候補に櫛田はぶうたれてそっぽを向いた。

その態度に佐藤と篠原はテンションが上がる。

「櫛田さんカワイイ〜！」

「モヤモヤするけど彼女じゃないから強く言えないやつね！ 甘酸っぱ〜い！」

「じゃあ私、黛君にアタックしちやお〜」

「も、もう〜！ 皆して押揃わないでよ〜!!」

三人からの総攻撃に、櫛田は悲鳴をあげた。

それはまるでずっと仲の良かった友人同士のような、お互いがお互いを気の許せる相手であるかのようなやりとり。

三人は柚榔と、そして櫛田に心を許したのだ。

二人とならば、良い関係を築けると思ったのだろう。

そこから先、彼女たちは日が沈むまでカフェで談笑に興じることとなった。

その日の夜、敷地内のある場所。

学生を癒す施設として設けられてたとある店で、Cクラスが会合を行っていた。

そこはおよそ学生が利用するにはあまりに大人びた施設。一般的に成人男性や成人女性が夜に足を運ぶような店。ナイトクラブだった。

ミラーボールで鮮やかに照らされた店の一角にはシャンパンタワーのようなものが高く積み上げられており、クラスの男女入り交じり各々好き勝手に飲み食いをしている。

そしてその空間の支配者、Cクラスのリーダーである龍園翔はソファアに堂々と腰掛け、隣にいる女生徒から飲み物を注いでもらっている。

注がれた飲み物を一気に呷ると、龍園は改めて店内を見回した。

「臭えな……」

思わず出た呟きに、隣の女生徒が反応する。

「え、私臭いですか？ え、えっ!？」

「お前じゃねえよ」

不安そうに自分の制服を嗅ぎだした女生徒に龍園は投げやりに言葉を返す。

龍園の脳裏にあるのは、先日の暴行事件だ。

計画を立てたのは彼であり、実行させたのも彼だ。

小宮、近藤、石崎の3人を使って須藤を罠に嵌め、Dクラスにペナルティを下させる。

それが龍園の計画だったが、結果は大失敗。

審議の日当日にこちらの偽証が成立し、訴えを取り下げることになった。

幸い偽証によってこちらにペナルティが課せられることはなかったが、事実上の黒星であることは確かだった。

「近藤。テメエ確か、審議のときに現場を押さえた動画が出てきたっつったな」

龍園は事件の実行役の一人である近藤を呼び寄せると、改めて当時の状況を尋ねた。

近藤はビクビクしながら龍園のところまでいくと、その時のことを偽りなく語り始める。

「は、はい、途中まではこちらが優勢でした。坂上先生主導の下、こちらが有利になる和解案を提示したんです。ですがDクラスの担任はその案を突っぱねて、その直後に……」

「生徒会長が事件の動画を生徒から貰った、と」

「そ、そうです……あ、あの、龍園さん。俺……」

「テメエ……いや、小宮、石崎。テメエら揃いも揃って人の気配に気づかなかったのか？ Dクラスの生徒だけでなく、他にも見てた奴がいたってことだろうが」

龍園に睨まれたことで、離れたテーブルで飲み食いをしていた小宮と石崎もまた、ビクビクしながら答える。

「お、俺、人の気配は感じなかつたんです。本当です！」

「まさか動画まで撮られてるなんて、気づかなくて……」

「チツ、使えねえ無能共が……」

それ以上彼らに聞くことはないと言わんばかりに龍園は吐き捨てた。

「アルベルト」

「Yes, My lord.^解」

龍園は側に控えていた巨漢の男を呼ぶ。

サングラスをかけた黒人の男は、龍園の意図を汲み取り、近藤の胸倉を掴み上げた。

「ひっ!? や、やめ——」

「Bad boy.^{役立たずめ}」

近藤の懇願も虚しく、彼はアルベルトと呼ばれた男に容赦なく殴りつけられる。

顔を、腹を、拳や膝蹴りを以って容赦なく、加減なしに。

それが制裁ということなのだろう。

「小宮、石崎、テメエらもこつちに来い。逃げようだなんて馬鹿なこと考えんなよ?」

「は、はい……」

「くっ……」

龍園に逃げ道を封じられたことで、二人もまた、素直に龍園のそこ

ろへ行く。

そして近藤同様、アルベルトからの暴力を受け入れた。

彼らの制裁にはさして興味がないのか、龍園は再びグラスを片手に考え込んだ。

「(臭え……どうにも鼻につく臭いだ……)」

事件の収束からずっと、龍園の鼻は何かを嗅ぎ取っていた。

それはおそらく、この事件が一枚岩ではないという本能的な勘。

野生の勘とでも言うのだろうか。

何かがおかしい。違和感がある。

そんな不快感がずつとこびりついていることへの苛立ち。

「……」

眉間にしわを寄せ、考えに耽っている龍園を、離れたテーブル席で眺めている一人の女生徒がいた。

彼女の名は伊吹濤。Cクラスに属し、龍園の配下となった少女である。

しかしながら、彼女は龍園の下についたことを良しとしていない。クラスの大半が龍園に忠実に従うようになった中、彼女は尚も抵抗を続けている一人である。

しかし龍園本人は、彼女のことを相手にしていない。

そのことが一層腹立たしくもあり、悔しいと彼女は思っていた。

今回の件でCクラスが敗北したことに、伊吹は内心ざまあみろと思っていた。

偉そうに踏ん返り返っている龍園が敗北を知った時の顔を彼女は鮮明に覚えている。

ここ最近で一番嬉しかったのは間違いなくその瞬間だっただろうと、彼女は胸を張って言える。

そんな彼女から見て、今の龍園は負けを認めたくなくて苛立っているようにしか見えなかった。

彼女が龍園を観察していたちようどその時――

「お邪魔するよ。ああ、やっぱりここにいたね、龍園くん」

だ。食べるかい？」

空いている椅子に腰掛けると、柚椰は袋の中からゾロゾロとアイスを出し始めた。

どれもこれもコンビニで売っているようなラインナップで、適当に買ってきたことが明らかだった。

「他の皆も食べていいよ。全員分買ってきたんだ。あ、でも全部が全部同じものじゃないから早い者勝ちで頼むよ」

場違いな雰囲気を感じ取っているはずなのに、柚椰は至ってマイペースにアイスを広げている。

「チツ、まあいい。手土産を捨てるほど、俺は腐ってねえからな」

龍園は舌打ちすると、テーブルに広げられたアイスの中から棒アイスを一つ摘み上げた。

リーダーである龍園が手を出したことで、隣の席の女生徒もアイスを取る。

つられるように一人、また一人と龍園のテーブルから好きなアイスを適当に取って戻った。

先ほどまでボコボコに殴られていた3人も、口を冷やすためか少し嬉しそうにアイスを持って行った。

全員にアイスが行き渡ると、龍園はアイスを開けて口へと突っ込む。

「で？ 結局テメエは何しに来た。アイス配りに来たわけじゃねえだろ」

「おや、アイスを啜えて凄むのは少し間抜けで可愛いね」

舐め腐っている柚椰の態度に周りで見えていた生徒たちはヒヤヒヤしている。

しかし龍園はあまり気にしていないのか、柚椰の言葉を見無視するようアイスを齧る。

「放っておけ馬鹿が。いい加減本題に入れ」

「まあまあ、俺も暑い中来たんだ。少し寛がせてほしいな。良かったら、俺にも飲み物をくれないかな？」

柚椰はヘラヘラとしながら、龍園の隣に座る女生徒にそう言った。

女生徒は一瞬龍園を見たが、彼が顎で促したことで柚椰の分の飲み物を注ぐ。

そして注ぎ終わったグラスを柚椰の前にスツと差し出した。

「ん、ありがとう」

女生徒に礼を言うと柚椰はグラスを持ち、一気に呷った。

「ふう……さて、じゃあいい加減本題に入ろうか」

飲み終えたグラスをテーブルに置くと、柚椰は優雅に足を組んで龍園を見る。

「今回の事件、事実上Dクラスの完全勝利だったわけだけど、気分はどうだい？」

またしても龍園の神経を逆撫するような発言に周りは肝を冷やす。

龍園がずっと不機嫌であることはCクラスの生徒なら嫌という程度理解している。

そこを躊躇いもなく踏み抜く柚椰が恐ろしくて仕方がないのだ。

「その無能共が目撃者に気づかなかった間抜けだったことが運の尽きだったな。底辺を脱落させて、学校の反応を見るつもりが台無しだ」

龍園の言葉に実行犯である3人はビクリと震える。

「こちらとしては、たまたま生徒会長が情報収集をされていて、そこにたまたま確たる証拠を持った人間が現れてくれたおかげで助かったけどね。たまたま俺が用意していた提訴書類も功を奏したみたいだから良かったよ」

「……ああ、なるほど。そういうことか」

柚椰の言葉で龍園はずっと脳裏にこびりついていた違和感の正体に気づいた。

彼は手で顔を覆いクツクツと笑うと、鋭い眼光で睨んだ。

「テメエが全部裏で糸引いてやがったってことか、黛」

「……!?!?」

龍園が口にした言葉に、Cクラスの面々は度肝を抜かれた。自分たちのクラスを、もとい龍園を出し抜いたのが目の前の男だといふのだ。

彼らから見れば、柚椰はただヘラヘラしているだけの男にしか見えない。

にも関わらず、自分たちのリーダーはその男を今回の黒幕だと言ったようなものなのだから。

「ふふつ、大正解。花丸回答だ」

龍園に言い当てられたことで、柚椰はカラカラと笑いながら拍手を送る。

「テメエ、どこから仕組んでやがった？ いや……最初から、か？」
「そうだね、じゃあ順を追って説明しようか」

柚椰はテーブルに置かれているボトルを手に取り、自分のグラスに二杯目を注ぐ。

「まず初めに、君がそこで顔を腫らして座っている3人に指示をして須藤を罠に嵌めた。その様子を撮った動画を俺が受け取ったのが7月の初日、事件が明るみになる前だね」

「ほう、じゃあテメエは最初から全貌を知ってたってことか」

「正確には初めて君に会う前だよ、龍園くん」

「チツ、あの時から既にテメエは算段を立ててたってわけかよ」
どこまでも食えない男に龍園は怒りを通り越して失笑した。

「実際に事件が明るみになって、Dクラスは証拠集めに奔走した。こちらは須藤の無実の証明ではなく、そちらの嘘を証明するために動いた。これに関しては俺の指示だね。須藤にも最初からその方針でいくことは伝えてあった」

「なるほどな。そこにいる馬鹿共が自慢げに語ってた、テメエが須藤を見捨てたつてもブラフだったってわけか」

龍園にギロリと睨まれたことで、山脇を始めとする以前柚椰たちと揉めた生徒たちは身震いした。

「そちらの主張を変えさせないためにも、俺が調査に関わってないよ

うに見せる必要があったからね。君が警戒していたであろう俺は須藤を見捨て、他のクラスメイトは必死になって証拠を集める。俺以外が動き回ったところで、君にとっては大した脅威じゃなかっただろう？」

「ああ、確かにな。テメエが関わってないなら、いくら猿共が足掻こうが無駄だと踏んでいた」

「審議の日までの時間は、証拠が出てきても目撃者が出てきても、正直言って俺にとってはどうでもよかったんだ。同じクラスに目撃者が現れても、それだけで審議に勝てるわけがないからね」

「ハッ、じゃあテメエは同じクラスの奴らが駆けずり回ってるのを内心鼻で笑ってたってことか。随分とまあ、性格が悪いじゃねえか」

龍園は柚椰の性格の悪さを鼻で笑う。

「まさか。俺はクラスメイトを嗤ったことは一度としてないよ。そもそも俺の今回の目的はクラスの結束を固めることだ。中間テストを期に須藤を真面目な生徒として振舞わせて、彼への認識を変えさせた。そして今回、その彼が事件に巻き込まれたとあれば、クラスは当然協力する姿勢を取るであろうことは予想できていた。クラス一丸となって、仲間を脅かす敵を倒すために奮闘する。実に素晴らしい物語だと思わないかい？」

「ケツ、要は予定調和ってことじゃねえか。それもテメエの手の上で踊ってる滑稽なマリオネットだ」

「言い得て妙だね。でも俺は彼らのことを尊敬しているし、愛している。ああ、勿論俺は龍園クン、君のことも愛しているよ」

ニコリと笑いながら愛を語る柚椰に周りの生徒はざわついた。

今まで龍園に対して愛してるなどと言った者は誰一人とていない。

ましてや同じ男に言われたことなど皆無だ。

愛を伝えられた本人である龍園は不快感を隠そうともせず、顔を顰める。

「愛してる、ね……テメエがゲイってことはねえだろうが、どっちにしても気持ち悪いな」

「手厳しいね。でも、俺は君を心から愛している。そしてここにいる

Cクラスの皆も愛している。ともすれば、AクラスもBクラスも、ひいては人間全員を俺は分け隔てなく愛しているんだ」

「狂ってんのかテメエ？」

「そうかもしれないね。でも、生憎俺はこういう人間なんだ。割り切ってほしい。君のように手段を選ばない悪人であつても俺は大好きなんだ」

「人類愛。テメエ、マジでそんな思考なのか。イカれてんな。だとしてたら解せねえな。テメエは愛してるだのと言いながらその実、人間を玩具と見てるようにしか見えねえが？」

龍園は射殺するような目つきで柚椰を一心に見つめる。

「テメエは人間を愛してるだの言いながら、人間を蹴落とすことも、なんなら殺すことも平気でしそうな奴に見える。どうにも俺にはテメエが歪に見えるがな」

「ふむ、もしかして君は結構鋭い男なのかな？」

ある種罵倒のような言葉を投げかけられても尚、柚椰はへらへらと笑っていた。

「確かに、俺は君から見たら歪に映るのかもしれないね。でも、俺は自身を普通ではないとは思っても歪と思つたことはないよ。俺は人間を愛している。愛しているからこそ、彼らを成長、開花させてみたいんだ」

「ああ？」

「物語の中でよくあるだろう？ 絶体絶命の危機の中で何か特殊な力に目覚める。或いはそれまでの自分とは一線を画する成長を遂げる。それは物語の中だけの事象じゃない。日常にも存在するんだ。例えば火事場の馬鹿力や、逆境からの天啓などがそれに該当する。そういったものは側から見たら素晴らしい喜劇、ファンタジーに映るものだろう？ 平凡な日常を過ごしていた平凡な人間が、ある日降つて湧いた悲劇によつて成長する。それは人間の進化、才能の開花とも言えるんじゃないかな？」

「愛してるが故に苦難に突き落とす。つてことか」

「そう。愛する我が子を成長させるために崖から落とすライオンと一

緒さ。見込んでいるから殴る。突き落とす。悲劇に見舞わせる。そこで開花できれば僥倖。相手も俺も幸せな結末が待っている」

「そこで開花できず、そのまま潰れたら？」

「そのときは仕方ないな。うん、路傍の石ころでしかなかったということだからね」

あつけらかんと言いつ切る柚椰の姿に、周りで聞いていた者は絶句した。

要は好き勝手に場を引つ掻き回し、人を苦難に叩き落としておきながら、万が一そこで潰れてしまっても何の責任も感じないということなのだから。

開花できた者からすれば、柚椰は自分を成長させてくれた救世主に映るだろう。

しかしそれ以外の、開花することすら出来ない者からすれば……

目の前の男は不幸を振りまく悪魔にしか見えないのではないだろうか。

「テメエの主義主張はよく分かった。とんでもなくイカれた野郎だつてこともな」

「おや、もしかして嫌われてしまったかな？」

「ただのイカレ野郎だったら相手にしてねえ。だが、テメエはそれを掻き消すほどに頭がキれる。テメエみたいなのがDクラスにいるってことに、俺は益々興味が出てきた」

龍園は柚椰の狂気と、それを覆い隠すほどの優秀さに関心があるらしい。

飢えた獣のようなギラギラした目で目の前の男を舐め回すように見ている。

「じゃあ興味を持ってくれた機会に、君にプレゼントをしてあげよう」

「プレゼントだあ？」

眉を顰める龍園に、柚椰はニコリと笑う。

「次の期末試験の過去問、Cクラスに売ってあげるよ」

その言葉にCクラスの生徒たちはざわついた。

中間テストの時、龍園は過去問の秘密に気づき、それを入手し配った。

その秘策を再び、今度の期末テストで使おうというのは既に一同の頭にあつた。

目の前の男はそれをクラスに齎そうとしているのだ。

「何が目的だ？ AクラスやBクラスならともかく、ついこの前までやりあつてた俺たちに過去問を売るなんざ正気の沙汰じゃねえな」

「定期テストくらいではクラス間の差は埋まらないということとは君も分かっているだろう？ これは君の信頼を得るための投資さ。今後、君とは色々取引をしていきたいと考えているからね」

「ハッ、CクラスとDクラス。いずれぶつかるのは目に見えてるだろうが。その相手と取引していききたいとは、自分のクラスを裏切ることになるぞ」

「過去問自体は俺が勝手に手に入れたものだよ？ それをどうしようが俺の自由だ。クラスメイトにどうこう言われる筋合いはないさ」

龍園はますます柚椰に対して興味が出たのか、俯きクツクツと笑つた。

「クククツ、俺のことを悪人だと言ったが、お前も相当な悪人だな」

「善か悪かで言えば俺は確かに悪だろうね。それは自覚しているよ。それで、どうする？ 買うなら安くしておくよ」

「いくらだ？」

「ちよつ、本当に買うんですか龍園さん!？」

龍園が取引に応じようとしたのを見て、石崎が立ち上がった。

いきなり割って入られたことに機嫌が悪くなったのか、龍園は石崎を睨む。

「なんだ石崎、テメエ何か文句でもあんのか？」

「い、いえ！ そうじゃなくて、こんな奴にポイントを払うなんて！

第一、過去問だつてまた自分たちで用意すればいいだけじゃないですか！」

「その過去問を今日の前の男が寄越すって言ってんだ。買わねえ道理はねえだろうが」

「でも、俺はコイツを信用できません！ ポイントだけ貰って逃げようとするかもしれないじゃないですか！」

「なんだ。テメエ、俺がポイントだけ取られて逃げられる間抜けだつて言いてえのか？」

石崎の発言が龍園の機嫌を一層悪くさせる。

そして彼が不愉快そうになればなるほど、石崎は顔を青ざめさせていく。

「い、いえ、そんなつもりは！」

「じゃあ黙ってる。コイツに出し抜かれた間抜けはテメエのことだろうが。無能は口出しせずにすつこんでろ」

有無を言わせぬ態度で、龍園は石崎を黙らせた。

話が終わったのを見計らって、柚椰が料金を提示する。

「期末試験の過去問5教科揃えて2万ポイント。オプション付きだよ」

「オプションだあ？ 一体何だそりゃ」

「それは買ってからののお楽しみだ。でも、君にとってプラスになることは確かだよ」

龍園は顎に手を当て、暫し考え込む。

そして結論が出たのか、ニヤリと笑みを浮かべた。

「いいだろう。その取引に応じる」

「どうも」

柚椰は自分の番号を龍園に教える。

それを見た龍園は端末に番号を打ち込み、約束の分のポイントを振り込んだ。

ポイントの入金を確認すると、柚椰はニコリと笑う。

「確かに。では連絡先を交換しようか。過去問を送るよ」

「ああ」

2人は連絡先を交換する。

そして柚椰は龍園のアドレスに、過去問のデータを添付したメール

を送った。

メールを確認し、過去問のデータを保存し終わると、龍園は端末を仕舞った。

「こちらも確認した。取引成立だ」

「今後ともご贔屓に」

「それで、オプシオンってのは何なんだ」

龍園は先ほど柚椰が口にした取引のオマケについて触れた。

彼がそう尋ねると、柚椰はこれまた楽しそうにカラカラと笑い、グラスを呷った。

「君が俺をDクラスに属する警戒対象として見ていることは俺も知っている。けれどDクラスにはもう一人、無視できない存在がいることを教えてあげよう」

「なに?」

初耳な情報に龍園は関心を持つ。

自分の話に耳を傾けているのを確認し、柚椰は続きを語る。

「入学試験結果は5教科全て50点。4月末の小テストの結果50点。超難問を正解し、中学レベルの問題を間違えた異常者」

「ほう……」

「うちの担任がAクラスに上がるために必要だと言ったファクターの一人。点数を調整し、その存在をひた隠しにして周囲に溶け込もうとする事なかれ主義。今はまだ二の足を踏んでいるけど、いずれ動き出すことは確かだよ——」

「——言わばそれは、眠れる獅子バケモノとでも言うのだろうかね」

彼と孤独少女の休日。

期末テストも無事に終わり、もうすぐ夏休みに差し掛かる頃。

休日のある日、柚椰と堀北は敷地内のファミレスで昼食を摂っていた。

「1学期は終業式を残すのみとなったため、以前約束していた通り、こうして一緒に出かけているのだ。」

「1学期ももうすぐ終わりだね」

「そうね、期末テストも退学者が出なくてよかったわ」

「もう須藤たちも心配いらないんじゃないかな。今回だって前回と比べれば大分飲み込みが早かったしね」

「ええ。確かに負担はかなり少なかったわ。真面目に授業を受けるようになったからか、基礎は既に出てきたから対策もしやすかった」

「堀北様だね」

「黛君だって対策問題を作るのに協力してくれたじゃない」

「前は絞り込みも対策も任せきりにしてしまったからね。それくらいはやるさ」

「なんにしても助かったわ。ありがとう」

「どういたしまして」

堀北は微笑みながら礼を述べ、柚椰はそれを受け取った。

二人は食事を終え、食後のコーヒーを飲む。

「今日はこれからどうしようか?」

「本屋に行きたいわ。目当ての新刊が出てるそうなの」

「そうか、じゃあ行こう」

コーヒーを飲み終え、二人は席を立った。

柚椰は約束通り堀北の分の食事代を支払った。

店を出ると、二人はショッピングモールに入っている本屋を目指して歩き出す。

「折角だから俺も何か適当に見繕ってみようか」

本屋に行くというところで、柚椰も何か本を買おうと思ったのかそんなことを呟いた。

その呟きを堀北は拾う。

「黛君さえよければ、私が見繕ってあげるけど？」

「え、いいのかい？」

「構わないわ。私たちは親友なのだから」

胸に手を当て、何故か自慢げに堀北がそう言った。

気がつけば彼女の中の柚椰の立ち位置が友達から親友にランクアップしている。

ここ最近彼女は柚椰の友達であることをアピールするようになった。

少し前の彼女では考えられない変化だろう。

「じゃあお願いしようかな。堀北のチョイスなら安心だ」

「分かったわ。黛君はどんなジャンルが好きなのかしら？ ミステリー、サスペンス、SF、それともホラーとかかしら？」

好きな話題だからか、堀北はいつになく楽しそうだ。

そんな彼女を微笑ましく思いながらも、柚椰は顎に手を当て思索する。

「それが基本的に雑食なんだ。その時その時の心の持ちようで惹かれるものは違ってくるだろう？ 恋愛小説であったりアクションであったり。だからなんでも好きかな」

「意外ね。黛君が恋愛小説を読むなんて」

「そんなに意外かな。そういう堀北はどんなものを読んでいるんだい？」

「そうね……私は推理小説が多いかしら。読みながら推理するのが好きなの」

「いいね。じゃあ俺のも推理小説で選んでほしいな」

「分かったわ」

そういうしているうちに二人は本屋に到着し、揃って中へと入っていった。

堀北は早速店内の一角に設けられている新刊コーナーに足を運び、目当ての本を物色し始める。

数分と経たずに目当ての新刊を見つけたため、引き続いて柚椰の本を見繕うために推理小説の棚へ向かった。

「何が良いかしらね……」

「君が読んだことのある中で良いと思ったものでいいよ」

「だったら私が持つてるのを貸したほうがいい気がするわね」

「じゃあ君さえ良ければ貸してほしいな」

「っ！　そ、そう。じゃあ帰りに私の部屋に寄っていつて」

そう言いながらポイントとそっぽを向く堀北。

今の彼女の心情は喜びと羞恥の二つだった。

本の貸し借りという友達ならではのことが出来ることへの喜び。

そしてそんな喜びを感じている自分自身への羞恥だ。

自分にとって初めての友達である柚椰と友達らしいことが出来ることがたまらなく嬉しいのだ。

そんな喜びを噛み締めていると、彼女たちに声をかける者たちがいた。

「あれ？　黛君と堀北さんじゃん！」

「なにになに？　もしかしてデート？」

「ん、ああ、佐藤と篠原。二人もお出かけかい？」

声をかけてきた二人、佐藤と篠原はニヤニヤとした笑みを浮かべながら柚椰と堀北を交互に見ていた。

その視線は二人を揶揄ってやろうという気が見え見えである。

「私堀北さんが誰かと出かけてるのなんて初めて見たかも」

「ねっ！　それもクラスでトップ2人気の黛君となんて。やっぱり堀北さんも黛君狙いなのだ!？」

「櫛田さんと堀北さんどっちが本命なの黛君！」

二人は完全に面白がっているようで、柚椰と堀北、そしてこの場にはいない櫛田を話題に出してやいのやいの言っている。

Dクラスの女子の中で最も人気のある男子が平田、次点が柚椰となっている。

そしてその柚椰と現在最も近い立ち位置にいる女子が、これまたDクラス男子人気一位の櫛田だ。

入学当日から今まで一貫してお互い仲の良い雰囲気醸し出している二人。

櫛田本人は否定しているが、女子の中では既に二人は付き合っているのではないか。

或いはもうすぐ付き合い始めるのではないかと噂されている。

そしてその櫛田と同じくらい今噂になっているのが堀北だ。

元々は綾小路と噂になっていた彼女だが、最近は専ら柚椰と噂になっている。

理由はいくつかあるが、一番は柚椰と話している時の彼女の表情だろう。

元々彼女が話す相手はごく限られた人間しかない。

同性は櫛田くらいしかおらず、異性も柚椰と綾小路、そして須藤くらいだ。

この中で彼女が能動的に話しかける者、そして話していて楽しそうにしているのは柚椰だけなのだ。

加えて最近、柚椰が女子と話しているのを堀北が何とも言えない顔で遠巻きに見ているといった光景がクラスでたまに目撃されている。

本を読みながらではあるが、チラチラと柚椰の方を見ているのの一部の女子たちは知っている。

クラスの女子の中には櫛田と堀北のどちらが勝つのか半ば賭けのようなことをしている者さえいる状態だ。

「櫛田も堀北も大切な友達だよ」

「むっ……いいえ、私は櫛田さんとは違うわ。私は黛君の親友よ」

柚椰の言葉に割って入るように堀北がそう言及した。

心なしか彼女の頬は不満そうに少し膨らんでいる。

櫛田と同列ということが不満なのか、友達という枠が不満なのか。ともかく柚椰の認識に物申したいというのは確かかのようなだ。

「え、親友？」

「そうよ。私と黛君は友達よりも深い関係なの。櫛田さんよりもね。」

彼女が友達なら私はその上、つまりは親友よ」

頭に疑問符を浮かべる佐藤にドヤ顔で解説する堀北。

恋人マウントならぬ親友マウントという新しい部類の自慢に佐藤はポカンとしている。

篠原はそのやりとりを見て柚椰に小声で話しかける。

「ねえ黛君、堀北さんつてもしかして……」

「多分俺が初めての友達だからかな。特別に思ってくれるのは嬉しいね」

「(いや、これは違うやつだと思うけど……)」

柚椰は至って普通に受け止めているが、篠原は気づいていた。

今の堀北の感情は好意を抱く男性に対するそれに似ている。

籾田と張り合っているのがいい証拠だ。

堀北自身はその感情が恋愛感情であると気づいていないのだろう。

恐らく彼女が今までそんな経験をしてこなかったことと、友達がいなかったことが理由だろうか。

友達付き合いの経験もないからか、友達に求めることと、

好きな相手に求めることとがちや混ぜになっているのではないだろうか。

これはまた面白いオモチャを見つけたと篠原は内心ニンマリと笑った。

「ねえ黛君、今日は堀北さんとデートなの？」

篠原は堀北と佐藤にも聞こえるような声量で柚椰に尋ねる。

「んー、そうなるのかな？ 前に遊ぼうって言ったのに中々誘わなかったからか堀北が拗ねてしまっただけ」

「黛君、私は拗ねてないわ」

むくれた堀北が口を挟む。

釣れたと言わんばかりに内心ニヤツと笑った篠原は、再び柚椰に尋ねる。

「じゃあ籾田さんとは出かけたことあるの？ あ、勿論二人つきりで」

「あるよ。えっと、確か先月末に買い物に付き合っただけでね」

「――！」

柚椰の返答に堀北がピクリと反応した。

「へえ、クラスのアイドルと二人つきりでデートなんて黛君も隅に置けないね〜」

「柚田には色々世話になってるからね。日頃のお礼も兼ねて付き合っただけさ」

「でも柚田さんって男子と一対一じゃ出かけないって聞いたよ？ その柚田さんが誘うってことはもしかするんじゃないの〜？」

「気兼ねしない相手ってだけじゃないかな？ それにほら、よくお互いに色々相談し合っているからね」

「ふーん、なるほど。あ、じゃあ私たちはそろそろ行くね！」

篠原はそこで会話を打ち切ると、佐藤の腕を組んでレジの方へ向かっていった。

彼女に腕を組まれている佐藤はズルズルと引きずられながら柚椰たちに手を振っていた。

二人が去っていった後も、堀北は何やら考え込むような仕草で沈黙している。

しかしやがて何やら結論が出たのか、彼女は顔を上げて柚椰をまっすぐ見つめた。

「黛君」

「なんだい？」

「黛君は柚田さんと既に二人で遊んでいたのよね？」

「うん、そうだけど」

「そう……なら、計画変更よ。今日の夕食、私にご馳走してあげるわ」

「いや、今日は俺が奢る約束だから食事代くらいは——」

「そうじゃないわ。私を作るって言ってるの」

「え、いいのかい？」

「構わないわ。日頃のお礼よ。それにどの道、本を貸すために私の部屋に寄るのだから一石二鳥でしょう？」

そこまで言われれば、柚椰が申し出を拒否する理由はなかった。

「じゃあお言葉に甘えてご馳走になろうかな」

「ええ、そうしてちょうだい。じゃあ帰りにスーパーに寄るけど構わ

ないかしら?」

「ああ、勿論」

柚椰から了承を得ると、堀北はスタスタとレジに行き会計を済ませると、二人は揃って店を出た。

「それと、今この時から私は黛君のことを柚椰君と呼ぶけどいいかしら?」

「どうしたんだい? 唐突に」

スーパーへ向かう道中、藪から棒に堀北がそんなことを言い出した。

「別に構わないでしょう? 親友なら名前呼びは普通だと以前本で読んだことがあるわ」

「まあそれはそうかもしれないね」

「確認するけれど、櫛田さんのことは苗字で呼んでいるのよね?」
「うん」

「なら、親友である私のことは名前で呼ぶべきだと思うの。柚椰君にはその権利があるわ」

「どうやら櫛田とは何かなんでも差をつけたらしい。」

一緒に出かけたところまで同じならば手料理を振る舞うことで差をつける。

同じように苗字で呼ばれるならば、名前で呼び合うことで差をつける。

とにかく柚椰の中で櫛田と自分との間に少しでも差をつけたいといういじらしさが見受けられる。

「んー、じゃあそうしようか。鈴音」

「——っ! ええ、柚椰君」

名前を呼ばれたことに堀北は頬を綻ばせた。

初めての親友に名前と呼ばれたことへの喜びが彼女を包み込んでいる。

胸にじんわりと染み入るような温かさと心地よさ。

こんな気持ちになるのなら、友達を作るというのも悪くないと彼女は思った。

「ところで柚椰君、夕食のリクエストはあるかしら？」

「夏らしいものがないかな。夏野菜を使ったメニュー」

「具体的なリクエストで助かるわ」

スーパーに入ると、堀北はカゴを片手に思案する。

頭の中では夏野菜の種類とそれを用いた料理の選択肢がポツポツと浮かんでいた。

「ナス、トマト、ピーマン……柚椰君は辛いのが平気？」

「それなりに」

「じゃあカレーにしましょう」

作るものを決めた堀北は頭の中で必要なものを思い浮かべながら商品を次々カゴへ入れていく。

「どうやら彼女は本格派らしく、市販のルーを使わずに作るようだ。」

「柚椰君は自炊するの？」

「いや、簡単なものぐらいしかしないんだ。夏なら素麺、冬なら鍋くらいのものだよ。だから基本は外食がメインなんだ」

「栄養が偏るから自炊したほうがいいわよ？ 日持ちするものなら節約にもなるし」

「毎日料理するのは大変じゃないかい？ つい面倒臭くなってしまつてね」

「……よかつたら今度からたまに作つてあげるけど？」

柚椰の食事情を把握した堀北が思わずそんな提案をした。

「いいのかい？」

「いいわよ？ 一人分多く作るくらい大した差はないから。柚椰君さえ良ければ作つてあげるわ」

「じゃあお願いするよ。材料費は鈴音の分も俺が出すから」

「半分出してくれればいいわよ。私も食べるのだから」

今後の約束を取り付けたからか、堀北は上機嫌でレジに並んだ。会計を済ませ、商品を袋に詰めると二人はスーパーを出て寮へ帰った。

「ふう、ぐ馳走様でした」

「お粗末様でした」

数時間後、堀北の部屋で二人は夕食を食べ終えた。

堀北が作ったカレーは絶品だったのか、柚椰はご満悦そうだ。

柚椰が満足そうにしているのを見て堀北もまた嬉しそうに微笑む。

「美味しかったよ。凄く」

「そう、口に合って良かったわ」

「こんな美味しい料理が食べられるなんて、会長さんは幸せ者だね」

柚椰がそう言うと、堀北は目を伏せて俯いた。

「……兄さんは私の料理を食べたことはないわ」

「そうなのかい？」

「兄さんはなんでも出来るから……私なんか料理してもらおう必要はないのよ」

ポツポツと語る堀北の姿は、どこか寂しそうだった。

兄のこととなると、彼女は一転して幼さすら感じさせるほどに萎縮する。

それはこれまでも何度かあったため、柚椰にとって今更驚くことでもなかった。

しかし、この機会に柚椰は今一歩踏み込んでみようと考えた。

「前から思っていたことだけど、会長さんと鈴音は兄妹なんだよね？」

そのわりには随分とギスギスしているというか、溝があるみたいだけど何か事情が？」

柚椰がそう問いかけると、堀北は暫し沈黙した後、ボソボソと語り始めた。

「……別に、深い事情があったわけじゃないわ。ただ、兄さんは優秀で、私は不出来な妹だった……それだけのことなの」

「でも鈴音は前に自分は優秀だって言っていなかったかい？ だから

Dクラスに配属されるのはおかしいと」

「あくまでそれは他の人に比べたらという話よ。兄さんと比べたら私なんて……だから少しでも兄さんに認められたくて、追いつきたくてこの学校に来たの」

「だけどDクラス配属でいきなりつまずいた、と」

堀北はコクリと頷く。

「前に兄さんと話しているのを柚椰君と綾小路君に見られたことがあつたでしょう?」

「ああ、あの時のか」

5月初旬のある日の夜の出来事を柚椰は思い出した。

実の妹をコンクリートの地面に叩きつけようとする兄というバイオレンス極まりない光景を彼は今でも覚えている。

「兄さんに私がAクラスに上がるのは無理だと言われたとき、頭が真っ白になった。私の目標を、辿り着かなければならない場所を否定された。当然悔しかったわ。だから絶対に辿り着くと言いつ返した。けど、兄さんが言うことが今まで間違っていたことはなかったの」「だから心のどこかで納得してしまったわけか。今のままではAクラスにはなれないという言葉に」

「ええ。だからあの後、部屋に戻って考えたわ。兄さんが言っていたことの意味。そして、柚椰君が兄さんに言ってくれた言葉の意味を」「俺の?」

「覚えてないかしら? 何かを目指すことは平等な権利だって。私がAクラスになるって夢に敬意を持ったって言ってくれたわよね?」

「ああ、そういえば言ったね」

あの夜、生徒会長の去り際に自分が投げかけた言葉を柚椰は思い出した。

堀北の夢を否定した兄への怒りもあつたあの言葉が、どうやら本人には響いたらしい。

「嬉しかったわ。兄さんに無理だと言われたことへの悔しさと同じくらい、私は貴方にそう思ってもらえていたことが嬉しかったの。同時にその時、須藤君に自分が酷いことを言ったことも自覚した。たとえ

自分が無理だと思っても、理解できなくても、人の目指す道を否定する権利はないのよね」

「ああ。夢を描くのも、それを目指すのも、そして叶えるのも結局はその人なんだ。諦めなければ夢は必ず叶う、なんてことを大っぴらに言うつもりはないけど、他人にどうこう言われて諦めるのは愚かしい。そして他人のそれをどうこう言うこともまたおかしいことだと俺は思う。たとえ先生だろうと家族だろうと、人が決めた夢を否定していい道理はないんだ」

「そうよね……でも兄さんの言う通り、あの時の私のままだったらAクラスに上がるのは無理だったと思うわ。誰のことも近づけず、自分だけの実力でやるって意固地になっていたあの時の私じゃあ、ね……」

そう語る堀北は、もう以前の彼女ではない。

誰とも関わろうとせず、誰とも触れ合おうとせず、ただ自分の力のみを誇示していた頃の堀北。

確かに彼女は優秀だろう。

しかし、それは決して完璧ではない。

集団生活の場において、ことこの学校において個人で出来ることには限界がある。

どこまで行っても、最後は集団の力が必要になるのだ。

彼女はそれを理解し、今までの自分を悔い改め、それでも尚上へ進もうとした。

もう彼女は自分一人の力で全てを為そうとはしていなかった。

「改めてお願いするわ。柚椰君、Aクラスに上がるために私に協力してほしい」

彼女は柚椰をまっすぐに見つめ、想いを告げた。

「それは会長さんに認めさせるためかい？ それとも、追いつくためかな？」

「いいえ、自分自身のためよ」

間髪を容れずに彼女はそう答える。

その答えを聞いた柚椰はニコリと笑った。

「いい目になったね、鈴音」

自分の予想よりも遥かに早いペースで成長している目の前の少女に柚椰は心踊らせていた。

そしてその少女が高みを目指さんとするために自分の力を欲している。

それも誰かのためではなく、自分自身のためと彼女は豪語した。

最早問答は不要。これ以上ないほどの満点回答だった。

「いいよ。俺も最大限協力させてもらうよ。必ず君をAクラスにしてあげよう」

「――・ありがとう」

礼を述べた彼女の顔は今ままで一番の笑顔だった。

その日の夜、堀北はベッドに横になりながら今日の出来事を振り返っていた。

初めての親友である柚椰と過ごした休日。

一緒に昼食を摂り、買い物をし、夜には手料理を振る舞った。

そしてお互いのことを名前で呼び合うことを決めた。

何から何まで初めての体験で新鮮であると同時にとても楽しかった。

やはり彼と居ると心地良い。

友達というのは、こんなにも胸が温かくなるものなのかと彼女は幸せな高揚感に包まれた。

昨日の放課後に茶柱先生と話したことなど、彼女はもうどうでもよくなっていた。

先生に伝えられたことを受け、今日彼女は柚椰のことを注意深く観察しようと考えていた。

しかし、そんなことは結果として無意味なことだったと理解した。

柚椰は決して、怪しい人なんかじゃない。

自分にとってかけがえのない親友なのだ実感したのだ。

前日の放課後、校舎の屋上で茶柱先生と堀北は向かい合っていた。

「堀北、お前は二人をどう思う？」

「二人？」

「綾小路と黛だよ」

その問いに堀北は眉を顰めた。

「言っている意味が分かりかねます」

「以前お前に、二人がAクラスに上がるヒントになると言ったな？」

「はい。そういう意味では、確かに黛君がAクラスに上がるために必要だということは理解できました」

「ほう？ 何故だ」

「今回の暴力事件で先生もお分かりになったはずです。黛君は優秀です。紛れもなくDクラスの中でトップクラスに知力に長けている。運動神経も折り紙つき、学力も言わずもがな。正直な所、文句の付けようがありません」

「堀北にそこまで言わせるとはな。お前も認めざるを得ないということか。では、綾小路はどう見る？」

再び問われたことで、堀北は暫し考え込んだ。

その末に出した結論は、彼女にとっても明確なものではなかった。

「……正直まだよく分かりません。ただ、彼には不可解なところが見受けられます」

「ほう」

「先生の睨むように、綾小路君は普通の生徒ではないのでしょうか。そもそも、以前見せていただいた彼のテストの点数の時点でおかしいとは思っていました。本人は否定していますが、彼が実力を隠しているのはなんとなく分かります」

「そうか、お前もあいつが何かを隠していることには気づいたか」

「先生はご存知なんですか？ 彼が何者なのか」

「それは私からは教えられんな。ただ一つ教えてやれるとすれば、Dクラスに配属される生徒は皆、大なり小なり何か欠点を抱えていると

いうことだ。それはお前も例外じゃない。理解しているな？」

「……理解はしています」

「ならば、綾小路の欠点とはなんだと思う？」

そう問われ、彼女は「一つ思い当たることがあった。」

「彼は以前、自分のことを事なかれ主義と言っていました」

「ほう、それはお前から見てもそう感じたか？」

「……正直な所、矛盾していると思ったことがないわけではありませ
ん」

「だろうな。本当に事なかれ主義ならば、今回の事件の捜査に協力し
たりはせんだろう。どうやら最終的に佐倉を説得したのも綾小路ら
しいしな。そもそも本当に事なかれ主義ならば、私に目をつけられる
こともなかっただろうさ」

「それは……そうかもしれませんね」

「これは私の見解だが、Dクラスにおいて、最も不良品である生徒は綾
小路だ」

「彼が、ですか……」

「扱いが難しい。使い方を誤れば全てを破算にする可能性を秘めて
いる。それも言ってしまうえば不良品だろう？」

「……」

茶柱先生曰く、綾小路という人間は大きな欠点、謎を秘めているら
しい。

ではもう一人はどうなのだろうか。

堀北の疑問はそこに集中した。

「では黛君はどうなのですか？」

「む？」

「黛君です。彼はスペックは間違いなくAクラス相当のはずです。性
格だって、綾小路君と比べれば社交性もあり、交友関係も広い。にも
関わらず、彼はDクラスに配属されている。いったい何故ですか？」
そう、それは彼女がずっと疑問に思っていたことだった。

彼女の親友、柚椰は彼女が知る限り欠点などないように見受けられ
る。

そんな彼がどうして不良品として扱われているのか。

今の彼女にとつての最大の疑問はそこだった。

「あー、そうか。そうだな、やはり気になるか」

堀北に尋ねられた茶柱先生は頭を掻き、目を逸らした。

普段の彼女らしくない反応に堀北は戸惑った。

「どうかしましたか?」

「ああいや、黛だな。そうだな……こんなことを私が言うのもおかしな話なんだが……」

茶柱先生は困ったような顔でこう答えた。

「正直に言つて、私にも分からないんだ」

「は?」

予想外の返答に堀北が思わずそんな声を出したのは無理もなかった。

「黛のクラス配属を判断したのは理事長なんだよ。私が知っているのはあいつの出身校と試験の結果くらいだ」

「そんなことがありますのですか?」

「まさか。異例中の異例さ。普通は生徒の一人一人の情報を学校側が調査し、理事長と役員との間でクラス配属を決める。その後生徒の情報が配属先の担任に伝えられることになっている。しかし、黛だけは理事長の独断でDクラス行きが決定した。加えて役員も、そして担任である私にも詳しい配属理由が伝えられていない」

「では、彼の欠点を知っているのは理事長だけということですか?」

「そうなるな。だが、あいつの出身校が出身校だから……おおよその予想はつく」

「どういうことですか?」

堀北がそう尋ねると、茶柱先生は言いづらそうに口を開いた。

「あいつの出身校は、聖ヶ丘第三中学だ」

「——っ!?!」

その名は聞き覚えがあった。

というより、数ヶ月前に世間を騒がせた名前なのだから一度は聞いたことがある名前だった。

「その反応なら理解できたようだな。お前たち一年生が入る一ヶ月前、つまり三月付で廃校になった中学校だ」

そう、その学校はもう既になくなっていてる。

前年度を最後に、廃校処分となったと以前ニュースでやっていた。廃校になった理由が理由のため仕方ないとその時は特に気にも留めていなかった。

しかし、その学校を出た生徒が柚椰であるならば話は別だった。

「聖ヶ丘第三中学校の最後にして唯一の卒業生。それが黛柚椰だ」

彼らは孤島に降り立つ。

常夏の海。広がる青空。澄み切った空気。

潮風は優しく身体を包み、真夏の熱を感じさせないほど心地よい。現在地は太平洋のど真ん中。

四方八方を取り囲むのは海。海。海。

「うおおおお!! 最高だああああ!!」

豪華客船のデッキから高らかに両手を挙げ、池の叫び声が響き渡る。

普段であればどこからか煩いと文句がとんできそうなものだが、今日に限ってはそんな意見が出ることもない。

クラスメイトは各々至福のひと時を堪能している。

特等席とも言えるデッキのベストポジションから眺める海はまさしく絶景と言える。

「凄い眺め! マジ超感動なんだけど!」

船内から出て来た軽井沢率いる女子グループが、満面の笑みを浮かべ大海を指差す。

女子たちは皆海を眺め、感動の声を上げていた。

「期末テストも無事に乗り切れてよかったよな」

「ほんとな、須藤だつて今回は余裕だつたみたいだし?」

池と山内は、この前終わった期末テストについて振り返っていた。

山内に話を振られた須藤は、余裕そうに胸を張っていた。

「へへっ、今の俺には期末テストなんざ取るに足らねえ障害だつたわけだな」

「よく言うぜ。でもまあ、こんなに晴れ晴れした気分で大カンスにこれるとは思わなかったよな」

池のその言葉に須藤はうんうん、と頷く。

「高校生でまさかこんな豪華旅行が出来るなんてな。しかも2週間だぜ2週間。実家の父ちゃん母ちゃんが聞いたらひっくり返るかもな」

須藤の言うように、一般人からすればあまりに規格外の旅行だろう。

国が支援しているこの学校では、学費や雑費を払う必要が全くない。

当然この旅行も破格の対応だ。

彼らが乗っている客船は外観は言うに及ばず、施設も非常に充実。

一流の有名レストランから演劇が楽しめるシアター。

さらには高級スパまで完備されている。

個人でこの旅行をしようと思ったなら、シーズンオフでも十万以上はかかるだろう。

そんな贅の限りを尽くした旅行が今日から始まった。

予定では最初の1週間は無人島に建てられているペンションで過ごす。

そしてその後の1週間は客船内での宿泊という行程だ。

午後5時に1年生が一斉にバスへ乗り込み東京湾へ向かうと、生徒を乗せて港からこの客船は出発。

朝食を船内のラウンジで食べた後、生徒たちは各々自由行動となった船内で気ままな時間を過ごしていた。

この船内のどの施設も生徒は無料で利用することができる。

常日頃ポイント不足で悩んでいるDクラスの者たちにとつては渡りに船だろう。

「んー、絶景だね」

「ねっ！ほんと、凄い景色……」

デッキの柵に身体を預け、柚椰と櫛田は大海を眺めていた。

そよぐ潮風に髪を揺らし、微笑みながら並ぶ美男美女。

一つの芸術のように、絵画の一枚のように完成されたその姿は周りの視線を惹く。

男子からは嫉妬の籠った負の視線を、女子からは羨望といった正の視線を。

「豪華客船でクルーズとは、流石はお国が運営する学校だ」

「なんか船の中に色々施設もあるみたいだよ？ 遊ぶところもいっぱい

い！」

「それは退屈しなくて済みそうだね。尤も、遊ぶ余裕があればの話だけれど」

「……そうだね」

柚椰の言葉に榎田は表情を引き締める。

彼らがこんなやり取りをする理由は後々語るとしよう。

「あ、綾小路君だ」

ふと榎田が自分たちから少し離れたところで同じように景色を見ている綾小路を見つけた。

彼女が声をかけると、綾小路もこちらに気づいたようで近づいてくる。

「綾小路君一人？ 堀北さんと一緒じゃないの？」

「別に俺はあいつのお守りじゃないからな。というか、あいつの最近のお守りは黛だろ」

榎田に問われた綾小路はそう言いながら柚椰を見た。

「そういえば朝食の時に見たきりだね」

「旅行を満喫するような人間じゃなさそうだし、部屋にいるんじゃないか？」

「確かに。彼女のことだから、部屋で本でも読んで寛いでいるのかもしれないね」

「そういうえば、お昼は島のプライベートビーチで自由行動だよね！ 楽しみだなあ」

榎田は堀北のことからこの後の行程について話題をシフトする。

この学校は、南に小さな島を一つ所有しているようで、この船は今そこへ向かっている。

『生徒の皆様にお知らせします。お時間がありましたら、是非デッキにお集まり下さい。間もなく島が見えて参ります。暫くの間、非常に意義ある景色をご覧いただけるでしょう』

突如そんな『奇妙な』アナウンスが船で流される。

榎田を始めとする周りの生徒たちはさして気にした様子もなく楽しみにしているようだ。

続々と生徒が集まりだすと、数分後その島は姿を現した。

「おおおおお！ あれが無人島か〜！」

池が歓喜の声をあげる。地平線の彼方、視界に小さく島のようなものが見えた。

他の生徒たちもそれに気づき、一斉にデッキへ集まり始める。

群衆が押し寄せると、それまでベストポジションにいた綾小路や柚椰たちを押しよける横暴な男子生徒たちが現れる。

「おい邪魔だ、どけよ不良品ども」

威圧しながら男子の一人が見せしめの如く綾小路の肩を突き飛ばした。

それによってバランスを崩した綾小路だったが、横にいた柚椰がすかさず支えることで転倒を避ける。

「おっと、大丈夫かい？」

「ああ、悪い」

よろける綾小路を見て、突き飛ばした男子とその取り巻きは蔑むように笑った。

「デメエ何しやがる！」

綾小路が突き飛ばされるのを見ていたのか、須藤がすぐに噛み付いてきた。

柚椰は心配した様子で綾小路と柚椰の傍に寄ってくる。

「お前らもこの学校の仕組みは理解してるだろ。ここは実力主義の学校だ。Dクラスに人権なんてない。不良品は不良品らしく大人しくしてろ。こっちはAクラス様なんだよ」

その言葉に須藤だけでなく、池や他のDクラスの男子たちも怒りを露わにし始める。

一触即発の空気の中、その場を収めようとしたのは意外にも柚椰だった。

「それは失礼したね。ここがAクラスの占有エリアだというのは知らなかったよ。ほら皆、移動しようか。デッキの端でも景色は見えるから心配いらないさ」

暗に相手の言い分に従うようなことを言う柚椰に、当然ながらDク

ラスの男子たちはいい顔をしない。

須藤は柚椰が言うならと渋々従うような顔をしているが、池や山内は未だ不満ありありと言った様子だ。

「おう、お前は自分の身の程を分かっているみてえだな」

「そうそう、不良品は俺たちAクラスの言うことに素直に従ってればいいんだよ」

調子に乗り始めたAクラスの男子たちはニヤニヤしながらさらに罵倒を重ねる。

柚椰は彼らに一瞥もくれず、こつそり腕時計を触りながら池たちだけに視線を向けた。

「ほら、俺たちは先にここにいて景色は十分に堪能していただろう？

彼らは後からノコノコやってきておきながら、自分たちはAクラスだから場所を寄越せと言ってきたんだ。実に子どものような論調だけど、ここは俺たちが大人になって彼らに譲ってあげなきゃダメじゃないか。そうだろう？」

言葉こそ池たちに向けられているが、その内容はAクラスの男子たちに向けた皮肉が思いつきり込められていた。

その言葉に一瞬ポカンとしていたAクラスだったが、やがて柚椰がこちらを罵倒したのだと気づき顔を真っ赤にし始める。

「ダメエ調子乗ってんじゃねえぞー」

綾小路を突き飛ばした男子が柚椰を威圧する。

同じように取り巻きもまた怒りに駆られ、柚椰を取り囲む。

須藤が参戦しようと動き出そうとするが、それを柚椰は手で制止する。

「おや、何か気に障るようなこと言ったかな？ 間違ったことを言っただつもりはないんだけど」

「ああ!？」

「俺は仲間たちに譲り合いの精神を説いていたのに、どうして邪魔をするのかな。自分たちが頭の悪いことを言ったという心当たりでもあるのかい？」

火に油を注ぐ柚椰に我慢できなくなったのか、最初に罵倒を浴びせ

た生徒がついに彼の胸倉を掴んだ。

「デメエ、いつペン痛え目に遭わねえと分からねえみたいだな」

凄んでくる相手に対して、柚椰はヘラヘラとした態度を崩さない。「暴力？ これは怖い怖い。別に殴りたければ殴るといい。ただ、こんな場所で暴力を振るえば……どうなるかは分かっているね？」

そう言いながら、柚椰は自分たちから少し離れたところにいる集団を指で示した。

そこにはこちらを見ている生徒がおり、中には端末のカメラで撮影している者までいた。

「うっ……」

動画を撮られていると分かり、柚椰に凄んでいた相手の勢いが一気に無くなる。

同時に取り巻きもまた、周りの視線を気にし始めたのか徐々に敵意を引っ込めはじめた。

「こちらとしても、つい最近Cクラスとゴタゴタがあったばかりなんだ。学校にまた審議をさせるのも申し訳ないと思っている。尤も、今回のコレに関しては最初から勝ちの見えた戦いだ。負けるつもりは毛頭ないけど、どうかな？」

「ぐっ……」

「俺たちは譲ってあげると言っているんだ。だからここは素直に受け取っておきなよ。こちらは君たちと喧嘩をしようだなんて考えているわけじゃないんだ。そうだろう皆？」

「え、あ、おう！ そうだよな池、俺らは喧嘩しようなんて考えてねえよな！」

柚椰に話を振られた須藤は池の肩に腕を回して同調するように促す。

暗にパスを渡されたと察したのか、池もニヤニヤしながら同じように山内と肩を組んだ。

「だなく俺ら優しいし！ 譲り合いって大事だからな！」

「俺らは先に絶景を堪能したもんな！ ここはAクラスに譲ってあげるのが男だよな〜！」

その言葉に他のDクラスの面々も同調し始める。

「さて、じゃあ移動しようか。ほら、場所は空いたんだ。心置きなく島を見物していくといい」

自分の胸倉を掴んでいる手を解き、最後に相手の肩をポンと叩き、柚椰はその場から離れた。

後続くようにDクラスの面々もその場をどいた。

Aクラスの生徒たちは未だ苛立ちが残っているのか苦い顔をしていたが、それ以上何か言うことはなかった。

デッキの端に移動したDクラス一同。

そこに今しがたやってきたのか、平田が声をかける。

「やあ皆、ここにいたんだね。……何かあったの？」

平田は何かを感じ取ったのかそう尋ねた。

というのも、須藤や池、山内が妙にニヤニヤしており、他の生徒も何故か面白おかしそうにしていたからだ。

「いや、特になにもないぞ」

綾小路が代表して平田になんでもないと告げた。

「そうそう、ちよつとイイコトしただけだって」

須藤が晴れやかな笑顔でそう答える。

その顔に平田はキョトンとしていたが、それ以上何か聞くことはしなかった。

「なあ平田。おまえ軽井沢とはどこまで進んでんだよ」

軽井沢の傍に寄って行こうとしない平田に池がニヤニヤしながら話しかける。

「折角の旅行なんだから、もっとイチャイチャしてもいいんだぜ？」

他の女子の目が平田に向くのが嫌なのか、そんな風に茶化す。

「僕らには僕らのペースがあるから。ごめん、三宅君が困ってるみたいだから行くよ」

端末が鳴ったのか、平田は操作しながら船内に戻っていく。
流星は人気者ということか。

「……」

船内に戻っていく平田の背を見ながら、柚椰は何かを考えていた。

一方、池と山内は平田の態度に不満そうにぶうたれていた。

「何だあいつ。旅行先でもクラスメイトの心配ばっかりかよ」

「でも軽井沢も軽井沢で、最近あんまベタベタしないよな……もしかして二人が別れたとか？ だとしたら最悪だぞ」

「ああ、櫛田ちゃんを巡るライバルが増える！」

およそ杞憂としか言えない心配だが、彼らの言う通り平田と軽井沢は最近あからさまな接触がない。

別段喧嘩したとか険悪になつたという噂も流れていない。仲良く話している姿は見られているからだ。

「決めたぜ春樹。俺、この旅行で櫛田ちゃんに告白する！」

「ま、マジかよ。フラれたらすげえ気まずいじゃん。いいのかよ」

「櫛田ちゃんつてとにかく可愛いだろ？ だから男の大半は付き合いたいって思う。でも、レベル高すぎて告白には辿り着いてないはず。だからこそ、逆に告白慣れしてないんじゃないかってさ。俺の愛の告白に櫛田ちゃんの心が揺れる可能性はあるはずだ。つか、そこしか希望はない！」

「そうか……お前、男だな！」

「おうよ！ 男池寛治、この旅行でキメるぜ！」

いつもならここで山内も対抗するのだが、彼はそんな様子は全くない。

彼はデツキをキョロキョロと見回して何かを探しているようだ。

「どうしたんだよ」

「あ、いや、別に」

上の空といった感じで聞き流し、山内がそれ以上櫛田について触れることはなかった。

「ねえねえ櫛田ちゃん。ちよつといいかな」

「ん？ なにかな？」

近くで海を眺めている櫛田に早速接近する池。

「そのき、なんつーか、俺たち出会って4ヶ月くらい経つじやん？ だからそろそろ、下の名前で呼んでもいいんじゃないかって。ほら、苗字だと他人行儀だしさ」

「そういえば、山内君たちとはいつの間にか名前で呼び合ってるね」「だ、ダメかな？ き、桔梗ちゃんって呼んだら」

伺いを立てる池に対し、櫛田は屈託のない笑みを浮かべた。

「オツケーだよ。私は寛治君って呼べばいいかな？」

「うおおおおお!! 桔梗ちゃああああん!!」

承諾を貰ったことで、池は歓喜のあまり天に吠えた。

その姿がおかしかったのか、櫛田はクスクスと笑う。

「(あー……やっぱり名前で呼ばれて嬉しいのは黛君だけだね)」
内心でそんなことを思われていると池は知る由もなかった。

そうこうしていると、ついに島がはつきり見えるほどに船が近づいたのか周囲がワツと騒がしくなる。

そのまま船は島につけられるのかと思われたが、何故か栈橋をスルーし、ぐるりと島の周りを回り始めた。

国から借り受けて管理するこの島の面積は約0.5 km²。標高230 m。

数値で見れば小さな島だが、客船に乗り合わせた生徒たちから見れば十分すぎるほどの大きさだった。

どうやら客船は一周回って島の全体を見せてくれるらしい。

島を周回する船は速度を変えず、高々と水しぶきを上げながら自然な高速航行をする。

「凄く神秘的な光景だね！ 感動するなあ。ねえ、黛君もそう思わない？」

柵に身体を預け、島を眺めている柚椰に櫛田がそう尋ねた。

「そうだね。海も綺麗で島も緑が多い。ロケーションとしては最高だ」

「うんうん、こんなところで過ごせるなんて夢みたいだよ」

目を輝かせている櫛田に対し、柚椰もまた微笑んだ。

『これより、当学校が所有する孤島に上陸いたします。生徒たちは30分後、全員ジャージに着替え、所定のカバンと荷物をしっかりと確認した後、端末を忘れず持ちデツキに集合してください。それ以外の私物は全て部屋に置いてくるようお願いします。また暫くお手洗いにいけない可能性がありますので、きちんと済ませて置いてください』

船内に再びアナウンスが流れる。

どうやらもうすぐ島に上陸するようだ。

「私物は持ち込み不可。持っていけるのは指定された物だけ、ね……」
「やっぱり、黛君の予想通り何かありそうだね」

事前に柚椰から話を聞いていた櫛田は、先ほどの空気から一転して顔を引き締めた。

「ここで頭を捻っていても仕方ない。とりあえず着替えに戻ろうか」
「そうだね」

生徒たちは着替えに戻るためにゾロゾロと部屋に戻るべく移動を始めた。

二人もそれに続くように船内に戻る。

それから生徒たちはジャージに身を包み、デツキへ戻り船が島に着くのを待った。

島が眼前に迫るにつれ、1年生のテンションはどんどん上がっていく。

「ではこれより、Aクラスの生徒から順番に降りてもらう。それから島への端末の持ち込みは禁止だ。担任の先生に各自提出してから下船するように」

拡声器を持った先生の声で、生徒たちは順番に客船の階段を降りていく。

「あちいー。早くしてくれよー。何でAクラスからなんだよー」
停泊した船の甲板は降り注ぐ太陽の光から逃れる術がない。

上のクラスから順番ということ、必然的に最後に下船することに

なるDクラスの面々は不満そうだ。

そうやって暑さに耐えながら待機していると、ようやく堀北も合流してきた。

一見いつもと変わらない様子だが、どこか違和感があることに柚椰はすぐに気づいた。

「鈴音、部屋にいたのかい？」

「ええ、本を読んでいたわ」

柚椰が近づいてきたことで彼女の表情が一瞬柔らかくなる。

しかし、やはりどこかいつもとは違う彼女の様子に、柚椰は再び違和感を覚えた。

「もしかして、体調が悪いのかい？」

「えっ」

いきなりそう尋ねられ、堀北は驚いたような表情をした。

「髪が乱れている。それは寝転がっていた証拠だ。君の性格上、身嗜みを適当にするとは思えない。だとすると気が回らないほどに別の何かがあるということだ」

「相変わらず柚椰君は人のことをよく見てるのね……」

柚椰の分析に堀北は困ったように息を吐いた。

「大したことないわ。ちよつと寒気があるだけ」

「この暑さの中で寒気がある時点で重症だと思っただけど」

強がりと言う堀北に柚椰も困ったように笑う。

「薬は飲んだかい？」

「ええ。医務室で貰ってきたわ。島にも持っていくから平気よ」

既に保険医には診てもらったのか、薬は処方されているようだ。

だからこそ自身の体調についてあまり重くは考えていないのが見て取れる。

「具合が悪くなったら言うんだよ？　すぐに先生を呼ぶから」

「ええ、ありがとう」

こちらを気遣う柚椰の言葉に微笑みながら彼女は礼を言う。

やがてDクラスの番が回ってきたのか、出席番号順に下船準備に入る。

しかし、その作業は殊の外時間を要するものだった。

生徒一人一人を先生たちが取り囲み、荷物の検査やボディチェックを行なっている。

そこまで厳重なチェックをすれば、必然的に疑問が出るのも仕方ない。

「ねえ、妙に慎重というか警戒していないかしら？ 端末を没収するなんてテストの時だってやってなかったわ。余計な私物の持ち込みを禁止することだってそうだし」

「確かに島のペンションに泊まってバカンスという触れ込みにしては、自由がないように感じるね」

顎に手を当て思案する堀北に対し、柚椰はカラカラと笑っていた。

その態度に何かを感じたのか、堀北は柚椰を見上げる。

「柚椰君は何か思い当たるところでもありそうね」

「船のアナウンスとか島をわざわざ一周したりと、色々と不可解なところはあったからね」

「それを踏まえて、柚椰君はどう思うの？」

「現時点では、まず間違いなくこの旅行はただのバカンスじゃないというくらいかな」

「でしようね。大方、私たちに何かをさせようとしているのでしよう」堀北も不可解であることは感じていたのか、柚椰の見解に頷いていた。

やがて二人の番がやってきて、厳重な検査を受けた後タラップを降りる。

「あ、そうだ。鈴音」

島に降り立つと、柚椰は羽織っていたジャージを脱いで堀北に渡した。

いきなりジャージを渡され、堀北は首をかしげる。

「羽織っておくといい。一枚でも羽織っておけば多少なりとも違うからね」

柚椰がそう言うと、堀北はジャージを受け取った。

彼女は既に着ていた自分のジャージの上に羽織る形でジャージを

着る。

「ありがとう、柚椰君」

「ん、気にしなくていいよ。さっきも言ったけど、具合が悪くなったら我慢せずに言うんだ」

改めて念を押すようにそう言われ、堀北はコクリと頷いた。

心なしか、彼女の顔が赤くなっているのは風邪の所為だろうか。

それとも、別の要因があるのだろうか。それは彼女しか知らない。

彼らは島にて試験を課せられる。

船から降りてきたDクラスの面々に、すかさず担任である茶柱先生の言葉が飛ぶ。

「今からDクラスの点呼を行う。名前を呼ばれたものはしっかりと返事をするように」

同時に整列するよう指示され、クリップボード片手に全クラス一斉に出席確認が行われた。

先生たちも生徒と同じジャージに身を包んでおり、夏休みというよりは合宿に近い雰囲気がある。

それでも多くの生徒に緊張の色はない。

「あー、早く自由時間にならねえかなー。海は目の前なんだぜ」

池が面倒くさそうにつぶやく。彼と同じく、大半の生徒は早く海で遊びたくて仕方ないだろう。

程なくして高身長 of 教師が前へ出てくると、準備されていた白い壇上へ上がる。

彼は英語を担当しているAクラス担任、堅物と生徒の間で有名な真嶋先生だ。

プロレスラーのような体格で一見すると体育会系だが、英語以外の教科を担当していたこともあるほどの優秀な教師だ。

「今日、この場所に無事につけたことを、まずは嬉しく思う。しかしその一方で1名ではあるが、病欠で参加できなかった者がいることは残念でならない」

「いるんだよなあ、病気で旅行に参加できない奴。かわいそ」
先生に聞こえない程度の小声で池が呟く。

真嶋先生が無言で生徒たちを見つめる中、作業着に身を包んだ大人たちが、少し遠くで特設テントの設置を始めているのが見える。

彼らの傍には長机とその上に置かれているパソコンなどもある。

およそこのロケーションには場違いな光景に生徒たちも徐々に困

惑の色を見せ始める。

空気が変わること待っていたかのように、真嶋先生から冷酷な一言が発せられた。

「ではこれより——本年度最初の特別試験を行いたいと思う」

「え、特別試験って？ どういうこと？」

その当たり前の疑問は池だけでなく、ほぼ全てのクラスで等しく巻き起こった。

ただの旅行だと思っていた生徒たちに襲いかかった不意打ち。

学校側の善意による夏休みのバカンス。そこにはやはり裏があったのだ。

「期間は今から1週間。8月7日の正午に終了となる。君たちはこれから1週間、この無人島で集団生活を行い過ごすことが試験となる。なお、この特別試験は実在する企業研修を参考にして作られた実践的、かつ現実的なものであることを言っておこう」

「無人島で生活って……船じゃなくて、この島で寝泊まりするってことですか？」

BかCクラス辺りから、当たり前の疑問が飛び出す。

「そうだ。試験中の乗船は正当な理由なく認められていない。この島での生活は眠る場所から食事の用意まで、その全てを君たち自身で考える必要がある。スタート時点で、クラス毎にテントを2つ。懐中電灯2つ。マッチ1箱を支給する。それから日焼け止めは制限なく、歯ブラシに関しては各自1つずつ配布することとする。特例として女子の場合に限り生理用品は無制限で許可している。各自担任の先生に願い出るように。以上だ」

以上ということは、それ以上のものは一切配布されないということだ。

「はあっ!? もしかしてガチの無人島サバイバルとか、そんな感じ!? そんな滅茶苦茶な話聞いたことないっすよ! テント2つじゃ全員寝れないし! そもそも飯とかどうするんですか! あり得ないっす!」

全員に聞こえるほど大きな声で池が騒ぎ立てる。

しかし彼と同じようなことを他の生徒も思っているのか、誰も彼も意味が分からないと言った顔で真嶋先生を見ていた。

彼らの不平不満の声と表情に対して、真嶋先生を始め教師陣は至って平然としていた。

「安心していい。これが過酷な生活を強いるものであったなら批判が出るのも無理のない話だ。しかし、特別試験と言ってもそれほど深く考える必要はない。今からの1週間、君たちは海で泳ぐのもバーベキューをするのもいいだろう。時にはキャンプファイヤーでもして友人同士語り合うのも悪くない。この特別試験のテーマは『自由』だ」
真嶋先生のその言葉に、生徒たちはこれまでとは違った困惑を見せる。

「え？ 自由がテーマってどういうこと？ バーベキューもできるって……んんっ？ それって試験って言えんの？ ヤベ、頭混乱してきた」

試験でありながら遊ぶのは自由と言われ、生徒たちは疑問が次々吹き出していく。

「この無人島における特別試験では大前提として、まず各クラスに試験専用のポイントを300支給することが決まっている。そのポイントを上手く使うことで1週間の特別試験を旅行のように楽しむことが可能だ。そのためのマニュアルも用意している」

真嶋先生は別の教師から数十ページほどの厚みを持った冊子を受け取った。

「このマニュアルには、ポイントで入手できる物のリストが全て載っている。生活で必需品と言える飲料水や食料は言うに及ばず、バーベキューがしたければ、その機材や食材も用意しよう。海を満喫するための遊び道具も無数に取り揃えている」

その言葉にだんだんと生徒たちの表情が穏やかなものへと変わっていく。

「つまり、その300ポイントで欲しいものが何でも貰えるってことですか？」

「そうだ。あらゆるものをポイントで揃えることが可能になってい

る。計画的に使う必要はあるが、堅実なプランを立てれば無理なく1週間過ごせるように設定されている」

つまりポイントを上手く使えば、当初の予定通りのバカンスが堪能できるということだ。

「で、でも先生。やっぱり試験って言うんだから難しい何かがあるんでしょ?」

未だ楽観視できないのか、池がそう質問する。

「難しいものは何もない。2学期以降への悪影響もない。保障しよう」

「じゃあ本当に、1週間遊ぶだけでもいいってことですか」

「そうだ。全てお前たちの自由だ。もちろん集団生活を送る上で最低限のルールは存在するが、守ることが難しいものは何一つない」

やたら自由を強調する真嶋先生だったが、その真意は未だ分からない。

しかし生徒たちは徐々に試験という単語へのプレッシャーから解き放たれているように見えた。

生徒たちの緊張が解れつつある中、再び真嶋先生が口を開く。

それは、この試験の全貌。これによって得られるプラス面についてだ。

「この特別試験終了時には、各クラスに残っているポイント、その全てをクラスポイントに加算した上で夏休み明けに反映する」

その言葉に、生徒たちの間に激震が走る。

間違いなく今日一番の驚きを与えたことだろう。

定期テストのように学力を計る試験は、基礎学力の高い生徒が集まる上位クラスが必然的に有利だった。

だが今回の試験は違う。

クラス間にあるハンディキャップを感じさせない。Dクラスにも勝ち目のある試験だった。

「1週間我慢したら、来月から俺たちの小遣いも増えるってことだよな!?!」

ポイントを使わず、島での生活を耐え忍ぶことが出来れば、そのポ

イントがクラスポイントになる。

つまりそれは、月頭に支給されるポイントが増えるだけでなく、クラス間のポイント差も埋まるということだ。

Dクラスにとってはこれ以上ないチャンスと言えるだろう。

「マニュアルは各クラス1冊ずつ配布する。紛失した際は再発行も可能だが、ポイントを消費するので大切に保管するように。また、今回の旅行を欠席した者はAクラスの生徒だ。特別試験のルールでは、体調不良などでリタイアした者がいるクラスにはマイナス30ポイントのペナルティを与える。そのためAクラスは270ポイントからのスタートとする」

真嶋先生の説明にAクラスの生徒たちは動揺した様子を見せなかった。

しかし、他クラスの生徒は開始前からAクラスとの差が30ポイント縮まったことに驚いている。

真嶋先生が説明を終えるのと同時に解散宣言がなされた。

解散後、生徒たちはクラス毎に集まり、担任の先生の指示を仰ぐ。クラスポイントを大量に増やすまたとなないチャンスに皆浮き足立っている。

「今からお前たち全員に腕時計を配布する。これは1週間後の試験終了まで外すことなく身につけておくように。許可なく外した場合にはペナルティが課せられるのでそのつもりでいろ。この腕時計は時刻の確認だけでなく、体温や脈拍、人の動きを感知するセンサー、GPSも備えている。万が一に備え、学校側に非常事態を知らせるための手段も搭載してある。緊急時には迷わずそのボタンを押すように」業者の人間が茶柱先生の傍に支給品を次々積み上げていく。

それはおそらくDクラスに支給されるテントや腕時計だろう。箱を取り出し、生徒一人一人に腕時計が配られる。

「あの一、佐枝ちゃん先生？ 緊急時つてことはですよ？ この島つてなんかヤベエ生き物とかいたりしないっすよね……？」

池が不安そうにおずおずと挙手をした。

「仮にもこれは試験だ。結果を左右する可能性のある質問には答えられない」

「いやいやいや！ クマとかいたら死ぬでしょ！ 他にもヤベエ虫とか蛇とか！」

「流石に大丈夫じゃないかな？ それでもし生徒が危険な目にあつたら大問題だ。腕時計は単に僕たちの健康管理が目的じゃないかな？」

平田が池の心配を和らげるようにフォローする。

彼の言う通り、腕時計は生徒の状態を把握するためのデバイスであると考えるのが妥当だろう。

腕時計が生徒全員に行き渡ると、各々好きな方の腕にはめていった。

「これつて付けたまま海とか入つて平気なんすか？」

「問題ない。完全防水仕様だ。万が一故障した場合は試験管理者がやって来て代替品と交換するようになってる」

腕時計の仕様について一通り聞き終えると、今度は平田が挙手をする。

「茶柱先生。僕たちは今からこの島で1週間生活するとのことですが、ポイントを使わない限り全て僕たちで何とかしなければならぬということでしょうか」

「そうだ。学校は一切関与しない。水も食料も、お前たち自身で用意してもらおう。足りないポイントにしても同様、解決方法を考えるのも試験の一環だ」

その言葉に男子よりも女子の方が戸惑いを見せる。

寝床が確保されていないからだろうか。

「大丈夫だつて。食料は魚でも捕まえたり森で果物探せばいいじゃん。テントだつて葉っぱとか木とか使つてさ。最悪体調崩しても我慢すりゃいいし」

300ポイントを温存する気満々の池は楽観的な様子だ。

しかし現実はそう甘くはない。

一人で生き残るだけならまだしも、30人以上の人間が集団で生活しなければならぬのだ。

食料や水を確保するだけでも容易ではないことは明らかだ。

「残念だが池、お前の目論見通りに行くとは限らんぞ。お前たち、マニユアルを見てみるかい」

平田は茶柱先生の指示に従い、受け取ったマニユアルを開いた。

「最後のページにマイナス査定項目が載っている。まずはそこに目を通せ。それはこの特別試験において非常に重要な情報になる。生かすも殺すもお前たち次第だ」

「平田、俺にも見せてくれないか」

「うん、いいよ」

右肩から顔だけ出して覗き込んできた柚椰に平田は見やすいようにマニユアルの角度を変えた。

平田の肩に顎を置き、マニユアルを覗き込む柚椰。

そんな柚椰を受け入れて一緒にマニユアルを読む平田。

Dクラスの女子人気1位と2位の美男同士の絡みに一部の女子たちが少しざわついた。

彼女たちの興奮を他所に二人は該当箇所を見つけて読み始める。

「えっと、『以下に該当する者は定められたペナルティを課す』」

「著しく体調を崩したり、大怪我をし続行が難しいと判断された者はマイナス30ポイント」

「さつきAクラスが喰らったペナルティがこれということか」

「そうみたいだね。でも、他にもペナルティに該当する行為があるね」

平田の言う通り、他にもマイナスを喰らう行為がいくつか存在していた。

「『環境を汚染する行為を発見した場合、マイナス20ポイント』。木を切り倒すことや川を汚すことは禁止ということだね」

「『毎日午前8時、午後8時に行う点呼に不在の場合、一人につきマイナス5ポイント』。これは気をつけないとね。遅れてもダメみたいだ」

「『他クラスへの暴力行為、略奪行為、器物破損を行なった場合、該当生徒の所属クラスは失格。該当生徒のプライベートポイントは全没収』か。厳しいね」

「でもこれは当然のルールじゃないかな。あくまでこの試験は自分たちの力で生き抜くことが目的なんだよ」

平田は4つ目のルールはあつて当然のものだと受け止めているらしい。

「残り3つは生徒に無理をさせないための抑止力の面が強いだろうね。具合が悪いのに我慢した結果、悪化してリタイアしたらマイナス。木を切って使うことや、海や川に汚れたものを流すこともマイナス。点呼を設けることで野宿をさせないようにする。ポイントを惜しんで野蛮なことしないようにするためのルールということだろうね」

柚椰の考察に同感なのか平田は頷く。

「この試験は我慢大会をさせるつもりじゃないってことかもしれないね。生徒が取り返しのつかないことになったときに損をするのは学校側だから」

一通りペナルティを把握したので、柚椰は平田から離れた。

彼が離れたことで平田もマニュアルを閉じる。

それを見計らつて茶柱先生が再び生徒たちを見渡す。

「二人が読み上げたように、ペナルティはいくつか存在している。池、お前が無茶をするのは勝手だ。だが、もし10人の生徒が体調不良に陥りリタイアすることになった場合、それまでの我慢と努力は全て泡と消える。一度リタイアすれば試験中に復帰することは出来ない。強行するときはそれを覚悟しておくといい」

我慢で乗り切る手を封じられ、それを想定していた一部の生徒が困惑する。

1ポイントも使わないという作戦はこれでほぼ不可能となった。

しかし逆に考えれば、他クラスが同じことをしてくる可能性も消えたということだ。

この試験は如何に効率よくポイントを使い、節約して1週間を乗り

越えるかが鍵になりそうだ。

「つまりさ、ある程度のポイント使用は仕方ないってことじゃない？」

一通り話を聞いた篠原がそんなことを言った。

「最初から妥協する戦い方は反対だぜ。やれるところまで我慢すべきだろ」

「気持ちわかるけど、体調を崩したら大変だよ」

「萎えること言うなよ。まずは我慢あつての試験じゃねえの？」

平田が諫めようするが池はポイントを可能な限り使わないという方針を押し続ける。

「うーん、黛君はどう思うかな？」

池の言うことも尤もだと思つたのか、平田は今度は柚椰に話を振る。

彼が意見を求めたため、周りの視線が柚椰に向けられる。

当の柚椰は平田が持っていたマニュアルをいつの間にか手にとつてパラパラと捲っていた。

「俺かい？ そうだね……ポイントを惜しんで次々に人が倒れるくらいなら消費を惜しまない方がいいだろうね。最低でも住環境と水回り、トイレやシャワーは惜しむべきじゃないと思うよ」

クラスメイトを一通り目で見回しながら柚椰はそう言った。

その発言に篠原を始め女子たちはホッとしたような表情になる。

反対に池やポイントを節約したい生徒たちは不満そうだ。

「ああ、テントや調理器具も揃えられるみたいだね。水と食料もある。それにデジカメ、無線機……花火とかもあるみたいだ。これは欲しいときは先生に言えばいいのですか？」

「ああ。その都度私に申し出れば誰でも申請可能だ」

「らしいよ」

茶柱先生から返答を得ると、柚椰はマニュアルを閉じた。

「茶柱先生、答えられることであれば教えてください。仮に300ポイント全てを消費してしまった後にリタイアする者が現れた場合はどうなるのでしょうか」

堀北が挙手をし、回答を求める。

「その場合、リタイアする人間が増えるだけだ。ポイントは0から変動しない」

「つまりこの試験でマイナスに陥ることはない、ということですね？」
その問いに茶柱先生は肯定する。

先ほど真嶋先生も試験による悪影響はないと言っていたがそれは事実らしい。

「支給テントは1つが8人用の大きなものになる。重量が15キロ近いから運搬の際は気をつけるように。また支給品の破損、紛失に関して学校側は一切手助けしない。新しいテントが必要な場合はポイントを消費することを覚えておくように」

「僕からもよろしいですか先生。この点呼というのはどこで行うのですか？」

「担任は各クラスと共に試験終了まで行動を共にする決まりになっている。お前たちでベースキャンプを決めたら報告してくれ。私はそこに拠点を構え、点呼はそこで行う決まりだ。それから一度ベースキャンプを決めた後、正当な理由なく変更はできないのでよく考えて決めるように。これらは他クラスも同様の条件だ。例外はない」

監督責任ということで、先生も生徒たちと共に1週間過ごすということだ。

勿論、学校側である先生は生徒の手助けなどはしないだろう。

「続いてトイレの説明をする。大事なことだからよく聞いておくように」

先生はそう言うと、積み上げられたものの中から1つの段ボール箱を掴んだ。

それを開け、中に入っているものを取り出すと、それは折りたたまれた段ボールだった。

「佐枝ちゃんせんせい、なんすかそれ？」

池が思わず尋ねる。

「簡易トイレだ。各クラス1つずつ支給されるものだから大切に使うように」

その説明に戸惑ったのはクラスの女子たちだ。

「もしかして、私たちもそれを使うんですか!？」

声を大にして篠原が質問する。

彼女の表情からはそんなものを使うなんてあり得ないといった感情がありありと浮かんでいる。

「男女共有だ。だが安心しろ。着替えにも使えるワンタッチテントがついている。誰かに見られるようなこともないだろう」

「そういう問題じゃなくて! 段ボールなんて絶対無理です!」

女子からのブーイングをスルーし、茶柱先生は簡易トイレの使い方について説明を始めた。

段ボールを組み立て、付属していた青のビニール袋をセットしてその中に白いシートを入れる。

どうやらその白いシートこそ優れものらしく、汚物を固める薬品がついているらしい。

それにより汚物を見えなくすると同時に臭いを抑制する効果があるらしい。

使用後は同じシートをその上から被せることで1枚のビニールで最大5回まで使えるようだ。

このビニールとシートに関しては無制限に支給されるものらしい。説明を聞いた女子たちは絶句していた。

あまりに日常とかけ離れた行為に適応できないようだ。

「無理に決まっています! 絶対無理!」

篠原だけでなく、ほぼ全ての女子が一斉に拒否する。

その様子を黙って見守っていた池が不機嫌そうに言う。

「トイレくらいそれで我慢しようぜ。揉めるようなことじゃないだろ」

「ふざけないで。男子には関係ないでしょ。段ボールのトイレなんて絶対無理」

言い争う池と篠原。

二人の喧騒を放っておき、茶柱先生は話を進めようとする。

「やつほ」

しかし背後から聞こえてきた声に、茶柱先生は一気に不機嫌そうに

なった。

声の主は彼女の背中に勢いよく抱きつく。

「……何してる」

「何って、スキンシップよ。どうしてるかなーって思ったから」

Bクラスの担任である星之宮先生が何故かやってきた。

彼女は上機嫌でスリスリと茶柱先生の二の腕を撫でる。

「佐枝ちゃんの髪っていつ触ってもサラサラよねー」

「暑い。鬱陶しい。離れろ」

「もくつれないなあ」

冷たくあしらわれているにも関わらず、星之宮先生は笑顔を崩さない。

その光景を少し離れたところから綾小路と柚椰は見ていた。

「美人女教師のスキンシップは絵になるね。そう思わないかい？」

「それは否定しないが、いいのか？ 池たちを放っておいて」

綾小路は離れたところで未だ言い争っている池と篠原を指で差した。

平田に意見を求められたときと同様、柚椰も仲裁に入るものだと思っていたようだ。

「いいんじゃないかな？ 好きに騒がせておこう。それに、まだルー説明が終わっていないみたいだからね」

「お前って、たまに酷いよな」

あつさり放置の意を述べた柚椰に綾小路は苦笑いした。

しかしすぐに表情を引き締めると、真剣な声色で柚椰に話しかける。

「黛、あとで少し時間取れないか」

「ん、構わないけどどうしてだい？」

「話したいことがある。大事な話だ」

「ここでは詳しく話すつもりはないのか、とにかく重要であるということしか言わなかった。

「いいよ。じゃあ後でね」

「ああ、頼む」

「あつ。綾小路くんと黛くんじゃない。久しぶり〜」

星之宮先生はどうやら茶柱先生から今度は二人にターゲットを変えたようだ。

彼女はホワホワした雰囲気で男子二人に近づいていく。

「夏は恋の季節。二人とも、好きな子に告白するならこういう綺麗な海の前とか効果的かもよく?」

「海は綺麗でも、クラスにそんな余裕はないんで」

「でも案外カップルが誕生するかもしれないよ? ほら、池がキメると言っていたし」

軽く受け流す綾小路と、何故か乗ってくる柚榔。

美人教師に絡まれていることで、周りの視線も自然と二人に集まってきた。

「じゃあじゃあ、二人もこのチャンスをモノにしなきゃ——」

「おい。いつまでここにいてもいい加減戻れ」

遮るように現れた茶柱先生が星之宮先生の着ているジャージの首元を掴んだ。

イタズラした猫を掴むようなその行為に一部の男子が吹き出す。

「うゝ、分かったわよお。じゃあね〜」

悲しげな顔をしながら、星之宮先生は素直に自分のクラスの場所へ帰っていった。

「さて、喧しいのがいなくなったので、これより追加ルールについて説明する」

星之宮先生がいなくなったことで、茶柱先生が説明を再開した。

彼らは今後の方針を決める。

「つ、追加ルール？ まだなんかあるんすかあ……」

茶柱先生が口にした言葉に池が目を回していた。

もう既に彼の脳は多すぎるルールにオーバーヒートしているのだろう。

しかしそんな彼を他所に茶柱先生は説明を続ける。

「間も無くお前たちはこの島を自由に移動できるようになるわけだが、島の各所にはスポットとされる場所が幾つか設けられている。それらには占有権と呼ばれるものが存在し、占有したクラスのみ使用できる権利が与えられる。どう活用するかは権利を得たクラスの自由だ。ただし占有権は8時間しか意味を持たず、自動的に権利が取り消される仕組みになっている。そして、スポットを1度占有するごとに1ポイントのボーナスが与えられる。このポイントは試験中に使用することはできないが、試験終了時に加算される仕組みだ。学校側は常に監視しているため、このルールにおける不正の余地はない。心しておくように」

「え、それってスゲー大事じゃないっすか！ ポイント付いてくるなんて美味しすぎる！ 俺たちで全部取ってやろうぜ！」

池は目を輝かせ、すぐにでも探しに行こうと仲間を誘い始める。

マニュアルにもスポットについては書かれており、スポットにはどのクラスが占有しているかを示す装置が置かれているようだ。

スポットの確保はポイントを稼ぐ上で重要な要素だろう。

「焦る気持ちはわかるが、このルールには大きなリスクがある。それを考慮した上で利用するかを検討することだな。そのリスクも含めてマニュアルに書いてあるから目を通しておけ」

茶柱先生の言うように、マニュアルには箇条書きで追加ルールが書き記されてあった。

・スポットを占有するには専用のキーカードが必要である

・1度の占有につき1ポイントを得る。占有したスポットは自由に使用することができる

・他クラスが占有しているスポットを許可なく使用した場合、マイナス50ポイント

・キーカードを使用することが出来るのはリーダーとなった人物に限定される

・正当な理由なくリーダーを変更することは出来ない
大まかなルールは以上。

茶柱先生が追加で説明した内容は以下の通りだ。

・占有権がリセットされた後、同じ場所を続けて占有することも可能

・同時に複数のスポットを占有することも可能

仮に1箇所を1日占有し続けた場合、そのクラスは3ポイントを得る。

そしてそれを1週間続けた場合、最終的に得られるポイントは21ポイント。

同時に複数のスポットを抑えられればさらにポイントが加算される。

一見するとこれは単なる早い者勝ち。

強引にスポットを繰り返し占拠すれば勝てる仕組みに見えるが、そう甘くは出来ていない。

茶柱先生が告げた最後のルールが以下の通りだ。

・試験最終日、点呼の際にリーダーは他クラスのリーダーを言い当てる権利が与えられる

・リーダーを的中させた場合、的中させたクラス一つにつきプラス50ポイント

・リーダーを的中させられなかった場合、外したクラス一つにつきマイナス50ポイント

・リーダーを的中させられた場合、マイナス50ポイント

そう、試験最終日に他クラスのリーダー当てが行われるというのだ。

当てれば50ポイントと大きなプラスとなるが、外せば大きなマイナスとなる。

加えて、当てられてしまった場合も大きなマイナスとなる。

つまり他のクラスにリーダーを知られてしまえば、損害を被ることになるのだ。

これを踏まえると、先のスポットの件が簡単な話ではなくなってくる。

スポットの占有は、リーダーを見破られるリスクを高めることになる。

つまり折角稼いだボーナスポイントを失う危険があるのだ。

これによって、占有合戦に参加することへの躊躇いが生まれる。

「参加するしないは自由だが、例外なくリーダーは必ず一人決めてもらう。欲を出さなければリーダーだと知られることもなく済むだろう。リーダーが決まったら私のところに来るように。その際にリーダーの名前を刻印したキーカードを支給する。制限時間は今日の点呼まで。もしそれまでに決まらない場合はランダムで選出するからそのつもりでいろ」

キーカードに名前が書かれているということは、それを見られただけでも致命傷になりうるということだ。

リーダーの選出、そしてキーカード管理とどちらも気をつけなければならぬ。

茶柱先生の説明は以上のように、さっさとその場を離れてしまった。

茶柱先生が去った後、平田がすぐに行動を開始した。

「リーダーを誰にするかは時間ももあるし後で考えよう。まずはベースキャンプをどこにするかだね。このまま浜辺に陣取るか、森の中に入っていくのか。スポットのことはその後で考えるべきじゃないかな」

マニュアルには、簡素ではあるが島の地図が付属していた。島のサイズや形だけが書かれたとてもシンプルなものだ。

「シンプルというより、これはもう雑としか言えないね」

地図を見ていた平田に柚椰が声をかける。

彼もまた、マニュアルに付いている地図の簡素さに思うところがあるらしい。

「自分たちで必要な部分を埋めろ、ってことなのかもしれないね」

「島の探索、そして物資の確保。当面の目的はその辺りになるかな」

「ベースキャンプは先生たちがいる船の傍がいいんじゃないの？」

意見交換をしている二人に佐藤が進言した。

しかし、その意見に平田は難色を示す。

「いや、そうとも限らないよ。スポットの存在もそうだけど、ここには何もないからね」

「拠点に何を望むかだね。水場が近いところがいいのか、雨風を凌げるようなところがいいのか。この暑さだし日陰もないところというのは厳しいかもしれないね」

柚椰は拠点として好ましい地形について見解を述べた。

平田もその意見には同意なのかコクリと頷く。

しかし拠点の話をしている彼らとは離れたところで、今も尚トイレ論争は続いていた。

「あんなのでトイレなんて絶対無理だから！」

「じゃあどうしろっつーんだよ。お前は1週間我慢できるっていうのかよ」

「そういう問題じゃないでしょ！」

池と篠原を中心として簡易トイレ肯定派と否定派が真っ二つに別れていた。

言い争う声があまりにも大きかったからか、平田と柚椰にもそれは聞こえてくる。

「……まずはアレをどうにかしないとイケないね」

「確かマニュアルに載ってるポイントで買えるものに仮設トイレがあったよ」

そう言つて平田はマニュアルを開き、該当する箇所を指で差した。仮設トイレと銘打つてはいるが、その機能は申し分ないようで、水洗式で家庭用と遜色ないものだった。

これは1基につき20ポイントという値段がついている。

「とりあえず皆を集めて意見を纏めようか」

平田は池と篠原、そして彼らの周りにいる者たちを全員呼び寄せた。

そしてマニュアルに載っている仮設トイレの存在を教える。

「それ絶対いる！ ほんとはそれでも嫌だけど、それじゃないと無理！」

案の定、篠原は真つ先に飛びついた。

彼女を皮切りに多くの女子がそれに賛同する。

女性にとつてはトイレの存在はまず最優先なのかもしれない。

「ちよ、ちよつと待てよお前ら！ 20ポイントだぜ!? たかがトイレに！」

賛成ムードに異を唱えるのは、少しでもポイントを節約したい池。そして簡易トイレでもいいと思つている一部の男子たちだ。

「皆、ここは冷静になつて考えよう。言い争うのはよくない」

一向に意見がまとまらないため、平田がそう言つて取りまとめようと試みる。

しかし、どうにも対立構造は終わりそうにない。

「20ポイントということとはプライベートポイントに換算すると2000ポイントだね。現金で考えても2000円。それで衛生が買えるなら安いんじゃないかな？」

けろつとした顔でそう言つたのは柚椰だった。

「そ、そうよ！ 2000円で買えるなら安いものじゃん！」

これ幸いと篠原が柚椰に乗つてくる。

「いやいや！ 一人2000だぜ!? クラス全員分で考えたら800000じゃねえか！」

池は脳内で計算したのか、クラス全体の費用に換算して異を唱える。

「それでも1週間で割れば一人当たり300円もいかないでしょうが！」

「その300円が大事なんだろう!？」

「1ヶ月でポイントをバカみたいに使いまくったバカに言われたくないわよ！」

「なんだとお!？」

トイレの話から今度は金遣いの話にシフトしていく二人。

流石に彼らを担いできた両派閥も呆れてきている。

「どうしよう黛君、これじゃあ一向に話が進まないよ……」

平田もどうかしようとは思っていても、中々打開策が見つからないようだ。

彼に尋ねられた柚椰は言い争う二人を眺めながら呟く。

「この試験の難しいところは、こういふところなのかもしれないね」

「——っ！ そうか、この島で生き残れっというのほそういう目的ってことだね?。」

平田は柚椰が言いたいことを理解したのか、その表情は強張っている。

「となると、大元の方針を決めるべきだね」

「どういふことかな?。」

「あー、全員聞いてくれるかな」

柚椰は全員に聞こえるように声を張る。

それによって一旦言い争いは収まり、池と篠原、そしてクラス中の視線が柚椰に集まった。

「いつまでもトイレがどうこう、ポイントがどうこう言うのは正直に言って建設的じゃない。既に他クラス、特にAクラスやBクラスは行動を開始してるみたいだよ?。」

柚椰が指で差した方向に全員が視線を移す。

そこには数人で固まって森へ入っていく様子が見えた。

恐らくスポットやベースキャンプ地を探すためだろう。

一方Cクラスはこちら同様、未だ纏まりが出来ていない様子だ。

「1人で1週間島で生き延びろというのなら、トイレは我慢すればい

いいし、食べ物も水も現地調達でいい。けれど、40人全員が生き延びることが目的なら話はそう簡単なことじゃないってことくらいは分かるだろう?」

「柚椰の言うことは尤もだったのか、全員が一旦頭を冷やす。」

「クラス単位で生活することが前提である以上、クラス全体の方針を決めたほうがいい。この試験にどう臨むのか、何を最終目標とするのかをね」

「なるほど、大元の方針っていうのはそういうことだね?」

平田は先ほど柚椰が言っていたことの意味が分かったようだ。

「さて、今この時点で俺たちにはいくつか選択肢がある。その中からどれを選ぶのかを決めればトイレの論争も終着するさ」

「選択肢って?」

そう尋ねたのは櫛田だった。

女子の代表とも言える彼女が聞く姿勢を取ったことで女子の関心が柚椰に向く。

同時に櫛田を好いている男子たちも耳を傾け始めた。

その様子に柚椰は内心ニヤリと笑い、選択肢を提示した。

「二つ目、300ポイントを躊躇いなく使い尽くして1週間のバカンスを満喫する」

「はあああつ!?!」

真つ先に叫んだのは池だった。

「何考えてんだよ黛!」

「真嶋先生も言っていただろう? 何をしようが自由だって。当初の予定通り島でのバカンスを楽しむのも勿論自由さ。この暑い中で島でサバイバルなんて辛いことをするより、優雅な時間を過ごすことを選ぶのも賢い選択じゃないかな?」

「ポイントは試験の後クラスポイントになるんだぜ!? そっちの方が

いいに決まってるだろ!」

先ほどまで対立していた篠原でさえ、池の意見にはコクコクと頷いている。

「どうやらこの選択肢は到底受け入れられるものではないようだ。」

「じゃあ二つ目、ポイントを徹底的に節約して1週間生き延びる」

「そうそれ! そつちを選ぶに決まってるじゃん!」

「何があっても、どんな不測の事態があっても、その場にある物でなんとかする。真正銘のサバイバル生活だ。勿論、食料が確保できなければ食事は無しだし、テントが壊れたら野宿だね。島を汚すのがご法度な以上、その辺りで用を足すのもダメだ。一個の簡易トイレを全員で回しながら原始人じみた生活を送る。そうすればポイントは減らないし、夏休み明けの懐は潤うね」

「うっ、それは……」

池も流石にそれはキツイと考えたのか、少し苦い顔をする。

「無理無理無理! 絶ッ対無理!」

篠原は断固拒否の姿勢だ。

「そ、そんな極端なことしなくても、ポイントは適宜使えばいいんじゃないかな?」

「柚椰の選択肢が極端だったからか、平田がそう進言する。」

「でも現にこうして買う買わないで争っているだろう? それも娯楽品などではなく衛生面においては必要と言わざるを得ないトイレで」
「そう言いながらチラリと見られた池と篠原はウツと言いながら目を逸らす。」

「そもそも必要な物なんて、それこそ男女に関わらず人によって違うものさ。川の水なんて飲めないという人にとってはミネラルウォーターが欲しいだろう。不潔な身体で1週間も過ごせないという人にとってはシャワーが欲しいだろうね。でもそれを買うかどうかの判断の度に、こうして長ったらしく言い争っていたらキリがないと思わないかい?」

ぐうの音も出ない正論に池と篠原だけでなく平田も口を噤んだ。

「さて、じゃあ三つ目の選択肢だけど、これが一番現実的だと思うん

だ。衣・食・住。全員が納得できる最低ラインをポイントで確保して、その上で1週間生活する」

「それが一番ベストかもしれないね」

一番良い選択肢だと判断したのは平田だった。

「勿論、全員が」という点が何より重要だよ。誰か一人でも生活にストレスを感じるならそれは補うべきだ。ストレスというものは溜まれば身体に悪影響なだし、結果としてリタイアを招きかねない」

「黛、それは流石に甘いんじゃないか？」

そう異を唱えたのは幸村だった。

「この試験は他クラスとのポイント差を埋める千載一遇のチャンスなんだぞ？ 一人の不満に貴重なポイントは使えない。僕はいつまでもDクラスに居るつもりはないんだ」

「どうやら彼は少しでも上のクラスに上がるためのチャンスをモノにしたいようだ。」

そのためにも、柚椰の提示した選択肢は甘すぎると考えているらしい。

「幸村、この試験において最も避けなければならないことはなんだと思う？」

異を唱える幸村に柚椰はそう尋ねる。

「避けなければならないこと……それは勿論ポイントの無駄遣いだらう」

「いいや、それは違うよ」

自信ありげに答えた幸村に柚椰は首を横に振った。

「この試験において最も危惧すべきこと。いや、最も恐ろしいことはね——」

「——クラスが跡形もなく崩壊することさ」

「「——っ!?!」」

その言葉を聞いたクラスメイトに激震が走る。

彼の言葉はあまりに物騒。あまりに突拍子も無い。荒唐無稽な仮定。

そう、考えすぎとしか言えないものだろう。

「ちよ、ちよちよちよつと待てよ! 流石に考えすぎじゃねえ?」

「そ、そうだよ! クラスが崩壊するなんて大げさだよ」

「……」

池と櫛田が柚椰の話を否定する。

しかし平田は何か思うところがあるのか黙り込んでいた。

他の生徒は池と櫛田同様、柚椰の発言は考えすぎだと思っているらしくどこか楽観的だった。

「そうかい? 集団生活なんてものは否が応にも不満が溜まるものなんだ。ましてやこの特殊な状況下であれば、その不満はさらに溜まりやすい。ついさつきまで、池と篠原は言い争っていた。そしてその論争はまだ決着がつかないね? ここで強引に多数決を取つてどちらかの意見が採用されても、少数派は不満を抱えたまま次へ進む。そして次にまた何か必要なものが出てくれば、同じように論争をして多数決。多数決は民主主義に則った素晴らしい決め方だけど、少数派はどうしても不満を募らせてしまうんだ。その小さな不満は火種になって蓄積する。水面下で少しずつ、息を潜めて、着実に。そしてその火種はある時、ほんの些細なきっかけで、いとも容易く、盛大に爆発してしまう」

柚椰の言葉に一同は生唾を飲んだ。

ただの仮定の話でしかないにも関わらず、不思議とそうになってしまふかもしれないと思わせる。

皆が皆、柚椰が語る仮定の未来に不安を覚え始めた。

「この試験でのポイントは、試験終了後にクラスポイントに加算される。それは学校が俺たちに与えた一つの火種なんだ。このルールに

よってポイントに執着して周囲に我慢を強いる者、この1週間という期間を日常と同じように過ごしたいと思う者、そもそも試験後のプラスを考えず、この1週間を快適に過ごしたいと思う者。こうやってクラスメイトの中で必ず考えが分かれてしまう」

その言葉に先ほど対立していた者たちは皆一様に顔を俯かせる。

「目指す方向が違えば、必然的に足並みは揃わない。全員が腰をロープで繋がれた状態で各々が全く違う方向へ歩き出すようなものさ。この試験において何より重要なことは、他クラスよりポイントを残すことでも稼ぐことでもない。いかにして自滅を回避するか、だよ」
「そのために全員が最低限マシな生活ができる環境を確保する、ってことか？」

柚椰の言葉を一通り聞き終えた幸村がそう尋ねる。

その問いに柚椰はコクリと頷く。

「だって悔しいとは思わないかい？ 学校側は暗に俺たちにこう言ってるんだ。『どうせお前らは自分のことしか考えてない奴らだ。そんなお前らに集団生活なんて無理だろ？ 一致団結なんて出来るわけがないんだからさつきと諦めろ』とね。この試験を考えた人間は、今頃涼しい部屋の中でビールでも飲みながらゲラゲラと笑っているだろうさ」

「ナメられたもんだな……！」

闘争心に火がついたのか、そう声をあげたのは須藤だった。

彼と同じように、池や一部の男子たちも怒りを露わにし始める。

「だな。要は俺たちが争うのを期待して楽しんでるってことじゃねえか！」

「ふざけやがって、バカにするのもいい加減にしろ！」

先ほどまで仮設トイレに反対していた男子たちは怒りの矛先を学校側へと変えた。

「確かに黛の話聞く限り、この試験を考えた人間は相当性格が悪いみたいだな。ここまでコケにされると正直怒りでどうにかなりそうだ」

幸村もこの試験の底意地の悪さに反吐が出るのか、顔を顰めてい

る。

「前言撤回だア！ 篠原！」

「ひっ!? な、なによ！」

いきなり大声で名前を呼ばれて篠原は飛び上がった。

「悪かった！ 俺も節約節約つて意固地になりすぎた。ここでいつまでも争うのは学校の思う壺だよな。自分のことばっか考えて悪かった」

そう言つて勢いよく頭を下げる池。

事情を知らない者からすれば急激な心変わりに映るだろうが、この場においては違う。

先ほどまで話していた内容が内容だったため、篠原も思うところがあるようだ。

その証拠に彼女もバツが悪そうに目を逸らしながらも口を開く。

「わ、私も……ごめん。ちょっと感情的になってたかも。そうだよな。皆で生活するんだから協力していかないともんね」

池と篠原はお互いの非を認め、和解したようだ。

同じように対立していた者たちも、お互いの気持ちを考えるようになったのか、既に敵対意識はない。

「さて、どうやら意見は纏まったみたいだね」

「うん、そうだね。ありがとう黛君」

平田はクラスを上手く纏めた柚椰に礼を述べた。

「俺はただ口が上手いだけだよ。最終判断は君がするんだ。俺は精々参謀辺りに置いておいてくれ」

「じゃあ今後も頼りにさせてもらってもいいかな？」

「勿論。俺で良ければ力になるよ」

「ありがとう」

柚椰の承諾に平田は笑顔で礼を言った。

そして彼はクラスメイト全員を見渡す。

「じゃあ僕たちDクラスの方針は、黛君の提示した選択肢の三つ目。皆がとりあえず納得できるような環境を整えて生活するってことでいいかな？」

「「さんせい！」」

平田の決定にクラスメイトたちは大きな声で肯定した。
声に出さなかった一部の生徒も、その決定には肯定の様子だ。

こうしてDクラスは特別試験における方針を決定した。

彼らは拠点を探し始める。

クラス方針を固めたDクラス一同は、ベースキャンプとなる場所を探すべく行動を開始した。

平田と柚椰を中心に男子数人がテント2つを担ぎながら森を進む。

そのすぐ後ろをクラス全員分の小物類が入った段ボールを担いだ須藤が歩いていった。

彼らから少し離れた後列には女子の集団と、残りの男子たちがいる。

そしてその集団からも離れた最後列に綾小路と堀北がいた。

ちなみに綾小路は簡易トイレの段ボールを片手に持っていた。

一応の荷物持ちを買って出たらしい。

「大丈夫か？」

「なにが？」

綾小路の問いに堀北が睨むような目を向ける。

「別に。具合悪そうに見えたからな」

「心配には及ばないわ」

「そうか」

そう言うのならと綾小路はそれ以上何も言わなかった。

彼がそうしていると、ふと前方から視線を感じた。

見ると少し前を歩いていた佐倉が時折チラッとこちらを振り返っていた。

しかし綾小路が自分を見ていることに気づくと、彼女は慌てて視線を前へ戻す。

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

堀北にそう返して、彼もまた前を向くことにした。

「それにしても、さっきの黛の演説は上手かったな」

話題は先ほどの柚椰の話へと移る。

「そうね。平和主義の平田君には出来ない方法だわ」

「学校という共通の敵を作ることで反骨心を煽る。日頃から馬鹿にされてるこのクラスだから出来る方法だな。結果として対立も収まってクラスの方針も決まった。スタートとしては中々良いんじゃないか」

「他のクラスはどうするかしら。AクラスやBクラスが徹底してポイントを抑えるつもりなら、私たちも覚悟しなければいけないし。ここで差を広げられるわけにはいかないわ」

「上のクラスを目指すのは大変だな……」

「貴方は本当に上のクラスに上がることに興味がないの？」

以前指導室に呼ばれたときのことを堀北は思い出していた。

あの時から一貫して綾小路はAクラスに上がることに興味を示さない。

それが彼女には今ひとつ理解できないのだろう。

「別に不思議なことじゃないだろ。このクラスで全員がAを目指してるわけじゃない。毎月お小遣いが増えれば嬉しいし、運良くAクラスに行けたらつくらくらいだろ」

「この学校に入る人たちは、その特権を生かすために入学したと思っただのに」

この学校は入学すれば進学先や就職先が約束されるという触れ込みだった。

それに多くの生徒が期待していたことは事実だろう。

「人によって理由はまちまちだろう。お前だって本当に特権を生かすために入学したわけじゃないだろ」

「……何が言いたいなの？」

暗に自分の兄のことを言われたと察したのか、堀北は綾小路を睨む。

綾小路は涼しい顔でその視線から目を逸らす。

「この学校に特権以外のものを求めて入学する人間もいるって話だ」

「貴方もそうだってことかしら？」

「どうだろうな。とにかく、無闇に人を詮索するものじゃないってこ

とだ」

「……そうね」

自分のことを触れられたこともあつてか、堀北はそれ以上何も言わなかった。

程なくして先行していた平田たちが立ち止まる。

「ここなら日差しも遮れるし、周囲に誰かいて話を聞かれることもなさそうだね」

場所は森から少し入った木陰。

炎天下の中浜辺にいた彼らにとつてはかなり良い環境だ。

「ひとまず荷物をここに置いて、何人かでベースキャンプに相応しい場所探し。そして地図を埋めるために島を探索しようと思う」

そう言つて平田は早速探索志願者を募つた。

「はいはい！ 俺行く！ スポットバッチシ見つけて来るからさ！」

真つ先に手を挙げたのは池だった。

彼に追従するように山内や一部の男子も手を挙げ始める。

「俺も行くぜ。じつとしてるのは性に合わねえからな」

須藤も探索に乗り気らしく、自信ありげに挙手をした。

「私も行くよっ」

男子ばかりが志願する中、唯一の女子志願者として櫛田が名乗りを上げた。

その姿を見て、彼女狙いの男子たちの目の色が変わった。

そして彼らも次々志願して気がつけば志願者は11人になった。

志願者の中には綾小路も交じっている。

「11人かな。あと1人参加してくれれば4チーム作れそうなんだけど」

「黛は行かないのか？」

平田が全体に呼びかけている中、綾小路が手を挙げてなかった柚椰に話を振る。

「見張り番には男子も残っていた方がいいかと思つてね。平田が探索に行くなら俺は残るつもりだよ。探索してる間にこつちでマニユア

ルから必要なものを纏めておくことも出来るからね」

つまり探索の間に先の方針で決めたクラスに必要なものをピックアップしておくようだ。

あとで時間を設けて話し合いをするよりは遥かに効率的な時間の使い方だろう。

「俺からしたら君が手を挙げたのが意外だったけど」

「何かしら役割を持ってないと、クラスで浮くからな」

そうこうしていると、彼の傍で控えめな手が挙がった。

平田がその手を見て安堵したように指名する。

「ありがとう佐倉さん。これで12人。3人ずつの4チームで行こう。今が1時半だから、成果の有無にかかわらず3時までにはここに戻ってこよう」

そして各自が好きにチームを組んでいった。

綾小路と、最後に手を挙げた佐倉はその輪に入れずポツンとしている。

「よ、よろしくね綾小路君」

「ああ」

そうして残ったのは彼ら2人と、そして――

「実に清々しい太陽だ。私の体がエネルギーを必要としているねえ」

唯我独尊、傍若無人の御曹司。高田寺六助その人だった。

何はともあれ、探索組は森の奥へと足を踏み出した。

青々と生い茂った緑。奥へと進むたびにそれは深くなる。

太陽は未だ頭上から絶えず照り続ける。

直射日光ではないものの、ジメツとした暑さが森の中に広がっていた。

「暑いな……」

シャツの首回りを掴み、扇ぎながら綾小路は眩く。
ふと彼は前方をズンズンと進む男に声をかける。

「高円寺」

「嗚呼、美しい！ 大自然の中に悠然と佇む私は、美しすぎる。まさに究極の美！」

会話が成立しないということを察し、綾小路は諦めた。

必然的に彼が会話できるのは1人に絞られる。

「佐倉は偉いな」

「えっ!？」

話しかけられると思っていなかったのか、彼の後ろを歩いていた佐倉の体がビクリと跳ねる。

「あと一人欲しいって言われて手挙げただろ」

「え、あ、うん、でも私は偉くなんてないよ。自分でもなんで手を挙げたんだらうって少し混乱してる……」

そう言って彼女は遠慮がちに綾小路の横に並んで歩き出す。

「失礼かもしれないが、正直意外だった。佐倉はああいった場面では手を挙げるタイプじゃないと思っていたからな」

「だって……綾小路君が、その、手を挙げたから……」

そこまで言うのと佐倉はハツとしたように顔を上げて、慌てて身振り手振りを交えて声を張り上げた。

「ち、違うんだよ!？」 話せる人がいないから、だからその、つてことではない!? 男の子の中だと、綾小路君が一番一緒にいて落ち着くからってだけで……いや、そういうことじゃなくて!」

自分でも考えがまとまっていなのか佐倉は目を回している。

混乱したまま、彼女は小走りに前に飛び出した。

「あ、おいつ危な——」

「わわわっ!？」

前をよく見ていなかったためか、佐倉は大木の根っこに気づかず足を引っ掛けてしまう。

綾小路は慌てて手を伸ばして彼女の腕を掴み、なんとか転倒を阻止した。

「大丈夫か？」

「う、うん……ありがとう」

うつすら頬を赤らめながら礼を言う佐倉。

それは転びそうになったことへの恥ずかしさか、綾小路に助けられたことへの恥ずかしさか。

「前をよく見て歩いた方がいいぞ」

「うう……」

忠告されて佐倉は俯く。

綾小路が言うまでもなく、この森は歩くのにかなり苦勞する。

樹木が生い茂っているため道はかなり入り組んでおり、まっすぐ歩くことができない。

加えて時折斜面にもなっている所為か、無駄に体力を消耗してしまうのだ。

先頭をどんどん突き進む高円寺をなんとしても見失わないようにしなければならぬ。

「佐倉、ちよつと急ぐぞ」

「え、あ、うんっ」

2人は高円寺を見失わないように、小走りで彼の後を追いかけた。

一方その頃、荷物番をしている待機組はというと――

「あつつくい……日陰でも暑くい」

「そりゃ夏だもん、暑いに決まってるじゃん……」

「でも流石にこの暑さの中でテント暮らしかマジあり得ない……」

木陰に腰を下ろしてぶうたれていた。

待機組はほとんどが女子で、そしてそのほとんどが木陰でブツブツ不満を漏らしていた。

「グフ……俺氏、この夏一番のピンチですぞ……」

「……」

待機組の男子である外村と幸村は女子たちとは離れたところに腰を下ろしてぐったりしていた。

元々比較的体力がない2人は既にグロッキーらしい。

全員の様子を一通り見た柚椰は彼らとはまた別の木の根元に腰を下ろした。

「柚椰君は探索に行かなくてよかったの？」

「彼が腰を下ろしたすぐ隣に堀北がやってきた。」

彼女も柚椰の隣に腰を下ろす。

「さつきテントを運びながら歩いているときに平田と話し合っていたんだ。探索と待機でグループ分けをするなら、俺たちはそれぞれの組に分かれたほうがいいだろうってね」

「なるほど。平田君が探索組に行ったから、貴方は待機組にいることにしたのね」

「そう。待機している時に何も起きないとは限らないからね。あと、君の体調も心配だったから」

「そ、そう……ありがとう」

堀北は羽織っているジャージをきゅつと握りながらポソリと礼を言った。

「さて、じゃあ早速だけど必要なものを一通りピックアップしてみようか」

柚椰は平田から受け取っていたマニュアルを開き、ポイントで買える物の一覧を見た。

ふと堀北は気になっていたことがあったのか、マニュアルを見る柚椰に声をかける。

「ねえ柚椰君」

「なんだい？」

「AクラスやBクラスはこの試験、どう挑んでくると思う？」

その問いに柚椰は顎に手を当て思案する。

「Aクラスは今回、方針としては節約型かな。下のクラスとの差を自分から詰めるとは考えにくい。それにスポットの占有も積極的に狙ってくると思うよ」

「Bクラスは？」

「クラスのスタイルを考えたら俺たちと同じ方針だろうね。上へ上がることでも勿論考えているだろうけど、それよりもクラスの輪を大事にするだろう」

「じゃあ……Cクラスはどう来ると思う？」

堀北がそう尋ねると、柚椰は再び思索した。

「なんとも言えないね……Bクラスへ上がるためにポイントを稼ぎにくることも考えられるし、俺たちDクラスとの間に差があるから現状維持を考えるかもしれない」

「それって、さつき貴方が言っていた最初の選択肢ってことかしら？」

堀北は先ほど柚椰が全員の前で提示した選択肢の一つ目を思い出した。

「そう、ポイントを惜しみなく使ってこの試験をバカンスとして過ごす。さつきも言ったけど、実際のところこれも賢い選択なんだ。節約に固執してクラスがギスギスするよりは遥かに良い選択だ。各クラス間の差を考えると、この方法を取る可能性が1番高いのがCクラスかな」

AクラスとBクラスの差。

BクラスとCクラスの差。

CクラスとDクラスの差。

この中で最も差が大きいのが三つ目だ。

未だ大差がついている現状を考えると、

Cクラスが方針をバカンスに決めることはありえない話ではないと柚椰は指摘する。

しかし堀北は理解できないのか頭を抱えていた。

「理解に苦しむわ。試験を放棄して何の得があるのかしら」

「さつきも言ったけど、この試験において最悪のケースが自滅だ。クラスの崩壊はこの試験だけの問題じゃない。今後の学校生活、それこそ次の特別試験にさえ影響する。先を見据えて考えると、今この試験を円満に過ごすという選択は間違いじゃないんだ」

「でも、わざわざクラス間の差を縮めるなんて自分の首を絞めている

ものじゃない？」

柚椰の話聞いてある程度は納得できた堀北だったが、やはり気になるものは気になるようだ。

与えられている300ポイントを湯水のように使えば、必然的に他クラスとのポイント差は生まれる。

他クラスがポイントを節約していれば、その分だけ試験後のクラス間の差が縮まるのだ。

試験を放棄するということは、転じていずれ寝首を搔かれる可能性を高めることになるのだ。

クラスの輪も勿論大切だが、デメリットの方が大きいのではないかと彼女は考える。

しかし、彼女の考えに柚椰は異を唱えた。

「鈴音、この試験がただの節約合戦だと思ったら大間違いだよ？ 既に与えられた300ポイント。そしてスポットを占有して得られるボーナスポイント。どちらも確かに自分のクラスにとってプラスになるシステムだ。けれど、この試験において他クラスより優位に立つ方法は他にもあるんだよ」

「どういうこと？ ポイントの消費を抑えて、スポットを占有してボーナスを稼ぐ。それがこの試験の必勝法じゃないのかしら」

「それはあくまでセオリー通りの戦い方さ。自分たちのクラスのポイントを稼ぐ、尚且つ他のクラスの足を引く方法。なんだったら300ポイントなんて全部使って豪遊して過ごしたとしても、最終的には他クラスとの差が縮まっている方法が一つあるんだ」

そこまで言われて堀北は一つの可能性に思い当たった。確かに存在する。

自クラスがポイントを稼ぐ、尚且つ他クラスのポイントに干渉できる方法。

この試験の最終日にある一つの目玉。

「リーダー当てってことね？」

「正解」

堀北が出した答えに柚椰は満足そうに笑う。

「当てればプラス50ポイント。加えて他クラスがマイナス50ポイント。他のクラスを引き摺り下ろして自分たちがのし上がる強引にして強力な方法だ」

「柚椰君は他のクラスがリーダー当てに参加すると思う?」

「さあ、まだなんとも言えない。でもどのクラスもリーダーを堂々と公開するほど馬鹿ではないだろうから警戒はしているだろうね。自分たちが参加しないにしても、他のクラスにバレたらマイナス50ポイントのリスクがあるんだから」

「要は如何にしてリーダーが誰か分からないようにするか。そしてその上で如何にして他のクラスのリーダーが誰か探るってことね」

「その通り。この試験はクラスの輪を守り、リーダーを守りつつ、他クラスのリーダーを討ち取る。防衛と攻略を同時並行でやらなければならぬ試験ってことさ」

そこで一旦会話を打ち切り、柚椰はマニュアルを片手に立ち上がった。

「全員集まって。今から全員が必要と思うものを選んでいくよ」

柚椰が呼びかけたことで、木陰で休んでいた者たちは腰を上げて彼のところへ集まっていった。

「凡人達に質問があるんだがいいかな?」

先陣を切って森を進んでいた高円寺が振り返り、後ろからついてくる綾小路と佐倉にそう尋ねた。

彼らが返事をする前に、高円寺は続ける。

「君達には、この場所がどんなふうに見えるのか聞かせてもらえないだろうか」

「え? ……ど、どういう意味かな? 綾小路君」

高円寺の視線から逃げるように綾小路の背中に隠れながらそう尋

ねる佐倉。

「どんなって……森だな、としか思わないが」

綾小路が代表して見たままの感想を述べる。

しかしその返答がお気に召すものではなかったのか、高円寺は再び前へ向き直ってしまった。

「オーケー。分かったよ、気にしないでくれたまえ。やはり凡人は凡人ということだね」

そう言い残して彼は再びズンズンと先へ進んでいってしまった。

「何か変わったこと、あったかな？」

「いや……」

おずおずと尋ねる佐倉に綾小路はそう返す。

しかし再び高円寺が歩き出してしまった以上、ここで立ち止まっているわけにもいかなかった。

「佐倉、もし持ってたらハンカチ貸してくれないか」

「え、あ、うん、あるよ？」

佐倉はジャージのポケットから綺麗に折りたたまれたハンカチを取り出して綾小路に渡す。

それを受け取ると、綾小路は傍に生えていた木、そこから生えている枝の一つにそれを括り付けた。

「帰るときに迷わないための目印にな」

「あ、なるほど。頭いいねっ」

帰るときのことを考えていた綾小路を佐倉は褒める。

「佐倉、ここからは少しペースを落とそう。俺も少し疲れてきた」

一緒にいる佐倉のことを考えてか、そんな提案をした綾小路。

彼の気遣いが伝わったのか否か、佐倉はコクリと頷く。

「それと、ほら」

歩き出す前に、綾小路は佐倉に手を差し出した。

その手の意味がわからなかったのか、佐倉はキョトンとした顔で綾小路を見る。

「ここは足場が悪いからな。お互い転ばないように繋いでおこう」

彼がそう言うと、佐倉の顔が一瞬にして茹で上がった。

「あ、あわわわ、あ、あやのこここうじくんと、私が、て、てててを」
「佐倉、大丈夫か。呂律が回ってないぞ」

最早日本語かどうかすら怪しい言語を漏らす佐倉に綾小路が尋ねる。

「だ、だだ大丈夫だよ!? そ、そうだね! 転んじやつたら危ないからね!」

声を張り上げて何でもないとアピールした佐倉は、やがて恐る恐る差し出された手に自分の手を重ねた。

そうして2人はゆつくりと、しかし確かな足取りで森の中を再び歩きただした。

彼らは拠点を決め、設備を整える。

「うわ……凄い……！」

森の中を進み、やがて辿り着いた先に広がる景色に佐倉が感嘆の声を上げた。

人が切り開いたと思われる道を見つけ、進んで行ったその先に。

山の一部にぽっかりと空いた大きな穴。

それは洞窟と呼べるものだろう。

一見すると天然のものに見えたが、内部はしっかりと舗装されているように見えた。

「アレってもしかして……スポット、なのかな？」

「さて、どうだろうな」

眼前に広がる巨大な洞窟を、佐倉と綾小路は観察していた。

ちなみに高円寺はいつの間にか見失ってしまった。

しかし二人の関心は高円寺よりも目の前の洞窟に向けられていた。

もしこれが本当にスポットに指定された場所ならば、どこかにそれを記す証拠があるはずだ。

それを確かめるべく洞窟に近づこうとしたところで、穴の奥から一人の男子が出てきた。

「佐倉、ちよつと」

「え、ええっ!？」

綾小路は即座に佐倉の腕を引き、物陰へ引き込み身を潜めた。

突然のことで目を白黒させている佐倉を他所に、綾小路は洞窟から出てきた男の様子を伺う。

男は入り口の前で立ち止まると、そこから動かずどこかを向いて静かに佇んだ。

その状態から1、2分ほど男はそのままだった。

自由行動になってからまだ1時間ほどだ。

時間を考えると、男は迷うことなくこの場所に來たと推測できる。

そして何より問題だったのは、男が手にカードのようなものを握っていたことだ。

男を観察していると、内部から男に向けられた声が聞こえてきた。その声を聞き、物陰に隠れている二人は再び息を殺し身を潜める。「この大きさの洞窟があればテントは2つで十分です。ね葛城さん。それにしても運が良かったです。こんなに早くスポットを抑えられるなんて」

「運？ お前は今まで何を見ていた。ここに洞窟があることは上陸前から目星が付いていたぞ。見つかるのは必然だったということだ。それと言動には気をつける。どこで誰が聞き耳を立てているかわからないんだ。俺にはリーダーとしての監督責任がある。些細なミスもしないよう心掛ける」

「す、すみません。でも上陸前から、つてどういう意味ですか……？」
「船は栈橋につける前、何故か遠回りをするように島の外周を一周した。アレは生徒たちにヒントを与えるための学校側の行動だったんだろう。船のデッキから森を切り開いた道が見えていたからな。あとは上陸した栈橋から道への最短ルートを進むだけでいい」

「どうやら葛城と呼ばれている男は存外優秀なようだ、と綾小路は警戒を強めた。」

「で、でもただの観光というか、景色を楽しむ配慮だった可能性はないんですか？」

「観光で回るにしては旋回が速すぎた。それにアナウンスの内容も妙だったからな」

「俺にはその、全然感じられなかったですけど……葛城さんは学校の意図を見抜いていた。それでここに洞窟があることが分かったんですね……流石です！」

「次に行くぞ、弥彦。スポットを抑えられた以上長居は無用だ。あと2ヶ所ほど船から見えた道があった。その先も施設等、何かがあるはずだ」

「は、はいっ！ でもこれで結果を残せば『坂柳』も黙るしかありませんね！」

「内側ばかりに目を向けていると足を掬われるぞ」

「そうは言いますが、警戒するとしたらBクラスくらいですよ？特にDクラスなんて不良品の集まりじゃないですか。ポイント差を考えても無視でいいかと」

船の上での一幕同様、AクラスはDクラスなど眼中にないらしい。脅威以前に相手にすらされていないのが現状のようだ。

そうこうしている内に男2人は会話を終え、別のスポットを目指して歩き出した。

彼らの足音が聞こえなくなるまで、隠れている2人はじつと息を殺していた。

「行ったか……」

2分ほど経過した後、綾小路は顔を覗かせて確認した。

男たちの姿はなく、周囲に人の気配もない。

それを確認し一息ついたところで、彼は手に掛かる温もりの比重が重くなったことに気づいた。

彼は同行していた少女を慌てて抱き寄せてからそのままの状態だったことに今更ながら気づく。

「悪い佐倉……佐倉？」

「きゆうっ……!?!」

綾小路が視線を移すと、そこには何故か半分意識を失って弱り切った佐倉が居た。

「だ、大丈夫か？」

思わずそう尋ねる綾小路。

「だだだ、だい、だいじょうぶ、ぶぶ……」

体から湯気が立ち上りそうなほど顔を真っ赤にし、へなへなどその場に座り込む佐倉。

明らかに大丈夫ではなかった。

「はふ、はふ、はふっ……し、死ぬかと思った……心臓が止まるかっ」「流石に大げさだろう」

佐倉はズレたメガネを直しながら大きく深呼吸をして息を整える。

「さっきの二人組。話の内容からしてAクラスみたいだったな」

綾小路の関心は先ほどまでいた二人の男に向けられていた。気にかかるとすれば、彼らがこの場を放棄して離れていった点だろうか。

誰か見張り役を残すわけでもなくその場を離れた彼ら。スポットを横取りされる可能性も考えられたはずだ。

にも関わらず、彼らがこの場所を離れたということは……

「やっぱりな」

洞窟の中へ入ったことで、綾小路はその理由を理解した。

洞窟の壁に埋め込むようにして設置されているモニター付きの端末装置。

その画面にはAクラスの文字があり、7時間55分と表示されていた。

つまりこれによってスポットをどのクラスが占有しているかを証明するのだ。

このカウントが0になるまで、他クラスは一切手を出すことが許されない。

無断でこの場所を使うことも不可能。

だから安心して彼らはこの場所を離れたのだ。

そして試験中、このスポットを占有し続ければ最大21ポイントが手に入る。

不参加一名によるマイナス30ポイントを十分に補えるプラスポイントだ。

「アイツら、他のスポットにも目星がついてたみたいだったな」

「そ、そうだね。船から見て分かったって……」

どうやら佐倉も混乱はしていながらも彼らの会話は耳に入っていたようだ。

「島に上陸する前からヒントは与えられていた。あの葛城という男はそれにいち早く気づいたってことだろ」

「ね、ねえ綾小路君。じゃあその葛城、君？　って人がリーダー、なのかな？」

佐倉は彼らの会話からそう推測していた。

彼女の言う通り、葛城がリーダーであるという可能性は高い。

しかし、綾小路は腑に落ちない点があった。

洞窟を確実に抑えるためとはいえ、Aクラスは占有権を得るためにキーカードを通した。

そしてその現場を自分たちに見られた。

それは自分がリーダーであることを明確に知られてしまったことになる。

勿論、他クラスの誰かに見られているとは思わなかったのだろうが、明らかに不用心だった。

「周囲を警戒する素振りを見せながら堂々とカードを持ち、会話の中で自分がリーダーと言った。用心深い奴が取る行動にしてはちぐはぐじゃないか……?）」

念のため洞窟を奥まで調べて見たが、やはり誰か人が隠れている様子はない。

「どど、どうしよう。すごい秘密知っちゃったね……!」

極めて重要な情報を耳にしてしまい、佐倉は興奮気味だ。

「後で俺の方から平田に報告しておくよ」

口下手な佐倉が自分から報告することは難しいだろうと思い、綾小路はそう申し出た。

時刻は3時を回った。

約束通り、探索組は一旦帰還して荷物番組と合流した。

各々の成果を報告し合っている中、池が興奮気味にクラスに報告した。

「川があっただよ! すげえ綺麗な川! そんで近くになんか変な

装置もあつてさ！ 多分アレがスポットだと思っただよ！」

「どうやら池の班は大きな成果を持って帰ってきたらしい。」

他クラスに奪われないよう、班員の一人が川に残って待機しているらしい。

「それは大手柄だね。水源が確保できるのは大きいよ。じゃあ早速全員で川に向かおうか」

平田の号令の下、一同は早速池が見つけたという川へと向かった。

集合場所から歩いて20分ほどしたところに静かに流れる川があつた。

幅は10メートルほどある立派なもので、周囲は深い森と砂利道に囲まれている。

明らかに人の手が加えられているもので、学校側が整備したものと分かる。

その証拠に不自然な大岩が一つあり、そこに端末装置が埋め込まれていた。

「どうだよこれ！ すげえだろ！」

池が川を指差し、得意げに鼻を鳴らす。

「うん、綺麗な水に日光を遮る日陰。均された地面。ベースキャンプにするのに理想的だね」

「大手柄も大手柄だ。今の所、池がぶつちぎりのMVPだよ」

「へへっ！ だろお〜？」

平田と柚椰からお墨付きを貰い、一層ドヤ顔をする池。

周囲に他クラスの生徒がいる様子はなく、川辺の森にはスポットであることを示す立て看板が刺さっていた。

ここを占有すれば、他クラスがこの川を利用することは出来ないようになっている。

「ここをベースキャンプにするのは確定として、問題は占有するかどうかな」

「え、しないなんて選択肢があるのか？」

平田の発言に池が反応する。

その問いに答えたのは柚椰だった。

「占有は端末にキーカードを通せばそれで完了だ。だけど8時間でもセツトされる上、更新をするならもう一回カードを通さないといけない。問題はこの操作をしているところを見られる危険があるんだ」

「黛君の言う通りだよ。端末にキーカードを通せるのはリーダーだけ。ここは森で囲まれているから、どこで誰が目を光らせているか分からないよ」

平田の言う通り、この場所は全方位を森で囲まれている。身を隠す上でこれ以上ないほど良い条件だ。

物陰から監視されていても気づくのは難しいだろう。

「じゃあ囲むようにしてやればいいんじゃないか？ それなら外からなら誰がリーダーか分からねえだろ？」

その提案をしたのは意外にも須藤だった。

彼の提案は、リーダーと装置を囲むように他の生徒が立つことで、外からの視界を遮るというものだ。

この方法ならリーダーがバレるのを防げる。

クラス一同、ここを占有する方針で意見が纏まり、占有時は須藤の案を用いることに決まった。

「じゃあ後は、誰をリーダーにするかだね。肝心なのはそこだ」

この試験はスポットを占有するか否かより、リーダーを誰に据えるかが大きな鍵となる。

ここでのミスは命取りになりかねない。

その所為もあつてか、誰もがその重役を避けたいと思っている中、櫛田が皆に集まるように言い、円を作らせると小声で話し出した。

「色々考えてみたんだけど、平田君や軽井沢さんは嫌でも目立つちゃうでしょ？ でも、リーダーを任せるなら責任感のある人がやったほうがいいよね。その両方を満たしているのは堀北さんだと思っただけど、どうかな？」

推されている本人である堀北は、特に表情を変えることはない。

誰がリーダーに相応しいか冷静に見極めているように見える。

数秒ほど思索した後、考えが纏まったのか彼女は判断を下した。

「分かったわ。私が――」

「いや、リーダーは俺がやるよ」

堀北の返答を遮るようにそう言ったのは柚椰だった。

いきなりの申し出に彼女だけでなく、クラス中の視線が集中した。

「いいのかい？」

「リーダーと言つてもやることはそう変わらない。専任の仕事は占有の更新くらいだからね。要は他のクラスにバレないように立ち回ればいいだけだ」

平田に対し、柚椰はニコリと笑いながらそう言った。

しかしいきなり割って入ってきたことに堀北がいい顔をするわけもない。

「ちよつと柚椰君、リーダーは私が――」

「鈴音は具合が悪いだろう？ 可能な限り安静にしていたほうがいい」

柚椰が堀北をリーダーに据えることに待ったをかけた理由は言わずもがな。

彼女の体調不良だ。

「別に大したことじゃないわ。薬だつて飲んでるのだし心配には及ばないわよ」

「君のことだから変に気負って頑張りすぎてしまうのが目に見えるよ。いいからここは俺に任せて」

大丈夫だと主張する堀北に対し、安静にしているべきだと主張する柚椰。

お互い譲らない中、周りの生徒たちはどちらに付くかと言われれば後者だった。

「堀北さん体調が悪いのかい？」

寝耳に水だったことで平田は驚いていた。

他の生徒も堀北がそんな素振りを見せていなかったためか同じような反応だった。

「船に居たときから寒気があるらしいんだ。一応薬は処方されているみたいだけど、用心に越したことはない。だから余計な仕事はしないで、身体を休めたほうがいい」

堀北の代わりに柚椰が掻い摘んで事情を説明する。

それによって周りには堀北を心配するような雰囲気立ち込め始めた。

「だから大丈夫だって——」

「鈴音、俺は君がリーダーに相応しくないから申し出ているわけじゃない。君にもしものことがあつてほしくないから、君を心配しているからだよ」

「……柚椰君は心配しすぎよ」

「そうかもしれないね。でも、親友を心配するのは当然じゃないかな？」

「——っ！ 柚椰君はズルいわ」

柚椰の言葉が決め手となったのか、堀北はプイツと目を逸らしてそう呟いた。

その頬は紅潮しており、柚椰の言葉が何かしら響いたのは確かかうだ。

「分かったわ。リーダーは柚椰君に任せる」

「うん、じゃあそれでいいね」

堀北の了承を聞いた柚椰は平田に自分がリーダーを務めることを改めて報告した。

その言葉を聞き、平田はすぐに茶柱先生のもとに行き柚椰の名前を伝える。

程なくしてカードを受け取って戻ってくると柚椰にそれを渡した。

勿論誰かに見られている可能性を考慮し、全員がそれとない動作で装置に触れて誰かわからないようにカモフラージュした。

「ねえ黛君」

「なんだい？」

スポットを占有し終えた矢先、櫛田が柚椰にズイズイと近づいた。心なしか彼女の圧は鬼気迫るようなものに見える。

「さつき堀北さんのこと名前で呼んでたよね？ それに堀北さんも黛君のこと名前で呼んでたし」

同じことを気になっていたのか、他の生徒たちも一斉に柚椰と堀北に群がっていく。

「そうだよ！　なんかお互い名前で呼びあつてたし！」

「黛テメエ！　抜け駆けは許さねえぞ！」

柚椰には主に男子からの怨嗟の声が、堀北には主に女子からの揶揄いが集中した。

「この前二人で遊んだ時に鈴音から名前で呼び合おうって言われてね」

「私たちは親友よ？　名前で呼び合うのは当然じゃないかしら」

二人は各々事情を説明した。

堀北はなぜか胸を張って得意気である。

「むう〜!!」

しかしそんな説明で納得しない者がここに一人いる。

そう、櫛田である。

彼女はまるで大福のように頬を膨らませて、心底不満そうだ。

「じゃあ私も柚椰君って呼ぶから！　私のことも桔梗って呼んで！」

堀北への対抗心か、彼女はそんな提案をする。

「櫛田さん、無理強いは良くないわよ。私と柚椰君は親友だけれど、貴女は彼の友達じゃないかしら？」

「堀北さんは黙っててよ！　私と柚椰君の問題なんだから！」

何故か名前呼びに拘り、一步も譲らない二人。

「黛〜！　俺は勇気を出してようやく桔梗ちゃんと呼ぶ権利を獲得したのに貴様ア〜！」

船の上で櫛田に名前で呼ぶことを了承してもらった池は嫉妬で目が血走っている。

「黛、堀北のこと名前で呼ぶなら俺のことも名前で呼んでくれよ」

須藤は櫛田同様、何故か堀北に対抗心を燃やしていた。

「まあまあ、とりあえず一旦この話は終わりにして今後のことを話そうよ」

收拾がつかないと判断した平田がそう提案する。

「そうだね。じゃあ健も桔梗もそれでいいかな？」

「お、おうー！」

「――！ うんっ」

柚椰が名前で呼んでくれたことに須藤と櫛田は目を輝かせた。

ひとまず彼らの熱は収まったと言っていていいだろう。

「さつき待機している間にマニュアルから必要だと思っものを通り選んでおいたんだ。その確認と、まだ足りなかったら追加で候補に入れようと思う」

「そうだね。じゃあ選んだものを教えてくれるかな？」

平田と柚椰を中心に、全員が集まってマニュアルを見る。

「まず追加のテント。1つが8人用だから最低でも追加で3つ必要だね。本当はテントの定員は当てにしたらいけないんだけどここは妥協しよう」

「そうだね、流石にあぶれた人を野宿させるのは良くないからね」

「次に調理器具一式、あと調味料。これは必須だ。あと簡易浄水器。これは今確保した川の水がそのまま飲める飲めないに関わらず必要だと思うんだ」

「確かにそうだね。見た限りだと綺麗だけど、万が一ってこともあるしね」

柚椰がピックアップしていくものに平田は概ね肯定的だった。

同じく男子たちも反対する余地はないためコクコクと頷いている。

「食料とミネラルウォーターはもしもの時に買えばいいからひとまず保留。そして食料確保のために釣竿4本。この1週間は魚メインになりそうだね」

「さ、流石にこの森にイノシシとかクマとかはいねえもんな……いねえよな？」

周囲を覆う森を見回し、身震いをする池。

「そして簡易シャワー。これは男女2つずつで。もし男子が川で水浴びでもいいって言うなら女子に譲ってもいいしね」

「トイレならまだしも、シャワーなんてそんなにいるか？ 余計な設備じゃね？」

些か無駄な出費ではないかと男子の中から疑問が飛び出す。

「水に関しては川の水を使えばいいから問題ないとして、問題は回転率だと思うんだ。トイレと同様に1つのものを全員で回すのは現実的じゃない。だけど男女それぞれ1つずつの場合、これまた回転率が悪い。シャワーを使うのが夕方以降だと考えると、少ないシャワーを全員で回すとするとどうしてもその後の時間が取られる。点呼の間にシャワーを浴びていて遅れましたなんて笑い話にもならないだろう?」

「まあ、確かに。中学のときの修学旅行でも、風呂入ってて晩飯食いそびれた奴いたし」

須藤は中学時代、そんな間抜けなことをして先生に怒られていた同級生のことを思い出した。

他の生徒も中学時代に同じようなクラスメイトがいたのか、苦笑いをしていた。

「現実的に考えた最低ラインが、トイレとシャワーは男女それぞれ2つずつ。この辺りだと思う」

「僕も賛成かな。後のことを考えると、ここで出費を惜しむべきじゃないと思う」

平田も柚椰の意見には賛成の様子だ。

「今言ったのを全部纏めると、大体110ポイント。これで最低限の環境が整う」

「いきなり100ポイント以上の消費は痛いけど……全員で生き残るためだもんなー!」

総額に一瞬苦い顔をした池だったが、背に腹はかえられぬと割り切った。

「食料が確保できれば消費は抑えられるし、スポットも賢く占有していけばプラスになる。スタートラインとしては良いんじゃないかな」

平田が肯定的な姿勢を取ったことで、女子たちも賛成の雰囲気包まれた。

ちなみに池同様、当初は節約志向だった幸村も今は文句を言うこともなかった。

「よし、じゃあ今決めた物資を茶柱先生に言ってポイントで買うって

「ことでいいかな？」

「「さんせい！」」

女子たちは平田の決定に賛成した。

男子も皆納得しているようで反対意見はない。

数分後、茶柱先生が業者を伴って設備の設置、並びに物資の供給に
来た。

業者が仮設トイレと簡易シャワーを設置している間、生徒たちは届
いた物資を確認する。

まず最初に浄水器と鍋を取り出すと、柚椰が全員を見回した。

「とりあえず物資が来たし、川の水が飲めるかどうか試してみようか。
まず生で飲めるか。もし無理そうなら浄水器を使うか、鍋で煮沸して
みよう」

「おー、なんか理科の実験みてえだな」

須藤は中学の時の理科の授業を思い出したのか、少し楽しそうだ。
勉強嫌いだった彼でも理科の実験は楽しかったようだ。

一同は再び川のすぐ近くまで移動した。

「この中で川の水を飲むことに抵抗無いつて人はいるかな？」

平田が全員に促したが、女子は概ね拒否感ありといった様子で
手を上げない。

男子もアウトドアの経験がないのか、いまひとつ踏み切れない様子
だ。

「俺小さい頃よく親に連れられてキャンプしてたから平気だぜ？ 見
た感じ綺麗だし、一口飲むくらいならやるけど」

池がそう言って挙手をする。

普段はお調子者な彼だが、まさかこういつた場面で頼れることにな
るとは。

僅かだが女子の池に対する見る目が変わった。

「ありがとう。じゃあまず池君が味見をして、大丈夫だったら備蓄の
水として蓄えよう。もしそのまま無理そうなら飲めるように浄水

するか沸騰させてみようか」

「オツケー！　じゃあ早速……」

池は川にゆっくり近づき、手で川の水を掬うと口へと運んだ。

全員が固唾を呑む中、池が水の状態を確認し終わると全員に向き直った。

「うん、普通に飲める。多分学校が川の状態も管理してんじゃねえの？」

「そうか。ありがとう池君」

池の勇気ある行動に感謝しながら、平田は全員を見回した。

「じゃあ備蓄の水とシャワーの水はこの川の水を使おう。勿論、そのままが嫌って人もいるから飲み水用で浄水器を通した水と沸騰させて殺菌した水も用意しておこうか」

「とりあえずここで水を汲んで、テントの近くで浄水なり煮沸なりさせたほうがいいね。男子何人か、水を汲むのを手伝ってほしい」

柚椰がそう促すと、須藤を始め力に自信のある男子たちが何人か名乗り出た。

彼らがバケツやポリタンクに水を汲み終わると、一同はテントを設置した場所まで戻った。

王は宴へと繰り出し、彼らは格闘少女を拾う。

時間は少し巻き戻り、試験開始直前。

Dクラスの生徒の集団から少し離れたところにCクラスの生徒が集まっていた。

担任である坂上先生が試験のルールやマニュアルの使い方などを一通り説明した。

先生が説明を終えて去っていくと、クラスのリーダーである龍園がクラスメイト全員を見回す。

「デメエら、この試験のルールは頭に叩き込んだな？」

ギロリと睨まれ、一同は身を竦ませ目を逸らす。

彼らは確かに坂上先生からルール説明は一通りうけた。

しかし、頭に叩き込んだかと言われると自信はない。

ましてや龍園に向かって堂々とそれを宣言できる者などいなかった。

「チツ、まあいい。全員がルールを把握していようがいまいが俺が理解していればどうでもいい」

最初から期待などしていなかったのか、龍園は別段不機嫌になることもなかった。

「方針を発表する。全員耳の穴かっぽじってよく聞け」

彼がそう言うのと、周りは一瞬で静寂に包まれた。

恐怖による支配は未だ健在のようだ。

「リーダーに関してはこの俺がやる。そして俺達Cクラスがこの試験をどう臨むかだが——」

龍園はニヤリと笑みを浮かべ、その先を口にした。

「——この試験は放棄する。300ポイント全て使ってバカンスを楽しむぞ」

彼のその言葉にクラスは騒然とした。

ざわざわとした喧騒を龍園は黙って傍観する。

「あの、龍園さん。試験を放棄するってどういうことですか……?」
彼の側近の一人である石崎が恐る恐るそう尋ねる。

「そのままの意味だ。このクソ暑い中、無人島で皆で力を合わせてサバイバルだあ? ハッ、ふざける。そんなもん俺は真っ平御免だ」

唾を吐き捨てるように龍園はこの試験のコンセプトを否定した。

「マニュアルにポイントで買えるもんは全部載ってる。全員好きなものを選んで好きに買って好きに遊べ。とにかくCクラスはポイントを節約するだの、協力して生き残るだなんてイイ子チャンな選択はしねえ」

「で、でもそれだとDクラスの奴らに差を詰められるんじゃない?…連中はただでさえクラスポイントが少ない。節約して乗り切ってくるかもしれないよ?」

「石崎、テメエ無能のくせに変に真面目チャンだなあ。ええ?」

僅かに口角を上げ、どこか可笑しそうに龍園は石崎を見る。

彼の眼光に本能的な恐怖を感じた石崎は冷や汗を浮かべた。

「猿が足掻こうが所詮は猿知恵でしかねえ。そもそも、この試験でポイントを節約して自給自足のサバイバルなんて本気でやってくるクラスはいねえよ。いるとしたらそいつらは相当な無能だ。救いようのねえカスだと笑ってやれ」

「ど、どういうことですか?」

「つまり龍園氏はこう言いたいのですよ、石崎氏」

話に入ってきたのは金田という男子。

龍園にその知力を買われている生徒だ。

彼はメガネをクイッと上げると、石崎を横目に語る。

「この試験において重要なのは、如何にして自分たちのクラスが円満に試験を終えるか。過酷な環境下でのサバイバルなど一学生たちが行うにはは些か無謀にすぎる。試験開始時の支給物資はクラス全員に行き渡るとは到底思えないほどに少ない。ポイントの消費を抑え、スポットを占有して物資を得ることは確かに試験を有利に運びます。しかし、1週間という期間を考えれば必ずどこかで綻びが生まれます。その綻びは時が経つにすれ大きくなり、そして破綻する。そう

なってしまうえばそれまでの苦労など水の泡。無駄な努力にしかかなり得ません。重要なのは、ポイントを如何に賢く使うか。転じてそれは、この1週間をどう過ごすかに焦点が当てられます。そこで龍園氏は大胆にも、我々Cクラスの方針を当初の予定であるバカンスに決めたのです」

金田の説明は概ね当たっていたのか、龍園はクツクツと笑う。

「金田の言ってることは概ね正解だ。この1週間、俺たちはポイントを稼ぐことも、節約することもしねえ。この試験の本質は『自由』。なら好きに遊ぼうが自由だろ。好きなだけ遊んで、遊びに飽きたらリタイアしろ。元のポイントが0なら何十人リタイアしようがポイントは減らねえんだからな」

それはあまりに奇抜な作戦だろう。

ポイントが0より下にはならないというルールを逆手に取った方法だ。

しかし、試験を放棄すると言われてはいそうですかと全員が納得できするわけもなかった。

「それじゃあ、Dクラスの奴らとの差を自分から縮めてるようなものだろ。いくら今大差がついてるからってその差に胡座をかくようなことをするのは反対だ」

龍園の方針に意を唱えたのは伊吹という女子。

未だ彼の支配に抗う生徒の一人だ。

彼女は自殺行為とも取れる龍園の方針に納得しかねるようだ。

しかし彼女の反対意見を聞いて尚、龍園は愉快そうに笑った。

「伊吹、俺がああ猿共をつけ上がらせるような真似をみすみすやると思うか？ 当然アイツらを潰す策は考えてある。アイツらだけじゃねえ。AクラスもBクラスも、一切合切引き摺り下ろす算段は立ててあるんだよ」

「成る程。リーダー当てですな龍園氏？」

金田は龍園の真の狙いに気づいたようだ。

彼の言葉に周りの生徒達も驚く。

「リーダーを当てればプラス50ポイント。だが肝心なのはそこじゃ

ねえ。当てられたクラスにマイナス50ポイントのペナルティが課せられるってところだ。例えば、俺たちが試験最終日にBクラスのリーダーを当てたとする。その場合、Cクラスにはプラス50ポイント、Bクラスにはマイナス50ポイント。即座に利益になるのは言うまでもねえが50ポイントだ。だが、クラス間の差に目を向ければその倍、100ポイント分の差が縮まることになる。上のクラスへ昇る足がかりになり、同時に他のクラスの足を引くことができる。後生大事に残してやがったポイントを、せこせこ占有で稼いだボーナスを搔つ攫つてやれるのさ」

これこそが龍園の作戦。

防衛ではなく攻撃。

徹底的に他クラスのマイナスを狙う超攻撃型。

他でもない龍園だからこそ実行できる策だ。

作戦の全貌を聞いた伊吹はひとまず矛を収めた。

「……分かった。一応は納得する。それで、リーダー当てはどうやるつもり？」

「詳しい作戦は俺が選出した人間にだけ教えるつもりだ。種はもう蒔いてある。とりあえずベースキャンプを決めるが、場所はもう考えてある。ついてこい」

そう言うのと龍園はクラスメイトを置いてスタスタと先に歩き出してしまった。

彼の後を追うように、クラスメイトも急いで移動を開始した。

数十分後、Cクラスは300ポイント全てを消費した。

午前3時30分。

川の畔にテントが5つ並んでいる。

Dクラスのベースキャンプの設営は恙無く進んだ。

川で汲んだ水も沸騰させたものや浄水器にかけたものをテントの側に置いたタンクに溜めてあった。

ともかく水は確保できた。とあれば次に確保するものは……

「皆、ちよつといいかな」

平田の点呼でクラスメイトが集合する。

「とりあえず拠点は決まって、水も十分に確保できた。次は食料と……あとは明かりの確保が必要だと思うんだ」

彼の言う通り水の次は食料、そして明かりが必要だ。

前者は当然ながら全員の食事のためには必須。

そして言わずもがな後者も重要だ。

夜に明かりがないというのは避けなければならない。

支給されている懐中電灯2本では心許ない。

何か別の方法で以って明かりを用意しなければならなかった。

「この辺りで焚火をするのに使えそうな枝を拾って燃料として集めておこうと思う」

「確かに火があると安心するもんな」

池は平田の意見に肯定的なようだ。

他の面々も焚火をするというのはいい案だと思っていた。

「食料確保は釣竿が4本あるから魚釣りに4人。森の中にも食べられるものがあるかもしれないから引き続きいて森の探索にも行きたいね」

柚椰は食料確保における具体的な役割を提示した。

「じゃあ魚釣りは俺が行くぜ」

「俺も俺もー」

いの一に名乗り出たのは須藤と池。

彼らは釣れる自信があるのか既に釣竿を手に取っていた。

他にも釣りに興味がある男子が2名いたため魚釣り係はすぐに埋まった。

「釣った魚を針から外すのって結構コツいるから出来なかつたら言っ

てくれ。まあ俺も釣りやったことはあっても釣れたことはあんまないんだけど！」

可笑しそうにゲラゲラと笑う池。

彼の発言に若干の不安もあるが、彼が経験者であることは確かだった。

そのためか後で申し出た男子二人は幾分安心しているようだ。

「じゃあ早速行ってくるぜ。バカみてえに釣ってきてやらあ」

「大船に乗った気で待っていてくれよ！ 大漁で帰ってくるからさ！」

須藤は自信に満ち溢れた言葉を残して早速川へと繰り出した。

それに続くように池達も釣竿片手にその場を後にした。

「大丈夫なのアイツら……」

池の発言もあつてか、篠原は若干心配そうだ。

彼女同様、女子も何人かは彼らの釣果が不安の様子だ。

「まあまあ、次は森の探索と枝拾いの人を決めようか」

「じゃあ今度は俺も探索に行くよ」

柚椰は先ほど待機していたからか、今度は探索に行くとしし出た。

同じように先ほど探索に行っていた男子も再び探索に行く手を挙げ始める。

そうこうしているうちに人数が一定数集まったことで、彼らは探索のために森へと入っていった。

「じゃあ最後、枝拾いだけどうしようか」

「それくらいなら私やるー」

「私もー」

比較的楽な仕事であるからか、女子達が一人また一人と名乗りを上げた。

体力に自信のない幸村や外村もこれならばと手を挙げていった。

「その辺にあるものを適当に拾ってくればいいんだろ。なら俺も行く」

他に名乗り出ている人がいるからか綾小路も手を挙げた。

何かしら仕事をおこうという考えなのだろう。

ある程度人数が集まったが、問題はグループ分けだった。

一人で出歩くのは危ないという考えから先程の探索同様2、3人ほどで1チームを作るようになった。

しかしこれまた先程同様綾小路はあぶれてしまった。しかも今回はあぶれたのは彼一人だ。

チームが決まった者達が次々出払って行く中、ポツンと残された綾小路。

まだここにいるどこか別のチームに加えてもらおうかと考え始めた矢先、彼のもとにトコトコとやってくる者がいた。

「あ、あの……私も、一緒に行ってもいい、かな……？」

そう、探索の時にも一緒に行動した佐倉である。

同情から名乗り出てくれたのかと少し悲しくなった綾小路だったが、これ幸いと飛びついた。

「助かる。でもいいのか？ 別に休んでもいいんだぞ」

「大丈夫。私も、クラスのために何かしておいたほうがいいかなって……」

彼女も綾小路同様、何か仕事をしておこうという考えのようだ。

似た者同士だな、と内心ホツとしながらも綾小路は彼女の申し出をありがたく受け取った。

「じゃあ行くか」

「う、うん」

「な、なあー！」

佐倉を伴って森へ向かおうとした綾小路に後ろから山内が声をかけた。

彼は小走りで綾小路達のところへ駆け寄ってくる。

「俺も手伝ってやるよ！ 人手は多い方がいいだろう？」

事前に名乗り出なかった山内だが、どうやら考えが変わったようだ。

「いいのか？ 須藤達について行って釣りの手伝いとかでもいいんだぞ」

「まあほら、こういう時は助け合いだろう？ なあ、佐倉」

「あ……は、はい……」

いきなり話を振られた佐倉は萎縮した様子で綾小路の背中に隠れて頷いた。

山内とは殆ど会話したことがない彼女。

緊張するのも無理はないか、と綾小路は内心佐倉を慮っていた。

「さて……ようやく一人になれた」

森の中を悠々と歩く男が一人。

彼はDクラスのリーダー、黛柚椰だ。

出発時に一緒にいた二人のクラスメイトとは既にはぐれていた。

いや、意図的に撒いたと言ったほうが正しいだろうか。

一人になる時間が欲しかったため、彼は班員を置いてどんどん先へと進んだ。

「まずは情報収集だ」

彼は頭の中で既にこの試験の作戦を練っていた。

各クラスのベースキャンプの場所。

島に点在するスポットの把握。

そして各クラスのリーダーの特定。

やるべきことは山積みだった。

「請け負った仕事もあるんだ。仕込みはしておかなければね」
ニヤリと笑い、彼は森の奥へと消えていった。

ベースキャンプからそう遠くない場所で、綾小路達は枝集めをして
いた。

あまり奥に行ってしまうと迷う可能性があった故の判断だ。

「な、なあ綾小路。ここだけの秘密にしてほしいんだけどさ」

山内が枝を片手に綾小路に近づいていくと、彼の首に手を回して耳打ちする。

「俺さ……佐倉狙おうと思うんだ」

「え？」

「いや、櫛田ちゃんってレベル高すぎるじゃん？ コミュ力も高いし。だからこの際その高い目標は捨てようと思うんだよ。それに比べて佐倉って人を苦手にしてるってか、その、男慣れ全くしてないしさ。ぶつちやけ、この旅行で行けるとこまで行こうと思ってるんだよ。多分あの手の女の子は優しく気配りできる男を演出すれば落ちると思うんだよな。何ならキスくらいまでするぜ。いやマジで。この際佐倉でオツケー。いや、佐倉がいい」

「この際って、今まで何一つ佐倉に絡んでなかっただろ。随分急だな」
「いやさ、見る目がなかったって反省してんだよ、それに関してはやさ。地味だから目に留まってなかったけど、すげえ可愛いし。アイドルだし？ 胸はもう、最高だし。ジャージ着込んでも丸分かり、目立って仕方ないよな」

ぐへへ、と手で揉む動作をする山内。

彼が急に手伝いを申し出た理由はこれらしい。

つまり佐倉は本命だった櫛田を諦めた末の滑り止め。

「(何故だろうな……妙に腹が立つ)」

急に胸の内に芽生えた靄に綾小路は違和感を覚えた。

「だから応援してくれよ。例えば今から俺と佐倉を二人きりにするとかさ」

「それは応援とは言わないんじゃないか？」

「何だよお前、もしかしてお前も佐倉狙ってるのか？ あのおっぱいか！」

山内は佐倉の魅力を胸だけだとも思っているのだろうか。

彼の性的嗜好は置いておいて考えても、佐倉は決して楽な攻略対象ではないことを綾小路は知っている。

櫛田と違い、佐倉は男とのやり取りにとにかく不慣れだ。

これが純粹に友達になりたいだけだったなら協力するのも吝かではなかった綾小路。

しかし、異性として狙っている男と突然二人きりにさせるわけにはいかなかった。

それは佐倉が自分のことを信用してくれていることへの対価だろうか。

それとも何か別の理由があるのだろうか。それは彼自身にもまだ分からない。

「今は諦めてくれ。お前がもう少し佐倉と仲良くなったら考える。それに、早いうちに戻ってちゃんと焚火ができるかどうか試しておきたいし。だろ?」

協力を取り付けられなかったことにながっくりと肩を落とす山内。

しかし彼はすぐに気を持ち直した。

「まったく固いよな。まあいいか。綾小路が佐倉狙いじゃないならいいや」

綾小路はライバルではないと判断したのか、山内は楽観的だ。

「ほら枝しつかり集めろよ。俺も向こうでちゃんと拾うからさ」

彼はそう言っただけで自分が集めていた枝を綾小路に押し付けた。

両手で抱えるように受け取り、地面に落とすのを阻止する。

その後も枝集めを続けたが、佐倉は警戒しているのか一人で黙々と枝を集めていた。

「もうこれくらいでいいんじゃない? 他の班の分と合わせれば今日明日は平気つしよ」

気がつけば燃料には十分すぎる量が集まっていた。

山内の一言で枝集めの作業を終えて3人はベースキャンプへ戻り始める。

「なあ佐倉、持つの手伝ってやろうか? 女の子だと大変だろ。怪我するかもだし」

最初からそう切り出すつもりだったのか、山内の手には綾小路の半分ほどしか枝がなかった。

先ほど語った作戦通り、優しく気配りの出来る男を演出するつもり

らしい。

対照的に綾小路が手伝わぬことで、山内の優しさが際立つ狙いもあるのだろう。

「だ、大丈夫です……綾小路君、いっぱい持つてるし。手伝わてあげてください」

「くうく！ 佐倉は優しいなあ！ ったく、一人でいっぱい持つなんて欲張りすぎだぜ綾小路。ほら、半分持つてやるから貸せよ」

そう言つて最初に押し付けた量の半分くらいを掴んで回収する。

佐倉に断られた場合でも優しさをアピールできる二段構えの作戦だったようだ。

変なところで頭の回る奴だ、と綾小路は苦笑いする。

満足そうな山内は、意気揚々と歩き出す。そんな帰り道の出来事だった。

「最悪……」

大木に背中を預けるようにして座り込み不機嫌そうに呟く一人の少女。

彼女はDクラスの生徒ではなかった。

近づいてくる3人に気づくと、一度目を向けた後興味なさそうに視線を外す。

他クラスの人間なのだから放っておけばいいことは確かだった。

しかし少女の様子が只事ではないことに3人はすぐに気づいた。

少女の頬には赤く腫れた跡。誰かに殴られてついたものだと一目で分かる。

それもかなり強い力で。

「なあ。どうしたんだよ、大丈夫か？」

傷ついた女の子を放つてはおけぬと山内が率先して声をかけた。

「……放つておいてよ。何でもないから」

「何でもないって……全然そうには見えないし。誰にやられたんだ？ 先生呼ぼうか？」

腫れの状態から察するに、相当な痛みを伴っていることは見て取れた。

「クラスで揉めただけ。気にしないで」

自嘲気味に笑い、少女はそう言って山内の言葉を拒絶する。

口調こそ強気だが、元気がないのは明らかだ。

そして揉めたという話も穏やかではなかった。

「(周囲は森で囲まれている。もうすぐ日も沈むな)」

綾小路は森を見回し、時間を確認した。

日没までそう時間はない。

このまま放置していけば、少女が遭難する可能性も考えられた。

「俺たちDクラスの生徒なだけどさ。良かったらベースキャンプに来なよ」

山内がそう申し出た。

彼に同意を求められた綾小路と佐倉は少しだけ頷いて話を合わせる。

「は？ 何言ってるの。そんなことできるわけないでしょ」

「困った時は助け合いつていうか、当然っていうか、な？」

少女はそっぽを向いて黙り込む。

「私はCクラスだ。お前らの敵つてこと、それくらいわかるでしょ？」

「けどさ、こんなところに一人で置いておけないって。だよな？」

その言葉に綾小路と佐倉も同意する。

「……バカだなお前ら。相当なお人好し。うちのクラスじゃ考えられない」

少女は山内が折れないと察したのか、重い腰を上げる。

「困ってる女の子を放つておけないだけさ」

山内が格好つけて親指を立てる。

これも佐倉の好感度を稼ぐ作戦の一つなのだろう。

しかし肝心の佐倉は彼のことを大して気にしている様子はなかった。

むしろ極力関心を寄せないようにしているようにさえ見える。

「でもいいわけ？ キャンプの場所を教えても。しかも案内までするとか」

少女の言う通りキャンプ地が分かれば、そのクラスがどのように試

験を乗り切るかが見えてくる。

傾向と対策を練ることもできる上、Dクラスに関して言えばスポーツが知られてしまう。

「大丈夫だ。別に何も問題はないと思うぞ」

そう答えたのは綾小路だった。

「だよな？　問題なしってことで！　俺は山内春樹。よろしく！」

「……伊吹」

おそらくそれは少女の名前であろう。

自己紹介を終え、3人は伊吹を伴ってベースキャンプへ帰り始めた。

道中、気を利かせた山内が伊吹の鞆を持とうとして一悶着があったが、それはまた別の話。

「ああ、本当に最悪……」

Dクラスのベースキャンプに到着し、彼らとは離れた所に腰を下ろしながら伊吹は毒づく。

目線の先には、Dクラスの者たちが木を組み合わせて焚火の準備をしていた。

そんな彼らをぼうっと見ながら、伊吹はここに至った経緯を思い出す。

先ほどの場所に居たのも、山内たちに拾われたのも、全ては自分の所属するCクラスの作戦だった。

彼女は最初からDクラスに入り込むつもりであの場にいた。

同情を引くためにご丁寧に殴られた跡をつけて。

彼女はこの作戦には否定的だった。

別にリーダーである龍園の方針に反対したわけではない。

普段は反抗しているが、この試験における作戦に関しては反対して

はいなかった。

では、彼女は何に反対していたのか。

それは自分がスパイとして潜り込むクラスがDクラスだということについてだ。

スパイ役は彼女以外にもう一人いた。

そいつはBクラスの担当に充てがわれていた。

彼女は龍園に自分がBクラスをスパイすると申し出たが、龍園はそれを却下した。

結果、彼女はそのままDクラス担当として潜り込むことになった。

「(なんで私がDクラスなんだよ……ふざけんな)」

彼女はDクラスには近づきたくはなかった。

つい先日擦った揉んだがあつた相手。

目下の敵でもあるクラスに潜り込むなど面倒くさいことこの上ない。

そんな役回りを押し付けた龍園に彼女は内心で怒りを募らせる。

一旦そこで回想を打ち切り、彼女は再び眼前の光景に意識を向ける。

見ればDクラスたちは無事に焚火が出来たのか興奮していた。

「悪いな。もう少し待ってくれ。お前のことを相談してみるから」

集団から離れ、こちらにやってきた綾小路がそう言った。

「別に無理しなくていいって。邪魔することになって悪いと思ってるし」

そう言つて伊吹は自分の足元にある草を握り締め、引き抜く。

「どうせすぐに追い出されるよ。違う?」

「わからないぞ。平田ってヤツは人一倍お人好しだからな」

綾小路は伊吹が追い出されることにはならないだろうと思つていた。

クラスを中心である平田がそのような判断を下すとは思えなかったからだ。

「さつきは自己紹介してなかったからな。俺は綾小路だ」

「私ももう一度名乗ったほうがいいの?」

「いや、それは大丈夫だ。Cクラスの伊吹。ちゃんと覚えたからな」
そう言つて綾小路は再びクラスのところに戻つていった。

彼が離れていったことで、伊吹はふうと息を吐き出す。

表向きには『クラスから追い出された可哀想な女の子』を演じなければならぬ。

そのことへのストレスが既に苛立ちへと変わっていた。

「別に、お人好しばかりの馬鹿クラスだったら私だって反対しなかったさ……」

そう、伊吹は何もDクラスが無能の集まりだったなら喜んでスパイを買つて出ていた。

お人好しばかりが集まる集団ならば、騙すことも、リーダーを知ることでもそう難しくはない。

心が痛まないかと言われれば嘘になるが、自分たちのクラスが勝つためならば喜んでやってやる。

しかし、彼女が反対した何よりも理由。

彼女がこのクラスに潜り込みたくないと思つていた一番の理由。

それは……

「やあ、漣ちゃん。久しぶりだね」

そう言つて目の前で笑顔を浮かべるこの男と出会いたくなかったからだ。

男の名前は黛柚椰。

伊吹漣にとつて少々、いやかなり深く関わりのある男だ。

そして――

「本当、最悪……」

伊吹漣の人生を最も大きく変えた男だ。

格闘少女は彼と出会い、俺様御曹司は島を去る。

中学三年生の時、ある夏の日。

その日は取り立てて何も語ることはない平凡な一日だった。

朝はじつとりとした蒸し暑さにうんざりしながら目を覚まし、だるい身体に鞭を打ってベッドから起き上がる。

2年以上ほぼ毎日のように着ている制服に身を包み、朝食を口の中へと押し込む。

見慣れた通学路を歩き、見慣れた校門を潜り、見慣れた校舎へと入る。

高校受験を控えていることもあって、教師の授業にも熱が入っていない。

何にしてもいつも通り授業が次々進められ、放課後になる。

部活に入っていない”私”はいつもこのまま家に帰る。

いや、帰ろうとする。

だけど――

「伊吹いー、ちよーつといいー?」

「一緒に帰ろーよー」

「まあ、アンタに拒否権なんてないけど」

これもいつも通り。

帰ろうとすると必ず声をかけてくる女子が3人。

三年に進級してから同じクラスになった女達。

新学期早々、私は彼女達に目をつけられた。

私は元々人とあまり馴れ合わなかった。

というより、人付き合いが苦手だった。

それは異性相手だけでなく、同性も同じだ。

小学校の時はそれなりに友達もいたと思う。

それなりに話す相手もいたし、一緒に遊んだこともそれなりにあった。

でも、それが本当に友達だったかと聞かれれば……
とにかく、この学校に私の友達はいなかった。
連中にとつて私は格好の標的だったんだろう。

「……今行く」

朝にベッドから起き上がるのと同じくらい、いやそれ以上に重い身体に鞭を打って席を立つ。

いつも通りの日常。いつも通りの1日。

これから先の出来事も、いつも通りのこと。

そうなるはずだった……

「伊吹い、悪いんだけどアタシらちよつと金欠でさあー」

「そーそー、だからちよーつとだけでいいからさ」

「今日は樋口さん一枚でいいよおー」

学校から出て、通学路の途中の路地裏に連れ込まれてお馴染みのセリフを吐かれる。

彼女達に目をつけられてからこんなことばかり。

元々あまり散財する性格じゃなかった私を、金を貯め込んでいる女とでも判断したんだろう。

私が体のいい金蔓として扱われるまでにそう時間はかからなかった。

「もう渡すお金なんて残ってない……バイトもできない中学生になんにお金あるわけないでしょ」

そう、貸すお金なんてもうとつくに残っていない。

そもそもこいつらにお金を貸して返ってきたことは一度だってない。

こいつらも最初から返すつもりもないのは分かっている。

だから、意味なんてないと理解しているこのセリフを言うのもお決まり。

「はあー？」

「おい伊吹、アンタ調子乗ってんじゃないの？」

「アンタに拒否権なんてないって言ってんじやん」

こいつらのこの反応もお決まり。
至っていつも通り。変わらない日常。

私だって、こいつらに思うところがないわけじゃない。
でも、こいつらは学校ではそれなりに幅を利かせている女達だ。
そんな彼女達に反抗すればどうなるかは容易に想像できる。

ただ一人でいるのは慣れてる。
今までもそうだったし、これからもそうすればいいだけ。
でも周りが敵になるなら話は違う。

こいつらが私を潰すと表明すれば、周りは皆嫌でもこいつらに味方するだろう。

賛同じゃなくて同調。

自分が標的にされない為に、それが不本意なことであっても。

「面倒くさい……」

心の中でつぶやいてみる。

変わらない日常。いつも通りの日々。
ともすればそれは、変わる事のないものだってこと。

何か違うことをしてみても、どうせこの日常は変わらない。

いや、むしろもっと最悪な日常に変わるかもしれない。
だったら別にいい。

今のこの日常で私は生きていけている。

それでいい。

別に死ぬわけじゃないし、どうでもいい。

「いいからアンタは黙って金渡せばいいんだよ！」

痺れを切らしたのか、連中の一人が声を荒らげて怒鳴る。

甲高い耳障りな声。聞くに堪えない。

こいつの声ってのはどうしてこんな不愉快なんだろう。

「(最悪……)」

心の中でつぶやいてみる。

口に出してもいいけど、余計面倒なことになることをわざわざしない。
い。

どうせ最後は無理矢理にでも財布を取られて中身を抜かれる。

何をしても、何を言っても変わらない。

どうせ無駄なんだから。

そう自分に言い聞かせて、私は鞆のファスナーを開けた。

そのときだった――

「いじめかい？　良くないな。実に良くない」

路地裏に、非日常の声が響いた。

日常の侵入者に私は勿論、私に金を集ろうとしていた連中も目を向ける。

そこに立っていたのは一人の男。

背丈は高く、身体つきは細め。

半袖の白いワイシャツに黒のスラックス。

髪は短髪とセミロングの中間くらいの黒髪。

顔立ちは眉目秀麗。学校にいたら間違いない人気者になってそうなくらいには整っていた。

男はヘラヘラしたような笑顔を浮かべてこちらに近づいてくる。

「なんだよお前、関係ねーだろ」

「そーそー、アタシら別にいじめてねえしー」

「ちよーつとこの子にお金借りようとしてただけだしー」

侵入者の男を女達は睨む。

大方ただの野次馬、あるいは正義感に駆られた痛い奴とでも思ったんだろう。

しかし連中の言葉に対しても、男は笑みを崩さない。

「君たち、中学生にしては結構派手な格好をしているね。制服を着ていてもその下にはアクセサリーが付けられていて、髪で隠れているけどピアスもつけている。そして鞆には付けすぎと思えるくらいのストラップ。対してそこにいる女の子は制服はきちんと着ていて、化粧も何もしていない。鞆は使い込まれていて装飾品は一つも付いていない。お友達同士のお金の貸し借りにしては、随分と見た目に差があ

るように見えるけどね」

「それはコイツがダサいだけだし！」

「つーか何なのお前！ 関係ねえだろつつつてんじゃん！」

「いきなり出てきてキモいんだよ！」

淡々と分析する男に居心地の悪さを感じた女達が敵意をむき出しにする。

このまま話を続けていけば分が悪いと思ったんだろう。

「そうだね。関係ない。君たちがここで殴られようが襲われようが。俺は赤の他人だから、今日この日この時間この場所で君たちとこうして言葉を交わしているのも偶然の産物だ。だから君たちが俺に対していかなる感情を抱こうが関係ない。そして……」

男はそこで言葉を切ると、ポケットからあるものを取り出した。

それは長方形の薄い箱。

私も、女達も、現代人なら誰もが見慣れたもの。

そう、スマートフォンだ。

「君たちがお金を集つていた一部始終を録画した動画を、俺が君たちの学校に提出しても関係ない。よね？」

男がニヤリと笑って口にした言葉に女達は言葉を失った。

つまり目の前の男はその手に持つてるスマートフォンでずっと自分たちを録っていたんだらう。

現場を押さえられている。

その事実が女達の勢いを殺すのに十分すぎた。

「その制服、第二中だよな？ 制服着たままカツアゲなんて録つてくださいと言っているようなものだよ？ ああ、安心していいよ。第二中には俺の友達がいるから、送りつけておけば明日にでも先生が君たちを呼び出すんじゃないかな。君たちみたいな派手な見た目をした子たちを、先生が目をつけてないことはないだろうからね。ちょうどいいお説教の材料が出来て先生たちも喜ぶさ。そうなれば後は先生と君たち、あとは君たちの親御さんも呼んで三者面談だ。うん、実に面白いことになりそうだと思うかい？」

男はペラペラと、矢継ぎ早に、心底楽しそうに喋る。

彼が喋れば喋るほど、女達の顔は青ざめていく。

その姿に私は内心こう思っていた。

「ごまあみろ」ってさ。

心の中でそう思っていると、男がチラリとこちらを見た気がした。

「さて、じゃあ君たちを選択肢をあげようか。君たちがここで大人しく立ち去れば、俺は君たちを見逃してあげよう。ああでも、またその子に絡んだりしたら……」

「い、行こうよ！」

「うん！」

「伊吹！ アンタ覚えてなよ！」

男の言葉を聞き終わるより先に、連中は急ぎ足で逃げていった。

路地裏に残っているのは私と男の二人だけ。

呆然と立ち尽くす私。

その私に、男はゆっくりと近づいてきた。

「怪我はないかな？」

「……はい」

男が年上に見えたそのときの私は、思わず敬語でそう答えていた。

「ありがとうございます……ごさいました……」

「気にしなくていいよ。俺は本当にたまたま通りかかったただけなんだ」

私が口にした礼の言葉に、男は柔らかな笑みを浮かべて答えた。

変わらない日常。いつも通りの日々。当たり前前の日常。

変わることのない日常。変わることのない日々。変わることのない日常。

それが――

「俺は黛柚椰。よろしくね」

目の前の男によって、変わった。

「久しぶりだね。こうして直接話すのはほぼ一年ぶりかな？」

「そう……だな」

隣に座り、思い出深そうに語る柚椰に対して、伊吹は体育座りで抱え込んだ足をギョツと抱きしめる。

「同じ高校に進学したんだから話しかけてくれればよかったのに。寂しいな」

「……アンタだつて私に話しかけてこなかったじゃん」

眉を下げて悲しそうに呟く柚椰に白々しいと言うように吐き捨てる伊吹。

両者の相手に対する感情の浮き沈みは正反対と言えるだろう。

「俺は君のことをとても気に入っているんだよ？ 初めて出会ったときに比べて君は大きく変化した。君は進化したんだ。今でもあのとき君に出会ったことは運命だと思ってるよ」

「——っ！」

柚椰の言葉が癪に障ったのか、伊吹は彼をキツと睨む。

「アンタが私を救ってくれたことには今でも感謝してる。アンタが救ってくれたから私は変わった。でも、アンタがどうしようもないほどに狂ってるってことも私は嫌ってほど知ってる」

「酷いな。昔みたいに柚椰と呼んでくれてもいいんだよ？」

「誰が……！」

思わず声を荒らげそうになる伊吹を柚椰は面白そうに笑う。

「初めて出会ったあのときから、君は少しずつそれまでの日常から離れていった。いや、正確にはそれより前の日常に戻ったという認識のほうが正しいね。でも最後の最後、君が明確に変化した大きな引き金。それを引いたのは他ならない滯ちやん自身だということをお忘れ

てはいけないよ?」

「……………」

柚椰の言葉に思うところがあるのか、伊吹は言葉を飲み込む。

そう、彼女が大きく変わる事になった分岐点。

それは目の前の男と出会った日ではない。

それより後、正確には彼と過ごさようになってからしばらくしたある日のこと。

彼女が今の彼女になった原点にして原因。

それを引き起こしたのは、引き起こさせたのは紛れもない自分自身であることを、彼女は理解していた。

「君は俺を求めた。だから俺はそれに応えた。それだけのことだよ。俺はあの結末を後悔はしていないし、むしろ良かったことだと思ってるよ。何故なら、その証拠に今こうして君は生きていて、こうして俺と言葉を交わしている。君は新しい自分になることが出来て、俺はそんな君を見ることが出来た。お互い幸せになれたのだから上等じゃないか」

「…………だからって、あんなことして許されるわけないでしょ」

「許す許さないなんてものは所詮個人の価値観だよ。第三者から見たらあの結末は因果応報、天誅といったところだろう。そもそも、何が善で何が悪かなんてものは一人一人によって違うという事は、前に教えたはずだよ? 俺は自分のことを善だとは微塵も思っていない。勿論、君が俺を悪だと思うのならそれでも構わないよ。でも、俺を悪だと断じ、忌避している君は、果たして善と呼べるのかい? 結果として悪である俺を求めて、悪だと理解していた結末を叩き出した大元の原因である君は」

「…………分かってるよ。私だって、善人じゃないってことくらい」

伊吹は俯き、戒めるようにそうつぶやいた。

その返答に満足したのか、柚椰はニコリと笑った。

「うん、滲ちゃんはそのでいいんだよ。あのことは君を変えたことであると同時に軛でもある。人間が変わるためには、ときとして別の何かを抱えなければいけない。君は今を生きる代わりに消えない過去、

拭い去れない罪悪感を抱えて生きていく。ああ、勿論それは巡り巡れば俺の所為であり、そもそも君が抱え込むことではないよ。でも、俺がそう言おうが他の誰かがそう言おうが、君のそれは消えることはない。何故なら他ならぬ君自身が、それを罪だと認識しているのだから」

「……」

柚椰のその言葉に、伊吹はもう何も言うことはなかった。

「まあ、昔話は尽きないけどひとまず置いておこう。今はそうだね……君が龍園クンの指示でここに来たことについて話そうか」

「——っ！ やっぱリアンタは気づいてるってわけね」

自分がここにいる理由は既にお見通しであることを理解し、伊吹は歯噛みする。

この作戦は失敗する。

そう確信した矢先、柚椰は予想外の言葉を口にした。

「この状況で他クラスの人間が来たら誰でもスパイだと疑うだろう？」

ああでも、安心していいよ。俺は君の目的がスパイだと言うつもりはないんだ」

「は？」

「おや、言った方が良かったかい？ 君にしてみれば、俺が黙っていることはありがたいことだと思っただけだ」

「そ、そりやそうだけど……なんで黙ってるわけ？」

「理由はいくつかあるけど、一つは単純に興味本位だね。君がどうやってうちのクラスのリーダーを知るのか興味があるんだ。それと、うちのクラスの皆が君に対してどう行動するかに対する興味もある」

「……相変わらず人の行動を見て楽しむのが好きなんだな」

「それが生きがいでもあるからね。仕方ないさ」

二人が話していると、そこに平田が綾小路と山内を連れてやってきた。

「あれ、黛君どうしたんだい？」

「ん、ああ、見慣れない子がいたから話しかけていただけだよ」

柚椰は伊吹と顔見知りであることを隠した。

彼の発言に、伊吹も暗黙の了解であると察して黙る。

「そうなんだ。えっと、伊吹さん？　ちよつと詳しく話を聞きたいんだけど」

「邪魔だろ私は。世話になったな」

あくまでも自分はお呼びではないと理解しているというアピールのため、伊吹は立ち上がる。

「ちよつと待って。何があつたのか聞かせてもらえないかな？　力になりたいんだ」

語気を強めて平田が呼び止める。

伊吹の腫れた頬を見てただ事じゃないことを察したのだろう。

「待ってたつて変わらないうちもあるだろ。そつちの時間をこれ以上無駄にさせたくない」

「これは試験だから、君を疑う生徒がいるのは仕方がない。だけど怪我をして、それもクラスに戻れない君を追い出すような真似はしたくない。そう思ったから、山内君もここに連れて来たんだと思う。だからちゃんと事情を聞かせてほしい」

「話してどうにかなる問題じゃない。それに、他クラスの私に作戦が筒抜けになるのは嫌だろ？」

そつぽを向き伊吹は歩き出す。それを平田は少し強引に回り込み制止した。

「本当に君がスパイだったら、自分から追い出されるようなことは言わない。違う？」

「もういいって。私はどこか眠れそうな場所探すだけだから」

伊吹はCクラスに戻るつもりはなかった。

しかしもうすぐ太陽が沈み、夜がやってくる。

「この森の中で女の子一人が野宿するなんて無茶だよ」

「無茶でもそうするしかないだろ。私を助けても、おまえらに何の得もないんだから」

「損とか得とか関係ないよ。困ってる人を放り出せないだけさ。皆そう思ってる」

クラスの女子が見ればコロツと落ちるような爽やかフェイス。

そんな風に言われれば虜にされている人間に抗う術はないだろう。伊吹は平田の言葉を受け、自身も悟ったように重い口を開いた。「クラスのある男と揉めた。それでそいつに叩かれて追い出された、それだけだ」

「っ！ それって……！」

「Cクラスを纏めているリーダー格の龍園って男子だよ」

目を見開く平田に柚椰が詳しい情報を与える。

「酷いな……女の子に手をあげるなんて」

「Cクラスの体制を考えればおかしなことじゃないさ。彼は逆らう相手は女子だろうと平気で殴るような人間だ」

柚椰が情報を付け加えれば付け加えるほど、平田や綾小路、山内の顔が歪んでいく。

龍園という男がどれほどの外道なのか彼らの中でマイナスイメー
ジが蓄積されていく。

「これ以上詳しく話すつもりはない。匿ってもらおうとも思わないし、じゃあな」

「待って。君が困ってることは分かったし、事情も理解した。少し時間をもらえないかな。そしたら他の皆にも事情を話して君を置いてもらえるように頼んでみるよ。綾小路君、伊吹さんを見てもらえるかな？ 黛君は僕と来てほしい。今から皆に事情を話してくるから」

「ああ」

「いよいよ」

平田は綾小路をその場に残し、代わりに柚椰を新たに連れて山内と共にクラスのところに戻っていく。

残された綾小路に対して、伊吹は素直に思ったことを口にする。

「マジでお人好しだな、アイツ」

「多かれ少なかれ人なんてそんなものだよ。そつちも似たようなもんじゃないのか？」

「全然。Cクラスにはそんなお人好しなんて殆どいない」

そう言って伊吹は再び地面に腰を下ろし、体育座りで顔を伏せる。

「そうか。そういえば、さつき黛と何を話してたんだ？」

「別に……名前を聞かれて、どこのクラスか聞かれただけ。あと、この顔の傷についてもどうしたのか聞かれた。それくらい」

「黛も平田に負けず劣らずお人好しだからな」

「(コイツもアイツの外面に騙されてる奴か……)」

伊吹は柚椰の本性を知らない綾小路を内心笑いながらも沈黙を貫いた。

数分後、平田たちの説得の末、伊吹をDクラスで面倒を見ることが決定した。

中には反対を強く表明した生徒もいたが、柚椰が伊吹を殴った人間の非道さ、乱暴さを語り、平田がCクラスの点呼時のマイナスペナルティについて語ったことで納得したようだ。

平田本人は損得など考えていなかったが、他の生徒のために実利の問題をあげることでうまく纏めたようだ。

だがこの場所の占有権問題は非常にデリケートだ。

伊吹には事情を説明し、不用意に装置に近づかないことを約束させた。

リーダーを知られないための防止策だ。

それから急いで夕食の準備に取り掛かり、日が沈む直前に料理が完成した。

幸いにも須藤たちが魚をそれなりに釣ってきたため、それをメインにしたメニューとなった。

他にも探索中に見つけたと思われる木の実や果物。野菜などもあったためか、初日にしてかなり豪勢だ。

「はい伊吹さん、これ食べて」

一人距離を置いたところで静かにしていた伊吹のもとに、櫛田が料理を運んできた。

他の生徒が食べているものと同じものだ。

「なんで私に？」

「お腹、空いてるでしょ？」

「折角調達した食料だろ。自分たちで食べるよ」

「大丈夫。思ったよりいっぱい取れたから余っただけだよ。だから気

にしないで」

「……どいつもこいつもお人好しすぎる」

そう毒づきながらも、伊吹は櫛田から料理の載せられたトレイを受け取った。

「遠慮せずに食べてね。それと、あとでお話ししようね。テントで待ってるから」

櫛田はそう告げて自分が座っていた席に戻っていった。

「なあ、綾小路」

山内が食事中の綾小路に話しかける。

「なんだ？」

「いや、こうしてみると、女子つて結構派閥が分かれてると思わねえ？」

そう言われ、綾小路は女子グループを一通り見渡す。

Dクラスの女子は大まかにわけて二つの集団に分かれていた。

「軽井沢率いる女帝チームと、櫛田ちゃんの仲良しチーム。あとそいつらと離れたところに佐倉と堀北」

「ああそうだな。あの二人以外は、女子は皆どっちかのグループに入ってる」

「何の話だい？」

山内と綾小路の会話に興味があるのか、柚椰が綾小路の隣に座った。

「おお、黛。いやさ、女子グループが綺麗に分かれてるって話してたんだよ」

話し相手が増えたことに嬉しくなった山内が柚椰に話していた話題を軽く説明する。

彼の説明で大体察しがついたのか、柚椰は柔らかく微笑んだ。

「そうだね。佐倉と鈴音以外は皆軽井沢か桔梗、どちらかのグループに入っている」

「やっぱお前もそう思う？ でもさ、やっぱ大きなグループは櫛田

ちゃんの方だよな」

男子3人は再び女子の集団に目を移す。

このクラスの女子は軽井沢チームと櫛田チームの二つに分かれている。

しかし、その母数は櫛田の方が多かった。

入学当初からしばらくの間は、軽井沢が幅を利かせていた。

あまりクラスの中でも溶け込んでいない地味な女子たちも、なし崩し的に軽井沢の派閥に入っていた。

しかし最近になって、その女子たちが皆揃って櫛田の方へ鞍替えしたのだ。

軽井沢と櫛田、親しみやすいのは後者であることは男子もよく知っている。

だからあまり驚きはしなかった。

櫛田も彼女たちを快く受け入れ、仲の良い友達として接している。

「まあ、桔梗は誰にでも優しい子だからね。優しい人間が上に立つ派閥の方が居心地がいいのは当然だろう」

「まあなー、軽井沢ってなんかこう、偉そうだもんなー。平田の彼女だからってよお」

山内は聞こえないことをいいことに、軽井沢への毒を吐く。

「女子ってのは大変なんだな……」

綾小路は女子の交友関係の複雑さに苦笑いしていた。

「なんにしても、クラスとして纏まっているならいいんじゃないかな。派閥争いとかそういうのは桔梗も求めていないだろうからね」

「だな。櫛田ちゃんはそういうの嫌いだろうし、そもそも軽井沢が對抗心燃やしても櫛田ちゃんには勝てねえって」

山内はもう女子の実質的なトップは櫛田だと思っているらしい。

「櫛田も平田と同じ平和主義みたいだからな。女子同士で争うことはしないだろ」

綾小路も櫛田に対する評価は高いようで、彼女のことを買っているようだ。

「まあ、その話は……いいとして……なあ、佐倉一人だと可哀想だ

し、俺一緒に食べようかな!？」

山内はさつきと話題を打ち切り、一人で黙々と夕食を摂る佐倉に焦点を当てた。

「やめた方がいいんじゃないか? 多分怖がられるぞ」

「うん、いきなり一緒に食べよう、なんて誘ったらびっくりしてしまうんじゃないかな?」

綾小路と柚椰は冷静に山内の行動を制止した。

「くっそー。仲良くなりたいけど、引っ込み思案すぎるのも問題だな……」

二人に忠告されたものの、山内は悩んでいるようでウズウズしていた。

「なんだよ春樹、一人で美女ウオッチングかあ? 俺も交ぜろよ」

挙動不審だった山内が気になったのか、池が新たにそこに加わってきた。

「なになに……つと、なんだよ佐倉か。え、なに、お前あのおっぱい見ながら飯食ってんの?」

山内の視線の先を見た池は、ちよつと引きながらそう尋ねた。

「バツカちげえよ! そんなんじゃないし!」

「えー、じゃあなんだよ。あ、もしかしてお前佐倉のこと——」

「そんなんじゃないって。ほら早く食おうぜ」

どうやら山内は佐倉狙いに切り替えたことは内緒にしておきたいようだ。

池の追求を誤魔化すように、ガツガツと料理をかきこんだ。

「ねえ綾小路、もしかして山内って」

「ああ。黛の予想で合ってる」

こっそり耳元で尋ねられたことに綾小路は短く答える。

それで全てを察したのか、柚椰はそれ以上何も聞かなかった。

綾小路はいいタイミングだったこともあり、前に話していたことを再び話題に出す。

「そうだ、黛」

「なんだい?」

「昼に言ってたやつだが、点呼の後にでもいいか？」

それは試験開始前に彼が柚椰に言ったことだろう。

すぐに察した柚椰はニコリと笑って頷いた。

彼のその反応を了承と受け取った綾小路は彼に感謝の言葉を口に
する。

「ありがとう」

「気にしなくていいよ」

二人が話していると、あることに気がついた平田の声が響いた。

「あれ、高円寺君は？ 姿が見えないんだけど」

彼の言葉にクラス中が周りを見回した。

平田の言う通り、夕食の場には高円寺の姿だけが見当たらなかった。
た。

しかしその異変にすぐに茶柱先生が答えを寄越す。

「高円寺ならば、体調不良を訴えて船に戻ったぞ。勿論体調を崩した
ということ、既にお前たちは30ポイント差し引かれたことにな
る。これはルール上どうしようもない。高円寺はリタイアとなり1
週間船内での治療と待機が義務付けられた」

「「ええええええつ!」「」」

先生の言葉に一齐に衝撃の悲鳴が上がる。

「ふざけるなよ高円寺の奴！ 何考えてるんだ！」

普段は冷静な幸村が叫び、地面を蹴り上げる。

ふと綾小路は隣で可笑しそうにケラケラと笑っている柚椰を見た。

「楽しそうだな黛」

「まあ予想していたことだからね。高円寺が1週間も島で生活なんて
するわけがないとは思っていたよ。彼は自然の中でのキャンプ生活
より、豪華客船の中で優雅に過ごしている方が似合うだろう?」

「まあ……そうだな」

綾小路は頭の中で大自然に囲まれている高円寺と、豪華客船で豪遊
している高円寺を想像した。

結果、柚椰の言う通り高円寺は後者を選ぶだろうと納得したのであ
る。

どこまでも自由な男、高円寺六助。

彼は以前Aクラスに上がる必要はないと言っていた。

彼にこの試験で他クラスに勝つなんて考えは毛頭なかったのだろう。

楽をするためにクラスが30ポイントを失おうが痛くも痒くもないのだ。

「いきなりマイナス30ポイントとかふざけんなよ高円寺イ！」

男子も女子も、高円寺の行動には怒り心頭のようにだったが、本人は既にその場にはいない。

彼らの中で、高円寺の高らかな笑い声が響き渡った瞬間だった。

王は策を巡らせ、無機質少年は彼と協力する。

時間は巻き戻り、試験開始から1時間が経過した14時。

龍園が金田と伊吹を呼び寄せ、森の中へと連れ込んだ。

「金田、伊吹。テメエらにはこれから1週間、クラスを勝たせるために動いてもらう」

「ふむ、なるほど。読めましたよ龍園氏」

龍園が自分たちに何をさせようとしているのかを既に金田は察しているようだ。

「他クラスへ潜り込み、リーダーを探れと仰るのですね？」

「察しが早くて助かるな。その通りだ」

「なんで二人？ 3クラスあるんだからあと一人要るんじゃないの？」

伊吹は呼び出されたのが自分と金田の二人であることが解せなかった。

自分たちCクラスを除けば、他クラスはA、B、Dの3クラスのみならず。

にも関わらず呼び出されたのは二人。一体どういうことなのか。幸いにも、その疑問を龍園はすぐに解消した。

「潜り込むのはBクラスとDクラスの2クラスだけだ。Aクラスは無視していい」

「ほう、してそれは何故？」

金田は興味深そうにメガネをクイッと上げる。

「Aクラスの葛城と取引をした。いわば協力関係になったってことだ」

そう言うと、龍園はジャージのポケットから折りたたまれた紙を取り出した。

彼はその紙を広げると二人にそこに記載されている内容を見せる。

『契約書』

葛城康平（以下「甲」とする）と龍園翔（以下「乙」とする）は以下の通り契約を締結する。

1. 当試験において乙は甲に対し、200ポイント相当の物資を購入して譲渡する。
2. 乙はBクラスとDクラスのリーダーを探り、得た情報を甲へと伝える。
3. 乙が本契約の1及び2を達成した場合、甲は当試験に参加したAクラスの全生徒から毎月2万プライベートポイントを回収し、乙へと譲渡する。これは本校卒業まで継続するものとする。
4. 下記に署名した者は、本契約内容に同意したものとする。

「俺たちはポイントを全て使って好きなかだけ楽しむ。飽きたら道具を全てAクラスに譲る。食料と水に関してはAクラス全員が生き残れるだけの量を揃える必要があるから先に購入するぞ。とにかくこれでAクラスは俺たちのお下がりを買って1週間乗り切れるってわけだ」

「なるほど、先ほどポイントを全て使うと仰っていたのはこのためだったということですか」

金田はルールを説明されてからすぐにここまでの策を練っていた龍園に感心しているのかニヤリと笑った。

「葛城がこの契約を結んだってことは、私たちが今回戦うのはBとDだけってわけ？」

「いいや、Aクラスも獲物だ。必ず潰す」

伊吹の問いに龍園は獰猛さを孕んだ笑みを以って答える。

「よく見てみる。契約内容には『甲は乙の、乙は甲のクラスを攻撃してはいけない』なんて書いてねえだろ？」

「——っ！」

改めて契約書に目を通して、伊吹は気づいた。

そして抜け目のない龍園に改めて戦慄する。

「だがAクラスに堂々とスパイを送り込めば当然警戒されるだろうな。だからAクラスにはこっちからは何もしない」

「どういうこと？」

「何もしなくてもAクラスのリーダーの情報は手に入るってことだ。既に種は蒔いてある」

龍園は少し前に言ったことを再び口にする。

どこか含みのある言葉に伊吹は眉を顰めたが、特に深く聞くことはなかった。

「とにかく、テメエらにはこれからBクラスとDクラスそれぞれに潜り込んでもらう。割り振りだが金田がB、伊吹がDだ。いいな？」

その言葉にすぐに伊吹が声を上げる。

「はあ？　なんで私がDなんだよ」

「猿共の中に放り込むなら女のテメエの方がやりやすいと判断した。それだけだ」

「ふぎげんな。誰が好き好んであんな奴らのところに行かなきゃいけないんだよ。金田がDで私がBでいいだろ」

「テメエに拒否権はねえよ。黙って従え」

伊吹の抗議の声を龍園はバツサリ切り捨てる。

最初から彼女の反対など彼にとってはどうでもいいことなのだろう。

決定事項だとしても言うように、龍園はさっさと話を進めてしまう。

「テメエらには鞆を持って所定のクラスの奴らの近くまで行ってもらう。だが遭遇するより前に、テメエらが安心だと思っ場所これに埋めろ」

そう言うのと龍園はあるものを二人に投げてよこした。

それは掌に収まるくらいの大きさの長方形の箱。

受け取った二人は一目でそれが無線機だと分かった。

「端末を持ち込めない以上、連絡手段はその無線機だ。肌身離さず持つていれば方が一のこともある。だからスパイとして潜り込む前にどこか別の場所に隠しておけ。報告はその無線機を以って行う。いいな？」

「……」

「了解です。して、リーダーの情報はどのようにやり取りするのです

か？ 先の取引の内容を考えるとAクラスにも情報を流す以上、口頭では信憑性に欠けるのでは？」

「それに関してはこれを使い」

龍園は新たにもう一つ、あるものを出して二人に渡した。

「デジタルカメラだ。既に坂上からポイントで買っておいた。それでキーカードを撮影しろ。この島じゃ写真の合成なんざできねえからな。写真に収めておけば確実な情報が手に入る」

「なるほど、理解しました」

金田は段取りについては概ね把握したのか、納得した様子だ。

「……」

反対に伊吹は未だ不満そうだった。

それほどまでに自分がDクラスの担当であることが嫌なのだろう。「そんなに不満そうにすんな。Dクラスにはアイツがいる。股でも開いて取り入ればすんなり入り込むのも訳ねえだろうよ」

龍園が口にした「アイツ」という単語。

そして凡そ女子相手に言うにはあまりに最低な言葉。

それらに一層伊吹の眉間に皺が寄る。

「チツ……」

伊吹は不愉快そうに舌打ちすると、無線機とデジカメを持ってベースキャンプへ戻って行ってしまった。

おそらく鞆をとりに戻ったのだろう。

後に残されたのは龍園と金田の二人。

金田もそれまで納得していた表情から一転、龍園が指している人間が思い当たったのか懐疑的な表情を浮かべていた。

「龍園氏、分かりきったことを尋ねますが、そのアイツとは黛氏のことですか？」

「ああ、正解だ。アイツなら伊吹が自分のクラスに来ても快く迎え入れるはずだ」

「ふむ……つまり龍園氏は黛氏が見逃す、と？」

金田は今ひとつ龍園が柚椰を信じている理由が分からなかった。

「黛は伊吹がスパイとして送り込まれたことにはすぐに気づくだろう」

よ。そしてそれを指示したのが俺だつてことにもな。その上でアイツは黙つてそれを受け入れるはずだ。むしろクラスの猿共に伊吹を匿うように積極的に呼びかけることもしてくるだろうな」

「龍園氏はなぜそこまで黛氏を？」

「金田、前にアイツが俺たちの溜まり場に乗り込んできたときのことを思い出してみる」

そう言われ、金田は夏休み前に起きた出来事を思い返した。

Cクラスが会合と称して集まっていたクラブに件の男は一人やつてきた。

場違いな空気の中、男は笑みを崩さず悠々とその場に居座つた。

自分たちのリーダーである龍園と対等であるかのように話す男。

時折煽るようなことを口にして、周りを戦々恐々とさせたのも記憶に新しい。

その場で男が語つたのは人間を愛しているという己の信条。

人類愛。およそ正気の間人が口にするものではないことを男は大真面目に語り聞かせた。

男が持つ人間への愛。男が掲げる人間讃歌。

おそらくあの場の誰一人として、自分たちのリーダーである龍園でさえ理解できなかっただろう。

それほどまでに男の思考は、情愛は狂っていた。

しかし、金田は彼にどこか感じるものもあつた。

全く理解できないのではなく、少し、僅かながらでも理解できる部分が存在している気がする。

別次元の人間でありながら、どこか自分たちと同じなのではないかと錯覚させる歪さ。

それが男の持つ雰囲気であり、同時に武器なのだ。

全く違う部類の人間であるはずなのに、親しみやすさを感じさせる。

あの男の恐ろしさはそういったところなのかもしれないと金田は思つたのだ。

「黛はイカれたクソ野郎だ。それはテメエも分かるだろ」

「ええ、まあ」

「だが、アイツの思考を深く考察してみれば、付け入る隙が見えてくる」

「付け入る隙、ですか」

「黛は人間を愛してるなんてイカれたことを口にした。だがそれは見方を変えれば大概のことは黙って傍観してるってことだ。現にこの前の事件のとき、アイツはクラスの猿共が足掻く様を黙って見ていたわけだからな」

「それに関してはクラスの結束を固めるため、と称していましたが？」
「その通りだ。つまり大きな目的のためなら誰が足掻こうが知ったことじゃねえってのがアイツの思考なのさ。それがたとえ同じクラスの奴だろうと、アイツは大きな目的のために使い潰すし見逃す。黛は伊吹がスパイだと知っても、自分のクラスの奴らがどう動くかを見るために見逃すはずだ。アイツが掲げる人間讃歌に則って言えば、猿共が成長するのを見たいってところだろう」

「……理解に苦しみますね」

「同感だ。黛を理解しようなんて考えるのは時間の無駄だから諦めろ。アイツはどうしようもなく狂ってやがるが、頭はキレる油断ならねえ奴だ。だがアイツは小さな動きにはさして事を起こすことはしねえ。Dクラスは伊吹でも容易に潜り込めるだろう。だから俺は伊吹をDに当てがった」

「では伊吹さんはDクラスのリーダーの情報を得ることが出来るのでしょうか？」

「いや、勝率は五分五分といったところだな。先も言ったがアイツは油断ならねえ。今回の試験の一番の敵はAでもBでもねえ。Dクラス、いや黛が最大の壁だ。アイツをどう上手く動かせるかでこの試験の勝敗は大きく変わると俺は考えている」

「フッフ、なるほど。龍園氏は黛氏を逆に利用するという腹なわけですか」

金田は龍園の狙いに気づいた。

我らのリーダーは、あの男を敵とするのではなく味方とする事を選

んだのだ。

勿論信用はしていないだろう。

だがそれ以上に、龍園は黛柚椰という人間の異常性を買ったのだ。彼の人類愛を逆手に取り、自身の企てを上手く運ばせる。

肝の据わりかたも、行動の大胆さも、全てが突き抜けている。

やはりCクラスのリーダーは龍園しかいないと金田は確信した。

「イカレ野郎も使いようってことだ。この試験、勝ちにいづくぞ」

「ククツ、やはり我々のリーダーは貴方しかいませんよ」

Cクラスの王たる男と、その参謀たる男はこの戦いの行く末に笑みを浮かべた。

時間は進み、日が沈み夜になった20時。

Dクラスのベースキャンプでは茶柱先生の号令の下点呼が行われた。

「よし、高円寺を除けば全員いるな」

先刻リタイアした高円寺を除けば、Dクラスは全員揃っていた。

点呼によるマイナスペナルティはひとまず回避できたということだ。

「では後は寝るなり遊ぶなり好きにするといい。ただし、分かっているとは思いますが朝にも点呼があるからくれぐれも寝坊はしてくれないよ」

茶柱先生はそう言い残すとさっさと教員用のテントに戻っていつてしまった。

「黛、いいか？」

「うん、構わないよ」

解散になるや否や、綾小路は柚椰に声をかける。

用件は既に伝えられているためか、柚椰は二つ返事で了承した。

この後何をするかを楽しげに話し合っているクラスメイトを他所に、二人は森の方へと歩いて行った。

「この辺りでいいか」

森に入って少し歩いたところで綾小路は足を止めて柚椰に向き直る。

「それで、昼に言っていた大事な話とは一体なにかな？」

気を遣ったのか、柚椰の方から話を切り出す。

「実はなんだが……」

綾小路は少し間を置いた後、口を開いた。

「今回の試験から、俺は本気を出そうと思う」

「ほう、それはまた随分急な話だね。突然どうしたんだい？」

柚椰は綾小路の話に少し意外そうな顔になる。

綾小路のこれまでの行いと性格を知っているからか、その心境の変化に驚いていた。

「Aクラスを本格的に目指さざるを得なくなった、ってことだ」

「茶柱先生にでも脅されたのかい？」

「……やっぱり黛は鋭いな」

暗に肯定の意を示した綾小路に柚椰はふわりと微笑んだ。

彼は近くの木に背中を預けると大まかな事情を推測する。

「先生が鈴音に言ったAクラスに上がるために必要な人材。それが俺と君の二人だった。まあ高円寺も優秀だけど手に負えないから外したんだろうね。この前の事件の裏で動いていた俺はともかく、君はまだまだ大きく動いていない。恐らく先生に言われたんじゃないか？ 『お前が協力していればもっと早く片がついていた』とか」

「驚いたな。そこまで分かるのか」

綾小路は改めて柚椰の推理力に驚いていた。

「茶柱先生が鈴音と同じかそれ以上にAクラスに上がることに拘って

いることには気づいていたんだ。だから未だに動かない君に焦れつたくなつたんじゃないかと考えたんだけど、どうかな？」

「ああ。あの人は俺に全力を出せと言ってきた」

「でも意外だね。先生に注意されたくらいで君が素直に言う事を聞くなんて。先生に入試や小テストの点数で追及されても受け流していた君らしくないな」

「……」

柚椰の指摘に綾小路は顔には出さないまでも、彼から少し目を逸らした。

「言う事を聞かざるを得ないようなことでも言われたのかい？」 『言う通りにしないと退学させる』とか」

「……ああ」

綾小路は短く肯定の意を示した。

「一教師の一存で生徒を退学になんて出来るわけがない、と言いたいところだけど……あの先生の性格を考えれば、いくらでも問題はでっち上げられるだろうね。しかも君はクラスの中では目立たない立ち位置だから、何か問題が起きたとしても抗議してくれる人が少ない。加えて健の時と違って敵が学校側なら処分を覆すのは容易じゃない。脅しとしては強力だね」

「俺も言ったよ。『アンタ、それでも教師か』ってな」

その言葉に柚椰は可笑しそうにケラケラと笑った。

「ふふつ、確かに。あの人はお世辞にも良い先生とは言えないな。大事なことは話さないし、生徒には辛辣だ。でもまあ、メリットを提示すれば乗ってくれるだけの頭の良さはあると思うよ。君が本気を出してAクラスに導くというメリットを得る代わりに、あの人は君の身を保証する、といったところかな？」

大体の事情を把握し終え、柚椰は満足そうに空を見上げる。

「上のクラスに行くことに拘りはなく、良い成績を出すことにもあまり積極的じゃない。幸村みたいにハングリーなわけではなく、少し前の池たちのように諦めているわけでもない。君が宙ぶらりんな人間だということは気づいていたけど、退学をチラつかせられたら首を縦

に振らざるを得なかったということか。約束された将来とか、至れり
尽くせりの環境とか、君はそういうものに興味がないものと思ってい
たんだが」

「そんなことはないぞ。今回の旅行も、試験じゃなければ俺も満喫す
るつもりだった」

「そうか。でも、この学校も快適ではあっても最高ではないだろう？
徹底的な実力主義。弱肉強食の学校制度。外部との接触禁止。こ
の学校は一種の隔離訓練施設だと思うんだ。俺の推測だと、君が守り
たいのは快適な住環境でも、賑やかな学校生活でもない。君が求めて
いるのはこの学校の規則の部分。恐らく――」

「黛」

そこから先は言わせないと言わんばかりに綾小路は遮る。

彼の声は硬く、どこか険しい色を帯びていた。

「それ以上は詮索しないでほしい」

「……いいよ、深くは聞かないさ」

柚椰はそれ以上詮索するのは野暮だと思ったのか話をそこで切つ
た。

「話を戻すぞ。俺は本気を出す。ただ俺は目立つのが好きじゃない」

「うん、それで？」

「黛に俺の隠れ蓑になつてほしい」

綾小路が言いたいのはつまりこういうことだろう。

自分が今後齎す成果を全て柚椰の手柄だというようにしてほしい
と。

自分の存在が目立たないためのスケープゴート。

それが綾小路が柚椰に求めたことだった。

「俺を指名した理由はあるのかい？」

「お前は優秀だ。Dクラスじゃ間違いなくトップクラス。だからだ」

「隠れ蓑にするなら、クラスのリーダーである平田でもいいんじゃない
かな？ それこそ鈴音でも良いと思うよ」

「平田は頼めば了承してくれると思う。堀北も拒否されるかもしれない
が、強引にさせてしまえばどうにかなる。だが、俺は黛がいい。お

前が適任だと思った」

「おや、随分俺のことを買ってくれているんだね」

「それに、お前は約束は守るタイプだと踏んだ。口も硬いと思った」
だから、と綾小路は柚椰を真っ直ぐ見つめた。

「俺に協力してくれないか？ 頼む」

真剣な眼差しでそう頼み込む綾小路。

彼のその願いを聞いた柚椰は……

「うっ……！」

何故か号泣していた。

「綾小路っ……！」

そして何故か彼は綾小路を抱きしめていた。

「ど、どうした？」

いきなり、しかも同性に抱きしめられたことで綾小路は珍しく狼狽えている。

彼の混乱を他所に柚椰はポロポロと涙を流す。

「何も言わなくていいよ。うん、皆まで言わなくても君の事情は分かかったとも」

「は？」

「君がこの学校に来たのは、親から逃げるためだったんだね……」

「——っ!? な、なに？」

柚椰の言葉にビクリとする綾小路。

「君がこの学校を選んだ理由は恐らく外部からの干渉がされないという点。退学になりたくないということは、君はこの学校から出た瞬間に連れ去られてしまうんだろう？ 君は自分に酷い事をしてきた親から逃げるためにこの学校に来たんだ。そうだろう？」

「い、いや黛？ 俺は——」

「大丈夫、言わなくてもいいさ。全部分かっているよ。君をそんな親の所になんて連れて行かせはしない。俺が君を守ってあげるさ」

「いや、そうじゃなくてだな——」

「気にすることはない。隠れ蓑にでもスケープゴートにでもいくらで

もなつてあげよう」

「(なんでコイツは一人でこんなに盛り上がってるんだ?)」

綾小路はなんで柚椰がこんなに泣いているのか理解に苦しんでいた。

そして柚椰の発言から彼が行き着いた結論を推測した。

恐らく柚椰の中で、自分は親に虐待されていて、そこから逃げたためにこの学校に来た。

もし退学になり学校から出てしまえば、その酷い親の所に逆戻りしてしまう。

なんて可哀想なんだ、というところだろうとあたりをつける。

「(頭の回転が良すぎてそういう結論に至ったのか?)」

彼は断片的な情報から自分の置かれている境遇を推測したのだろう。

若干違うところもあるが、彼の態度を見る限り自分に同情していることは明白だった。

なにはともあれ、この勘違いは綾小路にとってはありがたかった。

「……引き受けてくれるのか?」

「当たり前だろう? 友達じゃないか」

「そうか。助かる」

綾小路は柚椰の勘違いを利用することに決めたようだ。

事情は違えど、相手が同情して協力を買って出ってくれるなら悪い話ではなかったのだ。

「なんでも言ってくれて構わないよ? 君のためなら協力を惜しまないさ」

柚椰は一人で盛り上がっているようで、綾小路を強く抱きしめる。

「そ、そうか。それはありがたい。が、ちよつと苦しい……」

協力してくれるのはありがたいが、柚椰の抱擁の強さに綾小路は少し顔を顰めた。

「ん? ああ、すまないね」

綾小路からの抗議の声を聞き、柚椰は素直に抱擁を解いた。

ひとまずお互いに落ち着いた後、改めて綾小路は真面目な話を始める。

「それで早速で悪いが、お前に報告しておきたいことがある」「なにかな？」

「実は最初の探索のとき、Aクラスのリーダーを見つけた」

「え、もう分かったのかい？」

あまりに早い成果に柚椰は驚いたような顔になる。

「ああ。だが少し気になることがあってな。お前の見解を聞きたい」「聞かせてほしい」

綾小路は洞窟のスポットを見つけたこと。

そしてそこからAクラスの生徒が二人出て来たこと。

内一人は葛城、もう一人は弥彦という男子だということ。

そして葛城という男がキーカードを握っており、自身をリーダーだと言ったこと。

葛城は上陸前からスポットにあたりをつけており、占有ボーナスを稼ぐつもりだということ。

現状Aクラスが警戒しているのはBクラスのみだということなどを話した。

「なるほどね。葛城がリーダーか」

「黛はその葛城という男について何か知っていることはあるか？」

綾小路は他の生徒についてあまり詳しくないため、柚椰の情報を求めた。

「そうだね、まずAクラスにはリーダー格が二人いる。その葛城という男子と、そして坂柳という女子の二人」

「坂柳……確か弥彦と呼ばれていた男が言っていたな」

洞窟の前で葛城ともう一人の男子がしていた話と同じ名字が出て来たのを綾小路は思い出した。

「そう、両者は派閥を作って対立している状態なんだ。俺が面識があるのは坂柳の方。彼女はかなり武闘派の人間だ」

「ということとは葛城は……」

「穏健派。それもかなり用心深いタイプらしい。それが坂柳にとって

は不満みたいだね」

「なるほどな……となると、尚更葛城の行動が引つかかるな」

「そうだね。周囲を警戒する素振りを見せながら堂々とキーカードを手にとって出て来ている。それに洞窟の前で長々と話しているのも、自分をリーダーだと言ったことも用心深い人間が取る行動にしては違和感があるね」

「ということは、葛城がリーダーだと言ったのはブラフの可能性が高いな」

「洞窟の近くにいたのは葛城ともう一人の男子だけだったのかい？」

「洞窟の中にも入って確かめたが、他に人の気配はなかったな」

「となると、本当のリーダーは必然的に……」

「ああ。もう一人の方、弥彦と言われていた男だな」

「戸塚弥彦。葛城の派閥にいる人間だね」

「知ってるのか？」

「いや、直接話したことはないよ。ただ、葛城派にいる人間の中では葛城をかなり崇拜している信者らしいね」

「確かに、なにかにつけて葛城を持ち上げる口ぶりだったな」

「なんにしても、これでAクラスのリーダー当ては出来そうだね」

「そうなるな」

「大手柄じゃないか。凄いよ」

「偶然だったが、ラッキーだったな」

これでDクラスはAクラスのリーダーを当てることができると。

こちらはプラス50ポイント。そしてAクラスはマイナス50ポイントが決まった。

綾小路の大健闘と言えるだろう。

「それともう一つ、お前に報告しておきたいことがある」

「それは？」

「今日山内が連れて来た伊吹についてだ」

綾小路は伊吹を見つけたときの状況。

そしてDクラスのベースキャンプに連れてくるまでの経緯を掻い摘んで話した。

「どう思う?」

「うん、まあ、普通に考えてスパイじゃないかと疑うよね」

「やはりそうなるか」

「そりゃあね。この状況で他クラスの人間がいたら疑うさ。龍園は俺たちが彼女に同情しやすいようにわざと殴った。そんなところじゃないかな?」

「ああ。俺も同じ結論に至った。恐らくだが、他のクラスにも同じように潜り込ませている可能性が高い」

「明日Bクラスのベースキャンプを探して乗り込んでみるよ。Cクラスの間人間がいたら疑いが強まるからね」

柚椰の申し出に綾小路はキョトンとした顔になる。

「いいのか? お前までスパイだと疑われるかもしれないぞ」

「Bクラスには一之瀬がいる。彼女に話を通してから中に入れば大丈夫だろう。現状彼女と交友があるのは俺と桔梗くらいだからね。ああ、どうせなら綾小路も来るかい?」

「もし良かったら同行してもいいか? 単身で乗り込むよりは警戒されないだろう」

「じゃあそうしようか」

二人は明日一緒にBクラスのベースキャンプに行くことで話を纏めた。

「それと、これは黛にしか言っていないことだが」

「なんだい?」

「最初に伊吹を見つけたときに違和感があった」

「違和感?」

「ああ。アイツの手は何故か土で汚れていた。爪にも土が付いていた」

綾小路は伊吹を拾った時に、彼女の手にも土が付いているのを見たのだ。

それが彼にはどうにも引つかかるらしい。

「地面に爪を立てた跡ってことかな?」

「Dクラスのベースキャンプに来た時も、足元の草を引き抜いたりし

ていたから一概に怪しいとは言えないんだがな……」

「うーん、そうか。考えられるとすれば、殴られたとき地面に転がって手に付いたか、そもそもそういう癖があるのか。それとも……」

そこから先を濁して柚椰は暫し思案する素振りを見せる。

「伊吹を見つけた場所は覚えているかい？」

「ああ。この近くで枝を拾って帰る途中だったからな」

「明日そこも見てみるのはどうだろう？　もしかしたらヒントがあるかもしれない」

「そうだな。そうしてみるか」

二人は伊吹の居た場所にも明日行ってみようということになった。

「とりあえず今得た情報はこんなところだ」

「うん、分かった。それとこのことは——」

「ああ。出来れば俺とお前の二人だけの秘密にしておきたい。他の奴らが自分で気づいたのならその限りじゃないが、こちらから教えることはしないつもりだ」

「それもそうだね。特にスパイの方は言うとかえって混乱させかねない」

「そういうことだ」

ひとまずこの話は二人だけの秘密ということになった。

「そろそろ戻るか」

「あ、先に戻っていてくれないかな？　俺は少し時間を空けて戻るよ」

「どうしてだ？」

「分からないかい？　これだよ」

柚椰はそう言って自身の目元を指で差した。

彼の目元は少し腫れており、どう見ても泣いた跡だと分かる。

「二人で出て行って、片方が目を腫らして戻って来たら誤解されてしまっただろう？」

「うっ、それもそうか……」

「綾小路が泣かせたー！　とか誤解されたら面倒なことになってしまっ」

「確かに。黛を泣かせたとあつたら、クラスから大鬘蹙を買いそうだ」

クラスでも平田に次いで人気のある柚椰が泣き腫らした顔で帰って来た。

彼と出て行ったのはクラスでも目立たない地味な自分。

うん、誰がどう見ても自分が犯人だ。と綾小路は結論づけた。

このまま帰れば男女問わず自分が吊し上げられることは確定だ、と綾小路は苦笑いする。

「じゃあお前の気遣いに甘えて、俺は先に戻ってるな」

「うん、いいよ。川の水でも冷やしてから帰るから気にしないでくれ」

「ああ、分かった」

「じゃあまた後でね。清隆」

「え？」

いきなり下の名前で呼ばれて綾小路はポカンとした。

「俺たちは協力関係、要は相棒だ。だったら下の名前で呼び合ってもいいんじゃないか？」

そう言つて柚椰は微笑んだ。

彼にそう言われ、綾小路もまた僅かに口元を緩める。

「ああ、そうだな。柚椰」

「ん、じゃあね」

二人はそこで別れ、綾小路は一足先にベースキャンプに戻っていった。

王は宴に招待し、彼は地中を掘り起こす。

特別試験二日目の朝。

蒸し暑さに寝返りを打とうとしたところで、それが出来ずに綾小路は目を覚ました。

彼が寝ていたのはテントの中。

クラス全員が寝れるだけのテントを購入しているため、Dクラスは皆テントの中で夜を明かすことができた。

しかし、あくまでテントの定員とクラスメイトの数に鑑みての最低数しか購入していないため、テント内は少々窮屈だった。

寝返りを打とうとすれば隣の奴と当たる。背中には隣で寝ている奴の体が触れ、体温を感じる。

ただでさえ暑い真夏日に、他人の肌から感じる体温は不快指数を上げていた。

綾小路は同じテントで寝ている他のクラスメイトを起こさないようにゆっくりとテントから出る。

「ふう……」

窮屈なテントから出てほつと息を吐く綾小路。

彼はそのままテントの前に山のように積まれている荷物に近づいていく。

Dクラスは男女それぞれ、テントの前に全ての荷物である鞆を纏めて置いている。

テントの中を可能な限り広く使うために荷物は外に置くことになっていた。

辺りを見渡し誰も居ないことを確認すると、彼は一つだけ色の違う荷物を見つけて近づいていく。

彼が目をつけたのは、昨日このクラスにやって来た伊吹のカバンだ。

鞆は各クラスごとに色が異なるためすぐに見分けがつく。

迷わずそれに手を伸ばし鞆を掴むとゆっくりとチャックを開けた。もしこの現場を押さえられれば言い逃れは出来ないな、と内心不安に思いながらも中を物色する。

中にはタオルや替えの服、下着など基本的に皆と同じものが入っている。しかし――

「これは……」

伊吹の鞆の中から出て来たのはデジタルカメラ。

底面には貸出用のシールが貼られている。

おそらくポイントで購入したのだろう。

綾小路はデジカメの電源を入れて中身をチェックする。

デジカメが使用された痕跡はなく、データは何も入っていないかった。

一通り物色を終えた後、荷物を戻してテントへ戻ろうとした。

「おはよう綾小路君。トイレかい？」

寝ていた平田がいつの間にか目を覚ましていたらしく、テントから出てきていた。

「ああ。悪い、もしかして起こしたか？」

「ううん、ちよつと蒸し暑くて起きちゃったただだよ。それにしても

……8人用を8人で使うとやっぱり狭いね」

「まあな。柚椰の言っていた通り、テントの定員は当てにならないな」

「そうだね。って柚椰？」

平田は綾小路が柚椰を名前で呼んでいることに気づいた。

「ああ。昨日アイツと少し話すことがあつてな。その流れで名前で呼び合うことになった」

「そうなんだ。なんかいいよね、友達と名前で呼び合うってさ」

「平田も言ってみたらどうだ？　柚椰なら多分すぐにOKしてくれる

と思うぞ」

「じゃあ後で僕も話してみようかな」

微笑みながら話していた平田だが、やがてその顔つきは真剣なものへと変わった。

「僕たちが昨日までに使ったポイントは110ポイント。高円寺君が

リタイヤしてしまつたから、それも含めると140ポイント消費したことになる。残りは160ポイント。今日入れて試験はあと6日。ポイントがどれだけ残せるかとか、何事も無いといいなとか色々考えちゃうな」

彼はテントの近くに腰を下ろし、マニュアルを取り出して状況を確認していた。

「大変だな。クラスのまとめ役も」

綾小路は平田の心労を慮りながら彼が開いているマニュアルを覗き込む。

見辛くならないように平田がマニュアルの位置を調整する。

「ううん、好きでやってるだけだから。それに、黛君も協力してくれてるからね。僕はクラスの皆が幸せでいてくれればそれで満足なんだ。でも、試験が始まる前のときもそうだったけど中々難しくくて。僕一人の力じゃ今のこの形にはなつてなかつたと思うんだ」

「ああ、トイレのゴタゴタのことか」

「うん。あのとき黛君が上手く皆を誘導してくれなかつたら、僕はあの問題を先延ばしにしてたと思う。でも先延ばしにすればするほど、池君と篠原さんを中心にクラスが分かれてしまつていたと思うんだ」

「Aクラスをを目指したい生徒とDクラスのままがかまわない生徒で意見は分かれるからな。平田はどっちなんだ？」

「難しい問題だね……上のクラスを目指すって気持ちは大切だし否定するつもりはないよ。でも、そのために誰かが我慢をしたり、無理をするのは間違つてると思う。だから……ごめん、すぐに答えは出ない、かな」

綾小路の問いに少し謝りながら平田は薄く笑う。

「綾小路君はAクラスを目指したい人？ それとも学校生活が楽しければいい人？」

「どちらかと言えば、学校生活優先だな。Aクラスに上がれるとは現実的に考えてない」

「そっか。僕も簡単なことじゃないってことは感じてるよ。僕たちのクラスは纏まつてきているけど、最初の1ヶ月の失敗がやっぱり大き

いからね」

平田の言うことは尤もだった。

上位クラスであるAクラスは今尚その地位を確たるものとしていくる。

であるが故に努力しても差は簡単には縮まらない。

1000ポイント近くの差を埋めるのは、本当に大変なことだった。

一つ上のCクラスに追いつき追い越すことすら困難だというのが現状だ。

「焦る必要はないと思う。今はまず、Dクラスが一丸となつてこの試験を乗り切ること。そうすれば、ゆつくりと次の目標が見えてくると思うんだ」

そこまで言うと、平田はマニュアルを閉じて立ち上がった。

「良かったら一緒に顔を洗に行かない？」

「ああ。分かった」

二人は近くの川へ顔を洗いに行くことにした。

ビニールに包んだ自分の荷物からタオルを取り出して準備をする。

平田はついでにマニュアルを鞆にしまっているようである時間がかかっていた。

彼からチャラチャラとプラスチックが擦れる音がする。

よく見ると彼の鞆にはアクセサリーが付けられていた。

「それ、軽井沢からのプレゼントとかか？」

「え、うん、そうだよ。よく分かったね。つて、なんとなく分かるかな」

ハートマークの入ったアクセサリーを見れば流石に想像は容易いだろう。

「へえ、平田は愛されているんだね」

平田でもなく綾小路でもない声がいきなり響いた。

「うわっ!?! つと、黛君か」

「やあ、おはよう」

いきなり聞こえた第三者の声に平田はビクリとしながら振り向く。

その声の主が柚椰であると分かるとすぐにホツとしたように息を

吐く。

綾小路もいきなり現れた柚椰にキョトンとしていた。

「柚椰も起きていたのか」

「うん、思いの外早く目が覚めてね。少しこの辺りを散歩していたんだ」

「どうやら柚椰は綾小路よりも早く起きて辺りを歩き回っていたようだ。」

「黛君も顔洗いに行かない？」

「ああ、顔を洗いに行くところだったんだね。じゃあ一緒に行くよ」

柚椰はさつきと自分の鞆を掴んで中からタオルを取り出した。

それから三人で川へと向かうと、そこに思いがけない人物がいた。

「こんなところで何やってるんだ」

Bクラスの生徒、神崎がDクラスのベースの様子を伺うようにこちらを見ていた。

少し遠くにも男子生徒が立っており様子を伺っていたが、おそらく彼と同じくBクラスの生徒だろう。

「1日経ってどうしたかと思つてな。少し様子を見に来てみた。良い場所を抑えたな」

綾小路に尋ねられた神崎はそう言つてベースキャンプを見た。

素直に感心しているらしく、特に裏のある発言ではなさそうだ。

「確か君は……Bクラスの神崎君、だよな？」

平田は神崎に見覚えがあるようで、しっかりと名前も覚えていた。

「驚かせてしまっただろうな。すまない、気を悪くしないでくれ」

「大丈夫、気にしてないよ」

「そう言つてもらえると助かる。それと……」

神崎は平田と綾小路と一緒にいる柚椰に視線を移した。

その視線に気づき、柚椰はふわりと微笑む。

「やあ、初めまして。黛柚椰だ。よろしく」

「神崎隆二だ。一之瀬がいつも世話になつてる」

「いやいや、この前はBクラスにお世話になつたじゃないか」

直接会うのは初めてであるため、二人はお互いに軽く自己紹介をし

た。

「神崎。Bクラスはどこでキャンプしてるんだ？」

昨日の話し合いでBクラスのベースキャンプに行くことになっていたからか、綾小路がそう尋ねる。

すると神崎は嫌な顔一つせずに答えた。

「ここから道なりに浜辺に戻る途中に折れた大木があるだろう。そこから南西に森に入って進んだ先にBクラスが滞在するキャンプ地がある。大木から入れば迷うこともないだろう。必要なら来ても構わないぞ」

「そうか。じゃあ機会があれば」

神崎は最後に微笑むとその場を去っていった。

彼と一緒にBクラスの男子たちも去っていく。

「Bクラスも近くに拠点を構えたみたいだね」

「そうみたいだな」

柚椰と綾小路は神崎が齎した情報を聞き、後で訪れてみようと考えていた。

「とりあえず顔洗って戻ろうか」

平田がそう締めると三人は川で顔を洗い、ベースキャンプへと戻った。

朝の点呼も無事に終わり、Dクラスは自由行動へと移る。

平田はクラスメイトたちに指示を出し、ポイント節約のために物資調達へ乗り出す。

勿論全員が全員出払っているのではなく、男女含め数人はベースキャンプに残っていた。

「桔梗、少しいいかな？」

「え？ うん」

柚椰は櫛田に声をかけると森の近くまで呼び寄せた。

「なにかな？」

「このあとの動きについて指示を出しておこうと思ってる」

その言葉に櫛田はすぐにあることに思い当たる。

「……もしかして、伊吹さんのこと？」

「おや、どうしてそう思うんだい？」

「だって、たまたま近くを通りかかった山内君たちに拾われてここにきたっていうのは怪しいもん。初日で仲間割れしてクラスを追い出されたっていうのもちよつと不可解だし。柚椰君は気づいてるんじゃないの？ 伊吹さんがスパイだって」

「ふふっ、やはり君は有能だね」

櫛田が既にそこまで感付いていることに柚椰はニヤリと笑みを浮かべた。

「確実な証拠はまだ揃っていないけど、彼女がスパイだということはほぼ間違いないと思っ

「やっぱり。じゃあ柚椰君が頼みたいことはリーダーの偽装かな？」

「正解。君にはあたかも自分がDクラスのリーダーであるように振舞ってもらおう」

そう言うのと柚椰は櫛田の手にキーカードを握らせた。

「この後の動きとして、まず君は必ず複数人で行動すること。リーダーは他クラスに知られてはならないから、キーカードを持った君が一人で行動することはご法度だ」

「うん、分かった」

「本来のリーダーである俺が単独で動き回り、君は必ず集団で行動する。こうすれば俺がリーダーだと疑われる可能性は低くなるからね。彼女はおそらく君のグループにリーダーがいると誤認するはずだ」

「じゃあ伊吹さんは私のグループで面倒見た方がいいかな？ その方が攪乱させやすいでしょ」

「そうだね。彼女をここに一人で置いておくよりは、一緒に行動しておいたほうが油断させやすい」

「分かった」

「それと、君がキーカードを持つのは朝の点呼から夜の点呼の間。夜の点呼が終わり次第カードは逐一俺に返してもらう。方法は今やったようにこつそり手に握らせるだけでいい」

「え、ずっと持つてなくていいの？」

「寝込みを襲われなくても限らないからね。夜は俺が持つていたほうがいい」

「あ、それもそうだね。でも、そんなに頻繁にカードの受け渡しをしてたら伊吹さんに見られちゃう危険があるんじゃない？」

「それでいいのさ」

「え？」

榎田はキョトンとした顔で頭に疑問符を浮かべた。

「万が一現場を見られたとして、彼女は俺たちがリーダーを攪乱させるためにカードを渡しているという情報しか手に入らない。俺か桔梗、あるいは俺たちと親しい誰か。本当のリーダーが誰かなんてことは分からないんだ。リーダー当てを失敗すればマイナス50ポイントのペナルティ。これは生徒一人がリタイアするよりも重いマイナスだ。だから彼女はただキーカードを受け渡す現場を見ただけでは情報を流すことは出来ない」

「あ、そっか。リーダーを知るためにはキーカード自体を見るか占有する瞬間を見ないといけないもんね」

「その通り。キーカードを用いた占有はリーダーにしか行えない。日中キーカードを持っていてる君は占有が出来ない。つまり君と一緒に行動している彼女はスポットを占有する瞬間には絶対に立ち会えないんだ」

「残る危険はキーカードを見られるか盗まれるか、だね」

「君がキーカードを見られるなんて失態は犯さないと信じているし、夜は俺がキーカードを持っていてるから盗まれる心配はない。彼女がリーダーを知ることがまずありえないのさ」

榎田の作戦を一通り聞き終わると、榎田はキーカードをジャージのポケットにしまった。

「榎田君の作戦は分かったよ。じゃあ、私はこれからリーダーの演技

をすればいいんだよね?」

「ああ。演じるのは君の専売特許だろう? 期待しているよ」

「演じるのが得意なのは柚椰君もでしょ。もう……」

「柚田はぶうつと頬を膨らませながらジト目で柚椰を睨む。

「この作戦は俺と君の二人だけのものだ。誰にも言ってはいけないよ」

「勿論。柚椰君との秘密は守るもん」

「じゃあよろしく頼むよ」

「うんっ」

そこで会話を打ち切り、二人は別れた。

ちやうどその時である。

「何だよお前ら!」

ベースキャンプに池の怒号が響き渡った。

待機していたクラスメイトは何事かと声のする方へ視線を向ける。

そこには二人の男子生徒がニヤニヤしながら立っていた。

二人に見覚えがあるのか、伊吹は苦い顔を浮かべるとテントの陰に隠れる。

男子二人の名前は小宮と近藤。つい先月須藤と揉めた相手である。

「お前ら朝は何食ったんだ? 草か? それとも虫か? ほら、スナック菓子でも食えよ」

小宮はそう言ってポテチの袋を開けて一枚取り出すと池の足元に放った。

明らかにおちよくついているとしか思えない行動に池の顔がどんどん強張る。

周りで事の成り行きを見ていたDクラスの面々も皆不快感を顔に滲ませていた。

「龍園さんからの伝言だ。夏休みを満喫したかったら今すぐ浜辺に来てよ。遠慮せず来た方がいいぜ。この馬鹿みたいな生活が嫌になる夢の時間を共有させてやるってさ」

言いたいことは言い終えたのか、二人はそのまま去っていった。

「夢の時間を共有させてやるって、どういう意味だろうね」

去っていく小宮たちの後ろ姿を見ながら平田が綾小路に尋ねた。

「さあ。ただ、様子を見に行ってみてもいいかもな」

「そうだね。Cクラスがどういった風に試験に臨んでいるのか、偵察してみる価値はありそうだ」

いつの間にか柚椰も話に加わってきていた。

「柚椰、Bクラスを偵察する前にCクラスの方に行ってみないか？」

「うーんそうだな……いや、ここは時間を有効に使おう。君は鈴音を誘ってCクラスの偵察に行ってくれないかな。俺は先にもう一つの用を片付けようと思う」

綾小路は柚椰が言わんとしていることを察した。

「伊吹を見つけた場所の調査か」

「うん、Bクラスの偵察は一緒に行く約束だからね。そちらを先にやっておくよ」

「分かった。悪いな」

「気にしなくていいよ」

「二人は伊吹さんをスパイだと疑っているのかい？」

二人のやりとりから大まかな事情を察したのか平田がそう尋ねる。

「ああ。まだ確証はないけどな。だが、伊吹を見つけた場所にももしかしたら手がかりが残っているかもしれない。そう思ってたな」

「そっか。このことは皆には内緒にしておいたほうがいいよね」

「そうしてもらえると助かる。わざわざ不安材料を投下するメリットはないからな」

「確かにそうだね。じゃあ僕もこのことは秘密にしておくよ」

綾小路からの頼みを平田は二つ返事で了承した。

「じゃあ俺は一足先に行ってくるよ。何もなかったらそのまま辺りを探索しておくね」

柚椰はそう言う森の中に入って行ってしまった。

その後、綾小路はテントで休んでいる堀北に声をかけ、Cクラスのベースキャンプへ向かった。

綾小路と堀北がベースキャンプを出発した頃、柚椰は伊吹を見つけたとされる場所に到着した。

詳しい場所は事前に綾小路から聞いていたからか、彼はまっすぐこの場所にたどり着くことができた。

しかし、いくら場所を聞いたからといって広い森の中でそうすんなりと目的地を把握できるものだろうか。

「ふむ、ハンカチか」

伊吹が座っていたと思われる場所、そのすぐ側にある木の枝に結び付けられている水色のハンカチ。

それを解き、手に取って触れればハンカチが女物であることはすぐに分かった。

恐らく伊吹が自分が居た場所を見失わないように結んでおいたのだらうと柚椰は推測する。

「わざわざ目印を付けるということは……と」

この場所にはいくつか気になる箇所が存在する。

木の根元付近に生えている草はある一定の範囲の部分だけが“寝ている”。

恐らく人が座った跡だらう。そしてその相手は言わずもがな伊吹だ。

次に気になるのはそこから少し離れた地面。

一部分の土だけが濃く、色が違う。

手で触れてみるとその部分だけが柔らかい。

周りの地面は固く、人の手が長らく加わっていないことが分かる。

「（確か清隆は滯ちゃんの爪に土が付いていたと言っていたな）」

考えられる可能性は一つだった。

柚椰は土の色が変化している部分を手で掘り起こしてみる。

10センチほど掘ってみると、土の中から口を結んだビニール袋が出てきた。

袋には何かが入っているらしく、わずかに重い。

彼は結び目を解き、袋の口を開いた。

「へえ……」

中に入っていたものは無線機だった。

通信手段を封じられているこの試験において、これを使うためにはポイントで購入するしかない。

その証拠に無線機の底部には貸出し用のシールが貼られていた。

「なるほど。リーダーが分かり次第、無線機で報告する手筈というところか」

伊吹の作戦を把握した柚椰はニヤリと笑みを浮かべる。

そしてそのまま彼は無線機の電源を入れると、無線機を口へと近づけた。

「あー、あー、龍園クン、聞こえるかい？」

数分後、柚椰は無線機をビニール袋に戻し、元あったところに埋めてその場を去った。

三者三様、少年少女は奮闘する。

森を抜ける直前の茂みから見えた浜辺に、Cクラスの大勢の生徒が見える。

綾小路と堀北が見たCクラスの状況は彼らの想像の斜め上を行っていた。

「嘘でしょ……まさか、こんなことってあり得る?」

目の前の光景に堀北は何度もあり得ないと口にしていった。

仮設トイレやシャワーが設置されているのはDクラスも同じであつたがそれ以外が問題だつた。

日光対策のタープにバーベキューセット。

チェアーにパラソル。スナック菓子とドリンクと娯楽に必要なありとあらゆる設備が備えられていた。

肉を焦がす煙と笑い声。

沖合では水上バイクが駆け抜け、海を満喫する生徒が悲鳴をあげながら楽しんでいる。

ざつと見渡すだけでも150ポイント以上を吐き出していることが伺えた。

「……もしかしてCクラスの取った選択は」

「ああ、柚椰が言っていた最初の選択肢。ポイントを全て使ってバカンスを楽しむことにしたんだろ」

「確かめに行きましょう。Cクラスがどういうつもりでその選択をしたのか」

茂みから二人で浜辺へと足を踏み入れ、砂を踏みしめていく。

するとすぐに男子生徒が一人彼らに気づき、傍にいた男子に声をかける。

相手はチェアーに体を預けているようで二人からは顔が見えない。

すぐに男子は綾小路たちに方へ駆け寄ってきた。

「あの、龍園さんが呼んでます……」

そう伝えに来た男子に覇気はなく、どこか怯えた様子だ。

男子の様子を見た二人は、以前柚椰が言っていたことを思い出した。

「どうやらCクラスの王様は柚椰君の言う通りかなりの暴君のようね」

「そうみたいだな」

二人は呼びに来た男子生徒に返事をして彼の後をついていく。そしてこの現状を指示したと思われる男の傍へと近づいた。

「よう、Dクラスの猿共。来ると思ったぜ」

「随分と羽振りが良いのね。相当豪遊しているようだけど」

堀北が水着姿でチェアに寝そべる龍園を見下ろした。

「見ての通りだ。俺たちは楽しい楽しいバカンスを満喫してるのさ」

「そう、Cクラスはポイントを残すことを捨てたのね」

「おうとも。こんな島でせこせこサバイバルなんて馬鹿らしいからな」

「それは貴方の独断かしら？ だとしたら傍若無人としか言えないわね」

「俺がYesと言えば他の奴らもYesと言う。王である俺の言うことは絶対だ」

龍園はクツクツと笑い、無線機のそばに置いてあった水のペットボトルを手にした。

「たった2日でどれだけポイントを使ったの。見渡すだけでも1000ポイントは優に超えているように見受けられるけど」

「さあ幾らだろうなあ。ちまちま計算なんてしてねえもんでな」

そう言うのと龍園はペットボトルのキャップを開け、一口飲んだ。

すると何かお気に召さなかったのか眉を顰めて舌打ちした。

「チツ、もう温くなってやがる。おい石崎。キンキンに冷えた水持ってきてこい」

「は、はい」

傍でバレーをしていた石崎が慌ててテントの中へと水を取りに行った。

「俺たちはバカンスを楽しむことを選んだ。つまり、この試験中お前らの敵にはなりようがないってことだ。わかるだろ？」

「そうね。目下の敵である貴方たちが早々に脱落してくれて助かるわ」

「ククツ。ああ、俺たちが悠々自適なバカンスを楽しんでいる間に、お前らは少しでも差を縮められるように頑張れ。現状俺たちCクラスとお前たちDクラスの間には大きなポイント差があるんだからな」

「貴方たちはずっとそうやって胡座をかいているといいわ。必ず足を掬ってあげる」

「そうかい。じゃあ、楽しみにしてるぜ」

話は終わりだと踵を返そうとした堀北だったが、一步踏み出したところで思いとどまった。

「用件がもう一つあったわ。貴方のクラスの伊吹さん、うちのベースキャンプにいるわ」

「ほう、それがどうした」

「彼女、顔を腫らしていたわ。あれはどういうこと？ 貴方がやったのかしら」

「ああ、その通りだ」

龍園はチェアーにどっかかりと身体を預けて踏ん反り返った。

「伊吹は俺の方針に逆らった。だから力づくでここから叩き出してやっただけのことだ」

そうやって手で頬を叩くような動作を見せる。

やはり伊吹を殴ったのは龍園で間違いないらしい。

「もう一人逆らった男がいたが、そいつも同じようにここから追い出した。死んだって報告は聞いてねえから、そいつもどこかでしぶとく生き延びてるだろうさ」

およそ仲間に向けるものとは思えない発言。

しかし彼の発言で綾小路たちはあることに気づいた。

それは、伊吹が点呼に不在でもCクラスに影響がないということだ。

だから心配もしなければ、探そうともしない。

「そう、そういうこと……既にCクラスは1ポイントも残してないってことね」

「そういうことだ。昨日の段階でこのクラスのポイントは0。だから伊吹がどうなろうとポイントを引かれることはない。それがどれだけ自由なことか分かるか？」

「ポイントが0であることを逆手に取ったのね。ということは、遊びに飽きたら全員でリタイアでもするつもりかしら？」

堀北がそう尋ねると、龍園はニヤリと口角を上げた。

「ほう、存外聡いな。まあ、試験放棄を選んだ俺たちがどうしようが前らには関係ないことだろ？」

「そうね、その通りだわ。これ以上ここにいるのは時間の無駄ね」

「またな鈴音」

「……どこで調べたのか知らないけれど、気安く人の名前を呼ばないでくれるかしら」

堀北は殺意にも似た敵意を滲ませた眼光で龍園を睨む。

「あのクソ野郎にしてやられてからDクラスの中で目ぼしい奴を一通り調べたのさ。お前みたいな強気な女は嫌いじゃないぜ。いずれ俺の前で屈服させてやるよ。そのときは最高の気分を味わえるだろうぜ」

彼はそう言つて、右手を自らの股間に持っていき水着の上から触れて挑発した。

「そう。精々叶わない妄想に夢を膨らませているといいわ」

ありつたけの侮蔑を込めた目で龍園を見下した後、堀北は背を向けて歩き出す。

彼女の後を追うように綾小路もその場を去った。

「Cクラスは本当にポイントを使い切ったみたいだな」

「そうね。でも、ただの負け犬にしては彼の目は好戦的な感情を隠し切れていない。恐らくCクラスの本当の狙いは——」

「リーダーを当てることによるボーナスポイント、だな」

二人は龍園率いるCクラスの本当の作戦に気づいていた。

「それにしても、よく龍園たちがリタイアするつもりだつて分かったな」

「簡単なことよ。点呼のペナルティが怖くないなら、その他のペナルティも怖くないということ。他のクラスへの妨害行為によるプライベートポイント剥奪のペナルティ以外は彼らにとっては最早ペナルティにならない。つまりこの島を汚そうがりタイアしようが痛くも痒くもないのよ」

「好きなだけ遊んだあとはリタイアして船の中で豪遊、か……龍園は随分と大胆な奴だな」

「ただの愚か者でしょう……と、前の私なら言っていたでしょうね」

そう呟く彼女の表情は真剣だった。

「問題はここからよ。彼の本当の狙いがリーダー当てだとして、どうやって彼は他のクラスのリーダーを知るつもりなのかしら？ 貴方も見たから分かるでしょうけど、Cクラスの生徒は皆海で遊び呆けていたわ。他のクラスの偵察をしている素振りもない。なのに何故彼はあんなにも強気だったのか」

「もうお前は気づいてるんじゃないか？ 龍園の打った手を」

堀北の表情と語り口から、綾小路は彼女が既に自分と柚椰が出した結論と同じように行き着いたと確信していた。

「伊吹さん。そして彼が言っていた、反対していたもう一人の男子。前者は私たちDクラスに、そしてもう一人は恐らく……」

「AクラスかBクラスに同じように匿われている可能性が高い、つてことか」

「彼は二人を追い出したんじゃない。スパイとしてこちらに送り込んできた。私はそう考えているわ。伊吹さんの腫れた頬も、同情を買わせて潜り込みやすくするための演出」

「なるほどな。ということは、俺たちはまんまとスパイを迎え入れてしまったわけか」

「他人事のように言っているけれど、貴方も彼女を連れてきた共犯でしょう」

「伊吹を連れて行くって言い出したのは山内だぞ？　俺は波風立たないように同調しただけだ」

「同調した時点で同罪でしょう……」

あくまでも自分は悪くないというようにしれっとしていいる綾小路に堀北は頭を抱えた。

「それで、今の結論を踏まえてお前はどうか動くつもりなんだ？」

綾小路は堀北を試した。

自分と柚椰と同じ考えに至った今、彼女はどうか動くのか。

その返答次第では、彼女を仲間に引き入れるのも吝かではないと思っただのだ。

「Dクラスの中にも伊吹さんを100%信用しているわけじゃない人もいるでしょう。それこそ平田君でさえ、彼女がスパイだって疑いは僅かながらでも持っているはずよ」

「だがその上で平田は伊吹を匿うことを決めた。柚椰だって説得に参加してたぞ」

「平田君に関しては疑いよりも目の前の哀れな人に手を差し伸べることを選んだだけでしよう。柚椰君に関しては……もしかしたら知った上で泳がせているのかもしれない」

「どうしてそう思う？　アイツも平田に負けず劣らずお人好しだぞ」

「柚椰君は平田君とは違うわ。彼は確かに優しいけれど、誰彼構わず考えなしに手を差し伸べたりはしない。彼が誰かを助けるようなことをするとき、それが自分か、あるいはその人のためになるか。考えられる可能性は二つ。柚椰君は自分がリーダーだとバレることはないっていう確信がある。あるいは伊吹さんを泳がせることで逆にCクラスのリーダーを探るつもりか。そのどちらかよ」

「どちらにしても全てはアイツのみぞ知るってところだな」

「柚椰君が傍観という選択をしたのなら、その選択には意味があるはずよ。なら私がすべきことは、伊吹さんから目を離さないこと。同じ女である私の方が彼女を監視するには適任でしょうし」

堀北はこの後の自身の動きについてはひとまずそう結論づけた。

その返答は綾小路にとってはお気に召すものだったらしく、彼はそ

れ以上何も言うことはなかった。

「ところで綾小路君、さつきからずっと気になっていたのだけれど、どうして柚椰君を名前で呼んでいるのかしら？」

「昨日話の流れでな。名前で呼び合おうと言ってきたのは柚椰の方だぞ」

「……そう。そうなの。分かったわ」

帰り道、堀北は何故かずっと不機嫌そうだったと後に綾小路は語った。

「そうか、Cクラスはそんな感じだったんだね」

一旦ベースキャンプに戻った二人は待っていた柚椰にCクラスの状況を報告した。

柚椰は二人からの報告にはさほど驚いた様子はない。

「柚椰はCクラスがポイントを全て使うと読んでいたのか」

「クラスポイント差とクラスの特徴を考えると、一番その選択をしそうなのがCクラスだったからね」

「俺も実際に会ってみて思ったが、龍園はかなり大胆な男みたいだな」

「恐れを知らない、というよりはメリツトの方が上回っていると判断すれば躊躇しないってところかな」

「柚椰君」

男子二人が話しているとそこに堀北が入ってきた。

彼女は相変わらずどこか不機嫌そうである。

「貴方は伊吹さんのこと、どう思ってるの？」

彼女のその問いに、柚椰は一瞬だけ驚いたような顔をした。

しかしすぐにその表情はニヤリとした悪どい笑みへと変わる。

「なるほど。その質問をするということは鈴音は気づいたのかい？」

「ええ。Cクラスの状態を見て、彼らの本当の狙いがリーダー当てにあることには気づいたわ。そしてリーダーを探る方法が伊吹さんを

使ったスパイ作戦だってこともね」

「うん、恐らくですけどそれで正解だと思うよ。龍園は他クラスにスパイを送り込んでリーダーを探らせる魂胆なんだろう。清隆、鈴音にも伊吹のことを話しても構わないかい？」

「ああ。堀北は自分の力でこの結論を導き出したんだ。俺がどうこう言える立場じゃない」

綾小路は堀北ならば自分たちの話し合いに参加させても良いと判断したようだ。

彼の許しを得ると、柚椰は改めて堀北に向き直る。

「昨日の夜、俺と清隆は伊吹がスパイだという結論を出した。けどこれは現時点ではあくまで推測でしかない。だから清隆から彼女を見つけたときにあることに気づいたという情報を聞いた俺は、それを踏まえて彼女と最初に遭遇した場所に何か手がかりがあるかもしれないと考えたんだ」

「なるほどね。綾小路君が柚椰君ではなく私をわざわざ誘った理由が分かったわ。私たちがCクラスの方へ行っている間に、柚椰君はその場所を搜索したのね？」

「その通り。だけど、いくら清隆が場所を覚えているとはいえそこは森の中だ。簡単に見つけることは出来ないはずだろう？　にも関わらず、俺はすぐに伊吹が居たと思われる場所を見つけた。それは何故だと思う？」

その問いに堀北は暫し思案する。

すると数秒と経たずに彼女は結論を出した。

「森の中に目印でもあった、とかかしら？」

「正解。伊吹が居たと思われる場所のすぐ近くの枝にハンカチが結び付けられていたんだ。ハンカチは女性物。つまり彼女が自分で結んだものだと分かったよ」

「わざわざ目印を付けているということは、その場所には何かあったってこと？」

「それも含めて二人に詳しく話しておくよ」

柚椰は堀北と綾小路二人を見渡すと自分が見たものについて話し

出す。

「清隆、伊吹を見つけたときに彼女の手に土がついていたと言ったね？」

「ああ」

「土？」

「なんでも清隆が言うには彼女の爪に土が付いていたらしいんだ。爪に土が付くということは地面に爪を立てたか、或いは地面を手で掘っていたかのどちらかだ。実際に現地に行ってみると、彼女がいた場所付近の地面で1箇所だけ色が濃かったところがあつたんだ。まるでつい最近掘り起こしたみたいだね」

その言葉に堀北は何かに気づいたように目を見開く。

「——っ！ ということは」

「うん、その場所を掘ってみたら口を縛ったビニール袋が出てきたのさ。明らかに何かが入っている重さのね」

「何が入ってたんだ？」

「無線機。ポイントで買えるものの中にあつただろう？」

「！ なるほどな……」

柚椰が告げた情報を聞いた綾小路は合点がいったような表情を浮かべる。

「Cクラスのベースキャンプにも無線機が無かったかい？」

「ああ。龍園が座っていた椅子の傍に無造作に置いてあつた」

「つまり伊吹さんはDクラスのリーダーが分かり次第、その場所に埋めてあつた無線機で報告を行う手筈だということね」

「彼女以外にもAクラスかBクラスにもスパイが潜んでいる可能性は高い。俺と清隆はこの後Bクラスのベースキャンプに行ってみようと思う」

「そう。なら私はここに残って伊吹さんを見ているわ」

堀北がそう申し出ると、柚椰は意外そうな顔をした。

「意外だね。君なら一緒に行きたがると思つただけだ」

「リーダーである貴方が動き回ることは一見すると危険だわ。でもそれは、あちこち移動する人間がリーダーである可能性は低いという思

い込みでもある。柚椰君の狙いはそこでしょう？ あえてベースキャンプに留まらずに移動し続けることで疑いの目を逸らす。伊吹さんにここに残っている人間の中にリーダーがいると思込ませるのよね？」

「鈴音が俺のこと理解してくれているみたいで嬉しいよ」

「——っ！ と、当然よ。親友なのだから」

プイツとそっぽを向きながらそう呟く堀北。

しかしその表情は心なしか嬉しそうな、けれど少し恥ずかしそうなものだった。

「じゃあ早速Bクラスの所に向かうとしようか」

「ああ、時間は有効に使うべきだ」

柚椰と綾小路はBクラスのベースキャンプを目指して出発しようとした。

「鈴音、あとは任せたよ」

「ええ、留守は任せて」

堀北にそう言い残し、二人は出発した。

綾小路と柚椰は朝に神崎に教えられた通り、折れた大木の根元から森の中に入り進んでいく。

学校が整備した島にも関わらず、折れた大木が放置されていることに二人は違和感を覚える。

恐らく学校側が目印として意図的に放置しているのではないかと結論づけるとそのまま先へ進む。

深い森を進んでいくと、わずかに風景が変化する。

地面は大勢の人間が道を踏みならしたような痕跡があり歩きやすくなっていた。

単純にこの跡を追っていけばBクラスのキャンプ地に辿り着くの

だろう。

案の定、程なくして二人はBクラスのベースキャンプ地へと辿り着いた。

「へえ、流石はBクラス。実に快適そうな拠点だ」

BクラスのベースキャンプはDクラスのそれと比べると快適という他なかった。

テントこそDクラスより少ないが、その分をハンモックによって補っている。

水源は井戸を確保したのか、水を汲む装置のようなものが取り付けられている。

加えてクラスの雰囲気も良い。

Dクラスも学校という仮想敵を作ったことで団結しているが、Bクラスは初めから統率が取れているように見えた。

「あれ、黛君？ それに綾小路君まで。どうしたの？」

二人の気配を感じ取ったのか、一之瀬が彼らの方を振り返り声をかける。

彼女はハンモックを取り付けようと木に紐を結びつけていた。

ジャージに身を包む一之瀬は快活な印象を一層引き立てていた。

「ちよつと他のクラスはどんな感じか気になってね。この試験は何かと火種には事欠かないだろう？」

「あはは。確かに最初は色々苦労したよ？ でもなんとかね、色々意見を出し合って工夫してみたんだ」

そう言つて微笑み、一之瀬はきゅつと紐を結び終えた。

「Bクラスは協力して試験を乗り切ることにしたのか」

クラスの雰囲気を見た綾小路が尋ねる。

「うん。ポイントは残せれば残せた方がいいけど、やっぱり皆が不満なく過ごせる環境を作るのを最優先にしたんだ」

一之瀬率いるBクラスは概ねDクラスと同じ方針のようだ。

それを聞いた二人は今一度ベースキャンプを見渡す。

「Bクラスは井戸を水源にしたんだね」

「運良くすぐに見つけられたからねー。やっぱり水の確保は大切で

「しよっ。」

「確かにね。ちなみに俺たちは川を水源にしているよ」

「いいなー。川なら魚も獲れるし遊べるよね」

「Bクラスとは協力したいから、もし良ければ遊びに来るといい。」「こちらのリーダー」には話を通しておくからペナルティの心配はないよ」

「え、いいの?」

柚椰からの申し出に一之瀬は目を丸くした。

「勿論。良いよね? 清隆」

「ああ。Bクラスには前に世話になったからな。平田たちも了承してくれると思うぞ」

「じゃあ皆に話してみるね。ありがとう二人とも。あ、折角だから中に入つて。歓迎するよ!」

「いいのか? 他クラスの人間を拠点に入れて」

一応建前として綾小路は尋ねるが、一之瀬は嫌な顔一つせず首を横に振った。

「ううん、大丈夫。私は二人のことを知ってるし、神崎君も二人ならOKしてくれると思う。他の皆も二人なら受け入れてくれるよ」

「じゃあお言葉に甘えるところでしょうか」

「そうだな」

一之瀬の言葉を信じ、二人は中に入ることを決めた。

「じゃあついて来て!」

そう言う彼女振り返り、拠点の中を案内すべく奥へ進んでいった。

「清隆、拠点の中にCクラスの人間がいなか探そう。伊吹同様離れた所にいるか、あるいはBクラスに積極的に協力しているかもしれない」

「分かった」

二人は小声でそんなやりとりをしつつ一之瀬の後をついていった。「見てもらったから分かると思うけど、私たちのクラスは足りないテナントの代わりにハンモックを使うことにしたの。あとは調理器具と

ランタンと仮設トイレ。釣竿と簡易シャワー。あと食料って感じかな」

一之瀬は二人に拠点を一通り紹介しつつ、ポイントで購入したものを教えた。

購入したラインナップはハンモックを除けば大体Dクラスと同じだった。

「概ねDクラスと同じだな」

「ここにある井戸は水量も豊富で水質も良かったからラッキーだったよ。飲み水としても、シャワーの水としても使ってるかな」

「こちらは川の水を煮沸させたり簡易浄水器で濾したものを使っているよ。川は綺麗だったけど念のためにね」

「あ、そっか。マニュアルに浄水器があったもんね。確かにそうしたほうが安心だよな」

「Dクラスも最初はポイントを極限まで節約する派と、最低限の物を揃える派で分かれていたんだけどね。最終的に全員が納得できるラインまで設備を整える案で纏まったんだ」

「なるほどー。じゃあ私たちと方針は同じみたいだね」

「そういうことだね」

三人はお互いのクラスの状態を伝え合っていた。

BクラスとDクラスは共にクラスの纏まりを重視する方針で固まっていた。

「そうだ。一応聞いておきたいんだけど、私たちは協力関係ってことでいいのかな？ リーダーの正体を見破るって追加ルールで、お互いのクラスを除外し合うのも手だと思っただけ。どうかな？」

一之瀬の提案したこと。

それはBクラスとDクラスはお互いに相手のクラスのリーダー当てには参加しないという協定だった。

つまり戦う相手をAクラスとCクラスに絞るということだ。

「その提案は魅力的だね。現状一番話を聞いてくれそうなのは一之瀬のクラスくらいだ。清隆はどう思う？」

「そうだな。一クラスでも警戒対象から外れるのはありがたい。一之

瀬が構わないなら、その提案には賛成したい」

「もちろんオツケーだよ」

柚椰も綾小路も、一之瀬の提案には肯定的だったため、協定は結ばれた。

「しかし、本当にBクラスは良い雰囲気だね。皆が皆、クラスのために自発的に動いている」

拠点を見渡せば、Bクラスは皆楽しそうに役割を全うしているのが見て取れた。

一重にそれはクラスの中心である一之瀬の人徳がなせる技だろう。

「Dクラスは誰が纏めてるの？ やっぱり黛君？」

「いや、平田って男子だよ。俺は彼の補佐のような立ち位置かな」

「へー、意外だなあ。黛君ならリーダーにも向いてると思うんだけど」

「まさか。俺はただその場で意見を出すくらいがちょうどいいんだ。最終判断を下すのは別の人間の方がいい。その点、平田はクラスの雰囲気を読み取るのに長けているからね」

「そっか。でも平田君かあー。うちの女子にもすごい人気なんだよね」

「やっぱり平田はクラス問わず人気なのか？」

綾小路は平田の女子人気についてはやっぱりか、と納得している様子だ。

彼も平田の物腰の柔らかさは評価していた。

「うん。優しそうだし、かっこいいってことで話題は尽きないよ。サッカー部でも一年生ながらも注目選手みたいだしね」

「そうなんだね。あ、もし君さえ良ければ拠点をもう少し見て回ってもいいかな？ うちのクラスでも出来るようなことがあれば参考にしたいんだ」

「いいよー。私が案内したんだし、ゆつくりして行ってね」

「ありがとう。じゃあ清隆、少し拠点を見てみようか」

「ああ」

綾小路は早速拠点内をぶらつくためにその場から離れていった。

事前に話し合っていた、拠点内にCクラスの人間が居るか探するため

に。

「さて一之瀬、ここからは俺と君の二人だけの話にしたいんだけどいいかな?」

「え、う、うん。なにかな?」

いきなり真剣な声色に変わった柚椰に一之瀬は少し緊張しながらもコクリと頷く。

「俺たちは協力関係を結んだ。つまり戦う相手をAクラスとCクラスに絞ったことになる。だから情報を共有しておこうと思ってね。さつき清隆はCクラスのベースキャンプを偵察に行ったんだけど、どうやらCクラスはリーダー当てのみに焦点を当てているらしい」

「どういうことかな?」

「Cクラスのリーダー格である龍園はポイントを全て使って、この試験をバカンスとして過ごすことを選んだみたいなんだ」

「ええっ!?!」

柚椰が齎した情報に一之瀬は驚いていた。

つまりCクラスはポイントを残すことを捨てたというのだから驚くなという方が無理な話だ。

「ポイントが0なら誰がリタイアしても、島を汚してもそれ以上のマインスは無い。彼はそれを逆手に取ったようだ。好きなだけ遊んで、飽きたら全員で船に戻って船の中で遊ぶ。大胆な作戦だけど、選択としてはこれも悪くない選択だと思う」

「確かにそうだね。ポイントポイントってギスギスしちゃうよりは遊んだ方がいいっていうのは賢いのかも。じゃあ、リーダー当てに焦点を当ててるっていうのはどういうこと?」

「清隆が言うには試験を放棄したにしては、龍園の態度が妙に強気だったのが引っかけたらしいんだ。そこから考えると、Cクラスの真の狙いはリーダー当てによるボーナスポイントだと推測が立つ」

「でも、全クラス当てても150ポイントにしかならないよ? 今更そんなポイントを稼いだって意味が……!?!」

そこまで言っで一之瀬はあることに気がついた。

「気づいたかい？ そう。リーダーを当てるといっなのは自分たちのボーナスを稼ぐこと以外にも利点がある。リーダー当ての本質は、当てたクラスからポイントを奪うことなんだ」

「そっか。当てられちゃったクラスはマイナス50ポイント。差で考えれば100ポイント分の差が縮められるってことなんだね」

「その通り。つまり龍園は目下の敵であるDクラスとBクラス。そしていずれ倒すつもりであろうAクラス。全てのクラスとの差をここで縮めるつもりなのさ」

「侮れないね、龍園君は……」

「彼はかなりのやり手だと思うよ。勝負を放棄したように見せてこちらを油断させ、本当は虎視眈々とこちらの足を引こうとしてるわけだからね」

「でも、他のクラスのリーダーを探るのは簡単なことじゃないはずだよ。どのクラスもバレないように警戒はしているはずだし」

「既に手は打たれているよ。現に今、Dクラスは危機的状況に陥っている」

「えっ、黛君のクラスが？」

「昨日の夕方、うちのクラスの男子が森の中でCクラスの女子を拾ってきたんだ。顔を殴られていてボロボロになっていた女子をね」

「っ！ まさか……」

一之瀬はある可能性に思い当たった。

龍園翔という人間を知っているならば、その可能性は否定できない。

彼がどういう性格なのかを踏まえればおかしな話ではなかった。

一之瀬が察したと分かり、柚椰はコクリと頷く。

「そう、おそらく龍園が打った策。それは他クラスの中にスパイを送り込むことだ。わざわざ痛めつけて放り出すことで、あたかもクラスから追い出されたように見せかける。結果、Dクラスはまんまとスパイを迎え入れてしまったってわけさ」

「ちよ、ちよっと待って！ あのさ、黛君に聞いて欲しいんだけど――」

「お話中しません。あの一之瀬さん。中西君はどこにいるか分かりますか」

柚椰と一之瀬の話し合いの中に、一人の男子生徒が遠慮がちに入ってきた。

すると一之瀬は一瞬だけビクリとしたが、すぐに笑顔を作つてその男子に向き直る。

「中西君はこの時間だと海の方に行つてははずだよ。どうかしたの？」

「いえ、手伝いに行こうと思ひまして。余計なことでしたか？」

「ううん、そんなことないよ。金田君の気持ちはすごく嬉しい。じゃあ、向こうで千尋ちゃんたちのフオローをしてくれないかな。私から言われたつて話せば大丈夫だから」

「分かりました」

短いやり取りの後、金田と呼ばれた男子生徒はその場を去つていった。

彼が去つていくと一之瀬はほつと息を吐き出す。

そして再び真剣な顔を作り、柚椰と目を合わせた。

「あのね、私たちも昨日Cクラスの男の子を見つけたの。それが――」
「彼、つてことだね」

柚椰は一之瀬が言うCクラスの男子が金田のことだとすぐに気づいた。

「うん、彼もCクラスの人と揉めたみたいでさ。森の中で一人でいたの。放つておけなくてここに連れてきちやつた。詳しい事情は話してくれなかつたけどもしかして……」

「恐らくこちらと似たような感じだろうね。彼もまた、龍園に送り込まれたんだろう」

「そつか……」

柚椰が肯定したことで一之瀬は俯いた。

結果としてスパイと思わしき人間を拠点に迎え入れてしまったことに責任を感じているのだろう。

「それを踏まえて、一之瀬はこれからどうするつもりなのかな？」

「黛君はどうするつもりなの？ スパイだって分かった今、その子を追い出すの？」

「いや、俺は傍観することにしたよ。幸いにもこちらのリーダーはかなり用心深い人間だ。そう簡単にはバレないだろうと思っっているよ。それに……いくらスパイだとはいえ、女の子を追い出してここからは一人で過ごせなんて言うのは酷だろう？」

「そうなんだ……やっぱり黛君は優しいね」

そう言っで一之瀬は微笑んだ。

「俺一人の判断じゃないよ。清隆も俺の判断には賛成してくれたし、平田もそのつもりだったらしいからね」

「でも、黛君なら皆を説得して強引に追い出すことも出来たはずだよ？ それをしなかったんだからやっぱり優しいよ」

「そう言っつて貰えると幾分か気が楽になるよ。結果として万が一の危険もある選択だったからね」

「私が黛君の立場でもそうするよ。だから、私も金田君を追い出したりはしないつもり」

「そうか。じゃあお互いリーダーを悟らせないように用心しておかないとね」

「うん」

一之瀬並びにBクラスもまた、スパイである金田を泳がせることに決めたようだ。

「この後俺と清隆はAクラスのベースキャンプにも行ってみようと思う。もし場所が分かれば教えてもらえないかな？」

「多分で良ければ分かるよ。ここを抜けたところに開けた場所があった、右に曲がってまっすぐ行くと洞窟があるの。Aクラスはそこがベースキャンプ、っぽいかな。でも、Aクラスは徹底的に守りに入ってるっていうか、他のクラスを寄せ付けない雰囲気だったから偵察は難しいんじゃないかな」

「Aクラスはこの試験を堅実にこなす方針、ということか」

「多分そうだと思う」

「分かった。貴重な情報だったよ。ありがとう」

試験は折り返しを迎え、彼は奇策に打って出る。

3日目の昼、綾小路は初日に高円寺がした質問が気になっていたため森を探索しようとしていた。

森へ入ろうとしたそのとき、背後から駆け足でくる少女の姿があった。

「はあつ、はあつ、ふう……こ、これから綾小路君はどうするつもりなの?。」

どうやら綾小路を見つけ急いで走って来たらしく、佐倉は乱れた呼吸を整えながらそう尋ねた。

「昨日の昼に高円寺と一緒に森を探索しただろ? そのときアイツが言ってたことが気になってな」

「それって、ここがどんな風に見えるかって言ってた話?。」

「ああ。もしかしたらこの森にはまだ秘密があるのかもしれない。高円寺はどこまでも自由な奴だが、ただ会話するためにあの質問をしたわけじゃないだろ」

「た、確かに高円寺君は頭はいいもんね……もしかしたら何かに気づいたのかも」

「それを確かめるために少し森をぶらついてみようと思った」

「わ、私もついていっちゃダメ……かな? 足手纏い、だけど……」

「やめたほうがいいんじゃないか? 色々噂が立つたら困るだろ?」

「そんなの、全然気にしないよ。それに……綾小路君となら別に……」

最後の方はあまりに小さい声で綾小路には聞こえていなかった。

「じゃあまあ、一緒に行くか?」

「うんっ」

こうして二人は一緒に森を探索することとなった。

道中、無言でいるのも変だと思った綾小路は身近な話題を振った。

「女子連中とは上手くいってるか? こういう生活だと一人じゃやってけないだろ」

「ううん、それは全然……元々クラスに話す人いないし」

自分で言っていて恥ずかしくなったのか、髪の毛をくるくる巻きながら佐倉は呟く。

「私って本当ダメだなあ……勉強もスポーツも出来ないし、全然成長してない」

「そんなことはない。佐倉はちゃんと成長してきてるぞ」

「私が成長してる？ あはは……それはないよ」

「本当だ。自分じゃ分からないかもしれないが、ちよつとずつ、だが確実に成長してる」

綾小路は心からそう思っていた。

それを態度で伝えることで佐倉に訴えかけていた。

彼の気持ちが伝わったのか否か、佐倉は歩みを止め、綾小路を見つめる。

「大丈夫だ。佐倉にはすぐに友達が出来るよ。もつともつと学校が楽しくなるはずだ」

そう語る綾小路と目が合うと、佐倉は慌てて視線を逸らして俯いてしまった。

出会った時は目を合わせることすら出来なかったのだから、これでも大きな変化だろう。

そこで一旦会話が途切れたのをきっかけに、二人は再び歩き出した。

しばらく歩いていくと、森は段々と荒れていき道も生い茂った木々をかき分けて進むようになる。

先頭に立った綾小路が後ろからついてくる佐倉のために道を切り開いていった。

前方がどんどん険しくなるのを感じながらもしばらく歩み続けて数十分。

そろそろ休憩を挟んだ方がいいと判断した綾小路は振り返る。

彼が振り返ると思っていなかったのか、佐倉はビクツと肩を震わせる。

「ちよつと休憩するか。目的地まではもう少し時間がかかりそうだから」

ら」

ちょうど佐倉も疲労が溜まっていたのか、その提案に少し嬉しそうに頬を緩めていた。

綾小路は極力暑くなさそうな影の出来る木陰を探し、二人くらいが座れそうな根の間に腰を下ろした。

しかし佐倉は遠慮しているのか、彼から少し離れたところに座ろうとした。

「ここ座れよ」

デコボコの地面に座る佐倉を慮った綾小路はそう言った。

「いい、の?」

「そんなところじゃ満足に休めないぞ。気にしなくていい」

「う、うん。ありがとう……」

短いやり取りの後、佐倉は遠慮がちに隣に腰を下ろした。

微妙にお互いの体操服の袖が触れ合うほどの距離だ。

「ごめんね気遣ってくれて。ちよっと疲れちゃった」

「森の中を歩くのは疲れるからな。仕方ない」

「旅行に出発するとき、最初はすごく憂鬱だったんだ。友達もいない私が旅行したって楽しくなんてないし。だから部屋にずっと閉じこもっているつもりだった。なのにこんなことになっちゃって。試験だなんて言われて……」

木に背を預け、佐倉は空を見上げた。

「でも今は……少しだけ来て良かった、って思ってる。こんな風に綾小路君とお喋りする機会なんて、学校じゃなかなかないから……」

深い森の中、座り込む二人の間に穏やかな空気が流れる。

「ずっとこうしていられたらいいのに——」

「そうだな」

佐倉の呟きを綾小路は肯定した。

この島に来て3日目、お互いに最も長い時間を過ごしているのが隣にいる相手だった。

しかし二人とも不思議と虚しくはなく、少しお互いの距離が縮まったように感じていた。

それが友達としてなのか、あるいはそれ以外の何かなのは不明。しかし、二人の関係は確実に少しずつ変化していた。

「健、見てみなよ」

「おお！ スゲーー！」

綾小路と佐倉が森を探索している頃、柚椰と須藤は森の中であるものを見つけた。

森の中を進んだ先にあつた開けた場所。

そこは畑になっていたようで、あるものが生っていた。

「これは随分立派なスイカだね」

「デケエな。バスケのボールくらいあんど」

どうやらそこはスイカ畑になっていたようで、耕された土の上には大玉のスイカがゴロゴロ転がっていた。

スイカはかなり状態が良く、徹底管理がなされているのが見て取れた。

「自生してるもの……じゃないだろうね。学校が意図して育てたものだろう」

「つてことはこれ持って帰っていいのか!？」

「いいんじゃないかな。要はこれは足を使って探索すれば食べ物はあるということだからね」

「じゃあ抱えられるだけ抱えて持って帰ろうぜ！ こんな立派なスイカ、他の奴らも腰抜かすぜ！」

「健、ジャージを脱いでくれないか」

柚椰がそう言うと、須藤はなぜかオドオドしながら自分の身体を抱き締めた。

「はっ!? ま、待て柚椰！ 確かに俺はお前に感謝してるし良い奴だって思ってる！ けど、あくまでお前とはダチとして付き合ってきたいっつーか」

「何を勘違いしてるのか知らないけど、ジャージを風呂敷代わりにす

るから脱げと言っているんだよ」

「な、なんだよ脅かすなよ……」

「君が勘違いしただけだろう……」

ぶつくさ言いながらジャージを脱ぐ須藤に柚椰は頭を抱えた。

その後、柚椰は須藤が脱いだジャージを受け取るとジツパーを締め、ジャージの裾からスイカを入れた。

そして両方の袖を持つとスイカを入れた裾部分が上になるように一回捻る。

そして須藤の背後に回り、彼の首に苦しくないように巻きつけた。

「裾の方を下にすると落ちるから気をつけてね。普通に歩いていれば落ちないはずだから」

「おう」

「あとは両腕に一玉ずつ抱えて持って行こう」

「体操服の中に入れてももう一個くらい持っていけんじゃね？ ほら、妊婦みてえにすればよ」

「うーん、まあ確かにもう一度来たときにまだ残っているとも限らないか」

こうして二人は両手にスイカを1玉ずつ、そして着ている体操着の中に1玉。

須藤はそれに加え、ジャージの中に1玉と合計7玉のスイカを持って拠点に戻った。

スイカをありったけ抱えて戻ってきた二人がクラスから讚えられたのはまた別の話である。

須藤と柚椰が拠点に戻った頃、綾小路と佐倉は再び探索を開始した。

休憩場所から目的地まではそう遠くなかったようで、20分ほどで以前木に結びつけていたハンカチがある場所まで辿り着いた。

綾小路はハンカチを佐倉へ返すと、改めて高円寺が立っていたであ

ろう場所に立ち周囲を見回す。

「何か気づかないか？」

「うーん、何か違うかなあ……？」

二人はキョロキョロと周りを見るが、視界に広がるのは森一色。特に何か変なところはなかった。

「とりあえず手当たり次第調べてみよう。ただしお互いの姿が見えなくなるまで遠くにはいかないように、定期的に確認しながら。集中して探していると注意力が散漫になりやすい」

注意を促し、二人は周囲を詳しく搜索し始めた。

生い茂る草木を掻き分け、奥に何かないかと探る。

「わっ!？」

すると茂みを調べていた佐倉が悲鳴に似た声をあげた。

何事かと思いい、彼女のもとに近づくと綾小路。

「何かあったのか？」

「ねえ、見て！　すごいよ綾小路君っ！」

興奮気味に語る佐倉が見ているものを見るべく、綾小路は彼女の横に立ち、茂みの奥を覗き込んだ。

そこには茂みとは違う緑の葉が伸び、一部から黄色い実を覗かせていた。

「これって、トウモロコシ……だよな？」

「どうやらそうみたいだな」

二人が見つけたのはトウモロコシ畑だった。

時を同じくして柚榔と須藤が見つけたスイカと同様、土は森の土とは色が異なり、人工的に栽培されているのが見て取れた。

「高田寺が言っていたのはこのことか……」

ようやく綾小路は合点がいったのか納得した表情を浮かべた。

恐らく高田寺は早々にこのトウモロコシを見つけ、そしてこの島には人工的に栽培された食料が数多く存在していると推測したのでろう。

そして自分と佐倉が同じ結論を導き出せるか試すために思わせぶりな質問をしたのだと察した。

綾小路はトウモロコシを試しに一本引き抜いて調べてみた。すると、どうやら品質は良く、店に並んでいるようなものと相違ないとわかった。

「鞆持ってくればよかったね……とてもじゃないけど一度には持って帰れないから」

トウモロコシの数は目視できるだけで4、50本はあり、とても手では抱えられなかった。

考えた結果、綾小路は来ている体操着をおもむろに脱いだ。

「ええええ!? なんな、何してるの綾小路君っ！ それは早すぎるよお!!」

いきなり服を脱ぎ出したことに仰天した佐倉が抱えていたトウモロコシをボロボロと落とした。

彼女の悲鳴に綾小路は一瞬首を傾げたが、やがて理由を察した。

「あー、悪い。断ってからにすればよかったな。って、早すぎるって何だ……?」

佐倉の最後の方の発言には意味が分からなかったようだが、彼は配慮が足りなかったと反省していた。

「シャツの口を結べば袋の代わりになる。これで運べる量を増やせるはずだ」

即席の袋にトウモロコシを詰められるだけ詰めると綾小路はそれを抱えた。

「ひとまず持っていけるだけ持って帰ろう。他のクラスの人間と鉢合わせすると面倒だ」

「そうだね」

あまり長居することで余計な面倒が起こることを避けるため、二人はそそくさと拠点へと戻っていった。

二人が食料を持って戻って来たことでクラスメイトは歓喜した。

つい数十分前にも柚椰と須藤がスイカを持って帰って来たこともあり、Dクラスの拠点には多くの食料が確保されることとなった。

ちなみに、佐倉と一緒に帰って来た綾小路が何故か上半身裸だったことに山内が仰天して詰め寄るとい一幕があったが、綾小路はス

ルーした。

4日目、折り返し地点ということもあり、Dクラスの面々は無人島生活に慣れてきていた。

森で採れる野菜や果物に川で釣れる魚と食料には困らず、水も常に綺麗なものがストックされているという状態だ。

初日で揃えた備品とリタイヤのペナルティ以外に今のところポイントの消費はない。

Dクラスは今のところ順調とっていいだろう。

そんな中、綾小路はボールペンと紙をポケットに入れてベースキャンプを離れた。

目的は島の状況の把握と他クラスの状況の把握だ。

試験は残すところあと3日。

他クラスへの攻撃に打って出るには頃合いだと判断したのだろう。

彼は目下の警戒対象であるAクラスとCクラスの偵察に向かったのだ。

一方その頃、彼の協力者である柚椰はというと……

「はい、トウモロコシとスイカのお裾分けだよ」

「ありがとう黛君。助かるよー」

Bクラスのベースキャンプにいた。

彼は昨日Dクラスが確保した食料を持ってやってきていた。

協力関係であるBクラスに食料を分けるとするのは平田が考えた案だった。

いくら協力関係だとしても貴重な食料を渡すことに最初は反対するものもいたが、Bクラスからも食料を貰ってくるということで纏まった。

「じゃあ私たちからはトマトとナス。あとピーマンのお裾分けだよ！」

「ありがとう。うちの皆も喜ぶよ」

Bクラスも島に人工的に栽培されている食料があることは突き止めたのか、一之瀬がクラスで収穫した野菜の一部を柚椰に渡した。

「スイカは井戸で冷やすといいよ。昨日夕食の後に食べたんだけど甘くて美味しいから」

「うん、分かった。じゃあ神崎君、お願い！」

「分かった。黛、俺からも礼を言わせてもらう。感謝する」

一之瀬からスイカを受け取った神崎は柚椰に改めて礼を言った。

「構わないよ。こちらでも野菜を提供してもらったからね。それに、この生活では少しでも潤いがあったほうがいいだろう？」

「そうだな、そういう意味でもスイカはありがたい」

最後にフツと微笑むと、神崎はスイカを抱えて井戸の方へ歩いていった。

どうやら食料の共有というのは双方にとってもメリットがあったようだ。

「折角だからもうちよつとお話していこうよ」

「分かった」

一之瀬と柚椰はテントの側に腰を下ろす。

クラスのリーダーである一之瀬が他クラスの男子と並んで座っているということでベースキャンプで作業をしているBクラスの面々はチラチラと彼らを見ている。

「今日で4日目。この生活もやつと折り返しだね」

「うん、このまま平和に終わるといいなあー」

そう言うで一之瀬はふう、と息を吐き出す。

彼女の顔には心無しか疲れの色が滲んでいる。

「やっぱり疲れは溜まっているかい？」

「うん……慣れない環境だとやっぱりね……それと、うちのクラスでも少なからずトラブルもあったし」

「無人島で集団生活だからね。気をつけていても些細なことでギクシヤクするものさ」

どうやらBクラスとはいえ、何事もないわけではないらしい。

小さな諍いは起きていたということだろうか。

すぐに収まる小さなものでも、纏め役である彼女には心労があるの
だろう。

「黛君のクラスはどう？」

「最初の方こそ小さな衝突はあったけど、それ以外はこれといって問題はないかな。各々出来ることをやっている状態だね」

「そっか。じゃあうちと大体一緒だね」

お互いのクラスの状況を報告し合った二人は続いて他クラスについての話に移る。

「AクラスとCクラスはどんな感じなのかな」

「Aクラスはとことん堅実にやっていると思うけどね。拠点は絶対死守。スポットの占有もかなり慎重にやっているはずだ」

「他のクラスの人に見られないような場所だけを占有してるって感じかな？」

「そうだろうね。率いているのが葛城である以上、リーダーの正体がバレル危険が少しでもあればスポットの占有はしなく思うよ」

「黛君はAクラスの事情を知ってるの？」

「ああ。坂柳から事情は聞いている」

「あ、坂柳さんと知り合いなんだ」

「以前食堂で会ったときに仲良くなったんだ。なんでもAクラスは派閥争いが激しいらしいね」

「うん。慎重な葛城君に対して、坂柳さんは好戦的というか攻めたいタイプみたい。だから中々意見が合わないみたいだね」

「でも今回彼女は欠席している。だから必然的に葛城が指揮をとるしかない」

「だから葛城君は今回の試験で一層慎重なのかもしれないね」

「まあそんなAクラスは現時点でDクラスとBクラスにリーダーを知られてしまっているわけだけだね」

そう言って柚椰はカラカラと笑った。

「あはは、確かにそうだね。でもこれでAクラスにも全く隙がないわけじゃないことが分かったよ」

「クラスのリーダー格が対立している以上、どうしても綻びが生まれる。そういうことじゃないかな？」

「そうかもね。そういえば、Cクラスはどうなったかなあ」

二人の話題はCクラスへと移った。

「もう全員リタイアした頃かな？　流石に遊び疲れているだろうからね」

「じゃあもうビーチには誰もいないかなあー。Cクラスのリーダーは誰だったんだろう？」

「さあ。ただ、大胆な手を打ってくる龍園なら、敢えて意外な人間をリーダーにすることもあるかもしれないね」

「あ、確かにそうかも。Cクラスの雰囲気を知っていると、どうしても龍園君がリーダーだっと思って思い込みじゃうもんね」

「各クラスの中心にいる生徒は必然的に他クラスからも警戒されるからね。打つ手としてはアリだ」

「なんにしても、リーダーを当てるって難しいね」

「あくまでボーナスという位置付けなんだと思うよ。この試験を乗り越えるためには、結局はクラスの結束がモノを言うって俺は思うんだ」

「うん、私もそう思う。だから残り3日、お互い頑張ろうね！」

そう言っで一之瀬は立ち上がると、柚椰に向けてふわりとした笑顔を向けた。

「あ、そうだ。実はBクラスに少しい話があっただね」

柚椰もまた立ち上がると一之瀬に向き直った。

「ここから北にまっすぐ進んで、大体20分くらいしたら大きめの岩が転がっているのが見えるはずだ。そこを左に曲がって少ししたところに小屋がある。中には非常用の缶詰やコンロに使うガス缶。まあとにかくこの生活に役立ちそうな物資が一通り置いてあったよ。小屋の入り口に端末があったからどうやらスポットらしい。幸いまだどのクラスにも占有されていなかった」

「そんな施設があったんだ……全然気づかなかったよー。あれ？　Dクラスは占有しなかったの？」

一之瀬は柚椰が言った占有されていないという言葉に引つかかっ

た。

見つけた時点でまだどのクラスにも占有されていないのなら、Dクラスが占有することも可能だったはずだ。

「実は俺が一人でウロウロしてる中で見つけたものなんだ。そのときうちのリーダーはクラスメイトと一緒に別行動をしていたから占有することは出来なくてね。結局その後も言うタイミングを逃して、件の小屋は未だ占有されてないというわけなんだ。だからもうこの際Bクラスが占有してもいいかと思って教えてしまったよ」

あつけらかんと言う柚椰に一之瀬は苦笑いした。

「あはは、じゃあ私たちが占有しても恨みっこなしだよ？」

「勿論。そもそも俺たちは協力関係なんだから、情報をあげても問題はないよ。Dクラスがスポットを占有しても、多分またBクラスにお裾分けをしに来ただろうからね」

「あ、そっか。じゃあ早速行ってみるね！」

「もし占有するならAクラスが来る前に早く行ったほうがいいよ」

「うん、そうする！」

「じゃあ俺はそろそろ行くよ。野菜ありがとう」

柚椰はBクラスから貰った野菜を入れた袋を両手に持って拠点を去ろうとした。

彼の礼の言葉に一之瀬は首を横に振って微笑む。

「ううん、こちらこそスイカとトウモロコシありがとう！ クラスの皆にもよろしくね！」

「ああ、じゃあね」

二人はそこで別れ、一之瀬はクラスメイトを集めて先ほど教えてもらったスポットについての話し合いを始めた。

柚椰はDクラスのベースキャンプへの帰り道をゆっくりと歩いていった。

5日目の朝、Dクラスのベースキャンプにて事件が起こった。

テントの中で眠っていた男子たちに向けて、テントの外から不機嫌な女子の声が聞こえて来た。

「ちよつと男子。集まってもらえる？」

それは一言では終わらず、次第に強い言葉に、怒鳴り声へと変わっていった。

朝から怒号を浴びせかけられれば、当然男子も何事かと意識を覚醒させていく。

「んー！ー！ 一体なんだっつーんだよ……ふああーっ」

須藤が不機嫌そうに身体を起こして大欠伸をする。

「何かあつたんだろ。じゃなきや朝っぱらから怒鳴られる理由がない」

隣で寝ている綾小路も今の怒号で起きたのか、寝ぼけ眼で身体を起こす。

「あれ？ 柚椰は……？」

ふと須藤はテントの中に柚椰の姿がないことに気づいた。

「アイツのことだ。多分朝の散歩でもしてるんじゃないか？」

「そーか。ふああーっ……つと、とりあえずテントから出ようぜ」

「ああ。何が起きたのか事情を聞かないとな」

二人は揃ってテントの外へ出た。

外では一足先に出ていた平田が女子から事情を聞いていた。

「どうしたの？」

「あ、平田君。……悪いけど、男子全員起こして貰っていい？ 大変なの」

先ほどテントへ向けて怒号を飛ばした張本人である篠原がそう声をかけた。

彼女から少し離れたところでは、女子の集団が男子が寝ているテントを覗んでいる。

「分かった。声をかけて来るから少し待ってて」

平田は男子が寝ているテント二つに順番に入っている男子た

ちに起きるよう声をかけた。

それから5分と経たず、男子全員がテントから出て来た。

まだ寝ぼけている男子たちは、テントの外で集まる女子たちを見て初めて只ならぬ状況を察知する。

「おや、どうしたんだい皆？　こんな朝早くに」

クラス全員が声のする方に視線を向けると、そこにはタオルを首から下げてこちらを見ている柚椰の姿があった。

その姿から、彼が顔を洗っていたことが見て取れる。

既に一足先に起きて川で顔を洗っていた柚椰は朝早くにクラス全員が集まっている状況に驚いていた。

そんな彼に代表して平田が事情を説明した。

「篠原さんに男子全員を起こすように頼まれたんだ。それで今全員起きて集まっている状態だよ。なんでも大変なことが起きたみたいなんだ」

「大変なこと。一体どんな？」

柚椰がそう尋ねると、篠原は平田と柚椰を除く男子全員に対し、侮蔑を込めた目で言葉を浴びせた。

「今朝、軽井沢さんの下着がなくなってたの。それがどういう意味か分かる？」

「え……下着が……？」

いつも冷静な平田も、思いがけない事態に動揺した様子を見せる。

見れば軽井沢と一部の女子の姿がここにはなかった。

「今、軽井沢さん、テントの中で泣いている。櫛田さんたちが慰めてるけど」

そう言っつて、女子のテントを見る篠原。

彼女の口ぶりで男子たちも状況を察したようで慌てた。

「え？　なに、なんで下着がなくなつて俺ら叩き起こされた挙句睨まれてんの？」

「そんなの決まってるじゃん。夜中にこの中の誰かが鞆を漁つて盗んだんでしょ！　荷物は外に置いてあつたんだから盗ろうと思えば盗

れたわけだしね！」

完全に篠原含め女子たちは男子が犯人だと思っっているらしい。

「いやいやいや!? ちょい待ちー！」

池は男子と女子を交互に見やる。その様子を見た男子の一人がぼそりと呟いた。

「そういや池、お前昨日の夜遅くにトイレ行ってたよな? しかも結構時間かかってたし」

「はい!? いや、それはライトも無くて暗かったからゆっくり歩いてただけだって！」

「ほんとかよ。下着盗んだのお前じゃねえの?」

「違うって! いくらなんでもそんなことしねえよ！」

男子たちの中でアイツが怪しいコイツが怪しいと罪の擦り付け合いが始まる。

「でも、男子が盗ったって証拠はないんじゃないかな。軽井沢さんが無くした可能性だってあると思う」

「そうだそうだ! 俺たちは無関係だぞ! 冤罪だ！」

平田の後ろから男子一同が声を張り上げ無実を訴える。

「僕はこの中に犯人がいるとは思いたくないよ」

男子を疑うというよりは、クラスメイトを疑うのが平田は嫌なようだ。

「まあ、集団生活の中で女子の下着が無くなったとなれば、必然的に疑われるのが男子の俺たちなのは仕方ないね」

柚椰は状況を踏まえて、今現在男子が敵意を向けられているのは止む無しと判断しているようだ。

「あ、平田君と黛君は疑ってないよ? 二人ともそんなことしないって信じてるし……とりあえず男子の荷物検査させて」

どうやらそれが女子一同の総意らしく、男子に犯人がいると決めつけていた。

しかし、当然身に覚えのない男子たちにとっては篠原の要求は不愉快以外の何物でもない。

「は? ふざけんなよ。そんなことする必要ねえし。断れよ平田」

「ひとまず、僕たち男子が集まって話し合ってみる。少し時間を貰えないかな」

そう言って平田はすぐに男子全員を集め、テントの前で話し合いを始めた。

「女子の言うことなんて無視しようぜ。マジで濡れ衣なんだからさ」
池は無視という選択肢を推奨していた。身に覚えのない彼にとつてはこの状況は不快なのだろう。

「だよな。俺たちが軽井沢の下着とか盗るわけねえじゃん。彼氏持ちだぞ」

山内に続くように他の男子たちもそうだと声を上げる。

実際問題、盗まれたのが軽井沢の下着だというのが大きいのだ。

彼女と平田の関係はクラス全員が知っている。

その上でわざわざ彼女の下着を盗む理由がないのだから。

「僕も君たちを疑うつもりはないよ。けど、それじゃあこの問題は解決しないと思うんだ」

離れたところで同じように固まって話し合っている女子たちは、時折男子たちを睨んでいる。

そんな状況を見て、柚椰がある提案をした。

「じゃあ妥協案を出そう。ひとまず、俺たちの中だけで荷物検査を試みるというのはどうだろう？ 島に持ち込めるものが限られている以上、誰も彼も似たような荷物だろうし、男同士ならまだマシだと思うんだけど、どうかな？」

「僕も黛君の案が良いと思う。最初に僕たちでお互いの潔白を証明しておいたほうがいい」

そう言うと二人は自分の鞆を手にとって男子の輪の中に置いた。

「まずは僕から開けるよ」

一番手を買って出た平田が男子たちの前で鞆の中身を出していった。

勿論女性の下着などあるわけもなく、いたって普通の荷物だった。

「じゃあ次は俺だね」

二番手の柚椰も鞆の中身を一通り出していく。

これまた目立ったものではなく、彼もまた白だった。

「仕方ねえな……まあ無実で疑われるのも気分悪いしさっさと済みますか」

須藤が頭を掻きながら自分の鞆を引つ掴むと、そのまま男子たちの前でぶちまけた。

彼の鞆にもこれといって不審なものはなく、当然ながら彼も無実だった。

こうして一人、また一人と男子が自分の鞆を公開していった。

そうして残ったのが池と山内、そして綾小路の三人。

「んじやまあササツと済ませようぜ。いつまでも睨まれてちや居心地悪いつたらねえよ」

「だな」

池と山内はブツブツ言いながら自分の鞆を取って男子の集団に戻る。

しかし池が自分の鞆を見せようとチャックを半分開けたところで、彼の手が止まった。

「どうした?」

「あ、い、いや? なにも?」

山内に尋ねられた池は拳動不審になりながらもなんでもないと言った。

しかしガバツと急に男子たちに背を向けて座り込むと、ゴソゴソと鞆の中を確認して勢い良くチャックを閉めた。

「寛治?」

顔に変な汗をだらだらと流している池を見て流石におかしいと思っただ山内が彼の肩を揺すった。

「おーい、どうした?」

「へあつ!? い、いやー、何も? ええ、なんでもありません」

明らかに様子がおかしい池に山内が冗談半分で茶化した。

「なんだよー、まさかマジで下着が入ってたとかか?」

「バツ、ち、違えし!」

慌てて否定した池が、鞆を抱えるようにして首を左右に振った。明らかにおかしい。あまりに露骨な反応に、流石に男子たちも反応した。

「お前、まさか……」

「なんだよ。俺を疑うのか!？」

「いや、そういうわけじゃないけど。……鞆、見せてみろよ」

「あ、ちよっ!？」

山内が池から鞆を引つ手繰ると、男子の輪の中に置いて池の代わりにチャックを開けた。

するとそこには……。

男子が絶対に穿くことのない白い下着が丸まって隠されていた。

「お、俺じゃねえって! なんかわらねえけど鞆に入ってたんだよ!」

「お前さ、その言い訳は無いわ……」

慌てふためく池に対して哀れみの目を向ける山内。

「知らないんだってマジで! なんで俺の鞆にパンツがあんだよ!」

「見苦しいぞ寛治」

「もうこれ確定だろ。女子に報告しようぜ」

山内含め男子たちはもう犯人が池であると判断しているらしく、さっさと女子たちに突き出そうとしている。

「俺は無実だって! なあ綾小路! お前なら信じてくれるよな!？」

縫るように助けを求められた綾小路は頭の中で状況を整理していた。

軽井沢の下着は池の鞆から出てきた。

状況証拠で判断すれば池は限りなく黒だろう。

しかし、そう安直な結論になるほど単純な話なのだろうか。

いつ、どのようにして盗んだかはともかくとして、犯人が自分の鞆に下着を隠すだろうか。

下着が無くなっていることに軽井沢は当然気づく。

そうなれば犯人探しが始まることは明らかなのだ。

犯人をあぶり出すために荷物検査を行うかもしれないというのは簡単に想像がつくはず。

考えられるもう一つの可能性。

それは誰かが池に罪をなすり付けようとしているということだ。

しかしそれも現時点ではあくまで憶測に過ぎない。

「……状況証拠だけを見れば、池が犯人じゃ無いと言い切れる証拠がない」

「綾小路い！」

「だけど、池が間違いなく犯人だとも言い切れない。自分の鞆に入れるとか間抜けすぎる」

「そりゃ確かにそうだけどさ。じゃあ誰かが寛治を犯人に仕立て上げようとしてるってことか？」

「それしか考えられねえって！」

「つーか篠原の奴、鞆がテントの前にあんだから盗もうと思えば盗めるつつつたけどよ。要は誰でも盗めるってことじゃねえのか？」

「ここに俺ら以外にも、それこそ女子だって出来んだろ」

須藤は鞆の置き場所が置き場所のため、容疑者はこのベースキャンプにいる全員に当てはまると指摘した。

「僕も池君が犯人だなんて思いたくないよ。でも、状況は最悪だ」

「盗まれたのが軽井沢の下着だったというのが大きいね。女子の中でも中心に位置する彼女のものが盗まれたんだ。これはちよつとやそつとじゃ鎮火しそうにない」

平田と柚椰は池が犯人だとは思っておらず、だからといってこのままあやふやにするわけにもいかず手をこまねいていた。

「どうするよ？　いつまでもここでコソコソしてたら、それこそ全員吊るし上げられるんじゃない？」

「そうだそうだ！　もうこの際、池が持ってたんだからそれでいいだろ！」

「ちよつと待てよ！　俺を見捨てるのか!？」

このままでは本当に犯人ということにされてしまうため、池は必死に無実を主張していた。

「助けてくれよ！ なあ綾小路！ 平田！ 黛！」

「といってもな……」

「どうすればいいのかな……」

「……」

池は自分が犯人だという説を否定してくれた三人に助けを求めたが、三人とも明確な打開策を見出せないでいた。

味方になってくれる者はおらず、池は途方に暮れたように崩れ落ちた。

「……よし、こうしよう」

そんな重い空気の中、柚椰は明るい声で呟くと池に駆け寄って彼の肩をポンと叩いた。

「黛……？」

既に諦めムードの池が涙目で柚椰を見上げる。

「池、そして皆も聞いてくれるかい？」

柚椰は男子全員を見渡す。

平田含め男子たちは皆何をするつもりなのかと柚椰に視線を向ける。

「今ある情報だと誰が犯人かは分からない。健の言う通り下着を盗むことも、誰かに罪を着せることも誰にでも出来るわけだからね。でもこのまま容疑者不明のまま篠原たちが納得してくれるわけもない。だから——」

全員の視線が柚椰に向く中、彼はニヤリと笑いながら言った。

「この事件の犯人、俺だってことにしてもいいかな？」

彼は罪を被り、孤独少女は鍍金の女王へ事実を突きつける。

「何を考えてるんだアイツは!?!」

悲嘆の叫びや怒号が飛び交う中、伊吹滯は焦っていた。

目の前の喧騒が何処か遠くに聞こえるような感覚。

壁一枚隔てたような、スピーカー越しに聞いているような感覚が彼女を包む。

つい先ほどまでであったはずの余裕は跡形もなく雲散霧消していた。

それほどまでに今の彼女は焦っていた。

今日は特別試験5日目。時刻は午前7時。

彼女が身を置いているDクラスのベースキャンプで事件は起こった。

クラスのリーダーである男子、平田洋介の彼女である軽井沢恵の下着が何者かによって盗まれた。

厳密には鞆から無くなっていったが正しいのだが、状況を考えれば盗まれたと見るのが妥当だろう。

事が発覚し、被害者である少女の取り巻きたちは真つ先にクラスの男子に疑いの目を向けた。

声を荒らげ、感情的に喚き散らして男子を問い詰める様を見ながら伊吹は内心ほくそ笑んでいた。

何を隠そう、この事件を仕組んだのは彼女なのだ。

早朝誰も起きていないことを確認した彼女は、テント前に山と積んであった鞆の中から軽井沢の鞆を選び、中から下着を抜き取った。

そしてその下着を、ある男子の鞆の中へ忍ばせたのだ。

初日から今日に至るまで、彼女はDクラスの状況をずっと観察していた。

その過程で、積んである鞆の一つ一つが誰のものであるかを把握し

ていたのだ。

下着を抜き取る相手は、出来るだけ目立つ女生徒が望ましかった。地味な女子の下着を盗んでも、本人が隠して有耶無耶にされてしまうことも考えられたからだ。

だからこそ、伊吹はターゲットを軽井沢に決めた。

軽井沢と平田の関係はCクラスである伊吹にも知れ渡っていた。

故にその人選は当然の流れだったと言えよう。

次に偽の加害者。つまり罪を擦りつける相手も伊吹は選んでいた。下着泥棒という下劣な行いが明るみになったときに真っ先に疑われる男子。

本人が否定しても信じてもらえないような男子。

正直ここに関しては伊吹は特に慎重に選ぶことはなかった。

クラスを中心におり、信頼もあるであろう平田は当然ながら選外。

そして伊吹が敵に回したくない相手である黛も選外だった。

そうなったとき、彼女の脳裏に浮かんだのは自分をベースキャンプまで連れてくることを決めた山内だった。

彼ならば罪を着せても心は痛まなかった。

元より伊吹にとってDクラスの間人は、ただ一人を除いてどうでもいい存在でしかないのだから。

しかし彼女はここで一つ工夫を凝らした。

安易に山内に罪を着せるのではなく、彼と一緒にいた池という男子に狙いを定めたのだ。

正直犯人役はどちらでも良かったのだが、観察した過程で池の方が犯人役をやらせるのに相応しいと伊吹は判断した。

結果、彼女は池を偽の犯人に仕立て上げることを決め、彼の鞆に下着を詰めた。

全ては順調だった。

Dクラスの女子たちは男子を犯人と決めつけ、荷物チェックを決行させた。

よし、これでいい。

伊吹は自身の作戦の成功を確信していた。

荷物チェックが行われれば、池の鞆から軽井沢の下着が出てくる。そうなればいくら池が否定しようと、状況証拠から彼が犯人である事が確定する。

後は簡単な流れのはずだった。

Dクラスはこの事件を皮切りに内部分裂が起こり、軋轢が生じる。バラバラになった集団は統率が取れず、必ず穴が生まれる。

そうなれば彼女の目的であるこの試験におけるDクラスのリーダーを探ることも容易になる。

そうなるはずだったのだが……

彼女の計画は大きく狂わされることとなる。

それは今から少し前まで遡る――

「柚椰テメエッ!!」

女子と男子、睨む者たちと睨まれる者たち。

そんな一触即発の状況を打ち壊したのは一人の男子の怒号だった。

一体何事かと女子たちはそれまで男子全体に向けていた敵意の視線から声を荒らげる須藤と、彼に胸倉を掴まれている柚椰へと視線を絞った。

「どういいうつもりだ……!?!」

「どういいうつもりもなにも、見たままだろう。どうしたんだい？ 君はどうとう目の前の事象さえ正常に判断できない程に頭が悪くなったのかな？」

「ふざけんなッ！ テメエ、一体どういいうつもりでこんなことしやがったのかって聞いてんだよ！」

鋭い目つきで睨みつけ凄む須藤に対して柚椰は冷たく辛辣な言葉をぶつける。

その態度に一層須藤の怒気が強まっていく。

「ちよっ！ なに!! 一体どうしたのよ!?!」

「そうだよ！ なんて黛君が胸倉掴まれてるの！」

いきなり始まった男子二人の争いに女子たちはそれまでの敵意を一旦納め、どういいうことかと男子たちに理由を尋ねた。

ただ男子が言い争っていたならば別段止めに入ることも、ましてや事情を聞くこともしなかつただろう。

しかし、争いの渦中にいたのが柚椰であるならば話は別だった。Dクラスの女子の中で柚椰は平田と同じくらいに信頼が厚い男子だ。

品行方正、文武両道、眉目秀麗を地で行き、平田と同じく誰にでも優しい。

ほとんどの男子が参加した女子の胸の大きさを測る賭け事にも柚椰は毅然とした態度で不参加を表明したのも記憶に新しい。

そんな彼は既に女子の中ではかなりの注目株であり、人気の男子だった。

その彼が胸倉を掴まれるまでの事に発展しているというのだから、当然女子たちは事情を問い質さなければならなかった。

しかし――

「い、いや、黛君は……」

男子を代表して平田が女子たちに説明をしようと試みたが、何故か彼は言葉に詰まっていた。

平田だけでなく他の男子たちもどこかばつが悪そうに、言いたくないさそうに目を逸らす。

男子たちのその態度に女子たちは困惑する。

そんな中、女子たちに事情を説明したのは意外な事に須藤だった。

「……コイツの鞆の中から出てきたんだよ。女子の下着がな」

「え……」

「「――っ!?!」」

須藤の発言に篠原を始め女子たちは皆一様に驚愕していた。

彼の言う事が本当であるならば、それが意味することは一つ。

この事件の犯人が柚椰であるということだ。

「う、嘘でしょ……? 黛君がそんなことするわけ」

「そ、そうだよ。何かの間違いじゃ……」

先ほどまで男子全員に対して敵意を向けていた篠原や、彼女と一緒に男子を睨んでいた女子たちは須藤の発言を受け入れられなかった。

それほどまでに彼女たちは柚椰を信用していたのだろう。しかしその信用を、彼女たちの信頼を否定したのは柚椰本人だった。

「そうだよ。俺がやったんだ」

「どうして……」

「ん？」

「どうしてこんなことしたの!？」

自身にかけられた容疑を肯定した柚椰に篠原が声を荒らげる。

彼女と同じように他の女子たちも困惑半分悲しみ半分といった表情で柚椰を見ていた。

「どうしたの皆……?？」

いつの間にかテントから出てきていた櫛田が、今の状況を飲み込めていないのか誰にでもなく問いかける。

しかし須藤に胸倉を掴まれ、篠原に詰め寄られている柚椰の姿を見た彼女は段々と状況を理解した。

けれど理解出来ない、理解したくないといったように櫛田は顔を青ざめさせる。

「まさか……」

「黛君の鞆から軽井沢さんの下着が出てきたんだって」

呆然と立ち尽くす櫛田に女子の一人が事情を説明する。

その言葉を聞いた櫛田は悲しそうに眉を下げた。

「嘘でしょ柚椰君……? 嘘だよね……? 柚椰君がそんな……」

「鞆から物が出てきたんだ。動かぬ証拠だろう? 信じたくないのならそれでも構わないけどね。ちよつと魔が差したというのかな。言ってしまうば、ただの暇つぶしだったんだ」

「嘘だよ! 柚椰君はそんなことしない! だって柚椰君は——」

「優しくして、いつもクラスのことを考えている良い人だから。かい?」「っ!」

「だからこそ、だよ。君たちに信用されているからこそ疑われないと思っただ。女子の下着が無くなった状況で、君たちは男子を疑いはずれど、必ず平田と俺を容疑者から外すだろうと考えた上でやったん

だ。でも我ながら詰めが甘かったよ。下着はどこか適当な場所に捨てておくか、他の男子の鞆にでも入れておけばよかったね。そうすれば他の奴に罪を擦りつけることが出来たのに」

「……」

柚椰のあんまりな発言に櫛田だけでなく他の女子たちも黙り込む。

彼女たちは柚椰に怒りというよりは悲しみの感情を向けていた。

裏切られたような、騙されたような感情。

今まで自分たちから信用を得てきた目の前の男は、その信用を利用して非道な行いに出た。

その事実を未だ信じられないのだ。

「ああ、ちなみにどうして軽井沢のだったのかというと、別に理由はないよ。正直誰でも良かったんだ。適当に鞆を取ったら、たまたま彼女の鞆だったというだけだ。だから彼女に実は密かに好意を抱いていたとか、そんなことは微塵もない。ここ、重要だよ？」

柚椰は罪を認めつつもヘラヘラとした態度を崩さない。

彼のその態度に、ようやく女子たちも彼が犯人だという認識を持ったのか徐々に彼を睨み出した。

しかしその一方で、平田含め男子たちはどこか居心地が悪そうに目を伏せる。

「でも今になって後悔しているよ。どうして軽井沢の鞆だったんだろうってね」

皆が皆沈黙する中、須藤の手を解いた柚椰がそう言って櫛田に歩み寄っていく。

そして彼女の耳元で何かを囁いた後、柚椰はニヤリとした笑みを浮かべた。

「これが桔梗や鈴音だったら、実は俺が犯人なんだと言っても君たちは許してくれただろうにね」

「——っ」

「櫛田さんー！」

彼のその言葉が決定打となったのか、櫛田は膝から崩れ落ちた。すかさず近くにいた女子が彼女の身体を支える。

「バレてしまった以上、もうここには居ることは出来ないね。仕方ない。じゃあここから俺は別行動をさせてもらうよ。ああ、一応点呼のときは居てあげよう。俺もポイントは欲しいからね」
そう言うと彼はケラケラと笑いながらベースキャンプを去っていった。

「(黛君……君は……)」

クラスメイトに背を向け去っていく柚椰を見ながら平田は齒を食いしばっていた。

彼を始めとするDクラスの男子たちはここに至るまでの事情を全て知っていた。

知った上で傍観することしか出来なかった。

口を挟めば、柚椰を庇おうとすれば彼の行いが全て無駄になると理解しているが故に。

だがしかし、そうであっても、結果として柚椰を犠牲にした事には変わらない。

その事実が平田の心に重くのしかかっていた。

池の鞆から下着が出てきた際に柚椰が出した解決策。

それは――

「待ってくれ黛君！ つまり君は――」

「そう、この事件の罪を全て俺が被る。犯人が見つければひとまずこの騒動は収まるはずだ」

「そんなこと君がやる必要はない！ なんとか別の方法を探して――」

「じゃあ平田が犯人という事にするかい？ その場合、彼女の下着を盗んだ変態として残りの時間を過ごす事になるけど」

「っ！ ……それは」

「健の言う通り、容疑者はこのベースキャンプにいる全員が当てはまる。加えて現段階では誰が犯人かを決定づける証拠は無い。下着が捨てられていなくてよかったね。もしこれで物が無くなっていたら女子たちは残りの日数、ずっと俺たち全員を疑っていただろう。今打てる最善の策は、誰でもいいから犯人役を立てて事件を終息させることだ」

「……だからお前が冤罪を背負うってことかよ」

平田と柚椰の問答に入ってきたのは須藤だった。

以前停学一步手前まで追い込まれたことのある彼だからこそ、柚椰がやろうとしていることは看過できなかった。

恩人であり仲間である彼にみすみす濡れ衣を着せることなど須藤には出来なかった。

「犯人になった俺はまず間違いなく君たちと一緒に行動することは出来なくなるだろう。当然ながら残りの日数は君たちと別行動をとる事になるけど、まあ心配いらないよ」

「でも黛君、それじゃあ君があまりに……」

柚椰がやろうとしているのはあまりに酷い自己犠牲だった。

クラス皆が幸せになることを目指している平田にとって、それはあまりに残酷な選択だ。

しかし彼の心配を他所に、柚椰はふわりと微笑んだ。

「大丈夫、俺もずっと犯人でいるつもりはないよ。必ず真犯人は見つけ出すつもりだ」

「見つけ出すってどうやってやんだよ……?」

平田や須藤だけでなく、他の男子たちも柚椰の事を心配していた。万が一真犯人が現れなければ、柚椰はこれから先ずっと下着泥棒の汚名を着せられたまま学校生活を送ることになるのだから。

「犯人を見つけ出すヒントは犯行動機だ。推測されるのは全部で三つ。一つ目は性的嗜好。二つ目は軽井沢への個人的な恨み」

「恨みって……軽井沢に何かされたことのある奴ってことか?」

山内が柚椰にそう尋ねる。

「そう。恨みから彼女を困らせるために犯行に及んだ可能性も考えら

れる。そして三つ目の可能性、それはDクラスの中を混乱させるための策略だ」

「……っ！ 待てよ、ってことはよ……」

柚椰が口にした三つ目の可能性を聞いて、須藤は一人の容疑者が思い当たった。

恐らく他の男子たちも同じ可能性に行き着いたのか目を見開いている。

「現段階では、どれもこれもが可能性の話でしかない。証拠がこの場にはないからね。けど、まだ猶予はある。要は試験が終わるまでの間に犯人が見つければいいんだ」

「勝算はあるのか？」

そう尋ねたのは綾小路だった。

協力者である柚椰がクラスを離れるとあつてはこの後の計画に支障をきたす可能性がある。

それを踏まえても、柚椰が博打に打って出るつもりならば彼は止めるつもりだった。

「俺も自分なりに足掻くつもりだよ。最終手段も考えてある」

「……そうか」

柚椰の眼差しと口調から決して運否天賦ではないのだと察したのか、綾小路はそれ以上何も言わなかった。

「健、これから俺は君に酷な事を頼むけどいいかな？」

「……なんだよ？」

最後に柚椰は須藤に自分を締め上げる役を頼み、先的一幕へ至った。

柚椰がベースキャンプを去ってから暫くした後、テント前にはクラ

ス全員が集まっていた。

そこには目を真っ赤に腫らしながらも、怒りに震える軽井沢の姿もある。

「最悪……！ 下着盗むなんて最低！」

彼女はこの場にはいない。柚椰に対して罵詈雑言を浴びせかけていく。事情を知っている男子たちは彼女の言い草に口を挟もうとするが、既の所で思い留まる。

罪を被った仲間の想いを無下にしないためにも、彼らは耐えなければならなかった。

「自分が信用されてるから疑われないと思ったとかホント最低！ 私たちのこと今までずっと騙してたってことじゃん！ それに何？

誰でも良かったって!? ただの変態じゃない！」

積もり積もった怒りが爆発したように、軽井沢の暴言が止まらない。

彼女の取り巻きたちもそれを止めることはしなかった。

柚椰に対してまだ僅かでも信用が残っているが故か。

しかし状況証拠は揃っており、本人がそれを認めている以上、現実には残酷だ。

「変態とこれからも同じクラスなんて無理！ なんでクラス替えがないのよ！ そうだ、学校に言えばあの変態を追放することが出来るんじゃない——」

「いい加減その口を閉じてくれないかしら？ 不愉快すぎて身体に障るのだけだ」

軽井沢の止まらない暴言を堀北が心底不快そうに遮った。

彼女は眉間に皺を寄せ、殺意にも似た敵意を軽井沢に向ける。

いきなりそのような目で睨まれば、軽井沢も勢いを殺される。

「な、なによ。なんか言いたいことでもあるわけ？」

「ええ、それはもう。言いたいことは山ほどあるわ。穴だらけの自白をして勝手に出て行った柚椰君にも、それを真実と受け止めている貴女にもね」

「どういうことよ！ アイツが自分でやったって言ったんならアイツ

「が犯人でしょ!？」

「愚か者ここに極まれりね。頭が残念な人だとは思っていたけれど、これほどとは思わなかったわ」

「はあっ!？」

「平田君。確認するけれど、柚椰君はどういった流れで犯行を認めたのかしら?」

詰め寄ってくる軽井沢を無視して堀北は平田に詳しく事情を問いただす。

クラス中の視線が平田に向く中、彼はポツポツと当時の状況を語り出した。

「……僕たちはお互いの潔白を証明するために、まず男子の中だけで荷物確認をしたんだ。そして黛君の鞆の中から軽井沢さんのおぼろげに女性用の下着が出てきて……」

「彼はそれを自分が盗んだと認めたのね?」

「……うん」

平田は言いづらそうに、認めたくなさそうに頷いた。

「そう……今話を聞いて、何か思ったことはないのかしら?」

堀北はクラスメイトを見渡してそう尋ねる。

その問いに軽井沢が不機嫌そうに言い返す。

「何が。盗んだものを自分の鞆に入れてたっただけでしょ」

「まずそこからおかしいのよ。普通盗んだ物を自分の鞆に入れるかしら? 事件が発覚すれば疑われるのはクラスの男子たち。そうならば男子の荷物を確認することくらい簡単に想像がつくはずだけど。私が犯人だったなら、下着はどこか別のところに隠すか捨てるかして証拠隠滅を図るわ。にも関わらず下着は柚椰君の鞆から出てきた。これはどういうことかしら?」

堀北の淡々とした解説をクラスメイトは黙って聞いていた。

彼女の言うことは尤もだったからか、クラスの中に違和感が広がり始める。

「そもそも私達の鞆は男子のものも含めて全てがテントの前に置かれていた。篠原さん、貴女は男子を問い詰めるときに言ったわよね?」

『荷物は外に置いてあつたから盗ろうと思えば盗れる』って」

「い、言つたけど……」

「つまり言い方を変えれば誰にでも犯行は可能ってことじゃないかしら？ 鞆から下着を盗ることも。それこそ、盗つた下着を誰かの鞆に入れて罪を擦り付けることも、ね」

「そ、それは……！」

「つまり柚椰君の鞆から下着が出てきて、彼が犯行を認めたからといって彼が本当に犯人であるとは限らないのよ」

「じゃ、じゃあ黛君はなんで犯人だつて認めたの？ やってないなら認める理由がないじゃん！」

篠原の疑問は尤もだった。

もし柚椰が犯人でないのなら、わざわざ自分が犯人だと言う理由がない。

一体何故彼はわざわざ自分から罪を被るようなことをしたのだろうか。

「ここからは私の推測よ。恐らく、最初に下着が入っていたのは別の男子の鞆だつたんじゃないかしら？」

「——っ——」

堀北の仮説に男子たちは息を呑んだ。

しかし動揺を悟られぬよう、努めて平静を装う。

「鞆が一箇所に纏めて置いてあることから、犯人は誰にでも罪を着せることが出来る。けどだからといって、容疑者不明のままいけばこのクラスはどうなるかしら？ それこそ初日に彼が言つた最悪のケースになり得るんじゃない？」

「じゃあまさか黛君は……」

「自分を犯人にして強引に事態を収めようとした。私はそう考えているわ」

「そ、そんなのアンタの勝手な想像でしょ！ アイツが本当に犯人かもしれないじゃん！」

堀北に圧倒されかけた軽井沢だったが、それでも柚椰への疑いは晴れていないらしく声を荒らげる。

感情的になつてゐる彼女に対し、堀北の方は至つて冷静だった。

「ええ、だから言ったでしょう。私の推測だつて。貴女が柚椰君を犯人だと決めつけて罵声を浴びせかけているのと同じように、私も彼が無実であると本気で信じているだけよ。少なくとも私は貴女より遙かに彼のことを知つてゐる自負がある。どっちにしても私は貴女より遥かされるはずよ。私の主張と貴女の主張、どちらが真実なのかはね」

彼女は柚椰が犯人だとは全く思つておらず、真犯人は別にいると主張している。

対して軽井沢は本人が自白してゐるのと、鞆に下着が入つていたことから柚椰が犯人だと思ひ込んでいた。

両者の主張は真つ向から対立しており、現状これの真偽を判断できる材料がない。

しかし堀北はいずれ真相は明らかになると確信していた。

それは偏に、彼女の柚椰に対する信頼だろうか。

そこで話は終わりかと思われたが、堀北はまだ言い足りないのか顔を顰めて軽井沢を睨む。

彼女が苛立つてゐるのは柚椰が犯人として受け入れられていることその他にもあるのだ。

「そもそも貴女、自分は何の罪もないかのように振舞つてゐるけど、自分がこうなつたことに心当たりはないのかしら？」

「何それ。そんなの無いに決まつてんじゃん」

いきなり何を言い出すのかと軽井沢は不機嫌そうに言い返す。

そんな彼女に対して堀北は腕を組み呆れたような表情をした。

「本当にそうかしらね。私は貴女のこととはよく知らないし知る気もないわ。でも今までの学校生活を見る限り、随分と好き勝手に振舞つてきたように見られたけれど。あれは5月頃だったかしらね。貴女クラス中を回つてポイントを借りてなかつた？ あの時借りていたポイントは結局返済したのかしら？」

「——っ！。そ、それは……」

痛いところを突かれたとばかりに軽井沢は顔を顰める。

その表情から彼女が未だ借金を返済していないことは明白だった。

「その顔を見る限り、未だに返済してないようね。自分の日頃の行いが悪いからこんな問題に発展したとは考えなかつたのかしら。恨みを買ってもおかしくない行動をしてきた自覚はある？」

「そ、そんなのアンタだつてそうじゃん！ 友達もないし口も悪いアンタなんてもつと恨まれて——」

「私は人と馴れ合いたくないから突き放した。けど貴女は友達であることを盾にして人からポイントを巻き上げた。どちらが恨みを買いやすいかは明白じゃない」

「ち、違う！ 私は巻き上げたりなんてしてない！ ちゃんと後で返すつもりで——」

「先月、ようやくこのクラスに再びポイントが支給された。その時点でせめて仲の良い人たちには返済できたはずじゃない。なのに貴女はそれをせず、1ヶ月経つても何もしていない。今の貴女の言葉に説得力はあるのかしらね？」

「っ……い！」

堀北の言葉に軽井沢は思わず周りを見渡す。

彼女と口頃連んでいる篠原、佐藤、松下。

そして彼女がポイントを借りていた女子の面々。

しかし皆一様に軽井沢の視線から逃れるように目を逸らすか俯いていた。

その反応は、大なり小なり彼女に思うところがあるという証明だった。

「私から見ても篠原さんや佐藤さん、松下さんは良い人だと思っわ。ポイントを貸したきり返す気配もない人の下着が盗まれて、自分のことのように怒れるんですもの。自業自得としか言えないこの状況で、それでも寄り添おうとはしてる。私には到底できないわ。尤も、しようとも思わないけれど」

「くっ……い！」

「ほ、堀北さん、もうそこまですてあげてくれないかな？」

言い返す言葉もなく俯く軽井沢を見かねてか平田が割って入る。

しかし彼の仲裁も意味を成さない。

堀北は今度は入ってきた平田に矛先を向けた。

「平田君、貴方にも責任の一端はあると思うのだけど。曲がりなりにも彼女の恋人であるなら、当然彼女がやってきたことも知っていたはずよね？ 何故今まで一度たりとも彼女に注意するなりしなかったのかしら？」

「それは……」

「大方、クラスの和を乱さないために、と思っていたんでしようけど。結果としてこの状態よ。彼女は友達を裏切っているのだから」

そう言うのと再び軽井沢に視線を移す。

「軽井沢さん、私は貴女のグループにも榎田さんのグループにも入っていないし入るつもりもないわ。けど、そうね……もしどちらかの味方をしろと言われたら……私は迷うことなく榎田さんの方を選ぶわ。少なくとも彼女は、貴女よりは人の気持ちを考えられる人間でしょうから」

「堀北さん！ そんな言い方しちや可哀想だよー」

流石に言い過ぎだと思つたのか今度は榎田が仲裁する。

しかしこの状況でそれは悪手以外の何物でもない。

Dクラスの女子は軽井沢と榎田を筆頭に二つのグループに分かれている。

そして今、榎田は責められている軽井沢を助けるために仲裁に入つた。

この時点で二人の力関係が決定付けられたと言つても過言ではないのだ。

加えて榎田が口にした『可哀想』という言葉。

無意識からか、あるいは良心から出たものなのかは定かではない。

しかしその言葉は皮肉にも榎田が軽井沢より上であるということを浮き彫りにする決定打となつてしまった。

「そうね。これ以上彼女に何を言つても無駄でしょうしここまでにしておくわ」

言いたいことは全て言い終えたのか、堀北はそこで矛を収めた。

彼女はもうこの場に用はないと言わんばかりに踵を返し、その場を

去ろうとする。

しかし最後に、堀北は足を止めて顔だけを軽井沢に向けると口を開いた。

「軽井沢さん、この際だからはっきり言わせてもらおうわ。貴女が踏ん返り返って座ってる女王の玉座、とつくに罅が入ってるわよ？」

彼と無機質少年は策を講ずる。

朝の点呼が終わり、時刻は午前10時。

Dクラスの空気は張り詰めていた。

宣言通り、点呼の時間に柚椰はベースキャンプに戻ってきた。

しかし誰も彼に声をかけることはせず、離れたところで彼を観察していた。

どこか腫れ物に触るような雰囲気で傍観する者。

まだ彼を信じているのか困ったような顔で見つめる者。

そして彼を犯人だと思つて睨んでいる者と周囲の反応は様々だった。

周囲がそうしている中、柚椰は再びベースキャンプを離れて何処かへ行こうとしていた。

「黛君、どこに行くんだい？」

形だけでも聞いておこうと思つたのか、平田が思わず尋ねる。

「別にどこでもいいだろう？ 適当に時間を潰してくるだけだ」

「……」

短く言い残して柚椰はさっさと出て行ってしまった。

演技とはいえ普段の彼とはまるで違う冷たさに平田は息を呑む。

平田に対してそんな態度をとつたことで、柚椰を敵視している者はますます眉間に皺を寄せる。

「……」

柚椰を疑っている者、軽井沢は去って行く彼の背を睨んでいた。

そんな彼女を、彼女の友人である篠原、佐藤、松下は少し離れたところから見ている。

本来ならば彼女に寄り添い、彼女と同じく柚椰に対して敵意を向けず然るべしだった。

しかし現在、彼女たちは軽井沢から少し離れている。

理由は朝的一幕。軽井沢に対して堀北が突きつけたある事実が起

因っていた。

Dクラスの女子グループとして存在している二つの派閥。クラスのリーダー平田の彼女である軽井沢を中心とした派閥とクラスのアイドル的存在である櫛田を中心とした派閥。

入学時からしばらくの間は前者が幅を利かせていた。

目立たない生徒も長いものに巻かれるように、あるいは王の妃という肩書きに怯えるように前者に身を置いた。

しかし時が経つにつれ、というよりはここ数ヶ月で後者が急速に勢力を拡大させていった。

それまで軽井沢の方へ属していた者がこぞつて櫛田の方へ乗り換ええた。

気がつけば両者の力関係は逆転し、派閥に属す生徒の総数も逆転していた。

その事実を、堀北が皆の前で突きつけたのだ。

女王の玉座は既に崩壊寸前であると。

今まで従えてきた平民は、皆新しい女王へと流れているのだと。

「(最悪！ ホント最悪！ あんな奴に好き放題言われるなんて！)」

軽井沢は自分に恥をかかせた堀北へ怒りを燃やしていた。

自分の影響力が無くなりつつあると、最早お前は櫛田より劣っているのだと皆の前で堂々と、はつきりと告げられたのだから。

彼女のプライドは、自尊心はひどく傷つけられた。

今の彼女にとって、柚椰と堀北は最悪な人間として認識されていた。

それだけではない。自分と連んでいた女子三人も今の彼女にとっては敵同然だった。

自分が責められているときに彼女たちが何もしなかったことが起因しているのだろう。

ともかく今現在、軽井沢は誰も近づけないような雰囲気を出していた。

「軽井沢さん……」

軽井沢を心配するように櫛田が声をかける。

しかし彼女の心遣いが癪に障るのか軽井沢は櫛田を睨みつけた。

「なに。放っておいてよ」

「そんなこと出来ないよ。友達でしょ？」

やさぐれた態度を取る軽井沢に対して櫛田は努めて優しく応対していた。

それが余計に頭にきたのか軽井沢は声を荒らげる。

「ふん、どうだか。本当は私のこと見下してんじゃないの？ アンタも堀北みたいに自業自得だって笑ってんでしょ!？」

「おい軽井沢！ 桔梗ちゃんはお前を氣遣つてくれてんのになんだよその態度！」

櫛田に向かって酷い態度を取ったのが我慢ならなかったのか池が口を挟む。

「うっさい！ アンタには関係ないでしょ！」

「そういう態度だから嫌われてるって気づけよ！」

「——っ！ 変態のアンタには言われたくない！ 女子にキモがられてるくせに！ アンタや山内だって黛と同類でしょ！ いかにも盗みそうだもんね！」

「なんだとお前！」

軽井沢は池や山内にまで喧嘩を売っていく。

周り全てが敵であるかのごとく、彼女は誰彼構わず敵意を振りまく。

彼女がそんな態度を取れば、必然的に周囲の輿感を買う。

元々彼女に思うところがあつた者だけでなく、彼女の友人だった篠原たちでさえ険しい表情を浮かべていた。

「軽井沢さん、私は軽井沢さんのこと下に見たりなんてしてないよ」

しかしこの場で唯一、櫛田だけは嫌な顔一つせず軽井沢と向き合っていた。

それどころか彼女は真摯に、相手に伝わるように優しく語りかけている。

「私はグループとか、派閥争いとか、そういうのがしたいんじゃないの。私は皆一緒に仲良くなればそれで幸せなんだ。軽井沢さん

だって、私にとっては大切な友達なんだよ？ だからそんな悲しいこと言わないで……？」

「……」

「すぐには信じてもらえないかもしれない。でも、いつかは私のこと、友達だって思ってくれると嬉しいな」

最後に優しい笑顔を向けて、櫛田は軽井沢から離れた。

そして彼女は離れて見ていたクラスメイトたちのところに行った。

「皆、聞いてくれないかな？」

櫛田がそう言うのと、周りの視線が彼女に集中する。

「軽井沢さんも下着を盗まれたショックで大変なんだと思う。だからちよつと今はピリピリしちゃってるんだよ」

軽井沢のひどい態度を受けて尚、櫛田は彼女を気遣ってそのようなことを言った。

彼女のその気遣いと優しさに周りは彼女に対して尊敬の目を向ける。

「今の軽井沢さんには一人になる時間が必要なんじゃないかな？ 私も友達が困ってるならどうにかしてあげたい。でも下手に声をかけたら、かえってパニックになっちゃうんじゃないかなって思うんだ」

「まあ、そうね……」

「うん……」

「さっきのアレ見せられたらね……」

篠原を始めとする軽井沢の友人三人は先の櫛田と池に対する彼女の暴言を見ていたからか苦い顔をしていた。

「寛治君も、止めに入ってくれたのは嬉しかったよ。ありがとう。私の所為で酷いこと言われちゃったよね……ごめんね？」

「き、桔梗ちゃんが謝ることじゃないって！ 俺も山内も気にしてねえから。な？」

「お、おう。キモいとか言われんのは慣れてるしな」

櫛田に頭を下げられ、慌てて池と山内は気にしてないと彼女に言葉をかけた。

「あと、これは私の個人的な気持ちなんだけどいいかな？」

そう前置きして櫛田は全員を見渡した。

「さつき堀北さんが言ってたよね？　柚椰君がもしかしたら罪を被ってるかもしれないって」

彼女が触れたのは、朝に堀北が言っていた推測についてだった。

周りもそれは気になっていたのか、一様に考えるような素振りを見せ始める。

「私は柚椰君を信じたい。だって、ずっと一緒にいたんだもん。柚椰君が下着を盗むなんてこと絶対にしないって私は信じてる。でも柚椰君を信じるってことは、犯人がまだこの中にいるかもしれないってことでもあるよね？」

櫛田の言うことはその通りだった。

もし柚椰が本当に犯人でないとすれば、彼が罪を被っているとすれば。

それは真犯人がまだ隠れているということになるのだ。

クラスメイトたちは皆お互いの顔を見合い、ざわつき始める。

「私は友達を疑うなんてことしたくない。でも柚椰君のことも信じた。中途半端な考えかもしれないけど、これが今の私の正直な気持ちだよ。だからそれを踏まえて、皆に提案したいんだ」

彼女はそこで言葉を切って小さく息を吸う。

そして真剣な顔で皆の顔を見遣った。

「今ここで改めて犯人探しをするのは柚椰君の想いを無駄にすることになる。だから、ひとまず犯人が誰なのかは置いておいて今まで通りの生活をするべきなんじゃないかな」

「それって、下着泥棒の件をなかつたことにするってこと？」

「流石にそれは……」

「うん、犯人が別にいるかもって中で今まで通りなのはね……」

櫛田の提案に女子たちは皆難しい顔をしていた。

確かに彼女の言うことは一理あった。

しかし生理的なところで、気持ち的なところでは折り合いをつけ切れないというのが現状だった。

反対に男子たちは柚椰の考えを知っているからか、櫛田の提案に胸を撫で下ろしたような、これ幸いというような表情だ。

「別に無かったことにするわけじゃないよ。堀北さんが言っただでしょ？ いずれ真相は分かるはずだって。そうだよ？ 堀北さん」
「ええ。柚椰君が単なる自己犠牲でこのまま終わるはずがないわ。必ず真犯人を見つけ出す算段を立てているはずよ」

櫛田は自分の提案を補強するために堀北に話を振った。

それに対して堀北は今一度強い口調で事件の真相は必ず明かされると宣言していた。

「皆に柚椰君を信じろなんて言うのは難しいってことは分かってる。だから今は私を信じてほしいな。もし本当に柚椰君が犯人だったら、犯人が見つからないままだったら……そのときは私も一緒に責任を取るよ」

「責任って……」

女子の一人が呟いた問いに櫛田は堂々と答えた。

「皆に嫌なことを無理矢理させた責任を取って自主退学する。もう二度と皆の前には現れない。それが私の覚悟だよ」

その発言に今日一番のざわつきが広がった。

いの一番に異を唱えたのは池と山内だった。

「ちよ、ちよつと待ってよ桔梗ちゃん！ 何も桔梗ちゃんがそこまでしなくたって」

「そうだぜ！ そんなことしたら——」

「皆に納得してもらうためには私も自分を賭けるしかないよ。自分は責任を取らないで、皆にこんな提案を呑んでもらうなんて不公平だと思うから」

櫛田の覚悟は本物のようで、そこに迷いはなかった。

彼女にそこまで言われれば、周囲も彼女の覚悟を呑む他ない。

「……分かった。僕は櫛田さんの提案に賛成する」

「平田君!？」

その覚悟に最初に応えたのは平田だった。

彼が肯定の意を示したことに女子の中から声上がる。

「ただし、櫛田さんだけに責任は取らせない。そのときは僕も責任を取る」

「そんなん?!? 平田君まで退学するつもりなの!?!」

「僕も櫛田さんと同じ気持ちだよ。僕も黛君を信じてるんだ。だからこの提案を呑む以上、万が一のときは僕だって同罪だ」

平田も覚悟を決めていた。

先に柚榔に自己犠牲をさせてしまった負い目からか、あるいはリ―ダーとしての覚悟か。

ともかく彼は自身を賭けることを躊躇わなかった。

「おい平田、一人でカツコつけてんじゃねえよ」

次に名乗りを上げたのは須藤だった。

彼はどこかばつが悪そうに頭を掻いている。

「朝は叩き起こされた挙句疑われてイライラしてたからついカツとなっちまったけどよ……冷静に考えてみたら柚榔が下着泥棒なんてするわけねえよな。だから俺もアイツを信じることにする。俺も乗らせてくれよ」

須藤は疑われていた苛立ちから衝動的に柚榔に詰め寄ってしまったという体にして櫛田の案に乗ることにしたようだ。

彼がそうしたこと、今度は池と山内が声をあげた。

「そーそー。俺や春樹ならまだしも、黛が下着ドロとかねーわ!」

「おい寛治、お前ナチュラルに俺を同類にすんなよ」

次々に男子たちが一人、また一人とそこに加わっていく。

「……分かった。私もそれに賛成する」

そして女子の中から松下が声をあげた。

難色を示していた彼女からの賛成に櫛田は頬を綻ばせる。

「松下さん……」

「ここで反対したらそれこそ空気読めないじゃん? 櫛田さんが黛君を信じるなら、私は彼を信じてる櫛田さんを信じることにする。今はそれでいいでしょ?」

「勿論だよ！　ありがとう松下さん」

「わ、私も！　黛君を信じ、ます……」

覚悟を決めたように、意を決して佐倉がそこに加わった。

意外な人物が声をあげたことに周囲の視線が集中する。

その視線にビクビクしながらも、佐倉は頑張つて言葉を紡ぐ。

「前に黛君には助けってもらったから……だから悪い人じゃないって

……思い、ます……」

「ありがとう佐倉さん」

勇気を出した佐倉に対して、櫛田は笑顔で礼を述べた。

女子二人が名乗りを上げたことで、少しずつ女子の中からも声上がり始めた。

そうしていくうちに、気がつけば櫛田と平田を中心に意見が纏まった。

二人が示した覚悟に、クラスが応えた瞬間だった。

「（とりあえずクラスの方は櫛田のおかげでなんとかかなりそうだな……）」

再び一丸となって動き出すクラスの様子を綾小路は眺めていた。

柚椰が起こした行動を櫛田と平田が上手く汲み取った結果、Dクラスは最善の形で再起動している。

その結果に綾小路はひとまず安心していた。

「ちよつといい？」

一段落したことで少しだけ休もうとした彼に伊吹が声をかけてきた。

「ずっと遠くから見てたけど……なんとかなつたみたいだな」

「まあ、な。櫛田と平田のおかげだな」

「あの櫛田って奴、凄いな。自分の退学を賭けるなんて」

伊吹は女子の集団の中で指示を出している櫛田を見ながら感心したようにつぶやいた。

「櫛田はこのクラスで柚椰と一番付き合いが長いからな。それだけ柚

「椰のことを信じてるんだろ」

「でも、仮にそいつが犯人じゃないとして、真犯人はまだこの中にいるってことだろ？ 誰か心当たりはないのか」

クラスを眺めながら、伊吹は綾小路にそう尋ねた。

「今のところは全く。犯行動機から推測しても正直このクラスの全員が当てはまるからな」

「動機？」

「軽井沢への恨みからの犯行なら、容疑者は男子よりも女子が当てはまる。それ以外なら普通に考えて男子が容疑者だ。だが、男の俺としては極力男子は疑いたくない」

綾小路がそう言うのと伊吹がボソツと呟く。

「お前の言うように男子が犯人じゃないとしたら、犯人は女子。だったら一番疑わしいのはその軽井沢？ って奴の取り巻きだろ。そして次に疑われるとしたら、それはよそ者の私。このクラスを混乱させるための罠って考えれば疑われるのは私じゃないか？」

自分も容疑者の候補に入っていると承知の上で、伊吹は自嘲気味に笑った。

「少なくとも俺は信用するかな。お前が犯人とは思えない」

伊吹の言葉に対し、綾小路は迷わずそう答えていた。

その言葉に伊吹は少し驚いたように彼の目を見る。

それが真実かを確かめるかのように。

綾小路が視線を合わせると、伊吹は目を逸らさずに受け止める。

「……ありがとう。まさかそんな風に言ってくれるとは思わなかった」

「正直に答えただけだ」

綾小路がそう答えたのは、伊吹の目を見ただけで確信が持てたからだ。

彼はこの瞬間確信したのだ。

軽井沢の鞆から下着を盗んで池の鞆に忍ばせた犯人が、目の前の少女であると。

一方その頃、柚椰はBクラスのベースキャンプに足を運んでいた。昨日まで何度か訪れていたこともあり、一応今の自分の状況を伝えしておくためにやってきたのだ。

「というわけで、残りの日数はここに来ることが多くなると思う」

「うん、分かった。大変なんだねDクラスは……」

「予想外のトラブルだよ。正直平田たちが上手くやってくれるかどうか……」

柚椰は朝の騒動と自分が取った行動について一之瀬に包み隠さず話した。

一之瀬は女子の下着が盗まれたということに最初は驚いていた。

しかし事件当時の状況や容疑者が断定できないこと、そして苦肉の策として柚椰が犯人となることで強引に場を収めたことを聞くと彼を心配するように顔を曇らせた。

「大丈夫なの？ その……もし犯人が見つからなかったら黛君は……」

「もれなく残りの学校生活が終わってしまうね。うん、そのときは仕方ない」

「そ、そんなあつさり!? 本当に大丈夫なの!？」

「俺は犯人の見当がついているからね。あとは相手の出方を伺うだけさ」

「えっ、もう犯人が誰だか分かってるの……?」

一之瀬は柚椰が既に犯人の目星をつけているということに目を丸くしていた。

「無人島での集団生活、突如として女子の下着が盗まれるという事件が起こった。さて、一番最初に疑われるのはどんな人間かな?」

柚椰が問いかけると、一之瀬は顎に手を当てて首をかしげる。

「うーん、そうだね……疑いたくないけど、やっぱり最初に疑われるのは男子の誰か、だよな?」

「その通り。さて、ここで一つ情報を付け加えよう。被害者の女生徒は普段から高圧的な態度が見られたクラスの女王のような存在だっ

た。女王はクラスの女子からポイントを徴収した過去がある。この情報を踏まえると、容疑者の候補はどうなる？」

「えーっと……その女王様に対してなにか恨みがあるかもしれない人。その……ポイントを取られたことへの恨み、とかかな？」

「はい正解。表立って彼女に反抗はしていなくても、水面下で不満というものは溜まるものだ。ここまですぐと容疑者はDクラスの人間全員が当てはまる。だけどこれはあくまで日常の中で事件が起きた場合の推測だ。この特殊状況下での事件であればここにもう一つの可能性が生じるんだ」

「もう一つの可能性？」

「俺たちの鞆はテントの前に固めて積んであった。つまり誰でも好きに弄れるんだ。それこそ……Dクラス以外の人間でもね」

そこまで言われて一之瀬はようやく気づいた。

柚椰が言ったもう一つの可能性とはなんなのか。

「まさか……」

「そう、もう一つの可能性。それはDクラスを混乱させ和を乱すことが目的の犯行。犯人はこの特別試験において俺たちDクラスの自滅を喜ぶ人間だ。いるだろう？ 一人だけ、それをするこによってメリットを得られる人間が」

「DクラスにいるCクラスの女の子……」

「正解。俺はこの三つ目の可能性が最も高いと考えているんだ。そもそも5日目というこの正念場でDクラスの人間が下着泥棒をする理由がない。もしDクラスの男子や女子が犯人ならもっと早い段階で事を起こして、逃げるようにリタイアするなりしているはずだろう？」

「確かにそうだね……いつでも盗れるってことはもっと早いうちから気づいてたはずだし」

「恐らくうちのクラスのリーダーが誰か一向に分からないことに業を煮やした結果、こんな手に打って出た。俺はそう考えてるよ。となれば、犯人の目的はリーダーを知ることだ」

「どうするの？ このままじゃCクラスにリーダーが誰かバレちゃう

んじゃ……」

「心配ないさ」

一之瀬の不安を他所に、柚椰はなんでもないように言い切った。

「さっき言っただろう？ 平田や他の男子たちは俺の意図に気づいて
いるはずだ。聡明な平田が三つ目の可能性に気づいていないはずが
ない。平田だけじゃない。女子の中にも鋭い人間は何人かいる。そ
うなれば、このままスパイの思うように事が動くことはないんだ」

その発言に一之瀬は柚椰の真意に気づいた。

それを証拠に、彼女は優しい表情で柚椰を見つめる。

「黛君はクラスの皆を信じてるんだね……」

「ああ。ここまで一緒に学校生活を過ごしてきた仲間だからね。俺が
一人いなくらいでバラバラになるような柔なクラスじゃないさ」

柚椰は笑顔でそう言った。

彼のその笑顔に一之瀬もつられて笑顔になる。

「ところでBクラスはどうしたんだい？ 来たときに随分と騒がし
かったけど」

柚椰はBクラスのベースキャンプに来た際に見た光景を振り返っ
た。

彼がここを訪れたとき、Bクラスは妙に騒がしかった。

何かに気づいたような、どこか焦っているような雰囲気広がって
いた。

それを思い出した彼は一之瀬に事情を尋ねたのだ。

すると一之瀬は途端に慌てたように柚椰に事情を語り始めた。

「そ、そうだよ、黛君聞いて！ さっき点呼の後に気づいたんだけど金
田君がいなくなってたの！」

「なるほど、さっき騒がしかったのはそれが原因か」

柚椰は事の詳細を一之瀬から伝えられた。

朝の点呼の後、Bクラスは今日の探索に向かうべく役割分担を行
なっていた。

その際、これまで積極的にクラスに協力する姿勢を取っていた金田
の姿がないことに気づいたのだ。

「朝の点呼の時は居たはずの金田の姿が。」

「匿っていた他クラスの生徒が突然姿を消せば当然どうということかと動揺が生まれる。」

「柚椰がここを訪れたのはまさにそのタイミングだったのだろう。」

「どうやら、俺はまずいタイミングで来てしまったみたいだね」

「ううん、気にしないで。それにしても、金田君がいなくなったってことはもしかして……」

「もうここにいる理由はなくなった、ということだろうね」

「——っ！ ってことは」

「ああ。恐らく気づいたんだろう。Bクラスのリーダーが誰なのか」

「ど、どうしよう!? もし金田君が本当にリーダーを知ってたら、リーダー当てでマイナス50ポイントだよ……」

「一之瀬が狼狽えるのも無理はない。」

「もし金田が本当にBクラスのリーダーを知っているならば、リーダー当てでCクラスによってマイナス50のペナルティが課せられる。」

「結果として、Cクラスのスパイ作戦を成功させてしまうのだから。」

「しかし、動揺する彼女に対して、柚椰は至って冷静に言い切った。」

「いいや、この試験でBクラスがリーダー当てによるマイナスのペナルティを課せられることはないよ」

「え、どういうこと?」

「一之瀬は既に知っているはずだ。このペナルティを相殺する方法を」

「そう言われた一之瀬はこの試験における重要なボーナスポイントを思い出した。」

「……あっ！ Aクラスのリーダー当て!」

「そう。俺はあの時点で、金田がBクラスのリーダーを見破った場合の保険をかけたんだ。俺が与えた情報で、既にBクラスはAクラスから確実に50ポイント奪える状況にある。だから、もし金田が本当にリーダーを知っていたとしても、Bクラスが今のポイントを減らされることはない。勿論、Aクラスのリーダーを当てたプラス分は無くな

るけど、結果としてそれでマイナス分は相殺。Bクラスは今残っているポイントを残したまま試験を終える事が出来る。だから、一之瀬たちの頑張りは無駄にならないよ」

つまり彼はこうなることを想定してAクラスのリーダーの情報を無償で提供したのだ。

全てはBクラスがマイナスを被ることを避けるために。

それを理解した一之瀬は泣きそうな顔になりながら柚椰を見る。

「黛君は私達のクラスを守ってくれてた、ってこと……？」

「協力関係を結んでいるBクラスに同じようにスパイが潜り込んでいたから出せる手を打っていただけさ。たまたまAクラスのリーダーを知っていて、BクラスにCクラスのスパイがいた。全ては偶然。運が良かっただけだよ」

「それでも、貴重なボーナスポイントの情報をタダで教えるなんて柚椰君にメリットがないよ……協力関係だって、私との口約束でしかない。反故にすることだって出来るのに……」

「君を裏切ったら俺がBクラスの人達に袋叩きにされるだろう？ 俺も流石に近衛兵さんたちを全員敵に回すのは怖いからね」

冗談めかして笑う柚椰に一之瀬は困ったように笑った。

「ホント、困っちゃうな黛君には……」

思わず呟いたその言葉は、あまりに小さかったためか当人に聞こえることはなかった。

「とにかくBクラスはこれまで通り、皆で出来ることをやればいいさ。そうすれば無事に試験を乗り切れるはずだよ」

「そうだね、頑張るよ。Dクラスの方も上手くいくといいね！」

「ありがとう」

二人は互いのクラスが残りの日数無事に過ごせることを祈った。

その日の夜、点呼を終えた後に綾小路は柚椰を呼び出した。

彼が離れている間のDクラスの動きと、下着泥棒の犯人の正体を伝

えるために。

「それで、クラスの方はどうだい？ 帰って来てみたら雰囲気が大分違っていたようけど」

「ああ、実は——」

それから綾小路は今のDクラスの状態に至るまでの経緯を掻い摘んで説明した。

堀北が柚椰が罪を被っている可能性を指摘したこと。

櫛田が中心となってクラスの再始動を行なったこと。

その際に櫛田と平田が自身の退学を賭けたことなどを語った。

「なるほどね……まさか最初に鈴音が」

「人に流されない堀北だからこそ出来たことだろうな。危険な一手だったが、結果としてお前が偽の犯人じゃないかという疑惑が生まれただ」

「それを桔梗が上手く汲み取って流れを作ったということか……どうりで帰ってきたとき、クラスの視線が柔らかくなっていると思っただ」

「現状お前が犯人だと信じきっているのは軽井沢だけだ。あとの奴らはひとまずお前を信じている櫛田と平田を信じるって形で落ち着いている状態だ」

「上手く事が運んでいるってことだね」

「そうなるな。お前の自己犠牲も無駄にならなかった」

「そう言ってもらえると助かるよ」

綾小路からのフォローに柚椰はふわりと微笑んだ。

「それと、犯人が誰だか分かったぞ」

その言葉に柚椰は目を丸くする。

「早いね。それで、犯人は？」

「伊吹だ。間違いないと言っている」

「なるほどね。となると、手の打ちようはあるね」

「伊吹と取引するつもりか？」

綾小路は既にその可能性に気づいていた。

朝に柚椰が言っていた最終手段。

恐らくそれは伊吹が犯人だった場合に用意している手なのだろうと当たりをつけたのだ。

彼の予想通り、その問いに柚椰は笑みを浮かべていた。

「彼女の目的はDクラスのリーダーを知ること。ならそれを満たしてやればいい」

「お前が持つてるキーカードを渡すことを条件に犯行を認めさせるつもりなんだな？」

「その通り。リーダーが分かればもうこのクラスにいる理由はなくなる。元々仲良くするために潜り込んでるわけでもない彼女にとって、告白は大した事じゃないだろう」

「だがこちらのリーダーを教えれば、Cクラスにリーダーを当てられてマイナス50ポイントだぞ」

「清隆ももう分かっているんじゃないか？ それを回避する方法が一つだけあるということを」

ニヤリと笑う柚椰に綾小路もフツと笑った。

「やっぱり柚椰も気づいていたのか。リーダーを変更する方法を」

「勿論。Cクラスがルールを逆手に取るなら、こっちはルールの穴を突くだけさ」

二人は互いに相手の頭脳を高く買っているからか、細かく言わずとも今後の流れは理解できていた。

「となると取引を終えた後、次のリーダーを決める必要があるな」

「それは清隆がやればいいよ。ここで別の人間を作戦に加えるよりは俺たちの中で完結した方が成功率は高い」

「柚椰ならそう言うと思った。なら次のリーダーは俺がやろう」

「あとこれは前提としての話だが、伊吹が確実に取引に応じるには、彼女がキーカードを手に入れる以外に仕事を完遂出来ないようにする必要はある。そして出来れば取引を終えた後、彼女がここを抜け出すチャンスを作ることが出来ればベストだ」

「分かった、そっちは俺に任せろ。考えがある。取引が終わったら教えてくれ。出来る限り早く手を打っておく」

綾小路は既に算段を立てているのか、二つ返事で仕事を買って出

た。

「そもそも一つ、俺は手を打とうと思う」

「どういうことだ？」

「今日の日中にBクラスに行ったんだが、スパイは既に仕事を終えて離脱していたんだ」

「つまりBクラスはCクラスにリーダーを知られているということか」

「そう。でも本題はここからだ。金田がリタイヤした今、島に残っているCクラスの間は何人かな？」

「昨日の段階でCクラスのベースキャンプには誰一人いなかった。だがスパイの報告を受ける以上、龍園は島に残っているはず。そしてDクラスのベースキャンプに伊吹がいる。つまり二人だな」

「リーダーは龍園で間違いないと思う。でも、伊吹が俺の名前の入ったキーカードを持って帰ってきたらその限りではない可能性がある」

綾小路は柚椰が言いたいことが理解できたのか、顎に手を当て思案する素振りを見せる。

「なるほどな。リーダーがお前だったらみすみすキーカードを盗まれるようなヘマをするのはおかしい。わざと伊吹に渡したか、あるいは盗まれてもいいように何か手を隠していると読まれるってことだな」

「彼に最も警戒されているのが俺だからね。そこから逆算して俺たちと同じような結論を導き出すかもしれない」

「龍園がリーダーを変更する方法に気づくとすれば、直前で伊吹にリーダーを変えるってことか。そうなれば俺たちはCクラスのリーダー当てを間違えることになる」

「龍園が気づかなければ彼がリーダー。でも、気づいてしまえば伊吹がリーダーということになる。確率は1/2だけど危険な賭けには変わりない。だから、確実にポイントを得るならどちらがリタイヤするのか見極める必要があるんだ」

柚椰の口ぶりから既にその方法を見出していると察したからか、綾小路はそれ以上聞く事はなかった。

三者三様、少年少女は最後の夜を過ごす。

特別試験6日目。いよいよ試験は今日を入れてあと2日となった。

天気は曇天。雨が降り出す一步手前のような空だった。

最終日前日の朝は取り立てて何があるわけでもなかった。

朝の点呼を済ませ、朝食を作って食べるクラスメイトたち。

誰も寄せ付けないで一人で黙々と食事をする軽井沢。

それらから少し離れたところで一人果物を齧る柚椰。

昨日打ち合わせした通り、Dクラスはこれまで通りの生活をルーティンとして行なっていた。

食事を終えると、クラスは今日の仕事へと取り掛かる。

あと1日分の食料さえ確保できればポイントを消費せずに試験を終えられる。

そのため探索にも一層熱が入っている様子だ。

男子は平田を、女子は櫛田を中心に役割分担を始める。

「柚椰」

「ん」

周囲が慌ただしく動くのに紛れて、綾小路は柚椰のところに行き声をかける。

「明け方に伊吹の鞆を漁ったらデジカメが入ってた。恐らくだがキーカードを撮影するためのものだろう」

「なるほどね。それで?」

柚椰が言わんとしていることを察している綾小路はコクリと頷いた。

「ああ、既に壊しておいた。これで伊吹はキーカードを盗る以外に龍園に情報を渡す方法はなくなる」

「ありがとう。あとは俺が彼女と交渉するだけだね。話が付いたら報告するよ」

「頼んだ」

綾小路は手早く報告を終えると、他の男子に交ざるように平田の元へ向かっていった。

「チツ……」

動き出すDクラスの人間たちを眺めながら伊吹は舌打ちした。

彼女の目論見は外れ、Dクラスはこれまで通りの動きをしている。

それが尚更腹立たしく、彼女は苛立ちを募らせていく。

「(アイツがクラスで信用されてるのがこうも仇になるなんてな……)」

柚椰が下着泥棒の罪を被ったときは意図が読めなかった伊吹だが、

その後のクラスの動きでようやく彼の意図が理解できた。

それと同時に彼女は確信していた。

柚椰は事件を起こした犯人が自分であることに感づいていると。

だからこそこちらの目論見を潰すために自分を犯人に仕立て上げたのだと。

彼女は改めて理解した。

黛柚椰という人間がいかに計算高く、そして油断ならない男であることを。

「(どうする……もう時間がない……)」

試験は残すところ後2日。

明日の正午にはリーダー当てが行われる以上、今日中にDクラスのリーダーが誰であるかを知らなければならない。

今の段階で伊吹がリーダーだと疑っている人間は三人。

言わずもがなクラスの中心である平田。同じく主軸として機能している櫛田。

そして昨日の朝の一幕で柚椰の意図にいち早く気づいた堀北の計三名。

ここまでは絞り込めた彼女だったが、それ以上絞り込むことは出来ていなかった。

というのも、三人ともキーカードを出す素振りを見せなかったの

だ。

Dクラスがスポットである川を占有している以上、更新する瞬間は必ず訪れると踏んでいた。

しかし三人は皆他の生徒に交じって端末の方へ行く素振りも見せてもキーカードを取り出す瞬間は見せなかった。

そして気がつけば川のスポットは更新されているという状態。

一体誰が、いつ、どのタイミングで占有を更新したのか伊吹は判別できなかった。

「(多少強引にでも揺さぶってみるか……? いや、それはリスクがデカすぎる)」

三人を順番に締め上げ、キーカードを出させることも考えたが、それは悪手だと思い却下する。

他クラスへの暴力行為や略奪行為が発覚すれば、Cクラスは問答無用で失格。

それだけでなく自分はポイントを全て失うことになる。

あまりにそれはハイリスクであるが故に、彼女は手をこまねいていた。

「やあ、漣ちゃん。元気かい?」

焦る伊吹に無遠慮な男の声がかかる。

その声にうんざりしたような顔を浮かべながら、彼女は声の主を見上げた。

「黛……」

「どうしたんだい? 随分と浮かない顔じゃないか」

「別に。ただ、ちよつとお腹の具合が悪いだけ」

まさかリーダーが誰だか分からず苛立っているなどと言えるわけもなく、彼女は嘘をつく。

しかしその言葉に柚椰はおかしそうにカラカラと笑った。

「うちのクラスのリーダーが分からなくて焦っているのかな?」

「——っ! アンタのそういう分かってるくせに聞いてくるところ、私嫌いだ」

「まあまあ、俺の人間性なんてものは君が一番よく分かっているだろ

う？ 話を戻すけど、リーダーは絞り込めたのかな？」

「……」

「その様子だと今一つといったところのようだね。じゃあちよつと話そうか」

柚椰はそう言つて森の方を指差した。

暗にそこで二人きりで話そうということだと伊吹は理解する。

二人はベースキャンプを抜け出し、森の中へ入っていく。

5分ほど森を進んだのち、改めて二人は向き合った。

「さて、ここから先はクラスの間人に聞かれるわけにはいかない話だ。澁ちゃん、俺と取引をしないかい？」

「取引？」

伊吹は訝しげな顔で柚椰を見る。

「君なんだろう？ 軽井沢の下着を盗んで池の鞆に入れたのは」

「っ……やっぱ気づいてたの」

下手に嘘をついて誤魔化したところで意味がないと判断した伊吹は言い逃れすることを諦めた。

「リーダーが誰だか一向に分からないから、こんな手に出たのかな？」

クラスが男子と女子に対立して不和を生み出せば、必ずどこかに穴が生まれる。そうなればリーダーを探ることも楽になる。君の狙いはそれだったんだろう？」

「……」

何から何までお見通しだという事実には伊吹は沈黙する。

「そこで、俺が君の目的を達成させてあげよう」

「は……？」

「Dクラスのリーダーを教える、ということさ」

不敵な笑みを浮かべる柚椰に伊吹の眉間に皺が寄る。

「どういうつもり？ 自分のクラスのリーダーを教えるなんて」

「どういうつもりもなにも、それが君の望みだろう？」

「分かっているの？ アンタはクラスを裏切るって言ってるんだぞ」

「勿論タダで教えるわけじゃない。俺が君に求めるのは先の事件の犯人が自分だと明かすこと。これが条件だ」

伊吹はようやく柚椰がしたいことが理解できたようで不敵に腕を組んだ。

「なるほどね。要はアンタの冤罪を証明するための取引ってことか」
「俺の知らないところで桔梗や平田が勝手に自分の退学を賭けてしまったからね。どうにかして真相を明かさないといけないんだ」

「ふーん、それで？ 仮にその条件を呑むとして、アンタが教える情報
が正しいって保証はあるの？」

彼女のその質問がおかしかったのか、柚椰はケラケラと笑った。

「君も分かっているだろう？ 俺は自分にも他人にも嘘をつくことはあっても、取引に関しては決して嘘をつかないよ。それが俺の誠意というものだ」

「誠意とか、アンタに一番似合わない言葉だな」

「それで、どうする？ 君がこのまま成果なしで龍園の元に帰って、その後君の居場所はCクラスにあるのかい？ 流石の彼も、反抗ばかりして成果一つあげられない人間には価値を見出さないと」

「別にどうでもいい。元々Cクラスに親しい奴なんてほとんどいないからな」

強気に言い返す伊吹に対して、柚椰はうんうんと頷いた。

「そうか。なら君はこのまま彼に役立たずの烙印を押され、残りの学校生活を彼の忠実な下僕として過ごすということか。クラスの王である彼にこのままずっとおんぶに抱っこでAクラスに上がれることを祈り、彼に怯えながら過ごしていくんだね」

「……喧嘩売ってんなら買うよ。元々アンタは一発蹴つ倒したいと思ってたところだ」

柚椰の言葉が癪に障ったのか、伊吹は鋭い眼光で彼を睨みつける。
その気になれば、いつでも彼の首筋目掛けて蹴りを放つつもりで。

「君があの手タイプを心底嫌っていることは、俺が一番よく知っているよ。君はもう現実から逃げることを、変わらない日常のなかで諦めることを止めたはずなのだから。それとも、君は戻りたいのかい？
ただ搾取されるだけだったあの日々に」

「……」

その言葉は伊吹にとって大きなものだった。

今の彼女を作り上げたのは、昔の彼女を変えたのが目の前の男である以上、彼女の考えは全て筒抜けだった。

今の状況が彼女にとって不本意であることも。

かつての自分の影がちらついていることも。

「さて、俺が君に提供するのはDクラスのキーカードだ。リーダーの名前が刻印されているキーカードはリーダーを証明する証に他ならない。君はそれを持って龍園のところに帰るといい」

「アンタはそれをどうやって手に入れるつもり？ リーダーは平田か榎田か堀北の誰かでしょ」

伊吹が立てていた予想を聞いた柚椰はカラカラと笑った。

「いいや、彼らはリーダーではないよ。平田や桔梗は目立ちすぎていて、鈴音は体調が万全ではない。俺たちDクラスは自軍のリーダーを選ぶ際に、疑われる可能性が低い人間に候補を絞った。目立たず、リーダーであるともまず疑われないような人間をね。要は君の予想は大外れだ。このままいけば、間違いなく君の作戦は失敗に終わっていったんだ」

「……」

柚椰から齎された事実は伊吹にとって決定打だった。

予想が外れている以上、今から再びリーダーを絞り込まなくてはならない。

残りの時間でそれを行い、且つ自力でリーダーを知るのは最早不可能だった。

「……分かった。その取引に応じるよ」

「濡ちゃんが賢い子で俺は嬉しいよ」

伊吹から了承の言葉をもぎ取ったのを合図に、柚椰はポケットから取り出したキーカードを彼女に投げて寄越した。

彼女はそれを危なげなく受け取ると、カードに書かれているリーダーの名前を見た。

「——っ！」

「そう、俺がDクラスのリーダーだ」

「……そっか。何から何までアンタの掌の上だったってことか」

キーカードを見ると、伊吹は脱力したように傍の木に凭れ掛かる。彼女はここに至るまでの全てが目の前の男の計画通りだったと理解したのだ。

「さて、この後の君の行動を指示させてもらうけど構わないかい？」

「分かった。物は受け取ったんだから素直に従うよ」

「まず今日の夕方に俺の協力者が君を逃すチャンスを作る。君はその間にここから離脱して龍園に報告しに向かうといい」

彼がそう言うと、伊吹は意外そうに目を丸くした。

「驚いた。アンタに協力者が居たなんてな」

「俺以外にも君が犯人であると確信した人間がいたんだ。なんでも、君が犯人で間違いないと言っていたよ？ 澪ちゃん、君は昨日から今日までの間に誰かと事件について話さなかったかい？」

そう言われた伊吹は、柚椰が語る彼の協力者が誰であるか気づいた。

彼女が事件について話した相手など、Dクラスにはたった一人しかいないのだから。

「綾小路か……」

「正解。彼は中々に鋭い人間だ。まさか会話の中で君が犯人だと確信するとはね。Dクラスにも鋭い人間は何人かいるが、彼はその中でも突出した存在だ」

「どの道私は詰んでたってわけか……降参だ」

元々自分が犯人であることは遅かれ早かれ明かされていたことに、伊吹はお手上げだと言わんばかりに両手を挙げた。

「あと、うちのクラスの人間に犯行を自白するタイミングだが、これは君に任せよう。試験終了後でも船の中でも構わない。君が俺との取引を反故にすることはないと信じているからね」

「ふーん、じゃあ私のタイミングでやらせてもらうよ。じゃあ取引はこれで成立だな」

話は終わりだとしても言うように伊吹はベースキャンプへ戻るべく踵を返した。

しかし帰ろうとする彼女に柚椰は待ったをかける。

「ああ、まだ話は終わっていないよ。もう一つ、君には話したいことがある」

「なに？　まだ何かあるの」

振り返った伊吹は悪どい笑みを浮かべている男の姿を見た。

「ここから先は綾小路も知らない。僕と君だけの個人的な取引だ」

その日の夕方5時、Dクラスのベースキャンプでトラブルが起きた。

学校から配布されていたマニュアルが何者かによって燃やされたのだ。

幸いすぐに気づいた男子たちによってボヤ騒ぎで済んだが、クラスの中には緊張感が立ち込めた。

燃えたものがマニュアルであり、燃えていた場所が仮設トイレの裏であつたことから明らかに放火だと分かったからだ。

いたずらにしては度が過ぎているため、誰も彼もがざわついていた。

一体誰が、何の目的でマニュアルに火を点けたのか。

一同の中に疑念が浮かぶ中、櫛田があることに気づいた。

「あれ……？　伊吹さんは？」

そう、ベースキャンプに伊吹の姿がなくなっていたのだ。

このタイミングで姿を消すということは、導き出される結論は一つ。

「もしかして放火したのって……」

「このタイミングで居なくなるってことは……」

皆が皆、状況から確信したのだろう。

この放火を引き起こしたのが伊吹なのかもしれないと。

「皆聞いてー！」

ざわつくクラスメイトに向けて櫛田が声をかける。

「いきなり火事が起きて混乱しちゃうのは分かるよ。でも、今は早く後片付けをして夜の点呼に備えようよ！ 結果論だけどすぐに消火出来たんだし、今は先のことを考えて動こう！」

彼女の提案に難色を示すクラスメイトだったが、やがてこのままでも埒が明かないと判断したため、彼女の言葉通り行動を開始した。

男子たちが率先して後片付けをし、女子たちが夕食の準備に取り掛かる。

火事のことを忘れたわけではないが、ひとまず先のことを考えることで乗り切ったのだった。

「(凄いな櫛田さんは……僕なんかよりよっぽどリーダーシップがある)」

動き出すクラスメイトと、中心になって動く櫛田を眺めながら平田は思った。

昨日から続く不測の事態に櫛田は臨機応変に対応している。

周囲の気持ちを汲み取りつつ、なんとかクラスとしての形を保つように動いている。

その姿に尊敬の念を感じると共に、対する自分自身への不甲斐なさを平田は感じていた。

「(僕はどうしてこんなときに限って動けないんだ……)」

下着泥棒の罪を被ることで事態を収めようとした柚椰。

イレギュラーにも柔軟に対応して周りを引っ張る櫛田。

その二人の姿が平田には眩しく映った。

「(伊吹さんが離脱した、ということとは……)」

クラスが慌しく動く中で、堀北は状況を整理していた。

マニュアルが放火され、そのタイミングで伊吹が姿を消した。

恐らく火を放ったのは彼女なのだろうと堀北は推測した。

そして伊吹がスパイであるという前提を踏まえて、彼女の行動の意

味を推測する。

「(もうこのクラスに用は無くなった……つてことよね)」

つまり伊吹は仕事を完遂させたということ。

それが示すことは、Dクラスのリーダーが柚椰だと知られてしまったということだ。

「(キーカードは柚椰君が肌身離さず持っているはず。にも関わらず伊吹さんは離脱した……)」

柚椰がみすみスキーカードを見られるなどという下手を打つなんてことを彼女は信じていなかった。

考えられる可能性はいくつか存在した。

「(柚椰君がわざと伊吹さんにバラした。あるいは何かの対価として情報を与えた?)」

彼女はそこで一つの仮説を立てた。

もし、下着泥棒の犯人が伊吹だとしたら。

柚椰がそれに気づいていたとしたら。

彼は真相を明らかにするために伊吹と交渉するのではないだろうか。

そしてその対価として、彼女の目的を達成させたのではないだろうか。

「(柚椰君は伊吹さんに自白させるために自分がリーダーだと教えた、つてことかしら……?)」

そうと考えれば辻褄が合った。

柚椰はクラスの不和を解消するために、冤罪ではない本当の罪を背負った。

自分のクラスのリーダーを教えるという一種の裏切り行為を以つてして、クラスを守ったのだ。

結果として、これによつて真実は明らかにされ、櫛田と平田の身は守られる。

二人が退学することはなく、クラスも完全に元の形を取り戻す。

だがもしこれが明るみになれば、柚椰はこの先裏切り者として扱われるだろう。

彼はそれを厭わなかったのだ。

「ふふっ、そう。貴方はそういう選択をしたのね……」

事の一部始終を理解した堀北は思わず笑みをこぼした。

それはおかしさから生まれた笑いではなく、むしろ真逆。

彼女の胸に宿ったのは沸々とした怒りだった。

「許さないわよ柚椰君。貴方が裏切り者として扱われるなんて、私は絶対に許さない」

もしこれから先、柚椰を害する者がいたとしたら。

彼のことを裏切り者と呼び迫害する者がいたとしたら。

彼女はどんな手を使ってでも地獄を見せると誓った。

「ご苦労だったな伊吹、上出来だ」

「ふん……」

Dクラスのベースキャンプから離脱した伊吹は、手筈通り無線機で龍園に連絡を取った。

その後、龍園が指定した場所まで移動すると、そこには不敵な笑みを浮かべる彼の姿があった。

「まさかデジカメが故障するとはな。余計な手間をかけさせてくれる」

「不測の事態くらい想定しろよ」

「ククク、当人のテメエがそれを言うとはな」

態度の悪い伊吹に龍園はおかしそうにクツクツと笑った。

「で、カードは？」

「ここにある」

伊吹はポケットからキーカードを取り出し、龍園へと渡した。

彼はカードを確認し、『マユズミュウヤ』と書かれた名前をしっかりと確認する。

「ほう。あのクソ野郎がリーダーとはな」

龍園は柚椰がリーダーだということが意外だったのかニヤリと笑った。

「おい、お前もこっちに来て確認しろ。テメエが要求した条件だろ？」

安心しろ、周りには誰もいねえ。さつさと確認しろ」

彼のその言葉に、物陰から男が姿を現す。

それはAクラスの葛城だった。

事前に龍園が言っていたように、CクラスとAクラスは協力関係だったということがこれで証明された。

葛城は龍園からキーカードを受け取ると、その肉眼でしっかりとカードを確認する。

「本物のようだな」

「これで納得したか？」

確実な証拠は提示された。

にも関わらず葛城は険しい表情を変えない。

「よくDクラスに潜入できたものだ。疑われなかったのか？」

「やりようはいくらでもあるってことだ。残念ながらBクラスの方は情報が得られなかったが、これで条件は満たしただろ」

「……そうだな」

契約ではBクラスとDクラスのリーダーを探り、得た情報を葛城に伝えると言うもの。

一見するとBクラスの情報が手に入らなかったのだから条件を満たしていないように見えるが、契約内容には両方のリーダーの情報を得た場合とは書いていない。

つまりどちらかの情報が手に入れば条件は満たされるのだ。

それを葛城も理解しているからか、短く返事をする。

「これで契約は無事に完了だな。ポイントの方は頼んだぜ？」

「……ああ、契約は守らせてもらう」

「じゃあとつとと帰れ。あまり長居すれば坂柳派の奴らに感づかれるかもしれないねえぜ？ 手柄欲しさに下のクラスのリーダーと手を組んだってよ」

「……」

葛城は龍園の言葉に顔を顰めつつも、伊吹にキーカードを返してそのまま去っていった。

後に残っているのは龍園と伊吹の二人だけ。

二人きりになるや否や、伊吹は先ほど龍園が葛城に言ったあることについて問い詰めた。

「どういうこと？ 金田の奴、結局しくじったってわけ？」

「いいや、金田はちゃんと仕事を完了させた。Bクラスのリーダーの情報はしつかりと俺が握っている」

龍園はニヤリと笑みを浮かべると、ポケットからデジカメを取り出した。

それは金田に持たせていたものだ。

彼はそれを操作すると、中に入っていた写真を伊吹に見せる。

「——っ！ これは……」

「占有の瞬間だ。遠くからズームで撮ったんだろうが、はつきりと写ってるぜ」

写真には小屋の前に置いてある端末に、一人の女生徒がキーカードを翳す瞬間が収められていた。

離れたところから撮ったものであるが、女生徒の顔は判別できくくらいには綺麗に撮れている。

「こいつの名前は白波千尋。一之瀬の金魚の糞の一人だな。これでBクラスのリーダーは判明した」

「ちよつと待って。じゃあなんでさつき葛城にBクラスの情報はなかって言ったの？」

「契約書の三つ目の条件だ。Aクラスから毎月ポイントを貰うための条件はBクラスとDクラスを探り、得た情報を伝えるってものだ。両方のリーダーの情報を伝えた場合とは書いてない。つまりBクラスの情報を意図的に伏せてもなんの問題もねえってことだ」

「なんでそんなことわざわざする必要があるわけ？ Bクラスのポイントが減らすのが目的なら、教えるクラスは多い方がいいんじゃないの？」

伊吹のその問いに、龍園は獯猛さを孕んだ笑みを浮かべた。

「それはな……俺がある奴からAクラスの情報を得る対価として、本来Aクラスに与えるはずだった情報をくれてやるって取引をしたんだよ」

「ある奴？」

「ククツ、伊吹。テメエがキーカードをパクってきた相手だよ」

龍園の言葉に、伊吹は目を見開いた。

自分がキーカードを盗んで来た相手、それは――

「――っ！ 黛か……!?!」

「ああ、奴と交わした契約がこれだ」

龍園は一枚の紙を取り出して伊吹に見せた。

『契約書』

龍園翔（以下「甲」とする）と黛柚椰（以下「乙」とする）は以下の通り契約を締結する。

1. 乙はAクラスのリーダーを探り、得た正確な情報を必ず甲へと伝える。

2. 甲はBクラスのリーダーを探り、得た正確な情報を必ず乙へと伝える。

3. 乙はAクラスの情報に関して、他クラスと取引を行うことを禁じる。

4. 甲はBクラスの情報に関して、他クラスと取引を行うことを禁じる。

5. 乙が本契約の1に違反した場合、乙は甲に50万プライベートポイントを違反金として支払う。

6. 甲が本契約の2に違反した場合、甲は乙に50万プライベートポイントを違反金として支払う。

7. 乙が本契約の3に違反した場合、乙は甲に30万プライベートポイントを違反金として支払う。

8. 甲が本契約の4に違反した場合、甲は乙に30万プライベート

ポイントを違反金として支払う。

9. 下記に署名した者は、本契約内容に同意したものとする。

「これって……」

「要は情報のトレードだな。俺は葛城にくれてやるはずだった情報を
黛にくれてやることでAクラスの情報を得る。反対に、黛はAクラス
の情報を俺にやる代わりにBクラスの情報を得る。この契約では俺
もアイツも、何一つデメリットはねえのさ」

伊吹はようやくそこで、試験開始時に龍園が言っていた言葉の意味
に気づいた。

「最初からこれが狙いだっただんな？」

「ああ。俺が蒔いていた種つてのは黛のことさ。あの野郎は他クラス
の情報を得れば、それを武器に必ずどこかのクラスと交渉してくると
読んだ。DクラスとBクラスは表向きは結託してるつてのは先月の
事件で知っていたからな。だからアイツが武器にするとすればそれ
はAクラスの情報が俺たちCクラスの情報だ。そしてまず前提とし
て、アイツはAクラスとは取引をしないだろうと俺は踏んだ」

「どうして？」

「黛が関わりがあるのは坂柳の方だ。坂柳の方も黛を買っている節が
ある。みすみす葛城を調子付かせるような無駄なことはしねえ。だ
から取引を持ちかけるとすればBクラスかCクラス。Bクラス
とは既に協力関係である以上、わざわざここで新たに取引を持ちかけ
る必要はねえ。放って置いてもどちらかが得た情報を共有するだろ
うからな。そうなると必然的に、奴が取引を持ちかけてくるのは俺の
ところつてことになるのさ」

「でも黛は対価としてBクラスの情報を買ったんだろ？ それつてB
クラスを裏切ることになるんじゃないのか」

「いいや、恐らくだがアイツはリーダー当てではBクラスを指定しな
い。アイツがこの取引で重視したのは、情報の専有権だ」

「Aクラスに情報を流させないことが目的つてこと？」

「ああ。葛城が情報を得ていれば、BクラスはCクラスとAクラスからリーダーを当てられてマイナス100ポイント。だが葛城が情報を得られなければ、Cクラスのみがリーダーを当てたことになってマイナスは半分の50ポイントになる。アイツは協力関係であるBクラスのマイナスを軽減させるためにこの契約を結んだってことだ」

「理解できないな。いくら協力関係でも、所詮は敵同士だろ」

「同感だ。まあ俺には一切のデメリットはねえから関係ねえ話だな」

話は終わりだとも言うように、龍園は踵を返した。

「仕事は終わりだ。リタイアして船に戻っていいぞ」

「そうさせてもらおう」

伊吹もそれ以上話すことはないのか、さっさと教員が待機している浜辺へ向かおうとした。

しかし――

「待て伊吹」

立ち去ろうとする伊吹に龍園が待ったをかけた。

「なに？　もう仕事は終わりだろ」

彼女が振り返ると、そこには難しい顔をした龍園の姿があった。

彼は考え込むような素振りを見せると、やがて鋭い目つきで伊吹を見た。

「伊吹、テメエどうやって黛からカードをパクってきた？　アイツが風呂の時にでも抜き取ったのか？」

「ああ。シャワーを浴びてる時にジャージのポケットから盗んできた。それがどうした？」

「ちよつと待て」

事情を聞いた龍園はそこで再び思案する。

彼の本能が嗅ぎ取ったのだ。

以前にも感じた不快な臭いを。

何かが蠢いているような不快感を。

「あのクソ野郎がそんな簡単に隙を見せるか……？　伊吹がスパイだと理解しているアイツが……」

そう、彼は柚椰が伊吹をスパイだとすぐに見抜くことを読んでいた。

その上で伊吹を送り出したのだ。

元々成功率は五分五分だったが、結果として伊吹は見事に仕事を果たした。

そのこと自体については龍園は評価していた。

しかし伊吹が持って来たキーカードに書かれていた名前が柚椰であつたという事実がここにきて引つかかった。

リーダーであるという情報はこの試験においてはアキレス腱だ。

他クラスに知られればポイントを失うことになる大きなミス。

それを柚椰が理解していないはずがない。

当然自分がリーダーだと知られないように手を打っているはずなのだ。

にも関わらず、柚椰はまんまと伊吹にキーカードを盗まれた。

あまりにもあつさりした結末に龍園は違和感を覚えたのだ。

「(リーダーを知られない方法はいくらでもあつたはずだ。アイツがそれを怠るのか?)」

もし、これが意図して行われたものだったとしたら。

柚椰がわざと伊吹にキーカードを盗ませたとしたら。

何か奥の手を隠しているのではないだろうか。

「いや……逆か？　アイツはこの後に何かをしてくる……とすれば」

龍園は今一度この試験の仕組みについて振り返った。

初日に教師が言っていた説明。

マニュアルに書かれていた禁止事項。

課せられるペナルティ。得られるボーナスポイント。

スポットの占有。そして……

「ああ、なるほど。そういうことか……！　ククツ、流石クソ野郎だな

「黛イツ！」

龍園は一つの可能性を見出した。
彼は気づいたのだ。

柚椰が隠している奥の手を。この試験のルールの中に潜む穴を。
危機的状況をひっくり返す一手を。

それに気づいた龍園はおかしそうにゲラゲラと笑った。

いきなり笑い出した彼を伊吹は変なものを見るような目で見てい
る。

「伊吹、計画変更だ。リタイアするのは俺だ。リーダーはテメエがや
れ」

「は？ いや無理だろ。リーダーの変更は出来ないんじゃないのか」
いきなり何を言い出すのかと伊吹は呆れ顔だ。

「いいや出来る。リーダーを変更する方法がたった一つだけな。黛も
それを狙ってたんだ。ククツ、危うく下手を打つところだったぜ」

「何一人で納得してんのさ。説明しろよ」

「リーダーは正当な理由なく変更は出来ない。テメエが言いたいのは
このルールのことだろ？」

「ああ。要は一回決めたリーダーは変更できないってことだろ？ だ
から教師はリーダーは慎重に決めろって言ったんじゃないか」

「だが、もしリーダーが体調不良で試験が続行不可能になった場合は
どうなる？」

「そりゃあ……リーダーがリタイアしたってことで、リーダー不在に
なるんじゃないのか？」

「体調不良によるリタイアは正当な理由にはならねえのか？」

「——っ！ なるほどね……そういうことか」

伊吹は龍園が言いたいことが分かったようで不敵に笑った。

「黛はわざとテメエにキーカードを盗ませた。その上でアイツが別の
人間にリーダーを託してリタイアする。そうなればアイツのキー
カードを見てリーダー当てを行ったクラスは不正解でマイナス50
だ。なんせ、既にリーダーは黛じゃねえんだからな」

「それがアイツの奥の手だったってことか……じゃあなんでアンタがリタイアする必要があるわけ？」

「簡単なことだ。アイツは俺が情報を全て集めた後、全員をリタイアさせてくると読んでる。島に残るのは俺一人。必然的に俺がCクラスのリリーダーだという予想が立つ。もしこの場合、最終的なポイントはどうなる？ 現時点で俺はAクラスとBクラス、そしてDクラスのリリーダーを知っている。だがDクラスの情報は更新されて不正解になる」

その質問に、伊吹は暫し考えた後に答えを出した。

「…… AとBで稼いだボーナスが全部で100ポイント。でもDクラスのリーダーを間違ってマイナス50ポイント。そして、こっちがリーダーを当てられてマイナス50ポイントで0になる」

「そういうことだ。危うく俺はあの野郎に嵌められるところだったってわけだ。そこで予定変更だ。今回Dクラスのリリーダー当てはしねえことにする。そしてリーダーを伊吹、テメエに変更する。するとどうなる？」

「最低でも100ポイントは保証されるし、Dクラスはリーダーを間違ってマイナス50になる」

伊吹の出した答えは正解だったのか、龍園は満足そうに口角をあげた。

「このことAクラスには」

「教えるわけがねえだろ。教えてやる義理もねえ」

「そう言うと思った」

「つつーわけだ。さっさと船のところに向かうぞ」

「分かった」

二人は浜辺に設置されている教員用の待機テントに向かい、龍園はリタイアを表明した。

教員は何か言うことはなく肅々と作業を行なった。

結果、龍園はリタイアとして扱われ、代わりに伊吹の名前の入ったキーカードが再発行された。

この瞬間、Cクラスのリリーダーは伊吹へと変わったのだ。

「清隆」

「ああ、どうだった？」

午後7時30分。事前に待ち合わせしていた場所で綾小路と柚椰は落ち合っていた。

理由は一つ。Cクラスの最終的なリーダーが誰であるかを伝えるためだ。

「Cクラスのリーダーは伊吹に変わったようだね」

「つまり龍園は気づいたってことだな」

「そうなるね。じゃあ後は頼んだよ」

「分かった」

二人は短く言葉を交わし、そのまま一緒に浜辺まで歩いていった。数分後、Dクラスのリーダーが柚椰から綾小路へと変更された。

島での生活は終わりを告げ、彼は嗤う。

8月7日。長かった無人島生活がようやく終わりを迎える。

試験終了時間とされていた正午になったが、周囲に教師たちの姿はない。

『ただいま試験結果の集計を行っております。暫くお待ち下さい。既に試験は終了しているため、各自飲み物やお手洗いを希望する場合は休憩所をご利用下さい』

そんなアナウンスが流れ、生徒たちが一斉に休憩所として設けられている仮設テントへ集まっていく。

そこにはテーブルや椅子も用意されており、十分な休憩が取れるようになっていた。

「綾小路君、お疲れ様。この一週間いろいろありがとう」

平田が労いの言葉と共に、2つ持っていた紙コップのうち1つを綾小路に渡した。

「礼を言うのはこっちだ。平田が表立ってクラスを引っ張ってきたんだ。お前こそおつかれ」

「ううん、僕だけの力じゃないよ。後半は櫛田さんが頑張って纏めていたし、それに……」

平田はそこで心配そうに船の方を見る。

「黛君がいなかったら……きつと無事にここまでくることは出来なかったと思う」

彼は昨夜リタイアした柚椰のことが気にかかっているらしい。

夜の点呼の際に、茶柱先生の口から柚椰がリタイアしたということがクラスに伝えられた。

それを聞かされたとき、クラスは大いにざわついた。

リーダーを担う柚椰の突然のリタイア。

前日のこともあってか彼の真意が読めないクラスメイトは混乱していた。

結局明確な答えは出ないまま日は明け、試験終了を迎えたのだ。

「綾小路君、 黛君は……」

「ああ。アイツのことだ。別に気にしてないからって言いそうだな」

「そうだね」

「なあ、お前ら何の話してんだ？」

「そうそう、 黛がどうしたって？」

二人の会話が聞こえてきたのか、 須藤と池が寄ってきた。

その声が思いの外大きかったからか、他のDクラスの面々も平田の方へ視線を向ける。

「綾小路君」

平田は隣にいる綾小路の顔を伺ったが、彼が頷いたためクラスメイトを見渡す。

「黛君はリーダーとして、文句無しの働きをしてくれてたってことだよ」

「平田君どういうこと？」

女子の中から疑問の声上がるが、それに対して平田は微笑みをもって応える。

「もうすぐ分かると思うよ。それにしても……Cクラスは彼女一人みただね」

平田は唯一残っているCクラスの生徒である伊吹の方へ視線を移した。

伊吹もちょうど彼らの方を見ていたのか、視線ががち合うや否や不敵に笑って近づいてくる。

「よう。お互い無事に終わってよかったな」

伊吹は休憩所で貰ってきたと思われるスポーツドリンクの入った紙コップを片手に白々しくそんなことを言う。

昨日起きた放火の犯人が目の前の女子だと疑っているDクラスの面々は近づいてきた彼女を睨んでいる。

「もう気づいてると思うけど、私はお前らの中にいるリーダーを探るために潜り込んだスパイさ。どうやって潜入してやろうかと思ってたけど、その馬鹿のおかげで楽に潜り込めたよ。ありがとな」

伊吹はチラリと山内を流し目で見ながらDクラスを嘲笑した。
暗に山内の所為だと教えるような口ぶりに一同の視線が山内に集中する。

クラスメイトが山内を責めるより先に、平田が伊吹と向き合った。
「つまり君は初日の夕方から昨日の夕方まで、ずっと僕たちを探ってたってことかい？」

「ああ、その通りだ。リーダーはアンタか櫛田、それか堀北じゃないかって読んでただけけど……昨日黛から教えてもらったのさ。Dクラスのリーダーが自分だつてな」

衝撃の発言にDクラスは困惑した。

伊吹の言っていることが本当ならば、柚椰は自分から彼女にリーダーの情報を渡したということなのだから。

「ちよつと待ちなさいよ！　じゃあなに？　黛の奴、クラスを裏切つたつてわけ!？」

一昨日から柚椰に対して悪感情を抱いていた軽井沢はヒステリックに喚く。

彼女だけでなく、他の面々もどういふことかと混乱している。

「私も正気か疑ったよ。でも、アイツはそうせざるを得なかった、つてことさ」

「どういふことよ!？」

「ちよつどいいタイミングだからお前らに教えてやるよ」

伊吹は彼らを見渡すと、ニヤツとした笑みを浮かべて真実を口にする。

「一昨日の朝に起きた下着泥棒の件。あれやったの私だから」

「——!？」

またしても放たれた爆弾発言に一同は衝撃を受ける。

このタイミングで真犯人が明かされたのだから無理もない。

「お前らを混乱させてリーダーを探りやすくするためにやった。尤も、最初に下着を忍ばせたのは黛の鞆じゃなくてソイツの鞆だったんだけどな」

伊吹は池を指差しながら笑った。

自分に罪を着せようとしたのが伊吹だと分かり、池は彼女を睨む。「これが黛の提示した条件さ。リーダーの情報を与える代わりに、私がやったことを告白する。鼻で笑うような条件だったけど、アイツにとつては重要だったんだろ。どっかの誰かさんたちが勝手に自分たちの退学を賭けてたんだからな」

「——っ！」

その言葉に平田と櫛田は息を呑んだ。つまり柚椰がこんな取引を持ちかけた要因は自分たちにあるのだと理解したのだ。

「じゃ、じゃあ、黛君は平田君と櫛田さんを守るために取引した、ってこと……？」

篠原が震える声で呟く。

その呟きに伊吹はおかしそうに笑った。

「泣ける話だよな。クラスの為にはその二人を退学にするわけにはいかない。要はアイツはお前らDクラスの為に冤罪どころか本当の罪を背負ったわけだ」

その言葉に一同は俯いた。

この結末を叩き出したのは柚椰だが、そうなってしまったのは結局のところ自分たちの所為なのだと言われたのだから。

「尤も、アイツも保険はかけてたみたいだけどね」

「？ 伊吹さん、それはどういう——」

平田の言葉は拡声器のスイッチが入る音によって遮られた。

音の発生源に生徒たちの視線が向けられると、そこには拡声器を持った真嶋先生が立っていた。

慌てて列を作ろうとする一年生たちを先生は手で制止させる。

「そのままリラックスして構わない。既に試験は終了している。今は夏休みの一部のようなものだ、自由にしてもらって構わない」

真嶋先生がそう言っても、生徒たちには緊張が広がっており既に雑談する雰囲気ではなかった。

「この一週間、諸君らはよく頑張った。クラスによって取り組み方は様々だったが、総じて素晴らしい試験結果だったと我々は思ってい

る」

その言葉に生徒たちから安堵が漏れる。

ようやくと試験が終わったのだと実感が湧いてきたのだろう。

「ではこれより、特別試験の結果を発表する。尚、試験に関する質問は一切受け付けていない。各々結果を真摯に受け止め、分析し、次へ活かしてもらいたい」

「よかったな。アンタらDクラスは黛のおかげで命拾いしたんだぞ」「どういうことかな?」

伊吹が小声で囁いた言葉に平田が反応した。

「アイツはなにも、ただ体調を崩してリタイアしたわけじゃないってことだよ」

「——っ!? それってどういう」

「結果が出れば分かるさ」

各々自分たちのクラスの結果が気になっている中、真嶋先生の声が響く。

「ではこれより特別試験の順位を発表する。最下位は——Cクラスの50ポイント」

「ふん……」

最下位という結果を受けながら、伊吹はなんでもないように鼻を鳴らしている。

真嶋先生は淡々と発表を続けていく。

「続いて3位はAクラスの70ポイント」

その発表にどよめきが起こる。

誰もが予想していなかったであろう順位、そしてポイント。

最も驚いていたのはAクラスの頭である葛城だろうか。

彼は計算していた数値との誤差に戸惑いを隠せていなかった。

そして残るはBクラスとDクラスだが、ここで真嶋先生の動きが硬直した。

しかしすぐに言葉が再開される。

「2位はBクラスの230ポイント。そして1位は……Dクラス。2

52ポイントだ。以上で結果発表を終わる」

この事態に誰より混乱していたのはDクラスの生徒たちだろう。驚いていないのは事情を知っている平田と綾小路だけだった。

「どういうことだよ葛城ー」

Dクラスがいる休憩所とは反対側の方から怒号が飛んできた。

見ればAクラスの生徒たちが葛城を取り囲んでいる。

「何かがおかしい……どういうことだ……」

葛城も状況を飲み込めていないのか、頭を抱えて顔面蒼白といった有様だ。

そんな彼を伊吹はつまらなそうに見ていた。

「ふん、アイツも所詮はあの程度か……」

最早ここにいる意味はなくなつたとばかりに、伊吹は船の方へ向かってさつさと歩き出してしまった。

Dクラスも結果に対して混乱している中、平田がなんとか宥めて船へと誘導するとその場を離れた。

「まさかDクラスが1位とは。今回は大白星、かな？」

船の中でモニター越しに結果を見ていた柚椰はカラカラと笑っている。

彼がいるのは船内にあるカフェの一角。

そこでコーヒー片手に試験結果の中継を見ていた彼はこの結果に満足そうにしていた。

「やってくれたな黛」

柚椰がいるテーブルにやってきたのは昨夜リタイヤしていた龍園だった。

彼は配下を連れてやってくるや否や、空いている席にどっかりと腰掛ける。

周りにいる取り巻きは椅子が空いていないからか立って待機して
た。

「やあ龍園クン、試験お疲れ様。まあお茶でも飲んでゆっくりしてい
くといい」

柚椰はウェイターを呼ぶと龍園の分のコーヒを追加で頼んだ。

数分と経たずにコーヒーが運ばれると、龍園はグイッと飲み干し
た。

「テメエは読んでやがったってことか。俺がテメエのカラクリに気づ
いて伊吹にリーダーを変えらることを」

龍園は試験結果からおおよその予想を立てていた。

Cクラスの結果が50ポイントだったことが決定打だったのだろ
う。

「正解。俺がリーダーだと知れば、君は必ず洞察するだろう。そして
ルールの穴を突けばリーダーを変えることが出来るということに気
づく。仕掛けに気づいた君はDクラスを標的から外し、逆にこちらを
出し抜く為に同じ方法で伊吹にリーダーを変えるはずだ。君が俺の
やってくることに気づいたように、俺も自分の仕掛けに君が気づくと
信じていたのさ」

「リーダーは俺か伊吹の二択。テメエは後者に賭けたってわけだな」

「そういうことだね」

「だが解せねえな。Aクラスのポイント結果を見る限り、テメエはB
クラスにも情報をリークしてやがった。これは俺との契約違反じゃ
ねえのか?」

龍園はニヤニヤと笑いながら柚椰の行いを指摘したが、それに対し
て柚椰はカラカラと笑った。

「いいや? 俺はBクラスと取引をしていないよ。ただ雑談をしてい
た流れでうっかり口を滑らせてしまっただけさ。つまり君から得た
情報を対価とした取引はしていないから、君との契約にも違反してい
ない」

その返答が予想通りだったのか、龍園は別段苛立つこともなく腕を
組んだ。

「まあいい、Aクラスが無様を晒したのは葛城の自業自得だからな。俺には関係のねえ話だ」

「君も大概悪い男だね」

「テメエには言われたかねえな」

互いにニヤツとした笑みを浮かべて笑い合う二人。

その光景に龍園の取り巻きたちは身震いした。

「俺はもう行くぞ」

「おや、もういいのかい？」

「テメエと仲良く茶を囲むのは御免だからな」

龍園は席を立つと、取り巻きを連れてその場を去ろうとした。

「じゃあな。次はもつと楽しい取引を望むぜ」

「こちらこそ。今後ともご贖員に」

最後に言葉を交わし、二人は別れた。

試験は終了となり、解散となった一年生たち。

船は2時間後に出発となるらしく、海で遊んでいくも、船で休むも自由となった。

「やあ諸君。1週間の無人島生活はどうだったかな？」

船のデッキでDクラスの生徒たちを出迎えたのは、ドリンクを片手に持った高円寺だった。

「てめ高円寺！ お前のせいで30ポイント失ったんだからな！ 分かっただろか！」

「落ち着きたまえ池ボーイ。私は体調不良で寝込んでいたのだ。仕方ないだろう？」

ツヤツヤした肌でいかにも健康的な状態でそんなことを言っても説得力は皆無だ。

一層男子たちはやいのやいのと高円寺を責め立てる。

そんな中、同じくリタイアしていた柚椰が一同の前に現れた。

「皆、お疲れ様」

「ありがとう。黛君もお疲れ様」

先んじて平田が柚椰へ礼を述べる。

それによって先ほどからの疑問がクラスから噴き出した。

「つーかマジでどうということなんだよ！　なんで俺らが1位なわけ？」

「そうそう！　一体どういうわけか全く分かんねえ」

「ねえ、さつき伊吹さんが言ってた……」

「保険って……まさか」

「多分それは黛君が答えてくれるよ。そうだよね？」

「うん、流石にここで説明しないと皆納得してくれないだろうからね」

平田から話を振られた柚椰は仕方ないというようにクラスを見渡す。

「今回俺がやったのは大きく分けて二つだ。一つは他クラスのリーダーの把握。そしてもう一つは一昨日の事件の真相を明かすこと。ここまではいいかな？」

「うん、さつき結果発表の前に聞いたよ……柚椰君、私と平田君のために伊吹さんと取引したんだよね……？」

「事件が有耶無耶になったら僕たちが責任を取るって勝手に言ってしまったから、黛君はなんとしても伊吹さんに告白させなければいけなかったって……」

柚椰にそんなことをさせた責任を感じているのか、櫛田と平田は俯いていた。

「クラスの中心である二人が抜ければ、今後上のクラスに上がることはおろか他クラスから好き放題に狙われる可能性があったからね。まあ俺も自分の無実を証明する為にもこれは仕方なかったことだから気にしていないよ。問題はその後だ。伊吹にリーダーを教えるしまったら、Dクラスはリーダーを当てられてマイナス50ポイントのペナルティを受けるはずだった」

「そうそれ！　なんかポイント増えてるしマイナスになった感ねえんだけどどういふことよ……」

池の問いに一同も頷く。

「これは簡単なことさ。リーダーを変える方法が一つだけあったということだよ。リーダーは正当な理由なしに変更はできない。でも、リーダーが試験続行不可能になれば、必然的に他の誰かがリーダーをやらなければならぬんだ」

「——っ！なるほど、リタイアは正当な理由になるってことだね？」

平田の言葉にクラスメイトたちは目を見開いた。

隠されていた奥の手を知り、それにいち早く気づいた柚椰に驚いている様子だ。

「そう。リーダーを当てられればマイナス50。でもリタイアすればマイナスは30で抑えられる。差にしてみた20でも、伊吹に渡した情報によるデメリットは僅かに軽減できるんだ」

「しかも情報を渡した相手のCクラスは、リーダー当てを間違えてマイナス50のペナルティ。一見すると裏切り行為に見えたそれは、むしろCクラスに仕掛けた罠だったってことかしら？」

柚椰が対価として情報を与えたと推理していた堀北はようやく合点がいったような顔をしていた。

彼女と同じように、他の女子たちも柚椰の行動の真意に気づいたようにうで潤んだ瞳を向けている。

「そういうことだね。あとは俺が残しておいたAクラスとCクラスのリーダーの情報で得られるボーナスが100ポイントあった。マイナス要因は高円寺と俺のリタイア、そして初日に購入した物資の分と合わせて170ポイント。残っていた130ポイントにリーダー当てるボーナス100と占有ボーナスを足せば、最終的なポイントは252ポイントになる。結果、見事に全クラスを抑えて1位。大勝利だね」

「何から何まで全て柚椰君がやってたってことなのね……」

「いや、俺一人ではここまでの結果にはならなかったよ」

堀北の言葉を否定し、柚椰はクラス全員に目を向けた。

「鈴音や桔梗や平田は勿論、健や池と山内も俺を信じてくれたんだろう？ 他の皆も俺を信じている彼女達を信じることで纏まってくれ

た。これは俺にも予想外な展開だったよ。元々は俺が犯人だと全員に信じ込ませて、俺という敵を前に団結させることで強引に残りの日数を乗り切らせるつもりだったからね」

「見縊らないでほしいわ。私が柚椰君を犯人だと思うわけないじゃない」

「そうだよ！ 柚椰君のことはよく知ってるもん」

「黛君がクラスを想ってくれていることを、僕たちはちゃんと知っている。だから君が犯人じゃないってことも、必ず真犯人を見つけてくれることも信じるのが出来たんだ」

「つーか馬鹿にすんなよ。俺らもお前を犯人にして丸く収めるような奴じゃねえ」

「ほんとほんと。つか、マジでサンキュな？ あのととき黛が助けてくれなかったら俺が変態扱いされてたんだし」

「確かに寛治だったら信じる信じない以前にそのままお縄だったもんな」

「春樹テメエ！ 俺のこと犯人だって真つ先に疑ったの忘れてねえからな！」

「日頃の行いが悪いからだろうよ！」

「お前に言われたくねえんだよ！」

気がつけば二人で言い争いを始める池と山内。

しかしその表情は穏やかで、一目でじゃれ合いだとわかるものだった。

普段と変わらないやり取りに周りの雰囲気も幾分か柔らかくなる。

気がつけば彼らは互いに笑い合い、勝利を称えあっていた。

こうして波乱万丈だった特別試験はDクラスの勝利で幕を閉じたのだった。

「これで満足してもらえたと思っただいいですかね」

「そうだな。黛を協力者として選んだのは最善の選択だ。結果も申し

分ない」

クラスの喧騒から抜けた綾小路は、今回の成果について茶柱先生と話していた。

二人がいるのは人気のない船の後端。この会話は誰にも聞かれていない。

「一つ、聞かせてください。『あの男』がオレの退学を要求した話は本当ですか」

綾小路は目の前の教師と取引をした際に言われたことを思い返した。

彼が今回から本気を出さざるを得なくなった一番の要因がそれであつたが故に。

茶柱先生はその問いに対して思わせぶりに空を見上げた。

「……その話が本当だと言い切れる根拠はあるんですか？」

「私がお前のことを詳しく知っている。それが何よりの理由だろうか？ 他の教員達はお前の本当の実力を知らないし疑ってすらいないだろう」

彼女の言う通り、入試問題の違和感から綾小路を疑っている教員は彼女以外にいない。

現段階で確証はないが、綾小路は彼女が自分にまつわる何かを握っていることは理解できた。

「有名な神話の話はお前も聞いたことがあるだろう。イカロスの翼」
「それがどうかしたんですかね」

「イカロスは自由を得るために幽閉された塔から飛び立った。だがそれは父であるダイダロスが作らせた翼によつてだ。その翼も、飛び立ったのもイカロス一人の為したことではない。皮肉な話だとは思わないか？ 自由を求めているがその実、親の力を借りなければイカロスは飛べなかつた。まるでどこかの誰かにそっくりだな」

「理解できませんね」

「あの男……いや、お前の父親はこう言っていた。清隆はいずれ、自ら退学する道を選ぶとな。太陽に翼を焼かれ大海に落ちて死ぬイカロスと同じ結末を辿るということだ」

こちらを見透かすような物言いに対して、綾小路は背を向けた。これ以上話すことはないという意味表示だろう。

背を向け去っていく彼に対して茶柱先生は問いかける。

「これからどうするつもりだ？」

「先生も知ってるでしょう。イカロスはダイダロスの忠告や助言を守らない」

それは暗に父親の予言を無視するという、覆すという意味表示だった。

「試験結果は確認してくれたかい？」

「ええ、先ほどメールにて確認しました。ご苦労様です、黛君」

船内に設けられているカラオケルームの一室で柚椰は誰かと連絡を取っていた。

この会話を聞かれては困るため、彼はわざわざこの部屋を取ったのだ。

「しかし君も怖い女の子だ。まさか直接手を下さずに對抗馬を蹴落とそうと企てるとはね」

「ふふっ、以前お話しした通りですよ。元々私は好機さえあればいつでも葛城君を蹴落とすつもりだったんですから」

柚椰が通話している相手はAクラスのリーダー格の一人、坂柳有栖だった。

「真澄さんから得た情報を使ってBクラスとCクラスにリーダーを当てさせる。加えて貴方の作戦によって葛城君はリーダー当てを失敗しました。結果、堅実に事を進めようとした彼の目論見は完全に潰された。今回の試験はAクラスの惨敗ですね」

「残しておいたポイントの内殆どを、彼は他クラスからの攻撃と自身の自爆によって失ってしまいました。今後Aクラスは荒れるだろうね。なにせ君が不在の間に彼はAクラスを危険に晒してしまったのだか

ら

「そう、何を隠そう柚椰は坂柳から依頼を受けてこの試験に臨んでいたのだ。」

「目的は単純にして明快。葛城率いるAクラスを敗北に導くこと。」

「その為に坂柳は自身の配下である神室真澄を柚椰へ情報を流す橋渡しとして当てがった。」

「初日の段階で柚椰は彼女からAクラスのリーダーの情報を得ていたのだ。」

「後はBクラスとCクラスにも情報を流し、全クラスで以ってAクラスをリーダーを当てに行く。」

「150ポイントのマイナスを喰らったことは試験結果を見れば一目瞭然。」

「葛城がリーダーを守れなかったということはすぐに分かるだろう。そうなれば彼への信用と信頼は大きく落とされることとなる。」

「坂柳の狙いはそこだったのだ。」
「彼女は自分のクラスの勝利よりも、対抗馬である葛城を蹴落とす事を選んだのだ。」

「約束の報酬はこの後すぐに振り込ませていただきます。リーダー当てるの失敗による追加報酬も加えさせていただきますね」

「いいのかい？ 元々かなり高額報酬だったはずだけど」

「いえいえ、これは黛君の実力への正当な評価です。今後とも、貴方は良い関係が続けさせていたいただきたいですね」

「こちらこそ。俺はAクラスのリーダーは君以外いないと思っているからね」

「ありがとうございます。では、またいずれ」

「ああ、ちよつと待ってほしい。君に良いお知らせがあるんだ」
「なんですか？」

「柚椰なニヤリと笑みを浮かべると、その先を口にした。」

「綾小路が動き出したよ。彼は自身の身の安全を対価として、Aクラスに上がろうとしている」

「……なるほど、面白いですね」

「彼は退学させられることをなんとしても避けたいんだろうね。まさか彼がこの学校を選んだ理由が俗世から隔離されることだったとは。彼がそうまでしてここに拘る理由に君は何か心当たりがあるかい？」
「ええ、一つだけ。彼がこの学校に逃げてきた理由に覚えがあります」
「まあいいさ。理由はさておいても、彼がどう動いていくのかは俺も興味がある。君も見たいんだろう？ 彼がこの実力至上主義の世界でどう足掻くのか」
「ふふっ、そうですね。綾小路君が本気になってくれれば、私も少しは楽しめそうです」

「じゃあまた、今後ともご贔屓に」
「ええ、では」

そこで通話は切れ、一瞬の静寂が室内に広がる。

数分後、ポイントが振り込まれたことを確認した柚椰は室内に居たもう一人の人間に目を向けた。

「さて、では君にも報酬を払わなければいけないね——」

「——漣ちゃん」

「……ほら、私の番号。さっさと振り込めよ」

声をかけられた相手、伊吹漣は端末を取り出すと自分の番号を表示させて柚椰に渡した。

彼はそれを確認すると、事前に交わした契約通りにポイントを振り込んだ。

「君が最終的なリーダーを教えてくれたおかげで、Dクラスはさらにポイントを稼ぐことができた。尤も、Cクラスはポイントを半分失ってしまったが」

「たった50ポイントだ。それくらい後でいくらでも巻き返せるだろ。じゃなきや龍園も所詮はその程度だったってだけの話だ」

彼女の返答がおかしかったのか柚椰は微笑みを浮かべながら座席

に身体を預ける。

「君は見定めるといい。彼がこれから先、坂柳有栖を喰い殺せるだけの器なのかどうか。尤も、件のお姫様は一人の男にご執心のようなが」

「アンタも坂柳も、随分と綾小路を買ってるんだな。それほどの男なの?」

「僕の想定では、今学年の最終的な局面は坂柳有栖と彼の一騎打ちになるだろう。それは彼の実力を考えてもそうだが、彼が自分の居場所を守る為にはそうするより他にない。Aクラスに上がることが目標であるならば、いずれ二人が衝突することは明白だ」

「アンタはどうするつもりなの? アンタのことだ。単なる三つ巴にもっていくわけじゃないんだろ?」

「君は聡いね。いや、僕のことを理解してくれていると考えたほうがいいかな?」

「心底不本意だけどな」

不愉快そうに顔を顰める伊吹に対して柚椰は心底楽しそうだった。

「僕がやることは二人を取り巻く環境を最大限掻き回すことだ。坂柳の方はそう遠くないうちにAクラスを束ねて女王になるだろう。綾小路の方は……少なくとも、今の環境に留まらせるつもりはない。顔のない英雄などという形で生き残れるほど、この箱庭は単純には出来ていないのだから。必ずどこかで尻尾を掴まれ、民衆の前に引き摺り出されるだろう。大衆の目に晒されたとき、彼はどのような顔をするのか。実に興味を唆られる」

「龍園も言ってたけど、やっぱりアンタはクソ野郎だよ」

「君に彼の存在を教えたのもそのためだよ。他のクラスのリーダー格にも彼の存在はそれとなく匂わせてある。一之瀬帆波も、龍園翔も……いずれ綾小路清隆という眠れる獅子に辿り着く。そうなったとき、果たして彼はどう動くのか。実に面白い演目だと思わないかい?」

その問いに伊吹は何も言わない。

「心配は要らないよ。契約通り、君のことを匿えるだけの用意はして

おこう。万が一君が今のクラスにいられなくなったとしても、君が学校中を敵に回したとしても、最終的には勝ち馬に乗せてあげよう。それが仕事をこなしてくれる君への対価だからね」

「……まさかアンタとこんな風に関わることになるとは思わなかったよ」

「僕は嬉しく思っているよ。まさか君とこういった関係になれるとは。実に喜ばしいことだ」

「私はもう行くからな。龍園に感づかれると面倒だ」

伊吹は座席から立ち上がるとそのまま部屋を出ようとドアの前まで歩いていく。

「また何か頼むことがあれば連絡するよ。ああ、一応確認しておくが、僕との通話やメールの履歴はその都度削除しておくことだ。君と僕との関係を知られるのはまだ望ましくない。連絡先は先ほど覚えただろうから、何かあれば君の方からかけてきても構わないよ」

「ふん……」

柚椰の軽口を鼻で笑い、伊吹は部屋を出て行った。

伊吹が出て行ってから数分後、再びカラオケルームの部屋のドアが開いた。

室内に入ってきたのは柚椰に呼び出された櫛田だ。

「どうしたの柚椰君。わざわざこんなところに呼び出して」

「クラスの人間に聞かれるとまずいこと、と言えば分かるだろう?」

「ああ、そういうことか」

事情を理解した櫛田は柚椰の向かいの席に腰掛ける。

「まずはお疲れさま。今回君は誰よりも良い仕事をしてくれたよ」

「ありがとう。でも、私にとってもメリットが大きかったしwin-winじゃない?」

「そうだね。じゃあ一応聞いておこうか。クラスの方はどんな状況だ

い？」

その問いに櫛田は心底おかしそうに笑った。

「計画通りだよ。あのムカつく女は完全にその地位を失った。女子はほとんどが私の方に鞍替えしてる状態かな。本当、馬ツ鹿みたい！皆私が気遣ってあの女を一人にしてあげたと思ってたよ！アイツを徹底的に孤立させるのが目的だって知らずにさー！」

「彼女のプライドの高さが功を奏したね。プライドの高い彼女がああ局面でクラスメイトに頭を下げるはずがない。振り上げた拳は下ろせず、振りまいた敵意は引つ込めることは出来なかったんだろー」

「あえて声をかけて敵意を私や池たちに向けさせたのもラッキーだったよ。声をかければ自分も何か言われるかもって思えば誰もアイツに声をかけないもんね」

「結果、女子の力関係は完全に桔梗の独走状態になった。それどころか、男子たちも俺の意図に気づいた君と鈴音を信頼するようになったはずだ」

「まさか堀北が私のアシストをするとは思わなかったよ。それほどあの女にムカついてたってことかな？」

「聡明な鈴音なら俺の自白が穴だらけだということにはすぐに気づくと読んでいたからね。俺が自分の意思で罪を被ったことを男子全員が知っている以上、鈴音がその可能性に行き着いた時点で彼らは彼女を信頼するだろう。そして同じく、俺を信じるという方針を取った君にも彼らは全幅の信頼を置く。結果、今回の試験で君と鈴音はクラスメイトから信頼されるポジションを確立できたわけさ」

「全部が全部、柚椰君と私が仕組んだ予定調和。でもびっくりしたよ。まさかああるとき、もう柚椰君は伊吹さんが犯人だって気づいてたなんてね」

櫛田は5日目の朝、柚椰が自分に囁いた言葉を思い出した。

彼が伝えた言葉、それは『下着を盗んだのは伊吹だ』というもの。つまり彼はあの時点で犯人の見当をつけていたのだ。

「一番可能性が高かったのが彼女だったからね。尤も、もしも別の人間が……それこそDクラスの誰かが真犯人だったとしても、俺は伊吹

を犯人に仕立て上げるつもりだったよ」

「どういうこと？」

「伊吹の目的を達成させられるのは俺だけだ。つまり俺がキーカードを渡すことを条件に彼女が罪を被ることを強いることも出来たということさ」

「——！ そっか、どの道伊吹さんにそれを拒否する選択肢はないもんね」

「その通り。そして今回の事件で、俺は大きなメリットを得ることが出来た」

柚椰が言うメリットとは何かを櫛田は既に分かっていた。

それを証拠に、彼女はニヤツと口角を上げる。

「柚椰君はクラスのためには自分が犠牲になることを厭わない人だつてイメージを刷り込ませたんだね？」

「そう。下着泥棒の汚名を背負ってでもクラスを纏めさせようとした。加えて君と平田というクラスの軸となる存在を守るために裏切りという罪さえ背負った。そして結果としてDクラスを勝利に導いたのは、その裏切り者と思われた俺だった。これで俺もDクラスの中で確固たる地位が築かれたというわけさ」

「本当、私なんかよりよっぽど怖いよ柚椰君は……」

ここに至るまでの全てを目の前の男は計算尽くでやってのけた。その事実と恐ろしさに櫛田は改めて彼が規格外の悪人だと理解した。

「ここから先、もし俺が不穏な動きを見せていたとしても、悪行が露見したとしてもクラスの人間は疑う。『もしかしたらまた彼は誰かの罪を被っているんじゃないか』、『もしかしたらクラスのために何かしているんじゃないか』、『彼が本当にクラスを裏切るわけがない』、『彼が悪い人間のはずがない』と、知らず知らずのうちに俺を容疑者から外してしまう。たとえ目に見える決定的な証拠であっても疑ってしまうようになるのさ。無意識の信頼。根拠のない信用が蔓延した環境は俺にとって実に動きやすい」

一通り語り尽くした後、彼は天を見上げた。

「これから先、もっと面白いことになると思うよ。火種は向こうからこちらにやってきてくれるはずだ」

柚椰は静かに笑い、櫛田に語り聞かせる。

「あとはそれを好き勝手に、四方八方に放り込んでやればいい。敵味方関係なく、例外なく火種は撒き散らされる。火の海と化した環境で、彼らがどう行動し、何を魅せてくれるのか——」

「——考えただけで、とてもワクワクするじゃないか」

幕間：彼は羽化した。

「じゃあ今からこの前やったテストを返すぞー。名前呼ばれたら取りに来るように」

男性教師の言葉に教室から悲喜こもごもの声が響く。

生徒たちの声を他所に、教師は答案返却を恙無く進めていく。

一人また一人と答案が返され、喜ぶ者や落ち込む者で分かれていった。

そうしてまた一人、教師から答案を返される少年がいた。

教師は少年の顔を見ると笑顔を浮かべ、手に持った答案を差し出した。

「今回も満点だ。頑張ったな六条！」

「ありがとうございます」

六条と呼ばれた少年は特に喜びを見せることはなく淡々と礼を述べた。

それは別段特別ではないように、まるでそうあることが当たり前であるかのような態度だった。

その態度に教師は不愉快になるどころか寧ろ感心すらしていた。

結果に一喜一憂することはおかしなことではないが、目の前の少年はまるで心を乱さない。

今回のテストはそれまでのものより一段難しいものだった。

そのため今まで好成绩を収めていた生徒ですら点数が振るわなかった。

しかし目の前の少年はどうだろうか。

彼は今まで通り、これまでと全く同じように一切の不正解を出さずに満点を取った。

これまで以上に少年がテストに向けて努力したのは明らかだった。にも関わらず少年はこの結果に浮かれる素振りが全くない。

勝って兜の緒を締めよとはよく言ったものだ、と教師はますます少

年が気に入った。

「これからも頑張れよ。と言つても、六条ならこの先ずっと満点なんじゃないか？」

「いえ、これからも油断せずに頑張るつもりですよ。僕も何もしないで満点を取るなんて出来ませんから」

「はは、お前は真面目だな！　だが良い心がけだ。先生も応援してるぞー！」

「ありがとうございます」

少年は席に戻り、教師は生徒への答案返却を再開した。

「六条はスゲエよなー。今回も満点だろ？」

「だなー。つか、今回マジでムズかったよな？　なんでまた満点なんだよ」

テスト返却が終わった後の休み時間、少年の周りにはクラスメイトが集まっていた。

少年とよく関わっている男子たちは今回も少年が満点を取ったという事実には笑っていた。

彼らにとつて少年のそれは最早驚くことでもなくなっていた。

最初こそ一問も間違わない少年の凄さに驚いていたものの、今ではそれが当たり前前の事実として根付いていた。

「いつも通り、日頃の復習を欠かさなかっただけだよ。僕だって何もしないで満点を取れるほど天才じゃないさ」

「出ました日頃の復習だけ！　六条はいつもそれしか言わねえよなー」

「それで満点取れりゃあ苦労しねえよー。頭の出来だろやっぱ」

「いいよなー、俺も肖りたいわー」

「分かる」
少年の発言にこれまたいつも通りだと男子二人が苦笑いして茶化す。

特別なことは何もしていないと、日頃の小さな努力だけだといつも

少年は口にする。

しかし本当にそれだけで結果を出し続けられるわけがないと男子たちも思っているが故に、尚更彼の地頭の良さに感心半分呆れ半分といった反応を示していた。

彼らの他にも教室では少年を遠巻きに見ている者が散見された。

「本当凄いやね六条君って……何か特別なことやってるのかなー？」

「塾行ったりとか家庭教師とかは居ないって言ってたよ？」

「じゃあ本当に独学でつてことかなあ……いいなあ羨ましい」

「ねえ、今度一緒に勉強教えてもらおうよ！」

「いいね！ 六条君優しいからきつと教えてくれるよ！」

そんな話し合いが繰り広げられていることを本人は知ることはない。

クラスメイトたちは少年の非凡な才に肖ろうとする者や少年の快進撃を一つの娯楽として楽しむ者など様々だった。

しかし当の本人たる少年は……

「(退屈だ……)」

その心に一抹の陰を落としていることを、誰も知る由もなかった。

「学校はどうだ？」

「問題ありません。今日返却されたテストもいつも通り満点でした」

その日の夜、少年は父親へ学校生活について伝えた。

父親との夕食は、夕食と言う名の報告会だった。

少年からの報告に父親は喜ぶこともせず、ただ当たり前であるように鼻を鳴らした。

「当然だな。六条の男として、お前は常に頂点でなくてはならない。勉学においても運動においても、何においてもだ」

「ええ、分かっています」

「引き続き手を抜かずにやりなさい。私の息子ならば常にトップであり続けることは当たり前だ。くれぐれも、私を失望させてくれる

な」

「はい」

父親は少年に激励の言葉を贈るでもなく、褒めることもしない。ただこれまで通りトップを取り続けることを命じるだけ。

トップであることは当然であり、当たり前であると少年に言い聞かせるのみだった。

それが我が家系の男としてあるべき姿なのだ。

自分の息子であるならばそうあるべきだと。

そんな父親からの命令に少年はただ首を縦に振った。

少年もまた、父からの言葉を素直に受け入れていた。

だがしかし、少年の心には……

「(退屈だ……)」

少しずつ、少しずつ淀みが広がっていた。

「まあまあ。あなた、まずは満点だったことを褒めて差し上げたらいかがですか？」

いつもは父と少年のみだった夕食の席に、その日はもう一人女性が相席していた。

女は少年の母親であった。

彼女の言葉に父親は片眉を上げる。

「これくらいは当然のことだ。褒めるに値することではない。私の息子なら出来て当然。寧ろこれで満点でなければ失望していたところだ」

父親は既に食事を終えていたからか、そこで会話を打ち切り席を立てて自室へ戻っていつてしまった。

夕食の席に残っているのは少年と母親だけ。

母親は父親が出て行くのを見届けると、少年に対して優しく微笑んだ。

「期待が大きすぎるとも困っちゃうわよね。あなたはこんなにも頑張ってるのに」

「僕は気にしないよ母さん。だから大丈夫さ」

「ふふっ、そっか」

少年の言葉に対して、母親はおかしそうに笑った。

「でも——」

しかしその笑みは——

「——そのわりには随分と退屈してるように見えるわよ？」

一瞬にして冷たい笑みへと変わった。

初めて見る母の表情に少年は背筋が凍るような寒気を感じる。

「っ！……母さん、どういうことかな？」

「あなたはずつと思ってるんじゃない？ 今の日常が退屈だつて。何をやっても出来てしまう。あなたがすることは何でも受け入れられてしまう。あなたが右を選べば周りも右を選ぶ。あなたが是とすれば周りもそれを是とする。人間が取り巻く世界が脆く、容易く、愚かに見える。まるで空虚な世界に自分一人放り出されているように感じている……あなたは気づいたんじゃないかしら？ 自分の中にある才能……支配者の才能に」

「……」

母の問いに少年は何も答えない。

否、答えられなかった。

彼女の言ったことは、少年にとってはまさにその通りだったのだから。

物心ついたときから少年はあらゆることに秀でていた。

勿論少年は努力を惜しまなかったし、手を抜いたことは一度もない。

端的に言えば、少年は課した努力に対して必ず結果が伴っていた。それは理屈で考えれば別段おかしなことではないだろう。

しかし、努力が必ずしも報われるわけではないというのは誰しもが知っている。

それは厳然たる事実として存在している。

頑張りが報われないことは往々にしてありえることで、それでも尚愚直に努力を重ねるのが人間という生物だ。

だからこそ努力が必ず報われるという少年のそれは、凡人から見れば異常と言う他なかった。

そして少年自身もまた、己が異常だということに気づいていた。

己に課した試練は、課された試練は必ず踏破することが出来る。

己を取り巻く周囲の人間は、こちらが何もしなくとも好意的な反応を示す。

それは対象が同期であつても、年下であつても、年上であつてもだ。

人間の感情というものの不確実性を、非論理的な性質を知識として知っているが故に、少年は目の前の事象があまりに出来過ぎていと理解していた。

出来過ぎている事象は、恒久的に続けば必然的にそれが当たり前となってしまう。

明らかに異常だというのに、誰もその異常に気づくことはない。

苦悩の末に少年は気づいたのだ。

異常なのは周囲ではなく、己自身だということ。

気づいてしまったが故に、少年の心には仄暗い感情が芽生え始めた。

自分が特別だと驕っているわけではない。

しかしながら少年は優秀であるが故に気づいてしまったのだ。

己を苛み、退屈な世界に放り出したコレが、自分の本性がどういった性質を備えているのか。

少年は気づいてしまったのだ。

その性質が故に、世界が虚構に見えてしまっているということに。

少年の沈黙を肯定と捉えた母の表情は慈愛に満ちた笑みへと変わった。

「隠さなくてもいいわ。それはおかしいことじゃないの。だって――」

「——あなたのそれはお母さん譲りだもの」

「えっ……」

何を言っているのか少年は理解できなかった。

それほどまでに母の言葉は衝撃だったのだから。

母は己の中にある異物に気づいていた。

それが影響して最近退屈を感じていることも。

全てを母は言い当て、その上でそれは自分譲りだと言った。

少年はそれを父親譲りだと無意識のうちに思い込んでいた。

父があのように厳格で己が血筋を誇っている以上、父もまた自分と同じ才を備えているものだと思っていたからだ。

「ふふっ、信じられない？　そうよね。あの人があだから、どうしてもあの譲りだっと思うかもしれないわ。私はあの人に見初められてこの家に嫁いできた……ってあの方は思ってるでしょうね。でも実際は逆なの。私があの人を動かしてこの家に入り込んだのよ」

「そんなことが……」

「あなたなら、それが不可能じゃないことは分かるわよね？　私と同じ『目』を持つあなたなら」

そう語る母の“目”はこれまで見てきた母親のそれとはまるで別人だった。

こちらの内面全てを剥き出しにされるような、全て見通されているような目。

見られたら最後、目を逸らすことを許されない。

心を掌握するような絶対者の目。

言葉一つで、指先一つでこちらを完膚なきまでに粉々にされるような恐怖を与える目。

その目で見つめられた少年は理解した。

目の前の女は間違いなく自分の母親であり、自分はその母の目を受け継いでいるのだと。

「母さんが、父さんを操っていたってことなのかい……？」

「そうよ。あの人は何も知らない。自分が何を妻にしたのか。あの人は確かに優秀だけれど、精々それまでの器でしかない。私のような怪物には遠く及ばない、ただの人間よ」

母の言葉が真実とするならば、父は母の本性を知らない。隠された才能を知らない。

今日この日、この時、母が少年に明かさなければ、この秘密は母だけのものだった。

父は何も知らず、ただ母の手で踊り続けるマリオネットだった。

もしこのことを少年が父に教えればこの家は崩壊するだろう。

しかし少年は、母の本性を知った息子は……

「へえ、そうなのか……」

愉悦に満ちた笑みを浮かべていた。

少年のその笑みを見て、母も一層笑顔になる。

「あなたならそういう反応をすと思うたわ。やっぱり私の子ね」

「母さんに言われて分かったからね。父さんも、所詮はそこらの石塊と変わらなかった。今の僕を形作ったのは父さんじゃない。間違いなく母さんなんだと分かったよ」

少年は嗤う。己を形作ったと思ひ込んでいる父の愚かさを。

目の前の怪物に踊らされている滑稽な人形を。

そして怪物の血を色濃く受け継いだ自分自身を。

「母さんは、どうして父さんと結婚したんだい？ まさか本当に愛していたわけじゃないんだろう？」

「ただの暇つぶしよ。たまたま街であの人を見かけて、たまたまちよっとそんな気分だったから近づいてみただけ。あとはただあの人が見望む言葉をかけ続けて、あの人が見望むような人間を演じ続けた。面白かったわよ？ あの人が見望む瞬間は」

「母さんは酷い人だね。父さんも不憫だよ」

「ふふっ、心にもないことを言うのね。笑いながら言っても説得力がないわ。それに……あの人は自分自身のことさえ知らない。あなたが自分の息子で、私との間に出来た優秀な子だと信じて疑わない。あの人は自分が持っている欠陥にさえ気づいてないのだから」

「欠陥？」

「いずれ分かるわ。あの人の秘密はあなたにも関係することなのだから」

今はまだ明かすつもりはないのか、母はそれ以上そのことについて触れることはない。

それを証拠に母は元々していた話に切り替える。

「あの人と結婚した理由だけど、今のあなたと一緒に。私も退屈だったの。だからちよつと変化を齎すためにあの人を使って色々してみただけのこと。退屈な日常に飽きたなら、何か変化を求めるのは当然じゃないかしら？」

「母さんはそれを父さんで満たそうとしたんだね」

母は父を愛しているわけではない。

愛したが故に結ばれたわけではない。

ただ日常に飽いていたから。退屈を感じていたから。

己の中に変化を齎すための余興。それこそが真実だった。

「それで、今話を聞いてあなたはどうかするのかしら。今のまま退屈な日常の中で生きる？ それとも……新しい生き方を見つけ出してみるのは？」

母の言葉は少年にとって青天の霹靂だった。

枯れきった日常の中に落とされた一滴の水。

このまま己の才を振るい、周りの人間を支配し続けることで王として君臨することも選択だ。

しかしそれは自分の周りを人形で固めることと同義だった。

少年はそれが退屈だと感じているが故に苦悩している。

母はそんな少年に対して新たな選択肢を提示したのだ。

「——っ！……僕は」

少年は言葉に詰まった。

それまでの日常から脱却したいという思いは存在している。

しかし、何をすれば、何を目的にすればいいのだろうか。

退屈な日常を変革するには、己の生き方を変えるには。

新たな軸を自分の中で形作らなければならぬのだから。

少年の困惑を察した母は微笑む。

「すぐに答えを出さなくてもいいわ。でも、考えが纏まったら母さんに教えて？ あなたがどういう道を選ぶのか、どんな生き方をするのか私も興味があるの」

「……分かった」

親子の会話はそこで終わり、二人は食事を再開した。

「僕はどうしたいのだろうか……」

部屋に戻った少年は思考していた。

彼が振り返っていたのはこれまでの日々、己が見てきた人間模様。

そして母から教えられた自分が備えている資質について。

母の言うことが真実ならば、少年は母と同様に人を支配することに長けている。

少年が自分の才能を十全に振るえば、今まで以上に少年は生きやすくなるだろう。

皆が少年に頭を垂れる世界で生き続ければ、父を超えることも容易いはずだろう。

しかし、少年はそんな未来に何一つ魅力を感じなかった。

約束された未来。容易い人生。そんなものを己は欲していない。

彼が求めたのは新しい生き方だ一つ。

己の才能の新たな使い道。

支配し従える以外の人間の使い方だった。

「もしかしたら、僕はまだ狭い世界しか知らないのではないだろうか」

少年の中に湧いたのはこれまでの自分の思考への疑問。

自分は身の回りにいる人間を、無意識のうちに見下していたのではないだろうか。

自分の周りにいる人間だけを見て、人間そのものを意思のない人形であると無意識のうちに定義していたのではないだろうか。

なまじ勉強に明け暮れた所為で、人というものの定義を先人たちから無意識のうちに受け売りしていたのではないだろうか。

少年が過去に読んだ書物の中にも、先人たちの歴史や思想が記されているものは存在した。

それを無意識のうちに自分の考えかのように受け入れていたのではないだろうかと省みた。

「笑えるな。愚かだったのは僕のほうじゃないか」

少年は己の愚鈍さに思わず笑いを漏らす。

自分は所詮、見聞きした事象と知識で以って世界全てを、人間全てを知った気になって悦に浸っていたに過ぎなかった。

それはなんと詰まらなく、馬鹿馬鹿しいことだろうか。

人間は所詮こうだ、と定義して悦に浸り、世界の真理を知った気になるなど愚かという他なかった。

ましてやその偶像を掲げて高みから見下ろすなど実に詰まらない生き方だろう。

「ならば、僕の新しい生き方は……」

考えた末に、少年は一つの答えを出した。

そして気がつけば、彼は母の部屋のドアを叩いていた。

「入って」

部屋の主たる母の許しを得て、少年は部屋へと入る。

母はベッド脇の椅子に腰掛け、入ってきた少年に笑いかける。

「答えは出たみたいね」

少年の表情から、母は全てを察したようだった。

「うん。だから母さんに聞いてほしいんだ。僕のこれからの生き方を」

「聞かせて？」

母は心底楽しそうに、少年の胸の内に耳を傾けた。まるで新しいおもちゃを見つけた子供のように。少年は短く息を吐き、やがて言葉を紡ぎ出す。

「僕は、人間を愛してみようと思う」

「へえ、それはどうして？」

少年の答えに対して母は興味深そうにした。

「人間は愚かしい。それは歴史を紐解けば分かる。甘い蜜を覚えれば容易くそちらに流れる。簡単に人に流される。母さんも分かると思うけど、自分より優れた者に媚び諂う人間や、お零れに預かろうとする人間もいる。どこまでも利己的で、愚直で、醜い生物だ」

「そうね。私が見てきた人間もそんな人間ばかりだったわ。愚かだからこそ真の支配者に簡単に掌握される。あの人も結局は私の本性を見抜けなかったのだからね」

「でも、こうも思うんだ。僕も、それこそ母さんもまだ知らない世界があるのではないかと。世の中には、僕や母さんが想像し得ない結果を見せる人間もいるのではないかと」

「でもそれは居たとしてもほんの一握りよ？ さしずめ砂漠の中に落ちた一粒の宝石。ましてやそれが存在するという確証もない。徒労に終わってしまうんじゃないかしら？」

「そうかもしれない。でも、だからこそ探す意味があると思うんだ。決して悪へと傾かない人間や、理不尽に立ち向かえる人間。全てを捨てても自分の信念を貫こうとする人間。支配者に抗い、ついには踏破すら成し遂げるような人間もいるかもしれない。そんな人間を僕は見つけてみたい。そんな人間を僕は開花させてみたいんだ」

「つまりあなたは人を成長させることに幸せを見出したってことかしら？ 善人も悪人も、全て纏めて愛した上で、人間に羽化を促す」

「そうなるね。石塊の中にも磨けば光るものがあるかもしれない。だから僕は、人間全てを心から愛してみようと思うんだ。愚か者も。悪

人も。凡人も。聖人も。全てが未知なる可能性を秘めていると信じて愛そうと」

「まるで神様の視点ね。人間が考える様なことじゃないわ」

「ふふっ、母さん、僕は自分のことを神様だなんて思っただけよ。こんなおかしい考えを持った神様が居たらたまらない。僕は根っこの部分まで悪人だ。生まれてから今日に至るまでも、そしてこれから先も、ずっとね」

少年は母へ想いの内を全て吐露した。

それが子が親へ示す最大級の親孝行であるかのように。

怪物の血を引く自分が示す、生き証であるかのように。

「そう、分かったわ」

少年の考えを聞いた母は短くそう答えた。

言葉こそ短いものだが、その表情はとても満足げなものだった。

それは紛れもなく、子の成長を喜ぶ母親の顔だ。

「今日はもう遅いわ。部屋に戻って寝なさい」

話は終わりだと言うように、母は少年に退室を促した。

少年は素直に従い、母の部屋を後にする。

「あなたは私の自慢の息子よ。 柚椰」

少年が出て行った扉に向けて、母は小さく呟いた。

数日後、少年の父親が他界した。

死因は交通事故による事故死。

父が運転していた車が赤信号を無視して交差点に進入し、トラックと衝突したのだ。

事故によって父は即死。現場検証でも不可解な点は見つからず、父

の過失が原因だと判断された。

母は亡き夫が犯した罪の責任を取って父が経営していた会社を解体し、相手方に多額の慰謝料を支払った。

支払った金額が莫大だったため事件は示談となったが、結果的に六条家は壊滅状態になった。

その数週間後、母は少年の下から姿を消した。

六条という名から婚姻前の苗字に改名した矢先の出来事だった。

少年もまた母と同じ苗字へ名前を変えていた。

学校から帰った少年を待っていたのは、人一人居ない家。

残っていたのは、母が秘密裏に蓄えていたであろう多額の貯金が入った通帳のみだった。

母が消えたことで、少年は一つの事実を理解した。

これまでのことは、全て母の企てによるものだったのだと。

父の交通事故も、恐らく母が仕組んだことなのだろう。

改名の手続きが恙無く行われたのも、事前に準備していたことだったからだろう。

母は自分と同じ苗字を少年に与え、その上で姿を消した。

少年がこれから先、自由に生きることができるよう。

少年が謳った人間讃歌を実現させられるように。

あの日の夜、少年との問答で母は理解したのだ。

少年がもう誰の手も借りる必要がないということ。

少年は理解した。

母もまた、自分と同じように人間の変化を楽しんでいたのではないかと。

息子が自分の言葉によって、どのような選択をするのかを見ていたのではないかと。

自分が出した結論に、母もまた至っていたのではないかと。

少年は理解した。

自分は間違いなく、紛れもなく母の子であると。

少年はその日から、新しい人生を歩み始めた。
己の本性を封印し、全ての人間を愛し始めた。

ある夏の日の出来事。 13歳の少年は黛柚椰となった。

彼らは第二の試験を課せられる。

無人島での特別試験が終わってから3日が経過した。高度育成高等学校の生徒たちを乗せた豪華客船では、何事も起きることなく平穏な時間が流れていた。

無人島でのサバイバルという過酷な試験を乗り越え、ようやく生徒たちは旅行らしい旅行を満喫できるようになった。

至れり尽くせりの設備が整った豪華客船、嫌なことも忘れられる夢のような旅行の最中。

うら若き少年少女にとっては何かイベントが起きても不思議では無い。

噂では既に幾つかカップルが誕生したとかしていないとか。

しかしそんなことは彼、綾小路清隆には無縁だった。

試験前と何も変わらない、孤独な時間が彼には流れている。

「いや、厳密には変わりつつあるが……」

目下綾小路が考えているのは己のこれからの身の振り方。

彼の入学時からの目論見は大きく軌道修正を強いられることになっっていた。

この学校を選んだ一番の理由である『外部との接触の禁止』。

それが今『ある男』……彼の父親によって根底から覆されようとしている。

その兆候があることを彼は担任である茶柱先生から告げられた。

そして現在、彼は自身の身の安全を保障してもらおう代わりにAクラスを目指すために尽力する契約を結んでいる。

先生の話が真実であるのか嘘であるのかを確かめる術は今の所ない。

綾小路には契約を呑む以外選択肢はなかった。

「だが、いつまでも言いなりになるつもりはない」

彼が茶柱先生に従っているのは、あくまで現時点での話に過ぎない。

い。

必要な情報が揃い次第、逆に自分の方から仕掛けることも彼は考えていた。

先手必勝。やられる前にやる。

先生が自分を退学にするつもりならば、こちらは相手を辞職に追い込むことも辞さない構えだった。

「(それに問題は他にもある……)」

目下の懸念材料は何も茶柱先生だけではなかった。

彼が思い返したのは先日の無人島での特別試験。

そこでDクラスは他クラスを抑えて見事1位という大健闘をした。

その勝利を表立って貢献したのが黛柚椰。

そして彼と協力してDクラスを勝利に導いた陰の立役者こそ綾小路だった。

二人以外にも、クラスの調和を維持した平田や櫛田。

柚椰の考えを汲み取ってクラスに思考することを促した堀北も勝利に健闘したと言えるだろう。

今回の試験で勝利に貢献したのは綾小路を含め全部で5人。

その中で綾小路が気になっていたのは3人。

クラスを導いた平田と櫛田、そして柚椰だ。

綾小路清隆という人間は根本的に人を信用していなかった。

クラスメイトたちを仲間と思ったことはなく、ましてや心配をしたこともない。

彼にとって何よりも優先すべきことは『勝利』ただ一つ。

最後に『勝つて』さえいれば、その過程で何が犠牲になろうと構わない。

綾小路にとって平田も、櫛田も、堀北も、そして柚椰も道具でしかなかった。

道具だからこそ、その道具に不可解な点があれば見過ごすことはできない。

この学校におけるDクラスとは落ちこぼれの集まりだ。

学力、知性、判断力、身体能力、協調性。

それらのステータスが全体的に低いか、あるいは極端な偏りがあるか。

あるいは人間性に致命的な欠陥を抱えている人間がDクラスに集められていることはこの数ヶ月で綾小路も理解していた。

須藤や池、山内は学力が低く、人間性はお世辞にも完成されているとは言えない。

堀北は文武両道ではあれど、協調性が絶望的であり、人間性にも難があった。それは高円寺も同様だ。

誰しもが何か欠陥を抱え、それが足枷となったが故にDクラスに配属された。

では先の3人はどうだろうか。

平田は成績優秀、スポーツ万能。そして協調性も高いクラスのリーダーだ。

櫛田も成績は上の中でスポーツも苦手というわけではない。協調性は言わずもがなだ。

これまで接してきた上で、2人には欠点らしい欠点が見つからないというのが綾小路の正直な感想だった。

強いて挙げるならば平田はクラスの和を意識しすぎるが故に、イレギュラーへの対応力が弱い。

その点においては櫛田は完全に平田の上位互換とも言えるほどに臨機応変な対応を特別試験では見せていた。

つまり櫛田は良く言えば柔軟性がある。

悪く言えば切り捨てるという決断が出来ないといったところだ。

特別試験5日目に起きた事件で起きた軽井沢の孤立。

あそこで櫛田は彼女を切り捨てることも、彼女を自分のグループに吸収する選択肢も存在していた。

しかし櫛田はそれをしなかった。それを欠点と言うのならば欠点だろうか。

そして一番の謎。最も大きな疑念が存在するのが柚榔だった。

「(柚椰の欠点。アイツがDに居る原因はなんだ……?)」

綾小路は柚椰のスペック、人間性、そしてこれまでの行いを振り返った。

柚椰はスペックは高円寺と同等以上に高く、協調性も平田や櫛田と並ぶほどに高い。

性格もお人好しを絵に描いたようなもので、落ちこぼれだった須藤にも手を差し伸べ、彼の窮地を二度も救った。

堀北の性格を軟化させたのも柚椰と関わったことが起因しており、彼女を成長させる要因になったことも特別試験で理解できた。

非の打ち所がない柚椰は間違いなくAクラス相当の実力を持つ優秀な人間だった。

では一体何故、彼はDクラスに配属されたのか。

「(考えられるとすれば、5日目のアレか……?)」

真っ先に思い当たったのは5日目の朝に柚椰が起こした一つの行動だった。

クラスの不和を防ぐために彼が決行した自己犠牲。

下着泥棒の罪を被り、クラスの敵になることを選択した彼の行動。

柚椰に欠点があるとすれば、その自己犠牲だろうか。

「(過去に自己犠牲によって何か仕出かしたということか……?)」

もし、過去に彼が罪を被ったまま、真相が明らかにならなかったことがあったとしたら。

それはそのまま彼の汚点となり、消えない経歴として残るのではないだろうか。

結果、それを学校側が調査の過程で知り、彼の欠点として処理したのではないだろうか。

だとすれば辻褃は合う。推測としては尤もらしいものだった。

しかし――

「(あの柚椰が勝算無しにそんな真似をするか……?)」

これまで過ごした日々の中で、柚椰が計算高い人間であることは綾小路も理解していた。

どこまでも抜け目なく、念入りに、着実に、水面下で勝ちへの道筋を作り上げる。

そしてその一手で以って、確実に勝利をもぎ取る。

「手法そのものは俺と似ているな……だからこそ解せない」

綾小路が気にかかっているのは、そこまでの頭が働く人間がつまりないミスを犯すのかという点。

明確な勝ち筋を見出し、下準備を怠らない男がみすみす汚名を背負うようなことになるだろうか。

もしかしたらそのようなこともあるかもしれない。

柚椰といえど下手を打つことはあるのかもしれない。

であるならば、所詮はその程度の人間だったというだけのこと。

勝ち続けられない人間など、綾小路の敵ではなかった。

しかし――

「(やはり信用は出来ないな)」

明確な答えは分からない。

真相は柚椰本人にしか分からない。

だからこそ、綾小路は彼を信用しない。

柚椰は優秀なのだろう。人格も優れているのだろう。

彼は信頼出来る協力者として扱えるだろう。

けれど決して信用は出来ない。

「(Cクラスの最終的なリーダーを知っていた理由も気になるしな)」

綾小路が思い返したのは6日目の夜の柚椰からの報告。

彼はCクラスのリーダーが伊吹に変わったことを報告してきた。

一体彼はどのようにしてそれを知ったのだろうか。

伊吹と龍園のやりとりを身を潜めて監視していたのだろうか。

確かに周りが森で囲まれている島の中でならば身を隠すことは容易だろう。

ルールの穴に気づいた龍園が周囲の警戒を怠って伊吹にリーダーを変更することを喋ることもあるかもしれない。

ありえる話。ありえそうな話。

そうであるかもしれないし、そうでないかもしれない。

確実な真実を知ることが出来ない。

「(やはり柚椰は決して信用出来ない)」

綾小路は改めて柚椰の計算高さを理解した。

可能性の高い推測は導き出せても、確定出来る要素は残さない。

人間は、自分にとって都合のいい可能性を無意識の内に信じる生き物だ。

それは下着泥棒のときでもそうだった。

女子たちは無意識の内に男子を犯人と決めつけ、無意識に平田と柚椰を信用して容疑者から外していた。

信頼は信用を呼び、無意識の内に真実を見定める目を曇らせる。

「(無意識の信頼。根拠のない信用。か……柚椰は侮れない)」

柚椰がそれを意図的に行っている綾小路は当たりをつけていた。

自分が行動することによって周囲がどのような反応を示すかを理解している。

コミュニケーションにおける自分の立ち位置を理解している。

周囲からの信頼を得るためにはどう振る舞えばいいのか、どう立ち回るべきかを理解している。

黛柚椰という男の実力は目に見えるものではなく、そういったものの。

人が集まる環境に自然と溶け込み、自然と信用される立ち位置を勝ち取る。

それは人間の心理を深く理解しているが故の強さであると綾小路は察した。

「(もし、アイツが敵に回ることがあれば……間違いなく厄介な相手になる)」

この先もしも、柚椰が自分の敵になることがあれば。

己の邪魔をする障害となったならば。

「(容赦なく潰すだけだ。俺にとって、情の湧く相手なんてものは1人もいない)」

そう、それが綾小路清隆の在り方。

自分の道を阻む者がいるのなら潰す。

自分の敵として立ちあがるのなら潰す。
情けなんてものはかける余地もない。

そもそも彼に情けをかける感情なんてものは存在していなかった。
たとえクラスメイトであろうと、たとえ家族であろうとそれは変わらない。
だからこそ――

「柚椰とは別の駒を用意する必要があるな」

協力者として、柚椰は確かに使える優秀な駒だった。

わざわざ詳しく話さなくても考えが伝わり、見解を述べることができる。
きる。

それは綾小路が無人島試験で実感したことだった。

上手く扱うことが出来れば柚椰は非常に強力な武器になる。

しかしいくら強力な道具でも使い手に牙を剥く危険があるものを
無闇に使うわけにはいかない。

そのため綾小路は柚椰とはまた別の駒を求めた。

弱みを握り、確実に支配できる駒を。

飼い主に噛み付くようなことがあればすぐに始末できるような扱いやすい駒を。

「いただきます」

船内最上階のデッキにあるレストランで、平田と柚椰は食事を摂っていた。

ちょうど同じタイミングで昼食を食べにきた柚椰を平田が誘ったのだ。

「改めてありがとう黛君」

「どうしたんだい？ 藪から棒に」

「特別試験でDクラスが1位になれたのは君のおかげだったから」
「今回は運が良かったただだよ。これからはどうなるか分からない
さ」

柚椰の言葉を謙遜と受け取ったのか平田は柔らかく微笑む。

「軽井沢に下着は返せたかい？」

「うん。伊吹さんが犯人だと分かって君の誤解も解けたからね」

「それはよかった」

無人島でのトラブルも無事に後処理が済んだことで平田も胸を撫で下ろしていた。

しかし彼は一転して真剣な表情になると柚椰にある相談を持ちかけた。

「実は黛君に少し相談があるんだ……」

「なにかな？」

「僕と堀北さんの橋渡し役になってほしいんだ」

「鈴音の？ どうしてまた」

「君が犯人を装ってクラスから離脱したとき、堀北さんは一番早く君の意図に気づいた。彼女が皆にそれを伝えてくれたおかげで、クラスの中で君を信じる雰囲気生まれたんだ。事情を知っていた僕たち男子にとって彼女の存在はとても助かった」

平田は堀北が皆の前で己の立てた仮説を語ったときのことを思い出していた。

あのとき彼女が立てた仮説はまさにその通りといったものだった。

柚椰が離脱した後、どのようにして皆を纏めるべきか悩んでいた平田にとって、彼女のそれは救いの手だった。

それを柚田が汲み取り、上手く落とし所を作ったことで皆が分裂することなく纏まったのだ。

試験後半におけるクラスの功労者は堀北と櫛田だと平田は感じていたのだ。

「清隆から聞いたよ。鈴音のことは俺にとっても予想外の好転だった」

「今回の一件で堀北さんも君を信頼してるんだって分かったよ。そし

てやっぱり、僕たちがこれから他のクラスと戦う為には、堀北さんの力が必要だってことも。彼女のように堂々と皆の前で自分の意見が言える人っていうのは重要だと思うんだ」

「目に見える事象から導き出される安易な結論に逃げず、自分で思考できる人間、ということかい？」

その言葉に平田は頷く。

「あれから男子だけじゃなく女子の中にも堀北さんを慕う人も出てきたみたいだし、彼女が皆と仲良く出来ればもつとクラスの雰囲気も良くなると思う。協力し合えればCクラスやBクラス、ううん、Aクラスにだって上がれる気がするんだ」

平田は入学して間もない段階で堀北を買っていたのだろう。

彼女が持ちうるポテンシャルの高さに気づいていたが故に、今が良い機会だと踏んだのだ。

「橋渡しか……まあ鈴音も別にクラスメイトを嫌っているわけではないみたいだよ。一応健とかとは会話が出来ているからね。と言っても、ほとんど言い争いに近いけど」

「ははは……でも、端から見てたら2人の仲が悪いわけじゃないってことは分かるよ。須藤君も堀北さんも、そういうやり取りが楽しいからやってるんだよね？」

「健も鈴音が齒に衣着せないというのは分かっているからね。鈴音も鈴音で、これまでのことで健のことは一応認めているみたいだから」
「入学当時の印象からは想像できないよ。ところで、黛君はどうやって堀北さんと仲良くなったの？」

堀北をクラスに馴染ませるためにまずは友達から始めてみるつもりなのか、平田はそんな質問をした。

その質問に対して柚椰は顎に手を当て思案すると、やがて口を開く。

「平田には教えるけど、最初は少し狡い手を使ったんだ」

「狡い手？」

予想外の言葉に平田は首を傾げる。

「鈴音が自分に自信を持っていることを逆手にとったってことさ。」

『友達になったら勉強を教えてあげるよ。案外君より出来るかもしれないから』とね」

「なるほど……敢えて堀北さんを焚きつけたんだね」

「そういうこと。それでひとまずお試し期間ということで友達付き合いを始めたんだ。明確に友達認定されたのは5月頭のときだね。この学校のシステムが明かされた日だ」

「結構早かったんだね」

「俺が早々にシステムに気づいていたということと、小テストで満点だったことが大きかったみたいだね。今でこそ損得関係なく仲良くしてくれているけど、最初は俺が彼女にとってメリツトを齎す人間だったからってことなんだ」

「そうだったんだ……2人にも色々あつたんだね」

初めて詳しい事情を聞いた平田は、2人の人間関係の変化が思いの外特殊だったことが意外だったのか驚いていた。

「じゃあ堀北さんと仲良くなるには、僕たちが使える人だっと思ってもらわないとダメだっということかな」

「どうだろうね。今の鈴音なら少しは歩み寄ってくれるかもしれないな。彼女も1人の力ではAクラスに上がるのは無理だと分かっているみたいだからね。特別試験の時、桔梗のことをアシストしていたんだろう？ それは以前の彼女では考えられなかったことだ」

「！　　そういえばそうだね。堀北さんは櫛田さんとも関わろうとしなかったから驚いたよ」

「鈴音も少しずつ変わり始めてるってことさ。必要とあらば、きつと手を貸してくれるよ」

「そうだね。そうだといいな」

柚椰の言葉に安心したのか、平田は食事を再開した。

だがちやうどそのとき、誰かが近づいてくるのに気づいたようで彼は一瞬戸惑ったような表情を柚椰に向けた。

「平田君っ！　ここにいたんだ……一緒にご飯食べ——あつ……」

嬉しそうな、けれどどこか焦っているような声をデッキに響かせながらやってきたのは軽井沢だった。

彼女は平田を見つけるや否や嬉しそうな顔で駆け寄ってきたが、同席しているのが柚椰だと分かった途端その勢いは急速に萎んだ。

柚椰は軽井沢の表情から彼女の気持ちを察したのか食事の手を止めて席を立った。

「どうやらお邪魔みたいだね。俺はもう行くよ」

「えっ、まだ食べ終わってないじゃないか」

席を立った理由を察しつつも、平田はそう言って呼び止めるが柚椰は自分の食事を手に取った。

「あまり食が進まなくてね。ああ、俺のことは気にしないでいい。彼女と二人きりのランチを楽しんでよ」

そう言い残して柚椰はさっさとその場を去ってしまった。

「あっ……」

去りゆく彼の背に向けて何かを言いかけた軽井沢だったが、明確な言葉になることはなかった。

「酷い目にあった……」

昼食時でもあまりお腹が空いていなかった綾小路は船内をぶらぶらと探索していた。

その道中、彼はボーイと揉めている高円寺に遭遇した。

尤も、揉めているというのは正確ではなく、ボーイが注意を促しているのを高円寺がまるで意に介していないという光景だったのだが。どうやらプールから上がった高円寺が身体を全く拭かずに船内を歩き回っているのをボーイが咎めていたようだ。

高円寺は綾小路を見るやニコニコしながら近づいて髪をかきあげた。

前述したように高円寺は身体を拭いていなかった為水浸しだった。

結果、綾小路は高円寺から飛び散った水滴を顔面と制服に浴びることになった。

人に水滴を飛ばしておきながら高円寺は全く気にせず、自分の髪のかきあげ方のみにか意識を向けていなかった。

これ以上巻き込まれたくないと思った綾小路は困り顔のボーイを見捨ててその場から逃げた結果が今である。

「まあ夏だしすぐに乾くだろう」

濡れた髪と制服に不快感を覚えながらも、彼は引き続き船内を探索していた。

船は地上5階地下4階の全9階層に分かれている非常に大きなものである。

地上階には生徒が利用できるラウンジや宴会用のフロア、客室などが設けられている。

地下階には映画館や演劇場などの様々な娯楽施設、屋上にはプールとカフェと至れり尽くせりの環境だ。

現在綾小路が歩いている地上2階は生徒が使っている客室とはまた違った雰囲気があるフロアだった。

何のためのフロアなのか分からないまま歩いていると、ポケットの携帯が震えた。

「ん……メールか」

確認するとメールの差出人は佐倉だった。

事情は分からないが、暇を持て余していたこともあってか綾小路はすぐに承諾の旨の返事を送り、彼女が呼び出した場所へと向かった。

「はあっ……はああっ……はあああ……」

指定された場所に到着した綾小路が目にしたのは重苦しいような悩み深そうなため息をついている佐倉の姿だった。

「どうしたんだ。随分深いため息だな」

「わあっ?! あ、綾小路君っ!」

不意打ちだったようで佐倉は丸まっている背筋をピンと張って慌てふためいていた。

「驚かせて悪いな」

「う、ううんっ。私がちよつと、変に緊張してただけだからっ」

そう言うと佐倉は大きく深呼吸して心を落ち着かせる。

「綾小路君って、同室の人は平田君と高円寺君、幸村君……なんだよね？」

「俺か？ ああそうだけど、それがどうかしたのか？」

「うん……実は、その……私、同じ部屋の人のことでちよつと悩んでて」

佐倉の悩みとはルームメイトについてだった。

彼女と同室の女子は篠原、市橋、前園の3人。

篠原は軽井沢のグループに属していた女子で我が強い人間だ。

市橋と前園も篠原に似て強気な性格の女子であり、佐倉とは真逆のタイプだ。

「(こうも真逆の人間ばかりが同じ部屋とは……流石に気の毒になってくるな)」

事情を聞いた綾小路は今まで泣きつかなかった佐倉を褒めたくなった。

「事情は分かったが、どうして俺に？」

「……綾小路君なら、何かアドバイス、くれるんじゃないかな、って」
ぼそぼそと小さく呟く佐倉。

頼れる人間が自分しかないのだろうと綾小路は察した。

しかし悲しいかな、彼自身も別段ルームメイトと仲が良いというわけではなかった。

「悪いが力になれるかどうかはなんとも言えないぞ。俺も正直同室の中で話す相手は平田くらいだ。その平田も向こうから話しかけてくれるときに話す程度だしな」

「そ、そうなんだ……」

「佐倉のルームメイト達とも仲良い奴はいないしな……」

どうしたものかと綾小路が考え込んでいると、彼と佐倉を見つけた1人の女子がやってきた。

「あれ？ 綾小路君と佐倉さん。どうしたの2人して」

やってきたのは2人と同じクラスの櫛田だった。

彼女がやってくると佐倉の明るかった表情は途端に消え、居心地悪

そんな雰囲気変わった。

明らかに櫛田が現れたことに対する拒否反応だった。

「あ、邪魔するつもりはないよ？ 友達と合流することになって来ただけだから」

「……私、部屋に戻るね」

櫛田が慌てて引き留めようとするも、佐倉は駆け足で去っていつてしまった。

「うー……ごめんね。タイミング悪かったね。声かけないほうがよかったかなあ」

残された綾小路に手を合わせて謝る櫛田。

しかし同じクラスの人間がいることに気づけばどの道佐倉が移動してしまおうと思った綾小路は気にしていなかった。

「そういうえば、船に戻ってから初めて櫛田と話した気がするな。柚榔と二人で居たり色んな子と遊んでるのだけは見たんだが」

Dクラスでも一番の人気者である櫛田は今では全クラスを通して人気の女子になっていた。

佐倉や堀北などの一部の生徒を除き、櫛田の交友関係は一年生全クラスに渡っている。

「今日はCクラスの子たちと遊ぶんだ。あ、もし良かったら綾小路君もどう？」

「え、いいのか？」

「えっ、来るの？」

櫛田の戸惑ったような反応から、彼女の発言が社交辞令だと気付いた綾小路。

変な空気を払拭すべくきちんと断ろうと思った。

「冗談だ。俺が行っても気を遣わせるだろ？」

「あはは、そんなことないよ。でも、綾小路君も冗談言うんだね」

櫛田も綾小路を気遣ってかそんなことを言った。

「じゃあ私行くね」

軽く別れの挨拶を交わしたとき、突如二人の携帯が同時に鳴った。キーンという甲高い音。それは学校からの重要な連絡の際に鳴る

通知音だった。

マナーモードであつても強制的に音が鳴ることから重要性の高さが窺える。

「なんだろうね?」

何事かと櫛田が足を止めて携帯を確認する。

彼女に倣い綾小路もまた自身の携帯が受信したメールを確認しようとした。

すると今度は船内アナウンスが入る。

『生徒の皆さんにご連絡いたします。先ほど全ての生徒宛に学校から連絡事項を記載したメールを送信いたしました。各自携帯を確認し、その指示に従ってください。また、メールが届いていない場合には、お手数ですが近くの教員に申し出てください。非常に重要な内容となっておりしますので、確認漏れのないようお願いいたします。繰り返しします——』

アナウンスの内容を聞き終えた二人は互いに顔を見合わせる。

「今届いたメールのことだよね?」

「多分な」

船内にいる全生徒に同時に届いた学校からの通知。

アナウンスに従うように携帯を操作してメールを開いた二人。

メールにはこれから生徒達が取る行動と、その目的が記されていた。

綾小路の携帯に送られてきたメールは以下の通りである。

『間もなく特別試験を開始いたします。各自指定された部屋に、指定された時間に集合してください。10分以上の遅刻をした者にはペナルティを課す場合があります。本日18時までには2階204号室に集合してください。所要時間は20分ほどですので、お手洗いなどを済ませ、携帯をマナーモードか電源をオフにしてお越してください』

無人島試験終了から3日目。

一年生に第二の特別試験が課せられた。

彼らは協力することを強いられる。

一年生全生徒に一齐に送信されたメール。

そこには新たな特別試験の開始を告げる旨が記されていた。

「特別試験、か」

文面に目を通した綾小路が呟く。

メールには試験を執り行うことと、その内容を説明する時刻のみが書かれている。

つまり具体的な内容は現時点では明かせないということだ。

「試験内容ってなんなんだろうね？ これじゃあ分からないや」

同じようにメールを確認していた櫛田が綾小路にそう言った。

その発言を聞いた綾小路は気になることがあったのか彼女に申し出る。

「ちよつとメールを見せてもらってもいいか？ 気になることがある」

「え？ うん、いいよ」

快く承諾した櫛田に会釈して綾小路はメールを見た。

大まかな文面は同じものだったが異なる点も存在した。

指定された場所と時間である。

綾小路が指定された部屋は204号室。

しかし櫛田が指定された部屋はそこから3部屋ほど離れたまた別の部屋だった。

そして集合時間も18時と指定された綾小路とは違い、21時と3時間も空いている。

「なんでこんな変な呼び出し方するんだろうね？」

自分の携帯と照らし合わせている綾小路の横から覗き込むような形で同じようにメールを見ていた櫛田がそう尋ねた。

「さあ、見当もつかないな」

「もしかしたら他の皆も指定された部屋と時間はバラバラなのかも

ね。私と綾小路君だけとは思えないよ」

「多分な……そうだ、柚椰にも確認してみてくれないか？」

「うん、分かった」

榎田が柚椰に確認している間、綾小路もまた他の生徒に確認を取った。

彼は連絡先を知っている数少ない知り合いである堀北にチャットを飛ばす。

すると珍しくすぐに既読がつく。

『今学校からメール届いたか？』

『届いたわ。それがどうしたの？』

『俺は18時からに指定されていたんだが、そっちは？』

『こっちは20時40分からよ。随分時間が違うのね』

「堀北は20時40分か」

自分とも、榎田とも違う時間が指定されていた。

恐らく部屋もまた違う番号が指定されているのだろう。

やはり生徒によって指定されている条件は異なるようだ。

『時間帯が異なるのは気になるわね。開始時間が異なるのであれば、先に情報を知った生徒が有利になって不公平が生まれそうだけど』

『そこは学校も考えているんじゃないか？ まあ、今はまだなんとも言えないが』

『とりあえず時間になったら足を運ぶしかないわね』

そこで話を打ち切り、綾小路は携帯を閉じた。

「綾小路君」

ちやうど同じタイミングで連絡を終えた榎田が話しかける。

「どうだった？」

「柚椰君は集合時間が20時40分だったよ。部屋も私とも綾小路君とも違うみたい」

「堀北と同じ時間か。となると指定された部屋も堀北と同じかもしれないな」

「むう……」

堀北の名前を聞いた櫛田は頬を膨らませた。

自分は違うのに堀北が柚椰と同じ時間と部屋というのが不満なのだろう。

一方、集合時間が一番早い綾小路はひとまず様子を見ようと判断した。

17時55分。指定された時刻の5分前に綾小路は目的の部屋に到着した。

2階のフロアは生徒の宿舎ではないため普段は生徒など一人も歩いていない。

しかし今は数人の生徒がウロウロしていた。

その生徒たちは近くの部屋に入っていく、また新たに生徒がフロアに現れては別の部屋に入っていく。

「他クラスの生徒か……」

部屋の前で待機しているのも居心地が悪いと感じたのか、彼は一足先に部屋に入っていようと判断し扉をノックする。

するとすぐに中から返事があった。

「入りなさい」

許可を受け一室に足を踏み入れる。

室内にはガツチリした体格のスーツに身を包んだAクラスの担任真嶋先生が椅子に腰掛けていた。

小さなテーブルの資料に目を落としている。

そして先生の前には綾小路もよく知っている二人の男子生徒が腰掛けていた。

「綾小路殿ではござらんか！」

男子生徒二人の内の一人、外村は眼鏡をかけた小太りの生徒。

歴史や機械に詳しく、所謂オタクというやつだ。

「妙なことになっているな。綾小路」

もう一人の男子は綾小路のルームメイトでもある幸村だった。

「何をしている。早く座りなさい」

真嶋先生に促され、綾小路は空いている席に座った。

だが空席はまだ一つある。

状況から見れば、試験の説明は先生一人と生徒4人で行われるようだ。

「あと一人、到着を待つ。それまで大人しく待っていてなさい」

顔を上げることなく先生は彼らにそう指示する。

生徒と先生の間会話などあるわけもなく室内に重たい沈黙が続く。

予定時刻まで多少あるとはいえ、この沈黙から早く解放されたいと男子たちは思っていた。

やがて約束の18時を回る。

微動だにしなかった真嶋先生が一度だけ時計を見やった。と、ほぼ同時に部屋がノックされる。

先生が入るよう促すと、ゆつくりと扉が開かれた。

「失礼しまーす」

間延びした声を発して入って来たのは軽井沢だった。

この室内における唯一の女子である。

「え、なにこれ。なんで幸村君たちがいるわけ？」

戸惑ったような、不可解そうな声で発せられた言葉には綾小路たちも同感だった。

「時間厳守だと伝えておいたはずだ。早く席につきなさい」

「はい」

綾小路ら男子たちの存在、そして真嶋先生の言葉にやや不服そうに返事をして軽井沢が最後の空席に座る。

「Dクラスの外村、幸村、綾小路、軽井沢だな。ではこれより特別試験の説明を行う」

「ちよ、ちよつと待ってよ。意味わかんないんですけど。試験の説明ってなに？ だってもう試験は終わったじゃん。それに他の人たちは？」

即疑問を口にする軽井沢。

彼女の口ぶりからメールをちゃんと読んでいないことは明らかだった。

「今の段階では質問は一切受け付けない。黙って聞くように」

案の定真嶋先生は呆れたような、冷ややかな視線を送る。

何でもすぐ答えてもらえろと思っただら大間違いだということだ。

「うわ出た。すぐそれなんだから」

「今回の特別試験では、1年全員を干支になぞらえた12のグループに分け、その中で試験を行う。試験の目的はシンキング能力を問うものとなっている」

軽井沢の不満の声を無視して先生は説明を開始する。

つまり今回行われる試験は考える力、考え抜く力を量るものだということだ。

20時25分。綾小路たちのグループの指定時間から約2時間後。

これから説明会を予定している生徒である堀北と平田、そして柚榔は2階フロアを訪れていた。

フロアには壁にもたれている生徒、携帯を弄りながら座り込む生徒など各々好き勝手に時間を潰していた。

「全員同じグループ……ってことじゃなさそうだね」

「どうだろうね。何とも言えないけど、何か意図があるのかもしれないな」

「それってどんな？」

意味ありげなことを言う柚榔に堀北が尋ねる。

その問いに柚榔は二人に示すようにある方向を指差した。

「あそこの生徒、今俺たちを見て携帯を操作したんだ。この時間ここに来た人間の顔ぶれを把握して誰かに教えている可能性もある」

「それって、これからの試験に関係することなのかな？」

「さあ。今の段階では分からないね。平田はこの場にいる生徒の中で知っている人はいるかい？」

「うん。あそこにいるのはAクラスの森宮君。エレベーターの近くにいるのはCクラスの時任君だね」

平田の情報を聞きつつ、3人は目的の場所まで移動する。

そこには数人の男女が集まっており、その集団から一人の男子が出てくると3人に話しかけた。

「もし俺の勘違いでなければ、20時40分組なんじゃないか？」

声をかけて来たのはAクラスの生徒である葛城。

高校生とは思えないほどに風格のある男子だ。

「そうだよ。その感じだと葛城君もそうなのかな？」

「ああ。よろしく頼む」

「こちらこそ。同じグループとしてよろしくね」

既に平田は同室の幸村から試験の概要を聞いていた。

そのため、同時刻にこの場所に集まった生徒が同じグループに属することになることも知っていた。

そしてそれは葛城も同様らしい。

「君たちとは一度改めて話したいと思っていたところだ」

「どういうことかしら。Dクラスの私たちに何を話すというの？」

皮肉を込めて堀北が問う。

「正直俺は今までDクラスの存在は眼中に入れていなかった。しかし前の試験の驚異的な結果を見れば、注目しないわけにはいかないだろう」

これまで注目していなかったDクラスが全クラスを差し置いて1位の結果を出した。

それは葛城も見er目を交えるに値したということだ。

「もしこれから先いつかは分からないが……DクラスからCクラスに上がってくるようであれば、Aクラスは容赦なく君たちを叩くだろう」

「おや、穏健派の君にしては随分と好戦的なことを言うじゃないか」

葛城の発言がおかしかったのかカラカラと笑いながら柚椰が話に

加わる。

「君は？」

「Dクラスの黛だ。どうぞよろしく」

名前を聞いた葛城は平田から柚椰へと相手を変える。

「黛、先の発言はどういう意味だ？」

「そのままの意味だよ。君は争いを極力避けるタイプだと思っていたんだが。眼中になかったクズの集まりが一つ上に上がったところで君たちAクラスの敵ではないだろう？　にも関わらず、君は随分とDクラスを警戒しているようだ。クラスの中で何かあったのかい？」

「……」

凶星だったのか葛城は黙り込む。

その反応が面白いのか柚椰は一層笑みを深める。

「君の気持ちは分かるとも。無人島試験で結果を出して少しでもクラスでの権力を強めたかったのにあの結果ではね……聞けば結果発表の時に随分と責められていたらしいじゃないか。リーダーというのは不憫だと思うよ。いつもは好き勝手に崇め奉っておきながら、負けたらその責任を全て押し付けられてしまうのだから」

「……君には関係のないことだ」

「今回の試験は是非とも頑張つてほしい。君にとっては汚名返上、一発逆転、名誉挽回の一大チャンスに他ならないんだ」

柚椰は葛城の肩をポンと叩いてエールを送る。

しかしそれは誰がどう見ても挑発以外の何物でもなかった。

現に葛城は口に出さないまでも顔を顰めている。

「君たちこそあまり調子に乗らない方がいい。クラスが入れ替わるようなことがあるば、CクラスやBクラスも君たちを警戒するだろうか
らな」

「ご忠告ありがとうございます。心に留めておくよ。ただ、ここから先卒業までずっと今の位置関係が続くと思っているのなら、それは少し楽観的と言わざるを得ないね」

「黛の言う通りだな。俺たちBクラスも隙あらばAクラスに上がるつもりだ。いつまでも居座れるとは思って欲しくないな」

二人の会話に入ってきたのはBクラスの神崎だった。
どうやら彼も同じグループらしい。

「やあ、神崎君も同じグループってことかな？」
現れた神崎に平田が問いを投げる。

「そのようだな。よろしく頼む」

「うん、よろしくね」

「クク、随分と雑魚が群れてるじゃねえか。俺も交ぜろよ」

また一人、新たにこの場に現れたのはCクラスの龍園。

彼は同じクラスであろう生徒を3人引き連れて現れた。

「……龍園か」

彼を視界に入れた葛城は柚椰の時より一層険しい雰囲気を纏った
神崎もまた表情を引き締めて龍園を見やる。

「お前もこの時間に召集されたのか？」

「残念なことに、お前らと同じ時間のようだな」

龍園は葛城の問いに答えるも、その視線は柚椰に向けられていた。

「よお黛、どうやら同じグループらしいな」

「そうみたいだね。よろしく頼むよ」

「ハッ、テメエとよろしくするのは死んでも御免だな」

言葉こそ乱暴だが、龍園の表情はこれからの試験を想像してか楽し
そうだった。

相手にされていないと察した葛城は顔を顰める。

「この組は学力の高い生徒が集められていると思っていたが、お前と
そのクラスメイトを見る限りそうではないかもしれないな」

葛城のその言葉を龍園は鼻で笑う。

「学力だあ？ くっだらねえな。そんなもんは何の価値がある」

「それこそ残念な発言だ。学業の出来不出来は将来を左右する最も大
切な要素だ。日本が学歴社会であることを知らないのか？」

ふざける龍園に対して葛城が正論をぶつける。

だがそんなものを龍園が受け入れるわけもなく、呆れ返っていた。

取り巻きも龍園に合わせるように似たような反応を示す。

「俺はお前の非道さを許すつもりはない」

「あ？ 非道さ？ おいおい何のことだよ。具体的に教えてくれねえかあ？」

「……まあいい。今回同じグループになったとしたら、ゆっくり話す時間もあるだろう」

その言葉に龍園はクツクツと笑った。

「そうかそうか、テメエは何も知らねえんだな。まあそうだろうな。ボケーっとしてぬるま湯に浸かってた結果、あんな無様を晒したんだ。テメエのことだ、自分たちがなんでボロカスにやられたか分かってねえんだろ？」

「……何の話だ」

片眉を上げ不可解そうな表情をする葛城に対して龍園は何も語らない。

しかし一瞬だけ目線を柚椰に向けると再び人を食ったような笑みを浮かべる。

「いずれ分かるだろうさ。さて、そろそろ時間だな」

時間を確認すると、取り巻きを引き連れて龍園は指定された部屋に入って行ってしまった。

彼が去ったことで、葛城もまた同じクラスの生徒と共に別の部屋に入っていく。それは神崎たちBクラスも同じだ。

「僕たちも部屋に入ろうか」

「そうだね」

「ええ」

平田たちもまた、当てがわれた部屋に入った。

「これから特別試験の説明を行う。こちらから質問の有無を尋ねたとき以外は黙って聞くように。尚、質問の内容によっては答えられないこともあるのでそのつもりでいろ」

平田たちDクラスのメンバーに試験の説明をするのは茶柱先生の

ようだ。

「お前たちのことだ。既に説明を行ったグループの生徒から情報を得ているとは思う。だが、形だけでもちゃんと聞く姿勢は取るように。いいな？」

既に情報が共有されていることは予想済みなのか、そう前置きして先生は説明を行った。

「今回の試験は一年生を干支になぞらえた12のグループに分け、その中で試験を行う。このグループは1つのクラスで構成されるのではなく、各クラスから3人ないしは4人ほど集めて作られる」

そうやって先生は3人にハガキサイズの紙を配った。

「今配ったのはこのグループのメンバーリストだ。お前たちのグループは『辰』。この紙は退室時に回収するので、必要であれば今覚えておけ」

3人は渡された紙に目を落とした。

Aクラス；葛城康平 西川亮子 的場信二 矢野小春

Bクラス；安藤紗代 神崎隆二 津辺仁美

Cクラス；小田拓海 鈴木英俊 園田正志 龍園翔

Dクラス；平田洋介 堀北鈴音 黛柚椰

錚々たる顔ぶれが揃っていた。

各クラスのリーダー格がいるこのグループはこの試験においても重要な役割を持っているのかもしれない。

「今回の試験では、大前提としてAクラスからDクラスまでの関係性を一度無視しろ。そうすることが試験をクリアするための鍵になるからな」

先生の意味ありげな言葉に3人は注目した。

「今から君たちはDクラスとしてではなく、辰グループとして行動することになる。そして試験の合否はグループ毎に設定されている」

そうやって先生は新たに3枚の紙を取り出した。

紙はくしゃくしゃになっており、管理が雑なのではないかと疑ってしまうほどだ。

「この試験の結果は4通りしか存在しない。例外は存在せず、必ず4つのどれかの結果になるように作られている。分かりやすく理解してもらおうためにそこに結果を記してある。この紙に関しても退出時に回収するのでこの場で確認しておくように」

書かれてある基本ルールは以下の通りだった。

『夏季グループ別特別試験説明』

本試験では各グループに割り当てられた『優待者』を基点とした課題となる。

定められた方法で学校に回答することで、4つのうち1つを必ず得ることになる。

・試験開始当日午前8時に一斉メールを送る。『優待者』に選ばれた者には同時にその事実を伝える。

・試験の日程は明日から4日後の午後9時まで（1日の完全自由日を挟む）。

・1日に2度、グループだけで所定の時間と部屋に集まり1時間の話し合いを行うこと。

・話し合いの内容はグループの自主性に全てを委ねるものとする。

・試験の解答は試験終了後、午後9時30分から午後10時までの間のみ優待者が誰であったかの答えを受け付ける。尚、解答は1人1回までとする。

・解答は自分の携帯電話を使って所定のアドレスに送信することのみ受け付ける。

・『優待者』にはメールにて答えを送る権利はない。

・自身が配属された干支グループ以外への解答は全て無効とする。

・試験結果の詳細は最終日の午後11時に全生徒にメールにて伝える。

以上が基本的なルールとして書かれていた。

そして、ここからが先生の言う4つの定められた『結果』というものだ。

・結果1：グループ内で優待者及び優待者の所属するクラスメイトを除く全員の解答が正解していた場合、グループ全員にプライベートポイントを支給する。ポイントの内訳は優待者に100万ポイント、優待者以外の者に50万ポイントである。

・結果2：優待者及び所属するクラスメイトを除く全員の答えで、一人でも未解答や不正解があった場合、優待者には50万プライベートポイントを支給する。

「この試験の肝は言わずもがな『優待者』の存在だ。グループには必ず1人優待者が存在する。その優待者が誰かを見極めることが試験の行く末を左右する。例えば、平田が優待者だとしよう。この場合、解答は『平田洋介』となる。後はこれをグループ全員で共有すればいい。試験終了後の解答時間の間に全員が平田の名前をメールで打ち込めばそれで結果1が確定する。平田には100万ppt、堀北や黛を含めた他のメンバーは50万pptを手に入れる」

「随分と大きな額ですね……」

与えられるポイントの額のに平田は驚いていた。「それだけこの試験が一筋縄じゃいかないってことよ。そうですよね？」

堀北の質問に答えるように茶柱先生は説明を続ける。

「結果2についてだが、これは優待者がその情報を明かさなかった場合、あるいは嘘の情報を広めるなどして最後まで正体を隠した場合に起こる。文面にある通り、この場合は優待者のみがポイントを得ることができる。尤も、半額の50万pptだがな」

「いずれにしても、今までの試験の中では最も大きなボーナスですね。優待者の見極めは重要なポイントになりそうだな」

優待者の重要性を知った柚椰はどこか楽しそうに笑っている。

しかし紙を見ていた平田があることに気づく。

「先生、残り2つの結果はどんなものなんですか？」
「それについては今から説明する。全員裏面を見る」
そう促され、3人は紙を捲って裏面を見た。
そこに書かれていた残りの2つはこうだ。

以下の2つの結果に関してのみ、試験中24時間いつでも解答を受け付けるものとする。

また試験終了後30分以内であれば同じく受け付けるが、どちらの時間帯でも間違えばペナルティが発生する。

・結果3：優待者以外の者が、試験終了を待たず答えを学校に告げ正解していた場合。

答えた生徒の所属するクラスはクラスポイントを50ポイント得ると同時に、正解者にプライベートポイントを50万ポイント支給する。

また、優待者を見抜かれたクラスにはマイナス50クラスポイントのペナルティが課せられる。

及びこの時点でグループの試験は終了となる。尚、優待者と同じクラスメイトが正解した場合、解答を無効とし試験は続行となる。

・結果4：優待者以外の者が、試験終了を待たず答えを学校に告げ不正解だった場合。

答えを間違えた生徒が所属するクラスはマイナス50クラスポイントのペナルティが課せられる。

またその場合、優待者は50万プライベートポイント得ると同時に、優待者の所属するクラスはクラスポイントを50ポイント得る。答えを間違えた時点でグループの試験は終了となる。

尚、優待者と同じクラスメイトが不正解した場合、解答を無効とし試験は続行となる。

「なるほどね」

結果4つ全てを知った柚椰はこの試験の全貌を理解した。

その証拠に彼は面白そうに笑みを浮かべている。

「ここまでで何か質問があれば答えよう。何かあるか？」

「では質問があります」

茶柱先生が質問の有無を尋ねると柚椰が手を挙げた。

「言ってみろ」

「4つの結果によって発生するプライベートポイントとクラスポイントの増減が反映されるのは結果が確定した直後ですか？ それとも全グループの結果発表の後ですか？」

「ほう……」

「…………？」

柚椰の質問に対して茶柱先生は感心したように微笑む。

平田と堀北は質問の意図が分からなかったのか首を傾げている。

「それについてはこのあと説明しよう」

「どうやらこのあとの説明事項に含まれている質問だったためか先生は説明を再開した。

「今回学校側は匿名性についても考慮している。試験終了時には各グループの結果とクラス単位でのポイント増減のみ発表する。優待者が誰だったか、解答者が誰だったかについては公表しない。そして先ほど黛がした質問についてだが、クラスポイントは結果発表後に反映される。プライベートポイントについても基本的には同じだ。だが結果3と4についてのみ、結果確定直後に学校から受け取り方法についてのメールを送ることになっている。受け取り方法だが、一括で受け取るか分割で受け取るかなど生徒が要望すれば好きにすることもできる。仮IDを発行してそこにポイントを振り込むなんてことも可能だ。つまり本人さえ黙っていれば、試験後に発覚する恐れはない。もちろん隠す必要がなければ堂々と受け取っても構わん」

「なるほど」

満足する答えが得られたからか柚椰はニヤリと笑みを浮かべている。

「ここまでで理解したと思うが、3つ目と4つ目の結果は他の2つと

は異なるものだ。グループ内でよく話し合い、どの結果を選ぶかよく考えて決めろ。以上で試験の説明は終了だ」

先生の説明を大まかに要約するところなる。

この試験は全てのクラスが互いに話し合い、考え合う試験である。試験期間3日のうちにグループの中にいる優待者をいつ、どのタイミングで見極めるか。

そして4つの結果の中からの結果を選ぶかを決める。

優待者は正体を明かすのか隠すのかの選択を迫られ、それ以外の者は優待者の存在を共有するのかもしれないのかの選択を迫られる。

そしてグループ内で優待者を抱えているクラスはいかにして優待者を守るのかも考えなければならない。

言わずもがな、結果3が確定してしまえばクラスポイントが減らされてしまうからだ。

「お前たちは明日から午後1時、午後8時に指示された部屋へ向かえ。当日は部屋の前にそれぞれグループ名の書かれたプレートがかけてある。初顔合わせの際には室内で必ず自己紹介を行うように。室内に入ってから試験時間内の退室は基本的に認められていない。そのためトイレ等は事前に済ませておくように。万が一我慢できなかったり、体調不良の場合はすぐに担任に連絡して申し出るようにしろ」

そこまで聞き終えると平田が挙手をした。

「先生、ルールには1時間の話し合いをするようにと書かれています。つまり自己紹介が終わっても1時間が経過するまでは室内にいなければならないということですか？」

「その通りだ。1時間が経過した段階で船内アナウンスでその旨を傳達する。アナウンスが流れた後ならば室内に残ろうが退出して船内で好きに過ごそうが構わん」

「分かりました」

「それからグループ内の優待者は学校側が公平性を期し、厳正に調整している。優待者に選ばれた、もしくは選ばれなかったに関係なく変更は一切受け付けない。また、学校から送られてくるメールのコピー

や削除、転送、改変などの行為は禁止だ。発覚次第ペナルティを課す場合もあるから注意しておけ」

つまりメールを弄って悪用することは認められていないということだ。

裏を返せば学校からのメールは真実を証明する確たる証拠になるということだ。

これは使い方によっては大きな武器になる。

その後先生から退室を命じられ、3人は部屋を後にした。

試験内容の説明が終わり解散した後、柚椰は屋上デツキを訪れていた。

時刻は21時過ぎ。デツキには数人程度の生徒がいた。

柚椰はデツキの端まで歩いていくとちょうどそのタイミングで携帯が鳴った。

確認するとどうやら電話のようで、画面には着信番号が表示されている。

その番号を見て笑みを浮かべると、彼は画面をタップして携帯を耳へと当てた。

「やあ。かけてくると思っていたよ」

『その様子だと用件もお分かりのようですね』

「ああ。君が俺に何の用でかけてきたのかは予想できているよ」

『ならば話は早いですね。周囲に誰かいますか？』

「いいや。時間も時間だからか人は少ない。デツキの端にいるから周りに人もいないから安心していいよ」

『そうですか。では、本題に入らせていただきます』

そこで一拍置くと電話の相手、坂柳有栖は言葉を続けた。

『黛君、仕事の依頼です』

「ああ構わないよ。それで、内容は？」

『大まかな内容は無人島での試験と同様です。Aクラスを敗北へ導くこと。しかし今回は単独最下位にして下さい』

その言葉を聞いた柚椰はおかしそうに笑った。

「ふふつ、単独最下位ときたか。今回の試験内容は聞いているかな？」

『ええ。先ほど真澄さんから聞きました』

「ならこの試験の本質も、大きな鍵となる要素が何なのかも分かっているね？」

『勿論。その上で私は黛君にAクラスを負かしてほしいのです』

既に坂柳はこれから行われる試験の本質に気づいているらしい。

その上で先の要求をしてきたのだから、やはり彼女は怖い女だと柚椰は微笑む。

「分かった。君が女王になるための大詰め勝負だ。協力しよう」

『ありがとうございます。成功報酬は100万ppt。結果次第では前回同様ボーナスも付けさせていただきます』

「随分大きく出たね。前回の成功報酬の二倍じゃないか」

『それほど今回の試験は複雑だからですよ。それはお分かりですよね？』

「勿論。方法は前回と同じように俺に任せるといふ方針でいいのかな？」

『ええ。しかし今回は少々条件を加えさせていただきます』

「条件？」

尋ねる柚椰に対して坂柳は優雅な笑い声を漏らす。

『ふふつ。綾小路君が動き出したとあって、私も少し遊んでみたくなったのですよ。黛君の実力がどれほどなのか。そして綾小路君がどう足掻くのか興味があります』

つまり坂柳は動き出した獅子に触発されたのだ。

そのため直接手を下せない今の状況でも早く戦いたくて焦ったくなったのだろう。

そんな彼女を微笑ましく思いながらも柚椰は茶化すように笑った。「怖いことを言うね。彼を直接叩き潰す機会なんてこれからいくらで

もあるだろうに。わざわざ俺のような小心者を使う必要があるのかい？」

『おかしなことをおっしゃいますね。貴方は紛れもない天才ではありませんか。私は貴方もいざれ衝突する相手だと判断していますよ？』
「まさか。俺は君と正面切つてやり合うつもりはないよ。俺は君が必要とあれば手を貸すし、綾小路を助けろと言うのなら吝かでもない。だから君は俺のことなんて気にしないで彼だけを見ていればいいよ」
『冗談を。貴方のような風来坊を装った人ほど牙を剥けば最も恐ろしいのです。ギブアンドテイクな関係を築いておきたいは勿論本音ですが、警戒しているのも本音ですよ。毒を以て毒を制するとは言いますが、毒を毒と認識せずに扱うことは愚かなことだということですよ』

「まあいいさ。それで、条件というのはなんだい？」

そう尋ねる柚椰に坂柳は条件の内容を語った。

『全クラスの現在の位置関係を変えない。これが条件です』

彼らは1回目 of 会合に出向く。

21時40分。船内のカラオケルームで柚椰と櫛田は顔を突き合わせていた。

全てのグループが試験の説明を受けたのを見計らって柚椰が呼び出したのだ。

「試験の内容は把握したかい？」

「うん、グループの中にいる優待者を見抜く試験だよな？」

「そう。そしてこの試験で重要な鍵の一つが優待者の存在だということとは分かるね？」

その問いに櫛田は頷く。

「勿論。一つのグループに4クラスの生徒がいて、優待者と同じクラスの人には解答権がない。つまり優待者がいるクラスはグループ全員に情報を共有させるか、最後まで隠すか選ばなきゃいけないってことでしょ？」

「その通り。優待者及び優待者と同じクラスの人間は4つの結果の中から選択を迫られる。全員でプライベートポイントを取りに行くのか、あるいは優待者だけがポイントを得るのか。嘘で他クラスを出し抜いてクラスポイントを取りに行くのか」

「1日に2回の話し合いが3日。つまり6回のディスカッションをどう使うかがポイントってことだよな。グループ全員で協力し合うか騙し合うのか……」

櫛田は改めてこの試験の難しさに頭を悩ませた。

詰まる所、この試験はグループを信じるのか、クラス単位での勝利を目指すのかの二者択一。

話し合いか騙し合いか。各々が腹の内を探り合う試験なのだ。

「まず、4つの結果の中で最も起こりやすいのが結果4だと俺は踏んでいるよ。他クラスを出し抜こうとして自爆する」

柚椰の発言に櫛田は首を傾げる。

「え、でも確信がないんじや裏切るのも難しいんじやないの？」

「優待者の告発を間違えた場合のペナルティはクラスポイントだ。つまりクラス単位では大きなデメリットにはなっても、裏切り者自身には何のデメリットもない。これが結果4が最も起こりやすい理由で、同時に最も気をつけなければいけない点なんだ」

「そっか、正解ボーナス欲しさに勝手に行動しちゃう人を抑えなきゃいけないってことか」

「結果4のペナルティにプライベートポイントが含まれていないというのが嫌らしい点だね。極論を言おうと、クラスのことを考えなければ好き放題に裏切ることが出来るということだ」

「なるほど……」

榎田は思うところがあるのかなにやら考え込んでいる。

「柚椰君はこの試験をどう攻略するかももう考えてるの？」

「ああ。どう立ち回るかは既に考えているよ。この試験のルール、優待者の仕組み、4通りの結果の出し方。それらの要素を熟知していれば、この試験はとても面白い演目になる」

これから起こる展開を頭の中で思い浮かべながら、柚椰はカラカラと笑う。

彼の態度から榎田はこの試験の行く先を察した。

恐らくきつと、この試験は目の前の男が思い描いた展開になるのだろう、と……

「さて、君のいるEグループのメンバーはどうなっているのかな？」

「うん、ちよつと待ってね」

榎田は用意されていたルーズリーフに自分の属しているグループのメンバーを書き込んだ。

蛇グループ

Aクラス：五十嵐正人 岸田裕子 小林裕介 武田遥

Bクラス：折原直志 紀田美優子 竜胆幸仁

Cクラス：金田悟 冴島実 椎名ひより

Dクラス；榎田桔梗 白石愛美 三ヶ島沙優

「はい。これが私のグループだよ」

櫛田は書き終えたルーズリーフを柚椰に手渡す。

渡された紙に目を通した後、柚椰はテーブルにそれを置いた。

「優待者の発表は明日の朝。まずそこでうちのクラスの優待者を把握するところからスタートだ。これは平田や鈴音も分かっているだろうからわざわざ説明しなくても勝手に情報が集まるだろう。だから桔梗には、今から全グループのメンバーの情報を集めてほしい」

「メンバーの？」

「優待者の情報は勿論重要だ。しかし、各グループのメンバーの情報も同じくらい重要なものなんだ。出来れば今日中に情報を集めて俺に報告してほしい。無理なら明日の朝でも構わないよ」

「ううん。それくらいだったら多分すぐに集められると思う。だから大丈夫だよ。同じクラスの子に聞けばいいのかな？」

「基本的にはそうだね。でも、今から言う生徒には聞かなくていい」

そう言うのと柚椰はその特定の生徒の名前を挙げた。

「綾小路、軽井沢、外村、幸村。この4人にはコンタクトを取らなくていい。彼らが属しているグループの情報は既に持っているからね」

試験説明の翌日。綾小路は朝食を摂るために船内のカフェを訪れた。

船内には他にも食事の摂れる施設が存在する。

生徒たちの間ではレストランのビュッフェが人気だった。

人混みがあまり好きではない綾小路はビュッフェを避け、早朝あまり生徒が訪れないカフェに来たのだ。

そのカフェの中でも日陰の、人のいないテーブル席に座りながら彼は人を待っていた。

数分ほどそうしていると、彼のいるテーブルに件の相手がやってきた。

「おはよう清隆」

「おはよう綾小路君」

「ああ。おはよう柚椰。それと、堀北もおはよう」

やってきたのは柚椰と堀北だった。

2人は綾小路の向かいに腰を下ろす。

「もう先に注文してる？」

「いや、2人を待っていたからな。まだ何も」

「そっか」

「なら早速、試験について話し合しましょう」

3人がここに集まったのは試験について意見を交換するためだった。

そのため堀北は早く本題に入るよう促す。

彼女の言葉で男子2人も真剣な表情になる。

「それで、柚椰と堀北は同じグループだったってことでもいいのか？」

「ああ、ルールについても事前に聞いていたものと同じだった。12

のグループで4つの結果の内どれかを選ぶ」

「そして今日の朝8時……つまりもうすぐ優待者の発表があるわ」

時刻は7時55分。つまり後5分で予定時刻になる。

「ところで、お前たちのグループのメンバーはどうだ？ 人数は？」

綾小路の質問に答えるように、堀北が紙をテーブルの上に出した。

「ここに書いてあるわ。見たら驚くと思う」

テーブルに置かれた紙を取り、綾小路は目を通す。

2人が属しているのは辰グループ。

そこに属している他クラスのメンバーを確認した。

「各クラスのリーダー格が揃っている感じだな」

「そうだね。でも、葛城や龍園がいるのに一之瀬がないのは意外だったな。てっきり彼女も辰グループにいるものだとばかり思っていた」

柚椰のその疑問に答えたのは綾小路だった。

「一之瀬は俺のグループにいるぞ。卯グループだ」

「へえ、ちよつとメンバーを教えてもらつてもいいかい？」

「ああ。俺も事前にメモしてあるから見てくれ」

綾小路は自分のグループのメンバーをメモした紙を2人の前に置いた。

卯グループ

Aクラス：竹本茂 町田浩二 森重卓郎

Bクラス：一之瀬帆波 浜口哲也 別府良太

Cクラス：伊吹濤 真鍋志保 藪菜々美 山下沙希

Dクラス：綾小路清隆 軽井沢恵 外村秀雄 幸村輝彦

「これはこれは、随分と意外な面々だ」

「そうね。この顔ぶれに一之瀬さんがいるのは違和感を感じるわ」

綾小路のグループを確認した2人は揃って意外といった表情を浮かべていた。

やはりこのメンバーの中で異彩を放っているのは一之瀬だろう。

Bクラスのリーダー的存在である彼女がここに当てがわれたのは何か意図があるのだろうか。

「Aクラスは葛城、Bクラスは神崎、Cクラスは龍園。そして俺たちのクラスからは平田と堀北と柚椰。辰グループにリーダー格を集めるつもりでグループ分けがされてるのは間違いないはずだ」

「だからこそ、一之瀬がいないことが気になるね……もしかしたら、何かしらの手が加わつたのかもしれない」

「学校側が一之瀬さんをあえて辰グループから外したってことかしら？」

「あるいはBクラスの担任の判断かもしれないね。グループ分けに担任の意向がある程度反映されている可能性もある」

「となると、卯グループで警戒すべきは彼女ってことになるわね」

「まあ今の所は推測でしかないね。グループ分けに法則があったとしても、それを確定できる要素はまだないだろう」

「問題は優待者が誰になるか、だな」

3人は時間を確認する。

あと数十秒で予定時刻の8時を迎える。

「もうすぐ時間ね。優待者は誰になるかしら……」

時刻が8時を迎えると同時に、3人の携帯が一斉に鳴った。

すぐに届いたメールを確認する。

ほぼ同時に内容を読み終わると、互いに携帯の画面を見せ合った。

『厳正なる調整の結果、あなたは優待者に選ばれませんでした。グループの一人として自覚を持って行動し試験に挑んで下さい。本日午後1時より試験を開始いたします。本試験は本日より3日間行われます。辰グループの方は2階辰部屋に集合して下さい』

『厳正なる調整の結果、あなたは優待者に選ばれませんでした。グループの一人として自覚を持って行動し試験に挑んで下さい。本日午後1時より試験を開始いたします。本試験は本日より3日間行われます。卯グループの方は2階卯部屋に集合して下さい』

柚椰と堀北、綾小路の受け取ったメールはほぼ同じだった。

グループが異なるため当然一部違うが、あとは同じ文章が並んでいる。

「優待者に選ばれていたら文面も違っているのかもな」

「そうかもしれないね。ともあれ、俺たちは全員優待者じゃないということだ」

「そうなるわね。喜ぶべきか悲しむべきか」

「優待者はやり方次第で全ての選択が許されるからな。意味のない仮定だが、この中の1人でも優待者だったら作戦も練りやすかったな」

「こればかりは俺たちにはどうすることも出来ないね」

「優待者に選ばれたかどうかは大きなポイントね。優待者以外の生徒は、誰が優待者なのか探らなければならない」

「柚椰、お前は どう見る？」

綾小路は柚椰に意見を求めた。

彼自身既に考えはいくつかあったが、協力者である柚椰の見解を聞

きたかったのだ。

「グループは全部で12。クラスは4つ。単純に考えればどのクラスにも優待者は3人いると考えるのが妥当かな」

「学校側が特定のクラスに優待者を偏らせることはないということか？」

「そうだね。偏ってしまったら、それこそ試験そのものが出来レースになりかねない。清隆も鈴音も、メールをもう一回見てみてほしい」
そう促され、2人は改めて携帯に目を落とした。

「このメールの最初の文面、『厳正なる調整の結果』と書いてある。優待者がプログラムか何かでランダムで選出されているのなら『厳正なる抽選の結果』と書いてもいいはずだ。にも関わらずメールには『調整』と書いてある。ということとは？」

「優待者は選ばれるべくして選ばれる、ということかしら？」

「そうだと俺は踏んでいるよ。試験を公平に執り行うためなのか、あるいは全グループとの兼ね合いなのか。意図は分からないが、優待者は学校側が考えた上で選んでいる可能性が高い」

「恐らくリーダー格の連中も同じ考えに行き着いているだろうな。もう幾つか戦略を練っているかもしれない。俺たちもどう立ち回るか早い段階で定めておかないと出遅れるぞ」

「分かっているわ」

堀北は言われるまでもないといった態度で返した後、考え込む素振りを見せる。

「昼に1回目のグループディスカッションがあるから、そこで顔を突き合わせてみれば他クラスの方針もある程度見極めることが出来る。無人島の時と同じように、他クラスの動きを知るのは攻略する上で必須だね」

「柚椰君が一番警戒しているのは誰かしら？ リーダー格が集中している私たちのグループは探りをいれる上で要だわ。意見を聞かせて」
堀北の問いに柚椰は暫し考えた後答える。

「この試験の複雑さから考えるとダントツで龍園だろうね。彼はDクラスにとって目先の障害であると同時に、脅威になると思う」

「同感だな。単純な学力において優秀なのはAクラスの葛城になるだろうが、警戒すべきは龍園の方だろう。何をしてくるか分からないからな」

「無人島の時と同じようにルールを逆手に取ってくるってことかしら？ 確かにそう考えると彼は危険ね」

「いい天気だな鈴音」

不敵な笑みを浮かべながらやってきた二人組。

まさに話の渦中にいたCクラスの龍園。そしてもう一人――

「気安く名前を呼ばないでと前に言わなかったかしら。それと……この前はうちのクラスが随分世話になったわね、伊吹さん」

龍園の隣には強気な目つきで3人を睨む女子生徒、伊吹の姿があった。

彼女は堀北の言葉に何か言うでもなく、ただ黙って龍園の横にいた。

やはり龍園が伊吹を従えているのは事実なのだろう。

「メールが届いたと思うが結果はどうだったんだ？ 優待者にはなれたか？」

「教えるわけないでしょう。それとも、聞けば貴方は教えてくれるのかしら？」

「お望みとあればな」

龍園はそう言って隣のテーブルにある椅子にどっかりと腰を下ろした。

「昨日の様子じゃ、葛城は随分とDクラスを警戒している様子だったな」

「無理もないわ。眼中になかった相手が自分たちを差し置いて1位を取ったんですもの。自惚れていた自分を恥じているんでしょう」

「ククツ、違えねえな。だが、アイツは自分が惨敗したタネまでは掴めてねえ。所詮はその程度の奴ってことだな」

龍園は葛城を取るに足らない相手だと見下していた。

既に彼にとって葛城は敵に値しないのだろう。

「あら、その口ぶりだと貴方は分かっているようね」

「ああ。そのクソ野郎が一枚噛んでるってことは知ってるぜ？
ルールの穴を突くとはテメエもやるじゃねえか、黛」

「お互い様だろう？ 君も随分と大胆な作戦を立てていたじゃないか」

「ククツ、今回の試験も精々俺を楽しませてくれよ」

「まあそれについては昼にでも話そうか。AクラスやBクラスの動向は君も気になるだろう？」

「まあな。あの葛城がどう足掻くのか、イイ子ちゃん共がどんな作戦を立ててるのかは興味がある」

話すことは終わったのか龍園は席を立った。

「じゃあな。また昼に会おうぜ」

そう言っただけは伊吹を引き連れて去っていった。

「俺は最後まで眼中になかったな……」

終始居ないものとして扱われていた綾小路がポツリと呟く。

「あら、目立つことを嫌う貴方がそんなこと思うだなんて意外ね」

「まあいくら清隆でも、目立たないのと無視をされるのでは違うってことなんだと思うよ？」

「ともあれ、どうやら俺たちが龍園を警戒しているように、向こうも俺たちを警戒してるってことが分かったな」

気を取り直して綾小路は元々話していた内容に戻った。

「もしかしたら、俺たちは彼に見張られているかもしれないね」

「合流するにしたらタイミングが良すぎる、ってことかしら？ 確かに言われてみれば間が良すぎるわね」

「元々マークされていた柚椰と、何故か気に入られている堀北。二人と早々に合流したことで俺もマークされるかもな」

龍園が柚椰と堀北をマークしていたとしたら。

Dクラスに存在する脅威として二人を見張っていたのだとしたら。

二人と真っ先に合流した綾小路にも疑惑の目が向けられるかもしれない。

陰に徹するつもりだった彼にとって、今回のそれは大きなミスに

なったかもしれないわね。

その懸念は柚椰も感じていたのか、その表情は少し硬い。

「迂闊だったね……清隆が頭のキレる奴だということがバレるかもしれない」

「ここで考えていても仕方ないわ。今は試験のことを考えましょう」

堀北は試験のことに集中すべきだと主張し、話を打ち切った。

気がつけば優待者発表から数十分が経過しており、デツキにも生徒の姿がちらほらと見られ始める。

「話し合いはひとまず終わりだな。俺はまだ眠いから部屋に戻ることにする」

「これからは話し合いの場所を考えたほうがいいかもしれないわね。どこで誰が聞き耳を立てているか分からないわ」

「女子の部屋に出入りするのは不味いから、やるなら俺か清隆の部屋だね」

「俺の部屋には平田や幸村もいるから意見を聞くこともできる。やるなら俺の部屋が良いと思うがどうだ？」

「そうだね。じゃあとりあえず1回目のグループディスカッションが終わったら報告し合おうか。夜の2回目の前にグループの雰囲気をお互い知っておこう」

その提案に綾小路と堀北は頷く。

3人はそこで別れ、各々の部屋へと戻っていった。

時刻は12時50分。予定時刻の10分前に平田と堀北は指定された部屋に入った。

室内にはまだ誰もおらず、二人が一番乗りらしい。

部屋には円を作るように椅子が並べられており、テーブルは壁に寄せてあった。

「まだ誰もいないみたいだね。座って待ってようか」
「そうね」

二人は空いている席に適当に座る。

「そういえば黛君は？」

「さつき連絡したら用事があるらしいわ。時間通りには来るって言うってたけど」

「そつか。あと10分だから、もうすぐ来るんじゃないかな」

平田がそう言うと同時に部屋のドアが開かれて生徒が入ってくる。

「なんだ、もう来ていたのか」

やってきたのは神崎だった。彼の後ろには同じBクラスであろう生徒が二人いる。

「僕たちも今来たばかりだよ」

「そつか。黛は？」

「ちよつと用事があるみたい。もうすぐ来るんじゃないかな」

そうこうしているうちに、他の辰グループの生徒も次々と室内に入ってきた。

葛城や龍園もクラスのメンバーを引き連れてやってくると空いている席に腰を下ろす。

残る空席は堀北の隣にある椅子一つだけになった。

時刻が12時59分を指し、予定時刻1分前になったギリギリのタイミングで最後の一人が入室してきた。

「つと、ギリギリ間に合ったみたいだね」

辰グループ最後の一人である柚椰は入ってくると急いで堀北の隣に腰を下ろした。

彼が座ると同時に船内アナウンスが響き渡る。

『ではこれより1回目のグループディスカッションを開始します』
簡潔で短いアナウンス。多くは語らないということだろうか。

当然、状況も周りのメンバーもよく分からないグループ内では誰も率先して話そうとしない。

「えっと、とりあえず学校からの指示通りに自己紹介でもしようか」
場の空気を変えるべく平田が声をあげた。

しかし殊の外グループのメンバーの反応は悪い。

「ルールにあることはやっておいた方がいいかもしれないね。学校の

中と同じように監視カメラがあるかもしれない。あるいは盗聴器が仕掛けられていることもあり得る」

「確かに。やれと言われたことを無視した結果、全員にペナルティがあるかもしれないからな。ここは指示通りに事を済ませた方がいいだろう」

柚椰と神崎がそう言うのと、AクラスとCクラスにも動きが見られた。

「そうだな……簡単な自己紹介くらいは済ませたほうがいいだろう」

「チツ、面倒くせえ」

葛城と龍園がとりあえず応じる姿勢を取った事で彼らと同じクラスの生徒も応じるような態度を取る。

その後、提案者の平田を皮切りにぐるりと一周する形で自己紹介が行われた。

しっかりと行う者や名前だけを名乗った者などやり方は分かれたが、ひとまず最初の指示は消化した形になった。

自己紹介が終わると再び静寂が訪れる。

これ以上は誰も多くは語ろうとはしなかった。

「これで学校からの指示は果たしたと思う。あとはこのグループの方針を話し合おうよ。僕としては全員で協力して結果1を目指したいと思うんだけど、どうかな？」

進行役を買って出た平田が全員にそう促す。

各クラスの意見を出し合ってもらうためにひとまず自分の意見を述べたようだ。

「4つの結果のうち、最もメリットが大きいのが結果1だからな。全員に巨額のプライベートポイントが行き渡れば全員にメリットがある」

神崎も平田の意見には概ね同意しているのか、そんな事を言った。「確かに平田の言う通り、結果1が最も望ましい結末であることは明白だ。だが、俺たちAクラスは全員沈黙させてもらうことにする」

平田に同意する形を取りながらも、葛城は余計なことは話さないという方針を取った。

彼がそう言ったことで室内の空気が変わる。

「それはどういう意味かな？」

「余計な話し合いをせず、試験を終えるべきだということだ」

そう言うのと葛城は立ち上がり、室内の生徒全員を見渡す。

「この試験で避けなければならぬこと。それは裏切り者を生み出すことだ。裏切りが成功しようと失敗しようと、どちらにせよ敗北だ。だが、それ以外の答えの場合はどうなる？」

「マイナスになる要素は存在しない、ってことかな？」

葛城の問いに平田が答える。

「そうだ。残りの2つの結果にはデメリットがない。クラスポイントが詰まることも開くこともない。その上大量のプライベートポイントが手に入り潤う。学校側しか負担を負うことはないということだ。ならば、わざわざ優待者を見つける必要はない。話し合ってしまうことで、周囲の面々を優待者だと疑い、過ちを犯してしまう方がよっぽど危険だと俺は思う」

その主張は尤もらしいものだった。

しかしその葛城の弁に堀北が異を唱える。

「尤もらしいことを言っているようだけど、それってつまりクラスポイントのボーナスを他のクラスに取られたくないってことでしょう？ 結果1と結果2によって発生するボーナスはどちらもプライベートポイントのみ。それを目指す方針を取れば他のクラスに出し抜かれることもない。先の特別試験での失態を取り繕っているつもりなのかしら？ だとしたら滑稽ね。私たちDクラスは勿論、BクラスもCクラスも、いつまでも今の位置で留まるつもりはないわ」

「それは——」

「俺も堀北と同意見だな。あと何回特別試験が行われるかも分からない今の現状で、みすみすチャンスを手を振るつもりはない。昨日も言ったが、いつまでもAクラスに居座れると思ってほしくはないな」

堀北の主張に神崎が続く。

「どうやら彼はAクラスを追い越したい気持ちが強そうだ。」

「なら反対というわけか。先に言っておくが、既にAクラスの方針は」

固まっている。それはどのグループでも同じだ。如何なる理由があつても話し合いには応じない事を覚えておけ。お前たちが結託して話し合うなら好きにすればいい」

「どうやらAクラスは葛城を中心としてとことん守りに入る方針らしい。」

「話したいことは話し終えたのか葛城は腕を組み椅子に腰を下ろしてしまった。」

「ハッ、なんだよ。前回の試験でビビっちまったつてののか?」

「葛城の方針が可笑しくてたまらないのか龍園が挑発する。」

「……好きに捉えてもらつて構わない」

「穏健派もここまでくるとただのヘタレだな。それじゃあ坂柳には勝てねえぞ?」

「……」

坂柳の名前を出されたことで葛城の眉間に皺が入る。

龍園は的確に葛城の地雷を踏んだようだ。

「ククッ、どうして惨敗したかも分からねえで挙句守りに入るしかねえとはな。これじゃあAクラスのリーダーは決まったも同然だな。なあ?」 黛

龍園が柚椰に問いかけたことで室内の視線が一気に彼に集中する。

「……」 応聞いておくけど、どうして俺に聞くんだい?」

これから起こる事を薄々察しながらも、柚椰は龍園に問いかける。すると龍園は心底楽しそうにニヤリと笑うとその問いに答えた。

「そりゃあ、テメエがAクラスをボロカスに負かした張本人だからに決まつてんだろ?」

彼らは試験の仕組みを考察する。

「そりゃあ、テメエがAクラスをボロカスに負かした張本人だからに決まってんだろ？」

1回目グループディスカッションの場で、龍園は衝撃の事実を暴露した。

Dクラスの勝利に柚椰が関わっていることを知っているのは、Dクラスの生徒と龍園、そして伊吹だけだ。

しかし龍園が言いたいのは単にDクラスが勝った理由ではない。

Aクラスを負かした、つまり彼らの成績が振るわなかった原因だと言うのだ。

当然寝耳に水だと言わんばかりに室内がざわつく。

「どういふことだ龍園……」

一番驚いているのはやはり葛城だった。

驚倒を前面に押し出したような表情は、普段の彼らしくない。

そんな葛城を龍園は鼻で笑う。

「ここにいる奴らは全員知っておいて損はねえぞ。そのクソ野郎が先の特別試験で何をしてやがったのか。これから3日は嫌でも顔を突き合わせるんだからな」

ニヤニヤと笑う龍園に一同の関心が向く。

「何故Aクラスの敗因に黛が関わっていることをお前が知っているんだ。先の試験ではCクラスは早々にリタイアしてたんじゃないのか？」

一同を代表して神崎が問う。

「ククツ、分からねえだろうから順を追って説明してやるよ。まず俺は試験開始直後に葛城とある契約を結んだ」

「——っ！ 龍園」

内容をバラされなくなかった葛城は思わず止めに入る。

「契約には内容を漏らしてはいけない、なんて項目はなかったぜ？」

なら俺がここで暴露しようが契約違反にはならねえはずだ」

「くっ……！」

ぐうの音も出ない正論に葛城は口を噤む他ない。

「俺たちCクラスは300ポイント全てを使って早々に試験を切り上げる方針を取った。」

だが、その内の200ポイントはAクラスが使う物資を代わりに購入するために使ったのさ。これで葛城は自分のクラスに当てがわれたポイントを使わずにまんまと物資を手に入れたってわけだ」

「なるほどな……他クラスが購入した物資を提供してもらおう形ならポイント消費を抑えられるってことか」

初めて知ったAクラスの作戦に神崎は素直に感心していた。

「でも、それだとAクラスにしかメリットが無いよね？　メリットが無い契約を君が結ぶとは思えない」

「聡いな平田。俺がAクラスに求めたのは毎月のポイント献上だ。物資の提供ともう一つのある条件を満たした場合、Aクラスは毎月ポイントポイントポイントを俺に渡すって契約だ」

「そうか、それで君と葛城君は契約を結んだってことなんだね？」

平田を始めとする生徒の視線が葛城に集中した。

この場にいる彼以外のAクラスの生徒は皆彼の派閥に属する生徒なのか、その内容に驚いてはいない。

事前に内容は知らされていたのだろう。

もしこの中に坂柳派が一人でもいればこの場で言い争いに発展していたかもしれない。

「それで、もう一つの条件っていうのは何なんだい？」

「それはな、BクラスとDクラスのリーダーの情報を提供するって条件だ」

「——！」

龍園の言葉に神崎率いるBクラス、そして平田と堀北はようやく気づいた。

特別試験中に両クラス共Cクラスの生徒を一人ずつ保護した。

後になってその生徒がスパイだということが分かったのだが、それ

はAクラスとの契約のためだったのだと気づいたので。

「お前たちのベースキャンプに送り込んだスパイは俺がリーダーを知
るためでもあったが、葛城に情報を渡すためでもあったわけだ。結
果、俺はリーダーを知るに至ったわけだが……葛城、テメエは何かに
気づかぬえか？」

「なに？」

「俺は試験6日目の夜にテメエに情報を渡した。それで契約は成立
し、俺はこれから毎月テメエらAクラスからポイントを貰うことが出
来る」

「……ああ、Dクラスの情報を得た以上、契約は果たした。契約内容に
はBとDどちらも情報を得た場合とは記載されていなかった」

「そうだな。だが……俺はDクラスのリーダーは当てにいかなかっ
た」

「――！ お前……まさか」

何かに気づいた葛城は龍園を睨む。

ただならぬ雰囲気室内の空気がピリついた。

「そうだ。俺はBクラスのリーダーの情報を持っていた。だが、テ
メエには教えなかった。何故だか分かるか？」

「……」

「正確には教えなかったんじゃないやねえ。教えられなかったのさ」

「どういうことだ？」

「俺はテメエと契約を結んでから情報を提供するまでの間に、別の人
間とも契約を結んでいた。本来Aクラスに渡すはずだったBクラス
の情報をくれてやる代わりに、Aクラスの情報を提供してもらおう契約
をな」

「なんだと……!?!」

「――つ、柚椰君、貴方まさか」

困惑する葛城を他所に、いち早く真相に気づいた堀北が柚椰を見
る。

彼女のその反応に口角を上げながら龍園は詳細を明かした。

「そう。俺は黛と契約したのさ。どういうわけかコイツはAクラスの

リーダーを知ってやがったからな」

「……まあ、葛城との契約をバラしたから俺のことも言われるだろうとは思っていたけど、随分と呆気なくバラすね龍園クン」

暴露されたにも関わらず柚椰はどこか面白そうに笑っていた。

「僕はAクラスの情報を持って俺にコンタクトを取りに来た。コイツが提示した取引内容は『Aクラスの情報を提供する代わりにBクラスの情報を提供してもらう』こと。ただし、取引で使った情報は他クラスとの取引に使ってはいけないという条件付きだな」

「情報のトレード……しかもその条件は」

「ああ、コイツは俺と teme が密約を交わしていたことも見抜いてやがった。だからそれを踏まえた上での条件を提示したってわけだ」

「……じゃあ、僕は最終的に全てのクラスのリーダーを知ってたってことかい？」

平田が問うと、皆の視線が柚椰に向いた。

「そうだね。俺は最終的に全クラスのリーダーの情報を持っていた。協力関係を結んでいたBクラスの情報もね」

「だが解せないな。先の試験でDクラスと俺たちBクラスの点差は僅か22ポイントだった。もし俺たちのリーダーが誰か知っていたなら、もっと点差は開いていたはずだ」

神崎は試験結果を覚えていたためか不審な点に気づいた。

彼は試験終了時の自分たちのクラスの残りポイントを把握していた。

それを踏まえても先に明かされたことと点数とが一致しなかったのだ。

彼のその問いに答えたのは龍園だった。

「そりゃあそうだろう。なにせコイツは自分が使わねえ情報をわざわざ取引で貰ったんだからな」

「どういうことだ？」

「気づかぬえか？俺と僕は結んだ契約の条件は情報を使った他クラスとの取引の禁止。これで葛城はBクラスの情報を手に入れることが出来なかった。これが何を意味するか」

「……まさか……」

「ククツ、Aクラスが情報を得ていればお前らBクラスは2クラスからリーダーを当てられてマイナス100。だがお前らとDクラスは協力関係だったらしいじゃねえか。その前提と、先の取引の条件での情報の占有性を考えれば結論は自ずと出てくる。要はコイツはテメエらBクラスを守るために、こんな頭のおかしな取引を持ちかけてきやがったのさ」

「……本当なのか、黛？」

神崎が問うと、柚椰はコクリと頷いた。

「BクラスのベースキャンプでCクラスのスパイを見つけた段階で、俺はAクラスの情報しか持っていなかった。もしAクラスに情報が渡ればBクラスはマイナス100ポイントが確定する。だから俺はまず一之瀬にAクラスのリーダーを教えた。この情報を開示するにあたって、俺は彼女に対価を求めなかった。つまり、一方的に俺が教えただけのことである以上、龍園との契約違反にはならない。その後、龍園との取引が成立すればBクラスの情報は龍園と俺しか知らないことになる。でも俺はBクラスのリーダーを当てにくつもりは最初からなかった。だから、BクラスはCクラスにリーダーを当てられたマイナス分を、Aクラスのリーダーを当てたプラス分で確実に相殺出来る。5日目に俺が一之瀬にスポットの情報を教えたのは、スパイに確実にBクラスの情報を手に入れてもらうためでもあったんだ。Cクラスがリーダーの情報を掴んだかどうか分からなければ手の打ち用がなかったからね」

「それでわざわざ未占領のスポットの情報を教えたのか？」

神崎は5日目にベースキャンプで一之瀬が言った新しいスポットのことを思い出した。

「明確な隙を作っておけば、取引のタイミングも掴めるからね。確実にBクラスがプラスマイナスゼロに出来るように場を整える必要があったということさ。まあ占有によるボーナスポイントは無くなってしまったけど、最悪のケースは回避させることができたんだ」

「だが、俺が言うのもおかしな話だが所詮は口約束だろう。書面に起

こしたわけでもない協力関係を守る必要があったのか？ 全てのクラスを出し抜いて自分のクラスを勝たせることも十分可能だったはずだ」

「これまでもBクラスには色々世話になっていたからね。ここで裏切ったらそれこそ恩を仇で返すことになるだろう？ 試験中も物資を提供してもらっていたから、目の前の脅威を叩いて潰すくらいはさせてもらっただけのことさ」

「……すまない、恩に着る」

結果としてクラスが救われたのは確かなため、神崎は素直に礼を述べた。

「俺は元々葛城にくれてやる情報を渡すだけでAクラスの情報が手に入り、最終的に全てのクラスのリーダーを知ることが出来る。なんのデメリットもねえ取引だから乗ったってわけだ」

「結果、AクラスはB，C，Dクラスからリーダーを当てられてマイナス150ポイント。さらにDクラスのリーダー当てを間違えてマイナス50ポイント。合計でマイナス200のペナルティを喰らってしまったわけだね」

そこで葛城は先ほど龍園が言ったある言葉が引つかかった。

「待て龍園、さっきお前はDクラスのリーダーを当てなかつたと言っただな？ 何故だ」

「決まってるんだろ。Dクラスのリーダーがコイツだったからだ。考えてもみろよ。俺とテメエの密約を見抜き、自陣に入り込んだ他クラスの間人がスパイだと見抜けるコイツが、みすみすリーダーだとバレるようなヘマををすると思うか？ 何か裏があると考えるのが当たり前だろうが」

「……では、お前はそれに気づいていながら俺にはその情報を教えなかつたというのか」

「俺がコイツの罠に気づいたのはテメエにリーダーを教えた後だ。尤も、気づいていてもわざわざ教えてやる義理はねえだろ？ 契約違反さえ犯さなければ俺はポイントが手に入るからな。テメエらAクラスが負けようがどうでもいい」

「ふふっ、君らしいね龍園クン」

「言つてろ。葛城、これで理解できたか？ テメエらAクラスを嵌めたのが一体誰だったのか」

「……ああ、Dクラスで最も警戒すべき相手が誰なのかはよく理解した。だが、その上で今一度宣言させてもらおう」

そう言つて葛城は険しい表情で柚椰を見た。

「黛、お前が油断ならない相手であることは理解した。だが先の試験のように上手くいくとは思わないことだ。結果的にこうしてお前の実力が明かされた以上、俺たちAクラスは勿論他のクラスもお前を警戒することになる。お前の動きを具に監視する者さえ現れるかもしれない。精々気をつけることだ」

宣言布告と忠告を行う葛城に対して柚椰はカラカラと笑った。

「ふふっ、穏健派の君らしいね。ご丁寧に忠告するなんて。でも、俺ばかり警戒していると足を掬われるかもしれないよ？ それだけ今回の試験は一筋縄ではないかない。守るも攻めるもね」

「ククッ、その口ぶりだとテメエはもうこの試験の算段を立ててるようだな」

「さあ、どうだろうね」

問いに対して意味ありげな返答をする柚椰に龍園はニヤツと口角を上げる。

「なら質問を変えるぞ。今回の試験、テメエはどのクラスが有利だと思おう？」

「——」

その質問に周りの関心が一気に引き寄せられた。

先ほどの話で柚椰が暗躍していたのは白日の下に晒された。

彼が優秀であること、そして油断ならない人間であることはこの場にいる全員が理解した。

その上でなされた龍園の質問は全員の関心を引くには十分過ぎた。

柚椰の見解はこの試験の攻略において役立つかもしれないと誰もが思ったのだ。

全員の視線が集中する中、柚椰は暫し考えた後に見解を述べた。

「今回の試験、まず一番有利なのはCクラス。つまり君だね」
「ほう、どうしてそう思う？」

自分が最も有利だと言われたことに気を良くしたのか龍園は心なしか機嫌が良さそうだ。

逆に神崎や葛城はどうしてCクラスが有利だと言ったのか分からず不可解そうな表情を浮かべている。

「この試験で重要なことは当然ながら優待者の存在だ。どのグループにも優待者が1人いる。グループは全部で12。単純に考えればどのクラスも3人の優待者を抱えることになる」

「そうだな。学校側が特定のクラスに優待者を偏らせることはしないだろう」

葛城もその点は考えていたようで腕を組んで頷く。

「どのクラスも自分のクラスが抱える優待者を把握するのがスタートラインだ。まずこの時点でCクラスが圧倒的に有利になる」

「どういうことだ？ 何故その時点でCクラスが有利になる？」

神崎はどういうことかと首を傾げている。

「それは優待者の持つ選択肢の多さが関わってくるんだ」

「選択肢の多さだと？」

「まず優待者以外の人間が試験中にやることは何があるかな？」

「それは勿論、グループ内にいる優待者を特定することだろう？」

「そう。じゃあ優待者は試験中に何が出来る？」

「グループ内の全員に優待者であることを明かすか……あるいは最後まで隠すか、だな」

「その通り。優待者は全員でプライベートポイントを貰うか、自分だけが貰うかを選べる。まずこの時点で優待者は選択を迫られるんだ。試験終了まで誰にも優待者であることを明かさず、誰にも見抜かれることがなければポイントは自分だけが貰うことが出来る。貰える額が額だからね。黙ってさえいれば一気に自分だけ懐が潤う。それこそ同じクラスと同じグループの人間にさえ黙っている可能性がここで生まれるんだ」

「だが、結果2で優待者が貰えるポイントは結果1の半分だぞ。どう

せなら全員で結果1を目指したほうがメリットは大きいんじゃないのか？」

Aクラスの一人がそう問いかける。

しかし柚椰は首を横に振った。

「こういう発想で動く人間は、そもそも全員で協力してポイントを貰うなんて考えないんだ。自分だけ、自分一人だけが甘い蜜を吸われればそれでいいと考える。相手がクラスメイトだろうが関係ないんだ。何故ならこの試験は、終わった後も優待者が誰だったかなんて発表されないからね」

「なるほどな……つまり同じクラスの中でも優待者だと素直に名乗り出ない可能性があるってことか。だが、それで何故Cクラスが有利だと思うんだ？」

「優待者だと一発で分かるものが一つだけあるだろうか？」

そこで神崎があることに気づいた。

「……そうか、学校からのメールだな？」

「そう。学校からのメールは弄ることも削除することも禁止とされている。つまり携帯の中にそのまま残しておかなければいけないんだ。だから携帯を確認すれば、誰が優待者なのかは簡単に把握することが出来る。勿論こんなことは常識で考えればしてはいけないことだけ……君ならやるだろうか？ いや、もうやるつもりだったかな？」

柚椰はそう言って龍園を流し目で見ると、彼は不敵に笑った。

「ククツ、テメエと俺は考え方が似てるらしいな。まあ、やり用はいくらでもあるとだけ答えておくぜ」

「予想通りの返答をありがとう。と、まあ本人がこんな感じだから察せられると思うけど、強引にでも確実な情報を集められる点で彼は有利だということだよ」

「そうね。携帯を見せることに文句を言うクラスメイトを黙らせるくらいはやってのけるでしょうし」

「俺を理解してくれてるようで嬉しいぜ鈴音」

「貴方のやり方は悪い意味で有名になっているだけよ」

ニヤニヤしながら見てくる龍園をバツサリ切り捨てる堀北。

鬱陶しいとでも言うような態度は取りつく島もない。

「つまり自分のクラスの優待者を知る上で、確実に情報を集められるCクラスが有利だということか」

一通り話を聞いた葛城は考え込むように腕を組んだ。

柚椰の見解は概ね納得できるものだったようで、彼もまた何か思うところがあるらしい。

それは他の面々も同じのようで、神崎は手を顎に当てて考え事をしていた。

各々が考えを巡らせている中、1時間が経過したことを知らせるアナウンスが船内に響いた。

「時間のようだ。では俺たちは先に失礼する」

アナウンスを聞くや否や、Aクラスの面々が揃って退出した。

後続くように龍園率いるCクラスも部屋を出て行く。

「俺たちも失礼するぞ」

Bクラスも退出するつもりなのか神崎がそう言って席を立った。

「うん、じゃあまた夜にね」

席を立った神崎に平田が別れの挨拶をした。

それに対して微笑んだ神崎だったが、一転して真剣な表情になると視線を柚椰へと移した。

「黛、先の特別試験でBクラスを守ってくれたこと、改めて感謝する」

「気にしなくていいよ。今回はたまたま上手くいっただけだ。次はどうなるか分からないからね」

「フツ……一之瀬がお前を気に入っている理由が分かった気がするよ。じゃあな」

最後にそう言い残して神崎たちは部屋を出て行った。

室内にはDクラスの3人だけが残った。

「私たちも帰りましょう。考えを纏めておく必要があるわ」

「そうだね。どのクラスも今回のグループディスカッションの感触を報告し合うだろうから」

先んじて退出した3クラスの雰囲気から、平田はこの後彼らが取る行動を察していた。

「平田、清隆から聞いてるかもしれないけど、作戦会議は君たちの部屋でやることになったんだ」

「うん、話し合いの前に聞いたよ。僕も幸村くんもそこは大丈夫。高円寺くんは……」

平田は申し訳なさそうな顔をしたが、無理もないと柚椰は微笑んだ。

「まあ高円寺は一人で何かしらやると思うよ。部屋にも寝に帰ってるだけだろう?」

「うん、まあね。日中はほとんど船内の施設で過ごしてる感じかな。たまに他のクラスの女の子と談笑してるのは見るけど、基本は一人で過ごしてるかな」

「彼も彼なりにこの試験を乗り切るだろうさ。攻略法はいくらでも思いつくだろうからね」

その意味ありげな口ぶりに堀北が反応する。

「もしかして、柚椰君も既に攻略法を見出しているの?」

そう問いかけると柚椰はふわりと微笑んだ。

「さあ。今はまだなんとも言えないな。ただ、6回あるグループディスプレイスカッションは、なにも優待者が誰かを探るだけのものじゃないということは確かだね」

「どういうことだい?」

「それについては部屋で話そうか。平田、今からクラスにメールを回して優待者だったかどうか聞いておいてほしい。桔梗にも同じことを頼んでおく。君は女子に、桔梗は男子に聞いてもらいたい」

「分かった。じゃあ早速メールしておくよ」

平田は携帯を取り出すとメールを打ち込んだ。

午後2時30分。綾小路と平田の部屋に一同が集った。

当初の面子である綾小路と堀北と柚椰以外にも平田と幸村、それと

櫛田もいた。

櫛田は柚椰が呼んだのだろう。それを証拠に彼女は柚椰の隣に腰を下ろしている。

「じゃあ早速始めましょう。夜までにクラスの方針を固めるべきよ」

堀北の号令で話し合いが始まる。

「まず他のクラスの情報だ。葛城は今回の試験、グループディスカッションでは沈黙を貫いて裏切り者の発生を防ぐ方針みたいだね。そしてそれは他のグループにいるAクラスの生徒にも徹底させてるよ
うだ」

「ああ。卵グループにいるAクラスの奴らもそんな感じだった。だからAクラス全員に同じ指示が出されてると考えていいと思う」

綾小路は自分のグループにいるAクラスの雰囲気を感じ浮かべながら見解を述べた。

「私のグループも同じかな。全く会話に参加しない感じっていうか」

櫛田のいるBグループも同じ状態らしい。

「どうやらAクラスは先の試験での失敗をここでなんとかしても補うつもりみたいね。でも、そうだとっても攻めを放棄して守りに入るなんて底が知れるわ」

堀北は葛城作戦が弱気な姿勢に映ったのか鼻で笑っている。

そしてその発言に柚椰も同意する。

「同感だね。彼は他クラスに出し抜かれることを恐れているようだけど、裏切り者の本質に気づいていない」

「裏切り者の本質、って？」

意味を分かりかねた櫛田が問う。

「そうだ、さつき黛君が言ってたグループディスカッションの目的ってのは結局なんなんだい？」

「そうだね、そのことも含めて話そうか。前置きをしておくと、これは俺の個人的な見解だから鵜呑みにはしないでほしい」

そう前置きした後、柚椰は自分の見解を語った。

「まずグループディスカッションの目的についてだ。全部で6回あるこの目的の一つはグループに潜んでいる優待者を見つけること。」

これは誰もが分かることだね?」

「ああ、顔を突き合わせて会話をすることで優待者を炙り出すってことだろう?」

幸村がそう言うのと柚椰は頷く。

「そう。でもここに裏切り者の存在を仮定すると別の目的が出てくるんだ」

「どういうことだ?」

「まず、この試験で裏切り者と呼べるのはどんな行為をした生徒かな?」

「えーっと……試験が終わる前に優待者当てをしちやう人、だよね?」

柚椰の質問に櫛田が答えた。

他の面々も同じ答えなのか頷いている。

「そうだね。優待者の名前を打ち込んだメールを学校に送る。それが正解不正解に関わらず、その時点で結果3か結果4が確定する。葛城が恐れているのは、これによってクラスポイントが変動することだ。自分のクラスの優待者が当てられてしまえば、一人につきマイナス50ポイントだからね」

「無人島でのリーダー当てと同じペナルティだね。各クラスに3人優待者がいると考えると最大で150ポイントもマイナスになってしまふ。葛城君はこれ以上クラスポイントを減らされたくないってことだよね」

「そう。だから彼はなんとしても自クラスの優待者を守るために奔走するはずだ。でも、だからこそ彼は疑わない。自らのクラスに属する優待者が、絶対に自分たちのクラスに協力することを、ね」

「……なるほど、そういうことね」

柚椰の言いたいことが分かったのか堀北は難しい顔をした。

綾小路も同じ結論に至ったのか何やら考え込んでいる。

「鈴音と清隆は分かったみたいだね。そう、葛城は気づいていないんだ。優待者自身が裏切り者になる可能性をね」

「どういうことだ? 優待者には回答権がないはずだろう。それにそれは優待者と同じクラスの人間にもだ」

幸村は意味が分かりかねているようで眉間に皺を寄せている。

「簡単なことだよ。つまり優待者自身が他のクラスの人間にこっそり名乗り出るんだ。『自分が優待者だ。早く学校に報告してくれ』とね」
「どうしてそんなことをする必要があるんだ？ 優待者が当てられた場合、ポイントが貰えるのは正解者だけだろう。それに当てられればクラスポイントがマイナス50。クラスにとってデメリットにしかならないじゃないか」

「Aクラスは二人のリーダー格が派閥争いをしていることは知っているだろう？ その前提を踏まえれば理由は明白だ」

「葛城を失脚させるために、もう一人のリーダー側にいる優待者の生徒が裏切るってことだな？」

綾小路のその発言に幸村は啞然とした。

自分が従っているリーダーのために自分のクラスの足を引くというのだから当然だろう。

なまじDクラスには表立った派閥争いがなかったためか理解できないといった顔だ。

「もしかしたら葛城派の中にも、既に彼を見限っている生徒がいるかもしれない。そういった生徒にとって、この試験の仕組みは実に動きやすいものなんだ。裏切ったところで学校は名前を公表しないのだからね」

「そういうことか……Aクラスも一枚岩じゃないってことだな」

理解出来ないが可能性としては確かにあり得ることだと幸村は納得したようだ。

「だからこそ、今のAクラスは狙いやすいってことだな？」

「そういうことだね」

綾小路の問いかけに柚椰はコクリと頷いた。

「でも問題は他のクラスよ。今回の試験ではBクラスも自分たちのことで手一杯でしょうし、そもそもこの試験は協力して乗り切れるものじゃないわ」

「うん……柚椰君の話の聞くと簡単な人狼ゲームじゃないってことだもんね」

堀北と櫛田は揃って難しい顔をしている。

普段馬が合わない二人だが、何故か息ぴったりである。

「とりあえず、まずは俺たちのクラスにいる優待者が誰か把握するところからだね。二人とも、優待者が誰か分かったかい？」

「うん、さつきメールで確認したけど、南君が優待者だって。午グループだよ」

「僕の方はなんとも……皆自分が名乗り出ることを躊躇してるのかもしれない」

櫛田は一人優待者の情報を得たようだが平田の方は収穫なしといった結果だった。

「残る優待者は二人……早く名乗り出てほしいわね。優待者が分からないと守りようがないわ」

「そうだね。でも、もしかしたら時間が経てば名乗り出てくれるかもしれない。分かり次第このメンバーで共有しよう」

「うん」

「分かった」

平田と櫛田は頷き、引き続いて優待者への呼びかけを行うことになった。

「だが、問題は他クラスの優待者をどうやって知るかだぞ。さつき黛が言ったことを踏まえても、Aクラスの奴が素直に教えてくれる保証はない。それにBとCにいる優待者を知るのは容易じゃないだろ」

幸村がそう言うと同は再び考える姿勢を取った。

するとそこで堀北が拳手をした。

「ねえ、これは私の推測だけどいいかしら？」

「うん、聞かせてほしい」

柚椰が促すと彼女は自分の立てた仮説を語り始めた。

「朝に私と綾小路君と柚椰君と一緒に優待者かどうかのメールを受け取ったわ。そこで柚椰君は言ったわよね？ 優待者はランダムで選ばれているわけじゃないかもしれないって」

「うん、言ったね」

「もし、もしもよ？ 学校側が考えた上で優待者が誰か選んでいるの

だとしたら……その選出方法には何かしらの法則性があるんじゃないかしら？」

「なるほど。つまりどのグループにも共通した法則がある、ということだね？」

「ええ。もしこれが本当だとすると、法則が何か分かればそこから芋蔓式に他のクラスの優待者を知ることにも出来ると思う」

その仮説に皆一様に頭を捻った。

「堀北さんの推測が当たっていたとしたら、優待者の情報がある程度手に入れば法則性に辿り着けるかもしれないね」

榎田は堀北の推測を踏まえてこれからの方針を示唆した。

その発言に綾小路も同意する。

「ああ。その為にもせめて自分たちのクラスにいる優待者くらいは早いうちに知っておく必要があるな」

「そのためにも残り二人の優待者には早く名乗り出てほしいわね」

堀北のその呟きに一同は揃って頷いた。

彼は火種を見つける。

話し合いが終わった後、各々は夜のグループディスカッションまでの間の時間を過ごすか考えていた。

平田は軽井沢から呼び出されたようで、早々に退出していった。

櫛田は友達との予定があるらしくこれまた足早に部屋を出て行く。

「私も部屋に戻るわ。何かあったら連絡して」

そう言い残して堀北も自分の部屋へ戻っていった。

「すまん、俺も呼び出しだ」

携帯を片手に綾小路が言った。

どうやら彼もこの後予定があるらしく、二人に言い残して足早に出て行く。

室内に残っているのは幸村と柚椰だけとなった。

「そういうえば、幸村と清隆のグループにいるクラスメイトは博士と軽井沢だったね。どんな雰囲気なんだい？」

柚椰がそう尋ねるや否や幸村は顔を顰めた。

その表情から凡その状況を察した柚椰だったが、彼を他所に幸村は不満をぶちまけ始めた。

「どうもこうも、最悪だ。博士は良いとしても軽井沢が酷すぎる。事前のメールすらロクに読まずに説明会に来るような奴だぞ？ 試験

説明も一々遮って好き勝手に文句を言う始末だ。おかげで真嶋先生から余計な注意をされる羽目になった」

「おや、それはよくないな」

「綾小路や博士だけだったら足並みを揃えることが出来たが、軽井沢は協力するどころか俺たちと関わりたくもないといった態度だ。さっきのグループディスカッションでも酷かったぞ」

幸村はそう言うと、数時間前のグループディスカッションのことを語り始めた。

『ではこれより一回目のグループディスカッションを開始します』
午前1時、アナウンスによって話し合いの開始が告げられたもの、室内には重たい空気が流れていた。

他クラスの人間と同じ空間に押し込められていることもあり、誰もが口を閉ざす。

そんな空気を変えたのはBクラスの一之瀬だった。

「はいちゅうもーく。大体の名前は分かっているけど、一応学校からの指示もあつたことだし、簡単に自己紹介しておこうよ。初めて顔を合わせる人もいるかもしれないし」

この場を仕切る役目を買って出た彼女は、嫌な顔一つせずにこやかに進行役をやった。

「今更自己紹介の必要なんてあるのか？ 学校側も本気で言ったとは思えない。したい奴だけがすればいいだろう」

Aクラスの町田という男子が一之瀬の提案に異議を唱える。

学校からの指示は強制のものではなく、しなくても構わないものだろうというのが彼の主張だった。

「町田君がそうしたいなら強制はしないよ。だけど、この部屋にマイクが仕込まれてるかもしれないよ？ 私たちが指示に従うかどうか確認しているかもしれない。そうなったときに不利になるのは指示に従わなかった人だし、もしかしたらグループ全体の責任になるかもしれないよ？」

そう言われれば異を唱えた男子も折れざるを得ない。

その後、一之瀬を皮切りに全員が自己紹介を行なった。

全員が短めの自己紹介を終えると、一之瀬は再び話を切り出した。「これで学校からの言いつけは果たせたかな？ それでこれからのことだけど、どうやって進めていこうか。私が進行役するのが嫌なら言ってもらえる？」

希望するならいつでも仕切り役を代わる用意があると彼女は問いかける。

しかし新たに名乗り出る生徒は現れなかった。

一之瀬の進行に不満を覚える生徒はいただろうが、率先して話すことで隙が生まれることを恐れたのだろう。

「特にいないみたいだから私が進めるね。まず初めにこのグループの方針を決めた方がいいと思うんだ。だからみんなに聞きたいことがあるから質問させてもらうね。私としてはみんなが優待者ではない、というのを前提に聞かせてもらいたいことなんだけど……この試験を全員でクリアする、つまり結果1を目指すのが最善だと思ってるかどうか聞かせて欲しいの」

そう言う彼女は今後の方針について独自の見解を交えて述べた。彼女のもといBクラスの方針としては、グループメンバー全員で協力して試験のクリアを目指すというもの。

つまりは結果1を目指すというものだった。

当然それは当たり前だと彼女の提案に多くの者が賛同した。

軽井沢や幸村、Cクラスの真鍋という女子も一之瀬の案に同調する。

「俺も同意見だ。折角グループになったわけだし、プライベートポイントも不足してる。出来れば協力してポイントが欲しいというのが本音だ。博士は？」

「もちろん、俺もポイントは欲しいでござるなーポイントがあれば今まで買えなかったアレやコレやが……！」

雰囲気壊さないように綾小路も賛同する姿勢を取り、博士も自分の欲求のために賛成した。

しかしその様子を疑念の目で観察していたのは、男子のみで構成されたAクラス一行。

各クラスの面々の意見を様子見していたようで、落ち着いた物腰で注意を促す。

「一之瀬、その質問はずるくないか？ 『自分が優待者でない』なら利点があるグループ報酬を期待したくなるのは当然だろ。それに堂々と裏切りを宣言する人間も普通じゃない。これじゃまるで優待者と悪人の炙り出しだ。とても適切な質問とは思えないな」

先ほども一之瀬に異を唱えていた町田が再び険しい口調で言った。

当たり前のように意見を聞き入れて答えたDクラスやCクラスとは明らかに違う。

一之瀬の話に疑問を抱き、誘導尋問のような質問を批判する。

それを聞いたBクラスの浜口と言う男子は落ち着いた様子で町田へ言い返す。

「試験としては妥当な質問じゃないですか？ 一之瀬さんは正直に答えろとも言っていないし、脅迫もしていません。嫌なら反対するなり、答えなければいいだけです」

冷静な切り口で批判するAクラスの生徒を牽制する浜口。

早くも舌戦合戦の様相を呈する中、町田はその切り返しに動じない。

「そうか。なら俺たちAクラスは全員沈黙させてもらうことにする」

町田とAクラスの生徒2人は腕を組んで拒否を示した。

釣られるようにまだ答えていなかった残りの面々も黙りを決め込む。

「ちよつと責め過ぎた質問だったかな？」

思いがけない拒否反応に、一之瀬は困ったような苦笑いを浮かべた。

「いえ、一之瀬さんの質問は至極普通かと。ただ彼らの警戒心が想像以上に強かっただけです。でも町田くん、適切な質問とはどんなものがあるか教えてもらえますか？ 拒否する以上は話し合いの代替案がなければこちらとしても納得しかねるのですが」

「話し合いの代替案？ そんなものはない」

浜口の意見を一蹴するように町田は答えた。

人任せに黙り込んでいるだけでは優待者は絞り込めない。

それは町田も分かっているはずだが、彼は腕を組んで警戒したままだった。

彼をはじめとするAクラスの面々は徹底的に話し合いには不参加の姿勢を取っていた。

「そうになると、不本意だけど場合によっては多数決で最終的なジャッジを決めることになるよね。質問に答えてくれない人たちを疑うこ

とになるし、優待者を当てずっぽうで指名するかも。それで納得できる?。」

一之瀬は純真に正面からAクラスとぶつかりに行く、しかしそのやり方は周囲と手を繋ぎ団結するというものだ。

周りの賛同を得つつ戦うため、このような状況では彼女は非常に強い力を発揮する。

実際この部屋にいる者の過半数が既に彼女の側についている以上、この場の主導権は彼女にあった。

「……脅しか?」

「勘違いはしないでね。私たちは話し合いがしたいだけ。何を話すのも答えるのも自由だけど、この試験で求められる舞台への参加、つまり土俵には上がってもらいたい」

「この試験、本当に話し合いで解決することか? 話をしていくうちに優待者が安易に正解を認めるとでも? それとも徹頭徹尾頭を下げて頼めば教えてくれるのか?」

「なら、他に方法はあるのかな?」

恐らく「ない」。存在しない。

それを分かっているからこそ、一之瀬は聞く。

しかしそれはAクラスにとっては望んでいた質問でもあった。

「——最初から最後まで話し合いを持たない。これが確実に試験をクリアする方法だ」

悩むことも躊躇うこともなく町田は語った。

彼の、というよりAクラスの作戦だとこの場にいる人間は確信した。

「どのクラスに優待者がいるのか、そんなことはどうでもいい。いや関係ない。話し合いを持たなければ絶対に勝てる。それが葛城さんの提唱するやり方だ」

そこから町田が語ったことはどのグループのAクラスの生徒が語ったこととも同じだろう。

裏切り者を生み出さないための徹底沈黙。

マイナス要素が存在しない結果1ないしは結果2を導き出す作戦。

そしてその作戦に反対する者も当然いた。

しかし、そんな反対もAクラスは聞き入れない。

とにかく徹底して沈黙を貫く。

それがこの試験におけるAクラスの総意だったのだ。

「なるほどね、察するに町田は葛城派の人間ということか。恐らく他の2人も」

幸村が話を一旦そこで区切ったのをきっかけに柚椰が意見を述べる。

それに幸村も同意するように頷いた。

「そうなるな。あいつの口ぶりからも、単にリーダーだから従ってる感じじゃない。心から葛城を信頼しているというか、尊敬している感じだった。竹本や森重も、葛城の作戦を必勝法だと本気で信じている雰囲気だ」

「元々Aクラスにおける葛城派はそれこそもう一つの勢力と拮抗していたほどの勢力だ。単純に考えてもクラスの半分。20人近い生徒が彼に与していると考えたほうがいいね」

「だが、この前の試験の結果を受けてそれが揺らぎつつあるっていうのがお前の見解なんだろう？」

「そうだね。だって考えてもみてほしい。もし君がAクラスの生徒だったとして、同じくらい優秀なリーダーが2人いて、片方のリーダーが不在の中、もう片方のリーダー主導で試験を行った結果他のクラスに惨敗した。君ならどう考える？」

「……もう片方のリーダーが居たら、結果は違っていたかもしれない」
「たらればでしかないが、そう考えてしまうこともあるだろうと思いつつ、幸村は自分の意見を言った。

「そうだね。勿論それは意味の無い仮定だ。結果は既に出ている以上、今更何を言ったところで状況は変わらない。しかしその結果は確実に、彼らの心に黒い影を落とす。たった一回の敗北。そう、たった

一回だ。でもその一回の敗北でさえリーダーには許されないんだ。ましてや対抗馬が存在している中での敗北なんて決して許されない」「常勝無敗、か……それがリーダーとしての、Aクラスとしての在り方」

「これがBクラスの一之瀬だったら周りの人間がフオローをするだろうね。そもそも彼女たちのクラスは一度の敗北で壊れるような関係じゃない。これがCクラスの龍園だったら、そもそも反抗する人間を、離反する人間を徹底的に潰すはずだ」

「でも葛城にはそれが出来ない、つてことか」

「彼は優秀だけど、その在り方は典型的な穏健派だ。彼が反乱分子を炙り出したり、全員の前で吊るし上げたり、ましてや潰すなんて手段は取れないんだ。それは今までの彼自身の在り方を否定することになると同時に、自分に付いてきてくれた仲間を否定することになるからね」

「難儀だな。Aクラスも」

少し同情の色を帯びた声を漏らした後、幸村は話を再開した。

町田が提唱した作戦は反対もあつたが、受け入れる声もあつた。

「いいんじゃないでござるか？ 試験が終わったあとにクラスで話し合いを持ってポイントを分け合えば平和でござろう」

「私も賛成かも。全員が答えを揃えれば50万もポイントが貰えるし。話し合いで優待者を見つけるなんて現実的じゃないからさ」

博士やCクラスの真鍋などは賛成する姿勢を見せた。

他にも声に出さないまでも反対する気配は感じられない。

町田も手応えを感じ始めたのか、少しだけ白い歯を見せて笑った。「なるほど。じゃあ全員の意見を聞かせてもらえる？ まず賛成だと思う人、拳手をしてくれるかな」

一之瀬がそう言うと、Dクラスの幸村と博士、そしてCクラスの面々もバラバラと全員が手を挙げた。

しかし伊吹だけは腕を組んだまま動かなかった。

「伊吹さんはどう？　もし良かったら意見を聞かせてもらえるかな」

「別に。今は何も無いから勝手に進めていいよ」

どうやら伊吹はCクラスの3人とは立ち位置が違うのだろう。

真鍋たちが別段驚いたりする様子がないことから、伊吹の普段からの態度だと分かる。

「正直不満もある……けど、話し合いでポイントが手に入るとも限らないわけだし。さっさと試験を終わらせて遊びたいし」

軽井沢も彼女なりに考えて意見を出した。

「浜口君たちはどう？」

「僕らは一之瀬さんに全てお任せします」

Bクラス2人は一之瀬を信頼しているからか、彼女に全てを一任した。

「ありがと。じゃあ……綾小路君はどう思う？」

最後まで答えを保留していた綾小路に一之瀬が問いかける。

「いいんじゃないか。既に過半数は納得したようだし、元々話し合いは苦手だしな」

賛成意見で通るように促した綾小路だったが、彼は一之瀬を観察していた。

彼女がここですんなりと流されて承諾するのか、あるいはそれでも異を唱えるのか。

そして予想通り、彼女はこの雰囲気以待ったをかけた。

「町田君の……ううん、葛城君の案は確かに悪く無い作戦だよ。でもこの作戦って一見デメリットがないように見えるけど、Aクラス以外にはデメリットがあるよね」

彼女が語ったことは概ね堀北が葛城に言ったことと同じだった。

結果1と結果2ではクラスポイントの変動がない。

つまりクラス間のポイント差を埋めることができない。

多額のプライベートポイントは確かに魅力的だ。

しかし、貴重な特別試験のチャンスを、上のクラスに上がるチャンスを棒に振ることもある。

それを看過出来るほど、一之瀬はお人好しではなかった。

一度は賛成に挙手した生徒も、彼女の発言を受けてまた大半が中立、あるいは彼女寄りの空気になった。

室内の空気は一之瀬率いるBクラスと町田率いるAクラスの一騎打ち。

DとCはどちらに付くか傍観しているといった様子だ。

「Aクラスの方針は既に固まっている。話し合いに応じるつもりはない。お前たちが話し合うなら好きにすればいい」

町田はそこで話を切り上げると、クラスメイトを連れて部屋の隅へ移動した。

「うーん、どうしたものかなー」

頬を小さく掻いて、一之瀬は残った3クラスの輪に座った。

「これでAクラスに優待者がいたら、個人まで絞り込むのは簡単じゃないかもね。でも、どのクラスに優待者がいるのかまで分かればやり用はあるかも」

彼女は優待者が、まずどのクラスにいるのかを探るつもりらしい。

その上でどうするべきか考えるようだ。

「もほどのクラスに優待者がいるか分かって、そこから特定できるの？ 難しくない？」

Cクラスの真鍋がそう問いかける。

当然の質問に周りの生徒も心の中で同調する。

「今はまだそこまで考えなくてもいいんじゃないかな。これから先もつと良いアイデアが出るかもしれないし。試験は始まったばかりなんだから、誰の案を採用するのかしないのか、ゆっくり決めていけばいいと思うな」

今は答えを出すことを控え、時間を有意義に使おうということで一之瀬は話を締めくくった。

進行役である彼女の話が終わると、室内には自由な空気が流れた。

残りの時間をどう過ごすか考えていると、Cクラスの真鍋が軽井沢に話しかけた。

「ねえ軽井沢さんだっけ。ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

名指しされるとは思っていなかった軽井沢は面食らって携帯から視線を移す。

「なに」

「私の勘違いじゃなかったらなんだけど……もしかして夏休み前にリカと揉めた？」

「は？ なにそれ、リカって誰」

「私たちと同じクラスの子でメガネかけてるんだけど、お団子頭の覚えはない？」

「知らない。別人でしょ」

自分とは無関係だと判断した軽井沢は携帯に視線を落とす。

しかしその次の真鍋の言葉で彼女の様子に変化が生じる。

「私たち確かに聞いたんだけどね。Dクラスの軽井沢って子に意地悪されたって。カフェで順番待ちしてたら突き飛ばされて割り込まれたって言ってたんだけど」

「……知らないし。っていうか何、あたしに文句あるわけ？」

「別に確認してるだけ。本当なら謝ってほしいの。リカって全部一人で抱えちゃうタイプだからなんとかしてあげたいから」

真鍋の話が本当ならば、軽井沢は他クラスとトラブルを起こしたことになる。

しかも相手がCクラスなのだから厄介だ。

軽井沢は無視を決め込んだが、その態度に苛立ったように真鍋が携帯のカメラを向ける。

「リカに確認してもらおうけどいい？ 知らないっていうなら問題ないでしょ」

そのとき、軽井沢は突如顔を上げて真鍋の持つ携帯を払いのけた。

その勢いは思いの外強く、携帯が真鍋の手から吹き飛び床へと転がった。

「何すんのよー！」

「それはこっちのセリフ。勝手に撮らないで。別人だって言ってるでしょ」

二人の主張は真っ向から対立している。

一之瀬はその様子を傍観するように見守っていた。

どちらが善でどちらが悪か見極めようとしているのかもしれない。

「携帯壊れたらどうすんのよ!」

「学校に言って新しいの貰えばいいでしょ」

「大切な写真とか友達の連絡先とか入ってるんだから……」

慌てて携帯を拾い上げた真鍋は恨めしそうに軽井沢を睨む。

一部始終を見守っていたCクラスの生徒二人は真鍋に加勢するよ
うに軽井沢に詰め寄った。

「何よ……あたしが悪いっていうの?」

「別人だっていうなら、そんなにムキになることないじゃん」

「そうそう、リカに確認したらすぐ消すし」

「嫌だつてば……」

もつと強気にぶつかつていくと思われた軽井沢だったが、意外なこ
とに消極的だった。

「後ろめたいことがあるから否定してるんじゃないの?」

真鍋は強引に撮るつもりなのか、レンズで軽井沢を捉えようとす
る。

それをCクラスの女子二人は楽しそうに笑いながら見ている。

残りの一人である伊吹は椅子に座ったまま事の成り行きを傍観し
ていた。

心なしかその目には軽蔑の色が浮かんでいる。

しかしクラスメイトを止める気も、仲裁するつもりもないのか何か
言うわけではない。

彼女は真鍋たちに興味も何も無いのだろう。

「とにかく撮らせてもらうから」

「嫌だつてば! ねえ、この子に何か言ってあげてよ」

何を思ったか、軽井沢はAクラスの町田に擦り寄って助けを求め
た。

救いを求めるように隣に座り、真鍋に対して文句を漏らす。

「無断で写真を撮るなんて許せないんだけど。町田君はどう思う……
?」

「……そうだな。真鍋、本人が嫌がってるんだからやめてやれ」
「ま、町田君には関係ないでしょ」

「部外者の俺が話を聞く限り、この状況で悪いのは真鍋のように思えるぞ。軽井沢が知らないと言ってるんだからここで強引に決めつけるのは良くないだろう。その友達に確認してから改めて話をしようがいい」

町田と同じようにこの場で話を聞いていた者は、皆彼の言うことは尤もだと思っていた。

真実を確かめるために写真を撮りたい気持ちは分かる。
友達を慮る真鍋の気持ちも理解できる。

しかし、無断で写真を撮る事は常識で考えれば明らかにマナー違反だ。

正論を振りかざされれば真鍋たちも引きさがる他なかった。
それでも真鍋は確信があるのか、納得はしていない様子だ。

「言いがかりはやめてよね、全く。ありがとう町田君」
「……当たり前のことをしたただけだ」

尊敬の念を込めたような目で上目遣いで見る軽井沢。
町田もまんざらでもないのか彼女の礼に答える。

同じAクラスの竹本達は少し面白くなさそうだった。

「Cクラスとのトラブルか……まずいね」

話を聞き終えた柚椰は苦笑いを浮かべた。

幸村も不愉快そうに顔をしかめている。

「全くだ。次から次へと問題を作ってきて……」

「目下の敵であるCクラスとのトラブル……これが余計な火種にならなければいいんだけど」

「ふん、軽井沢のことだ。偉そうに威張ってそのリカって女子を突き飛ばしたんだろ。先に手を出したのがアイツなら、トラブルになった

のは自業自得だろう」

幸村は真鍋の話を本当だと思っっているのか、軽井沢の擁護はしなかった。

「まだなんとも言えないけどね……これが軽井沢じゃない他の女子だったら味方になってくれる人もいただろうけど。今現在、うちのクラスで彼女の味方をしてくれそうな女子は……」

「いないだろうな。この前の試験が影響してるのか、取り巻きも軽井沢とは距離を取ってるらしいしな」

「そうだね。篠原も佐藤も松下も、桔梗と一緒に遊んでいるのは見たけど、軽井沢と一緒にいるところは見ていないな」

柚椰はこれまで船内で見かけた光景を振り返っていた。

櫛田はいつも誰かと一緒にいるところが目撃され、篠原たちとも一緒にいることがあった。

反対に軽井沢は一人でいるか、それこそ彼氏である平田といえるくらいしか目撃されていない。

「今までやってきたことが返ってきたってことだろう。俺の知ったことじゃない」

「まあね。そうやってしまえばそれまでかな。でも意外だね。彼女がAクラスの男子に助けを求めるなんて。清隆か、それこそ君や博士とか同じクラスの人間に助けてもらえばよかっただろうに」

「アイツのプライドだろ。俺たちとは関わりたくないみたいなのを言ってたしな。Dクラスじゃ、それこそ平田くらいにしかアイツは助けてなんて言わないだろ」

「そうかもしれないね。そういえば話は変わるけど、携帯が壊れたときの対処方法について幸村は知っているかな？」

「ん？ ああ、そういえば軽井沢が言ってたな。学校に言えば新しいのが貰えるのかなんとか」

幸村は軽井沢と真鍋が言い争っているときのことを思い返した。

「そう。例えば水の中に落としたりとか、うっかり落として画面が映らなくなったりとか。そういうときは誰でもいいから先生に言えば、すぐに新しい端末を用意してくれるみたいなんだ。しかも常にストック

してあるのか、結構早く対応してもらえよ」

「本当に至れり尽くせりだな……つて、黛も携帯を壊したことがあるのか?」

「うん、入学してわりとすぐにね。うっかり落としてしまったんだけど、それが運悪くコンクリの上でね……案の定、画面が割れてしまったんだ。流石に画面が割れたくらいで対応なんてしてくれないだろうと思っていたんだけど、あっさりしてくれたから驚いたよ」

「ふーん、そうなのか。別に完全に壊れてなくても交換はしてもらえるんだな」

「そうみたいだね。別にポイントを払うこともなかったから、無償で用意してもらえようだ」

「なるほどな。万が一のときのために一応覚えておく」

「貴重な情報だと幸村は判断したのか、頭に入れておくことにしたようだ。」

「携帯が無いと何かと不便だからね。覚えておくといいよ」

地味に役に立つ知識を披露しつつ、柚椰は微笑んだ。

彼は歪な恋模様を知る。

午後3時。作戦会議を終えた綾小路は呼び出された相手と落ち合うために船内を歩いていった。

呼び出した相手は昨日試験のメールが来る前にも会っていた佐倉である。

待ち合わせ場所は人の少ない船首付近と指定があった。

「昨日みたいに誰かが来ないようになってことだろうな」

昨日、話している途中に櫛田が現れたことで佐倉はその場からいなくなってしまうた。

恐らくそれを受けての場所変更だろうと綾小路は察した。

甲板に出て船首の方へ向かう。

船は豪華な設備に溢れているが、船首の方には景観を眺めるためのデッキがあるのみで基本的に生徒が訪れることは少ない。

景観は旅行初日で既に十二分に堪能したからだろう。

どうやら今も他には誰もいないようで、広いデッキをほぼ独占できる状態だった。

そして目的の相手である佐倉だが、デッキの端の方で柱に隠れる様にして立っていた。

大声で呼ぶのも変だと思った綾小路はゆっくり彼女に近づいていく。

「……だと思っただけ……ど、どうかな？」

佐倉との距離を詰めていくにつれ、ぶつぶつと喋る彼女の声が聞こえてくる。

風に乗って声が運ばれてくるが、元の音量が小さいためか上手く聞き取れない。

「わ、私と、その……で、で、デー……」

誰かと話しているようにも見えたが、デッキには他に誰もいない。手に携帯を持っているわけでもないため、その様子は少々不気味さ

を感じさせた。

「佐倉？ どうした？」

声をかけていいものかと一瞬迷ったものの、綾小路は極力驚かせないように静かに声をかける。

結果――

「トウおおおおおおおおおおおお?!?!?」

空へ飛ばたくのではないかと思わせるほどに佐倉は飛び上がった。奇声にも似た叫び声を上げるその様子に綾小路も驚く。

「い、いい、いつ、いつの間にそこにい!?!?」

「いつの間にも何も、今来たばかりだ」

綾小路が確認するが、やはり周囲には誰もおらず小動物のようなものもない。

つまり佐倉が話していた相手は幽霊か妄想の友達か、そのどちらかだろうか。

「聞いた!?! 私の話聞いちゃった!?!」

「飛び飛びでは。けど、何て言つてたかは流石に」

そう答えると佐倉は安堵の息を漏らした。

聞かれたら困る内容だったのか、あるいは単に恥ずかしいのか。

真相は定かではないが、あまり深く触れない方がいいと綾小路は判断した。

「それで、俺を呼び出した理由は？」

「ええと、その、だから……そ、そう！ 今回の試験のことで悩んでて！」

物凄く落ち込んだ様子で差し出された紙のリスト。

それを受け取ると、書かれた名前に綾小路は目を通す。

丑グループ

A：沢田恭美 清水直樹 西春香 吉田健太

B：小橋夢 二宮唯 渡辺紀仁

C：時任浩也 野村雄二 矢島麻里子

D：池寛治 佐倉愛里 須藤建 松下千秋

丑グループに配属されたDクラスは綾小路にとっては知った顔が揃っていた。

男子からは須藤と池。悪い奴でないことを綾小路は知っているが、佐倉にとつては同情せざるを得ないメンバーだ。

女子も特別親しいわけでもない松下であるため、話し相手にはなりそうもない。

この試験はどうしてもグループのメンバーだけで過ごす時間が生じる。

傍にいれば多少なりともフォローできたものの、今回はそれも叶わない。

指定された時間になればグループ毎に集まらなければならないため、孤立無援で戦う必要がある。

こつそり携帯で連絡を取り合うことは出来るが、デイスカッションの場では何が命取りになるか分からない。

現状、綾小路に佐倉の悩みをどうにかしてやれる術はなかった。

「もし他クラスに知ってる奴でもいればと思っただが……見事なまでに誰も知り合いがない。友達の『と』の字も感じられないな……」

元々綾小路にとつて、他クラスの知り合いは一之瀬と神崎くらいのため、頼めそうな人物は思い浮かばなかった。

一之瀬は彼のグループに、神崎は堀北と柚椰のグループにいるため、どうしようもない。

須藤と池に佐倉を任せるという案もあまり現実的ではなかった。

「すまん……俺にちゃんとした友達がいなければかりに」

「あ、謝ることじゃないよっ。私の方が全然友達いないしっ！」

気がつけばどちらが友達が少ないかを、どちらが下かを競う二人。お互いの友達がいらない自慢を一通りしたところで別の話題に切り替える。

「ところで、俺も佐倉に少し聞きたいことがあったんだがいいか？」

「え、私に？ なに？」

「最近山内に声をかけられたりしてないかと思っとな」

「山内君……？ ううん、特にはないよ。どうかしたの？」

「そうか。いや、何もなければいいんだ」

「……？ うん」

無人島での試験の際、山内は佐倉を狙うと綾小路にこっそり宣言した。

応援してほしいという頼みは結局保留のままだったが、あれから山内の方から再度頼まれたことはない。

別に関係のないことだと言われればそれまでだが、何故か彼は気にならなかった。

「(思えば、なんであの時俺は腹が立ったんだ……?)」

思い返すのは、山内が佐倉を狙うと宣言したとき的一幕。

元々池と同じく櫛田が気になっていたはずの彼だったが、いつの間にか佐倉に鞍替えしていた。

理由は単純明快で、櫛田の競争率を考えての計画変更。

模試の結果が振るわなかったから志望校を変えるようなもの。

第一志望に落ちたときのために滑り止めの学校も受けるようなものの。

言ってしまうえば佐倉を狙う相手などいないだろうと判断した上でのことだ。

普段俯いていることが多い佐倉だが、その顔立ちは紛れもなく美少女だ。

加えてスタイルも整っている。

そこに山内は目をつけたのだろう。

勿論、綾小路と佐倉はただのクラスメイト。恋人でもなければ特別親しい間柄でもない。

だから山内が彼女を狙おうと、綾小路には何の関係もないしどうでもいい。

そのはずだった。

しかし、何故か綾小路は山内の頼みを保留にした。

何故か山内に対して腹が立った。

出くわしたのだ。

その光景を見るや否や山内は急いで物陰に引つ込み、様子を見張ることにした。

彼は佐倉と親しげに話している綾小路を見て激しい嫉妬の念に駆られた。

未だロクに会話も出来ていない自分とは違い、親しげに話す綾小路。

佐倉も綾小路に対しては心を開いているのだろうと理解させられてしまうような光景。

気がつけばその場から逃げる様に立ち去っていた。

一体何故、どうして綾小路なのだろう。

山内の頭を埋め尽くすのは疑問と嫉妬だった。

「おや、山内じゃないか」

ちょうど通路を通りがかった柚椰が壁に張り付いている山内に気づいて話しかけた。

「——ッ！ な、なんだ黛か」

いきなり話しかけられて肝を冷やした山内だったが、相手が柚椰だと分かれるとホツと息を吐き出す。

「それで、どうしたんだい？ 壁に張り付いてウンウン唸って……どう見ても不審者だったけど」

「ちよつと色々あってな……」

「何かあったなら話を聞くとよ？」

柚椰がそう言うと、濁った山内の目に僅かに光が差し込んだ。

「悪い、ちよつと聞いてもらってもいいか？」

「いいよ。じゃあ場所変えようか」

通路で話すことではないのだろうと察した柚椰は山内を連れて屋上カフェに移動した。

二人は人に聞かれないように奥のテーブル席を選び、適当に飲み物を注文する。

ウェイターが持ってきた飲み物を一口飲んだのをきっかけに、山内はポツポツと話を始めた。

「実はさつき、綾小路と佐倉が話してるところに遭遇してな」

「へえ、何の話だろう」

「そこまでは分かんなかったけど、佐倉が楽しそうだし……」

「まあ清隆は佐倉の数少ない友達だからね。友達と話すのは誰でも楽しいものさ」

山内は俯いてテーブルを見つめている。

「ここだけの話なんだけどさ、俺、佐倉のこと良くなって思ってたよ……」

「おや、君は池と一緒に桔梗のことが気になってたんじゃなかったのかい？」

綾小路から事情を既に聞いているが、敢えて知らないふりを装ってそう尋ねる。

すると山内は以前綾小路に語ったのとほぼ同じ内容を柚榔にも語り聞かせた。

櫛田の競争率が高いこと。

それに比べれば佐倉は目立たず、彼女を狙っている男子もいないこと。

見た目も良く、元グラビアアイドルということでスタイルも抜群。

彼女の魅力に他の男子が気づかない今こそ狙い目なのだと語った。

「つまり君は、何とかして佐倉と恋人になりたい、ということだね？」

「ああ！ 佐倉みたいなタイプは一回付き合えば何でもしてくれると思っただけだ！」

「何でも」

「あんなことやこんなことでも、健気に応えてくれるぜきつと……胸もデケエし」

「まあそれは置いておくことにして、彼女と友達にならないとどうにもならないんじゃないかな？」

「そこなんだよ。俺も無人島の時に話しかけたりしてたんだけどさ、なんか壁があるっつーか」

「元々人見知りというか、あまり人と関わるのが得意じゃない子だからね」

「なんで佐倉は綾小路とは普通に喋れるんだ……」
「なるほど……」

山内が何を思い、何を感じているのかを柚椰は具に感じ取っていた。

その感情を何と呼ぶのか、何故そのような感情が芽生えるのかを理解していた。

詰まる所、山内は綾小路に嫉妬しているのだ。

自分が満足に会話も出来ない相手に対して、親しげに話すことが出来る綾小路に。

佐倉が心を開いている綾小路に。

「君は彼女がどうして人見知りなのか、考えてみたことはあるかい？」
「えっ？」

「だから、彼女がどうして人と接することを苦手としているのか、ということだよ」

「えーつと……生まれつきとか、そういう性格だからとかじゃねえの？ まあ新しく友達作るのが緊張するってのは分からんでもないし」「そうかもしれないね。でも井の頭とか王も、今でこそ桔梗と仲が良い二人も入学当初はあまり周囲に馴染めていなかったよね。あの二人と佐倉との間に何か違いがあると思う？」

「佐倉の方が可愛い」

間髪を容れずに答える山内に柚椰は苦笑いを浮かべる。

「そういうのではなく、内面の違いだよ。彼女にも桔梗は何度か話しかけたりしているわけだろう？ もし井の頭たちと同じようなタイプだったなら、今頃桔梗のグループにいたはずだ」

そう言われると山内は思い当たるところがあるのか考え込む素振りを見せる。

「そーいや確かに……軽井沢ならまだしも、櫛田ちゃんにも心開いてねえよな佐倉って」

「女子相手でさえそんな状態なんだ。男子の友達なんて皆無に等しい。俺も話しかければ普通に会話をしてくれるくらいにはなっただ、彼女が自主的に話しかける相手は清隆くらいだろうね」

「マジで、なんで綾小路？　理由が分かんねえんだけど……地味だから？」

「まあ馬が合うというのは確かにあるかもしれないね。でも、人と関わることを避けていた佐倉がどうして彼には心を開いたのか。そこには明確な理由があるんじゃないかな」

「明確な理由？」

「佐倉が元グラビアアイドルだということは勿論知っているね？」

「そりゃまあ」

「グラビアアイドルというのは、俺たち一般人にとってはどんな存在かな？　ああ、これは一般的な男子からのイメージと、男女問わず世間からみたイメージで分けて考えてみてほしい」

山内は暫し考えた後、その質問に答えを出す。

「男から見たらそりゃあ、アレだろ。憧れっつーか、アイドル？　巨乳だし可愛いし、雑誌に載ってたらついつい見ちまうよな。世間から見たら……芸能人？」

「正解だ。一般人にしてみれば、雑誌やテレビに出てる人間というのは特別な存在なんだ。だからそういう存在が同じ学校にいたら、同じクラスにいたら、どうにかお近づきになりたいと思ってしまうものさ。芸能人と友達というのは、それだけで自慢できるステータスになるだろう？」

「まあ確かにそうかも……って、それが一体何の関係があるんだ？」

「つまり、自分と仲良くしたいからではなく、芸能人だから仲良くしたいという人が大勢やってくるということなんだ。雑誌の1ページに載った一枚の写真を見て、可愛いから、スタイルがいいからお近づきになりたい。昔有名人だったから仲良くなりたいたい。そんな理由で人が次々やってきたら本人は何を思うだろう？　自分という人間の中心身知らない、知りもしない人なんて突き放すんじゃないかな？　そして気がつけば人と関わる事を、人と接する事を避けるようになってしまう」

「佐倉がそうだって言うのか……？」

「勿論これは俺の勝手な想像さ。でも、そう考えると辻褃が合ってこ

ないかい？ ましてや彼女が雫として活動していたのは中学の頃、周りにいるのは中学生。思春期に成り立ての男子が彼女に対してどんな感情を向けるのかは想像に難くない。異性に対する不信任感。周囲に対する不信任感。所謂トラウマを持ってしまってもおかしくはないんだ」

これは一から十まで全て柚椰の想像でしかない。

しかし本当の事情を知らない山内にとってそれは尤もらしく、現実味のある話だった。

佐倉のことをよく知らない、内面に触れていない彼にとって柚椰の言葉は真綿のように吸収されていく。

「じゃあ、綾小路とは喋れるってことは……」

「清隆が信用するに値する人間だと彼女が判断した、ということだろうね。ほら、清隆って人畜無害そうだろう？ なにかきっかけがあって、彼なら安心できると思っただんじやないかな。だから君が佐倉と仲良くなりたいのなら、まず自分が誠実だということを経験に分かり、それからそこから始めるべきなんじやないかな」

「つてもよ……今現在マトモに会話も出来ない状態だぜ？ そんな状態で分かってもらおうたってなあ……」

「会話がダメなら行動で示すのはどうだろう？」

「行動で？」

「うん、例えば彼女が困っているときにさりげなく助けてあげるとかね。あとはプレゼントを贈ってみるのはどうだろう？」

「なるほどな……プレゼントか……アリアかも」

顎に手を当て、山内は考え込む。

何かプレゼントをして、それをきっかけに関わりを作るという作戦も有効だろうと思ひ始める。

「佐倉が喜びそうな物ってなんだ？ 俺の手持ちのポイントで買えるかな……」

「俺もよく分からないけど、やっぱり彼女の趣味の物とかの方がいいかもしれないね。写真が趣味だからカメラや、それ関係のアクセサリーとかかな」

「あーいいかも……カメラって値段どんぐらいだ？ やっぱ高えかな？」

「ピンキリだと思うよ？ 画質に拘るなら、それこそ20万くらいは普通にするだろうね」

「やっぱそうだよなあ……俺ポイント全然貯めてねえからなあー」

「あ、でも今回の試験でポイントが貰えれば買えるんじゃないかな？

上手くいけば最低でも50万は貰えるわけだからね」

「……！ 確かに。つまり俺が優待者を当てれば……」

「50万ポイントが手に入る上に、クラスポイントも貰える。彼女にプレゼントも出来て、クラスの皆からも尊敬されるかもしれないね。君は一躍ヒーローだ」

柚椰のその言葉を聞き、山内の目が爛々と輝き出した。

今回の試験へのモチベーションがみるみるうちに上がってきているのだろう。

「結果を出せば周りの君を見る目も変わるだろう。勿論、佐倉も君を少しは認めてくれるんじゃないかな？ 君が本気を見せて、熱意をぶつけば自ずと結果は付いてくると思うよ」

「俺の本気……」

山内の目に光が宿り、熱意の炎が灯る。

そんな彼の気持ちをさらに刺激するように、柚椰は駄目押す。

「これは俺の中学のときの友達の話んだけどね。彼もクラスの女の子のことが好きだったんだ。それである日の放課後、教室に呼び出して勇気を出して告白したんだ」

「どうだったんだ？」

「結果は惨敗。『友達としか見れないから』と言われてしまったらしいんだ。それから少しして、彼はあることを知ってしまった。なんとその女の子は、彼の親友のことが好きだったんだ」

「マジか……それキッツ……」

柚椰が語るその男子に対して、山内は感情移入しているのか辛そうな表情を浮かべる。

「最初は親友が相手だったってこともあつてか、自分の恋心に折り合

いをつけて彼女を応援しようと思っただけ。でも、彼はどうしても諦めきれなかった。それほどまでに彼女のことを好きだったんだろうね。それから彼は、なんとか女の子に振り向いてもらえるように努力した」

「それで、どうなったんだ？」

「彼はその子に意識してもらえるようにアプローチをしたり、自分を磨き続けた。そして意を決してもう一回告白した。自分がどれだけ好いているか、どれだけ本気なのかを真剣に伝えた。結果、彼は見事彼女を手に入れたんだ」

「スゲーなそいつ……」

「だから、君が佐倉と親しくなりたいのなら、どれだけ真剣かということとを分かってもらおうことが何より大事だね。この試験はそのための第一歩だと思えばいい」

その言葉で山内は奮い立った。

「よし、俺やるぜ……！俺は佐倉を手に入れてみせる!!」

「うん、頑張つて。陰ながら応援しているよ」

「おうサンキュ！つか綾小路じゃなくて最初から黛に相談すれば良かったわ」

そう言うと彼は上機嫌でカフェから出ていった。

今回の試験で、彼がどのような結果を出すのかはまだ誰にも分からない。

「ふふっ、これはこれで面白くなりそうだ」

カフェの一角で一人、笑みを浮かべる男が何を考えているのかも、まだ誰にも分からない。

思惑が交錯する中、試験は動き出す。

午後8時30分。2回目のグループディスカッションが始まつてから20分が経過した。

Aクラスは2度目の集まりでも話し合いには一切参加しなかった。葛城含め誰も彼もが腕を組んで沈黙を貫いている。

1クラスが欠けた状態で込み入った話など出来るはずもなく、ただただ時間だけが流れていった。

「暇だね……あ、龍園くん」

「あ？」

「しりとりでもしないかい？」

「気狂ってんのかテメエ」

柚椰の提案を龍園は呆れながら辛辣な言葉で拒否する。

しかしそれですんなり引き下がるはずもなく、柚椰はヘラヘラとした態度で龍園に絡む。

「今の状態では、どの道話し合いなんて出来ないだろう？ でもこのまま9時までじっとしているのも退屈だ。だからしりとりでもすれば良い暇つぶしになるかと思つてね」

「そこでの一番に俺に声をかけてくる神経が理解できねえな。自分のクラスの奴と勝手にやってろ」

「じゃあ世間話でもしようか。それならいいだろう？」

しつこく絡んでくる柚椰に対して龍園は鬱陶しいとばかりに顔を顰める。

傍で聞いているCクラスの生徒は彼がキレるのではないかと戦々恐々としている。

「Cクラスの優待者は把握できたかい？」

「——っ——」

世間話と言うにはあまりにタイムリー。

あまりに突拍子もなく放たれた話題にそれまで傍観していた他ク

ラスの関心が引き寄せられる。

皆が皆、柚椰と龍園へ一斉に視線を移した。

「聞かれてすんなり『はい分かりました』と言うと思うのか teme は？」

「まあそれもそうだね。でも昼のときも言ったように、君なら迅速且つ確実な情報を集められそうだと思うてね。優待者が発表されてから既に12時間が経過した。そろそろどのクラスも、自分たちが抱えている優待者が誰なのかくらいは把握している頃合いだろう？」

「そう言う teme はどうなんだ？ 人に聞いたら teme も情報を寄越してくれてもいいんじゃないか？」

ニヤリと口角を上げながら龍園が尋ねると柚椰は顎に手を当て考える素振りを見せる。

「うん、実は正直なところ全員はまだ分かっているじゃないんだ。だから今は、早く素直に名乗り出てくれるのを待っている状態だね」

「ほう。良いのか？ 自分たちが出遅れていることをバラしちまうて」

「ここでハツタリを利かせてもいずればれることだからね。だったら素直に手の内を明かしたほうが、余計な探りを入れられなくて済む。違うかい？」

「まあそうだな。だが teme のところの優待者が把握出来てねえ間に他のクラスの奴らがそいつと接触する可能性があるぜ？ 他クラスの優待者の情報は試験を攻略するには喉から手が出るほど欲しいからな」

「その様子だと、君も攻略の目星が付いたところかな？」

「さあ？ どうだかな」

含みのある笑みを以って龍園は答える。

その笑みは彼が何か策を隠し持っているのだろうとこの場にいる誰もが理解した。

対する柚椰も龍園の返答に対して別段驚くでもなく、むしろ面白そうに微笑んでいた。

そうこうしているうちに気がつけば1時間が経過した。

今回も時間経過のアナウンスが流れるや否やAクラスはさつきと部屋を出て行った。

「時間だな。もうここに用はねえ」

「また明日ね、龍園くん」

「馴れ馴れしくすんな」

そう吐き捨てて龍園は取り巻きを引き連れて出て行った。

室内に残っているのはBクラスとDクラスの面々。

緊張が緩んだのか平田と神崎が大きく息を吐き出した。

「流石に2回目じゃ進展はないよね……」

「無理もないだろう。Aクラスは完全沈黙。Cクラスも協力する気は毛頭無さそうだからな」

「このまま回数を重ねたところで誰も優待者だと名乗り出ることにはなさそうね」

各クラスの状況を考えて堀北は腕を組んで呟く。

「鈴音の言う通りかもしれないね。ただ、さっきの会話で彼の方針は大体分かった」

「どういうことだ?」

疑問を投げかける神崎に柚椰は詳しく説明した。

「彼は自クラスの優待者を把握している。これはほぼ間違いない。でも、彼は優待者を守る気はないんだ。むしろ教えてくれと言ったらあっさり教えてくれるかもしれないということだね」

「え、でも優待者を見抜かれたら裏切り者が出る危険があるんじゃないのかい?」

「自クラスの優待者全員を見抜かれたところで、失うクラスポイントは150。このマイナスは他クラスの優待者を3人当てることが出れば相殺できる値だ」

「それはそうかもしれないが、そう上手くいくはずもないだろう」

「勿論これは机上の空論だよ。でも、今回の試験で得られるボーナスはクラスポイント以外にもある。それを取引材料にすれば、優待者の秘匿性は一気に下がるんだ」

そこで堀北は柚椰の言ったことの意味に気づいた。

「――！なるほどね。正解者が得るプライベートポイント。確かに取引によつて回答を強制してはいけないってルールは無かつたわ」

「そうか！自分のクラスの優待者を教える代わりに正解者からポイントを貰うことも出来るってことだね？」

「そう。裏切り者はクラスポイントを稼ぐことが出来る。そしてリークした人間はその対価としてプライベートポイントを手に入れることが出来る。クラスポイントとプライベートポイント。どちらが欲しいかによつてやり用は幾らでもあるんだ。グループ内で優待者を抱えているクラスには回答権がない。なら早々に取引で事を済ませてしまえばいいのさ」

「黛は龍園がそれを狙ってくるか？」

「彼は葛城とは真逆のタイプだよ。一見自殺行為に見える行動も、結果的に彼に利を齎す行動になりうる。それは無人島のときで分かっているはずだ」

「確かにそうね。彼がBクラスに上がる為のクラスポイントを稼ぐのではなく、プライベートポイントを取りに来る可能性はありえるわ」
「やはり目下警戒すべき相手は龍園ということか……」

柚椰の話聞いた神崎は今一度龍園に対する警戒度を引き上げた。

彼がこの試験を荒らす危険性が最も高いということがここで改めて証明されたが故に。

「とりあえず今日のところはこれで失礼する」

神崎はそう言って席を立ち、他の二人を連れて部屋を出て行った。

「僕たちも帰ろうか」

「そうね。次の話し合いは明日の昼。それまでにこちらも優待者を把握しておくべきよ」

「あと二人。一体誰なんだろうね……」

平田たち3人ももうこの部屋に用はないため、各々自室に戻るべく部屋を後にした。

同時刻、卯グループもまた話し合いが終わり退出する生徒がちらほらと見受けられた。

辰グループ同様、Aクラスは話し合いに参加する気はなく時間と同時にさっさと部屋を出て行ってしまった。

その様子に一之瀬は少し重い溜息をつく。

「うーん、これは大変な試験になりそうだねー。綾小路くんはどう？ きつくない？」

「正直、俺みたいな人間はこんな試験じゃ手も足も出ない。ただ傍観するだけだな」

「諦めるのは早いよ。少しでも良い方向に転ぶように一緒に頑張ろ」
状況を好転させるためにも一之瀬は奮起しているように見受けられる。

「まあこのまま単純に話し合いを続けても、誰も素直には優待者とは認めないだろうねー。このまま平行線になるようなら、最悪Aクラスの思惑通りに動くのも手なのかもね」

弱気とも取れる発言とは裏腹に、彼女の目は全く死んでいなかった。

数多の考えが錯綜しながらも、彼女に臨戦態勢を解いた様子は全く見られない。

「とりあえず今日は終わりだね。二人ともお疲れ様」

「いえ、僕たちは何もしていませんよ。では引き上げますか」

スイッチをオフにするようにBクラスの3人はリラックスするよう肩の力を抜いた。

それを証拠に3人は落ち着いた表情で部屋を出て行った。

次いでCクラスの真鍋たちが腰を上げたところで綾小路は彼女たちの背中を追いかけた。

エレベーター前で追いつくと、綾小路は少し遠慮がちに声をかける。

「ちよつといいか？」

話しかけられるとは思っていなかったのか、少し警戒した様子で真鍋が振り向く。

綾小路は元々用意していた話を彼女に振る。

「軽井沢と話してた件あったよな。カフェで突き飛ばしたとか突き飛ばしてないとか」

「それがどうかしたの」

本来綾小路には興味など持っていないだろうが、話す内容には興味があるのか3人は彼を試すような視線を向ける。

「100%じゃないけど、軽井沢が前に別のクラスの女子と揉めてるのを見たんだよ」

「――！・それ本当？」

真鍋が距離を詰めるように強張った声で問い返す。

それにやや萎縮しながら綾小路は小さく頷く。

「多分、な。その時の悪い空気っていうか、気まずい感じを覚えてたから。一応伝えておこうと思って。それだけだから」

そう言うと彼はそそくさと元来た道を引き返した。

彼の目的は一度有耶無耶となった軽井沢とCクラスとの問題を再燃させることだった。

勿論実際にそんな現場を見たわけもなく、真鍋たちに語った話は全て綾小路の嘘だ。

しかしそれでも効果はあった。彼はそう確信していた。

彼はこの火種で真鍋たちが行動を起こしてくれることを期待していた。

それで軽井沢がどう反論するのか、どう対応するのか。

綾小路はそれを見たかった。

思惑通りに事が運べばこれから先、彼にとって大きな利益になることを期待して……

時刻は午後11時。綾小路は自室に戻っていた。

室内には既にルームメイト全員が戻って来ており、そこには高円寺の姿もある。

「おかえり綾小路君。随分遅かったね」

「ちよつとな。ああそうだ、少し平田に聞きたい事があるんだがいか」

「疲れてると思うんだけど、もし良かったら少しだけ話をしない？」

ほぼ同時に、綾小路と平田の言葉が被った。

「うん？ 僕に聞きたいことって何かな」

「いや、先に平田の用件を聞こうか。俺の話は後でもいいから」

幸村からはピリピリとした空気が流れている。

その様子から試験に関する話だろうと綾小路は察する。

承諾の頷きをしてから彼はジャージに着替え、二人の傍まで足を運ぶ。

「幸村君の方から相談があつてね。試験の報告をし合おうってことになつたんだよ」

「そうなのか。だったら柚椰も呼んだほうがいいんじゃないか？」

「僕もそう思つただけどね……」

「なんでも用事があるらしくてな」

平田と幸村も既に柚椰を呼ぶつもりだったのだが、どうやらここには来られないらしい。

「本当は高円寺君にも参加してくれると嬉しいんだけどね、断られてしまつたんだ」

「すまないね平田ボーイ。私は今肉体美の探求に忙しいのだよ」

上半身裸の高円寺は逆立ちした状態で腕立て伏せを繰り返している。

大量の汗を噴出しながらも苦しそうな様子はなく、彼がその手のトレーニングを日常的に行なっていることが見て取れる。

「二応高円寺君もグループの場には姿を見せているようだよ。禁止事項に試験への不参加はその都度ポイントを差し引くと書いてあるからね」

ルールに違反する行為はしていないと分かり、ひとまずは安心と
いった空気が広がる。

「実は僕のところにも新しく優待者になったって連絡を貰ってるんだ」
「なんだって？ 一体誰なんだ」

急かすように問いかける幸村を抑えるように綾小路が手を挙げた。
「ちよつと待て。念のために紙に書くか携帯に打ち込んだ方がいい。
どこで誰が聞き耳を立ててるか分からない」

「それもそうだね。ちよつと待って」

平田は携帯の画面をつけそこに名前を打ち込んでいくと、二人に画
面を向けた。

『Eグループ、櫛田さん』

短くそう書かれた文字に二人が目を通したのを確認すると、平田は
すぐにその文字を消した。

「なるほど」

「僕と同じタイピングで黛君にも教えているみたい」

「そうか。ならわざわざ連絡する必要はないな」

「優待者は各クラス3人。つまりあと1人、正体を隠してる奴がい
るってことだな」

「うん、幸村君の言う通りだね。僕や櫛田さん以外の人に相談してい
る可能性はあるけど。誰にも話さないで黙っていることも考えられ
る。人に話せばその分リスクも高くなるからね」

3人が真面目に話をしている中、部屋には高円寺の鼻歌が響き始め
た。

しばらくの間我慢していた幸村だったが、一向に鳴り止む気配がな
い鼻歌に我慢の限界を迎えたのか椅子から立ち上がる。

「高円寺っ、その呑気な鼻歌をやめてくれないか！ それに、真面目に
しろとは言わないが最後までちゃんと試験は出るよ。無人島の時み
たいなりタイヤはごめんだぞー！」

「仕方ないだろう？ あの時私は体調を崩してしまったのだ。無理は
できないさ」

「ぐっ……ただの仮病の癖にっ」

「しかしあと2日も試験が続くのは、ただ面倒なだけだねえ」

腕立て伏せを続けていた高円寺は、優雅に足を下ろし立ち上がった。

そしてベッドに立てかけておいたタオルを首にかける。

「面倒なだけだと？ 試験を考えようとしてもしない癖に偉そうな」

「面白くもない試験を続けても意味がないだろう？ 嘘つきを見つめる簡単なクイズさ」

携帯を掴んだ高円寺は、指をスライドさせ何かの操作を始めた。

そして、程なくして操作を終えた直後、高円寺を含めたこの場に居る全員の携帯が一斉に電子音を発した。

「おい、何をしたんだ高円寺!？」

嫌な予感をひしひしと感じながら幸村が叫ぶ。

平田と綾小路は急いで携帯を取り出すと、届いたメールに目を通す。

『申グループの試験が終了いたしました。申グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動してください』

メールが告げた事。それは試験を終えたグループが発生したという事実だった。

「この申って、お前のグループだろ高円寺っ！」

「その通りだよ。これで私は晴れて自由の身になったわけだね。アデュー」

携帯を放り投げバスルームへと姿を消す高円寺に、3人はただ呆気に取られた。

「ふ、ふざけるなよっ。俺たちが必死に考えているのに、またあいつはっ！」

「まあまあ。高円寺君も何か考えがあったのかもしれないし……」

「平田は甘いんだっ！ あいつはただ自分が楽出来ればいいだけなんだ！ 最悪だ！」

頭を抱え唸る幸村に平田もどうフォローしたものかと困っている。

高円寺の突発的な行動はすぐに全生徒に知れ渡り、平田の携帯が引つ切り無しに鳴る。

チャットでは何があったのかを知りたがるクラスメイトの声であふれていた。

葛城や龍園、一之瀬たちも同様に驚いているに違いない。

初日時点で裏切り者が出るとは誰も予想していなかっただろう。

あたふたと対応に追われている平田を傍観していた綾小路の携帯にも着信が届いた。

「もしもし」

『清隆。申グループということは、まさか……』

「ああ、多分お前の想像通りだ」

『やはり高円寺か……』

綾小路に通話を飛ばして来たのは柚榔。

平田では混線ですぐに繋がらないと判断した上での行動なのだろうと綾小路はすぐに察した。

「高円寺は俺たちの前で堂々と裏切って試験を終わらせた。今は風呂に入ってる」

『随分優雅だね』

「あいつのことだから、当てずっぽうにやったとは考えにくいが……」

『彼はなにか言っていたかい？』

「この試験は面白くない。嘘つきを見つける簡単なクイズだ、とさ」

『彼らしいね……その言葉がどういう意味かは分からないけど、とにかく結果³であることを願うばかりだ』

「全くだ。案の定幸村は高円寺にブチ切れてる」

『ああ……』

「高円寺が誰の名前を打ち込んだのか後で聞いてみようと思う。それが正解か不正解かはさて置いても、何かのヒントになるかもしれない」

『彼が素直に答えてくれるとは思えないけど……分かった。そっちは任せるよ』

「ああ。じゃあな」

通話を切って携帯を仕舞うと、依然対応に追われている平田がそこにいた。

幸村も頭が痛いのか顔を顰めている。

「くそ……高円寺のせいで話し合いどころじゃなくなっちゃったじゃないかつ」

「ちよつと出てくる」

話し合いが流れてしまったことを横目に確認し、綾小路は一言残して部屋を出た。

高円寺が試験を終了させたことにより、残るグループは11となった。

綾小路はこの試験をどう立ち回るか考えていた。

その結論として、今回の試験で出来る限界をある程度見てしまっていた。

どう画策したところで、残る干支全てのグループでDクラスに勝利を齎すことはほぼ不可能だった。

それぞれの生徒と繋がりを持っていれば手の施しようもあるが、綾小路にはその繋がりが無い。

自身が持つ携帯からは、他グループの答えに介入することも出来ない。

それ以外の方法に手を伸ばすには時間も足りなければリスクも高い。

「(情報網を持っているのは平田と櫛田、そして柚椰だが……)」

現状としてその3人を以ってしても自分のクラスの優待者ですら全て把握できていない。

明らかに後手に回っている状態だった。

「(優待者の法則さえ掴めればまだやり用はあるが……)」

今のところ法則性を導き出すための材料は揃っていない。

決定的な要素を揃えないうちに動き出すことは悪手に成りえる以上、まだ手は出せなかった。

休みを含めてあと3日。

たとえ今から3人の情報網を駆使していったとしても、勝率は心許

ない。

各グループの話し合いを把握できるような状態には持っていない。

現状を踏まえ、綾小路は一つの判断を下した。

「(やはり今回の試験は目先の勝利より先に、この先動かせる駒を手に入れることが重要だな)」

考えを巡らせながら当てもなく歩き続けていると、船外のデッキに辿り着いた。

天を見上げると、満天の星空が視界いっぱい広がっている。

本や映像で見えるものとは桁違いの規模で広がる美しい光景に思わず声を漏らすほどだ。

都会ではまず見ることの出来ない夜景に足を止める。

周りを見渡してみれば、少数ではあるが男女の生徒が手を取り合ったり肩を組みあつたりして同じ星空を見上げているのが分かった。

明らかにカップルばかりが集まっている。

その事実に対し虚しさを感じながら、綾小路は引き続いて景色を堪能した。

ただ、そんな二人組だらけの空間に、彼と同じく一人だけで星空を見上げる生徒のシルエットがあつた。

彼の気配を感じ取ったのか、その影が動き振り返る。

「あれ？　綾小路君？」

「その声は……櫛田か？」

闇から浮かび上がった来た姿は櫛田であり、彼女は驚いたような顔で綾小路を見ている。

「一人、か？」

誰かと待ち合わせをしているのではないかと思いつながらもそう尋ねる。

すると櫛田はコクンと小さく頷いた。

「うん、そうだよ。なんとなく眠れなくなつて」

「そうか」

近づいていいものかと綾小路が思っていると櫛田の方から近づい

てきた。

「綾小路君は一人なの？」

「ああ。まあ、ちよつとな」

「ふふつ、そつか」

「櫛田のことだから柚椰とでも待ち合わせしてるものかと思った」

「え？」

その問いにキョトンとした顔をした櫛田だったが、やがて照れ臭そうにはにかんだ。

「違うよ。確かに柚椰君とこの星を見るのも楽しいかもしれないけどね」

「そつか」

「うん、時間も遅いからね。いきなりそんなお誘いしても迷惑になっちゃうよ」

「柚椰なら二つ返事で了承してくれそうな気もするけどな」

「あはは、そうかもね。じゃあ、明日は柚椰君と来ようかな」

ふわりとした笑顔で櫛田がそう答えると、二人の間に沈黙が広がった。

会話の引き出しが少ない綾小路にとってその沈黙は痛かった。

周りがカップルばかりということもあり、なんとなく居心地の悪さも感じていた。

「えーと、じゃあ俺は先に戻るから」

「もう帰っちゃうの？」

「眠くなってきたしな」

そう嘘をつきつつ、さっさとこの場を離れようとする綾小路。

櫛田は少し残念そうな顔をしながらも、立ち去ろうとする彼に手を振った。

「そつか。それじゃあまた明日。お休みなさい」

「お休み」

短く別れの言葉を交わし、綾小路は足早にその場を去っていった。

『午グループの試験が終了いたしました。午グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動してください』

『酉グループの試験が終了いたしました。酉グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動してください』

『戌グループの試験が終了いたしました。戌グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動してください』

『亥グループの試験が終了いたしました。亥グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動してください』

午前1時30分。4件のメールが全生徒に一斉に送信された。

水面下で思惑は広がる。

「〜♪」

船内試験二日目の朝。ビュツフェレストランで一人、上機嫌に朝食を摂ろうとする男子生徒の姿があった。

いつもはあまり多くの量を食べない彼だが、今日はらしくなく皿には料理が山のように積んであった。

心が軽くなった今ならば、いくらでも食べられる気がしているのだ。

目下のストレスから解放された今ならば、

「いただきます」

両手を合わせ、感謝の言葉を呟く。

人としてのマナー、食事をすることへの感謝の気持ちだ。

手に持ったフォークで早速サラダをつつき口へと運ぶ。

「ん〜っ、おいしい♪」

新鮮なレタス特有のシャキシャキとした食感と快音に自然と頬が緩む。

ひんやりとしたパプリカも、綺麗にカットされたトマトも、全てが心地よい。

別段特別なものではないはずのサラダが、いつも以上に美味しく感じる。

その感覚にますます気分が高潮する。

続いてソーセージをフォークで突き刺し口へ運ぶ。

茹でたてのため歯を立てるとバリツという快音が鳴る。

ここで食べられるソーセージは自家製と銘打っており肉の中にハーブが練りこまれていた。

噛めば粗挽きされた肉から出る肉汁とハーブの風味が口の中に広がる。

「(おいしいなあ)」

心の中で思わずしみじみと呟いてしまうほどにその味は極上だった。

彼がソーセージの味に浸っていると、同じく朝食を食べに来たクラスメイトが彼を見つけた。

「よお、沖谷。おはよー！」

「一人か？　なら俺たちと一緒に食おうぜ」

「随分盛ったな。お前そんな食う奴だっけか？」

やってきたのは池、山内、須藤の三人。

彼らは一緒に朝食を食べるためにここにきたようだ。

声をかけられた沖谷は山内の申し出に快く了承し、空いている席へ三人を促した。

腰を下ろした三人は改めて沖谷の皿に盛られている料理の数々に目を向けた。

「つかどしたん？　めっちゃ盛ってんじゃん」

「だな。沖谷ってあまり食わないイメージあったわ」

「食べ放題でテンション上がってんのか？」

「あはは……うん、まあ、そんなところかな」

「食いきれなかったら言えよ。食ってやるから」

それは須藤なりの優しさなのだろうと察した沖谷はふにやりと微笑んだ。

「ありがとう須藤君」

「ん」

礼の言葉を受け取りながら須藤は大盛りにしたカレーをがつつく。「まあでも取りすぎちまうのも分かるけどなー。どれも美味そうだし」

「それな。朝からめっちゃ豪華だよなー。つい欲張っちゃまう」

そう語る二人も思い思いに皿に盛った料理を食べ始める。

朝食を楽しんでいると話題は昨夜のことへシフトした。

「なあ、夜中に届いたメール見た？」

「うん」

「そりゃ見るだろ。立て続けに4通も来たら」

「夜中に携帯鳴らしやがって」

池が振った話に他の三人はそれぞれ反応を示す。

「初日で5グループも試験終了だろ？ やべえよな」

「うん、早いよね」

「要するに5人裏切り者が出たってことだろ？ んで、内一人が高円寺と」

「あの野郎、試験ダリイからって適当な奴当ててねえだろうな」

須藤は高円寺が当てずっぽうで優待者を当てていないか不安らしい。

池と山内も同じことを考えているようで難しい顔をしている。

対して沖谷はあまり心配はしていなかった。

「どうだろう……でも高円寺君って頭いいよね。案外ちゃんと優待者が誰か見抜いてたのかも」

「1日で誰が優待者が分かってたって？マジかよ」

「だとしたらどうやってやったか教えて欲しいよな。ヒントになるかもしれないし」

「あの高円寺が素直に教えてくれるわけねえだろ」

高円寺が性格に難ありというのはDクラスならば誰もが知っていることだ。

彼に教えを請うたところで素直に教えてもらえるはずもなく。

結局は自分の力でどうにかしなければならぬというのは明らかだった。

「そっぴいや昨日で沖谷のグループはもう試験終わったんだよな？」

「うん、僕は西グループだったから」

沖谷が属していた西グループは昨夜裏切り者の手によって試験終了となった。

つまり彼はもう試験に参加する必要はなくなったということだ。

「誰が裏切ったんだらうな。つか、そもそも誰が優待者だったんだ？」

「僕も分からないけど……でも僕的には良かったかなって」

「良かったって、なんでだ？」

須藤がそう尋ねると沖谷は困った顔で俯く。

「僕、他のクラスに友達とかいないから……グループにいた同じクラスの人にも仲の良い人いなくて」

「あーなるほど」

「まあ普段他クラスとは喋り合ってるからなー。いきなり協力しろって言われても無理だよな」

「そう考えると俺と池は同じグループでよかったぜ」

三人は沖谷の心労を察した。

彼は元々内気な性格で交友関係が広い人間ではない。

そんな彼が知らない人間しかいない環境で3日間過ごすというのはストレスだろう。

「優待者を探るためにグループにいる人全員を疑うのって疲れちゃうからさ。それから解放されるって考えたらなんか肩の荷が下りたっていうか」

「だからそんなリラックスしてんのか」

「うん、そんな感じかな」

試験が終わったということはもう他クラスと探り合いをする必要はなくなったということ。

それは沖谷にとって裏切り者が出たことよりもはるかに重要だった。

「つていうかさ、俺思ったんだけどよ」

何かを思いついた山内がニヤニヤとした顔で三人に話を振る。

「どうした春樹」

「どうせロクでもねえこと思いついたんだろ」

「ふっふっふ……ロクでもないかどうかは確かめてから言ってもらおうか！」

須藤のツッコミに気持ちの悪い笑いを漏らしながら山内は携帯を取り出した。

今の状況で携帯を片手に持っているということに須藤たちの間に嫌な予感が過ぎる。

「もう5人も裏切り者が出たわけだろ？　ならこっからはどれだけ早

く裏切るかのスピード勝負だと思っただわ」

「おい春樹、お前まさか」

「裏切られる前に裏切るしかねえっしょ！ ダラダラしてつと他の奴らにポイント持ってかれちまうからな」

「ちよつ、待て待て！ お前優待者の目星付いてんのか!？」

「当てずっぽうでやって当たるわけねえだろ!？」

「そ、そうだよ！ もし間違えちゃったら——」

「大丈夫だって、怪しい奴はもう見つけてるからよ！ これで50万は頂きだ！」

三人が止めようとするが山内は聞き入れることなく、手早く携帯を操作して学校にメールを送ってしまった。

するとすぐに全員の携帯が一斉に鳴る。

山内以外の三人が恐る恐る携帯を確認すると、

『未グループの試験が終了いたしました。未グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動してください』

昨日から何度も見た文面が表示されていた。

このタイミングでそのメールが届くということは原因はただ一つ。

今、目の前でメールを送った山内が試験を終わらせたのだ。

「マジでやりやがった……」

「これどうすんだ……？ 一応クラスに報告した方がいいのか？」

池と須藤は山内の軽率な行動に頭を抱えていた。

2日目の朝にしてクラス内に新たな裏切り者が出たのだ。

しかもその裏切り者が山内だというのが余計に頭を悩ませる。

高円寺の場合は元のスペックの高さからまだ正解の希望が残っていたが山内に関しては、

「(まず間違いなくハズレだろこれ)」

普段連んでいる間柄だからこそ分かる山内のスペック。

テストの出来もどんぐりの背比べであるこのメンツ。

こんな早い段階で優待者を見抜くほどの頭脳は自分にも山内にもないと須藤と池は確信していた。

故にこの回答はほぼ間違いなく不正解。

つまりこの時点でDクラスはクラスポイントを50失ったと考えるのが妥当だった。

「ヤベエよ健……どうすつぺこれ？」

「とりあえず柚椰と堀北には裏切ったのが春樹だって報告した方がいいかもな」

「だよなあ……よし、じゃあ俺が黛に報告行くからお前は堀北ちゃんのところ行けよ」

「は？ ふざけんなよ。俺が柚椰の方行くからお前が堀北のところ行けよ」

「無理無理無理！ 堀北ちゃん絶対ブチ切れるって！ つか多分ワンチャン高円寺の時点でキレてるって！」

「うるせえ！ 男なら腹括れ！」

「お前こそ腹括れや！ いつも堀北ちゃんと口喧嘩してんだから今更だろー！」

「いつものアレと八つ当たりじゃモノが違うだろうが！ 堀北のガチギレとか想像したくねえぞ！」

「あの……二人とも、メールで報告すればいいんじゃない？ 別に直接言いに行かなくても」

二人の言い争いに沖谷が正論を挟んだ。

確かに携帯がある以上、報告はそれで事足りるだろう。

当たり前前にことに気づかされたことで二人は一気に落ち着きを取り戻す。

「そ、そうだよな。メールで済む話だったわ。うん」

「じゃあさっさと報告済ませようぜ。柚椰にメールしとくわ」

「あ、俺堀北ちゃんのアドレス知らねえ」

「あ？ 俺も知らねえよ。じゃあ柚椰に堀北にも伝えてくれて打つとく」

須藤は用件を一つ追加した文面を打ち込んで送信した。

「……山内君は間違いなく外した」

沖谷は山内の様子を静かに観察して確信していた。

彼が優待者当てを間違えたことを。

学校に優待者を書いたメールを送った後、山内は上機嫌で食事を再開していた。

正解を根拠もなく信じているのか、彼の表情からは一切の不安が伺えない。

しかし沖谷は確信していた。

間違いなく山内は優待者を外した。

何故なら山内はメールを送った後、一切携帯を弄っていないからだ。

それは不正解の証明であると沖谷は知っていた。

「これで僕たちのクラスはマイナス50ポイント。優待者には50万ポイントかあ……」

これが後々響かないことを沖谷は内心願った。

「最悪だわ……」

午前10時。平田の部屋に昨日のメンバーが集まっていた。

全員が揃うや否や開口一番堀北の深々としたため息と共に吐き出された毒舌。

彼女に同調するように幸村もため息をつく。

「同感だ。高円寺に次いで山内まで裏切るとは……しかもそっちはほぼ間違いなくハズレだど？ ふざけろ！」

「健たちと一緒に朝食を食べていたその席でメールを送ったらしいね。本人は自信满满みたいだけど、健も池も、同席していた沖谷も不

正解だと思っっているようだ」

「そりやそうだろ。こんな早い段階で確信を持って優待者が当てられるわけがない！」

柚椰から状況を説明され、幸村は一層怒りを露わにする。

「山内君のことは一旦置いておいて、とりあえず状況を整理しようか」
平田がフォローするように場を取り持ち、全体に落ち着くよう促す。

彼の言うことは尤もであるため幸村も一旦矛を収める。

「既に試験が終わっているグループは午、未、申、酉、戌、亥の6グループ。残っているのは子から巳までの6グループだね」

「このタイミニングでの試験終了は結果3か結果4のどちらかだけ。つまり既に終わった6グループはいずれも裏切り者が現れたってことよね」

「内二人。申の裏切り者が高円寺で未の裏切り者が山内。高円寺の方は分からないが、山内の方は不正解が濃厚、と」

柚椰と堀北、綾小路の3人が淡々と状況を整理していく。

「うん。そして午グループの優待者は私たちのクラスの南君。見抜かれちゃったかどうかは分からないね……」

既に試験が終わったグループに存在する優待者のため、櫛田は堂々と名前を言った。

「残る優待者は2人。他のクラスはどうなっているか……」

「単純に考えればどのクラスも1人か2人は優待者が残っているって計算になるわね」

「にしても早すぎるな……こうも簡単に裏切り者が現れるとは」

綾小路は試験の展開が早すぎることに違和感を覚え始めていた。

誰も彼もが当てずっぽうに、無作為に裏切りを行なった可能性は勿論ある。

しかし何か裏があるような、誰かが裏で糸を引いているような雰囲気を感じ取っていた。

「裏切り者にはいくつ種類がありそうだね。高円寺のように何かに気づいて確信を持って当てにいったパターン。山内のように勘に身

を任せて当てにいったパターン。そしてもう一つは」

「誰かから優待者の情報を買ったか、あるいは取引で手に入れた人が裏切ったパターンね？」

堀北の言葉に柚椰は頷く。

「優待者の情報は使いようがいくらでもある。例えば自分のクラスの優待者を1人教える代わりに他のクラスの優待者を1人教えてもらう、とかね」

「情報のトレードってことね。お互いに相手のクラスの優待者の情報を握っていれば裏切ることによるクラスポイントのマイナスを相殺出来る。でも問題はそこじゃないわ。それによって生まれる利点は――」

「そう。優待者の法則を導き出すための判断材料を手に入れることが出来る。自クラスの優待者だけでは法則性を見抜くには不確定要素があるからね。そしてその手を使うためには自クラスの優待者を確実に把握している必要がある」

「やってきそうな相手が一人いるわね……」

「龍園か……」

龍園が自分のクラスの優待者を確実に知ることができるといっているのはこの場にいる全員が理解している。

正確な情報源と彼の性格を考えれば今の推測に当てはまるのは彼以外にいない。

「まずいね……俺たちが把握している残りの優待者は1人だけだ。後1人は未だに誰だか分からない」

「ここまで黙ってるってことは、もしかしたらその取引に応じてる可能性もあるんじゃないのか？ 前に黛が言ってただろ。優待者自身も裏切り者になる可能性があるって」

幸村は以前柚椰が示した可能性の話を思い出していた。

そのときはAクラスを例に挙げたが、それは他のクラスにも当てはまる可能性は十分ある。

「最後の1人が他のクラスと取引をしている可能性…… 確かにありえるわね。対価として正解ボーナスの何割かを要求するとか、結果

を操作することも取引の内容によっては可能だわ」

「僕は……信じた。仲間がクラスを裏切るなんて思いたくないよ」

「私も……折角同じクラスになれたのに、裏切る人が出るなんて信じたくないな……」

平田と櫛田はクラスメイトを信じたいという気持ちが強いうだ。

同じクラスの人間がクラスを裏切るような真似をするとは思いたくない。

それは偏に2人の仁徳だろうか。

「鈴音、今ある情報で優待者の法則まで導き出せると思うかい？」

「……正直難しいわ。分かっている優待者が2人だけ。他のクラスの優待者は1人も分からない。あまりに情報が少なすぎる」

「そうだね……清隆、高円寺は何か言っていたかな？」

柚椰は昨日電話で綾小路が言っていたことを思い出した。

高円寺が裏切って試験を終わらせたため、彼がどのようなにして優待者を見抜いたのか聞いてみるというものだ。

もしかしたらそれがヒントになるかもしれない。

しかし綾小路は困ったような顔で首を横に振った。

「今朝聞いてみたんだが、はつきりとしたことは言ってもらえなかった。『気づいてしまえばなんてことはない。実につまらない問題だよ』とだけしか」

「口ぶりから察するに優待者が嘘をついていることを見抜いた、ということではなく本当に法則に気づいたみたいだね」

「問題はその法則よ。高円寺君はどうやって法則まで辿り着いたというの？ 彼は自分のクラスの優待者すら知らなかったはずよ」

高円寺はこの話し合いの場には一度たりとて参加しなかった。

平田や櫛田から優待者の情報を得ていた素振りもない。

つまり全く情報を入れずに法則を導き出したことになる。

「悔しいけど、今の段階じゃ法則性を見抜くのは難しいね。引き続き自クラスの優待者を守る方針で、何か進展があればその都度共有し合おう」

平田がそう纏めて今回の話し合いは終了した。

TO：黛柚椰 件名：ポイント 10：30

さつきポイント振り込まれたよ。約束通り半分振り込むから番号教えて。

TO：黛柚椰 件名：ポイント貰えたよ！ 10：35

ポイント振り込まれたから黛君にも送るね！ 番号教えてほしいな。

TO：黛柚椰 件名：完了 10：40

確認した。徴収後ポイントを送る。これで取引完了だ。あとはお互い好きにやろうぜ。

午後1時10分前。綾小路は3回目のグループデイスカッションのために卵グループの部屋にやってきた。

開始10分前に来て一番乗りだった彼の次にやって来たのは意外なことに軽井沢だった。

彼女は綾小路を見つけた直後、一瞬嫌そうな顔をしたがすぐに視線を逸らすと、部屋の隅っこに腰を下ろす。

綾小路から一番遠い位置に座る辺り、よっぽど近寄りたくないらしい。

軽井沢は携帯を操作すると耳に当て、誰かと通話を始めた。

「あ、もしもしリノっち？ 今大丈夫？ そっちの様子はどうなわけ？ え、こっち？ こっちはマジ最悪っていうか。なんかもうゲンナリって感じ」

二人きりの部屋では、当然会話も筒抜けであり軽井沢の陽気を織り交ぜた巧みな会話が綾小路の耳にも入ってくる。

軽井沢が言う最悪というのは二人きりのこの気まずい状況を言うのだらうと薄々察した。

それからすぐに通話が終了すると、途端に静寂の時間が訪れる。

「あーそうだ。あんたって優待者？ 幸村君と外……君は違うみたいなんだけど」

軽井沢がなんとなしに綾小路にそう問いかける。

外村の名前は覚えていないらしい。

どうやら軽井沢も自分のクラスに優待者がいるかどうかくらいは確認しておきたいのだろう。

そう察した綾小路は素直に彼女の質問に答える。

「違う」

「あつそ。ならいいけど」

否定されればそれ以上聞く気はないのか軽井沢がそこで会話を打ち切る。

「信じてくれるのか？」

「は？ 違うんでしょ？」

疑うつもりがないのか、そもそも興味がないのか。

本心は分からないが軽井沢はそれ以上追求することはなかった。

「二人とも早いねー」

一之瀬達Bクラスの面々がやってきた。

「今日もよろしくね」

一之瀬の言葉に綾小路は小さく手を挙げて応える。

彼女は軽井沢にも声をかけたが、軽井沢は携帯に集中していて反応を見せなかった。

そして定刻になる直前には全員が揃った。

しかしその様子は昨日と全く変わらない。

Aクラスは距離を置き、除いた三つのクラスだけで輪を作る。

それをみた軽井沢は腰をあげるとAクラスの町田の隣に座りなおした。

明らかに昨日の真鍋達とのいざこざを受けての防御策だった。

ほぼ話し合いに参加していない町田だが、存在感は非常に強く発言力も強い。

男女の差もあり真鍋達女子だけで構成されたCクラスからしてみれば手も足も出ない状態と言えるだろう。

唯一対抗できる可能性を秘めている伊吹も今まで通り誰とも馴れ合わず腕を組んで黙り込んでいる。

状況を考えると軽井沢の判断は正しかったと言えるだろう。

「大丈夫だ。もし何かあったらすぐに助けてやる」

「ありがとう、町田君」

再び自分を頼ってきたことで、町田は完全に軽井沢のナイトを気取っていた。

性格はさて置いても、軽井沢は外見は可愛い女の子である。

そんな子に頼りにされれば悪い気はしないだろう。

たとえクラスが違っても守ってあげたくなるはずだ。

しかし軽井沢には既に平田という彼氏がいる。

あわよくばな展開は無いだろう。

そんな歪な恋模様を横目に他の面々は顔を突き合わせて険しい顔をしていた。

この場にいる誰もが理解しているのだ。

自分たちのクラスに優待者がいるのかいないのかが勝敗を大きく左右することを。

「さてと。昨日の夜から話し合いは平行線なんだけど……やっぱり私は全員で優待者を探し出すための話し合いを持つべきだと思うの」「またそれか。いい加減成立しないと悟ったらどうだ。俺たちが不参加の状況で優待者を見つけ出すことなんてできるわけがない」

Aクラスからバカにしたようなヤジが飛んでくる。

「そうでもないと思うけど。要は信頼関係の問題だよ。そこで今日は、皆でトランプでもして遊ぼうと思うの。もちろん強制じゃないからやりたい人だけでいいよ」

私物と思われるトランプを取り出し笑顔を見せる一之瀬。

「ははは。トランプで信頼関係？　くだらない」

「くだらないって言うけど、やってみると意外と楽しいよ？　それに今から1時間ずっと黙って過ごすのは辛いと思うんだよね。だから退屈しのぎって思ってもらえたらいいよ」

Bクラスからは当たり前のように全員が参加を表明する。

「拙者もやるでござる。やることもないですし」

博士に乗っかる形で綾小路も軽く手を挙げて参加を伝えた。

「5人だね。とりあえず大富豪でもしよつか」

それからアナウンスがなるまでの間、5人はトランプに興じた。

大富豪に始まり、最終的にはババ抜きまでと5つほどのゲームを堪能した。

時間経過を伝えるアナウンスが鳴ったのをきっかけに、トランプ遊びは終了する。

「ふう……楽しかったでござるねえ。たまにはカードゲームも悪くないでござる」

博士は有意義な時間を過ごせたと感じているのか満足気だ。

既にAクラスとCクラスのメンバーは部屋を出て行っていた。

どうやら本当に決められた時間以上はこの場にいるつもりはないらしい。

「さてと、じゃあちよつと行ってくるね」

「どこへですか？」

「このままAクラスに逃げ切りを許すわけにもいかないしね」

「葛城君に会いに行くんですね」

どうやら一之瀬はAクラスのリーダーへ接触を図るつもりらしい。人との繋がりを持っていない綾小路にとってこれは絶好のチャンスだった。

「もしよかったら俺もついていいか？」

「ん？　それは全然いいけど。もしかして綾小路君も葛城君に？」

単純に疑問に感じたのか一之瀬が首を傾げる。

「そうじゃないけどな。葛城がいるグループには柚椰と堀北もいるからな」

「そっか、そうだよねー。じゃあ一緒に行こうか。また後でね浜口君」
納得したのか一之瀬は頷いた。浜口なる男子生徒はそのまま見送るつもりらしい。

同時に話し合いが行われている以上、解散時間も同じだろう。

一之瀬と綾小路は辰グループの解散前に目的地に着くべく足早に廊下に出た。

「ちよつと急ぐうか」

「ああ」

二人は早歩きで目的地を目指した。

王は動き出し、彼は心を弱らせる。

辰グループの部屋へ急ぐ一之瀬と綾小路。

各グループの部屋は全て同じフロアにあるため、目的地に辿り着くまでそう時間はかからなかった。

プレートが飾られた一室の前に二人は立った。

中から声は聞こえないが、まだ室内には人の気配がある。

「結構時間かかっているみたいだね」

「龍園や葛城が話し合いに加わるとは考えにくいけどな。Bクラスの力が作用してるか」

「どうかなあ。神崎君は場を纏めるタイプじゃないし……話を纏めるなら黛君たちDクラスなんじゃない？ 堀北さんや平田君もいるし、進行役には事欠かないんじゃないかな」

「そうかもな」

規定の時刻を10分ほど過ぎた頃。辰グループの扉が開いた。

先陣を切って出てきたのは、一之瀬が話すべくやってきた人物である葛城だった。

後ろには同じAクラスと思われる生徒達の姿もある。葛城はすぐ一之瀬の姿に気がつき顔を向ける。

「一之瀬か。こんなところで何をしている。偶然、というわけではなさそうだが」

「少しだけ葛城君に話があつてね。時間いい？」

「この試験はインターバルが長い。時間は持て余しているから問題ない」

「どうやら葛城もBクラスのリーダーである一之瀬を無視することではなく、対話には応じるつもりらしい。」

彼は承諾すると後ろの生徒たちに先に行くように指示をした。

「俺だけ残ってれば問題ないだろう？」

一之瀬は小さく頷き、通行者の邪魔にならないようにやや壁寄りに

集まった。

綾小路も話の輪に加わるべく彼女の傍に立つ。

「話の内容は、葛城君なら見当がついてると思うけど。君が全てのグループに話し合いの拒絶をお願いしたのは本当？ もしそうなら、一度考え直してもらえないかな？ 今回の試験は対話をもとに答えを見つけるもの。試験そのものが成立しないよね？」

「やはりその話か……その話し合いは既に昨日の段階で耳にタコが出来るほど追及された。一之瀬にしては随分と遅い接触だったな」

葛城の作戦は既に多くの生徒に認知されていたらしい。

自由時間の間も彼の元を訪れた者がいたのだろう。

「こっちにはこっちの事情があるからね。それで、葛城君。さっきの質問だけど対話を断つ考え方には賛同できない。考え直してもらえないかな？」

一之瀬の要望に対して葛城は聞き飽きたと言わんばかりに嘆息する。

「お前は今回の試験を対話ありきと考えているようだがそれは違う。今回の試験はシンキング、考える試験だ。つまり話し合いはさして重要ではない。俺はしっかりと試験に沿って考え、その上で話し合いの拒絶という選択を選んだだけだ」

「でも葛城君の考え方だと、試験を拒否しているように見えるよ」

「言葉は悪いが間違っではない。この試験だけでなく、今後も試験では、結果の差異がつかない仕組みを探して行くつもりだ。我々Aクラスが今の位置をキープするための手段としては、何も間違っていないと思うが？」

「これがクラス対抗の試験ならね。葛城君の考えは間違っではないと思うよ。でも今は全クラス入り混じっての試験、それが本当に正しい意見かな？」

話し合いに応じないAクラスを変えるために葛城に接触した一之瀬だが、当の葛城の意思は固い。

彼はグループ内の小競り合いに興味はなく、あくまでAクラスのリードを保つことを最優先として考えていた。

「これ以上の話し合いが無意味なことは分かっただろう一之瀬。俺は考えを変えない」

「交渉の余地はない、つてことかな？」

「その通りだ。俺は俺の選択でAクラスを死守する」

話し合いは平行線。最早議論を挟む余地はなかった。

しかし一之瀬は落胆することはなかった。

元々望みの薄い賭けだったためか、苦笑いを浮かべるのみだ。

「残念だがAクラスが不参加を表明している以上、お前達に出来ることは限られている。そう上手く事が運ぶことはないだろう」

たとえ3クラスが結束しようとしても、この試験に勝つことは容易ではない。

試験の仕組みそのものが裏切り者が得をすることになっている以上、協力関係を構築することも維持することも難しい。

均等にメリットが生まれなければ協力する理由も生まれない。

「……一つ聞かせてもらいたい。もし君がAクラスのリーダーだったならどうした？もしかすると同じような作戦を立てていたのではないか？」

「さあ、どうかな？ 実際にその立場になってみないと分からないかな」

明確な返答はしなかったが、葛城は目を閉じて腕を組んだ。そして改めて一之瀬と目を合わせる。

「これは個人的なイメージだが、君は俺と同じ戦略に至ったと思っている。自らのクラスを守るためならば他の批判など気にも留めないだろう、とな」

葛城は一之瀬が同じ信念を持つと感じているらしい。

彼の読みを一之瀬は柔らかな笑みを浮かべ流した。

「時間取らせてごめんね。なんとなく理解できたよ。葛城君の考え方がね」

「それはよかった。では失礼する」

そう言い残して葛城はその場から去っていった。

「どうやら葛城の方針は変わらないみたいだな」

「そうだねー。でも元々望み薄だったから仕方ないかな」

「どうするんだ？　ここで神崎が出てくるのを待つのか？」

「綾小路君も黛君達を待つんでしょ？　話も聞いておきたいし、一緒に待とうかな」

葛城は考えを変えない以上、他のクラスの面々の意見を聞くという意図もあつたのだろう。

引き続いて一之瀬は他のクラスのメンバーが出てくるまで待つことにしたようだ。

二人がその場で10分ほど待っていると辰グループの扉が開いた。出てきたのは龍園を除くCクラスの生徒、そして平田だった。

「綾小路君、それに一之瀬さんもどうしたんだい？」

部屋の外で待っていた二人を見つけた平田が不思議そうに近づいてきた。

「こんにちは平田君、辰グループは随分ゆっくりなんだね」

「うん、ちよつと色々あつてね。一之瀬さんは神崎君を待ってるのかな？」

「そんな感じかな。あと平田君達Dクラスの人ともちよつと話したいなつて」

「黛君と堀北さんはまだ中にいるよ。神崎君もね」

「取り込み中か？」

綾小路がそう尋ねると平田は困ったように笑った。

「うん……まあ、そうだね。詳しくは中に入って確かめた方が早いよ」

平田は扉に手をかけ中に入るよう促す。

「いいいいいよ、話し合い中なら待つし」

「大丈夫だと思うよ。今は自由時間だから、他のグループの人が部屋に入っても問題ないはずだ」

そう言つて平田は二人を部屋の中へと案内した。

中へと入った二人が見たのはこれまた異様な光景だった。

一つのテーブルを囲むように配置された椅子が四脚。

それらに神崎、龍園、柚椰、堀北が腰を下ろしていた。

机上には何やら紙が置かれており、彼らが何やら話し合いをしてい

るのが見て取れる。

その空間に部外者が立ち入ったことで、それぞれの視線が一之瀬ら二人に向けられる。

堀北と神崎は表情を変えることはなかったが、龍園は面白そうに小さく笑い声をあげた。

そして手を挙げ一之瀬を呼ぶ。

「よう。わざわざ偵察に来たのか？ 遠慮せず座れよ」

「随分面白い組み合わせだね。時間外で何を話し合ってたのか興味あるな」

「クク。そりやそうだろうさ。本来ならお前が神崎とこの場所にいると思っていたからな。ところが蓋を開けてみればお前は別のグループ。それも、箸にも棒にも掛からないチンケなチームに振り分けられるなんてな。それとも、お前はそこまでの人間だったか？」

「やだな龍園君。戦略もなにも、学校側が決めたことだし詳細は分からないよ。ただ、私たちは与えられた状況、情報をもとに戦うんだよ。その言い方だと順序が逆になっちゃうじゃない。学校は意図してグループ分けしたってこと？」

何も気づいていないように振る舞う一之瀬だが、それを龍園が素直に信じるわけもなく、彼はクツクツと小さく笑い声を漏らす。

傍にいる綾小路など眼中にないかのように繰り広げられるやり取りの中、今まで黙っていた柚椰が彼に声をかけた。

「清隆、ずっと立っているのも疲れるだろうから座りなよ。椅子はたくさん余っているからね。ほら一之瀬もどうぞ」

そう言つて壁に寄せて置いてあった椅子を二脚抱えるとテーブルの傍に並べた。

彼の厚意に甘えるように二人は置かれた椅子に腰を下ろす。

「それとさつき二人がしていた話に関してだけど、この試験のグループ分けが意図的に行われたことは明らかだろうか？ でなければ一つのグループに各クラスのリーダー格が揃うなんてことは、まずあり得ない」

柚椰は龍園と同じ見解なのか彼が一之瀬としていたやり取りにつ

いて触れた。

龍園はニヤツと口角を上げて柚椰を横目に見ると再び一之瀬に視線を合わせる。

「同感だな。だからこそ解せねえ。Bの筆頭であるお前が外れたのは一体どういうわけなんだろうな」

「さあ。私には理由なんて分からないかな」

一之瀬はあくまで今知った、理由も知らないといったような反応を示す。

しかしこの場において、彼女がそこまでの考えに至らないほど無能であると認識している者など誰一人として存在しない。

同じクラスの神崎は勿論、柚椰や堀北、綾小路も、龍園でさえ彼女のことは一定の評価を下している。

今更この手の化かし合いに釣られるほど、このメンバーは馬鹿ではないのだ。

「フン、まあ惚けるならそれでいい。それにしても……」

やや呆れた様子で、龍園は綾小路に向けて軽く一瞥を向けた。

「俺も女のケツを追いかけるのは好きだが、お前も大概だな。いつ見ても女の横に陣取ってやがる」

確かにこれまで彼が現れた際、綾小路はほぼ毎回誰か女子の隣にいた。

無人島のときは堀北の、そして今回は一之瀬と行動を共にしている。

本人にその気は毛頭ないだろうが、龍園の言っていることを否定できないうちも確かだった。

龍園もそこまで綾小路に関心があるわけでもないのか、それ以上なにか言ってくることはなかった。

「ところで一之瀬、お前良いところに来たじゃねえか」

「どういうことかな？」

一之瀬の疑問に柚椰が答える。

「この試験の今後について話していたんだ。葛城たちAクラスはすぐに出て行ってしまったから、残りのメンバーで色々と話をね」

「へえ、どんな話？」

「今日の午前中の段階で既に半分のグループが試験終了になった。その内訳についてだな」

龍園が切り出した話題に関心が寄せられる。

「終わったグループの内、午と戌に関しては俺のクラスが裏切った」
「それを証明する手段がない以上、信じることは難しいと思うんだけど」

一之瀬の至極当然の指摘を受けて尚、龍園は飄々としている。

「勿論、信じるかどうかはお前らの自由だ。だが、ここにもう一つ情報を加えてやる。午グループの優待者はDクラスの人間だった」

「——っ」

「それで、もう一つのグループに関しては？ どうせ明かすのならそちらも教えてほしいな」

堀北が僅かに息を呑む中、柚椰が龍園に更なる情報の開示を求めた。

すると龍園は嫌な顔一つせずさらに情報を追加する。

「もう一つのグループ。戌に関しては優待者はAクラスだ。これでCクラスはAとD、二つのクラスから50ポイント頂いたってわけだ」

「もし龍園君の話が本当なら、どうやって他のクラスの優待者を見抜いたのかな？ Cクラスには人の心を読める人でもいるの？」

「さあどうだろうな。もつとも、テメエなら俺が何をしたか分かっているんじゃないか？ なあ黛？」

一之瀬の疑問に答えさせるかのように龍園は柚椰に話を振る。

「考えられるとすれば、君が自分の力で優待者を導き出した。あるいは他のクラスの中に内通者がいるか、優待者と君が繋がっていたか。可能性はいくらでもありそうだね。でも、君が言った優待者の内訳も本当かどうかは分からない」

「クク、そうだな。試験の仕様上、終わったグループの裏切り者も優待者も分からねえ。どのクラスが動き出したのかさえ、な……」

「どのクラスも自分たちが抱えている優待者が誰かくらいは把握しているだろう。そこから逆算すれば、現時点で自分たちが守るべき優待

者が残り何人かは分かるはずだ」

「まあな。まさかこの期に及んでテメエのとこの優待者すら把握出来てねえなんてことはねえだろうからな」

「それで？ 残り6グループになった今の状況で君はどう動くつもりなんだい？」

「決まってるんだろ。ここに居るのはAクラス以外の3クラス。そのリーダー格が揃ってる。なら残りの6グループの結果をどう操作するかを話し合うのさ」

そこで一之瀬は龍園の狙いが分かった。

「なるほど、つまり龍園君は今残ってるグループの優待者をここにいう3クラスで共有したいってことだね？」

「その通りだ。契約によって解答を強制してはいけないなんてルールはない。なら書面にでも起こしてここに居る奴らで情報を占有しても問題はねえだろ？」

「現実的とは言えないわね。裏切り者が誰か分からない以上、契約違反の証拠もまた残らない。ここに居る誰かが情報を独り占めして、そのクラスが勝ち逃げをする危険があるわ」

話にならないとばかりに堀北がそう一蹴する。

契約によって解答を強制できるというルールの穴を突いた作戦は以前柚椰も指摘していた。

しかしそれはあくまで優待者が条件を設けて他者に解答を強いる場合についてだ。

つまり個人対個人の取引であり、契約を結んだその場で解答を行えるからこそ成立するものである。

だが龍園の提案はクラス対クラスの契約。情報が開示されても彼らが属しているグループ以外のものについては解答権がない。

結果を操作するには、必ず対象のグループに属しているクラスメイトに連絡を取る必要があるのだ。

この手間、このワンクッションこそが罠であることを堀北はすぐに見抜いていた。

もし残り6グループの結果を3クラスそれぞれがメリットを得ら

れるように割り振った場合、順当に行けば1クラス2グループの割り振りとなる。

しかしもし誰かがその決まりを破り、他のクラスに充てがわれたグループのクラスメイトにコンタクトを取ればどうなるか。

裏切り者が分からない以上、どのクラスが裏切ったのかも分からない。

つまりどこかのクラスが情報を独り占めし、それをクラスの中で共有させることも可能なのだ。

契約を反故にしたという証拠も残らないため、事実上契約が意味を成さない。

堀北が言っているのはつまりはそういうことだった。

「情報をこの場で共有しても、今この場でこっそりクラス中にメールで内容を送ってしまえばそれまでだ。使い慣れている人にとっては、たとえテーブルの下だろうと、後ろ手でだってメールは打てるだろうからね。それに、残りの6グループの中にAクラスが優待者のグループがあれば当然情報なんてものはない」

「それはどうだろうな？ 残り半分になった今、どのクラスが何人優待者を抱えてるか分かれば今までよりはかなりやりやすくなると思うぜ」

柚椰の指摘に対しても龍園は織り込み済みなのか強気な姿勢が崩れない。

彼はもうこの試験の全貌が見えているのかもしれない。

「それに、だ。少なくともこの案は俺と一之瀬なら可能だと思うがな」
龍園は一之瀬をチラリと見てニヤツと笑う。

「どういうことかな？」

「さっきそこのクソ野郎が言ってただろ？ どのクラスも自分たちが抱えてる優待者くらいは把握してらだろって。クラスを支配する俺と絶大なる人気を持ったお前。情報の正確さは保証できる。俺はここにいる3クラスで共闘しようなんて本気で思ってるわけじゃねえ。2クラスあればルールの種を割り出すことは十分可能だ」

「買いかぶりだよ。それに、Dクラスだって優待者くらい把握してる

はずでしょ」

「どうだかな。昨日の段階じゃ、Dクラスは二人までしか優待者を把握出来てなかった。加えて今の段階で内一人脱落した。残りの一人がまだ分からねえなら、この提案には乗れねえはずさ」

そう言うと龍園は今度は堀北に視線を移した。

睨め付けるような目で見られた堀北は対抗するように彼を睨む。

付け入る隙を見せれば一気に飲み込まれると理解しているからこそ、堀北は龍園から目を離さない。

しかし龍園もこの場にいるDクラスの面々において最も崩しやすいのが今日を向けている彼女だと本能的に感じ取っていた。

だからこそ柚椰ではなく彼女に視線を移したのだ。

数秒ほど堀北を見ていた龍園だが、もう興味を失ったのかニヤリとほくそ笑むと椅子から立ち上がる。

「フツ、まあいい。俺は別に必ずしも共闘しなきゃいけないわけじゃねえからな。精々俺を楽しませてくれよ」

そう言い残して彼は部屋を出て行った。

「ふう……やっぱり一筋縄じゃないみたいだね。Cクラスも」

龍園が出て行くや否や一之瀬は浅くため息をついた。

しかし特に焦っているようなことはなく、少し疲れている程度の反応だ。

一方柚椰は龍園の強気な態度が面白かったのかカラカラと笑っている。

「しかしまあ、正直なところ今の状況は龍園にとってかなり動きやすいということは確かだ。彼が言っていたことが本当なら、彼は既に他クラスの優待者の情報を得られるだけの状況を整えている、ということだからね」

「ああ、さっきお前が言っていた龍園が取ったと思われる手段の選択肢。そのうちのどれかか、あるいは全てを握ってる可能性もある」

「えーっと、つまり昨日の段階で当てたって言ってたDクラスとAクラスの優待者か、あるいはその子が優待者だって知ってる人と龍園君が繋がってるかもしれないってことだよな？」

「つまり内通者がいるかもしれないってことよ……私たちDクラスやAクラス、それこそ貴女達Bクラスの中にも」

堀北は一之瀬と神崎を見ながらそんなことを言った。

龍園が起こした行動、そして柚椰が示したいくつかの可能性。

それらが引き起こしたのは自分たちのクラスの中に他クラスのリーダーと繋がっているクラスメイトが紛れ込んでいるかもしれないという疑念だった。

「私は信じたくないな……私たちのクラスの中にそんな人がいるなんて」

「ああ。Aクラスに上がることが目下の目標である現状で龍園に協力するような奴がいるとは俺も思いたくない」

一之瀬も神崎も、クラスメイトを信じているのか疑念に吞まれることに抗っていた。

ここで疑心暗鬼になることは、それこそ龍園の思う壺なのだから。「葛城は現状維持に専念するために籠城。龍園は何をしてくるかわからない。試験は今日入れて残り2日、か」

神崎が淡々と並べる事実に一同の空気がますます重くなる。

そこで一之瀬が柚椰に目を向けた。

「ねえ黛君」

「なんだい？」

「今回の試験で、クラスを越えた協力関係は成立すると思う？」

「正直に言って、かなり難しいだろうね。Aクラスは、まず試験の目的そのものが俺たちと違う時点で論外だ。Cクラスに関してはさつき鈴音が言ったように契約反故もやってのける危険がある。そして俺たちDクラスは……はつきり言って、今どのクラスよりも後手に回ってる状態だからね」

「——っ、柚椰君」

「大丈夫だよ鈴音。一之瀬や神崎になら正直に話したとしても問題はないよ。龍園相手ならまだしも、今この場でBクラス相手にハツタリを利かせるメリットはないんだ」

クラスの現状を素直に明かす柚椰を堀北は思わず嗜めようとする

が、当の本人は一之瀬たちを信用しているからか楽観的だ。

「それってさつき龍園君が言つてた話？ Dクラスはまだ優待者全員を把握出来てないっていう……」

「そうなんだ。あと一人。一人だけが完全に沈黙している。平田や桔梗の呼び出しにも答ええない状況でね。だからもしあの場で龍園と一之瀬が共闘する、なんて流れになっていたら、こちらとしてはかなりまずかったんだ」

「心配しなくても私は龍園君と協力するつもりはなかったよ。Bクラスの中には彼の行動で傷ついた子もいるから」

（柚椰の心配は杞憂だと言うように一之瀬は首を横に振った。）

同じく神崎も無言で頷いている。

二人ともあの場で素直に龍園と協力するつもりはなかったようだ。「とにかく、今のDクラスは君たちBクラスと同じ土俵にすら立てていないんだ。だから今この場で協力して欲しいなんてことを提案するのはイーブンじゃない。結果的に君たちに多くを求めることになってしまい、かける負担も大きくなってしまふ。それは俺としても申し訳ないんだ」

「そんな、気にしなくていいのに……黛君には今まで何度も助けてもらったんだから」

どこか他人行儀な柚椰の物言いに寂しくなったのか一之瀬は眉尻を下げる。

「そうだ。無人島の時も裏で俺たちを手助けしてくれていただろ。借りを返すという意味でもこちらを頼ってくれて構わない」

神崎も昨日龍園がこの部屋で暴露したことを振り返って一之瀬に同調した。

それは間違いなく柚椰が勝ち得てきた信頼であり信用だった。

しかし二人にそう言われても尚、柚椰は首を縦には振らなかった。「俺はここからクラス単位での一発逆転は難しいと思っっているよ。残りの6グループそれぞれで、個々の力で以って結果を少しでも良い方へ転ばせるのが関の山、といったところだね。完全に打つ手無しとは言いたくないが、あまりに大きく先手を取られすぎた」

「いつになく弱気だな。らしくないぞ」

弱気なことを言う柚椰に綾小路が言葉を投げる。

しかし彼の言葉を受けて尚、柚椰は弱々しく微笑んだ。

「前にも言っただろう？俺は大した人間じゃないんだ。先んじて手を回す程度のことしか出来ない。既に手が打たれている以上、少しでもその思惑から外れるように策を弄するくらいしか出来ないんだ」

そう言い残して、彼はトボトボと部屋を出て行ってしまった。

心なしかその足取りはおぼつかず、その背は少し小さく見えた。

「あつ……私も部屋に戻るわ。何かあつたら連絡して頂戴」

去っていく柚椰を見て少し慌てたように堀北も立ち上がると、最後に綾小路にそう言い残して足早に退出していった。

部屋に残っているのは綾小路と一之瀬、そして神崎とBクラスの生徒が二人だけとなった。

「(おかしい……)」

綾小路は柚椰の態度に違和感を覚えていた。

部屋を出て行くときの彼はそれまでの雰囲気とはまるで異なり、情けなく小さく見えた。

普通に考えれば、これまで順調だった計画を崩され自信を喪失したように見える。

勿論そういうこともあるだろう。

人間誰しも芯となる部分を壊されてしまえば脆いものなのだから。

だからこそ、その程度で崩れてしまう自信ならいつそ跡形もなく崩れてしまった方がいい。

こんなことで壊れてしまう男なら、所詮はその程度だったというだけのことだった。

自分が協力を持ちかけた男は、取るに足らない男でしかなかったというだけなのだから。

しかし、だからこそ綾小路は柚椰のそれに違和感を募らせた。

「(あまりに脆すぎる。本当にアイツはその程度の奴なのか……?)」
これまで見せていた実力は、今の状況程度で崩れるものなのか。

上手く事が運ばないくらいのもので、あそこまで弱々しくなるものなのか。

綾小路には、彼がまだ何か隠していると思えてならなかったのだ。「と、とりあえず私たちも出ようか」

一之瀬がBクラスの面々を見渡してそう言うと、彼女達は揃って部屋を出ようとした。

「綾小路君も、よかつたら近くまで一緒に行かない？」

一人取り残された綾小路に気を遣ってか一之瀬が声をかける。

それに無言で頷くと、綾小路もまたBクラスに交ざって部屋を後にした。

鍍金の女王は崩れ、火種は落とされた。

時刻は午後7時50分。船内で特別試験4回目のグループディスプレイが行われようとしていた。

しかし卵グループの部屋ではこれまでとは少々異なる光景が広がっていた。

部屋に来て早々、Aクラスは部屋の片隅に椅子を集めて固まり始めたのはこれまで通りだったが、今回はAクラスの傍にCクラスの女子たちが座っていた。

正確にはAクラスの町田の傍である。

「ねえ町田君。今日これが終わったら私たちと遊びに行かない？ 女子3人で遊ぼうってなったんだけど、遊び相手が見つかってなくて」

「……そうだな」

対話に参加しない町田だが、その存在感は女子の中では強い。

一之瀬や伊吹を除く女子は全員町田に興味があるようだった。

Cクラスは既に優待者を見つけることは半分諦めているのか、あるいは作戦かは不明だが町田を遊びに誘う。

町田もまんざらではないようで、考えた素振りを見せつつも少し嬉しそうだった。

そんなやりとりが行われていると、Dクラスの博士と軽井沢が新たに部屋に入ってきた。

恐らく偶然タイミングが被ったのだろうが軽井沢は露骨に嫌そうにしていた。

そして部屋に入るなり博士から距離を取るようにして奥を陣取るうとする。

「ちよつと、そこあたしの場所なんだけど？」

遅れてやってきた軽井沢が、先に来ていたCクラスの生徒を鬱陶しそうににらみつけた。

他の女子が町田と親しそうに話していた場面を見つけて、より苛立ちを露わにする。

「意味わからないんですけど。あなたの場所って何。どこか適当に座ればいいじゃない」

「あたしそこがいいの。どいて」

「はあ？ 今町田君と話してるんだけど。夜遊ぶ約束してるところなんだから」

「ねえ町田君からも言ってくれない？ あたしが隣だって」

町田は少し困った様子で、どちらの味方をするべきか逡巡しているように見えた。

しかし、その様子をすぐに理解した軽井沢は、真鍋と町田の間に割り込んで手を握り込む。

「今度二人きりで遊ぼうよ。それとも、こつちの子と約束しちゃった？ あたし二股かける人とか嫌いだから、この子たちと遊ぶっていうならこの話は無しにするけど……」

平田と付き合っていることを知っている人間からすればよくもまあ言ったものだと思えるような物言いだ。

しかし『二人きりで』という部分に強く引かれた町田は、どちらを取るか決めたようだった。

「どいてやってくれないか？ 昼もここは軽井沢が座ってた場所だからな」

「は……？ なにそれ、ムカつく……」

あつさり切り捨てられたことでプライドが傷ついたのか、女子はその場から離れた。

そして空いたスペースに軽井沢が滑り込むように座り込む。

ほぼ町田に密着するような、最早身体が触れ合っているほどに彼女は近い。

それを受け入れていることから、町田が彼女に対して心を開いていると分かる。

厳密には好意を抱き始めていると言ったほうが正しいだろうか。

外見だけ言えば軽井沢は間違いなく可愛い上に、好かれている側か

らすれば守ってやりたくなくなるのかもしれない。

「みんなよろしくねっ」

最後にやってきた一之瀬が場を取り纏めるべく全員を見回す。

しかし場の空気が重たいことを察してかそれ以上不用意に話しかけたりはしない。

「(妙だな……)」

部屋の片隅でこれまでの光景を見ていた綾小路は軽井沢の行動が引っ掛かっていた。

平田という彼氏がいながら町田に擦り寄っているのも勿論不可解だが、それ以上に彼女の行動の強引さが一層不可解だった。

町田と親しくなりたいのだとしても、あそこまで露骨にCクラスの女子と揉める必要はない。

しかし、1学期から軽井沢を知る身である綾小路からすれば、先の行動は彼女の性格ゆえのものなのかもしれないと考えた。

今でこそその勢いは消えているが軽井沢は強気な物言いと態度でDクラスにおける女子のリーダーのような存在だった。

平田というクラスの導き手の彼女であることもあって男子に対しても強い発言権があった。

その1学期の軽井沢の行動を、今回の彼女の行動に当てはめるとしつくりくるのだ。

頼りなさそうな男子メンバーの中で一番強気かつ利己的な回答をする町田に取り入れればこの部屋でも主導権を握れると判断したのだろう。

事実Cクラスの生徒たちは軽井沢に対して恨みがましい視線を向けてはいるものの、町田に逆らえない状況に渋々引き下がっているのだから。

しかしそうまでして彼女が得るものとはなんだろうか。

「(優越感。自己満足。自己顕示欲、か……?)」

根底は見えてこないが、そういった類の何かであるということはどうつすらと見えてきた。

「よくないな……」

「そうだな。このままいったら優待者の勝ち逃げを許すぞ……」

綾小路の呟きを試験の心配にとらえたのか、隣に座っていた幸村が答えてきた。

違うと否定するのも面倒だったのか綾小路はそのまま聞き流す。

「さてさて、今回もAクラスは対話に不参加な感じ？」

「勿論だ。勝手に話し合いをしてくれ。こちらの方針に変わりはない」

堂々と言い切る町田の横で、喜怒哀楽の感情を消し去っている生徒がいた。

Aクラスの生徒、森重だ。この生徒は綾小路にとって見覚えのある生徒だった。

柚椰からの情報によるとAクラスを二分している葛城派と坂柳派。

森重は無人島試験で葛城に反旗を翻していた男の一人だった。

通常であれば葛城の意見を素直に聞き入れたりはしないのだろうが、坂柳が病欠で不在らしく今回の旅行には参加していない。

指示を仰ぐ存在が存在しない以上、大人しく従うしかないということだろうか。

森重がこの2日間沈黙を貫き通しているところからしても、今回の試験は耐えるしかないと判断したのだろう。

「じゃあ、無言で1時間過ごすのも勿体ないし今回もトランプで遊ぼうか」

一之瀬も慣れたもので、最初の確認が終わるとすぐにトランプを取り出した。

そして結局、今回も1時間をトランプ三昧で過ごす、あえなく解散となった。

幸村は必死に周囲を観察していたものの優待者らしき気配は掴めなかった。

しかしそれは他の生徒も全員同じだろう。そしてそろそろ結論づけているはずだ。

仮に対話を繰り返したとしても優待者は名乗りを上げることはないと。

一人、また一人と退出していく生徒たちを綾小路は観察していた。いつも出て行くのが早いCクラスの生徒はまだ動かない。

それに対し更に早いAクラスはいつものように一番手に出て行く。町田は軽井沢と連絡先を交換したのか、今度連絡すると残し去っていった。

それから幸村と博士も腰を上げる。

「戻ろう。綾小路も行くだろう?」

「ああ」

それとほぼ同時に軽井沢は電話をしながら立ち上がり、面白おかしく談笑しながら部屋を出て行く。

そして綾小路たちの脇をCクラスの3人が通り抜けていく。

「今の3人、どうも様子がおかしくなかったか?」

幸村も異変に気が付いたようで、少し怪訝そうな顔を見せる。

「そうでござるか? 拙者は気が付かなかつたでありますな」

めちやくちやな口調はさて置いて、博士は気づかなかつたらしい。しかし彼以外の二人は気づいていた。

Cクラスの女子たちが相当鬱憤を溜め込んでいることを。

二人はそつと部屋の扉から廊下の様子を窺う。

すると軽井沢の後ろをピツタリついていく女子3人が見えた。

いないのは唯一軽井沢に対して興味を見せなかつた伊吹だけだ。

「ひと悶着あるんじゃないか?」

幸村はどうすべきか尋ねるように綾小路に視線を向ける。

「一応追いかけるか。暴力沙汰にはならないと思うが、騒ぎになるかもしれない」

「全く軽井沢の奴。他人に恨まれるようなことを勝手にして……こっちは優待者を探すのに精いっぱいだというのに」

博士には部屋に戻ってもらうことにし、綾小路と幸村は4人の後を静かに追った。

角を曲がるとボタンと非常口の扉が閉まる音が聞こえた。

エレベーターが混雑しているわけでもないのに非常階段を使う理由はない。

つまりそれ以外の目的があるということだ。

「ちよつと、こんなところに連れ込んでどういうつもり!？」

こっそりと非常口の扉を開けると、近くからそんな声が聞こえてきた。

「とぼけんなよ。あんたがり力を突き飛ばしたんでしょ？ それに関する話よ」

「……は、はあ？ なんであたしなわけ？ 別人だって言ったでしょ」

3人は困い込むようにして軽井沢を壁に追いやり、逃げられないようにしていたが、そんな状況でも軽井沢は謝罪することもなく事実関係を否認する。

「あたしこれから用事あんだけど。どいてくんない？」

「だったら確認させてよ。今からここにリカ呼ぶから。それであなたじゃなかったら許してあげる」

「意味わかんないし。先生に言い付けるから」

「先生に何を？ 私たち別に暴力振るってるわけじゃないし。なんならリカを突き飛ばしたことを問題にしたっていいんだからね」

真鍋たちも引き下がるつもりはないのか、この場で白黒はつきりつけるつもりらしい。

その証拠に逃げようとした軽井沢の腕をつかんで再び壁に押し付けるようにして困い直す。

女子の一人が、リカという生徒に連絡をとろうと携帯の操作を始めた。

「ま、待ちなさいよ」

その様子を見て本気だと悟った軽井沢が操作をやめるよう要求する。

「なに。なんで待たなきやいけないの」

「……今思い出したのよ。前にあたしとぶつかった子がいたこと」

「しらじらしい。最初から覚えてたくせに。まあいいや、ちゃんとりかに謝るわけ？」

「そうじゃない。あれはあの女が悪かったのよ。どん臭い子だったから」

非を認めるのかと思いきや軽井沢は強気にそう言い放った。それが相手の神経を逆撫ですると分かり切っていたにもかかわらず。

案の定真鍋達は目を吊り上げて怒りを露わにする。

「こいつマジムカつく。リカに謝るならさつき私たちにしたことは許してやろうと思ってたのに。もう許さないから」

そう言って軽井沢の肩を掌でどつく。

「どうせ最初から許すつもりなんてないでしょ……」

今まで真鍋の後ろにいた山下という少女が、小さく吐き捨てた軽井沢の言葉にキレた。

「志保ちゃん。私も我慢の限界。マジで軽井沢許せないかも」

「でしょ？ 絶対リカにも同じ態度だったと思うんだよね。本気で虐めちゃう？」

今度はさつきよりも強く、掌で軽井沢の肩を突いた。

幸村が咄嗟に扉を開けようとしたが、綾小路がその腕を掴んで制止する。

この段階で止めてもその場のぎにしかならないからだ。

ならば多少なりとも暴力を振るわれたほうが今後の抑止力にもつながる。

程度によってはそれを脅しの材料に利用できる可能性もあると考えたのだ。

何より綾小路から見た軽井沢恵の人物像が今変わろうとしていた。

「はあ、はあっ……」

荒くなっていく軽井沢の呼吸。痛みを感じ出したのか、両手で頭を押さえる。

その苦しんでいる姿さえ、真鍋達にとっては不愉快でしかなかった。

「今更女の子ぶったって許してやらないから」

真鍋が軽井沢の髪の毛を掴み、項垂れる顔を強引に上げさせる。

「私軽井沢の顔嫌い。ぶっ細工じゃない？」

「言えてる。いっそスタスタに切り刻んじゃう？」

「や、やめ……やめて……」

「や、やめて、だつて。さつきまでの勢いはどうしたのよ」

ガタガタと震え、ついには半泣きになりながら頭を抱えて動けなくなる軽井沢。

その姿にはいつもの面影は欠片も残っていないかった。

「(もう少し、もう少しで見えてきそうだな……)」

どんどん情けなくなっていく軽井沢を綾小路は具に観察する。

そうして見えてくるもの次第で、彼女の評価も決まるのだから。

しかし我慢できないのか、幸村が余計な正義感を見せた。

綾小路の制止を聞かず扉を開いてしまう。

来訪者の登場に当然三人は大きく驚き、一方軽井沢は助かったように一瞬安堵の表情を浮かべた。

「お前たち何をしているんだ」

「何って……別に？　ねえ。軽井沢さんと話してただけだよ。そうでしょう？」

暗に余計なことを言うなど言うように軽井沢を睨む真鍋だが、そんなことで軽井沢は怯まない。

「ちよつと幸村君、何か言つてやつて？　こいつらあたしを強引に拉致して暴力を振るつてきたし。マジ最低じゃない？　ウザいから消えろとか言われたんだから」

普段幸村のことなど全く相手にしていない軽井沢だが、この場に現れてくれたことをありがたいと思つたのだろう。

なりふり構わず頼っている様はいつそ清々しい。

「軽井沢さんとリカの問題で手を貸してるだけ。ぶつかった話は聞いてるでしょ？」

「……穏便にしたほうがいいんじゃないか？　ぶつかったのだから別に軽井沢に悪気があつたわけじゃないようだし」

部外者である以上、幸村としても月並みなことしか言えない。

「あんたは黙つてて。関係ないでしょ」

そう言われて睨まれればそれ以上口を挟むことは出来ず黙るしかない幸村。

軽井沢はそんな彼を情けない男を見るような目で見ていた。

大方幸村の振る舞いは期待外れだったのだろう。

そんな模様を横目に綾小路は静かに携帯を手にした。

「さっさと立ち去りなさいよ。じゃなきや人呼ぶから」

「なに、呼ぶって誰を？ 平田君？ 町田君？ それともヤリマンのあんたには他にも男がたくさんいるわけ？」

最早罵詈雑言と言う他ない言葉を並べて真鍋は軽井沢を詰る。

流石に潮時だと判断したのか綾小路が非常口に足を踏み入れようとしたその時、階段の下のほうから新たな来訪者が現れた。

「……何してんのあんたら」

呆れたような、軽蔑するような声色と表情で現れたのは意外や意外。

先ほど真鍋達と別れたはずの伊吹だった。

意外な来訪者に真鍋達は一瞬虚を突かれたが、すぐに顔を顰めて伊吹を睨んだ。

「あんたには関係ないでしょ。ていうか、あんた部屋に戻ったんじゃないの」

「そうするつもりだったけど、別れるときのアんたらの顔が引っ掛かったんだよ。あんたらがやりそうなことくらいバカでも分かるし。そいつを人気のないところに連れてって好き勝手に尋問するだろってな」

軽井沢を顎で示しながら真鍋達を見下す伊吹。

その態度に真鍋達の怒りの矛先が軽井沢から伊吹に変わった。

「あんたには関係ないでしょ！ 部外者は引っ込んでろよ！」

「そうよ！」

「試験もロクに参加しようとしてなかったくせに偉そうなんだよ！」

「参加してなかったのはあんたらもだろ？ Aの男子に尻尾振ってるか、そいつに因縁つけるかしてただけで議論もなにもしてない。私からしたらあんたら三人も役立たずの木偶の坊だよ」

「はあ?！」

「伊吹、お前マジ調子乗ってんじゃないの!?!」

「私たちはこいつとリカの問題を解決してあげようとしてるだけじゃん！」

「どうだかな。今そうして詰め寄ってるのはどう見てもあんたらの私怨だろ。友達のためなんて御大層な建前掲げてるみたいだけど、私からしたら自分がAの男子に相手にされなかつた憂さ晴らしをしようにしか見えないんだけど？」

どこかの誰かのようによく放題に真鍋達を煽る伊吹。

伊吹が煽れば煽るほど相手のターゲットは彼女に向く。

「あんたいい加減に——」

「それよりいいのあんたら？　このままここにいて」

「どういう意味よー！」

「私あんたらがバカなことするだろうなと思つてここに来たんだぞ。まさか一人でノコノコ来るなんて思つてないよな？」

伊吹がそう言うのと真鍋達は意味に気づいた。

今ここでこうなることを予想した上でこの場に現れたということ
は……

「もうすぐ先生が駆けつけてくるぞ。逃げるなら今のうちだな」

「——ッ！　あんたDクラスの味方なわけ!？」

「あんたらがやったことが明るみになってCクラス全体が責任を取らせられたらどうすんだよ。同じグループだったからつて私にも責任が問われたら？　そんなの真つ平ごめんだな。それに……」

ニヤリと口角を上げて伊吹は真鍋達を侮蔑するように見下す。

「あんたらが勝手に他クラスと問題を起こして結果的にCクラスに不利益が生じたら……龍園はあんたらに何をするだろうな？」

その言葉に真鍋達は震え上がった。

龍園が女相手だろうと容赦しない男だということはCクラスなら誰でも知っている。

現に彼に逆らっていた伊吹は過去に制裁を加えられているのだから。

それを受けて尚伊吹は龍園に逆らっているのだが、真鍋達にそんな根性があるわけもない。

伊吹の脅しにまんまと飲み込まれ身震いしているのが証拠だ。

「……絶対リカに頭下げさせるから！」

真鍋は吐き捨てるように軽井沢にそう言い残し、他二人を連れて出て行く。

軽井沢も必死に強気な表情を作っていたが、そこに余裕がないのは見れば明らかだった。

真鍋達も彼女の態度が強がりだということには感づいているようで、自分の優位性を疑わずして去っていった。

「大丈夫か？」

過呼吸気味の軽井沢を放置するわけにもいかず、幸村が声をかける。

「放っておいて……っ！」

近づいてきた幸村の手を払いのけるようにして軽井沢は遠ざかった。

「なっ、心配で様子を見に来てやったんだぞこっちは！」

「うるさいっ。そんなこと、誰も頼んでないっ！」

そう言い放ち、息を荒らげて一步を踏み出す。

威圧されるように幸村が一步下がる。

その隙に階段を上がり、非常口のドアを強く開け放った。

扉の先に綾小路が立っていたことで一瞬立ち止まった軽井沢だったが、彼に対しても強烈に睨みつけてからその横をすり抜けて走り去っていった。

「なんなんだあいつはっ！ いつもいつも迷惑ばかりかけて……！」

軽井沢の都合の良すぎる振る舞いに幸村は憤慨していた。

助けに入ったときは情けなく助けを求めてきたくせに、いざ危険が去れば元の偉そうな態度に戻る。

幸村からすれば勝手極まりないだろう。

しかし怒りよりも疲れが勝ったのかそれ以上は言葉を発さずに、彼は非常ドアから戻っていった。

残っているのは綾小路と伊吹のみ。

黙って立ち去るのも変だと思い、綾小路は非常階段に足を踏み入れ

た。

「助かった。まさかお前が止めに入ってくれるとは思わなかった」

綾小路が感謝の言葉を述べると伊吹は腕を組んでそっぽを向く。

「別に。あいつらにも言ったでしょ。連帯責任になるのが嫌だっただけ」

「それでもだ。正直俺や幸村じゃ上手くやれそうじゃなかった」

「そう？ 扉の前に突っ立ってた感じだと、私がこなければアンタが割って入ってどうにかしてたんじゃない？」

「買い被りだ。俺に女の喧嘩の仲裁は荷が重い」

伊吹はそれ以上追及するつもりはないのか、何か言うこともない。

そこで綾小路は先ほど彼女が言っていたことを思い出した。

「そういえば、さつき先生が駆けつけるって言ってたが」

「あんなの嘘に決まってるだろ。現場を押さえられたらそれこそ問題になるじゃないか」

「やっぱりか。でも真鍋達には効果があったってことだな」

「あいつらはそれよりも龍園の方にビビッてたみたいだけど」

伊吹も龍園の名前を使ったほうが脅しとしては効果があると理解しているようだ。

結果的に真鍋達はまんまと伊吹に騙されたことになる。

「もう用はないから私も帰る。アンタもさつきと戻れば？」

「ああそうさせてもらう」

綾小路に言い残して伊吹は階段を下りて一つ下の階の非常口から出て行った。

誰もいなくなった非常階段で綾小路は考える。

考えているのは勿論軽井沢のことだ。

女王の見せた危うい一面。怯え、震え、動けなくなっていた姿。

「何かあるな……」

彼には軽井沢が何か事情を抱えているような気がしてならなかった。

『これでいい?』

『上出来だ。迫真の演技だったよ。君には主演女優賞をあげよう』

『なんでわざわざこんなことを。割って入る必要があつたわけ?』

『割って入ることに意味があるんだ。途中で邪魔が入れば彼女達は不完全燃焼のまま終わる。しかし、そこにはまだ燃え切らなかつた燃料と未だ燻ぶっている火種が残っている。その状態は事が起こる条件としては最高の環境なんだ』

『……またロクでもないこと考えてるの?』

『このことに関して、僕は積極的に介入する気はないよ。僕が燃料をくべなくても勝手に燃料は撒かれるからね』

『どういうこと?』

『軽井沢恵という人間を欲している人間が現れれば、自ずと燃料は放り込まれるということだ。幸いにも火種はいつでも再燃するだけの熱を保ち続けて存在している。その気になれば誰でも、いとも容易く着火させることが出来る』

『意外だな。あんたならそういうの喜んでやりそうなのに』

『彼女の人間性は既に知っている。その上で必要ないと判断したままでだよ。彼女が開花することは勿論望ましい。しかし、それをやるのは僕である必要はないんだ。既に彼女の上位互換である人間を僕はとうに見初めているからね』

『……なるほどね。櫛田か。あんたの協力者つてのは』

『ご名答。彼女は素晴らしい。こちらが言わなくても自分の意志で好き勝手に動き回れるだけの地頭の良さとポテンシャルがある。今回の試験でも既に動き出しているみたいだからね』

『まあいいや。私には関係ないし。それで、この後はどうすんの?』

『今回はこのまま傍観するつもり?』

『まさか。出来るだけ面白くなるように場を整えさせてもらうよ』

『……ほんと、あんたみたいなのがいるってだけでも周りの奴らに同

情するよ』

NEW! 新しいスレッドが作られました。

・特別試験お役立ち情報!

1 名無しのピエロ 2 XXXX/08/14 (木) 03:31:0

8:69 ID: glo4nqBD

卵グループの優待者はDクラスにいる。

鍍金の女王の真実と王の懺悔。

二日目が終わる真夜中。綾小路は船内に設けられているプールを訪れていた。

昼間は喧騒に包まれるこの場所も深夜ともなれば人気は全くない。彼はあることを確認するため携帯を手にとっていた。

学校から支給される携帯には、最初から教員のアドレスが入っているため、彼がこれから会う人間とのコンタクトを取るのには容易だった。

ここはその待ち合わせ場所である。

真夏とはいえ今彼がいるのは大海原の上。船上に吹く夜風は少々肌寒い。

「……待たせたな綾小路」

待ち合わせ場所に現れたのはDクラスの担任である茶柱先生だった。

「別に構いませんよ。それより遅くに呼び出してすみません」

「生徒からの相談なら、担任の教師にはそれに応じる義務がある。別におかしなことじゃない。それに生徒に呼び出されることは初めてではないからな」

「先生にお聞きしておきたいことがあったんですけど……随分顔色が悪いですね」

暗がりで見づかなかったが、茶柱先生の顔色は死人のように青ざめていた。

「……気にするな、大人の事情だ。それでなんだ？」

吐く息から感じた独特の香りで綾小路は凡その事情を察しつつも本題に入る。

「この学校にはポイントで買えないものはないって言いましたけど、それでも例外がありますよね」

「まあそうだな。例外は当然存在する。非常識なものは当然買えん。

教師や生徒の命を要求されたところで常識的にも倫理的にも応えようがないからな」

「では過去にポイントによって買われた一番高いもの——」

質問をしている最中、人の気配を感じて綾小路は口を閉じる。

「やつほーサエちゃん。元気？」

やってきたのは星之宮先生だった。偶然現れたというにはあまりにもタイミングが良すぎた。明らかに茶柱先生の後をつけてきたとしか思えない。

「……酔いつぶれていたんじゃないのか」

「え？ やだな。私が酔いつぶれるわけじゃない。あれは寝たフリって奴？」

「全く……相変わらず酒に強いようだな。昨日といい今日といい」

呆れたように茶柱先生はため息をつく。

「こんばんはー綾小路君。元気？」

星之宮先生は綾小路に近づくと彼の肩に手を回し酒臭い息と体臭で絡む。

酔っ払い特有の匂いに綾小路の顔が僅かに歪む。

「普通です。可もなく不可もなくですね」

「ぶー。可愛くない回答だなあー。綾小路君はサエちゃんみたいなツンツン系のお姉さんが好みなのかな？」

「学生に絡むな。実務に支障をきたすぞ」

割って入るように茶柱先生が星之宮先生の襟首を掴んで引き剥がす。

邪魔が入ったことにぶうたれつつも星之宮先生はめげずに会話を続ける。

「それで二人は何の話してたの？ こんな真夜中に。これはこれで大問題じゃない？」

「大問題？ 生徒からの悩み事に対して相談に乗るのは当然のことだと思っうがな」

「だったら、もっと人気のあるところで落ち合えばいいじゃない。こそこそ隠れるみたいにしてたら怪しいし」

「探ってくる星之宮先生に、茶柱先生はどこまでも冷静な対応を続ける。」

「綾小路が望んだことだ。誰にも見つからずに相談したいとな」

「ふーん。まあ違反をしているわけじゃないけどさ……」

「わかったらバーに戻ってろ。私もすぐに戻る」

「はいはい。ごゆっくりー。でもエッチなことはしちやだめだからねー」

そんな余計な一言を残し、星之宮先生は船内に戻って行く。気配を殺して潜むようなこともなさそうだった。

「すまないな。色々と面倒な教師で」

「いえ」

探りを入れられていることを茶柱先生は敢えて触れなかった。

今までのやりとりで彼女と星之宮先生との間に何かがあることは察せられたが、自分には関係ないことだと綾小路は判断した。

「それでさっきの続きだが、過去に買われた最大のポイント、だったな」

綾小路が小さく頷くと、茶柱先生は少しだけ考え込むような姿勢を見せる。

「私が就任してからに限定するならば……『学校の校則を変える』だったな。もちろん現実的な範囲での変更だった。例えるなら遅刻と認めるまでの時間を1分長くする、といった具合のな」

先生はあくまでも事実ではなく例として答える。

「あくまでも参考例、ですか」

「不満か？」

「まあ構いませんよ。学校の仕組みとポイントの有用性は理解できますから」

些細なものであれポイント次第で学校の仕組みにも手を加えることが出来る。

即ち無限大の可能性を秘めているともいえる。プライベートポイントは極めて重要だということだ。

「話は終わりか？ これくらいならメールでも聞けるだろう。わざわざ

ざ呼び出して聞くようなことか？」

「メールだと記録が残りますからね。それを避けたかっただけです」

綾小路はそれだけ言い残し、星之宮先生が戻った入り口とは違う扉へ向かう。

「近いうちに頼みごとをしに行きますよ」

振り返りながらそうつぶやく綾小路を茶柱先生はやや訝し気な顔で見ている。

深夜2時30分。部屋に戻ってベッドに横になっていた綾小路だが、ふと隣のベッドで寝ているルームメイトが目を覚ますのを感じた。

男はゆっくりとベッドから抜け出し、部屋を出ようとしていた。

目論見が上手くいったことを確信した綾小路は男の後を追う形でベッドから抜け出る。

すると男も綾小路が起きたことに気づいたらしく彼と無言で目を合わせた。

綾小路が視線を逸らさず用件があることを訴えると、男は無言で廊下で待っていると告げるように指を差した。

それから廊下に出ると、その男……平田はちよつと困った様子で待っていた。

「起こしちゃったのか起きてたのか、どっちなのかな」

「後者だ。もしかしたら今日、おまえが部屋を出るんじゃないかと思ってた」

「どうしてそんな風に？ 真夜中に外出したのは今日が初めてなんだけどね」

そう問う平田に対して、綾小路は誤魔化すこともなく素直に答えることにした。

「軽井沢から連絡があったんじゃないかと思ってな」

綾小路のその一言で平田は大体察したようだ。

「もしかして何か知ってるのかな」

「同じグループだからな。どこまで聞いてるか分からないがある程度把握してる」

それで、と平田は綾小路からその続きの言葉を待っている様子だった。

「グループディスプレイスカッションでの軽井沢の振る舞いが引つ掛かってな。何か事情があるんだろうと思った。そして今日、軽井沢のことで少々面倒なことがあった。彼女が相談を持ち掛けるとすれば彼氏であるお前だろうと踏んだんだ」

「綾小路君は軽井沢さんのことを知ってどうするつもりなんだい？」

「別にどうしようしようってわけじゃない。他クラスとの確執があるなら今のうちに清算しておくに越したことはないだろう。それに、今軽井沢がDクラスにおいてどんな立場にあるかはお前も分かっているはずだ」

そう言うのと平田は暗い顔で俯く。

無人島での特別試験を経て、軽井沢を取り巻く環境は一変した。

彼女が全て悪いわけではないのだろう。

ただ彼女のこれまでの行動が、発言が、すべて悪い方向で作用してしまっただけのこと。

幸村は自業自得と言っていたが、軽井沢にもまだ更生の余地はあるはずだ。

平田もどうかして彼女を救いたいと思っっているはずだと綾小路は暗に指摘したのだ。

「……綾小路君が望む情報全部を与えられるかは僕にも分からないよ。」

軽井沢さん自身の気持ちもあることだから」

それだけ言い、平田は廊下を歩きだした。落ちついた様子で急な同行者の出現にも動じた感じは全くない。足取りも静かで時間帯を気にしてか歩き方にも気を遣っていた。

寝ていたはずなのに髪型にも乱れたところはなく、彼の人付き合いの上手さが察せられる。

「綾小路君なら余計なことを言わないと思うけど、これからする話は

凄くデリケートになると思う。それに、軽井沢さんが話すことを拒絶して帰ってしまう可能性だってある。それは最初に理解しておいてほしい」

綾小路が隠れて話を聞くという手もあったが、平田がそれを良しとしないだろう。事情があれば軽井沢を騙すようなことを受け入れるはずがない。

平田は素直に最初から綾小路を同伴させることを選んだ。待ち合わせ場所は地下2階の休憩コーナー自販機前だった。

長い船内の廊下、その中央に位置している。場所こそ人目に付きやすいが、誰かが近づいて来れば必ず見える位置。この場所では隠れて盗み聞きすることは難しかった。

軽井沢は既に平田を待っていたようで、ジャージ姿でソファアールに腰かけていた。

足音に振り返った軽井沢は平田を見つけ一瞬笑顔を見せるが、その少し後ろに綾小路がいることに気づくとすぐに不機嫌な顔になった。彼女が立ち上がると綾小路へ言葉を投げつける。

「なんで綾小路君が平田君と一緒になのわけ」

「僕が呼んで一緒に来てもらったんだ」

「平田君が……？ どうして？ 二人きりで話したいって言ったのに……」

「うん。でも軽井沢さんが電話口で言ったことが少し気にかかってね。状況を知ってるらしい綾小路君に来てもらった方がいいと思っただんだ。勝手なことをしてごめん」

不満全開の軽井沢ではあるが、平田の手前強く言い切ることもできないようだった。

「でも……二人きりで話したいんだけど……」

「必要ならね。だけど電話で言ってた話は、二人で話して決められることじゃないよ」

真鍋率いるCクラスとのトラブルに関してだと推察されるが、軽井沢はどんなふうにしたのだろうか。

ただ鬱憤を晴らすために話したのであれば、わざわざ二人きりで会

いたいとまでは言わなかったはずだ。

部外者がいることで話す気になれないのか軽井沢から話が切り出されることはなかった。

痺れを切らしたわけではないだろうが、このまま沈黙を続けても意味がないと思っただのか平田は、電話で受けたと思われる内容について話し始めた。

「今Cクラスの真鍋さん達と揉めてるって話を聞かされたけど、それは本当のこと？」

その質問に軽井沢は小さく何度か口を開きかけたが、綾小路の存在が気にかかってか何も言えない。その沈黙を破ったのは先ほど同様平田だ。

「綾小路君は軽井沢さんが真鍋さん達と揉めた話については把握してる？」

「それなりには」

平田は会話を進めるために綾小路と話の整合性を取ることにしようだ。

軽井沢は不満そうだったが、それでもまだ大人しく話を聞いていた。

それは恐らく、軽井沢が真鍋に詰め寄られているところを綾小路が見ていたからだろう。

「軽井沢さんが言うには、彼女たちに言いがかりをつけられたらしいんだ。それで人気のないところに連れて行かれて、暴力を振るわれる寸前だったって聞かされたんだけど」

「ああ。それは本当だ。実を言うとその現場を目撃したんだ。あと幸村も見てる」

「そっか……」

少し考え込むような仕草を見せ、平田は目を閉じた。
果たして平田はどのような判断を下すのだろうか。

真鍋達を叱責するために個別に呼び出すのか。或いは学校に報告するのか。

「もし真鍋さん達が一方的に暴力を振るったのなら、きちんと対応し

なきやいけない。友達同士で暴力沙汰なんて見過ごせないからね」
平田の正義感溢れる言葉を聞き、一瞬だが軽井沢に笑顔が見えた。
しかし綾小路が見ていることに気がつくとすぐに不機嫌な顔に戻る。

「軽井沢さんが一方的に酷い目に遭わされた。それで合ってるかな？」

「いや……」

経緯を答えようとした綾小路だが、軽井沢が無言で睨みつけているのに気づく。

しかし虚偽を述べることは得策ではないと判断した彼は見たまま感じたままを平田に伝える。

軽井沢が過去にリカという少女とトラブルがあったこと。

それを真鍋達が謝罪させようとしていること。

そして事実、軽井沢が暴力を振るわれそうになっていたこと。

全てを聞き終えた平田は、聞かされた話との差異を埋めるように何度か頷いていた。

「なるほど。それで僕にあんなことを言ったんだね」

「あんなこと？」

「軽井沢さんは、僕に真鍋さん達への仕返しをお願いしたいって言うてきたんだ」

綾小路が予想していた以上に話は物騒になっていた。

恐らくやられる前にやるという考えなのだろう。

その事実を平田から漏らされた軽井沢が短い沈黙を破る。

「なんで話しちやうわけ……」

「軽井沢さんらしくないからだよ。暴力で解決したいなんて君らしくない」

「彼女が困ってるんだよ？ 彼氏なら助けてくれるのが普通じゃない」

「もちろんそうだよ。だけど、目には目をの精神は僕にはない。知ってるよね？」

平田と軽井沢。二人の内面、信念のようなものが交錯する。

「これから一緒に考えよう。どうすれば真鍋さん達と仲良くなれるのか」

「無理に決まってるでしょ。あたしは一方的に恨まれてるんだから。分かってよ……！」

「一方的？ それは最初に軽井沢さんが諸藤さんと揉めたからだよね？」

諸藤とは、おそらくリカという女子の苗字だろう。平田は他クラスの女子についてもちゃんと把握しているらしい。

「だってそれは……仕方なかったんだって……篠原さんたちがいたし……」

「篠原がいたから仕方ない？ どういうことだ」

「あんたは口出ししないで！」

疑問を口にする綾小路だが軽井沢に即大声で怒鳴られる。

彼女の声は人気のない周囲に大きく響いた。

「お願いだから助けてよ……平田君は私を守ってくれるんでしょ？」

「勿論守るよ。だけど理不尽な理由で真鍋さん達を傷つけることは出来ない。話し合うことでお互いが納得のいく結論を出すように誘導してみる」

「だから無理なんだってば！ そんなことが出来るなら助けてなんて言わない！」

無茶なように聞こえるが軽井沢の言い分も彼女の今置かれている状況を考えれば理解できなくはない。

このままでは本格的な暴力事件に発展してもおかしくはないのだから。

学校のルールでも縛ることのできないものは世の中に多く存在する。

世の中で虐めがなくならないのも結局のところ表沙汰にならなければいいというだけの話なのだから。

平田は軽井沢を心配してはいるようだったが、同時に真鍋達のことにも気にかけている。

円満な解決策を第一に考えたいという姿勢を崩す様子はなかった。

それは大切な恋人と接するものではなく、他の友達と接しているときと変わらない。

「理由が何であれその期待には応えられないよ。僕にとって、軽井沢さんは大切なクラスメイトの1人だ。困っていれば助けるし、守るよ。だけどそのために他の誰かを傷つけることは出来ない。それがCクラスの生徒だったとしてもね」

「嘘つき！ 守ってくれてるって言ったのに！」

「嘘？ 僕は最初から一貫して同じ態度でいるつもりだよ」

平田は立て続けに、Dクラスの生徒には俄かには信じられないことを口にした。

「最初に言ったよね？ 僕らは本当の彼氏彼女じゃない。付き合うフリをするのは構わないけれど、君一人に肩入れすることは絶対にしないって」

誰も疑っていなかった二人の関係が偽りのものであると、彼はそう言ったのだ。

「っ!?! な、なんで今それを言うの！」

それは勿論今のこの場に綾小路がいるが故の不満だろう。

理由はなんであれ平田が真実を綾小路に明かしたのには意図があるはずだ。

別に彼は軽井沢を見捨てるつもりは微塵もない。

むしろその逆。平田は軽井沢にきっかけを与えているようにも見ええた。

「そろそろ、新しい選択肢が必要だと思ったんだよ。僕は君を助けたんだ」

彼は軽井沢のことは本気で救おうとしている。

取り乱す彼女に近づき声をかける。

しかし、その細く華奢な肩に触れようとはしない。

「あたしが……暴力を振るわれてもいいってこと？」

「だからそうは言っていないよ。僕は全力で君を助ける。朝になったら真鍋さん達に話をするつもりだ。これ以上軽井沢さんを困らせないでほしいって。不本意かもしれないけど、軽井沢さんは謝ろうとして

いたって伝えても構わないよ」

「それは嫌！」

平田の折衷案を軽井沢は突っぱねる。

真鍋達への仕返しを頼んできたことから浮かび上がってくるのは彼女の本質。

軽井沢恵という人間には何よりも恐れているものがある。

「だとしたら僕に出来る手助けはないよ。残念だけどね」

平田はこんなときでも冷静だった。しかしそれは頼もしいと同時に彼に頼る以外に選択肢を持ち合わせていない軽井沢にとっては死刑宣告に等しかった。

「綾小路君、君なら何か解決策は浮かぶ？」

あくまで中継役でしかない綾小路に平田は問いかける。

それは彼に何かを期待しているようにも見えた。

「もういい！ あたしのお願いを聞いてくれないんなら、あんたなんかない！」

そう叫ぶと軽井沢は持っていた缶ジュースを廊下に叩き落した。

中身がまき散らされ、甲高い声だけが虚しく響く。

「今日で関係は終わり。終わりよー！」

そう言つて軽井沢は話が始まる間もなく状況を放棄した。隠していた事実を暴露したことよりも、平田が自らを助けてくれないことへの苛立ちのように見えた。

走り去つていく軽井沢の背中を、平田は追う姿勢を見せなかった。

それは今優先すべき事項が彼女ではないことを指し示していた。

「綾小路君。僕には出来ることと出来ないことがある。だから、今君がここにいる。それを分かってほしい」

平田は軽井沢の秘密を教える対価として彼女の抱えるトラブルの解決役を綾小路に任せる魂胆だったようだ。

存外抜け目ないものだど内心感心しつつ、綾小路は平田へ問いかける。

「随分勝手だな。俺にそんな大役が務まると思うか？」

「僕は軽井沢さんの味方だし、綾小路君の味方だ。でも、当たり前だけ

ど相手によって対応は変えるさ。僕から見て、君はみんなが思うよりもずつとすっかりしてる」

「買い被りだな。今まで俺が何か役に立ったことがあったか？」

「君は自分のことを大した人間じゃないって思ってるかもしれないけど、君は僕にないものを持つてる。僕が取れない選択肢を選ぶことができると思う」

「俺じゃなくても、解決役なら柚椰にでも頼めばよかったんじゃないか？ この手のことならあいつの方が得意だろ」

「確かに黛君なら真鍋さん達とのトラブルも上手く解決してくれるかもしれない。でも今の軽井沢さんが黛君に助けを求めることは難しいと思うんだ。ほら、無人島試験で色々あったから……」

綾小路は平田の言うこともその通りだと思った。

先の特別試験でDクラスの面々が一時的に疑惑を保留にした中、軽井沢だけが最後まで柚椰を疑っていた。

それが結果的に悪い方へ作用してしまったが故に、軽井沢と柚椰の間には確執が生まれている。

「勿論黛君は気にしてないって言うてくれていたよ。でも、軽井沢さんにも黛君を疑ってしまった負い目があると思うんだ。だから彼を頼るには、まずそのことについて謝罪することが前提になってくる。真鍋さん達とのことでいっばいっばいの軽井沢さんにそれをするのは難しいことだと思う」

「まあそうだな。それに、謝ったと思ったらいきなり助けてくれなんてのは都合が良すぎるからな。軽井沢自身もそれは非常識だと認識するだけの良識は持ち合わせてるだろう」

「うん。だから僕が黛君と同じくらい買っている綾小路君に頼みたいんだ。君なら軽井沢さんの問題を解決できる。そう確信している」

その根拠について詳しく尋ねたかった綾小路だが、ひとまず話を進めることにした。

「まずお前と軽井沢の関係について改めて聞きたい。やつぱり付き合っているというのは建前だけで、本当じゃなかったんだな」

「その言い方だと、綾小路君には見当がついてたってこと？」

「お前と軽井沢が付き合い始めてもう4ヶ月近く経つ。なのに二人の仲は一向に進展する気配がない。もちろんお互いにピユアでプラトニックな関係を築いているって線も考えられるが、それにしても常に一定の距離を保ち続けている。お互いを苗字で呼び合うところかな」

肉体的に距離が詰まらなくても心が近づいているのであれば呼び方の一つも変わるだろう。

しかし平田と軽井沢の関係は良くも悪くも当初から全く変わっていない。

男女の恋愛関係にあれば、全く変わらないというのは異常なことだった。

「その通りだよ。僕らは付き合っていないなかった。でも、お互いに付き合うことが必要だと感じたから付き合っていた。この矛盾が理解でききるかな」

付き合うことが必要だった。つまりお互いに利益関係があったということだ。

なら付き合うことで得られるメリットとは何だろうか。

どちらが頼みどちらが承諾したのだろうか。

間違いなく軽井沢が平田に付き合うフリをしたいと持ち掛け、平田がそれに応えたのだろう。それは今までの彼女の行動で説明できることが増えてくる。

「入学から3週間くらいで噂になって、そこから軽井沢の知名度が急上昇した」

それはグループディスプレイスカッションの場でも似た現象が確認された。

町田に取り入ることで軽井沢は普段よりも強気な発言を行いその存在感は回を重ねる毎に増している。

つまり軽井沢から見て平田とは、その地位を確立するための宿木。

「お前は軽井沢の立ち位置を手助けするために彼氏役を買って出たんだな」

そう問いかける綾小路に平田は薄く微笑んだ。

それこそが真実であると導き出した綾小路だったが、僅かに疑念が

残った。

平田も微笑みはすれど、その通りだと認める様子はない。そもそも軽井沢は何故そうまでして立場が欲しかったのだろうか。彼女のこれまでの振る舞いを振り返ってみればみるほど疑念は深まる。

「横柄な態度を取り続けなければいずれはこうなることは予想できたはずだ。第一、何故平田は軽井沢の振る舞いに何も言わなかった？」
今でこそ鳴りを潜めているが、これまでの軽井沢は明らかに傍若無人といった有様だった。

調和を重んじる平田が何故彼女を黙認していたのだろうか。

そもそも、グループディスプレイスカッションの場で町田に擦り寄った理由が不明瞭だった。

グループ内での発言力を得たかと言われればそうではない。

話し合いの場において、軽井沢は一貫して無言でいる時間の方が長かったのだから。

では、町田を利用したきっかけはなんだったのだろうか。

「なるほどな……」

ピースは揃い、一つの結論が浮かび上がった。

そこで綾小路は『軽井沢恵』という少女の本質を知った。

「自分の身を守るため、か？」

「よくわかったね……今君からその言葉を聞いたとき、正直鳥肌が立ったよ」

「考えうる可能性を消去法で切り捨てていった結果、残ったのがそれだっただけだ」

「……綾小路君は不思議だね。僕には今の君がいつもの綾小路君だとは思えないよ」

「言っただろ。買い被りだ。材料がこれだけ揃っていれば誰だって、それこそ柚椰だって同じ結論に至ったはずだ。別に驚くことじゃない」

「でも僕は綾小路君を凄いと思っっているよ。他の皆とは少し違う気がする」

「やめてくれ。俺は柚椰には遠く及ばない。俺にはあいつほど人の気持ちを取り戻すことは出来ない」

「君の話し方には明確なロジックが組み込まれているように思う。君が人の気持ちを讀むことに長けてるなら、綾小路君は論理立てて考えることに長けてるって感じだ」

「……」

自分への評価が揺るがないと悟り、綾小路はそれ以上は何も言わなかった。

「君が言ったことだけど、僕が彼氏役を引き受けたのは彼女の身を守るためだよ。彼女に頼まれたんだ。助けてほしいって。ちよつと想像できないかもしれないけど、彼女は小学校から中学校までの間にずっと酷い虐めを受けてきたんだ」

「……疑うわけじゃないが、本当なのか？」

そう聞き返す綾小路だったが、彼は平田の話に納得していた。

思い返すのは今日の真鍋達との一幕。

過呼吸を起こした軽井沢の姿。

彼女がああなったのは過去が引き金になっていたと言われれば説明がつく。

「もちろん僕が軽井沢さんと出会ったのはこの学校に入ってからだよ。でも、僕には彼女が虐められてきたことが分かったんだ」
「どうしてだ？」

「虐められている人には特有の雰囲気があるんだ。だから付き合うことを承諾した。軽井沢さんは僕の彼女という立場を使うことで虐められることを回避しようとしたんだ。今の性格は本当の軽井沢さんじゃないと思う。弱さを見せないように強気に振舞ってるだけじゃないかな」

虐められる人間の大半は大人しく弱気な性格であることが多い。

一方、軽井沢のように強気に出る人間は反対側に位置することが多い。

しかし彼女の性格がハリボテであるなら。作られたものであるならば。

平田や町田のような場を支配する人間を立てることで安全な立ち位置を形成したことにも合点がいく。

「だが待ってくれ。軽井沢のことは分かったが、彼氏役をやることでお前に何のメリットがある？」

平田は大勢の女子にモテる。軽井沢のために付き合っているフリをすれば本当の恋愛も出来ない。

どう見ても平田にはメリットが存在しない。

「軽井沢さんが虐められずに学校に来られること。それが僕にとってのメリットだよ」

平田は誤魔化すことなくそう言い切った。それが自分のためだと迷うこともなく。

「納得いかないかな？ それだけが理由じゃ」

「納得いかないわけじゃない。ただ、何か意味があるんだろ？」

ここまで話したのなら、それも話さなければならぬことは平田も分かっていた。

彼は自販機で飲み物を二本買くと、内一本を綾小路に差し出した。

「僕は中二の頃まではクラスの中では目立たない生徒だったんだ」

「……ちよつと想像できないな」

リーダーシップを発揮している普段の平田からは想像できない話だった。

「目立ちもせず、かといって影も薄すぎず。友達もそこそこいて、本当に普通だった。そんな僕には小さい頃から仲が良かった友達がいた。

小学校は6年間ずっと同じクラスで、家も近かったから毎日一緒に登下校してたんだ」

懐かしむように、けれどどこか儂げに平田は過去を淡々と語る。

「中学に入って初めて別のクラスになった。最初は一緒に登下校してたんだけど、ある日を境に段々と頻度が落ちてって、僕は新しいクラスの子とばかり遊ぶようになった」

「まあそれはおかしなことじゃないだろ。クラスが違えばどうしても」

「うん、そうかもね。でも……僕が友達と遊んでいる裏で、その子は虐

めに遭ってたんだ」

そう語る平田の手には缶が強く握りしめられていた。

その手には彼の様々な感情が込められているのだろうと察しつつ、綾小路は続きが語られるのを待つ。

「何度か彼は僕に対してSOSを出してた。顔に怪我をしていたり、身体に痣が出来てたり。だけど当時の僕は深く考えなかった。元々彼は気が強い性格だったから、喧嘩でもしたんだらうって。だけど二年生に上がって再会したとき……既に彼の心は壊れてしまっていた。明るく活発だったイメーヅは見る影もなくなつて、殴る蹴るの暴行は日常茶飯事。授業中に恥をかかされて、それをネタにまた虐められる。そんな光景があつた」

「それでお前は……」

その後平田がどうしたのかを綾小路は薄々察していた。

平田はそれを感じ取るように弱弱しくコクリと頷く。

「うん。多分綾小路君の予想通りだよ。僕は何もしなかった。いや、出来なかつたって言う方が正しいかな。自分に矛先が向くことを恐れて、今の楽しい日常を失うのが怖くて……何年も前からずっと仲良しだった友達を見捨てたんだ。虐めている人たちも、きつといつかは飽きて止めるだらう。きつと他の誰かが助けるだらう。あるいは彼が不登校になつて虐めは終わるだらう。なんて都合のいいことばかり考えて、僕は自分の日常を生きていた」

自嘲するように、過去の己を侮蔑するように平田は語る。

彼は己自身が今尚許せないのだろう。

「それで、そいつは……どうなつたんだ」

「……あの日のことは今でも夢に出てくる。サッカーの朝練で登校していた僕が教室に戻った時、彼は顔を腫らして僕がやってくるのを待っていた。正直言つて、そのときは居心地が悪かつたよ。そりやそうだよ。見て見ぬフリし続けた相手が目の前にいるんだから。小さい頃から一緒に遊んできた友達なのに、もうそのときはまるで他人のように感じられてしまつて。彼に関わると僕が虐められてしまうかもしれない。そんな残酷なことすら考えていたんだから。今思う

と、彼には僕の心が見えてたんだろうね。何も言わず、だけど訴えかけるように……その日の授業中に教室の窓から飛び降りた」

「飛び降りた……？ それでそいつは」

「死にはしなかった。でも脳死状態で意識は戻らなかった。今も彼の両親は快復を信じて待つてる。だけどそんな状態の彼が、果たして生きてるって言えるのか。でも、心臓が動いているのに死んでるって言うことも出来ない。僕には分からない。ずっとそうだ。あの日の出来事はどこか現実味がなくて、今でも夢なんじゃないかって思うことがある。でもふとした瞬間に、頭の中で彼からの怨嗟の声が聞こえるんだ。忘れようとすればするほど、平和な日常を過ごせば過ごすほど彼は訴えかけてくる。僕が我が身可愛さのために、人を死に追いやったことを」

それが平田洋介の過去。消すことの出来ない、癒えることのない傷だった。

「僕をしていることは、結局のところ罪滅ぼしにもならないただの自己満足なんだろうね。ただ、僕はもう誰かが傷ついている現実から目を逸らしたくない」

己の生き方が決して高潔なものではないと自覚しているが故に。醜く、浅ましいエゴイズムであると誰よりも理解しているが故に。

平田洋介は自分自身を決して許さない。

過去の生き方を決して肯定しない。

自分自身を否定し続け、己の選択を後悔し続け、人に手を差し伸べ続ける。

それが自分に与えられたたった一つの選択肢だと知って。

・特別試験お役立ち情報！

1 名無しのピエロ 2XXX/08/14 (木) 03:31:0
8:69 ID:gl04nqBD

卵グループの優待者はDクラスにいる。

2 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:35:0

7:88 ID:neugna5F

それマジ？

3 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:36:0

3:44 ID:meuws4HU

どうせガセつしよ。つてか掲示板に情報リークしてOKなん？

4 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:38:0

4:39 ID:iewriterabij9

ルールの禁止項目にはなかった気がするけど。

5 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:39:0

2:55 ID:biikh3ags

じゃあこの掲示板で情報流してもルール違反じゃないってことか

6 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:40:0

3:33 ID:jnogra74

これマジならヤバくね？ チョー重要な情報じゃん！

7 名無しのピエロ 2XXX/08/14 (木) 03:41:0

4:33 ID:gl04nqBD

疑り深い皆のために昨日までに終わったグループの優待者の情報も教えてあげる★

午の優待者はBクラスだよー♡

8 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:42:0

5:55 ID:bjhise73

喋り方キメエw

9 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:43:0

8:33 ID:uiw4ae7tt

なんか一気に胡散臭くなったわー

10 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:44:

02:66 ID:bhiwer6njo3

証明しようがなくて？ BとかDの奴に聞いて教えてくれるわけ
ねえじゃん

11 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:45:

07:88 ID:tkajiw4009

それな

12 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:46:

09:33 ID:uiew56mong

でもさ、これがマジなやつだったらDクラスヤバくね？ 大ピンチ
じゃん。

まあ落ちこぼれクラスだから関係ねーか。

13 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:4

7:02:56 ID:rebi79nsa

とか言つてこれ鵜呑みにしてメール送るバカいそうじゃね？

14 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:48:

01:88 ID:uiowea503

ありそうwwつか、もしかしてそれ狙いなんじゃん？

15 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:49:

03:31 ID:iobjklqa3oi

なるほ。自爆狙いつてことか。

16 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:50:

02:77 ID:glonqBD

とりま今日は試験ねえし、卯グループのDの奴観察してみるのもい
いかも。

17 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:51:

07:88 ID:neugna5F

お巡りさん。こいつストーカーです。

18 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:52:

03:44 ID:meuws4HU

つかDの奴って誰だよ。まずメンバーを知らんわ。

19 名無しのピエロ 2XXX/08/14 (木) 03:52:

30:33 ID:glonqBD

卯グループのDクラスメンバーはコチラ★

綾小路清隆↑なんか影の薄い奴。大体女子の横にいるよ★

軽井沢恵↑Dクラスのリーダーの彼女。偉そうにしてるからすぐ分かるよ★

外村秀雄↑ザ・キモオタって感じの見た目だから一発で分かるはず

★

幸村輝彦↑ガリ勉君って見た目だからすぐ分かるよ★

20 名無し 2XXX/08/14 (木) 03:5

3:02:55 ID:ojasurf37

★がウゼエ。そして補足情報がdisばかりで笑うわ。

鍍金の女王は最後の希望に縋る。

早朝、豪華客船の中は騒然としていた。

船内の様々な場所で生徒たちが口々に何かを話している。

ある者たちは廊下で――

「なあ、あの話聞いたか？」

「学校掲示板のアレだろ？ 聞いた聞いた」

「マジなのかなあ。だとしたらヤバくね？」

「だな。誰がやったのか分かんねえけど、マジなら情報ダダ洩れってことだろ？」

ある者たちはエントランスで――

「ねえねえ、あの話」

「卵グループの話でしょ？ 優待者がDの誰かっていう」

「本当なのかなあ。デマかもしれないよね」

「でも終わったグループの優待者も知ってたっぽいじゃん。確かめようがないってコメントでも言われてたけど」

「そうだよー。終わった試験とはいえ優待者かどうか聞いて素直に答えてくれるとも限らないし」

「っていうか、そもそもあの書き込みって誰がやったんだろうね」

「さあ？ でもD以外の誰かなんじゃない？ わざわざ自分のクラスの情報流すメリットもないでしょ」

「それもそうだよー。でも他のクラスなら、一体どうやって優待者を見抜いたんだろう」

またある者たちはカフェで――

「例の掲示板のヤツさー」

「どうせデマっしょ」

「だよな。実際掲示板のコメもデマって意見がほとんどだしな。試験

終了のメール来てないってことは誰も真に受けてねえってことだし」
「確証が得られればって思ってる奴がほとんどなんじゃね？ もし情報
報がマジだったら自分のグループの優待者について質問するのもア
リだろうし」
「でも他のグループの情報も持つてるとは限らないだろ。単に卵グ
ループのことだけ知ってたパターンもあるかもだし」
「マジの情報通だったらスゲエ武器になりそうだよな」

本来試験のインターバルとなるはずだったが、船内はざわついてい
た。

船内で執り行われた第二の特別試験。

初日と二日目を終えて試験は残すところあと一日。

本来今日一日は試験に挑む生徒が身体と精神を休ませる日になる。
そうなるはずだった。

しかし今現在、生徒たちはお世辞にも休んでいるとは言えない。
皆が皆血相を変え、ある者は面白半分で、ある者は不安に駆られて、
口々に一つの話題で言葉を交わしている。

それほどまでに彼らが関心を寄せている話題はただ一つ。

深夜に掲示板に新たに立てられたとあるスレッドについてだ。

特別試験に役立つ情報と銘打って立てられたそのスレッドにて投
下された情報。

それは12あるグループの一つ、卵グループの優待者がDクラスに
いるというもの。

スレッドが立てられてから早5時間。スレッドは既に300を超
え、情報は瞬く間に広がっていた。

真偽はさて置いても掲示板に試験の情報が流されたのだから無理
もない。

元より噂好きの生徒にとってそれは格好の話のネタだった。

そして今現在、この話を知っている生徒は皆、船内を歩くDクラス
の生徒達を遠目からチラチラと見るようになっていた。

噂の真偽を確かめたいと思っっているのか、あるいはただ面白がつて

いるのか定かではないが、そのような不躰な視線をそこかしこから向けられれば良い気がするわけもなく、Dクラスの生徒達は居心地の悪さを感じていた。

「な、なんか私たちめっちゃ見られてない?」

「思った。なんなの一体」

レストランで軽い朝食を摂っていた篠原と松下も周囲からの視線に気づいていた。

周りに目を向ければクラスを問わず色々な生徒がこちらを見ている。

そんな状況では落ち着いて食事も出来ないから質が悪い。

「私聞いてこようかな。ずっとジロジロ見られてるし」

「止めとけば。聞いてもスルーされるだけじゃん?」

「そうかもしれないけどさあーヒソヒソされてると気分悪くない?」

「好きに言わせておけばいいのよ。前の須藤君の時みたいにこっちが何かしてくるのを待ってるのかもしれないし」

松下は焦れつたくなってきている篠原を諫めつつ冷静に分析をしていた。

「何それ。今日は試験はお休みでしょ? なんで今このタイミングでやってくるわけ」

「さあ? 他のクラスの作戦なんて分かんないけど。でもわざわざこっちから乗ってあげる必要はないでしょ」

「サバサバしてるよねー。そういうところちよつと羨ましい」

「ね、ねえ二人とも」

今まで会話に入ってこなかった佐藤がここで二人の話に入ってきた。

彼女もまた二人と一緒に朝食を摂っていたのだが、ふと携帯を弄っていたら何かに気づいたらしくその画面を二人に見せた。

「これ見て」

「どうしたの麻耶。そんな血相変えて」

「いいから!」

疑問符を浮かべる篠原を押し切り、佐藤は画面を見せ続けた。

その様子に違和感を感じつつ、二人はその外面を覗き見た。

「な、何これ……!?!」

「なるほどね……」

表示された内容を見た篠原の表情が変わった。

松下もまた、篠原ほどではないにしろ状況を理解したように眉を顰める。

「ヤバくない? 要は他のクラスが皆この情報が合ってるか気になってるってことでしょ」

「うちの卵グループのメンバー全員名前が出てるからね。しかもご丁寧に見た目の特徴まで書いてあるし」

「一体誰がこんなこと……」

三人は今槍玉に挙げられている四人のクラスメイト達を思い浮かべ、この試験の行く末を案じていた。

8月14日 午前9時20分

『丑グループの試験が終了いたしました。丑グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気を付けて行動して下さい』

午前10時、綾小路は佐倉から呼び出しを受け、待ち合わせ場所を訪れた。

呼び出した目的についてはまず間違いなく試験についてだと理解していたため、今更断る理由も無かった。

「丑グループの試験が終わったな」

「うん……」

合流した佐倉と共に今一度学校から届いたメールを確認する。

文面はこれまでのものと同じように簡素なもので極めて業務的な

ものだ。

「佐倉、お前が優待者だったってことは？ もしくはクラス内にいたか？」

綾小路の問いを佐倉は首を左右に振って否定する。

「私は優待者じゃなかったよ。ただ、須藤君達は、その、分からないけど……」

彼女も誰が優待者かは見当がつかないらしい。

「考えすぎても仕方ないな。俺もグループの優待者が誰か分からないからな」

「うん、ありがとう綾小路君」

綾小路の言葉を彼なりの気遣いと受け取った佐倉は礼を述べて微笑んだ。

「もしまた何かあったら教えてくれ。いつでも相談に乗るから」

「ありがとう。で、でもその……綾小路君も大丈夫？」

「どういうことだ？」

「えっ、綾小路君知らないの……？」

話を通じないことに佐倉はキョトンとした顔をする。

彼女が言いたいことが分からなかった綾小路もまた疑問符を浮かべていた。

「どうやら本当になんのことか分からないのだと察した佐倉はポツポツと事情を話した。

「私、聞いちゃったの……その、綾小路君のグループの話」

「俺の？」

「なんか、噂になってるみたいだよ……？ 卯グループの優待者がDクラスにいるって」

「……なんだそれは」

完全に寝耳に水だったため綾小路の関心は一気に引き寄せられた。

彼は視線で佐倉に続きを促す。

「その……ネットの掲示板に書き込まれてたって……綾小路君の名前も出てみたいで……」

「ということは博士や幸村……軽井沢の名前も、か？」

佐倉はコクンと頷いた。

「インターバルになるこのタイミングでその情報が出回るとはな……」

「あ、綾小路君は、その……優待者、なの？」

その問いに綾小路は先の佐倉と同じように首を左右に振った。

「いや、俺は違う。って言っても俺の言うことなんて信じてもらえないかもしれないが」

「そ、そんなことないよ！ 私、綾小路君の言うことなら信じるから」

綾小路の卑屈な発言に対して佐倉は強い声色で否定した。

彼女はそれほど綾小路のことを信頼しているのだろう。

たとえ今、この場で綾小路が実は優待者だと告白したとしても彼女はその秘密を墓場まで持つていくつもりだったのだ。

それほどまでに佐倉は綾小路に返しきれない恩があるのだ。

「情報の真偽はさておいてもこの状況は不味いな……どこに行っても見られているのは居心地が悪い」

「だ、大丈夫……？」

「ああ、確かにやりにくいが下手にコソコソすればかえって怪しまれるかもしれないからな。博士と幸村にも伝えておくよ。ありがとう」

「う、ううん！ 私の方こそごめんね？　なんか余計なこと言っちゃったかも……」

「いや、もし知らなかったら下手を打っていたかもしれない。俺以外の三人の中に本当に優待者がいることもありえるからな。用心しておくに越したことはないからむしろ有り難かった」

そう礼を述べて綾小路は佐倉と別れた。

その足で彼が向かったのは下の階、一般人が立ち入らないであろう最下層のフロア。

配電設備などがあるこのエリアは必要に応じて足を踏み入れるだけで、普段人気は全くない。

大声を出してみても反響はするものの、無人であるため誰かがやってくることもない。

出入り口は今し方綾小路が入ってきた場所を含めて二か所。

もう一つは非常階段に繋がっているらしく、ドア付近に積もっている埃から普段は全く使われていないことが見て取れた。

つまりただ一つの出入り口を見ていればすべての状況は把握できるといふことだ。

しかも都合なことは他にもある。

綾小路はポケットから携帯を取り出して確認した。

「電波が入らない……連絡手段はないな」

時折僅かな電波が入るもののメールやチャットを送るのも一苦労で、通話はとてじやないが出来ない。

これからやろうとしていることを実行するにはうってつけの条件が揃っていた。

「あとは段取りを詰めていくだけだな……」

この後の行程を頭に思い浮かべながら綾小路はそのフロアを後にした。

「やあ、まあとりあえず座って。あ、何か飲むかい？」

「……いい」

「遠慮しなくてもいいよ。ちゃんとここは奢るから。あ、すいません。アイステイーひとつ追加で」

カラオケルームの一室に一組の男女がいた。

男は部屋に備え付けられた電話で女の飲物をオーダーすると電話を切る。

「それで、俺に用ってなんだい？ —— 軽井沢」

男の向かいに座る女、軽井沢恵はその問いに視線を泳がせる。

彼女の様子に男、黛柚椰は内心ニヤリとしながらもそれを表に出さない。

「もしかして平田との仲で悩んでいるのかい？ 俺に彼女はいないから恋愛相談には向いていないんじゃないかな」

「ち、違うし……今日はちよつと、その、お願いがあつて……」

冗談めいたことを言う柚椰に軽井沢は弱々しく否定の言葉を返す。そしてしおらしく、おずおずと目線を柚椰に合わせた。

「まず、その……この前の試験ではゴメン。誤解だったとはいえ色々酷いこと言つた、と思う……」

まずはそれを謝るのが義理だと思つたのか軽井沢は先の無人島での行いを詫びた。

クラスを勝たせるために汚れ役を買つて出た柚椰に対して直接ではないものの罵声を浴びせかけたこと。

クラスが柚椰を信じる中で自分一人だけが最後まで彼を疑つていたこと。

試験が終つて誤解が解けた後も今まで謝罪しなかつたことを軽井沢は素直に謝つた。

彼女の謝罪に対して柚椰は優しく微笑んだ。

「そのことについてはもういいよ。直接被害に遭つた君が俺を疑うのは当然だよ。寧ろあの状況で裏まで読み取れる人間の方が稀なんだ。結果的に試験が上手くいったんだ。だからこの件についてはお互い水に流そう」

「……ありがと。アンタつてやつぱ優しいんだね」

「清隆にはお人好しと言われているけどね」

そう言つて謙遜する柚椰に対して軽井沢は肩の荷が下りたのかホツと息を吐いた。

「それで、俺にお願いつてなにかな?」

柚椰が促すと軽井沢は再び深刻そうな表情を浮かべ、ポツポツと事情を語つた。

「実は……同じグループのCクラスの人たちと色々あつて……」

「君のグループという……ああ、伊吹達か」

柚椰は携帯を確認しながらそうつぶやいた。

恐らく画面には卵グループのメンバーがリストアップされているのだろう。

それを察した軽井沢は話を進める。

「その中の真鍋って奴がさ、あたしが前にちよつとあつた子と友達らしくて……あたしは身に覚えがないんだけど真鍋はそうだって決めつけてて」

「友達のために、か……でもそれは、その友達とやらを呼び出して確かめればそれで済む話じゃないか。どうして拗れているんだい？」

「その真鍋が狙ってたAクラスの男子があたし達が揉めてるところに割って入って止めてくれたんだよね。だから、その男子に庇われたあたしが気に食わないんだと思う」

「色恋まで絡んできたか……厄介だね」

軽井沢は本当のことを話さず、かなり曲解して柚榔へ事情を説明した。

一方柚榔はそれを信じ切っているのか難しい顔をして考え込んでいる。

「真鍋は友達と揉めた上に、自分が狙っていた男子に目をかけられている君のことが気に入らない。でも君には揉めた覚えがない上に、そもそも平田という彼氏がいる。泥沼だね……」

「昨日、夜の話し合いの後に呼び出されてさ……真鍋以外にも同じCの女子二人も居て……」

「詰め寄られたのかい？」

軽井沢はコクリと頷く。

「結局昨日は途中で伊吹が止めてくれて、なんとかあったんだけど」
「伊吹が？ それはまた、意外な行動だね」

思わぬ名前が出てきたと言わんばかりに柚榔は目を丸くする。

「なんか大事になつたらめんどうとか言ってたけど……」
「なるほど。健のときのように学校が出張ってくると分が悪いと思つたのか」

「このままだと真鍋達になにかされるかもって思つたら怖くて……」
「確かにこのままだと不味いね……このことを平田には？」

柚榔は暗に彼氏には相談したのかと問えば、軽井沢は首を横に振った。

「したけど、真鍋達を呼び出して話し合いをして和解するって……で

も、それじゃ絶対収まるわけないって思うの……」

「同感だね。正直今の話を聞くと、ただの話し合いで仲直りという訳にはいかないかもしれない」

「でしよう？ あたしもそれじゃダメだって言ったんだけど……」

「彼は納得してくれなかった、と」

「うん……」

大体の事情を理解した柚椰は息を吐いた。

「(義理は通しても真実は語らない、か……それが自分の弱点だと理解しているが故に)」

当然のことながら、柚椰は本当の事情を知っている。

元の発端が軽井沢の自業自得であること、火に油を注いだのが彼女の強がり起因するものだということ。

彼女と平田の関係が寄生する者とされる者であるということも。

そして軽井沢恵という人間の本来の姿も全て。

「(あのリストで軽井沢の過去は全て知っている。だからこそ分かるのだろう。真鍋達がこれから何をするか……)」

軽井沢は経験則として知っているのだろう。

火種を燻らせた人間が、群れで個を囲む人間がなにをするのかを。群れとなった人間から何が剥がされるのかを。

「平田は穏便に事を済ませたい。けど君は強引にでもこの問題そのものを解消したい、ということでもいいのかな？」

「……うん」

柚椰の問いに対して暫し間を開けた後に軽井沢は頷いた。

「分かった。それで君は何をしてほしいんだい？」

「真鍋達に仕返ししてほしい。もうあたしに何かしてこないようにしてほしい」

頷いたことで吹っ切れたのか軽井沢はストレートに要求を突きつけた。

それがどれだけ傲慢か理解してはいるものの、己の防衛本能に従って。

「仕返し、か……そうなると彼女達を抑えつける材料が必要だね。健

のときと同じように、学校に提出されるとまずい何かが」

「脅しのネタってこと？」

「そうだ。一度と君に関わらせないようにするためには、彼女たちにメリットを齎すよりも、とことん質の悪いデメリットをチラつかせる方が効果的だと思うんだ」

「……そ、それじゃあ、あたしに何かしてくるところを押さえればそれが脅しのネタになるんじゃないの？」

柚椰が本格的に協力してくれることを感じ取ったのか、軽井沢はそんなことを言った。

つまり彼女は暗に自分を囿にして真鍋達を脅す材料を仕入れると提案したのだ。

しかしその提案に柚椰は首を横に振る。

「それだと万が一の場合があるだろう？ もしその場で君が傷つけられでもしたら元も子もない。君は女の子なんだ。自分を大事にしななければいけないよ？」

「っ！……そ、そう？ ありがと……心配してくれるんだ。」

優しい言葉をかけられたことに驚きつつも悪い気はしないのか、軽井沢は髪を弄りながらそっぽを向いた

「相談された以上、君にもしものことがあつたら平田に申し訳が立たない。なにより俺にとつても、君は大切なクラスメイトなんだからね」

「そっか……ありがと」

自分の身は保証しつつ、ちゃんところらの要望も汲んでくれる柚椰に軽井沢は素直に礼を述べた。

「ひとまず連絡先を交換しておこう。何かあつたら連絡してほしい」

「うん、お願い」

そう言うと二人は手早く携帯を操作して連絡先を交換した。

新たに頼れる相手が出来たことで安心したのか軽井沢は幾分晴れやかな表情になっていた。

「こちら真鍋達の情報を集めてみるよ。いい情報を仕入れることが出来たら君にも教えるつもりだ」

「ありがと……あんた、結構頼りになるじゃん」

嫌な顔一つせずはこちらの要求を飲んでくれた柚椰を容易く感じたのか軽井沢は安心しきった顔でそう言った。

いつもの強気な口調が戻っていることからそれが窺える。

「じゃあもう行つた方がいい。イケメンの彼氏持ちの君が密室で男と二人きりのところなんて、誰かに見られたら噂されてしまうよ?」

「!・そ、そうね。じゃあ行くわ」

柚椰に言われたことで軽井沢は今一度自分の立ち位置を思い出したのか慌てて椅子から立ち上がると足早に部屋を出て行った。

既に平田を見限っているとはいえ、学校内では未だ軽井沢と平田は恋人という認識なのだ。

そんな状況で彼女が他の男と密会していたなどとバレればそれこそ脅しのネタになりかねないと悟つたのだろう。

「さて……」

部屋に一人残された柚椰はテーブルの下から鞆を取り出すと中に入れてあったノートパソコンを取り出して机に置いた。

それを開き、パスワードを打ち込むとすぐにパソコンは使える状態になる。

この旅行にも彼はノートパソコンを持ってきていた。

持つて行ける私物の制限は特に無かったため問題ないだろうと判断したのでろう。

もし仮に違反であったとしてもバレなければ問題ないのだから。

彼はすぐさま学校掲示板にアクセスしてとあるスレッドをクリックした。

それは今現在最も盛り上がっている試験の情報に関するスレッドだ。

画面に映るスレッドを眺めながら、柚椰は携帯である番号をタップして電話をかけた。

「恋人を頼れないこの状況で、まさか僕を選ぶとは……軽井沢恵、君はとても運が良い」

この後の行程を思い浮かべながら柚椰は己を頼った少女に賛辞を送った。

王妃の毒林檎と虚像の王子

午後0時20分。船内のとある一室で臨時の職員会議が開かれていた。

AからDの4クラスの担任全員が顔を付き合わせるのはこの旅行中では珍しいことではなかったが今回は例外だった。

試験のインターバル中にわざわざ臨時で会議を開く理由などただ一つ。

現在実施中の特別試験に、具体的にはこの船内に起きている一つの異変についてだ。

「もう知ってると思うけどー学校の掲示板に妙な書き込みがあったのよねー」

「確認している。まだ試験続行中のグループの一つに関するものだ、とな」

口火を切った星乃宮に対して真嶋は短く会話を済ませる。

坂上は腕を組んで沈黙しているが、その表情から事情は既に把握しているらしい。

「そそ。卵グループの優待者がDクラス、佐枝ちゃんのクラスのメンバーにいて話」

「真面目な場だぞ。佐枝ちゃんは止める星乃宮」

話を続ける星乃宮に対して茶柱は呆れたように苦言を呈するが本人は大して気にしていない。

「掲示板を読んだ生徒がそこかしこでDクラスの子たちを見てるのよねー。まるでボロを出さないか監視してるみたい」

「そのの何が問題なんだ？ 試験のルールそのものには違反してないだろう」

「真嶋先生の言う通りです。ルールには掲示板を使って情報を流してはいけないとは記載されていない。これも生徒の誰かが弄した作戦の一つであると考えて差し支えないでしょう」

「どうやら真嶋と坂上はこの異常について別段問題視はしていないらしい。」

「寧ろルールの穴を突いたよく考えられた作戦だとさえ思っていた。「まあそりゃあそうなんだけどさー。どこの誰がやったのかは気になるじゃない？　こんな手の込んだ作戦を思いつく生徒のことをちゃんと評価してあげるのも先生の役目でしょ？」

「物は言い様だな。先の無人島のと看とは違、今回の試験は匿名性が保証されているのが肝であり要だ。生徒を丸裸にすればそれは学校側が試験に干渉することと同義だぞ」

茶柱の正論に対して星乃宮は頬を膨らませた。

「もー佐枝ちゃんは堅いなあー。もうちよつとこの問題を楽しもうよ」

「井戸端会議をするために臨時の職員会議を開いたわけじゃないだろう」

「まあまあ。真嶋君も気にならない？　今このタイミングでこんな手に出たカワイイ子の正体」

「くだらん。それに、学校の掲示板を利用した書き込みならいくらでも特定は可能だろう。わざわざ楽しむようなものでもないだろうに」

「そ・れ・が、ちよーつと面白いことになってるみたいなのよねー」

そう言うとき星乃宮は持ってきていたタブレット端末を操作すると机の上に置いて表示された画面を全員に見せた。

何を見せるつもりなのかと三人はその画面に目を移す。

「掲示板の書き込みは生徒達に配布している端末じゃなくてPCから。つまりノートパソコンかな。それで書き込んだみたいなのよねー」

「船内に……いや、この旅行に持ち込まれたものということか」

「それも問題ないでしょう。持ってきてはいけないものの中にノートパソコンは含まれていませんし、生徒にも娯楽は必要でしょう」

「それにパソコンを使ったとして、その時間にこの船の中にあるネット回線を通してあるんだ。端末を使うのと大して差はないだろう」

「そうなんだけどー。べつ丁寧に串通してるみたいなのよねコレ」
「串、ですと?」

聞き馴染みのない単語に坂上は片眉をあげるが、それを察した真嶋がすぐに補足する。

「プロキシサーバーのことですよ坂上先生。企業などで外部とのネットワーク通信をする際に間に介在させることで危険な通信を防ぐものです」
「なるほど。つまりネット環境を脅かされないための防御策というわけですね」

「それで、その何が問題なんだ?」

茶柱は星乃宮に先を促す。

すると星乃宮は困ったような、けれど少し面白そうに続きを語る。

「この串なんだけどー……どうやら一個じゃないのよねー」
「なに?」

「つまり用心深く串をいくつも経由させてるわけ。その上で船のネットワーク回線にアクセスして書き込んでるってこと」

「その何が問題なのですか?」

「例えばこの船内でパソコンを使ってAというサイトにアクセスしたとします。何も考えなければ船のネットワーク回線を通るため、この回線にはどの時間にどのパソコンでアクセスが行われたか記録が残ります。そしてプロキシサーバーを通してその上で船の回線を通してAにアクセスした場合ですが、プロキシサーバーは間に介在させるものではなく、結果として船の回線にはプロキシサーバーからアクセスされたという記録が残り、プロキシサーバーの方にはどの時間にどのパソコンからアクセスされたかという記録が残るんです。通常であれば時間はかかりますが特定は可能です。ですが……」

「サーバーをいくつも通した場合、その特定難易度は跳ね上がる。中継したサーバーの規模が大きければ大きいほど時間がかかる上に特定も容易ではないということだな」

真嶋の説明に茶柱が補足する。その上でようやく坂上はこの問題の複雑さを認識したようで腕を組んで唸った。

「ううむ……件の生徒はかなり用心深い人間ということですか」

「最初はただ単に試験を攻略するための上手い作戦だと思ったんだけどねー。掘り下げてみると随分とゴチャゴチャしてたのよ」

「よくそこまで分析できたな。お前パソコンそんなに詳しくあったか？」

「前に付き合ってた男がパソコンオタクだったのよ。スゴイって煽ってたら色々教えてくれたってわけ」

「相変わらず男を手玉に取るのが上手いなお前は」

「佐枝ちゃんに男っ気がなさすぎるだけですうー。それにオタク男子も結構良いわよ？　ちよつとそれっぽいやアプローチするだけでとんとん尽くしてくれるし」

「……お前が夜道で男に刺されないことを友人として祈っているよ」

「え、真嶋君。それ普通女が男を刺すパターンじゃない？」

「お前の場合は例外になりそうだと思うたまでだ」

真嶋は頭の中で既に状況が思い浮かんでいるのか苦い顔をしていた。

茶柱もまた、あながちありえない話ではないかもしれないと思っっているらしく目を逸らしている。

「ぶー。なにさ二人して。私も相手も楽しめたんだからwin-winじゃない。別に騙そうとしたわけじゃないもん」

「熱しやすく冷めやすいと自覚している時点でお前の過失だろうが……」

悪びれもしない友人の姿に茶柱は頭を抱えた。

同期三人の戯れに流れがシフトしつつある中、坂上の咳払いが響く。

「とりあえず現段階ではルール違反と見なされる行為ではありませんし、我々も特に動く必要はないのではありませんか？　そもそもとして、この書き込みが生徒達を焚きつけるデマの可能性だってある」「同感ですね。尤も、この手の作戦を思いつきそうな、ルールの穴を突くようなことを思いつく生徒なぞ限られてきますが……」

茶柱は坂上の意見に同調しつつも、意味ありげな視線を彼へ向ける。

「……私のクラスの生徒がやったことだとお思いで？」

「そうは言っていないません。ただ、限られてくると言っただけですよ」

「それを言ったら佐枝ちゃんもクラスもじゃない？」

坂上と茶柱の睨み合いに星乃宮が茶々を入れる。

「どういう意味だ？」

「無人島試験のときだって、結果はDクラスの一人勝ちだったわけだしねー。私たち3クラス全部出し抜いて、さ」

「フツ、それがどうした？ ラッキーパンチなど珍しくもないだろう。予想外の事は往々にして起こりうることだ。たまたま不良品が運良く他のクラスよりもポイントを稼いだけのことだろうに。ただの不良品共が実は有能だった、なんてものは所詮虚構の世界だけに許された理論だ。現実には持ち込むものじゃない」

茶柱は冷静に、どこまでも辛辣に自分が受け持っている生徒達を扱き下ろす。

とても担任が教え子を評する言葉とは思えない暴言だが、それを聞いて星乃宮は可笑しそうに笑った。

「ふふつ、誤魔化すときに饒舌になっちゃう癖。高校の時から変わんないね」

「抜かせ。とにかく、だ……私のクラスにこんな手の込んだことを計画できる生徒などいないさ」

「それはどうだろうねー。佐枝ちゃんお気に入りの子達なら……どうかな？」

「さあ、どうだろうか？」

人を食ったような笑みを浮かべる星乃宮と不敵に微笑む茶柱。

互いの腹を探り合っていることはこの場の男衆も理解していた。

「今ここで議論し続けたところで生まれるのはただの予想でしかない。俺達が動くとすれば、それは生徒達が試験のルールないしは学校そのもののルールに違反した行為をした場合のみだ。そうだろうか？」

「その通りですな。この場でお互いの腹を探り合っているも無意味。我々教員が出来ることは、ただ試験の行く末を見届けること。これに尽きます」

「同感ですね」

「ぶー……まあ、それもそっかー」

結論は下った。

この状況に対して何らかの対応を取ることはない。取る必要はない。

教師としての彼らの意見は合致しているが故に。

この状況を作り上げている人間の正体は知らない。知る必要はない。

それは教師の仕事ではないと判断したが故に。

午後1時15分。

「やあ、調子はどうだい？」

「良好です。今日一日丸々休日ですし、思う存分楽しむ所存ですよ」

「おや、君は思いのほか肝が据わっているようだ」

「僕の興味を惹くような物はこの船にはありませんし。この旅行中はずっと退屈していましたよ」

「そうだろうね。学校に居るときの君は今よりも生命力に満ちていた。君にとっては試験の結果云々よりもエアコンの効いた自室で過ごす日常の方が重要ということかな？」

「今回の試験はとうの昔に攻略しています。その上で興味なしと判断したまで」

「豪胆だね。今回の試験は大勝ち出来ればクラスポイントもプライベートポイントも大儲け。君の生活も潤うと思うんだが」

「プライベートポイントは魅力的ですが、個人で稼げるのは精々50万が限度。あとは他者と足並みを揃えなければならぬじゃないですか。そんなのは非合理的且つ非現実的です」

「契約を下敷きにした協力関係なら上手くことを運ぶことは可能だと思ふよ。俺と君の関係のように」

「僕と貴方はクリエイターとパトロン。資金と環境を提供していただ

く代わりに僕は貴方の要望と僕自身の理想を叶える。しかし今回他者と協力したところで得られるものはただの金のみ。何の魅力も感じませんよ」

「嬉しいね。それほどまでに俺と関わる事にメリットを感じてくれているとは思わなかった」

「……初めて、だったんですよ。本当の僕を見て、僕のことを理解してくれた人間は」

「君も大概癖が強い人間だからね。もう少し社会的になれば君を買う人間も増えると思うんだが」

「さつきも言ったでしょう。僕は僕が魅力を感じた者としか働かない。この船の中に貴方以外に僕が魅力を感じる人間など一人もいません。故に今回も試験には参加せず最後まで傍観させていただくつもりです」

「そうか。まあ今回の試験の結果に関して、君に何かを頼むことはないから安心していい。それよりも俺が興味があるのは、この船の人々が繰り広げる人間模様だ」

「……例のスレッドについてですか」

「ご名答。今日は朝から随分と騒がしい。あのスレッドは大きな火種になった。君のお手柄だよ」

「あの程度で荒れるとは……僕はまだまだまだ温いと感じたのですが」

「状況とタイミング次第では小さな摩擦も火種になるということだよ。予想通りにこの船の中は荒れてくれた。インターバルになるはずの今日この一日はDクラス対A, B, Cクラスの構図がそこから中に転がっている。それは明日の最終日まで続くだろう」

「そうまでしてDクラスを……自分のクラスを追い込む理由があるんですか？」

「本来は自分のクラスだけではなく全クラスを、この試験そのものを引っ掻き回して終わりにするつもりだったが……少し気まぐれを起こしてね。所謂老婆心というのかな」

「理解に苦しみますね」

「そうかもしれないね。協力者の子にも言われたよ。クソ野郎とね」

「言い得て妙ですね。しかし、僕はそんなクソ野郎も嫌いではないですよ」

「奇遇だね。俺もこんな自分が嫌いではないよ。幸いにも俺がこの試験で達成したいことは既に達成できつつある。だからこそ余裕が生まれたのかもしれない」

「標的は……」

「一人……いや、正確には一人を取り巻く数人、かな」

「なにをすればよろしいと?」

「まずはスレッドをこのまま盛り上げてほしい。盛り上がれば盛り上がるほどその火種は現実にも波及する。盛り上げ方は君が一番良く知っているだろう?」

「言われるまでもないですね。愚か者は嫌というほど見てきましたから」

「あと俺がこれから送るIDの持ち主、その端末の情報から動きを探ってみてほしい。動きがあれば適宜対応を。尤も、君にとってはどちらも退屈な仕事になるかもしれないが」

「構いませんよ。どうせ片手間で出来る作業です」

・特別試験お役立ち情報!

3 2 0 名無しのピエロ 2 X X X / 0 8 / 1 4 (木) 1 3 : 3

1 : 0 8 : 6 9 ID : g l o 4 n q B D

やつほー☆みんな! 優待者が誰か分かったかな?

3 2 1 名無し 2 X X X / 0 8 / 1 4 (木) 1 3 : 3

2 : 0 3 : 4 4 ID : n j o a s e 3 6 n

ピエロ参上!

3 2 2 名無し 2 X X X / 0 8 / 1 4 (木) 1 3 : 3

2 : 3 0 : 1 1 1 ID : p o a p i f 9 m 3

待ってました！

3 2 3 名無し 2 X X X / 0 8 / 1 4 (木) 1 3 : 3

3 : 0 9 : 2 2 ID : i a q h r 5 7 h s e

っていうかどうせなら他のグループも教えろください

3 2 4 名無しのピエロ 2 X X X / 0 8 / 1 4 (木) 1 3 : 3

3 : 4 0 : 2 4 ID : g l o 4 n q B D

他のグループは皆が卵グループの優待者を特定出来たら教えちゃうかも☆

さあ、みんなで優待者を当ててポイントゲットだ！

3 2 5 名無し 2 X X X / 0 8 / 1 4 (木) 1 3 : 3

4 : 1 0 : 2 1 ID : h a 3 p j g 6 b n

つまり4択問題当てたら俺のグループの優待者も教えてもらえる可能性が

3 2 6 名無し 2 X X X / 0 8 / 1 4 (木) 1 3 : 3

4 : 4 0 : 3 1 ID : p o k n 4 2 b g 6 e

尚正解はありませんでしたパターンもあるという

3 2 7 名無しのピエロ 2 X X X / 0 8 / 1 4 (木) 1 3 : 3

5 : 3 3 : 2 1 ID : e h u e w l b h 6 7

信じるも信じないも皆次第だよ☆

でも……このままだとまた落ちこぼれのDクラスに勝ち逃げされちゃうかもね

午後2時30分。そろそろ頃合いだと綾小路は行動を始めた。

これから思い描いた絵を実現させるべく、彼は下準備にと携帯で番号をタップした。

昨夜半ば一方的に託されてしまった手前、断られることはないだろうと判断した上でこれからする要求を呑んでもらうために。

「……どうしたんだい綾小路君？」

「平田、これからお前にあることをやってももらいたい。軽井沢に関することだ」

「……何かな？」

「彼女をこれから指定する場所に呼び出してくれ。呼び出す時間は一時間ほど間をおいてももらえばベストだ。それと、真鍋のIDを知っていれば教えてくれ」

「……分かった」

綾小路の要求に対して暫し沈黙した後、平田は肯定の意を示した。予想通り平田は要求を呑んだ。そして軽井沢もまた、平田の呼び出しに応じると綾小路は確信していた。勢いで別れると口にしていた軽井沢だが、平田との関係性を失えばデメリットが大きいのは彼女だ。

真鍋達に目を付けられている現状、軽井沢にとって今後も平田の存在は長い学校生活においてなくてはならないものであるはずだ。

要求から数分ほど経過した後、平田からメールが届いた。

『軽井沢さんと午後4時に約束を取り付けたよ。それと真鍋さんのIDも送るね』

文面には簡潔に内容がまとめられていた。

どうやら上手く話をまとめて呼び出しに成功したらしい。

真鍋のIDも既に入手していたようでメールに添付されている。

綾小路の要求に対して平田は申し分ない働きをしてくれた。

そしてメールの結びには彼らしい文も添えてあった。

『僕はこれ以上嘘で手を貸せない。どうか軽井沢さんを悲しませないでほしい』

その願いは、彼の想いは実現しないものだ。綾小路は理解している。

これから実行しようとしていることは、彼にとって看過できることではないと理解している。

だがそれは躊躇う理由にはなりはしない。

最終的に問題にならなければどうということはない。

一度粉々に壊してしまったとしても、そこから新たに作り上げてし

まえばいい。

継ぎ接ぎだらけの彫刻だろうと、気づかれなければいいのだ。

たとえ殺人を犯したとしても、証拠さえ残さなければ法の裁きをうけることはないのだから……

「そう。要は俺に辿り着く道筋を残さなければいいだけだ」

綾小路は予め考えていた文章を素早く打ち、チャットを飛ばす。相手は今IDを受け取った真鍋だ。そしてここから先は間違っても送り主が綾小路だとバレてはいけない重要なプロセスだった。

原則としてチャットアプリというものは各携帯につき1つしかアカウントを作ることには出来ない。

しかしルールには往々にして抜け道が存在するもので、大手SNSと連携させることでもう一つだけアカウントを持つことが出来る。もちろん普段から複数のアカウントを使い分ける生徒はいない。切り替えの手間もかかる上にそもそもメリットが薄いからだ。

しかし当然ながら利点もあり、アカウントを新たに作ることで正体を知られずに他者と連絡を取り合うことが可能になる。

「(手順さえ間違えなければ上手くいくはずだ)」

予想通り、見慣れぬ差出人からの連絡にもかかわらず真鍋に送ったチャットにはすぐに既読がつく。

『誰?』

正体不明の差出人に真鍋は至極当然の疑問を返す。

『今周りに誰かいるかな?』

『一人だけど。誰?』

『このチャットは誰にも見せないようにして。あなたのためにもね』

『だから誰なわけ?』

『同じ相手を憎む仲間、とでも名乗っておこうかな』

その文言にすぐに既読がつくが、意味を量りかねているのか暫く返信がない。

しかし綾小路は確信している。この言葉は彼女の心を揺さぶるには十分なものであるということ。

『……誰かと間違えてるんじゃない?』

『間違えてないよ真鍋さん。あなたが憎くて仕方ない軽井沢さんのことで連絡したんだ。もしかしたら相談に乗れるんじゃないかと思ってるんだよね』

『意味分らないんだけど。もう送ってくるのやめてくれない？』
真鍋は相手を警戒しているのか文章に敵意を滲ませる。

ここからは真鍋の敵意を解きほぐし懐柔するためのプロセスだ。『実は、同じクラスメイトとして、日頃から軽井沢さんには手を焼いてるんだ。だから一緒に協力して復讐したいなって思ってた君を誘ったんだよ。私は彼女と同じDクラスの人間だから直接軽井沢さんに復讐するのは難しい。だから協力してほしいの』

『意味分かんない。無視するよ？』
そう言いつつも真鍋はどこか会話を続けたがっていると綾小路は察した。

何故なら真鍋も本心では軽井沢を痛い目に遭わせたいと考えているのだから。

それは彼女が強硬手段を取って非常階段に連れ込んだことから明らかだ。

『リカちゃんは今でも軽井沢さんに怯えてる。友達として助けてあげたくないの？ あなたの顔には復讐したいって書いてあるよ。だけど実行したくても出来ないんだよね？ 昨日のことで軽井沢さんは強く警戒してる。しばらく平田君や町田君の傍から離れようとしないだろうね』

『余計なお世話。軽井沢さんとリカを強引に引き合わせる。そしたら真実が分かるし』

『そんな簡単にいくかな？ 平気で嘘をつく彼女が認めるとは思えないよ。寧ろリカちゃんが困るだけじゃないかな。軽井沢さんから心ない言葉を投げられて傷付くだけかも……うん、それだけじゃない。恨みを買ったらリカちゃんが虐められちゃうかもね』

『……だったらどうすればいいのよ。方法があるっていうの？』

次の返答次第で全てを左右すると綾小路は確信する。

自分の言葉次第で今やり取りをしている少女の今後が決まること

を。

そして目下自分が気にかけている少女の今後が決まることを。

『あるよ。あなたと私が協力すれば確実に安全に復讐できる』

『その保証は？ 私を毘にハメて学校にチクる気でしょ。サブアカつぽいし』

『もし私が真鍋さんを売ったなら、このチャットを先生に見せればいい。このアカウントは学校の携帯でしか登録できない。つまり軽井沢さんに復讐したいと言い出した私の正体は特定できてしまう。そうなれば一番の責任を負うのは私。違う？』

いくらサブアカウントだとしても、基本的に解析すれば持ち主に辿り着く。

このやり取りが、この後のことが明るみになった場合、計画を企てた人間が厳しい処罰を科せられるのは火を見るより明らかだ。

『今私が学校にこのチャットを見せたらどうする？ あなた終わりだよ』

『真鍋さんはそんなことしない人だと思ってる。信用されるには信用しないとね』

『なんとなく言いたいことは分かった。話を聞くだけ聞いてあげる』
そこから綾小路は念入りに真鍋に自分を信用させるように情報を刷り込んでいった。

如何に軽井沢がクラスの中で威張り散らしているか。如何に彼女を恨んでいるか。

しかし仕返ししたくても出来ない立場にあること。真鍋達が軽井沢と揉めていることを偶然耳にして接触を試みたこと。

嘘と少しの真実を織り交ぜて虚構の犠牲者を作り上げた。

そして学校の目が行き届かないこの期間だからこそ復讐するには絶好のチャンスであることを真鍋に認識させていった。

真鍋の中にふつつつと沸き上がる怒りを綾小路はゆつくりと確実に呼び覚ませていく。

『ここに軽井沢さんと呼び寄せる。後はそっちが勝手に話し合いでケリをつければいい』

船内の最下層のマップを添付してチャットを送る。

『ここは電波が入らないから助けも呼べない。普段は誰も来ない場所』

『なるほどね……クラスメイトのあなたなら呼び出せるってこと?』

『私のプランに乗るのか乗らないのか今決めてもらいたいの。それに呼び出した後復讐するかどうかは会ってから決めればいい。それなら問題も起きないはず、違う?』

その文章に既読がつくと、またしばらく返信はなかった。

しかしやがて返ってきた文章で綾小路はこの作戦の成功を確信した。

この後は頃合いを見て釣り糸を垂らすだけだ。

「さて、お手並み拝見だな」

『ねえ、真鍋さん』

『なに? まだなんかあるわけ?』

『いや、真鍋さんは例の掲示板の噂についてどう思ってるのかなって』

『どうもこうも、根も葉もないデマでしょ』

『もし本当にDの4人の中に優待者がいたらどうなると思う?』

『たとえばそうだとっても確率は4分の1。間違えたらクラスに迷惑をかける。リスクが大きすぎるわ』

『そうね。だからこそ皆もデマかどうか慎重に判断して軽率な行動を取ることを避けてる。けど、必ずしもそれが抑止力になるわけじゃない。違う?』

『グループの中に、情報を鵜呑みにして4択ゲームに参加する奴が出てくるってこと?』

『例えばAクラス。どのグループもだんまりで試験に参加しないみたいな態度を取ってるけど、この前の無人島のときにAクラスはボロ負けしてたよね? 案外私たち他クラスを油断させてあわよくば』

……って考えかもしれないよ。それに、Bクラスだってただの仲良しグループってだけで上のクラスにいるわけじゃない。他のクラスと裏で繋がってることだっておかしな話じゃないよね?』

『私はね、真鍋さん。今回協力してくればあなたに皆よりもっと詳しい情報を教えてもいいと思ってるの。4択問題なんかじゃない、もっと簡単なクイズにしてあげられる』

『どういうこと?』

『実は、昨日の夜に平田君が廊下で話してるのを聞いちゃったんだよね。卵グループの優待者の正体について』

『……誰なの?』

『もう分かってるんじゃない? 私が真鍋さんにこうして連絡を取ったこと。そして平田君がそんな重要な話を廊下でしちゃうくらいには心を許してる相手』

『……なるほどね。で、その話が本当だって証拠はあるの?』

『もちろん無いよ。けど、本人に直接聞けば分かるんじゃないかな?』

真鍋さんももう分かってるでしょ? アイツ、一人だとなんにも出れない奴だし』

『……そうね。良い機会だから聞いてみるわ』

「さて、賽は投げられた。あとは野となれ山となれ、だ」

報告を受けて男は微笑む。

その笑みを向ける先は一人の少女か、あるいは他の誰かなのか。

「王妃の毒林檎を喰らった白雪姫の末路は死か、あるいは白馬の王子デウス・エクス・マキナによる寵愛か……尤も、その王子さえも予め定められた機械仕掛けの人形かもしれないというのが皮肉な話だ」

無機質少年は鍍金の女王に糸を垂らす。

午後3時45分。深く鈍い音が最下層のフロアに響き渡る。機械音がこだまするこの場所に、その少女は一人でやってきた。

「なによ、携帯通じないじゃない……」

約束の時刻まであと15分。平田は何の用件で呼び出したのかは語らなかつたが昨日の今日で大体の内容は軽井沢でも簡単に想像がついた。

だからこそ、万が一のときを考えて例の新しい協力者に連絡をしようと考えたのだが……

「(電波が入らないんじゃないや、電波に連絡出来ないじゃん……)」

一旦上のフロアに戻って一報入れることも考えたが、軽井沢はここで連絡を入れることをしなかつた。

彼女は携帯が使えないと分かるとそのままポケットにしまい壁にもたれかかつた。そして目を閉じてかすかに口を動かし何かをつぶやく。

もし呼び出したのが平田以外の誰かだったら、今現在揉めている相手である真鍋達であつたなら軽井沢は間違いなく今すぐここを出て行って黛に連絡を入れただろう。

しかし呼び出したのが平田である以上、あと10分ほどでこの場に彼が現れることは確かだ。

たとえば彼がここに真鍋達を連れてきたとしても、傍に平田がいるなら安全は確保される。

万が一真鍋達が自分に何かしてこようとしても、平田がそれを見逃すはずはない。

どこまでも平和主義な彼がたとえば真鍋達に理由があつたとしても暴力を肯定するようなことはないのだから。

「大丈夫……あいつらがなんかしてきても黛がなんとかしてくれる……」

数時間前に協力を取り付けた相手は平田よりも頼りになる男子だ。本当の事情を話さなくても、こちらの思う通りの反応をしてくれた。

真鍋達をどうかしてほしいという願いに対して二つ返事で応じてくれた。

そのために彼女たちを脅せる材料を集めてくれると言ってくれた。黛は平田とは違い、平和的な解決よりも強引な手段で問題を解消してくれる。

それが分かっただけでも軽井沢にとっては救いだった。ピンチのこの状況で最高の武器が手に入ったのだから。

「最初から黛の方にしてたらこんなことにはならなかったのかな……」

思わず口をついて出たのは意味の無い仮定。

入学してクラスの面々を見たとき、軽井沢の寄生先候補は二人いた。

一人は今現在恋人役として協力関係を結んでいる平田洋介。そしてもう一人が黛だった。

二人とも見た目も性格も良く、女子からの人気もある。軽井沢にとつてどちらも寄生先にするには十分だった。

しかし彼女は結果として平田を寄生先を選んだ。

正確には黛を選ぶことは難しいと判断したのだ。

何故なら彼と親しいポジションには入学初日から一人の女子がずっと収まっていたのだから。

その女の名前は櫛田桔梗。軽井沢と同じくDクラスの女子カーブトでトップの地位にいる生徒だ。

彼女は入学当初から今日に至るまで着々とクラスでその地位を高めていった。

女子グループの中でもその存在感を確たるものとし、男子からはアイドルのような存在として認識されていた。

そしてその彼女が最も親しくしている相手こそが黛だった。

二人は入学初日に知り合い、お互いが校内で初めて出来た友人だと

いうのだ。

新入生にとってそのアドバンテージは非常に強力だ。

初日の顔合わせでその情報を聞いた軽井沢は黛を寄生先候補から外した。

既に顔見知りの異性が、同性から見ても美少女である櫛田というのが悪いと判断したのだ。

軽井沢がやっているのは恋の駆け引きでもなんでもない。

対象が寄生するのに容易であるか、寄生した後は快適であるか。判断する材料はそれだけなのだ。

ただ、今は思う。思ってしまう。

もし黛が最初にあった同級生が櫛田でなく自分だったら。

もし黛を寄生先に選んでいたら。

自分の高校生活は今よりもっと快適だったのではないだろうか。

今こんな状況に陥ったりはしなかったのではないだろうか。

そんな意味の無い仮定がこんなときに、こんなときだからこそ頭に浮かんで消えていた。

『真鍋達が最下層のフロアに入っていった』

『そうか。ならもう監視はいい。引き上げて構わない』

『止めなくていいの？ 万が一ってこともあるでしょ』

『その必要は無いよ。時間と場所から、今の状況が作り上げられた舞台だということは明らかだ。ならば、そのフロアには演出家がいる』

『……なるほどね、そいつがこの状況を作り出したってことか』

『彼がこの状況を利用して何をしようとしているのか。僕はとても興味がある』

『だったら尚更監視を続けるべきなんじゃないの？ アンタもそいつが何をするのか見たいと思うんだけど』

『彼は真鍋達に気づかれないう息を殺し、しかし意識はどこまでも鋭く張り巡らせているはずだ。君が監視していることがバレれば、彼の計画に支障をきたすかもしれない』

『……要はそいつの邪魔をするなって言いたいよね』

『君を気遣つてのことだよ。自分の計画を邪魔されたとあれば、彼が君に何をするか分からない』

『……分かった。じゃあ私はもう引き上げる』

『ああ、そうしてほしい』

「来たな……」

時刻が4時にさしかかる頃、フロアの扉が重い音を立てて開いた。気配を悟られないよう、最大限の警戒をして綾小路は物陰に隠れる。

姿を見せたのはCクラスの3人組。真鍋率いる女子達だ。そしてもう一人。

雰囲気は佐倉に似た大人しめの女子。彼女が恐らくリカなのだろう。

真鍋はリカを気遣うようなそぶりを見せながらフロアに足を踏み入れた。

そしてすぐ軽井沢の姿を見つけることになった。当然軽井沢もそれに気づく。

「……なんであんたらがここにいるわけ？」

予期せぬ来訪者にもかかわらず、軽井沢はどこか冷静だった。

そのことに違和感を覚えながらも綾小路は観察を続ける。

「あんたがここに入ってくのが見えただけ。あ、ちょうどいいから紹介するね、この子がリカ。軽井沢さんは覚えてる？」

そう言つて真鍋は背中に隠れるリカを前に引っ張り出し、両者を対面させる。

軽井沢は視線を逸らして知らないフリをしたが、態度から覚えがあるのは明らかだった。

「ねえリカ、前に貴女を突き飛ばしたのつて軽井沢さんで合ってるよね？」

「うん、この人……」

分かりきっていた答えを聞いて、真鍋は心底嬉しそうな笑顔を見せた。

一方の軽井沢は、明らかに危険な状況に徐々に焦りの表情を浮かべ始めていた。

「（後はただ見ていればいい。助けるつもりはない）」

これから起こることを、綾小路はただ傍観する。

たとえ想定以上のことが起こったとしても、割って入る気はなかった。

「リカに謝りなさいよ」

「は、誰が謝るのよ。あたしは何も悪くないのに」

「この状況でも強がるなんて結構やるじゃん。でも私にはなんとなく分かるのよね」

「……分かるって何が?」

「昨日もそうだったけど、軽井沢さんって自分の立場が弱くなると途端に情けなくなるわよね? ……もしかして虐められっ子だったんじゃない?」

「——っ!?!」

自らが隠そうとしていた事実を言い当てられてか、軽井沢は目に見えて動揺した。

「ほら凶星じゃん。やっぱりねー」

「ち、違うしー!」

下手な否定は意味をなさない。しかしもし軽井沢が演技が上手かったとしても通用はしない。

別段真鍋が観察力に優れているわけではない。

軽井沢の秘密は既に綾小路を通して漏れていたのだから。

『軽井沢は小さい頃からひどい虐めを受けていた。今の彼女にはそのトラウマが強く残っている』と。

既に解を得ている人間に何を言ったところで無駄なのだ。

「今なら土下座したら許してあげてもいいけど? 得意でしょ、土下座」

「っ！……は？…するわけないじゃん！」

逃げるように脇を通り過ぎようとするが、長い髪を真鍋につかまれ壁に押しつけられる。

復讐の舞台を整えたことで真鍋は愉悦に顔を歪めていた。

その姿は凶悪であり極悪であり、何より醜悪だった。

「人は、自分に一切の責任が降りかからないと分かると理性の枷を自ら砕く」

船の一室で一人、男は語る。

室内には誰もいないが男は確かに誰かに語りかけている。

「社会的制約を、善悪の壁を、ともすれば己自身の心でさえも破壊し突破する」

「犯罪者がよく口にする『魔が差した』という言葉がそれに該当する。その魔とは如何なるものであるか。それは悪魔の囁きと呼ばれる悪意の誘惑」

「何をして己に一切の不利益がない状況下で、己が己に囁く甘美の蜜。その蜜はとても美しく、とても甘くて癖になる極上の麻薬だ。だからこそ、状況さえ整ってしまえば人は容易く悪と呼ばれる行為に走る。それは嘗て先人達が行った実験や歴史が証明している」

男は微笑む。

定められた結果に向かって突き進む者達に親愛を以て。

「さあ、その手を振るってみるといい。そうすれば相手に痛みを与えらる事が出来る」

「その手にある爪を立ててみるといい。そうすれば相手の皮膚が裂けて血が滲む」

「その手で首を絞めてみるといい。そうすれば相手は苦しみ、藻掻き、死の恐怖に苛まれる」

「その手で刃を持つといい。そうすれば指先一つで相手の命を摘み取ることが出来る」

「さあ、その手で殺してみるといい。そうすれば君は命について知ることが出来る」

男は瞳を閉じて祈る。

定められた結果に向かって突き動かされる駒達に対して慈愛と憐憫の心を以て。

「君に刃を握らせた存在が、真の悪魔なのだとは知らぬままに」

「行ったか……」

真鍋達が立ち去ったのを確認した後、綾小路は動き出した。

軽井沢は蹲って泣きじやくっていた。

無理もない。彼女は真鍋達によって好き放題に痛めつけられたのだ。

そしてそれを見ても尚、綾小路は止めようとはしなかったのだから。

事前のアドバイスがあつたからか、真鍋達は見える部分に傷を付かなかつた。

制服の下は傷が多くあるだろうが、普段服を着ているのだからバレはしない。

頬が少々腫れていたが、冷やせば明日には引いている程度だろう。

「軽井沢」

綾小路が声をかけると軽井沢が顔を上げる。

「な、んで……!?!」

いるはずのない男が、絶対に見せたくない自分の姿を見ていると知り慌てる。

しかし何事もなかつたかのように振る舞うことは今の彼女には無理だった。

もしこのまま綾小路が立ち去っていれば、いつかは持ち直すだろう。

しかし綾小路は動かない。ただひたすらに彼女が会話が可能になるまで待ち続けた。

それからしばらくして、軽井沢は徐々に落ち着きを取り戻した。

「落ち着いたか？」

「……まあ」

綾小路は座り込む軽井沢に手を差し出すが、その手を取ることはない。

「平田君は……？」

「お前と待ち合わせがあったみたいなんだが、先生に呼ばれて行けなくなっただ。ちょうど一緒にいた俺が、代わりに声をかけにきたってわけだ」

綾小路は仕方の無い且つ納得のいく理由を述べる。

この場において真実はさほど重要ではないのだから。

「ちなみにどうして泣いてたんだ？」

「真鍋たちよ……あいつら絶対許さないっ」

先ほど自分の身に起きたことを思い出したのか、軽井沢の身体が震え出す。

情けない姿を見せたくないのだろうが、身体に染みついたトラウマを消すことは容易ではない。

「そうだ……黛っ……いっ」

痛む身体に顔を歪めながら、軽井沢は身体を起こすとフロアの扉に向かつてゆつくり歩き出した。

しかし足腰に上手く力が入らないのかその動きは酷く遅い。

故に簡単に止められる。

「待て」

進行方向先に立つことで綾小路は彼女を止める。

邪魔をされたことで軽井沢は綾小路を睨んだ。

「……どうしてよ。私はこれから行かなきゃいけないの」

「どこへ行くっ？」

「あんたには関係ないでしょ！」

「柚椰に助けを求めるつもりか？」

軽井沢のつぶやきから彼女の取る行動を予想した綾小路が先んじで問いかける。

「……だったら何？」

「柚椰がお前のことを助けてくれると？ 自分のことを嫌ってるお前を」

「ふんっ……無人島のことならもう謝ったし……！ 黛も許してくれ
た！」

「だから力になってくれるはずだ、とでも言うのか？」

「真鍋達のことはもう話してある！ 黛ももう動いてくれてるのよ
！」

「(柚椰……余計なことを)」

先ほどの違和感の正体に気づき、軽井沢に関わる新たな人間の存在に少々苦い感情が沸きつつも綾小路はすぐにその感情を消し去る。

軽井沢がまだ希望に縋っているのなら、無理矢理にでもその希望を汚してしまえばいいだけなのだから。

「その証拠がどこにある。あいつがお前のために動いているという証拠が」

「っ！ さつきからあんたは何が言いたいのよ！」

「分からないのか？」

問いかけると同時に綾小路は軽井沢を壁に押しつける。

そして無理矢理彼女と目を合わせると言葉を続けた。

「もし柚椰がお前のことを守るつもりなら、何故今この場にいない？」
「それはっ……！！ こ、ここは電波が入らないから連絡手段が無くて
……」

「柚椰は頭がいい。お前が真鍋達にリンチされることくらい予想できたはずだ。この船の中でそんなことが出来るとすれば、それは電波が届かないこのフロアだけ。となれば、このフロアに立ち入らないようお前に注意を促すことくらいはしていたはずだ」

「——っ！」

「はつきり言ってる。お前は柚椰を頼っているようだが、あいつは最初からお前を守る気なんてなかったんだよ」

そう、彼女がまだ誰かの庇護を受けられると思っっているのなら、その宿り木など存在しないことにすればいい。

その止まり木は既に、己の安息の地ではないのだと刷り込んでしまえばいい。

「平田も柚椰も同じだ。お前を助けもするが他の人間も助ける。事の発端がお前である以上、大事にすれば分が悪いことをあいつらは理解している。だからこそ、平田は穏便な手段をお前に提案し、柚椰はお前を切り捨てることで問題を解消しようとした。結局のところ、二人ともお前が寄生するには不十分な相手だったってことだ」

軽井沢も決して馬鹿ではない。

今の状況は自分にとつて危機的状況であることは確かだが、そもそも発端が自分の振る舞いから来たものだということを理解していた。

だが今更どうにもならない。

どうにもならないからこそ、選択肢を選ぶ余裕は生まれない。

「何よあんた……なんでそんな偉そうに言ってるのよ!」

「偉そう? 当たり前だろ。いい加減自分の状況を理解した方がいい。今日の前にいるのは誰だ? 平田じゃなければ柚椰でもない。俺だ。お前の過去も、平田との偽りの関係も、今も真鍋達に虐められ泣き喚いていたことも全部知ってしまった」

今日の前に居る男が、己の全てを知る者だと突きつける。

心臓は既に握られているのだと冷酷に知らしめる。

「つまりその気になればいつでも暴露してやれるってことだ」

顔が触れてしまいそうなほどの距離にまで顔を詰める。

軽井沢の顎を掴み、目を逸らすことを許さない。

「なによ、あたしに何をしたいのよ! 身体でも要求したいわけ!」

「身体か……それも悪くないかもな」

嗜虐的な笑みを作り、己が支配者であると認識させる。

「股を開け」

命令すると、軽井沢は涙を流しながらも指示に従う。

しかしその目は決して屈服の目ではない。

今この場で身体を犯されるかもしれないという状況でも尚、その目は濁らない。

「……やはりこいつは使える」

綾小路は確信した。

目の前の少女は目的のためなら自分の身体すら捧げる。

己の身を守るために身を捧げられる。

矛盾しているようでそこに矛盾はない。

「軽井沢、お前の全てを俺に見せろ」

「……ふん、人畜無害そうとか言われてたあんたも結局は変態だったってわけね」

「そうじゃない。お前が隠しているものを教えろと言っている。お前が過去にされたこと、受けてきた傷全てだ」

そう言うとき軽井沢は口を固く引き結ぶ。しかしその拘束は徐々に解け、やがて観念したようにポツポツと語り出す。

「人を虐める奴が考えるようなことは一通りされたわ……物を隠されたり壊されたり、トイレで水をかけられたり、こっさり暴力を振るわれたり。笑えば？ 虐められっぱなしの情けない奴だって笑いなきいよ」

軽井沢の言うことが真実ならば、受けた仕打ちは壮絶としか形容できなからう。

集団からそのような仕打ちを受け続ければ心が壊れても不思議ではない。

しかし彼女はこうして生きている。狂ってもいなければ壊れてもいない。

つまりそれだけの仕打ちを受けながらも彼女は立ち直ったのだ。

それは偏に彼女の心の強さなのだろう。

だからこそ、彼女を真の意味で丸裸にする必要がある。

「受けた苦しみはそれだけか？」

「え……？」

「今口にしたことだけなのかと聞いている」

軽井沢が怯えている本当の理由。

集団で暴力を振るわれる事に対して異常なまでに怯える何か。

己の身体を差し出すことを躊躇わないまでに隠し通す何か。

「お前は何を隠している」

「な、なにも……」

一瞬、ほんの一瞬だけ軽井沢が首と視線を自分の左脇腹に落とした。

それを見逃す綾小路では無い。彼は軽井沢の制服の上からその部分に触れる。

「や、やめてー!」

叫ぶ声がフロアに響き渡る。

綾小路は制服を掴み上へと引き摺り上げる。

そこにあつたのは一つの傷跡。綺麗な肌には似つかわしくない生々しく残った痕。

鋭利な刃物を用いて付けられたとすぐに分かる一線の切り傷が深く残っていた。

「これか。お前の闇は」

「う、く、うう……!」

軽井沢に残る傷は、下手すれば命に関わるものだったはずだ。

にもかかわらず、これだけの闇を抱えながらも彼女は折れなかった。

痛みを知り、苦しみを知り、絶望を知り、理不尽を知った上で尚彼女は生きた。

「なんなのよ……あんた……!」

闇を持つ物は惹かれ合う。そして、互いが互いを侵食し合う。

そしてより深い闇を持つ者が相手を飲み込むのだ。

「お前に約束してやれることが一つある。それは、お前をこれから先虐めから守ってやることだ。他のどの人間よりもずっと確実にな」

深淵を知る男は、闇を抱える少女に糸を垂らした。

『どう？ 気は収まった？』

『大分スッキリしたわ。ありがと』

『そう、それは良かった。これでアイツもちよつとは大人しくなれば
いいけど』

『まだ調子乗ってたらそのときはまた痛めつけなければいいでしょ』

『まあね。それで？ 例の噂については確かめられた？』

『ああそれね。アイツを泣かすのが楽しくて忘れちゃった。まあでも
そっちは別にどうでもいいわ。やりたいことはやれたし』

『そつか。まあ私もアイツを痛い目に遭わせたかっただけだから別に
いいや』

『じゃあもうこのやり取りは終わりね。バレるとめんどいし』

『お互いにこの履歴は消しましょ。証拠は残さないほうがいいわ』

『そうね』

辰の契約は結ばれた。

インターバルから一夜明け、特別試験は最終日に突入した。

船内では既に試験を終えてしまった生徒たちは各々好きなように過ごしており、未だ試験中の生徒はクラスメイト同士でなにやら話しかつている姿が目撃されていた。

各クラスのリーダーたる人物たちは残りのグループの動向について思索しているであろう。

既に事を進めている者や、既に事を終えた者もいるかもしれない。しかしそれは試験の結果が出る瞬間までは分からない。

今回の試験で最終的にどのクラスが、誰が一番利を得たのか。

全てはまだ、分からない。

「わああー！ また引いちゃった！ 私ってババ抜き弱すぎだろ!」

5回目のグループディスカッションでも卵グループの光景は変わらなかった。

今回も一之瀬が提案したトランプで一部のメンバーが遊んでいる。依然としてAクラスの面々は沈黙を貫いており、誰も彼らを対話に持ち込むことが出来ない以上、一之瀬の行動を咎める者はいなかった。

真鍋達の軽井沢への接触は意外なことに無かった。

しかし彼女らは時折軽井沢を、正確にはDクラスの面々をチラチラと見ているようだった。

「(どうやらアレは抑止力として機能してるみたいだな)」

今の状況を観察し、綾小路は自身の計画が順調に進んでいることを認識する。

彼には今の真鍋達の心情が手に取るように分かっていた。

彼女たちは軽井沢に例のモノを渡した相手を探している。

しかしそれを探る材料は何一つない。証拠は何一つ存在しない。

当然だ。綾小路が自身に繋がるような証拠を残さないように念を

入れているのだから。

「俺はこのままでいいのか……」

そう声を漏らしたのは綾小路の隣に座る幸村だ。

彼は落胆した様子でババ抜きをしている者たちを見つめている。

その眩きを聞き取った一之瀬が顔をあげて幸村を見る。

「暗いね幸村君。ここは一緒に遊んで鬱憤を晴らすべきじゃないかな。再戦再戦つと」

「結構だ。そんな気分にはなれない。それより……いいのか？ 一之瀬さん」

「何が？」

「このまま試験を終えて。俺は君がこのグループの手綱を握って全員との対話を持ち込むだと思っていた」

その言葉にトランプをかき混ぜる一之瀬の手が止まる。

「それは都合が良すぎるんじゃないかなあ幸村君。もし本気で勝ちたいと思っっているなら、誰かに頼るんじゃないで自分の力でまとめ上げるべきなんじゃない？」

「……分かってるさ。そんなこと」

噛み締めるように、悔しさを堪えるように呟く幸村。

その内で揺れ動く感情は己自身の無力さへの嫌悪だろうか。

それも無理はないと綾小路は察する。

これが普段の定期考査ならば、単に学力を測るだけの試験であれば幸村は大いに活躍できただろう。

しかし学力が高いだけでのし上がれるほどこの学校の仕組みは甘くはない。

人をまとめ上げる統率力、奇抜な作戦を立てられる発想力、そして作戦を確実に実行できるだけの決断力と行動力。

そういったものが無ければどうにもならないというのはこの夏休みの特別試験で嫌でも理解できたはずだ。

だからこそ幸村は己自身の実力が決して優れているわけではないと理解できてしまった。

己が無力であるからこそ、今の状況でも動じない一之瀬やAクラス

のメンバーに苛立ちを隠せないのだろう。
「(ここで折れればそれまでだ。だが、折れない限りはいずれ力になる)」

「次で試験も終わりね。綾小路君の方はどうなの？」

昼のグループディスカッションを終え、残るのは夜の部のみとなった。

屋上デッキの片隅で綾小路と堀北は最後の打ち合わせをしていた。
「特に進展はない。このまま優待者の逃げ切りを許しそうだ。そつちはどうだ？ 柚椰は？」

「柚椰君は昼のディスカッションの後から姿が見えないわ。でも、彼なら大丈夫よ」

そう語る堀北の目には信頼の色が宿っていた。

「あいつから何か聞いているのか？」

「……そうね、聞いているわ。彼がこの試験で見出した攻略の糸口を」
「それを聞いて、お前は許可したのか？」

綾小路の問いに対し、堀北は腕を組んで手すりに寄り掛かる。

「勿論初めは反対したわ。でも、一昨日彼が言っていたでしょう？」

『「ここからクラス単位での一発逆転は難しい』って。でも彼は難しいとは言っても不可能だとは言わなかった」

「柚椰の作戦は今の状況を好転させられると？」

「少なくとも、このまま無策に足掻くよりは賭けてみる価値はあると私は判断したわ」

「そうか。なにはともあれお前と柚椰がいる辰グループはこの試験の生命線だ。ここの結果次第で今後の展開も変わってくる」

柚椰が立てた作戦とやらが気になった綾小路だったが、この場で追及することはしなかった。

堀北に話を通し、彼女が了承しているのならそれは勝算のある作戦

であることは保証されている。

協力関係である自分に話を通さないのは気になるが、そもそも袖櫛と表向きに協力関係を結んでいるのは堀北なのだから筋は通っている。

「ここでわざわざ自分にも話を通せと要求する必要はないのだ。」

第一、今回の試験を勝ちに行くつもりが自分には既にあるのだから……

「あら、他所のグループを気にするなんて余裕ね。自分のグループの方はどうなのかしら？」

「問題ない。既に策は考えてる。頼もしい協力者も引き込めたからな」

「……隠し手を講じるのなら、あまり人を増やすのは得策とは思えないけれど？」

奥の手や搦め手を企てる場合、その策が漏れないようにするのは何よりも重要だ。

協力者を増やすことは成功率を上げることにつながるが、同時に情報が漏れる危険性も高めるというのは自明の理。

堀北の至極当然の指摘に対しても綾小路は堂々としていた。

「いや、今回の試験だけじゃなく今後の為にもなる。必要なピースになると俺は判断した」

「……そう。思い付きでないのならいいわ」

「意外だな。お前は関わる人間が増えるのを嫌がると思ったんだが」

「あまり勝手なことをされるのは確かに不愉快だけれど、少数であることに拘れば好機を逃すこともあると考えただけよ。時として私情よりも利害を優先すべきこともある」

「ふっ……」

「……なにかしら？」

生温かい目で微笑む綾小路を堀北はジトつと睨む。

「いや、なんでもない。泣いても笑ってもあと数時間だ。精々下手を打たないようお互い気を付けよう」

「言われるまでもないわ」

6回目、最後のグループディスプレイスカッションが始まった。残るグループは子、寅、卯、辰、巳の5つ。

そのうちの一つ、辰グループの部屋には異様な空気が漂っていた。葛城率いるAクラスの面々は依然として部屋の片隅に固まって黙秘を貫いている。

ここまでは今までと変わらない。

しかしこれまでと大きく異なる点がある。それは――

「おら黛、テメエの番だろ。さっさと出せよ」

「ふむ、じゃあ……パスで」

「ああ？ テメエこれで3連続パスじゃねえか。……8止めてんのテメエだろ」

「さあ？ そんなことを言いながら君もずっとパスじゃないか。君がパス出来るのはあと1回だよ」

「……どこぞのクソ野郎の所為で出せねえんだよボケが」

葛城達同様ディスプレイスカッションに一切参加していなかった龍園が柚榔と7ならべに興じているのだ。

龍園だけでなく彼以外のCクラスの面々もどういった心境の変化なのかこの遊びに参加していた。

事の発端はグループディスプレイスカッション開始早々に柚榔が龍園にトランプ遊びを持ち掛けたことが始まりだった。

これまでもそのようなことはあったため堀北や平田も、他のクラスのメンバーさえ別段気にかけるようなことはなかったのだが、龍園が提案に乗ってきたことで周囲の関心は一気に引き寄せられた。

何を考えているのか龍園は同じクラスの者たちにも参加を促し、結果彼らCクラス4人に柚榔を入れた5人で謎のゲームが始まったのだった。

「龍園さん……大丈夫っすか……？」

「ああ？ 俺の心配をするなんて随分偉くなったなあ小田ア」

手札を減らすことが出来ていない龍園を慮ってか彼の配下である小田が声をかけたが龍園は刺すような目つきで彼を睨んだ。

龍園の眼光に怯んだのか小田は目を泳がせて縮こまる。

そのやりとりを茶化すように柚椰がカラカラと笑う。

「ここら、自分が負けそうだからってクラスメイトを威嚇したら可哀そうだろう？ クラスメイトには優しくするべきだ」

「ハッ、俺がクラスメイトと仲良くすると思ってるのか」

龍園のその言葉に周りで見ている者も静かに同意した。

彼が一之瀬のように明るい笑顔でクラスをまとめ上げている姿など想像できない。

寧ろ不気味極まりないとさえ思えるほどに龍園の人間性とはミスマッチなのだから。

「君の在り方はよく理解しているし、寧ろ肯定的に見ているとも。上に立つ人間の在り方として、君のそれは一つの理想形とさえ言っている」

「ほう。随分と好意的だな。いいのかそんなこと言ってる。テメエんこのクラス委員はしかめっ面してるが？」

龍園の言う通り、柚椰の言葉に平田は少し顔を顰めていた。

平和を好む彼にとって龍園のやり方は乱暴極まりないもので、到底受け入れられるものではないのだから。

平田だけでなくAクラスの葛城もまた、言葉を発さないまでも柚椰の言葉に眉間に皺を寄せている。

「多数の人間を束ねて統率する方法はいくつか存在する。一つは有無を言わせない圧倒的な魅力、俗にカリスマと言えるものを以って支配する。一つは善も悪も、全ての感情を受け入れ、その上で妥協点を探すことで結束を促す。そしてもう一つは——」

「反抗する奴を徹底的に潰して黙らせる、か？」

「その通り。勿論それ以外にも方法はあるだろうが、結局は民意によって選ばれるか、自らを選ばざるを得ないようにするかどちらからだ」

「だろうな。歴史の教科書を開けばガキでも分かりそうなもんだろ」
「だからこそ俺は、君や一之瀬、そして坂柳を心底尊敬しているよ。見えざるシステムの存在に気づき、来たる戦いに備えて城を固めた。そこへ至る理由は違えど、それを成しえた以上、君たちは支配者としての資質を十分に備えていると言っている」
「そういうテメエはどうなんだ？ テメエもシステムの存在にはとつとくに気づいてたんだろ？ にも拘らずテメエはクラスを支配することもせず、こうしてのうのうとゲームに興じてる。一体何を考えてるのか教えてもらいたいねえ」

ともすればこの場にいる全員が気になっているであろう事象について龍園は指摘した。

目の前の男は優秀な人間だ。

その頭脳は各クラスのリーダー達と引けを取らないほどに高い。彼がその気になれば、Dクラスのリーダーになることなど造作もないことだったはずだ。

にもかかわらず彼はそうしなかった。
そこに一体どういった意図があるのか、それはクラスメイトの平田や堀北でさえ伺い知ることは出来ていない。

「君も坂柳も、俺を過大評価し過ぎていてね。そもそも俺は人の上に立てるような人間じゃない。その点において、俺は君たちには及ばないと自覚しているからね」

「フン、そういうことにおいてやるよ」

暗にこの場で素直に話す気はないことを感じ取った龍園はそう言っただけで話を打ち切った。

「ところで、今日で試験は最終日だ。残っているグループはここを入れて5つ。設けられているグループディスカッションも今回が最後。これが終われば試験も終わることになる。となると……そろそろどのグループでも優待者が誰か明かしている頃合いだろうね」

柚椰はそう言って室内にいるグループの面々を見回す。

同時に彼らもまた、お互いの顔を見合わせて何かを窺う素振りを見せ始めた。

試験のルール上、このメンバーと顔を合わせるのこれが最後。

もし結果1を目指すのであれば、このタイミングで優待者が名乗り出ることは当然と言えば当然だった。

「それもそうだな。おい葛城、テメエらAクラスは結果1か結果2狙いなんだろう？ 優待者に名乗り出てもらわなくていいのか？」

挑発的な笑みを以って龍園は問いかける。

しかしその挑発に乗るほど葛城も馬鹿ではない。

「その挑発には乗らんど。確かに話し合いの場は今回で最後。これが終わり次第試験は終わり、30分後に解答時間が設けられている。だが、裏切ることで導かれる結果3と結果4に関してはその時間帯でも行えるということをおぼわしているわけではないだろう？」

「確かに。今この場で優待者が名乗り出て、全員で結果1を目指すうとしても抜け駆けする奴がいなくても限らない。このグループの優待者が誰であれ、それが他クラスであったなら裏切る可能性は十分にある」

葛城が指摘したことを神崎も理解しているのか龍園を鋭く睨みつけている。

今この場において、その裏切りを行う可能性が最も高い男こそが龍園なのだから。

「でも、いつまでも疑い合っていたら結局当てずっぽうで優待者を選ぶしかなくなる。先に裏切っても間違ってしまうえばクラスポイントが減ってしまう。時間になって解答をしても間違ってしまうえば優待者の一人勝ちだ。この試験に勝つたとは言えないよ」

平田は冷静なのか、この試験が疑心暗鬼のまま終わることのデメリットを指摘した。

全てを疑い、二の足を踏んでいれば結局は優待者が、ひいてはどこかのクラスが得をすることになる。

それは勝ちへのチャンスのみをみすみす逃すことと同義だ。

葛城と神崎もそれは理解しているのか一層難しい顔をした。

「ククッ、まあお前らがこのまま運任せでやるつもりだっていうなら俺は構わないぜ？ 生憎とこっちはもう随分とポイントは稼がせて

もらってるからな」

ただ一人、龍園だけは余裕があつた。

それがブラフである可能性はあるだろうが、そうでないとも言い切れない。

予想を遥かに超えるペースでグループが消えていつている現状を加味すれば、龍園の言っていることが本当である可能性は十分にあるのだ。

もし仮に、既に終了しているグループが全てCクラスの裏切りによつて成されたものであつたなら、Cクラスはかなりのポイントを持っているのだから。

「なら、念書でも書いてみるかい？　ここにいる全員で結果1を目指すこと。そして決して裏切らないことを誓わせるんだ」

「柚椰君、それは意味がないつてこの前言つたじゃない」

柚椰の提案に堀北が異を唱えた。

この試験の仕様上裏切り者が分からないのだから、たとえば契約違反をしたとしてもペナルティを課すことができない。

つまり契約による解答強制は事実上意味をなさないのだと既に分かっているはずなのだ。

しかし柚椰もそれを理解しているのかさらに条件を付け加えた。

「大丈夫だよ。優待者の情報の真偽の確かめ方を踏まえれば、ペナルティを課す方法はあるんだ」

「どういうことかしら？」

「この場にいる全員の携帯を見せ合えばいい。そうすれば優待者の確実な情報が手に入る」

「！　確かに……でも、ペナルティの課し方はどうするつもり？」

「もし結果3が起こつてしまった場合、裏切つたのがどのクラスであれば、優待者が属するクラスのメンバー全員に残りのメンバーがポイントを支払えばいい。クラスポイントは上のクラスに上がるための貴重なポイントだからね。プライベートポイントで考えれば……一人当たり50万ポイントはどうかだろうか？」

「「？」」

柚椰の発想は堀北を始め、この場にいる者のほとんどを驚愕させた。

彼が提案したのはとどのつまり連帯責任。

誰か1人が裏切れば、優待者のクラス以外は全員が不利益を被る仕組みだ。

加えてペナルティの額も額だった。

50万プライベートポイントは結果3によつて裏切り者が得るポイントと同額だ。

つまり――

「裏切り者がプライベートポイントを得ても、ペナルティで全部持っていられるようにするってことか……」

神崎は顎に手を当て考えていた。

この条件ならば、もし裏切り者が現れたとしても、裏切り者自身には何のメリットも生まれない。

クラスポイントを50得たとしても、月初めに貰えるプライベートポイントは5000ポイントにしかない。

たった5000ポイントのために50万ポイントを払う馬鹿はいないだろう。

万が一裏切りを強行したとしても、そのたった50ポイントですぐさまクラスが変動する可能性も低い。

落としてどころとしては上等だった。

「裏切り者が出たとしても本人はポイントを得ることが出来ない。それどころか連帯責任でクラスメイトにも迷惑をかけることになる。勿論試験の仕様で裏切り者の正体は分からない。でも、結果としてクラスに不利益を与え、他クラスの人間にもデメリットを齎した裏切り者の存在をここにいるメンバーは許すかな？ 間違いなくその裏切り者を徹底的に炙り出すだろうね。それこそどんな手を使つても……さて、その裏切り者はこの場にいる全員を敵に回す覚悟が果たしてあるのかな？」

その言葉にこの場の空気が張り詰める。

彼のそれは、ともすれば脅迫とも取れる言葉だったのだ。

裏切り者はこの場にいる全員、つまり各クラスのリーダー格を敵に回すということ。

それはクラス間の全面戦争の引き金を引くことになるのだ。

たとえ穏健派の葛城だろうと、調和を重んじるBクラスだろうと、明確な敵の存在を放置するほど昼行燈ではない。

ましてや龍園を敵に回すなど、想像しただけで震え上がるだろう。

それこそ1学期の暴行事件のときと同じく、学校が観測できないタイミングで凶行に走る危険性さえ孕んでいるのだ。

この試験の始めにその優秀さが明かされた柚椰もまた、敵に対しては何をするか分からない。

彼の脅しは抑止力として十二分に機能していた。

「ふむ……確かに黛の案は良く練られているな。流星の裏切り者も他クラスを敵に回すほど恐れ知らずではあるまい」

「そうだな。もし裏切ればクラス間の争いを激化させる原因を作るだけでなくクラス内の不和も生む。そんな可能性を知って尚、裏切ることにメリットは感じられないな」

葛城と神崎はこの提案に興味を見出していた。

結果1を確実に導き出せる方法が見えてきたのだからこれを拒否する理由もない。

柚椰の案に肯定的なのは平田や堀北も同じだった。

「ククッ、どうやら結論は出たみたいだな。それにしても、連帯責任とはテメエもエグいことを考えるじゃねえか」

「この条件なら、君達Cクラスも裏切ろうとは考えないだろう？ 君以外の3人の内の誰かが裏切ったとしても、まず初めに喰らうのは君の制裁になるだろうからね」

「まあな。不要な争いを招いた奴には容赦しねえ。この条件ならクラスポイントも稼げて結果的にはマイナスだからな」

龍園の言葉と同じクラスの3人は震え上がった。

もし裏切れば支配者である彼の制裁を受ける。

その一点だけでも抑止力として十分だろう。

Cクラスを抑えられるという点だけでもこの作戦は他のクラスに

とっては必勝法なのだ。

「じゃあ早速契約書を作ろうか」

柚椰は取り出したルーズリーフにペンを走らせる。

【契約書】

辰グループは全メンバーが協力して結果1を目指すこととする。

優待者の情報並びに本契約内容はこのグループ内のみで共有することとし、他の生徒に漏らすことは禁止とする。

解答は試験のルールに定められた時刻である21時30分から22時以内に行う。

グループの結果が結果3だった場合、優待者が属するクラス以外の全クラスのメンバーにマイナス50万プライベートポイントのペナルティを課すものとする。

課せられたペナルティによって発生したプライベートポイントは優待者並びに優待者の属するクラスのメンバー全員に均等に振り分けるものとする。

本契約に同意した後には契約の破棄は認めない。

「こんなところかな。全員確認してほしい」

契約書を書き終えると、柚椰はそう言ってルーズリーフをテーブルの上に置いた。

その文面に全員が目を通した。

葛城も、神崎も、龍園も、皆契約書に記された内容を確認していく。

そして全員が確認し終えたところで署名欄に柚椰が最初に名前を書き込んだ。

続いて堀北と平田が、その後は葛城達Aクラス、そして神崎達Bクラス、最後に龍園率いるCクラスのメンバーが署名した。

「グループディスカッションが終わった後、これを先生にも見せに行くつもりだ。一応学校側の確認も必要だろうか？」

「そうだな。無人島の時ならまだしも、今回は教員の目を通させた方がいいだろう」

柚椰の念の入れように葛城は感心しているのか腕を組んだ。

「それと、葛城と神崎、それと龍園くんは携帯のカメラで契約書を撮影してほしい。俺がこれを提出しに行く間に、勝手に条文を書き換えたとしてもすぐに分かるようにね」

「念には念を入れて、というわけだな」

「分かった」

「ブン」

3人は携帯を取り出すと契約書にカメラを合わせて撮影をした。

これによりもし柚椰が契約内容を改変すればすぐに明るみになる。

元の契約書を写した写真を各クラスの3人が持つていればそれは確かな証拠となりうるのだから。

「さて、契約は結ばれた。次は優待者の正体を明かそうか」

その呼びかけに全員が携帯を取り出し、テーブルに集まった。

十数分後、最後のグループディスカッションが終了した。

快活少女は侮れない。

時間は少し戻り、6回目のグループディスカッションの開始直後。辰グループ同様卵グループもまた、一つの議題について話し合いを始めていた。

「この三日間、僕はどうすれば結果1を勝ち取ることが出来るのかをずっと考えていました」

口火を切ったのはBクラスの浜口。

彼、ひいてはBクラスのメンバーは結果1を目標にこの試験に臨んでいた。

しかし他のクラスとの足並みが揃わず今の今まで手をこまねいていた。

「皆さんも既にご存じですよ？ 昨日から広がっている一つの噂。このグループの優待者がDクラスに存在するという書き込みについて」

その話題に一同の緊張が高まる。

インターバルとして設けられた昨日の深夜に突如として掲示板に投下された書き込み。

このグループの優待者の存在を示唆する内容が記されたその書き込みは瞬く間に生徒達の間で噂になっていた。

それが真実であるか、あるいはデマであるかの判断は出来ない。

ただ書き込みがされたというだけで証拠という証拠がないのだから。

「今現在こうして話し合いが執り行われていることから、この場にいる誰一人としてあの掲示板の書き込みを鵜呑みにして行動しなかったことが分かります。当然ですよ。もし嘘だったら結果4を引き起こしてクラスに不利益を与えてしまうのですから。だからこそ誰もが軽率な行動をしなかった。そんな思慮深い皆さんだからこそ、僕の考えを聞いてほしいです。このグループ全員で結果1を目指す方

法が一つあります」

「――！ 本当か浜口」

諦めていた幸村を始めとする一部の生徒に希望の光が灯る。

「現状、どのグループもクラスの垣根を超えた協力を取り付けることは出来ていないと考えています。しかしそれはお互いに手の内を晒していないからこそ成しえていないからだと思うんです」

「どういうことだ？」

「今から僕はこの場にいる全員に携帯を見せます。携帯には学校から送られてきたメールが入っています。優待者に関するメールは内容を書き換えることも削除することも転送することもルールで禁止されている。よって、そのメールは真実であるということが保証されています。つまりメールを見れば僕が優待者なのかそうじゃないのかが一目で分かるはずです」

「なるほど。つまり浜口君のアイデアはグループ内でメールを見せ合うことで優待者を見つけてることだね」

一之瀬がそう尋ねると浜口はコクリと頷いた。

確かにそれは一見すると良い作戦に感じられる。

しかしそれは誰もが成立しないと理解している案だった。

「優待者が分かったところでどうする？ 見せた瞬間に裏切られるのがオチだろ」

町田がそう言うようにAクラスの面々は呆れたような顔をしていた。

「優待者にとってはメールを明かすことは裏切られることへのリスクを高めます。しかし、優待者でない人間にとってはなんのデメリットもないはずです。この話し合いが終わると同時に試験は終わる。ここで動かなければ最終的には運任せで優待者当てをしなければならぬ。町田君、それは果たしてAクラスが勝ったと言えますか？」

「……」

「ルール上、優待者がいるクラスには解答権がない。もし仮に優待者がいるクラスが結託して優待者を守ろうとするのなら、この作戦には乗ってこない。しかし結果として優待者を絞り込むことは可能のは

「ずです」

「だが根本的な問題は解決していないぞ。裏切りを確実に防ぐ手段が見つけられない以上、誰が先に裏切るかの勝負にしかならない」

「ならば町田君は参加しなければいいだけの話です」

浜口はそう言い切り、自らに届いたメールを公開した。

「浜口君の意見に賛成だ。俺も見せることにする」

同じBクラスの別府も浜口に続く形で携帯を全員に見せた。

「（どうやらBクラスのプランは俺と同じようだな）」

綾小路が考えていた作戦とBクラスが打ち出してきた作戦の過程は一致していた。

しかしそこに一体どのような思惑があるのかは分からない。

自分と同じようにBクラスもまた、何かを考えているのかもしれない。かかった。

「良い作戦だと思っけどね。私も携帯を見せることに抵抗はないよ」

一之瀬も例にもれずスカートのポケットから携帯を取り出した。

彼女のその行動は綾小路にとって好機だった。

「お前たちが賭けに出るなら、俺もその作戦に乗ろうと思う」

一之瀬が携帯を見せる前に、綾小路は自らの携帯を差し出した。

しかし当然それは彼の仕掛けたトラップだ。

今彼の手にある携帯は彼のものではない。

「綾小路君、いいの？」

「ああ。話し合いが得意じゃない俺に出来るのは真実を見せることくらいだからな。浜口の話に乗るしかない」

「正気か綾小路。こんな露骨な作戦上手くいくはずないだろ！」

幸村が止めようとするが、それを振り切り綾小路はメールを見せた。

そして彼が優待者でないことを知らしめる。

無謀に映るその行動には当然ながら意味がある。

鉄壁の牙城を崩す一点の穴を開ける一手。

「うん、確かに綾小路君も優待者じゃないみたいだね」

「分かった。私も賛成する」

未だ浜口の作戦に難色を示す者が多い中、予想外の人物が新たに賛同の意思を示した。

それは今まで一貫して沈黙を貫いていた伊吹濤だ。

「正気？ 私たちに得なんて何も無いじゃん！」

リスクを冒すことに反対の意見を出す真鍋。

しかし伊吹の意志は固かった。

「優待者がいないクラスにとって、このまま試験が終わることはデメリットにしかない。上のクラスに追い付くにはリスクを冒しても攻めなきや何の意味もない。それだけのこと」

「それは——」

「あんたも優待者じゃないなら見せられるはずよね。携帯」

ある意味脅しとも取れる伊吹の言葉に真鍋は今度こそ黙り込んでしまった。

そして観念したように携帯を開示し、他のCクラスの面々も続くように携帯を見せ始めた。

Cクラスに優待者が存在しないということこれで明らかになる。そしてまた一人、この作戦に参加する者がいた。

ストラップの付いた携帯を取り出して全員の前に差し出したのは軽井沢だ。

「お前もか軽井沢。お前もこの作戦に乗るつもりなのか？」

「あたしは自分の為にやるだけ。ポイントが貰えるなら貰いたいだけよ」

彼女のメールには優待者ではないと書かれてある。軽井沢も白だ。

「えつと……拙者はどうすれば良いでござる？」

「自分で考えろ外村。これは強制じゃない。あくまで自主的なものだからな」

状況が刻々と変化する様に困惑するように外村は綾小路に助けを求めるが彼はあくまで外村の意思に委ねた。

「ふむ……まあ長いものには巻かれるといますからな」

流れに乗るべきだと判断した外村が携帯を見せようとしたが、その手を幸村が掴んで止める。

「……本当に見せることが正しいと思ってるのか？」

「あんたさつきから、何びくついてるわけ。もしかして優待者？」
ずつと難色を示す幸村に伊吹が突っ込みを入れる。

その瞬間幸村の表情が硬くなったのは誰にでも分かっただろう。

「うわ、マジ？」

「いや、幸村は優待者じゃない。前に優待者じゃないと聞いているからな」

慌ててフオローを入れたのは綾小路。しかしあまりに露骨なその行動に一部からは失笑が漏れる。

「それを信じろって？ こいつが嘘ついてるだけかもしれないでしょ」

当たり前の指摘をする真鍋。彼女は完全に幸村を疑っている。

否定すればそれだけ疑いは強くなる。

しかし何かアクションを起こすことは出来ない。

何故なら幸村は――

「結論を出すのは早いよ。幸村君にだって考えはあるんだから」

一連の様子を見ていた一之瀬は改めて携帯を全員に見せた。

「ちよつと流れに乗り遅れちゃったけど、私も見せるよ」

メールには優待者ではないことが記されている。

これでBクラスにも優待者はいないことが証明された。

残るのはAクラスと幸村のみだ。

「……」

幸村の沈黙の意味が分からないほど、ここにいる生徒たちは鈍感ではない。

そしてAクラスの町田達も、いつの間にか幸村の様子を窺うようになっていた。

「……分かった。見せる。だがその前に一つ、約束してほしい」

観念したように携帯を出した幸村だが彼は全員を見回してそう前置きした。

「裏切らないでほしい。この場にいる誰も。特にAクラスは携帯を出して全員が見えるようにテーブルに置いてくれ」

代表する町田にそう声をかけるが、彼は鼻を鳴らし当たり前の言葉を返す。

「意味が分からないな。どういうことだ？」

「そのままの意味だ。それ以上もそれ以下もない」

「……まあ、いいだろう。置くくらいなら構わない」

町田がそう言うとAクラスの面々はそろそろと携帯をテーブルの上に乗せた。

それを確認した後、幸村は表情を曇らせながら手を動かした。

「……嘘をついてすまなかった綾小路」

そう小さく呟いて、幸村はメールの文面を見せた。

その文章を見て驚いたのはDクラスのメンバーだろう。

「俺が優待者だ……」

全員とは違う一文が書かれたメール。

「ゆ、幸村殿が優待者でござったか……!」

信じられないと言うように外村が驚愕している。

この状況はDクラスにとって最悪だった。

しかしこの状況こそ綾小路の狙いだった。

何故なら幸村こそが、彼が携帯を交換していた相手なのだから。

軽井沢も心底驚いているようで表情に動揺が見て取れた。

幸村が優待者であるはずがない、そんな風に思っていた彼女にしてみれば無理もない。

「メールは本物、のようだな。他のメールを見る限り幸村のもので間違いないさそうだ」

町田が許可も取らず他のメールまでチェックして真相を確かめた。

「学校からのメールに手を加えるのはルール違反。つてことはこの文章も偽物である可能性は0だね」

一之瀬は冷静に状況を分析していた。

幸村が優待者であるということは最早疑いようもない。

「……これで全員が答えが俺だと分かっただろ。たどり着ける答えが出てきたはずだ」

全員で結果1を達成すれば全員が最低50万ポイントを得ること

が出来る。

達成不可能と思われた結果1に結び付くかもしれない。

幸村の言葉に一之瀬は一度頷き、何より強くAクラスに願ひ出る。「お願い。幸村君の勇気を無駄にしないためにも協力して。裏切らないでほしい」

「俺たちは元々葛城さんの指示で動いている。勝手な真似はしないさ」

そう答える町田だが、試験終了から解答時間までは30分ある。

その間、自分たちの仲間だけでなく他クラスの生徒を信頼しなければならぬ。

「俺は信じる。ここまできたら、全員を信じるしかない」

願うように紡がれた幸村の言葉を全員が受け止める。

彼の想いを汲み、全員で勝利を分かち合うことが出来るだろうか。

「(いいや、ありえない)」

綾小路は確信していた。

間違はなく、誰かが裏切ると。

そしてその瞬間、携帯を入れ替えた自分達Dクラスの勝利が確定する。

同じように幸村も確信しただろう。

彼は笑いを堪えるのに必死であろうと察する綾小路。

だが、喜びもつかの間、幸村が手にしていた携帯電話が鳴り響いた。誰よりもその音に驚いていたのは幸村だ。

慌てて携帯を止めようとするが上手くいかず手から落とす。

偶然にもその画面が表を向いたまま皆が見ている前に転がっていく。

画面に表示された発信者の名前は『一之瀬』。

その本人は目の前で携帯を耳に当てながら、真剣なまなざしで幸村を、そして綾小路を見ていた。

「何をしているんだ一之瀬。今幸村に電話をかける意味はないだろ」

怪訝そうな顔で一之瀬を見る町田。

しかし一之瀬はそれが意味のある行動であったと確信して静かに

通話を切る。

「ううん、意味はあったよ。これではつきりしたことが一つある」
「なに？」

眉を顰める町田を横目に、一之瀬は幸村に問いかける。

「その携帯、幸村君のじゃないよね？」

「っ！ な、なにを言ってる——」

「だって、私と幸村君って連絡先交換してないんだもん。電話が繋が
るはずがないよ」

彼女のその言葉に一同に衝撃が走る。

先ほど幸村の携帯には確かに「一之瀬」と発信者の名前が表示され
ていた。

もし連絡先を交換していないのだとしたら、固有名詞が表示される
のはおかしい。

では一体どういうことか。

「その携帯、綾小路君のだよ？ 私がかけた番号は君と交換した
番号なんだから」

一之瀬が今コールした番号。それは以前に交換した綾小路の携帯
番号だった。

それは一つの事実を確定させる。

「個人メールの送受信履歴や着信履歴だけを移して、あたかもそれが
幸村君の携帯だと思い込ませる。手間はかかるけど携帯の中身を入
れ替えることはルール違反にならないからね」

それを聞き、町田は血相を変えて一之瀬と綾小路を見やる。

「幸村君、ゴールが見えてきたからかちよつと様子が変わったからさ。
もしかしたらって思ったんだよね」

「……」

幸村は顔面蒼白といった様子で呆然としていた。

「携帯を入れ替える作戦は私たちも思いついてた。でも、学校から支
給される携帯には一個だけ弱点がある」

「弱点だと……？」

町田がそう尋ねると一之瀬が続ける。

「SIMロックって言えば分かるかな？」

「——！なるほど、そういうことか……!!」

一之瀬の言わんとしていることが理解できたのか町田は驚いている。

「例えば私の携帯に入ってるSIMカードと町田君の携帯に入ってるSIMカードを入れ替えると、どっちの携帯も使えなくなって通話をすることは出来ないんだよ。だから誰が携帯を入れ替えたとしても電話を鳴らせば持ち主が分かる。このことに気づいていたから浜口君も携帯を見せ合うプランを提案したってこと」

つまり嘘を見抜く方法があつたからこそ、Bクラスは強引な手を打つたのだ。

一之瀬によつて綾小路と幸村の携帯が入れ替わっていたことが明らかになつてしまった。

「SIMロックを利用して確認されることまでは想定してなかったかな？」

その時丁度1時間の終了5分前を告げるアナウンスが入つた。

5分以内にグループを解散させ、自室に戻るよう命じられる。

「くそっ！」

幸村のその叫びは本物。そこに嘘はない。

「残念だったな幸村。だが、良い作戦だった」

町田達Aクラスはニヤニヤと笑い、作戦を見破られた幸村を見る。

同時に作戦に加担していたと思われる綾小路にも一度視線を移した。

「これで優待者が綾小路君だつて確定した。全員で裏切らずに結果1を勝ち取るって約束してくれないかな？」

「ああ勿論だ。信用してくれ。行くぞ」

一之瀬の申し出に応じるような言葉を返し、町田はAクラスのメンバーを連れて退出した。

「Cクラスの人たちもお願い。30分我慢してくれるだけでいいから」

真鍋達はそれとなく頷き、同じように退出していく。

「作戦に乗った俺が間違ってた。最悪だっ」

幸村は交換していた携帯を綾小路に返し、彼が持っていた携帯を掴んで足早に部屋を後にする。

続々と退出者が続き、最後に綾小路と一之瀬だけが残った。

「皆を信じるしかないね」

「ああ」

「……綾小路君は随分と落ち着いてるんだね。不安はないの?」

「俺にもう出来ることは残ってないからな。部屋に戻ってる」

これ以上ここに残る理由はないと踵を返す綾小路だったが、一之瀬はそんな彼の肩に手を置き呼び止めた。

「ねえ、ちよつと待って」

その瞬間、両者の空気が張り詰める。

「この作戦は誰が思いついたの?」

「……堀北だ。後手に回っていた俺たちが打てる起死回生の一手だつてな」

「……そう。じゃあ堀北さんに伝えてもらえないかな。作戦は成功だったよって」

「大失敗の間違いじゃないのか。現に一之瀬に見破られた」

「あはは。同じ作戦を思いついてたつてのは想定外だったかな」

「悪かったな。騙すような真似して」

「私たちが勝手に作戦執行しちゃったし、お互い様だよ」

「そう言ってくれたら堀北も安心するだろ」

お互いに中身の無い会話を繰り返り広げる中、話を打ち切って綾小路は部屋を後にしようとした。

「わ、ちよつとちよつと。まだ肝心の話が済んでないよ」

「肝心の話?」

「もー、意外と人が悪いよ綾小路君。確かに携帯にはSIMロックがかかっている。でも、ロックを解除する方法もある。星之宮先生に確認したらポイントさえ払えば簡単に解除できるって言ってたから」

その言葉に綾小路の脳内に微かに電撃が走る。

「嘘が暴かれたとき、人は新たに浮かび上がった事実を真実だと錯覚

する。でも、事実と真実は必ずしも一致するわけじゃない。幸村君と綾小路君は用意されたトラップ。真実はその奥にある。違うかな？」
「(やはり一之瀬は侮れないな)」

つまり一之瀬は真の意味で綾小路の作戦を見抜いた。

罠を罠と悟らせないために張った別の罠。二重のトラップ。

綾小路が所持している優待者の携帯。それは綾小路のものではない。

一之瀬が語ったように、彼は携帯を完璧に入れ替える方法に至っていた。

SIMロックの解除。ポイントを支払うことで達成できるひと手間。

そのひと手間さえかければ真実を霞の中に隠すことが出来る。

綾小路が打ち出した起死回生の策。

それは昨日軽井沢という駒を手に入れたときに実行に移されていた。

このグループの優待者こそ新たに駒に加えることに成功した軽井沢。

平田から事前に情報を仕入れていた綾小路は彼女を支配した後すぐに行動を開始した。

彼女の携帯と自身の携帯をSIMロックを解除した上でSIMカードを交換し、同時に優待者のメール以外の一切の中身を入れ替える。

こうすることで綾小路は電話番号を持ったまま軽井沢の携帯を使うことが出来る。

優待者のメールは転送していないためルールにも引つ掛かることはない。

そして次に優待者のメールを入れている彼の携帯と幸村の携帯を交換する。

ここは幸村の携帯にあった過去の履歴を入れ替えるだけでいい。

幸村の役割は『綾小路の携帯を持っていると錯覚させる』ことなのだから。

綾小路は幸村に自分が優待者であると嘘をついた。

幸村はそれを信じきっていたからこそ、綾小路が優待者だとバレた際に呆然としていた。

本当に綾小路が優待者だと思っていたが故に、幸村の反応に嘘はなかった。

敵を欺くなら味方からとはよく言ったもので、彼は綾小路に利用されたのだ。

こうすることで万が一携帯の入れ替えに気づいたとしても、綾小路という偽の優待者が明らかになるだけ。

真実は闇の中。軽井沢恵という優待者には絶対に辿り着けない。

「もしDクラスに優待者がいなかったらどうしたの？」

「クラス内で既に優待者だと判明している人間に携帯を借りて隠し持っておく。そして優待者だと名乗り出ればいい。そうすれば本当の優待者を炙り出すことも裏切りを誘発させることも出来る。それはお前も考えてたはずだ」

「えへへ、バレちゃってたか」

彼女は照れ臭そうにポケットから携帯を二つ取り出した。

片方は自分のもので、もう片方が恐らくBクラスの優待者のものなのだろう。

「ここからは私の予想なんだけど、本当の優待者は——」

一之瀬は自らの携帯に短くメッセージを書き込む。

「軽井沢恵さん、だったりして」

彼女が見せたのは学校へ送るための裏切りメール。

その指をタップするだけでメールは送信され、このグループは結果3で終わる。

しかしその直後、二人の携帯が同時に鳴った。

『卵グループの試験が終了いたしました。結果発表をお待ちください』

携帯に届いたのは学校からのメール。

それは卵グループの中に裏切り者が出たということ告げるものだった。

「あーあ、やっぱり誰かが裏切っちゃったか。AとC、どっちだろうね」

「……どうして軽井沢だと思った」

「幸村君と同じ理由かな。ちよつと挙動不審だったし、今まで気にかけてなかった綾小路君のことをチラチラ見てた。まあでも、証拠はないからどの道メールは送れなかっただろうけどねー」

「どうやら綾小路が立てていた作戦は完全に見抜かれていたらしい。どうしてさつき言わなかったんだ？ 少なくとも嘘は暴けただろ」

その問いに対して一之瀬は笑う。しかしその笑みは決して優しいものではない。

「AかC、どっちのクラスが間違えても私たちにとってはプラスだからね。私は最初から結果1も、裏切って勝ち取る結果3も選ぶつもりはなかった。浜口君も別府君も、そして私も優待者じゃないって分かった時点で、どこかのクラスに裏切らせることしか考えてなかったよ。多分裏切ったのはAクラスかな？」

「町田か」

「ううん、森重君だよ。彼は葛城君の派閥の人間じゃない。だから葛城君に従う理由もない。ポイントを得られるチャンスがあれば飛びつくかもって思っただけ」

そう言つて一之瀬は綾小路に背を向けた。

「綾小路君って結構凄いなだね。堀北さんも黛君も、そして君も。Dクラスには侮れない人がいっぱいいるなー」

「やめてくれ。俺は二人に比べたら凄くなんてない」

そう言いながら綾小路は内心で一之瀬に対する評価を改めた。

彼女は決して昼行燈ではない。

徹底したリスク管理と確かな戦略を練られるだけの頭脳が確かに存在する。

ただ周囲と上手くやっていけるだけでBクラスのリーダーが務まるはずもなかったのだ。

「(柚椰が言っていたように、一之瀬のようなタイプこそ油断ならないのかもな)」

「それじゃあ、私も部屋に戻るよ。禁止事項に触れちゃうと大変だからね」

そう一之瀬が言いかけた時、再び二人の携帯が一斉に鳴った。

しかも先ほどのように一度ではない。二度、三度。

そして最後に四度目の音が鳴り響いた。

一之瀬は驚愕したように急いで携帯を確認する。

綾小路もまた携帯を確認し、受信したメールを確認した。

そこには似たようなメールが全部で四通。

『子グループの試験が終了いたしました。結果発表をお待ちください』

『寅グループの試験が終了いたしました。結果発表をお待ちください』

『巳グループの試験が終了いたしました。結果発表をお待ちください』

『辰グループの試験が終了いたしました。結果発表をお待ちください』

今回の特別試験は解答時間を待たずして全てのグループが試験終了を迎えたのだった。

彼と無機質少年は相對する。

22時45分。深夜の海を船は進む。

船内のカフェにはそろそろと人が集まり、大盛況となっていた。早い段階で席を確保していた綾小路の元に一人の少女が近づいてくる。

「……お待たせ」

遠慮がちにやって来たのは、軽井沢恵。その表情はどこか今までとは違う。

「遅い時間に呼び出して悪かったな」

「ううん、それはいい……」

特に会話を交わすこともなく、二人の間に無言の間が続く。

しかし軽井沢が様子を窺っているのが分かった綾小路が口を開く。

「どうした？」

「あ、えつと……上手くいったのかなって」

「打てる手は打った。後は結果を待つだけだ」

「そりゃそうかもしれないけど……」

「二人ともここにいたんだね」

背後から近づいてきた存在に軽井沢はビクリと肩を震わせた。

彼女がそう反応するのも無理はない。

やってきたのは先日喧嘩別れになってしまった平田だったのだから。

「二人とも試験お疲れ様。座ってもいいかな？」

「ああ」

軽井沢は居心地が悪そうに目を伏せるが拒絶の意志は感じられない。

そしてもう一つ、彼らのテーブルにやって来た者がいた。

「やあ、これはまた珍しい組み合わせだね。座ってもいいかい？」

そう言ってやって来たのは柚椰だった。

彼がやって来たことで軽井沢がさらに縮こまる。

なにせこのテーブルには喧嘩別れした彼氏と、彼氏の代わりに助けを求めた男子。

そして結果的に自分が服従させられた男子が揃っているのだから。

「黛君も試験お疲れ様。今回は大変だったね」

平田がそう言うと柚椰は微笑みを浮かべる。

「そうだね。かなり危険な橋を渡ったよ」

その意味深な発言に綾小路が触れる。

「そういえば、お前は堀北にだけ何か作戦を伝えていたみたいだな。上手くいきそうなのか？」

「さあ？　ただ、打てる手は打った。あとは結果を待つだけだね」

先ほどの綾小路と似たような物言いをする柚椰。

この場で答えるつもりはないのか、彼は綾小路から軽井沢に視線を移す。

「ところで、随分と居心地が悪そうだけど大丈夫かい？」

「——っ！　べ、別に。平気だし」

柚椰との間に何があったのかをこの場で話すことはしたくないからか、軽井沢はその視線から逃げるように目を逸らす。

しかしその反応に寧ろ柚椰は温かい笑みを浮かべていた。

「そうか。どうやら俺の心配は杞憂に終わったみたいだね。火種は処理できた、ということかな？」

「……うん、もう大丈夫。ありがとう」

助けを求めたことは確かであったため、軽井沢は柚椰に一応礼を述べた。

その様子に平田も気づいたのか柚椰へ視線を移す。

「黛君、君は軽井沢さんのことを——」

「ああ、知っている。尤も、結局は俺も力になれなかったけどね」

「そうか……僕からお礼を言わせてもらうよ。ありがとう」

「何もしていない俺が礼を受け取る資格はないよ。礼を尽くすとすればそれは……」

一瞬だけ綾小路を見る柚椰だったが、それ以上は何も言わなかつ

た。

綾小路もまた、その視線の意味を察しながらも何も語らない。

「そろそろ時間だね。堀北さんはまだかな？」

時刻は22時55分。あと5分で試験の最終結果が発表される。

だがこの場には一人、まだ来ていない者がいる。

「もうすぐ来るんじゃないかな」

「あ、そうみたいだね」

柚椰の言う通り、平田の視線の先にはこちらへ歩いてくる堀北の姿があった。

「待たせたわね」

彼女はそう言って空いている最後の席に腰を下ろした。

「さっきのメールの件だけど」

堀北が最初に発したのは直近の出来事についてだ。

この場にいる者も気になっていた事象であるためか皆神妙な面持ちで話を聞く。

「結果としてどのグループも解答時間前に試験が終わったわ。それはどのグループも結果1も結果2も出せなかったってことでもある」

その言葉に平田は難しい顔で顎に手を当てる。

「結果1を指摘したいグループは、最後のグループディスプレイで優待者の共有をしたはず。そしてこの状況になったってことは……」

「ええ。結果として裏切り者が出たってことよ。残っているグループ全てに、ね……」

「……黛君、これは」

平田は柚椰に尋ねるが、彼は何か考えているのか何も話さない。

しかし何かに気づいたのかその目を見開いた。

「まさか……!？」

「何か気づいたの？」

「いや……でもそうか……そうであるとすれば……」

堀北の声が聞こえていないのか柚椰はブツブツと何かを呟いている。

そして苦虫を噛み潰したように顔を歪めて背もたれにもたれかかった。

「やられたな……最後の最後で彼は隠し手を打ったんだ……！」

「——っ！ どういうことかしら？」

「一見デメリットしか存在しない選択肢は、実のところデメリットでもなんでもなかった、ということだよ。一つだけ、彼を侮っていた」「良い夜だな、お前ら」

この場に新たな来訪者が現れる。

それはともすれば目下の宿敵であり、今回最も危険とされていた男。

「よお、俺も交ぜろよ」

やって来た男、龍園は隣のテーブルから椅子を持ってくると強引に堀北と柚椰の間に入った。

「随分と深刻そうなツラじゃねえか。一体何があったってんだ？」

面白可笑しく笑みを浮かべながらそう尋ねる龍園はこの場の空気を張り詰めさせる。

そんな彼に柚椰は驚きを隠せない顔で視線を移す。

「龍園くん、君は……」

「ほお、イイねえ。テメエのそのツラ、レア中のレアじゃねえか？」

「……貴方、一体何をしたの」

柚椰の様子から諸悪の根源が龍園であると理解した堀北が彼を睨む。

しかし龍園はその眼光が痛くも痒くもないといった様子でヘラヘラとしている。

「もう直に分かるぜ？ コイツもタネ自体はもう掴んでるみてえだしな」

「くっ……！」

意味ありげな視線に対して柚椰は悔しそうに歯噛みする。

丁度そのとき時刻が23時を迎え、生徒の携帯が一斉に鳴った。

子(鼠)——裏切り者の正解により結果3とする
丑(牛)——裏切り者の正解により結果3とする
寅(虎)——裏切り者の正解により結果3とする
卯(兎)——裏切り者の正解により結果3とする
辰(竜)——裏切り者の回答ミスにより結果4とする
巳(蛇)——裏切り者の回答ミスにより結果4とする
午(馬)——裏切り者の正解により結果3とする
未(羊)——裏切り者の回答ミスにより結果4とする
申(猿)——裏切り者の正解により結果3とする
酉(鳥)——裏切り者の正解により結果3とする
戌(犬)——裏切り者の正解により結果3とする
亥(猪)——裏切り者の正解により結果3とする

以上の結果から本試験におけるクラス及びプライベートポイントの増減は以下とする。

Aクラス……マイナス150c1 変動なし
Bクラス……マイナス100c1 プラス50万pr
Cクラス……プラス200c1 プラス250万pr
Dクラス……プラス100c1 プラス300万pr

本試験における最終結果は以下とする。

1位：Cクラス
2位：Dクラス
3位：Bクラス
4位：Aクラス

「これは……!?!」

「どういふことなの……」

平田と堀北が目を奪われたのは自身が属している辰グループの結果だった。

事前に優待者の正体が明らかとなり、誰もが正解を知っている中で結果4が出たのだから。

「……」

綾小路もまた、一つの結果に目を留めていた。

それは自身が属している卵グループの結果が結果3であるということ。

つまり裏切り者は軽井沢の名をメールで送ったのだ。

彼にとってそれは不可解だった。

何故ならこの結果が意味すること。

それはつまり、彼の作戦が失敗したということなのだから。

「今回は俺の圧勝だな。黛」

勝利を実感し、龍園は満足げに笑った。

それは無人島での借りを返したとでも言うような笑みだった。

「……そうだね。ところで、どうして辰が結果4なのか教えてもらえないかな？」

柚椰のその問いに平田と堀北もまた、龍園に視線を移す。

「簡単なことだ。裏切り者にわざと解答を間違えさせた。分け前をくれてやることと引き換えにな」

「ちよつと待って。結果4になれば解答した人間のクラスはマイナス50ポイントなのよ？ いくら分け前が貰えるからってそれはクラスを裏切ることになるわ」

「それも織り込み済みだ。そもそもたかが50ポイントだろ。そんなチマチマしたモンに拘るのとすぐ手に入る金。裏切り者になるような奴がどつちを欲しがるかは明らかだろ」

堀北の反論に龍園は傍若無人に返す。

彼の作戦は人間の欲望を利用したものであり、この試験の仕組みを考えれば有効性は非常に高いものだった。

「つまり君にとって結果4はデメリットでもなんでもなかった、ということか」

「その通りだ。結果4を例の条件に入れてなかったのはお前らしくないミスだったな」

龍園は自分たちが不利益を被らない且つ、自分たちだけがメリットを勝ち取ることの出来る道を用意していたということだ。

契約書に結果4についての条文を入れなかったのは柚椰の致命的なミスだった。

「君の言うことが本当だとしたら、他のクラスに本当に君のスパイが紛れ込んでいるということになる。AクラスにBクラス、それこそ俺たちDクラスにも」

「——っ！」

柚椰の言葉に平田と堀北が戦慄する。

それは一つの水滴。

しかしその一滴は波紋を呼ぶ。

クラスの中に龍園のスパイ、つまりは内通者がいる。

その疑念が生まれた以上、ここから先はその疑念と向き合い続けることになるのだから。

「AとBはポイントを失い、俺らCクラスとテメエらDクラスだけがプラスになった。葛城はもう死に体だろう。なにせ二連続でボロカスにされちまったんだからな。勿論Bも焦るだろうぜ？ この前まで協力関係だったDは、自分達とは違ってプラスになってんだからな。今後も仲良くしましょう、とはいかねえかもしれねえな？」

そこまで言われたことで堀北は龍園の本当の狙いに気づいた。

「……まさか、貴方の狙いは」

「ああ。クラス間の争いを激化させる。そのために俺は今回動いてたつてわけだ。こつから先は本当の潰し合いになるだろうぜ？ 上のクラスも容赦なくテメエらを叩くだろうし、俺も容赦はしねえ」

話は終わりだと言うように龍園は席を立った。

「じゃあな。二学期を楽しみにしておけ」

そう言い残して龍園は去っていった。

残されたDクラスの面々は皆沈痛な面持ちだ。

「一勝一敗、ということか」

柚椰は現実を受け入れたのか大きく息を吐きだす。

そんな彼に堀北が尋ねた。

「ねえ柚椰君、貴方の作戦は……」

「ああ。上手くはいっていった。少なくとも途中まではね」

「さつきも言っていたけど、その作戦って結局なんだったんだい？」
話についていけない平田がそう聞くのも無理はない。

今回柚椰の作戦を知っていたのは本人と堀北の二人だけなのだから。

「そうだね。じゃあ話そうか」

柚椰はそう言うと言葉をテーブルに一枚の紙を置いた。

「今回の試験、二日目の時点で半分のグループが裏切り者によって試験終了を迎えた。マイナス要素として考えられたのは南が優待者だった午グループ。そして二日目の朝に山内が出した不正解の可能性が高い未グループ。プラス要素は高円寺が早々に終わらせた申グループのみだ。そして俺たちが抱えていた残りの優待者は二人」

「確かに結果を見る限り、高円寺君は本当に優待者を当てていたことになるね。そして南君は優待者だと見抜かれていて、山内君は回答を間違えていた」

平田は発表された試験結果と照らし合わせてこの時点での答え合わせを行っていた。

「この時点でクラスポイントはマイナス50。ここからDクラスが巻き返すには自分達の力だけでは難しいと俺は考えた。そこで思いついた一つの策。それが――」

「龍園と手を結んだんだな？」

綾小路は気づいた。

柚椰が打った起死回生の一手の正体を。

それを聞いて平田が驚く。

「まさか、なんで……」

「最初のグループディスカッションの時に言ったはずだよ。この試験で最も確実な情報を手に入れ、そして自由に立ち回ることが出来るのは彼だ。だから協力関係を結ぶのに最も適していたんだ」

「柚椰君の考えを聞いたとき、勿論止めたわ。彼が素直に約束を守るとは思えなかったし、なによりリスクが大きすぎる。でも、他に現実

的な作戦がなかったのも事実だった」

堀北は二日目のグループディスプレイスカッションの後に柚椰とした会話を思い出していた。

辰グループの部屋を出た堀北は廊下を歩く柚椰を呼び止めた。

『待って柚椰君』

『……』

『貴方、何をするつもり？』

『……そうか。気づいたんだね、鈴音は』

『いくら先手を打たれたからといって、貴方があんなにも分かりやすく動揺するなんて考えられないわ。何か考えがあるのでしよう？』

『……ついてきてくれ』

二人は廊下から船内の一室へ場所を移した。

ここから先は誰にも聞かれてはならない。

『鈴音、これから話すことは試験が終わるまで誰にも言わないでほしい。クラスメイトには勿論、平田や清隆にも』

『分かったわ。聞かせて』

『現状、Dクラスの力だけで試験を攻略し、勝ち上がることは限りなく不可能だ。情報があまりに少なく、優待者の把握もままならないから法則性にも辿り着けない。だから、ここから起死回生を狙うには必然的に他クラスの人間と協力する必要がある』

『……でも、どのクラスも応じてくれるとは思えないわ。Aクラスは現状維持を望んでいるし、Bクラスも今回ばかりは自分たちを守るのが精一杯のはずよ』

『その通り。だから俺は別の選択肢を選ぶ。毒を以て毒を制すことを、ね』

『……まさか……』

『ああ。龍園と取引をする。そして彼が所持している優待者の情報を手に入れる』

『ありえないわ！ 彼と契約関係が成立するわけがないじゃない！』

彼が言うことが本当だとするなら、今の状況は彼の独走状態。そんな彼が他クラスとわざわざ取引を結ぶわけが——』

『自分のクラスの優待者の情報は、彼にとっては別に守るものでもない。それは前にも言ったはずだよ。それに彼が動き出しているということは、既に他クラスの優待者が誰であるか知っているか、あるいは法則性に辿り着きつつあるかのどちらかだ。後者であればDの優待者の情報を与えてやることでその仮説を補強してやる事が出来る。メリットは生まれるはずだ』

『彼に法則を導き出すためのヒントを与えることで、私たちもそこに辿り着くためのヒントを得るってこと?』

『ああ。そして彼の今回の狙いは、クラスポイントの総取りでもプライベートポイントの総取りでもないはずだ。ならばまだ交渉の余地はある』

『どういうことかしら?』

『もし彼が単純にCクラスを勝たせたいだけなら、既に試験そのものがほとんど終わっているはずだからさ。自分たちの優待者がいるグループ三つだけを残して他全てを結果3で終わらせようとしたはずだ』

『それは……まだ法則が確実に見つけ出せていないだけじゃないかしら?』

『勿論その可能性はある。でも、彼は勝ちの見えるゲームを余裕綽々と進めるタイプじゃない。寧ろ運否天賦のシューティングゲームを楽しむような人間だ。法則の予想が立ちつつある段階で、多少強引な手を打つことはなんらおかしくないことじゃない』

『……つまり彼の狙いは別にある、ってこと?』

『恐らくはね。今の段階では流石に彼の目的の全貌までは分からない。でも、何か目的が他にあると仮定すれば彼と呉越同舟に持ち込むことは出来る』

『彼と利害が一致することなんて……!? まさか柚椰君、貴方——』

『ああ。残念だけど、今回ばかりはAクラスだけではなくBクラスにも負けてもらう。龍園を勝たせ、その後には俺たちが続く形で試験を終

わらせる。これが今回の試験の突破口だ』

そう語る柚椰の表情は固く、それが苦渋の選択であると物語っていた。

「そうか。龍園との取引で優待者の情報を得て、そこから法則を見つけ出してDクラスが二位で試験を終えられるような結果を導き出す。それがお前の作戦だったんだな」

綾小路の言葉に柚椰は頷く。

Cクラスとの共闘。それはリスクの高い賭けであることは明白。

しかし同時に今回の試験においては最も勝算のある賭けでもあった。

「案の定、彼は自クラスの優待者をあっさり明かしてくれた。そこから強引に法則を導き出して、残っているグループの中にいる優待者を把握した。後はタイミングを見てCクラスを邪魔しない範囲で結果3を出せば終わりだった。だが――」

「龍園は結果4でも勝てる策を見つけていた、ということか」

「恐らく最初からそうするつもりだったんだろうね。俺が彼に取引を持ち掛けることを考えていたように、彼もまた俺が取引を持ち掛けてくると思っていたんだろう。だから最後の最後でこんな手に出た」

柚椰がテーブルに置いた紙には各グループの優待者の名前と所属クラスが書かれていた。

辰グループにいた優待者はCクラスの鈴木英俊。

グループのメンバー全員が彼の名前を書けば彼には100万ポイント、それ以外の者には50万ポイントが与えられた。

「リーダー格が集まる辰グループが結果1を出せば、最終的な順位はさて置いてどのクラスも士気が高まると思った。クラスのリーダーが実現不可能とされていた結果1を出したという事実は大きいからね。だから結果1を出せるような安全策を用意したつもりだったんだけど、誤算だったね。とつくに裏切り者の準備は出来ていた。裏切ったのはAの葛城派の中にいた誰かか、あるいはBか……」

「今となつては眞実は闇の中、ね……」

試験の仕様上、結果が発表されても優待者の正体はおろか裏切り者の正体も明かされない。

誰かが裏切つたという結果だけを残して試験は終了を迎える。

裏切り者は一体誰だつたのか。その疑念が晴れることはない。

「龍園君の目的はクラス間のポイント差を縮めて争いを激化させること。今までみたいに僕たちがBクラスと協力することを妨害するためだつたってことかな」

「今後どんな試験が待っているか分からない以上、彼が残していったものは大きいわ」

「クラスのポイント差を縮めて緊張を煽り、裏切り者の存在を印象付けることで簡単に他のクラスを信用できないようにさせる。実に彼らしい作戦だ」

「次からの試験は今まで以上に一筋縄ではいかないかもしれないな」

今回の試験結果を受けて各々が今後の未来を見据え、今まで以上に気を引き締めたのだつた。

深夜2時。船は地を這うような低い音を立てて大海原を進んでいく。

真夜中の屋上デッキは人の気配もなく静寂に包まれていた。

こんな時間に、こんな場所を訪れる物好きなどそういないだろう。

いるとすればそれは――

「さて、呼び出した用件を聞こうか――」

誰もいない屋上デッキに現れた影が二つ。

一つは呼び出された男、黛柚椰。

そしてもう一つは彼を呼び出した男——

「ああ。聞きたいことがあつてな」

無機質な目で柚椰を見つめる綾小路清隆。

この時間に、この場所を指定して柚椰を呼び出した彼には一体どんな目的があるのか。

ただの世間話であればこんな時間に呼び出すことはないだろう。

であればそれは当然、話題の方向性は決まっている。

「そろそろ本当のタネを明かしたらどうだ？　柚椰」

綾小路は柚椰へ語りかける。

その瞳は無機質だった。唯々無機質だった。

何かしらの感情が宿っているような目ではない。

喜怒哀楽というものがごっそり抜け落ちた人間がするような目は恐らくこんな目なのだろう。

機械的な、血の通わないその両眼は、ただ一人の男に向けられていた。

「ほう、その心は？」

柚椰は向けられる視線に対して、どこか喜びの感情を覚えていた。

もし自分の考えが正しいとしたら、今この状況は己にとって最も望ましいものなのだから。

「今回の試験、お前は後手に回っていた状態から、龍園と取引を交わすことで起死回生を狙った。そう言ったな？」

「ああ。危険な賭けだったけど、クラスポイントを失うことは免れた。寧ろ結果的にはクラスポイントもプライベートポイントもプラスで

試験を終えることが出来た。まあ、最後にしてやられてしまったけど、クラスにとつてこれは勝利と言っていいはずだ。それがどうしたんだい？」

「一見するとお前の言っていることは論理的で、筋が通っている。だから堀北も平田も、お前の作戦を危険な策だとは思っていても、それが事実起きたことだと受け止めている。だが真実は違う」

綾小路はまっすぐに柚椰を見据える。

一瞬たりとも彼から視線を逸らさないように。逸らすことをしないように。

「お前は初めから龍園と繋がっていた。今回の試験の全てはお前と龍園が描いた絵だった。違うか？」

「どうしてそう思うんだい？　そもそもDクラスとCクラスは敵同士だ。それは俺と彼も例外じゃない。敵と協力して、俺に一体どんなメリットがあるのかな？」

「呉越同舟。本来敵同士の者達が利害の一致によって協力することの例えだ。龍園は今回、クラス間のポイント差を縮めることで今後の戦いを四つ巴の状態に持ち込もうと目論んでいたと言っていた。だがそれは、お前の目的でもあったはずだ」

「続けて」

「そもそも無人島試験でのお前の行動が不可解だった。一見すると他クラス全てを蹴落としてDクラスを勝たせたように映る。だが、あの時のお前の本当の目的はAクラスの……いや、葛城の敗北だった」

無人島での特別試験において、柚椰はCクラスと取引をすることでAクラスの攻撃からBクラスを守り、その上でAとCを抑えて自分のクラスを勝たせた。

「AクラスからBクラスへの攻撃は防いだ。だがCクラスからBクラスへの攻撃に関してはお前は一切干渉しなかった。見逃すことでBクラスは占有ボーナスを失い、そうすることで総合点でDクラスがBクラスを上回るようにした。Bクラスは点数でこそ負けても、Aからの攻撃を防いだことでお前に感謝の念を抱く。そしてDクラスでは言わずもがなだ。クラスを勝利に導いたお前を責める奴なんている

はずがない。だが、それこそお前が作り上げた偽りの真実だ」

「偽りの真実、か」

「恐らくお前はAクラスのもう一人のリーダー……坂柳を今後Aクラスのリリーダーに仕立て上げるための下準備のために動いていた。無人島試験の結果はその第一歩だ。この仮定を前提にすると、今回の試験は第二步。目的はAクラスとBクラスの間にあるポイント格差の減少だな?」

「何故俺が坂柳のために動いたと? そこまで俺が肩入れする理由があるのかい?」

「目的を達成することで、お前は坂柳から何らかの報酬を約束されていたんじゃないか? そう考えれば筋は通る。あとはクラス間の闘争を煽りたいと考えている龍園と手を組めば、試験を自由に動かすことが出来る。そしてお前は手をこまねいているように見せかけて、裏で虎視眈々と試験の行く末を描いていた。裏切り者が現れたと告げる学校からのメールが連続したのは初日の夜と今日の6回目のグループデイスカッションの後。前者は全グループが結果3。後者は辰と巳だけが結果4。ここで問題なのは後者の方だ」

「何故?」

「辰の優待者は鈴木、そして巳の優待者は櫛田だ。優待者はCクラスとDクラス。そしてどちらも結果4。あまりに不自然じゃないか?」
「それは考えすぎじゃないか? 前者は龍園の用意していた裏切り者、後者は焦った裏切り者による自爆。そう考えるのが妥当だと思うけどね」

「ああ、普通はそう考えるだろう。辰に関しては龍園自身がタネを明かしたことで真実味を帯びる。巳に関してもありふれた予想だからこそ、そこに違和感を感じる奴はそういない。だからこそ、お前にとっては都合が良かった。そうだろう?」

そう追及され、柚椰は顎に手を当てる。

「ふむ……その推理が仮に正解だとするならば、真実はどういったものになるのかな?」

柚椰が尋ねると綾小路は小さく息を吸い、結論を述べた。

「辰の裏切り者の正体はお前だ。そして巳はCクラスの誰かに、龍園が回答を間違えるように指示をした。そうすることでクラスポイントのペナルティを相殺し、マイナスを防ぐ。お前らが重視したのは、クラスの変更が起こらないギリギリのラインでポイントを調整することだった。そのラインを調整して試験を終わらせることで、お前らの目的は達成される」

「龍園はBクラスへと迫り、AクラスはBクラスの射程圏内に捉えられる。俺が坂柳からの依頼を受けていたとするなら、確かにお互いに利益はあるだろうね。でも、それを裏付ける証拠を君は持っているのかい?」

至極当然の指摘を受け、綾小路は首を横に振った。

「いいや。全ては俺の仮説だ。明確な証拠がないから立証は出来ない。だが、俺はこれがただの妄想であるとも思っていない」「どうして?」

「Dクラスを勝たせるという目的だけで動いているにしては、お前は不可解な点が多すぎる。俺に作戦を明かさず堀北にだけ明かしたのも、堀北なら真実には辿り着けないと踏んでいたからだ。お前は俺に協力すると言っていないながら、その実俺には全てを明かすことをしなかった。そんなお前に全幅の信用をおけるほど、俺は鈍感じゃない」
そう語る綾小路に柚椰は小さく笑い声を漏らした。

「ふふっ、それは君も、じゃないかな?」
「なに?」

僅かに眉をピクリと動かす綾小路に微笑みを浮かべ、柚椰は彼に背を向けた。

「真実はどうあれ、俺はこうして結果を出した。二度の特別試験においてDクラスを勝利へと導いた。一度目は完勝、二度目は辛勝だ。勝利の度合いは違えど、これは君との約束を果たしたということにな

る。君はAクラスに上がるといふ目的のために俺を欲した。それに俺はこうして結果で答えた。でも、君はどうかな？」

「……何が言いたい？」

「君ほど優秀な人間なら、俺と同じような手は思いついていたはずだ。勿論、目立つことを嫌う君は龍園と取引をすることはないだろう。たとえ一之瀬相手だろうと表立って行動はしなかったはずだ。でも、その策を俺や鈴音、平田や桔梗に伝えて協力者を募ることは出来たはずだ。特に平田と桔梗はクラス内での伝達役にはうってつけの人間だ。優待者の情報を手に入れ、そこから法則を導き出し、後は二人を通して各グループにいるDクラスのメンバーに裏切りを持ち掛ける。この一連のプロセスは君ならば十分に可能だった。にもかかわらず君はそれをしなかった。それは何故かな？」

「買い被りだ。そもそもお前と違って俺はクラスの中でさえ顔が広がらない。今回の試験は俺にとって不得手だっただけだ」

「だから今回の試験のように他人との連携が不可欠な試験では動きようがなかった。そういうことかい？」

「そうだ」

「おかしなことを言うね。平田は君を信用している。鈴音も君のことは認めている。桔梗もクラスのためとあれば喜んで協力しただろう。君にそれが理解できないはずはなく、故に君には選り取れる選択肢が確かに存在していたはずなんだ」

「……」

至極当然の指摘に対して、綾小路は無言を以って答える。

正論に対して言い返せないように映るその行動。

しかしそれは柚榔にとつてある事実を確定させる要因になった。

彼はデッキの手すりに手をつき、海を眺めながらある言葉を紡ぐ。

「君は鈴音も平田も桔梗も、そして俺も。ともすれば誰のことも信用してはいない。故に君は今回の試験で勝ちに行くことを求めなかった。いや、初めから君は試験の攻略やクラスの勝利などではない全く

別の目的で動いていた。違うかい？」

「何を……」

「君は強力な武器ではなく、より確実に、そして自分の意のままに操ることの出来る武器を求めていた。それは言わば体のいい駒……いや、奴隷と言った方がいいかな？」

それが何を、誰のことを指しているのか分からないほど綾小路は鈍感ではない。

同時に彼は確信する。

目の前の男は今回自分がやったこと。その全てを知っていると……

「彼女を支配するには、随分と強引な手を使ったんじゃないか？ ただの口八丁で丸め込めるほど、彼女という人間は単純には出来ていない。彼女の傷は根深く、そして彼女の芯の奥まで刻み込まれている。それを癒し、彼女を信用させることはとても一朝一夕で成せることじゃない」

「どうだろうか」

「彼女が抱えていた問題は俺も知っているよ。問題解決のために策も練っていた。しかしそれはとてもこの旅行の間、ましてや試験中に終わらせられるようなものではなかった。にもかかわらず君はそれを成しえた。であれば当然、そこには仄暗い真実が息を潜めている」

「仮にそうだとして、それを裏付ける証拠があるのか？」

先ほどの意趣返しとでも言うように、綾小路はそう言い返す。

その言葉に柚椰はフツと笑みを漏らす。

であれば当然、この後続ける言葉も決まっている。

「そうだね。全ては俺の仮説だ。明確な証拠がないのだから立証は出来ない。だけど、俺はこれがただの妄想であるとも思っていないよ」

「どうしてだ？」

「君と同じだ」

柚椰は振り返り、再び綾小路と相對する。

「君は不可解だ。君が何より重視するのは己の身が守られること。そ

のためには勝ち続け、全てのクラスを下してAクラスにならない。そのためのピースとして君は俺を求めた。個人的利益の追求。実に利己的だ。人間らしいとさえ言えるだろう。でもそこへ至る過程において、君はあまりに非人間染みている。俺は君を友達だと思っっているから、君が俺を求めるのなら助けたいと思っっているよ。でも、君は俺を利用することはしても、俺のために動くことはないだろう？ 何故なら君は、根本的に人に心を許してはいないんだから。その点に気づかないほど、俺は鈍感じゃないよ」

「……」

綾小路は何も語らない。

何かを語ることは、同時に何かを浮き彫りにすることだ。

真実を煙に巻くことは、同時に真実が存在することを確信させる。

故にここで何かを語ることは許されない。

「確かに真実はどうであれ、君に何の相談もなく事を進めたことは事実であり俺の落ち度だね。一歩間違えれば龍園に裏切られて敗北を期すことも考えられた。その点に関してには謝るよ」

これ以上の問答は不要だと判断したのか、柚椰は綾小路に謝罪の言葉を述べた。

「今回の件はお互い水に流すことにしよう。君は俺が立てた仮説を忘れ、俺は君が立てた仮説を忘れる。これで手打ちにしようか」

「ああ……そうしよう」

拒否する理由はないため、綾小路はその申し出に応じた。

「じゃあ、俺は戻るよ。あまり夜更かしは褒められたことじゃないからね」

そう言い残して、柚椰は綾小路とすれ違い、その場を後にした。

デツキには綾小路一人だけが残った。

「……」

綾小路は振り返り、去っていく柚椰の背をじつと見つめていた。

彼はおもむろにポケットに手を入れる。

そこから取り出されたのは電源の入った携帯。

彼はボイスレコーダーアプリを起動した状態でそれをずっと隠し持っていたのだ。

「決定的な言葉は最後まで残さなかった、か……」

ここまでの会話を綾小路はずっと録音していた。

自分が導き出した、柚椰が裏で行っていた真実。

そして柚椰が導き出した、自分が裏で行っていた真実。

その全貌をお互いに語ったはいいものの、最後はあくまで仮説であるという形で会話を終わらせた。

柚椰の最後の発言が決定打だった。

お互いに水に流すという言葉と共に語られたのは、あくまでやったとされること。

具体的な内容については触れず、あくまで双方の立てた予想を破棄するというものだった。

このデータを公開したとしても、双方共に認めていないのだから言質にはならない。

そもそもお互いに仮説であると言い切っている以上、これが真実であるという証拠にもならない。

去っていく背を見て、綾小路は一つの事実を確信する。

「黛柚椰、お前は最も危険な存在だ」

綾小路の口から出た言葉は、宵闇の海へと消えていった。

狂王と女王は思考する。

「ほらこの前の試験で貰ったポイント。半分はアンタの取り分なんだろう？」

「そう言って携帯を差し出したのはCクラスの伊吹滯。

彼女は一週間前に行われた特別試験で50万プライベートポイントを勝ち取った。

自身が属していた卵グループの優待者を見事に当て、結果3を出した裏切り者こそが彼女だった。

そしてその彼女にそもそも優待者の情報を与えた者こそ彼女が今相對している男、龍園翔だ。

龍園は伊吹に優待者を教え、結果3を出すことを指示した。

そしてそれによって発生するプライベートポイント50万の内、半分の25万を回収するということも事前に伝えられていた。

故に伊吹の今の行動は龍園が言ったことであり、なんらおかしいことではない。

にもかかわらず、龍園は伊吹の携帯をチラリと見ただけでそれを受け取りはしない。

「ああ、それか。別にお前が持っていて構わねえぞ」

「は？ いいの？」

「お前が後先考えずに散財する馬鹿だとは思ってねえからな。それに、お前には無人島のとときに色々したからな。ささやかなお詫びの気持ちだ」

「お詫びとかアンタが言う気持ち悪いんだけど」

「ハッ、あの試験で得られるプライベートポイントに関しては、いざという時のための貯金だ。だからすぐに回収するか後でするかの違いでしかねえんだよ。たとえ後で回収するときに嫌がろうが黙らせればいいだけの話だ。その点に関して、お前は心配いらねえからな」

「ああそういうことかよ……」

要はあくまで自分に預けているだけで、必要とあればすぐに差し出させるつもりなのだ。と理解した伊吹は眉間に皺を寄せて龍園を睨んだ。

龍園はどこ吹く風といった様子で彼女の眼光を意に介していない。「プライベートポイントという保険も重要だが、俺の一番の狙いはクラスポイントだった。あの試験でBクラスとの差は50まで縮めた。その背を完全に捉えたってことだ」

「Bに上がるのも時間の問題ってことか」

「その通りだ。だがそれ以上に重要なのはAとBの差だ。その差は80。その差は小さなファクターひとつで簡単にひっくり返る」

「つまりここから先は私たちだけじゃなくAとBも簡単にクラスが入れ替わるってこと？」

「ああ。だが、Aに関しては今のAクラスのままなら、の話だがな……」

龍園が脳裏に浮かべるのはAクラスに控えているもう一人のリーダー。

否、龍園は知っている。

Aクラスの真のリーダー、本当の王こそこれから出張ってくる少女だ。

坂柳有栖。

一学年の頂点。Aクラスの女王。

彼女はここから先、Aクラスを束ねる者としてその手腕を遺憾なく発揮してくるだろう。

それは自分だけでなくどのクラスのリーダー格も理解しているはずだ。

完膚なきまでに叩きのめされた葛城も、平和主義の一之瀬も。

そして今回自分が手を組んだあの男も……

「(テメエが坂柳と繋がっていやがったことは見抜いてるぜ、黛……！)」

柚椰が今回自分に協力を持ち掛けたのは、自クラスの惨敗を回避するため。

表向きの理由はそうだろうが、当然そこに裏があることを龍園は見抜いていた。

自分がAクラスを狙っていたのと同じように、柚椰もまた葛城を狙っていた。

葛城は一番崩しやすい壁であり、自分や柚椰にとって非常に相性が良い。

堅実な結果を求めることは確かに安牌かつ定石だ。

だがそうであるが故に、葛城は搦め手に弱い。

非情、卑怯、外道。

そうした手段を講じた作戦が面白いほどに嵌まることを龍園も柚椰も知っていた。

蹴落としやすい敵がいるなら集中的に狙うのは当然のことだ。

しかし、だからこそ誰も疑わない。

セオリーの裏に隠された見えざる影に気づかない。

「(坂柳は黛を利用して事を動かかそうとした……俺と同じように)」

それが意味することは二つ。

ここから先は今までのように簡単な展開にはならないということ。

そして事を動かすファクターとして、今後も柚椰の存在が大きくなるということだ。

彼をどう利用するかで試験の難易度が大きく変わることとは今回の特別試験二つで坂柳も理解しているはずなのだから。

だがそれは切り札としては有用でも、決して頼みの綱にしてはいけないことも理解している。

強力な手札は使えば使うほど、その強さに無意識の内に頼ってしまう。

たとえどんな状況でも、その手札を切りさえすれば状況を好転させられると考えてしまう。

それは思考の放棄であり、戦略の単純化を招く。

黛柚椰という存在は、切り札として使えはしても決して頼りにしてはならない。

毒を以て毒を制し続けられれば、いずれその毒に芯から芯まで浸かって

しまうことになるのだから。

「今後、Aクラスは強くなる。そして一之瀬もいい加減本腰入れてくるだろうな。だからこそ……次に狙うのはDクラスだ」

「Dクラス……確かにAとBに比べたらやりやすいだろうけど……」

「ああ。お前の懸念材料は黛だろ？　だが心配には及ばねえ。手はある」

伊吹の懸念を先んじてかき消すようにニヤリと笑う龍園。

Dクラスという存在は、本来は全クラス中最も欠点の多いクラスだ。

個々が欠点を抱え、それが一か所にかき集められたクラスこそがDクラス。

普通であれば真っ先に狙い撃ちされる対象であることは言うまでもない。

しかしそう簡単にいくほどDクラスの実態は甘くはない。

落ちこぼれの集団であるDクラスを束ねる平田洋介。

男女問わず、クラスを問わず幅広い交友関係を持ち、アクシデントに対して柔軟な対応が出来る榎田桔梗。

Dクラスの精神的支柱はこの二人だ。

二人は言わばDクラスを守る盾。

だがその盾は他のクラスのそれに比べれば強度は劣る。

「平田は雑魚だ。榎田に関してもやり様はある。Dクラスの盾は壊そうと思えば簡単に壊せる。だが、Dクラスの真価は攻撃にある」

「攻撃……要は矛つてことか」

「ああ。俺は7月に黛にしてやられたあの日以降、Dクラスの情報を徹底的に洗った。そして今回の優待者当てでガラクタ共の中にいる矛は絞り込めた」

「アンタが夏休み前から動いてたのはそのためか」

「ああ。生徒の情報も教師にポイントさえ払えばある程度は手に入るからな」

Dクラスの盾が平田と榎田ならば、矛とは誰のことを指すか。

一人は圧倒的才能を以て、いち早く試験を攻略した高円寺六助。

決して他者と足並みを揃えることはせず、常に唯我独尊の態度を崩さない。

しかしそのスペックは同学年の中でも群を抜いていることは調べがついていた。

扱いはこの上なく難しいが、Dクラス最強の矛は間違いなく高円寺だった。

そしてもう一人、まだ結果らしい結果は出せていないが洞察力に秀でた堀北鈴音。

夏休みに入るまでは成績こそ優秀だが別段気にかけるほどの人間ではなかった。

気が強く、自信過剰の女。それが夏までの彼女に対する龍園の評価だった。

その認識を改め始めたのは無人島で邂逅したときだ。

Cクラスが試験のルールを逆手に取った戦術を企てていることを彼女は断片的にも見抜いていた。

彼女の名前をはつきりと覚えたのはその瞬間だった。

伊吹の報告ではその後も無人島での生活において、彼女が起こした火種によるクラスの不和を防いだと聞く。

対応に動いたのは櫛田だが、そのきっかけを作ったのは堀北らしい。

その一点だけでも堀北がただ勉強が出来るだけの優等生ではないことは理解できた。

不測の事態に対して動揺することなく事の裏まで読めるということとは簡単なことではない。

優待者当てでも自クラスの明確な勝ち筋こそ見出せていなかったようだが、他クラスの思惑については概ね把握している素振りがあった。

さしずめ堀北はDクラスの頭脳と言ったところだろうか。

まだ華々しい成果こそ上げていないが、いずれ思わぬ番狂わせがあるかもしれない。

そういった期待も含めて、龍園は彼女を気に入っていた。

「Dの矛は高円寺と堀北だ。だが高円寺はあいつらが扱えるようなタマじゃねえだろうな。だから攻撃要因は堀北のみ。アイツがDの頭脳であり、Dが他クラスと戦うための武器だ」

「それじゃあ黛は？ 攻撃も防御も、寧ろアイツの方がDの要じゃないの」

「確かにアイツはDの中じゃ何もかもが飛び抜けてやがる。基礎スベックもどうやら高円寺より上らしいからな。だがあの野郎はDの奴らが武器にするにしては手に余る。とても飼いや慣らせるような代物じゃねえよ」

「それはそうかもしれないけど……でもアイツだってクラスが負けるのを黙って見てるわけじゃないでしょ。いくらわけ分かんない奴だからって、自分のクラスが負ければいつまで経っても上のクラスに上がれないわけだし」

当然の指摘をする伊吹だが、それでも龍園の主張は変わらない。

「ああ、そりやそうだ。だが上のクラスに上がる方法は何もクラスポイントでのし上がるだけじゃねえ。当然抜け道は存在する」

「抜け道って……2000万ポイント貯めるってやつ？ でもそれって無理って話じゃなかった？」

「表向きはな。正攻法じゃどう足掻こうが2000万はおろか半分の1000万すら超えられねえだろう」

「じゃあ上のクラスに上がる方法なんて……」

「抜け道つつつたる？ 要は邪道も存在するってことだ。黛だけじゃねえ。おそらく高円寺も何かしらの方法を見つけているだろうな」

「抜け道を見つけてる二人は、必ずしもクラスのために動くわけじゃないってこと？」

「そういうことだ。そもそもテメエらじゃ扱えねえ武器を武器とは言わねえんだよ。あの二人を当てにしているようじゃDの奴らはガラクタのまままだ。警戒するに値しねえ。今のDはどのクラスよりも脆いってこった」

「そういうことね……」

「(尤も、懸念点がないわけじゃねえが……)」

伊吹には強気に言ったものの、龍園は必ずしもDクラスが雑魚だとは思っていなかった。

高円寺と柚椰は確かにDクラスの勝利に貢献する確率は高くない。しかし一度協力する構えを取れば、二人がどのクラスの矛よりも強力な武器になりかねない。

警戒し過ぎる必要はないが、樂觀することは愚かだと龍園は感じていた。

そしてもう一つ。龍園が考えていることがある。

Dクラスの矛とは果たしてそれだけなのだろうかという疑問。調べた結果は確かにそれを示している。

特定のステータスに秀でているか、あるいは全てのステータスが高水準でまとまっている人間。

いくつか候補は存在したが、その中で脅威になりうる存在は先ほど挙げた三人だけだ。

だが龍園は感じていた。

Dクラスには未だ隠れた存在がいる可能性を。見えざる刺客。まだ刃を抜いていない暗殺者。

「(黛の言っていたことがブラフじゃないとしたら、いるはずだ)」
龍園の脳裏によぎるのは夏休み前的一幕。

黛柚椰という人間の異常性を認識したあの日、彼は戯れにあることを語った。

Dクラスの担任が見初めた上のクラスへ上がるためのファクター。他クラスと戦うために、ガラクタの中から選出された武器。

それは柚椰と堀北。そしてもう一人いた。
正体不明の存在。顔の無い生徒。

柚椰の話の全て信じているわけではないが、龍園は本能的にそれが真であると感じ取っていた。

言わばそれは野生の勘というものだろうか。

「(Dクラスの隠し手……黛や高円寺と同格か、あるいは……)」
もし柚椰が言ったことが本当ならば。

自分から注意を逸らすためではなく、本当にその存在がいるのだと

示していたのだとしたら。

「面白れえ……!!」

こみ上がる感情は歓喜一色。

新たな敵の存在は龍園の闘争心を煽るのに十分だった。

しのぎを削る相手は多ければ多い方がいい。

特にこれから先、一学年を四つ巴の状態にしたいと考えている龍園にとってそれは好都合だった。

Dクラスに柚椰以外の強敵が存在し、それが明るみになればAクラスやBクラスの関心もそちらへ向くだろう。

警戒対象が増えるということはそれだけ気を張り巡らさなければならぬということ。

そういった状況は隙を突くのにつけてだ。

打算的な理由はいくらでも挙げられるが、強敵が増えることへの純粹な歓喜がほとんどを占めていた。

龍園翔という人間は、ともすればどのクラスのリーダーよりも戦いというものに飢えていた。

「(炙り出してやるよ……獅子だろうが怪物だろうが丸裸にして喰い殺す!)」

瞳に歓喜を宿し、口角を上げる龍園は狂氣的という他ない。

纏う空気は飢えた獣のそれだ。

最高の餌を前にどう喰らってやろうかと算段を立てる餓狼。

その姿はまさに『魔王』。

龍園を形容する言葉としてはこの上なく相応しい。

「アンタが何考えてるのかは知らないけど、あんまり危ないことはないでよね」

笑みを浮かべる龍園に対して呆れたように伊吹が言う。

伊吹の言葉が可笑しかったのか龍園は意識を彼女へ戻した。

「なんだ、心配してくれんのか?」

「冗談。アンタなんて心配するだけ無駄でしょ。私まで余計なゴタゴタに巻き込まないようにしてってことよ」

「そこでクラスって言わねえ辺りお前らしいな」

抑揄うようなニュアンスを含んだ龍園の言葉に伊吹はフンと鼻を鳴らした。

「私は自分が一番可愛いんだよ。アンタの言いなりになるのは今でも納得はしてないけど、他のクラスを倒してAに上げてくれるならそれに越したことはないだけ。特別試験二回でアンタ以外にCのリーダーは務まらないってことはいい加減理解したし、アンタが好き放題やって結果的にクラスが勝てるなら私は素直に従うさ」

「ククッ、媚び諂う馬鹿共よりかはお前みたいなエゴイストの方が俺は好きだぜ?」

「アンタに好かれても全く嬉しくないんだけど」

「どうだ、俺の女にならねえか? イイ思いさせてやるぜ?」

右手を自らの股間に持っていきニヤリと笑みを浮かべる龍園。

そんな彼を伊吹はゴミを見るような目で睨む。

「笑えないんだけど。その付いてるモノ蹴り飛ばされなくなかったらやめろ」

「おー怖い怖い。噛み付きっぷりは変わらねえようだなによりだ」

両手をヒラヒラとさせて冗談めかす龍園。

下世話なジョークに対する反応も相変わらずだった。

その事実を認識し、龍園は伊吹が自分に服従しているわけではないのだと改めて理解した。

「言っただろ。納得はしてないって」

念押しするように伊吹は冷たく吐き捨てた。

「葛城派は随分大人しくなったわ。二学期からはアンタが名実ともにリーダーでしょうね」

「そのようですね。あまりに呆気なくて残念ですが」

「よく言うわよ。直接手を下さず、彼を使って葛城を潰そうと考えた

時点でこうなることは想定済みだったんでしょ」

「ふふっ、そうですね。葛城君も決して弱くはありませんが……相手が悪かった、ということですよ」

「ホント、つくづくアンタって性格悪いわ」

学生寮の一室で女生徒二人が語り合っている。

一人は部屋の家主である神室真澄。

そしてもう一人は――

「誉め言葉、と受け取っておきますね」

ティーカップを片手に微笑むのは坂柳有栖。

Aクラス坂柳派のリーダーであり二学期からは本格的にAクラスの女王として君臨する少女だ。

家主が出した紅茶を優雅に飲むその姿は育ちの良さを感じさせる。性格の悪さはさて置いてもやはりお嬢様なのだと思わせられるだけのオーラがあった。

「葛城君は堅実な人です。多くは求めず、安定的な方法を好む。司令塔の在り方としては決して間違っていないです。ですが、支配者としてはあまりに脆弱です」

「脆弱、ね……」

「会社で例えるなら、葛城君は部署のリーダーとしてはこの上なく相応しい人物です。しかし会社全体の舵を取る経営者としての資質はない」

「なるほどね。リスクな方法や誰かを潰すことへの貪欲さがないからってことか」

「現状維持という選択は一見正しいように映りますが、それは進化の否定です。周りが前進している間に歩みを止めていけばそれは退化。退化を選ぶ者に、上に立つ資格はありません」

辛辣な物言いだ、それが坂柳が下す葛城の評価だった。

「それを突き付けるための惨敗ってわけね。結果、目論見通り葛城は虫の息。もうアイツに付いてる人間はアイツに心酔してる数人程度。他の人間はアンタを待ってる状態よ」

「黛君と龍園君。他クラスの要相手に全く太刀打ち出来なかったとい

う結果は大きいです。今後も彼らと矛を交える機会は幾度となく訪れる。その度に負けていけばAからB、BからC、そして最悪の場合Dへと落ちることだってあり得る。それを黙って許容できるほど、クラスの方々はお人好しではないでしょう」

「まあね。Aクラスは我が強い奴も多いし、プライド高い奴はもう葛城なんて当てにしてられないでしょうね」

「だからこそ、Aクラスには葛城君より強く、より容赦のないリーダーが必要なのですよ」

「まあこれからは安泰でしょうね。アンタ以上にAクラスを纏められる人間なんていないでしょうし」

神室真澄は思う。

目の前の女こそAクラスの女王に相応しい。

彼女を打ち負かすことが出来る者など、誰一人とて存在しないと。

それはAクラスの中でも、一学年の中でも同じだ。

坂柳有栖という人間はどこまでも冷徹に、どこまでも冷酷に敵を潰す。

他クラスに限らず、恐らくクラスメイトだろうと敵と判断すれば容赦はしないだろう。

非情に映るかもしれないが、だからこそAクラスの王としてはこの上なく適任だ。

「ふふっ、葛城君の失脚で舞台は整いました」

対抗馬が消えた今、満を持して女王は動き出す。

「黛君の報告では、龍園君も私と同じようにクラス争いを激しくさせたいご様子。であるならば、私もAクラスを束ねる者として参加しないわけにはいきませんね」

艶やかな笑みと鈴の音のような声。

しかし紡がれたのは好戦的な性を隠さない開戦宣言。

不整合なそれらが齎すのは圧倒的な覇気。

冷たく突き刺すような空気に神室は思わず息を呑んだ。

対象が己ではないと分かっているても尚、身体が震えてしまうほどに。

女神が大鎌を振り上げているような絶対零度の殺気。

『無敵の女王』。

死の女神とも呼ばれるそれを神室は坂柳有栖に重ね合わせていた。底知れぬ恐怖が身体を蝕むが、同時に感じるのは圧倒的な安心感。自分が服従させられた相手はやはり怪物だったのだと実感させる。「優待者当てでは下準備に動いていたようですし……いよいよ、ですね」

龍園翔、黛柚椰。目下の強敵は二人だが坂柳がそれと同じくらい、いやそれ以上に意識している相手が一人。ずつと前から見初めていた唯一無二の好敵手。

同学年の中で、いやこの学校で最も手強いであろう強敵。

坂柳有栖は確信していた。

己が最後に衝突する相手は、もし万が一敗れる相手とすればそれは

「（嗚呼、綾小路君……）」

その名を、その顔を頭に思い浮かべただけで心が躍る。

自分が本気で戦える相手。心から潰したいと思える相手。

それはずつと前からただ一人だった。

龍園も柚椰も、侮つてはならない相手であることは確かだが彼らではない。

自分が待ち望んでいる人は、焦がれている相手はあの時から一人だけ。

綾小路清隆。

教えてやらなければならぬ。知らしめてやらなければならぬ。

「（早く貴方と戦いたい。貴方を完膚なきまでに叩き潰したい！）」

坂柳有栖は宿敵おもいびとに誓う。

勝つのは、私だと。

快活少女の決断と彼の昼食。

「一之瀬、もうDクラスと協力するのは無理じゃないのか」

「神崎君……」

学校の敷地内にあるカフェ。テーブル席で向かい合っているのはBクラスの神崎と一之瀬。

二人が話題に上げているのは言わずもがな、つい先日行われた特別試験についてだ。

「クラスポイントを見ても、今回Aクラスと俺たちBクラスが的にかけられたことは明らかだ。どう考えても龍園と黛が組んだと思えない」

「うん、そうだね」

影を落とす一之瀬を慮ってか神崎は首を横に振る。

「別に俺は黛の選択を卑怯だとは思ってないぞ。クラスを勝たせる上で最も成功率が高い選択肢が、龍園との共闘だったというのは悔しいが理解できる。優待者を完璧に把握し、クラスを完全に支配している龍園は情報源としてはこの上なく適任だったんだろ」

ただ、と神崎は続ける。

「それをすぐに理解できたのは俺やお前だけだ。今回の結果でクラスの中では少なからずDクラス、黛に対して不満が出始めるだろう。あいつらにしてみれば、無人島で自分たちを助けたと思ったら今度は裏切ったようにしか見えないだろうからな。自分たちを油断させて出し抜きたいけ好かない奴。そう思ってもなんらおかしくないことじゃない」

「そうかもしれないね」

「その上で今一度聞く。まだ、Dクラスと協力する姿勢は変わらないのか？」

Bクラスを代表して神崎が問う。

返答次第では、この場でクラスが真つ二つに分かれるかもしれない

い。

故に半端な答えは許さないと言わんばかりに神崎はまっすぐ一之瀬を見つめる。

一之瀬は暫し間を空けた後、己の中で出た答えを示す。

「もしこれから先、他のクラスと協力して挑める試験があったら私は今までと同じようにDクラスと協力関係を結ぶつもりだよ」

「理由を聞かせてもらっていいか？」

コクリと頷いて一之瀬は続きを話す。

「クラスポイントの差が縮まって私たちBクラスとAクラスの差は80ポイント。そしてCクラスとの差は50ポイントになってるよね」
「ああ。Aクラスの背が見えてきたと同時にCクラスも迫ってきているから油断は出来ない」

「Aクラスは葛城君主導で動いた結果特別試験2回ともクラスポイントを増やせなかった。それどころか私たちとの差を詰められて危険な状態にある。だからここからは新しいリーダーがクラスの舵を取ると思うの」

神崎は脳裏に一人の少女を思い浮かべる。

「坂柳か……となると簡単にはいかないだろうな」

「坂柳さんは穏健派の葛城君とは真逆の武闘派。正面からぶつかるのは分が悪いと思う。そしてそれは龍園君も同じ。だから二人と戦うためには作戦をしつかり考えておかないといけない」

「確かにあの二人とやり合うなら味方は多い方がいい。だがDクラスが素直に応じるのか？ 上のクラスと手を組むことのリスクさはあいつらも分かっていると思うが」

「Dクラスのポイントは542でCクラスと300以上離れてる。つまり現状はA, B, Cで群雄割拠していて、Dがそれに出遅れてる状態ってことだよ。だから協力を仰ぐなら、AクラスやCクラスよりも圧倒的にやりやすいと思うんだ」

「DクラスはCクラスに追い付くことが出来る。まあメリットとしては十分だな。だが俺たち含め3クラスがやり合っている中で漁夫の利を狙わないとも限らないぞ？ 見方を変えれば、今の状況はDクラ

スにとっては動きやすい環境だ。上のクラスが三つ巴になっている中で虎視眈々と策を練っていないとも限らない」

神崎は慎重な男だった。

状況を鑑みて最悪の結果を想定しているその在り方は副官として至当と言えるだろう。

しかしその点は一之瀬も考えているようで指摘に対して表情を変えろことはない。

「そうかもしれない。でも、今回の件で一つ分かったこともあるよ」

「どういうことだ？」

「今回黛君と龍園君は手を組んだ。けどそれはあくまでお互いに利害が一致したから。黛君は優待者の情報を得るため、龍園君はクラス間のポイント差を埋めるため。目的は違ってもお互いのクラスを攻撃対象にしないって条件で二人は協力体制を作ったはず。本来敵同士の関係でもお互いに共通の敵がいれば協力は成り立つ」

「異越同舟。それをあの二人は体現してみせたということか」

「うん、その事実は一見すると他のクラスを脅かすものに見えるけど、一つの活路でもあると思うんだ。要は共通の戦う相手がいって、その上でお互いにメリットがあれば手を結ぶことが出来る。黛君が龍園君と手を組めるってことは、私たちにもそれは可能ってことだよ」

「ならAクラスかCクラス。つまり坂柳か龍園を敵と定めた上でDクラスにメリットを用意すれば、黛はそれを呑むということか」

「状況的に考えるとCクラスかな。私たちはCクラスとのポイント差を離せる。DクラスはCクラスとのポイント差を縮められる。Dクラスにとっても、手を組むなら私たちは選択肢として適しているはずだよ」

つまり一之瀬は打算的な思惑を含めた上で、Dクラスとの共闘を選んだ。

今まで協力関係を結んでいたからではない。

ここから先、手を組むのに最も適していると判断した上での決断。

神崎は改めて認識する。

一之瀬帆波はただ周囲を纏め上げられるからリーダーになったの

ではない。

ただ周囲に認められているからリーダーになったのではない。大局を見極め、先の未来を予見し、計略を巡らせることが出来る。勿論リスクはあるのだろう。決して安全な策ではないことは明白だ。

しかしそれを理解し、それを踏まえた上で選択した。

物腰柔らかな雰囲気と言動で隠されているが、彼女の戦略的思考は他クラスのリーダー格と引けを取らない。

虎視眈々と策を練る。

Dクラスに対して、いや正確には柚椰に対して使った言葉だが、それは一之瀬にも当てはまることだと神崎は思う。

調和を重んじる平和主義。

一之瀬帆波に対する周囲の認識は正しくそれだろう。

しかし彼女の真の姿はそんな生易しいものじゃない。

彼女は状況によっては相手が旧知の仲であろうと利用するだろう。用意周到且つ合理的な策を講じる策略家。

坂柳有栖や龍園翔のように目に見える強さではなく、芯の奥に秘められた強さ。

頭角を現してはいないが彼らと遜色ないほどの能力を備えている。

知る人ぞ知る彼女の姿。

それは能ある鷹が爪を隠すが如く。

『臥龍』。

嘗て軍師として名を馳せた者に付けられた言葉。

いずれ天に昇る龍。今はまだ眠っている傑物。

一之瀬帆波を形容するならば、その言葉が当てはまるだろう。

「……分かった。そこまで考えているなら俺も言うことはない」

神崎にとつて、一之瀬の答えは納得のいくものだった。

もし一之瀬が単なる義理人情で協力関係を続けると言ったのなら

彼は反対するつもりだった。

しかしそれは杞憂だった。

彼女は戦略的観点から見た上で、それが合理的且つ効果的であると

判断を下していた。

リーダーとしての在り方をしかと見せた。

ならばこれ以上言葉は不要だった。

「Bクラスのリーダーはお前だ。お前がそう判断したならそれを補佐するのが俺の仕事だ。クラスの方は心配するな。不満がある奴がいたら上手く宥めておく」

「神崎君に任せきりには出来ないよ。そのときは私も皆にちゃんと自分の考えを話すよ」

「そうか。だが一之瀬の決断なら皆従ってくれると思うがな」

一之瀬を安心させるために宥めておくと言った神崎だったが実のところその心配は要らないことだと思っていた。

Bクラスは決してお人よしだけが集まったクラスではないが、足並みがバラバラというわけでもない。

個々が何が正しく、何が間違いか判断して動くくらいには自分の意志を持っている。

その上で、一之瀬帆波という女生徒がクラスを引っ張る立場に相応しいと皆が判断したのだ。

周囲とのコミュニケーション能力に長けており、学業も上の上。

クラスメイトが彼女に対して尊敬の念を抱くのは当然の帰結だろう。

彼女の下した決断ならば、彼らも納得するであろうことは神崎も分かっていた。

「ともあれ一之瀬を支えるのが俺の仕事だからな。出来る範囲のことはさせてもらおうさ」

それが副官たる自分の責務であると胸に秘め微笑みを浮かべる神崎。

彼につられて一之瀬も笑う。

「うん！ よろしくね、神崎君！」

「テセウスのパラドックスを知っているかい？」

少女は雑誌に向けていた意識をその問いを投げた男へ移す。

彼女に問いを投げた男、黛柚椰はパソコンのモニターに向き合っていたが視線だけを彼女に向けている。

その視線を鬱陶しく思いながらも無視をすればより面倒なことになると分かっている少女は深々とため息をついた。

「……中学時代、アンタの家の馬鹿デカい本棚にあったから読んだことある。哲学の一種でしょ」

少女、伊吹漣は記憶の片隅にあったそれを引っ張り出して答える。

嘗て目の前の男の家によく行っていたとき、本棚から手当たり次第に本を読んだことがあった。

柚椰が何を読んでいるのか、何を好んでいるのか知りたくて本棚から手に取り続けたいくつもの本。

今となつては黒歴史としか言いようのない過去を掘り返して苦い顔を浮かべる伊吹。

そんな彼女の感情など意に介さず柚椰は機嫌良く会話を続けた。

「そう。テセウスの船。パラドクス、つまりは矛盾を指す例として用いられる有名な問題。同一性の問題、とでも言うべきかな」

椅子を回転させ、モニターから窓の外へと身体と視線を移す。

「プルタルコス、ヘラクレイトス、アリストテレス。各々がこの同一性の問題について独自の例を用いてパラドクスに対する答えを主張している。根幹の主義や定義が異なれば、得られる解もまた異なるというのは自然なことだ」

「特定の物に対して、構成するパーツが全て置き換えられたとき、過去のそれと現在のそれは同一であると言えるか、だっけ。なんか英語の表現でもあったよな」

『おじいさんの古い斧』だね。刃は三度交換され、柄は四度交換されているが、同じ古い斧である。尤も、これに関してはそこまでいくと最早ただの斧でしかないことへの皮肉として用いられるが」

「パーツを替えて替えて替えて……全部新品になったらそれはもう元の物じゃないだろ。まるつきり別物だ」

「いや、安易に答えを出すのは早計だよ。そもそも、この問題の本質は解を出すことではないんだ」

「はあ？」

わけが分からないことを言う柚椰に伊吹は不可解な疑問符が頭に浮かぶ。

「哲学に対して明確な解を出すことは僕たちがやることではない。それは先人たちが既にやっていることだからだ。今を生きる僕たちがやるべきことは、哲学に対して思考することだ」

「思考、ねえ……」

「テセウスの船の本質は同一性の問題。物を物足らしめているのは構成する要素なのか、あるいは名前や姿形なのか。前者であれば、構成するパーツを全て替えてしまった時点で、それはオリジナルではなく代替品であると言っていい。つまり、どんなものでも取り換えがきくものでしかないということだ。それは唯一無二、オンリーワンというものは存在しないということの証明でもある」

椅子から立ち上がり窓ガラスに手を当て、何かに対して語りかけるように呟く。

「だが、後者であれば……」

男の視線の先には何が映っているのか。

それを伺い知ることは出来ないが、男の考えていることは間違いなく、どうしようもなく、この上なく質の悪いものであることを伊吹は知っていた。

『情念は過度でなくては美しくありえない。人は愛しすぎないときには十分に愛していないのだ』……というのは誰の言葉だったかな
「ブレイズ・パスカル。フランスの思想家でしょ」

これも知っている。嘗て読んだことがある故に記憶の片隅にあった一節だ。

伊吹が即答したことが面白かったのか柚椰は小さく笑声を漏らす。
「中途半端な愛は愛ではないと、どんな感情であれ過度であるからこ

そ美しいと。中々に詩的なことを言ったものだ」

彼の言葉を引用する者には用心せよと言ったのは誰だっただろうか。

それはさて置いても、柚椰はこの一節が気に入っている。

ともすれば人の感情というものは、振り切れたときにこそ美しさを見せる。

それは熱せられた水が蒸気となって吹き上がる瞬間のように。

刻々と、着々と感情を滾らせて、それが抑えられたなくなった瞬間にこそ人は輝くのだと。

「嫉妬、憐憫、博愛、情欲、依存、執着、狂気、恋情……」

思いつく限りの感情の名前を並べてみるが、どれも非常に魅力にあふれている。

「さて、君にはどんなパーツが似合うだろうか」

その言葉の矛先は、浮かべる笑みの矛先が誰なのか。

全ては彼のみぞ知る、といったところだろうか。

「ところで潘ちゃん——」

「お昼でしょ。作ってある。っていうか昔から思ってたけど家に素麺と豆腐しかないってなんなの？」

部屋に来て冷蔵庫を開けた時のことを思い返す。

あったのはお茶とコーヒーのペットボトルと豆腐のみ。

冷蔵庫の上には箱で買ったと思われる素麺の山。

あの頃から何も変わっていない柚椰の食生活に伊吹は脱力した。

予め自前で食材を持ってきておいて正解だったと自分自身を褒めたいくらいだった。

「豆腐はタンパク質豊富な素晴らしい食べ物だろう？ 素麺も春夏秋冬冬問わず食べることが出来る。素麺と冷奴なんて夏にうってつけの

メニューだ」

「アンタはそれを一年中やってんでしようが。鶏むね肉買ってきおかず適当に作ったから食べなよ」

「君の手料理は久しぶりだね。昔から君は料理が上手だったから楽しみだよ」

「いい加減自炊覚えなよ。自分で料理するのもいいものだよ」

「手の込んだものは外で食べればいいじゃないか。この学校の敷地には食事が出る所もたくさんあるんだ。幸いポイントには困っていないからね」

「ほんと興味ないことに関してはどことん手抜きだねアンタ。そんな食生活続けてると、いつか身体壊すからね」

「君が食事を作ってくれるのなら、僕がわざわざ自炊をする必要も、身体を壊すこともないだろう？」

あっけらかんと言う男に対して伊吹が深いため息をついてしまうのは仕方のないことだ。

「私はアンタの家政婦でも奥さんでもないんだけど」

「ちゃんと給料は払うよ」

「……色付けてよね」

「勿論」

「言つとくけど色付けるって言っても馬鹿みたいな金額渡さないですよ？ 正直、中学の時に5万渡されたときはちよつと引いた」

思い返すのは昔同じように柚椰に手料理を作ってあげた時のこと。

そのときも彼は今と同じように給料と称して茶封筒を伊吹に渡した。

材料費、手間賃を加味しても精々4, 5千円くらいだろうと踏んでいた。

しかし家に帰って封筒を開けてみたら入っていたのはなんと福沢諭吉が5人。

予想外すぎる金額に暫く呆然としたことを彼女は覚えていた。

「気持ちなのだから素直に受け取っておけばいいというのに。君は真面目だね」

「いくらなんでも渡し過ぎなんだよ」

雑誌を放り投げて椅子から立ち上がると伊吹はキッチンの方へと引っ込んでいった。

作っておいた昼食を取りに行ったのだろう。

「アンタも食べるだけじゃなくて皿とか箸とか出してよね。あと飲み物も」

「はいはい」

伊吹の後を追うようにキッチンへ向かい、皿と箸を取ろうとした柚榔だったが、ふとあることに気づき彼女に声をかける。

「ところで、君も一緒に食べるのかい？」

「嫌だつて言つてもなんだかんだ理由付けて同席させるつもりなんですよ」

「なるほど、君もお腹が空いていたんだね」

「……朝起きるの遅くて食べてないんだよ」

そっぽを向きながら答える伊吹を微笑ましく思い柚榔は笑った。

「夜更かしは肌によくないよ？」

「蹴り飛ばすよ」

その後、談笑しながら昼食をつつく二人の姿があったという。

格闘少女は休暇を楽しむ

「澪ちゃんは占いというものを信じるかい？」

雑用をしていた伊吹にそう尋ねたのは家主である柚椰。

彼が脈絡のない問いかけをするのは珍しいことではないため伊吹はもう驚くことはない。

「……何？ 藪から棒に」

「最近この学校で流行っているらしい。なんでもモールに占い師が来ているようだ」

「ふーん、意外だね。アンタがそんなの気にするなんて。占いなんて興味ないと思ってた」

「処世術としてね。いつの時代も占いというスピリチュアルな娯楽は人の興味を惹くものだ。相手に関心を持たせるために、会話の切り口として知っておくに越したことはない」

「そういう理由ね……で？ 占い師が来てるってどういうことよ」

「どうやら期間限定で外部から出張扱いでやって来ているらしい。衣食住に事欠かないとはいえ、ここは基本的に外の世界と関わりを持つことは出来ないからね。物珍しさからか一層注目を集めているようだ。地下労働に従事する債務者にビールを差し入れるようなものさ」

「アンタもそういうの読むんだね……」

「そのタブレットに全巻入ってるから好きに読んで構わないよ」

柚椰はベッド脇に置いてあるタブレット端末を視線で指す。

とにかく、と彼は続ける。

「外からの来客。持ち込まれたものは占いという神秘的な娯楽。ここ生徒が惹かれるのも納得だ。どんな方法で、何を占ってもらえるのか。それがどれほどの精度なのか僕は興味がある」

「ふーん、じゃあ行ってくれば？」

勝手にやっつてろと言わんばかりに伊吹はなげやりだ。

「そこで澪ちゃん、実際に現地に行つてその占いとやらを体験してき

てくれないかい?」

「はあ?　なんで私が」

「これから暫くの間は少しやることがあつてね。だから僕の代わりに君に占ってもらいに行つてほしいんだ」

「私占いとか興味ないし……」

「おや、このまえ本屋で手相占いの本を買つていなかったかな?」

「……なんで知つてんの」

「たまたま情報が入つてきてね。なにか手相で気になることでもあつたのかい?」

「アンタとまた関わることでこの先不幸なことにならないかの保険よ」

「これは手厳しいね」

プライベートが筒抜けであることへの意趣返しとでも言うように伊吹は毒を吐くが当の柚椰は涼し気に流している。

「君も全く興味がないわけではないだろう?　何を占ってもらうかは任せる上に当日の出費は給料扱いで全額出そう。悪い話ではないと思うんだが」

「そうね……当日豪遊してアンタに領収書送りつけるのも悪くないかも」

「そうだね。友達でも誘つて遊んでくるといい。残り少ない夏休みを存分に謳歌してくれ」

「……バカにしてんの?」

暗に自分に友達がいないことを揶揄われたと思つたのか伊吹は柚椰を睨む。

「君にとつてもいい機会だと思うよ。今後の学校生活を有意義に過ごす意味でも、友達は作つておいた方がいい。損得なしに付き合える相手というのもいいものじゃないか」

その言葉がふざけていると思つたのか伊吹は鼻を鳴らす。

「生憎Cクラスに好き好んで関わりたいと思える奴はいないんだよ」

「別に自分のクラスではなくても、他所のクラスで作ればいいだろう?」

「それこそ無理だ。他クラスと軽率に関わると龍園の奴に目を付けられかねない」

「そうか。彼の所為で今後はどのクラスも互いに監視の目を光らせそうだからね」

「どっかの誰かさんも共犯だったみたいだけどね」

「それはそれは、悪い奴もいたものだ」

白々しい会話の応酬に両者とも笑みが零れる。

「ていうか、その手のお遣いを頼むならもつと適任がいるだろ。それこそ櫛田とかのほうが違和感もない」

「彼女は別件で動いてもらっているよ。と言っても僕が直接頼んだわけではないがね」

「前に言ってた勝手に動いてるってやつ？」

以前彼が言っていたことを思い出して伊吹は尋ねる。

「僕と彼女の繋がりには広く知れ渡っている。だからこそ彼女も理解しているのだろうね。どんな人間が自分に接触してくるのか。自分がどんな人間と接触するべきなのか」

柚椰が言わんとしていることが凡そ察せた伊吹だったがそれ以上深く聞くことはなかった。

そもそもとして櫛田など伊吹にとつてはどうでもよかつたからだ。

「ふーん……まあどうでもいいけど。精々背後から刺されないようにね。あの手の人間は常に勝ち馬に乗りたがるタイプだろ？ アイツがアンタが泥船だと判断すれば案外あっさり他所の船に乗り換えるかも」

忠告にも似た伊吹の言葉を聞き、柚椰はどこか可笑しそうに笑う。

「ふふっ、そうかもしれないね。だが他に船が存在しなければ、たとえ泥船だろうと乗らざるを得なくなる。いつか沈むと分かっているけども、黙って一人水底に沈むなんて殊勝なことは、彼女には間違つても出来ないのだから」

櫛田桔梗という女の在り方を理解しているからこそ、柚椰は彼女に信頼を置いている。

自由に飛び回りはすれど、自らの首を絞めるようなことは決してし

ない。

彼女の根底にあるのは生存本能ただ一つ。

どれだけ好きに立ち回ろうと、最後に重視するのは自分の身が守られるか否かのみ。

自己防衛への執着に関して言えば彼女はこの学校の生徒の中でも飛び抜けて強い。

考えの行き着く先が己自身に帰結するのならば、どこまでも自分本位であるのならば――

「どこまでも人間らしい人間だよ彼女は。だからこそこの上なく愛おしい」

そう語る彼の相貌は悪辣に歪んだものでは決してなく、寧ろどこまでも美しかった。

異性はおろか同性でさえ思わず見惚れてしまいそうなほどに。

「……」

だが、そんな彼を見ても伊吹は顔色ひとつ変えることはない。

何故ならば理解しているからだ。

彼が誰かを『愛おしい』と形容するときは、彼がそのような顔を浮かべるときは――

「〔愁傷様」

――対象が辿る結末が、対象を取り巻く環境が、目の前の男によって好き放題に引っ掻き回されると誰よりも知っているから。

「で、結局私はいつ行けばいいわけ？」

「三日後、だね。その辺りが丁度いいな」

パソコンのモニターに目を向け、何かを確認しながら柚榔は日取りを指定した。

「また妙なこと言うね。明日とか明後日とかならまだしもなんで三日後？」

「その辺りがタイミング的には一番うってつけだと思ってね。詳しくは行けば分かるよ」

詳しくは話すつもりはないらしく、どこか勿体ぶるような物言いを
する柚椰に伊吹は呆れながらも素直に諦めることとした。

彼が煙に巻くような言い回しをするのは今に始まったことではな
いし、どの道すぐに分かることなのだから詮無きことだった。

「ところで滯ちゃん」

「今日は麻婆豆腐」

皆まで聞く前に伊吹が顎で示したキッチンには既に皿に盛られ
ラップにかけられた料理が二つ置いてあった。

今やっている雑用の前に予め作っていたのだろう。

「おお、それはいい」

告げられた料理に想いを馳せているのか柚椰は楽し気な笑みを浮
かべる。

「食べるなら温めるけど？」

「そうだね。いい頃合いだし夕食にしようか」

時刻は午後7時過ぎ。夕食にはちょうどいい時間帯だ。

その言葉を聞くと伊吹はキッチンへと向かい、置いてあった料理を
電子レンジに入れて温め始めた。

「滯ちゃん、コーヒーと紅茶どちらがいいかな？」

「今日はコーヒー」

料理を温めている間、飲み物を用意しようとした柚椰の問いに伊吹
が短く答える。

「アイス？ それともホットかい？」

「このクソ暑い日にホットって言うと思う？」

「涼しい部屋ならホットでもいいんじゃないかな？」

「今日の麻婆豆腐は辛いから冷たい方がいいんだよ」

「おや、なら僕もアイスコーヒーにしよう」

冷蔵庫からコーヒーのペットボトルを出すと二人分のグラスに注
ぐ。

それらをスプーンと共にテーブルへ運ぶと、程なくして伊吹が二人
分の料理を持ってテーブルにつく。

二人は手を合わせると早速一口、また一口と食べ始めた。

伊吹が言っていた通り、四川風の痺れるような辛味が口内を刺激していた。

合間に飲む冷たいコーヒーが火照った舌を癒すのにちょうど良い。「そういえば……占いに行くのは別にいいんだけど、その間アンタは何してるわけ?」

食事の合間、伊吹がそう尋ねると柚椰は麻婆豆腐から視線を外し、どこか楽しそうに微笑んだ。

「今後を見越した下準備、かな」

「最悪……」

三日後、柚椰に指定された日時に言われた通りモールに繰り出した伊吹だったが、彼女は現在進行形で雇用主に対して呪詛の念を送っていた。

そもそもこんなことを頼む上に日付まで指定していた時点で怪しいとは思っていたが、こういうことだったのかと実際に現地に来てようやく彼女は理解したのだ。

「なんでアンタがこんなとこいんのよ」

「ここで占いをやってるって聞いてな。どんなものかと思って来てみただけだ」

占いをやっているフロアに出来ていた待機列で出くわしたのはDクラスの綾小路清隆だった。

先の特別試験で多少なりとも関わりがあったからか両者とも相手がこの場にいることに気づくのが早かった。

彼も伊吹同様誰か連れてやってきているわけではなく、お一人様の状態だ。

その有様を伊吹は鼻で笑った。

「アンタ一人で? 夏休みなのに一緒に来る相手もないの?」

「それ、お前が言うなってツツコミ待ちか？」

「蹴っ飛ばすよ」

キツと睨む伊吹に対して綾小路は乾いた笑いを漏らす。

見たところ目の前の少女の蹴りはそれなりに強力だと伺えたため口を噤む。

リスクヘッジの観点から見てもここで不用意に伊吹を煽る意味はないと判断した綾小路は愛想笑いで誤魔化すことを選んだ。

「大体二人一組じゃないと受けられないってどういうことよ。占いで普通一対一でやるもんじゃないの」

「そうだな。俺もそう思う」

「で、アンタは誰か誘って出直さないわけ？」

「元々そんなに興味があるわけじゃないからな。ペア以外無理だということなら諦めるしかない。そっちはいいの？」

「……まあ未練が無いと言えば嘘になるけど」

柚椰からの依頼が達成不可能になってしまうこともそうだが、そもそもよく当たると噂の占いとやらを体験したかったのも嘘ではないのだ。

何を占ってもらおうか具体的に決めてきてはいなかったが、ここであっさり諦めて引き返すのはどこか残念に思えてならなかった。

しかし当の占いが一人では受けることが出来ないとされている以上、これ以上彼女にできることはなかった。

いや、厳密には一つある。

己の欲求と柚椰からの依頼、その両方を満たせる方法が一つ。

しかしその選択肢は伊吹にとって論外と言わざるを得ないものだ。

故に彼女は――

「帰る。時間の無駄だった」

苦渋ではあるが諦めることとし、踵を返した。

ところがそんな彼女の背に綾小路が余計な声をかけた。

「同じクラス的女子でも誘えばいいんじゃないか？ 友達の一人や二人いるだろ」

「……は？」

分からない。何故だか分からないが綾小路のその一言は、伊吹の癪に障った。

諦めなければならぬことに対する苛立ちを抑えていたこともあつてか彼女は突沸にも似た怒りに包まれる。

「すううう……ふうううう……そういうアンタは友達いんの？」

大きく、それは大きく深呼吸した後、それはそれは底冷えするような冷たい声で伊吹は尋ねた。

勿論射殺さんばかりの眼光もセットで付いている。

入学して間もない頃の堀北に匹敵するかそれ以上の威圧感に流石の綾小路も僅かに冷や汗を浮かべた。

「お、俺も話し相手くらいはクラスにいるぞ。……2、3人くらい」

「休みの日に遊びに行ったりは？」

「それは……」

記憶を遡ってみても、クラスメイトから遊びに誘われたことは――

「……に、二回くらいだな」

「どうせ櫛田とかでしょ。誰でも誘いそうじゃんアイツ。それこそアンタみたいなのでも」

あまりに辛辣な物言いに再び以前の堀北を思い出した綾小路は愛想笑いを漏らす。

「随分な言われ様だな……そういうえば、櫛田はCクラスの生徒とも仲が良いのか？」

「さあ？ 私を知るわけないだろ」

世間話のつもりで振った話題もバツサリ切り捨てる伊吹。

刺々しい雰囲気は初めて会ったときから何一つ変わっていない。

これまでのやり取りからも伊吹の他人に対する接し方は敵意を振りまいているようなものだ。

根本的に他人と接することが苦手なのかもしれないと綾小路は推察した。

「刺々しいな。誰にでもそんな感じなのか？」

「別に、ただ他人と話すのが緊張するっただけ。緊張するから神経を

尖らせる。昔からの癖なんだよ。今更どうにかなるものじゃない」

敵意にも似た雰囲気は緊張によるものであると伊吹は語る。

他人と会話をする際に身構えてしまうが故につい刺々しい態度になっってしまう。

良く言えば人見知りなのだろう、と綾小路は分析する。

「いや、そうでもないと思うぞ。考え方を変えればいい」

「は？ どういうこと」

思いもしなかった言葉に伊吹は興味を持ったのか綾小路に耳を傾け始めた。

「例えば、お前はコンビニやファミレスの店員に対しても緊張するのか？ ポイントカードの有無や注文を聞かれたときに」

「そりやまあ……流石にしないけど」

「じゃあそいつらと学校の生徒、両者の違いは何だと思う？」

「……今後顔を合わせるかどうか、とか」

「その通りだ。だからこそ、そこに様々な想像が生まれる。自分の一挙手一投足が相手にどのような感情を抱かせるのか。相手から見た自分がどう映るのか」

それは良く言えば想像力豊か。悪く言えば被害妄想の類だろうか。

コミュニケーション能力が高い人間は、得てしてその想像力をプラスの力に変えている者達だ。

相手に自分が素晴らしい人間のように見せる術を、どうすれば相手に好かれるかを想像し、実行出来る。

それは無意識に行えるタイプと意識的に行うタイプに分かれるだろうが、やっていることは凡そ変わらない。

想像力をプラスに働かせられるものは自身を人気者にすることは難しくはないだろう。

だがマイナスに働いてしまう者は……伊吹のようになってしまうのだろう。

「占い師相手だと面と向かって色々と込み入った話をすることもあるだろ。だから緊張する部類の相手かもしれないな。だが結局は想像するかしないかだ。深く考えなければ緊張することもないんじゃないかな」

いか？」

「ふーん……随分饒舌に語るね。いつもそれくらい喋れば多少なりともクラスに馴染めるんじゃないの」

「寧ろ独り身だからこんなしような知識が身に着くんだよ。どうして自分には友達が出来ないのか考え始めて、どうして緊張するのかを考えて、最終的には人間はどこからやってきてどこへ行くのか考えるようになる」

「……キモイね、アンタ」

「やめろ。女子のキモイは結構男子の心を抉るぞ」

シンプルかつ鋭利な伊吹の言葉の矢が綾小路の心に突き刺さった。

「とりあえず俺は帰る。お前は？」

「私もそうするつもり。一人じゃダメだっていうならどうしようもないし。天中殺には興味あつただけどね」

「天中殺……不運な時期のこと、だったか」

単語の意味は理解しているからか綾小路はそう尋ねる。

伊吹も彼が占いの知識が深くないことを察したのか呆れながらため息をつく。

「干支になぞらえて自分の悪い時期が見えるって占い。うちのクラスのリーダーがあんなだから厄介事に巻き込まれないかどうか知りたかったんだけど……まさか噂の占いが恋愛メインだとは思わなかった」

恋愛脳の少年少女達を馬鹿にするような目で伊吹は長蛇の列を見る。

「学生からすれば恋愛は青春の一コマだろ。占いに頼ってもおかしいことじゃない。それに案外恋愛以外も占ってもらえるかもしれないぞ」

綾小路がそう言うと、伊吹はニヤツと笑みを浮かべた。

「ふーん……ならアンタにも協力してもらおうかな」

「えっ」

それはなんとなく発した励ましの言葉が藪蛇になった瞬間だった。

格闘少女と無機質少年の奇妙な一日

『やあ、調子はどうかな?』

『ああ君か。今日も良い日だね』

『例の件、上手くいったかい?』

『接触は成功。交渉も問題なかったよ。まあ今回の交渉は相手にとっても断る理由はないからね。簡単な作業で50万。こんなに楽な仕事はない』

『今回の件が成功すれば大きな一歩だ。俺や君にとっても。そして誰かにとっても、ね』

『それにしても、君も面白いことを考える。実にデンジャラスでクレイジーだ』

『平和な世界に長く居れば居るほど、人は無聊な日常に満足できなくなるものだ。だからこそ小さな摩擦が必要なんだ。水面に投げ入れた一つの小さな石が波紋を広げるように、それはいずれ大きな波を生み出す布石になる』

『何はともあれ、私もただの橋渡しで月給以上稼がせてもらったから深くは聞かないよ。今後も何かあれば遠慮なく言ってくれたまえ。何分私も刺激が無くて退屈だったんだ』

『ああ、頼むことがあればまた声をかけるよ』

ケヤキモール5階。生徒でゴった返しているフロアの一角で一組の男女が睨み合っていた。

正確にはどちらも睨んではいないのだが見つめ合っていると形容するには甘い雰囲気が無塵もないのだから仕方がない。

男の方、綾小路清隆は眼前の少女の発言を聞き間違っていると思いたかつ

たのか今一度聞き返す。

「悪い、俺の耳がおかしくなってるかもしれない。もう一回言ってもらっていいか？」

彼がそう尋ねると女の方、伊吹漣は腕を組みながら傲岸不遜といった態度で先ほど言った言葉を復唱した。

「占いを受けられる条件はペアであること。私もアンタも同伴者はいない。ならアンタが私の同伴者として占いに同行しなさい。分かった？」

「理屈は分かった。だがいいのか？俺と一緒にいるところをCクラスの奴に見られたら面倒なんじゃないか？」

「それアンタが言う？その心配は寧ろアンタがすべきなんじゃないの？無人島でのこと、忘れたわけじゃないでしょ」

伊吹の言う通り、二人でいる所を見られて面倒なことになる確率は綾小路の方が高いと言えるだろう。

Cクラスの中で綾小路の顔と名前が一致する人間は精々2、3人。逆にDクラスで伊吹のことを知らない者は一人とていないだろう。

一歩間違えればDクラスがバラバラになりかねなかったほどの不和を招いた張本人なのだから。

もしこの場をDクラスの誰かに見られれば綾小路が吊るし上げられることも考えられた。

しかしその指摘に対して綾小路は別段気にはしていなかった。

「お前のしたことはモラルに違反する行為だったかもしれない。でもこの学校はお前の行動を問題にしなかった。まさか全く認識していなかったとは思えないし、まず間違いなく学校側は知っていたはずだ。でもお前やCクラスには何もペナルティは課せられなかった。それは学校がお前の行動を是としたことの証明でもある。ルールの穴を突くことは作戦の一つ、つまりは実力の内だって学校は判断したんだろう。ならそこに文句を挟む余地はない」

「理屈ではそう言っても感情で納得できないこともあるでしょ。柔軟な思考を持てる人間ばかりじゃない」

「そうかもしれないな。だが、感情論で動くような人間はどの道この

先は生き残れない。俺はそう思うが」

キツパリとした物言いです。伊吹は少し感心したのか表情が柔らかくなった。

「アンタもハッキリ言うんだね。実は結構思慮深いんだ」

「用心深いってだけだ。俺には堀北や黛みたいな実力はないから色々と考えを巡らせることしか出来ない。ネズミが危険察知に秀でているのと同じだ」

つまりは小心者であるが故の処世術だと主張する綾小路を伊吹は笑うことはなかった。

謙遜にも取れる男の発言を彼女はどこか遠いところを見るような目で聞く。

「まあいいんじゃない。アンタみたいに冷静にモノを見れる人間はクラスに貴重な存在だと思うし。少なくとも、何の役にも立たなくせに一丁前に文句ばかり言う無能と比べればアンタは有能だと思うよ」

どこか自分を買っているようなことを言う伊吹に綾小路は少し驚いた。

「意外に高評価だな。俺みたいな奴のことはてっきり嫌いだと思ってたんだが」

「別に。ただアンタよりも劣ってる奴がCクラスにもいるってだけ。優待者当てのときにいたでしょ？ 真鍋って奴。ああいうタイプの方が私はよっぽど嫌いだね」

バツサリとクラスメイトをこき下ろす伊吹。

あくまで相対評価での話だったのだと理解した綾小路はそれ以上何か言うことはなかった。

ともかく、両者納得したところで彼らは待機列に並んだ。

スタッフが二人組であることを確認すると整理券と思われるものを綾小路に手渡す。

列を確認したところ今現在8組待ちのようだ。

占い師が一人に対応すると考えれば、一組当たり10分と見積もっても待ち時間は一時間以上と考えられる。

「しばらく待つことになりそうだな」

「まあ仕方ないでしょ」

友達ですらない関係の二人にとって一時間以上の待ち時間は中々に辛い。

「別に無理して話題振らなくていいから。雑談するような仲じゃないでしょ」

「そうだな……」

相手が沈黙を気にしないというのならこれ幸いだと綾小路も黙って列が進むのを待っていた。

「次の方どうぞ」

小さな仮施設の中から、中へ促す声が出たのは二人が列に並び始めて二時間が過ぎた頃。

結局一組15分近く使っていたようで、かなりの間立ちっぱなしだった。

普段長時間立ち続けることなどない者にとっては苦痛でしかない時間だっただろう。

現に綾小路も伊吹もふくらはぎや足の裏に疲労からくる鈍い痛みを感じていた。

「結構待たされたね」

「そうだな」

言葉少なに中へと入った二人。そこにはいかにもといった雰囲気の内装が広がっていた。期間限定の仮店舗とはいえかなり本格的だ。暗めの照明に何に使うのか分からない分厚い本、それっぽく置かれている水晶玉。

そしてフードを被った占い師とおぼしき老婆が腰掛けている。

「お掛けください」

老婆に促され二人は丸椅子に座る。

客が座ったのを見計らい、老婆は二人の前に小型の機械を置いた。敷地内の施設でよく見る学生証を読み込むカードリーダーだ。

「まず最初に料金の支払いを」

内装やら装飾やはいかにもオカルトチックなものにもかかわらず、ここはデジタルなのかと綾小路は内心ツツコミをいれつつ、学生証を取り出した。

「ところで何を占ってもらえるの？」

同じく学生証を取り出した伊吹が老婆に尋ねる。

「学業、仕事、恋愛、好きなものをどうぞ」

不気味な笑みを浮かべて老婆は答える。喋り方もミステリアスな雰囲気を漂わせている辺りプロなのだと言えさる。

しかし何度も言うがテーブルに置かれた料金表とカードリーダーが致命的にミスマツチだ。

料金体制は細かく分類されており、老婆が口にした項目は『基本プラン』に含まれているようだ。

セットとして設けられているプランもいくつかあり、人生の行く末を見ることが出来るというコースも用意されている。

ただお一人様お断りの占いということもあってかやはり恋愛に関するプランが多い。

どのコースも基本的に5000ポイント以上と中々に値が張る価格設定だ。

「結構高いな……」

いくら直近の特別試験で快進撃を続けているDクラスとはいえ、綾小路個人の懐事情としては決して潤っているわけではない。

そのためやたらめったら散財するわけにはいかないのだが、せつかく並んで待ったのだからここで占ってもらわないのも勿体ないと感じていた。

端末でプライベートポイントの残高を確認すると大体10000弱といったところで、9月がもうすぐやってくることを踏まえればなんとかかなる状態だった。

「私は基本プランだけで。あんたは？」

「じゃあ俺も同じで」

お互い大した拘りもないのか、学生証を翳して手早く会計を済ませ

た。

支払いが終わったのを見計らい、早速老婆が占いを始める。

「ではまず……そちらのお嬢さんから。お名前は？」

「伊吹滯」

短く名乗る伊吹。

「私の占いは相手の顔、手、そして心を見る。その中で貴女が見られたくないものも見ることがあるが？」

「別に。好きにして」

その言葉を信じているのかいないのか、さして動揺することなく伊吹は答えた。

老婆は伊吹に両手を出すよう指示し、まじまじと見た後に結果を話し始める。

「まずは手相。生命線から見ると長生きするだろう。大病の気配も今のところ見えていない」

「ふーん」

「次に金運だが、これから良くなると出ている。だが調子に乗って浪費するとすぐに運は離れていくぞ」

「そう」

「学業は普段の積み重ねが肝心じゃな。向上心が糧になると出ている。周りに合わせるよりも己を高めるが吉」

手のひらを見ただけでよくもまあそこまで分かるものだと思いながらも、無粋なことは言うべきではないと綾小路は黙って聞いている。

しかし非科学的なものであるからかどうしても先入観で否定してしまいそうになる。

一体何を以って運気の有る無しの判断を、今後のアドバイスをしているのか。

「最後に恋愛だが……近しいところにいると出ている。だがその道のりは前途多難。しかし案ずることはない。想い続けていれば成就することもあるだろう」

「そう……ありがとうございます」

占いを終え伊吹は礼を言つて頭を下げた。特に何か気にかかるようなものもなかったからか、彼女は別段喜ぶことも悲観することもなかった。

老婆の占いが当たり障りのないものだっただけでも言えるが。

伊吹の番が終わつたので続いて綾小路の番がやってくる。

老婆は先ほどの伊吹にしたのと同じように綾小路の手をまじまじと見た後、つらつらと結果を発表し始めた。

「……なるほど。お主は幼少期なかなか過酷な生活を送っていたらしい」

「誰だって過酷なことなんて一つや二つあるだろ……」

老婆のアバウトな指摘にそりやそうだと内心思いつつも綾小路は黙って聞いている。そもそも未来を予見する占いで何故過去を遡っているのか疑問だ。

しかしこのアバウトさが占いを占いたらしめているのかもしれない。

良く言えば広義的、悪く言えば大雑把にすることで誰しにも該当するようにする。

そうすることで相手は「当たっているかもしれない」と、たとえ今の自分に当てはまらなかったとしても、「もしかしたらそういう面があるのかもしれない」、「これから起こるのかもしれない」と思ってしまう。そういった疑念は頭の片隅に残り続け、後々何か起こったときにその疑問が解決する仕組みだ。

しかし、人間誰しも大なり小なり幸も不幸も訪れるのだからそのプロセスは必然である。

「これは……」

それまでつらつらと語っていた老婆の口が急に止まり神妙な面持ちになる。

「お主は宿命天中殺の持ち主だ」

「うっわ……」

老婆の言葉に驚いたのは当の本人ではなく横にいる伊吹。綾小路本人は意味が分からないのかいまいち反応が薄い。

「ぎつくり言えば、アンタは親と意思疎通や相互理解がしにくかったり、社会から孤立したり、物事が当たり前前の結果に行き着かなかつたりする。まあ苦勞するってことよ」

「それはまた見事なもんだな……」

綾小路の困惑を察してか伊吹が噛み砕いて解説した。

その解説でどうやら良くないことだということは理解できたようだ。

「ちなみにその宿命天中殺つてのはこれからも続くのか？」

「ふむ……確かにその小娘が言ったように宿命天中殺というのは天中殺の中でも生涯離れないとされているもので苦難を表すものだ」

「小娘……」

「しかしだからといってこの先ずっと不運が続くというわけではない。社会から孤立というのは裏を返せば型に嵌らない自由な生き方に繋がる。相互理解に関しては両親以外の育ての親がいる場合は本当の親子のような関係を築けることを示している。いずれにしても、その苦勞が後の運の伸びに繋がることもあるということだ」

占いが始まってからずっと険しかった老婆の表情がいつの間にか慈悲の籠った優しいものへと変わっていた。

「悲観することはない。自ずと道は開けるぞ」

そう締め括って占いは終了した。二人が椅子から立ち上がった引き上げようとすると、老婆が呼び止めた。

「最後にお主らに助言じゃ。今日は遠回りせずに真っすぐ帰ることを勧める。余計な道を通ると足止めを食らうやもしれぬ。もし足止めを食らった場合は慌てず冷静に協力し合えば乗り越えられる」

そんな予言めいた言葉を聞きながら、二人はその場を後にした。

「それで、初めての占いはどうだった？」

「そっちは……」

「まあまあかな。あの占い師結構有名みたいだし、よく当たるって話

だから」

「そうだな……たかが占いされど占い。そんな感想だ」

「そう」

それ以上話を広げるつもりはないようで、伊吹は投げやりに話を打ち切る。

「当初の目的は達成したわけだが、これからどうするんだ？」

「別に。折角モールに来たんだし適当に店回って帰る」

「いいのか？ さつき占い師が真つすぐ帰った方がいって言ったが」

綾小路は占い師が最後にした忠告の内容が頭に過ったようでそう尋ねる。

しかし伊吹はどこか馬鹿にしたような顔で鼻で笑う。

「ふーん、じゃあアンタは真つすぐ帰れば？ 言う通りにしてればアンタは平和に帰れるんだし」

「占いは楽しんでいたのにアドバイスは聞かないのか」

「そういうもんでしょ。良いことだけ胸に留めてそれ以外は信じない。どう行動するかなんて結局は自分が決めることなんだし」

「まあそれは確かにそうだな」

どうやら伊吹はあくまで自分の意志で行動することに価値を見出しているようだ。

占いはあくまで占い。後の行動は自分自身で選び取るべきだと彼女が考えている。

「列に並ぶ前も思ったが、伊吹のそういうところ俺は良いと思うぞ」

「煽てられても別に嬉しくもなんともないんだけど」

褒めるようなことを言う綾小路を伊吹は眉を顰めて睨む。

彼女の心の壁は一朝一夕で崩せるほど軟ではないということだろうか。

「じゃあここで解散だな」

「元々あの場限りの付き合いだしこの後も一緒に行動する理由もないでしょ」

「それもそうだな。じゃあ、またな」

「ん、もうこんなことないことを願うばかりだけど」

別れの言葉さえ冷たく残して伊吹はモールの人混みに消えていった。

「帰るか……」

一人でウインドウショッピングするのも忍びないと思った綾小路は、占い師の言葉通り真つすぐ帰ることにした。

こうして二人の奇妙な一日は幕を閉じたのだった。

「大体こんな感じかな」

綾小路と別れた後、伊吹は電話で報告を行っていた。

「そうか。それで、占いは君にとって利になる結果だったかい？」

「普通。当たり障りのない結果だったし、気になることもなかった」

「それは良かった。不幸の前兆が見える、なんて言われたら雇用主としては気の毒だからね」

「よく言うよほんとに……で、なんでわざわざアイツと引き合わせたわけ？」

「なんのことかな？」

「アンタが三日後を指定した理由。アイツが来るって知ってたんでしょ」

数日前に自分に占いに行つてほしいと頼んだ理由。そして日時を指定した理由。

それが今日あの場限りで同伴させた男にあることはいい加減伊吹も気づいていた。

「彼なら占いという娯楽に興味を示すと予想しただけさ。まさか本当に彼が今日やってくるとは思っていなかったよ」

「どうだか……」

柚椰の言葉が伊吹には誤魔化しにしか聞こえなかった。

ただの偶然にしてはあまりに出来すぎている。

「彼の結果はどうだったかな？ 何か気になることでもあったかい？」

「宿命天中殺だつてさ。前途多難だな」

「それはそれは」

電話の向こうで男が小さく笑い声を漏らすのを伊吹は聞き逃さない。

「楽しそうだね。アイツの不幸が面白い？」

「まさか。そもそもとして、彼がこの楽園はこにわで普通の生徒として幸せな学校生活を送れるわけがないだろう？ 獅子は他の生き物を喰らうことでしか生きられないんだ。必然的にそれは彼が火中に飛び込み続けなければならぬことを示している。宿命天中殺というのは実際に射た結果だ」

「アンタもありそうだけどね。宿命天中殺」

「おや、滲ちゃんには言っていないなかったかな？」

「何が？」

「実は過去に占いに関して興味を持ったときに、何度か色々な人間に占ってもらったことがあるんだ」

「へえ、貴方はクソ野郎です。とでも言われた？」

辛辣すぎる伊吹の物言いに柚椰が電話越しにカラカラと笑う。

「それはピンポイントな占いだ。そんな占い師だったなら是非とも臍眞にしたいね」

「で、それが何」

「出てくる結果は占い師一人一人によって全くと言っていい程に異なっていた。学業が良くないと言われた数日後に違う人間に占わせたら伸びしろがあると言われ、女難の相があると言われたその日に違う人間からは待ち人現ると言われたんだ」

「やっぱり占いなんてそんなもんか」

やはり占いは当てにしているものではないのだと伊吹はため息をつく。

「ただ一つだけ、どの占い師にも口を揃えて言われたことがあってね」
柚椰はどこか楽しそうに、ジョークを言うかのように語り聞かせ

る。

「貴方は口クな死に方をしないだろう、と言われたよ」

幕間：箱庭の外で

9月某日東京某所。5階建てのオフィスビルへ一人の女が入っていく。

女は年を召した風貌をしており、高齢者に属する年齢だろう。

彼女はエントランス横に設けられている管理人室の小窓から受付の男性に声をかける。

「すみません」

「……なんだ？」

男は読んでいた新聞を投げ捨て、気怠そうに用件を尋ねる。

彼がこのビルの管理人なのだろう。歳は30代前半くらいに見える。

受付の人間としてはよろしくない態度だが女は簡潔に用件を述べた。

「……この管理人さんへある人から伝言を預かってきました」

管理人の男は女の言葉にピクリと反応する。

「……伝言？」

「はい、こちらを」

女は鞆からUSBメモリを取り出して小窓越しに男へ差し出す。

それを受け取りまじまじと眺めていた男の目がみるみるうちに鋭くなっていく。

男はそれまでの気怠そうな雰囲気とは打って変わって鬼気迫る表情で女と目を合わせる。

「……アンタ、これを渡されたときに何か言われたか？」

「え、ええ。貴方にこれを渡すだけで50万と」

男の豹変具合に女は困惑しつつも依頼主から言われたことをそのまま伝えた。

すると男は一度小窓を閉めて奥へと消えていく。

数十秒後、再び女の前に姿を現した男の手には1枚のカードが握ら

れていた。

「これを持っていけ」

男が手渡したのは銀行のキャッシュカードだった。

「その口座に50万入ってる。今日中に引き出せ。カードは必ず破棄しろ。いいな？」

「わ、分かりました」

「用が済んだらさっさと帰りな。長生きしろよ婆さん」

もう話すことはないと言うように男は受付の窓を閉める。

女も貰うものは貰えたためさっさとそのビルを後にした。

「獅子渡、メンバーに連絡しろ。大至急だ」

オフィスビル4階。空きテナントになっている一室に入るや否や管理人の男は室内のソファに寝転んでいる女へ呼びかける。

獅子渡と呼ばれた女は身体を起こすと寝ぼけ眼で男を見る。

肩口で切り揃えた金髪に両耳に付いている聖十字のピアスが特徴的なその女性は大学生くらいに見える。

「芦那あしなと石黒いしぐろはコンビニだからすぐに帰ってくる。呼ぶまでもない」
「宇垣うがきは？」

「あのバカはどうせパチンコでしょ。ほっとけば」

「事が事だから駄目だ。呼び出せ」

「チツ……」

男の命令に獅子渡は舌打ちしつつ、固定電話が置いてあるデスクへ向かう。

彼女が電話をかけている間に室内に新たに二人の人間が入ってきた。

「シッシーただいまー！肉まん買ってきたよー！」

電話中の獅子渡に大声で帰宅の旨を伝えたのは芦那。腰まで伸びた茶髪とゴスロリドレスの奇抜な出で立ちをしている少女だ。その

見た目はどう見ても中学生くらいにしか見えない。

「ご所望のピザまんは売り切れだったので肉まんになってしまいました
たが同じ『まん系』ですし問題ないでしょう」

そう言つて肉まんの入ったビニール袋をソファー前のローテーブルに置いたのは石黒。ツンツンした黒髪に眼鏡をかけた青年だ。年齢は20代前半くらいだろうか。

「おっ！グロくん『まん系』だなんてエッチなんだからもー！」

「そんなことでシモに持つていくのは中学生までですよ芦那」

椰揄う芦那を石黒はバツサリと切り捨てる。

中学生という言葉が癪に障つたのか芦那はむくれた。

「むー！私中学生じゃないもん！高校生だもん！」

「芦那は高校進学していません。最終学歴中卒の貴女は中学生と大差ありません」

石黒の辛辣な言葉に芦那は大福のようにさらにむくれる。

「なにさ自分は会社辞めたニートの癖に！」

「今はネットでいくらでも稼げる時代ですよ。現在の私の収入は以前の3倍。よつて僕はニートではありません。現に貴女にアイスを奢つたのも僕なのですから」

眼鏡をクイツと上げながら自身の収入を明かす石黒。それは誰が見てもドヤ顔だ。

「ガリガリ君で威張るなし！私ハーゲンダッツが良かったのに！」

「ハーゲンダッツは大人の食べ物ですよ。芦那にはまだ早い」

どこまでも馬鹿にしてくる石黒にいよいよ頭にきたのか芦那はローテーブルに右足を乗せ両手で自分の胸元——およそ幼い顔には似つかわしくないほどに実つた果実をむんずと握る。

「私もう大人だもん！胸だつてシッシ——より大き——」

「ほう、誰よりも何だつて？」

芦那の耳に地を這うような低い声が入り込む。

いつの間にか電話を終えていた獅子渡が芦那の背後に立っていたのだ。

獅子渡は蛇のように鋭い目つきで芦那を見下ろす。

その目で見られた芦那はまさに蛇に睨まれた蛙よろしく冷や汗を浮かべた。

「し、シツシー?」

「芦那チャン、もう一回言っつてごらんささい? 何が、誰よりも、大きいって?」

「ど、どうしたの? 目が怖いよ……?」

「そんなクソ生意気なことを言う口はこの口かあ!!」

「いだだだだっ!」

獅子渡に両頬を抓られた芦那が苦悶の声を上げる。

美女と美少女のじゃれ合いは百合百合しいがやられている側からすればそんな可愛いものではないだろう。

そんな彼女らを見無視して管理人の男は持つてきていたUSBメモリを石黒に投げ渡した。

「石黒、今から宇垣が来る。パソコンにそれを挿して準備しておけ」

「つと——っ!」

キヤッチしたUSBメモリが何であるか即座に理解できた石黒は目を見開く。

嬉しいような、しかしにわかには信じられないと言うように管理人の男を見る。

「尾賀さん、これ……」

「全員が集まり次第話す。それまでは黙って動け」

「はい」

管理人の男、尾賀の命令に従って石黒は準備に取り掛かる。

自分の鞆からノートパソコンを取り出して部屋にある大型テレビと繋ぐ。USBメモリは全員が揃ってから挿すつもりらしい。

「お、なににににー? 何が始まるのー?」

獅子渡の折檻から逃れた芦那が興味津々といった様子で石黒に尋ねる。

「今から宇垣さんが来るらしいので準備をしているところですよ。どうせ駅前のパチンコでしょうから10分もすれば戻ってくるでしょう」

石黒がそう言うとう芦那は目をキラキラと輝かせる。

「ねえねえ、ガツキーがお金いくらスつてくるか当てようよ！」

「スつてくるの前提か……」

勝つてくるといふ選択肢が存在しないことに尾賀はため息をつく。

「あのバカが勝つてきた試しないでしょ。ギャンブル弱い癖に懲りないんだから」

「順当に負けるとして僕は大体4万くらいと予想します」

獅子渡もこれまでのことを考えて宇垣が負けてくることは疑っていないようだ。

石黒はパチンコに出向いた時間から現在の時間を踏まえていち早く予想を出す。

「じゃあ私は5万円！　ちなみにこれビリの人は今日のご飯奢りだからね！」

芦那は石黒よりも多く見積もつた予想を立てて罰ゲームまで指定した。

「じゃあ私は6万で。あいつなら倍プッシュして溶かしてもおかしくないわ」

「オガつちは？」

芦那は最後に尾賀に予想を尋ねる。既にこの賭けは強制参加になりつつある中、尾賀は顎に手を当て思案する。

「ううむ……10万だな」

「ええ……」

「尾賀さん流石にそれは……」

「いくらガツキーでも1時間ちよつとで10万は溶かささないでしょー」

尾賀の予想に全員が引いていた。いくら負けてくると考えていても流石にそこまでの大敗はしてこないだろうと思っていた。その高すぎる見積もりは最早勝負を投げたと思えないうさげな。

それからしばらくして男が部屋のドアを開けて入ってきた。

オールバックの髪にサングラスという厳つい見た目のこの男が件の人物である宇垣だろう。

その筋の人間にしか見えない風貌をしている彼は苛立っているようにソファにどつかりを腰を下ろす。

「チツ……っだよあのクソ台はよ……」

不機嫌を隠そうともしないその態度は他人からすれば絶対触れたくないと思うほどに刺々しい。

しかしこの場において彼に対して遠慮する者など一人とていなかった。

「ガツキーおかえり！　ねえねえどうだった？　勝てた？」

芦那は元気な声で宇垣に突撃していく。雰囲気から察せてもおかしくないだろうに敢えて聞く辺り彼女も肝が据わっているということだろうか。

彼女の言葉にカチンときた宇垣は青筋を浮かべて睨む。

「あ、あ？　これが勝ってきた奴の態度に見えるのか」

「ううん、思わない！」

「おうおう正直だな。オメエが知らねえ仲ならぶつ殺してたところだ」

満面の笑みを浮かべる芦那に対して宇垣が物騒なことを言う。

おそらくそれは冗談ではなく本気で言っているのであろうことは彼の表情を見れば分かる。

何故なら彼は目をギラギラとさせて笑みを浮かべていたからだ。

「それで、結局いくらスってきたんですか？」

「そうね。さっさと敗戦報告してごらんなさいよ」

「テメエら……揃いも揃って端から俺が負けてくると思つてやがんなコラ」

石黒と獅子渡からも好き放題言われ宇垣はますます苛立ちを募らせるが、そこで尾賀の声がかかる。

「宇垣がいくら負けたかは後でいいだろう。今はこっちの要件の方が重要だ」

尾賀の言葉に全員の意識が彼に向く。

彼はパソコンの前で待機している石黒に指示を出す。

「石黒、始めろ」

「はい」

石黒はリモコンでテレビを点けた。そこには接続されているパソコンのデスクトップ画面が表示されている。

「さつき」人の婆さんがこのビルを訪ねてきた」

「ああ？　なんでババアがこんなところ来んだよ」

「そうね。入ってるテナントもダメーだしここに店なんて一つもないでしょう」

尾賀の言葉に宇垣と獅子渡が疑問符を浮かべる。

「婆さんは俺宛てにある人から伝言があると聞いた。そして渡されたのが――」

「これです」

促され石黒は手に持ったUSBメモリを全員に見せる。

「ただのUSBじゃねえか。それがなんだってんだ？」

「これはただのUSBメモリではありませんよ。レーザーで刻印がされている特注品です」

「刻印されているのは言葉だ。『Fortune favors the bold.』。意味は分かるな？」

尾賀が言ったその言葉に石黒以外の3人は驚愕する。

同時に何故尾賀がこの場に召集をかけたのかを理解した。

「――ッ！」

『運命の女神は勇者に味方する』……ウエルギリウスの名言
「つてことは……」

全員が事の次第を理解したため尾賀は頷く。

「ああ。我らが導師様からのメッセージだ」

「マジかよ……ってかどうやって持ち出したんだ？　導師様は今箱庭にいるはずだろ」

「国が上にいる教育機関でしょう？　セキュリティもかなり厳しいはず」

「流石導師様だねー！　なんでも出来ちゃう神様だねー！」

宇垣と獅子渡はにわかには信じられないといった様子で驚いている。

芦那は導師様なる人物に対して想いを馳せているのかうつとりとした表情を浮かべていた。

「恐らく婆さんは学校が外部から招いた客人かなにかだろうな。だから導師様は接触した。USBメモリは小さいから持ち出そうと思えばやれないことはないだろう」

「そうですね。麻薬を密輸するときのように体内に入れてしまえば潜り抜けることは可能かと」

「報酬が50万ということ。やることはUSBを小袋か何かに入れて飲み込むだけ。婆さんが断る理由もないだろう」

尾賀と石黒はセキユリテイの穴を突く方法に当たりを付けていた。確かにやろうと思えばやれないことはない。現にこうしてUSBメモリは手中にある。

それは崇拜している御方が自分たちに言葉を伝えに来たという確かな証拠なのだ。

「石黒、早く導師様のメッセージを見せなさい」

「そうだよグロくん！ 早く見せて！」

獅子渡と芦那は早く見せろと石黒を急かす。宇垣も声に出さないものの興奮が表情にありありと浮かんでいる。

「今やりますから落ち着いてください」

彼女らの興奮を宥めつつ、彼はUSBメモリをパソコンに挿し込む。

テレビの画面にはパソコンがUSBを認識したことを表すようにウインドウが開いていた。

「では開きますよ」

全員に確認を取り、石黒はUSBに入っていたファイルを開いた。ファイルは動画のようで、カーソルでクリックしたことで動画が再生される。

『やあ皆、元気かい？』

「おお………」

「本当に導師様だわ……」

「ああ……導師様……」

発せられた声、そして画面に映る我らが導師様の姿に彼らは感嘆の声を漏らす。

尾賀と石黒も声こそ上げないが画面に釘付けになっている。

『これを聞いているということは計画は成功したようだね。君達、いままでも連絡出来なくてすまなかったね。何分こちらも新しい環境で慌ただしかったんだ』

己の非を詫びるかのような言葉を吐く導師様の姿に彼らは平伏する。

自分たちにそのような言葉をかける必要などないと示すかのよう

に。
動画越しでもそのような行動をとってしまうほど、彼らは導師様に敬意を持っていた。

『ジューベールは『心が激している時には人は誤って愛する。本当に愛するには落ちついて愛さなければならぬ』と言う。でも、こうして離れてみても俺は君達を愛おしいと感じているよ。それは誤った愛ではなかったということだね』

「勿体ないお言葉です……!」

「私も導師様大好きだよー!」

獅子渡と芦那は導師様からの愛の言葉に酔いしれていた。

彼の発する言葉一つ一つが心を動かして止まないのだと表情が語っている。

『君達は最近どうかな? 大きな病気や怪我をしていないといいんだが』

「フツ……俺たち全員元気過ぎるくらいだわな」

宇垣はこちらを心配するような言葉にむず痒さを感じながらも笑みを浮かべる。

『挨拶はこれくらいにして本題に入ろうか』

導師様の言葉に全員が今まで以上に意識を集中させる。

間違っても聞き逃すことの無いように、己の聴覚に全意識を向け

る。

『君達に一つ、お願いがあるんだ。俺の予想が正しければ、君達からの解答は俺にとって今何よりも気になっていいる事柄を解き明かす大きな一歩になる。力を貸してほしい』

「勿論です。この獅子渡瑠璃、導師様の為ならなんでも致します！」

「私も私も！ なんでもやっちゃうもんね！」

声に出す獅子渡と芦那だけでなく、尾賀や石黒、宇垣もその頼みを断ることは微塵も考えていなかった。

彼らにとつて導師からの命令は絶対。導師の為になることこそが生涯かけて行う自分の使命なのだと思じているが故に。

『君達のことだから無茶なお願いも引き受けようとしてしまうのかも知れない。でも、嫌だったら断ってくれても構わないよ。俺は君達を奴隷のように扱いたくはないんだ。君達一人一人を俺は気に入っているんだからね』

どこまでも優しい言葉をかける導師の在り方に彼らは感激する。

自分たちにそのようなことを言ってくれた人間など今まで一人もいなかったからこそ、彼らは導師を誰よりも大切に思っている。

導師が自分たちを大切に思ってくくださるということが、彼らにとつては何よりも嬉しい。

『肝心の内容だが、ここからは声に出さずに伝えるよ。しっかり見ていてほしい』

そう言う導師様はスケッチブックを開いてカメラに映るようにそれを見せた。

それを目にするより先に尾賀は石黒へ指示を出す。

「石黒、画面をキャプチャして保存しろ」

「もうやってます」

既に石黒も尾賀の言うことを予想して作業を行っていた。

画面には導師様が見せるスケッチブックの中身が映し出されていた。

1 1 8 1 5 5 2 5 1 3 3 2 0 4 2 2 8 5 4 1 2 1 8 8 4 2 4 2 1

5 8 1 8 8 6 1 6 1 1 5 8 1 8 8 2 2 8 5 1 3 1 2 2 3 2 2 1 0
3 8 8 7 1 8 3 3 3 0 4 7 2 8 3 1 3 9 2 8 8 2 1 0 3 2 4 1 2 8
8 9 6 9 6 2 1 0 4 4 3 7 1 4 4 0 4 5 2 7 5 6 9 9 3 3 3 3 2 0
3 2 5 0 4 1 3 0 2 7 5 4 2 1 2 4 4

数字の羅列としか言えないその並びを彼らは食い入るように見ていた。

導師が伝えたいメッセージである以上、この数字には意味があるはずなのだから。

『さて、俺が伝えたいことは以上だ。では君達、またいつか会おう』最後に柔らかな笑みを見せて、導師はカメラを止める。

添付されていた動画はそこで終了した。

彼は鍍金の女王に手を伸ばす。

8月最終週、夏休みもこの一週間で終わりを告げる。

生徒たちは限りある夏休みを最後まで楽しもうとしているだろう。現に敷地内の様々な施設で生徒たちの姿がある。

それはここ、レストランでも例外ではない。店内は食事を摂る者、談笑に興じる者、この後の予定を立てようと話し合っている者で溢れている。

そんな彼らと同じように、或いは溶け込むように店内の一角で本を片手にコーヒーを飲む男が一人。

『恋愛は多くのオペラと似たところがある。いちばん美しいのが序曲だという点で』

「ふふっ、深い言葉ね」

テールにやって来た女性店員が男が呟いた言葉に反応する。その言葉が彼女の琴線に触れたのだろう。

女性が声をかけてきたことで男は読んでいた本を閉じて応対する。「ジャン・ジロドゥの言葉ですよ。オペラは序曲、始まりほど劇的で美しい。それは人の心を掴み、惹きつける。恋愛も好きになりたて、付き合いたてが一番楽しいものでしょう?」

「ふふっ、そうね。相手を深く知れば知るほど、付き合いが長くなれば長くなるほど冷めちゃうことって多いから」

二人は互いに面識があるのか友人のように言葉を交わす。

「でも、そう言うってことは黛君って経験豊富なのかしら?」
「まさか。まだ15の子どもですよ? 女性に対して自慢できるほどの経験なんてあるわけもないじゃないですか」

謙遜にも似た言葉を吐く柚椰に女性は笑みを浮かべる。

「そうは言うけど、黛君つっても15歳には見えないのよねー。博識だし、こうして話してもまるで大人の男性と話してるみたいに関じちやうわ。さぞかしモテたんじゃない? 私が同級生だったら

放っておかないもの」

「美人の女性にそう言ってもらえるのは男冥利に尽きますね」

「あら、お上手なんだから」

柚椰の言葉に気を良くしたのか女性店員は頬を綻ばせる。

「お上手ついでにデザートでもどうかしら？　今だとマンゴーのスイーツが期間限定であるわよ？」

売り込みを忘れない辺り彼女の商売根性は大したものと言えるだろう。

柚椰も柚椰で彼女の提案が魅力的に映ったのか微笑みを作る。

「それはいい。一つお願いします」

「はい、かしこまりました」

正式に注文を受けて最後に営業スマイルを残して彼女は去っていった。

その背を見送りながら、柚椰はおもむろに腕時計で時間を確認する。

時刻は正午を少し過ぎたことを指し示していた。

「うん、そろそろかな」

予め自らが指定していた時刻にもうあと10分ほどで差し掛かることを確認する。

ここで落ち合うことになっている人物を待つべく、彼はゆつたりとコーヒーを飲みだした。

「いらつしやいませ。お一人様ですか？」

「ああいや、ここで待ち合わせをして……」

彼の予想を肯定するかのようにレストランに一人の生徒が入って来た。

新規の客が来店したことで店員が応対に現れるが、その生徒は店内を見回して既に来ている者と合流すべくやって来たのだと暗に告げる。

そして柚椰を視界に入れると、彼がその相手であると店員に告げてテーブルへと歩を進めた。

「お、お待たせ」

「やあ久しぶりだね、軽井沢」

呼び出された生徒、Dクラスの軽井沢恵が柚椰のいるテーブルにつく。

今は夏休みということもあってか彼女の出で立ちは制服ではなく私服だ。夏らしいコーデインネットに身を包んでいる彼女はお洒落という言葉がしっくりくる。

「急に呼び出して悪かったね。何か飲むかい？」

「えーっと、じゃあレモンティーで」

「分かった、レモンティーだね」

軽井沢の要望を聞き、柚椰はテーブルのベルを鳴らす。

そしてやって来た店員がオーダーを聞き再び去っていく。

「それで、なんで私を呼び出したの？」

「それについては君の飲み物が来てから話すよ。急ぐ話でもないからね」

用件はこの後にとっておくと告げ、柚椰は笑みを浮かべる。

注文の品が届くまでの僅かな時間、彼と軽井沢は世間話に興じる。

「夏休みはどうだい？ 束の間の休息を楽しんでいるかな」

「どうって……まあ友達と遊びに行ったり、買い物したりはしたかな。でも遊び過ぎたから二学期始まるまでは大人しくしないとだけ」

「なるほど。ということは現状君の懐は厳しいということか。ならこの場は俺が持つよ。遠慮せずに好きだけ頼むといい」

柚椰はテーブルのスタンドに挟まれているメニュー表を取って軽井沢へと差し出す。

「えっ。い、いいわよ別に。お茶代くらいは払えるし」

「気にしなくていいよ。これは俺の単なる自己満足だ。いや、罪滅ぼし、とでも言うのかな」

眉を下げ、どこか詫びるような表情を浮かべて柚椰は言う。

「罪滅ぼしっ？」

「君に助けを求められたのに、結果的に俺は何もできなかった。本当ならあの試験の間に方を付けるつもりだったんだけどね。間に合わずに君を危険な目に遭わせてしまった。申し訳ない」

頭を下げて詫びる姿に軽井沢は慌てた。

「い、いいって謝らなくて！ 私もその、我儘言つた自覚はあるし……アンタにあんなこと頼んだこと自体、普通ならありえないってことくらい分かってる。あのとき話を聞いてくれただけでも私は助かったっていうか、安心したし……」

「お待たせいたしました。こちらレモンティーになります」

丁度いい頃合いに店員が注文の品を持ってテーブルにやって来た。

軽井沢の前に冷たいレモンティー、柚榔の前にマンゴーのシャーベットを置いて店員が去っていく。

レモンティーに軽井沢が口を付けたのを見計らって柚榔は話を再開する。

「話を戻すけど、君が一番困っている時に俺は何も助けになれなかったからね。だからせめて、これから先君の力になればと思ったんだ。今日呼び出したのはそのためでもある」

「どういうこと？」

「一学期と特別試験を経て、Dクラスは団結を強めている。今のDクラスなら他のクラスとも十分に戦っていけると思う。でも、決してクラスメイト全員が纏まっているわけじゃない」

「それって、私のこと……？」

おらずと尋ねる軽井沢に柚榔は頷く。

「女子のグループは桔梗を中心として固まり始めているらしいね。君のグループに属していた子たちも桔梗のグループへ統合している。同時に君は嘗ての地位を失いつつあるのが現状だ」

「……」

淡々と説明されるクラスの現状に軽井沢は顔を俯かせる。

そこにあるのは後悔か悲嘆か、いずれにしても暗い表情を浮かべていることは確かだ。

自分が失墜しつつある現状に対して怒りではなくそういった感情を滲ませているのは少なからず己に非があることを自覚しているからだろう。

しかしそんな軽井沢を見かねてか柚榔は首を横に振る。

目を見開いた。

「30万ポイント振り込んだ。それで君は今までの負債を帳消しにするといい」

なんでもないかのように言う柚椰に軽井沢はこれまでにないほどに狼狽える。

「こ、こんな大金貰えないわよ！ それに借金だってそんなにあるわけじゃないし」

「なら余った分は君のものにしてくれて構わないよ。ポイントはあるに越したことはないからね」

「そんなにしてもらわなくてもいいってば！ これは、自分が蒔いた種なんだから……」

まさかポイントという現物で以って自分を助けようとは思わなかったからか軽井沢は完全に委縮してしまっていた。

ただのクラスメイトというだけでここまでしてもらうことをすんなり受け入れられるほど彼女は凶々しくはないのだ。

「でも今の君に負債を返せるだけの当てはないだろう？ なら俺が代わりに返済してしまった方が手っ取り早いと思うんだ」

「……確かに返せる当てはないけど、でも黛にそこまでしてもらうわけには」

「これは君に借りを作るとか恩を売るんじゃないよ。あくまで俺の自己満足だ」

「そっちの方が余計悪いって！」

「気にしなくていいのに」

「気にするなって言う方が無理でしょうが！」

気にしなくていいと言う男と気にすると言う女の堂々巡りが繰り返された。

「じゃあ一つだけ、君にお願いしようかな。それを聞いてくれればチャラで構わないよ」

「お、お願い、って？」

何を頼まれるのか分からず軽井沢はおずおずと尋ねる。

「今度俺にご飯を作ってくれないかな？」

「は？」

「いや、こう暑いと中々外で食べる気にならなくてね。仕方なく家で自炊をしているんだけど如何せんレパートリーが無くて」

「そ、それだけ……？」

「うん、それだけ」

「そんなことでもいいの……？」

明らかにすり合いの取れていない条件に軽井沢は信じられないと言うような顔だ。

「勿論。ああ、でも家には豆腐と素麺しか置いていないから材料を買ってきてもらうことになってしまうけど」

「はあ!? アンタ毎日そんなもんばっか食べてんの!？」

「そんなもんとは心外だな。豆腐は栄養もあるし、冷たい素麺なんていくらでも食べられるだろう？」

「そんな淡泊なものばかり食べてたら夏バテするでしょうが！」

柚椰の壊滅的な食生活が明らかになったからか、それまで委縮していた軽井沢の姿は見る影もなくなっていた。

寧ろ今の彼女はだらしない息子を叱る母親のようにさえ感じられる。

「呆れた。アンタがそんなにだらしないとはね……正直意外だった。なんでも出来そうなイメージあったのに」

「俺にだって不得意なことくらいはあるさ。寧ろ出来ないことの方が多いよ」

困ったように笑う柚椰に軽井沢は少しこれまでとは違う感情を抱き始めた。

「ふーん、うちのクラスの奴はこのこと知ってるの？」

「というと……」

「だから、アンタのそういうだらしないところ、知ってるのかって話」

軽井沢に問われ、柚椰は顎に手を当て思索する。

「そうだね……クラスメイトで知っている人はいないかな。前に鈴音

には『簡単なものくらいしか作らない』とは話したけど、作れないとは、ね」

「櫛田さんにも……?」

「そうだね、桔梗にもこのことは話していないよ」

テストの成績は常にトップ。交友関係が広く人望も厚い。クラスの主要な面々がこぞって頼りにするほどの知力。非の打ちどころのないとしか言いようのない完璧な男子。それが軽井沢にとっての黛への認識だった。

だが今はどうだろうか。

完璧に見えた男には食生活が壊滅的であるという欠点があった。

欠点と呼べるほど大袈裟なものではないかもしれないが、それは間違いない。目の前の男の秀でていない面であることは確かだった。

だからだろうか――

「ふーん……（コイツの弱いところ、他の人は知らないんだ……）」

――彼の弱さを、欠点を知っているのが自分一人だけだという事実はどこか優越感を感じたのは。

「それで、この条件で受けてくれるかい？」

軽井沢の雰囲気が変わったことで了承の方向へ向かっていることを感じ取ったのか柚椰はそう尋ねる。

「……正直全然釣り合っていない条件だけど、折角譲歩してくれたんだしいいわ。それでアンタの気が済むなら」

「よし、なら交渉成立だ」

少女から承諾の旨を聞き柚椰は満足げに微笑む。

「借りたポイントを返せば、少なくとも君にある絶対的な弱みは解消される。あとは君のコミュニケーション能力で関係を修復してあげばいい」

「簡単に言うわね……」

「君なら出来るはずだよ。人を惹きつけるだけの魅力が君にはあるんだから」

「――！・、そう？」

柚椰の言葉が琴線に触れたのか、軽井沢は少し声のトーンが上がる。

「うん、元々君は入学してすぐの段階でグループの中心になっていた。それは平田の彼女だからという外付けの理由じゃない。君だから。君という人間に魅力があったから出来たことだよ」

「ふ、ふーん、まあ、そんなに褒められたら悪い気はしないけど」

惜しみない賛辞を送られて気を良くしたのか軽井沢の表情が晴れやかなものへと変わっていく。

「だから何も心配することはないよ。もしまた何かあれば俺も協力するからね」

「黛が助けてくれんの……？」

「勿論。言っただろう？ ポイントをあげたのはあくまで第一歩だ。君がクラスで笑えるようになるまで、俺は協力は惜しまない」

その言葉を聞いた軽井沢は顔を俯かせ、ポツポツと語りだした。

「……もし、もしもさ」

「うん？」

「もし、私が上手くできなかつたら……女子の間でハブられたら……黛はどうするの？」

「どうする、とは？」

「だから……もし、私が虐められでもしたら……それでも助けてくれるの……？」

試すような、しかしどこか継るようなニュアンスが込められた問いかけ。

それを聞いた柚椰の中に沸いた感情は一つだけだった。

ならば当然、彼が返す言葉は決まっている。

「勿論。もし君がそうなってしまったとしても、俺は君を助けるよ」
「どうやって？」

「そうだね……これが平田だったら仲良くするように皆と話し合いをさせる、と言うのかもしれないけど」

「それは嫌！」

柚椰の言葉を拒絶するかのように軽井沢は大きな声を上げた。

その方法が一番の悪手だと、こと虐めにおいては何よりもしてはならないことだと彼女自身が知っているが故に。

「平田なら、と言っただろう？ 俺だったらまず君を虐めている集団を壊す。粉々にね」

「それって……虐めてきた奴らを攻撃するってこと……？」

「軽井沢はどうして虐めなんてものが起こると思う？」

質問を質問で返された軽井沢は戸惑いながらも頭を使う。

「……自分より弱い奴を見つけたから、とか」

「そうだね。要は虐めるに値する弱みを見つけたとき。或いは対象が虐められても仕方ないと思えるだけの悪性を備えていたとき、だね。コイツは悪い奴だから、弱い奴だから、それを虐める自分たちは正しい、悪くない。そういった考えを無意識のうちに持つてしまうから虐めという問題は起こるんだ」

「……」

「なら解消する方法は簡単さ。彼らにも弱さを、悪性を植え付けてしまえばいいんだ。自分が虐めをするに値する原因が、自分が今まで誰かを虐めてきた根底にあった理由が自分にもあるのだと認識したとき、人はそこで自分が虐められるかもしれないという恐怖を抱く。明日にでも今度は自分が虐められるのではないか。今まで自分がそうしてきたように、今度は自分が虐げられる者になるのではないか。亀が甲羅の中に閉じこもるように、自分の身を守ることには終始するようになる」

淡々と、しかし生々しく語る柚椰に軽井沢は自分のことのように震えた。

穏便な方法では決してなく、とても堂々と言えたものではない手段。

それはとても頼もしいものだったが、同時に一種の恐ろしさを彼女に抱かせた。

「黛はそうするってこと……？」

「勿論こんなことは本意ではないから、出来ればしたくはないけどね。」

でも、君を助けることが優先事項である以上、俺は手段を選ぶつもりはないよ」

彼はその手段が決して望んでのものではなく、あくまで自分のためだと語った。

とどのつまり、彼は望まない選択肢を取ってでも自分の為にそれを実行すると言ったのだ。

その言葉を聞いたことで軽井沢の中にそれまでであった恐ろしいという感情が一気に塗り潰された。

口からの出まかせではなく、本当にやるだろう、といった一種の信用さえ抱かせるほどに、柚椰の言葉は軽井沢にとって頼もしかった。

「そう……分かった。まあ、そのときは頼りにさせてもらおうことにする」

髪を弄りながらそつぽを向く軽井沢だが、彼女の中で目の前の男に対する信頼が芽生えていることは確かだった。

「じゃ、じゃあ話が終わったなら私帰る」

残っていたレモンティーを飲み干すや否や軽井沢は席を立った。

「もういいのかい？ 何か食べていったらいいのに」

「やらなきやいけないことがあるから」

そう語る軽井沢の目は強い決意の色が宿っていた。

既に聞くまでもない事柄ではあるのだが、敢えて柚椰は尋ねる。

「ふむ、それは？」

「アンタがそこまでしてくれて言うなら私もちゃんとしなないとでしょ。早速借りを返しに行くの」

勝気な笑みでそう語り、軽井沢はレストランを出て行った。

「黛君は悪い人ですね。女の子の心につけこむなんて」

軽井沢の背を見ながら、彼らの後ろのテーブルにいた生徒が柚椰に話しかける。

それに驚くこともせず、柚椰は背を向けたまま彼女に應對した。

「おや、まさか聞いていたのかい？ 坂柳」

「ええ。中々どうして面白い話が聞こえてきましたので、つい聞き入ってしまったよ」

柚椰のいるテーブルの一つ後ろの席、そこには坂柳有栖が紅茶を片手に座っていた。

「どうやら彼らの話を聞いていたようで、その口元は愉快そうに弧を描いていた。」

「女王様もお戯れが過ぎるね」

「まあまあ。ここでのことは口外する気はありませんので。軽井沢恵さん、ですか。彼女も貴方の手駒にするおつもりで？」

「まさか。彼女は既に売却済の物件だよ。俺が入ることは出来ないや」

「どうでしょう。平田君の恋人らしいですが、奪ってしまうことも出来るのでは？」

「どこか挑発するようなニュアンスを含めて坂柳は問いかける。」

「間男の役なんて俺には出来ないよ。それに彼は出来た人間だ。それこそ俺が入り込む余地はないよ」

「ふむ、つまり彼女の買い取り手は平田君ではないということですね」
坂柳が笑みを浮かべていることを背中で感じつつ、柚椰は微笑んだ。

「流石は女王。口を開くのは悪手だね」

「私が平田君の名前を出しているのに貴方は彼と言った。それは軽井沢さんの相手が平田君ではないと暗に言っているように聞こえますので」

「さてね。それは君が自分で見つけてみるといい。それは君の道程の中に落ちている一粒の石だからね」

「——！なるほど……そういうことですか」

柚椰の言わんとしていることが理解できたのか、坂柳はどこか別のところへ意識を割くような声色で呟いた。

「でも残念ですね。私がお支払いした報酬が、まさかあんな人に渡るなんて。もつと面白い使い道があると期待していたのですが」

「おや、女王様はお気に召さないかい？」

「黛君ならもつと私を驚かせてくれそうなことを考えると思ったのですよ。それへの投資も含めた高額報酬だったのですが、ちよつとがっかりです」

ティーカップを傾けて紅茶を飲む坂柳の表情はどこか落胆の色がある。

しかし彼女のその言葉を聞いて寧ろ柚椰は一層愉快に笑った。

「ふふつ、まあ君にとつて軽井沢は取るに足らない存在だろうね。でも、事が動くのはこの後さ」

「ほう？」

柚椰の言葉に反応し、坂柳はティーカップを置いた。

「優待者当てのとき、彼女が属していたグループはどこかな？」

「卵グループですね。そういえば、確か試験中に掲示板がその話題で盛り上がっていたとお聞きしましたが……あれは黛君ですか？」

「俺であつて俺じゃない、とだけ答えておくよ。話を戻すけど、彼女のいた卵グループは結果3、つまり優待者は当てられてしまった。正解者は50万ポイントを手に入れている。さて、それを踏まえると今の軽井沢はどんな状況だい？」

「ふむ……黛君がポイントを譲渡したことで、軽井沢さんは巨額のポイントを得ています。彼女のポイントの額が知れば、彼女が優待者を当てた正解者、という推測がなされますね。しかしここで黛君が仕組んだとされる掲示板の情報が真実であるという仮定を前提にする……ほう」

導き出された結論がとても面白いものであつたのか、坂柳は愉快そうに笑った。

同時に意図が伝わったと察した柚椰も笑みを浮かべる。

「もし掲示板の情報通り本当にDに優待者がいた場合、どうして彼女はポイントを持っているんだろうか。Dクラスには解答権がないはずなのに、ね」

「他のDクラスのメンバーか、あるいは自分が優待者だとリークした結果の成功報酬を得ているから、という推理がなされる。つまりは裏

切り者ということですね」

「クラスに貢献した功労者か、或いは他クラスと共謀してポイントを得た裏切り者か。その判断は周りの人間一人一人によって異なってくるだろう」

「本当に黛君は悪い人ですね……期待以上です」

この後の光景に想いを馳せているのか、坂柳は感嘆の声を漏らした。

「軽井沢さんを助けると言いながら、その実さらに悪い状況へ追い込むだなんて……恐ろしいことを考える」

「俺は彼女を嵌めたわけじゃない。彼女を助けたいというのは勿論本心だよ？　ただ、周囲の人間の感情まで操れるわけじゃないというだけさ」

「どう転ぶも周りの人間次第、ということですか。尚更質の悪いタイプですね」

「彼女が順調に名誉を回復していくとすれば、それは勿論望ましい。逆に彼女が苦境に立たされたとしても、それも彼女にとっては後に好転する要因になるかもしれない。彼女にとってここから先起こりうる最悪の展開は一番の劇薬であり、同時に特効薬にも成りうるだろう。もしも後者の事象が起こり、且つ彼女がその上で自身の傷を乗り越えた時、真に彼女は美しくなると俺は信じているよ」

「愛の鞭、にしては些か厳しすぎるとは思いますが、私もその行く末が見たくなってきました」

それは坂柳有栖の中で軽井沢恵という人間が刻まれた瞬間だった。

彼は狼少年に道を示す。

「やあ、いらっしやい。適当に座って」

「おう」

「お茶でも淹れるよ。アイスコーヒーと紅茶どちらがいいかな？」

「んー、その二択ならコーヒーで」

「分かった」

夏休み中のある日の午前中。一人の男子が柚椰の部屋を訪れていた。

事前に連絡を入れていたのか、家主である柚椰はその男子を快く迎え入れた。

「つつーか、黛の部屋入るの何気に初めてじゃね？」

ローテーブル前に腰を下ろした男子、山内は部屋の中を見回しながらつぶやいた。

「人を招くほど面白い部屋でもないからね。おもてなしできるような物も置いていないんだ」

「確かになんかシンプルつつーか、綾小路の部屋と似てんな。あ、でも本めつちやあんな。てか本棚ゴツくね？」

山内は部屋の中で異彩を放っている大きな本棚に目を向ける。

それは学生寮の一室であるこの部屋で、最も個性が感じられる点であろう。

並べられている本のタイトルはどれも山内にとっては聞き馴染みがなく、いかにも小難しい雰囲気を漂わせているからかその表情は引き攣っていた。

彼が本棚に釘付けになっていると、柚椰が二人分のコーヒーを持って戻ってくる。

「ムズそうな本ばっかだな……見てるだけで眩暈しそう。お前漫画とか読まねえの？」

「漫画ならそのタブレットに入ってるよ」

そう言つて柚椰はベッド脇に置いてあつたタブレット端末を指差す。

「なんだ、ちゃんと漫画も読むんだな」

「漫画は電子媒体の方が手軽に読めるからね。それで、今日はどうして俺の部屋に來たいなんて言つたんだい？」

「おー、そうだそうだ！ 実は黛を男と見込んで相談があつてよお！」
そう言つると山内は興奮しながら、おもむろに一通の手紙を取り出した。

「この前の試験の時に、俺が佐倉のこと狙つてるつて話したろ？」

「ああ、そういえば言つていたね」

柚椰は以前、山内とした会話の内容を思い返した。

山内の意中の相手である佐倉愛里。

その彼女が唯一心を開いている相手である綾小路清隆。

彼のことを羨ましいと、恨めしいと思つた山内。

柚椰はそんな山内に一つの光明を示した。

しかし……

「この前の試験は残念だつたね。君のいたグループは結果4。裏切り者の君は取り分無しになつてしまつた」

「そうなんだよなあー……いや、イケたと思つただけだよお」

山内は件の特別試験が結果3で終わると思ひ込んでいたのか、今回の結果に大層落胆している様子だ。

しかしすぐに頭を切り替えたやうでニヤニヤとした笑みを作る。

「でもさー！ 佐倉を手に入れる作戦を新たに考へたわけよ。それがこれ」

山内は手に持つた手紙をちらつかせる。

「手紙……ということとはラブレターかな？」

「その通り！ 直接話するのが難しいなら手紙で俺の想いを伝えようつてわけよ」

「なるほどね……ちよつとその手紙を読ませてもらつてもいいかい？」

「勿論！ 今日はそのために來たのさ」

柚椰は山内から手紙を受け取り、中を開いた。

『拝啓、佐倉愛里様。僕は以前よりあなたのことが気になっていました。付き合ってください』

「うん、丁寧なのか簡潔なのか、よく分からないラブレターだね……」
内容に対する素直な感想に山内は頭を抱えた。

「そうなんだよ。俺ラブレターなんて貰ったことはあっても書いたことはねえしさあー。何書いていいか分かんねえっつーか」

山内のその言葉に嘘が混ざっていることなど柚椰は容易に読み取れたが、触れることはしない。

今は彼の話をもっと引き出すことが何よりも重要だと知っているが故に。

「それで、どうして俺にこれを？」

「流石の俺もこのラブレターをそのまま出すのはイマイチだっつてのは分かるんだよ。だから黛にアドバイス貰いてえなっつて」

「アドバイスか……」

「前に相談してた綾小路は佐倉とあんなんだし？ だったら黛かなっつて。っつーか黛って綾小路より頼りになりそうだし？」

その発言が綾小路だけでなく柚椰にも失礼であることを山内は気づいているのだろうか。

いや、気づいていればこんなにも自信満々な顔はしていないだろう。

目的の相手以外のことには考えが及ばない、目がいかない。

山内春樹という人間はとどのつまりそういうった人間だ。

しかし柚椰はそんな彼を、そんな彼だからこそ愛しているのだ。

「そうか。俺も友人の恋路は応援したいと思っっているからね。俺に出来ることなら協力させてもらおうよ」

「サンキューー！ 黛ならそう言ってくれると思っってたぜ」

頼もしい協力相手が出来たことで山内はテンションが上がって

るらしい。

「まずラブレターという作戦は良いと思うよ。会話のコミュニケーションが難しい以上、直接的なアプローチ以外の方法を取るのには正解だ」

「だよな。俺もそう思ったのよ」

「それで、肝心の内容だけど……いくつか手を加えた方がいいね」

「というと？」

「まず第一に、君の名前は書かない方がいい」

柚椰の一つ目のアドバイスは山内にとって予想外だったようで仰天する。

「え、なんでだよ!? ラブレターなら送り主の名前は絶対いるだろー!」

「普通ならね。でも相手は佐倉だよ? それなら話は別だ」

「どういうことだよ?」

わけが分からない様子の山内に柚椰は丁寧に解説を始める。

「佐倉は男子相手でも女子相手でも遠ざける子だ。彼女が男子の、それもクラスメイトからラブレターを貰ったとなったら……」

「……あ、もしかして」

「そう、今まで以上に警戒する。下手をすると君が佐倉に避けられてしまう可能性があるんだ」

「マジかよ!?! で、でもよ、普通ラブレターなんて貰ったらちよつとは意識したりするもんじゃねえの?」

「普通なら、だよ。普通なら自分を好いている相手が身近にいると分かれば、その相手を意識してしまうものだ。自然と目で追い、気にかけるようになってしまう。でも佐倉はその例には当てはまらない。自分を異性として見ている相手が近くにいると分かれば、相手を避けるどころか今まで以上に周囲と壁を作ってしまうかもしれないんだ」

「嘘だろ……マジ難攻不落すぎるって佐倉!」

思っていた以上に佐倉が面倒な相手だと分かり、山内は項垂れる。しかし柚椰はそんな山内を見捨てず手を差し伸べる。

「だから今は君が佐倉を好きであるということは隠したほうがいいんだ。その上で距離を詰める方法を選ぶべきだね」

「え、ど、どういうことだよ?」

「そこで先のアドバイスだよ。ラブレターの差出人は不明という形にする。そうすれば相手が君だということはまず分からない。だから佐倉が君を避けるという可能性は潰せるんだ」

「そういうことか!」

「そして二つ目のアドバイス。これはもうやっていることだけど、手紙は手書きではなく印刷にしておく」

「まあ俺も字下手だから印刷にしたんだけどよ。これってOKだったの?」

山内が持ってきたラブレターはパソコンで作って印刷したものだったのだが、柚椰はこれを良い作戦だと言いつつ切った。

「字の癖で差出人が特定される可能性があるからね。特に字が特徴的な人間だと授業のノートとかでバレてしまうんだ」

「へえー、そういうもんか」

「相手が佐倉である以上、出来る限り君を特定させるような要素は省いた方がいい。君個人を意識させるのは追々にした方が、結果的に良い方に転ぶかもしれないからね」

「なるほどな!」

柚椰のアドバイスを山内は素直に受け入れている。

「そして文面の最後の部分。『僕と付き合ってくれたら毎月ポイントを全部差し出す覚悟です。貢ぎます!』だけ……これは削除した方が良いね。逆に君が思う佐倉の良いところをもっと書くべきだ」

「えー、でも可愛い子って貢がれるの好きって言うじゃん? ポイント全部差し出すってのも俺の覚悟っていうか熱意が伝わって良いかなって」

「ラブレターというのは俗物的な要素は極力省いた方が良いんだ。手紙にしたためのなら詩的な、もつと言えばちよつとクサイと思えるような要素の方が好ましい。ポイントという現物的な要素よりも、愛や恋といった非論理的な、非科学的なものをふんだんに盛り込んだほうが良いラブレターになると思うよ」

「そういうもん?」

「そういうものだよ。これは君が佐倉に宛てる最初のラブレターだろう？　なら、付き合つたときに与えるものを書くよりも、どれだけ君が佐倉を想っているかを素直に書いた方が利口だ」

「そっかー……って、最初の？　え、ラブレターって一回じゃダメなん？」

ラブレターを今後も送ることなど考えていなかった山内はキョトンとした顔で柚椰を見る。

「ただ想いをしたためた手紙を一通送っただけでは、人の心というものは靡かないんだ。特に佐倉は元グラビアアイドルだ。それこそ熱意あるファンレターだっつえばい貰っていたはずだろうからね」

そこで合点がいったのか山内は手をポンと叩く。

「あ、そういうことか！　ただ一通送っただけじゃ今まで貰ったファンレターと同じだと思われちゃうってことだろ？」

「そういうことだね。だから君のラブレターには一通に対する質も大事だけど、それと同じくらいに量も必要だっつことなんだ」

「なるほどなー！　確かに本気のラブレターが何通も来たら流石に佐倉も信じてくれるだろうしな！」

今までのアドバイスを頭に入れて山内はウンウンと頷いている。

自身の言葉を真綿のように吸収していく山内を見て柚椰は微笑む。

「ほんとサンキューな黛！　俺マジで頑張つて佐倉を落としてみせるよー！」

「俺はただアドバイスをしただけだよ。実行するのも、その果てに夢を掴むのも君だ」

「おう！　じゃあさっそく部屋に戻つて新しいラブレターを書くぜ！」

そう言うと山内はテーブルに置かれたコーヒートをグイッと飲み干すと立ち上がり、意気揚々と部屋を後にしようとした。

「あ、またなんかあったら相談してもいいか？　今後もアドバイス貰いてえし」

「勿論。俺でよければいつでも相談に乗るよ」

「へへっ、やっぱ持つべきものは友だよなー！」

ヘラヘラと笑いながら山内は柚椰の部屋を後にした。

「ふふっ、本当に面白い男だね。君は」

嵐が過ぎ去ったように静かになった部屋で柚椰はつぶやく。

山内がこれから取る行動が、どんな結果を導き出すのか。

導き出された結果が、どのようなものを柚椰は知っている。

そう、彼は知っているのだ。

山内春樹のような男が何を思い、何をするのか。

そしてそれが何を生み出すのか……

「同じようなことを説くのは好きではないんだが……まあ、これもまた人間の面白いところなのかもしれないな」

幕間：その日、彼の者は先生と出会った。

私とその少年に出会ったのは、まだ年が明けていないある冬の日だった。

当時ある中学校に在籍していた少年に、一目会いたいと足を運んだことをついこの間のように感じる。

彼に会いに行く時間を捻出するために、日夜仕事に明け暮れたことも記憶に新しい。

いい歳をした大人が二回り以上も年下の、それも同性である男に対してそこまで関心を持つことは稀有に映るだろう。

しかし、私が彼にそうさせるだけの関心を抱いたのには理由があった。

事の発端は三ヶ月ほど前に起きた一つの事件だ。

日本のとある中学校内で起きた無差別殺傷事件。

そのセンサーシヨナルな見出しは瞬く間に世間を騒がせた。

僅か2時間の間に生徒33人と教員3人が死亡し、生徒教員を含む14人が重軽傷を負った。

この数字だけでも恐ろしいことだが、これをやってのけた犯人が学校に在籍していた中学3年生の少年2人と1人の少女だったというのだからその衝撃は察するに容易いだろう。

さらにその殺害手段も強烈だった。

遺体は頭部が潰されているものから刃物などで腹部や胸部を抉られたもの、何かによって身体の3割を溶かされたもの、中にはボールペンやハサミで喉や眼球を貫かれていたものもあるという。

断片的に語られる情報だけでもおぞましく、残酷な事件だろう。

しかしこの事件は単なる凄惨な事件として片付けるにはあまりに複雑すぎた。

まず犯行を行った生徒三名は皆、周囲からいじめと呼べる行為を受

けていた。

ある少年はクラスの中心的グループから習慣的に暴力を振るわれていた。

ある少年は同性の教員から日常的に性的暴行を受けていた。

ある少女は友人だったはずの同級生によって謂れもない罪を被せられていた。

それだけでなく、三人を辱めるために彼らに性交を強要させたこともあったという。

そんな非道なことをさせたのはクラスメイトだと思うだろうがそれは少し違う。

なんと担任の教師でさえ加担していたのだ。

その場に居合わせていながら。教職者でありながら。

日常的に周囲の人間から虐げられていた者達。

その日常は彼らの怒りの発露によって、最悪の形で爆発した。

彼らはクラスメイト全員と担任の教師、日常的に性的暴行を加えてきた学年主任、そして止めに入った体育教師を殺害した。

それだけでなく、自分達が受けていた被害を知っていながら見ぬフリをしてきた者たち全てに決して浅くはない傷を負わせた。

その凄惨な悲劇は、生徒からの通報によって駆けつけた警察の手によつて三名が確保されたことで終息する。

以上が事の一部始終だ。

事件の詳細が明るみになるにつれ、世間の評価は大きく二つに割れた。

曰く、「やったことが自分に返ってきただけの自業自得だ」。

曰く、「それでも殺すのはやりすぎではないだろうか」。

曰く、「いじめを黙認してきた周囲の人間も同罪だ」。

曰く、「3人を助けてくれる人はいなかったのか」。

正確には賛否が分かれてはいたが総じて言えるのは、大なり小なり被疑者の3人に同情する声がほとんどだったということだ。

それほどもでにこの事件の内情が被害者側の劣悪さに彩られたも

のだったのだから。

しかしマスコミはさらに深い闇へと切り込んでいった。結果、この学校からこれまでひた隠しにされてきた問題が多く出てきたのだ。

取り上げられた問題だけでも次の通りだ。

- ・教員数名による女子生徒への淫行。
- ・女子生徒による不特定多数の男性との売春行為。
- ・生徒数名の違法薬物使用。
- ・学校長と教育委員会との癒着。

火の無いところに煙は立たないとは言うが、叩けば埃が出るとは言うが、こうも次々と出てくるものと呆れてしまったのは恐らく私だけではなかっただろう。

司法に触れるレベルの問題はこれくらいだったが、その他にも他校の学生との暴力沙汰や、教頭と生徒の親との不貞行為など、週刊誌にとっては格好のネタになりうるであろう事実が出続けた。

そんな問題だらけの学校であることが世間に知られてしまえばタダで済むはずもないだろう。

ましてや本来是正を促すべき組織である教育委員会でさえ、学校長と癒着しており全く機能していなかったのだから。

この中学校の問題は最終的に国会で議論されるまでに発展した。

そして出された結論としては今年度を以って廃校処分というものの一つの公立中学校が無くなるというのは在校生や周辺地域に大きな影響を与える。

そのような決定は当然簡単に下されることはない。

しかし教員を替え、生徒を入れ替えて学校を存続させるといった案が通るレベルはとうに超えていた。

件の事件に関わっていた人間の数があまりに多く、そしてこれまでの隠蔽体質が露見してしまったのだから。

最早切除すべき癌は一教員や一生徒だけに留まらない。

元より近隣に公立の中学校が複数あったことや、どういうわけか今年に入ってから生徒が次々に減っていることもこの決定を後押しした。

つまり国はこの学校の汚名を、汚濁を長い年月と労力をかけて浄化することよりも、跡形もなく速やかに消し去ることを選んだのだ。

そうした方が容易であるが故に。

私個人としては、この判断を否定しない。

一教育者として、一国民として、一人の人間として、そうすることが妥当であると判断している。

在校生はほぼ全て近隣にある他の中学校に特例として転学させられた。

被害を受け入院していた生徒たちに対しても形式上の転学手続きが取られた。

一連の問題に関与していなかった教職員は、希望者については来年度以降他の学校への配属措置が取られることが決まった。

話を戻そう。

私がこのことを聞いたとき、胸に湧いたのは虐げられていた三人の子供たちへの憐憫の感情だった。

これほどまでに周囲から迫害されることがあるだろうか。

本来守るべき大人たちに守られず、寧ろ一緒になって傷つけられることがあるだろうか。

一教育者として、一人の大人として、彼らを傷つけた者達には怒りを禁じ得ない。

故に私は彼らに面会を求めた。

赤の他人である私が、彼らに何か言葉をかけてやることなど出来ないだろう。

彼らの心に明かりを灯すことなど出来ないだろう。

けれど、それでも私は彼らに会ってみたかった。

彼らが周囲の人間によって壊されてしまったことは明らかだ。

彼らの何かが決定的に変わってしまったことは明らかだ。

では、人が人を壊すに値する決定的なスイッチとは何なのか。人が変貌と呼べるほどに変わってしまう決定的な要因とは何なのか。

私は知りたかった。

そう、単純に知りたかったのだ。

言わば単なる好奇心というやつだ。

これは決して清純な理由ではない。

寧ろ一大人が子供に向ける感情としては不純且つ不道德なものだろう。

しかしそれでも、私は知りたかった。

幸運にも3人全員と私は面会することが出来た。

私の立場がそうさせたのか、或いは別の要因があったのかは分からない。

しかし、その時の私にとってはまさに僥倖だった。

私は彼ら一人一人と時間をかけて対話を試みた。

実際に話してみてもまず驚いたのは、彼らは皆私に対して敵意など微塵も向けることはなく、寧ろこちらの話に対して素直に耳を傾けてくれたのだ。

事情が事情であるが故に、大人というものに対して嫌悪や憎悪といった感情を向けてもおかしくはなかったはずだ。

私もある程度の覚悟をした上で面会に臨んでいた。

だが結果として、そんな覚悟は不要であったため少々肩透かしを食らったのを覚えている。

彼らに対話の意志があるならこれ幸いと私は聞きたかった事を一つ一つ尋ねていった。

犯行はおよそ衝動的に行えるようなものではなかったため、計画的なものであることは明らかだった。

ならばその計画は3人で立てたものだったのか。

凶器は自分たちで用意したものだったのか。

警察に既に聞かれていたであろう事柄に対して、彼らはつらつらと語ってくれた。

恐らく何度も聞かれたことだったのだろう。彼らは言葉に詰まることはなく、テンプレートであるかのように答えていった。

計画は3人がそれぞれ意見を出し合って練ったもので、凶器も各々が自宅にあつたものや隣県まで足を運んで調達したもので、親の名前を使ってネットで注文したもので揃えたのだと彼らは答えた。

実際に凶器のほとんどの出所は彼らの話と一致していることからこれは真実だと言えるだろう。

つまり彼らは綿密な計画と準備を経て犯行に及んだのだ。

彼らはそこまで追い詰められていたのか、或いは狂気に染まっていたのか。

それを紐解くべく、私は最も気になっていた事柄を尋ねた。

「君たちが何故あのようなことをしようと思つたのか。実行に移すまでに至つたのか。勿論君たちが置かれていた境遇については既に知っているとも。だがそれはあくまで外付けの理由に過ぎないと私は見ている。だからこそ聞きたい。君たちに武器を取らせた決定的なスイッチとはなんだつたのかな？」

人が人を殺そうとするのには理由がある。

彼らにとつてそれが憎悪に該当することは直接言葉を交わさなくとも察せられるだろう。

しかし、実際に手にかけるとなればそれだけでは起爆剤足りえない。

虫や犬猫を殺すのとはわけが違う。

人が人を、つまりは同族を殺すということに対して生物は本能的な忌避感を覚える。

知性が発達した生命であればあるほどそれは顕著に表れるだろう。

だからこそ、人は殺人という行為が最大の禁忌であることを無意識の内に知っているし、それを実行してしまつた人間に対しては本能的

に忌避感を、危機感を覚える。

勿論衝動的に殺人を犯してしまうケースもあるだろう。

うっかり、咄嗟にした行動が結果として人を死なせてしまうケースもあるだろう。

しかしこと今回の事件には、この3人に対してはそれは当てはまらない。

何故なら彼らは自らを虐げてきた全ての人間を手にかけることを前段階から計画していたのだから。

なればこそ、問わなければならない。

生物としての本能を振り切った——否、焼き切ったのは何なのか。

彼らは私の問いに対して意外そうに目を丸くし、どこか救われたように頬を綻ばせた。

そして彼らはまるで物語を語り聞かせるかのように私に胸中を明かしてくれた。

「僕にそんなことを聞いてきた大人は貴方が初めてだ」

「警察は俺がされたことだの、凶器はどこで手に入れたのだらな
いことばかり聞いてきた」

「あいつらは私を可哀想な子どものように見てくるばかりだった」

「不愉快だった」

「鬱陶しかった」

「何もわかっていない」

「僕は、僕たちは確かに辛かった」

「ああそうさ、確かに何度死にてえと思ったか分からねえ」

「誰も私たちの事なんて見ていなかったくせに」

「あいつらにとつて僕は人間じゃなかった」

「野郎に犯される屈辱なんざ誰も分からねえだろうな」

「誰も私を助けようだなんて思わなかったくせに」

「僕はゴミのように扱われていた」

「俺は奴隷だった」

「私は玩具だった」

「だけど」

「けどな」

「けれど」

「僕はいつらが憎くて殺したんじゃない」

「俺があつた野郎共に復讐したくてこんなことをしたつて？」

「私がただのやり返しであんなことをしたつて思つてる？」

「それこそ思い上がりだ」

「そんなもんは勝手な同情だ」

「実に安易な思い込みね」

「僕はただ知つてほしかつただけだ」

「俺はただ理解したただけだ」

「私はただ見てほしかつたの」

「僕の痛みを、僕の苦しみを、僕の嘆きを」

「俺が本当にやりたかつたことを」

「今までオモチャのように扱われていたんだもの、当然でしょう？」

「あいつらにも知つてほしかつたんだ」

「あいつらに味わつてもらいたかつたんだ」

「私はここにいて、私はこういう女だつて分からせただけ」

「それが相互理解というものなんでしょう？」

「それが愛情表現つてやつだろ？」

「それが存在証明と云うのでしょう？」

「「だって、」先生」がそう言つてた（もの／からな）」「」

彼らは正常だつた。

決して狂つてなどいながつた。壊れてなどいながつた。

いや、他の者は彼らのソレを狂気と捉えるかもしれない。

しかし私はそれを否定する。断じて違ふのだと認否する。

何故なら彼らのソレは狂気と括るにはあまりにありふれていて、凡

庸だった。

そして淡く、儂く、清廉で、なにより尊いものだった。

私がそう形容するほどに、彼らの表情はまるで新しい玩具を買ってもらった子どものように純粹で、あどけなかつたのだ。

まるで今まで虐げられてきた過去は事実として、彼らの根底には確かに存在

しているのだろう。

しかし彼らの表情は、溢れ出でていく感情は穢れを知らない幼子のように澄んでいる。

それはあまりにも大きすぎる矛盾だ。

だがその矛盾に一切の綻びはない。

本当にそうであるかのように彼らの中で根差し、芽吹き、一輪の花の如く咲き誇っている。

それは豹変なのか、あるいは彼らの防衛本能による退避であるのか。

人によつてその判断は分かれるだろう。

しかし、私はそれを論ずることに意味を見出してはいなかった。

何故ならこの時、私の中にはある一つの疑問が生じていたからだ。

彼らは皆各々が純粹な感情に突き動かされていた。

「相互理解」、「愛情表現」、「存在証明」。

それは決して複雑な感情などではない。寧ろ至極シンプルかつ簡単な感情だ。

「分かり合いたい」、「愛を伝えたい」、「己を示したい」。

彼らの感情を言葉に表すのならばこういうことなのだから。

だがそれらの感情を持ったきつかけについて、彼らは共通してある人物の存在を示していた。

彼らは皆、それらの感情の根源を教わったものだと言った。

それを教えた者こそ、彼らが『先生』と呼んでいる人間だ。

私はその『先生』なる人物について詳しく尋ねてみると、彼らはこれまた嬉しそうに語ってくれた。

「先生は凄い人だよ」
「俺を地獄から救ってくれた」
「先生は私にとって光なの」
「僕に生きる意味を教えてください」
「ただ優しい言葉をかけられたくらいじゃ、俺はあの人を尊敬なんてしなかったさ」
「日陰にいた私を照らしてくれた、唯一の人」
「学校の教師共は何もしてくれなかったけど、先生は違った」
「先生と話していると、自然と心が安らいだ」
「誰もがないモノのように扱っていた私に、先生は手を差し伸べてくれた」
「周りの人間なんて信用できないと思ってた」
「全てが敵だと思ってた」
「誰も信用できないと思ってた」
「でも不思議だけど、先生にはなんでも話すことが出来た」
「けど先生は違うってのは本能で分かったんだ」
「けれど居たのよ。全てを打ち明けられる人が」
「先生は僕に沢山のことを教えてくれた」
「先生の話は難しくてもよく分かんねえことも多かったけど、面白れえ話もしてくれたぜ」
「先生の目は他の誰でもない私だけを見つめてくれた」
「先生は本が好きでね、よく勧められたよ」
「タメ語でいいって言うってくれてたけどよ、俺は先生にそんな口は利けねえな」
「先生に言葉をかけてもらえるだけで、見つめてもらえるだけで幸せだった」
「多分だけど先生はずっとあそこにいるんじゃないかな」
「慈悲深いっつーか愛情深い人だからな。俺にとっては親より大事な人だ」
「これからも私を見守ってくれているはずよ。ずっと、ね」

彼らは『先生』との日常やその人柄について嬉しそうに語った。大切な思い出を語るように、最愛の人について語るように。話を聞けば聞くほど、私はその『先生』という人物に関心を持った。彼らは皆等しく心に傷を負い、地獄と言う言葉が生温いほどの環境にいたはずだ。

しかし、その『先生』なる者は彼らに光を与えた。希望を抱かせた。それは誰にでも出来ることでは決してない。いや、寧ろ出来る者が存在することが奇跡と言っている。

『先生』という人間は彼らにとって救世主であり、まさに”先生”だったのだ。

だからこそ知りたいのだ。

その『先生』とは一体何者なのか。

彼らの話から人物像を絞り込むことは可能だった。

まず一人の少年が語った「学校の教師とは違った」という言葉。

このことから『先生』は学校の教師を指すものではないことが分かる。

続いて二人目の少年が語った「タメ語でもいいと言ってくれた」というのも重要なキーワードだ。

これは恐らく『先生』が少年ときほど歳が離れていないことを表しているかと推測できる。

大人が中学生に対してタメ口で話すことを許すことはごく僅かだがあり得るかもしれない。

それは相手が器の大きい人物であるか、あるいは少年が他者に対して敬語を使うことを苦手としている場合かのどちらかだろう。

しかし、この場合はどちらでもないかと私は確信していた。何故ならば前提が違うからだ。

彼らは皆同じ学校に通うクラスメイトだ。

そんな彼らに接触できる人間は必然的に学校関係者に絞られる。

教師、学校に出入りしている大人、生徒、保護者のいずれかだろう。

そして彼ら三人のパーソナルデータを踏まえればそこからさらに選択肢は絞られる。

彼らは三年生であり既に部活動は引退している。しかし現役時にも彼らの所属していた部活動はバラバラだった。

加えて彼らは三人とも塾や学外のクラブチームに属していたという情報は無い。

つまり彼らの交友関係はあくまで学校内で完結しているものであり、その繋がりには限定的だということが伺える。

そしてここに今までの情報を加えていく。
彼らは日常的に周囲から虐げられていた。

その相手はクラスメイト、担任教師、そして学年主任。

この時点で彼らにとつて味方となる人間は存在しなかった。

つまり彼らから見て、クラス全員は敵だった。教師という存在は敵だった。

であるならば、これらに属する存在は彼らの心を開かせることはまず不可能だったはずだ。

次に彼らは自身がされてきたことを隠してきた。当然親にさえ打ち明けていなかった。

つまり彼らは保護者に対しても心を開いたりしなかったはずだ。
親同士の情報網は馬鹿にできない。たとえ他所のクラスの生徒の

親だろうと、いじめの事実を知ればいずれは彼らの親に情報が届いていたであろうことは想像に難くない。

これらのことからまず教師、保護者、クラスメイトは候補から除外される。

残る可能性は学校内に出入りできる大人か、クラスメイト以外の生徒だ。

この時点で前者の可能性は正直に言ってほぼ無いと私は判断していた。

通常公立の中学校に出入りできる保護者以外の大人は精々が部活動が招致した外部コーチか、あるいは用務員に属する者くらいだろう。

そんな人間に彼らの心を開かせられるとは、彼らが心を開くとは思えない。

ならば必然的に残るのはクラスメイト以外の生徒だ。

この可能性を考慮した場合、考えられるのは次の二つだ。

一つは一年生あるいは二年生の生徒、そしてもう一つは彼らの同期である三年生の生徒だ。

だが先の少年たちの発言を振り返ると、前者である可能性は限りなくゼロだと言っているだろう。

何故なら『先生』なる人物はタメ口で話すことを許していた。

これは後輩が先輩にする行為にしては些か違和感を感じざるを得ないだろう。

もし仮に『先生』が彼らの後輩にあたる立場であった場合、あそこまで敬意を前面に押し出したような語り方をするだろうか。

確かに中には年下とは思えないほどに達観し、人徳に溢れた賢い人間というのも存在するだろう。

しかしその場合、『先生』がすべき行為は許すではなく頼むではないだろうか。

彼らの語り口から件の『先生』が、自身に対して敬語を使われることを当然と思うような傲岸不遜な人物ということはないだろう。

であるならば猶更、少年が『先生』への言葉遣いに対して許したと解釈していることが不可解だ。

この不可解を解消する上で、後輩であるという可能性の排除は当然の帰結と言えるだろう。

こうして考察していった結果、私は彼らが慕う『先生』の正体を絞り込むことが出来た。

『先生』の正体とは、彼らと同じ学校に通う三年生の生徒だ。

そこから先、より更なる絞り込みは少々難航した。

まず件の中学校において、事件発生当時在籍していた三年生は134人の4クラス。

そこから少年たちが在籍していたクラスの36人を引いた残りは98人。

この中で、事件によつて重軽傷を負つた者の中にいた三年生12人は『先生』ではないことは明らかだった。

少年たちの『先生』に向ける敬愛は本物だ。

たとえこちらを攪乱させるためだったとしても、彼らが『先生』に危害を加えるとは思えない。

となれば残る候補者は86人3クラスに渡る。

ここからの絞り込みは困難を極めた。

仕事の合間に一人、また一人と候補者に対して選別を行うこと二週間。

暗礁に乗り上げたかのように見えたが、面会の際の少年たちの発言を思い出したことで光明を見出した。

1人の少年は『先生はずつとあそこにいる』と言った。

1人の少年は『慈悲深く、愛情深い人』と言った。

1人の少女は『ずっと見守ってくれているはずだ』と言った。

それらは彼らの一方的な憧憬の念の発露だと、妄想であると判断することは容易だ。

彼らが妄信的に『先生』を慕っているが故に出た言葉だと解釈することは簡単だ。

しかし私は彼らの言葉を敢えて判断材料に加えることにした。

彼らのその言葉によつて新たに加えられる条件はただ一つ。

事件発生後に他所の中学校への転入手続きを取っていない生徒。

取られていないなどということはありません。

国が一律で全在校生に対して転入への対応を取っているはずなの

だから。

であれば当然、取られていないのではなく取っていない。

否、正確には国からのその対応を不要と回答したということ。

私にとつて、この推測は驚くほどしつくりときたのだ。

そこから先は早かった。

何故ならそんな条件に当てはまる生徒など多くはない。

否――

――『先生』以外にその条件を満たす者など存在しないのだから。

年の末、吹き抜ける風の冷たさが肌をざわつかせる冬の日のことだ。

ずっと探していた『先生』の正体を知った私は、その日をずっと待ち望んでいた。

その日は私のこれまでの人生で、間違いなく最も高揚し、恐怖した一日だった。

まるで若返ったかのように心が躍っていたことを鮮明に覚えている。

これから『先生』に会えるのだと、ようやく相見えることが叶うのだと晴れやかな気持ちで朝を迎えた。

間違つても失礼のないよう、いつも以上に身なりを気にしたのは些か気恥ずかしいことだったかもしれない。

車を出させ、到着した場所へ降り立ったときの緊張は思わず背筋を伸ばすほどだった。

はやる気持ちを抑え、私は門を潜った。

その日、私は『先生』との邂逅を求めて聖ヶ丘第三中学校へと足を踏み入れた。

幕間：かの者は一滴を投じること成功した。

「ようこそお越しくださいました。どうぞこちらへ。ご案内いたします」

「ありがとうございます」

敷地に入った私を一人の教員が出迎えた。

パンツスーツに身を包み、長い髪を後ろで括った若い女性。

その出で立ちはやまに「仕事の出来る女」を体現しているようだった。

女性は二、三步ほど歩いたが、ふと足を止めてこちらを振り返る。

「申し遅れました。私、市原と申します。本校への処分が執行される年度末までの期間、学校長代理を務めさせていただきます」

自身の名を名乗り、背筋を伸ばしてこちらに一礼するその姿は堂々としており、品のある様を感じさせる。

「これはどうもご丁寧に。私も名乗った方がよろしいですか？」

「いえ、既にお名前は伺っておりますので」

挨拶もそこそこに、市原と名乗ったその女性は私を校内へと案内すべく足を進める。

道中会話が何もないのは憚られた私は何とは無しに話を振った。

「ここには貴女の他に何名ほど教員が？」

「例の一件以降、処分を免れた教員のほぼ全てが来年度の再配属までの間、休職か自宅待機を選んでいる状態です。そして現在ここで勤務している教員は私を含めて三名です」

「そうですか……臨時とはいえ、学校長の職務はお忙しいのでは？」

「既に職務という職務が存在しているような職場ではありませんので。あくまで学校という体を取り繕うだけの役職ですよ」

齒に衣着せぬ物言いをする女性は投げやりになっていくわけではなく、ただ事実をありのままに述べているように見える。

「元々は私も再配属まで休職させていただくつもりだったのですが

……学校長として学校に残っていて欲しいと申し出がありました」
「教育委員会からですか？」

「まさか。もしそうであつたら断つていましたよ」
「では一体……」

尋ねた私だったが、同時に頭の中ではある可能性が浮上していた。教師という立場上、ある種絶対とも言える教育委員会の意向を躊躇することなく拒むくらいには否定していた今の役職。

しかし彼女は現にこうして学校長代理という職務をこなしている。彼女は暗に言っているのだ。

教育委員会などというものよりも遥かに重要な存在から頼まれたからこそ、自分は今ここにいるのだと。

彼女にそう言わせるだけの存在とは一体何か。

答えは明白だ。

ことこの場に足を運んだ私にとっては、その解を導き出すことは容易だった。

「……彼ですか？」

「ふふつ、そうです。彼に言われたのですよ。自分の卒業を見届けてほしい、とね」

頬を僅かに緩めて微笑むその姿は恐らく彼女という人間を知っている人間にとつてはとても珍しいものなのではないだろうか。

初対面の私から見ても、彼女は凛としているという表現がまさに相応しいほど引き締まった印象があつた。

その彼女が柔らかく誰が見ても嬉しそうに微笑む姿は、そうさせるに値する事象の大きさをこれでもかと感じさせていた。

私と彼女は上の階への階段を上っていく。

「まさか他の教員も、ですか？」

「ええ。ここににいる者は皆、彼に声をかけて貰えたからこそ、未だこの教師であることを許されているのです。尤も、転校していった生徒に関する引継ぎは既に完了しており、加えて彼は既にカリキュラムを終えていますので、これといった業務はないのですが」

「つまり、こう言つては失礼ですが……ただ居るだけだ？」

「そう捉えていただいて構いません。やることと言えば教育委員会への報告と、彼との面談を定期的に行うくらいでしょうか」

「面談、ですか」

「形だけのものですよ。報告書を上げるためには面談を行っている、という事実が必要なので。それに、面談の内容も彼の話を聞くというより寧ろこちらの話を聞いてもらうことの方が多いですから」

「市原先生の話を、ですか？」

私が尋ねると彼女は先ほどのような微笑みを浮かべて頷いた。

「ええ。彼にはよく話し相手になってもらっていたのですよ。それこそ、あの一件よりもずっと前から。さて——」

階段を上り切ったところで彼女は足を止めた。

辿り着いたのは校舎の三階。廊下を見渡すと各教室のドアの上に3—1、3—2といったプレートが見える。ここは三年生の教室が並ぶ階のようだ。

「彼がいるのはここから先へ行った突き当りにある3—4の教室です。案内は必要ないかと」

「……なるほど。案内して頂いてありがとうございます」

どうして教室の前までではなく、階段を上ったところまで案内を止めたのか。

その疑問は残っていたが、別段今ここで問うことでもないと考えた私は、ここまで案内をしてくれた彼女に礼を述べた。

「いえ、お気になさらず。彼との出会いが、貴方にとって運命となることを祈っております」

そう言い残して、市原は階段を下りて行く。どうやら本当に教室までついてくることは無いようだ。

何か理由があるのか、それは分からなかった。

私は促された教室までの道のりを一步、また一步と踏みしめるように歩き出す。

「もし、私の推測が正しいものだったとしたら……」

歩きながら私は思考していた。

今日この日、ここに来るまでの間にずっと頭の中で考えていた、あ

る一つの可能性。

件の一件の被疑者である3人の少年少女と深く関わっている『先生』なる存在。

その正体がこの先に待っている一人の男子生徒であること。

それは最早疑いのないことであり、今更否定する道理もないことは分かっていた。

重要なのはその先だ。

『先生』は3人に光を齎した。これは間違いない。

彼らの表情は絶望に濡れてなどおらず、寧ろ天啓を得たと言わんばかりに晴れやかだったのだから。

あのような凄惨な事件を引き起こしたにも関わらず、彼らはその行いを罪深いことだと思っていなかった。

たとえ自業自得であっても、自身が今まで酷い目に遭ってきたいても、それでも人を殺めるという行為にはほんの僅かでも罪悪感や後悔の念を抱くはずなのだ。

勿論、世の中にはそのような感情を微塵も抱かずに殺戮を繰り返す残虐な人間も存在する。

しかしその例と彼らでは前提が異なる以上、彼らがその例に当てはまることはない。

生まれながらに狂っていたのではない、それを自覚させられたわけでもない。

彼らは本当に新たな感情を芽生えさせ、その感情の行く先が事件の被害者達であっただけのことだったのだ。

その感情を目覚めさせるきっかけを与えた人物こそが『先生』。

目的の教室に辿り着き、扉の前で足を止める。

扉を開けたその先に、私が会いたいと望んでいた存在が待っている。

彼自身にアポイントを取っていたわけではないため、厳密には待つてはいないのだがそれは些細な問題だろう。

大きく深呼吸をして、私は扉を横へスライドさせ中へ入った。

3人を絶望から救い、生きる意味を与えた『先生』という救世主。だがこのとき私は、その『先生』が彼らに行つたことの本質について半信半疑ではあるが至つていた――

——『先生』は救世主であるが、その名の通り教育者でもあるのではないか、と……

扉を開けたその先に広がっていた光景は、教室と呼ぶには少々状況が異なつていた。

まず普通の教室にブラツと並んでいるはずの机と椅子は一つもない。

あるのは長机が二つとパイプ椅子が二つだけ。

恐らく面談の際に使用しているであろうそれは向かい合わせになるように置かれていた。

そしてそれらとは別に、窓際に置かれていた一脚の椅子。

それに腰掛け、本を読んでいる一人の少年がいた。

彼こそ私がずっと会いたかった、ただ一人の相手。

この数か月の間焦がれていた、ただ一人の男であることは明白だった。

「黛柚椰君、だよね？」

「おや、来客とは珍しいですね。どちら様ですか？」

私が声をかけると少年はやや驚いたような、そして不思議そうな表情を浮かべながら本を閉じ、私に何者かを尋ねる。

その口調は柔らかく、コミュニケーションに長けていることが容易に窺えた。

彼が放つ雰囲気と表情はこちらを警戒する素振りなど微塵もなく、寧ろこちらを歓迎するかのような温かさを感じさせた。

それが彼の素の姿なのか、あるいはそうであろうと心掛けているからなのかは分からない。

しかしいずれにしても好意的であるのならそれに越したことは無いと、私は彼との対話を試みた。

「これはすまない、不躰だったね。私は、そうだな……ある高校で理事長をしている者だ」

私がそう言うと、彼はどこか嬉しそうに微笑んだ。

「そうですか。それで、その理事長さんが俺になにか？」

「君の噂を小耳に挟んでね。是非一度会ってみたかったんだ」

その言葉に彼は首をかしげる。

「噂、ですか……良い噂であることを願いますが」

「君が例の事件の後、他所の学校に移ることを選ばずこの学校に在学することを選んだ唯一の生徒だということを知ってね。どんな子か気になってしまったんだ」

「ああ、そのことですか。別に深い理由があったわけではありませんよ。ここは家から近いですし、市原先生……あ、今は校長先生ですね。彼女にはよくお世話になっていたのです、彼女の下で卒業を迎えたかったのですよ」

彼はつらつらと言葉を述べた。

自分は今の学校長に恩があり、だからこそこの学校での卒業を望んだだけのことだと。

「ここへ案内してくれたのはその市原先生でね。彼女も君のことを話してくれたよ。なんでも、彼女に学校長代理を勧めたのは君だったのか」

「おや、これはお恥ずかしい。そうですね、確かにお願いをしたことはありますよ。俺も全く知らない先生や他所から来た先生から卒業証書を貰うよりは、よく話すことがあった市原先生に貰いたかったと思っただけなんです。それに市原先生ってほら……美人じゃないですか」

「ふふっ、そうか。じゃあ君は美人の先生に卒業証書を貰いたかったからそうした、と」

「市原先生には言わないでもらえませんか？ その、恥ずかしいので

……」

頬を僅かに紅潮させて目を背けながら言うその姿は、まさに思春期の男の子といった感じだった。

俗物的な理由で一人の教員に学校長になることを頼んだということが本人に知られるのは恥ずかしいのだろう。

ここまでの会話において不自然なことは何一つない。

彼がこの学校に在学し続けることを選んだ理由も、件の学校長代理に声をかけた理由も矛盾する点は存在しない。

恐らくこの話を聞いた誰しものが、彼のことをただの思春期に成りたての少年だと解釈するだろう。

しかし、ことこの場に限りては、そしてこと私に関してはその限りではなかった。

私は彼が持つ会話の魔力に気づいたのだ。

彼は自身の発する言葉が、その表情や仕草が、相手にどのような印象を抱かせるのかを熟知している。

知っているが故に、その力の絶大さに気づいているのだ。

会話というものは、やり方ひとつで相手に対して好印象や悪印象を抱かせることが出来る。

つまり相手に好感を抱かせることも、詰まらない人間だと失望させることも容易なのだ。

そして彼はそれを意図的に行っているのだ。

気づいてしまったが故に私は確信する——

——彼こそが私の求めていた人間だということ。

「君は会話の持つ力を……いや、正確には相手の心を動かす術を知っているんだね」

私は核心に触れた。

彼が持つ力の本質を、彼が持つその力の恐ろしさについて。

同時にこの先の局面を頭に思い浮かべていた。

ここから先は鬼が出るか蛇が出るか。

上手くいけば私にとつては僥倖。だがもし誤れば……

恐らく私は目の前の少年によって破滅させられるだろう。

「ふふっ、その口ぶりですと貴方は俺が何をしてきたか知っているようですね」

核心に触れた私に対しても尚、彼は微笑みを浮かべていた。

それは虚勢などではなく、恐らく本当に然したる問題ではないのだということだろう。

彼の反応に私は僅かに胸を撫で下ろす。

もしここで敵意を向けられれば、警戒に値する存在なのだと判断されれば、たとえ客人である私であろうと危機的状況に晒されていたであろうことは想像に難くない。

「ああ、知っているとも……いや、告白しよう。君に直接会うまではあくまで推測だった。恐らくそういうことなのだろうという推察でしかなかったのだが……こうして相對して確信に変わった、といったところだ」

私は語った。

事件の後、被疑者の少年たちに面会を求めたこと。

彼らから犯行に至った理由を、その本質を聞いたこと。

その本質を説いたものが『先生』なる人物であったこと。

自分が『先生』を探すためにここ一ヶ月近くを費やしたこと。

そして今日この日、こうして会いに来たということ私を私は全て彼に語った。

彼は時折頷きながら、素直にこちらの話を聞いてくれていた。

その態度は、まるで推理小説の考察を聞いているかのように映る。

「君が『先生』なんだろう？　彼らを絶望から救い、光を齎した」
「……これはまた何とも、物好きな客人が来たものですね」

確信を持って出した私の解答を聞いた彼はどこか可笑しそうに微笑んでいた。

私が言ったことの意味を彼が理解していないはずがない。

彼のことを先生だと言うということは、事件の被疑者たちと関係があつたことを言い当てていることになる。

つまり事件に間接的に関わっていることを示唆しているのだ。

にも関わらず、彼は全くと言っていいほど動じていなかった。

寧ろどこか愉快そうに、嬉しそうにしているようにさえ感じられる。

「その解へ至るためのプロセス自体は実に単純だったはずですよ。彼らから『先生』という単語さえ引き出すことが出来れば、俺へと辿り着くことはそう難しくはない。この学校に残っている在校生が俺一人である以上、『先生』が俺であることは明白だ。しかし、この問題に解が存在するのを見つけることがそもそもその難問だったはずなのにすが……何故彼らから俺のことを聞き出すことが出来たのですか？」

「私も彼らが置かれていた境遇を知った時は同情し、彼らを酷い目に遭わせていた者達に対して怒りもした。そして彼らが例の事件を起こしたという結果を見れば、一連の出来事はまさに因果応報。彼らの怒りの発露であることは簡単に分かることだ。警察もメディアもそれが事実であり真実であると認識している。現に私も最初はそう思っていたんだ。だからこそ、事件を起こすに至った決定的なスイッチがなんだったのか知りたかった。彼らに面会を求めたのはそのためだったんだ」

「貴方は聡い方のようですね。人が変わるためには劇的な事象が不可欠であることを、一つの分岐点が行く末を変えらるということを理解している」

「その段階ではあくまで推測だったがね。でも、彼らと話しているうちに私の推測は徐々に真実味を帯び始めた。酷い虐めに遭っていたからというのは、あくまで私のような第三者が勝手に定義つけた外付けの理由でしかないのだと。それとは異なる全く別の要因によって、彼らは変わったのだという確信を得た」

「故に尋ねた。その要因とは何だったのかを、ですか？」

彼の言葉に私は頷く。

「彼らはどこか救われたように語ってくれた。私がそれを聞いたこと

は彼らにとって意外な事柄であり、同時に安堵した事柄であったのかもしれない。彼らは自身が置かれていた境遇と周囲に対する反逆で事を企てたわけではないと語ってくれた。その本質は『相互理解』、『愛情表現』、『存在証明』にあると。そしてそれを『先生』から……つまり君から教わったのだ、とね」

「なるほど……彼らがそんなことを……」

彼はどこか感慨深そうに私の言葉を噛み締めていた。

「彼らの言葉や表情に嘘はなかった。だからこそ人間が持ちうる本能と照らし合わせると大きな矛盾が生じる。しかしそれは矛盾であつて、同時に綻びの無い事実でもあつた。故に、彼らにその感情を教えたい『先生』という存在に強い興味を持ったんだ。そして彼らから『先生』のことについて聞き、その正体が君であることを突き止めた私は、今日こうして会いに来たというわけだ」

「そこですよ。俺が貴方を物好きと形容した大きな要因は」

少年はそれこそが最も重要な点なのだと主張する。

「例の事件の犯人である彼らと深く関わっており、同時に彼らに何かを説いた者が存在した。そしてそれが彼らと同じ学校の同級生であることを突き止めた。この時点で貴方には二つの選択肢が存在していたはずです。一つは俺を重要参考人になりうる人間だと警察ないしはマスコミにリークする。そして二つ目はこうして直接会い、例の事件との関係を、犯人である彼らを間接的に犯行に及ぼせた者であると問い詰める。本来であればこの二つしか選択肢は存在しなかつたはず。にも関わらず、貴方はどちらも選ばず全く別の選択肢を選んだ。尤も、先の二つの選択肢に関しては、選び取ったところで事が動くことは無かつたでしょう。物的証拠は何一つ存在せず、彼らが『先生』と呼ぶ存在がいたという事実だけでは俺を事件と紐付ける決定的な証拠には成り得ないのですから」

「ああ。私もそれは理解しているよ。だからこそ私は先の選択肢を選ばなかつた。私は君を事件の関係者だと言いつつも、彼らを唆した黒幕だと君を問い詰めるつもりもないんだ」

「そう、貴方は俺を詰問するためにここへ来たのではない。寧ろ、こう

して言葉を交わすことにこそ意味を見出している。違いますか？」
「その通りだよ。私にとってこうして君と直接会い、言葉を交わすところこそ最も望んでいた事柄なんだ。私はね、黛君——」

「——君のことを心底敬愛しているんだ」

そう、これこそ私の嘘偽りのない本心だった。

私は彼を敬愛している。

彼は苦悩や苦痛、涙と絶望に彩られた日常の中にいた少年たちを救った。

彼らに感情を教え、生きる理由を与えた。

もし少年らが彼と出会わなければ、恐らく自ら命を絶っていただろう。

そうあつても可笑しくないほどの環境にいたのだから。

だが結果として、少年たちは今も生きている。

やったことは司法の下においては決して許されることではないが、彼らは生きているのだ。

それは紛れもなく、目の前の少年が成した偉業に他ならない。

少年たちが人を傷つけ、殺めたのは揺るがざる事実だ。

しかしそれはあくまで結果的にそうなっただけのことではない。

現に目の前の少年は彼らに人を殺めろなどと説いたことはなく、ましてや今までされたことをやり返せなどと説いたこともないのだ。

あくまで彼らの抱く感情に名前を付け、その感情を肯定していただけなのだから。

その在り方はとても中学生の子供とは思えないほどに達観している。

私には彼がとても子供のようには見えなかった。

同時に私は彼の中に眠る一つの資質を垣間見っていた。

「君には教育者としての資質があるように見える。それは人を教え導く生き方……いや、この場合は視点が異なるが故に模索した一つの生き方、と言った方がいいかな？」

「……どうやら貴方は俺の想定を超えていたようですね」

彼の表情はそれまで浮かべていた微笑みから、さらに深い笑みへと変わっていた。

私は彼のその反応で自身の出した答えが正解であったことを察する。

「私が思うに、君は他者に対して何か大きな期待を寄せているように見える。その者が苦難を乗り越え、人として成長することを期待している。一体どうしてだい？」

「彼らを愛しているからですよ」

彼はそう切り出し、自身の胸の内を明かしてくれた。

「人は皆等しく、成長する可能性を有しています。たとえばどのような悲劇に見舞われようと、折れず奮起し立ち上がる。あるいはまた別のアプローチで以って状況を打破する。俺はそれを期待して後押しをしているんです。人が困難や恐怖に打ち勝つ姿。悲劇に見舞われようと前を向く姿。それは興味深く、美しく、そして素晴らしい。そうは思いませんか？」

「なるほど。つまり君は人を成長させてみたい。というのだね？」

「端的に言えばそうですね」

それだけ聞ければ十分だった。

彼は己の力の使い方を理解している。その力の大きさを、他者へ齎す影響の大きさを。

大きな力を持っていて且つその振るい方を知っている人間は貴重だ。

——だからこそ私は彼のことが欲しくなった。

「そんな君に提案があるんだが、いいかな？」

「提案、ですか。それは一体どんなものですか？」

「君に、私の学校の生徒になってほしい。君のような生徒が私は欲しいんだ」

「ほう……貴方がわざわざこうして出向いた本当の理由はそれですか」

合点がいったように彼は顎に手を当てた。

「私の学校は全国から優秀な生徒が集まる特殊な学校だ。それは勉強やスポーツだけではなく、協調性や知力、判断力なども評価される。何か光るものを備えている者だけが門を潜ることが出来るんだ。つまり、君が求める人の輝き。それを持っている可能性が高い生徒ばかりが集まる」

「……なるほど。それは面白いですね。詳しく聞かせてもらえませんか？」

彼の興味を惹くことに成功したと確信した私は、駄目押すようにある一つの情報を明かした。

「今度入学する生徒たちの中に、私が知りうる中で最も異質な少年が入ってくるだろう。その少年の父親とは少々交流があつてね。彼が入学することはほぼ確実と言っている。私はその少年と君が同じ学び舎で学ぶ姿を見てみたいんだ。私が見るに、君はその少年に勝るとも劣らない資質を兼ね備えている。いや、人間の心を知識としても、経験としても知り尽くしている分、君の方が優秀だと考えている」

「二の経験は百の知識に勝る。知恵とは知識だけで養うことは出来ず、経験を加えることで養われるんです。もし仮に、その少年がこれから経験を積み成長するのだとしたらそれは……なるほど。つまり貴方は、その少年と俺がどのような相乗効果を齎すか興味がある、ということですか」

「引き受けてくれるかな？　これは君にとっても利のある話だと思うんだ」

「……いいでしょう。その話、受けさせてもらいます」

彼から了承の意をもぎ取ったと理解した私は歓喜した。

もし私の想定が正しければ、彼とあの少年は同級生としてあの学校へ入学することになる。

それは想像するだけで教育者としての心が躍るほどの事象だ。

来年度の新入生が、現段階でも粒揃いであることは分かっていた。

私の愛娘も同じように一年生として通うことが既に決まっている。

ベクトルの異なる才能を持った者達がしのぎを削る、まさに実力至上主義の教室。

そこにまた一石、それも私が知りうる限り最も大きな一石を投じることに成功したのだ。

これで心が躍らないわけがない。

「そうか！ では、資料を後日ここに送らせてもらうよ。私は坂柳という者だ」

「坂柳さん、ですか。こちらこそよろしくお願いします」

それが私と黛柚椰君との出会いだった。

夏は終わり、秋が始まる。

9月1日。夏休みは終わりを告げ、生徒が再び授業に明け暮れる日々が始まった。

今日は二学期初日ということもあり、仏心か午後の授業に関しては2時間ホームルームに割り振られている。現在は午前の授業が終わり、生徒たちは昼休みを取っている最中だ。

「つまり干支の順番と各グループに割り振られた生徒の苗字が優待者を探すためのポイントだったってことなんだね」

「クラスって括りを外してメンバー全員を五十音順に並べる。そこにグループ名になっている干支の動物が示す順番を当てはめる……こうやって種明かしされると、とっても単純な法則だよな」

敷地内のカフェの一席にいるのはDクラスの中心人物である平田と櫛田、そして夏休みの間に行われた特別試験で動いていた堀北、柚椰、綾小路。最後に平田の彼女である軽井沢だ。

「うちが抱えていた優待者は南と桔梗。最後の一人は結局沈黙していたわけだけど……」

敢えて言葉を濁しながら、柚椰はチラリと軽井沢を見る。

先の特別試験中において、唯一本人の口から優待者であることを知らされていた平田は軽井沢が責められているのではと思ひ、割って入る。

「黛君、それは——」

「分かっているよ。別に責めているわけじゃないんだ。優待者は選べる選択肢が多い。故に沈黙を貫くこともおかしくないことじゃない。それは試験中の話し合いでも言っただろう？ だから彼女の選択に對してとやかく言うつもりはないよ」

柚椰の言葉に嘘がないことが見て取れたことで平田は胸を撫で下ろす。

そこで綾小路が再び試験についての話へ矛先を向けた。

「高円寺が言っていた、『気づいてしまえばなんてことはない。実に詰まらない問題だ』って意味がここにきてようやく分かったな」

「そうね。終わってみれば実にシンプルな問題よ。けれど試験の最中、それも初日の段階でこの法則に行き着くことはそう簡単な話じゃないわ。悔しいけれど高円寺君は優秀と言わざるを得ないわね」

堀北は心底悔しそうに高円寺を褒めた。

自分勝手、唯我独尊ではあるものの、その実力は目を見張るものがあることはいい加減認めなくてはならないのだと思っっているのだから。

「現に俺と鈴音も、この法則の確証を得たのは苦肉の策に出てようやくだったからね。自分の考えを疑わずに実行できた彼は肝が据わっているというか、恐れ知らずというか……」

「彼には守るべきものがないからでしょう。クラスを勝たせるため、なんて目的は最初から持ち合わせていないでしょうし」

柚椰の言葉に堀北が毒を以って同意する。

「あはは……で、でも結果的に正解だったんだし、高円寺君も凄いつてことだよー！」

「ま、まあ高円寺君に関しては僕たちが言っただけで無理に協力させるよりも、自由にしてもらったほうがいいかもしれないから……」

櫛田と平田に関しては、なんとか高円寺を良い方へフォローしようとしていた。

「でも引っ掛かるのはやっぱりCクラスだよ。龍園君は早々にこの法則に辿り着いてたことを匂わせてた」

平田が思い返しているのは二日目以降のグループディスカッションでの龍園の言動。彼はその時点で優待者の法則について確証を得ていることをちらつかせていた。

「そうね。彼の言葉がハツタリではなかったことは試験の結果を見れば明らかよ」

「柚椰君から聞いたけど、Cクラスのスパイがいるかもしれないんだよ。その……私たちのクラスにも」

聞かされた話があまりにも悲しいことなのか櫛田が影を落として

いる。そんな彼女を氣遣つてか柚椰がフォローを入れる。

「勿論確証はないよ。でも自クラスの優待者3人だけを判断材料にしているにしては、彼はあまりに堂々とし過ぎていたように感じる。なにか別の要因があつても不思議じゃない」

「私たちDクラスではなくても、AやBから情報を得ていた可能性だつてあるわ。クラスの方針に不満がある生徒が情報を売っていた、なんてこともあるかもしれない」

「確かにその可能性だとAやBにスパイがいてもおかしくないな。Aは激しい派閥争い、Bは一致団結の穏健派。少数の不満があつたという推測は浮かぶ」

柚椰に続くように堀北と綾小路がAクラスやBクラスにスパイがいる可能性を提示した。要は現段階ではスパイがどのクラスにいるのか、あるいはどのクラスにもいるのかは分からないのだ。

「試験が終わつた後にも話したけれど、龍園君の目的はクラス間のポイント差を縮めることでこういつた疑心暗鬼に陥らせること。他クラスと同盟や協力体制を敷かれないようにするための予防策、といった面が考えられるわ」

「お互いがお互いを疑つて、気を張り続けさせることでボロを出させる。そしてそこをすかさず刺す、か……漁夫の利つてやつだな」

「じゃあ私たちがここでウンウン頭捻つてるのも向こうの思う壺つてことじゃん。考えてたつて仕方なくない?」

ここに来て初めて軽井沢がそんな発言をした。今まで蚊帳の外だつたからかその表情はどこか不満気だ。

しかし全くの無関係だつた彼女の言葉だつたからこそ、皆は一度冷静になることが出来た。

「確かにそうだね。軽井沢さんの言う通り、いるかも分からない存在に頭を悩ませるのは龍園君の作戦通りだ」

「今後の特別試験でも、彼が奇策に打つて出る可能性は高いわ。何があつても対処できるような体制を整える必要があるわね」

暗にこのメンバーで今まで以上に盤石な布陣を形成する必要があると言う堀北に綾小路は温かい目を向けた。

「……なにかしら綾小路君？ その顔は」

「いや、別に。お前も随分優しくなったなと思っただけだ」

「話を聞いていたのかしら？ 私は事に当たるための体制を強化する必要があると云っているの。馴れ合おうだなんて言っただけはな
いわ」

綾小路の言葉が癪に障ったのか或いは不本意だったのか、堀北は
バツサリと切り捨てる。

しかし心底不快といった態度ではなく、どこか悪態をつく子どもの
ような雰囲気があるため、実際は面と向かって変わったと言われるの
が気恥ずかしいだけなのだろう。

それが周りでやり取りを見ていた平田たちにも伝わったのか、どこ
か微笑ましい空気が広がっている。

「じゃあ今まで以上に協力していかないかね！ 私もクラスのために
出来ることがあれば頑張るよ！」

場の雰囲気盛り上げようと思ったのか、櫛田が快活な笑みを浮か
べて拳を握っていた。

彼女に同調するように平田も頷く。

「そうだね。僕も精一杯やらせてもらうよ。皆で協力して頑張ってい
こう」

「まあここまで話聞いちゃったら無視するってのも気分悪いし、私も
出来ることならやるわ」

この場に同席した以上非協力的な姿勢を見せるのはデメリットで
しかないと思っただのか、軽井沢もそんなことを言った。Dクラスの主
要なメンバーが揃って協力的になったというのは今後のことを踏ま
えれば最上の結果だろう。

堀北もそれを理解しているのか、それ以上なにか悪態をつくことは
なかった。

だが、そこで素直に大人しくならないのが彼女である。

「他人事のような顔をしているけれど、当然貴方にも協力してもら
わよ綾小路君？」

「……お、おう」

最早ただのサンドバッグのような扱いに綾小路は苦笑した。

しかし彼は堀北とのやり取りの傍ら、彼女の隣に座る少女が目にとまった。

「ふふっ……」

彼の視線の先にいる少女、櫛田桔梗は微笑ましいものを見るように温かく笑っていた。それは傍から見れば堀北の変化やこの場の雰囲気を楽しそうに思っているが故の笑みだと分かるだろう。綾小路も彼女の笑みをそう解釈していた。

しかし同時に、彼はその笑みがやけに印象深く脳に張り付く感覚を覚えていた。

それが何故なのかは分からないままに――

午後の授業、つまりホームルームの時間。担任である茶柱先生が教室へ入って来ると淡々と説明を始めた。

「今日から改めて授業が始まった。お前たち、早々に夏休み気分は払拭しておくことだ。でなければ5月の頃に逆戻りすることになるぞ」

開口一番生徒たちに辛辣な言葉をぶつけるが、最早慣れたのかDクラスの面々は素直に彼女の言葉を受け止めた。その反応がお気に召したのか茶柱先生は僅かに雰囲気柔らかくすると、再び口を開く。「さて、では連絡事項だ。2学期は10月に体育祭がある関係で、来月初週までの一か月は体育の授業が増えることになる。これから新しい時間割を配布するので各々しっかりと保管しておけ。それから体育祭に関する資料も合わせて配っていく。先頭の生徒はプリントを後ろに回せ」

体育祭という言葉聞いた生徒たちの反応は十人十色だ。

運動が得意な生徒は見せ場が来たと奮い立ち、反対に運動が苦手な生徒は苦悶の表情を浮かべている。また一部の生徒は、ただの体育祭ではないことを薄々察しているからか顔を引き締めていた。

「体育祭の詳細については学校のホームページにも詳細が公開されて

いる。必要があれば見ておくように」

「先生、これも特別試験の一つなんですか？」

クラスを代表して平田が挙手した後に質問をする。

その問いには肯定が返ってくるど誰もが思っていたが……

「受け止め方はお前たちの自由だ。尤も、この行事は各クラスに大きな影響を与えることは確かだかな」

茶柱先生の言葉を悪い方へ捉えたのか、運動が苦手な生徒からは悲鳴が上がる。普通の学校の学校の体育祭であれば、もし嫌であれば手を抜くかサボるなどの選択が出来ただろう。

しかしクラスの命運を左右すると言われればたとえ苦手であつても参加せざるを得ない。

一方運動が得意な生徒、特に須藤などはまたとない活躍の機会に今からやる気に満ち溢れていた。

「綾小路君、これ——」

周囲の喧騒を気にせず資料に目を通していた堀北が何かに気づき綾小路を呼んで資料を指差す。

彼女に促されるように綾小路も指差された箇所を確認して自分の資料の該当箇所目を通した。

二人の動きが見えたのか茶柱先生が全員に向けて話し出す。

「既に目を通して気づいている者もいるだろうが、体育祭は全学年を二つの組に分けて勝負を行う。お前たちDクラスは赤組だ。そしてAクラスも同様に赤組。この体育祭の間はAクラスは味方ということだな」

AクラスとDクラスが赤組。ということは戦うことになる白組はBクラスとCクラスということだ。

「つてことは今回はマジで他所のクラスと協力するってことっすか!? それに先輩たちとも!?!」

「そうだな。上のクラスであるAクラスや上級生と協力する機会は貴重だぞ。色々と学ぶこともあるだろう」

驚く池に対して茶柱先生は淡々と語る。

つまり自分達より優れている者達と交流を深める過程で色々と吸

収しろと言っているのだろう。

「説明を再開するが、まずは体育祭が齎す結果に目を通せ。一度しか説明しないからよく聞いておくように」

茶柱先生はプリントをペシペシと叩きながらチェックする箇所を伝えていく。

その言葉に耳を傾けつつ、生徒たちはプリントへ視線を落とす。

・体育祭におけるルール及び組分け

全学年を赤組と白組の2組に分け行われる対戦方式の体育祭。

内訳は赤組がAクラスとDクラス。白組がBクラスとCクラスで構成される。

・全員参加競技の点数配分（個人競技）

結果に応じて1位15点、2位12点、3位10点、4位8点が組に与えられる。

5位以下は1点ずつ下がっていく。団体戦の場合は勝利した組に500点が与えられる。

・推薦参加競技の点数配分

結果に応じて1位50点、2位30点、3位15点、4位10点が組に与えられる。

5位以下は2点ずつ下がっていく。（最終競技のリレーは3倍の点数が与えられる）

・赤組対白組の結果が与える影響

全学年の総合点で負けた組は全学年等しくクラスポイントが100引かれる。

・学年別順位が与える影響

総合点で1位を取ったクラスにはクラスポイントが50与えられる。

総合点で2位を取ったクラスはポイントの変動しない。

総合点で3位を取ったクラスはポイントが50引かれる。

総合点で4位を取ったクラスはポイントが100引かれる。

「簡単な話、運動が得意だろうが苦手だろうが気を抜かず全力で競技する必要があるということだ。負けた組が受けるペナルティは決して軽くないからな」

「あの先生、勝った組は何ポイント貰えるんですか？ 記載がないみたいですが」

平田の疑問は尤もだった。資料には負けた組に科せられるペナルティは書かれていても勝った組については何も触れられていないのだから。

「何も無い。マイナスという措置を受けないというだけだ」

「えー、マジっすかー？ 全然おいしくないじゃないっすか」

勝ったところで組全体での旨味はないということが明かされ教室内は落胆した空気が広がる。

「クラス別のポイントもしっかりと計算されているから注意するように。たとえば組自体が勝ったとしても、お前たちが総合点で最下位だった場合は100ポイントのマイナスを受けることになるからな」

つまり結果的に赤組が勝ったとしても、総合点で振るわなければ損をする仕組みだということ。だからこそ茶柱先生は気を抜かず全力で競技しろと言ったのだ。

かと言ってDクラスだけが活躍して総合点で1位を取り50ポイントを獲得したとしても、白組に負けてしまえばマイナス100ポイントのペナルティを受け、せっかく得たポイントが消えるだけでなく損をすることになる。

最悪の結果は白組に負け、さらに総合点でも4位だった場合だ。

この場合、組の敗北によって科せられるマイナス100と学年別総合点最下位によるマイナス100で合計マイナス200ポイントのペナルティとなる。

マイナス200という数値は先の無人島試験や優待者試験でのマイナスよりも大きい。絶対に避けなければならない結果であることは明らかだ。

教室が暗い雰囲気になったのを見てか、茶柱先生は飴玉を与えるように説明を始める。

「そう悲観することは無い。クラスや組の結果によるクラスポイントのマイナスは大きい。各競技で優秀な結果を出せばそれ相応の旨味は用意してある。特別報酬の欄を見ろ」

茶柱先生の言うように資料にはペナルティ以外にも特別ボーナスと言えるようなルールも記載されていた。

・個人競技報酬（次回中間試験にて使用可能）

各個人競技で1位を取った生徒には5000プライベートポイントの贈与もしくは筆記試験で3点に相当する点数を与える（点数を選んだ場合、他者への譲渡は出来ない）

各個人競技で2位を取った生徒には3000プライベートポイントの贈与もしくは筆記試験で2点に相当する点数を与える（点数を選んだ場合、他者への譲渡は出来ない）

各個人競技で3位を取った生徒には1000プライベートポイントの贈与もしくは筆記試験で1点に相当する点数を与える（点数を選んだ場合、他者への譲渡は出来ない）

各個人競技で最下位を取った生徒にはマイナス1000プライベートポイント。 （所持するポイントが1000未満だった場合は筆記試験でマイナス1点を受ける）

・反則事項について

各競技のルールを熟読の上遵守すること。違反した者は失格同様の扱いを受ける。

悪質な者については退場処分にする場合有。それまでの獲得点数の剥奪も検討される。

・最優秀生徒報酬

全競技で最も高い得点を得た生徒には10万プライベートポイントを贈与する。

・クラス別最優秀生徒報酬

全競技で最も高い得点を得た学年別生徒3名には各1万プライベートポイントを贈与する。

今までの特別試験ほどではないものの、条件の厳しいものから手軽なものまで、幅広い得点が用意されていた。

そして注目すべきは個人競技報酬のメリットとデメリット。そこには今までにない項目が追加されていた。

「先生先生！ この筆記試験の点数を得るってなんすか!?!」

興奮気味に尋ねる池の様子がおかしかったのか、茶柱先生珍しく少し笑った。

「お前の想像通りだ。体育祭で入賞するごとに筆記試験に補填できる点数を得ることが出来る。お前は特に英語や数学が苦手だったな。得た点数は好きに使って構わない。点数を持っているだけ、次回のテストで大いに役立つてくれるだろうな」

順位に応じた筆記試験点数の増減。それは人によつてはまたとない救済措置となるが、同時に重い枷にもなるということだ。

しかし旨い話には当然裏がある。

・全競技終了後、学年内での点数の集計をして下位10名にペナルティを科す。

ペナルティの詳細は学年ごとに異なる場合があるため担任教師に確認すること。

それはあまりに不穏な文面だった。

「先生、このペナルティってどんなものなんですか?」

「お前たち1年生に科せられるのは次回筆記試験におけるテストの減点だ。総合成績下位10名の生徒は10点の減点を受けるから注意するようにな。減点方法は筆記試験が近づいたときに改めて説明するためここでは質問は一切受け付けない。また、ペナルティを受ける生徒の発表も試験説明の際に通告することになっている」

「げえー マジ!?!」

明かされた情報に池は仰天している。仮に彼が学年で最下位の成績を取れば、次の筆記試験ではいつもより10点分余計に取る必要があるということなのだから。元々勉強が不得手な彼にとってそれは

相当苦しい条件になることは想像に難くない。

一通りの説明を終えると、次は体育祭の競技の詳細を確認していく。

体育祭の種目は大きく分けて『全員参加』と『推薦参加』の二つに分類される。全員参加は文字通りクラス全員が参加しなければならない種目。個別競技である100メートル走、団体競技である綱引きなどがこれに該当する。

対する推薦参加はクラスから選ばれた一部の生徒が参加する競技だ。推薦と言っても自薦他薦は問わない。また一人が複数の推薦競技に参加することもできる。要はクラス内で話し合っただけで決めるということだろう。内容は借り物競走や男女混合二人三脚、1200メートルリレーなどだ。

個人戦と団体戦が入り乱れ、且つ最終的な結果はクラスの総合点であるということはこの行事の忘れてはならない事柄だろう。敵となるBクラスやCクラスに負けないことは当然として、味方であるAクラスよりも良い成績を残さなければDクラスとして勝つことは出来ないのだから。

「体育祭で行われる種目の詳細は全て資料の通りだ。変更はない」「うげえ、これめっちゃハードじゃん！」

競技一覧に目を通していた篠原が苦い声を漏らした。彼女の言う通り、用意されている競技は多い。

・全員参加種目

- ① 100メートル走
- ② ハードル競走
- ③ 棒倒し（男子のみ）
- ④ 玉入れ（女子のみ）
- ⑤ 男女別綱引き
- ⑥ 障害物競走
- ⑦ 二人三脚
- ⑧ 騎馬戦

⑨ 200メートル走

・ 推薦参加種目

⑩ 借り物競走

⑪ 四方綱引き

⑫ 男女混合二人三脚

⑬ 3学年合同1200メートルリレー

並んでいるのは全13種の競技。番号はそのまま競技が執り行われる順番を示している。そして現在クラス内で不満が出ているのは全員参加種目の多さだ。

「普通3つとか4つとかじゃないんですか？ 一日でこんなにあるなんて……」

「心配するな。普通の学校とは違い応援合戦やダンス、組体操などといった種目は一切存在しない。この学校の体育祭とは純粋な体力、運動神経を競い合うものだからな」

運動が苦手な生徒の抵抗もむなしく簡単にあしらわれる。

「それから非常に重要なことだが、ここに参加表と呼ばれるものがある。参加表には全種目の詳細が記載されている。お前たちはこの参加表に自分達で各種目にどの順番で参加するかを決めて記入し、私に提出してもらう。これは必要事項だから忘れないように」

「自分たちで参加する順番を決めるって、一体どこまでですか……？」
「全てだ。当日に行われる競技の全て、何組目に誰が走るかまで全部お前たちが話し合っ決めて決める。締め切り以降は如何なる理由があっても入れ替えることは出来ない。それがこの体育祭の重要なルールだ。提出は前日の午後5時まで。期限を過ぎても提出がされなければランダムで振り分けられるので注意するように」

平田からの質問は想定済みだったからか茶柱先生はスラスラと説明をしていった。

つまり体育祭に向けてこれからやらなければならないこと、それは自分たちで計画を立て、どうやって勝ちにいくかを考えるということだ。

体育祭において参加表の存在はクラスの戦略を立てる上で重要な要素であることは明白だった。

「先生、質問してもいいですか？」

と、これまで淡々と資料を読んでいた柚椰が手を挙げた。

同じタイミングで堀北も手を挙げていた。

「ふむ、恐らく二人とも同じ質問だろうから……黛、言ってみろ」

二人が聞きたい事柄が一致していることを読んだ茶柱先生は柚椰を指名した。

柚椰は堀北の方を一瞥し、彼女が頷いたのを確認すると質問を始めた。

「参加表は一度受理されれば以降の変更は出来ないとのことですが、仮に当日に生徒が体調不良や負傷などで競技参加が不可能となった場合はどうなりますか？ 全員参加競技の中にはペアやグループを作らなければならないものも存在する以上、生徒が欠ければ競技が成立しないと思いますが」

『『全員参加』の競技においては最低限の人数を下回った場合は失格だ。騎馬戦の場合は一人欠席すれば騎馬が一つ少ない状態で競技を行ってもらおう。二人三脚も同様だな。パートナーを選ぶ競技は頑丈な生徒を選ぶことだ』

つまり共に競技を戦うパートナーを選ぶ際にもその点を念頭に置く必要があるということだ。

「だが救済措置も存在する。花形競技である『推薦競技』に関しては代役を立てることが許されている。しかし好き勝手に代役を立てられては参加表の意味がなくなるからな。特別な条件が存在する。それはポイントを支払うことだ」

「そのポイントの額は？」

「各競技につきプライベートポイントが10万。これを高いと見るか安いと見るかは自由だ」

「体調不良や負傷に関して、学校側が判断を下すことはありませんか？」
「基本的に生徒の自主性に任せている。自己管理は社会に出れば基本だからな。だが傍観できない状況になればその限りではないとだけ

言っておく」

そこまで聞き、柚椰は再び堀北を見た。彼女が聞きたい事柄が全て聞けたかどうかの確認だろう。

柚椰と目が合った堀北はコクリと頷く。それを肯定と捉えた柚椰は再び茶柱先生に向き直る。

「では、最後に一つだけいいですか」

「なんだ？」

「参加表を締め切った後の変更は出来ないとのことでしたが、それは如何なる手段を講じてでも不可能ですか？ たえば何十、何百とポイントを積まれたとしても、学校側は変更の申し出を受諾することは無いと捉えていいのですか？」

「ほう……」

早くも抜け道を探そうとしている柚椰に茶柱先生は感心していた。夏の優待者試験でもそうだったが、やはりDクラスが勝ちあがるファクターとして彼を選んだのは間違いではなかったと彼女は思った。

茶柱先生だけでなく、その質問の意図を理解した平田や堀北、綾小路もまた柚椰の抜け目の無さに瞠目している。

「過去にポイントを積んで変更を申し出た生徒は存在した。しかし結果的に変更は成されなかった。この体育祭においてこのルールは前提であり絶対だ。変更を認めればこの行事の意義そのものが揺らぐことになる。故に学校側はこの点においてはポイントを積もうが判断を変えないと思っただいぞ」

「なるほど……ありがとうございました」

「他に質問者がいなければ話はここで打ち切るぞ」

茶柱先生はグルリと教室を見回す。幾人かの生徒はまだ何かあったのかコソコソと小声で何か話し合っているが、実際に確認しようとはしない。

それを茶柱先生は問題なしと判断した。

「次の時間は第一体育館で各クラス他学年との顔合わせだ。遅れずに行くように」

彼女は時計を確認するが、ホームルームの時間は少し残っている。

「まだ20分ほど残っているな。残りの時間は好きに使うといい。雑談するのも真面目に話し合うのも自由だ」
改めて教室を見回して彼女はそう締め括った。